

浅倉が増えて、樋口の
ストレスは加速した。

バナハロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、浅倉に浅倉擬きが足され、樋口のストレスが高速で溜まっていく話です。

目次

プロローグ

水に水を入れると水が増える。

1

慣れと調教は紙一重。

16

ほんの少しの調味料で味は変わる。

39

一緒にいれば思考も変わる。

59

どんなに透明でも、何処かに色は混

ざっている。

85

朱に交われれば赤くなる。

110

苺の果汁を一滴、垂らす。

131

普通じゃない人に慣れ始めて一番、良

良

くないのは、ルール違反に慣れること。

156

一方、その頃的な。

189

目的を達するには努力が大事。どんな

形であれ。

205

長く放置されれば、水にも色がつく。

230

lonlか、2onlか、伏兵か。

253

呼び方一つとはいえ、変わる事は少な

くない。

278

2月はどんな女の子にも色が付く。

301

ポーカーフェイスにも現れる感情はあ
る。 | 327

水の中で広がる、赤と白とグレーのイン
ク。 |

花とミツバチのように。 | 350

ポーカーフェイスも見慣れた人にとつ
ては二十面相。 | 374

照れるポイントなんて人それぞれ。

395

透明と無色は別物。 | 419

クリアな誠実さこそ信用に値する。

456

肉体改造は計画的に。 | 486

不条理が生んだ疎外感を埋めるのは周
りの友達。 | 517

蒔かれて成長した種が絡み合つて。

長期休みも、スタートが肝心。

550

三つ巴は三勢力共、拮抗した力が無い
と成立しない。 | 579

備えあれば憂いなし。 | 609

フルコース全て強い味ではなく、侘び

寂びが大事。 | 636

誰でも出来るナンパの撃退方法。

660

猫は心を許している人の前でのみり

ラックスする。

688

いるわけではありません。

885

ラッキースケベは実際に起こると全然ラッキーじゃない。

717

嫌よ嫌なの、いやほんとに嫌だからマジで。いやいやいやいや、フリじゃなくて嫌よまで言っつてようやく好きのうち。

恥での逃げは役立たず。

746

素直さといじつぱりさは紙一重。

それはまるで暗殺者の如く。

770

三人の中ではまともに見えるだけ。

形に残る思い出は思い出しやすい。

808

たまには損得勘定を弾け。

918

怒られやすい奴はどんな道を選んでも

怒られる。

835

無理がある、それは無理がある。

大事なのは、咲いた後の話。

夏休み後をだるく感じるのは9月の下旬から。

旬から。

865

1033

※前書きの内容が物語の内容となつて

見えないものの成長が大事。

1006

大学生あたりになったら苦勞しそうだ
よね。彼女の方が。 | 1066

秋といえば芸術、食欲、紅葉、スポーツ、
そしてコーデイナー。 | 11098

演技力は大事なところで使え。 | 11211

酒飲めない年齢でよかつたね。

1152

学校の七不思議を生まれるのは、学校
に忍び込んだ奴が七人いた時。 | 1181

約束とフラグは紙一重。

ペットは身勝手なものであり、それを

許すほど人としての器は広がる。

1205

実験と一緒に、同じ事をしてる時にこ
そ性格の差が出る。 | 1228

なんかこれイチャイチャとか二股と
か、そういうんじゃないよね。 | 1256

クリスマスあんま関係なくなっちゃつ
た。 | 1295

人生は山あり谷あり。

便利な時代になった。

理屈と感情は別物だから、最大公約数

を探せ。 | 1384

妄想毒身。 | 1412

雪の日を嫌って良いのは社会人か休校
にならない学校の学生のみ。 | 1438

チョコより豆派。

1466

期待してる程度じゃ貰えない。確信がないと。

1497

人付き合いに興味持たないところなる。

1523

羊を数えても眠れない。

1551

ふとした時が一番のきっかけ。

1579

家族や塾講師が言う「大学に行ったら遊べるか」はアテにならない。

日々、変化するのは人間関係も。

1608

いつも一緒に良いことばかりじゃない

い。

1637

ラッキースケベはすけべをラッキーと思える人には訪れない。

1666

訪れる試練は大体、間の悪さ。

1698

大人になる程、仲直りが難しくなる。

1726

バカなら隠蔽なんてしないで素直に謝ろうや。

1756

素直さと節操のなさは紙一重。

1782

雨の中、ずぶ濡れになろうと効かない

1808

奴は効かないから。

渡る大学生活は罨ばかり。

1839 上手く断る方法もコミュカの一つ。

ガス抜きせずに溜め過ぎるとこうなる。

1866

よそに飛んで大きくなった火種は返つ

てくる。

素直さにも種類はある。

19221898

童心に帰った時ほど心は弾む。

1950

とおるん、誕生日おめでとう。

1979

幹事役のコツは父親になる事。

2004

幹事に大事なのは労い。

2031

怒られる、と思っっている人達は本当に

困らせる要素を作る。

2058

有名になるとそれはそれで大変。

銃も魔法も無し、ゴリゴリのインフア

イト。

2087

性的知識に最も必要なのは性的倫理

観。

2115

純粹悪という奴だろうか？

酒に強くなるより、飲み方を覚えろ。

2169

我がふり直すには人のふりを見る。

- 2381 炬燵という名のミミックの季節。
- 2355 運が芽生える時は消費をした後。
- ピンチにこそパワーは宿る。 |
- あほばかトライアングル。 |
- 成長ではある。 |
- 2251 久々に会うと甘えたが爆裂する。
- もはやH₂O。 |
- 2196
- 233123052279
- 2223

プロローグ

水に水を入れると水が増える。

樋口円香がその少年と出会ったのは、ありきたりなきっかけだった。

今日、中学三年に進級した樋口だが、別にそんな事で悲観するほど子供ではないつもりでいたので、今日もいつものように幼馴染の透と一緒に帰ることにした。

幸いというかなんというか、同じクラスになったので透の席の方へ迎えに行こうとすると、ふと視界に入ったのは、意外にも透が隣の席の男子と楽しそうに話している姿だった。

「……はあ」

たまにいます。見てくれだけは綺麗な透を狙ってナンパする男が。別に付き合う付き合わないは勝手にすれば良いが、変な男なら放つてはおけない。

すぐに声をかけようと思い、鞆を持って席へ向かった。

「あー、ヴェノム見たんだ。カッコイイよね、あの役者……なんだっけ」

「ト〇・クルーズ」

「あれ、ト〇・ホランドじゃなかった？」

「いや、ト〇・フェルトンだった気もする」

「あれ、ト〇・リドルじゃなかった？」

「まあ、誰でも大体、合ってるでしょ」

「まあね」

……なんかナンパしてる感じじゃない。いや、それどころか同じ人が性別だけ変わって話しているような感覚だ。ちなみに、ヴェノムには今出た役者、誰一人出ていない、別のト〇である。最後のは役者でさええないし。

「ヴェノムと言えば、俺あれも見たわ。ゴジラの……ほら、キングオブモンスター」
それ、全然ヴェノムと関係ないが、透からツツコミは出ない。

「ああ、ガメラと戦う奴？」

「ギドラな。……いや、ゴモラだった気もするな」

「リトラじゃない？」

「ペギラのような気もするけど」

「うーん……サクラ？」

「あ、コーラ」

もうただの「ラ」がつくものを言い当てているだけになって来た。

頭が痛くなる内容には慣れたつもりだったが、透が二人に増えるだけで今までの経験

が吹き飛ぶような気がしてため息をついてしまう。

そんな中、透がふと思つたように「あつ」と声を漏らす。

「コーラ飲みたい」

「飲むか」

「うん。帰ろう」

別に話が終わるのを待っていたわけではないが、急にコーラが出て来て話が切り上がった帰ることになり始めた。何なのだろうか、この二人の感性は？

「じゃ、またね」

「うん。明日」

淡白な挨拶と共に、二人は別れた。鞆を背負った透は、控えめに手を振りながら、まるでこつちに自分がいることに気づいていたように接近して来た。

「お待たせ、帰ろうか」

「もう良かったの？」

「うん。コーラ飲みたいし」

「あつそ」

どうせ、家に着く頃には忘れているだろう、と分かっているのに、円香の頭の中では「家にコーラあつたっけ」なんて考えていた。

二人で教室を出てのんびり廊下を歩きながら、とりあえず聞いてみた。

「あの人、隣の席？」

「え？ うん」

「名前は？」

「なんだっけ………忘れた。多分『か』行の誰か」

「ふーん………」

興味なさそうな返事を浮かべてしまった。もう少し説明が欲しいところだったが、説明なんてしてくれないのは分かりきっているので、自分から聞いた。

「さっきの、映画の話？」

「え？ 多分………なんか、映画好きらしいから」

「ふーん………」

趣味が一緒、というわけだ。男が女に言い寄るには絶好の言い訳と言える。

「ちなみに、何の映画の話だったの？」

「なんだっけ。えーつと………ジャミラ？」

やはり、何一つ情報は出なかつた。あの男の子も、どこか気怠げな表情をしていたが、基本的には整った顔をしていたと思う。髪は天然パーマ気味だったけど。

……しかし、そんな表情だからこそ、やはり透と似た雰囲気があったのかもしれない。

「でも、楽しかったよ」

「え？」

少し驚いた。実際、楽しそうに話していたとは言え、透が自らそんな風に言うとは思わなかった。

「なんか、言ってる事聞き返されないし、話しても難しい顔されないし、こつちも何となく言いたい事、理解出来たし、樋口待つてたから帰りたいつて思った時、すぐ帰れたし」

「……」

要するに、話が噛み合うと言う事を言いたいのだろう。

透が初対面の他人をこうも評価するのは珍しい。結構、綺麗な顔に惹かれて話しかけてくる男子は多かったが、その日に一緒に帰った時には忘れていて、次の日に顔を見てようやく思い出すことも多かった。

……しかし、だからこそ普通に引つ掛かった。これは、普通に言っておくべきだろう。「全然、噛み合ってなかったから。気が合ってただけ」

「マジでか」

お互いに「なんとなくこんな感じかな？」で話を進めていただけなのは明白だった。

あのト〇の話だって、本当に同じ映画をさして話していたのかさえ怪しい。「ヴェノ

ム」と言う映画だったのか、それとも「ヴェノムが出て来た映画」の話だったのか。

何にしても、なんか聞いている感じだと自分があまり目を釣り上げる話ではなさそう……などと思っているときだった。

「やは~~~~~♡とおるせんば~~~~い」

長つたらしくウザつたらしい耳から脳に響く声が喧しく聞こえた。思わず眉間にシワを寄せてしまうほどのものだ。

階段から降りて来ると同時に、ハグでもする勢いで駆け寄って来た。

「やつ、雛菜」

「透先輩、今から帰り〜？」

「うん。雛菜も？」

「そう〜。雛菜も一緒に帰る〜！」

いつもの様子で勝手に一緒に帰ることにしたのは、市川雛菜。小学生からの付き合いで、一個下の生意気な後輩だ。

「え〜、だって透先輩に早く会いたかつたし〜……別に円香先輩はどうでも良いけど〜」

「は？ 誰も何も聞いてないのに何？ かまって欲しいわけ？」

「別に〜？」

ホント、相変わらず生意気だ。わざわざ自分を引き合いに出す理由など無かったの

に、名前を出してくるあたりとか。

今に始まった事ではないので、わざわざ腹を立てたりはしない。スルーして透に声をかける。

「さっさと帰るよ」

「あ、うん」

話しながら、いつものように三人で帰宅した。

× × ×
円香と透の家は隣同士。家族ぐるみの付き合いをしていて、昔は二家族で河原でバーベキューとかもしたものだ。

実際、知り合ったのは幼稚園に通っていた時から。小糸もその時から知り合いだったが、やはり同い年である二人の方が遊ぶ機会は多かった。

そういうこともあってか、登下校は大体、一緒。次の日になっても、二人はセットで登校していた。

「授業開始っていつからだっけ？」

「知らない。でも一週間くらいで始まるでしょ。今年、受験なの分かってる？」

「うん。……うん？　じゅけん？」

「……中卒で働くなら、応援だけしてあげる」

反応を聞くなり、早くも切り離し作業に移る円香だった。

「ちなみに、樋口は何処高いくの？」

「近くのところ」

「じゃあ私もそこで良いや」

「偏差値まあまあなところだから。来るのは良いけど、今の成績じゃ落ちるよ」

「……もう3ランクくらい下げない？」

「交渉するならせめて1ランクって言ってくれる？」

「じゃあー」

「ナメてる？」

そんな話をしながら歩いている時だった。ふと、透が何かを見つけたように「あっ」と声を漏らした。

その視線の先にいるのは、昨日話していた男の子だった。何をしているのか、公園の中で木を見上げている。

「……何してんの？」

「さあ？」

二人揃って背後からその様子を見守る。ジッと木の幹を眺めている男子生徒は視線の先に、何かあるようにも思えない。

「……お化けでも見えるのかな」

「朝からそれはナンセンスでしょ」

「朝おぼだ、朝おぼ」

「朝から怒ってくるおぼさんみたいに言わないでくれる?」

「じゃあ……樋口ならどう言うの?」

「……朝レイ?」

「朝礼みたいじゃん」

そんな他愛もない話で盛り上がっている中でも、少年はぼんやりと木を見上げていた。

いい加減、飽きて来た円香は、透に声を掛ける。

「……もう行かない?」

「そうだね。飽きて来た」

××そう決めると、早くも二人は少年を置いて学校に向かった。

××教室に着くと、円香は鞆を机のサイドについているフックに引っ掛け、頬杖をつく。

あの少年は来ていないみたいだが、まだ木を見ているのだろうか? まあどうでも良
いが。

「樋口」

珍しく透が自分の席にまで歩いてきていた。

「何？」

「菅谷だった」

「何が？」

「名前」

「……ああ。なんで分かったの？」

「机の中に入ってた教科書の裏見た」

なるほど、と、円香は顎に手を当てる。

「何してたんだろうね？」

「ああいう変わった人には、私達には理解できない世界が見えてるんでしょ」

「どんな世界？」

「知らない」

流石にどうでも良い。当たるわけないし。

そんな事を思った直後、教室にその菅谷という少年が入って来た。

「あ、菅谷ー」

入って来るなり、透が軽く手を振って呼ぶ。それに気付いた菅谷も顔を上げて、鞆だ

け席に置いてそのまま自分達の元へ歩いてくる。

「……なんで呼ぶの？」

「? 嫌なの？」

「嫌とかじゃないけど……そういう問題じゃないでしょ。私、あの人と話したことないし」

「クラス替えしたばかりだし、そりゃそうじゃん」

「っ……」

まあ、そう言われればその通りなのだが。たまにこういった正論を言うから、目の前の幼馴染は狡い。

なんで拒絶しているのか、円香自身分かっていない。それでも嫌だと思っているのは、来れば面倒な事になると分かっているからだ。

今からでも逃げようか、なんて思っても遅い。菅谷は目の前に来ている。

「呼んだ？」

「うん。おはよう」

「こんばんは」

「あ、じゃあこんばんは」

「じゃないでしょ。その挨拶がしたいならイギリスに行つて」

ちようど12時間時差がある、という意味でそう言うと、少し驚いたように目を丸くした菅谷が自分を見ていた。

「つ、な……何？」

「君、面白いね。名前は？」

「え……樋口」

「ふーん……ヒグっさん？」

「いや、樋口」

「良いじゃん。ヒグっさん」

「浅倉……！」

余計なこと言うな、つーかお前まで呼ぶな、と円香は透を睨むが、透はどこ吹く風。笑いながら菅谷と話している。

「マズイ、気に入られる、と思った樋口は、半ば強引に拒絶する事にした。

「いや、ホントいいから。もうすぐ先生来るし、早く席戻ってくれない？」

「そうだ、聞きたい事あるんだけどさ、さつき公園で何見てたの？」

「だから、浅倉……！」

話を進められてしまう。ホントそういうところだ。

菅谷は真顔になって聞き返した。

「公園って……?」

「木、見てたじゃん。さつき」

「……ああ。あれ」

話が進んでしまった以上、もう諦めるしかなかった。

菅谷は質問された直後、聞き返して来た。

「何見てたと思う?」

「うーん……お化け?」

ノータイムで答えたのは透だ。

すると、菅谷はまた驚いたような顔になる。

「……えっ、お化けって実在したの?」

「あ、違うの?」

「するんだ。浅倉見たことあんの?」

「ないよ?」

「あ、見えてないけどいることは知ってるんだ」

「? うん。多分そう」

やはり、全く噛み合っていないのに話が上手く進んでる。こいつらある意味すごい。

そんな中、菅谷は今度は自分に顔を向けた。思わず冷や汗が流れたが、菅谷は気にせ

ずに聞いて来た。

「ヒグっさんは何見てたと思う？」

「知らない。ていうか、その呼び方やめて」

「なんでも良いから」

「……。……じゃあ蟻」

適当に答えてやった。流石に蟻の観察なんて友達がいらない奴しかしないことはしないでしょう……と、思っただけで、チラリと顔を見上げる。

すると、また目を丸くしていた。え、まさか……と、また冷や汗が流れる。

「正解。なんで分かったの？」

「え」

「ヒグっさん、すごいじゃん」

「浅倉、ビンタするよ」

まじでブツ飛ばしたいと思って言うが、それでも透は薄い笑みを浮かべたままだ。

「もしかして、樋口と菅谷似てるんじゃない？」

「あんたにだけは言われたくないんだけど」

「ねえ、なんで分かったの？」

「適当に言っただけ。てか、あんたは少し黙ってて」

「え、私と菅谷は全然、違うでしょ。ねえ？」

「え？ うん。ねえ、なんで分かったの？」

「つ、あーもうつ、うるっさい！ いいから席戻って」

そう言うと、2人は顔を見合わせる。すると、少しにこりと微笑み合うと自分に顔を向ける。

「じゃあ、また後でね。ヒグっさん」

「浅倉、ちよつとトイレ行かない？」

聞きながら手を伸ばしたが、ぬるりと躲されて席に戻られてしまった。

これは、かなり疲れる事になる気がする。そう思いながら、円香は机の上で突っ伏して、ため息をついた。

慣れと調教は紙一重。

円香と透が菅谷と知り合いになって、早一ヶ月。円香は、疲れていた。それはもう、本当に胃が痛いほど。

「アデニン、グアニン、シトシン、チミンだつて。うける」

「それな。最後の母音を『i n』で揃えてるあたり、多分名前つけた奴、ラッパーだよな」

「なんでいちいち、韻踏んだんだろうね。ラップ好きだったのかな」

「しりとりめつちや弱かったのかもよ」

「え、これ名前つけたの日本人？」

「知らないけど」

受験に備えて軽く勉強しに、学校の図書室にいるわけだが、バカ二人の会話に混ざらなくても疲れてしまう。

ちなみに、少なくとも円香と透が受験する予定の高校（仮）の受験科目は英語と国語と数学の三教科のみである。

「ねえ、うるさい。勉強するなら静かにして」

「ヒグっさん、今何してんの？」

「……現国」

「じゃあ俺らもゲンコクにしない？ ラッパ―飽きた」

「良いよ」

「やめて。何のために一人で現国にしたと思ってんの？」

「なんで？」

「あんたらと同じ科目やってると、絶対間違つて覚えるから」

失礼なことをズカズカ言うようになってしまった。まだ知り合つて一ヶ月程度なのに。

……と、いうのも、菅谷があまりにも透に似たところが多い為、つい気安く接してしまふというのもあるが、何より一緒にいて疲れるから、つい厳しいことを言ってしまうのだった。

とはいえ、それにカケラの反省もしていないが。

「……で、ゲンコクって何？ 裁判？」

「え、元の国じゃないの？」

「……数学やろう」

「じゃあ、私も数学にする」

「あ、じゃ俺も……」

「鬱陶しい……」

ストーキングされているような気分だ。……教科のストーキングって新しいな、と思わないでもないが。

そんな中、透が当然のように聞いて来た。

「数学って何やったっけ？ 英語？」

「いや、だから数学でしょ」

「なんだって、なんか式が並んで……電車みたいな奴」

「連結方程式」

連立でしょ、と頭の中でツツコミを入れる円香だが、無視。反応したら負けな気がした。

「……連結？」

「そう。なんか、こう……合体だって。とりあえず足せば良いんじゃないの。……あれ、でもxを求めよ、だって」

「前から思ってたけど、なんで数学の問題って『求めよ』って王様になるんだろうね？」

それは正直、円香も思った。口にはしないが。

「もしかしたら、王様なんじゃね。これ先生が考えてるんじゃないやなくて、数学の王様による見えない糸でのマリオネット的な」

B級映画みたいな話の想像やめて、と思う。やはり口にはしないが。

「マリオ……？ ……ああ、うん。配管工も兼業してそう」

マリオじゃなくてマリオネット、とツツコミを入れたくなつた。耐えた自分を褒めたくなつて来た。

「配管……？ それむしろ工場長かも」

「……」

……やはり、噛み合わないまま話が進む。何なのこの二人。もしかして、脳内で通じ合つてる？ と、エスパー説を押したくなるほどだ。

しかし、今はそんなことしている場合ではないので、黙って科目を変える事にする。数学は家でやる。じゃないと、次に数学をやる時にはマリオネットのマリオが工場を運営している光景が浮かぶようになってしまう。

……というか、そもそも配管工は工場を運営する工業ではなく、様々な種類の管を取り付ける建設業だ。

ホント……この二人バカな事ばつか話す……よく知らない言葉を使うんじゃない。

「ふっ……ふっ……ふっ……」

思わず、笑いをこぼした。こぼしてしまった。後になつて、笑つたことにハツとして顔を上げると、二人がキョトンとした顔でこつちを見ていた。

「え、なんで笑ったのヒグっさん」

「もしかして、普通の人には見えてないもの見えてる？」

「つ、あ、あんたらがそれ言うな……！ バカな事話してるからでしょ」

「聞いてたんか」

「樋口つてさ、意外と無視するの下手だよ」

「つ、う、うるさい……！」

本当にうるさい。こうなったら、校則違反を覚悟して持つて来たスマホとイヤホンでも使つてやろうか、と思い、カバンの中を漁り始める。

そんな円香を眺めながら、菅谷は微笑みながら言った。

「あんまり根を詰め過ぎても良くないよ。休憩しようよ」

「あんたらは全然、詰めてないでしょ」

「え、超勉強してたじゃん。数学が工場長説は多分、私らが初めて発見したよ」

「ヤバイよな。こんな所で新たな人類の叡智が発見されたわけだし」

「いやその説、全然意味わかんなかったから。あんたら本当に高校行く気あるわけ？」

「答案用紙に『マリオ』って書いたらどうなるかな」

「怒られるでしょ。ウケる」

「ウケない。そしたら私、他人のフリするから」

そもそも数学の回答用紙に日本語は絶対に出てこない。絶対に怒られるどころかブラックリストに載りかねないのが目に見えている。

そんな中、透がふと思いついたように「そういえば」と口を開いた。

「もうすぐゴールデンウィークじゃん。どっか行く？」

「良いね」

もう勉強は本当に休憩に入ったようで、透は頰杖をつき、菅谷は背もたれによつかつて、二人ともペンを手放している。

いつの間にかしつかりとツツコミを入れていたことを思い出し、仕方なく円香も会話に参加した。

「……だから受験生の自覚ないわけ？ 勉強したら？ 普通に中間も近いし」

「いやほら、中学最後のゴールデンウィークだし」

「あ、じゃあ俺あれやってみたい。制服デ○ズニー」

「あれまだやってる人いるの？」

「知らん」

「でも、楽しそうじゃん。私もいききたい」

また勝手に話は盛り上がっていつてしまう。正直、興味がないと言えば嘘になるが。

……いや、まあ円香は正直、無理なく行ける高校に進学するし、猛勉強が必要になる

のは目の前の二人……というより、菅谷はどここの高校に行くのかも知らないし、透だけだ。

なら、まあ本人の好きにさせても良いのかもしれない。

「よし、行こうか」

「よっしゃ、決まり」

その判断に、菅谷は少し驚いたように円香を眺める。「何？」と視線で聞くと、菅谷はそのまま口にした。

「いや、どうせ『勝手に行けば』とか言われると思ったから」

「私はちゃんと余裕あるし。その代わり、あんたら直前で私に泣きついて来ないでね」

「分かってるって」

「どっちのデ○ズニー行く？」

分かってないな、と思いつつ、とりあえず当日の事を相談し始め、そのままその日の勉強会は幕を閉じた。

さて、疲れると分かっているながらも約束してしまった制服デ○ズニー当日。雑菜が好きな響きだが、服装が変わるだけで何か変わるのだろうか？

少し、想像してみよう。一番、円香が想像しやすい相手は、福丸小糸である。理由は

単純。可愛いからだ。とても市川雛菜と同じ年とは思えない少女である。

自分達と唯一、違う制服の少女がそのままデ○ズニーに行き……例えば、頭に巨大ネズミをマスコット化した物の耳を乗せて……。

「……」

……普通にアリかもしれない。ミスマッチ感が、私服に耳を生やした時とは違う可能性を示唆している。

少し楽しみになって来た……が、でも一緒に行くメンバーは透と菅谷だと思うとやはりテンションは落ちる。あいつらが制服のまま耳を付けたところで、透はともかく菅谷とか見ても、円香は全く得しない。

……いや、何なら自分が耳をつけるハメになるのかも……。

「……」

まあ良いか、と思い、とりあえず家を出た。自分と透の家が隣同士であることを知ると、2回も待ち合わせするハメになる手間を省くためか、わざわざ自分達の家の前で待ち合わせにくれた。そういう気遣いが出来ることに驚きだった。

そんなに分かりにくい所にあるわけではないが、口頭で道順を説明しただけだったから、ちゃんと来れるか心配だ。

が、それはいらぬ心配だった。表に出ると、既に透と菅谷は待機していた。……私

服姿で。

「……………は？」

イラツとした声を漏らしてしまった。それに気付いた二人は、軽く手を振ってくる。

「あ、おーい。樋口ー」

「？　なんで制服着てんの？」

「制服デーズニーって、言ってたでしょ」

「あれ、そうだっけ？」

「やべ、忘れてた」

今度は、もうあからさまにイツラアつ…………と、眉間にシワを寄せる円香。

「やばっ、私着替えてくる」

「じゃあ俺も」

「バカなの？　時間無くなるでしょ」

「え、でも樋口だけ制服ってヤじゃない？」

「別に気にしない」

いや、気にしない事はないが、透が着替えたら菅谷は一人で私服になってしまう。

制服二人と私服一人、それも女子と男子では周りの見る目も変わるかもしれない…………と、思った時だ。

「浅倉、背中にカメムシついてた」

「え、マジ？」

「マジ」

そう言ったのは、菅谷だった。ポイトとその辺の茂みに投げると、続けて透に言う。

「カメムシの臭いつて服にも移るし、着替えてきたほうが良いよ」

「えー。割と気に入ってた奴なのに」

「待ってるから」

「はい」

素直に……というより多分、何も考えていないまま従った透は、家に引き返す。

その背中を眺めながら、円香は菅谷に顔を向けた。

「ほんとにカメムシいたの？」

「え？ うん。まあ道路を歩いてた奴だけだ」

「……何のつもり？」

怪訝な顔で顔を覗き込む。相変わらず何か考えていそうで何も考えていない表情の

まま答えた。

「や、一人だけ私服は別に良いけど、一人だけ制服はアレでしょ」

「……余計な気、回さなくて良いから」

そう言いつつ、背中を向けた。なんか、悔しかったからだ。よりにもよってこんなバカな男に気を使われたことが。少しギャップを感じたのもあるが、なんか腹立たしく感じてしまった。

そんな自分の気も知らず、相変わらず菅谷はすつとぼけた表情のまま続けた。

「ていうか、カメムシの臭いつてほんとに服に移んのかな」

「知らないしどうでも良い。……ていうか、その手で私に触ったら通報するから」

「え、なんで？」

「臭い移るかもしれないから」

「……」

××ぐうの音も出なかった。

×

到着した三人は、まず菅谷が手を洗いに行つてから、装備を整えに来た。物販で、色々グッズを見て回つた。

「うわつ、これ良くない？」

「良い。派手じゃない。……でもこれエコバッグだよ」

「えっ」

そんな話をしながら仲良く「地球に優しく、人に優しい」をテーマにしたグッズを見

ながら、そんな事を話している。

円香は、その後ろからついていきながら、ぼんやりと店内を見回す。中々、煌びやか且つレトロな内装。好み、というわけではないが、割と落ち着いていられる所だ。

「……あつ、浅倉あれ。制服デ○ズニー鉄板の奴」

「ああ、あれね。つける？」

「うん」

そう言うと、透はミ○キーの耳を取りに行き、それを頭に装備させた。菅谷の。

「ぷっ……似合う」

「ナチュラルさ以前に根本的なこと聞くな。なんで俺？」

「え、着けたかったんじゃないの？」

「……」

そのやり取りに、思わず無言で……というより、必死に声を押し殺し、両手を顔に当てて笑いを堪える円香。

それが視界に入った菅谷は、透の前を通り過ぎて、円香の前に仁王立ちした。

それに気付き、フルフルと震えながら顔を上げる円香。睨みつけるように顔を向けてしまったのは、カんでいるからだ。

その円香にトドメを刺すように、菅谷は真顔のまま裏声を出して言った。

「It, s me MARIO (裏声)」

「ブフオツ！」

円香だけでなく、透も吹き出した。お腹を抱えて笑い声を嘯み殺しながらも、二人揃ってツボに入る。

ミツキーじゃねえのかよ、と。なんでそこマリオなんだよ、と。

フルフルと震えて笑い声を嘯み殺す。こんな所で、下品に大声で爆笑するのは趣味じゃない。……とはいえ、笑いを堪えるのは大分苦しいが。普通に。

徐々に過呼吸になりつつ、もはや頭痛さえ響いて来た自分を眺めた後、真顔のまま菅谷は笑いから解放された透に声を掛けた。

「めっちゃ笑い堪えるじゃん、ヒグっさん。ウケんだけど」

「樋口、あんま騒がしいの好きじゃないから」

「マジか。じゃあ、今くすぐったらどうなんの？」

別の意味で吹き出しそうになった。この野郎、なんてことをほざき出すのか。

バカの思いつきを聞いてしまったのか、少し目を丸くした透が、やがて「その手があつたか」と言わんばかりの真顔になる。

「樋口」

「っ……ひいつ、ふうっ……な、何……？」

「動かないでね」

手をワキワキさせながら近寄って来た。これはまずい。多分、声を出すまで止めてもらえない。

全くもつて余計なことを言ってくれた物だ。ちよつと気を許すとこれだ。もう絶対、許さない……！ と、思つて、キツと菅谷を睨みつけると、さつきまで立っていた場所にはもういない。

何処へ消えた？ と、思つた直後、後ろから肩に手を置かれる。振り向くと、浅倉透に負けていない顔の良さが近くにあった。

「大丈夫、我慢しなくて良い。……思いつきり、声を出せば良いさ」

「フッ……！」

限界だった。こういう時に限つて良い顔で良い声を出して余計な事を抜かしやがつて、と思つた円香は、反射的に手が出た。

まるで、巨大なゴムをアホほど伸ばした後、手を離れたような音が店内に響き渡つた。「フウッ、フウッ……！」

気が付けば、自分は荒ぶる獣のように吐息を漏らし、目の前で菅谷が頬を赤く腫れ上がらせて倒れていた。

周りの目など気にする余裕もなかった円香は、そのまま顔の影を濃くして透の方を振

り向く。

「……まだ、やる気……?」

「やりません」

×おそらく初めて、浅倉透をヒヨラせたであろう日だった。

×

「口[×]の中、まだ血が滲んでるんだけど……」

「分からない坊やには、時には体に教えないと分からないってコトでしょ」

腫れ上がった頬を押さえながらになったが、三人で園内を歩き回った。ちなみに、円香の手も普通に痛いのは内緒だ。

プンスカ怒ってしまった円香に許してもらおう為に、菅谷は円香にはミ〇ーの帽子付きの耳カチューシャ、そして何故か透にまでフ〇ンダーぬいぐるみカチューシャを奢るハメになった。これで今年のお年玉の四分の一が消滅した。

ちなみに、フ〇ンダーのぬいぐるみカチューシャとは、脳天のあたりに魚が置かれているカチューシャである。シユールなことこの上ないが、透は普通に気に入っていた。

「ごめんって」

「もう怒ってないし。死ね」

「いや、死ねって言うってんじゃない……」

そう言いつつも、本人達的には、誰一人険悪なムードは感じ取っていなかったのは流石だった。周りから見たら険悪そのものなのだが。

「ていうか、菅谷は買わなくてよかったわけ？」

「いや、男だからね俺」

「気にしなくて良いでしょ。……ぷつ、ふふつ……に、似合ってたし……」

「漏れてる漏れてる、笑顔が漏れてる」

「……」

少しロマンチックな表現をされてイラツとしたが、それも本人の語彙力のなさが故なので無視した。ちなみに、その時の写真もちゃんと撮つてある。許すための交渉道具として、透と一緒に確保しておいた。

そんな時だった。さつきから静かに先頭を歩いていた透が「あつ」と声を漏らした。

「どうしたん？」

「すごい。めっちゃおおきい」

そう言う透の視線の先にあつたのは……シ〇デレラ城だった。高く聳え立つ西洋風のお城。それが、物販が並ぶストリートから抜けるといの一歩に、来場者を迎えてくれる。

久しぶりにデ〇ズニーに来た円香も、実は初めて来た菅谷も、少し圧倒されてしまっ

た。

何より驚くべきは、城の前に広がる花畑。いや、実際には目の前というわけではないのだろうが、遠近法と三人が立っている位置によって、目の前で咲き誇っているように見えてしまった。

「……」

「……」

二人揃ってぼんやりとそのお城と花を眺めていると、目の前の透が振り返りながら、スマホを取り出した。

「ね、撮らない？」

「？ 写真？」

「そう。初めて三人で遊びに来た記念」

言われて円香はハツとする。今更ながら、同級生の男の子と一緒に、少し遠出して遊びに来たのは初めてかもしれない。

……それがストレスの対象でしかない菅谷だというのは誠に遺憾だが。なんだかまた少しいらつとして来て、不機嫌そうに目を閉じて言った。

「……その次も三人で遊ぶみたいない方やめてくれる？ 今日来たのは気まぐれだから」

「え、樋口嫌なの？」

「嫌」

「なんだかんだ楽しそうにしてたくせに」

「……」

幼馴染だから故の、お互いに表情だけで何を思っているか分かってしまうそれが、向こうから発揮されてしまった。

……まあ、確かに？ 少しだけど、笑かしてもらったりしたし、つまらなかつたわけではないが。

ちなみに……菅谷はどう思っているのかな、と思つて隣を見ると、姿はもうなかつた。……いや、正確に言えば、しゃがんで何かを見ている。

「……何してんの？」

「すごいよ。夢の国にも蟻がいる」

「……」

こいつ、やっぱり普通にムカつく。今後、もう二度と遊んでやるもんか。

それならば、逆に最初で最後の記念に、写真くらい撮つてやつても良いかもしれない。小さくため息をつくとき、樋口は蟻に夢中になつてるバカの腕を引いた。

「うわっ、ちよつ………何？」

「写真」

「は？」

「三人で。撮るよ」

「良いけど……どうしたの、ヒグっさん。熱でもあんの？」

「あつたとしたらあんたが原因だから。責任取ってよね」

「結婚しろつての？」

「やっぱ写真やめよう」

「うそうそ、撮ろうか」

面倒になって切り上げようとしたら、慌てて乗って来た。なんだかんだ、彼も撮りた
いようだ。

改めて三人揃ってシ〇デレラ城の前に立ち、横に並ぶ。透がスマホを構えて、三人入
るように調節し始める……が。

「浅倉、もっと左。ヒグっさん映ってない」

「違う、浅倉。逆逆」

「今度は俺の頭入ってない」

「よし、そこで」

「ヒグっさん、俺の頭入ってないってことは、お城も入らないってことなんだけど……」

「ハイハイ。」

「いやなんで撮るの」

あまりに透が下手過ぎた。まあ、一人だけ首が映っていない写真は、それはそれで面白かったので保存したが。

何にしても、せつかくなら城と三人が映ったちゃんとした写真が欲しいところだ。

どうするか悩んでいると、掃除のスタッフさんが声をかけて来た。

「あの、よろしければお撮りしましょうか?」

「あ、お願いします」

スマホを手渡した透がそう言うのと、改めて三人並ぶ。証明写真のように、直立不動で真顔のまま揃っているその絵に、スタッフさんは冷や汗をかきながら苦笑いで訂正した。

「あの……何かポーズとか取られては如何ですか?」

「ポーズ……どうしようか?」

透が聞くと、円香が答える。

「じゃあ、ピース?」

「普通すぎない? ウルトラマンとかは?」

「みんなスペシウム光線になるでしょ」

透の案に円香が反対すると、真ん中の菅谷がツツコミを入れる。

「ストリウム光線とエメリウム光線とメタリウム光線とM87光線があるじゃん」

「いや知らないし」

「あ、あはは……」

あまりにぐだつて来て、スタツフさんが苦笑いを浮かべた。氣を利かせて声をかけてくれたのに、あんまり時間は掛けられない。

とりあえず、と言うように透が言った。

「菅谷、なんでも良いからテーマ決めて」

「え？　じゃあ……苦悩と困難」

「絵画のコンテストか」

「よし、じゃあそれで」

「浅倉、すぐに乗らないで」

「じゃあ、すみません。3カウントでポーズ取るので、それに合わせて撮ってください」

「え、本当にそれにするの？」

「分かりました！」

透がそう言うのと、円香のツツコミを無視して、スタツフさんは快活な返事をする。自分から声かけて来たのに、もう嫌になっているようだ。いや、気持ちはわかるが。

「じゃ、いきまーす！ 3……………2……………1……………！」

慌てた円香は、仕方ないのでその場でしゃがみ込み、考える人のポーズを。

そして浅倉は、まるで競馬に大負けした人が、膝をつけて両手を顔に当てるポーズを。

最後に菅谷は、持って来たカバンを頭に被ってスペシウム光線を放った。

カシャつという乾いたシャッター音が切られ、三人はポーズを解くとスタッフさんの

方に駆け寄る。

「はい、どうぞー。では、ごゆっくりお楽しみくださいねー」

「ありがとうございますー」

「ありがとうございますー」

「どうもー」

そう言つてそそくさと退散するスタッフさんに各々、お礼を言いながら写真を確認すると、三人とも半眼になった。

「……………誰も顔写つてないんだけど」

「ホントだ、ウケる」

「俺なんて一枚目も映つてないんですけど」

「あんたのポーズ何してんの？」

「ヒーローとしての困難と苦悩」

結局、これはこれで良いか、となつて、三人は園内をエンジョイした。

ほんの少しの調味料で味は変わる。

中間試験が終わり、六月の頭。試験が帰ってくる頃の朝のホームルームの時間。担任の先生が、教壇に立つなり言った。

「よし、席替えやるか」

その声に、教室内がざわつく。小学生の頃から、席替えは誰もが好きなワクワクイベントだ。それは中学でも高校でも変わらない。

しかし、菅谷はそればかりではなかった。一番前の席だが、隣に透がいたからあまり気にならなかった。……まあ、前だろうと後ろだろうと、授業はあまり聞かないのだろうか。

席替えになってしまったら、透から離れてしまう。勿論、席替え後に透か円香のどちらかと隣になれる可能性はあるが、それでも15分の2の確率だ。

「……ま、いつか」

どの道、透とは別に授業中、たくさん話していたわけではないし、理科の実験の時はそれなりに話したけど、それ以外の時はお互いに寝てたり、黒板の模様で顔つぼいの探してたり、たまに教室に入って来た蟻を観察していたし、特に感慨深くもない。

先生が即席で作ったくじを、透の列から縦に且つたがい違いに回し、各々が引いていく。

そして、菅谷の番になった。

「……」

適当に一つ取って、次の列に回す。中を見ることもなく待機。ぼんやりと天井を眺めていると、唐突に全員が動き出す。引き終えたようだ。

そこでようやくくじの中身に目を落として、黒板に出ている席順を示した四角の列に書かれている番号を見る。

窓際、一番後ろと言う中々の席を手に入れた。まあ中学の席順は、男子の列と女子の列が交互に並んでいるため、窓際から二番目、と言うのが正しいか。

何にしても、居眠りにちようど良さそう……なんて思いつつ、移動を完了して席に着いて待機。

すると、隣に来ていた女子生徒がピタッと動きを止める。

「……」

樋口円香だった。心底嫌そうな顔でこちらを眺めている。

「あつ、ヒグっさん」

「……え、あんたそこ？」

「? うん」

「……」

軽く手を振ると、円香は仕方なさそうに隣に来る。

「はあ……窓際の最後尾を手に入れたと思つたら……」

「良かったー、知らない人だったら教科書忘れた時、見せてもらえなかったから」

「私は見せないから」

「浅倉はどこいんの?」

「知らない」

冷たく言いながら、席に座った。

「うーし、じゃあ一時間目は英語だから。お前らちゃんと準備しとけよ」

それだけ言つて、さっさと退散してしまう担任を眺めつつ、菅谷は隣の円香に声をかける。

「……英語だつて、今日?」

「そうでしょ」

「公民じゃなかった?」

「一時間目に公民があるのは火曜だから」

「……今日何曜だつて」

「月曜日。月曜日、見失う人とか中々いないと思うけど」

「マジか」

「……」

「……」

「見」

「せない」

完封で黙らされた菅谷は、どうするか腕を組んで考え込む。教科書の業者に電話するか、或いは先生に予備がある確認するか……どつちも面倒だ。

「あ、浅倉に借りれば良いのか」

「馬鹿なの？ あんたが使う時は浅倉も使う時でしょ」

「む、そうか……ヒグっさん、頭良いね。流石」

「どんなに褒めちぎっても、見せないものは見せないから」

「……」

やはり黙らされた菅谷は、次の授業は諦めて眠ることにした。

××

「ま、今日は多分、テスト返却だし、教科書なくても問題ないと思うけど」

そう円香が呟いたのは、隣の男が机に伏して、僅か5秒で寝息を立て始めた頃である。

早い話がわざとだ。

たまには痛い目を見れば良い、と思つて、鼻息を漏らしながら、自分も教科書を出すことなく、頬杖を突く。

ふと、隣の席に目をやった。相変わらず顔だけは良い男で、天然パーマである事がむしろベストマッチしているような容姿である。

「……」

窓から太陽光が差し掛かり、スヤスヤと寝息を立てるその様子は、中身を知っている円香も少し胸の奥をドキリと高鳴らせる。そういえば、彼の顔を長く眺める機会があるのは初めての経験かもしれない。

……と言うより、初めてだ。本当になんか、見ていると外見詐欺な気しかない。透と同じくらい付き合いが長ければ、多分何も感じなかっただろうが、知り合つて二ヶ月しか経過していないのに、この寝顔を見せられるとどうにもギャップが襲いかかつて来る。

黒猫のような寝顔、この可愛くもある顔は、どう考えたつて運動なり勉強なり出来る人だ。

……それが何故、中身がアレなのか。何も考えてなくて、隙あらば蟻の観察を始めて、表情も滅多に変わらず、似たようなバカと組ませるとロクな事にならない中身なのか

……。

や、だからあんまり考えるとギャップが酷くなる。顔を背けて、なるべく見ないようにした。

「……」

ダメだ、気になる。それ程、顔だけは良い。仕方なく、円香は隣の男を起こすことにした。

「菅谷、起きて」

「すう……すう……」

「菅谷、今日の英語多分アレだから」

「……っ、すびー……」

「試験返却だから。教科書いらぬ奴」

「……ぐう、ぐう……」

「……」

まだ眠り始めて数分だろうに、どんだけ熟睡しているのか。面倒になった円香は、布製のペンケースからシャーペンを取り出し、菅谷の首筋を軽くさした。

直後、ピクンツと跳ね上がるように体を起こし、辺りを見回した。

「えっ、な、何？」

「起きて。今日の英語、多分試験返却だから教科書いらない」

「あ……そ、そう？ そのためにわざわざ起こしてくれたの？」

「……そう」

認めるのは癪だが、この際それで良い。寝顔が良過ぎて寝られると困る、なんてもつと言えないから。

「もしかして、構って欲しかったの？」

「もう一度、寝かせてあげようか？ 今度は目、醒さなくて良いから」

「あ、嘘ですすみません……」

そんな話をしている時だった。教室に先生が入って来た。ただし、さっきまでの担任の先生だ。

「あー、すまん。今日の英語、テスト返却のつもりだったけど自習らしい。先生、病欠だと」

自習……と、二人とも少し力が抜ける。

テスト返却する時は答え合わせも同時にやるので、他の先生というわけにもいかないのだろう。

「提出は明後日の授業の時まで。やらなかった奴は、ガッツリ成績に影響するらしいからそのつもりで。範囲は、問題集10〜13ページの練習問題全部な」

言うだけ言って、先生は出て行った。

さて、起こしてしまったにも関わらず、やはり寝とけなんて言えない。いやさつき言ったが。

「ヒグっさん、問題集見」

「嫌」

「えー、見せてよ」

「寝てたら?」

「うーん……まあ、それでも良いかあ……」

良いんだ、と呆れつつも、円香は問題集を開く……が、ふと思った。寝かせたら、またあの寝顔が飛び込んで来るのではないかと。と。

そしたら、課題だって終わるもんも終わらないかもしれない。そう思った円香は、伏せようとするバカの体を止めた。

「? 何?」

「やっぱ見せてあげる」

「やっぱり構って欲しいの?」

「もうそれで良いから」

仕方ない。それでも「寝顔に見惚れるから」なんて理由を知られるよりマシだ。

机をくっ付けて、問題集を中間に広げて、二人ともルーズリーフを机に出す。
そんな時だった。

「わお、二人とも一緒にやってる。超仲良しじゃん」

同じ顔面詐欺教師が、茶々を入れて来た。二人の席の前に椅子を持って立っているのは、浅倉透。

当然、そんなこと言えば火打ち石が砕けんばかりに破裂するわけで。

「は？ 仲良くないし。一人だけ別の時空を生きてると勘違いしてたらしいから、教科書見せてるだけ」

「へー」

あまりに大袈裟な表現であつたにも関わらず、透は慣れた様子のまま二人の机の前に椅子を置いた。

「私も、問題集忘れたから。見せて」

「いや、三人で一つは無理でしょ」

「やれるやれる」

「わからなかつたら、教え合えば良いよね」

「いやそれ私が一人で教えるだけになるんだけど……」

「大丈夫大丈夫」

「やれるやれる」

「私がやりにくいって話してんの」

「大丈夫大丈夫」

「やれるやれる」

「あんたらそう言う鳴き声の生き物なの？」

イライラが少しずつ溜まる。そもそも、なんで二人揃って忘れてるのか。中身が似るにも程がある。

「はあ……ホント、バカばっか」

「菅谷、これ穴埋め何入んの？」

「モグラ？」

「いや、モグラは掘ってるだけでしょ。入るのは人間じゃない？」

「いや、蟻かもよ。掘って出てまた潜るし」

「じゃあ蛇は？」

「やば、選択肢多過ぎでしょこの問題」

本当にうるさい。「can」と「be able to」のように、別の形の助動詞の復習問題をやっているのに、生物の名前が入るわけがない。

とはいえ、円香に教える気はないが。割とこうしてバカな会話に耳を挟むのも慣れて

来た円香は、手を動かしながら言った。

「もしかしたら、デイグダかもよ」

「……それあるな」

××ないでしょ、なんて余計なことは言わず、さつさと課題を済ませた。

××さて、四時間目になった。教室での席順が、そのまま理科室でも反映される為、円香と菅谷は隣同士。……いや、机の形的にお向かいというべきか。

テスト返却の時でも一々、理科室に集まる意味はあるのか、と円香は思っていたが、まあ先生がそう言うなら仕方ない。そんな所で反抗するほどガキではない。

ここまで、隣の菅谷と点数を比べてみて分かった。やはり、この男バカだ。国語42点に、公民38点。せめて半分くらい取れよ、と思わず鼻で笑ってしまうレベルの事だ。ほんと、見た目だけが良いのは透だけで十分、と一人ほくそ笑んでいると、試験の配布が始まった。

名前順なので、菅谷は割と早い方。すぐに呼ばれて取りに行った。

「フツ、何点?」

戻って来た思わず嫌な奴のように笑みを浮かべながら聞いてしまった。しかし、普段騒がしくて鬱陶しい奴をイジれる機会など中々ないのだから、ここは痛快にいきたい。

当の本人はキョトンとした顔で答えた。

「え、点数？」

「それ以外ないでしょ」

「100だけどなんで？」

「ふふっ……ふふっ？」

条件反射で笑ってしまっただが、言ってる内容がシンプルにおかしかったため、笑いな
がら疑問系になってしまった。

「今なんて？」

「だから、100」

「いや、いいからそういうの。何点？」

「え……あ、笑点？」

「いやボケ待ちでも大喜利でなくて」

「じゃあ沸点」

「それ今私の中で上がってる奴」

というか、そうじゃなくて。と、円香は話を軌道に戻す。

「点数。教えて」

「だから100だつてば」

「もう良い。見せて」

「はい」

見せてもらった。100だった。

「なあっ……なんで!？」

「簡単だった」

「いや簡単って……え？　実は勉強できるってわけ？」

「え、さあ……」

「っ……」

惚けた態度が、いつもの三割り増しで腹たった。

……いや、しかしだとしたらこの前の授業までの酷い点数はなんだったのか？　そう
だ。というかその辺は全部、自分が勝ってるわけだし、何もバカに負けた、なんて卑屈
になることはない。

……ていうか、そもそも勝ち負けなんてハナっから意識していない。だから、別に気
にすることはない……。

「……で、なんで点高いの？」

でもムカついたので問い詰めた。

「なんでって……生物はやってて楽しいから？」

「……それだけ?」

「え?」

「……」

確かに、よく蟻の観察はしていたが、まさかあれ趣味だけでなく実益も兼ねていたとは……。

ということとは、前に図書室で「ATGC」について透と話していたのは、透に合わせて話していただだけの説さえある。

……とにかく、円香はとりあえずテストを返却してもらいに行った。

なんだかんだ、少しは長く一緒にいたが、色々と透との相違点にも気付くようになって来た。気を使うポイントは透と違うし、基本的に勉強全部出来ない透とは違い、一科目は出来るようだ。

と、そこでふと意外な事実が脳裏に浮かぶ。もしかして……透も生物だけは点取れるのでは? と思った。思ってしまった。何を思ったか。

79点というまずまずのテストを受け取り、透の席に向かった。

「浅倉」

「あ、樋口。どうしたの?」

「何点?」

「え、笑点？」

「いやそれもういいから。テスト、何点？」

「28」

「……」

やはり相違点だったようだ。たった数秒の無駄な時間を使った事を後悔しながら、すぐに席へ引き返した。

×

さて、放課後。円香は家に到着すると、すぐに透の部屋に上がり込んだ。今日は透が

「え、菅谷って一科目だけ出来るの？　じゃあ私も一科目だけやる」とかい出して、勉強することになった。受験生なら、そこまで謙虚にならないでもらいたい。

「で、英語で良いの？」

「うん。なんか、文理選択……だったけ？　両方、英語やるらしいし」

「あそう」

「あ、それとき、樋口」

「何？」

「これからって時に呼び止められ、何かと思ったら透はスマホを取り出した。

「チェインのさ、アイコンどうやって変えるんだっけ」

「は？ 何急に」

「この前の、デ○ズニー行った時の写真。あれにしたくて」

「なんで今更なわけ？」

「前からしたいなって思ってた、忘れてた。今思い出した」

「……勉強したくなさ過ぎて本能が出ただけでしょ」

「そうかも」

「少しは歯に衣を着せてくれない？ 浅倉が勉強したいって言い出したんだけど」

始まる前から集中力が途切れている。

「まあ良いけど。スマホ貸して」

「あ、うん。はい」

手渡されたスマホを、スイスイといじる。

「どっちの写真？」

「二枚目の方」

全員、顔が写っていない奴ね、と理解しながら、スマホをいじる。しばらくして、完成した。

「はい。これで良い？ 誰の顔も見えてないけど」

「うん。サンキュー」

手渡されたチエインのトプ画を見て、透は少し微笑む。その様子を眺めていると、続いて言った。

「そういえば、菅谷は何処の高校行くんだろうね」

「知らないけど。あの性格だと、どうせこの辺の近くでしょ」

「まあそうだけどさ、せっかくなら同じとこ行きたくない？」

「絶対に嫌。あんなのもう三年間、一緒なんていられない」

「えー。なんだかんだ樋口も楽しい癖にー」

「別に楽しくないし」

用意しておいた飲み物を口に含みながら、引き続き透は言った。

「ふーん……私は一緒が良いけどね」

「あつそ。じゃあ菅谷と一緒に高校行けば」

「あーうそうそ。怒らないでよ」

「別に怒ってないし」

自分から自分と同じ高校に行きたいと言い出したくせに、今更になつて別の高校にするとか言われると、それはそれで釈然としない。

その話の流れで、ふと思ひ出したことがあつたので言った。

「そういえば、期末の前に私、行こうと思つてる高校の文化祭やるから行くけど、浅倉も

行く?」

「行く」

「言っておくけど、学校説明会も参加して行くから。寝ないでね」

「あ、そうだ。菅谷も誘おうよ」

「ねえ、聞いてる?」

なんで最悪のチョイスをするのか。本当にこの幼馴染は自分がしたい事をするだけなのだから困る。

「良いじゃん。菅谷ももしかしたら同じ高校行くってなるかもだし」

「尚更、連れて行きたくないんだけど」

「早速、声かけてみよっと」

「じゃあ二人で行ってきて」

いや、まあ別に同じ高校に行くくらい良いかもしれないけど、説明会に二人を一緒に連れて行くのは少し勘弁して欲しいものだった。

まあ、こう言えば今回は諦めてくれるでしょ……と、踏んだのが運の尽きだった。

真顔のまま顎に手を当てていた透は、ポツリと呟いた。

「……それありかも」

「……はっ。」

「そうしようつと。誘ってみるね」

「ちよつ、待つ……」

まさかの、自分が蹴られてしまった。

透の中では、おそらく損得勘定を計算するソロバンが打たれていたのだろう。学校見学のつもりで行く円香か、多分学祭に行ったら思いっきりエンジョイする菅谷か。

少し、冷たくし過ぎたか、と後悔しつつ、頭の中では何故か菅谷に対する敵意が溢れ始めていた。

その日の夜、某所にて、一人の女子中学生が震えたスマホを見下ろした。

「あは〜♡ 透先輩、チェインのトプ画変えたんだ〜」

今までのアイコンは写真を載せていないトイレのアイコンみたいな状態だったのに、珍しいこともあるもんだ。

そう思つて、早速「いいね」を付けるためにその写真を見てみると、思わず半眼になる。

写っていた写真は、樋口円香と浅倉透ともう一人の三人で、デ○ズニーと思わしき場所なんか哲学的なポーズを決めている写真。誰一人顔は映っていないけど、すぐに透と円香のことは分かった。

問題は、最後の一人。二人の真ん中に写っている限り、偶然入り込んだとかではない。というか、頭に鞆を被せた人が偶然いるとか怖い。

そして何より、この体格は間違い無く男の人だ。

「……………ふくん？」

円香も一緒にバカやっている以上、まず間違いなく二人には気を許されている。そして、男である以上、顔だけは美人である二人に何かしらの恋心は抱いているはずだ。何せ、過去の男はみんなそうだったから。

「雛菜、少し不愉快かも」

そんな事を口走りながら、机の上で背もたれにかかり伸びをし、目だけ全く変化のない笑みを浮かべた。

一緒にいれば思考も変わる。

七月。期末テストもあと、少しと言う日の土曜日。今日は透と円香が志望する高校の学園祭。だが、透が一緒に行く相手は菅谷である。

駅前に到着した。待ち合わせ時間は、30分前。つい寝坊して遅れてしまったわけだが、また彼の姿は……。

「……あつ」

「おっ……」

今きた、みたいな感じで前から歩いて来ていた。

「ごめん。遅れた。寝坊したわ」

「大丈夫、私も。寝坊して今きた」

「マジか。爆笑」

「うん。じゃ、行こっか」

「ああ」

それだけ言うと、二人で並んで駅のホームに歩いて向かう……前に、菅谷が透に手を差し出した。

「繋がらない?」

「え、なんで?」

「今日、電車混んでそう。デ○ズニーの夏休みイベ、今日からだから」

「詳しい。もしかしてこの前行った時からハマってた?」

「うん」

意外と可愛いところある、と思いつつ、透は手繋ぎに応じる事にした。二人で手を繋ぐと、そのまま歩いて駅に向かう。

歩きながら、菅谷は透を見る。短いデニム生地ショートパンツに白のキャミソール、そして上から羽織っているグレーの薄いシャツと、首から垂らしたネックレス……なかなか、季節にあった活発な服装だ。

「相変わらず、浅倉って私服のセンス良いよね」

「そう?」

「そうだよ。カッコ良いし」

「そこは可愛いじゃないの?」

「え、だってカッコ良いし」

「ふふ、女の子に言う言葉じゃなくてウケる」

そんな側から見たらデートにしか聞こえない会話だが、本人達的には適当な会話であ

る。

「なんだっけ、これから。学祭だっけ？」

「うん」

「俺、学祭とか行ったことないんだけど、何あんの？」

「さあ……でも要するにお祭りでしょ？ 花火とかあるんじゃない？」

いきなり絶対に無さそうなものを言った透だった。学祭のイメージを聞いただしい……と、普通の人なら思う所だが、残念ながら一緒にいる男は同種の人間である。

「マジか。じゃあ御神輿とかもある感じ？」

「またも、なさそうな奴が来た。何なら伝統行事じゃないとない奴である。」

「知らない。でもあつたら面白そう」

「学校で御神輿とか、俺なら絶対嫌だ。しかもこのクソ暑い中……」

「て言うか、誰が担ぐんだらうね。御神輿部？」

「何その部活。部分的過ぎて笑えるわ。それ大会とかあんのかな」

「知らないけど。ていうか、何を競うの？ 速さ？」

「や、知らないけど。……美しい担ぎ方とか？」

「いやどう担いでも暑苦しいでしょ」

「プフツ、確かに」

笑いをもらしながら、二人で改札口を通り過ぎて会話を続ける。今度は透が思いついたように言った。

「あ、あれは？ お祭りと言えば、盆踊り」

「それはありそう。ワンチャン」

悲しいかな、二人の会話はツツコミ役がいないと、何処までも変な方向に広がってしまふのだった。

×

「あ、円香ちゃん！」

「あ、きた」

一方、その頃。駅前にて、同じように待ち合わせしている二人の女子中学生がいた。

片方は樋口円香、そしてもう一人は、円香や透と幼馴染の福丸小糸である。一個下で別の中学ではあるが、なんだかんだ幼稚園からの付き合いだ。

「ごめん。試験も近いのに」

「う、ううん……！ 大丈夫だよ……！」

呼び出したのは円香の方。これから、一緒に志望高校の文化祭に行く……のだが、小糸は不思議だった。何故、自分も一緒なのか、と。

「それで、円香ちゃん……どうして、私も一緒なの……？」

「……別に、大した理由じゃない」

「あ……も、もしかして寂しかったのっ!?!?」

「……それは小糸でしょ」

「いふあふあふあふあ!」

キューつと鼻を摘みつつ、抓る。実際、一人だけ中学が違うから、色々と思う所はあるのだろうと思ひ、誘ったという理由もある。

「じ、じゃあ……円香ちゃん、行……」

「いや、待って。まだ行かない」

「へ?」

「もう少し様子見たい」

「……なんの?」

聞かれるも、気にしてると思われるのが嫌なので言わなかった。

……と、言うのも、今日の目的は、もう透と菅谷の尾行をする、というものに半分くらい変わっている。

今の今まで、出かける時はいつも三人一緒だったが、ここに来てまさかのマンツーマンデート……いや、デートかどうかは知らんけど、何にしても変な事をするようであれば許されない。

その上、あのアホ二人のデートを一人で尾行する、という絵がなんか腹立ったので、小糸と一緒に来た次第だ。

……が、二人のデートが気になる、なんて小糸に知られるのも嫌なので、その言い訳も考えないといけない。

「ごめん、小糸。昨日、夜遅くまで勉強してたから少し疲れてて……近くのカフェで休んでからでも良い？」

「あ、そ、そうなんだ……やっぱり、受験生って大変なんだね……！」

「小糸は大丈夫でしょ。勉強できるし、ダメそうなら私が見るから」

「ホントに!?? ありがとう！」

本当に小糸にはこれでもかと言うほど甘い円香だった。雛菜? 誰それ? と言わんばかりの空気だ。

オープンテラスのあるカフェに入り、駅前を眺めることを可能にしつつ、二人でカフェオレを飲む。

現在、11時5分過ぎ……あの二人が待ち合わせていたはずの時間をかなりオーバーしている。

にも関わらず、片方ならともかく両方来ない。どうなっているのだろうか?

「にしても、これから高校かあ……た、楽しみだね、円香ちゃん……！」

「別に普通でしょ。近いところ行くし、浅倉も同じところ来って言うてるし。今までと変わらない」

「そ、そうなんだ……あ、で、でも高校は私も同じ所、行くからね……!」

「……それは楽しみかもね」

言いながら、小糸の頭を撫でてあげつつ、机の上のポテトをつまみ、駅前をチラ見する。やはり、来ていない。もしかして、待ち合わせ時刻が変更になった?

……いや、そんな気がきくような真似をする二人じゃない。多分これは……寝坊だ。

「……はあ」

「? どうしたの?」

「別に」

なんか自分で自分が馬鹿馬鹿しくなって来た。こんなくだらない事に時間を割くなんて、我ながら、らしくなかったかもしれない。

しかし、休むと言ってしまった以上はもう少しここにいないといけないので、小糸に話しかけてみた。

「ちなみに、小糸」

「? 何?」

「私達、もう割と長く一緒にいるけど、カレシとか出来るとしたら、誰が先だと思う?」

「え……」

少しぼんやりした顔を浮かべてしまう小糸。少し自分っぽくない話題だったかもしれないが、聞くだけ聞いてみたかった。

やがて、小糸は何かを察したような表情になった後、顔を赤くして大声を出した。

「も……もしかして、円香ちゃん好きな人いるの!?!?」

「落ち着いて。そういうんじゃないから」

「どんな人!?!? う、運動部? カッコ良い……イケメンさん? あ……ま、まさか実は

透ちゃんが男の子だった、とか……!?!?」

「落ち着いて。てか最後のはどう言う意味」

「ぴゃんっ……!」

額に手刀が来て、小さな悲鳴を漏らして座り直す小糸。しよぼんと肩を落としていく。可愛い。

「なんとなく思っただけ」

「え……だ、誰だろう……? 透ちゃんかも……いや、でも円香ちゃんがいるし……」

「だからそれどう言う意味?」

「ぴゃ? だって……円香ちゃんなら、変な人と付き合わせないと思うから……」

そういう意味か、と黙ったまま納得してしまう。

「……雛菜ちゃん？」

「なんで？」

「いや、何となく……」

「私なら絶対、あれは選ばないけどね」

「あ、あはは……」

とはいえ、まあ気持ちはわかる。人当たりは良いし、顔だけは可愛いし、スタイルも四人の中で抜群……まあ、中身は最悪だと思っっているが。

「でも、彼氏かあ……私もいつか、憧れの男の人と……う？」

何を想像しているのか知らないが、まあ小系の頭の中は分かりやすいものだ。憧れの王子様ーみたいな抽象的な男に、お姫様抱っこしてもらっている事だろう。

ホントそういうところが、可愛い小系の所以でもある。……けど、小系の彼氏なんて絶対に許されない。

「小系、もし彼氏になりそうな人、或いは告白されたりとかしたら私に言って」

「え、ど……どうして……う？」

「三者面談するから」

「びゃっ!?？」

なんで？　と言わんばかりの「びゃ」が小系から漏れた時だった。

駅前で、見覚えのある二人組が、お互いに手を振って合流しているのが見えた。今回のターゲットだ。いや別にドッキリを仕掛けるつもりなわけではないが。

「……小糸、行くよ」

「えっ、も、もうっ？ まだ残ってるよ!?!?」

「飲み歩きで」

「お行儀悪いよ! あとこれからすぐ電車に乗るんだよ?」

「……平気でしょ。飲まないで持つとけば」

それだけ言つて、二人の様子を眺めながら慎重に後を追う。その時だった。菅谷が手を差し出し、透がそれに応じて、手を繋いで移動を始めた。

直後、ベコツというプラスチックの容器が潰れる音が響く。遅れて、黒と白が入り混じり、茶色となった液体が溢れ出す。

「ぴえっ!?!? ま、円香ちゃん、どうしたの!?!?」

「なん。でも。ない」

「な、ない事ないよ! 洋服に掛かっちゃってるよ!」

「そんな事より、行くよ。小糸」

すぐに邪魔するため、強引に先へ進もうとしたが、小糸が引き止める。

「そんな事じゃないよ! それ去年、誕生日に透ちゃんにもらった奴でしょ?」

「つ……」

それを言われると、止まらざるを得なくなる。

「そんなに派手に散ったわけじゃないから、拭けば大丈夫だと思うよ」

「つ……ごめん……」

×× 結局、見失った。

×× 電車に乗り、高校に到着した二人は、ボンヤリとアーチをくぐった。

「おー、すつげえ。なんかマジで祭っぽくね」

「ねー。割と本格的じゃん」

「で、まず何から見る？ 花火？ 御神輿？ 盆踊り？」

「花火は夜でしょ」

「じゃあ、御神輿と盆踊り探そっか」

「てか、探すまでもないよ。なんかパンフ配ってるし」

「お、マップじゃん」

そんな呑気な話をしながら、二人でそのパンフをもらい、中を開いた。盆踊りもお神輿も花火も載っていなかった。

「……ないよ。三つとも」

「マジか。……あ、お化け屋敷ある」

「行く?」

「うん。じゃあ行こうか」

そんなわけで、早速昇降口に向かった。人混みを避けながら、とりあえず下駄箱を見下ろす。

さて、ここで二人は重大なミスに気がついた。……スリッパも上履きも持つて来っていない。

「菅谷」

「忘れた」

聞くまでもなく大体、分かってしまった。そもそも二人ともカバン一つ持っていない。特に透は志望校の学祭に来たにも関わらず、だ。

どうしようか、と二人揃って辺りを回す。

すると、実行委員らしき腕章をつけた生徒が案内をしているのが見えた。

「ちよつと聞いてみるね」

「うん」

二人でその生徒に声をかけに行った。

「すみません」

「はい?」

「上履き忘れちゃったんですけど……」

「あ、でしたら来客用のこちらをお使い下さい。校舎を出る時は、各箇所の我々、運営委員が回収致しますので」

「そうすか。どうも」

軽くそう言うと、スリッパと靴を入れるビニールを受け取って中に入った。

二人で並んで、手を繋いだまま歩いていると、透が足元を見てつぶやく。

「スリッパってさ、歩きにくいよね。なんか足から落ちそうになる」

「分かるわ。落ちそうになる」

「ね。……そういえば、スリッパでGとか殺した事ある?」

「あるよ」

「私も。超やりやすいよね。これむしろG駆除機だよね」

「うん。スパイクの瞬間の音が心地良い」

「なんなら楽器じゃん」

「楽器とか……爆笑」

相変わらずわけのわからない話で盛り上がっている。見た目は盛り上がっていない表情だが、本人的には最高潮である。

ちなみに、お化け屋敷に行くと明言した割にパンフを開くことなく歩いていく為、ど
んどん遠ざかっていった。

「浅倉は楽器とか出来るの？」

「鍵盤ハーモニカとリコーダーなら」

「学校で習う奴じゃん」

「そっちは？」

「俺はピアノも出来るよ」

「へえ、意外。何弾けんの？」

「いや楽譜と時間があれば大体、なんでも弾けるよ。余程、ぶっ飛んだ奴じゃない限り」

「じゃあ……古今和歌集」

「……いけっかな。ちよつと考えてみるわ」

「うん」

そんな話をしながら、二人は体育館に来ていた。お化け屋敷の教室は本校舎2—4で
ある。

中に入ると、ステージ上でやっていたのは吹奏楽部だった。さつきスリツパが楽器と
か抜かしてたにも関わらず、のうのうといった。

「わっ、演奏じゃん。これルパンのテーマじゃね？」

「ぼいね。聴いていこうよ」

「良いね」

そのままパイプ椅子が並んだ席の方へ歩いて行った……が、空いている席はない。

流石に立ったまま聞くほどじゃないので「どうしようか」と顔を見合わせ、菅谷が声を漏らした。

「とりあえず……席増やしてもらおう？」

「誰に言えば良いのそれ」

「舞台袖の人に聞けば良いんじゃないやね。あそこの扉、袖に入れるっぼいし」

「そうだね」

普通、スタッフオンリーだとわかるものだが、お構い無しだった。

そのままのんびりと歩いてその入り口に向かう。吹奏楽部の演奏はそれなりにオーラがあり、普段は騒がしいはずの客席に座る生徒達は静かに清聴していたが、二人だけが話しながら歩いていった。

「なんだっけ、あのラツパ。えーつと……ふ、フロート？」

「フルート？」

「そうそれ。あれ音出すのめっちゃむずいらしいよ」

「へー。まあ明らかに使いにくそうだもんね。なんであれだけ横にして吹くのあれ。吹

き矢でさえ縦にして吹くのに」

そんな呑気な話をしながら、扉を開けた。中に見えたのは、吹奏楽部などではなく、サーカスでもやるのかつてくくらい色々な衣装に身を包んだ面々だった。

「えっ、だ、誰君達？」

「すみません。席座りたいんですけど埋まってて」

「椅子ないですか？」

「いや知らないよ！」

「ここバックヤードだから！ 出て行って……！」

「どうかしましたか？」

なんか困り始めてしまったと思ったら、奥から普通に学生服の生徒が歩いて来た。腕章があるあたり、スタッフなのだろう。

その男は、透と菅谷を見るなり目を輝かせた。

「っ、き、君達！ ちょっと良いかい？」

「え」

「なんですか？」

「頼みたいことがあるんだ！」

そのまま二人は訳がわからないまま連行されてしまった。

×××
×××
ようやく目的地に到着した円香と小糸は、パンフレットをもらい、先に元々の用事であつた説明会を終えた。

付き合つてくれた小糸に、円香は出店で売つていたかき氷をご馳走し、食べ終えてから再びパンフレットを見る。その間、円香はバカ二人を捜索するために目を光らせていたが、見つかることはなかつた。見てくれだけは美男美女なのだから、すぐに見つかると思つていたが。

一応、お化け屋敷の前や漫画研究会の漫画喫茶、美術部の抽象画展など二人が興味持ちそうな店は抑えたのだが、何処にも影も形もなかつた。ついでに、小糸がお化け屋敷でビビり散らしている絵は可愛かつた。

「小糸、どこか見たい所ある?」

「え? えーつと……」

パンフレットをペラペラと眺めながら、小糸は顎に手を当てる。すると「あつ」と声を漏らした。

「これ行きたい!」

小糸が指差す先にあるのは、体育館のステージだった。演劇部の次にやる演目「ミス・ミスター〇〇□高校コンテスト」らしい。

「小糸、こう言うの興味あったっけ？」

「え……わ、私は興味ないけどねっ？ 円香ちゃんは、あるんじゃないかなってね？」

「は？ どういう……」

そこで脳裏に浮かんだのは、小糸とさつきまで話していた内容。四人の中で恋人がどうの……と言う話。もしかして、触発されたのだろうか？

なんだかんだ、小糸もそう言うのに興味が出て来た年齢、と言うことだろう。可愛らしいものだ、本当に。

しかし、円香の中の「イケメン」のイメージは、何処かの何かの菅谷によって「中身は残念」なイメージもセットでついて来ている。

思わず、両手で小糸の肩に手を置き、真剣な表情で忠告してしまった。

「小糸……顔だけの男は、選んじゃダメ」

「えっ？」

「ちゃんと、中身を、見て。……良い？」

「は、はひ……」

強く強くそう言うのと、小糸は控えめに頷いた。……とはいえ、まあ外見が気になるのもわからなくはない。とりあえず、そのコンテストに行ってみることにした。

二人で歩きながら、ちゃんと持参した上履きに履き替えて体育館に向かう。

『はい、ミスオーマスっ……ミズっ……ミスター○□コンテスト。女性部門、エントリーナンバー5を紹介します!』

どうやら、もう始まっていたようだ。二人とも空いている席を探したが、無かったの
で階段を上がり、体育館を見下ろせる通路に立った。

ステージを見る限り、おそらく男子と女子、同時にやっているのだろう。左に女子、右
に男子が並んでいて、全員がナンバープレートを着けている。

とりあえず、今並んでいる男子のなかなか、小糸の好みはいるのだろうか？

「小糸、どう?」

「な、なんか……高校生って、なんかもうみんな大人なんだねっ。私も高校生になつた
ら、あんな風になれるのかな……!」

どちらかと言うと女子の方に目がいつていた。まあ、それはそれで良いやと思つた円
香は、黙って耳を傾けた。

『この方は飛び入り参加! というより、こちらから出場をお願いしたわけですが……
思わずスカウトしてしまう程の顔の良さ!』

へえ、と円香は少し興味が出る。並んでいる女子生徒を見た限りだと、ぶりっ子そう
な女子しかいない。化粧も濃しい、割と不自然な感じある。……一方で、男子は二人ほ
どイケメンはいるが、一人はブーメランプルンパンツでめちやくちやマツチヨ、もう一人は女

装して出ている。ネタ過ぎる。

『浅倉透さんです!』

「は?」

「ぴゃ?」

思わず円香と小糸から声が漏れた。揃って顔を向けると、そこに立っていたのは本当に浅倉だった。さつきまでの活発な私服姿ではなく、何故かドレスまで着させられて。

『どうもー。浅倉です』

「え……なにしてんの?」

「透ちゃん……え、いつ入学したの……?」

「いや違うでしょ。何してんの……?」

二人の疑問を他所に、司会の人は浅倉への質問を続ける。

『まずはクラスをお願いします』

『3年2組です』

中学でしょ、という1番重要な点が置いていかれてる。

『え……3年にこんな綺麗な子いたつけ……ま、いいや。趣味と特技をお願いします!』

『え、趣味は……なんだろう。映画とかドラマとか……最近は菅谷とか樋口と一緒にいる

ことです』

『……そんな名前の人いたっけ。ま、いいや。その方達は、お友達ですか?』
『はい』

『……なるほど。特技は?』

『特技……何かな。人の顔とか覚えること?』

『じゃあ、僕のこと見たことありますか?』

『ないです』

『……そ、そう……生徒会長んだけど……』

そりゃないでしょ、と円香は眉間に皺を寄せる。そもそも学校が違うのだし……と
思ったところで理解した。パンフレットを見ると、これをやる前には演劇部による演劇
が行われていた。

つまり、なんらかのことがあって私服姿を演劇部の一人と勘違いされ、飛び入り参加
する事になったのだろう。

『で、では最後に一言お願いします』

『え、じゃあ……パラセーリング』

『……なんで?』

『やってみたいなって』

『そ、そうですか……では、次はミスターの方へ行こうと思います』

もう完全に司会者も逃げてしまっていた。

「ていうか、円香ちゃん！ 大丈夫なの？ これ、止めた方が良くないじゃ……！」

「いや……もう放っておこう」

「ええっ!?」

何故なら、もう既に嫌な予感がしている。透と一緒に来たはずの菅谷の姿が見えないからだ。

こうなってしまうと、もうむしろ関わりたくない気さえしてくる。

『つ、続いては男性陣エントリーナンバー5……こちらも飛び入り参加の方です。菅谷……へヴシッ！……さんです、どうぞ！』

くしゃみで下の名前は聞こえなかったが、とりあえずやはり菅谷はいるようだった。

『どうも、菅谷です』

『クラスと趣味、特技をお願いします』

『3—2。趣味は浅倉と樋口と遊ぶ事と生き物の観察、特技は理科です』

『お……というと、あなたはやはり、先程の浅倉さんの？』

『友達です』

それを聞いて、ふと円香は思うところがあった。友達と言っていたが、今朝は二人で手を繋いでいた。あれはなんだっただろうか？

『なるほど。……しかし、男女間の友達は成立しないのはご存知で?』

『え、そうなんですか?』

『はい! 実は、男子と女子が親密になれば……』

『どうなるんですか? 兄妹になるとか?』

『いえ、それは盃を交わしていただかないと……』

『じゃあ、姉弟?』

『いやだから順序の問題じゃなくて』

『義兄妹?』

『今まで義理のつもりじゃなくて言ってたの!?!?』

て、そうじゃなくて! と、司会者は声を荒立てると、直球で聞いた。

『異性が仲良くなると、恋人になれるのをご存知ありませんか?』

『ぴゃつ!?!?』

小糸の悲鳴に近い声は、客席のざわめきによつて掻き消された。平静を装つてはいるが、円香も内心で少し狼狽えていた。

何故なら、あの二人なら、このムードのまま「え、恋人?」「そうなの?」「爆笑」「なつちやう?」「良いね。樋口驚きそう」というノリで恋人になりそうな所だ。

二人に恋人になられるのは困る。いや、嫉妬だとか自分も菅谷のことが好きとか、そ

んな事はかけらもなく、今後、どうせ三人でまた一緒にいる事があるのなら、今の関係が変化するのは嫌だ。特に、よりもよって透が自分より菅谷を選ぶような事になるのは許されない。

どうしたものか悩みたいが、自分にはどうすることもできない……と、思っていたら、菅谷が答えた。

『や、それはないです。もう一人、仲良い奴がいるし、俺も浅倉も……少なくとも中学を卒業するまでは、ずっと友達のまままでいると思いますよ』

「……」

それを聞いて、円香は目を丸くした。まさか、そんな風に考えているとは……てつきり、なんだかんだ言っても、透を狙っているものだと思っていた。

なんだか、安堵したような、それとも少し何故かむかつとしたような……ただ一つ思ったのは、あの男もこの関係を楽しんでくれていることだ。

「……」

少し、笑みをこぼしてしまうほど、嬉しかったからだろう。今の発言、しれっと問題発言が混ざっている事に気付かなかったのは。

『え……中学卒業？』

『え？』

『え……待つて。この高校の生徒じゃないの?』

『違うよ? え、そんなこと言ったか俺?』

『……もしかして、同じクラスで友達の浅倉さんも?』

『え、そうだけど?』

透も聞かれて真顔のまま答えた。それを見るなり、円香は体育館から出ることにした。多分、だいぶ騒ぎになる。その中に巻き込まれたら堪らない。

「小糸、行こう」

「……」

「小糸?」

「ま、円香ちゃん……あのう、友達なの?」

「え? あ、うん」

そういえば、小糸と雛菜には紹介していなかった。……というか、雛菜がいなくて良かった。いたら、あの中に突っ込んでいきそうだったし、なんなら今後も教えない方が良くもしれない。

「クラスメートだから。今度、機会があつたら紹介する」

「う、うん……」

そう話しておいて、そのまま2人を捨て置いて帰宅した。

とりあえず……ここまで伝説になった以上、もうこの高校に入学することはできないかな、と決めながら。

どんなに透明でも、何処かに色は混ざっている。

8月中旬、夏休みに入って三週間が経過した。

中学の成績表には「内申点」なるものが存在する。速い話が、生活態度やイベントへの参加の態度、そもそも参加の有無などで、学力以外の点をつけて進学を有利にする……というものだ。

円香が通う中学には、校舎の裏に川が流れていて、その清掃ボランティアを三ヶ月に一回くらいの頻度で引き受けていた。

さて、今日はまさにその日。三人とも参加していて、今は点呼も始まっておらず、集場所に集まっている状態だ。

そんな中、上半身は体操服のまま、下半身に履いてあるジャージの裾を捲った姿の透が、軽く伸びをする。

「ん〜……川遊びかあ。なんだかんだ毎回、参加してるよね」

「遊びじゃないから。ボランティア」

そうツツコミを入れる円香は、下半身は短パンだが、上半身はジャージを羽織る、透と真逆のスタイルである。

「なんか面白いものあるかな。自転車とか」

「去年は男子がエロ本拾って盛り上がったたよね」

「そうだったけ？」

「全員、指導室送りになったでしょ」

捨ててあるものを拾ったとはいえ、じっくり読むのはまた別問題というわけだ。

しかし、カケラの興味もなさそうに透は話題を変えた。

「ふーん……あ、そういえば、菅谷来るかな」

「……ああ、知らない」

「来ると良いね。久々だし」

夏休みに入ってから、勉強やら何やらがあつたのと、女子二人には小糸と雛菜という別の友達もいた為、菅谷と顔を合わせるのは久しぶりだ。

円香は、相変わらず興味なさそうな素振りです。

「別に、なんだって良いでしょ。いてもいなくても、どうせ大差ないし。……なんなら、むしろ邪魔されそうな気さえするし」

「えー」

「それに、あいつどうせすぐ蟻に夢中になるでしょ。いや、仮にも自然の中にいくわけだし、いろんな虫に夢中になってそう」

「……………ふふ」

「? ……何?」

「いや、なんか口数多いなと思って」

……………ほんのり、頬が赤くなる。久々に会えるかもしれないけれど、テンション上がってる、みたいな言い方に聞こえ、癪に障った。

「……………別にそんなんじゃないし」

「せっかくだから、いたら一緒に楽しもうよ」

「いやだからボランテИАだから。楽しむもんじゃないから」

とにかく、別にあの夏休みに入る前には確実にあった、二人が揃った時だけの鬱陶しさが欲しいわけではない。

不愉快そうにしつつ、円香は鼻息を漏らす。そんな、少し不愉快になって来た頃に、夕イミング悪くバカがやって来るわけで。

「やは〜♡ 透せんぱ〜い」

市川雛菜が、軽く手を振って駆け寄って来た。鬱陶しいのが来た、と言わんばかりに円香はため息をつくが、透は微笑みながら出迎えた。

「雛菜。元気だね」

「うん〜。みんなで川遊びできるからね〜」

完全に認識が透と同じレベルである。まあ正直、樋口も遊び半分で来ている点は否めないが。別にたくさんゴミを拾った人にボーナスが出るわけでもない。

面白いゴミとか出て来たら最高だ。具体的には、自転車とか車のタイヤとか。……なんて思っている円香に、雛菜が今気付いたように声を掛けた。

「あゝ、円香先輩もいたんだゝ」

「いちや悪いわけ?」

「うゝん……良くはないかもゝ」

「いちや悪いのはあんたの方でしょ。クラスごとに集まってるんだから、さっさと自分のクラスに戻ったら?」

「えゝ……じゃあ、透先輩と一緒に戻るゝ」

「ふふ、じゃあ戻ろつか。雛菜」

「やはゝゝゝ♡ 許可降りたゝゝゝ」

もう勝手にしろ、と思った円香は、黙って始まるまでの時間を待機する事にした。

そんな中、透を連れて本当に2年生の列に向かおうとしていた雛菜が、何かを思い出したように円香の方へ振り向いた。

「円香先輩は、彼氏と一緒に遊んでたら?」

「は? いないし、そんなの」

「え、透先輩のトプ画の写真に写ってた真ん中の人、円香先輩の彼氏じゃないの？」
言われて、そういえば透は最近……と言っても一ヶ月か二ヶ月くらい前、トプ画を変えたなーと思ひ出す。それを見て、真ん中の顔が隠れた男が自分の彼氏だと思ったのだろう。透も一緒にいるのに。

「……違うから。なんで私なの？」

「え？ だって、透先輩の彼氏は雛菜だし」

「は？ 何言ってるの？」

「え、そうだったの？ やばっ、私と雛菜百合カップルじゃん」

乗るな、と思ったが、もうその辺はスルー。勝手に付き合ってください、と言う感じ。

「でも、円香先輩の彼氏じゃないなら、なんで三人で遊びに行ってたの？ 普通、男子一人と女子二人で、遊びに行かなくない？」

「……」

そう、なのだろうか？ いや、そうなのかもしれない。せめて男がもう一人いれば友達で済んだかもしれないが、2対1は中々ない。

そんな中、ゾツとしたのはこの前の学祭見学。小糸の方が面倒がないと思っただけで一緒に尾行したが、あれが雛菜だったら、まずカフェで見つけた時点で一緒に気付かれて終わ

りだった気がする。

……一応、興味本位で聞いてみた。

「……もし、浅倉の彼氏だったら？」

「え〜？ 何その質問〜」

ぶっすーと膨れっ面になりつつ、雛菜は続けて言った。

「その時は〜……やは〜〜♡」

「……」

これは、会わせられない。この前、出かけた時、普通に友達関係で手を繋いでいた透と菅谷だ。なんか、会わせたりなんてしたら、かなりまずい気がする。

「じゃ、また後でね〜。透先輩、行こ〜？」

「うん」

そのまま透を連れて、自分のクラスの元に戻る雛菜を眺めつつ、ため息をつく円香。ようやくあのアホ二人のストレスに慣れて来たと思ったら、また新たなストレスが投下された。

なんで毎回毎回、自分ばかり疲れさせなきやいないのか……と、ため息を漏らした時だ。

「うーっす、ヒグっさん」

「ツ!?」

「うおつ、どした?」

その張本人の声が耳に届き、思わず肩を震わせて振り返ってしまった。そこにあったのは、菅谷の顔。

ビックリした所を見られたのと、そもそもお前が原因で色んなストレスが溜まってんに平然としやがってこの野郎、みたいなイライラが募り、思わず出会い頭に耳たぶを摘み、引つ張り回してしまった。

「え、い、痛い痛い。ちよつ、何?」

「別に」

×とりあえず、集合が掛かるまでそのまま引つ張り続けた。

×

×クラス行動を強いられるわけではないが、学年ごとにエリアは別れている。

しかし、他のイベントごとと違ってあまり強く様々なものが定められているわけでもなくて。割と無視して移動する生徒も少なくない。職員でさえ自由だ。

そんなわけで、円香は少し警戒気味に掃除を続けていた。

「菅谷、何見てんの?」

「ん、おんぶバツタ」

「へー、どれ？」

「これ」

「わ、ほんとに背負ってる。可愛い」

「これメスの方が大きいんだよ。上に乗ってるのがオス」

「へー」

……ほんとあいづら、子供かっけ言いたくなる。3人班で自分だけ働かされるのは普通に納得がいかないので、すぐ二人の首根っこを掴み、自分の方へ引き込んだ。

そのため、しゃがんでいた二人は尻餅をつく。

「あんたら、サボってないで掃除して」

「えー、樋口も見たら？ 可愛いよ、オンブバッタ」

「見ない」

そのままズリズリと引き摺り、自分が回収しているゴミを溜めた袋の前まで持って来る。

「私が袋持っておくから、二人でゴミ集めて。はい、トング」

「えー、樋口楽しようとしてない？」

「今まで何もしてなかった人達は何言ってるの？ 良いから仕事して」

「ヒグっさん、ヒグっさん」

「何……」

振り返ると、手を掴まれ、その手にぬめつとした感触。思わず背筋がゾワゾワと伸びるほどの拒否反応が出る感触。

恐る恐る手のひらを見ると、アマガエルが乗っていた。

「~~~~ツツツツ!!??!!??!!??」

「可愛くない? アマガエ……ルベツ!!??」

思わずアマガエルを菅谷の顔面にぶん投げてしまった。鼻に直撃し、ひっくり返る菅谷。

「最ツツツ低ツツ!!??!!??」

怒号と共にキツと睨みつけながら、川に手を洗いに行った。ひっくり返った菅谷の額から、アマガエルはひよこひよここと逃げ出す。

「菅谷、あつちにデツカいガマガエルいたよ」

「マジ? 見たい」

「じゃないでしょ!!??」

珍しく大声を出して、二人に水がかかって来た。手を洗いに行った円香からのプレゼントを頭からかぶった。

「菅谷、あんた少しはデリカシーとかないわけ? 普通、女の子の手に両生類を……」

「浅倉スプラッシュユ」

直後、別方向から、水を浴びる。頭から、体操着までグチャグチャになるほど。顔を向けると、いつの間にか水の中に足だけ入っていた透に思いつきり喰らわされていた。

「……浅倉、どういいうつもり……」

「お、何。もうおっ始める感じ？ 良いね、やろっか」

「は？ 何馬鹿なこと……」

「浅倉ダイダロス」

二発目が円香に直撃した。よし、良い度胸だ、と言わんばかりに指をゴキゴキと鳴らし始める円香。残念ながら、二回も舐められたまま黙っていられる程、大人では無かった。

ジャージを脱ぎ捨て、円香も水の中に入る。

「いやいや、二人だけでずるいよ。俺もやる」

さらに、菅谷も水の中に入った。

まず円香が潰すべきは透だった。カエルの件は文字通り水に流されていた。

「樋口トルネード」

「ひやつ……やっつたな。浅倉リヴァイアサン！」

「冷たつ……このつ、樋口ハリケーン！」

「隙あり。菅谷、菅谷く……菅谷精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の……」

「長いよ」

一斉に二人から攻撃をもらった菅谷、そのまま後ろにひっくり返った。完全にパンツまで濡れてしまったが、もう完全にお構いなし。

菅谷は身体を捻ると、両手を水面につけて逆回転させる範囲攻撃を行なった。それでは水は多く飛ばないが、少量の水が二人の顔に向かう。その隙に、円香を透と挟むように移動した。

「……」

「三つ巴の要領その一、まずは一人減らす」

「チツ……この！」

円香が水をかけようと、片手を立てて腰に構えると同時に、菅谷も両腕を引いた。

お互いに水を掛け合う直前、菅谷はしやがみ込んで水の中に潜る。は？ と、円香が片眉を上げた直後、背後から水が思いつきりかけられる。

振り返ると、透がらしくなくニヤニヤしながら立っていた。

「隙あり過ぎ」

「……なんでそんなに息びつたりなのあんたら？」

本当に同一人物じゃないの？　と思いたくなって来た。しかし、おかげで頭も冷えた。こんなことしている場合じゃない。せめて少しは掃除を進めてからにするべきだろう。

「はあ……バカやってないで、掃除を……」

「じゃあ、樋口の負け？」

「上等。覚悟しなさいよ」

結局、続ける事にした。お互いに水の掛け合いが始まる……かと思われたが、その二人の間に菅谷が入る。

「あー……ちよつ、二人とも待った」

「は？　待たない。勝ち逃げとか許さないから」

「いや、むしろこのままじゃ俺の一人勝ちというか……いや、むしろその後を考えると負けか……？」

「何言ってるの？」

「とりあえず、胸元見て。胸元」

言われて、二人揃って胸元を見る。白い体操服が濡れば、下まで透けるのは当然な話であつて。

円香は思わず顔を真っ赤にして胸を隠すように抱き、俯きつつ、キツと菅谷を睨み付

けた。

「つ、へ、ヘンタイ！ 死ねツ!!？」

「ご、ごめんごめん。でもほら、気付いたからには上がった方が良いでしょう」

「最低！」

そう怒鳴りつけながら、円香は慌てて上がり、ジャージを上から羽織り始める。

……一方で、透はどうしてるかな、と、菅谷は顔を向けた。

「わっ、これがブラ透け？ 意外と恥ずい。露出度高い水着より」

1ミリも顔色を変えずにそう言っていた。とても恥ずかしかがっているようには、菅谷には見えなかったが、何にしてもこのまま放置は流石にまずいと踏み、自分が着ているジャージを脱ぎながら羽織らせた。

「ごめん。濡れてるけど、これ羽織って」

「ありがとう」

そう言いながら、とりあえず透が少しでも周りに見えないように、隣に立って岸までエスコートする。

しかし……水色の綺麗な下着まで見えていたのにテレないとは……なんかよく円香には似てると言われるが、こう言うところは全然違うよなーなんて思っていると、ふと視界に入ったのは、透の耳。そこだけが、赤く染まっていた。

「……」

やっぱりこいつも女の子なんだな……と、変に感心しつつ、とりあえず三人で川岸まで上がった。

「はーあ……もう、サイアク……」

そう愚痴をこぼすのは、プールの更衣室で着替えをしている円香だ。汗だくになると思つて持つて来ておいた制服を、もうこんな早くから着る事になると思わなかった。

体操服を外に干している間に、プールにしかないシャワーで軽く身体を流さないといけない。

「冷たい……」

小さくため息をつく円香。何せ、プールに備え付けられているだけのシャワーだ。海にあるものと一緒で、水しか出ない。

疲れ切つた愚痴を溢したばかりの円香に、透はしゃあしやあと言った。

「ん〜……気持ちよかつたー。やっぱ真夏はこれだよね」

「……今日は遊びに来たんじゃないんだけど」

「良いじゃん。樋口だつてノリノリで楽しそうにしてたくせに」

「……」

まあ、それはその通りなのだが。なんだかんだ、最初に水を掛けたのは自分だし、真夏に川で水かけっこは普通に気持ち良い。

でも、それを認めるのは癪だった。どちらかと言うと、今は菅谷へのイライラが大き
いから。

「……言つとくけど、これで参加してないって扱いになって内申点貰えなかつたら、浅倉も菅谷も夏休みの課題、見捨てるから」

「えっ……なんで手をつけてないこと知ってるの？」

毎年の事だからだが、もう無視した。ちなみに円香はもう半分ほど片付けた。

……正直、受験があるのだから、そもそも宿題をやめて欲しい所ではあるが。

「菅谷はやってないの？」

「知らない。理科の課題だけ終わってるんじゃないの？」

「ああ、かもね。樋口、理科の宿題、もうやるのやめたら？」

「なんで？」

「見せてもらえるかもよ？」

「……あいつに借り作るの嫌」

それだけは絶対に嫌だった。

「でも、意外だったよね」

「? 何が?」

「ちよつと、照れてたじゃん。私達のブラ透け見た時」

「……」

確かに、と円香は唇を塞ぐ。

「……確かにね。もう少しからかってやれば良かったかも」

「ふふ。まあ、今日ならいくらでも機会あるんじゃない?」

「普段の仕返し、やってやろうか」

そう返しながら、キュツとシャワーを止めて、持って来たタオルで身体を拭き始める。本当にタオルを持つてきておいてよかった。

汗だくやずぶ濡れになった時に備えて、制服とタオル以外にも下着を持参しておいた。……まあ、正直な話、水かけっこになる事は想定して、用意したものでもあるが。

「ふう、よし」

とりあえず……やっぱり後で菅谷はぶつ飛ばす、そう心に決めた時だった。

「樋口、樋口ー」

自分と呼ぶ声が、自分が入っていたシャワールームの隣から聞こえてくる。顔を向けると、透がカーテンの隙間から顔を出している。

「ブラとパンツとタオル貸して」

「……はいはい」

まあ、持って来ていないのは察していた。そもそも学校出る前から手ぶらだったし。……かと言って、ちゃんと持参してあげている自分もどうかと思うが。

「浅倉、今胸いくつだっけ？」

「え、知らない」

「……一応、持って来てはあるけど私のだから。サイズ違っても文句言わないで」

「どうも」

「あと、洗濯して返して」

××それだけ言いつつ、持って来たタオルと下着のセットを手渡した。

×一方、男子である菅谷は、パンツまでぐしよ濡れになっていても気にせずにごみ拾いを続けていた。二人がいなくなったら、もう遊ぶ相手もないのでコツコツとゴミを拾う。……あわよくば「なんか面白いもの出て来ないかなー」なんて思っていたり。

「ふう……」

空き缶やら何やらを回収していると、ふと目に入ったのは一人の女子生徒。何故目に入ったかって、ジャージの一部が二年の色だからだ。

堂々と歩きながら、キョロキョロと周辺を見回している。上級生のエリアであれだけ

普通にしていられる子も珍しいだろう。

とりあえず、声を掛けるのはやめておいた。それよりも、二人の分も頑張つてゴミ拾いしなくては。

そう思つて、また新たなゴミを見つけに行こう……とすると、後ろから腕を掴まれる。さつき視界に入った少女が、ニコニコしながら掴んでいた。

「……なんですか？」

「やは~~~~♡ 人を探してるんですけど、知りませんか？」

「? 人ならたくさんいるけど……」

「そうじゃなくて、透先輩を探してるんですけど」

まあ、頼られた以上は仕方ない。その人を探さないといけない。

……しかし、透とは浅倉透のことだろうか？ 名前の響きだけでいえば男でも女でも通用するし、割とノーヒントな感じある。

「どんな人？」

「カッコ良い人」

まず浅倉ではないだろう。あれは綺麗な類だし。それに、カッコ良いと言われれば男を連想する。

「他には……」

「えーつと……いつもマイペースで、カッコ良くて、意外と何も考えてなくて、カッコ良くて……あとカッコ良い人」

「ふむ……なるほど。つまり、カッコ良くてマイペースなイケメン？」

「そう」

「ごめん、俺にそんな知り合いいない。……というか、三年にそんなのいたかな」

「え、透先輩知らないわけないよ。密かにファンクラブとかあるんだよ？」

「そんなのあるのか、と思いつつ、密かなファンクラブを普通の人を知るわけないでしょ、と言うツツコミは飲み込んだ。

「うーん……雰囲気的には、ちょうど先輩みたいな人だけど……」

「先輩？……あ、俺のこと？」

「そう」

なおさら、心当たりがない。と言うか、そもそも自分の発する空気にピンと来てない。

これ以上、付き合うのは面倒になって来た。先生の話によると、少なくとも班に配った袋、半分以上はゴミを敷き詰めないといけない。

その為には、大物拾いは必須だ。「え、なんでこんなもの川に捨てるの？」つてもものを見つけたい。

「じゃあ、とりあえずゴミ拾い手伝って。途中でその人、見つけたらそっち行って良いか

ら」

「え、もしかして先輩、雛菜の事好き〜ってなっちゃった〜?」

「? 雛菜って誰?」

「私の事〜」

「ああ……いや全然。俺、もう好きな人いるし」

「あは〜〜〜?!? そうなの〜〜?!?」

急に目を輝かせた。女子は皆、恋バナが好きなものだ。

「誰々〜?!? 先輩みたいなイケメンさんが誰を好きになっちゃったの〜?!?」

「え、言わないよ」

「えー?!? なんでー?!?」

「恥ずかしいから」

「やは〜〜〜♡ 全然、恥ずかしくなさそ〜〜〜」

そんなこと言われても、恥ずかしいものは恥ずかしい。言いたくないものは言いたくない。ましてや他人を相手に。

「でも、少し先輩に興味出て来たかも〜。手伝うから、透先輩探し、手伝ってね〜?」

「はいはい」

それだけ話して、二人でゴミ拾いを続行した。

× × ×
透と円香は、着替えを終えると、少しウキウキして菅谷の元へ合流しに行った。

いじれる、と、思ってから、二人の行動は早かった。すぐに制服に着替え、元の場所へ向かう。

「樋口、下着きつい。ブラが特に」

「喧嘩売ってんの？」

割と本気でイラつとした様子の声音であったが、透は気にもしていない。

「で、どういじる？」

「どうしようか……またブラ透け？」

「嫌。自分でやったら？」

「だよね」

せつかくなら、スカートであることを使いたい。もう川に入るつもりはないけど、ギリギリ見えるか見えないか、みたいな駆け引きが……。

ふと案を出したのは、円香だった。

「スカートは？」

「え……パンツ見せるの？」

「出さないから。見えるか見えないかの際どい所、みたいな感じ」

「……なるほどね。良いかも。具体的には？」

「敢えて私達の後ろに菅谷がいる時、前屈みになりながらゴミを拾うのを試したい」
「良いね。じゃ、私は逆に前屈みになってる菅谷の前に立ってみようかな」

なんて、割となかなか悪い作戦を考えながら歩いている時だった。ふと、視界に入っただのは、菅谷が見覚えのある少女と手を繋いで歩いている所だった。

「やは~~~~♡ 菅谷先輩、優しい〜」

「え、そう？」

「そうだよ。雑菜の分、ゴミ持ってくれてるし〜、さつき雑菜が見つけたけど持てなかった電子レンジと、自転車のカゴと、羽なし扇風機も引き抜いてくれたし〜」

「お陰で俺しか役に立ってなかったけどね〜」

「あは〜、そう言うところムカつく〜」

そう言う菅谷のゴミ袋の中には、家電が三つ程、入っている。周りが持っているのは桁が違う、40リットルゴミ袋だ。

あれを、二人で集めたと言うのだろうか？ 自分達を差し置いて？ 二人揃って、少しムカついた。ジェラシーと言えばジェラシーなのだが、どちらかと言うと「自分達がない間に、別の子と仲良く本来の目的を達成させるとは何事だ」と言った具合である。

「……」

「……」

さて、どうするか。とりあえず邪魔はするとして……どうしてやろうか？ 円香が作戦を考えている間に、透が突撃してしまった。

「やつ、雛菜。バカ谷」

「やは♡ 透先輩だ♡」

「え、今なんでナジったの浅く……」

「……やは？」

透と知り合い？ と、雛菜が理解しかけたのをわずか0.00001秒で把握した円香は、頭の中でハツとする。

そういえば、雛菜はあの写真に写っている真ん中の男に、口では言えない制裁を下すつもりだった、と思い出すまで0.00002秒。

そして、地面を蹴って菅谷と雛菜の間に飛び込むまで、0.00003秒で動いた。「！」

「？ 円香先輩？」

「え、何してんの？」

そうだった、何してるのか、自分は。これじゃあ、嫉妬して飛び込んだみたいになっ
てしまう。

何とか言い訳を考え尽くし、絞り出た言葉がこれだった。

「は？ あんた、これだけ拾ったゴミ、自分の手柄にするつもり？」

「？ 何言ってるの？」

「悪いけど、班員だから。私の手柄でもあるから」

「いや、全然言ってる意味が分からないんだけど」

「分かったら、これ運ぶから。あんたも手伝って」

そう言うのと、強引に円香は菅谷の腕を引いて、ポカーンとする透と雛菜の間を抜けて、ゴミを回収している教員の元まで引き摺った。

「ねえ、何してるの？」

「良いから黙って……私が一番、何してるか分かってないから」

「はあ……あ、もしかして疲れてるの？ 休んだら？」

「それは間違ってるけど腹立つ」

本当に、本当に何しているのか、と思い、真っ赤になった顔を隠しながら、とにかく
進んだ。

×××
一方、その頃。

「樋口、どうしたんだろ？」

「透先輩、菅谷先輩と知り合いなの〜？」

「うん、クラスメイトだから。良い人だよ、菅谷」
「分かる〜。雛菜、男の人の中では一番好き〜」

完全に一人相撲だった。

朱に交われれば赤くなる。

9月になった。

久しぶりの学校が始まり、円香は透と一緒に登校した。席に座ると、透が自分の席に荷物を置いて歩いて来る。

「いやー、久々だね。学校」

「前に川ボラ来たでしょ」

「でも二週間くらい前じゃん」

「まあね」

あの後、割と菅谷と一緒にいる事も増えて来て、三人一緒にお祭りに行ったり、美術の課題の風景画を描きに行ったり、最終日に図書館で三人集まって宿題を終わらせたりました。

とにかく、来年から絶対、3人で宿題を三分の一ずつ分けて写し合いにしてやる、と強く決めるほど大変だった。

「浅倉、来年からもう宿題見せないからね」

「え、なんで？」

「浅倉と菅谷が三分の一ずつやるなら、写させてあげるから」

「え？」

「何その返事。自分はやるつもりないって事？」

「いや、来年はもう菅谷いないでしょ」

「……あ、そっか」

そういえば、今年で卒業だった。未だに菅谷がどこの高校に行くかは知らないが、なんだか一緒にいるのが当たり前みたいになってた。

……それを思うと、なんだか少しだけ羞恥心が込み上げて来る。その円香を見て、透が珍しくフォローするように言った。

「私も気持ちには分かるよ。なんか、今年初めて知り合った感じしないよね」

「あんたは似てるからでしょ」

「え、そうかな」

残念ながら不発だったが。……しかし、そう思うと円香自身にとつても、おそらく透なのだろう。

透と似ているから、4月に初めて会った気がしない。そう思うと、割と初対面からガン言ってしまった自分の事は、今思えば反省してしまふ。……まあ、菅谷が相手だし、あんま気にすることないか、とすぐに反省を打ち消したが。

「まあ、向こうにその気があるなら、卒業しても連絡くらい取れるでしょ。チェインとかあるし」

「そっか。じゃあ、私めっちゃチェイン送る」

「勝手にすれば。私は送らない」

少し、来年も一緒にいると思っていたことが癪だった為、しれっと返しておく。そもそも、あいつと一緒にいても疲れる事の方が多い。

お祭りに行つた時は勝手に透と別方向にウロウロし始めて、二人の位置を可能な限り把握しないとイケなかった。二人とも、行く店が割と円香にも興味ある店だったのが余計に腹立つ。

美術の宿題をやりに行つた時は、一人だけ川じゃなくて蟻の絵を描いていた。これはもう捨て置いた。ムカつくほど上手かったし。

最終日の宿題なんて、途中で飽きて透と脱走し、かくれんぼになる事も多かった。誰と誰の宿題を手伝い、写させてやっているのか考えて欲しい。途中で見せるだけ見せたが、円香もやめて本を読み始めると、二人ともやり始めたので、本当に放っておいた方が良くのかもしれない。

だから、別にあんなのいなくなつて平気だ……ん？ 平気かどうかの悩みだつたっけ？ と、悩んでいると、自分の隣の席に男子生徒が現れる。

「うーっす。浅倉、ヒグマ」

「おはよう」

「誰がヒグマ？」

「いや、夏休みも終わつたし、そろそろ新しいあだ名を考えてた所で『樋口円香って、略したらヒグマじゃね?』って……」

「アレだ。夏休デビューってやつ」

「それだ」

「どうでも良いけど、その呼び方しても返事しないからね」

しれっと一刀の元、斬り捨てた。もうヒグっさん呼びの訂正は諦めたが、ヒグマとか言う真夏のキャンプに気を付けなければならない哺乳類みたいな呼び方は頼むからやめてほしい。

そんな中、透が隣から割り込んできた。

「ね、私のあだ名は？」

「浅倉? 浅倉は……南ちゃん?」

「え……やだ」

「いや、ていうか浅倉ってやたらと呼びやすいから、浅倉のままが良い」

「え、私のママ?」

「うん」

「私のママの名前知ってたっけ？」

「え、いや知らないけど」

「え？」

「え？」

なんか噛み合わない二人の話を聞くこともしないで、円香はその場でため息をつく。

「ていうか、別に樋口って呼びづらくないでしょ」

「え？ うん、まあ」

「じゃあそのヒグっさんって呼び方もやめて」

「えー、もうヒグっさんで慣れちゃったよ」

「良いじゃん、ヒグっさん。私もアサっさんが良い」

「いやそれは呼びづらい」

まあ、こう言うやりとりになるから、訂正はもう諦めた所あるのだが。

そんな話をしてしていると、教室に先生が入ってくる。それに伴い、透は一度、軽く挨拶して席に戻った。

「おーし、お前ら。久しぶりー。とりあえず、課題回収すんぞー。英語から前に回せー」
先生のセリフで、全員が課題を前の人に流して渡す。円香と菅谷は一番後ろなので、

自分達が回さないと回収が始まらない……のだが、菅谷は鞆の中を漁り続ける。

「何してんの？」

「ないわ、課題」

「……は？」

「忘れちゃった」

「……全部？」

「全部」

「……」

思わず円香はため息が出る。この男、何故ここまでバカなのだろう、と。せつかく手伝ってやったと言うのに、このザマである。

それと同時に、少し後悔してしまった。昨日、宿題が終わって解散した後、透には「ちゃんと忘れないようにね」と伝えておいた。それを、菅谷にするのを忘れていた。

「はあ……どうすんの？」

「先生に土下座するわ」

「土下座は逆に怒られると思うけど？」

「じゃあ袖の下」

「もつと怒られるでしょ。普通にお願ひしたら？」

「……そうする」

さて、菅谷の列も、菅谷の前の席から回収が始まり、課題のプリントが重ねられていく。

普段、給食に使われる配膳台の上に、課題が全部、重ねられると、先生は続けて言った。

「今、自己申告すれば、少なくとも俺が受け持つてる公民の分は明日まで許してやる。課題、忘れた奴はいるか？」

「はい」

「菅谷、お前は分かっている。手を下げる」

「いや、違うんですよ。ちゃんとやってあるんです」

「分かったから。そう言うのは持つてきてから言え」

そう言うって菅谷はおとなしくされる。まあ、公民の分だけ待つてもらえただけでも良しとするべきなのだろう。

すると、先生は今度は透の席の前に立ち、まるで重要参考人として連行した被疑者に詰め寄るように、机に手を置いた。

「浅倉、白状しろ」

「え……何を？」

「課題、忘れたろ？ 言ってみ？ ん？」

「いや、持ってきたけど」

「今なら公民は許してやるって言ってるんだろ？」

「や、ほんとに」

「……」

日頃の行いが、これでもかと言うほど火を吹いていた。流石に円香にもフオローは出来ないので、黙って無関係を装っていると、先生が円香の方を見ているのに気づいた。

「樋口、お前ん所の双子、どうなってるんだ？ ちゃんと面倒見ろよ」

それにより、教室内から控えめな笑いが漏れる。イラリ、と額に青筋を浮かべた円香は、すぐに言い返す。

「は？ 私の子みたいに言わないでくれませんか？」

「でも保護者だろ？」

「違います」

……とはいえ、まあ宿題をやっているのも持つて来たのも事実なので、このまま透が攻められるのは少し可哀想な気もする。

仕方なさそうにため息をついた円香は、すぐに続けた。

「ていうか、少なくとも浅倉の課題はあると思いますよ。昨日、菅谷とまとめて見ました

ので」

「やっぱり保護者じゃん」

「は？」

「っ……怖っ」

お調子者のクラスメイトを眼力で封殺すると、続けて言った。

「疑わしいなら今、確認してくれませんか？」

「……あつそ。なら良いや。じゃ、お前ら廊下出るよー」

とりあえず信用することにしたのか、先生は廊下に並べさせた。これから始業式である。

×××

さて、始業式が終わり、教室に戻って来た。とりあえず、もうやる事は何も無い……

はずだが、先生は全員に言った。

「よし、お前ら。席替えやんぞ」

そのセリフに、また全員が盛り上がる。本当に同じイベントで盛り上がるなんて単純、と円香は鼻息を漏らした。

しかし、まあそろそろだとは思っていた。前回の席替えは6月だし、新学期になったこともあつて心機一転と化すのは考えられた事だ。

「あーあ、ヒグっさんともお別れかー」

「転校するみたいと言わないでくれる？ 席が変わるだけでしょ」

「でも、寂しいじゃん」

「……別に。むしろ清々する」

本当に鬱陶しいし、なんなら寝顔を見ないために寝かさないうよう、起こし続けるのが大変だった。だから全然、清々する。

「ふーん、俺は寂しいけどなー」

「……」

「あ、でも浅倉と一緒にになれるならやつぱ寂しくないや」

そんな言葉を聞きながら、回って来たたくじを引く。全員が番号を確かめ始める間、先生が続けて言った。

「あ、ちなみに次の席順が修学旅行の班員になるからな。心して引けよー」

引く前に言えよ、と誰もが思ったが、黙って全員、くじを引いた。そういえば、修学旅行かー、なんて円香はぼんやりと思った。

まあ、旅行でくらい周りの言う「保護者」の位置から外れて一人、のんびり回るのも良いかもね……なんて、思ってもいない事を思いつつ、机を移動した。

また一番後ろ、そして今度は廊下側になった。相変わらず、程よくサボれる席だ。

さて、誰が班員になるかな……なんて思っていると、前の席に透が来た。

「あ、樋口じゃん」

「……結局、保護者ね……」

まあ、こつちなら楽出来るし、悪くない……なんて思っていると、透の隣に菅谷が来た。

「お、ヒグつさんと浅倉」

「わっ、勢揃い」

「……」

気苦労を覚悟する他なかった……はずなのだが、そこまで憂鬱には感じなかった辺り、やはりなんだかムカつく。二人にも、自分にも。

残りの一人は、同じクラスの男子生徒。菅谷の後ろ、円香の隣の席に来るなり、焦つたような声を漏らす。

「え……ま、マジ？ 三馬鹿姉弟勢揃い？」

「……は？」

「あ、しまっ……！」

円香が一瞥した直後、その生徒は口を塞ぐ。しかし、時既に遅し。

「あんた今なんて言った？ 三馬鹿姉弟？」

「い、いや……」

「それ私も含まれてんの？ てか、誰と誰が姉弟？」

「ちよつ……別に俺が言い出したわけじゃないし……」

「……それどういうこと？ クラス全員が言ってるわけ？」

「……」

目を逸らす男子生徒。クラス全員を見ると、一斉に顔を背けた。

「菅谷、私達姉弟だって」

「なんそれウケる。マジで姉弟になれちゃったじゃん」

「菅谷が弟なのは確定してるとして、私と樋口、どっちが姉？」

「え、なんで確定？」

バカ二人はもう受け入れている。コイツらのせいで、自分までバカにカウントされて

……いや、まあ心当たりがないわけでもないが。その事実が余計に怒りを増させた。

「……ちなみに、言い出しっぺは？」

「先生」

「……は？」

×× 片眉を上げながら黒板の方を振り向いた時には、もう教員の姿はなくなっていた。

さて、翌日。授業の中にたまに混ざる「学活」の授業。学級活動という奴だ。

この時間は、修学旅行の予定について班員で決める。使って良いのは、図書室とコンピュータ室。

自分達の残りの班員の一人は「俺は俺で調べるから」と早々にいなくなってしまった。

「いるよね、ああいう協調性ないの」

「それな」

「あんたらが言うな」

そもそも、あの男の子の気持ちも円香にはわかる。三馬鹿姉弟とか抜かされている三人の中に放り込まれたら、誰だって気まずいだろう。……とはいえ、わざわざフォローしてやるほどお人好しでもないが。

図書室で京都・奈良関連の資料を漁りながら、透が聞いた。

「で、どうしよつか。自由行動出来るのって一日目の午後と二日目の午後でしょ?」

奈良と京都で半日ずつ。三日目は全員グループ行動になる。

まず手を挙げたのは、菅谷だった。

「俺、あれ食べたい。どろどろスープのラーメン」

「グルメ旅行じゃないから。そういう話すると浅倉が……」

「あ、じゃあ私、京野菜のカレー食べたい」

「ほら乗っちゃう……」

グルメ旅行はプライベートで行ってもらいたいものだ。食べ過ぎると普通に太るし。「そうじゃなくて、観光地でしょ。清水寺……はクラスで行くからいいとして、京都と奈良の観光地を探してくれる？」

「鹿公園」

「大仏公園じゃなかった？」

「奈良公園ね」

少なくとも、円香はそのイージーな名前を間違えて覚えている人を見たことがなかった。

「とりあえず、そこ行ければ良いよね」

「うん。ロデオしたい」

「あれ天然記念物だから。そんな事したら怒られるよ」

ロデオはそもそも牛である。せめて一般常識は身につけて欲しいところだ。

「……そうじゃなくて、何処で時間を潰すか考えないとだから。修学旅行に行った後は、どうせレポートとか書かされるし、ちゃんと事前に調べておかないと面倒になるよ」

「あ、俺あれも食べたい。バッテラ」

「聞いてんの？」

「じゃ、私たこ焼き」

「それ大阪だし」

「京都も大阪も同じじゃないの？」

「浅倉、それ現地で言ったら殺されるかもだから気を付けて」

「えっ」

よくもまあ、ここまで言いたい放題出来るものである。もうこうなってしまうたら、食べ物の話から脱却できない。

そうなったら、円香もツツコミなんて入れても無意味だ。

「私にはしんそば食べたい」

もう訂正を諦め、話に参加した。それを聞いて、菅谷が賛同するように微笑んだ。

「良いね。正直、俺観光よりも食い倒れ旅行のが興味ある」

「分かるわ。なんなら行っちゃおう？ 私達だけ、大阪に」

「……ありだな。大阪なら、たこ焼きもお好み焼きも串カツもあるし」

「一応、後で聞いてみようか。先生に」

なんて変な方向に話は盛り上がっていく。最近になって、円香は二人の自由さに当てられるようになってきていた。

菅谷が、ふと思いついたように言った。

「あ、大阪といえばU○Jあるじゃん」

デ○ズニー擬き……なんて言えば双方から怒られるアレである。実を言うと、映画等の作品などで言えば、デ○ズニーより円香はバ○クトウザフューチャーやス○イダーマンの方が好きである。

円香が少し行きたい、と思つたあと、さらに透が続けて言つた。

「良いね。あと大阪城」

それは正直、興味なかった。いや、見たくないわけではないが。何にしても、行きたいところがあるのは結構だが、その二つの間にどれほどの距離があるかを知らないといけない。

「待つて、二人とも。全部回るなら計画的にルート決めないと無理。泊まる宿は京都だから、交通の面でも考えないと。特に、U○Jなんて行つたら一日潰す事になるよ」

「じゃあ、その辺は樋口よろしく」

「うん。俺らそういうの出来ない」

「はいはい……あんたら、代わりに案出してね」

と、言うわけで、三人で計画を練り始めた。行き帰りの時間を含め、あれこれと考え、大阪を回るのに可能な限り現実的な案を作り上げた。

その結果……。

「京都・奈良って言ってんだろ、三馬鹿姉弟」

× 勿論、やり直しを喰らった。

× 土曜日、円香と透は、雑菜や小糸と買い物に来ていた。旅行に持って行く化粧品のためである。化粧水やリップなど、そういった物を三日間分、持っていないといけない。年下二人は付き添いである。

手早く買うべき物の購入を終えて、ついでに本屋などで旅行雑誌を立ち読みしていた。

「あーあゝ……透先輩、修学旅行なんて休んじやえば良いのに」

「ひ、雑菜ちゃん……ダメだよ、わがまま言ったら……！」

「円香先輩は別に良いけど」

「何。一々、私を引き合いに出さないと気が済まないわけ？」

「雑菜と小糸ちゃんも来る？」

「ぴやつ!? 行けるの!?」

「やは~~~~♡ 行く~~~~」

「行けるわけないでしょ」

もうほとんどいつもの会話である。仲良いのか悪いのか分からないが、雑菜がまとも

に会話する時点で、円香ともそれなりに仲が良いと見るべきだろう。

雑誌を眺めながら、透がふと思ったように聞いた。

「二人とも、お土産は何が良い？」

「えっ、か、買って来てくれるの……!?？」

「透先輩好き♡♡」

「勿論。樋口と割り勘で」

「……まあ良いけど」

割り勘なんだ、と少し意外に感じてしまった。勿論、割り勘ということは二人で一つずつのお土産を二人に買うことになる。二人で二人に買って来るより低コストで済むので、そういう意味だとセコイとは思うが。

「やは♡♡ じゃあ、雛菜はね♡……京都のおばんざい食べたい♡」

まあこう言う無理難題を平然と抜かす可愛げのない後輩だから、それでも良いか、と思ってしまうわけで。

ちなみに可愛げのある……というか、可愛げしかない後輩の方は。

「じ、じゃあ……私は、よーじやのあぶらとり紙！ 私もう、大人だからね！」

と、一番低く小さい胸を張ってそう言った。本当にどこまでも可愛い子である。本当は八つ橋とか食べたいだろうに。

「わかった。じゃあ、小糸はよーじやね」

「雛菜、やっぱり八つ橋の方が良いかも」

「えっ、ひ、雛菜ちゃん……八つ橋にするの？」

「うん。甘いもの食べると、しあわせ〜ってなるから」

さつきまでおぼんざいを望んでいた少女とは思えないセリフである。それが雛菜たる所以ではあるのだが。

お陰で振り回される方は大変である。そんなことを目の前で言われれば、小糸も当然、食べたくなってしまうわけで。

「じ、じゃあ……やっぱり私も八つ橋！」

「味は？」

「チヨコレートで！」

「雛菜はあんこ〜」

「っ、や、やっぱりあんこ！」

ちよつとよくわからない所まで競い始めた。可愛い、と思わず円香も透も雛菜もほっこりしてしまう。

そんな生温かい目を逃れるべく、小糸は新しく提案するように言った。

「し、修学旅行と言えばさ、やっぱり夜だね！ 男の子と女の子が集まって、トランプ

とか枕投げとかしちやつて……」

「いや、男子と女子はまず階が違うから。先生とか見張つてると思うし、無理でしょ」
が、円香が切り捨てる。教員が思っているほど、中学生の性欲は強くないのに、万が一に備えてかなりの数が防衛に出ている。

「そ、それ以外にもさ、好きな男の子と宿を抜け出して、浴衣で空を眺めるとか……」
「え……10月中旬だし、お風呂上がりだと普通に寒いかも……」

透が少し困惑したように言う。夜は割と冷え込む季節だし、そもそも浴衣で外に出ればかなり目立つ。

「ほ、他にもさ！ 外に出なくても部屋に入らなくても、温泉の近くにある卓球台で、身体を動かすとか！」

「雛菜、部屋でお菓子食べてた方が幸せかも」

「……」

小糸は涙目になって黙るしかなかった。で、小糸が涙目になれば、黙っていない奴が一人、いるわけで。

さりげなく庇うように小糸の前に出た円香が、頭を撫でてあげながら透と雛菜を睨み付ける。

「あんたら、もう少し夢見る小糸の話に付き合っただけであげられないわけ？」

「え、樋口が真っ先に止めてたんじゃん」

「あはく♡ 円香先輩、最低くくく」

「は？ 私は私、あんたらはあんたらでしょ」

「お、落ち着いて三人とも……！」

なんか勝手に険悪になり始め、小糸が慌てて止めるしかなかった。

何はともあれ、もうすぐ修学旅行である。

苺の果汁を一滴、垂らす。

10月。修学旅行の日の朝は、何故かいつもより怠い。旅行が嫌だとか、面倒臭いとかではなく、なんか知らないけど頭が重いのだ。

その怠さは学校に着くまで続くが、新幹線に乗る頃には既に消えている。不思議なものだ。

それは円香も同様で、新幹線で透の隣に座っている頃には、柄にもなく少しワクワクしていた。なんだかんだ言って、京都と奈良は嫌ではないのだ。

「樋口、ポッキー食べる?」

「……食べる」

なんで今食べてるの?　なんて疑問は無駄である。もう開けてしまっているのだから、もらったほうが良い。

「いやー、いよいよだね。楽しみ」

「そんなにはしゃぐほどの事でもないでしょ。結局、有名どころばっか回るわけだし」

結局、回るルートはもう一人の男子が決めた。大阪の食い倒れ旅行計画を3人で立てている間に、ちゃんと考えておいてくれた。あれを提出した時の「やっぱ三馬鹿姉

弟じゃん」という担任のセリフは円香の中の屈辱として残った杭となっていた。

「でもほら、やっぱ楽しみじゃない？ 金閣寺とか、写真でしか見た事ないし」

「……浅倉ってそういうの好きだったっけ？」

「うーん……どうだろ。今までのイベントと違って、樋口以外の仲良い人と一緒にいるの、初めてだから。……ほら、この前の体育祭も楽しかったじゃん」

「……ま、確かに退屈ではなかったけど」

修学旅行前にあつた体育祭では、三人はもう一人の男子と一緒に障害物競走に出場した。三人とも、決して運動が苦手なわけではなかったこともあつた……のだが、体育の授業の練習中、遊びに遊びまわっていた事もあつて、障害物の突破に時間掛かつた。

特に、平均台の上で足を滑らせた菅谷が、股間を強打した時は痛みがわからない女ならではの爆笑が込みあげてきた。

「……あの時のこと、覚えてる？」

「忘れるわけじゃないでしょ。あれもうホント、動画撮つときたかつたくらいだし」

「その時の樋口も面白かったよ」

あの時、なんと二位を獲得した。唐突に次のランナーだった円香が、バトンを受け取るポジションから抜け出したのだ。

助けに行つた……誰もがそう思ったが、バトンだけ抜いて捨て置いたのだ。それがま

た波紋となつて広がり、爆笑を呼んだ。

「あの時、ホント……ぷふつ、あいつのあんな姿……中々、見れないよね……！」

「いやいや、私が面白いつて思ったのはそつちじゃなくて。……そつちも面白かつたけどね」

「? 何?」

「いや、あのまま菅谷を……」

「呼んだ?」

唐突に割り込んできた声に、窓際にいて通路がよく見える透はすぐに顔を上げて、通路側にいた円香は透の方を向いているため姿は見えなかったものの、誰だかすぐに分かったようであめ息をついて答えた。

「やつほー、菅谷ー」

「やまびこー、浅倉ー」

「はあ……バカ部族……」

そう言うつてから、ジロリと菅谷を見上げる。

「何しに来たの」

「ん、遊びに」

「走行中は必要以上に立たないでください」

「まあ良いじゃん。菅谷も一緒に話そうよ」

「いや、席空いてないし」

「俺、体幹強いから」

「この前滑り落ちた人のセリフじゃないでしょそれ」

それはその通りだ。説得力という言葉を知らないのだろうか？ というか、体幹とかそういう問題ではない。普通に何かあった時に危ないというものだ。

さつさと帰らせようと円香が口を開きかける前に、難しい顔で顎に手を当てていた透が、ふと思ったように聞いてきた。

「ねえ、菅谷」

「? 何?」

「興味本位から聞くんだけどさ」

「だから何?」

「ていうか、立ったまま話す気? 後にすれば……」

「ソレ、強打するとやっぱ痛いのか?」

「ブフツ……!」

股間を指差しながら聞いてくる透の真横で、思わず吹き出してしまったのは円香だった。

「あ、あんた何聞いてんの……!?」

「だって、気になるじゃん。私達に無いものだし」

「だ、だからって……!」

「痛いなんてもんじゃないから。猫とか犬で言うと、尻尾を踏まれた感覚なんじゃない?」

「あんたも答えるな!」

なんなのか本当に分からない、このバカ達。女子である自分にはいまいち分からないが、あまり男は股間の話をする事に躊躇いが無いのだろうか? ……それとも、やはり人による? 透は全然、平気そうに質問してたし。

いや、そんな事よりも、さっさと追い出した方が良い。

「良いから席戻って! この変態!」

「え、なんで変態?」

「い、い、か、ら!」

ギロリと睨んで追い返すと、小さくため息をつく。本当にあいつはダメだ。何がダメって……それはもう、何もかもである。

……まあ、種を蒔いたのは隣にいるバカだが。

「あーあ、行っちゃった……」

「浅倉も。バカな質問しないでくれる?」

「いやだつて気になつたし……尻尾踏まれた猫と同じ感じなのかな？」

「……それより浅倉、さつき何言おうとしたの？」

強引に話題を逸らした。何が悲しくて同級生のナニの話を、修学旅行中にしないといけないのか。

話題を変えるには、さつきまで話していたことを持ち出すのが一番……なのだが、透にはそれが効かなかつた。

「なんの話してたっけ？」

「……あ、富士山」

「え、どっ？」

窓の外で話を逸らすことにした。

×

×

さて、無事に奈良に到着した。まずはクラス行動、それもバスで移動。午前中を使い切つて、宿まで行き、デカイ荷物を部屋に置いてから、お昼をとつて奈良公園まで移動し、写真を撮つてそのまま班行動となる。

まずはお昼を終えて、奈良公園まで移動して来た。

「わつ、マジでいるじゃん。鹿」

「ロデオ？」

「やらないですよ。やるなら、私が近くにいない時にして」

冷たく返されたが、とにかく三人で歩いた。残りの一人は、仲良い友達の班と合流した。追い出してもいけないし、お昼の時も普通に話していたのに、だ。

「なんでだろうね？」

「ホントだよ。そんなに昼飯の時、四人でやった『箸を使った一発芸大会』で自分だけ滑ったのが傷ついたのかな」

「あれほとんどいじめだったからね」

本気で不思議そうにしている透と菅谷に、円香がしれつと苦言を漏らす。

その円香に、透が言い返した。

「いやいや、樋口も中々、突ったことしてたでしょ」

「それな。面倒だからって『ミサイル』とか言いながら、俺に箸投げつけたでしょ」

「それを菅谷が弾いてあの人のところに行つて、あの人が弾いて先生の鼻の穴に刺さったもんね」

「めっちゃ笑った」

「めっちゃ怒られたけどね」

それだけの事があれば、普通の人は一緒に行動するのも嫌になるのも頷ける。それが正しいとは言えないが。

「ま、いいから動こう。奈良公園を一通り見た後は、法隆寺とか見に行くんだし」
円香が言うと、二人は渋々、従った。

こうして見ると、本当に奈良公園の風景というのは異形なものだ。何せ、野生の鹿が普通に生きているのだから。

これら一頭ずつが天然記念物であり「ご神鹿」として讃えられているそうだ。

「ヒグっちゃん、写真撮ろうよ」

「良いけど……ねえ、今変わった呼び方しなかった?」

「浅倉も。……自撮り出来っかな。鹿と。シカトされるかも」

「鹿だけに?」

「……ふふっ」

透の返に笑いをこぼしてから、円香はハツとした。なんて浅いギャグで笑ってしまったのか、自分は。

それを見て、透と菅谷もふつとほくそ笑むように笑う。

「今、ヒグっちゃん笑った?」

「超笑ってた。樋口、不意打ちに弱いところあるから」

「別に『超』は笑ってないでしょ……!」

「ということは、不意打ちのくすぐりにかなり弱いのでは……?」

「後ろから脇の下にブスつみたいな？」

「みたいな」

「じゃないでしょ。やったら蹴り入れるからね」

意外と鋭い蹴りが来そうではある。

そんな中、一頭の鹿が歩み寄って来るのが見えた。クンクンと鼻を鳴らしながら、透の顔に寄っていく。

「わっ、こっち来た」

「懐かれてる？」

「あはは、顔舐めるの辞めて。痒くなりそう」

意外とドライなことを言いつつ、他の鹿までさらに寄ってくる。何に惹かれているのか分からないレベルで寄ってきていた。

「え、ちよっ、スカート引っ張るのやめ……髪の毛に涎が……えっ、首筋舐めないで……ちよっ、ブラウスからビリって音が……」

なんか、やばい気がする。円香も菅谷も、あまりの圧に距離をとってしまった。

「た、食べられる、草食動物に。二人とも助け……!」

珍しい透の救助を呼ぶ声に、円香と菅谷はお互いを見て頷き合う。とりあえず、なんとかするしかない。

「どうしよっか？」

「おみくじ引いて浅倉の運勢を見ておこう」

「いやそんなじっくり対策してる場合じゃないでしょ」

「じゃあ、大仏様に助けを乞おう」

「なんで一歩目から神頼みなの」

本当に不思議な性格している男だ。

「私が浅倉についてるから、何とか出来そうなもの買つて来て」

早い話が鹿せんべいの事だが、流石にわかるだろう。とりあえず自分はどうするか考え始める円香に、隣で菅谷がしゃあしゃあど聞いた。

「その前に写真撮らない？」

「……それはそうかも」

「ちよつ、二人とも後で覚えててね」

本当に写真を撮り、さらにはその浅倉をバックにして二人も映り込んで撮った後、売店を見に行った菅谷の後ろ姿を眺めつつ、円香は透の方に向かう。

「とりあえず、鞆預かるよ」

「いや、鹿を預かって」

「それは無理でしょ。なるべくブラウス裂けないように立ち回って」

「いや立ち回るも何も動かないんだけど」

実際、何もできないのだから仕方ない。鹿を後ろから引きずろうとしようものなら、後ろ足から強力な一撃をもらうかもしれないし、そもそも重たくて持ち上がらないだろう。フィジカルで言えば、人間より鹿の方が上なのだろうから。

鞆だけ本当に預かって何とか抜けると「おーい！」と戻って来た。顔を向けると、菅谷は木刀を持っていた。

「こう見えて暴れん坊將軍見てたんだよ、俺」

「だから天然記念物だって言ってるでしょ。それで殺しちやったら逮捕だから」

追い返す。あの男、本当に何を考えているのか……と、思っていると、ピリツという音が円香にも聞こえてきた。

「ちよつ、浅倉。大丈夫？　なんか裂けてない？」

「さつきから割と破れる音が……あ、ボタン飛んだ」

「ちよつ……どこの？　ブラウス？　スカート？」

「一応、ブラウスだと思う……ひやつ、だから頬舐めるのは……」

一応、鹿の気を引けることはないだろうか？

どうしたものか考え込んでいる間に、またすぐに菅谷が戻ってきた。

「買ってきたよ」

「早いじゃん」

「走ったから」

そう言うのと、菅谷は袋の中をまさぐる。ようやくか、と円香はホツと胸を撫で下ろすと、中から出て来たのは大仏の絵がプリントされたTシャツだった。

「さつきビリって音がしたらしいから、Tシャツ買ってきたよ」

「役に立つけどそうじゃないから！ 事後に使う物じゃなくて、今使うもの買って来なさいよ！」

もう大声を上げてしまった。それにより、菅谷は走って売店の方に戻る。あの男、本当にバカだ。

すると、また戻って来た。

「すごい、見て見て！ 鹿のフンっていうチョコレート売ってた！」

「鹿せんべい買って来い!!？」

もう直球だった。言わなきゃ分からないらしい、あのバカタレは。

追い返してからため息をつくど、鹿の中から透が呆れ気味に声を漏らす。

「なんであいつに買いに行かせたの？」

「……………めん」

透が友達を「あいつ」と言うことは中々ない。そういう意味で、本当に持っている男

だ、あれは。

ようやく戻つて来た菅谷が、今度こそ鹿せんべいを買つて来た。

「おい、買つて来たよ。鹿せんべい」

「じゃあ、気を引いて」

「はいはい」

そう言うと、菅谷は袋からせんべいを取り出す。その直後だった。透の方に群がついて鹿達が、一斉に菅谷の方を振り向く。

「えっ」

そして、猛然と駆け出した。

「ちよつ、まっ……お客様、一人ずつお配りしますので、一列になってお並び下さ……」
飲まれた。ひっくり返つた菅谷に群がついている間に、透はとりあえず抜け出す。胸元のボタンが飛び、袖や襟が少し穴空いていて、身体中もベトベトでとてもこのまま観光を続ける気にはならなかった。

「……私、鹿嫌い」

「まあ、着替えはあいつが買ってきてくれたし、着替えたら？」

「いや……このまま銭湯行かない？ 近くにあるでしょ。上からはジャージ羽織るか
ら」

「……そうしよっか」

そう呟いてから、二人は未だに飲まれている菅谷に顔を向ける。まるでゾンビの群れに飲まれているように、片手を力なく掲げていた。

「……行こっか」

「うん」

×無情にも、二人は捨て置いて、コインランドリーが近くにある銭湯を探しに行った。

×

×コインランドリーが近くにある銭湯を探し、二人で温まった。スカートを洗い、乾燥機に叩き込み、円香がそれを取りに行き、銭湯に戻ってから透はTシャツとスカートを履いた。ミスマッチだが、この際仕方ないだろう。

珍しく腹を立てている透が、お湯の中で温まりながら愚痴るようにつぶやいた。

「ふう……まったく、菅谷は……」

「でも浅倉。実際、菅谷と逆の立場だったら、同じ事してたでしょ」

「しないよ」

「いや、少なくとも鹿のフンとTシャツは買った」

「……」

否定し切れないのが困る。よくよく考えたら、仕方ないといえば仕方ないのだろうか

?

「言つとくけど、普通は一発で鹿煎餅が出るから。仕方なくはないから」

「たまに思考を読むのやめて」

「それはお互い様でしょ」

幼馴染ならではの会話だった。

……まあ、でもああいうノリも悪くない。なんだかんだ穴が空いたブラウス姿も、他の誰かに見られたわけではないし、終わりが良ければ全て良い。二度とごめんではあるが。

何より、修学旅行中に銭湯に行くなんて、中々ある話ではない。こういう感じも、決して嫌いというわけではなかった。

「……ねえ、樋口」

「何？」

「樋口はさ、菅谷のことどう思ってたの？」

「……何、急に？」

なんとなく気になったので聞いてみただけだが、円香は少し嫌悪感を出した。

「……嫌いなのか？」

「別に嫌いじゃない。嫌いだったら一緒にいないし。たまに鬱陶しいけど」

円香らしいと言えば円香らしい答えだ。言っていることは決して嘘では無いのだろう。

「ま……あんまり男の人と絡んで来なかったのもあるけど、一番気を遣わないでいられる異性ではあるかも」

実際、気を使ったことなんか無い。気を使わない、というより、あんまり気を使いたくないだけでもある。

向こうが自然体でいるなら、こちらも自然体でいたいと思っている。

「でも、体育祭の時は、わざわざバトンを取りに行つてあげてたじゃん」

「あれは、あのまま放置したら負けてたから」

「菅谷をあのダメージのまま走らせたくなかつたんでしょ？」

言うのと、円香はジロリと自分を睨んだ。

「は？ くだらない事言わないで」

「違うの？」

「……」

聞き返すと、円香は黙り込む。分かりやすい、と透は少し微笑んでしまう。円香が意外とそう言う風に接する相手は少ない。……まあ、実際、円香もあの時は爆笑を必死に抑えていたので、透の言う事は2割程度しか含まれていなかったが。

「ていうか、浅倉こそどうなの？」

「え？」

「菅谷の事。どう思ってるの？」

「……」

それを聞かれて、今度は透が黙る番だった。初めて話した時から、何となく思っていた事だ。

お互いにお互いのペースを外す事なく出来る会話……あまり口数と語彙力が多くない透は、他人との会話に苦勞する事も少なくなかった。いや、透は苦勞せず、相手に力をかけさせ、離れていくことが多かった。

だから、ここまで通じ合える人物を見つけたことによつて、透はもはや確信した。

「とつても気が合う奴だと思ってるよ」

「いやそんな当たり前のこと聞いてるんじゃないやなくて……」

「ずっと友達でいたい」

「……」

本心を言ったのに、円香は鼻息を漏らしながらため息をついた。自分の勘違いなら、それはそれでいつか、と思うように。

「さ、そろそろ上がろっか」

「? なんぞ?」

「いや今、修学旅行中」

「あ、そっか」

「予定表に『行く』って書いた場所で一枚は写真撮っておかないといけないんだから。急いで」

「銭湯って書いてあつたっけ?」

「あるわけがないでしょ」

そんな話をしながら、お湯から上がった。身体を拭きながら、下着を付けてから髪を乾かす。他にお客さんがいないから、ほぼ貸切状態なわけで、わりとやりたい放題できた。

「とりあえず、私スカートどうなってるか見てくるから、浅倉ここで待ってて」

「うん」

上半身の着替えはあるが、スカートの代わりになるものは持ち歩いていない。宿に置いてきたでつかい荷物の中だ。

先に着替えを終えた円香が出ていき、しばらく待機。暇なのでスマホを見ると、雛菜や小糸から連絡が来ていた。

「ふふっ……」

まだ奈良まで出て来て半日くらいなのに、本当に可愛い子達だ。

そう思いながら笑みを浮かべてトークルームを覗くと、円香が送った、透が鹿に襲われている写真にコメントを送って来ていた。

福丸小糸『透ちゃん、大丈夫?!?』

ひなな♡『透先輩、モテモテ♡』

「……」

いつのまにか、送られていた。まあ、円香もあ口で言っただけだが、こういう写真をしれっと送っている所を見ると、菅谷と一緒にやっぱり楽しんでるようだ。

そのことを小さく微笑みを浮かべて嘸み締めながら、とりあえず一通、送り返した。

浅倉『樋口、後で覚えてろ』

樋口円香『分かった。スカート置いてくるね』

浅倉『ごめん、嘘』

×弱かった。

×

× 銭湯から出た後は、とりあえず菅谷と合流する為に電話をかけた。これがまた良いタイミングで、電話をかけた直後、映画館のアナウンスが聞こえてきた。あと一歩遅かったらチケットを買われている所だった。

さて、電話で待ち合わせ場所を決めて、スマホのマップを眺めながらなんとか合流地点に向かうと、既に菅谷は到着していた。……アイスを食べながら。

「お待ちせ、菅谷」

「……あ、来た」

顔を向けた菅谷は、透の方を振り向くと、少し目を丸くした。それもそのはず。透は鞆の中に畳んでしまっておいたブレザーと、その下を買ってあげた大仏のTシャツを着ているから。

「すごいな、浅倉。なんでそんな変な服装なのに、絵になるの？」
「プフツ」

吹き出したのは円香。いや実は同じことを思っていた。何故、そんなにその服装が似合う？　そして何故、似合うのに面白い？

しかし、その反応もセリフも透にとっては地雷だったわけで。笑顔のままピシッと凍り付くと、とても透とは思えない速さで菅谷の手首を掴んだ。

「っ、な、何……？」

「そういえば、覚えててねって言ったよね」

「いや、そういえば……本人が今、忘れてたよね……？」

「思い出したからノーカン」

そう言いながら、透は後ろから菅谷の背中に回り込み、両肩に手を置く。

「っ、な、なに……?」

「よっ、と」

「うおっ……重っ!?」

「……なに?」

「ぐえっ……し、締まってる! 絞まってる!」

背中に飛び乗った直後、失礼な言葉が聞こえたので、首を絞める。後ろに落としそうになったのを、慌てて支える。

「っ、な、何してんの!?」

「まったくなんですけど」

同意したのは円香。少し驚いたように透を見上げてしまった。……が、その円香には透の鞆が放り投げられ、普通に避けた。

「え、なんで避けんの?」

「いや、持ちたくないし」

「ダメ。樋口もなんだかんだ写真撮ったし」

「いや、スカート洗ったでしょ」

「ダメ。勝手に送ったし」

「……ていうか何なの？」

「ホントだよ。いい加減重……ギェっ！」

学習能力のないバカを無視して、透は高らかに宣言した。

「鹿の時の罰。樋口は荷物持ち、菅谷は私持ち」

「はあ？」

「私持ちって一体何」

「良いから。ほら、行こう。金閣寺までこのまま！」

「その距離は俺死ぬ」

「法隆寺でも死ぬほど離れてるよ」

「ほらほら、早く！」

そう言って、透はズシッと菅谷の背中に体重を預ける。

「い、いや……あの……ほんと、勘弁して……」

「？　なんで？」

「いやほら……普通に公衆の面前に出てるわけですし……それに、ここから法隆寺って電車乗るし……」

「関係ない……というか、そんなの気にするタイプじゃないでしょ」

珍しく、口数が多い透に論破されていく。いや、円香も目立つからおんぶはやめて、や

るなら私が離れてからにして、とまで思っているが、確かに菅谷は人の前でおんぶする事くらい気にしない。

他に何か要因があるのかな？　と思つて顔を覗き込むが、特に変わった様子はない。少し目が泳いでいるくらいだ。

「……ま、それやるなら私、少し離れるから。公衆の面前でサーカスやつてる集団と思われたくない」

「あ、うん。迷子にならないようにね」

「世界で一番、あんたが言うな」

それだけ言つて離れていく円香……を眺めながら、透は少し不思議そうに真下の少年を眺める。

まあ、何にしても関係ない。恨むのなら、ピンチの自分を捨て置いて遊び倒してた自分を……と、思っている時だ。透の視界に入ったのは、菅谷の耳。なんか、ほんのりと赤い。

「ねえ、菅谷」

「な、何……?」

「もしかして、照れてる?」

「……」

いや、まさかそんな……いや確かに前、濡れた体操着姿の自分達を見た時、動揺していた。でも、まさかこのすつとぼけた男に、そんな情緒があるとは……なんて、透らしくなく熟考していると、菅谷らしくなくハッキリしない声音で返事を漏らした。

「……………うん。照れ、てる……………」

「……………」

不覚にも、透の耳まで赤くなった。少し、大胆な真似をした自覚はあったが、正直ノリのつもりだった。異性でも、菅谷なら良いか、みたいな感じ。

しかし、その菅谷にも弱点はあった。この子、アホほどウブだ。思わず、透の胸の奥がキュンつとする程。

さつきまで酷い目に遭わされたこともあって、透は意地悪そうにニヤリと微笑んだ。そして……………。

「さ、ほら早く運んで？ 法隆寺までで許したげるから」

「……………へいへい」

×××そう言いながら、三人で奈良観光をした。

×××

「……………」

二人を眺めながら、円香は黙って離れて歩く。遠くで見ている円香には、いちやつい

ているカップル……には見えなかった。二人にイメージカラーをつけるのなら、二人とも無色透明なだけあって、あれだけの様子を見ていても普通に友達同士に見えるのだから不思議だ。

……とはいえ、透の様子は少しいつもと違う様子に見えるが。あんな透は、長く付き合ってきたけど初めて見る気がする。

ま、何にしても、とりあえず面白い絵である事には変わらない。

ちようど、透の横顔で菅谷の顔は見えない。その方が、なんか絵的に映えるような気がする。

そう踏んで一枚撮った。

「……」

楽しそうにしている透の横顔が、ほんの少しだけイラつとした。なんで自分一人だけ外れて、二人が楽しそうにしているのか。

勝手に外れておいて、勝手にイラついた円香は、その写真を四人のグループに流した。

普通じゃない人に慣れ始めて一番、良くないのは、ルール違反に慣れること。

さて、翌日。京都旅行の日。クラス全員で、まずはバスで移動して清水寺。

まずは、記念写真。本堂の前で全員並んで各々がポーズを取ったりする中、円香も透も菅谷も三人で直立不動だった。三人とも、集合写真に興味がかケラもないあたり、本当に仲良い奴以外と思いつく出を作るつもりはないのだろう。

さて、そんな三人な訳あって、集団行動もまともに出来ない。ふと気になるものがあるれば、すぐに食いついてしまう。

「浅倉、アレ見て。胎内巡りだって」

「え、お母さんのお腹の中に戻るの？ グロ」

「いや、むしろその感覚を再現したのかもしれない。なんか、こう……お母さんのお腹の中のな……どんなだったっけ？」

「知らない」

「なんか、あったかくて……脈打ってて……食べた物の栄養が直接、流し込まれる感じ？」

「拷問じゃん」

本当に馬鹿が炸裂してる会話である。ツツコミどころしかないが、もうツツコミ入れない。入れても疲れるだけだから。

むしろ、最近はこの会話にストレスを感じない方法を考案さえしてある。

「流し込まれるんじゃないかって、ドリンクバー式なんじゃない？　好きな時に飲めて、好きな時に飲むのやめられる的な」

自分のIQも下げる事だ。そうすれば、なんか一時的に楽しくなってくる。……会話が終わった後の疲労度も桁違いだが。

「それは笑える。……てことは、あの中にはドリンクバーが？」

「行こう、菅谷。樋口」

そう言うと、透は近くにいた菅谷の手を引き、走り出す。その後を、円香も追う。なんだか、やはり透の様子が昨日からおかしな気がする。少し、菅谷と仲良くなったのだろうか？

「樋口？」

「あ、うん。行く」

後を追って、三人で胎内廻りに向かった。ちなみに、クラスメート達は既に本堂でお参りを始めている。

大体、10〜20分ほどで出て来た三人のうち、菅谷と透は少しガツカリした様子でため息をついていた。

「……ただ暗いだけだった」

「……ドリンクバーなかった」

「良かったじゃん」

最後に皮肉を返す円香だった。

さて、そのまま三人は気ままに清水寺の観光を続ける。目に入ったのは、今度は恋占いの石だった。

しかし、そんなものを透と菅谷が知るはずがない。

「何あの石。なんでしめ縄巻いてあんの？」

「人の首に見えるんじゃないかね？ あれしめ縄じゃなくて鉢巻なんじゃないの」

「猟奇的過ぎでしょ」

「じゃあ、樋口はなんだと思うの？」

「あんなの、せっかくな観光地なんだから、中学生が喜びそうなアトラクション作ろうとしたっただけでしょ。目隠ししてたどり着いたら恋が叶うとか……下らない」

「詳しいね」

「言つとくけど、授業で事前学習してれば誰だっけ知ってる事だから」

茶化されるのは好きではないため、ここは否定しておく。何というか「本当は恋愛に興味あるんでしょ?」「え、好きな人いるの? 誰?」「菅谷?」「おいおい、悪いけど俺、好きな人いるから」とか言われたらキレてしまう。

「こんなの良いから、さっさといこう」

「えー、でも面白そうじゃね? 俺、目隠しして迫り着けるか試したい」

「ああ、好きな人とか関係なしで?」

「うん」

ホント、好奇心旺盛も大概にして欲しい。まあ、これ以上、止めるのもアレだし、やりたいならやらせれば良い。

「……じゃあ、やって来たら?」

「よっしゃ。見とけよ、お前ら」

「せつかくだし、誰か決めてよ。相手の女の人」

「え? あー……じゃあ、アメリカ・イアハート」

「絶対叶わない夢」

「……誰?」

「女性初の飛行機のパイロット」

なんでそのチョイス、と二人が思ったのは言うまでもないし、それらを一切、気に止

める様子もなく、菅谷がチャレンジしに行ったのも言うまでもない。

さて、スタート位置である岩の横に立ち、目を隠される。

「……すう、ふう……よし！」

その気合いに押され、円香と透も唾を飲み込んだ。本当にアメリカ・イアハートと付き合うつもりなのだろうか？

スタートした直後……まさかのダッシュで走り出した。

「え、走ってる？」

「普通、慎重になるよね。目を隠されたら」

しかし、作戦的には悪くない。距離にして10メートルほどの場所。つまり、慎重に歩いて真っ直ぐ行ってるか不安になるより、最後に視界に収めた景色を信じて突き進むのがベストだろう。

……まあ、菅谷にそんな作戦的意図は無く、普通に走りたかっただけだが。

なんだかんだで、まっすぐ走れている。しかし、たかだか10メートルの距離感、走るのはやはり危険だ。

「あつ」

盛大に岩に躓き、足を後ろに持っていかれて一回転した。宙返りしながら宙を舞い、腰と背中を石畳に強打……するかのよう思われ、円香と透は思わず駆け寄ろうと一歩

踏み出す。

しかし、菅谷の身体は華麗に一回転し、両脚は岩の真上に着いて着地した。

二人して思わず固まり「訳が分からない……」という表情を浮かべ、見ていた他の観光客からは拍手が巻き起こる中、思わずマスクを外した菅谷があたりを見回す。

「……なにがどうなった？」

「奇跡が起きた」

「あんたホント何なの？」

「一応、ゴールしたんじゃないのこれ？」

まあ、確かにゴールと言えばゴールだろう。とりあえず、目隠し用の布を返して、菅谷は二人の元に戻った。

「……えっと、何がどうなったの？」

「あんた、一回転して着地したの。躓いた岩の上に」

「うっそだあ」

「無自覚なの……」

「菅谷、すつごいね。私にも出来るかな」

「やめて。怪我じゃ済まないと思うから」

少なくとも透には怪我をして欲しくなかった。しかも、こんなバカな理由で。

だが、透は真顔のまま動かない。

「え、でも私もやりたい。これ」

「や、だから……」

「いや、走るとか目隠し宙返りとかバカなことじゃなくて。普通に」

「……」

「え……それ、つて……」

恋占いの岩をやりたがる……それが一体、何を意味するのか。円香だけでなく、菅谷もわかったようだ。

しかし、信じられない。今まで何を考えているかわからないようで、何も考えていなかった少女が、そこまで言うとは……思わず、菅谷は頬が赤くなって大きな声を出してしまった。

「俺の宙返り、かなりバカっぽかったって事!?？」

「……そうなんじゃない?」

「ヒグっちゃんまで……」

「……ふふっ、魅せるから。私の優雅な宙返り」

「結局それやる気だった、と……」

円香は小さくため息をついた。まあ、正直に言うとは薄々そんな気はしていたが。まさ

か、よりもよつてこの幼馴染が恋愛なんかに興味あるとは思えない。

何となくだが、自分と透と小糸と雛菜は、なんか一生、友達でいられる気がしている。高校生とかになつても、彼氏なんて作らずに四人で駄弁つてそうだし、大学生になつてもなんならルームシェアとかしてそう。

「……」

今、ふと変な事を思った。もしかしたら、その輪の中に菅谷が入る事もあるのだろうか？

「よーし、行くよー」

「浅倉、コツを教える。心の目を持ち、自らの勘を信じて、慎重に一步一步、噛み締めて進め」

「え、それさっきの菅谷と真逆の事してない？」

いつの間にか目隠ししていた透と、菅谷が話を進めていて、ハツと意識が戻る。というか……もう、良いや、と円香は捨て置く事にした。

こうなつたら、怪我しそうな時に備えるしかない。身構えて、透の様子を見ると……同じように、ダッシュで走り始めた。しかも、木に向かつて。

流石に備えててもどうしようもない。激突するべつぴんさんを眺めながら、よりもよつて一番、呆れられたくない相手が呆れて言った。

「あいつ、俺のアドバイス聞いてたの?」

「あんたのはアドバイスじゃなくてフィーリングでしょ」

話しながら、二人は透の方へ駆け寄る。

「おい、大丈夫?」

「生きてる?」

「大丈夫……まだ、私のターンは終わってない……!」

「え、いやもう大分いっぱいっばいっばいでしょ」

「怪我されても困るし……」

「じゃあ手伝ってよ」

「……良いけど」

そこまでクリアしたがる? と、怪訝に思った円香の肩に、菅谷は手を置いた。

「止めてやるな、ヒグっちゃん」

「はあ?」

「浅倉の乙女心を理解しよう。一度、始めたゲームは降りるつもりないって事なんだよ」

「それ乙女心?」

「でも、怪我されたら困るから、こっちの声は聞いてね」

そう言うのと、菅谷は未だに目隠ししている透の肩に手を置き、とりあえずゴールの岩

の方に体を向けた。

「今、ゴールの方を向いてるから。真っ直ぐね」

「……ありがとう」

「ヒグつちゃんも、これで良い？」

「勝手にすれば」

そう言うと、今度は慎重にフラフラとゴールに向かって進み始めた。

円香は、菅谷と並んでその様子をぼんやりと眺める。やはり、どうにも透らしくない気がした。いや、それはむしろ菅谷もだろうか？　ここまで面倒見良かったっけ？と、円香は少し変な所で何か違和感を抱いてしまう。

そうこうしている内に、透は石に到着した。割とあっさりとした。

「ふう……楽勝だった」

「どの口が言ってるの？」

「浅倉、絆創膏と消毒」

「お、サンキュ」

「ていうか、俺やろうか？　見えないでしょ、顔」

「あ、うん。じゃあ……」

「私やるから」

が、その間に円香が割って入る。それに、菅谷は消毒液とか入っているポーチを手渡す。

「あ、ホント？ よろしく」

「ていうか、なんでそんなもの持ち歩いてるの？ アホなあんたらしくない」

「母さんにいつも持たされてるだけ」

「……苦労してるんだ。あなたのお母さんも」

それだけ言つて、恋占いの岩から離れると、透の額を消毒してあげながら言つた。

「ていうか、そろそろバレると思うから、あんたはクラスの人達が今、どこにいるか見て来てくれない?」

「え、もう少し見てまわらない?」

「バレたら怒られて、最悪自由行動なくなると思うけど」

「行つてきます」

そう言つて、まずは菅谷を先行させつつ、透の額の傷を処置する。

「痛つ……」

「染みる?」

「平気」

「……で、どういうつもり?」

「? 何が?」

「何かあったの? 昨日から、やたらと菅谷と距離近くしてるみたいだけど」

「別に、何もないけど? 元から仲良いし」

「私にまで隠し事?」

「……」

何かあったのかは知らない。と言うか、ずっと一緒だったし、何かあったとは思えない。だからストレートに聞いた。分からないものは分からないから。

すると、透は真顔のまま答えた。

「別に、本当に何も無いよ。けど、10月になって、中学生生活も残り半年を切って……それで初めて、名残惜しいって思える友達が出来たから」

「名残惜しいって……あいつのこと?」

「うん。菅谷が高校、どこ行くかは知らないけど、離れ離れになるなら、せめて悔いがないように遊んでおきたいかなって」

「……」

なるほど、とようやく腑に落ちた気がした。だからと言って、おんぶとか手繋ぎはボデイタッチが多くない? と思ったりもしたが、口数が足りない透だからこそ、行動に移していたのだろう。

卒業してもずっと友達、と言う人は少なくない。が、現実はそう甘くない。高校が楽しければ、多分、また同じ中学だった人と連絡なんて取らなくなるし、そうじゃなくても環境の変化で連絡を取る余裕すら無くなるかもしれない。

「樋口は良いの？」

「……何が？」

「菅谷と、もつとくつつかなくて」

「いやくつつく必要は無いでしょ」

「そう？」

……とはいえ、確かに修学旅行を逃したら、いよいよ本格的な勉強に集中しなくてはならなくなる。もしかしたら、菅谷と普通に遊べるのは、今日明日が最後なのかもしれない。

「……はい、終わり」

「ありがとう」

透の額に絆創膏を貼った。女の子が顔に医療品をつけたにも関わらず、いつもの真顔はとても楽しそうに見えた。本気で楽しんでいるからだろう。

なら、自分も少しは、必要以上に拒絶せずに彼との思い出を作るべきなのだろうか？

「おーい、みんな今、滝の所にいるよ」

すると、菅谷が走って戻ってきた。

「なんかスツゲーな。あそこの滝、飲むと学力・恋愛・寿命、全てが良くなるって！ 進

○ゼミみたいなこと言ってた！」

「なにそれウケる。ていうか、ゼミって寿命も延びんの？」

「知らないけど、延びそうじゃない？」

「分かるわ」

「……」

こんな馬鹿な話ができるのも、もしかしたら残りわずかかもしれないということだ。

なら……せめて、自分は……。そう決めると、円香も再び、会話に混ざった。

「学力が伸びる↓良い大学に行ける↓良い職業に就ける↓お金持ちになれる↓人間ドッ

ク何度も受けられる↓早い段階で重たい病気が見つかるから、重症化しないで治せる

……って事ならいけそう」

「おお、なんか頭良さげ」

「樋口、すごい」

疲れない為なんかじゃなくて、自分も楽しむ為にバカな話にも参加しよう。そう決め

て、二人の会話に混ざった。

×××
何のつもりか知らないが、学校側が開催するイベントによって、修学旅行二日目の夕方、座禅を組まされた。

隣の透と、さらにその隣の菅谷が二人合わせて18回、肩を叩かれていて、笑いを堪えている間に自分も2回ほど叩かれた円香は、それはもう疲れで動きたくなくなっていた。

「お疲れだね、樋口」

「……誰の所為よ……」

「え、私達？」

「達ってつけた時点で自覚あるでしょ」

まあ、体験座禅だから、あんまり強くは打たれなかったが。

なんにしても、今日はもう寝るだけ。同じ部屋に泊まる残り二人の女子生徒は遊びに行ってしまったって、透と二人だけである。

「ま、良いじゃん。もう寝るだけなんだし」

「……」

まあ、それはその通りだ。……笑わされた本人に言われると腹立つが。そのことに気が付いていないのか……いや、十中八九気付いているが、気になり透は言った。

「明日で終わりかー。なんか、思ったより短く感じたね」

「そう?」

「楽しかったからね」

あの後、3人で嵐山の方へ赴き、竹林に覆われた道を森林浴……とは勿論、行かず、拾った枝でハリーポッターごっこやら何やらと遊びに遊びまくった。いくら楽しむと決めた、と言っても、普通にそんな子供っぽいにも程がある、ごっこ遊びにまで混ざる気はなかった円香は、途中でちよいちよいアドバイスとか魔法の名前を教えたりして、上手く立ち回った。

「樋口は?」

「……まあ、少し名残惜しいかな」

「ふふ、やっぱり」

特に、一目目。放置して来た上に、捨て置いて銭湯に入った後、おんぶでイチヤイチャしてるようにしか見えなかった二人から離れて移動していた為、大分無駄な時間を使ってしまった気がする。

「明日は、樋口から色々と菅谷を誘ってみたら?」

「……考えとく」

「うん」

なんて話した時だった。コンコンとノックの音が聞こえる。何かと思って円香が出迎えに行くと、菅谷が目の前にいた。

「よう」

「はっ!?」

「遊びにきたよ」

「あ、菅谷」

「ちよつ……え?」

思わず狼狽えそうになってしまったが、そんな中、聴こえてきたやたらと低い声。

「そろそろ就寝時間だぞー。廊下に出てる奴」

「あ、ヤバっ。来た」

「っ、ち、ちよつと入って」

思わず中に入れてしまった。あのままだと見つかってしまうし、最悪自分達も連帯責任にされかねない。

慌てて部屋の中に入れて、肩でしている息を静める。

「いらっしやい、菅谷。お菓子あるよ」

「食べる。ポテチとか?」

「いや、それは太るからない。チョコとか」

「それも太りそうだけど」

自分が落ち着いている間に、何食わぬ顔で同類のバカに出迎えられ、しかも円香が持ってきたホワイトチョコとブラックチョコが格子状になっている、地味に高いチョコに手を伸ばし始め、苛立ちは短期間で頂点に近くなった。

「二人とも、浴衣似合ってるじゃん」

「ありがと。菅谷も……樋口？」

「っ、うお……！」

気が付けば、菅谷の目の前まで迫り、ジト目で睨み付けていた。思わず近過ぎて菅谷が顔を背けるほどの距離である。

「えっ、な、何……？？」

「なんで来たの」

「え、遊びに……」

「見張りの先生にバレたらどうするの？」

「いや、だつてせっかく浅倉と樋口と泊まりで遊びに来てるんだし、少しくらい部屋で駄弁つたつて良いでしょ？」

「……バカ……」

恐らく他意など一切ないその言い草に、思わず樋口は何も言えなくなり、代わりに子

供みたいな暴言がこぼれ落ちた。

そんな樋口の気も知らず、菅谷は二人に声をかけながら、その辺に落ちている枕を手に取った。

「よし、修学旅行の夜にすることといえば、決まってるよね」

「！ お………良いね、ついにやつちやう？」

「……枕投げならやらないからね」

「スタート！」

「スキあり！」

「ぶづっ………！」

二人して枕を円香に投げ付け、顔面にクリーンヒットした。それにより、後ろにひっくり返る。

「あ、やばっ………」

「思ったよりクリティカルに………」

ひっくり返った円香は、そのまま起き上がらない。大の字に倒れ込み、顔に枕が積み重なったまま動かない。

しばし、静寂………しかし、まず動いたのは腕だった。妙にゆっくりと動き、枕に手を当て、ゆっくりと身体を起こしながら両手で構える。

「あーそう……騒いだら絶対、先生にバレるからって言おうとしたけど……ふーん、そう。そういう感じでいくわけね……」

「お、ヒグっちゃんもやる気になった?」

「良いね。それでこそ樋口」

「覚悟は出来てるんでしょね……?」

「勿論。あ、命は一人三つね。最初に全滅した人がジューズ奢り」

「面白いじゃん」

「つまり、3回殺されたい、と。ホント、そういうところ良い度胸してる」

　　噛み合っているようで噛み合っていない中、デスゲームはスタートした。一気に枕を射出する円香の一撃を、二人とも慌てて避ける。

　　壁に直撃した枕を拾った菅谷は、そのまま円香に投げ返すが、キャッチした。その様子を眺めながら、透は珍しくはしゃいでいる円香を記念に残すために、参加の前に写真を撮る事にした。

「死ねツ!!?」

「うおっ!!? 危ない危な……ほわっ!!? ヒグっちゃん、それ座布団!」

「カンケーないから!」

「ていうか、あの……ゆ、浴衣浴衣!」

「掛け布団スマッシュユ！」

「ほあああああ!!?」

はだけでもお構い無しに暴れる円香を、すこしくすくと笑いながら透はスマホに収めた。3秒後、自分の顔面に枕が直撃した。

×××
「通り三人でそのまま枕投げ（一人はガチ）を続けた後、疲れてトランプをやりながら休憩。」

そんな中、ふと思ったように菅谷が言った。

「ね、それよりさ、気付いた？ 大浴場の近くに、卓球台あったの」

「ああ、気付いてたよ」

「今から、やりに行かない?」

「は? 行くわけないでしょ」

落ち着いた円香はすぐに首を横に振る。それをやるなら、せめて枕投げの前に言っただけ欲しかった。

それは透も同じだろう……と思った直後、透はしやあしやあと答えた。

「良いね。行こうか」

「浅倉、何でもかんでも肯定しないで。たまには反論の一つでもしてみたら?」

大体、もう直ぐ就寝時間だつて先生のセリフが聞こえたばかりだ。この二人の頭はどうなっているのか。

が、本気で行くつもりのように、二人とも立ち上がると部屋の出口に向かう。

「じゃ、樋口。待つて。ちよつと身体動かして来るから」

「つ……わ、分かつたから。私も行くから……」

「お、ヒグちゃんも来る？　じゃあ、審判やつて」

自由にも程がある二人に、半ば強制的に連行された。

本当に卓球をやるつもりのように、そのままの足で卓球場へやつて来た。

到着するなり、ラケットを持った菅谷は平気な顔で言った。

「よし、じゃあ負けた方が飲み物奢りな」

「そういえばあんたさっきの枕投げで負けた分、私に払いなさいよ」

「後でね」

そう言ったのは、勝った円香だった。命を一つも散らす事なく猛威を奮った猛々しい勝利だった。

その提案に、透は首を横に振る。

「普通に勝負するんじゃないルール分らないし、ラリーにしない？　お題に答えて球を

打って、打ち損じるか答え損ねたら負け」

「お、良いね」

「じゃあ、お題発表するから」

振られる前に、円香が口を開く。この際だ。メチャクチャ難しいお題にしてやろう。

「古今東西、私が好きなコンビニスイーツ」

「よしこい！」

メチャクチャ個人的なお題を出してきた。しかも、二人ともノリノリである。正直、冗談のつもりだったが、やる気ならそれはそれで構わない。

「スタート」

「濃厚モンブラン」

まずは透から。

正解。あの本当に濃厚な栗の味がするモンブランは絶品だ。

「かぼちゃプリン」

それも正解。実はカボチャはスイーツにしても美味しいと教えてくれた奇跡の一品である。

「抹茶ぜんざい」

当たり。抹茶クリームをふんだんに使ったそれは、苦味と甘味の黄金比をこれでもかというほど味合わせしてくれる。

「いちごクリームチーズケーキ」

それも合っている。いちごのクリームを若干、薄味にする事でチーズケーキの中に織り交ぜた仄かなトマトの風味を表現することに成功した、革命的な一品となっている。

「北海道ミルクプリン」

これまた大正解。要するに普通のミルクプリンだが、そもそもミルクプリンがプリンより美味しいので、そもそも好みじゃないはずがない。

「期間限定GODIVAコラボ商品、チョコレートワッフ……」

「ちよつと待って」

「またも正解だったが、あまりに的確な返事をもらい過ぎて、思わず間に入ってしまった。」

「あ、ヒグっちゃん。良いとこだったのに、なんて邪魔すんの?」

「そうだよ。そろそろ私と菅谷の間に新たな友情が芽生えるシーンだったのに……」

「そんなスポーツマンシップないでしょ。てか、そうじゃなくて。なんでそんなに当てられるの? 的確過ぎるでしょ」

言われて、二人とも顔を見合わせる。

「なんでつて……まあ、ブラックコーヒー飲めないあたり、逆説的に言えば甘いもの好きでしょ?」

「てことは、樋口の性格から逆算して、ちょっと斜に構えた感じで、美味しそうな空気の奴が好きかなって……」

「ーっ」

少し恥ずかしくなってきた。こいつら、自分について理解しすぎだ、と。

「も、もうそのお題やめ。普通に卓球してて」

「え、なんで？」

「てか、勝敗は？」

「どっちで途切れたっけ？」

一応、菅谷が答えながら返そうとした所で止まったので、菅谷で止まったのだろう。

「じゃ、菅谷の負け」

「えええ……」

「やりく。奢りね？」

「まあ良いけどさあ……」

というか、もうこつちにきてだいぶお金を使っている気がするが、菅谷はいくら持つて来たのだろうか？ まず間違いなく「5000円以内」は無視しているように見える。

そのまま、二人は卓球でラリーを始める。痛烈に恥ずかしい思いはしてしまっただが、まあ休めるので問題ない。

二人の様子を眺めながら、椅子に座って一息ついた。

「いよいよ、修学旅行もあと一日。いや、夜が明ければ一日弱と言うべきか。せつかくだし、また何枚か写真を撮っておくことにした。」

「二人が卓球しているシーンを、カシヤツとスマホに収めておいた。」

途中から、菅谷に誘われた円香も混ざった。

二刀流を謳っておきながら、実質一刀流の菅谷を二人でいじめ、ようやく部屋に戻るか、となった。

今度は、自分達の部屋に来ることはなく、そのまま菅谷の班の部屋に戻る事だろう。

「……やはり、名残惜しさが残った。それは、透も菅谷も同じのようで、戻るまでの間に会話はない。」

このまま帰ると、後は寝るだけ……まだ、時間は就寝時刻から一時間過ぎた程度なのに。

そう思った円香は、反射的に二人の手を取って動きを止めていた。

「……………」

「? 樋口?」

「どしたの?」

「つ、お、奢り」

「「え？」」

「菅谷の奢り、まだじゃん」

それを聞いて、二人とも少し表情を明るくする。その顔は、まるで「その手があつたか」と言っているようだ。

「そ、そうだったっけ」

「そうだよ。買いに行こう」

「売店閉まつてるけど、外にある自販機なら、まだ買えるから」

「じゃあ、これから夜空の下を散歩だね」

「うん」

それだけ話しながら、三人で外に出た。空を見上げると、何かの詞で聞いた「星が降るようで」というフレーズを思い出してしまう程、星が燦然と輝いていた。

それをじっくりと眺めながら、とりあえず自販機で飲み物を買う。立ったまま、三人で乾杯した。

「ふー、美味しい」

「人のお金だから、格別」

「ちゃんと味わえよ」

そんな話をしながら、飲み物を口に含み、空を見上げる。三人とも、ほっこりした表情で空を見上げた。

「いやー、楽しかったな。今日」

「うん。楽しかった。嵐山」

「一緒にいる私は普通に恥ずかしかったけどね。人前で大声で『エクスペリアームス！』なんて大きな声で叫ばれて……」

「ヒグつちゃんが一番、魔法のこと詳しくあったけどね」

「それ。デイミヌエンドなんて呪文があるの初めて知ったし」

「……あんたらのモノマネが拙いからでしょ」

「混ざりたかったの？」

「黙って」

嵐山の思い出から、モンキーパークを見た話に移り、さらにその後、清水寺の話を思い出し、そっちに移る。そのあとは、さらに昨日に遡り、法隆寺や奈良公園の話になり、ようやく一息ついた。

気がつけば、飲み物も残り僅かである。そんな中、ふと透が口を開いた。

「……ね、菅谷」

「？ 何？」

「高校、どこ行くの?」

「え?」

不意な質問だった。円香も、今聞くの? みたいに顔をあげる。

「えー……どこだろ」

「まだ決めてないの?」

「まあ、うん」

「……嘘でしょ、それ」

すっぱ抜いたのは円香だった。

「本当は、決まってるんじゃないの?」

「……」

「別に、違う高校行くならそれはそれで良いけど、せめて教えて欲しいんだけど。どうするつもりなのか」

二人から、じつと見られてしまう。菅谷は黙り込んだまま、飲み物を飲み干した。

そんな言いづらい事なのか、円香と透は黙ったまましばらく待つ。一応、友達のつもりではあるし、中学を卒業した後だって、友達でいたい気持ちはある。

にも関わらず、志望校で隠し事されるのは、少し良い気がしない。少なくとも、円香にとっては不愉快だった。

やがて、菅谷がポツリと呟くように口を開いた。

「……本当に、まだ決まってるはないんだよ。いや、気持ちは決めてるけど、実際はそうならないかもって」

「落ちそうって事？」

「いや、うちの両親が引越すって言ってる」

「……は？」

しれっと言われた内容に、円香は思わず声を漏らした。今、なんて？ 引越し？

「……どこに？」

「知らない。……けど、二人が受験する高校までは、ギリギリ通えないかなってレベルの場所」

「なんで？」

「うち、金持ちなんだよ。だから、今より住みやすい場所に行きたいんだって」

なんだかさつきまでの疑問が腑に落ちた。つまり、財布の中に多めに入っていた金も、そう言う事なのだろう。……というか、なんだかこの自由奔放さも腑に落ちた気がする。

「俺は、二人と同じ高校に行きたい。けど……」

「一人暮らしすれば良いじゃん」

「はっ？」

しれっとそう言ったのは、透だった。

「だから、一人暮らし。お金持ちなんでしょ？」

「……いや、無理でしょ。友達と同じ高校行きたいから一人暮らししたいって、百パー……」

「あ、そっか。その手があったか」

「ちよつと、真に受ける気？」

ていうか、本気だろうか？ このアホでバカで理科しかできない少年が一人暮らし？
絶対無理だろう。

「うん。そうだ。親に交渉してみよう」

「いやいや、あんた一人暮らし出来んの？ 炊事洗濯家事全般、全部自分でやるって分かってる？」

「大丈夫でしょ。こう見えて、小学生の時はよく母ちゃんの手伝いしてたんだよ」

「いやそんなレベルと一緒にされても困るんだけど……」

「不安だったら手伝うよ。私と樋口が」

「はっ!!？」

この顔が良い女はまた勝手なことを……などと思っている間に、菅谷は早速スマホを

取り出した。

「よっしゃ！ 早速……」

「いや、電話する前にもう一度、よく考えて……」

「新しい門出を祝って記念写真撮ろう！」

「……もう勝手にして」

なんだか、心配しているのがバカらしくなる男だ。ヘナヘナと力が抜けたように座り込み、残り僅かとなった缶にトドメを刺すと、その円香を透がニコニコしながら眺めていた。

「……何」

「いや、嬉しそうだなって」

「……そんなんじゃないし」

「二人とも、撮ろうよ。写真」

「良いよ。樋口も」

「撮るならさっさと済ませて」

そんな話をしながら、菅谷を真ん中に二人は寄る。しかし、真ん中の人がスマホを構えると片方、映らなくなるわけで。

仕方ないので、一番左の円香がスマホを構えた。

「……なんで菅谷の門出を私が撮るの」

「良いじゃん、細かいことは」

「樋口、めっちゃ心配してたし」

「……うるさい」

そんな話をしながら、三人は写真を撮った。こうして、三人の修学旅行は幕を下ろした。

一方、その頃的な。

先輩達が修学旅行に臨む中、市川雛菜は退屈だった。大きな欠伸を浮かべながら、学校から帰宅する。

普通に暇だ。もう退屈で仕方ない。あまりに暇なので、すでにもう今日1日が三日分のような感覚に陥った。唯一の救いは、明日から土日である事を利用し、小糸がうちに泊まりに来る事だ。だって、先輩達だけズルいから。

家に到着して、小糸が来るまでゴロゴロしながらスマホを見ると、四人のトークルームに、円香からチェインが来ていた。透が鹿に襲われている写真だった。

「やは、何これ」

思わずそんな呟きが漏れる。鹿せんべいでもあげ損ねたのだろうか？　もしかしたら、鹿にも愛される程、透の魅力は溢れているのかもしれない。

すると、新たなメッセージが届く。小糸からだ。

福丸小糸『透ちゃん、大丈夫!?』

すごく心配している。やっぱり、とても同い年とは思えないくらい素直で可愛い子だ。

とりあえず、自分も返信しておくことにする。

ひななく♡ 『透先輩、モテモテ♡♡』

……なんか、楽しそうで羨ましい。そう言えば、あの菅谷という先輩も多分、一緒の班で仲良くしているのだろう。前々から気になっていたが、デ○ズニーの時の男と菅谷は、同一人物なのだろうか？ まあ、どっちでも良い事なのだが。

チエインに既読が付かないのは、おそらく旅を楽しんでいるからか……いや、多分、もう鹿から脱出して銭湯にでも入っているのだろう。

小糸が来るまでに、とりあえず数学の課題だけ出ているので、それをパパッと終わらせると、また新しくスマホが震えた。

浅倉 『樋口、後で覚えてろ』

樋口 円香 『分かった。スカート置いてくるね』

浅倉 『ごめん、嘘』

無許可で送ったものらしいが、こればかりは円香先輩ナイスと言いたくなってしまう。言わないが。

すると、ピンポンとインターホンが鳴り響く音が聞こえた。もう来たのかな？と、思い、すぐに部屋を出た。

「あら、もう来たの？」

「うん、多分」

母親にそう言いながら玄関から出迎えると、やはり小糸が小さな身体で大きな荷物を背負って立っていた。

「ひ、雛菜ちゃん……えへへ、来ちゃった……!」

「あは〜♡ 無断で彼氏の家に遊びにきた彼女みたい〜」

「ぴえっ!!? か、彼女!!?」

「さ、あがつて〜?」

小糸なら絶対に驚くと分かっていることを言っておいて、マイペースに家にあげた。軽く親との挨拶を終えて、とりあえず自室まで行く。

「ふふっ、雛菜ちゃんの部屋、久しぶりだね」

「別の中学に行っちゃったからね〜」

「こ、高校は同じ所に行けるようになるから……!」

とはいえ、小糸の成績なら同じ所くらい行けるだろうが。勿論、雛菜も勉強どころか何でもそれなりに出来るので、二人が行く高校には行けると思う。

部屋に入り、ちゃぶ台にお菓子と飲み物を広げる。

「そういえば、雛菜ちゃん。さっきの写真、見た……!!?」

「見た〜。透先輩、すごく鹿に狙われてて面白かったよね〜」

「う、うん……！ でも、大丈夫かな……？ 食べられちゃってないかな……！」

「洋服は食べられちゃってるかもね〜」

「そ、それ公然猥褻になっちゃうんじや……！」

「大丈夫でしよ〜。円香先輩も一緒っぽいし〜、菅谷先輩も多分一緒だし〜」

それを聞いて、小糸は眉間に皺を寄せる。「ん？」と小首を傾げて、少し神秘的な強面で尋ねた。

「……菅谷って……あの菅谷さん……？」

「え〜？ 多分その菅谷先輩〜」

「あ、ご、ごめんね……！ あの、とか言われても分からないよね……！」

適当な返しに、多分わかかってないと思つて小糸は話を進める。

「え、えつとね……実は、前に円香ちゃんに誘われて、〇〇高校の文化祭に行ったんだけど……その時に『ミスター〇〇〇〇高校コンテスト』っていうのやって……！」

要するに、美男美女を決めるというコンテストだ。

「それにね、透ちちゃんと一緒に、その菅谷って名前の人が参加してて……！」

「……なんで〜？」

「さ、さあ……？」

雛菜もほんの少し困惑したようにしている。普通、そういうのはその高校の生徒のみ

が出れるものではないだろうか？

「その時に……透ちゃんも、その菅谷つて人も……お互いと円香ちゃんと一緒に遊ぶのが趣味、みたいな事言つてて……」

「ふーん……」

思わず冷たい声が漏れる。ほほほほ間違いない。あの男、菅谷だ。少し、複雑な心境ではあるが……でも、夏休みにやった川の清掃であの人は良い人だつて分かつたし……。

……むしろ、菅谷以外の馬の骨じゃなくて良かった、と見るべきか。

「ま、それなら雛菜は良かったかも。菅谷先輩、良い人だし」

「そ、そうなの……？」

「うん。透先輩と同じ空気出てるから、小糸ちゃんもすぐ懐くと思うよ？」

「な、懐くって……」

ペット枠のような言い方だが、菅谷に対しては警戒心なんて抱いても仕方ない、と言うのが雛菜の見立てである。

何より、仲良くなりしたいと思った相手に、敵対なんてしても仕方ない、と雛菜は思っている。卒業される前に、もっとたくさん話しかけようとすら考えている。

「でも……そっか……。透ちゃんと円香ちゃんには、仲良い人がいるんだ……」

しかし、対照的に小糸は小さくため息をついてしまう。中学も別々で、もうすぐ高校に進学して、その上、高校のコンテストに参加出来るほどめちやくちやで仲良い人がいる……そんなのを目の当たりにして、疎外感を感じない程、小糸は強く無かった。

……多分だけど、受験勉強だって一緒にやっている事だろう。学年が違うとは言え、一緒に勉強しようなんて誘われた事はないのに。

「あ、またチエイン〜」

雛菜の声で、また下を向いてスマホを見る。一枚の写真が送られて来ていた。

「やは〜♡ 菅谷先輩と透先輩、超仲良し〜」

「……ほ、ホントだね……」

小糸から漏れたのは、寂しそうな呟き。何故なら、透がとても楽しそうな表情で、男子生徒におんぶされている写真だったから。

「……」

やはり、この人と仲良しみたいだ。それも、こんなに密着できる程度には。それがなんだか、複雑で、羨ましくて、妬ましくて。自分が同じ中学に進学出来ていれば、ここまでこの人と仲良くならなかつたかもしれないのに。

そんな小糸に、雛菜が横から両手を広げて迫って来ていた。

「ぴえっ!?」

「小糸ちゃん、ぎゅ〜♡」

「つ、ひ、雛菜ちゃん……!? ど、どうしたの……?」

「小糸ちゃん、なんか寂しそうな顔してたから〜」

「……雛菜ちゃん……」

……そうだ。別に、あの男がいるからって、二人が自分に構ってくれなくなるわけではない。少し環境が変わったくらいで、悲観することは無い。

「ありがとう……!」

「なにが〜?」

「……う、ううん。なんでもないよ……!」

こういうことを無意識でやってくれる辺りが、やはり雛菜の良い所なのかもしれない。

「それより、透先輩の服装何これ〜? 制服の下、Tシャツでしょこれ〜?」

「な、なんだろうね……! 本当に鹿さんに食べられちゃったのかな……?」

×とりあえず、適当に文章を入力して、のんびりとその夜は雛菜と過ごした。

×翌日の夜。その日も円香と透から色々と写真が送られてきた。嵐山やら、清水寺やらと、思いっきりエンジョイしている写真ばかりだ。羨ましい限りだが、まあ来年は自分

も行くので我慢。

雛菜の家を出て自分の家に帰った後も、あんまりにも羨ましくなってしまうので、なるべく送られて来た写真は一回しか見ないようしていた。

「明日、かあ……」

なんだかんだ、早かった。雛菜と一緒に出かけ、メイクやら何やらと校則では禁止されているが、その分興味出た分野を一緒に学んできた。これで自分も立派な大人である。

明日、驚かせてあげるために、今も少し勉強していた。

しかし、修学旅行に行ってしまう前、小糸はいろいろ言ったことを思い出した。

『し、修学旅行と言えばさ、やっぱり夜だね！ 男の子と女の子が集まって、トランプとか枕投げとかしちやって……』

『そ、それ以外にもさ、好きな男の子と宿を抜け出して、浴衣で空を眺めるとか……』

『ほ、他にもさ！ 外に出なくても部屋に入らなくても、温泉の近くにある卓球台で、身体を動かすとか！』

……この辺。今にして思えば、全部否定されて良かったと思っている。

何せ、こんな青春の代名詞みたいな宿での生活をされていたら、間違いなく透か円香は取られてしまう。

なんだか初めて、学校側が厳しく校内の風紀を正そうとすることに感謝してしまっ
た。

「……あ、また」

そんな中、チエインが届く。透と円香からだ。時間も時間なのに、まだ何か面白いこ
とがあったのかな？ と、思いその画像を開くと、思わず半眼になった。

・ 円香（ガチ怒）と菅谷が、枕投げをしている写真。

・ 透と菅谷が、卓球をしている写真。

・ 宿の前で、三人揃っての集合写真。

それを見るなり、思わずスマホを持つ手が震えてしまう。感情が入る、と言うのはま
さしくこう言うことを言うのだろう、と実感してしまう程に、込められた力が全身を震
わせる。

おそらく、この体格でなければスマホを握り潰してしまったかもしれないとさえ思
う。

そして、それらは誰もいない……正確に言えば画面の向こう側にしかない相手に向
かつて、言葉となつて一気に放出された。

「結局、私が言った事全部やってるじゃん!!？」

翌日、お土産を渡すために、疲れているだろうにわざわざ小糸の家までお土産を持ってきてくれた円香と透に、思わず昨日の夜中に叫んだ言葉と同じ事をぶちまけてしまった。

もちろん、二人とも困惑する。

「……どうしたの?」

「寂しかった?」

「ちが……くはないけど、そうじゃなくて!」

違くないんだ、可愛いね、なんていう二人からの生温かい視線が迫ってくる。それが嬉しいやら恥ずかしいやら分からなくなり、結局怒りという形で落ち着いたまま、スマホを取り出して昨日の写真を二人に突き出した。

「これ! 私が言つて二人と雛菜ちゃんが『いやそれは無理でしょ』みたいな感じで否定した奴!」

「……ああ、あれ」

「そう言えば言つてたね」

二人揃つて呑気なことを言い返しながら顔を見合わせる。

「でも、楽しかったし」

「バレなかったし、別にね?」

「ば、バレなかったの!?」

あの画像が送られて来たのは夜の11時以降にまとめて。つまり、それまでの間、何かしていたってことになるはずだが、まさかその時間までずっと遊んでいたと言うのだろうか?

「ま、円香ちゃん! 止めないとダメだよ!」

「いや……うん、まあね」

「? どうしたの……?」

珍しく歯切れが悪い様子を見て、思わず聞くと、隣の透が説明した。

「樋口、もしかしたら今年度で菅谷とお別れだと思ってたから、それなら少しくらいはつてメチャクチャな遊びにも付き合ってくれてたんだって」

「あそび……? 修学旅行に行ってたんじゃないの……?」

「ほとんど遊びみたいなものですよ」

その返事、なんだか少しずつ透に染められている気がする。……いや、幼稚園の頃から一緒にいても最近まではこんなじゃなかった。つまり、その菅谷という人と二人がかりで染めている、と言うべきか。

しかし、さっきの話を聞くに、菅谷という男は別の高校に行くのだろうか?

「ちなみに……その人は別の高校に行くの?」

「いや？　なんか同じ高校来るって」

「浅倉が余計なこと言うから……」

「えー、喜んでた癖に」

「別に喜んではないし。……それに、まだ親から許可得たわけじゃないでしょ」

「許可って？」

「一人暮らしするんだって。浅倉が言ったらノリノリになつてた」

本当に余計なことを言ってくれたものだ、と思いつつ「別に喜んではないし。……それに、まだ親から許可得たわけじゃないでしょ」というのは、裏を返せば親から正式なGOサインが出たら喜んでしまうのでは？　と思つてみたり。

「その時は、樋口も色々手伝つてあげるんでしょ？」

「何、他人事みたいない方してんの？　浅倉が勝手に言ってるだけでしょ。百歩譲つて手伝うとしても、浅倉にも手伝わせるから」

それ、もう円香ちゃんも手伝う気満々じゃないの？　という言葉も飲み込んだ。

「じゃあ、今のうちに役割決めようよ。私は応援する係で、樋口は手伝つてあげる係ね」
「手伝う内訳を決める中に、なんで丸々、手伝う係がいるの。私だつてなんでも出来るわけじゃないから」

「や、やつぱり手伝う気満々じゃん！」

今度は声に出していた。当然、円香はジロリと小糸の方へ視線を向ける。
「ぴえ……………」

早くも萎縮してしまった。が、円香はすぐにフツと微笑を浮かべると、小糸の頭に手を置いた。

「別に、心配しなくて良い。私とか浅倉が菅谷と関わっても、小糸とあまり遊ばなくなるってことは無いから」

「ぴやつ……………!? ば……………バレてたの……………!?」

「わかりやすすぎ」

「うう……………は、恥ずかしい……………」

頬を真っ赤にして俯く小糸。円香も透も、ニコニコして見物する。

「よく分かったね、樋口」

「……………」

しかし、余計な一言によって頬の赤みが一気に飛んでいってしまった。透は分かっていたいなかった、という事が証明されてしまった。

そんな気まずい空気を何一つ察することなかった透は「あ、そうだ」と呟きながら鞆の中を漁った。

「はい、小糸ちゃん。お土産」

「あ、そうだった。ご注文の、生八つ橋チョコレート味」

「ぴやつ、ありがとう！」

手渡されたのは、かの有名な西〇八つ橋。お土産用でオーソドックスな八つ橋はこれだろう。

そう言えば、あまり食べ物の写真は送られてこなかったが、実際の味はどうだったのだろうか？

「食べた？ 八つ橋」

「あ……そういえば食べてないかも」

「部屋に備え付けてあった硬い奴は食べたよね」

「あれ微妙だった。食べておけば良かった」

「私は家族にお土産で買ったけどね」

「え、頂だ……」

「やだ」

速烈で断られている透に、苦笑いを浮かべるしかなかった。

そんな小糸に、透は真顔のまま振り返った。え、何？ と言わんばかりに小糸は冷や汗をかくが、透は何食わぬ顔で恥ずかしげもなく聞いた。

「小糸ちゃん、ひとつ頂……」

「ダメ」

「え、私今、小糸ちゃんに……」

「誰が誰に買ってきたお土産？」

「半額は樋口じゃん」

「尚更ダメ」

「えー……」

少ししよぼんと肩を落としてしまった。まあ、六つ入りらしいし、一つくらい良いかな……と、小糸が思ったのを、まるで察したように円香が口を挟んだ。

「菅谷も買ってたから。もろうならそっちにしたら？」

「うん。そうする」

秒で友達を売っていた。もしかしたら、小糸が思っている程、マブダチではないのかもしれない。

「浅倉、そろそろ帰らないと」

「あ、そつか。じゃあ、小糸ちゃん。またね」

「う、うん……！ わざわざありがとね……！」

それだけ話して別れた。なんだかんだ言って、旅行で疲れているのに、お土産を渡すためだけに会いに来てくれるあたり、良い人達だ。

やっぱり、自分の友達として手放したくない。そのためには、やはり菅谷とかいう人に渡したくなかった。一人暮らしだかなんだか知らないけど、付き合い始めて一年も満たない人に負けたくない。

「そう言えば、明日から二日間、振り休だけどうする?」

「勉強に決まってんでしょ」

「あ、菅谷からチェイン……うわ」

「どうしたの?」

「早速、交渉したらしいんだけど、期末で全科目60点以上じゃないと一人暮らしダメって言われたって」

「……見なかった事にしない?」

「無理。既読つけちゃったし。私、明日は菅谷に勉強教えてあげようっと」

「……私も行く」

そんな会話が、去り際の二人から聞こえてきた。やはり、負けられない。そう心に決めて、小糸はとりあえず八つ橋を家で食べた。美味しかった。

目的を達するには努力が大事。どんな形であれ。

11月。期末試験は12月の中旬なので、時間があると言えばあるし、ないと言えない。特に受験する高校の受験対策もしないといけないし、その対策は円香や透と同じ高校の予定だ。

つまり、本当に勉強ばかりしなければならないわけで。

「次の問題。太平洋戦争の終結は何年？」

「……1492年」

「はい残念。それコロンブスがアメリカ大陸に到達した日。試験範囲外。一度間違えたので、ふりだしに戻る」

「ヒグちゃん……」

「ダメ」

なので、樋口はそれはもう楽しかった。バカをいじめる名目で勉強を教え……あ、逆だった。勉強を教える名目でいじめていた。

何せ、普段は振り回されている自分が振り回しているのだ。こんな痛快な事、滅多にない。……いや、まあ最近はそれが日常になりつつあるが。

「あの、休憩……」

「ノールウエイ」

「ノルウエイ？」

「オツケ、休憩ほんとに無しね」

「あーうそうそ。休みを……」

「ノルウエイ」

「……」

「はい。問題。日露戦争をきっかけに1905年にロシアと結ばれた条約は？」

「あ、そつか。最初から間違えれば良いんだ。ヒグマ条約」

「一生進まないし終わらないけどね」

「……」

簡単に封殺できる。この男の考えも少しずつ分かってきた。これだけでもこの前の修学旅行で、なるべく一緒にいた甲斐があったというものだ。

「ふふ、じゃがりこ美味しい」

その隣の席で、透は高みの見物をかましながらじゃがりこを食べている。中学校の図書室は、普通に飲食禁止である。というか、そもそも中学にお菓子の持ち込みは禁止である。

「一本……」

「良いの？ 樋口」

「ノルウエー」

「あの……それ流行ってんの？」

「あなたが言い始めたんでしょ」

そう返しつつ、円香は内心で透を褒める。絶対、わざと自らの意思ではなく円香に委ねてきた。断るって知ってたから。

「ていうか、付き合っただけで私の身にもなってくれる？ アンタのためにこっちは自分の勉強の時間を潰してるんだけど」

それは2割くらい本気で言っているが、ほとんど冗談みたいなものだ。少し困らせてやろうと思ひ、言ってみた。

円香の見立てなら、おそらく菅谷はこの程度、気にするタイプじゃない。むしろ……。「あーうー……疲れたよ、勉強……」

「私も疲れてるから。はい、あと100問連続で答えて」

「ねえ、今更だけどなんで100問もやんの？」

「ノリノリでやるって言ったのあんたじゃん」

まあ、ノリノリでやるって言うのわかってて言ったわけだが。……とはいえ、100

問やるのは円香にとっても苦痛なので、大体10〜20問ほどで止める予定ではあったが。

「ねえ、浅倉は勉強しなくて良いの？」

すると、菅谷は他人を巻き込む作戦に出た。しかし、透との付き合いの長さは円香の方が長い。その為、教えてやることにした。

透の方を向くと、頷いて促した。透がそれを見て鞆から取り出したのは、今日返却された20点満点の小テストだった。右上に書かれたスコアは、フルスコアとなっている。

「え……うそ、満点!?!」

「浅倉、勉強しないで出来ないわけじゃないから」

「菅谷みたいなのに、理科しかできないんじゃないし」

「うぐつ……なんか、騙された気分……」

「良いから、教科書とノート見て。特別サービスでカンニングありにするから」

逃げ場を失ったネズミを、再びケージの中に戻す。

パラパラと教科書をめくって眺めながら、菅谷はまた深いため息を漏らす。

「はあ……これ全部覚ええないといけないのか……」

「ていうか、覚えやすいように考えれば良いんじゃないの?」

まるで勉強慣れしているかのように透は口を挟む。急に自分より遥か上の人になられたみたいで、菅谷は悔しげに唸るが、この際聞くことにした。

「……………どういう意味？」

「例えば……………日本史は日本の歴史を覚える、じゃなくて、日本人の生態を覚えるつもりでやるとか……………」

そのアドバイスに、流石に円香は引いた。流石に無理矢理、過ぎる気がする。日本史を生物に当て嵌めさせるのは無理がある……………と、思ったのだが。

菅谷は突然、集中力を高めたかのように真顔になると、教科書を眺め始める。

「……………」

「菅谷？」

「ちよつと待つて……………よし、良いよ」

問題を出せ、という事だろうか？ とりあえず、円香は適当に出してみた。

「じゃあ……………国民を軍隊に強制的に入隊させる制度を？」

「徴兵制」

「アメリカとソ連の間で起こった、経済情報外交を用いて、武力を使わない戦争は？」

「冷戦」

「……………関東軍が南満州鉄道の線路を爆破したことで起こった事件は？」

「満州事変」

「待つて、どんな覚え方したの？」

「ざっくり言ううと、日本をスズメバチだと思ふことにしてみた」

「……」

訳がわからなかった。感性が違うにも程がある気がしたが……まあ、解けてしまったのなら何よりだ。とりあえず、円香の方が疲れたので休憩にすることにした。

「ふう……まあ、なんにしても覚えられるならそれで良いケド」

「よっしゃ。日本史チヨロい」

「じゃ、私トイレ行つてくる」

「あ、私も」

透もじやがりこを机の上に置いてついてきた。軽く伸びをしながら、円香は首を左右に倒す。疲れているからか、コキツという音が鳴った。

「ふう……疲れた。なんでこんなに苦勞しないとイケないの」

「結構、楽しそうにしてた癖に」

「そんなわけないでしょ。楽しかったんじゃないやなくて、少しスッキリしただけ」

「スッキリ？」

「普段、苦勞かけさせられてる側が苦勞かけさせてるから。ちよつと痛快」

ふふん、とご機嫌に鼻を鳴らす。疲れている、というのも、座りつばなしだったからかもしれない。

「ていうか、浅倉は退屈じゃないの？ ずっと一人でじやがりこ食べてたけど」

「平気だよ。一緒にいるだけで楽しいし」

「……何そのお金は無いけど結婚しよう、みたいな事言ってるカップルみたいなセリフ」
「えー、菅谷が私の旦那？ どっちかって言うと、私と樋口が親で菅谷が子供じゃないの？」

「性別の壁を易々と超えないで。大体、私の子供はあんなにアホにならないし、させない」

相変わらずたまに円香にも想像できない返しをして来る奴だ。

その透は、歩きながら何かふと思いついたように円香に声をかけた。

「そういえばさ、また席替えしたじゃん？」

「したね」

「今、私の隣の席の人と話してる時に知ったんだけどさ、菅谷って一年生の時は人気あつたらしいよ」

「人気？」

「そう。顔だけは良かったから。結構、キヤーキヤー言われてたみたい」

「へー。じゃあなんで今は何も言われてないの？」

「二週間で鎮火したって。会話が成立しなくて」

「すごいな、日本人同士だろうに……と、引きつつも、そんな時期があったなんて知らなかった。まあ、そもそもあまり他人に興味がなかったというのもあったが。」

「中一の時は、透はあまり男子から声を掛けられてはいなかった。というのも、男子は女子より精神年齢が二つ下、と言うように、異性よりも部活とかに夢中だったのだろう。まあ、それはそれで助かったが……高校に上がったらそうはいかないのかもしれない。」

「……高校に上がったら、浅倉も大変かもね」

「え、なんで？」

「この女、本当に自分の顔の良さをまるで自覚していない。これは、今とは別の意味で苦勞しそうな気がした。」

「浅倉、顔だけは良いでしょ。告白とかされるかもよ」

「え、やだよ」

「……」

「まあ、高校入学初日で告白する奴なんて絶対、面食いだと思うが、そんな奴らに少し同情す……いや、しない。別にどうでも良い。」

「ていうか、それなら菅谷だってそうじゃないの？」

「……確かにそうかもね」

菅谷も本当に顔だけは良いので、もしかしたら初対面から……というより、初対面だけで好かれることもあるかもしれない。

それは……少し困る。透も同じのようで、困った表情を浮かべていた。何が困るって、三人一緒に遊べなくなる事だ。菅谷自身がどう思うかは知らないが、なるべくなら断ってもらいたいものだ。

そんな話をしている間に、トイレに到着したので、お互いに用を済ませてからトイレを出る。

なんか、気まずい話題のまま一度、話が途切れてしまい、二人とも少し黙り込んでしまう。

「……ねえ、樋口？」

「何？」

再び菅谷の元に戻りながら、透が声を掛けてきた。

「高校でさ、また三人とも同じクラスになれるかな？」

「……知らない。まあ、確率はかなり低いでしょ」

「なるべくなら、高三で同じクラスになっておきたいよね」

「? なんぞ?」

「修学旅行あるじゃん」

「高校の修学旅行は高二でしょ」

「あ、じゃあ高二」

そう返しつつ、頭の中では肯定しておいた。やはり、別のクラスになるとかあまり想像したくない。特に、三人全員バラバラになるのは困る。

結局、本当に○□高校への進学はやめて別の高校にしたわけだが、それは正解だったかもしれない。ミスコンなんてやられたら割と困ることになっていた。

「そう言えば、そっか。文化祭とか色々あるんだっけ」

「やっぱり、三年間ずっと同じクラスのが良いかも」

「……」

円香には確信があった。三年間同じクラスになれたとして、透と菅谷が一緒にいれば絶対に初対面で絡んでくる奴は現れない。この二人より顔が良い連中なんて、テレビの中でも見た事がないからだ。

そんな事を思いながら菅谷がいる席に戻った。じゃがりこでタバコの真似をしていた。

「……」

ホント、こんなバカでも顔だけは良いものなのだ。ホント。思わず呆れていると、隣の透が菅谷の方へ先に歩いて行く。

「ちよつと、もうじゃがりこ一本しかないじゃん」

「一本、残しといたよ」

「いや、そもそもあげるなんて言っていないし」

そんな小さい事でなんか揉め始める二人……もしかしたら、これこそが入学したばかりの対策になるのかもしれない。

そう思った円香は、菅谷と、菅谷の頬を引っ張る透の両肩に手を置いた。二人とも「何？」と顔を向けると、真顔のまま答えた。

「二人とも。高校ではずっとそのまままでいてね」

「え、嫌だよ。高校でもじゃがりこ取られるの」

「高校に上がったたら、俺もじゃがりこくくらい自分で買えるようになりたいかな」

「良い調子。それでお願い」

「??」

我ながら理解されない自覚はあったが、理解されるときこちなくなるかもしれないのでそれで良い。

ウンウンと頷いていると、菅谷が口を挟んだ。

「どうしたの？ ヒグっちゃん。狂った？」

「樋口もたまにわけわからないから」

「世界で一番、あんたらには言われたくないから」

少しムカつくくらいセリフを聞いたものの、今日はイジめる側であることを思い出し、なんとか気を落ち着かせる。イジる側が憤慨するのは良くない気がした。

「別に。ただ、あんたらの性格なら、どんなに顔が良くても、高校入学したてでも他人に好かれることはないと思っただけ」

「え、じゃあヒグっちゃんは好かれちゃうんじゃないの？」

「はあ？」

「顔も性格も面倒見も良いし」

「あ、たしかに」

透にまで賛同されて、少し円香は顔を赤くしてしまう。唐突に褒められて、思わず菅谷を睨みつけてしまう。

「つ、な、なに言ってるの？ あんた、DMなの？ 被虐趣味は見えない所でしてくれない？」

「え、だって少なくともヒグっちゃんと一緒だと楽しいし、性格悪い人と一緒にいて楽しいってことはないでしょ」

「……」

「こういうところ、ホントこういうところだ。」

「樋口、めっちゃ照れてる」

「っ、あ、浅倉……!」

ついでにこの女もこういうところだった。もうなんか恥ずかしさが怒りに塗り替わり、ギロリと二人を睨みつける。その圧力は、飄々とした二人を威圧する程のものだった。……少女漫画のヒーローみたいなセリフを抜かしてる暇があるなら、まず同じ高校に行くための努力をしてくれない?」

「ひえっ……」

「え、お、怒った……?」

「スズメバチにすれば答えられるんでしょ? 二人交互に答えて100問連続正解する

まで帰さないから」

「ま、待って。樋口。私も?」

「当たり前でしょ。あんたがやってるの受験勉強で期末試験の勉強じゃないし」

「いや、小テストで満点取って……」

「ノルウエー」

「菅谷……」

「え、俺の所為？」

×最終下校時刻まで帰らせてもらえなかった。

×

さて、翌日。今日は体育の授業があるのに体操服を忘れた透を置いて、円香は一人で登校していた。

しかし、昨日は愉快だった。何がって、勉強である。菅谷や透が虫の息になっているのを見て、何故だかとても楽しく思っていた。普段、どれだけ振り回されているのか、自分で改めて実感した。

特に、今となつては二人のバカさ加減をスルーするスキルも身に付けてきたため、これからはただ振り回されるだけではなくなりそう……なんて思っていると、自分の前方に見える、チリチリの天然パーマ。

「……」

声を掛けようかと思つた時、何故か少し躊躇つてしまった。なんか、こう……緊張？に近い何かを感じて。

考えてみれば、浅倉がいない時に二人でいる時なんて、一回目の席替え以降な気がする。が、すぐに相手は菅谷だと言い聞かせた。緊張なんかしたって、何一つ良いことなん

かない。

そう思い、改めて声をかけた。

「伊藤博文が総理になつた回数は何？」

「4回。……え、誰？」

誰かどうかを確かめるより答えを言ってしまう辺り、昨日の事が大分、頭から離れていないようだ。……いや、なんなら心の底では声で気付いていたのかもしれない。

振り向いた菅谷に、軽く円香は軽く手を振って応じる。

「あ、ヒグっちゃん。……いきなりなんでクイズ？」

「ホントにスズメバチで覚えたんだ。どうなってるの頭？」

ガン無視である。少しは困った顔すると思つたら、答えられたからか真顔のままだ。

「コツ教えようか？」

「うん」

少なくとも、円香では絶対にその覚え方は無理だ。というか、この世の人間、全員無理だろう。

すると、今度は菅谷の方から聞いて来た。

「浅倉は？」

「いつも一緒なわけじゃないから」

「体操着でも忘れたとか？」

「正解」

よく当たりを引くものだ。この男、割と人のことをよく見ている。

「ヒグつちゃんも浅倉も、運動神経悪くないよね。球技とかも出来るの？」

「別にそうでもない。成績3とれる程度」

「すごいじゃん」

「菅谷は？ 何ができるの？」

「なんで出来ない前提……」

平均台で足を滑らせるような人は、むしろ出来ない前提になって当たり前な気がする。

釈然としない様子の菅谷は語り始めた。

「ドッジボールなら強いよ」

「雨の日限定じゃん、それ」

「いや、他のも出来ないわけじゃないけど」

「ふーん……それ、出来ない人が言うセリフでしょ」

「ホントだよ。体育のソフトでこの前、二回ゲッツー取ったし」

「打撃は？」

「ノーヒット」

ダメじゃん、と言わんばかりの視線を向けると、またすぐに弁解を始めた。

「あ、でもサツカーの時はバックの守護神として、7回くらいピンチになったけど、1
シュートも許さなかった」

「なんでそんなにピンチになったの？」

「それは4回分、俺のパスミスの所為だけだ」

「……」

要するに、カットは出来るけどそもそも蹴れないという事だろう。やっぱりダメだ、
この人。

「あ、あと水泳で背泳ぎと平泳ぎとバタフライできるし」

「クロールは？」

「……」

「一々、欠陥作らないと気が済まないわけ？ しかも全部、大事なところ出来てないし」

「やばっ、ある意味才能かも」

「仕事は出来ても人間関係作れなくて嫌われてる社会人みたい」

「……」

本当に面白い男だ。あまり毎年、2月に開催される球技大会に興味はなかったが、今

年はじっくりと菅谷を観察してみても良いかもしれない。

なんだ少し楽しみになりながら歩いていると、唐突に菅谷は少しだけ真剣な声で聞いてきた。

「円香は、俺のこと嫌い？」

「……は？ 何きゅ……」

急に？ と、聞こうとした所で自分が言った最後の例えを思い出す。嫌われてる人みたい、という言葉が少し気に掛かったようだ。

そういうの気にするんだ、と少し意外に思ったのが半分、もう半分は少し呆れてしまった。

バカバカしい、と言わんばかりに鼻息を漏らすと、真顔のまま答えた。

「そんなわけないでしょ。嫌いな人と同じ高校に行くために勉強手伝ったりしないから」

……こういうセリフは、少し照れくさい。もう少し遠回しな言い方にしないと、この男は……。

「じゃあ好き？」

「っ……」

こういう事を平気で聞いてくる。もう少し語彙力とセンスを磨こう、なんて考えつ

つ、とりあえずなんで答えるかを決めないといけない。

……けど、好きって答えるのはなんだか抵抗がある。どうしても嫌、というわけではなかったし、多分そういう意味じゃないというのも分かっていたが、なんとなく憚られた。

少し悩んでいる円香に、菅谷はしれつとあまりにも自然に告げた。

「俺は好きだよ。ヒグっちゃんのこと」

「……………は？」

あまりにも、あまりにも当然のように言われ、思わず円香は惚けたように口を半開きにし、思わず足を止め、目を丸くして菅谷を見上げた。

それ、どういう意味で言っているのか？ 何のつもりでこんな所で告げて来たのか？ 一体、自分の何処が気に入ったのか？ 大量に浮かんだ疑問は、次の菅谷のセリフで一気に弾け飛んだ。

「浅倉のことも好きだし。だから、ヒグっちゃんと浅倉には嫌われたくないんだ」

「……………」

一気に熱が下がったが、別の熱は鰻登りだった。この野郎、ホントこの野郎、と言わんばかりにメラメラと怒りが燃えたぎる。

「……………ホント、齒の浮くような無自覚系主人公……………」

「え？」

「覚悟してなさいよ。今日、あんたに休み時間はないと思ってて」

「え、どういう意味……あ、この時期に珍しい。蟻がまだ活動してる」

「……」

×そのままツカツカと学校へ歩いた。

××一時間目が終わり、菅谷は軽く伸びをする。ここ最近、授業中はずっと起きています。

季節が季節、ということもあるが、たまに虫が入ってきた時に観察したり、机や黒板で顔っほいものを探している暇はない。

束の間の休息に入るため、椅子に座ったまま目を閉ざすと、その自分の顔にばこつと硬いけど柔らかい感触。目を開けると、円香が教科書を持って立っていた。

「何寝ようとしてんの？ 勉強」

「え……10分休みだよ今？」

「だから何？ 姿勢を正して」

「どういう事？」と聞きたくても、円香は有無を言わずに自分の席の横に立って問題を出し始めた。

「英単語から。『遊ぶ』の原型、過去形、過去分詞形」

「え、えーっと……ゴホンヅノカブト、タイゴホンヅノカブト、で……play played」

「相変わらず、どんな覚え方してるのか分かんないけど正解。はい次」
「ち、ちよつとまつてつて」

「却下」

「閣下？」

「それでも良いけど続けるから。はい次……」

「や、だから待つてよ。昨日まで10分休みは普通に休んでたよね？」

「言ったでしよ。休み時間はないと思えつて」

「……言つてた」

言つてたけど……え、まさか朝、ブチギレてた？ なんて今更すぎることを思つたり。

しかし、マジでノンストップでやる気？ と、今更ながら冷や汗が流れてきた。

「あ、あの……樋口さん？」

「次。壊すの三段活用」

「や、だから待つてつて……」

「5秒以内に答えないと明日から勉強教えないから」

「……えつと、フタマタクワガタ、セアカフタマタクワガタ、マンデイブラリスフタマタ

クワガタで……break broke broken」

「はい次」

「ちよつ、ヒグつちゃん……!」

そこで、ふと助けを求めるように透の方を見る。自分の席でおとなしくこちらを見学していた。おとなしくしていれば良いというものではないだろうに。

『た、す、け、て!』

口パクで救援を出してみた。さつきまで目が合っていただろうに、急に顔を伏せてしまった。本当に調子良い奴……と、思っていると、上からパコつとまた教科書が降ってくる。今度のは割と痛かった。

「何よそ見してんの？ ちゃんとこつち見てくれない？」

「あつ、ハイ……あのトイレに」

「ノルウエー」

「まだ言ってるの……?」

ホント、何よりなんて嬉しそうに人をいじめられるのか、と菅谷は少し冷や汗をかき、まあ、これもまずは期末試験が終わるまでと思えば頑張れるが。

「次。見るの3段活用」

「え、えーつと……ヒラタクワガタ、スマトラオオヒラタクワガタ、パラワンオオヒラタ

クワガタで……」

×「ほんとに先生くるまで逃してもらえなかった。」

×「給食の時間。当番である菅谷は虫の息だったが、そんなのに何か気を使うことなどか
けからも無く、透と円香は自分達の給食を全て取り、席についていた。」

「にしても……樋口、ご機嫌だね？」

「は？ 何が？」

その円香に、透が茶化すように言った。

「いや、休み時間に毎回、菅谷の所に遊びに行ってたから」

「……別に。ちよつと登校中、顔合わせた時、ムカつく事言われたから」

「へー、なんて？」

「……」

ちよつと、口に出すのは憚られた。内容が内容だけに、言えば自分がどう勘違いした
かもバレてしまう。

それを、よりにもよって透に知られるのはちよつとゴメンだ。

「……別に。たいした事じゃないから。ていうか、そもそもご機嫌じゃないし」

適当に返しながら誤魔化した。実際、ご機嫌ではない。決して不機嫌というわけでも

ないが。

……なのに、透はニコニコしたままこつちを見ている。お陰で不機嫌になりそうだった。

「……何？」

「いや、でもご機嫌に見えるから」

「だから違うって……」

「問題出してる時の樋口、超楽しそうだし」

「……は？」

また間抜けな声が漏れた。楽しそう？ 自分が？ 楽しそうにする理由なんて……いや、あるにはあった。多分、ズタボロにしている顔を見るのが楽しかった。そうに決まっている。

「……ま、楽しくはあったかもね。あいつ、ほんとに泣きそうになってたから面白くて」

「いや、そういうんじゃない」

「は？」

「好きな子にちよつかい出してる男の子みたいだった」

「……まあ、別に嫌いじゃないし。いつも振り回されてる分、こういう時に仕返ししておかないと……」

「ふーん？」

「……」

イラツとした。その何もかも見透かしたような笑み。ホント、こういうところ幼馴染は厄介だが、それならその幼馴染がこの先どうするかも読めておいた方がよい。

「あんたも昼休み勉強ね」

「えっ」

「逃さないから。覚悟しといて」

「……私、早退し」

「ノルウエー」

藪をつついて蛇を出す、という言葉が、透の脳に嫌というほど響き渡った。

長く放置されれば、水にも色がつく。

期末試験の返却は、終業式の一日前に一齐に行われる。そういう日は出席番号順に席が決められ、菅谷と透は隣の席で待機している。

「ヤバイ、緊張してきた」

「ふふ、それ。私も緊張してきた」

真顔のまま言った透だが、実際緊張していた。自分の結果より、菅谷の成績である。

これで、まず受験出来るかが決まる。……そもそも12月に何処の高校受験するか決めて大丈夫？ とか色々と思う所はあるが、とにかく今日で同じ高校に行けなくなるか決まるのは確かだ。

「……え、浅倉も緊張する事なんてあるの？」

「あるよ」

「例えばどんな事で？」

「実は昨日、樋口の家にあつた『まどか』って書いてあるプリン食べちゃった」

「それはヤバイ。俺でも緊張しそう」

「でもスリル、ヤバイよ。今日、放課後やってみる？」

「やってみつか」

なんて別の緊張感が高まる一方で、テスト結果の緊張感は薄まっていつていた。すると、先生が教室に入つて来る。

それにより、生徒達のざわめきは収まった。一時間目は散々やった社会。はスズメバチで日本の社会を覚えるという訳のわからない荒業をやつてのけたものだ。

「ちなみに、菅谷。自信のほどは？」

「めっちゃある。むしろ自信しかない」

「流石」

「でも一つだけ覚えてるのは、マッカーサのどこを女王蜂つて書いた事」

「え……それヤバくない？」

「大丈夫でしょ。他出来てるし」

「そっか」

さて、そうこうしている間に先生は、テストの返却を始める。

「出席番号順に取り来いよー」

とのことで、生徒たちは取りに行く。

まず透から取りに行った。のんびりと歩いて、テストを受け取った。

「いくつ？」

「ね、菅谷。勝負しない？」

「何急に。点数良かったの？」

「いや、そういうんじゃないよ……菅谷が60点取れるか取れないか」

「まあ良いけど……え、俺に点数とって欲しくない？」

「や、そういうわけじゃないけど。60点取れたら、私にあだ名、つけて欲しいなって」

それを言うと、菅谷は少し悩ましい表情で眉間にシワを寄せる。

「待つて待つて……俺が、点取れたら、あだ名つけるの？」

「そう。……ダメ？」

「や、ダメっていうか……じゃあ、取れてなかったら？」

「その時は、私とデートしよう」

「…………はえっ？」

少し頬を赤らめる菅谷。でも、透は本気で言っていた。

今、思いついた事だけど、あだ名が欲しかったのは本当だ。どんなにダサくても良い。

……いや、あんまり変なのは嫌だけど、でも少しだけヒグっちゃうんが羨ましかった。

相当、デートの部分が衝撃的だったのか、菅谷は少し狼狽えた様子で頬をぽりぽりと

搔く。

「い、良いけど……普通、そういうの逆じゃない？」

「かもね。……あ、あだ名だけど、私が良いって言うまで考え直してね」
「え……あー、まあ良いか。うん、分かった」

決定、と決めた透は、先について少し胸に手を当てる。願わくば……願わくば、デートにならないように祈るばかりだ。

そんな透に、菅谷は何食わぬ顔で聞いた。

「ちなみに、そっちは何点？」

「71」

「す、すごいな……」

「スズメバチには負けるから」

「プレッシャーやめて」

そう答えている間に、今度は菅谷の番。立ち上がって取りに行き、すぐ戻ってきた菅谷に聞いた。

「何点？」

「ん、60ピツタリ」

「うわ、ギリじゃん」

「それな。もっと出来たと思ってた」

しゃあしゃあと言うが、もう少し危機感を持つて欲しい。というか、この男はなんで

こんな呑気な表情でいるのだろうか？ と、よくよく横顔を見ると、少し冷や汗が流れているのが見えた。もしかしたら……彼も割と緊張しているのかもしれない。

これはこの後も気が抜けなさそうな気がした。

××
×+

さて、続いて数学。何にしても、一科目はクリア。親からは英国数理社の五科目だから、家庭科の試験は60点以下で問題ない。

社会の返却でもう慣れたのか、二人とも緊張の欠片もなかった。

「そういえば、駅前に出来たラーメン屋。あれメチャクチャ美味いらしいよ」

「へー、何ラーメン？」

「味噌」

「意外と趣味渋いね……。私、食べるなら豚骨が良い」

「豚骨だったら、これから親が引越す所にあるなあ。美味いところ」

「へえ、どんな感じ？」

「え……豚骨って感じ？」

「めっちゃ美味しそうじゃん」

あまりにも適当な会話だが、円香は近くにいないので誰もツツコミを入れてくれない。いや、最近では円香でさえツツコミは入れない。

「ていうか、菅谷ってラーメン好きなの？」

「うーん、どうだろう。そもそもあまり嫌いな食べ物ないから……」

「ふーん……じゃあ虫も食べれる？」

「食べれるらしいよ。コオロギとか。俺は食べた事ないけど」

「今度食べてみてよ」

「やだよ。可哀想」

可哀想じゃなかったら本当に食べそうなのが困る……いや、さすがに食べないか、とすぐに思い直しながら話していると、ふと思ったことがあったので聞いてみた。

「そう言えば、一人暮らしとかする気満々みたいだけど、料理出来るの？」

「え？ 出来るよ？ やった事ないけど」

「へえ、すごいじゃん」

「浅倉は？」

「私も出来るよ。多分」

「マジか。いーなー、食べてみたいかも」

何一つツツコミが入る事なく、会話が進む。引く程、二人とも根拠なく自身のスケールを上げて行ってしまう。

「あ、じゃあ60点以上が決まったら私の家においでよ。作ってあげる」

「マジか。超行く……え、でも浅倉の家？」

「？ 嫌？」

「や、嫌じゃないけど……」

言つてから、透は自分のセリフを後悔する。そういえば、彼は割とそういうところウブだった。けどまあ、可愛いと言えば可愛いものだ。

「ふふ、じゃあ決まり。余計に頑張らないとね」

「頑張るも何も、もう結果待ちなんだけど」

「そっか」

そんな話をしてしていると、先生が入ってきた。

「お、きた」

「試験用紙」

「その馬鹿姉弟。俺は試験用紙じゃねえ」

先生に怒られながらも返却開始。当たり前だが、透から用紙をもらいに行つた。

「いくつ？」

「81」

「本当に勉強、やれば出来たんだね……」

「え？ だってそんな難しいことやってないじゃん」

「まあ、数学はやれば出来るよね」

そう言っていると、また菅谷の名前が呼ばれ、取りに行った。

あんな風に言っていたし、数学はある程度自信があるのだろう。それなら少し安心できけるかも……と、思つて透は少し力を抜いた。

「何点？」

戻つてきた菅谷に聞くと、テスト用紙を見せて来た。60点びつたりだった。

「つ、だ、だからギリじゃん……」

「あはは、危なかった。爆笑」

「いや、普通に笑えないから。その点数」

途中計算式が合つていれば加算されるので、そこに救われた形になっている。

「まあ、点数取れてたから良いじゃん」

「良いけどさ……」

なんで本人よりドギマギしないといけないのか、と透は珍しくイラつとしつつも、とりあえず答え合わせと解説に耳を傾ける事なく、菅谷と雑談を続けた。

×× 次の時間は、英語。唐突に菅谷が思い付いたように口を開いた。

「よし、この時間の間は二人とも、英語しか話せない縛りで行こう」

「良いね。面白い」

相変わらず、二人は呑気なものだ。透でさえ、もう少し慣れてきてしまった。

さて早速、英会話でお話を始めたわけだが……もちろん、二人の英語力はそこまで出来る程高くない。

「……」

「……」

その上、改まって話すとなると話題は思い付かないものだ。二人とも黙り込んだまま口を開かない。

「へ、へロウ？」

「え、グッドモーニン、じゃないの？」

透の一言目が、もう日本語だった。

「え、あ、そつか。まだ午前中か」

「あ、今の日本語」

「いやさっきの浅倉も日本語使ってたし」

「じゃ、今度こそ今からね。よーい……」

「あれ、なんか外雨降ってない？」

「え？ ……うわ、ホントだ」

もう飽きたのか、すぐに他所に興味が移った。

「俺、傘持つて来てないんだけど」

「私も。樋口なら持つてるかも」

「うーわ、良いなあ。家隣とか」

「菅谷も入れれば良いじゃん？」

「え、良いの？」

「平気でしょ。私も樋口も菅谷も細かいし」

なんて話していると、先生が教室に入ってきた。それにより、二人は一旦黙って前を向く。

早速、試験の返却が始まった。

「いくつ？」

「今回は良いよ。64」

「うん。もう何も言わないわ」

×何はともあれ、これで5分の3、クリアである。

×樋口円香は、割と怖がりな点がある。別にお化け屋敷が怖いとか、そういう怖がりではなく、大きなことに対して起こるプレッシャーに強くないという事だ。

だから、その日は二人から少し離れた席にずっといたものの、わざわざ二人の席まで点数を確認しに行くことはなかった。

少し距離を離れた所から、二人が仲良さそうに点数を見ているのを眺める。今の所、二人の反応を見る限り60点は超えているようだ。

「……」

とりあえず、ほっと胸を撫で下ろしておく。なんだかんだ、やはり同じ高校に行きたいという気持ち強いのだ。

何より、ここまで面倒見てきた身としては、高校の件が無くても良い成績をとって欲しいと感じている。

……しかし、何故か胸の奥に苛立ちに近いものを秘めていた。

「……」

何がそれを掻き立てているのかは、考えればすぐに分かった。今回は自分が多く勉強を教えたのだから、普通は一科目突破した事に言うべき言葉があるのではないだろうか？

それを、いつまでも浅倉とばかり話して席から動こうともしない……少し、配慮が足りないのでは？ なんて思ってしまう。

だが、まあ透が楽しそうにしているし、良いか、と考えることを放棄する。

……一瞬、自分から聞きに行けば良かったのでは？　なんて思ってしまった。考えるのをやめようとした直後に。

「あーもうっ」

少し苛立つて、机に伏せた直後、先生が教室に入って来た。

「うーし、テスト返却するよー」

その声を聞きながらも、しばらく円香はぼんやりしていた。

自分がテスト用紙を取りに行く順番になって、ようやくなんの科目だったかを思い出す。四時間目は理科だった。

結果は、81点。まあまあだろう。借りは作りたくなかったので、菅谷から「教えてよるか？」と聞かれても断り続けてきた科目……というところで、はっと思いついた。

理科なら、菅谷は出来るから確実に60を下回ることはない。これなら、全然余裕で聞きに行けるというものだ。

「……って、結果分かっているなら聞きに行く必要ないでしょ……」

自分で自分が分からない、と言わんばかりにヘナヘナと机の上で伏せてしまった。

そのまま答え合わせに耳を傾けつつ、とにかく自分で自分が嫌になりながら、八つ当たり気味に楽しそうにしている菅谷と透を睨み続けた。

全科目を一日で返すだけあって、答え合わせとテスト返却に使う時間は30分ほど。

すぐに終わり、円香はどうしようか悩んだが、結局自分から見に行こうと思い、立ち上がった時だ。

「ヒグっちゃんくん」

「! ……な、何……?」

向こうからやってきた。まさか、さつきまで自分が考えていたことが伝わった? と疑いたくなるようなタイミングだ。

思わず狼狽え、ドモってしまったが、何とか取り繕って聞き返した。ラスト一科目になつて、とりあえず報告しにきてくれたのだろうか? 結果は分かっているとはいえ、殊勝な心がけ……なんて心の中でニンマリしていると、菅谷は自分に向かって紙を一枚、突き出してきた。

「俺、理科100点だったけど、ヒグっちゃんどうだった?」

「……」

取れるマウントを取りに来ただけのようだ。ホント、腹立つ男である。

「……81」

「勝った!」

「他は社会85、数学89、英語91だけどいくつだった?」

「……席に戻ります」

「だめ。答えて」

「……社会60、数学60、英語64」

「ギリギリも良いところじゃん。ダサ」

言い返せなくなる菅谷に、ナジるだけでなくそもそも根本的な不安を聞いた。

「最後の国語、大丈夫なんでしょうね？」

「……多分」

「多分じゃ困るんですけど。わかってる？ 他人に一科目だけマウント取ってる暇があるなら、もっと緊張感持って席に座ってたら？」

この際、過去のイライラも全てぶちまけてやろうと思い、くどくどと説教してやっていると、先生が教室に入って来た。

×

さて、最後の科目。お説教が響いて虫の息になっている菅谷は、机の上で突っ伏して

いた。

「だから言ったじゃん。やめといたら？ って」

「いや、お前『いってくれば？ 面白そうだし』って煽ってたじゃん……」

「そうだったけ？」

「あれ、違ったっけ」

なんて適当な会話に、緊張感など何処にもない。二人揃って真顔のままテストの返却を待つ。

透が取りに行っている間、菅谷は頰杖をついたままぼんやりと黒板を眺める。白い粉が、なんか青白い貞子に見えてきた。

「菅谷ー」

「うーい」

名前を呼ばれたので、ぼんやりと立ち上がって取りに行く。何とかなるでしょーと思いつながらテストをもらい、席に戻る。

すると、透も同じように緊張感のない表情で聞いてきた。

「どうだった?」

「あー……何点だろ」

そんな返しをしながら紙を見て点数を読み上げた。もらった時点でまだ点数を見ていなかった。

「59点……え?」

「……………へ?」

××× 菅谷は、その場で崩れ落ちた。

円香は苛立っていたので、国語のテスト返却の時、菅谷の眺める事はなかった。何となくだが、あの菅谷の様子を見ているとなんだかんだ言って平気なんじゃないかなーなんて思えて来る。

なんにしても、とりあえず様子だけ見ておこうかな、なんて思い、ついさつきまでの休み時間感じていた行きづらさを微塵も感じる事なく様子を見に行つた。

そこでは……。

「……………俺なんて死んじやえば良いんだ…………」

「どんまい。菅谷。落ち着いて」

机に突つ伏した菅谷の背中を、透が摩つているところで、思わず背筋がヒヤツとする。まさか、と思い、駆け寄つて声をかけた。

「……………どうしたの？」

「…………」

聞くと、無言で透は菅谷の試験用紙を見せる。そこに書かれていたスコアは59点。……………つまり、1点足りない。

「っ、う、嘘……………？」

「…………」

「……………ごめん、ヒグっちゃん、浅倉……………俺、もう死んで償うから…………」

「大丈夫だよ、菅谷。高校離れても遊ぶから……」

その落ち込んでしまう気持ちは、円香にも分かってしまう。というか、自分も同じ気持ちだ。少なくとも教えている間、菅谷は真剣にやっていたから、円香には責められなかった。

というか正直、円香と透もショックではある。最後の科目、気を抜いた瞬間というのがまた堪える。

……最悪、菅谷の両親に自分達からお願ひしに行こうか……なんて思った時だ。

「……浅倉」

「何？」

「菅谷、もしかして返却終わってからずっとこのまま？」

「そうだけど？」

もしかしたら……と、慌てて円香は自分の席に戻り、解答用紙を持ってくる。一応、きちんと答え合わせを聞き、間違った所に正しい回答を写しておいた。

その癖をつけたことに心底、自身を称賛させまくりつつ、見比べていく。

「樋口？」

「黙ってて」

透に声を掛けられたが、一刻も早く見つけたかった為、用紙を交互に見比べていく。

ある、あるはず……あつてくれ……なんて強く思いながら全神経を目に集めた結果、当たりを引いた。いや、正確に言えば、ハズレを引いた、と言うべきか。

「菅谷」

「……屋上からスカイダイブするから許して」

「それ許されてないから」

「じゃあ、頸動脈をばっさり……」

「良いから黙って聞いて。本当に別の高校に行くことになりたいわけ？」

「……へ？」

どういう意味？　と言わんばかりに顔を上げる菅谷に、円香は机の上に用紙を2枚おき、二箇所を指さして説明する。

「ここ。合ってる。採点ミス」

「……え？」

「ちゃんと答え合わせ聞いてなかったでしょ。ここ、答えは『ア』。私はマルであんたはバツ」

「あ……」

表情をパアツと明るくする菅谷。それが、少し円香にはイラツとする。

「喜んでる場合じゃない。普通、こういう誤植は答え合わせ中じゃないと受け付けない。

でも、今まだ廊下にいると思う。お願いするなら急いだ方が良い」

「おっす！ 行つてきますす！」

光の粒子となって消え去っていた。

一気に静かになった円香と透は、その場で立ち尽くす。ポカーンとしていた透は、すぐに正気に戻つて円香に声をかける。

「よく気付いたじゃん、ひぐ……どしたの？」

しかし、円香は顎に手を当てて、鋭い目つきで廊下を見ている。

「……念の為、私見てくる」

「え？ あ、じゃあ私も」

慌てて二人は後を追つた。廊下の曲がり角に出た所で、菅谷が先生に頭を下げているのを見て、慌てて角に戻つて身を隠す。

「お願いします、先生。ここ、ここだけ！」

「みんなそう言うんだよ。でも、名乗り出なかったのはお前だろ？」

「や、そうですけど……あれはシヨックで……」

「は？ お前いつも何点だろうとシヨック受けないだろ。国語59つて快挙じゃん」

「そうだけど1点足りないの！ ……わかった、じゃあこの2点のここバツで良いから、さっきの3点のここちょうだい」

「そういう問題じゃねえんだよ。てか、1点得してるじゃんお前」

「じゃあ俺の菅谷ポイント1点あげる」

「何に使うんだこれ。」

「肩叩き」

「なめてる?」

「1点につき強度が1、上がりますよ。強度5で壁が凹む威力になります」

「殺す気じゃねえか! ふざけんなお前!?!」

「やっぱり……と、円香はため息をつく。交渉が下手くそすぎる。……というか、あれ交渉になっていない。」

「……仕方ないなあ」

「は……?」

そう呟いた透が、角から飛び出した。

「っ、あ、浅倉……」

「は? 浅倉?」

「先生、私からもお願い。元々、先生のミスなんだし、廊下から走ってきたんだし……ここだけ」

「なんでお前まで……もしかして本当に姉弟なの?」

「この際それで良い、姉弟で良いから。お願い」

「待って。兄妹が良い」

「は？ いや姉弟だから」

「おーい、どこでモメてんだお前ら」

仕方ない、と思つた円香も、同じように飛び出した。

「あの、すみません。私からもお願いします」

「ヒグつちちゃんまで……」

「おお、噂の三馬鹿姉弟勢揃い」

「もうこの際、それで良いのでお願いします」

「同じセリフ。ほんとの姉妹か？」

「「お願いします！」」

三人揃つてとにかく頼み込む。それに、流石に先生は引き、ため息を漏らした。

「……はあ、もうわーつたよ。次はねーからな」

「ありがとうございます」

「お前、幸せもんだな」

許可と丸と点数をもらい、一先ず安堵した。先生が立ち去つてから頭を上げ、円香と透は一息つく。

その二人を、真ん中にいた菅谷は両腕を広げて包み込んだ。

「つ、す、菅谷？」

「な、何して……………」

「二人とも……………ホント大好きだ」

「「っ!?」」

流石に、二人とも動揺してしまった。円香の頬と、透の耳が同時に真っ赤に染まった。そして、大きなリアクションをしてしまったのは円香だった。照れやら羞恥やらそして謎の怒りやらが込み上げ、思わずビンタで張り倒してしまった。

電流でも弾けたのかと思う程のバチンツツという甲高い音と共に、後ろに大きくひっくり返り、菅谷は大の字で倒れた。

「最ツツツ低ツツ!!??」

そのまま教室に戻って行った。

ビンタのこだまがしばらく響いた後、やがて音は無くなり、静かさが返ってきた。そんな中、倒れたまま菅谷は残っている透に聞いた。

「俺……………そんな悪いこと言った？」

「さあ？」

「少しは真面目に答えてよ……………」

「それより、おめでと。受験資格を得て」

「ありがとう……」

「で、あだ名は？ あと今日、うちでご飯だから。何食べたい？」

「……あの、少し待って……」

口の中に、血の味が滲んでいた。

「謝った方が良いかな？」

「大丈夫でしょ。今頃、樋口顔真っ赤にして蹲ってると思うし。……あ、樋口誘おうよ」

「……」

とりあえず、菅谷はもうそのまましばらく廊下から起き上がるのは諦めた。

1 on 1か、2 on 1か、伏兵か。

放課後。透、円香、菅谷の三人は円香の家に集まった。理由は単純。約束通り透が手作り料理を作るからである。

え、じゃあ浅倉家じゃないの？ となるところだろうが、何故か透が円香の家を推した為、ここになった。

さて、まずは食材を購入する為、スーパーに来た。

「で、何作ろつか？」

「え、あんたら決めずにここ来たわけ？」

「俺も初めて知った」

まあ、予想出来たことか、と円香は思うことにして、話を進めた。

「じゃあ、たこ焼きとかにしない？」

「あの、俺口の中切れてるんだけど……」

「は？ じ、自業自得でしょ……ミスターハグ魔」

「っ、ご、ごめん……？」

だいぶ後になってハグしたことを認識した菅谷は円香同様、頬を赤らめて目を逸ら

す。

そういう所は可愛げあるんだけどな……と、円香は思いつつ、とりあえず菅谷に聞いた。

「じゃあ、他に何かがあるわけ？ 何食べたって口の中切ってたら痛いでしょ」

「お刺身とかは？」

「真冬だし、料理でもないしそれ」

「え、それは困る。私の料理の腕を見せるわけだし」

透がそこへ入ってくる。とはいえ、たこ焼きで料理の腕を見せられるのか、と問われれば微妙な所だが、そこは黙っておく。絶対、みんなで作ったほうが楽しいやつだから。

「ていうか、そもそも浅倉は料理とかした事ないでしょ。何の腕を見せるつもり？」

「え、だからもしかしたらできるかもしれないじゃん？」

「どういう理屈それ。料理って一か八かでやるもんじゃないから」

自分も食べる以上は好きにさせるわけにもいかないの、口を挟みながらスーパー内を見て回る。

一応、円香は母親に許可とお金をもらって来た。意味がないのはわかっていたが、菅谷を紹介するのは後回しにした。どうせ後からバレるのに、つい防衛本能が働いてしまった。

今からでも、少し母親に菅谷のことがバレるのが憂鬱に感じているが、その辺、たこ焼きのタネを作る透の手伝いをしてもらって有耶無耶に出来るかもしれない。

「あ、ヒグつちゃん。俺これ食べたい。ポテチ」

「ダメ。……ていうか、何しに来たと思ってるの?」

「えー、良いじゃん。少しくらい」

「一人暮らしするんでしょ」

「……するけど?」

何そのピンときてない顔? と、円香は眉間に皺を寄せる。まさか、と思い、その表情のまま聞いた。

「……ていうか、あんた一人暮らしするのにお金の使い方とか考えないわけ?」

「え、食材買えば良いんじゃないの? 自炊すればエコなんでしょ?」

「まず言っておくけど、エコって別に金銭的節約って意味じゃないから。電気代やガス代の節約が、結果的にお金の節約にも繋がってるだけ」

そこを注意しつつ、円香は続けた。

「買い物にはなるべくお金を掛けない。野菜とかは、少しでも大きい食材を選ぶ事。お肉は値段よりグラム単位で見る事」

「え……そ、そう?」

「適当に選んじやダメなの。そういうの学んでおかないと、キツくなるから」

「なるほど……要するに、みみっちくなれって事ね」

「言い方」

まさか自分が他人の言い方を指摘することになると思わなかった、なんて思いつつ、
円香は近くにあつたキャベツを指し示す。

「例えばこれ。重いの選んでみて」

「いや、カゴ持ってるし」

「待っててあげるから」

まだ空のカゴを受け取り、菅谷にキャベツを受け取らせる。

澁々ながらも真剣に選び始める菅谷の横で、透が円香を見て微笑んだ。

「ふふ」

「何？」

「樋口、お嫁さんみたい」

「……はっ」

一瞬、胸の奥でドキツと心臓が高鳴る。お嫁さんって……誰が誰のお嫁さん？
わんばかりに眉間に皺が寄せられる。と言

「というより……口うるさい小姑で、菅谷がお嫁さん？」

「……お嫁さんって、そういう意味？」

「？ ……他にどんな意味が？」

こいつ……いや、もはや菅谷も含めて本当に人を誤解させる天才である。その度、自分の勘違いによつて羞恥心を掻き立てられる。

「はあ……菅谷、まだ？」

「ねえ、見てこれ」

聞かぬが、菅谷もどこ吹く風で無視。代わりに差し出してきたのは、小さい上に変つた形のキャベツだった。

「？ それが何？」

「ヒグつちゃんに似てる」

「……」

「プフツ」

笑いを漏らしたのは透。お陰で円香の苛立ちはさらに増した。ヒクつと頬が引き攣り、眉間の皺が増える。

「……あつそう。ところで、これも二人に似てない？」

円香が手にとつたのは、やたらと丸いキャベツだった。どう見ても透と菅谷に似たイメージはない。

円香らしからぬ感性に、二人揃って小首を傾げてしまう。

「どの辺が？」

「俺なんて天然パーマなんだけど？」

そう言った直後、円香は鞆から自身の身嗜みを整える用のポーチを取り出し、さらにそこから小さなハサミを取り出した。

「ごめん、間違えた。今からそっくりにしてあげる」

そう言った直後、二人とも肩を震わせる。

眉毛とかの形を整えるためのハサミだから、間違ってもバカ達を坊主にするためのものではない。それでも知ったことか、と言わんばかりの形相で二人に迫った。

透も菅谷もヒヤリと脳裏を冷やし、お互いに両手をつなぎ合ってヒヤリと背筋を伸ばす。

「ひ、ヒグっちゃん……ごめん、冗談だから落ち着いて……」

「謝る、謝るから……怒らないで」

「知らない」

マズイ、と二人揃って冷や汗をかき始めた直後、すみません、とやんわりした声が三人の間に入って来た。

円香が横へ振り向くと、かなり警戒した様子で告げた。

「あの……痴話喧嘩でしたら、一度三人でじっくり話し合いをした方が……」
「は？」

「刃物は、その……当店としても困ると言いますか……」
「……」

言われてみれば、そう見られてもおおかしくないかもしれない。……というか、そうにしか見えない。

「つ、す、すみません……でも、痴話喧嘩じゃないんで」

「はあ……しかし、刃物は……」

「これバリカンの代わりにするつもりだっただけです」

「バルカン？ 浅倉、ハサミでどうやってバルカンにするの？」

「バルタンじゃない？」

「……やっぱり刺したい」

「お、お客様……お気持ちはお察ししますが……」

まあ、（ここ）で補導されるわけにもいかない。高校にバレれば、何もかもおじやんだ。

「すみません。刺すのは家でやる事にします」

「は、はい。……いえ、ですからよく話し合って……」

「失礼します」

頭を下げたから、バカ二人の首根っこをガッツリ掴んで引きずって行った。

× × ×
アホ二人の頭にたんこぶを作りながら三人は帰宅。樋口家の前に着くなり、円香はま
ず菅谷に声を掛けた。

「菅谷」

「何？」

「まず最初に言っておくけど……お母さんに余計なことは何も言わないように」

「余計なこと？」

「私と学校でどんな感じか、とか、普段どんな話をするか、とか、そういうの全部」

「なんで？」

「なんでも」

念を押さないと、何を言われるか分からない。特に、無事に高校に合格したとして、今
後も友達としてやっていくのなら、尚更面倒はゴメンだ。

「まあ良いけど……」

「ふふ、樋口めっちゃ警戒してる」

「そこ、うるさい。警戒して当然でしょ」

「え、俺そんなに危険人物なの？」

「そうに決まってるでしょ」

普通にシヨククなことを言いながら、樋口は玄関を開けた。家の中に入ると、とりあえず緊張気味に挨拶だけする。

「ただいまー」

「お邪魔しまーす」

「おかえりなさい」

お客さんが来るのがわかっていたからか、母親はわざわざ出迎えてくれた。まあ、こ
うなることは覚悟していた為、あくまで円香は落ち着いていた様子で母親に声をかける。

「いらつしやい、透……と、どちら様？」

「菅谷。クラスメート」

「初めまして。ヒグっちゃんの友達の前で菅谷です」

「……はい、バカ……」

もう全てが終わった気がした。普通にヒグっちゃんという蔑称を使われ、円香は盛大にため息をつく。

案の定、母親は困惑した表情で円香に聞いた。

「ヒグっちゃん……？」

「何でもないから」

「あ、そつか。ヒグっちゃんのご家族もヒグっちゃんになっちゃうのか。じゃあ、マドっちゃん」

「はい、もうちよつと一旦集合」

直後、円香は半ば強引に菅谷の肩を掴んで玄関から出た。閉めた扉に壁ドンでもするかのように、菅谷に迫り、至近距離から詰め寄った。

「ねえ、余計なこと言うなって言っただしよ。どういうつもり？」

「いや……初対面の人にヒグっちゃんは無いかなくて……」

「あんた私のことは普通に初対面からヒグっちゃん呼びしてたでしよ」

「初対面ではヒグっさん……」

「お口チャック。どっちでも良いでしょそんな事」

菅谷の唇に人差し指を当てて、物理的に黙らせる。

「とにかく……良い？ 普段、私に対して言わない事は言わない。普段、言ってる事も言わない。お母さんに対しては、とにかく定型文のような事だけ発言を許可するから。良い？」

返事を聞くために、唇に当てた指を離す。すると、菅谷は目を逸らしながら呟くような返事をする。

「……っ、う、うん……？」

「……何顔赤くしてんの？」

「いや……ちよつと、顔近いかなって……」

「っ！」

遅れて自身の行動の大胆さを自覚した円香も、思わずのけぞって離れた。

「ひ、人の話聞いてんの!!？」

「は、半分くらい……」

「ちゃんと聞いてくれる!!？ 追い出されたいわけ!!？」

「いや……仮にも思春期の男に、そんな綺麗な顔、近付けちゃダメだって……」

「っつ、だ、だからそういうセリフをしゃあしやあと吐かないでくれる!!？ ミスター軽

薄男！」

なんなのか、この男は、と少しずつ声が大きくなってきた所で、玄関から透の声が聞

こえてくる。

「ねえ、いつまで二人でよろしくやってんの？」

「……」

二人揃って顔を見合わせ、とりあえず戻ることにした。

「で……俺はどうしたら良いの？」

「……もういつも通りで良い」

そう言い捨てて扉の中に入った。中に入ると、意外にも透が少し不愉快そうにしている。

「……どうしたの？」

「別に」

聞いてみたが、むすつとしたまま答えてくれなかった。本当に珍しいので、少し聞いてみたかったが、その前に菅谷が母親に声を掛けた。

「それで、えーつと……菅谷です。よろしくお願いします」

「ええ。娘の……彼氏？」

「まあ、そんなところで……ほぐっ!?」

「違う。私と浅倉の友達」

調子こいた返事をしたバカを黙らせてから、円香は母親に言った。

「とにかく、上がらせて。まだ手洗いうがいもしてない」

「ええ……まあ、良いわ。とりあえず、上がって。三人とも」

このことで、とりあえず家に入った。まずはリビングまできて、荷物を下ろす事にした。

「ごめんね、菅谷くん。急に來るって話になったから、あんまり片付いてないけど」

「わ、ホントだ。ソファアの上にブラジャー落ちてる」

「……正直な子ね」

「菅谷、殺すよ」

本当にデリカシーのない言葉に、円香は普通に殺意を芽生えさせた。とうか、あんな所に下着を置きっぱなしにしただろうか？

とりあえず片付けないと……と、思つて手に取ると、思わず半眼になった。

「樋口、それ誰の？　樋口の？　おばさんの？」

「浅倉の」

「……へっ？」

興味本位で聞いたつもりが、耳だけでなく顔が真っ赤に染まる透。それは透だけでなく、菅谷もだった。

「っ、な、なんで……私のが……？」

「泊まりに来た時、忘れてったでしょ」

「っ！」

慌てて円香からブラを奪う。よりにもよつて、薄紫のちよつと派手目な母親のお下がりの奴。恐る恐る菅谷の方を見ると、頬を赤らめたまま目を泳がせていた。

「っ、ちよつと集合……！」

今度は透が菅谷の肩を掴んで廊下に引き摺り出して行つた。

その背中を眺めながら、円香の母親はぼつりと呟いた。

「……透って、下着見られるくらい気にしない子じゃなかった……？」

「……そうだった、かもね」

× 円香は眺めつつ、とりあえず放っておく事にした。

×

廊下で、透は菅谷を壁際に追いやり、壁に手をつく。

「ま、またも……！」

「……見た？」

「ご、ごめん……まさか、浅倉のだと思わなくて……」

「それ……樋口のだったら照れてないって事？」

「いや、ヒグっちゃんというか……母親のものだと……母ちゃんも似たような色の持つ

てたから」

「……」

母親のなら照れないんだ、と思いつつ、透は小さくため息をつく。まあ、元々自分が蒔いた種でもあるので、彼を責めるのはちよつと違うかもしれない。

……まあ、そもそも普通は他人の家にある下着について言及はしないが。

そんな中、ふと菅谷の表情が気になった。頬を赤らめて目を逸らしている。どうした

のだろうか？

「……何、どうしたの？」

「いや……さっきのヒグつちゃんと同じだけど……その、綺麗な顔、近づけられると……ちよつと、恥ずかしいから……」

「……」

素直に嬉しかった。結構、男子から可愛いだのなんだの言われたことはあるが、やはり仲良い奴に言われると、それは別格だ。

……円香にも言った、というのを聞くと少し複雑だが。何にしても、良い機会だ。このままもう一つの要件を済ませることにした。

「……あだ名は？」

「え？」

「そろそろ良いでしょ。あだ名」

「……あ、ああ。忘れてた」

今まで流れがなかったというのものもあるが、玄関のやり取りは流石にいらつとした。円香ばかり三つもあだ名をもらうのは普通にずるい。

「変なのはやめてね」

「アサオとかダメ？」

「……」

「考え直します……」

無言の圧力は、円香より透の方が強かった。略せばそうなるのが腹立たしい。

しばらく無言になった後、菅谷は再び口を開いた。

「……アサちゃん？」

「なんで、ちん？」

「いや、ちゃんだと被ってるかなって」

「でも女の子にちん？」

「……じゃあもう普通に透で良くない？」

「……」

「とおるん、とおるんで行こう」

……まあ、そもそもヒグっちゃんって名前も別に可愛いわけでもセンスがあるわけでもない。この際、贅沢は言うまいと思うことにした。

「じゃ、それで」

「うん。とおるん」

××そのまま菅谷を連れて、リビングに戻った。

「へえ、じゃあ菅谷くん、実は4月からずっと円香と透と仲良くしてくれてたんだ」
たこ焼きを焼いている席でそう言うのは円香の母親。それに菅谷は頷いて返事をしていた。

「はい。マドっちゃんもおるんもずっと仲良くしてくれてて……特にマドっちゃんはよくビンタして来て大変でした」

「自業自得でしょ」

「あんた、だからって手をあげちゃダメでしょ」

「……」

それはその通りだ。これだから母親と同じ席というのは少し面倒なのだ。とは言え、友達と飯を食うから出て行っても言えない。

「俺はそんなに気にしてないので大丈夫ですよ。俺なんか結構してくれる人、なかなかいないので。なんだかんだ、一緒に受験勉強してる時とか助けてくれますし」

「あんたは邪魔しかしてないでしょ。最初の頃なんて、特に浅倉とバカな雑談ばかりしてたし」

「あ………そういえば、そんなことあったね。樋口、毎回私達と一緒にやってる科目、避けるの」

「へえ、どうして？」

「この二人、バカな覚え方ばかりするから。連立方程式の話からマリオの話に飛ぶなんて普通はあり得ないでしょ」

少し懐かしむように円香は呟く。意外と記憶に残っているものだった。

その円香に、母親が少し笑みを浮かべたまま聞いた。

「でも、この前の期末試験までちゃんと教えてあげたんでしょ？ 菅谷くんにも。家でも、自分の勉強よりどう教えるかに時間割いてたし」

「つ、な、なんで知って……！ というか、言わないでよ」

「へえ、そうなんだ。なんか悪いね、わざわざ」

「全くだから。こつちも試験以外に受験の勉強あんのに……」

「樋口自身も、メチャクチャ厳しく教えてた割に楽しそうだったもんね」

あれは正直、いじめるのが楽しかったというのもあったが、母親の前でそれを公言するほどバカではない。この際、飲み込んだ。

「そもそも、あんたら二人がもう少しまともなら良かったんでしょ。日常的にも……」

普通、文化祭に行った高校のミスコンなんて出ないから」

「いや、アレは席が空いてなかったから舞台袖に借りに行ったら、待機してた演劇部の部員と勘違いされた結果だから」

「だよ。私達の所為じゃないし」

「だとしても、普通は断るでしょ。てか、この高校の出身じゃないって言ってよ」
「あ、その話は聞いた。お陰で志望校変えたんだもんね？」

あの日、帰った円香は速攻で母親に相談した。自分の名前も思いっきり、大勢の生徒の前でバラされてしまった為、完全に行く気が失せてしまった。

そんな中、ふと円香が思い出したように透に聞いた。

「そう言えばあの日、あんたら手を繋いで出掛けてたでしょ？　なんで繋いでたの？」
「え……見てたの？」

「たまたま視界に入っただけ」

「あれは迷子にならないためだから。浅倉、ぼーっとしてるとこあるから……」
「は？」

「じゃなくて、とおるん」

「さつきから思ってたんだけど、その呼び方なんなの？」

「さつき出来たばかりのあだ名」

「ふーん……ダサ」

正直、変。特に透の雰囲気からはカケラも合わないが、まあ円香には関係ないので特に何も話さなかったが。

「少し前……というか、今日か。試験で無事に受験して良いって決まったら、あだ名を決

めるって約束したの」

「……ていうか、とおるんさ、あれダメだったらデートとか言われたんだけど、あれなんだったの?」

「は? デート?」

「ああ。あれは普通に離れ離れになっただとしても、思い出だけは作りたかったから言っただけ」

「死ぬ前に美味しいもの食べる的なあれ?」

「そうそれ」

「縁起でもない例えやめて」

そう言いながら、円香はたこ焼きをひっくり返す。そろそろ焼けそうさだ。

そんな中、母親が菅谷を見た後、透と円香を見比べるように視線を移しながら微笑んだ。

「ふふ……なんだか初めてだよ。二人とこんな仲良くしてくれる男の子。今まではみんな、円香が追い返しちゃうから」

「……別に、追い返してなんかないから。ただ、どいつもこいつも浅倉の顔に惹かれて来る奴ばかりだったから、弾いた方が良くと思っただけ」

「マドつちゃ……小さい『つ』邪魔だな……マドちゃん、男嫌いななの?」

「別に嫌いじゃないし。……友達を選びたいだけ」

だから、顔だけで寄ってくる男は嫌いだった。その円香に、透が意外そうな顔で答えた。

「でも、たまに樋口目当ての男の子もいたよ」

「ていうか、菅谷くんも同じクチ？」

「え、そうでもないですよ。隣の席にいたから、友達になろうと思って声かけただけで……そしたら、なんかやたらと話しやすくて」

「今だから言うけど、普通は浅倉と話しやすいつて思う人いないからね」

「それがよく分かんないんだよね。それなのに俺と似てるとか言うし、終いには姉弟とか呼ばれるようになってるし」

「あんだ、今まで仲良い友達できた事ある？」

「ない」

「要はそういう事だから」

実際、円香も透と知り合いじゃなかったら、菅谷と話をすることなんてなかったかもしれない。慣れというのは本当に大事だ。

「でも、市川いるじゃん。川ボラで知り合った後輩の子。あの子は廊下ですれ違った時、挨拶してくれるよ」

「あれは例外。あれも中々、普通の子じゃないから」

「え、知り合いだっけ？」

「市川って……市川雛菜ちゃん？ あの子も二人の幼馴染だよ」

「そうなんだ」

少し驚いたように菅谷は目を丸くした。

「あの子も綺麗だよ。二人の友達なら仲良くなりたいたいかも」

思わずそんな風に呟いた時だ。何気ない菅谷の呟きに、二人の視線が唐突に集中した。それにより、菅谷は一気に萎縮する。

「……は？ いい加減にしたら？ ミスターナンパ症」

「まだ他の美人とお近づきになりたいんだ……」

「え……なんで？ 友達は何に多くても良いでしょ。二人の友達なんだし」

それはその通りなのだが、と円香は小さく頷く……いや、雛菜と仲良くなれるのやっぱり普通に困る。

……というか、まあ雛菜はアレだけど、別に菅谷が何処で誰と仲良くしようが知った事ではない。ただ、自分と透以外と仲良くされるのは少し釈然としなかった。

「……………ふふっ」

そんな中、円香の母親が笑みを漏らす。円香も透も菅谷も、怪訝そうな表情で母親の

方に振り返り、キョトンと小首を傾げる。

「あなた達、今年はとつても楽しい思い出が多かったんだ」

「つ……ま、まあ……」

円香がみあげを控えめにいじりながら頷いて答える。確かに、退屈ということは
まったくなかった。

勉強も、学祭も、川ボラも、体育祭も、修学旅行も、全部楽しかった。イラつとすること
もあつたけど、それでも最後には憎めない思い出となつて心の中に留まっている。
透と菅谷も同じだ。

それが分かつているように、母親は続けて説明した。

「じゃあ、年末の夜は初詣に行つて来たら？ 三人で」

「え……初詣？」

「そう。受験生だし、願掛けつて事で」

それを聞いて、三人とも顔を見合わせる。

「俺、行きたいかも」

「私も行ける」

「じゃ、私も」

「ちゃんと気をつけて行つてくるようにね。……はい、焼けた」

たこ焼きをとってもらいながら、三人はしばらく談笑した。

× × 食事が終わり、円香は母親と洗い物。その間、菅谷と透はのんびり食卓で落ち着いていた。これから、わざわざ食後のコーヒーまで用意してくれるようだ。

「ふう……美味かったあ。あのタネほんとに浅倉が作ったの？」

「は？」

「……じゃなくて、とおるん」

「うん。まあ、一応ね。ほとんどおばさんに教わりながらだけど」

なるほど、と思いつながら菅谷はぼんやりとリビングを改めて見る。他人の家に遊びに来るのなんて初めてだから、少しソワソワしていた。

その菅谷に、透が声を掛ける。

「ね、菅谷」

「? 何？」

「やるよ。プリン強奪」

「……は？」

「言ったじゃん。冷蔵庫から盗ってみようかって」

「……まさか、そのためにマドちゃんの家？」

「そう」

……とはいえ、流石に菅谷は今日、散々お世話になっておいてそれを実行する気にならなかつた。

「ごめん、俺は遠慮する」

「そ。じゃ、行つてくる。無事に帰つて来るように、祈つててね。任務が成功したら、一緒にプリン食べよう」

「ああ、待つてる」

死亡フラグをこれでもかと言うほど、乱立して旅立った。数秒後、透はたんこぶを作つて戻つて来た。

呼び方一つとはいえ、変わる事は少なくない。

12月31日、つまり、年末。円香と透は、神社の小さな駐車場近くで待機していた。これまで色々勉強し続け、今日は円香の母親に言われた通り、願掛けしにきたわけだ。現在、23時30分。円香は腕時計を眺めながら、マフラーに下唇が隠れた口から、白い息を漏らす。

「……遅い」

菅谷が来ない。チェインも何度か送ったが、応答が無かった。既読すらつかない様子に、少し円香は不安に……はならなかった。前に透と学祭に行く時の待ち合わせで普通に遅刻していたし、今回もそれかもしれない。

とはいえ、寒い中、それを待たされる身としては普通に苛立ちをするのだが。

「ホント、あいつは毎度毎度……」

「ねえ、樋口」

「何？」

「すつごく今更だけどき、菅谷の下の名前ってなんだっけ？」

「？ 何急に？」

「いや、何となく」

「そう言われればそうだが……自分も透もずーっと菅谷と呼んでいるし、気になる所ではある。」

「考えてみれば、菅谷は自分の名前を言う時も苗字しか言わない。……たまに、普通に下の名前を言った方が良い時でも苗字だけしか発さない。」

「前に試験用紙を見た時は、明るいつて漢字が入ってたけど」

「じゃあ……アキラ？」

「いや、二文字だった。……なんだっけ？」

「正直、あんまり気にしていなかったのはあるが、話に出されると気になってしまう。隠しているのか言わなくなったのかは分からないが、聞いてみても良いかもしれない。」

「うーん……明人とか？」

「明を男の子の名前で使うの、割とハードル高いよね」

「あ、明斗とか？」

「それ漢字しか変わってない」

「じゃあ、暁人」

「明も使っていないでしょ」

「そんな話をしながらしばらく待機していると、自分達の前に、車が止まった。ミニ

クーパーと呼ばれる、円香でも知っているほど有名な車だ。

そこからウィーンと顔を出されるのは、如何にもお金を持っていそうで、厳格そうな男の人だった。

「えーつと、君達がマドちゃんさんと、とおるんさん？」

聞き覚えのある呼び方に、大体何者か分かったので、頷いて答えておく。

「おい、起きろ。着いたぞ」

男の人は後部座席に声をかける。が、後部座席から声は無い。

「おい、いい加減起きろ。お前が行くって言ったんだろ」

「んあ……」

「明里！ 友達、待ってるぞー！」

「……んー……」

明里？ 誰？ なんて思っていると、ようやく後ろの席の扉が開く。そこから降りて来たのは、寝ぼけた様子の菅谷だった。

「ふわあ……おはよう、父ちゃん……」

「こんばんは、だ、むしろ。良いから、初詣だろ？ ……つたく、柄にもなく31日になつても勉強なんてすつから……」

「え……もしかして、菅谷のお父さん？」

分かっていなかった透が隣から聞くと、その人は頷いて答えた。

「ええ。失礼、息子がずっと眠ってしまっていて。昨日から楽しみにしていたようで、夜はずっと眠れず勉強してしまいましたね」

「……そ、そうですか……」

本当に単純な男である。それが悪いとかではないが……いや、悪いか。そんなに楽しみにされても、支障が出ていたら意味がない。

すると、菅谷が車から降りてくる。大きなあくびを片手で押さえながら、ぼんやりした視線を宙に向けていた。

「……あれ、マドちゃんにとおるん……？　なんでここにいるの？」

「初詣でしょ」

「おはよう、菅谷」

「あ、そつか……父ちゃん、サンキュー」

「気をつけて帰ってこいよ」

元々、歩いて行かせる予定だったからか、父親はそのまま帰ってしまった。

ようやく意識が戻ってきた菅谷が、ぼんやりした表情で二人を見回し、片手をあげる。

「おはよう。二人とも」

「遅刻なんですけど」

「ごめんごめん」

まあ、理由があまりに子供っぽいだけに責める気にはならなかったが。

「コンポタ自販機で奢るから許して」

「私、お汁粉で」

「私はコンポタで良いよ」

「はいはい」

そんな話をしながら、神社に上がる前に自販機へ向かう。

そんな中、円香は少し神秘的な表情で顎に手を当てていた。彼の父親が出てきた事と、遠足前の小学生みたいな理由の遅刻で、ついタイミングを逃してしまったが……彼の名前、明里と呼ばれていなかっただろうか？

いや、しかしまさかそんな女の子みたいな名前になることは……しかし、それは人それぞれな気もするし……しかし、名前を隠したがる理由もわかる気がする名前……しかし『明るい』という漢字が使われているように、それなりに明るい子にはな……しかし……。

などと円香が考え込んでいる間に、その隣で透が言った。

「菅谷って下の名前、明里って言うんだ？」

「うん。知らなかったの？」

「だって聞いてなかったし」

「そうだっけ？」

普通に聞いてくれやがった。しかも、本人もさほど気にした様子は見せていない。

「明里かあ……女の子みたいだな名前だね」

「透に言われたくない」

「いや、男女共用でしょ。透は」

「それもそうか」

まあ、本人が気にしていないのなら良いだろう。円香は黙って、自販機で購入した飲み物を受け取る。

「ありがとう」

「いや、お詫びだし」

「あそつか。じゃあ今のお礼無しで」

「とおるんも、はい」

「ありがとう」

なんにしても、女っぽい名前前で隠したかったとか、そういう重い理由じゃなくて良かった、と安堵していた円香がおしるこに口を付ける中、隣の透が思いついたように言った。

「そうだ。せっかくだし、菅谷のあだ名も考えようよ」

「は？」

また面倒なことを……と、円香がため息をつく。というか、何でいちいちあだ名をつけないと気が済まないのか。

「樋口と一緒に考えるから」

「は？」

「ね？」

「いや、ね？ じゃなくて。私は別にいいから」

「えー、樋口だって菅谷にあだ名付けてもらってたじゃん」

「別に頼んでないし」

というか正直、マドちゃんと呼ぶのもやめて欲しいところある。マゾなのかサドなのか分からないし。

だが、その菅谷は少し寂しそうに円香を見ている。

「俺欲しいかも。あだ名」

「は？」

「二人のあだ名は俺が考えたし……二人から考えた奴を一つ」

「いや、一つ、じゃなくて……」

「ほら、樋口。考えて。明里から」

……まったく、こういうよく分からないノリを引き出して……良い迷惑だ。

とりあえず、以前のヒグマの仕返しと思つて言つてみた。

「アリで良いでしょ。よく観察してるし」

「ぶつ……ぶつ」

「良いよ。俺はそれで」

しかし、予想外にも帰つてきたのは笑いと許可。提案した自分が言うのもなんだが、人でなしか、と思つた。

「じゃ、俺はこれからアリで」

「よろしく。アリ」

「待つて待つて、やめて。なんかハードなイジメみたい」

「えー、可愛いじゃん。アリ」

「そうだよ。アリ」

「やめなさい」

透の額をペチンと叩く。ホント、未だこの2人からは読み取れない言動が多過ぎる。

というか、なまじ気に入られているだけあつて、このままでは本当にアリで決まつてしまふそう。真剣に考えなくて。……なんでこんなことで、真剣に考えないといけ

ないのか、というのはあるが。

「あ、じゃあこれは？」

「はい、とおるん」

「アカちゃん」

「ごめん、それは嫌」

「浅倉、あんた天性のいじめっ子か何かなわけ？」

「良いわけがない……と、思いつつも、アリは良くて赤ちゃんはダメな理由は少し分かんなかったが。」

「じゃあ、もうアカリちゃんです」

「それ普通に女の子じゃん。ちゃん付ける意味ある？」

「確かに」

「というか、透こそ真面目に考えていない気がする。……ほんと、何故付き合わされてる自分が真面目に考えないといけないのか。」

「ていうか、マドちゃんは何かはないの？」

「所望しないで。……考えてるから」

「とはいえ、アリもアカも使ってしまったし、カリというあだ名もちよつとよく分らない。金でも借りにいくのか、それともモンスターでも狩りに行くのか……なんて思っ

た時だ。

「……あ」

「何？」

「じゃあ……理科得意だし、リカってというのは？」

「……」

「……」

明里を一部ひっくり返したのと、理科が得意なのをかけてリカ。

二人の無言の視線が集中する。思わず照れが爆上がりし、円香の頬が赤く染まる。

「っ、な、何……？」

「それアリ」

「樋口、センスあるじゃん」

「え、良いの？」

決まりのようだ。……なんか自分だけ真剣に考えていたみたいで、これはこれで恥ずかしい気がする。

「女の子っぽいのは変わってないと思うけど」

「そんなの別に気にしてないし。それに、マドちゃんが考えてくれた奴だし」

「え、私も考えたんだけど」

「いや、浅倉のはダメだから。私が無理」

「とにかく、決まり。俺がそれって言ってるし」

そう言いつつ、菅谷は円香に微笑む。その真つ直ぐな笑みに、円香は思わず怯みかけ
てしまう。こんな事で、そんなに喜ぶのはやめて欲しい。

その円香に、まるで追い討ちをかけるように透が言った。

「じゃあ樋口、早速呼んであげてよ」

「つ、え、な、なんで私なわけ？　そもそもそんな改まって呼ぶ事ないでしょ」

「いやだつて思いついたの樋口じゃん」

「あんたらが勝手に私を巻き込んだんでしょ」

「え、じゃあマドちゃんは俺のこと、そのあだ名で呼んでくんないの？」

「……呼ばない」

別に一度も呼ぶとは言っていない。そういう頭の悪いカップルみたいなノリは二人
でやっていれば良いだけのことだ。

「じゃあ良いよ。私と菅谷だけで呼ぶから」

「ねー、とおるん」

「ねー、リカ」

「……」

「イツツラアツ……と、円香の額に青筋が浮かぶ。こいつら打ち合わせでもしてんのか、と思うほどに息を合わせてこちらのイライラポイントをくすぐり回して来る。

「いや、別に羨ましいとかではなく、疎外感とイチャイチャ感が腹立つ。」

「……分かったから、リカ。これで良い？」

「良いよ。マドちゃん」

「満足したら、さっさと鳥居を潜るよ。そんなに神社の真下で年を越したいわけ？」

「はい」

呑気に二人揃ってそう言うのと、三人で階段を上がった。

××
×+

時計を見ると、今年も残り5分となっていた。それに伴い、バカなことを考えるのが得意な二人のうちの男の方は、平気な顔で提案した。

「今年もあと少しだし、どうやって年を迎えるか考えようか」

もうこの手のノリに慣れた円香は、とりあえずありきたりな提案を試してみた。

「定番なのはあれでしょ。年越しと同時にジャンプして、地球上にいなかったって奴」

「え、何それ。樋口バカだけど頭良い」

「そう言ったのは透。円香も聞いた話を伝えたただけだったが、透的には褒め言葉であるセリフに何かを言い返すことはなかった。」

しかし、その横で菅谷が意外そうな顔で余計なことを言う。

「え、いや宇宙の範囲って定義的には高度100kmから上空だから、それ以内は普通に地球上だよ」

「は？ 私、聞いた事あるヤツ言っただけだから。知ってたからそれくらい」

すぐに反旗を翻した。菅谷に知識で負けるのだけは我慢ならない。実際、知らなかったわけだが。

その横で、実に素直で羨ましい性格の透が少し驚いたように聞いた。

「へえ、そうなんだ」

「そうだよ。だから成層圏と中間圏と熱圏はまだ地球。その上の外気圏から初めて宇宙になんの」

「清掃権と中間圏と熱拳？ 変なのばっかだね。最後の、必殺技っぽい」

「まあ、大気圏に人がいれば死ぬから、最後のと言わず三つとも必殺されちゃうけど」
「怖っ。樋口、知ってた？」

「別に知らなくても死にはしないでしょ。私達が行く高校、地学ないし」

「それもそっか」

上手いこと論点をずらし、透の興味を逸らす。絶対に負けた感じは出さなかった。

「それより、他に案は無いわけ？」

「じゃあ年末年始、息を止めて過ごすのは？」

「ふむ……面白いかも」

「いや、地味でしょ。周りからしたら何も分らないし」

「じゃあ、三人で三人の口を塞ぎあえば良いのでは？」

「なんで年末年始にデスゲームをしなきゃいけないの」

「面白いかもね。それにしよう」

スイスイとやることは決まる。まあ、円香も別にそれくらい良いか、と思い、三人で円になって向かい合った。

時計を見ると、残り2分で年越し。思ったより時間が余ってしまった。

「……時間までしりとりしようか」

「じゃ、俺からね。樋口円香」

「なんで私の名前……まあ良いや。カラス」

「菅谷明里」

「り、り……あ、リトアニア」

「あ？ 顎」

「樋口……なんで私の名前出してくれないの……」

「冷たいなあ、これだからまったくマドちゃんは……」

「なんて答えたって私の勝手でしょ」

「……ゴジラ」

「らく……ライア」

「足」

「……屍」

「になつたマドちゃん」

「それしりとりじゃないでしょ」

「樋口がスルーするからでしょ」

「でしょでしょ」

「どんな語尾……!?」

年末だというのに、すぐくくだらない事で言い争いが始まった時だ。神社にいる周りの参拝客が「5!」とカウントダウンを始める。

それにより、三人とも元々やろうとしていたイベントを思い出し、慌てて円香は菅谷に、菅谷は透に、透は円香に手を伸ばした。

しかし、揃いも揃って勢いが強過ぎて、鼻の頭にビンタをするような形になり、後ろにひっくり返る。

その直後、ごおくん……ごおくん……ごおくん……ごおくん……という、風情ある余韻と

参拝客の「0！」のコールが神社中に上がる中、三人とも顔を抑えたままダウンしていた。

「……」

「……」

「……」

「あけおめ」

「ことよろ」

「あけよろ」

「何あけよろって」

「フュージョン」

×年が明けた。

×

さて、1月1日になり、三人は改めてお参りしに行く。列に並びながら、年始めからやりたいことをしくじったものの、それがなんだかおかしくて三人とも笑っていた。

「はあ……マドちゃんの一撃、普通に痛かった」

「私も浅倉からキツイのもらったからお互い様」

「正直、リカのはあんま痛くなかったけどノリで倒れた」

「一人勝ちされてますよ、円香さん」

「許されないわ。浅倉、歯あ食いしばって」

「いや、樋口が叩くの？　そこはリカじゃないの？」

「女の子に手をあげる男は最低だから」

「いやリカ、あんたもう、一回振るってるから」

なんて話している中、もうそろそろお参りの順番が回ってきた。

それにより、ビンタされる前に透が話を逸らした。

「何お願いする？」

「それ先に言おうと叶わないってよ」

「じゃあ俺、高校落ちますようにって」

「お、リカ賢い」

「でしよ？」

「それで本当に落ちたらビンタするから」

「嘘嘘。合格したいから口にしないで願う」

「それも言うてるようなもんじゃない？」

「セーフ。神様だし少しくらい融通聞くでしょ」

「融通って言っちゃってるし」

そこをツツコミつつも、円香も大丈夫だろうと思っていた。何故なら、自分も似たような願いをするつもりだから。自分も口にしなければ大丈夫のはずだ。

その隣の透も、大丈夫でしょ、と確信していた。透も似たような事を考えている。円香も同じことを考えるだろうし、口にしていないから平気のはずだ。

さらにその隣の菅谷も、大丈夫だと強く感じていた。神様も少しくらい融通を利かせてくれる、と本気で思っていたから。

「お、次だ。いくら入れる?」

「5円。神様にご縁があるように、って」

「じゃあ俺、10000円入れよ。縁より金で」

「じゃあ足りなくない?」

「20000円」

「だけ?」

「えーい、持っつけ泥棒! 50000円だ!」

「やめなさい。神様に泥棒とか言うの」

「樋口、そっち?」

結局、みんなで5円ずつ入れ、そして手を合わせ、目を閉じた。

頭の中で唱えた三人の願いは、もはや必然と言うべきであろう程に一致していた。

『三人で、合格出来ますように』
と。

三人揃ってお参りを終わると、列から外れる。視界に入ったのは売店。お参りに来た中学生グループがやることと言えば一つだけだ。

提案したのは、透だった。

「よし、おみくじ引こう」

「良いよ」

「負けた人、罰ゲームにしよう」

提案したのは円香だった。一番、神様を信じていない円香の発言だった。

それに、菅谷が尋ねる。

「どんな」

「合格祈願のお守り奢り」

「え、あれ意外と高くない?」

「俺は良いけど……てか、他人が買ってご利益あるのああいいうの?」

「知らない」

「じゃあどうする?」

「後ろから雛菜の肩を叩いて頼むにつで」

「良いね」

透の提案に決定した。おそらく、タダでは済まないだろうに。

さて、三人でお金を払い、おみくじを引く。中身を見る事なく、三人は購入を済ませると、少し離れた場所に移動し、向かい合って一斉に顔を見合わせた。

「「セーのっ」」

透↓大吉

菅谷↓大吉

円香↓吉

「はい、勝ちイッ！」

「……いや、こういうの勝ち負けないから」

「いやいや、マドちゃんから言い出した事でしょ」

「浅倉、あんたがマドちゃんって呼ぶな」

まあ、負けたものは仕方ない。小さくため息をついた円香は、とりあえずおみくじをポケットにしまった。

それに釣られて、他二人もおみくじをポケットにしまった。

「ちゃんと私達の前でやらないとダメだからね」

「始業式の日、俺とおるんが隠れて見とくから」

「はいはい……」

円香は適当な返事をしながら、今からそのことを憂鬱に思いつつ、とりあえず今のうちに言い訳を考えておいた。

その横で、透が菅谷に声を掛ける。

「てか、リカ。見ときなよ、中身」

「え、おみくじの中身ってポエムしか書いてないじゃん」

「学業のことかあるでしょ」

円香も口を挟む。この中で一番、不合格になる可能性が高いのは菅谷だ。

菅谷が開いたおみくじの様々な項目が書かれている箇所を、円香が指差す。

「どこ見れば良いの?」

「はい」

「あ……ほんとだ。こんな見やすいところあったんだ」

言われて菅谷はその場所を見る。学業の他にも失せ物やら健康やらたくさん興味があるものがあつた。

「スゲー、万能だなおみくじ……うわ、恋愛まであんじゃん」

その一言に透と円香はピクツと反応する。

「読み上げて」

「え？」

「学業と恋愛」

「……………う、うん？」

二人に促され、目を通してみた。実際、菅谷も恋愛の所は少し興味があった。

「えーつと……………学業。あ、やれば出来るみたいいな事書いてある。松〇修造かな？　で、恋

愛は……………」

「は？」

「……………『選ぶ必要はない』だって」

「……………」

その直後、二人の視線が菅谷に集中する。心なしか、ゴミを見る目だ。

「……………え、何？」

「別に」

×二人揃って目を逸らした。

×**◯** 菅香は、困っていた。家に帰ってから、自身のあの時の感情のブレに疑問があったか

ら。

気になったのは、おみくじを見ていた時の話。何故、彼の恋愛の欄の結果が気になっ

たのか分からない。

というか、ここ最近、菅谷関係について悩むことも多かつた。何故かは自分でも分からない。別に、菅谷が好きではない。顔を見て胸が高鳴ることは無いし、まあ一緒にいて楽しいし面白い奴とも思うが、それだけだ。

何より、別に透と菅谷が仲良くしていても、全然嫌じゃない。いや、イラつとすることとはあつたが、それは決して嫉妬のような感情では無いと断定出来た。

……でも、雛菜と菅谷が仲良くしていたら、それは少し嫌だと感じるだろう。透は良くて雛菜はダメ、なんていう感情がまたよく分からなかつた。

「……………なんなの……………」

新年からなんでこんな事で悩まないといけないのか。この感情は何なのか。それと、透は自分や菅谷の事をどう思っているのか。

何もわからないまま、とりあえず眠いので目を閉じた。願わくば、この悩みが高校に上がるまでにはおさまってくれている事を祈りながら。

2月はどんな女の子にも色が付く。

2月。受験が終わった。

「終わったー！」

仲良く両手の拳を空に突き上げるのは、透と菅谷。今まで自分達を縛り続けていた勉強という名の枷が外れ、まるで教科書を馬鹿みたいに詰め込んだランドセルをおろし、そのまま天使の羽を生やした小学生のように二人は軽くなった。

「お疲れ様」

そう返すと円香は軽く伸びをする。円香自身も、割と疲れているようで肩をトントンと叩いていた。

「この後、どうしよつか？」

「打ち上げしちゃう？」

「あーごめん。俺、父ちゃんと部屋見に行くから」

「あ、そっか。一人暮らしだもんね」

「ん。お疲れ。またね」

挨拶だけして、すぐに菅谷は帰宅。残った透と円香も、とりあえず二人で帰宅し始め

た。

「どうする?」

「久しぶりに小糸ちゃん達に会いに行こうよ」

「……ん」

頷いて答えて、とりあえず荷物を置くため、家に戻る事にした。円香が一応、小糸と雛菜に連絡を入れる中、隣の透が続けて声掛けた。

「ね、樋口」

「何?」

「樋口にちよつと相談あるんだけどさ」

「お店入る?」

「いや、そんな重要な話じゃないから、このまま帰ろう」

歩きながらそう言うと、透は真顔のまま相談を続けた。

「今月、バレンタインあったじゃん?」

「あつたね」

残念ながら、受験でそれどころじゃなかった為、せつかく仲良くなつた異性がいるのに渡せなかった。

「今から渡さない? リカに」

「え、わ、私も？」

「そう。多分、リカももらった事ないでしょ？」

「それはそうだと私も思うけど……」

事実とは言え、ナチュラルに酷いことを言った自覚もなく、二人は話を進める。

「私も樋口と雛菜と小糸ちゃん以外に買った事ないし、やってみようよ」

「あ、手作りじゃないんだ」

「確かに。手作りのが良いかも」

藪蛇だった事に後悔しつつ、円香はすぐに言い返す。

「別に、もう終わった行事だし、来年でも良いでしょ」

「えー、でももしリカだけ落ちてたら嫌じゃん」

「私達は合格してる前提なんだ……別に良いけど」

とはいえ……まあ今年は小糸と雛菜にもチョコを渡していない。少し遅れてはいるが、二人に作るついでに菅谷に渡すのもアリかもしれない。

「じゃ、食材買いに行くよ。割り勘で」

「私あれ作りたい。ウイスキーボンボン」

「ウイスキー買えないでしょまず」

「えー、じゃあブランドー」

「同じだから」

その辺を渡すには買って済ませるしかない。

……とはいえ、菅谷の好みは分からないという事実が少し困る。チーズバーガーが食べられないくらいチーズが嫌いなのに、モッツアレラチーズのピザは大好きだし、ジャガイモ大好きなのにポテサラは嫌いな少年だ。

どうせ渡すなら喜んでもらいたいが、そのハードルはあまりにも高い以上、市販品が安全牌な気もする。

「……買って済ませる？」

「え、やだ。作る」

しかし、透の意思は固かった。首を横に振るい、スーパーに向かって歩きながらスマホを取り出す。

「何してんの？」

「簡単に美味しいチョコ探してる」

「そんな都合が良いのあるわけないでしょ。……いや、有るかもだけど、溶かして固めるとかそんなのくらいだと思っけど」

手間をかけたのかかかたくなのかわからない透にツツコミを入れると、円香のスマホが震える。小糸からレスが来ていた。

福丸小糸『私は空いてるよ!』

ちようど良いかもしれない。せつかくなので、みんなでお菓子作りとかしたら喜んでくれるのではないだろうか?

「浅倉、お菓子作りだけど、小糸と雛菜も呼んで四人でやらない?」

「あ、良いかも。……え、でも二人にも渡すチョコを四人で作るの?」

「材料費は私達持ちだし、良いでしょ」

「うーん……ま、良いか」

そうと決まれば、すぐに返信。小糸なら乗ってくれるだろう。

樋口円香『受験終わったから、うちでお菓子作りとかしない?』

福丸小糸『したい!』

ひなな『雛菜も♡』

うるさいのが参加して来た。まあ、女子力の高さだけで言えばトップクラスの雛菜がいれば助かることもありそうなので、何も言わないが。

ひなな『でも、円香先輩がお菓子作りとか超似合わない』

前言撤回。こいつやっぱムカつく。

樋口円香『言い出しっぱは浅倉だから』

ひなな『あは♡じゃあ似合う♡』

樋口円香『は？ どの辺が？』

いや申し訳ないが透に女子力で負ける覚えはない。身嗜みはともかく、普段の家事などでは特に。

福丸小糸『それより、何作るの？』

いつもの調子でレスバトルが始まる前に、小糸が口を挟む。すると、ちようど良いタイミングで透が「あつ」と声を漏らした。

「これ食べたい。チョコクッキー」

「浅倉が食べたいもの選んでどうするの。……別に良いけど」

「じゃ、決まりね。材料、何使うの？」

「それは調べて」

×「言いながら、後輩二人に何を作るかを伝えておいた。

×「買い物を終えて家に到着すると、家には既に小糸と雛菜がいた。

「ただいまー」

「あんたの家じゃないでしょ。ただいま」

「あは〜♡ おかえりなさい」

「ふ、二人とも、お疲れ様……！」

そう言えば試験が終わった後であったことを思い出す。まあ問題を解くだけだったので、普段の授業より全然、楽だった。

「ありがとう」

「小糸ちゃん、疲れたよー」

「わっ、と、透ちゃん……!」

労ってくれた小糸を控えめに抱きしめる透。それを見るなり、雛菜も笑みを浮かべて小糸を挟むようにハグをした。

「あは~~~~♡ 雛菜も~~~~」

「むぎゅっ……!」

「ふふ、サンドイツチ」

「んっつ! んっつ!」

背が低い小糸の顔と後頭部を、二人の円香より大きい胸が包み込む。別に良いけど不愉快である。別に良いけど。

「そこまで。良いからさっさと作るよ」

ダブルバーガーから小糸を助けると、さっさと家の上がろうとする。

小糸が「助かった……」という表情を見せた直後、その円香に雛菜が余計なことを言う。

「円香先輩も混ぜてほしいの〜? 超かまちよ〜」

「……は? 一言も言っていないでしょ」

「じゃあ円香先輩、一人で先に作ってて〜。雑菜と透先輩は小糸ちゃんを愛でてるから〜」

「働かざる者食うべからずだから。三人で遊んでも良いけど一つもあげないから」

「それ自分の皿の上のものはガンとして分けてあげない食いしん坊みたい〜」

「……そんな話してないでしょ。少しは会話の本質を捉えてくれない?」

徐々に険悪になっていく空気。いつもの事でも、割と久しぶりなやり取りに小糸は「ぴやわわ……」と怯えた声を漏らす。

その前にいる透は、相変わらずの無表情を浮かべた後、小糸に声を掛けた。

「じゃ、そろそろクツキー作りに行こうか」

「ぴやつ!!? と、止めなくて良いの!!?」

「大丈夫でしょ」

××それだけ言って、先に手洗いうがいを済ませた。

××

××なんだかんだ言って、四人でお菓子作りなんて久し振りなので、小糸はとてもワクワクしていた。

「クッキーって、どんなクッキーにするの?」

「ん、チョコレート? 的な? これ、バレンタインの代わりだから。小糸ちゃんと雛菜を誘ったのはそういう事だし」

「あ、そ、そうなんだ……! ありがとう」

「ううん」

そんな話をしながら、ググったレシピを二人で見してみる。まずは「バターとチョコレートを湯煎し、よく混ぜ合わせる」らしい。

「湯煎って何?」

「え? えっと……この場合はチョコとバターをお湯で溶かす事だと思うけど……」

「なるほど……じゃあ、お湯沸かそう」

「ち、ちゃんと分量測ってね……! お菓子とかは、割と精密にやらないと味変わっちゃうから」

「え、そうなの? じゃあ小糸ちゃん分量測って。私、混ぜるから」

「わ、分かった……!」

なんてやりながら料理を作る中、雛菜が楽しそうな表情で台所にやってくる。

「あは〜〜♡ 円香先輩、ほんとめんどくさ〜〜い」

「あんたが言うな」

「あ……きた。樋口、手伝って」

「分かっている」

×そう言つて、さらに四人で作り始めた。

×

×適当にク○クパッドで探したものが、それならば不味くはならないと思つた次第だ。

ココアパウダーと薄力粉を混ぜ、筒状に丸めて冷蔵庫に寝かせ、しばらくリ○グフイットでズタボロになつた後、型取りを始める。

「ねえ、これ型取りとかして良いの？ 筒状のまま輪切りつて書いてあるけど」

「平気でしょ。色んな形作りたいし」

そう言うならまあ良いか、と思ひながら、四人で型取りを始める。

円香は、顎に手を当ててどんな形にするか、考えた。四人だけなら別に全部、丸でも良かったが、せつかくのバレンタインだし、少しは凝つた形に……いや、でも相手は菅谷だし……普通ので良いか、とすぐに思い直した。

「見て、雛菜。ハート型」

「やは♡ 透先輩、雛菜にそれちようだい」

「良いよ」

……やっぱり自分ももう少し凝ろうか。

手首をドリルにした後、円香は近くにあった星の型抜きを手に取る。……菅谷に星は似合わない気がする。となると、他に何を……。

と、思っていると、今度は小糸の声が聞こえてきた。

「わっ……ひ、雛菜ちゃんすごい、ね……！ 星と丸で、ピカチュウ作ってる……！」

「これ、透先輩の〜」

「え、私にくれるの？」

「そう〜」

……なるほど、と円香は顎に手を当てる。雛菜からヒントを得たのは癪だが、組み合わせ次第で新たなクッキーを生み出せる。

となると……重要なのは発想力。彼が好きなのを、どれだけ可能な範囲で再現するかが大事だ。

その為にも、まずは彼な好きな物は何か……と、思った所で脳裏に浮かんだのは、あまりに子供みたいなクッキーだった。簡単に作れるけど、それを作る女子中学生はいない、と断言出来るもの。雛菜や小糸の前では絶対に作りたくないものだ。

そんな風に思っていると、小糸が何か目に入ったのか、透の方を見て引き気味に呟いた。

「と、透ちゃん。それ何作ってるの……?」

「ん? アリ」

「ピヤツ!?? な、なんでアリ!??」

「あは、可愛いわ」

「か、可愛くないよ!?? 食欲無くなるよ……!」

流石に虫の形の食べ物はない、という小糸のリアクションはもつともだった。

しかし、そういう純粋なリアクションは透や雛菜みたいな人種に弄られやすいのだ。

「え、小糸ちゃん酷い……」

「あは、小糸ちゃん人でなし」

「そ、そんなつもりじゃないけど……」

「小糸、気にしなくて良いから。至極(ごく)もつともだし」

そう言いつつ、円香も手元でアリを作る。菅谷が何故、アリが好きなのか。それは集団で大衆のために働く絆に惚れているらしい。

つまり、同じアリがいくつあっても問題ない。むしろ個性あるアリが増えて、喜びに狂喜乱舞するかも……いや、流石にそれは大袈裟だが。

「つて、円香ちゃんもアリ作ってるよ!??」

当然、どんな意図であれ、フォローした人物が同じものを作っていたらツツコミは炸

裂するわけで。

その小糸の隣で、雛菜が笑みを浮かべながら言った。

「やは、円香先輩のアリはいらない」

「ぴえっ……？　じ、じゃあ……ゴクリ……円香ちゃんのは、私が食べるよ……？」

「小糸、無理しなくて良いよ」

そもそも、小糸のために作ったものではない。小糸のために作るクッキーなら動物の形がベストだろう。あの歳になってファンシーなものが大好きだし。

「小糸には、パンダとか作ってあげるから」

「ほ、ホントに……？　じゃあ、円香ちゃんにはネコのクッキー作ってあげるね！」

「ありがとう」

「じゃあ、雛菜は透先輩に、ピカチュウとピチュークッキー作る」

「じゃ、雛菜にはクッキーの形したクッキー作ってあげるね」

××　なんか一人おかしい奴がいたが、なんだかんだ楽しそうに料理を終えた。

××　再びり〇グフィットで身体をバカみたいに痛めつけた。今日、仮にも受験を終えた後だというのに。

よくよく考えたら、我ながらかなりのハードスケジュールで動いているが、クッキー

が焼きあがれば、それもそこまでだ。

焼き上がった音がして、円香と透が取りに行く。とても美味しそうな甘栗色に仕上がったそれは、かなり食欲を刺激して来る。

「どんな感じ〜？」

「じよ、上手に焼けてる……う？」

「うん。良い感じ」

「今、持っていくから」

円香の母親が淹れておいてくれた紅茶も含めて準備をする。

そんな中、ふと透が円香に声を掛けた。

「樋口、どれにする？」

「アリ、私達で作ったの一つずつで良いでしょ。あれで普通のクッキー三枚分だし」

「そっか。そうだね」

とりあえず、ラッピングは後にするとして、別の皿に取り分けて置く。それと、おまけでさらに2枚、普通のを追加しておいた。

さて、改めて大きな皿に盛りつけたクッキーの山と、紅茶を人数分、持って行った。

「はい、お待たせ」

「ありがとう」

「よ、よく焼けてるね……!」

早速摘み始めた。

「ん〜……おいひいよ〜、円香ちゃん!」

「良かった」

「あ、ほんとだ。美味しい」

「やは〜。クッキー簡単〜」

各々が摘み始め、円香も一口齧る。程よい苦味と控えめな甘味が口内に広がり、咀嚼しながら目を閉じて堪能する。これなら、渡しても恥ずかしくないだろう。

そんな中、小糸が自分の顔を覗き込むように聞いてくる。

「円香ちゃん、美味しい?」

「……それと同時にク〇クパッドのレシピ、ガチ過ぎでしょ」

「え?」

「円香先輩の褒め言葉、めんどくさい」

「余計なお世話」

ちよつと覗き込んできた小糸が可愛かったから斜に構えた褒め方をした自覚はあった。ミルクティーにした紅茶をズズツと啜ると、小糸が「あつ……」とクッキーの山の中

から一枚、取り出した。

「は……はい。円香ちゃん！ 私のネコちゃん！」

「……」

その本当に子供みたいな屈託のない笑顔が、なんだかもはや眩しいを通り越してほっこりしてしまつて。

気が付けば、円香の手はクッキーではなく小糸の頭に伸びていた。

頭撫でられた事に恥ずかしくなつたのか、小糸は顔を真つ赤にしながら握り拳を両手に作り、半ば叫ぶように言った。

「っ、も、もー！ 円香ちゃん！ 私じゃなくて、クッキー食べてよー！」

「ごめんごめん。代わりにパンダ、あげるから」

言いながら、小糸の口元にパンダのクッキーを運ぶ。流されるがまま、小糸はそのパンダを齧つた。

「美味しい！」

「なんでだろ。小糸の事見てると、ペット飼いたくなる」

「え、なんで？」

「なんでだろうね？」

キョトンとする小糸を置いて、円香はまたミルクティーを口に含んだ。

その円香の口元に、ずいっと差し出されるネコの耳。

「はい、お返しだよ!」

「……ありがと」

本当に心をほっこりさせながら、もみあげを耳にかけつついただいた。

その様子を眺めながら、雛菜と透は顔を見合わせる。

「私達もやる?」

「やる〜」

「はい、あーん。クッキーの形のクッキー」

「じゃあ雛菜からも、ピカチュウ〜」

「おいしい」

「雛菜も〜」

あまりに淡白な食べさせ合だった。向かいの席と温度差あるにも程がある。まあ、なんにしても楽しかった。なんだか久々に何も考えずに羽を伸ばせた気がした。

円香は、なんだか……久しぶりに幼馴染の良さを体感した気がした。普段、幼馴染と幼馴染そっくりのバカにどれだけ気疲れさせられているか分かった気がする。

「小糸は、ずっとそのまま……私の近くにいてね」

「ぴやつ!? き、急に何!?」

「プロポーズ〜?」

「ひゅー」

馬鹿達の妄言を無視して、円香は小糸の頭を撫で続ける。

さて、しばらくそのまま談笑を交えつつ、おやつを終えた。もういつの間にか暗くなってしまったので、送って帰ることになった。

とりあえず後片付け。クッキーが入っていたお皿を、ご機嫌な小糸が片付けてくれた。

「はあく、雛菜お腹いっぱい」

「どうでも良いけど、帰ってご飯食べられなくなっても知らないから」

「雛菜、今日ご飯いらなーい」

「勝手にすれば」

それを両親に言っただうなるかは知らないが。

そんなことを話していると、小糸から声が飛んできた。

「円香ちゃん。こつちに残ってるクッキーは何? ご両親の分?」

「ん? ……ああ、それは……」

「菅谷の分だよ。私と樋口から、遅めのバレンタイン」

「………ぴえ?」

直後、今度は間拔けな声が漏れた。

「……もしかして、菅谷って人の為に作るって言ったの？」

「半分はね」

頷いて答えた。普通に返事をしたつもりだったが、どうにも小糸は少しショックを受けた表情を見せている。

何にしても、なんだか円香には嫌な予感がしてならなかった。

「……二人とも、そんなにその人の事が好きなの？」

「雛菜も菅谷先輩好きだよ？　パイの実の次にだけど〜」

「それランキング何位？」

「私も菅谷のこと好きだよ。樋口達と同じくらい」

「そ……それ、だいぶ高くない……？」

しかも、面倒な二人が余計なことを言ってくれたお陰で、さらに小糸の機嫌が悪くなる。

「ちよつと……小糸？　どうしたの……？」

「別に……なんでもないもん」

「なんでもないことないでしょ。菅谷と知り合いなの？」

「なんでもない！」

声が荒立った。声のわりに寂しそうな表情を見せる小糸は、自分を真つ直ぐと見据えている。

もしかして……なんとなく分かったかもしれない。中学が一人だけ別で、何となく疎外感があつて、その上自分だけ知らない友達が円香や透、雛菜にはいて……その感情がもしかしたら、爆発してしまつたのかもしれない。

それは当たりのようで、涙目のまま小糸は背中を向けてしまつた。

「……ごめん。帰るね」

「待つて、小糸……!」

が、聞いてくれずに小糸は家から出て行つてしまふ。本当にどうしたのだろうか? そんなに癩癩起こすようなことをしてしまつたのか分からない。

一応、二人の方を見てみた。

「どうしたの〜?」

「雛菜、つまみ食いしちゃう?」

もはや自分が後を追うしかない。

「つまみ食いしたらビンタするから」

それだけ言い残し、慌てて小糸の後を追つた。

靴を履いて玄関を開けると、そこでは……。

「ぴやうう……い、痛い……」

「大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「つ、ぴえ……へ、平気です……」

「あそう。とりあえずハンカチ。涙拭いて。で、怪我した？」

尻餅をついている小糸の目尻に、菅谷がハンカチを当てていた。なまじ顔が良いだけに、小糸は圧倒されてしまっている。

「はい、立って。これお詫び。ちようど今の家の人に持つて行く予定だった奴。あげるから元気出して」

「ぴえっ……そ、そんな……」

「父ちゃんが勉強で世話になつてくれた奴つて買つてくれた奴だから、一緒に食べて」

そう言いながら、なんかやたらとデカイケーキ屋の箱を手渡している。……いや、よく見ると箱が二つ重なっているようだ。

……なんだろう、あの……なんだろう。なんかムカつく、絵面がどうしても。円香はイライラを隠そうともせず、額に青筋を浮かべながら、玄関からツカツカと歩いていった。

「あつ、マドちゃん。この子、知り合いでしょ？ そこでぶつかつて、泣かしちゃったんだけど」

「……小糸。おいで」

「あ……ま、円香ちゃん……」

「怪我は？」

「大丈夫」

「あの、マドちゃ……え、聞こえてる？ あの……マドちゃ……」

なんか気に食わなくて、無視して家の中にケーキと小糸を連れ込んだ。

「ごめん。円香ちゃん……」

「気にしてない。別に、あのバカと仲良くなったって、小糸と遊ばなくなることは無いから」

「……」

あまりに子供っぽい内容で腹を立てたことがバレ、一気に真っ赤に染まった。

「うう……は、恥ずかしい……」

はい眼福、なんて思いながら、リビングに戻り、ケーキを机の上に置いた。

「やは、おかえり」

「何処行つてたの？ ……ていうか、それは？」

「リカのお父さんがくれたんだって。受験のお礼」

「ふーん……え？ てことは、リカ今、外にいるの？」

「いる」

「じゃあ、渡しちやおうよ。クツキー」

「……」

まあ、確かにわざわざ改めて学校で渡すより、よっぽど気が楽かもしれない。……正直、苛立つてる今、渡したいと思えないが、後日に回すより良いだろう。

仕方なさそうに円香はため息をつくど、台所に向かった。ラツピングは……まあ適当にジ〇プロックで良いだろう。

一応、二人とも別々の包みに入れて、玄関に出た。門前では、菅谷がいまだに待機している。

「あ、マドちゃん。とおるん。さっきの小学生、平気？」

「平気」

小学生の所を丸々、無視して円香は頷いて答える。

その隣から顔を出した透が、袋を手渡した。

「リカー、はい。これ」

「? 何？」

「バレンタイン」

「え？」

言いながら、透が呆けている菅谷の手に、強引に握らせた。円香も後からゆっくり出て来て、反対側の手に握らせる。

「そんな暇なかつたでしょ。……まあ、あのケーキと交換みたいな形になっちゃったけど」

全然、割りに合わない……と、思いながらも、とりあえず握らせる。しかし、菅谷から反応はない。なんだからしくくない。普通にありがとうとか言われる……と、思ったら、菅谷は頬を赤らめたまま目を逸らしていた。

「……あ、ありがとう……うん……ごめん、うれしいけど……うん、ちよつとこう……急だったかな……」

「……」

「……」

……この反応、まさか……。

「照れてる？」

「え……たかがバレンタインで？」

「……うるさい……」

ダメだ、ホントこういう反応ズルイ。照れるのは勝手だが、ギャップとレア度を交えてこつちにまでそれを伝染させるのは本当にやめて欲しいものだ。

「あ、樋口にも移った」

「！ あ、浅倉……………」

「ふふつ、おもしろ。リカ、よかったらあがつてく？」

「あんたの家じゃないでしょ！」

「ご、ごめん……………俺、今日はちよつとパス……………あ、クッキーありがと！」

それだけ言つて、菅谷は足早に逃げて行つた。

その背中をぼんやり眺めながら、透は頷きながら呟いた。

「……………わかるよ。ああいうところ、ホントずるいよね」

「……………うるさい……………」

話しながら、家の中に戻つた。まあ、今日できたクッキーを今日渡せたのはよかつたのかもしれない。

二人揃つてリビングに戻つた直後「やは……………♡」と、特大の歓声が耳に響く。

「す……………い！ 有名なケーキ屋さんの、ホールケーキが二つも……………！ 絶景……………」

「ひ、雛菜ちゃん……………！ 勝手に開けちゃダメだよ……………！」

言われて見てみると、目の前に広がっていたのは、チーズタルトとチョコレートケーキの大きな奴。

確かに絶景だ。艶のある二つのホールケーキが真横に並んでいる光景は、ケーキ屋さ

んでしか見たことがない。両家族で食べられるように、ホールにしてくれたのだろうか？ なんにしても、改めて菅谷の家がお金持ちであることを実感させられる。

……だが、今はクツキーを食べ終えた後である。大した量はなかったが、それでも体重が気になる。

「……今からあれ、いける？」

「いけても死んじゃう」

二人揃ってそんな眩きを漏らす。そんな中、二人の視界に入ったのは、テレビの前にあるリ○グフイット。

「……」

「……」

またも、二人揃って顔を見合わせた後、雛菜と小糸を巻き込んで運動会を始めた。

ポーカーフエイスにも現れる感情はある。

三月。今時、番号を高校まで見に行つて「あるかな」「わくわく」「そわそわ」「ドキドキ」なんて合格発表はなく、合否判定が家に送られてくる。

三人とも無事に合格し、同じ高校へ入学することになった。卒業式も無事に終えて、彼の両親から「高校でもよろしくお願いします」なんて挨拶され、みんなで写真まで撮つた。

強いて言うなら「あの時、2点くれてありがとう」と改めて先生にお礼を言つたら泣かれてしまった卒業式から、数日が経過した。

次の環境に向けて各々が準備を進める中、菅谷はさらにもう一つ、住処の準備もしていた。

場所は、親がわざわざ気を利かせてマンションにしてくれた。絶対に高校生が三年間だけ暮らすような場所ではない。

そんなマンションの引っ越しを終え、あとは細かい荷物をしまっただけである。

「……………ふう、疲れた……………」

ようやく、一息ついた。ソファーやテレビ、ベッド、机と椅子に冷蔵庫、洗濯機など

の必需品の設置は済んでおり、後は細かいもの……なのだが、面倒臭くなって来ていた。片付けが下手な奴は、一気に全部済まそうとするから、体力が切れた時以降、進まなくなる。

「……」

自分だけの空間……と、少し感慨深くなりながらも物寂しさを感じつつ、ベッドの上で天井を見上げる。

……。

……。

……。

「……マドちゃんとおるん、何してるかな」

スマホを手にとって電話を掛けた。とりあえず、昨日夜遅くまでチェインしていた透に電話を掛ける。

「もしもし?」

『……あ、リカ? どしたの?』

「今暇?」

『樋口と今、買い物してるけど……今日は引越したから無理って言ってなかった?』

「引越し飽きた。俺も行きたい」

『別に良いけど……あ、じゃあ私達が引越し手伝おうか?』
『は?』

円香の「え、なんで?」と言わんばかりの声が耳に届くが、菅谷は無視。

「良いの?」

『良いよ。買い物、今終わったとこだから』

『ちよつと、何勝手な事言ってるの? 私、行かないから』

『じゃあ、雛菜誘おう。多分、暇してるし』

なんと、雛菜が来るかもしれない。それなら、オヤツでも用意した方が良いだろうか?
?

『待って。それなら私がいくから』

しかし、それを隣から食い止める声。

『なんで?』

『なんでも良いでしょ』

『あそう。……やっぱ樋口くるって』

『はいよー。とりあえず……駅まで迎えに行くね』

『え? あーそつか。ていうか、リカの家が初めてか』

「あ、今駅遠い? てか、買い物って何処行ってるの?」

『駅で平気だよ。30分後くらいで良い?』

「それで」

×約束して、とりあえずぼんやりした。

×

「はあ、もう……なんでこうなるの」

そう愚痴るのは、待ち合わせ場所に到着した円香。その隣にいる透が飲み物を啜りながら聞いた。

「嫌なの?」

「率直に言っただけ」

わざわざ引越しの手伝いまでしてやることはない。ただでさえ、今は親に家事のゴツをさりげなく聞いている所だ。まだ振る舞えるほどの腕前はない。

「素直に言っただけ?」

「は? 普通に嫌だけど?」

「……ふーん。ま、良いけど」

「それより、あいつまだ来ないわけ?」

あいつ、というのは菅谷の事だろう。未だ見えない彼の姿に、多少の苛立ちが募っていく。

「自分から誘っておいて待たせるとか、ほんと良いご身分」

「部屋に行くって言ったのは私だけだね」

そうツツコミを入れつつ、透は小さく伸びをする。

「ん〜……なんか、楽しみかも。リカの部屋」

「多分、全然片付いてないと思うけど」

「飽きたって言うってたしね。生き物の事以外だと飽きっぽいから」

「ホント、よく私あいつを合格させられたよね……」

普通にしんどかった。理科以外は本当に何も出来なかったのだから。特に英語と社会は苦勞した。昆虫に置き換えないと初代総理大臣の名前も答えられない。

あと個人的に不思議だったのが、聖徳太子を藻類に喩えていたのは何なのだろうか？

今、思い出してもため息をついてしまう程の苦勞であったが、その隣にいる透は、何食わぬ顔でしゃあしゃあと言った。

「私もいたからでしょ」

「重石の片割れが何言ってるの？ 大概にしてよホント」

「え、でも虫に例えたら？ って言い出したの私だよ」

「……そのお陰で、私はこの前の期末で三権分立、ハリサシアリ、グンタイアリ、アルゼ

ンチンアリって書いたけどね」

「ウケる」

「ウケない」

先生には「大丈夫か？ バカに挟まれてバカになったのか？ 今ならまだ間に合うぞ？」と心配された挙句、カウンセラーまで紹介されそうになった。

……なんか思い出したら腹立ってきた。

「あ、いた。ごめん、お待たせー」

タイミング悪く現れた菅谷が、片手を振るう。……が、円香はその菅谷の頬を摘み上げた。

「えっ、い、いふあいんふえふけふお……」

「反省して」

「ふあひひ……?」

「良いなあ、樋口。私も触る」

「え、ほ……」

そのままつねり散らかした。あまり頬が柔らかい感じはしなかった。まあ普通くらいだろう。

「樋口の頬のが柔らかいね」

「不要な比較しなくて良いから」

「知ってる？　なんか頬が柔らかい人ってむっすりすけべなんだって」

「そう言う浅倉はどうなの？」

今度は透に手を伸ばした。頬をつまむが、柔らかいと言うよりすべすべしている。ムカつくほどのしつとり素肌だ。

「……………これはこれで腹立つ」

「えっ」

「あ、俺も触る」

菅谷がさりげなく手を伸ばし、透の頬に触れる。手のひらの、親指の付け根のあたりで押すようにフニフニと触れた。

「ホントだ、すべすべ」

「何？　その触り方」

「え……………変？」

「変。……………ま、まあ良いけど……………」

……………良いんだ、と円香はいつの間にか二人から手を引いた。……………まるで、猫の頬を撫でる飼い主のようだ。

「……………ゴロゴロゴロゴロ」

「タマ〜」

「猫ごっこまでしなくて良いから。……なんか変なプレイみたいだし」

「プレイ？ ……え、猫ごっこするゲームとかあるの？」

「ねー、どういう意味？ 樋口〜」

「っ、う、うるさい……！」

……二人にあつさり蹴散らされそうになったので、二人のおでこをぺしつと叩いて誤魔化す。

「……え、ホントにドユコト？ プレイって何？」

「しつこい」

女の子に恥をかかせるのはやめなさいと教わらなかつたのだろうか？ あの嚴格そうな父親に育てられたとは、思えない男である。

「早く行くよ。さっさと済ませて、そのお礼にご飯でも奢って」

「安いのにしてね」

「お、良いんだ。ラッキー」

「とおるん、ちゃんと手伝わないと奢らないから」

「えっ」

「せつかくなら、働いた量だけ高いの選べるようにしたら？」

「あ、それもらうわ。何もしなかったら伝票しか奢らないから」
「それ奢つてないどころか奢らせてる」

そんな呑気な話をしながら、三人で歩いてマンションに向かう。
その途中で、透がふと気になったように菅谷に聞いた。

「ところでさ、リカ。なんで私達の家と同じ最寄駅にしなかったの？」

「父ちゃんがマンション選びに拘ったんだよ。俺は1DKで良いって言ったんだけど、セキユリテイが万全なところじゃないとダメとか、三階以上じゃないとダメとか、ご近所さんが良い人じゃないとダメとか」

「ご近所さんなんてどうやって決めたの……」

「父ちゃんがベランダに出て『助けて殺されるー！』って大声で叫んで、助けに来てくれた人が隣に住んでたらって」

「……」

すこし、心配しすぎではないだろうか？

「ちなみに、来たの？ 助け」

「うん。これから行くところは来たよ。すっごい美人さんだった」

「……ふーん」

「……へー」

円香と透は、思わず冷たい返事をしてしまう。その情報いるか？ みたいな……いや、聞いていないよりマシかもしれないが。

「？ 何？」

「別に」

「??？」

別になんだって良いしどうだって良い。こいつが美人さんの隣に住もうが、そもそもその女の人を美人さんと認識していようが、自分には何も関係ない。

「着いたよ」

「え、早くない？」

「駅から近い方が良いでしょって父ちゃんが。あと近くにコンビニとスーパーもあるよ」

「……立地良すぎない？」

「俺、本当に何も言っていないのに父ちゃんと母ちゃんが、ここにしないと一人暮らし許さないって」

確信した。この子の両親、めっちゃ親バカだ。甘やかされたが故のルーズさと、あと変なところでの逞しさの根源が垣間見えた気がする。

「……ていうか、大きくない？ ー」

「ホントそれ」

「そうなの？ 俺あんまマンション行った事ないから知らない」

「何階建て？」

「え、知らないけど。俺が住むのは15階」

なんだか、改めてお金持ちであることを実感させられた。でも……この歳になると羨ましいとは思わなかった。なんとというか……自分の家庭くらいで十分、みたいな。

そのまま二人で並んで歩き、菅谷の部屋に向かった。まずは自動ドア。ナンバーを押さないといけない……のだが、菅谷は動かずに指を宙で止める。

「……何番だっけ？」

「いや知らないけど」

透は首を横に振るう。いや、それ以前に、と円香は顎に手を当てる。

「そもそも、ここに鍵当てれば番号いらんじやないの？」

「え？ あ、そっか」

慌ててポケットの中を弄る……が、何も出てこない。

「やべ。部屋に忘れてきた」

「……はっ。」

普段、鍵を持ち歩く習慣がなかったのだろうか？ ……いや、なさそうではあるが。

「ていうか、どうすんの？」

「ごめんあった」

「……」

あるんかい、と頭の中でツツコミを入れ、中に入った。

エレベーターのボタンを押し、しばらく待機していると、透がまたバカな提案をする。

「階段で行かない？ 15階まで」

「は？ バカじゃないの」

「良いね。一回はそれやっておきたい」

「15階ってわかって言ってる？」

「じゃあわかった。じゃんけんで勝った人1人がエレベーター。負けた二人は階段ね」

「とおるん、それもらい」

「……」

負けられない、そう思った円香は、両手の指をゴキゴキ鳴らしながら、冷徹な視線を

放ちつつ言い放った。

「あつそ……じゃあ良い。私、パー出すから」

「！」

心理戦である。死んでも階段で行きたくない円香は本気だ。

それにより、透も菅谷も表情を変え、引き締める。

「じゃあ私、チョコキしか出さない」

「なら、俺はグーしか出さないわ」

「じゃあ、行くよ」

言いながら、三人揃って拳を引く。コオオオオ……つつと、冷気でも放っているような呼吸をする。元々、落ち着いていた鼓動をさらに鎮める。

とくん、とくん、とくん……と、胸の奥に響く音がさらに遠く感じ、気と肉体を充実させた最高潮……一気に目を見開いた！

「最初はパー!!」

「最初はチョコキ!!」

「最初はグー!!」

最初から全員、ルール無視。だが、己で定めたルールは守った。次に来る一手は、ラ
ンダム!

「「じゃんつ、けんつ、ぽん!」」

繰り返されたのは、透のチョコキ、菅谷のグー……そして、円香のグーだ。

「え、樋口?」

「私は二人と違って『パーしか出さない』とは言っていないから」

さて、一人脱落。残りは菅谷……だが、円香にとってはその方が御し易い。

「で、あんたグーしか出さないんでしょ？」

「え？ いやそれはさっきのじゃんけんの話で」

「は？ そんな事一言も言っていないでしょ」

「や、そうだけど……」

「……」

「……はい、グー出します」

数秒後、円香は無言で15階まで上がった。

××

2× 人が15階まで到達した。

「遅………どしたの？」

「……疲れた」

「もう二度と……徒歩でここまで、来ない……」

疲弊し切っていた。しかし、そんな事円香には関係ない。

「いいから早く開けて。そして片付けを終わらせて晩御飯奢って」

「……マドちゃん、冷たい……」

「うるさい」

ヨロヨロと歩きながら、玄関を開けた。三人で中に入ると、円香は思わず目を見開く。思ったより広く、暮らしやすそうだ。というか、とても一人暮らし用に思えない。

大きな家具の配置は終えているようだが、細かいものは何もいじっていないようで、段ボールが散らばっている。

「リカ一人には勿体無いほど広い部屋……あんたが男じゃなかったら、泊まりに来たかった」

……返事がない。後ろを見ると、二人とも玄関で寝転がっていた。

「ねえ、何してんの？」

「……ちよつと、ハード過ぎない？」

「グリコなんてやりながら来なければ良かった……」

「自業自得でしょ。早くして」

強引にバカ二人の襟を掴み、リビングまで連れて行った。キッチンには普通に最新式だし、食卓も割と大きめ。ソファはテレビの前に設置されていて、そのテレビの下にはゲーム機が置かれている。

「リカ、ゲームとかやるの？」

「いやあんまりやらないけど、父ちゃんが家にあっても仕方ないからって」

そう言う通り、少し古いタイプのようだ。円香自身、別にゲームをやる方ではない。

透がやってる奴はやるくらいだろう。

その透も、昔少しポケモンやマリオをやったくらいで全然やらないし、必然的に円香もやらなくなっている。

まあ、その辺はどうでも良い。それより、片付けだ。早速、近くのダンボールを無断で開けた。

「これは何処にしまえ、ば……」

その箱の中から出て来たのは、菅谷のパンツだった。思わず頬を赤く染めてダンボールを勢いよく閉ざす……が、二人はガツツリみていた。

「いやん、マドちゃんつたらえつち」

「樋口、超大胆な下着泥棒の巻」

「つ、う、うるさい！ ていうか、良いから片付け！」

バカ二人を黙らせて、作業に移った。パンツの箱を菅谷が座り込んでいじり始めたので、なるべく中を見ないようにしながら声をかける。

「リカ、何したら良い？」

「あー……じゃあ、あのダンボールの中に私服入ってるから、それ俺の寝室に運んで」

「はいはい」

「私はー？」

「とおるんは……あれ。教科書を机の上に並べて置いて」
「りよー」

高校になると、教科書はあらかじめ郵送される。入学式前に学生服の採寸のついでに教科書を買わせられ、それが後日になって届くのだ。

「どれが私服のダンボール？」

「分かんない。適当に開けちゃつてくれる？」

「覚えなくてよ……」

円香が早速、適当に菅谷の真後ろにあったダンボールを開くと、そこからクワガタや芋虫、スズメバチがでてきた。

「くくくつ!!?!」

思わず後退りし、後ろにあったダンボールに踵を打ち、ひっくり返って菅谷の膝の上に頭を落としてしまった。

「つ、え、な、なんで急に膝枕？」

「つ、違う！」

「ほぐつ……!!?!」

「グハっ……!!」

至近距離に現れた菅谷の顔に、思わず起きあがろうとして、額と額が激突した。後ろ

に倒れる菅谷と、頭を押さえたまま横に転がり、膝の上から転がり落ちる円香。

「……………何してんの？」

透が困惑したように二人に聞かれたが、自分も何をしているのか分からなかったの
で、答えられなかった。

……………いや、それ以前に、だ。あの箱は一体なんなのか。びっくり箱もびっくりな箱
だった。いやそのまんまだが。なんかもう自分の脳内がわけわかんなくなっていたが、
とにかく驚かされた上に醜態を晒した事が、とつても頭にきて、思わず菅谷の胸ぐらを
掴んでしまった。

「ちよつと、何あの箱!?!」

「え? ああ、最近のガチャポンってすごいよね。500円であーんなにクオリティ高
いフィギュアが飾れるんだもん」

「本当にクオリティ高くてすごかった! 思わず2回もひっくり返るほど」
「それであんなに驚いて頭突きかましてきたの?」

「つ……………!」

ま、まあ確かに菅谷にしてみれば、勝手に驚いてひっくり返った挙句、頭突きされた
のに迫られているように感じるかもしれないが……………。

「……………こういうことになるから、どの箱に何が入ってるか覚えといてよ」

「あ、はい……ごめんね？　でも可愛いでしょ？」

「気持ち悪い」

バツサリ切り捨てると、円香はそのダンボールを退かし、別のを開ける。今度こそ私服だった。

その奥で、教科書の箱を探していた透が菅谷に声をかけた。

「ていうか、リカさあ。ペットとか飼ってないの？」

「ペットって？」

「クワガタの……なんて言うんだっけ、ビルダー？」

「ブリーダーじゃない？」

「そう、それ」

円香の助け船に乗ってきかたものの、受験してもう何もかも忘れたのか、と円香は少し不安になったが、透は無視して聞いた。

「そういうのやってそうとか思ってたんだけど」

「やらないよ、俺は」

「なんで？」

「動物とか昆虫とか、そういうのは自然の中で生きてこそでしょ。人の手で管理してる生き物観察しても、何も面白くないし、飼われる動物自身も面白くなさそうじゃん」

「……あー」

小耳に挟んでいた円香も、少し意外そうな表情を浮かべていた。それは、菅谷なりの倫理観なのだろうか？ それも一つの考え方なのかもしれない。

「でも、絶滅危惧種とか保護してる人達のことすごいなーとかは思うし、動物園とか水族館とか、行けばなんだかんだ楽しいから、あんま説得力ないかもだけど」

「そんな事ないんじゃないの？」

「え……そう？」

「うん。私はそんなの考えたこともないから」

素直にそう言う透の言葉は、おそらく本音だろう。本当に考えたこともないだろうが、だからこそ素直に感心しているように見える。

そういう割と裏表がない部分で、円香としては気に入っている点でもあり、同時にたまに気に食わなかったりするのだが。

そんな事を思いながら、円香は私服のダンボールを持って寝室に向かった。ここで開けるより、しまう場所に持っていった方が早いことに気が付いたからだ。

この部屋以外の扉は四つ。バスルーム、トイレ、そして謎の部屋二つ。勘で右の部屋を開けると、当たりを引いたようだ。勉強机とベッドとタンスとクローゼット……と、寝室としか思えないものが多くあった。

そんな中、目を引いたのは部屋の壁。犬や猫のポスターや、サバンナの動物が映った風景ポスター、昆虫の写真が載っているカレンダーが飾られていて、壁際に見えるガラスの小ケースには、動物や爬虫類のフィギュアが飾られていた。

「……いや、そこまでオタクなら何か飼いなさいよ……」

さつきの虫のフィギュアは、ほんの一部に過ぎなかつたようだ。

やはり、彼の趣味は少し理解を超えていた。

×

他に、3人で割とテキパキと片付けを終え、途中で昆虫や哺乳類や魚類や両生類や爬虫類……というか、あらゆる生き物の図鑑が大量に出てきたり、ハンカチやタオルの柄が昆虫の一番くじの物だったり、割とこの部屋に来るのが憚られる物が多かつたが、

とりあえず片付けを終えた。

「ふう……疲れたね」

「ホント。意外と物多かつた」

「どうでも良いけど、あのアナコンダの巨大抱き枕、3メートルくらいあつただけで、使ってるの?」

「使ってるよ?」

やはり、理解の範疇を優に超えている。円香は少し、次にこの部屋に来る時が憂鬱だ。

頭痛を抑えらうように眉間を抑える円香の横で、透が聞いた。

「で、ご飯か。……どうしよつか?」

「え、食べ行くんでしょ?」

「奢りなの、忘れてないでしょうね?」

「分かってるよ。何食べたい?」

聞かれて、円香は透と顔を見合わせ、頷き合った。

「私は、ここで食べていければ良い」

「私もー」

「え、なんで?」

意外そうな表情で目を丸くする菅谷に、円香は答えた。

「何となく。食材がこの家にあるものなら、あんたの奢りだし」

「うん。それに、せっかく新居なんだし、みんなでワイワイしたいじゃん?」

「……」

せっかくの機会、というのものもあるが、彼のご両親としては菅谷にそのようにして欲しくて、この部屋にしたのかもしれない。

勿論、親バカっぽい菅谷……つまり明里本人のためというのが大きいのだろう。が、それ以上に広目の部屋だったり、大きめのソファであったり、古めとはいえゲー

ム機であったり、片付けている時に気づいたが、食器の枚数だったり、明らかに一人用ではない。

その上、親元を離れて初めての夜だ。今日はなんかかまちよも多かつた気がする。晩御飯くらい、一緒に食べて損は無いだろう。

「で、ダメ？」

「ダメでもそうするけどね。手伝った私達の希望だし」

「良いけど、冷蔵庫カラだよ。まだ買い出し行つてないし」

「……」

「時間も時間だし、食材買ってからここで作って食べるとかじゃ、二人とも遅くなるよ？」

意地でもここで食べることにした円香は、マツクをテイクアウトさせてこの部屋で食べた。

水の中で広がる、赤と白とグレーのインク。
花とミツバチのように。

入学式の日、樋口円香は新たな制服に身を包んだ。中学と同じでブレザー。違うのはネクタイの形だが、結び方を覚えるのにそんな時間は掛からなかった。

自分ではおかしな所はなく、強いて言うのなら大きめのものを買って少しぶかぶかかな？ っ程度だが、自分が面倒を見てしまったが故に同じ高校に行くことになってしまったバカタレは、どう思うだろうか？

まあ、あいつの事だ。どうせ特に何か言ってくるとは思えない。

「……ふう、じゃあいつてきます」

「いつてらっしゃい。入学式の会場だね」

「うん」

両親に挨拶だけして、家を出た。

これまたちょうど良いタイミングで、隣の家から透が出てくる。

「あ、おはよ」

「ん」

適当に挨拶して、お互いの制服を眺め合う。やはり、顔が良いだけあって透はどんな服を着ても似合う。似合わないような衣類なんて男性用の水着くらいじゃないだろうか？ 工事現場に使うツナギでさえ、想像してみると案外似合うものだ。

「ふふ、樋口似合ってるじゃん」

「それはどうも」

そんな話をしながら、学校に向かって歩き始めた。一度、電車に乗る必要があるが、隣の駅なので大して面倒ではない。

「男子の制服ってどんなのだろうね？」

「さあ……まあ、私達とほとんど変わらないでしょ。ブレザーだし」

「えー、リカの学ランとか見てみたかった気もするけどなあ」

「……」

想像してみる。あの天然パーマにムカつくほど似合う顔の良さ、それは透と並んでも見劣りしないレベル。

それが、学ラン……。

「……似合いそうなのがムカつく」

「ムカつくの？」

ムカつくものは仕方ない。なんか悔しくてムカつく。

「ていうか、樋口。せっかく新しい学校に通うんだし、少しイメチェンとかしてみたら？」

「……はあ？」

「例えばほら、前髪のヘアピンとか。毎日同じものだし、変えたら？」

「いや、家出てから言うことじゃないでしょ」

「今から言われても無理だ。なんなら当日に言われても手遅れ感ある。……まあ、明日から少し考えてみる、というのでも無しではないが。」

「ていうか、今日は放課後どうする？　せっかくだし、三人で遊びに行かない？」

「良いけど……リカの予定は？」

「大丈夫でしょ。それより、前に学校行った時に見ただけだし、学校の近くにタピオカの店あったよ」

「じゃあ、そこ行こうか」

「さつくり菅谷の予定などスルーし、そのまま今日の予定を決める。」

「せっかくだし、学校の近くで美味しいお店探しておかない？」

「あ、それ良いかも。帰りに食べて帰れるとこ探そうか」

「私はファミレスかマックがあればそれで良いけどね」

「まあ、実際、お金とかないし……あ、バイトとかする？」

「考え中」

それは本当のこと。いつまでも親にお小遣いもらうのも悩ましい所だ。……とはいえ、自分も透も菅谷も、金を使いに使って豪遊するタイプではないので、バイトとかしてしまうと遊ぶ時間がなくなりそうではあるが。

「部活は？」

「……それはないと思う。浅倉カリカがやらない限り」

やはり高校生活は楽しみが多い。素っ気なさそうな円香だが、どの話にも少しは考えている。

少なくとも中学よりは自由な時間は増えるし、よくやるムカつくキザな恋愛ドラマも、高校を題材にしているものが多い。内容はどうあれ、それだけ楽しむ要素が多いということだ。

柄にもなく、ウキウキと胸を躍らせて駅の中に入り、ピツと鳴らして改札を通った。

「お、定期だと改札の後、音ひとつしか鳴らないんだ」

「知らなかったの？」

「定期なんて持つことなかったし」

そう言われればその通りかもしれない。

電車に乗り、しばらく揺られる。割と混んでいるが、ドア側の角だったので特にスト

レスは無かった。

すぐ次の駅で降り、改札を出た。さて、この辺りで菅谷と待ち合わせしているのだが……見当たらない。

もう何度も菅谷と待ち合わせしてきた身としては、そろそろ学んでも良い頃だろう。すぐ円香は電話を掛けた。

1コール、2コール、3コール……で、ようやく出た。

「もしもし?」

『ごめん少し遅れる』

「は?」

『後まだ洗濯物干しとゴミ出ししないとだから』

「……そっち行こうか?」

『大丈夫。今、洗濯物が……あ、パンツ落ちた!』

「行くから。遅刻したくないし」

割とテンパっているようだ。冷静な声音ではあるが、内心では焦燥感に追われているのが丸分かりだ。

電話を切ると、円香は透に声をかけた。

「リカ、迎えに来て欲しいって。家事が終わらないらしい」

「はいはい。じゃ、行こっか」

×「そう言うのと、二人はすぐに迎えに行った。」

×「ふう……全く、朝から迷惑かけさせて……」

「ごめんって。今度、課題見せるから許して」

「世界で一番、あり得ないお詫びやめて」

洗濯物を干している間に、ゴミ捨てを二人に手伝ってもらい、何とか出発した。余裕を持った待ち合わせ時間にしておいたお陰で、のんびり行っても遅刻はなさそうだ。

「大変そうだね、一人暮らし」

「大変だよ。特に早朝は。普段は自分のペースでやれば良いだけだから楽なんだけけどね」

「どんな事してるの?」

「まずはお風呂の水を汲んできて洗濯機動かして、その間に布団を干してパン焼いて食って、歯磨きしながら上がった洗濯物干して……後ゴミ捨て」

「ママな男だ。わざわざ風呂場の水を使って洗濯するあたり、環境……というよりも生物を気遣つての事だろう。」

とはいえ、それで遅刻ギリギリになっていては、いつか間に合わなくなる。

「でも、これから毎日そんなことしてたら、保たくない？」

「やるしかないじゃん」

「いやそうじゃなくて。例えば、洗濯を二日に一回にするとかしたら？」

「いや、それじゃ回らないでしょ。ワイシャツとか毎日着るし」

確かに、と円香は顎に手を当てる。一人暮らし……円香が思っている以上に難しいのかも知れない。

「お陰で朝はパン一枚だよ……お腹すいた」

今まで、朝食はキチンと味噌汁、サラダ、白米に軽いおかずが一品、出ていたからか、パンでは足りない体になっているようだ。

少し同情してしまった円香は、一応聞いてみた。

「苦手な食べ物とかある？」

「え？ 何急に」

「良いから」

「うーん……特には」

「あつそ」

明日あたり、軽くおにぎりでも作ってみる事にした。苦手なものがないなら、とりあえず冷蔵庫に入っていた梅干しを具にすれば良いだろう。

「リカ、良かったら明日、おにぎり作って来ようか?」

しかし、同じ事を考えていた透が、先にそれを言ってしまった。

「え、マジで?」

「うん。具は何が良い?」

「じゃあ……カリカリ梅」

「了解。覚えてたらね」

まあ、菅谷が朝、お腹を空かさないと、別に自分まで作ることはないだろう。……とはいえ、浅倉のやることなので、事前に言っておかないと忘れそうではあるが。

……なんなら、塩と砂糖を間違えたりしてもおかしくないし、一緒に作った方が良いのかもしれない。

「何個食べたい?」

「10個!」

「言ったな?」

「……の、2/10個」

「えっと、10の2/10で……うん、分かった」

本当にわかったのか怪しい所だが、その辺も含めて明日、顔を出そう。

「そうだ。リカ、今日の放課後、空いてる?」

「今日？」

「そう。暇だったら、三人でタピオカ飲みに行こう」

「良いよ。スーパーにも寄って良いなら」

「主夫みたい」

「仕方ないでしょ。実際、半分そうなんだし」

そんな話をしながら、三人で学校に向かった。ドタバタしてしまっただが、とりあえず一緒に行けている現在にホッと胸を撫で下ろしていると、菅谷がふと思いついたように言った。

「そうだ、二人とも」

「？」

「制服、似合ってるよ」

「わ、ほんと？ ありがとう」

「……そういうことは先に言ってるよ」

×× 温度差ある返しになってしまったが、二人とも嬉しく感じているのは明白だった。

×× さて、放課後。三人とも同じクラスになれたのは幸いだった。……と、いうよりも何故だろうか？ 別々のクラスになる気がしなかった。

そんな話はさておき、とりあえず写真。透と円香は幼稚園からの付き合いなので、お互いの家族とも一緒に撮ったりしていた。

で、約束通り三人は帰宅しながら、そのタピオカの店でお目当ての飲み物を買ひ、飲みながら歩いた。

「タピオカとか久しぶりだなー」

「前に飲んだ時、リカの喉まで黒いの入ってむせてたよね」

「普通、むせるでしょ。あれは」

「いやむせないから」

「樋口もそのリカがツボに入ってむせるほど笑ってたけどね」

「むせるのベクトルが違うでしょ、それは」

派手には笑わないが、円香のツボも仲間内ではかなり浅い。特に不意打ちに弱く笑いでなくても動揺することが多い。

「そういえば昔、タピオカチャレンジって流行ったよね」

そんな中、また何か思い出したことをそのまま口に出したように言ったのは透。ツイスタで何度か見かけたことある奴だ。

胸にタピオカのカップを乗せ、口でストローを咥え、手を使わずに飲むアレ。夏休み、菅谷がない時に幼馴染四人で試したことがあった。

無事に出来たのは雛菜のみ。透はいけそうだったが、それ故に溢れてそのまま着替えるハメになった。

その隣で、菅谷がキョトンとした表情で聞いた。

「タピオカチャレンジって何？」

「知らないの？」

「聞いたことない」

「胸の上にカップを乗せて飲む奴。……まあ、女子限定かもね」

「ちよつ、浅倉」

「え？……あつ」

説明した透を、円香が横から注意する。理解して菅谷を見ると、少し恥ずかしそうに目を逸らしてしまっていた。

「前から思ってたんだけど、なんでそっちが照れるの？ 私の胸の話してたんだけど」

「や……だつてほら、とおるんの胸とか……うん。口にはしなかったけど、最近大きくなってきたし……少し反応に困るというか……」

テンパっていたのか、言わなくて良いことまで言ってしまった。お陰で、透もほんのり頬を赤らめる。

「あー……うん。よく見てるね？」

「あ、いや見てないよ。……気がつけば目を引くほど大きくなってたというか……」

「……み、見ないようにするから!」

なんか変な空気が流れる中、円香は自分の胸を見下ろす。別に、大差ないはずだ。まだ。……いや、そんなことよりもこの話題は不愉快である。

「それより、お腹空いた。ご飯食べに行こう」

「あ、そ、そうだよね」

「う、うん。私も」

×若干の急足で、二人とも円香の後に続いた。

×さて、お昼の後は駅の周りを探索。カラオケやゲーセン、本屋、服屋が並んでいるデパートなどをとにかく廻り尽くし、最後に菅谷の希望であったスーパーに立ち寄り、菅谷と別れた。

で、現在、円香は自室で天井を見上げていた。最近、あの二人といっても疲れを感じない。

それが喜ばしいことなのか、嘆くべきことなのかはわからない。全く悪影響ではないと思いたい。

「樋口ー。これ次の巻ないの?」

「ない」

ベッドの足元で座り込んで漫画を読んでいる透が声を掛けてくる。その漫画も、別に円香が集めたわけではなく、親戚から貰ったものである。読めば面白いが、続きがほしくなるほどではない。

「ていうか、気になるなら自分で買えば?」

「やだよ。そこまで気になるわけじゃないし……あ、そうだ」

「? 何?」

「実はこの前、リカにこれ借りてきたんだよね。今日返そうと思つてて忘れちゃった」

鞆の中から取り出したその本は、昆虫図鑑だった。

「はっ!!?」

「読まない? 少し虫に興味出たから」

「いらぬから……!! ていうか、なんでそんなもん借りてるわけ!!?」

「え、だから興味出たから……」

「見るなら、自分の部屋で見えてくれない?」

「でも虫の話になった時、私達も乗れた方が良くない?」

「……」

菅谷のため、とても言うつもりだろうか？ わざわざ無理して覚えることもないだろうに……と、思いつつも、そう言われると円香も見ようと思ってしまうのだから不思議だ。

まあ、菅谷の為とかではなく、菅谷の部屋に行った時、また虫で驚かされるかもしれないことを想定したら慣れておいた方が良いでしょう。

「……少しだけだからね」

「よっしゃ。こう見えて、私もう虫博士だから。なんでも聞いて」

話しながら、ページを開く。並んでいるのは、ちょうどクワガタのページだった。マインディブリスフタマタクワガタや、セアカフタマタクワガタ、ムニスゼツチフタマタクワガタなど、セアカ以外は違いを見分けにくいクワガタが並んでいる。

とはいえ……だ。いざ、落ちて着いて見てみると、確かに菅谷が惚れ込むのもわかる。少し、カッコ良いのかもしれない。

そんな中、円香は図鑑を手にとり、透の視界に入らないよう、背表紙を向ける。「なんでも聞いてって言った？」

「うん」

「じゃ、問題出すけど良い？」

「どうですか」

との事なので、早速問題を出してみることにした。とりあえず、学校の先生が出して来そうな方式を考えてみて、発してみた。

「問題。次の中で比較的、気性が荒いクワガタを選びなさい。オウゴンオニクワガタ、ヒラタクワガタ、メンガタクワガタ」

「え、希少？ が荒いの？」

「一応、言つとくけど珍しさじゃなくて性格ね」

「それは超簡単。オウゴンオニクワガタ」

「はいハズレ」

「え、うそ。もう名前的に強そうじゃん」

結局、そんなにガッツリは読み込んでいないようだ。

「ぶふっ、その程度？」

「いや……虫の性格とか覚えてられないでしょ」

「でも、リカなら答えられるんじゃない？」

「流石に無理でしょ。電話してみたら？」

「良いけど」

そんなわけで、電話をかけると同時にスピーカーにしてみる。暇していたのか、1
コールさえすることなく応答があった。

『もしもし?』

「リカ? 突然だけど問題。次の中で比較的、気性が荒いクワガタを選びなさい。オウゴンオニクワガタ、ヒラタクワガタ、メン……」

『ヒラタクワガタ』

「ほらね?」

「えー……おかしいよこの人」

「あんたが言うな」

全くだ、と、思わず透は自分で納得していた。

円香が持っているスマホから、なんかやたらと機械的な声が聞こえてくる。

『じゃあ次はこつちから問題ね?』

「え?」

思わず間の抜けた声が出てしまった。

なんで問題の出し合い? いや、そう受け取られる可能性はゼロではないが、普通はまず「なんなの?」と聞かないだろうか?

『オスの全長20〜76.6ミリ、メスは22〜48ミリ、日本列島全域で見られ、性格は基本的温厚な絶滅危惧種のクワガタは?』

「え……浅倉、分かる?」

「……スガヤクワガタ?」

『え、そんなクワガタいるの? 最高』

「いや知らないけど」

いてたまるか、そんな菅谷しか得しないクワガタ、と円香は黙ったまま嘯み締める。

『ヒント。二人が名前くらい聞いたことあるクワガタ』

「ノコギリクワガタ?」

「ヒラタクワガタ」

「あ、コクワガタ!」

「ミヤマクワガタ?」

『なんでそこまで言って外すの』

「日本産のクワガタ、あと何ある?」

「マダラクワガタ……アカアシクワガタ……」

『え、調べてんの? あ、俺が貸した図鑑か。じゃあ言うわ。答えはオオクワガタ』

「ああ〜」

確かに聞いたことはあった。

『はい、じゃあ次はそっちの番』

そのセリフで、円香は電話をかけた内容を思い出す。別に深夜のクワガタウルトラク

イズは求めていない。

『なんだって良いよ。俺に答えられない問題はないから』

「いや、悪いけどそういう電話じゃないから。浅倉がさっきの問題、リカでも解けないでしよって言うから」

『ん、そんなに難しい問題だった？ 2+2より3+2の方が大きいってレベルの問題だったけど』

「前々から思ってたけど、あんたの例え分かりにくすぎるから」

「今のは比較的わかりやすくない？」

「浅倉の感性が同レベルだからでしょ」

××なんて話をしながら、その日は晩飯の時間になるまで通話が続いた。

×「おはようございます」

「あら、円香。おはよう」

翌朝、浅倉家に入った円香は、まず透の母親に挨拶した。

「どうしたの？」

「浅く……透、起きてます？」

「ええ。起きてる。珍しく」

「ふーん……」

なら良かった、と思っていると、透の母親は自分の顔色を見てすぐに微笑んだ。

「もしかして、菅谷くん関係？」

「……まあ、その通りです」

「あの子、去年からずっとその子の話ばかりだったから。円香がここに来たのもそんなんでしょ」

「はい。……あ、いえ今のは……」

「……ふふ」

なにも、顔色がわかるのは幼稚園からずっと一緒にいるお互いばかりではない。それなりに付き合いがあれば、親にもわかる。……いや、むしろ子供は親の顔色は読めないので、ある意味、透以上の天敵だ。

「一緒にどうぞ？」

「……お邪魔します」

そう言って、円香は家に入った。

「で、どんな子なの？ 菅谷くん」

「……変な人です。透と同じくらい」

「ふーん……透の話だと、随分マイペースな人みたいだけど」

「マイペース……そうですね。娘さんと同じくらいマイペースですよ」
「そう。じゃあ普通じゃない？」

「……」

普通じゃないでしょ……と、思いながら、とりあえず台所に入った。

透はおにぎりなのにエプロンをわざわざ装備し、ラップの上に白米を置いている所だった。

「あ、樋口。樋口も作りに来たの？」

「違う。あんたがやらかさないか見張りに来ただけ」

「……ふーん？」

その含みのある笑み、とつても腹立たしい。

「おにぎりくらいで大袈裟でしょ。ちゃんとカリカリ梅もあるし」

「ふーん……でも、なんでおにぎりに韓国海苔を使うの？」

「え、使わないの？」

「普通は使わないでしょ」

「……」

仕方ないので、一緒に作ることにした。円香も制服を汚さないためにエプロンを装備し、味が付いていない海苔を使う。

白米の中に種が入っていないカリカリ梅を入れ、海苔で外側を巻き、ラップを使って丸める。それを、なんだかんだ二人で一つずつ作ってしまった。

「これで良いかな？」

「多分、良いでしょ」

「ふふ、完成」

「……まったく。世話が焼ける……」

「それ、今に始まったこと？」

「自分で言わない」

××「そんな話をしながら、とりあえず透の準備が終わるまで待つてから家を出た。

××「今朝も同じように菅谷との待ち合わせ……今日は菅谷のマンションへ。合流するなり、透が巾着袋を差し出した。

「はい。リカ」

「あ、昨日言つてた奴？ やったあ。このために朝飯抜いてきた」

「バカなの？ 朝ご飯が足りない時のために作つて来てるんですけど？」

円香から当然のツッコミが炸裂する。わざわざ、透が早起きしておにぎりを作つたのに、目的を履き違えるのは頂けない。

「あれ、そうだっけ？　じゃ、明日は俺が2人の朝飯作るから許して」

「いやだからそういう趣旨じゃないから。まず朝ご飯を余裕持って食べられるようになって」

「はい」

そうすれば、そもそもおにぎりはいらぬ。流石に透も円香も、毎日作っていらぬというものだ。

が、その横で特に何も考えていない透が、微笑んだまま言った。

「まあ良いじゃん。とにかく食べてよ」

「うん。いただきます」

言いながら菅谷は一口、おにぎりを齧る。

「んっ……美味っ」

「ほんと？　良かった」

「なんか悪いね。俺のために」

「ううん。別に」

そんな話をする二人を、円香はぼんやり眺める。そっか、と円香は頭の中で理解する。片方、自分が作ったわけだが、昨日菅谷がいる前で作ると言ったのは透のみ。

つまり、菅谷は円香が作ったおにぎりが入っている事を知らない。まあ、別に賞賛と

かお礼が欲しいわけではないので、構やしない。

実際、透だって作ったわけだし、いちいち腹を立てることはない……なんなら、自分も作ったって思われるのは普通に恥ずかしいかもしれない。

なんて思っていると、菅谷が片方、食べ終えたようで、ラップを丸める。

「ふう……うまかった」

「もう片方は樋口が作った奴だよ」

「ブハッ！」

思わず吹き出しながら、透の胸ぐらを掴んでしまった。

「なんで言うのなんで言うのなんで言うの」

「え、だってそうじゃん。」

「そうだけど……！」

「え、マドちゃんも作ってくれたの？」

「っ！」

少し驚いたような顔で見られてしまい、それがまた少しの羞恥心を掻き立てる。からかって来るのか、それとも「なんで？」と純粹な目で問われるのか。どちらにしても、円香としては不愉快だ。

何を言われても場合によっては許さない……なんて決意を固めている間に、菅谷は微

笑みながら言った。

「ありがとう。めっちゃ美味そう」

「ーっ!」

まさかの素直なお礼だった。もう何が何だかわからなくなっていたが、とにかく取り乱すのはやめた。頭の中で羞恥心を抑え込むと、キツと菅谷を睨む。思わず菅谷が後退りしてしまうほどの眼力だった。

「……………どう、いたし、まして……………」

「え、これもしかしてマドちゃんのお昼だった？ それなら返すよ?」

「良いから黙って食べて」

「う、うん……………」

睨みつけながらそう言ってやると、素直に従うように食べ始めた。

ポーカーフェイスも見慣れた人にとっては二十面相。

高校一年の授業は、割と最初の2回くらいは授業をやらない。こんな事するよーだとか、自己紹介とか、そんなんばかりだ。

それらが終わってから、ようやくまともに内容に入るわけだが、何の因果か知らないがまた菅谷と透は隣の席だった。出席番号が近いのは分かるが、女子の「あ行」の隣に「す」が来るのは決して高い確率ではない気がする。

さて、そんな新たな環境なのにそれを感じさせない日々。当然、透も円香も菅谷も同じように三人で連んでいた。

ハツキリ言って、もう他の新しい友達なんかに興味はない三人は、休み時間には円香の席付近に集まって、駄弁っていた。

しかし、他のクラスメートから見れば、そこに集まっているのはモデルが三人いるようなものであつて。

「……やべーよな、あそこ」

「ホントな。でも、偶然あんなイケメンと可愛い子がつるむかよ」

「どういふこと？」

「入学初日から面食い同士がつるんでるってことだろ」

「いや、あれ中学の時かららしいよ。なんか……ナントカ姉弟とか言われてたらしい」
「じゃあ中学の時から面食いって事じゃね？」

「お似合いだよ。イチヤイチャしやがって」

と、まあ悪目立ちしていた。美男美女なんて、クラスに大体1〜3人しかいない。つまり、まだお互いの中身も知らない段階で、まず何に惹かれるかと言われれば、やはり外見だろう。

その外見だけで言えば優良物件同士がくっ付かれれば、誰も良い気がしないのは当たり前と言え当たり前なのかもしれない。

さて、そんなガキの文句など意に介さない……というか、なんなら聞こえていない三人は。

「でき、だいぶ前やってた映画あるじゃん。海外の……なんだっけ。ベ○ディクト・カンバーバッチが主演の」

「え？ ああ、戦争の？」

「戦争？ ……ああ、まあうん。戦争だね。最後は無敵ループにしてたし、面白かった」
「あれ……ああ、うん。あんま覚えてないけど良かった」

「イ○テーション・ゲームとドクター・ストレンジは別の映画だから。毎回毎回、噛み

合っていないまま話を進めないで」

「あつ……なるほど」

「ちなみに、私はドラマだけどシヤ○ロックが好き。特にあの結婚式の時の」

「ああ、あれね。分かる」

……そんな話を聞いた直後、愚痴っていた周りの面々は呟くように感想を漏らした。

「……ごめん、全然イチャイチャしてなかった」

「むしろコントやってたな」

「……ああ、思い出した。三馬鹿姉弟って言われてたんだ」

「納得」

×ほんの数日で、三人を狙う男子も女子もいなくなった。

×

×円香は早くも給食がない学校生活に慣れつつあった。円香は。

「あ、お弁当忘れた」

「俺も」

「……食堂行こっか」

仕方なく、円香は二人を連れて教室を出た。一年生は割と他学年も使う食堂を利用する事が憚られる事も多いが、三人とも何食わぬ顔でテーブル席に座った。

「じゃ、私ら食券買ってくるから」

「待ってて」

「はいはい……」

そう言いながら、円香は弁当を机の上に置いて待機した。あの二人、いつになったら弁当を持つてくる事を覚えるのだろうか？ たまに忘れる程度の透はともかく、ほぼ毎日持つてこない菅谷はどうかしている。

最近はどうやく駅で待ち合わせしても普通に学校へ行けるようになり、おそらく菅谷も一人暮らしに慣れてきたのだろう。

まあ、何にしても慣れてくれて良かった。ゴールデンウィークも近いし、そろそろ遊びに誘ったりしても平気だろうか？

「ねえ、そのの」

そんな事を考えている時だった。ふと高圧的な声を掛けられ、イラつとしながら顔を上げる。立っていたのは、上級生の女子生徒だった。

「……なんですか？」

「そこ、四人席なんだけど。一人で使うならカウンター行ってくれませんか？」

「すみません。あと二人、学食組がいるので」

「……」

あくまで失礼にならないよう、敬語で言った。……他にも一人で学食組の分、席を確保している連中にはいるのに、唯一の一年である自分に声を掛けてきたのはスルーしてあげながら。

しかし、それでも納得がいかないのか、上級生は苛立ちを隠そうともせず片眉を上げる。

「私達は今使うの」

「使う予定つて言うだけなら、すぐ使う人に譲るべきなんじゃないの?」

「……見たところ、お弁当は持っていないようですが。あなた方も学食なのでは?」

「私は弁当持つてるし」

一人、弁当を持ってきている人は確かにいる。しかし、それならこちらも同じだ。

「であつても、条件は五分だと思われませんが」

「……ちつ、もういいわ」

「あんた、顔覚えたからね」

諦めて、立ち去ってくれた。……が、何やら不穏なことを言つて去つていったし、タダでは済まないかもしれぬ。

ま、何をするにしても結構だ。リボンの色を見た感じ三年。今年耐えれば良いし、そもそもあの頭が悪そうな三年に、いじめをする様な時間的余裕があるとは思えない。

「…………ふう」

とはいえ、少し気疲れした。上級生を相手にするのは面倒だ。

しばらく、ぼんやりと待機していると、ようやく二人が戻ってきた。おぼんに乗っているお椀の中は、おそらく麺類だろう。

「お待たせー」

「遅い」

「あれ、機嫌悪い。どしたの？」

「上級生が席変われって言うってきたから、少しムカついてただけ」

「ふうん…………次、そういうことあったら俺呼んでね。俺が二分で奴らを蛹のように閉ざしてやるから」

「何を閉ざす気？ ていうか、喧嘩とかやめて。女の人に暴力とか最低だから」

「そんな事しないよ。ただ、マドちゃんとおるんに何かあったら…………あの、あれ。なんか、なんかするから」

「…………」

ホント、そういう事をこの男は平気で言う。そういう人をナチュラルに照れさせるあたりが、本当に嫌いだ。…………その分、いつでも裏表がない点は決して嫌いではないが。

「…………甘い言葉を吐いてる暇があるなら、お昼にして。さっさと食べないと伸びるよ」

「あ、そっか」

いつのまにか透は既に座って麵を啜っている。菅谷も席に座った。

麵を啜っている透が「そういえば」とふと気になったように声を漏らした。

「リカって喧嘩とかするの？」

「しないよ。しつこく売られない限り」

「するんじゃない」

「手を出すな、と教わってて実際、喧嘩になったことはないけど、親が『真に自分の身を守るのは、学力と武術』とか言って、小一から小六まで柔道習わされてたし、いざという時、自分の身くらいは守れるよ」

護身といえば護身なのかもしれない。本当に過保護な彼の父親らしい教育だ。

「ふーん……頼れるんだか頼れないんだか……」

思わず漏れた円香の呟きの横で、透が啜ったラーメンを飲み込んで言った。

「じゃ、私がおしもの時はちゃんと助けてね。リカが」

「わーってるよ。いつも助けてもらってるし」

「そうだったけ？」

「そうなの」

それは円香にも心当たりがない。どちらかと言うと、二人を自分がまとめて助けてい

る気がしなくてもない……が、まあ口を挟まないでおく。

「……ていうか、リカ。今日もお弁当ないけど、ちゃんと一人暮らし出来てるの？」

「え、な、なんで？」

「や、だからお弁当ないから。……お願いだから、部屋が汚さすぎて病気になるとかやめてよ。面倒とか見に行きたくないし」

「え、部屋が汚くて病気になるの？」

聞いたのは透だった。透の部屋は基本、綺麗だが、それはものがなさすぎるから綺麗なだけだったりする。

「もちろんでしょ。不潔な所にはウイルスとか菌が溜まるし、それが病気の元になる事だってあるから」

「へー、怖」

「……で、綺麗にしてある？ 食生活も毎日、コンビニとかファミレスで済ませてたりしてないんでしょうね？」

「も、勿論でしょ」

「……じゃ、体調崩しても知らないから」

そんなやりとりを眺めながら、透はにこにこ微笑みながら、また余計なことを言う。

「なんか、樋口ってお母さんみたいだね」

「……は？」

「いや、お姉さんかな？ 本当に姉弟になっちゃってんじゃん」

「……うるさい。別に、私はリカが体調崩そうがどうなるうが知った事じゃないし」

「ふーん？」

「……」

イラツとした円香は、机の上にあつた七味を透のラーメンに流し込んだ。

「あつ、え、なんで？」

「自分の胸に聞いて」

「樋口より大きい？」

「トツピング足りない？」

「あの……あんま俺の前でそういう話は……」

×そんな呑気な話をしながら、昼飯を続けた。

×

×授業も残り一時間。その時間はLHR。未だ担任が現れない教室で、時間なので席に

だけついてはいる生徒達だが、その騒がしきは休み時間のそれだった。

「ねえ、リカ。前から思ってたんだけどさ」

「？ 何？」

「LHRってなんの略？」

「さあ……雲雀、鷹……駒鳥の略？」

「え、どういう事？」

「雲雀はラーク、鷹はホーク、駒鳥はロビンって言うから」

「ふーん……良いね。何する授業？」

「バードウォッチング？」

「それ生物じゃない？」

バードウォッチングとなったら、もはや趣味の範疇である。

「やったことあるの？ リカは」

「うん。でも最初は楽しくないよ。見つからんし、見つけても雀とか燕とかだし……それはそれで見つかったら可愛いんだけど、やっぱ普段見れない鳥見たいじゃん？」

「ふーん……」

なるほどね、と透は相槌を打つ。まあ別にやりたいとは思っていないが。映画とかドラマはともかく、生き物をじっくり鑑賞するのは退屈になりそうではある。

……まあ、この前借りた図鑑を見てからは、たまに虫の動画を見ることもあったが、それでも動きがあるかないのか分からないものを見に行きたいとは思えない。

「あ、そうだ」

そんな話をしている中、菅谷がふと思いついたように口を開いた。

「とおるん、家にグ○グルキヤストある?」

「? 何それ?」

「ネットフリとかプライムとか見る奴」

「分かんないけど……H○L○Uなら家で見てるよ」

「父ちゃんがデ○ズニープラスに登録したから、見れるようになったんだよね。マーベルの映画」

「え、良いなー。てことは、ドラマとかも?」

「うん。デアデビルもルークケイジもパニッシュャーも見れるよ」

本国ではメジャーだが、日本では割とマイナーなヒーローの名前が列挙される。

しかし、彼が自慢とはらしくない。何か他に言いたい事があるのでは?

その読みは正しく、続きを言った。

「うちで見ない? 映画でも、ドラマでも」

「……良いの?」

「うん」

「やったね。じゃあ、樋口も誘って……」

「あー……ま、待って」

言いかけた透の台詞を遮る。どうしたの？ と、視線で問うと、菅谷はいつになく挙動不審な様子で言った。

「その……まあ、なんだ。……二人で、見たい」

「……え？」

そのセリフに、少なからず透は動揺した。それは、いったいどういう意味で言っているのだろうか？

これでも、透だつて女子高生。異性に興味が無いわけではないし、菅谷をその対象として意識する事もたまにある。

その上、趣味が映画やドラマなだけあつて、その手の台詞には敏感だった。

……だが、それ故に、少し複雑だった。

「あー……リカ。気持ちは嬉しいよ。ほんとに。何よりも。……でも、私はやっぱり、樋口とリカと……二人とずっと三人で……一緒にいたいから……」

「え、俺もだよ？」

「え？ あ、うん……え？」

「え、なんで急にそんなこと言ったの？ 普通に恥ずかしいんだけど」

「……」

こっちのセリフだった。というか、どういう意味で言っていたのか。

「……なんで、私と二人？」

「いや……実を言うと部屋汚いんだよね。埃とかはないと思うんだけど、その分袋が溜まっちゃって……」

「……」

この男、本当にこの男……と、透はらしくなく頭に来ていた。この野郎は本当に人を誤解させる……と、全力でブーメランを投げながら、苛立ったまま言った。

「……誘うから」

「え？」

「樋口、絶対誘うから」

「え、や、やめてよ。俺死んじやう」

「知らないから」

思わず狼狽え、なんとか言い訳をしようと思ったタイミングで、先生が教室に入ってきた。

「……あ、きた」

「お前ら、静かにしてねー」

「……」

仕方なく二人とも黙る。一応、女性の先生が軽く手を叩く。

「今日は、近いうちにある林間学校について。班分けとか当日の予定とか説明するから、ちゃんと聞いてね」

×「仕方なく、耳を傾けることにした。」

×「放課後。」

「樋口ー、リカが家で映画見ようだって」

「良いけど」

「……」

瞬間で強制的に行くことになってしまった。自分の家なのに、もはや強制連行でもされるように二人に挟まれて帰宅する。

「ていうか、なんで映画鑑賞？」

「ん、いやなんかリカのお父さんがデズニープラスに登録したから、そのアカウント使えば見れるんだって」

明らかにリカのために登録したのだろう。それに気付いていない透は、単純に「羨ましい」の一言だったが。

帰宅しながら、ふと透のスマホにチェインが届く。菅谷からだ。

LIKA☆『マジで連れていく事になるとは思わなんだ』

まるで女の子みたいなユーザー名だが、元々のユーザー名が女の子っぽいのでノータッチ。……にしても☆まで付けることはないと思うが。

とおるん『自業自得でしょ』

L I K A ☆『鬼』

「樋口」

「? 何?」

話し掛けると、透は間髪を容れずにしれつと言った。

「実は、今リカの家ってき……」

「はいちよつとストツプごめん謝りますから待って」

「……ふーん? ま、良いけど?」

「……なに?」

「なんでもない」

菅谷と声を揃えて言うと、円香は怪訝そうな表情で睨みつつ、口を塞ぐ。

こうなった以上、菅谷としては自分で自分の身を守るしかない……と、思ったのだが、なんか面倒になったし「ま、いっか」と思う事にした。

見た感じ、埃が溜まっている感じはしないし、汚いと言ってもゴミも袋に入っただけ。……まあ、洗濯もなんか面倒になって土曜の朝にまとめてやるように

してしまつたし、溜まっているといえは溜まっているわけだが。

「なるようになれ」

「何が？」

「何でもない」

×そんな呑気な話をしながら、菅谷の部屋に到着した。

×

「で、何か言うことは？」

円香はプチギレていた。目の前で、タコスケを正座させ、仁王立ちで冷徹な波動をビ
ンビンに放ちながら。

「いえ、あの……掃除はしてたんです。ゴミ袋がそれを物語っているかと……」

「この部屋が物語っているのは、あなたが最近、ちゃんと時間通りに待ち合わせ場所に集
まつたのは、ゴミを出す時間も洗濯をする時間も省いて、自炊もしないで、家事もろく
にしないまま来てるって事でしょ」

ソファアの上に脱ぎ散らかされた洗濯物と、廊下に並んでいるゴミ袋を見て、さらに
そのゴミ袋の中のカップ麺やコンビニ弁当のゴミを見て言われ、菅谷は何も言えずに黙
り込んでしまう。

「この家で集まって映画見るとか正気？」

「それに関しては私も同意見」

「つ、と、とおるん……………」

「あなたは誰と話してゐるわけ？ 目の前にいる私見えてない？ その目は飾りか何か？」

「……………すみません」

シヨンボリと肩を落としてため息をつく菅谷を見て、円香は腰に手を当てて盛大なため息をついた。それはもうエアコン並みに大きなため息。

「……………まだ一人暮らし始めて一ヶ月弱でこれじゃ、先が思いやられるからお母さんに今からでも一緒に暮らしてもらったら？」

「うぐつ……………」

「そもそも、あなたその辺の話はちゃんとご両親として、キッチンとするとか約束しなかったわけ？ そういうところちゃんとしないと、実家に連れ戻されるかもよ？」

「はぐつ……………」

「私達はあなたがいなくなっても転校して一人暮らしとか出来ないから。そしたらもうサヨナラだから」

「……………」

「とにかく、もつとそういうところ考えて……………」

「樋口、樋口」

ふと、横から透が肘で肘を突いてくる。こういう話に透が口を挟んでくるのは珍しい。どうしたのだろうか？　と思つて透を見ると、透の視線は菅谷に向かっている。

……そして、菅谷は完全に意気消沈としてしまっていた。それを見て、円香も少し「うっ……」と悪気を感じてしまった反面、少しそのしよんぼり顔に何かを感じてしまつたり。

なんにしても、コホンと咳払いすると、背中を向けながら言つた。

「……映画の前に掃除だから。ゴミ捨てはどうしようもないけど、洗濯くらいは済ませる」

「……はい」

手錠もしていないのに、刑事と被疑者のように連行する円香とリカを眺めながら、椅子に座っている透がニヤニヤしながら言つた。

「リカー、先に見てて良い？　映画」

「浅倉、あんたも手伝つて」

「え、なんで私も……」

「あんた、なんでも自分の思い通りに行くと思つてたでしょ」

ギクツ、と透は表情を凍らせる。それを見透かしたように円香は続けた。

「そうはいかないから。さっさと終わらせて、さっさと映画見て、さっさと帰るから」
「……」

「ふふっ」

「は？ リカ、あんたなんで笑ってんの？」

「イエ、ナンデモ」

そのまま二人を連れて、洗濯をする事にした。円香が洗面所から持ってきたかごに、菅谷がソファアール上の洗濯物をぶち込み、洗濯機の中にぶち込む。

透が洗濯機の中に洗剤を入れ、電源を入れた。

その間に、円香は部屋の中から洗濯物をかき集める。靴下のような細かいものは、割と分散してしまっていた。

カゴの中にホイホイと入れてながら、少し反省するように自己嫌悪。さつきは、割と言いすぎたかもしれない。あんなに凹んでいる菅谷を見たのは初めてだったから。

元々、高校生での一人暮らし。慣れないことも多いに決まっている。それをフオロ―
するために、自分も家事のコツを色々と習っているというのに。

……なんなら、次の土日でもた顔を見にきた方が良くもしいれない。

「あ」

ふと目に入ったのは菅谷のパンツ。スパイダーマンの柄のボクサーパンツだ。

「……まったく……!」

これも、洗濯しないわけにはいかない。ため息をつくど、頬を赤らめながらもそれを拾い、なるべく見えないようにしながらカゴに入れた。

「……」

一瞬だけ、チラ見してしまった。また頬を赤らめながら、今度こそ見ないようにして洗濯機の前まで運んだ。

……スパイダーマンのパンツとか、子供っぽい履いてる、とか思ってしまったのは内緒である。

洗濯を終えて、映画を見ながらの夕食を終えて、帰宅。わざわざ、菅谷のために円香が日持ちするカレーを作った。

「なんか、悪かったね。二人とも」

「別に良いよ。アントマン見れたし」

「ん。でももうこんな汚い状態で呼ばないで」

「……はい」

そう言いつつも、円香は少し胸の奥で引つ掛かりを覚える。なんか、彼が悪いとはいえ、ここに来てからキツイことしか言っていない。

……もう少し、何かこう……少しは彼にとって良い事も言ってみるべきだろうか？

「……好みは？」

「え？」

「カレーの好み。今日、少し甘いって言ってたから」

「……え、美味かったよ？」

「美味しいかじゃなくて好みを聞いているんだけど。国語、もう少し頑張ったら？」

「……少し辛め」

「……ん。まあ次、その通り作るとは限らないけど」

「え……え？」

「うわ、樋口。それ作るやつじゃん」

「浅倉うるさい」

そんな話をしながら、少し照れを隠すようにさっさと帰宅した。

照れるポイントなんて人それぞれ。

ゴールドデンウィークという一週間は、休むためにあるのではなく、新たな環境に身を置いた人が、崩れた普段の生活リズムによって生まれてしまった様々な差異を取り戻す為にあるものだ。

その為、円香は初日からどのように時間を費やすか、既に考えてあった。それは、エプロン、三角巾などを持って菅谷のマンションに来ることだった。

……休みの日に、男の人の部屋に来て「家事をしにきた」なんて少し世話を焼きすぎかもしれないが、本当に成績も生活もダメダメで転校するようなことになられたら困るので、仕方ない事だ。

ちなみに、透は誘わなかった。正確に言えば、チェインは送ったがまだ寝ているようで、応答がなかったたので置いてきた。

「すう……はあ……」

彼の部屋に一人で入るのは初めてだ。少し、緊張してしまふ。だが……まあ、相手は菅谷だし、そこまで変に緊張することはないのだろう。

そう、自分に言い聞かせる事、5回。ようやく、決心した。

「……………よしっ」

ナンバーを押し、呼び出し。しばらく待つと、寝惚けた声が聞こえて来た。

『ふあい……………』

「樋口だけど。起きてる？」

『……………起きふえるほ……………』

その割に、眠そうである。もう11時半。午前中と言っても、昼近い時間なのに。

「開けて。様子見に来た」

『ふあゝい……………』

急に来たのに疑問くらい持てや、と思ったりしたが、まあ寝惚けているので仕方ない。

そのままマンションの中に入り、エレベーターに乗って15階へ。インターホンを押すと、中から菅谷が出て来た。

「ふあい……………あれ、マドちゃん？ 何してんの？」

「様子見に来た。入れて」

「え……………い、いや良いけど……………」

中に入る。薄らとだが良い香りが漂って来た。

「何これ……………ビーフシチュー？」

「ああ、うん。そうだよ。お隣さんがくれた」

「……ふーん。美人の?」

「そう。美人の」

イラリ、と円香は少し頭にきたが、なんとか抑えて荷物を椅子の上に置く。前に来た時よりマシだが、昨日のワイシャツとパジャマが散らかっていたり、新しく買ったのか、虫のおもちやのゴミが散乱している。

「……」

まあ、大した量ではないので、今日片付けるつもりだったのかも、と解釈しておいた。「マドちゃん、ビーフシチュー食べる? ガーディアンズ見ながら」

前言撤回。絶対、掃除する気なんてない。

「……食べる」

まあ、今はそれより敵情視察だ。美味しいのだろうか? ……いや、まあこれだけ良い香りを漂わせていれば、美味しいのはほぼ確実だとは思うが。

「じゃ、今、火にかけるから待ってて」

そう言うのと、菅谷は台所に引つ込む。とりあえず、菅谷の世話を自分だけがやるのは気に食わないので、あえて散らかっているのは放置しようかな、と思つて机の上を見ると、ゴールデンウィーク中に出された宿題がやりかけのまま放置されていた。

もしかしたら、これを夜中にやっててそのまま寝落ちしたのかもしれない。……彼に

しては、殊勝な心がけだ。

だとしたら、まあやっぱり手伝ってやるのも悪くない。そう思うと、とりあえず洗濯物だけ拾い集めて、洗濯機の中に叩き込み、スイッチだけ押してやった。

そこでビーフシチューの準備がちょうど終わったようだ。

「私、少なめで良いから。朝ご飯、食べて来たし」

「え、もう?」

「真つ当な人間は遅くとも9時には起きてるものだから」

円香は7時に起きたが。ソワソワしてしまつて、夜眠れなかつたのに朝早く起きてしまったのは内緒だ。

そのまま二人で食事。一口、早速メインの一品を口に含む。

「……………」

美味しい。悔しいけど。というか、美味すぎる。店出せるレベル。

「え……………これ、お隣の人が作ったの?」

「いや、お隣の人、たまにメイドみたいな人が実家から来てるみたいなんだよね。それでビーフシチュー作り過ぎたからもらった」

「……………」このマンションって、お金持ちの人御用達なの?」

「まあ金額的にはそうなんじゃない?」

家賃とか、聞いても良いのだろうか？ ……いや、菅谷家のことだ。息子は知らないだろうし、親は高いところを選んだに決まっている。実際、高い所に住んでいる。

「なるほど……でも、美味しい理由がわかった気がする」

「メイドさんつて、みんなこんなに料理上手いのかな」

「そうなんじゃない？ 本職なら」

「……ということは、メイド喫茶つて実はメチャクチャ美味しい飯屋なんじゃ……今度行つてみない？」

「そんなわけないでしょ。はあ……ホント、バカ……」

というより、多分何も考えていない。

「ていうか、今日とおるんは？」

「声掛けたんだけど、既読つかなかつたから置いて来た」

「ふーん……」

「それより、食べたらずゴミの片付けするから。あの辺に落ちてる袋とか」

「あ、うん」

一応、もう一度後でメールを送っておこう。

さて、食事を終えて、とりあえずおもちゃの片付けから。……いつまで経つても慣れないのが、やはりこの虫のオモチャ。なんかやたらと着色とフォルムにリアリティが

あつて、持ち主がいない間に動き出すんじゃないかと思つてしまう程だ。

その上、ダブっているものも割と多くある。いくらかけたのかはこの際、聞かないことにして、代わりに別のことを聞いた。

「同じの結構あるけど、売つたりしないの？」

「え、なんで？」

「や、同じのとかあんまり意味ないでしょ」

「いやいや、売らないよ。それは『髪の毛たくさん生えてるけど、一本くらい売らないの？』つて言つてるようなもんだから」

「全然、意味わからないんだけど」

「あ、でも欲しかったらあげるよ」

「ねえ、本当にさっきの例えの意味が分からないんだけど」

「売るのはダメであげるのは良いの？ と、思つたが、まあ友達だからなのだろう。」

「で、いる？」

「いらぬ。何処に飾るのこんなの」

「……壁？ 窓際にこれ貼つつけておくと、たまに母ちゃんが本物と間違えて腰抜かしてたよ」

「最低。一つもらうね」

「お、ほんとに？　どれにする？」

「なるべく日本にいる奴」

対象は母親ではなく、隣の家の幼馴染。たまには脅かす側もアリかも、と思いきらつた。

「ノコギリクワガタ、ミヤマクワガタ、ヒラタクワガタ、アカアシクワガタならダブリあるよ」

「違い分かんないから」

「え、全然違うじゃん」

「じゃああんたがカツコ良いと思う奴」

「おっけー」

意気揚々と部屋に菅谷が戻っている間に、円香はまず窓を開ける。その後洗濯物を取りに行き、干し始めた。早くも、パンツに触れて照れることは無くなった。……その反面、パンツの柄をまじまじ見ることは増えてしまったが。

なんとか煩惱を打ち払いながら、洗濯物を干して行つた。

この辺、母親にポイントは教わつた。色が付いている衣類は裏返して色落ちを避け、ワイシャツなどはなるべく肩などを揃え、とにかく干していった。

「マドちゃん、持って……あれ？」

「ごめん。勝手に洗濯物干してる」

「ありがとう。なんかごめんね」

「いい。元々、これをしに来てるわけだし」

「クワガタどうする？」

「机の上、置いといて」

そんな返しをしながら、ついでと言わんばかりに言った。

「あと、布団持って来て。ついでに干しちゃうから」

「は、はいっす！」

別に強く言ったつもりはないが、なんかやたらと畏まっている。まあ、我ながらかなり世話を焼いているし、当たり前と言えば当たり前なのだが。

洗濯バサミが大量についている靴下とか小さいものを干すためのアレに、靴下とパンツをぶら下げ始める。

「持って来た……っ、ちよっ、マドちゃん！」

「？ 何？」

「あの、それ俺のパンツ……」

「今更何言ってるの？」

「は、恥ずかしいんだけど……」

「嫌なら次からやめるから」

「……や、まあ良いんだけど……」

……いや、この反応は良くない、と円香は思い、一時中断した。

「じゃ、アンタ干して。私は掃除機かけるから」

「うちルンバだよ」

「……ああそう」

まあ、普段掃除とかしてなさそうなのに、埃の数が少ないのはそういう事だろう。

「じゃ、お皿洗おうか？」

「うん。お願い？」

なんで疑問系？ と、思いつつも洗い物をする。これもコツを習った。まずカレーやらビーフシチューやらの時は、皿に水をつけて放置。汚れを浮かす。

その間に、別のお皿を洗う。洗い終わった皿を一時的に置いておく籠にも注目する必要がある。皿は縦にして、少しでも多く入るようにする。お茶碗やコップは口を下にして、水が底に溜まらないように置くなど、様々だ。

後は可能な限り回数をこなし、慣らす。なんだかんだ、そういった日常生活における動作を慣らすには、回数しかない。

「ふう、よし……」

終了。濡れた手をフルフルと振って、ぶら下がっているタオルで拭く。この時期、まだ水は少し冷たく感じるが、冬ほどではないのでセーフ。

少し、疲れたのかぼんやりしていると、菅谷が台所の出入り口でこつちを見ているのが見えた。

「っ、終わったの?」

「うん。マドちゃんも?」

「終わった」

「ありがとね」

「……別に良い」

「眠かったら寝てても良いよ?」

「え?」

なんか驚くようなセリフが聞こえた。思わず、円香は瞬きしながら菅谷を見上げる。

「……何言ってるの?」

「や、なんとなく眠そうだなって思ったから」

「……」

悔しくて腹が立ったが、正解だった。遅寝早起きなんてすれば眠くて当然の結果とも言える。

……とはいえ、だ。寝るかどうかは別問題だ。

「なんか世話焼かしちゃったし、寝ててよ」

「……仮にも異性と一つ屋根の下、二人きりなんですけど。デリカシーどこに置いて来たの？」

「え……あ、そ、そっか……いや、別に何もしないけど」

「別の意味で眠れないってば……!」

「ズ、ズ、めん……」

こういうのは理屈ではない。「リカなら確実に何もしない」と分かっているけど、やはり少し緊張してしまうものだ。

まあ、お陰で眠気は吹っ飛ん……いや、吹っ飛んでないけど眠れそうにないので、諦めはつく。

そんな時だった。菅谷が「あつ」と声を漏らした。

「とおるんも呼べば良いのか。呼ぶね」

「……ああ、まあそうだけど」

確かにもう起きている頃合いかもしれない。予定なんて雛菜に誘われていない限り絶対はないし、連絡を取るのもアリだ。

「じゃ、横になって。俺呼ぶから」

「はいはい」

有り難くソファアの上で寝転がった。

電話をかけ始める菅谷を最後に、少しずつ視界がぼやけ、そして閉ざされる。ホント、変な所だけ鋭いのも透と一緒にだ。

まあでも、それでこつちにキッチンと気を回してくれるのだから、やはり良い子であるのだろう。

こうして労ってくれるなら、また世話を焼きに来るのも悪くないかも……なんて思いながら、意識を手放し……。

「もしもし、とおるん？ うん。俺。いや詐欺じゃなくて。……ああ、マドちゃん？ 今の俺の横で寝てるよ？」

一気に覚醒し、目を見開いて数多くある言い回しから最低最悪な最適解を導き出したバカタレに、パキケファロサウルス並みの特攻をぶちかました。

「え？ いや……おぐうつはあああああああ？？」

吹っ飛ばしたおたんこなすは廊下に叩き出される。手放され、宙を舞ったスマホをキヤツチし、円香は耳にあてがった。

『ねえ、どういう事？ どういうつもり？ ちょっと、いくら菅谷でも樋口とそういうのは本当に……』

「違うから落ち着いて浅倉」

『……樋口?』

ブチギレている。透にしてはあり得ないくらいに低い声音で発されたその言葉は、怒気以上、殺気未満のそれが込められていた。

「ごめん、ホントごめん」

『何が? ……え、まさかほんとに?』

「違うから。バカがバカ言つてごめんつて事。私が送ったチェイン見たなら分かると思うけど、掃除しに来ただけ」

『その後にナニかしたつてことは?』

「無い。今から寝ようとはしてたけど、二人だけで寝るのはあれだし、浅倉もそろそろ起きたかなつて思つて声掛けただけ」

『寝ようと(意味深)?』

「違うから。普通に」

嘘をついているかいないか、それは透ならすぐに分かるだろう。

『……ま、樋口がそう言うなら良いけど』

「うん。そう。とにかく……もう眠いから、早く来て」

『分かった』

それだけ話して、電話を切った。今度こそ眠れる……と、思って、スマホを机の上に置いてからソファアアの上で寝転がった。

「……あの、俺に何か言う事は？」

「日本語勉強して」

× 屍からの苦言を冷たくあしらってから。

×

「お邪魔しまーす」

透が家に来た頃には、円香はもう睡眠中のように「すう、すう……」という綺麗な寝息が耳まで届いてくる。

無事に眠っているようだが、あの人の誤解しか招かない言葉選びをした阿呆はどこに居るのだろうか？

そう思って、とりあえず樋口より先に菅谷の寝室に入ってみると、胡座をかいてティッシュを手にかマキリのフィギュアをいじっていた。

「……何してんの？」

「埃取り」

「樋口は？」

「ソファアアで寝てる」

「……なんで部屋で籠ってるの？」

「……マドちゃん寝顔、綺麗で変な気分になったから」

彼なりの理性を抑え込む方法がこれのようだ。とはいえ、そのセリフで何となく菅谷が円香に、本当に何もしていないことは理解した。

……いや、本当は最初から分かっていただろうに。しかし、何故か頭に血が上ってしまつた。やはり、心の奥ではまだ菅谷を信用していない、という事だろうか？

そんな自分に、珍しく自己嫌悪していると、菅谷がカマキリを机の上に置いて立ち上がった。

「でも、来てくれて助かつたよ。やっと友達が来てるのに内職みたいなことしなくて済む」

「そんなに樋口の寝顔見て興奮したの？ すけべ」

「いや、興奮というか……その、何？ とにかく、綺麗だなんて思つて」

「……ふーん」

聞きながら、透は内心、思つた以上に不愉快ではなかつた。どちらかというところ、そのまま樋口トークに花を咲かせたかつた。樋口が起きていると、本人が満更でもないくせに止めるから、そういう話は出来ない。

まあ……でも円香もいつ起きるか分からないし、この辺で……と、思つたのだが。

「……」

「……すう、すう……」

リビングに戻り、寝息を立てている円香の顔を菅谷はぼんやり眺めている。眠っている円香の体には毛布が掛けられている。多分、菅谷がかけたのだろうが……その菅谷は円香の寝顔を見て頬を赤らめている。

うん、水と栄養剤をぶち込もう、と思った透は、速攻で睨かせに行った。

「ちなみに、樋口のどんなところが綺麗？」

「え、見た目も中身も」

「具体的に」

「うーん……中身は、まあ普通に面倒見良いよね。とおるんと長く付き合ってたからか、俺みたいなのと仲良くしてくれるし。優しい子だよ」

「ふーん……他は？」

「他には、努力家な所。今日なんとか、俺やおるんに勉強教えるために、多分、自分も相当頑張ってくれてたよね。あと、今日の家事色々手伝ってくれたのも、親に色々教わったんだらうなってくらい、テキパキやってくれてたし」

「へえ……」

ニヤニヤしながらそれを聞く。この男、そんな恥ずかしいことをよくぞ平気で言える

ものだ。

「見た目は？」

「え、見た目のどこが可愛いと言われても……全部？」

「だから、具体的に」

「泣きぼくろも、垂れ目も、微妙な癖つ毛も、全部」

「わかるわかる。樋口可愛いよね」

「あ、同性のおるんから見てもそうなんだ？」

「そりやそうでしょ」

「そうだ。同性の視線でしか見えないことも教えてみたい。

「……ちなみに、同性ゆえの私しか見えないとこだけど、腰回りは胸回りよりすごいよ」

「え……いや、そんな話をされても……」

「いやいや、エツチな話じゃなくて。それに似合う私服とか超あるって事。今日は掃除

する為に来たからか、ラフだけど」

「……う、うん……？ あ、指、綺麗だよ。マニキュアとか似合いそう」

「あー、それあるかも。……ここだけの話、実は樋口って」

直後、起き上がった円香がソファアの上にあったクツションを投げつけた。見事に透の顔面に直撃、後ろにひっくり返った。

「……あんたら……ホント、大概にしなさいよ……い！」

ギロリと顔を真っ赤にして2人を睨みつけていた。菅谷にも一撃食わせるつもりだったのか、円香はもう一つ、足元のクツシヨンに手を伸ばす……が、自身に掛かっている毛布を見て、思わず手が止まる。

……おそらく、菅谷がかけたものだろう。自分に毛布をかけた覚えがないから。

「ごめん、起こした？」

当の菅谷は、何一つ察する事なくキョトンとした顔で円香を見ている。

腹が立つ。なんかその無邪気な表情が、とつても腹立たしい。まるで起きていたの……正確に言えば、二人が話しながらリビングに来た時点で起きたことを気付いていたようにも見えるし、本当に何も気付いていなかったように見える。

だから、なんか癪に障る。とにかく何か言つてやりたくなつた円香は、頬を赤らめたまま言つた。

「……さっきの言葉、何処まで本気だったの？」

「え？」

聞いてから後悔した。自分は何を聞いているのか、と。まるで褒め言葉が嬉しかったみたいだ。

そして、そんなことを聞いた所で、答えなんて分かっている。

「全部だけど？」

「ーっ……！」

こういう事を、平然と言つてのけるのだ。この男は。

今度こそ、クツションを足元から掴み、照れを隠すように菅谷の顔面にクリーンヒットさせる。

「おぶっりっ？」

「最低！」

ひっくり返つた菅谷に、それはまるで自分に対して言つて言っているかのようなセリフを吐いたあと、布団をかぶつて再び不貞寝し始めた。

×× 本当に円香は眠つてしまい、残つたのは菅谷と透。起こさないように、二人で菅谷の寝室で、パソコンを使って映画を見ていた。

見ている映画は、今日はハリポタ。それも不死鳥の騎士団である。のんびりと2人で眺める中、菅谷はふと立ち上がった。

「ごめん、トイレ。先見てて良いよ」

「待って」

「えっ」

ガツと手首を掴まれる。

「ダメ」

「え、漏れちゃうんだけど……」

「リカ、ホントは別にトイレとか行きたくないでしょ、この前、映画見た時から思ってた」

「え……な、なんで……？ 別に……」

「良いから。見てて」

「いやちよつと……」

抵抗しようとしたが、遅かった。画面では、ハリーとチョウの濃厚なキスシーンが始まってしまふ。

それにより、思わず菅谷は目を逸らす。

「……やっぱり」

「つ……う、うるさいな……苦手なんだよ……」

「ふふ……ほんと、そういうところ可愛いよね……」

からかっているかのように微笑む透。そういうところ、菅谷にとっては憎たらしかった。それでも恨めないのだから、得な性格をしている。

もう見てしまった以上、菅谷にトイレに行く理由はない。仕方なく、透の隣に座り直した。

「ねえ、リカ」

「……な、何？」

「さつき、樋口の魅力について語ってたけどさ」

「うん」

「私はどうなの？」

「……え？」

「私のことは、どう思ってくれてるの？」

急になんだろう、と菅谷は片眉を上げる。透はいつもの無表情で自分を見ている……が、髪で隠れていて、薄らと出ている耳は、少し赤く染まっているように見えた。

「それは……さつきと同じ感じで？」

「うん」

もしかして……透も褒められたいとか、そういう子供っぽい所があるのだろうか？

まあ、それを言うくらい、菅谷は構わないが。

「とおるんは……中身は、ぼんやりしてるよね。基本、俺と一緒に。最近、俺は一人暮らしで色々、考えることがあるから、前よりぼけつとする事は減ったけど……でも、とおるんと一緒に何も考えずに、適当な会話するの、とても好きだし、そういう所が良いと思う」

「うん……それで？」

「あと……所々で、実は子供っぽい所が出るの、なんか可愛くなって思う。マドちゃんをいじる時でも、……今みたいに、他の人が褒められてるの見て、自分も褒められたくなっちゃうとかか」

「……えへへ」

そのはにかみ方も、少し可愛かった。この子、やっぱり中身は思った以上に年相応じゃない。

「外見は……そうだな。やっぱり、綺麗だと思う。その薄紫っぽい髪も、ぱっちりした目をしてるのに落ちて着いた雰囲気があるとかも、形の良い唇も。……あ、あとファツションの流行とかに、割と敏感な所も。高校に上がったから、少し化粧品に興味持ったでしょ」

「……え、わ、分かるの？」

「分かるよ。全然違うし」

それを聞くと、今度は耳だけでなく頬も赤くなった。もしかして、嬉しいのだろうか？ と、思った菅谷は、すぐに続けて言った。

「こう見えて俺、目視だけでアリの種類も見分けられるから。とおるんがリップしてるとか、指にナチュラルな色のマニキュアつけてるとか、そういうのはすぐわかるから」

「……私はアリと一緒って事？」

「あ、あれ……」

なんか少し怒ってしまったようだ。やはり、虫の例えは良くないみたいだ。

「と、とにかく、とおるんもマドちゃんも、同じくらい好きだよ」

「……そっか……もう、良いよ。交代する？」

「いや……俺は、なんかそういうの慣れてないから……」

丁重にお断りしつつ、菅谷は逃げるように映画に目を向けた。というか、なんであのタイミングでそんな話を振ってきたのだろうか？ ちなみに、ハリーポッターの中で、不死鳥の騎士団が一番、好きだったりする。

「実はさ、リカ」

「？ な、何？」

「私、もうすぐ誕生日なんだよね」

「……あ、そうなの？」

「うん」

それは初耳だ。何かあげないと……と、思ったが、急な事でイマイチ、何も思いつかない。

「……でさ」

そんな菅谷を捨て置いて、透は話を続けた。

「当日は多分、雛菜とか小糸ちゃんとか樋口が、何かしてくれると思うんだ。毎年、してくれてるから」

「あ、そうなんだ」

「だから、リカ。前日に、私と出掛けない？ 二人で」

「え、マドちゃんは？」

「一緒の良い気もしたし、実際声かけたんだけど……予定あるから二人で行きなつて」
多分、翌日の準備だろう。本当に浅倉透という人間は、周囲の人から愛されている。

何にしても、菅谷としては断る理由もない。

「……わかった。どっかいこっか」

「うん。ありがとう」

「別に」

そんな話をしながら、その日は円香が起きるまで、二人で映画を見た。

透明と無色は別物。

浅倉透の誕生日は、5月4日。みどりの日である。自然の恵みに感謝し、豊かな心を育む日。

別にだからと言って、透は自然の恵みに感謝なんてしていない。いや、しているけど「その日だから今日は一層、感謝しよう」ときめて水やりとかするわけではない。

そして、今日はその前日。透は、今日も誕生日を祝ってもらえる日。待ち合わせ場所に到着していた。いつものようにマイペースに家を出たつもりだったが、到着したのは集合時間の10分も前だ。

「……」

でも、特に後悔も何もなく、のんびり待機。今日の服装は、黒いロングスカートにデニムジャケット、そしてその下はグレーのノースリーブ。上に着ているジャケットは肩を出すように袖だけ通している。

最近、購入した私服だが、我ながら似合っている自覚はある。ただ、大事なものは自覚ではなく、菅谷がどう思うかだ。

ふと時計を見る。待ち合わせ時間まで、あと8分。

「……え、まだ2分しか進んでないの？」

少しショックを受けるような眩きを漏らす。なんか、思ったより長く感じていた。早く来ないかなーなんて思った直後、すぐにやって来た。

「おーい、とおるん」

「あ、リカ。遅い」

「え、8分前なんだけど」

「私より遅かったら遅いし」

「あ、そう。ごめん？」

謝罪を聞きつつ、両手を腰のあたりで組んで、菅谷の表情を窺う。気の所為か、少し頬を赤らめていた。

「どう？」

「っ……し、私服？」

「そう。……似合ってる？」

「あー……う、うん……でも、肩を隠そうな……？」

「え？」

言いながら、菅谷は透のジャケットの、垂れ下がった肩の辺りを掴み、キチンと羽織らせる。

「なんで？」

「……俺が恥ずかしいから」

「ふーん？ ……照れてるんだ？」

「つ……いい、良いでしょ、別に……。それに、風邪引くし……あとは……まあ……直視、したいけど出来ない、し……」

そう途切れ途切れに告げる菅谷は、ほんのりと頬を赤らめている。小糸とはまた違った、からかい甲斐がある男だ。

今回は、透の方から菅谷の手を取った。珍しくキョドっている同級生の手を取ると、強引に引いて駅へ向かう。

「じゃ、行くよ」

「え……あ、うん」

×そのまま二人で、大きめのショッピングモールに電車で向かった。

×
× ショッピングモールが、菅谷は昔から好きだった。いろいろな個性的なお店が並んでいて、どこを見ても煌びやか、誰も彼もが楽しめる夢のお店……などという理由ではなく、自分の好きなものや欲しいものが売っている可能性が高いからだ。

夏場などは子供ながらに、よく売られているオオクワガタやノコギリクワガタを買い

占め、森に放ちに行つたものだ。外国産のクワガタなどはそうもいかなかったが。

今では、他にも興味あるものが増えたため、純粹に楽しめるようになったが。

「ね、リカ。これどう?」

「ん……んー、少し派手じゃね?」

「あ……そうかも」

透の買い物……というより、もはやデートでしつかりと普通にエンジョイしていた。

今、透が身体にあてがっていたのはスカート。短い赤のやつだ。似合わないってことはないだろうが、やはり透には落ち着いた色が似合う。

「そういうの、秋に履いたらかなり合うかも」

「あー確かに?」

「それにする? プレゼント」

「いや、いい」

いいんだ、と思いつつ、二人でそのお店を出た。特に何かあげるとか、そういう話はないが、プレゼントをあげる、或いは貰うのが前提となつてデートしていた。

さっきのスカートは、円香なら似合っていたかもしれない……なんて思っていると、透が隣で手を繋いだまま聞いて来た。

「リカってさ、女の子と二人で出掛けたことあるの?」

「去年、とおるんと学祭行ったじゃん」

「それ以外」

「え、ないけど……なんで？」

というか、友達も多くなかった自分に、そんな事あるはずがない。そんなの、透にも分かつているはず。

透はその意図に答えるように続けた。

「なーんか、割と普通にしてるし、意外とハッキリ何が似合うか似合わないか言うんだなって」

「？ え、だって聞かれたことには答えないとでしょ？ ていうか、さっきの普通に似合ってはいたし」

「いや、普通はほら……男の子だったら『良いんじゃない？』とか『可愛いねー』とか『俺そういうの疎いから』とか、そういうの言うでしょ」

「それはつまり、その男はその女の人の人に対して、それしか思わなかったって事では？」

まあ、実際菅谷も、透や円香に相談されたら普通に答えるが、他の女の人には適当な返事しかしないかもしれない。その人に興味が持てれば別だが。

そんな事よりも、さっき気になることを言った。

「ていうか……普通って、とおるんは他の男と出掛けたことあるの？ 二人で」

「え、無いけど」

「無いなら、良いけど……」

「？ 何が良いの？」

「え、何って……」

「そういえば、何にだろうか？ 反射的にモヤってして、つい言ってしまった事だが、何にモヤモヤしたのか分からない。」

「なんとなくで、自分の内心を推測するように唸りながら答えてみた。」

「……なんか、俺より先にとおるんとデートする人が……ズルかった、とか？」

「何それ？」

「俺も分からん」

「そんなこと言われたら、樋口とか雛菜とか小糸ちゃんとか、もう何度もデートしてるよ」

「うわ、羨ましい。……というか、俺マドちゃんとデートした事ないや」

「この前、おうちデートしてたじゃん」

「え、あれデート……？」

「まあ、リカが言えばなんだかんだ付き合ってくれると思うよ」

「よっしゃ」

「徐々に二人特有の勝手な会話に変わっていく。いないはずなのに巻き込まれている」

円香は、今頃くしやみでもしているかもしれない。

「あ、じゃあさ、マドちゃんのお誕生日の時はわざわざ二日に分ける事ないように、市川とその小糸つて子ともデートす」

「ダメ」

「え……だめなの？」

「ダメ」

意外にも、きつぱり断られてしまった。ていうか何故、透が断るのか？

何となく気になったので質問してみようと思ったが、その前に透が菅谷の手を引いて、通りかかったお店に入った。

「あつ、このお店見たい」

「え？ あ、うん」

入ったお店はメンズ服のお店だった。誤魔化してるのがよく分かる。問い詰めても良いだろうか？ というか、ここまで誤魔化している事に触れてみたい、という好奇心が少しだけ強まっていく中、透は近くの革ジャンを手に取り、菅谷に手渡した。

「はい」

「え？」

「着てみて」

「俺が？」

「ここメンズの店だよ？」

「分かってたんだ」

「当たり前じゃん」

「どうやら、誤魔化そうとしたわけでもなさそうだ。……もしかしたら透なりに、自分だけ楽しむのではなく、二人で楽しめるようにしてくれているのかもしれない。」

「これまででも十分、楽しめていたが、そう言ってくれるのならお言葉に甘えるしかない。」

「ありがとう。じゃあ……」

早速、着てみた。

「……うん。やっぱり似合う」

「やっぱり？」

「うん。前々から、樋口と『もう少し背が伸びたら、革ジャン似合いそう』って話してたんだよね」

一年前までは、身長に大きな差はなかった。三人で平均、156センチくらいだったが、透が159センチ、円香が158センチで、菅谷は165センチにまで伸びた。おそらく、まだ伸びるだろう。

「でも、これから夏だしなあ……」

「ま、そっか」

「でも、とおるんが似合うって言うってくれるなら、着てみようかなあ」

「良いと思うよ……あ、じゃありカの誕生日、それにしようか？」

「え、何かくれるの？　じゃあ昆虫博のチケットが良い」

「分かった。それは絶対にあげない」

「え、なんでそんな意地悪を……」

××そんな話をしながら、結局何も買わずにお店を出た。

×

×午前中から出撃したため、お昼を途中で取ることにした。フロアマップが載っている

案内板の前で、菅谷が透に聞いた。

「何食べる？」

「ん〜……」

「ご馳走するよ。誕生日だし」

「え、良いの？」

「もちろん」

銀座やら何やらの飯屋に比べたら、ショッピングモールにあるお店など安いものだ。

「じゃあ……お寿司が良い」

「寿司……あるかな。少なくともフードコートにはなさそう」

「3階に、フードコート以外のお店あったし、そこで見てみようよ」

「だな」

そう決めると、二人でエスカレーターを上がる。三階は飯屋以外にも、雑貨屋やアクセサリー、ゲームセンターなどがあり、如何にも「その他」という分類をされるようなお店が並んでいる。

ちなみに、服やバッグ、帽子など……或いはフードコートが置いてあるのは二階、食料品や本屋、スポーツ用品などが一階だ。

三階の飯屋を見て回っていると、本当にお寿司屋さんが目に入った。……が、まさに今がお昼時。ゴールデンウィークの真つ最中なこともあつてが、既にオーダーが掛かっていった。

「あーあ、混んでるよ」

「ね、リカ」

「何？」

「ゲーセン、見てみたくない？」

「あ、良いね」

いつの間に興味を持ったのか知らないが、透が言うのならせつかくなので見てみることにした。

「リカ、ゲーセンとか行ってた？」

「いやあんまり」

「小学生の時、俺が欲しいって言った赤とんぼのぬいぐるみを、父ちゃんが7千円かけてまで取ってくれて以来、なんか怖くて」

「ぶっ、うける」

自分の金じゃなくてよかった、と心底思っているので、軽いトラウマでさえある。

「ウケないから。俺、途中でもういいって言ったのに……」

「良かったじゃん」

「や、何が？」

「色々、リカは学べたでしょ」

「ああ、うん。まあね」

「7000円もかけずに取る方法を活かす時だよ」

「それは学んでないけど」

というか、何か欲しいものでもあるのだろうか？

とりあえず、透の後に続いて中を見て回る。やはり、騒がしい。こういう生き物と一

番、縁が無さそうな場所はあまり得意ではない。

まあでも、透が楽しめているのなら、とりあえずそれで良いかな、なんて思っ
て、のんびりと見て回った。

そんな中、透が呟くように声をかけて来た。

「すごいね。ゲーセン。何が置いてあるのかさっぱり分からない」

「分かる」

「え、分かるの?」

「え? うん」

昔はメダルゲームとかぬいぐるみをとる筐体とか格闘ゲームとか、そんなんばっ
かだったから分かりやすかった。カードゲームはちよつと理解が追いつかなかったが。

最近では、なんか洗濯機みたいな奴とか、なんかやたらと騒がしい奴が多いガンダム
のゲームとか、コクピットみたいなのに乗って撃つ奴とか、初心者には敷居が高い物ば
かりだ。もつとも、そんなのを気にする二人ではないが。

プライズゲームでさえ、なんのアニメだかわからないキャラクターのフィギュアやぬ
いぐるみばかりだ。

「じゃあ、あの筐体何?」

そんな中、急に透は遠くの筐体を指差す。何が「じゃあ」なのか分からないが、とり

あえず顔を向けると、UFOキャッチャーがあった。最近流行りだけど、菅谷は全く興味がない「鬼滅の刃」のファイギュアだった。

「あれは……UFOキャッチャーじゃない？ 鬼滅の」

「じゃああれ」

「あれ？ あれは……ドラゴンボールのファイギュア」

「じゃあ……あれ」

「あれは……なんだっけ。じゅ……呪術廻戦？ のファイギュア」

「すごい。めっちゃ詳しいじゃん。もしかして、来慣れてる？」

「全然？」

微妙に噛み合っていない会話のまま、二人はゲーセン内を見て回る。残念ながら、二人とも漫画やアニメに興味は無い。ファイギュアコーナーの先に出て、アーケードゲームの所に出た。

「ここは分かる？」

「え、分かんない」

「だよ。一応、見てみようよ」

「うん」

まず目に入ったのは、艦これOC。実在した艦隊が擬人化し、美少女となって深海棲

艦と呼ばれる比喩しづらい化け物を倒す……という、シミュレーションゲームのゲーセ
ン版だ。

右手のレバーで速度を調整しつつ、真ん中の舵で移動する方向を定め、連れて行った
艦娘の艦種ごとの攻撃を敵に叩き込むゲームだ。

画面の上に並んでいる五人の女の子を見て、透が聞いた。

「リカ、どの子が好み？」

「え？ とおるんかマドちゃん」

「いや……世界中の女の子からの候補じゃなくて、上の五人」

「あ、ああ。ごめん」

そこを指摘されて、改めて顔を見る。

「……みんなおんなじ顔に見える」

「うん。私にもそう見えた」

「身長と髪型と武装が違うだけじゃないのこれ？」

プレイヤーから「チツ」「は？」という反応が漏れ出す。透にも菅谷にも聞こえてい
ない。

そんな中、ふと菅谷の目に入ったのは、誰も座っていない筐体の映像。そこで流れて
来たのは、弥生だった。

「あ、この子」

「え、ロリコン？」

「いや、子供の頃のとおるんが不機嫌そうにしてたら、こんな感じかなーって」

「……や、私こんなに目つき悪くないし」

「まあ普段はね？ 寝起きならこんな感じそう」

「寝起き機嫌悪いのは樋口だよ。この前だつてクツション投げられたじゃん」

「そっか」

あれは起きてる本人を目の前に誉め殺しを続けた二人の所為であるからであつたが、二人ともさっぱり忘れていた。

「ていうか、どつちかつて言うのと樋口に似てない？」

「あー……分かるかも。ヘアピンとか」

そのまま二人で、さらに奥へ進む。目に入ったのはWOCF。サッカーのカードゲームだ。11人の選手と、4人の控え選手を並べ、カードを動かしつつ、左右についているパス、カット、シュートのボタンをケースバイケースで押すゲームだ。

「ちよつと面白そう」

「やってみたら？」

「うーん……でも、サッカー選手知らないんだよなあ。ボビチャとク○イフしか知らな

「い

「? 誰それ?」

「めっちゃ上手い人達」

「あ、上手いと言えばあの人知ってる」

「誰?」

「なんだつけ。T i k t o kの……」

「めっちゃ気になる。後で教えて」

「うん」

ああいうSNSに限って職人がいたりするものだ。一体、世界中に何人のピタゴラス
イツチ製作者がいるのか。

その奥に行くくと、今度はFGOのACが目に入った。ソシャゲ界限では有名な鬼のガ
チャゲーだが、ゲーセンでもそれはご健在。カードをチョイスし、キャラを操作しつつ、
攻撃とスキルをうまく使って敵を倒す。

いわゆる必殺技のような「宝具」もあるが、当てるのがかなり難しく、素殴りした方
が早い。

「めっちゃうける。沖田総司が女の子になってる」

「それな。ていうか、坂田金時って金太郎でしょ? 赤エプロンもしないでめっちゃ

マッチョじゃん」

「え、金太郎のあれってエプロンなの？」

「知らないけど」

そんな話をしながら、アーケードの場所を抜けた。次に見つけたのは、音ゲーコーナーである。

「リズムゲームかー。苦手なんだよなー」

「あー分かる。なんか、タイミングに合わせるの、なんかやだよーね」

「でも、カラオケで歌うのとか楽器とかやるのも同じなのに、なんでゲームだとダメなんだろう」

「あー確かに。なんでだろうね」

「ていうか、今度カラオケいかない？」

「良いね」

もはやゲームへのコメントもやめて、二人でそのコーナーを通り過ぎていった。

なんだかんだ、二人とも100円玉一枚、投入する事なくほぼ一周してしまふ。残り
はプリクラだけが……。

「撮る？」

「いや、初プリは樋口と一緒に良くない？」

「だよね」

そんなわけでスルー。そのままゲームセンターを出ようとした時だ。ゲームセンターの出入り口は一つしかなく、そしてそこにプライズコーナーが溜まっている。

その景品の中に、見つけてしまった。弥生のフィギュアを。

「ねえ、リカ！ これ、さっきの子じゃない？」

「あ、ホントだ」

「……樋口に、取ってあげない？」

「良いね。面白いかも」

そんなわけで、結局お金を使う事になってしまった。

橋渡し形式……つまり、確実に取れるけど、取るのにそこそこ金がかかるパターン。しかも、アームの強度によっては一手ミスったら何もかもおじゃんになる可能性さえあり、初心者がやるにはそれなりの高額を覚悟するしかない。

「うおつ、右側のアームだけ強くない？」

「メツチャ傾くやん。どうすんの？」

「え、知らない。もっかいセンター狙う？」

「え、分かん。てか、調べようか」

「動画あるかな？」

「それだ。……え、こんな地道にズラしていくわけ？」

「やってみるしかないでしょ」

「私、やるしかない、って言葉めっちゃカッコ良いと思うんだよね。映画で出たらなんかテンション上がるし」

「あ、分かる。なんか分かんないけど良いよね」

「え、分かるの？ 分かんないの？」

「分かるでしょ？」

「あれ、分かるって何が？」

「何がって何が？」

なんてボソボソ話しながら、二人でトライを続ける事、27回目。それどうやって自分の体重を支えているの？ と疑問に思う程、角が棒に引つ掛かっていた。もう台を押せば振動で落ちるんじゃないか、というレベル。

そこへ、慎重にクレーンが降り、菅谷と透はいつになく興奮気味にそれを見守った。

「……きた」

「……きたきたきたきたきた……！」

最期の一押しは、アームの先端。そこで、引つ掛かっている角の部分を下に押し込む。そうすれば……ゴトリとようやくお宝がこんにちは。

「とつたあああああ！」

思わず舞い上がってしまった二人は、その場でお互いに身体をギュツと抱き締めあつてしまった。

透の重心が若干、横に逸れたため、落とさないよう遠心力を利用するように、そのままグルンつと横に旋回させる。

勿論、ゲーセン内の通路は狭い。足をクレインゲームの筐体に強打し、そのままフアールを喰らったサッカー選手のように、足を押さえて転げ回るハメになる透だった。

「あ、ごめん」

「ぐふっ……」

「……つて、とおるんスカートスカート！ 太ももまで出てるよ」

「……何とかして」

「な、なんとかって……」

とりあえず、上着を下半身にかけてあげた。……なんか、ドラマでよくある「唐突な陣痛とその場に偶然、居合わせた医者によつてその場で出産することになった人」みたいだ。

となると、透には夫がいるのだろう。……なんか、嫌だ。その夫が、例えば円香なら

良いけど、他の人なら少し困る。

なんにしても、こんな姿を他人に見せるわけにもいかなかった。肩を貸して立たせてあげることにした。

「起きて。肩貸すから」

「……正直、それ待ってた。『唐突な陣痛とその場に偶然、居合わせた医者によつてその場で出産することになった人』みたいなことされた時はどうしようかと思つた」

危なかつた。どうされる所だつたのだろうか？

景品だけ回収してから透の腕を掴み、自身の首の後ろに回し、身体を真横に並べて持ち上げる。……少し、柔らかい感触が右半身に触れる。言わぬが花であることは重々、承知しているが。

とりあえず、立たせてあげて、ゲーセン前の腰掛け用の椅子に運ぼうとした直後だつた。

「よっ、と」

「うおっ、重っ……くないです」

「よろしい」

ズシツと背中に重心が掛けられる。両肩の上から両腕が垂れ下がり、おんぶさせられそうになっている事に、早々に気づき、慌てて透の両足を抱える。

「どしたの、急に？」

「足痛いしお腹すいたし動けない。このまま運んでー」

「それは良いけど、足ほんとに平気？」

「大丈夫大丈夫」

そのまま二人でさっきのお寿司屋さんに向かった。

寿司屋もゲーセンも3階にあるので、そこまで距離はない。それなのに、少し心拍が速くなっているのは何故だろうか？

少し心臓を落ち着かせようと、なんか何かを意識しようとしていると、耳元にある透の口が、まるで囁くような声を発した。

「ふふっ……顔近っ」

「……ほ、ほんとに」

「キスとか出来ちやいそう。横向いてよ」

「いや……向いたらしちゃうでしょ」

「だよね」

……少し、意図が分からなかったが、言及はしなかった。なんか、したら何かが変わってしまう気がする。自分と透だけでなく、円香との関係もだ。

透から迫撃される前に、早めに話題を逸らそうと思い、口を開きかけた時だ。後ろか

ら回された人差し指が、自分の開きかけた口に当てられる。

「……安心して。もうこれ以上は何も言わないから」

「……は、はひ……?」

「……ふふ」

変な返答が漏れた菅谷とは対照的に、透は不敵な笑みを浮かべていた。

寿司屋に到着し、完全にいつものノリに戻った透は、背中から飛び降りながら呟く。

「わっ、回転寿司なのに100円じゃない。ホントに奢りで良いの?」

「え? あ、ああ。良いよ。誕生日イヴだし」

「誕生日イヴ最高」

なので、菅谷もなんとかいつものノリに戻す事にした。

「……」

「そういうえば、とおるんは寿司とか何好きなの?」

「え? あ、ああ。うん。えんがわ」

「意外と高いのがお好みで……」

とはいえ、菅谷も好きだが。

「ていうか、菅谷は回転寿司初めてじゃないの?」

「初めてじゃないよ?」

「マジかー。なんか、お金持ちの人って高いお寿司ばかり食べてるイメージあった」
「父ちゃんとかそうだけど、母ちゃんは元々、お金持ちじゃなかったから、連れてってくれてた」

「へえ……」

そんな話をしながら、案内された席についた。

菅谷が聞いた話では、父親の親に猛反対され、母親の元ヤンだった過去を暴かれたりし、それでもメチャクチャ頑張ったらしい。

それを思うと、世の中に不可能なんてないのかも、なんて菅谷は思ったりしてしまった。特に、好きな人のためならば。

「お、早速えんがわ」

流れてきた二貫一セットのお皿を透は早速、取った。自分の前に置くと、醤油を垂らして食べる。

その様子を、菅谷はのんびりと眺めた。なんか透にしては美味しそうに食べてくれたので、ご馳走のし甲斐があるというものだ。

「美味しい?」

「美味しいよ。はい」

「え?」

一貫、残った状態で差し出して来た。

「シエアして食べようよ」

「え、良いの？」

「うん。どうせリカの奢りだし、もう一貫、食べたかったら、また取れば良いでしょ？」

「……じゃ、もらう」

もしかして、これも友達と来た時の食べ方なのだろうか？ 割と面白いかもしれない。

一口で一貫、頬張る。醤油の味が染み渡ったえんがわ特有の歯応えが、口内に響き渡る。やはり、美味しい。

「美味しい」

「お、次とろサーモン」

「食べよう」

そのまま、二人でいくら軍艦、中トロ、ハマチ、カツパ巻き、かずのこ、何を思ったかビーフサラダというよくわからないものも手に取り、意外と美味かったので調子に乗ってウニ納豆ビーフ（二貫550円）を食べて食欲が失せ、少し食休した。

「……口の中、なんか気持ち悪い……」

「……わかる……お茶飲む？」

「ありがとう……」

そもそもここまでお茶を飲まずに食べてこられたことに驚くべきだが、それはさておき菅谷が二人分のお茶を用意する。

「ふう……いやー、酷かった」

「うん。泣くかと思った」

涙出るほどの食感はある意味初めてである。癖が大きすぎた。よほどのマニアでもない限り、あれを頼む人はいないだろう。

「……うん。決めた」

「何が？」

ぐったりしてる中、透が何か思いついたように声を漏らす。本当に急だ。

「プレゼント」

「え？」

「すこし、大人になってみない？」

「いや任せるけど」

「リカも」

「え、俺も？」

「うん」

プレゼントの話ではなかったのだろうか？ 別に構わないが。

「何にするの？」

「後で言う」

「後？」

「うん。それよりほら、食べようよ。口直しに、イカ食べよう」

「口直して普通ガリじゃないの？」

「え、あれ口直しのためにあるの？」

×××なんて話しながら、とりあえずお寿司を食べ続けた。

×××会計を終えて、また手を繋いで二人で移動。今度は菅谷から手を繋ぎ、歩いた。

「とりあえず、あのお店にしようか」

「あ、うん」

透が並んで歩きながら指差したお店は、少し小洒落たアクセサリーショップ。どちらかと言うと女性向きっぽいけど、まあ両用っぽいので気にせず入った。

「で、何買うの？」

「ん、ピアス」

「へえ〜……あ、俺も少し興味あったんだよね」

「マジか」

中学の時は、アクセサリーの類は禁止されていた。高校ではどうか、校則なんて把握していない二人は知らないが、もしかしたらアリかもしれない。

「それでさ、せつかくだからお揃いにしたいなーって」

「え、俺と？」

「うん」

「良いけど……良いの？ 俺とお揃いになると、欲しいの買えなくなりそうだけど」

「なるべく、目立たないけど綺麗な奴で、何となく直感的にしっくりくる奴が良い」

「あ、俺も」

「やつぱり。じゃ、大丈夫でしょ。選ぼ？」

なんか見透かされていたような言い方で、強引に選ぶことになってしまった。まあ、お揃いというのもありだ。何せ、初めてのピアスな訳だし、せつかくなら記念に残る奴にしたい。

「……どれが良いかな」

「うーん……まあ、さっきの条件に当てはまる感じのを探すんでしょ？ 見て回ってればありそうじゃない？」

「だね」

そんな話をしながらお店の中を見て回っていると、透が大きな円のアクセサリーを手に取った。

「そういえばさ、たまにこれくらい大きな穴、耳たぶにあけてる人いない？」

「あーいる。俺、なんかああいうのダメ。なんかグロく見えて、気持ち悪くなつて来ちゃう」

「へえ、グロいのダメなんだ？」

「ダメダメダメ。ホラー映画とかも、グロいの見れないし」

「実はさ、お父さんが会社の人からゲーム機もらつて来るらしいんだけど、ソフトがないから何買おうかなつて思つててさー……バイオにしようかなつて」

「バイオくらいじゃ平気。全部じゃないけど、狩○英孝の実況見てるし」

「なーんだ、つまんない」

自分でも、拳銃でゾンビが撃たれて爆散するより、耳たぶに大きな穴空いてる人の方がグロいと感じる理由はよくわからないが、そうなのだから仕方ない。

「わっ、すごいこれ。重そう。こんなの耳に付けてたら、耳たぶ取れちゃう」

「お願い、想像したくない事言うのやめて」

「耳たぶに火口の断面のような切れ込み」

「……浅倉」

「あ、ごめん」

本当に苦手なのだ。昔、父親にハンターハンターを読まされた時も、割と本気でブチギレてしまったレベル。

そんな中、今度は菅谷「おっ」と声を漏らす。

「これ、良いかも」

「どれ？」

手に取っているのは、黒のピアス。リングのような形をしていて、コンパクトで綺麗なものだ。

「……あ、良いじゃん」

「とおるんも気に入った？」

「うん。これにしよう」

案外、簡単に決まった……が、形は同じだが違う色のピアスを見つけてしまえば、話は変わってくる。

「……俺かとおるんの、色変えない？」

「お……それも面白いかも。他、何色ある？」

「ブルーとシルバー……かな？」

「じゃ、リカはシルバーね？」

「あ、とおるんの選んでたんじゃないんだ」

「だって、私はリカが最初に選んでくれた奴が良いし」

そういうえば、誕生日のプレゼントを選んでいるんだった。それならば、当たり前と言えども、当たり前のことかもしれない。

「じゃ、買うかー」

「よろしくー」

×そんな呑気な話をしながら、二人でレジに向かった。

×

×帰り道。晩御飯も一緒に食べ終えた後、菅谷が送ってくれると言うので、透は浅倉家まで送ってもらうことになった。

買った後は、なんかピアスをつけるには色々と準備が必要との事で、色んなものを購入しに行つたついでに、また洋服やら何やらを見て回り、結局まだ二人ともつけていない。

少し、勿体無かつたかも……と、透が思つた時だ。

「とおるん」

「何?」

「公園、寄らない?」

「え？」

よく円香と昔、遊んだ公園の前まで来ていた。少し間が空いてしまったが、菅谷は透の手を引いて公園の中に入る。

「せっかくだからさ、ピラスつけて写真撮ろうよ。最後に」

「……」

同じことを考えていたようだ。

「うん。良いよ」

そんなわけで、並んでベンチに座る。

とりあえず、大きな鏡があるわけでも無いので、お互いでお互いの耳を空けることにした。

痛いとなんか嫌なので、なるべくお互いに「いくよ?」「うん」なんて声をかけ合いながらこなした。

ものの数分で、透の左耳、菅谷の右耳に穴が空き、左右対称でなく片耳に二つずつつけた。

「どう? リカ」

「綺麗だよ」

「ふふ、さんきゅ」

「こっちは？」

「綺麗だよ」

「男なんだけど……」

「でも綺麗だよ」

「……どうも」

そんな話をしながら、のんびりと夜空を見上げた。三日月が雲一つない空に浮かび、東京にしては、綺麗な星空が見受けられた。

「今日は、ありがとね。リカ」

「何が？」

「私のわがまま、聞いてくれて」

「え、いや別に全然平気。友達の為だし」

「……ふふ、ホントそういうと最高」

やはり、良い奴だ。気が合う、というだけでは無い。これで今まで友達がいなかったなんて勿体無い。本当はもっと楽しい思い出が作れただろうに。

それ故に、やはりもっと早く出会っておきたかった、と思う事も多い。……まあ、過ぎた事を思っても仕方のないのだが。

「ね、リカ」

「? 何?」

「写真撮ろ」

「良いよ」

「ジャングルジムで」

「え……マジで?」

「うん」

「危ないでしょ。脚、怪我してるし」

「えっ?」

「思わず目を丸くしてしまう。」

「……なんで?」

「足、ぶつけてからあんま俺の手を引かなくなったから、そうかなーって」

「……」

もしかして、途中から絶対、手を繋いでくれていたのも、家まで送ると言ってくれたのも、気付いていたからだろうか?

それを自覚した直後、今までとはまた違う緊張が胸の奥から伝わってくる。ホント、マイペースに見えて他人のこともよく見ている人だ。そういう人の良さが、自分を温かいものによって満たしていくのを感じていた。

だからこそ、透はもつと甘えなくなってしまう。円香のことを面倒見が良いとは言いが、自分だって人の事言えないのだ。

ベンチから立ち上がった透は、フラフラと回りながら思い出があるジャングルジムの方へ向かう。

「とおるん？」

「これ以上、怪我してほしくなかったら、ちゃんと手を握っててよ。私、登っちゃうからね」

「あ、そう。まあ、せめて俺の真上で登ってね」

話しながら、菅谷も後からついて来る。ジャングルジムに手をかける透。なるべくぶつめた方の脚を使わないよう、身体を持ち上げる。その真下で、菅谷はちゃんと見守ってくれていた。

そして、ようやく頂上に登り、鉄の格子の上に腰を下ろした。

「ほらね、楽勝」

「さすが」

言いながら、菅谷も登り、隣に座った。二人で月をバックに、並んでさつきより少し高い所から夜空を見上げる。

「……写真、撮るよ」

スマホを構える透。その横に、菅谷も身を寄せる。耳についているピアスがキラリと光り、二人の間に三日月が映る。

「撮るよ。リカ」

「……………んっ」

透が指でシャッターボタンを押す直前、チカツと街灯が消えかけ、透のピアスが映らなくなった。

「あ、やばっ……………」

それにより、反射的に透はイヤリングを写そうと菅谷の方に向く。

「どした？」

菅谷はそれに反応し、透の方に顔を向けようとした。

それにより、二人の顔によって月は隠れ、代わりに透の唇が何かに軽く触れた。視界に入っているのは、ジャングルジムから見える街の景色でも、月と星による明かりに照らされている夜空でもなく、菅谷の横顔。それが、至近距離に来ていた。

遅れて、カシャっという音が聞こえて、口を手で覆いながら顔を離す。

「っ……………」

「え、いま……………」

スマホの写真を見ると、透が菅谷の頬にキスしているように見える……………というか実

際、唇は頬に触れている写真が撮れていた。

事故、という捉え方も出来る。実際その通りだから。とはいえ、唇が異性に触れたことに間違いはない。

すこし、心臓がバクバク言っている……とはいえ、過ぎた事だ。それに、嫌な気分ではない。

「……ま、いつか」

「え」

「大事にしてね。初めてだから」

「……へ？」

彼が気にすると良くないし、微笑みながらそう言っただつた。しかし、忘れていた。相手は、その手の話にかなりウブな男子高校生であることを。

「……きゆう」

「え、そつちが落ちるの？」

顔を真っ赤にしてジャングルジムから落下しそうになった菅谷を慌てて掴み、手に持っていたスマホで円香に救援依頼を出して、何とか無事に帰らせた。

クリアな誠実さこそ信用に値する。

樋口円香は、机の前で頼杖をついていた。明日の準備は夕方までに終わり、小糸と雛菜は帰宅。ゴールデンウィークの課題も終わってしまった、菅谷の家に世話を焼きに行くのも本人がいないので出来ないため、割と退屈していた。

……少し、ソワソワしてしまう。透と菅谷のデートは、どうなっているのだろうか？別に、あの二人がどうなるかが知ったことでは無いはずなのに、どうしても気になる。付き合っていないよね？なんて思ってみたり。いや、まあ付き合ってるなら付き合ってるで別に結構だし、当人達の問題で自分が関与する所でもないし、もう勝手にして欲しい。

そもそもあの二人にはストレスしか感じてないし、あの二人が付き合った事で大人しくなるならそれはそれで良いかも……なんて徐々に苛立ちながら思っていると、その円香のスマホに電話がかかって来た。透からだ。

「もしもし？」

『あ、樋口？ ごめん、大至急助けて』

「！ 何かあった？」

まさか、雰囲気飲まれた菅谷に襲われた？ 今、もう夜だしありえない話でもないかも……と、思いつつ、絶対に阻止するつもりで、上着を着ながら準備をしていると、すぐに透の声が聞こえて来た。

『リカがジャングルジムから落ちそう。私の腕も、もう限界……』
「……」

やはり、バカは何処までいってもバカだった。とりあえず、ほっと胸を撫で下ろしつつ、苛立ちを解消するために八つ当たり気味に言ってみた。

「手、離しちやえば？」

『いや、ダメだから。今、リカ気絶しちやってるし、頭から落ちそうになってるし』

「あそう。どこの公園？」

『前よく遊んでた場所』

「りよ」

とりあえず、頷いてお迎えに行った。人の手助けがないと普通にデートも出来ないのか、と思いつつも、確実に付き合つてなさそうな事は分かった為、大急ぎで迎えに行つた。

×××
公園で菅谷を叩き起こし、家の前まで来てから男子は帰宅。残った二人は、とりあえ

ず円香の部屋に行く。

……と、いうのも、だ。

「……お土産で美少女フィギュアって、どういうセンス？」

「樋口に似てると思ったから」

「私こんなムスつとしてないし……」

お土産を買って来たと言うから部屋にあげたら、これである。

そう言いつつも、まあデートの間も自分のことは忘れてなかったことが嬉しくて、箱から出して机の上に飾って置く。せっかくなので、記念だ。

「……で？」

「ん？」

「それが、誕プレ？」

円香の指差す先には、透の耳。ピアスを指していた。

気付かれた、とでも言うように、透は少しだけ照れた様子で左耳を隠しつつ、小さく頷く。

「……うん。どう？」

「似合ってる。……けど、パールツクとかいつの時代の男女？」

「アクセサリーなんだし別に……え、ペア？」

「リカの耳にも、色違いついでた」

まあそれどころじゃなかったのと言わなかったが。悔しいけど、あの男にもよく似合っていた。死んでも言わないが。

「ふふ」

「? 何?」

なんか意味深に微笑まれたので、怪訝そうに聞くと、透は相変わらずの薄い笑みで言った。

「いや、よく見てるなって。リカのことも、私のことも」

「つ……普通気付くでしょ。わざわざ家でゆっくりしてた人をバカなことで呼び出した二人の変化くらい」

「そっか」

……少し辱めを受けたと思ったら、透はあっさりと頷いて引き下がってしまった。この女、ホントそういうとこだ。

本当なら無視してやりたい所だが、わざわざ自分の家に上がり込んできているし、話したいことが沢山あるのだろう。

それは結構だが、とりあえず確かめておかないといけない事がある。

「で、足はどうしたの?」

「あ、それも分かるんだ」

「いやそれは普通に話してたし」

「そうだっけ？」

そうじゃなくても、歩き方で分かるというのは黙っておいた方が良い奴だろう。

「これねー。ほら、樋口にあげたあのフィギュアあるじゃん」

「ああ……ていうか、あれ何のキャラ？」

「艦これ？ とかいう、ゲーセンにあったゲームのキャラ」

「ふーん……なにそれ？」

「知らない。ただ樋口に似てたから」

「……あんたらの感性どうなってるの？」

そこを注意しつつ、そもそも今知りたいのはそこでは無いので、流して聞いた。

「で、それが？」

「ああ、うん。それが取れた時に、私とリカ、ハグして」

「……は？」

「……ん？」

円香は思わず片眉を上げてしまったが、語っていた本人も「あれ？」みたいな表情を浮かべる。

「私……リカと、ハグ……?」

「外国人?」

思わずツツコミを入れてる間に、透の頬はほんのりと赤く染まる。この子、今更思
い出して照れてるの? と、円香は不覚にもクラッと来た。……まあ、それ以上に当時
は何も思わなかったのか、というツツコミの方が大きかったわけだが。

「……何今更照れてるの」

「いや……思い出すと恥ずかしくて……」

「時差あり過ぎでしょ。リカよりウブか」

「え、それはなんか嫌だ」

××

××方、その頃。

「そういえば俺、ゲーセンでとおるんと……」

××爆テレして電車乗り過ごしていた。

××

「で?」

「あ、ああ。うん」

改めて話の続きを促す。照れるのも結構だが、足の方が心配だ。

「それで、ハグした時にちよつと重心を崩しちゃって、リカが遠心力で支えようとしてくれたんだけど、そしたらゲーム機に足ぶつめた」

「何してるの……浅倉もリカも」

「あ、でもその後、おんぶしてくれたから。ずっと、そのあと私の手、引いてくれたたし」

「……ふーん」

やはり、苛立ちがある。円香の胸の奥で、ズキッと痛むものがあつた。でも、透が嬉しそうに今日の思い出を語っている所を見るだけで、まあ良いかと思える。楽しかったのならOKだ。

多分、怪我也そこまで酷くは無いのだろう。普通に歩いて来れていたし、見た感じもナスみたいに青く腫れ上がっているわけでもない。

けど、まあ念には念を入れておこう。明日はパーティなのだし。

「ちよつと待つてて」

「? どこ行くの? 弥生」

「誰が弥生?」

返事はしないで、廊下から救急箱を取りに行った。箱を開けて、湿布とテーピングだけ手に取ると自室に戻る。

「はい。足出して」

「お、さんきゅー」

素直にスカートを若干、めくって足を出す透。本当に綺麗な脚をしている。真っ白なその足も、青痣は出来ていないが赤くなつてはいる。明日まで放置したら、どうなるか分からないし、そしたら小糸や雛菜に心配をかけさせてしまう。いや、雛菜は割とどうでも良いが、小糸に心配は掛けさせられない。

……というか、自分がちよつと目を離れた隙に怪我をしてくる辺り、やはりそう簡単に二人きりで遊ばせられないかもしれない。

「はい。おっけー」

「ありがとう」

「じゃ、今日は早めに寝な。疲れたでしょ」

「うん」

それだけ話すと、透は立ち上がって部屋を出た。その後ろ姿を、円香は少しだけ憂鬱そうに眺める。いや、正確に言えば、後ろ姿ではなく、耳だ。きらりと光る二つのピアス……それが、なんだか少しだけ引つ掛かる。胸がざわざわし、少しだけ変な不愉快さがある。

……まさか、羨ましいとも思っているのだろうか？

「っ……」

それを思った直後、思わずベッドの方に身体を倒してしまった。そんな子供みたいな感情が、自身の中にあつた事に、変に自己嫌悪してしまう。

……でも、別にピアスがしたいわけじゃない。元々、穴だらけの人間に、さらに穴を増やしてどうするのか分からない。

では、何が羨ましいのか……いや、気付かないようにする事にした。気付いてしまえば、尚更自分に嫌な感情が芽生えてしまいそうだから。

「……はあ」

とりあえず、明日は透の誕生日会。それが開かれるのは夕方からで、午後から自分と小糸が浅倉家にお邪魔して飾り付け。雛菜が透を連れて、外で時間を潰してもらう役割をしてもらう。

つまり、午前中は空いているわけで。せっかくだし、ちょっとあのぼかたれの様子を、文句も含めて見に行った方が良いかもしれない。

さて、翌日。円香は早速、家を出て、菅谷のマンションに向かった。一応、特に深い意図は無いけど、エプロンを持つて。や、ホントに深い意図なんかカケラもないけど、家の食材を少しだけ拝借して。

ナンバーを押すと、相変わらず眠そうな声が届く。

『ふぁーい……』

「リカ？ 私」

『あ、マドちゃん……どしたの、こんな朝早く』

「もう9時過ぎだから。様子見に来た」

『なんかごめんねー、いつも。今、開ける』

「……んっ」

ウィーン、と自動ドアが開き、エレベーターに乗り込む。……急に来たの、迷惑だったかな、なんて今更思ったり。まあ、そんな感じの声音はなかったが。

15階まで来て、玄関の前でインターホン……を押そうとしたが、何やらドタバタと騒がしい足音が聞こえる。

その時点で、今何のつもりか理解してしまった。最後にここに来たのは、ゴールドデンウィーク初日。つまり、約一週間前。つまり、だらしがない人が部屋を大惨事にするのは十分過ぎる期間だ。

「まったくと……」

ため息をついた直後、ガチャッと玄関が開かれる。

「大丈夫……まだ来てない。階段降りるごとにボタン押してればエレベーターは足止め

出来……あつ」

ゴミ袋を両手に持った菅谷が出て来た。円香の顔を見るなり、冷や汗を無言で流し始める菅谷に、円香は苛立ちを隠すこともしないで、問い詰めるように聞いた。

「続けたら？」

「……」

「もしくは言いたい事、ある？」

一応、チャンスをあげてみた。謝るのなら、説教は控えてやろう。

そう決めたら、菅谷は相変わらず真顔のまま続けた。

「マドちゃんが来ると思って仕事残しといたよ？」

「分かった。一発お見舞いしてあげるから覚悟して。ミスタークソノート」

「え、な、なんで……？」

誤魔化した時点で、もう終了である。面倒を見るのが嫌なわけではないし、彼はなんだからだお礼の言葉を忘れたことが無いから良いが、それでも自分でやろうとしない人のために骨を折るのはごめんである。

「わっ、やばい。無言の圧力が本当に弥生そっくり……！」

「……」

……とはいえ、やはり昨日、二人きりのデート中にわざわざお土産を買ってきてくれ

た事を思い出してしまうと、許してしまう気になってしまう。全然、関係ない事なのに。「はあ……ゴミ、あんたが捨てて来て。部屋の掃除は私がするから」

「ありがと。やつぱり、持つべきものはマドちゃんだね」

「……調子に乗ってる暇があるなら、さっさと仕事して」

「どわっ、と」

俯きながら菅谷の真横を通り過ぎ、玄関から追い出す。強引だった自覚はあるが仕方ない。あんな軽い言葉に、少し嬉しくて惑わされてる顔なんて、死んでも見られたくないから。

×

×

一人暮らししている友人の家を掃除する事に「いつも通り」という表現をして問題が

ないのか分からないが、とりあえず掃除を終えた。

時刻は10時45分を経過。掃除に洗濯、食器洗いを終えて、ようやく円香と菅谷は机を挟んで椅子に座り、お茶を飲んでいる。

「まったく……少しは綺麗にしておけないわけ？」

「ごめんって」

「謝罪はいいから」

「ていうか、今思ったけどとおるんの誕生日会じゃないの？」

「それは夕方から」

そう言いつつ、二人でテレビを眺める。今、やっているのはアイアンマン。ベッドシーンになるたびに菅谷はトイレに行っていたが、円香は何も言わずにテレビを眺めた。

「でも、昼過ぎには帰るから。小糸と準備あるし」

「分かった。お昼はどうする？ 外行く？」

「いい加減、自炊する事を覚えてくれない？」

「たまにしてるよ。でも外食のが美味しいし楽なんだもん」

「……味じゃないんだけど。問題なのは」

まあ、料理が面倒な気持ちは分かる。円香も、親に教わった事を透に試験的に実践してみた時、手間を感じたことはあった。その度に、母親への感謝も強くなった。

「それに、マドちゃんのご飯が一番、美味しいし」

「っ……あ、あんた……ホント、そういうところ……!」

「？」

「……なんでもない」

本気で分かっているようなので、もう無視した。

「……なら、とりあえずせめて料理手伝って。それなら食べさせてあげる」

「え、た、食べさせてくれるの？」

「一応言っておくけど『あーん』じゃないから。作ってあげるって意味だから」

「あ……なるほど。ビックリした」

「甘やかされたかったら、せめてもう少し頑張って」

直で透と菅谷の噛み合っていない会話を見ていたが故に読み取れた齟齬だった。

まあ、そんな事よりも、だ。別の大事な事を聞いておく。

「それより、リカ。あんた宿題終わったの？」

「終わったよ」

「え……うそでしょ」

「ほんと。……え、どういう意味？」

反射的に漏れた眩きに、菅谷が怪訝そうに聞いてくる。しかし、怪訝そうにされて当然というものだ。

「いや……だって、え？ 中学の時、一回でも宿題、私が何も言わずにやった事あった？」

「あつたよ」

「ないから。ブツ飛ばすよ」

覚えている。実際、言わなかった時はやらずに来たし、休みが続いた日とかは苦労させられた。

「でも、ほんとに終わらせたらから」

「何があったの？ 風邪？」

「いやいや、そんなことないよ。ただ、父ちゃんに『成績落ちたら一人暮らし終わりだから』って言われてて」

「……なるほど」

それは確かにやらざるを得ない。……というか、冷静に思い出すと、ゴールドンウィーク初日に掃除しに行った時、宿題の残骸があったことを思い出した。

「……もしかして、宿題やってて家事が疎かになつてたの？」

だとしたら、まあ高一の夏辺りまでは今のまま、面倒見ても良いかもしれない……。

「え？ あ、ああ、うん。そうだよ。だから毎日ご飯作って」

「……やつぱりブツ飛ばす」

「あ、いやすみませんジョークです」

今度はやめなかつた。少しイラつとしたので、菅谷の額に軽くチョップをかます。

「いてっ」

「私、別にあんたの世話係じゃないから」

「所で、とおるんは宿題終わってるの？」

「知らない。昨日のデートでだいぶ浮かれてたし、最終日に泣きついてくるんじゃない？」

「手伝うなら、俺も誘って」

「？ 終わってるんでしょ？」

「だから終わってない人がヒーヒー言ってるってこ見たい」

自分が早く終わるとそれか、なんて思ったものの、円香にもその気持ちは分かる。割と、巻き込まれさせしななければ気持ち良いものだ。

まあ、そっちの話に花を咲かせるよりも、これを機に一つ、菅谷を論してみる事にした。

「で、どう？」

「何が？」

「宿題を先に終わらせて、今の感覚は」

「感覚……スパイダーセンスの話？」

「いや違うから。……毎度思うんだけど、どこからその発想がくるの？」

「じゃあ何？」

「宿題が終わった日から今日までの話。清々しいとか、そういうの無かった？」

「……」

ま、こればかりは人によると思うが、少なくとも円香にはそういうのはある。とりあえずやるべき事が終われば、心は軽くなるのだ。

……とはいえ、まあ普通の人つぽくない透や菅谷にはわかりそうにないが……なんて思っていると、菅谷が「ああ」と納得したような声を漏らす。

「それだったんだ。なんかここ最近、心が大きくなった気がしてたの」
「分かるんだ？」

「うん。や、今までも別に宿題の存在を忘れることが基本だったから、正直窮屈な感じはしてなかったんだけど」

なんなんだよ、と円香が思ったのも僅か、すぐに菅谷は清々しそうに続けた。

「なんか、ここ最近はやたらと心に余裕があったまま、アリやら野良猫やらカエルやらの観察が出来たのは、そのお陰だったんだ」

「男子高校生がどんな休日？」

「……なるほどね。これが、みんなが思ってる感覚かあ……」

悪くないかも、と言わんばかりの表情だった。ホント、こういう素直な所は可愛らしいものだ。イケメン男子高校生でありながら、自分や透の弟と見られる理由がよくわかる気がする。

だからだろうか？ 思わず円香の方もおおらかになってしまい、頬杖をつきながら、

手を伸ばしていた。

その先にあるのは、菅谷の頭。微笑みながら、軽く撫でてあげる。

「そ。だから、これはご褒美」

「……ふえ？」

「良くできました」

「……」

微笑みながらそう言うと、菅谷の頬が少し赤くなる。その反応が、やはり円香は少し面白くて。

ニヤリとほくそ笑むと、さらにそのまま撫で続けた。

「家事も出来るようになったら、もっとしてあげる。ミスター甘えん坊ちゃん」

「い、いや……普通に恥ずかしいんだけど……てか、撫でてなんて言っただけ……」

「そう言うなら、せめて撫でられてる現状を拒んでみたら？」

「……それは、少し勿体無いというか……」

「ふふっ……ホント、お子様」

×そう言いながら、手を引つ込めてお茶を飲んだ。

×

×さて、菅谷の部屋で食事を終えた後、円香は小糸と一緒に飾り付け。二人だけとはい

え、元々凝った飾りにする予定はなかったので、夕方までには余裕で間に合った。

で、今からようやくパーティーが始まる時間だ。ケーキもジュースも準備出来ている。

雛菜が透を連れてくればパーティー開始。それに伴い、円香と小糸はクラツカーを用意する。

「……え、(´▽｀)?」

「そう。早く入って」

雛菜が誘導する声が聞こえる。サプライズっぽくしている様子だが、透は十中八九気付いている。だから、菅谷とのデートを前日にずらしたのだろう。

扉が開かれ、透の顔が見えた直後、円香と小糸はお互いに頷き合うと、一気にクラツカーの紐を引いた。

「た、誕生日おめでと〜!」

「……誕生日おめでとう」

「……わお」

そのリアクションは、果たしてサプライズに対してなのか、クラツカーに対してなのか。

どちらにしても、驚いている時点でサプライズには成功と言えるだろう。

透は何処となく察していたのか、昨日と同様、いつも以上にオシャレをした私服に身

を包んでいた。特に、耳できらりと光を反射するイヤリングは、嫌でも円香の目を引いてしまう。

「……ありがと。三人とも」

「やは、大成功♡」

「そ、そうだね……!」

「座つて。ケーキ食べるでしょ?」

言いながら、円香はケーキに刺さっている蠟燭に火をつけ始める。ちゃんと16本、灯し終わると、雛菜が電気を消した。

「じゃあ、歌おっか」

「透ちゃんがそれ言うの……?」

「じゃ、雛菜指揮者する」

「あんたは歌つて」

なんて話をしながら、歌い始めた。円香も一応、静かに口を動かすが、目立っていたのは雛菜と小糸の声だった。

「おめでと〜!」

「おめでと」

「おめでと!」

その声の後、透は暗闇の中、点々と揺らめく灯火に向かって息を吐く。

「やべつ、ミスった」

「やはく、じゃあ雛菜も〜」

「あつ、ひ、雛菜ちゃん……! 消しちやダメだよ!」

「まだ残ってるよ。小糸ちゃんもやる?」

「え……じ、じゃあ……!」

と、何故か三人で火を消し始め、ようやく全部消えた。それが終わるなり、円香は電気をつける。

「満足した? ケーキ切るよ」

「円香先輩、そんなにケーキ食べたかったの?」

「は? 違うし」

包丁を手に取り、机の上に置いてあるケーキに手を伸ばす。

こういうケーキの切り方も母親から教わった。別にいいと言ったのに「菅谷くんのお誕生日で使うかもしよ」との事だ。そもそも誕生日いづだかも知らないのに。

とはいえ、教わったものを試してみたい、というのがあるから、どちらかと言えば切りたかった、というのが正解だろう。……方が一、本当に使う機会があったときにも安心して出来るかもしれないし。

割と綺麗に8等分し、包丁とフォークを使って一切れずつ配る。まずは誕生日の透へ。

「はい」

「ありがとう」

「次、雛菜」

「小糸、お皿出して」

「びえっ!!?」

「あは、円香先輩ムカつく」

無視。小糸のお皿に乗せ、次に雛菜。最後に自分のを済ませる。

今回のケーキは、チョコレートケーキ。チョコのスポンジをチョコレートソースで包んである上に、イチゴの代わりにチョコレートのクリームとチョコそのもので飾り付けられた、もう「ザ・チョコ」と言わんばかりのものだ。

「ん、おいし」

苦味が強いもののしっかりと甘味も含まれていて、実はまだブラックコーヒーが飲めない円香でも、普通に楽しめる味だった。

「ホントだ」

「これ、樋口のチョイスでしょ」

「……なんで？」

「や、それっぽいなーって思ってた」

「新しい。雛菜はイチゴのショートケーキが良いって言ったんだけど」

「それはあんたが食べたかっただけでしょ」

正直、ケーキならどれを選んでも正解感はあるが、それでもせっかくなので、一番安いのは避けておいた。

雛菜が「あ、そうだ」と声を漏らすと、ガサガサと鞆を漁る。

「はい、透先輩。雛菜からプレゼント」

「あ、雛菜ちゃんずるい……！ はい、私からも……！」

「ふふ、ありがとう。二人とも」

受け取った透は、微笑みながら二人の頭を撫でる。それをされて、二人揃って頬を赤らめながら、にこりと微笑んでいた。

ついでのので、円香もプレゼントを渡すことにした。というか、今渡さないと「溜めた」と思われる。

「はい、浅倉。私から」

「ありがとう」

「え？」

「あれ〜?」

「?」

すると、雛菜と小糸から小首を傾げながら声を漏らされる。

「……なに?」

「透先輩のピアス、円香先輩があげた奴じゃないの〜?」

「あ、うん……私も、そう思ってたんだけど……」

「え、違うよ?」

じゃあ誰があげたんだ? 当然、そうなる。

円香の脳裏で嫌な予感がする中、透は何一つ隠す事なく、真顔のまま答えた。

「リカにもらった」

「リカ?」

「菅谷」

え、言っちゃうの? と、円香は冷や汗を流す。その隣で、別に何も思っていない雛菜がニコニコしたまま言う。

「やは〜。菅谷先輩、意外とセンスある〜」

「でしょ? ちなみに、お揃いにした」

「良いなあ〜。雛菜もつけた〜い」

「良いんじゃない?」

「じゃあ穴あけ機貸して〜」

「だ、ダメだよ。雛菜ちゃん……中学は、ピアス禁止だと思うよ……?」

小糸が口を挟む。前に少し泣きそうになってる小糸を見ていたから、もう少し何かあると思っていたが、取り越し苦労だったかもしれない。

ホッと胸を撫で下ろしていると、透が「あ、そうだ」と声を漏らす。

「写真も撮ったんだよね」

「見たい〜」

写真なんて撮ったんだ、と思いつつ、取り敢えず円香はケーキを口に運んだ。

透がスマホを取り出し、いじり始めるのを何気なく見ていると、その手が画面を見るなりピタッと止まったのを、円香は見逃さなかった。

「……?」

「ごめん、消しちゃったっぽい」

「え〜?」

「ごめんごめん」

と思ったら、何か誤魔化し始めた。前にデズニーでわけわからないコンセプトで撮っていた写真は普通に見せていたのに。

何かある、と本能的に睨んだ円香は、とりあえず今は流しておいた。

× ×
パーティーもお開き。円香に比べれば家が遠い小糸と雛菜を先に帰り、円香は透と一緒に片付けをする。

「いやー、ありがとね。今日は」

「毎年のことですよ」

「まあそうだけどき。やっぱり、嬉しいから」

確かに、嬉しそうに見える。ベタなパーティーになつてしまった気がしないでもないが、なんだかんだ透はシンプルなのが好きなので問題ない。

さて、それよりも、だ。円香は、ひとまず気になつてゐる事を聞きたい。あたりを見回し、透の両親がいない事を確認してから、しれつと聞いた。

「で、写真は？」

「あのさ、樋口」

「……え？」

まさかのハモつた。もしかして、透からも何か話があるのだろうか？

「先どうぞ」

「ありがと」

とりあえず譲った。なんとなくだけでも、円香が聞こうとしている事は、知れば必ず気まづくなる内容な気がしているから。

それなら、先に話させてやった方が良いだろう。

先を譲られた透は、下を向いてついついとスマホをいじる。

「そういえば、昨日あのあと……ドタバタしてて、言い忘れてただけど……」

「昨日? ……ああ、公園の後?」

「そう。その時、リカにキスした」

「ふーん。……は?」

あまりにさりげなく言われた為、思わず流してしまいそうになったが、何かかなり衝撃的な事を告げられた気がする。というか、告げられた。まるで腐ったみかんが周りに増殖していくように、円香の中で動揺が広がっていく。

「……どういう事?」

「厳密には、キスじゃないんだけど……私の唇が、菅谷の頬に当っちゃった」

「それキスでしょ」

「まあ、そうかな」

「……」

少し苛立つて決めつけるような言い方をしてしまったが、透は基本的に言い訳をしな

い。例え言い訳するべき場面でも、説明が面倒になった途端に返事かしくなり、損するように怒られる事が多い。

なんとか円香は気を落ち着かせ、正面から透を睨んだ。

「ちゃんと説明して。どういう事？」

「……嘘みたいな話だよ？」

「嘘ついてるかどうかは、私が決めるから」

「……」

そう言うと、透は少しだけ頬を赤くしながら、呟くように説明を始めた。

「二人でさ、ジャングルジムに登って、写真撮ったんだけど……公園内の街灯が切れて、私のピアスだけ映らなくなったから、横に顔を向けたら、リカの頬に口が当たっちゃったの」

「……」

確かに、漫画みたいな話だ。少女漫画でも、そこまでベタな展開はやらないであろうと思える程、現実離れしている。

しかし、あり得ない話ではない。透と菅谷なら、尚更のことだ。

「……あつそ」

「さつき、写真見た時に思い出したから、言えなかつたけど……」

菅谷からもそんな話は聞いていない……いや、そうなれば自分が呼び出された経緯も何となく察する。

あのアホほどウブな少年は、それで気絶してジャングルジムから落ちかけたのだろう。目を覚ました時には、何もかも忘れていた、という所か。

まあそれは良いとして、だ。それなら疑問が浮かんでくる。

「……なんで、それを私に言おうとしたわけ？」

黙っておけば……いや、さっきの雛菜とのやりとりがあつた以上、自分が問い詰めてはいたが、それでも誤魔化す方法はあつたはずだ。何せ、もう一人の証人である菅谷には、おそらく記憶がないわけだから。

惚けようと思えば惚けられただろうに。

「なんでつて……樋口には、言ったほうが良いと思つたから？」

「……なんで？」

「分かんらん」

何となくなのだから仕方ない、と言わんばかりだ。……まあ、確かに隠されるよりは気分が良い。知らなければ幸せ、なんていうのは騙していることと変わらないから。

「……ありがと」

なんとなく、お礼を言ってしまった。

やっぱり、なんだかんだ長い付き合いな事もあって、透とはかなりの信頼関係で結ばれている。こういう関係は自分も大事にしておきたい、と胸の奥底で思ったりした。

「で、樋口の話は？」

「今ので終わった」

「あつそ。じゃ、もう一つ」

「宿題やるなら、リカのマンション集合ね」

「やった。やっぱ、持つべきものは樋口だね」

「はいはい」

しれっと辛辣な提案をしながら、二人で片付けを続けた。

この時、円香は気付いていたのに目を逸らした。そもそも、何故キスしてしまった透からの告白に、お礼を言ってしまったのか、考える事を無意識に放棄して。

肉体改造は計画的に。

ゴミ出しだけはなんとかしないといけない、という事を、菅谷は学んだ。何故なら、小蠅が鬱陶しいから。それに朝は円香も透も家まで来てくれない。

つまり、自分でなんとかするしかない訳で。今日も朝早く起きて、朝の支度を終えてから登校のついでにゴミを捨てに行くと、ゴミ捨て場から戻って来る綺麗なお姉さんとすれ違った。

「……あら、菅谷くん。おはよう」

「おはようございます。有栖川さん」

お隣さんだ。カトレアという名前の犬を飼っているお姉さん……有栖川夏葉。絶品のビーフシチューとか貰ったこともある。

「最近はいどの人來ないの？」

「ええ。私からお父様に断りを入れたの。初めての一人暮らしで心配してくれるのは良いけど、週一でメイドをよこすのは目立つからやめてって」

「良いじゃん。樂出来るし」

「出来るかもしれないけど、私もう大学生よ？ ご近所の目もあるでしょう？」

「え、俺は全然気にしないよ。俺もクラスメートがよく家事しに来てくれてるし」
「……あなたの場合はそうかもね」

微妙に論点がずれているのに気付कि、夏葉は気まずい笑みを漏らしながら目を逸らした。

これから学校に行く菅谷とは真逆で、夏葉の全身は汗だくだ。もしかしたら、ランニングでも行っているのかもしれない。

「有栖川さんって、毎朝走ってるんですか?」

「ええ、もちろん。私、アイドルを目指して一人暮らしを始めんだもの。身体作りは必須だわ」

なるほど、と菅谷は顎に手を当てる。なんだか、カッコ良い人だ。自分の夢を堂々を語り明かせる上に、それを目指して努力できる。

……何より、この引き締まった体。両腕や両足しか筋肉は見えないが、なんだか羨ましかった。少なくとも小六以来、運動していない自分の身体が情けなく見えた。

「……俺も筋トレしようかな」

「あら、本当!?!?」

「えっ?」

なんか目が爛々とし始めていた。なんかまずいこと言った気がしてギクツと菅谷は

肩を震わせるがもう遅い。夏葉は自分の両手を包む込むように両手で握り込まれ、語り始めた。

「ええ、それなら私も付き合うわ！ ちゃんとあなたに合うメニューを組んであげる！」

「え……いや、そんなガチじゃなくても……」

「あなた、スポーツや武道の経験は？」

「……6歳から12歳まで実践向きの柔道……」

「なら、それなりにキツくても平気そうね！ 今日、私4限までで16時に終わるから、

16時45分にエントランスに集合ね？」

「うん。だからその後は……」

「さ、遅刻するわよ。早く行ったら？」

「……」

だめだ。これ聞いてもらえなさそう。もはや覚悟を決めるしかない。そう判断した

菅谷は、死んだ笑顔で言った。

「あ、そうね。じゃ、また」

「ええ。またね」

××× 逆にランラン気分になって、学校に向かった。

翌日、円香と透はいつものように駅で待機していた。待ち合わせ時間になっても菅谷が来ないのには慣れたつもりだが、最近は来ていたのに珍しい、と思いつつも、やはりまだ完全に一人暮らしに慣れ切ったわけではないようだ。

「遅いね。リカ」

「遅れるなら遅れる、って連絡も入れられないわけ？」

口ではそう言いつつも、何かあったのかも、と円香はマンションの方向を眺める。

その円香を見て、透は何かを察したように聞いた。

「様子、見に行く？」

「ん」

頷くと、二人でマンションを見に行く。駅から菅谷のマンションまでのルートは最短コースが一番分かりやすい道のりなので、入れ違いになる事はない。

歩き始めようとする円香を見て、透はクスツと笑みを浮かべる。

「? 何？」

「いや、樋口……なんだっけ。あのオタクが好きなの……あれ。ツンデレっぽいなって」

「はっ。」

お前今なんだった? とマジギレするヤンキーの如く眉間に皺を寄せた円香は、そのまま透の方に詰め寄る。

「ツンデレって私のこと言ってるわけ？」

「え？ そうだけど？」

「違うでしょ。全然。私がいっつあいつにデレたわけ？ あいつの様子とか見に行くのは

仕方ないから、だから。別にあいつのためとかそんなじゃないから」

「じゃあなんで？」

「……行くよ、さっさと」

答えられなかった。

世話を焼く理由なんて決まっている。友達として、一人暮らしが大変な彼をサポートするためだ。それに間違いはないはずなのに……何故かそれを口にするのも憚られる。

しかし……それは明確な理由が分からないのと同じな気がする。だとしたら、こんな世話を焼く必要なんて……と、自虐気味に思った時だ。スマホが震えた。

LIKA☆『ごめん、今日学校休む』

驚いた。まさか、本当に何かあったのだろうか？ さっきまでの感情などまるで忘れて、円香は慌てて電話をかけた。

「どしたの？」

「リカ、学校休むって」

「？ なんかあったの？」

「これからそれ聞くの」

言いながら応答を待っていると、すぐに出た。

『もしもし……う？』

心無しか声が震えている。それは、どこか本当に辛そうにしているようにも感じられた。

「どうしたの？ 風邪？」

『いや……筋肉痛』

「ああそう。何処が痛……は？」

『だから……筋肉が痛い……。腹筋と背筋と大胸筋と三角筋と上腕二頭筋、一頭筋と、大腿四頭筋と、ハムストリングと、内転筋が痛い……。』

「……」

フルコースかよ、何したんだよ、と円香は半眼になる。そういえば、昨日は珍しく用事があると言つて、若干覚悟を決めた顔で帰宅していたのを思い出した。

「……」

どうしたものか、と円香は困つたように顎に手を当てる。まあ、何があつたか知らないが、本当に辛そうなのは間違いない。

……とはいえ、先生が筋肉痛でのお休みなんて許すとは思えない。担任の先生、現代

文担当の女性教師だし、理解がなさそうなのは尚更だ。……実際、そこまで筋肉痛になる程、馬鹿みたいに運動した自業自得感もあるし。

「……はあ、今から行く」

『え、いやいいよ。先に行つてて』

「サボつたら学校からご両親に連絡行くと思うけど」

『……でも遅刻確定するよ』

「それくらい別に良いから。浅倉も一緒だし」

「え？ 何が？」

『……』

「で、どうするの？」

少し問い詰めるように聞くと、10秒ほど黙り込まれた後、すぐに声が聞こえた。

『じゃあ、お願い』

「はい」

そこで電話を切ると、円香は歩きはじめながら透に言った。

「筋肉痛で動けないから迎えに行く。あんたも行くでしょ？」

「ああ、さっきのそれ？ 行くけど」

「ん」

そう言つてツカツカと歩き始める円香を見て、再び透はクスツと微笑む。それが何故かやたらと癪に障つた。

「……なに」

「や、だからツンデレだなつて」

「あんただけ先に学校行つたら?」

「ごめんごめん。冗談だから」

××そのまま菅谷を迎えに行つた。

××一応、着替えは済ませていた菅谷は、残念ながら朝飯は食えなかつた。それでも、二人にまた色々手伝ってもらつて、なんとか登校。ゴミ出しと洗濯物干しを、円香だけでなく透にまでやつてもらつてしまった。

今は昼休み。お昼を作る時間が無かつた……というより、もう少し料理出来ないと作る気もない菅谷は、また学食に行くしかない。

円香が日直の仕事で、先生に課題のプリントを職員室までの運搬が終わるのを待つている中、菅谷がぼんやりと呟く。

「……はあ、なんか学食飽きたな……」

「え、早くない?」

透が小首を傾げる。

「だってどれも似たような味じゃん。うどんもそばも、油揚げか天かすか肉か山菜を乗せただけ。ラーメンは醤油と塩しかないけど、正直カップ麺のが美味いし」

「いやそういうもんでしょ、普通」

「そうなの？」

「こういう所が、やはりお金ある家の子なのかも、と透は思ったり。駅近くにあるワンコインで大盛りを食べられる蕎麦屋とか、入った事ないのかもしれない。」

「じゃあ、どうするの？」

「いよいよ、やっちゃうか」

「何を？」

「学校抜け出して、外食」

それを聞いてから、少しだけ透は目を丸くした。……が、やがて、まるで「面白そう」と言わんばかりに唇を歪める。ちょうど、自分も弁当を持って来ていない。

「良いね。やってみよっか」

「よっしゃ」

あつさりとそう話すと、二人はすぐに立ち上がった。

こういう時、二人の太々しさは長所へと成り代わる。

「マドちゃん誘う?」

「いや、止められるでしょ。お弁当持って来てると思うから、行くって言っても来ないと思うし」

「そっか。じゃあ、連絡だけしておかないとね」

なんて何食わぬ顔で普通の話をしながら歩くもんだから、誰からも何も思われない。円香への連絡をしながら、平然と昇降口から出て校門を抜けてしまった。

「何食べよっか?」

「いやー、やっぱりたらふく行きたいでしょ」

「じゃあ……フオアグラのソテー」

「あれそんな量ないし、値段ほど満足しないよ」

「へえ、そうなんだ。……そっか。食べた事ありそうな人だったわ」

「マックとかないのかな」

「駅まで行かないとないよ」

やはり金持ちっぽい子なのかそうでもないのか分からなかったが、そのままお店をじっくり選ぶ。ちなみに、昼休みは30分である。

「あ、あそこ良くない?」

そんな中、透が指さしたのはラーメン屋だった。とんこつラーメンで、学生は替え玉

一杯無料らしい。

「良いね。食べよう」

「替え玉しちやう？」

「良いけど、体重平気なの？」

「怒るよ？」

「なんでっ……？」

「女の子にそういう事、言わなくて良いから」

×××結局、ラーメン屋に入ることにした。

×××一方、その頃。円香は教室に戻って来て、鞆からお弁当を出しながら、さつき届いたチエインを確認した。

LIKA☆『お昼食べに行ってくる』

LIKA☆『学外に』

「……」

まあ、自分に直接言ったところでお弁当あるから行けないし、時間のロスという意味では当然の判断だろう。

だが、それ以前にやっぱりそういう事平気でしちやうのは、本当にバカだと思う。

樋口円香『頑張つてね』

適当な返事をして、食事をすることにした。別に、気に食わないことなんて何もない。ほんと、ほんとのほんとに。

「や~~っ~~ば、美味しい」

「それな。格別」

背徳感、というものだろうか？ やつて良いのか悪いのか分からない、ギリギリのラインでの行動はドキドキする反面、それに見合つた快感がある。

それが、今は味となつて帰つて来ていた。

ちなみに、食べる前に写真を撮り、それを円香にも送つた。来れない分のお裾分け（つもり）である。

「すごい、美味しいわ。ここのとんこつ」

「ほうれん草とか入ってるから、野菜も取れるしね」

「そう、そのほうれん草がやたらと美味しいのよ。何これ。労働後のビール？」

「いやほうれん草だけ……え、飲んだことあるの？」

「ほうれん草？　ないよ。喉詰まらせたくないし」

「じゃなくて、ビール」

「それもないよ。あんな苦いもの」

「あるんじゃない」

子供の時に一舐めしただけだ。速攻で吐きそうになった。透も、なんとなく今のニユアンスで普段も飲んでるわけではないことは察している。

直ぐに食べ終えた二人は、お椀の上に箸を置く。

「ふう、ご馳走様でした」

「ごっそさん」

「いやー、替え玉はやりすぎたね。割とお腹いっぱい」

「どうか、死にそう。破裂する」

「リカってあんま食べないの？」

「え、知らないけど」

「男子高校生は食べ盛りでしょ？ 替え玉5個くらいいいかないと」

「俺の胃にも替え玉必要になる」

そんな話をしながら、二人で席を立った。

「さ、そろそろ戻ろっか」

「うん。満足したし、行こう」

言いながら、二人は膨れたお腹のまま立ち上がる。食券制だけあって、会計は既に

終えている。

お店を出て、揃って伸びをする。が、お腹いっぱいなので、これまた揃ってお腹を押さえる。

「……帰ろうか」

「てか、今何時？」

「あ、そういや授業始まるかも……あ」

「あ？」

「あと5分」

「……」

ヤバい、と二人とも大量に汗を流す。幸い、学校までは近いので、走れば間に合うかもしれない。

「い、急ごっか」

「ごめん、無理。筋肉痛」

「……あー」

「先行つてて良いよ。俺は怒られるから」

「……」

言われてから、透は顎に手を当てて黙り込む。

「……じゃ、仕方ない。私も怒られるね」

「え？」

「ほら、なんだっけ……い、『一覽宅送』？」

「ああ。『韋駄天楽勝』じゃなかった？」

「えーつと……『イカ弁最高』」

「じゃあこっちは『今、ケン爆走』」

「なら、『陰険サイコ』」

「ごめん、結局何が言いたいの？」

ちなみに答えは「一蓮托生」である。つまり、言わんとすることはこういうことだ。

「一緒に食べ行くなって決めた共犯なんだし、最後まで付き合うよ」

「とおるん……」

そのセリフに、ほんのり感動してしまふ菅谷。思わず頬を赤く染め、目をキラキラと輝かせ、涙でも浮かべそうなほどに感激していた。

「ありがとう……！」

「気にしないで。お礼は帰りにタピオカ奢りで良いから」

「うん。……ん？ 共犯なのにお礼？」

「バレたか」

××なんて話と爽やかな笑みを交わしながら、二人は教室に戻った。

「良い話風にはざいてるけど、普通にサボりと一緒だから。罰則」

そんなわけで、二人はペナルティのプール掃除である。季節も夏に入りかけ、梅雨を控えているこの季節にやるプール掃除など何の意味もないだろうに。

「嫌がらせだよねこれ」

「ペナルティだからね」

「いや、せめて意味あることをやらせてほしくない？」

「言わないで。やる気失せる」

そんな話をしながら体操服姿でブラシをゴシゴシと擦る二人に対し、円香がプールサイドから高みの見物を決め込みながら言った。

「知ってた？ 昔のドイツの刑務所だと、意味のない穴掘りを延々とさせられるらしいよ。刑務作業で。要はそういう事ですよ」

「それと学生のペナルティを一緒にしないでいただきたいよね……」

「ちようど良いでしょ。どんなに怒られたって反省しないバカ二人なんだから」

少しムスツとした様子でボヤク円香を見て透と菅谷は顔を見合わせる。

「というか、マドちゃんどうしてわざわざ待つてくれるの？」

「それなー。多分、最終下校時刻ギリギリまで掛かるし」

「……別に、待つてない。今日はここで時間潰したいだけ」

その一言に、また透と菅谷は小首を傾げる。

「「なんで？」」

「別に良いでしょ。あと同じ顔でハモるのやめて」

「え、私とリカ、同じ顔？」

「似てないよね、別に」

「表情って意味。……難しい日本語使ってごめんね」

なんか少しずつイライラが増し始めている円香を見て、バカ二人は口を噤む。どうしたのだろうか、なんか機嫌悪いが。

二人とも、円香に背中を向けてヒソヒソと話し始める。

「……どしたのあの子？」

「さあ……昼休みまでは別に普通だったのにね」

「うん。……ん？ 昼休み会ってなくない？」

「ごめん、昼休みの一歩手前の休み時間」

「ああ……確かに。そういえば、5時間目と6時間目の間も、しれっとトイレ行っちゃったよね」

「……ねえ、もしかしてき……」

「……」

透の推測に、菅谷は目を見開いて顎に手を当てる。

「……あるかも」

「言ってみる？」

「行くう」

「ねえ、バカ二人。いちやついてる暇があるなら掃除さつきとしてくれない？」

苛立ちが少しずつ成長している円香の声を聞きながら、一先ず離れ、透がコホンと咳払いして言った。

「もしかして樋口、寂しかった？」

「……は？」

昼休み、という単語がまるで抜けていたが、円香にはガツツリ伝わっているようで、過去最高潮の苛立ちを見せた。

「そっかー。マドちゃんに寂しい思いさせちゃったか」

「うん。多分そうでしょ。やっぱり置いて行くのダメだったね」

「一声かけた方が良かったね、やっぱ」

「幸せのお裾分けしたんだけど、寂しさは払拭できなかったっぽいわ」

本当に人の神経を逆撫でするのが上手い二人である。おかげで、既に最高潮にあったイライラはゲージを突破。雲を突き破り、地球に迫る隕石があつたら打ち砕いていたであらう程の爆発力を見せた。

「準備してくる」

そう言った円香は、制服の上着を脱ぎ捨てて、ブラウスの袖を捲りながらプールの出入り口の方へ向かう。

「やっぱりそうだったんだね」

「ツンデレだなあ、樋口は」

なんて話していると、すぐに戻って来た。……ホースの先端を摘んで塞いだまま。

「じゃあ、流すから。あんたらにかかっても不慮の事故だから」

「え」

「Fire」

直後、摘んでいた指を解放し、最強にまで蛇口を放った水流を一気に放出した。

構えた先にいるのは、バカ二人の顔面。まずは菅谷から。目でも潰す気だったのか、という一撃が見事に穿つ。ひっくり返った菅谷は、ゴホゴホと被弾し続けた。

「え、ちよつ……樋口？ 誰洗ってんの？」

「汚れ」

「……」

次は自分だ、と思った透は慌てて逃げようとする。

しかし、それを円香が見逃すはずがない。その背中を撃ち抜き、透は前方に倒れ込む。

「ちよつ、ひぐつ……痛ッ、背中ッ……!」

「手伝つてあげてるんだから文句言わないでくれる?」

「とおるん、君の尊い犠牲は無駄にはしない」

「逃がさない」

「おごっ……!」

しばらく蹂躪され続けた。

とにかく謝り続け、漸く解放された時には、透も菅谷も大の字になってプールの中で荒立った呼吸を整えていた。

「……次はないから」

「す……すんません、でした……」

「次からは俺も弁当頑張ります……」

「よろしい」

そう言つて、円香はひとまずホースをその辺に置く。代わりに、透の横に落ちているデッキブラシを取りながら、手首のヘアゴムで髪を後ろにまとめた。

「浅倉、顔にゴミついてる。洗って来たら？」

「いやつけたの樋口でしょ、多分……」

あれだけ放水されてひっくり返れば、顔にゴミくらいについても不思議はない。

しかし、円香は真顔のまま透の真横に座り込むと、耳元で囁くように言った。

「ブラ、透けてる」

「へ？」

「更衣室にある私の鞆の中に、ジャージ入ってるから。着て」

「……ありがと」

それだけ言うと、透は一度、更衣室に戻った。どちらにせよ、円香の所為で透けたこ

とは言うまでもない。

「あれ、とおるんどこ行くの？ サボり？ 俺も行く」

「もう一回、浴びる？」

「嘘ごめん冗談」

言いながら、菅谷は身体を起こし、円香を見上げる。すると、何故か目を丸くしたように驚いていた。

人の顔を見て驚くなんて失礼極まりない。少し不機嫌そうに「何？」と聞くと、菅谷はそのままま言った。

「マドちゃん、髪束ねても似合うね」

「……っ、あ、あんただからそういう事を平気で……」

「え、ダメだった？」

「……ダメではないけど……」

……ただ、不意打ちはやめて欲しい。心臓に悪い。特に、こいつの褒め言葉は刺さる。

「……王子様みたいなセリフを吐く暇があるなら、さつさと仕事して」

「はーい」

そのまま二人で、ゴシゴシと汚れている所を擦る。

まあ、あんな風に言ってしまったが、なんだかんだ仲良い奴に褒められるのは嬉しいものだ。

少しほっこりしながら、普通にお手伝いをしている円香に、後ろから声が掛かる。

「マドちゃん、マドちゃん」

「? 何？」

何かすごい汚れでもあったか、あるいは虫でも入ってきたか。何にしても、少しくらい相手してやろうと思ひ、振り返ると、菅谷はデッキブラシに跨っていた。

「良い子だから、言う事を聞いて! (細く高い声)」

「ブフツ!」

吹き出した。それこそ不意打ちだった。その声どっから出した、と言わんばかりのセリフが、思わずツボに入った。割と似てたのがダメ押しになってさえる。

「真っ直ぐ飛びなさい、燃やしちゃうわよ！（高く細い声）」

「プツ……や、やめて……！」

「身体を横に倒して！（高いだけの声）」

「それキキじゃなっ……あははっ……！」

畳み掛けられ、もはや声を出してしまった時だ。ジャージを羽織った透が戻って来た。……頭に真っ赤ででっかいリボンを付けて。

「お待たせ、二人とも」

「あ、キキー！」

「ぶはっ……あ、あんたら打ち合わせでもしてたの……!?」

×完璧なコンビネーションに、しばらく円香は悶えるしかなかった。

×

×そのまま、三人で掃除を続け、途中で水の撃ち合いになったり、デツキブラシのチャンバラになったりしたが、とにかく最終下校時刻までには終わらせた。

で、今は、円香は着替え中の透を更衣室で待っていた。

「あーあ、全身ぐちよぐちよ」

「そりやそうでしょ。なんで毎回、鬨いになるわけ？」

「うける」

「うけない」

「少なくとも巻き込まれる円香は溜まったものではない。まあ、今回は濡れなかったわけだが。」

「樋口、超避けてたよね。スパイダーセンスついてるみたいに」

「制服濡らしたくなかったからね」

「それにしても、汗はたくさんかいてしまったから、割とプラマイ0感は出ているが。」

「はあ……これから帰るつてのに、ほんと最悪……」

「あつ」

「何？」

「ブラ、どうしよう」

「着替えて掃除をしてはいたものの、ぐしやぐしやの下着の上からブラウスを羽織れば透けてしまう。しかも今は夏なのでブレザーもない。」

「……自分のジャージは？」

「家」

「一応、私の羽織る？」

どちらにせよ濡れてはいるが、ノーブラのままブラウスだけで帰るよりマシだ。

「……………うん」

これから電車に乗ると思うと、正直、気が重かった。まあ見られなきや良いのだろうが、それでも少し気恥ずかしさは少なからずあった。

「はあ……………なんか、去年もこんなことあったような……………」

「川ボラの時でしょ？ あの時、普通に下着の替えとか持って来てたからね」

「来週から持つてくるようにしようかなあ」

「いや水かけつこの方をやめたら？」

なんて話しながら濡れているジャージを借り、二人で更衣室を出た。透は、まあ何とかなると思っていた。恥ずかしくないわけではないが、もう帰るだけだし我慢は出来る。

近くに円香もいるし平気と思いながら、校舎内を移動した。

「あ、やっと来た」

職員室の前では、菅谷が軽く手を振って待っている。円香が軽く手を上げて挨拶する中、透は身体をフリーズさせる。

「待った？」

「いや別に。待ったのはマドちゃんの方でしょ」

「そうだね」

話しながら、菅谷は透に顔を向ける。が、透は円香の背中に隠れてしまった。

「え……」

なんか、避けられた、と菅谷は甚く傷つく。

理解が追いつかないのは円香も一緒に、怪訝そうな表情で後ろを向く。

「ちよつ、何してんの？」

「ヤバイ……」

「何が？」

「なんか……恥ずしい」

「は？」

「……リカの隣を今、歩くの……なんか、恥ずしい」

「……」

異性だから、というわけでもないのだろうか？ どちらにしても、当然な反面、意外でもある。

気持ちがあつかってしまっている以上、自分がなんとかしないといけないのか、と円香は少し半眼になった。

「え、とおるん。どうしたの？」

「あー……や、ちよつと諸事情で……」

円香が適当に誤魔化そうとするが、まあ何と事情を説明したものか、と眉間に皺を寄せる。

そんな中、菅谷は何一つ察することなく、透に声を掛けた。

「あ、とおるん。先生に報告は済ませたから」

「あ、ありがと……」

「……風邪でも引いた？」

「いや、そうじゃないけど……」

「辛いならまたおんぶしよつか？ 大丈夫、筋肉痛であつても我慢して運ぶから。てか、

そのジャージも濡れてるし、脱いだ方が……」

そう言つて、菅谷が歩み寄つて来た時だ。

「こ、来ないで……！」

「へ……？」

今度は菅谷が凍りついた。それにを見て、円香だけでなく透も「やばつ……」と心の中で冷や汗をかく。

今のは良くない。何せ、事情も何も知らない菅谷にとつては、なんか避けられ、敬遠されているのだから。それも、ハッキリと。傷つかない方がどうかしている。

しばらく凍りついていた菅谷は、やがてピチツバチツと火花が走った自爆寸前の口ポットのようになり、こちない動きで2人に背中を向け、歩き出した。

「一人で帰ります……」

「あ、あー……待った」

それを、円香が後ろから止める。このまま行かせたら、明日は休みなのでしばらく会う機会がなくなる。

ぶっちゃけ、円香としてはこのまま帰らせて接触を避けた後、明日、家事のついでに何があったか教えてあげるのが最善策な気もしたが……。

「あ、え、えっと……あの、リカは悪くなくて……」

……幼馴染が珍しく歯切れが悪くなっているのは、このまま放置というわけにもいかないだらう。

少し考え込んだ結果、円香は最善手を思い浮かべ、提案した。

「……リカ、一旦家で洋服貸してくんない？」

「え……？」

「浅倉、着る服なくて、少し体調悪いらしくて。ジャージもブラウスも濡れてて。このままじゃ風邪引くから、タオルとかドライヤーとか洋服貸してあげて」

「あ、ああ……そういう事……？」

ショックによる後遺症だろうか？ よくよく考えれば訳分らない上に全然、リンクしていない内容だった気もするが、まあ勢いで誤魔化せた。

現在、ノーブラであることは隠せたし、このまま押し切る……と、思っていると、後ろから透が円香の袖を引いた。

「……………どういう事？」

「着替え借りれば、濡れてないノーブラでも隠せる服、借りれるでしょ？ それなら帰れるでしょ」

「あ……………なるほど」

「あの子バカだし、多分これで誤魔化せるはず」

「ありがとう」

そう決めて、改めて二人から菅谷の方に寄った。

「で、良い？」

「う、うん……………良いけど……………」

拒否されたことがよほど堪えているのか、微妙に歯切れが悪い。その菅谷を見かねてか、円香の後ろからゴクリと喉を鳴らす音が聞こえる。透が決心するように唾を飲み込んだ音だ。

「あ、あの……………リカ」

「? な、何……?」

「私、メンズ服でも全然、良いけど、なるべく地味な奴ね」

「……」

嫌がついていないことのアピール、とでも言うべきか。相変わらず分かりにくい言い方を
する女だが、菅谷には十分、通じた。

「良いよ。でもあんま期待しないでね。基本、シンプルなのしか着ないから」

「全然。……むしろリカの服とか、少し楽しみ」

「え、虫のTシャツとか持ってないよ別に」

「いやそれは別にどうでも良い」

「保存用ならあるけど自分じゃ着ない」

「あるんじゃない」

「良いから。早く帰るよ」

××とりあえず一件落着したように、元の三人に戻って帰宅した。

××「お待たせ」

円香と菅谷がカレーを作り終わると、シャワーを浴びて着替えをしていた透が出て来た。ブカブカの長袖のTシャツを着て、余した袖を垂れ下げながら。

「これ、なんて言うんだっけ。も……萌え袖？」

「可愛い。写メ撮りたい」

「よし、バツチ来い」

「マドちゃんも着る？」

「良いから晩御飯食べて帰るよ」

後日、その透の萌え袖は、雛菜と小糸の胸を穿った。

不条理が生んだ疎外感を埋めるのは周りの友達。

季節はいよいよ梅雨に突入……と、天気予報では出ていた。それ故に、円香は折り畳みの傘を鞆に入れて登校。

何せ、今日の降水率は午後から100%。クレマーが多い世の中では中々、言い切らない100%である。

なんなら、天気予報なんて見なくても「あ、これ雨降るわ」と分かるレベルの雨空も広がっているし、余程の馬鹿でもない限り傘を忘れることはないだろう。

そんな日の放課後。円香は透と菅谷の元へ歩み寄ると、バカ二人は真顔で振り返って言った。

「傘ないわ」

身近にいた、余程のバカが。それもセットで。

全力で深いため息をつきながら、円香は鞆から取り出した傘を握る。

「……折り畳み一本しかないけど」

「詰めれば三人いけるんじゃない？」

「え、いやいいよ。俺、走って帰るから……」

「……」

「……」

その反応を見て、円香と透は顔を見合わせる。そういえば、この子はいまだに照れ性。そろそろ、これだけ長く女の子二人と一緒にいるのだから慣れても良い頃だろうに。

……いや、傘一本の中に三人で入れれば、確かに身体は密着するが。それでも精々、肩と肩が当たる程度の話なのだし、そんなに照れる事はない。

まあ、それは人それぞれとしても、だ。これはチャンスである。毎度毎度、振り回されて自己達逆襲する。

帰ろうとする菅谷の手首を、後ろから円香が掴んだ。

「風邪引く。そしたら私が看病しないといけないでしょ」

「うん。だから一緒に傘入ろう」

「え……いや、ていうか力強……」

「はい、行くよ」

そのまま三人で教室を出た。

昇降口で靴に履き替えながら、雨空を見上げる。当たり前だが、止みそうな気配があるでない。

「リカ、傘持って」

「え、あ……う、うん？」

背が一番高いから、菅谷が持つことになるのは当然なのかもしれない。それを察してか、菅谷は傘を受け取る。

外に出た菅谷が傘をさした直後、透と円香は両サイドを挟み込む。

「え、な、なんで？」

「や、持つ人が真ん中じゃないと濡れるし」

「すごいじゃん、リカ。超モテモテみたい」

「い、いや……モテモテというか……」

超タジタジしている。いつも好き勝手動いている男が。透はともかく、円香にとってこれほど痛快な事、滅多にない。

「ちよつと詰めるよ。濡れる」

「ぴゃつ……！」

透は単純に菅谷をからかうのが楽しいようで、むぎゅつと詰め寄った。

それによって聞こえて来た菅谷の悲鳴を聞いて、円香は思わず笑いを堪える。なにその小糸みたいな悲鳴。

「こつちも濡れそう。寄って」

「やはっ……」

今度は可愛くない方の後輩の笑いかよ、と笑いを堪えるようにフルフルと体を震わせる。

ぎゅーっと二人揃って菅谷を挟み込みながら、帰り道を歩く。正直、折り畳みの傘なんかでは全然カバーしきれれていない。

「そういえばさ、そろそろ体育で水泳始まるよね」

「え？ あ、う、うん……？」

そんな中、普通に透が会話を始めた。意図してやっているのか、それとも無意識なのかは知らないが、完璧な話題を選んだ。

「ね。正直、高校になっても水泳の授業あると思ってた」

「わかるわー。あーあ、そろそろリ〇グフィットやらないと」

「別に浅倉、太つてないでしょ」

「そうじゃなくて。リカに見られるなら少しでもスタイルを……あつ、いや別に意識してるわけじゃないけど」

……うん、やはり話題の選び方はナチュラルだったようだ。自滅してる様子を見て確信した。

「そう。私も、少し運動とかしようかな。見られる相手がいるなら」

「樋口も一緒にやる？ リ〇グフィット」

「うちにあるからいい」

「いや、お互いに監視してやらないと手を抜きたくなるでしょ」

「別にならない」

「私はなるから一緒にやろうよ」

「……アカウントどうすんの？」

「Swotch持つて来て」

「手間かかる……」

まあ、その辺は隣の家だから出来る事だ。二人でやることは別に円香も嫌ではなかった。そんな中、ふとずっと黙っているアホがいるのに気付き、顔を上げてみる。

「……」

菅谷は、頬を赤らめたままずっと目を泳がせていた。本当にピュアなんだなあ、と可愛げと嗜虐心が湧いて来てしまう。

……今、声をかけたらどうなるんだろう、と思った円香は、横から普通にやってみた。

「リカ」

「っ、な、何……？」

「さっきからずっと黙ってるけど」

「どうしたの?」

透が途中から引き継ぐように聞く。二人で問いただせば、効果は二倍である。

「い、いや……ちよつと状況が恥ずかしくて……」

「? なんで?」

「別に相合い傘くらいで照れる事ないでしょ。実際、傘忘れただけなんだし」

「相合傘というより……二人の距離が……」

「濡れろつて言うの?」

「それ私の傘なだけど」

「うゝ……」

すぐく困っている。照れながら困っている。照れ困っている。少し気分が良くなつて来た円香は、さらに距離を詰めて見ることにした。

「ねえ、濡れそうだからもう少し……」

その直後、自身の薄い胸部がふにと凹む感触。何か当たったかな? と、普段なら胸に何か当たるくらい気にしない所だったが、状況が状況だけに嫌な予感しかない。見下ろすと、菅谷の肘が思いつきり当たっていた。

「っ」

「ちよつ、マドちゃ……!」

二人が反射的に離れようとする前に、その反対側にいた透がケタケタ笑いながら茶々を入れた。

「わお、樋口超大胆」

それが限界だった。照れが爆速でオーバーヒートした菅谷は、傘を透に差し出す。

「? 何?」

「ごめん。限界」

そして、雨の中をそのままダッシュで帰宅して行ってしまった。

「……樋口」

「……分かってる」

少し、やり過ぎた。明日になったら謝らないと、と思いつつ、肘が当たってしまった自身の胸を少し撫でた。なんだか、やたらとその箇所だけ熱を帯びている気がした。

××
登日。風邪を引いた。円香が。

「ズズッ……納得いかないんだけど」

「まあまあ。今日はゆっくり休んだら?」

鼻を吸る円香の横で、制服姿の透が茶化すように声をかける。昨日、雨の中を爆走したのは菅谷なのに、なんで自分が……と、真っ赤なままの顔でボヤク。

「じゃ、私もう行くから。放課後、リカとお見舞い行くからね」

「……別に、来なくて良いから」

「いや、行くから。じゃ」

昨日の件が気まずいから、正直勘弁して欲しかったが、透は無視して部屋を出て行ってしまふ。あの様子だと、行くと言った以上は来るつもりだろう。

「はあ……」

らしくない事をした……菅谷が相手だからかかってやりたくなる気持ちが出て来るのは何故なのだろうか。そんな自己嫌悪にも似た後悔と謎が、円香の中に残り続けた。

一方、透は。樋口家を出ると、すぐに電車に乗って菅谷との待ち合わせ場所へ。今日も雨だが、朝から降っていれば傘は忘れない。

自分が家を出るのが遅れたからか、既に待ち合わせ場所には菅谷がいた。雨の中を走った癖にピンピンしている。

「お待たせー」

「おはよ。マドちゃんは?」

「風邪」

「……なんで?」

「さあ?」

菅谷にとつても不思議だったようで、小首を傾げている。

「ま、でもそれなら放課後、お見舞い行こうか」

「うん」

軽いノリでそう決めて、二人はそのまま登校した。

「いやー、にしても雨だね」

「うん。超雨」

「雨、リカ嫌なんじゃない？ 虫とかいないし」

「いやいや、雨の日でもたくさん生き物いるから。カタツムリとかカエルとか」

「へー。でも見つけても手に乗せたりしないでね」

「なんで？」

「乗せたら怒るから」

なんて話しながら歩いていると、公園の横に差し掛かる。その壇場に生えている草木の先端に、カタツムリがいた。

「ほら、いた」

「ほんとだ。かわいい。絶対、触らないけど」

「カタツムリって四つ、触覚あるけど、その中の目つて上の大きい二本にあるんだよ」

「へー、じゃあ急に巨人が出て来て、目ん玉飛び出させながら驚くギャグ漫画を常に実践

してるんだ」

「すごい感性。ちなみに俺らのこと見えてないらしいよ。光を感じるか感じないか、程度が目だから」

「なるほど。……あ、そだ。樋口に送ってあげようよ」

「良いね。撮ろうか」

そう言うと、二人でカタツムリがいる葉っぱを挟むようにしゃがみ、透がスマホを構える。透と菅谷は各々のピースを重ね、カタツムリのツノを四本作ってカタツムリがいる葉っぱの下に構えた。

「よし、撮れた」

「送ってあげよう。案外、寂しそうにしてるかも」

「それあるわ」

×××なんて話しながら、二人で並んで登校した。

×××一方、その頃。

円香は頭に冷えピタを貼ったまま目を閉じていた。頭がボーツとするが、なんだか眠れない。

菅谷は、今日は透と二人でずっといる事だろう。別に良いけど……少し、疎外感はある。

る。小糸の気持ちだが、今更になって分かった。

まあ、とはいえ腹を立てるほど子供ではないつもりだ。今、眠れないのは全く別の要因のはず。

「……はあ」

それにしても、昨日のことは少し後悔していた。我ながら、キャラじゃない事をした自覚があった。あれでは、雛菜とやったことは同じだった。

しかも、ウィークポイントを攻めて逃げさせてしまった辺りが、大きな反省点かもしれない。

そして、それを思う度に今日の夕方が憂鬱だった。彼に、一体どんな顔して会えば良いのかわからなくなって来ている。

……気にしすぎだろうか？ いや、でも自分の行動を振り返ってみても、やはり気恥ずかしい。少なくとも、小糸と雛菜には知られたくない一幕だった。

「……はあ」

そんな風に思っていると、ヴーツとスマホが震える。確認すると、透から写真とメッセージが届いていた。

とおるん『今日の樋口の代わり』

そのメッセージと共に付いていた写真は、バカ二人が手でカタツムリを作りながらカ

タツムリと写っている写真だった。

なんかもう普通に二人とも笑顔で映っている。なんか、少し後悔していたのがバカバカしくなるほど。

でもまあ、自分がいないからこうしている、と思うと、やはりなんか胸の奥がキュツとなる。忘れっぽい男ではあるが、顔を合わせたら昨日のことは思い出してしまいうだろう。

「……はあ」

ため息をつきながら、とりあえず布団の中に包まり、後頭部だけ出して寝てる自分の写真を撮った。カタツムリ、と言われれば自分の今の状態も同じだから。

一応、菅谷には見せないで、と言いつつ、今度こそ目を閉じてみた。何故か、ぐっすり眠れた。

「いやー、このマドちゃんホント面白いね」

「元々、ノリは良い子だからね」

学校の休み時間中、菅谷と透は普通にカタツムリ円香の写真を見ていた。現在、体育の授業中。男女共に室内でバスケットである。

元々はプールの予定だったのだから、双方とも室内でやらざるを得なくなり、コート

を分けて遊んでいる。

二人とも出番ではないため、スマホをいじっていた。堂々といじりすぎて、逆に先生にバレていないあたり、スパイの才能がある。

「……あ、俺次試合だ」

「じゃ、スマホ預かるね」

「さんきゅ」

スマホを手渡された透は、しばらくここで待機。そういえば、中学の時の球技大会では、当日が晴れてしまって男子はサッカー、女子はバスケットになり、活躍を見ることはできなかった。

一体、どんな感じなのかな、と思い、眺めてみることにした。

早速、試合開始。元々、プールの予定であったのがバスケットに変更になった為、ほとんど遊びみたいなものだ。

「つしゃ、やるぞお前ら」

「相手バスケット部いるから。マジで行くぞ」

「植物園行きたい」

「なんで急にそんな話したの？」

それでもガチになるあたり、やはり男子はまだまだ子供だ。子供以前の話の奴もいた

が。

試合開始され、まずは菅谷がいるチームのボールとなった。ボールを回している過程で菅谷の元へ。フリーだった為、ドリブルしようとした。踏み出した足の上にボールが乗り、イレギュラーにバウンドして菅谷の顔面を襲った。

ひっくり返った菅谷の脚に、ボールが再び当たり、天井まで蹴り上げた。

再びバウンドし、戻って来て菅谷の顔面を再度、襲った。

「曲芸か！」

××× 体育館中からツツコミが炸裂し、その一部始終を透はスマホに収め、円香に提出した。

×

「ふう……」

目が覚めるなりトイレに行きたくなった円香は、用を済ませてから部屋に戻った。

ベッドの脇にある机に置いてあるスマホを見ると、また透からチェインが来ている。見てみると、菅谷の動画だった。1回のドリブルで、顔面に2ヒットもらう情けないイケメンの動画だった。

「ブツ、フフツ……！」

またも不意打ちである。こんな合成映像みたいな下り、中々ないだろう。

見事にツポに入り、ベッドの上でお腹を押さえて悶えている様は、かなりの重病人の

ように見えるだろう。

×「まあ、何はともあれ、熱は普通に上がった。」

×「昼休み。そろそろ学食に飽きて来た菅谷だったが、そのために考えた作戦は、購買部であった。」

従って、透とおにぎりやらパンやらチキンやらを購入し、食べる場所を探す。

「教室じゃつまらないよね」

「それ。屋上行ければ良かったんだけど……」

封鎖されている。前に学校抜け出してラーメンを食べに行つて以来、割と普通に担任から目をつけられている二人は、校則に反するような場所では食事は出来なかった。

「中庭は？」

「雨降ってるし」

「あ、そっか」

「体育館の横通路とか」

「あ、良いかも」

すぐ決まった。迷いがないにも限度がある。

そのまま二人で目的地へ向かって歩く。

「そういえば、とおるん。今更だけど、この前は平気だったの?」

「何が?」

「や、ほら。なんか体調悪そうとかなんとか。うちでシャワー浴びる前」

「ああ、あれ。うん。全然平気」

「なら良かったけど」

実を言うと、体調不良も嘘である。改めて、この前のノーブラは変に意識してしまった。あの時の態度は正直、普通に申し訳なかった。

「でも、普通に死にたくなかった。あの拒絶は」

「あ、あー……うん。ごめん」

「や、別に良いんだけど。でも、そんなに体調悪かった?」

「うーん……今だからぶっちゃけて言っちゃうと、ノーブラだった」

「……ぬえ?」

今なんて? と言わんばかりに片眉をあげる菅谷に、透は少し耳だけ赤くしながらも続けて言った。菅谷が傷ついたままにいるのなら、早いとこ誤解を解いた方が良い。

「ブラ無かったから、なんかリカの隣にいるの恥ずかしくて、それでちよつと拒否しちゃった」

「……な、なるほど」

正直、今でも少し恥ずかしいが。

「だから、ホントにリカは悪くないからね」

「あ、うん……なんか、ごめん」

「や、だから悪くないから」

なんてしれつと誤解を解きつつ、目的地に到着し、食事を始めた。早速、二人揃ってメインのチキンから食べ始めた。……のだが、揃って表情が曇る。

「……なんか、思ったより普通かも」

「ね。パサパサしてるし。表面はカリツとしてるけど……」

「冷凍のを揚げた感じ」

お気に召さなかったようだ。多分、もう二度と食わないとすぐに把握し、とりあえず円香にも教えてやる事にした。

「マドちゃんにも教えてあげよ」

「だね。これならうどん食べた方が良いや」

「ホントに料理覚えようかなホントに」

「それが良いでしょ」

なんて話しながら、ごく自然な流れで二人並び、チキンが入るように自撮りを撮って、それを円香に送った。

××× 一方、その頃。円香はまた目を覚ました。なんかチエインが来た気がしたからである。

「……ほんとに来てるってどういう事なの……」

自分で自分の感覚にツツコミを入れつつ、また送られて来た写真を見ると、二人がチキンを片手にツーショットを撮っていた。

とおるん『このチキン、あんま美味しくないから気をつけて』

「……美味しそうな顔で言われてもね……」

要するに、多少不味くても誰かと一緒なら別に良い、という感覚なのだろう。……というか、なんでこの人達は一々、写真を送って来るのか。

……いや、理由は考えるまでもない。風邪を引いている自分に気を遣っているのだろう。おかげで、疎外感ほとんどなかった。まあ、これで授業ノート取っていなかったら少し困るが……菅谷は本当に一人暮らしを続けるために授業を真面目に受けているし、平気だろう。

「……ホント、バカ二人……」

××× そんな眩きを、無自覚に嬉しそうな表情を浮かべながら漏らし、再び目を閉じた。

さて、放課後。菅谷と透は揃って帰宅……の予定だったが、寄り道することにした。お見舞いの品を買うためだ。

駅中に入り、何が良いかを考える。

「マドちゃん、何食べたいかな？」

「なんだろ。やっぱり甘いもの？」

「ケーキとか？」

「うーん、でもケーキとか買って来られても困らない？」

「じゃあ、みんなで食べられる奴にしようか」

「ケーキじゃん」

「それだ」

そんなわけで、ケーキ屋に向かった。ラインナップは様々。……なのだが、せつかくだし美味しいものを買っていききたい。

「どんなのが良いかな？」

「マドちゃんに聞いてみよっか。別にサプライズでもないし」

「だね」

そう言って、透が円香に電話をかけた。1コール、2コール……のあと、すぐに出た。

『もしもし？』

「あ、樋口？ お見舞いにケーキ買っていこうと思うんだけど、何が良い？」

『ケーキ以外』

「え」

『じゃ』

ブツツと切られてしまった。

「なんだって？」

「ケーキ以外」

「えー……ケーキ嫌だったのかな」

「ね、不思議」

そんなわけで、別のものを探す。別のお店で甘いもの……と、思っていると、今度はシュークリームのお店が目に入った。

「見て、恐竜の卵シューだって。うける」

「何それ？ ……あ、外殻が固いのか」

「中トトロのカスタードクリームとか、ほんとに生まれる前の恐竜みたいじゃない？」

「グロ」

「……あ、でも別のシュークリームはアリかもね」

「なるほど……マドちゃん何が良いかな。なんかめっちゃ種類あるじゃん」

「ね。もっかい聞く?」

「よろ」

もう一度、透が電話を掛ける。1コール、2コール、3コール、4コール……と、少し時間が掛かったが、また応答があつた。

『……何』

「シュークリームなら何が良い? 今、期間限定で……」

『シュークリーム以外』

「へ?」

『ていうか、クリーム系以外』

また切られた。

「なんだって?」

「クリーム系が嫌だって」

「えー……クリーム以外? それ甘いものなくない?」

「確かに。クレープもクレームブリュレも基本、クリームだしね」

「あ、チョコは?」

「なるほど。……あ、あとアップルパイとか」

なんて話していると、今度は向こうから電話がかかってきた。透が応答すると、不機

嫌そうな声が聞こえた。

『チョコとパイとたい焼き系とパフェも無理だから。あと、もう寝たいから電話して来ないで』

また切られた。かなり一方的である。

「……チョコもパイもヤダって」

「え〜……まあ、見て回ってみよっか」

「うん。良いの見つかるまで歩こう」

××なんて話しながら、二人で見て回った。

×

「お母さん、胃薬用意しといて」

「急にどしたの」

「何食べさせられるか分からないから」

と、風邪を引いた体を引きずりながら母親に所望し、水を一杯、飲んで部屋に戻った。

「ふう……」

布団の中に入り、息を吐く。まあ……相変わらずメチャクチャな提案ばかりされるが、お見舞いの品をわざわざ買って来てくれる、という点は素直に嬉しかった。自分は何処まで単純なのか、と少しまた自身のチョコ口さを嫌悪する。

……いや、まあ単純さで言えば透や菅谷の方が余程、酷いものだが。

「……」

……なんか、眠れる気がしない。叩き起こされたのだから当たり前と言えば当たり前だが。

でも、寝ないと治らないのに。……いや、二人が来るなら起きてた方が良いか？ それはない。治るのが遠のいては本末転倒だ。

というか、菅谷も来るっぽいのが、来た時どう対応しようか？ どんな顔をすれば良いのか？ 謝罪はした方が良いだろうか？ いや、それはした方が良いに決まってる。しかし、なんかもう向こうはさっぱり忘れている気もするし、蒸し返して辱めるのもどうなのか……あれ、でもそれ恥ずかしくなるのも自分じゃない？

などと、頭の中がグルグルと回る。回り回って、眠れなくなってきた。

「ーっ、はあ、もう……」

身体を起こし、小さくため息をつく。こんなんで眠れるわけがない。

ふと、窓の外を見る。酷い顔をしている。頬が赤く、髪はボサボサ。目ヤニも付いてる上に、汗もひどい。……とても、菅谷に見せられる顔ではない。

「……っ、もうっ、ホント迷惑な奴……」

思ってもいない事を毒付きつつ、円香はとりあえず今のダメダメな顔を見られないた

めに、顔を洗う事にする。……が、風邪引いている今、顔を洗って平気だろうか？

仕方ないので、顔よりも髪をなんとかすることに……いや、そもそも二人が来るまでに寝るつもりだし、髪を今、なんとかした所で意味がない。

なら、せめて身体を拭こう。そう思い、タオルに手を伸ばしたら、そのタオルは既に濡れていた。さつき寝る前に体を拭いた奴だ。こんなので身体を拭けば、間違いなく悪化する。

「ああもうっ……」

どうしたら良いか右往左往している時だ。ピンポンとインターホンが鳴り響く。

「っ、う、うそ……！」

もう来たようだ。おかげで慌てて円香は布団の中に籠る。こうなったら、カタツムリでいくしかない。それも、ツノも槍も目玉も出さないフォルム。

しばらく蹲るように布団の中に潜り込み、ジツと静止する。その僅か数秒後に扉が開かれた。

「ういーっす、マドちゃ……あれ？」

「わっ、カタツムリ」

「写真と一緒にじゃん。爆笑」

「それ」

あのバカ、結局写真見せたの？ と、少し円香は眉間に皺を寄せる。もちろん、表に出せないわけだが。

そんな円香の気も知らず、のうのうとバカ二人の話は進む。

「ていうか、これ息苦しくないのかな？」

「苦しいでしょ」

「出れば良いのに」

「いや、これ多分……」

「！」

この女、察してる、と円香は脳裏をヒヤリと冷やした。すぐにスマホに文字を入力し、止めに入る。よかった、持ったまま布団の中に入っておいて。

「本当は起きてて、寝癖だらけの顔を……ん？」

気付き、見下ろす透。

樋口円香『余計な』

樋口円香『事を』

樋口円香『言ったら』

樋口円香『殺す』

「……」

「どしたん？」

「いや……何でもない」

「えー、気になるんだけど。……あつ、もしかして、昨日の件、怒ってるのかな……」

「……！」

布団の中で、円香は少し驚いたように目を見開く。ちゃんと覚えていたようだ。どうせもう覚えていないと思っっていたのに。

「まだちゃんと謝ってないし」

「ていうか、気にしてたの？」

「そりゃしてるよ……。さつき、洗面所で手洗いうがいをしたときに落ちてたマドちゃんの下着見つけたときに、フツと降りて来て……」

「ブラ見て思い出しただけじゃん」

「とおるんがわざわざ指さすから！」

こ、こいつ……。と、円香は心の中で透に殺意を芽生えさせる。なんでこう余計なことばかりするのか、この女は。

「あ……やばっ、私トイレ」

しかも荒らすだけ荒らして出て行った。こいつら本当に腹立たしい幼馴染だ。

その背中を眺めながら、菅谷は小さくため息をついていた。布団の中で何を考えてい

るのか知らないが、足音は自分の方へ近付いてくる。

布団を剥がすつもり？　と思っただのも束の間、自分の枕元にどしやつと袋が置かれる音がする。

「ふう、渡すもの渡したし、帰ろっかな。なんか熱あがっちゃ困るし」

「っ……………」

そのまま帰ってしまうのだろうか？　それはそれで助かるはずなのに、何故か胸の奥で焦りを感じていた。

このまま、帰ってほしくない…………そんな風に思った時、思わずツノを伸ばしてしまった。

「あ？？」

きゅつとズボンを掴まれた菅谷は、怪訝そうに片眉を上げる。

「…………え、起きてる？」

「…………悪い？」

「いや、悪くないけど…………どしたの？」

「……………いいで」

「え？」

「……………まだ、帰らないで…………」

「……」

普段は絶対に言わない事を口走ったのは、風邪の所為だ、と頭の中で言い聞かせながらも、円香の顔は真っ赤に染まっていたが、それも熱の所為。心臓の鼓動が早いのも、死ぬほど身体が熱いのも、身体の節々が痛いのも、全部風邪を引いた所為だ。……いや最後は本当に風邪の所為だ。

「……じゃあ、顔見たい」

「……は？」

「顔。今日、マドちゃんの顔、見てない」

「……」

こういうセリフ、円香は聞くたびに苛立っていた。何故って、こういうセリフを簡単に吐く菅谷と、そのセリフでこんなにも舞い上がってしまう自分に、とても嫌気がさすからだ。

そして何より、なんだかんだ言ってもやっぱり嬉しいから、単調な文句しか出ない。

「……むかつく」

「え？」

「……むかつく、リカの癖に……ホント、腹立つ……」

「……そう」

少し、シユンとした声を出されてしまった。その割に、菅谷は自分のベッドの前に腰を下ろす。円香の手は、ズボンからワイシャツに移行する。

「で、結局、見せてくれないの？」

「……見せられない」

「なんで？」

「……察して。そういうとこ、最低」

「でも、俺も顔見に来ただけどなあ。俺の顔は散々見た癖に」

「……そっちが勝手に送って来たんでしょ」

「送ったのおるんだもん」

「というか、送られただけで見たとは限らないでしょ」

「見てないとも限らないでしょ」

「……でも、見せられる顔じゃない」

「顔面で2回ドリブルした俺は見たのに？」

「ぶふっ……」

「今、笑った？」

「思い出させたのそっちでしょ」

「やっぱ見たんじゃない」

「……」

菅谷のくせに、カマまでかけて来た。こんなにしつこい菅谷は初めてかもしれない。なんにしても、引つかかった自分が悔しい。

……。

……。

……。

……そんなに、自分の顔が見たいのだろうか？

「……別に、どんな顔してても、マドちゃんはマドちゃんでしょ」

「ーっ……」

もう、だめだ。この男、計算でやっているわけではないのだからタチが悪い。全部、本音で言ってくれているのが丸分かりだからだ。

だから、言う事を聞いても良いという気になつてしまふ。

少しずつ、慎重に、恐る恐る布団を開いていく。徐々に暗闇の中にこもっていた自分に、光が差し込んでくる。

その中から、菅谷の顔が出て来た。

寝癖だらけの顔の円香は、やはり少し恥ずかしくて顔が赤いやら目尻に涙が浮かんでいるやらで、なんかもう訳がわからなかった。

その円香に、菅谷は微笑みながら言った。

「……………うん。やっぱり、マドちゃんはマドちゃんだ」

「つ……………ば、バカ……………ホント、バカ……………」

また、布団の中に籠りたかったが、籠らなかつた。やっぱり、嬉しかったから。

その菅谷は、微笑んだまま枕元に手を伸ばした。

「そうだ、これ。お見舞いの」

「……………どうも。何買つて来たの?」

そこはあんま良い予感しないが。何せ、候補がケーキ、シュークリーム、チョコ、アツプルパイだった連中が選んだものだ。そもそもなんで甘いものばかり選ぶのか、と呆れてしまいそうなレベルだった。

そう思っていた円香に手渡されたのは、ゼリーだった。

「……………ふえ?」

その隣に、プリンがおかれる。

「ふたつ?」

しかし、完璧なラインナップだ。食べやすいし、その上で甘い物を見事に選び抜いて来た。やれば出来るじゃん、なんて思わず上から目線で感動してしまった時だった。

その隣に、カップ麺が置かれた。

「…………え」

さらにその隣にポテチが置かれた。

「や、あの…………」

さらにその隣にコーラが置かれた。

「炭酸？」

さらにその隣にかっぱえびせんが置かれた。

「…………」

その直後、透が部屋に戻ってきた。

「もう終わった？ ……お、始める？ お菓子パーティー」

「うん。おっ始める」

「よし、やろうか」

「マドちゃんも元気になったしね」

どうやら、お菓子パーティーをおっ始めるつもりで買って来たらしい。その気持ちは嬉しい。多分、今日一緒にいなかったから、今だけでも盛り上げてくれるつもりなのだろう。

実際、寂しいという気持ちが無かったわけではない。まあチェインを送ってくれたから、それもそんなに大きいわけでもなかったが。

ここまで大事にしてくれる友人二人は、どんな事があっても手放したくない。それこそ、恋愛のような関係に発展したとしても、だ。

まあ、何にしても、だ。

「気持ちとゼリーとプリンだけでもらうから、今日は帰って」
普通に風邪を移しちゃうし、こちらの風邪も悪化する。

蒔かれて成長した種が絡み合つて。

長期休みも、スタートが肝心。

学生の夏は、黒歴史と青春が背中合わせしている。夏に当てられ、恥ずかしい思い出を作る奴もいれば、今しかできない事を全力で楽しむ事になる人も出て来る。

その理由は、単純に夏休みがあるからだ。休みが多く、それを満喫するために恋人を作ろうとする……或いは、夏の間恋人を作ろうとするなど、人によって様々だ。

しかし、異性とのあれこれそれはそれこそ黒歴史との表裏一体。確実に楽しむためには、恋人を作るなど考えず、仲良い奴とバカやった方が良いだろう。

透はまさにそんな仲良しとバカやる夏を望んでいた。だから、期末試験が終わった後に、クラスメイトに校舎裏に呼び出された時は、普通に嫌な予感がしていた。

「好きです。付き合ってください」

「え、ごめん」

よく知らん奴に手を差し出されたが、嫌だった。というか、別のクラスでしょ。君と話したことあった？ という感じ。

「どうしてもっ？」

「ていうか、誰？」

「……」

しれつとあしらって立ち去ってしまった。校舎裏を抜けると、そこで待っていたのは円香。

「お待たせ」

「ん」

結果を聞いてこないあたり、何もかも分かっているのだろう。その気持ちは分かる。何故なら、昨日は円香が告白されたからだ。

「もう少し別の断り方したら？」

「昨日、ノーサンキューって言った人に言われても」

「だって嫌だし」

全くもって不愉快な季節だが、まあ今年だけだ。1年経てばああいうのもいなくなる。

「ていうか、リカは？ さつきまで一緒じゃなかった？」

「電話かかって来て、どっか行った」

「告白？」

「違うでしょ。あのバカ、私達以外に連絡先交換してないし」

三人だけ孤立しているわけではない。体育の時は普通に他の子達とコミュニケーション取るし、クラスのグループプロジェクトにも参加している。発言した事はないが。

それでも教室から出たら、やはり三人でしか遊ばない。

「……………うん。ん、分かった。なんかごめんね。こんな事で。いや平気。ありがと。うん……………うん。じゃ」

菅谷の電話中の声が近寄って来る。スマホを耳に当てて戻って来た。

「あ、とおるん。戻ったんだ。どうだった?」

「断った」

「だよね。良かった」

「いや、断るでしょ」

誰と一緒にいると思っっているのだろうか? なんて絶対に口にできないことを思っ
てみたり。

「それより、今の電話誰から?」

「室寺さん」

「……………誰?」

「父ちゃんの会社の人。昔から俺とよく遊んでくれてた人」

「ふーん……………何話してたの?」

円香も透の隣から聞く。なんかお礼を言っていたし、何か家にあるものを送って貰ったのだろうか？ だとしたら、また部屋の掃除を手伝う必要が出てくる。……とか、ここ最近は期末試験勉強で部屋に行けなかったが、ちゃんと片付けてあるのだろうか？

なんか、やたらと部屋に行くの拒否されて図書室での勉強を推奨されたし、不安になつて来た。

「いや、今年の夜の夜の雑木林はどうなってるか……」

「そんな事より、あんた部屋片付いてんの？」

「え、そ、そっちから聞いたって？」

円香はいつの間にか強い語気で菅谷に迫っていた。

「あ、それ私も思ってた。なんか絶対、部屋にあげてくれなかったよね」

「白状したら、許してあげる」

「助けて下さい」

「分かった。夏休みの宿題、5分の3で手を打ってあげる」

「え」

「ラッキー」

「浅倉、あんたは5分の1だから」

「えっ」

要するに、割り勘である。かなり菅谷に負担が偏っているが、当然と言えば当然である。

そんな話しながら、菅谷の家に向かった。

途中、スーパーに立ち寄り、食材を買い込んだ。菅谷が選ぶ食材を円香はほぼ全て弾いて自分が選び、透はしれつとお菓子やジュースや歯ブラシをカゴに入れ、お会計は7000円を超えた。これでも抑えている方である。

マンションに到着し、エレベーターに乗り、15階へ。こういう時、部屋が高い所にあると無駄に長く感じるため地獄である。

部屋の中に入ると、ムワッと熱気が流れ込んでくる。お陰で部屋の散らかり具合に目がいかなかった。

「リカー。クーラーつけて」

「はいはい」

「食材しまう場所、前と変わってない?」

「ないよ」

とりあえず手洗いうがいだけした後、透はリビングでダラけ、菅谷はクーラーのリモコンを押してから窓を閉め始め、円香は冷蔵庫に食材をしまう。

「あく……効いてきた効いてきた……やっぱ高いエアコンは違うわー」

言いながら、透は勝手にテレビをつけて、映画を選ぶ。何にしようかなーとか思いながら、とりあえず古畑○三郎をつけた。

「何見てんの？」

透が寝転がっているソファの前に菅谷が立つ。

「古畑。座る？」

「ん」

「どうぞ」

うつ伏せだったのを仰向けになった透は、スカートを押さえながら両膝を曲げてお腹の上で抱える。

その空いた箇所に菅谷が座ると、その膝に足を下ろした。

「……一本取られた」

「取ったー」

「でも、その……何。そういうのは家でやってくれる？ あれ……下着、見えそうだったから……」

「え……うそ。見えてた？」

「大丈夫、見える前に顔避けた」

ギリギリではあったが……正直、パンツが見えない方がえっちに感じなくもないのだが。何せ、パンツが見えるか見えないかのあたりは、見様によつてははみ出ているお尻でもあるから。

まあ、余計なこととは言わずに、テレビに顔を向ける。

「誰の回？」

「小堺〇機」

「ああ、ギャグ回ね」

「そ」

懐かしい。よくもまあ政治家関連のネタをギャグに出来たものだ、と感心する話だ。

二人揃つて、そのテレビに夢中になつてゐる時だった。突如、後ろから菅谷の脇の下に指が四本、勢いよく差し込まれる。

「ふあひよっ!??!」

お陰で菅谷は立ち上がつてしまい、その上に足を乗せていた透も必然的にソファーから転がり落ちる。

沈黙した透を無視して、立ち上がった菅谷は慌てて振り返ると、ご立腹の円香が自分を睨みつけていた。

「な、何すんの!??!」

「あんたは何もしないわけ？ 何しに来たか分かってる？」

「あつ……す、すみません……」

「……買って来たものは全部しまったから。あんたは洗濯して。私は散らかってる授業プリント束ねるから」

×との事で、片付けを始めた。

×

さて、片付けが終わり、お昼。買ってきたそばを茹で、ついでにエビと野菜の天ぷらを作った。一応、円香と菅谷が二人で作っていたのだが、途中から透も暇になったのか混ざって三人で作った。

「ゾボツ、ゾボボボツ。んー、やっぱこの時期の蕎麦は反則だよね」

蕎麦らしく嚼り終えてから、透が満足げに呟く。

「ゾボボツ、ゾボツ、ゾボボツ。分かるわー。俺も夏に食べるざる蕎麦大好き」

「ズボツ、ズボボツ、ゾボボ。うん。蕎麦と一緒にだと、脂っこいものも全部食べれるよね」

「ゾボボボボツ、ゾボツ。そういえば、マドちゃんの天ぷらは食べるの初めてかも」

「ズボボツ、ズボツ、ゾボツ。私も……というか、樋口が料理始めたの割と最近だしね」

「ゾボツ、ゾボボつ、なんでゾボ？」

「そりゃ勿論ゾボ……」

「うるさい。語尾みたいにしなないで。鬱陶しい」

当然のツツコミが炸裂する。噉って食べるな、とは言わないが、わざとやられるとイラっとする。その上、余計な事を言われそうになれば尚更だ。

本場にこいつら、打ち合わせせずにこのノリを継続しているのか疑わしい所だ。

「今日、この後どうしようつか？」

「いや、リカは片づけでしょ。まだ全然終わってないし」

「えー、でも大体もう終わってるじゃん」

「リビングはね。寝室は？」

「うぐっ……そこまでやる？」

「これ以上、ゴネるなら、外で干してあるあなたのパンツも私が畳むけど」

「わ、分かったよ……」

しよぼくれる菅谷と、不機嫌そうにえび天をかじる円香。その2人を見て、透がケタケタと笑いながら言った。

「あはは、全然家事しない夫と鬼嫁みたい」

「浅倉、ぶっ飛ばすよ」

「俺、一応家事してるんだけど……」

「あ、樋口嫌なんだ。リカが相手なの」

「……うるさい」

少し照れたように頬を赤らめたままそう返す。あまりそういう話は聞きたくない。

「マドちゃんがお嫁さんかあ……。なんか、尻に敷かれそう」

「あんたの場合は尻に敷かれてるんじゃないやなくて、教育を受けてるだけでしょ」

「え、俺のポジションも子供じゃないの、それ？」

「ね、リカ。私がお嫁さんだったら？」

「とおるんが？ ……家事やつてもらうために、やっぱマドちゃん呼ぶかも」

「それ有り」

「……馬鹿言つてないでさっさと食べて片付けして」

そう言いつつも、円香もなんかその未来は見えた気がした。……いや、正確に言うならば、なんなら結婚もしないでただなら三人で暮らしている……そんな未来が。

まあ……それはそれで十分、楽しそうではある。

そんな中、ふと透が思いついたように言った。

「というかさ、今年は高一だし、少し遠出ししない？ 海とか」

「ん、良いかも」

それにすぐ円香は乗った。なんかさっきまでの会話は続けちゃいけない気がした。

とりあえず候補を上げようと、透が顎に手を当てて天井を見上げる。

「海か山か……空か、砂漠？」

「正気じゃないでしょそれ。普通に海で良いから」

「海かあ……お金掛かりそうじゃない？」

「まあ、流石に東京湾は嫌だしね」

「うちの別荘がある所で良いなら、泊まりでも良いよ」

「へ？」

そんな二人の会話に、しれっとボンボンが入って来て、揃って目を丸くする。

「スーパードコンビニは遠いから食材は買って行かないとダメだけど、貸切でビーチ使えるし」

「……マジ？」

「良いの？」

「いや、夢だったんだよね。友達と別荘でバーベキューとかするの」

「いやそれくらい君なら簡単に叶うでしょ、と思わないでもなかったが、そこはツツコまない。」

「ただ、父ちゃんとかも使うかもだから、そこで良いなら早めに日程とか教えてくれると助かる」

「えつと……私は平気だけど」

「私も……」

「じゃあ、いつが良い？ 俺はいつでも平気。……あ、嘘。八月最初の一週間だけ実家戻ったりする」

すると、円香は鞆から手帳を取り出す。

「……うん、私の家も最初の土日で田舎に戻るし、平気」

「とおるんは？」

「分かん」

「浅倉の家も一緒」

「じゃあ……3週目に行こうか」

×× 思わぬ夏休みになりそうで、二人ともワクワクする反面、少し狼狽えていた。

×× 部屋の掃除が終わり、三人はせっかくなので宿題をやることにした。早めにやれば、それだけゆつたりと遊べる……というつもりだったのだが。

「出た、S M O P 犯人の奴」

「これマジで面白いよね。草〇くんが『自分で掴んだって言っちゃったよ』って怪我の言い訳するところ」

「分かる。なんで肩あがらなくなるまで、自分の肩を握り締めんだろうな。絶対バレる

じゃん」

「ほんそれ」

バカ二人はもう飽きてテレビに夢中だった。進んだページは、わずか3ページである。

「二応、言っておくけど、31日ギリギリで写すハメになったら怒るから」

「……」

「……やろつか」

「特に、リカ。あんた私と浅倉の宿題も、5分の3握ってるんだからね」

「へいへい」

……というわけで、仕方なく勉強を再開した。しばらく手を動かしていると、透が

「ね」と声をかけて来た。

「リカってさ、成績良かったよね」

「え？ ああ、まあね」

一人暮らしを続行するために、必要最低限の成績は取っている。それも、クラスの平均点以上という意味なので、とてもしんどいが、何とかなっている。やれば出来るタイプであることが実証されてしまった。生物基礎と物理基礎という高校に入ってから新しくできた科目も満点を2回連続で獲得していた。変態である。

「それでは第一問」

「え、急に？」

「蘇我入鹿を討ち取った二人の名前は？」

「え？ 中大兄皇子と中臣鎌足」

「なるほど……よし、はい。第二問」

「いや待って。クイズ形式にしても誤魔化されないから。それ俺に宿題やらせちゃつてるじゃん」

「大化の改新は何年？」

「……8」

「よし、8……え、嘘でしょ」

「自分でやれ。俺、5分の3やるんだから」

「けち」

なんて話しながら手を進めていると、ふと周りに円香がない事に気づく。

「あれ、マドちゃんは？」

「あ、ホントだ。サボリ？」

「もしかして、興味ないフリして俺の虫のおもちやを盗みに行ったのか？」

「おもちやにまでツンデレとかウケる」

「おっけー。二人ともコーヒー無しね」

直後、オボンの上にアイスカフェオレを三つ用意した円香から声が掛けられる。その表情は、どう見ても激おこぶんぶん丸である。

「嘘です。かたじけありませんでした」

「謝るので頂戴させて下さい」

「そのふざけた口調が謝罪のつもりなわけ？」

「すみませんでした」

「よろしい」

二人同時に謝らせ、飲み物を配る円香。少し一服しようと思ひ、二人とも息をついた。ふと時計を見ると、もう16時を回っている。

「今日、晩飯食ってく？」

「作るの私でしょ」

「いや手伝うから」

「私も食べる」

「そこは『作る』でしょ」

そんな話をしていて時だった。ピンポンとインターホンが鳴り響く。

「誰だろ」

「お隣さんでしょ」

「え、なんでわかるの？」

「呼び出し音が部屋の前のボタンのだったから」

「すごい、名探偵」

「良いから応対して来て」

とのことで菅谷が玄関に向かう……その背中を眺めていた円香と透は頷き合うと、慎重に後をつけた。なんだかんだ、美人と噂のお隣さんを見るのは初めてだ。この機会、逃すわけにはいかない。

二人とも菅谷の部屋の扉に隠れ、ひよこつと顔を出して眺める。

「こんばんは、どうしたんすか？」

「こんばんは。いいって言ったのに、またお父様がメイドをよこして料理を置いて行っちゃって……食べる？」

「ありがたいけど、それ毎日プロテインとかばかり食べてるからでは？」

「あら、プロテインって身体に良いのよ？ 筋肉つくもの」

「いや何その理論。筋肉をつけるにはプロテインより普段の食生活だから」

……なんか仲良さげに話している。菅谷と同じくらいの身長に、明るく茶色い綺麗な髪を背中まで伸ばしている。……確かに、美人さんのオーラは凄まじい。

「……どう思う?」

「……綺麗だとは思うけど」

「オーラすごいよね」

「スタイルも良さそう」

まあ、菅谷に被ってほとんど見えていないわけだが。……しかし、話し方は少なくとも上品なイメージがあった。流石、高級マンションに住んでいるボンボンのお隣さんなだけある。

「ま、考えとくわ。これ、餃子セット」

「おお、すみませんね」

「いいのよ。可愛いお友達と一緒にね?」

それを聞いて、後ろの二人も体を震え上がらせた。なんかバレてる。というか、なんなら今、盗み聞きしているのもバレてそう。

「え、なんで知ってるの?」

「たまたま楽しそうな声が聞こえてくるもの」

「もしかしてうるさかった?」

「いいえ? 夜中に騒がれてるわけでもないし、気にならないわ」

それなら良かった。菅谷と一緒に胸を撫で下ろす。

「そっか。よかった……あ、じゃあ一緒に食べる？」

が、そんな事を抜かしてくれたおかげで、透と円香の眉間に皺がよる。なんで他の女の人まで誘う必要があるのか分からないから。

「いいえ、お気持ちだけいただいておくわ」

「そっかー。残念」

どういう意味で言ってる、と冷ややかな殺意を露わにしたことで、菅谷の背筋が凍りついた。

「ふふ、じゃあそろそろ行くわ。また一緒にトレーニングしましょうね」

「あ、うん。もう少し穏やかなメニユーなら」

「何言ってるの？ 筋トレは穏やかじゃ何にもならないわ」

「うん。分かったから。ありがとう。今度はうちから何か持っていくね」

トレーニング、という言葉聞いて、真っ先に二人はピンと来た。以前、バカみたい
に全身筋肉痛になっていた菅谷とトレーニングしていたのは、この女だ。

「……」

「……」

なんか、ムカつく。なんか分かんないけど、ムカつく。

そんな二人の気も知らずに、菅谷はほくほくした表情で独り言を漏らす。

「ふいく……良いもんもらっちゃった」

「今のがお隣さん？」

それに、透と円香が声をかけながら姿を表した。

「え、なんで俺の部屋にいたの？」

「そんな事はどうでも良くて。お隣さんと仲良いんだ」

「いや、まあそれなりに……」

「ふーん……」

「年上のお姉さんが好みとか、子供みたい」

「え、別に好みとかじゃなくて。……大体、あの人、話してみると年上感ないよ。1に筋

トレ、2に筋トレ、3、4も筋トレ、5も筋トレの人だし」

「別にそんなこと聞いてない」

「? 何怒ってるの?」

「怒ってない」

不機嫌なだけだ。決して怒ってなんかない。

「それより、餃子の皮買いに行かないとなんだけど……というか、餃子で良い？」

「……別に良いけど」

「私も」

「じゃ、行つてくるね」

さつき買物には行つたばかりなので、本当に餃子の皮だけ買うつもりで出て行つた。

その背中を目で追いながら、円香と透はリビングに戻る。なんか、少し変な危機感があつた。お隣の年が近いお姉さん……同時期に一人暮らしも始め、お互いに助け合いも可能。

……もし、もし何かの間違いで、二人の間に何かあつたら……。

…

……

……

ある日、お隣のお姉さんは部屋で筋トレをしていた。その部屋のインターホンが押される音が室内に鳴り響く。

「はい？」

玄関を開けた直後、目の前にいたのは覆面を被り、刃物を構えていた男だった。

「金出せ」

「っ……っ！」

そう低い声で言われた直後、お姉さんは後退りし、玄関の段差に足を引つ掛けてひつ

くり返ってしまおう。

男は持つて来たガムテープでお姉さんの口と身体を巻きつけ、動けないようにする。

「こんな良いマンションに住んでんだ。金目のものなんかいくらでもあんだろ」

へっへっへっ……と、悪党の笑みを浮かべながら、男が室内を見て回った時だ。その玄関から、菅谷が入って来た。

「すんませー……うわっ、強盗」

「ちっ、隣人か。怪我したくなけりや、さっさと消えな」

「え、俺手品師じゃないよ？」

「いや、その消えなじゃなくて」

「あ、もしかして電気消してって事？」

「違う。いや、でも消してくれた方が周りにはバレにくいかも」

「消す？」

「よろしく」

電気を消した直後だった。菅谷はスマホのライトをつけて男に投げつける。

「うおっ……な、何のつもりだ!?!」

スマホを避けた男だが、ナイフに光が反射して目を奪われる。

その隙に菅谷は接近し、懐に一気に潜り込むと、大腰をぶちかまし、床へ一気に叩き

つけた。

「ゴホッ……!」

手からナイフとガムテープが離れ、菅谷は男の身体をぐるぐる巻きにした。

パチツ、と電気をつけ、お姉さんの元に駆け寄り、口元のガムテープを剥がす。

「大丈夫?」

「え、ええ……ありがとう……」

「うわ、口の周りがザクみたい。面白」

テープの跡が残っていて、それを示しているのだろう。お陰で、空気は少し崩れた。

「悪いけど、テープを剥がして貰えるかしら?」

「あ、はい。えーっと……」

テープの端を探していると、そこは夏葉の胸元にあつた。

「……えっ」

「? どうしたの?」

「い、いや……ちよつ、剥がし目が、ちよつと……」

「早く剥がしてくれると嬉しいんだけど……」

「そ、そう言われても……」

「別に胸元にあるくらい気にしないから!」

「ご、ごめんなさい！ 先に警察の人呼ぶのでその人に剥がしてもらってください！」

「……」

……

……

……

「……………」

「……………」

……なんか、一目惚れに近い感情なら、すぐにイケメンの魔法は解けそうだ。というか、そのやりとりは一周回って可愛げさえ感じる。

しかし、隣人同士のドラマチックに有り得そうな話はそれだけではない。

他のパターンを想定してみた。

……

……

……

お姉さんが部屋の中で掃除をしている時だった。何か焦げ臭さを感じる。ふと辺りを見回すが、自分の部屋からではない。ベランダに出て何かあるか探していると、下の階で火事が起こっていた。

「っ！」

その直後、自分の部屋の床が燃え始める。おかげで、ベランダにいたお姉さんは逃げられなくなってしまった。

そんな時だった。そのベランダに、隣のベランダから侵入してくる影。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ……でも、玄関が塞がれてしまつて」

「ベランダを伝つて、火が回っていない所まで逃げましょう」

「で、でも……私そんなに身軽にはいけないわよ」

「大丈夫です。俺が抱えて……」

そう言いかけた直後、菅谷の視線はお姉さんの抜群のスタイルに向く。

「あ、いや……やつぱり、その……先導するからご自分で……」

「? どうしてよ？」

「ちよつと、その……あんまり密着し過ぎるのは、なんというか……」

「言つてる場合じゃないから！ お願ひ」

お姉さんは強引に菅谷に抱っこしてもらう。大きなお胸がふにつと正面から直撃し、オーバーヒートした菅谷はそのまま気絶した。

「……きゆう……」

「……………ああもう、仕方ないわね！」

そう毒づいたお姉さんが逆に菅谷を抱っこして、そのまま無事に脱出した…………。

……………

……………

…

「……………」

「……………」

なんか大丈夫そうな気がして来た。

「ただいまー」

ちようどそのタイミングで、菅谷が部屋に戻ってくる。その時には、円香と透の表情は生温かい笑みになっていた。

「どしたの？」

キョトンとした表情で聞きながらリビングに歩いてくる菅谷を見て、こんなピュアな男子高校生、中々いないだろうと変な境地に陥り、気がつけば二人は菅谷の頭を撫でてあげてしまっていた。

「っ、な、何……………？」

「いや、別に」

「ずっとその可愛いままでいてね」

「な、何言ってるの……?」

××とりあえず、飽きるまで撫で続けた。

××食事を終えた。焼いたのは円香だが。いや、絶品だった。お隣のお金持ちのメイドが作ったタネに追加し、円香が母親に教わった羽付になる焼き加減により、それはそれはお店に出せるレベルのものとなっていた。

「あー、美味かった」

「ホント。樋口、焼くの美味すぎ」

「それはどうも」

今は円香はお皿を洗い、菅谷は机を拭きながら食後のコーヒーの準備をし、透はだらけている。

ほんと、こういう風に二人とも褒めてくれるから、やり甲斐を感じる。よく「対価をもらわないと向こうは感謝しない」という話を聞くが、透と菅谷の二人は、少なくともその限りでは無さそうだ。

「この後はもう帰るだけかー」

「もうそろそろ8時回るし、そろそろ帰った方が良いんじゃないね」

「分かってる」

名残惜しい、という気持ちがないわけではない。……とはいえ、もう夏休みなのだ。八月頭はダメでも、八月になるまでの四日間是一緒にいられる。

だらけている透が、暇になったのかぼんやりと聞いた。

「リカはこのあと、どうするの?」

「ん、今日はお出かけるよ」

「? なんで?」

「昔からよく行つた雑木林で虫の写真撮りに行くから。室寺さんが言うには、結構いるらしいから」

「……ふーん」

ちなみに、室寺さんとやらも昆虫オタクである。ブリーダーもやっている点が菅谷と違う所で、家にいるオオクワガタは今年で6年目に突入したらしい。

菅谷とは虫を愛でるスタンスは違うが、それでも仲良くしてられるのは大人と子供だからだろう。

「私達も行つて良い?」

「はあ」

その「達」には自分も含まれているのだろうか? と、円香は片眉をあげた。

「別に捕まえるわけじゃないよ？」

「うん。捕まえるってなっても、私ら触れないし」

「いや、待って。ダメでしょ。もう割と夜遅いんだけど？」

当然、円香が止めに入る。夜遅くなくても、別に行きたくない。

「大丈夫でしょ、少しくらい」

「私は行かないから。てか、浅倉もやめて」

「？　なんで？」

「……餃子食べたでしょ」

「それは平気。さっき、歯ブラシ買っておいたから」

「……え、あれ浅倉が入れた奴？」

確かに袋の中に歯ブラシがあったのは円香も覚えている。何せ今日買ったものを買ったのは、自分だから。二本も買っていったから、少し不思議だったが一人暮らしならそれくらいストックするものなのかな？　と思っていた所だった。

「え、なんで買ったの？」

「ん？　今後、ここでご飯食えることもたくさんありそうだから」

「あ、そっか。じゃあ、うちに置いとく感じ？」

「うん」

なんか流暢に飲み込んでいるが、よく考えてほしい。それ、一人暮らしの男の家に居座る第一歩にしか、円香としては思えなかった。

しかも、わざわざ自分の分まで透は用意している。

「でも、今日は帰った方がよいよ。夜の雑木林、割と危ないから。スカートだと虫にやりたい放題されるよ。脚に赤い腫れを地雷みたいに量産したくないでしょ？」

「えー、じゃあ仕方ないか……」

「洗い物終わった」

「ありがとー。こっちもコーヒー入ったよ」

「ん」

砂糖とミルクを入れて、三人ともカフェオレである。

これから始まる夏休みに、様々な想いを馳せながら、コーヒーを啜った。

三つ巴は三勢力共、拮抗した力が無いと成立しない。

真夏、クーラー代の節約が何より大事だと言うことに気が付いたのは、父親からの電話によるものだった。

『お前、もう少し節約しろ。請求額があり得ないから』

「え、払えないの?」

『そういう事じゃなくて、うちは確かに金はあるけど、だからって無駄に浪費するのはやめろって事』

怒られたので改めることになった。とはいえ、ずっと窓を開けていても暑いものは暑い。なんとかして手を打たないと、丸一日寝て終わってしまう。

「……マドちゃんに電話してみよ」

今日は来てくれないのかなーなんて思いながら電話してみると、すぐに応答があった。

『もしもし?』

「今日は来ないの?」

『今日は無理。小糸の受験勉強見るから』

「えー……とおるんは？」

『浅倉は雛菜と遊びに行ってる』

「……えつと、市川も受験生だよね？」

『余裕あるんでしょ』

皮肉ではなく本当に余裕あるのだからタチが悪い。やろうと思えばもつと上の高校も目指せるだろうに、透と同じ高校に行きたいから目指さないのはもはやナメている。

まあ、今はそんな話よりもこの暑さの処理だが。

「じゃあない……お隣さんと遊んで来ようかな……」

『うちに来て』

「え？」

『小系に理科を教えてあげて欲しいから、さっさとうちに来て』

「いや、まあ良いけど……」

×そんなわけで、行くことになった。

×

「おーつす、マドちゃん。とりあえず飲み物とお菓子買って来たよ」

「……ホントに来た……って、何その汗？」

真夏の中に来たにしても、少し汗をかきすぎない程、菅谷は全身び

しよびしよでスーパ一の袋を持って立っていた。

「いや、マドちゃんに会えると思つたら嬉しくて、走つて来てしまいました」

「バカなの？　人の家に来るのにわざわざ汗かいてくる事ないでしょ」

「？　うちにマドちゃんが来た時はどんなに汗かいても入れてあげるよ？」

本当に普通の人の基準がわからない奴である。いや、人によるのかもしれないが、みんながみんな自分と同じだと思わないでもらいたい。

「……とにかく、小糸も来るんだからシャワー浴びて来て。うちの使つて良いから」

「良いの？」

「他にどうしようもないでしょ。着替えは後から持つてくるから」

「ありがとう」

「先に洗面所で待つてて」

それだけ言つて、家に上げると洗面所の扉の前まで案内して、自室に向かつた。バスタオルは一枚、洗濯中でもう一枚は使用中。なので、普段の汗拭きタオルを貸すしかない。

それと、泊まりの外出に行く際に行く体洗う用のタオル。それらを抱えて洗面所に向かい、扉を開けた。

中で、菅谷は上半身のTシャツを脱いでいた。細マッチョというほどではないが、決

して脂肪が必要以上についているようにも見えなかった。……いや、今は感想じゃなくて。

「はっ!?？」

「っ、え、な、なん……!?？」

慌てて円香は背中を閉じた扉につける。不意打ちに、思わず心臓がアクセルを当然、思いつきり踏みつけたように加速する。

「っ、な、なんで脱いでるの!?？」

「い、いやだっってお風呂……」

「タオル持つてくるから待っててって言ったでしょ!」

「あ、そっか……ご、ごめん……」

「変態! 最低! 露出魔! 大っ嫌い!」

「……」

思いつく限りの罵倒を言った辺りで、ハッと正気に戻る。扉の向こうから、何の反応もなくなくなった。

言いすぎた、と即座に理解すると共に後悔し、円香は恐る恐る扉を開けて中を覗く。思った以上に大ダメージだったようで、まだ上半身裸のまま燃え尽きたボクサーのように項垂れていた。

「……」

「……まず服きなさいよ……」

まるで言い訳をするようにそう呟きつつ、円香は恐る恐る近付く。腹筋や大胸筋より、背筋の方がしつかりしている人、初めて見た。……そもそも男の人の裸をまじまじ見たことはないが。

とりあえず、呼び出した本人が相手を傷つけるのはごめんだ。近いうちに彼も実家に一度戻るし、喧嘩別れはごめん被る。

「……ごめん、言い過ぎた」

「……」

「べ、別に……あんたのこと嫌いじゃないから……とつさに、その……ちよつと、言っちゃっただけで……だから」

「へくちつ」

「……だから、まずシャワー浴びて来て。上がったら、何か甘いもの出すから」
「……ん」

との事で、とりあえずお風呂場を進めつつ、タオルを2枚、足元に置いた。

本当に自分のそういうところが憎い……と、自省しながら、円香は洗面所を出る。と
いうか、着替えを手渡すのを忘れていた。

自分の部屋に戻り、着替えを適当に選んで、持ったまま洗面所へ向かった。早めに来たので、中からシャワーの音はまだ聞こえる。セーフなので、さっと洗濯機の上に自分の私服を置いた。

「リカ、聞こえる？」

「つ、な、なんですか……？」

まだ少し怯えていた。謝るべきはむしろこっちなのに。

「……本当に嫌いとかになってないから、そんなに怯えないで」

「つ、ご、ごめん……」

「……とにかく、着替え。洗濯機の上に置いといたから」

「ありがとう」

「……」

微妙にぎこちない。本当に「大嫌い」は堪えたらしい。

「……本当に嫌いだったら、私服なんて貸さないから」

「え……？」

「それだけ。ごゆっくり」

それだけ言うと、菅谷の私服を持って洗面所を出た。リセ〇シユをかまして干しておけば、帰る頃には着れるようになっていよう。

それを完了すると、約束した甘いものの準備。久し振りに小糸が家に来るため、買っておいたドーナツを出した。自分と小糸で二個ずつのつもりだったが、自分の分を一つにすれば良いだろう。

勉強する場所である自室にちやぶ台を広げ、座布団を三つ用意し、ようやく一息ついた所で、何故か急に不安がフツと降りて来て「ん？」と声を漏らした。

——幼馴染がいる前で、家で男がシャワーを浴び終えて出てきたら、変な勘違いをされるのでは？

と。

「ーっ、ヤバっ……！」

だが、もう遅かった。ピンポーン……というメリーさんが訪れた鐘の音が届いた。

××
小糸は、ひさしぶりに円香と一緒にいられることが嬉しくて、勉強を教わるというのにワクワクしていた。

円香と透が高校に行つてからも、何度か遊んだことはあったが、やはり以前に比べたら格段に回数は減っている。

だから、同じ高校に行つて、また四人仲良く遊びたい。そう強く思っている中で、こうしてそれがまだ果たされていないのに会える期間はとても好きな時間だった。

残念ながら透は雛菜が連れて行ってしまったが、勉強を教わるには正直、透より円香の方が良い。

そんな風に思いながら、円香の家のインターホンを押した。10分も早く到着してしまつたが、迷惑ではないだろうか？ なんて迷いながらも。

『……はい』

「あ、ま、円香ちゃん……！ 来たよ」

『今、開ける』

数秒後、玄関が開いた。いつもの真顔だけど、やっぱり何処か優しそうな円香が出迎えてくれた。

「いらつしやい、小糸」

「え、えへへ、お邪魔します……！」

気恥ずかしそうにはにかむ小糸が家上がり、スリッパを履く。……正直、スリッパは好きではない。ぶかぶかで邪魔だから。でも、履いた方が大人っぽいので普通に使用せってもらうが。

そんな中、ふと鼻腔を刺激する香りが小糸を襲う。

「……円香ちゃん、シャワー浴びたの？」

「つ、な、なんで？」

「なんか、シャンプールの香りが……」

「まあ、実はさつき。すごい寝汗かいちやって」

「あ、あー！ もしかしてお昼まで寝てたんだ？ いけないんだー？」

「あー……うん。まあね」

円香も意外としっかりしていない事もあるようだ。

そのまま二人で家に上がつ……ろうとした所で、小糸が「ん？」と小首を傾げる。

「このスニーカー、円香ちゃんのお父さんの？」

「え？ ……あつ」

男物の靴を見て、小糸がきく。しかし、円香の父親のものにしてはカジュアル過ぎる気がしないでもないが。

「……誰か来てるの？」

「……」

しばらく考え込んだ後、円香はすぐに答えた。

「……実は、ゲストが来てるの」

「ゲスト？」

「そう。小糸はさ、中学位がってから満点とか取ってる人、見たことある？」

「え？ あ、あー……そういえば、ないかも……！」

「少なくとも、私とその人と知り合つてテストの答えを見てからは、理科のテスト全部満点取つてる人が来てる」

「え……す、すごいね……！」

小テストでは小糸も普通に満点などは取れるが、定期試験で一問も間違えないのはそう簡単には出来ない。

「理科は、その人に教わつた方が良いでしょう？」

「え……で、でも……」

小糸は人見知りだ。知らない人が来る、と聞けば萎縮してしまう。

そんな小糸の気持ちを見透かしたように、円香は微笑みながら続けた。

「大丈夫、小糸も知ってる人だから」

「えっ？　だ、誰だろう……！」

普通に考えれば「男の人」「円香が家にあげる人」の時点で菅谷しかいないと分かりそうなのだが、それに気づかないのが小糸たる所以だったりする……そして、何も知らないまま小糸は円香の部屋まで案内された。

一方、円香は自身の機転を内心でボロクソに褒めてやりたくなくなった。嘘は言っていない。朝、起きた時にシャワーは浴びたし、靴でバレそうになった時は、冷静に「菅谷がいる事」ではなく「菅谷にシャワーと着替えを貸した事」がバレるとまずいと改めて分

析し、上手いこと誤魔化した。

意外と菅谷はオシヤレに気を使う方だし、髪もちゃんと乾かして出てくるだろう。つまり、風呂上がりとバレることはない。

「円香ちゃん、これは？」

「ん、ドーナツ。小糸が来るから用意しといたやつ」

「あ、ありがとう……！ 勉強を教えてもらえる上にドーナツまでなんて……至れり尽くせり、だね……？」

「そうだね」

とはいえ、これは休憩中のおやつ用。先に勉強だ。

「まずどの科目から？」

「え、えつと……社会！」

「ほぼ暗記じゃん」

「だから難しいというか……」

まあ気持ちは分かるが。しかし、だからこそ大体、出題される場所は分かるというものだ。

「……でも、そもそもうちの高校の受験科目、国数英だったけど」

「ぴえっ!!？」

「まあ……模試で点取るために勉強しとくのはアリだと思うけどね。それに、学校の試験もあるわけだし、宿題も出てるでしょ？」

「う、うん……そ、そっか。そうだよね……！」

小糸は真面目なので、すぐに頷いてしまった。まあどの道、小糸がやりたい科目は全部やるつもりだ。

「で、でも……せつかくだから、やっぱり受験科目を、やりたいな……！」

「ん、わかった」

「英語が良い……！」

「じゃ、それね」

なんて話ながら、小糸の無邪気さと純粹さに心を洗われながら、様子を見ようと思つた時だった。

何か忘れていた問題の一つを忘却の彼方へと置いて来た時、それが後になって追いついて来た。

つまり……早い話が、本当にここまで完璧に誤魔化せて来れたのか、という所だ。

直後、部屋の扉がガチャッと開かれた。

「マドちゃん、見て見て。スカート初めて履いた。すっごいスースーする」

「えっ」

「ぴえっ」

後ろに立っていた菅谷は、濃い青のデニムスカートに、白い半袖のラグランTシャツ。……つまり、適当に私服を選び過ぎた。いや、タンスの中からブン取った為、選んでもいない。

思わず、反射的に円香はその場から立ち上がり、高速で菅谷の肩を掴んで部屋から追いつ出した。

「なんで履くのなんで履くのなんで履くの……!?？」

「え、これが洗濯機の上に置いてあったし、俺のズボンなかったから」

「ならせめてスマホに連絡してよ……!!」

「似合う?」

「……」

似合わないでもない。この子、すね毛薄いし。でも、所詮は適当に選んだ服。何より、似合うとか言いたくない。

「……馬鹿言っていないで着替えて……!!」

「えー、少し勿体無くない? うちにスカート無いし、こんな機会、滅多にないし」

「……」

イラつとした。純粹に楽しみやがって、と言わんばかりだ。本当に異性と身体を密着

したり、肌を見てしまう事以外は何でも楽しめて羨ましい限りである。

とりあえず、無理矢理にでも弱みを握って脱がすしかない。その為、スマホを取り出し、菅谷の身体を後ろにドンっと押すと、写真を撮った。

「っ、な、何？」

「これ、浅倉に送られたくなかったら脱いで」

「いや、それは別に良いんだけど……」

良いのかよ、学祭のノリか、と、頭の中で思っている間に、菅谷が続けて聞いて来た。

「そんなにスカートダメ？ 外出るわけじゃないでしょ？」

「これから勉強するのに、女装してる男が一緒にいて集中出来んの？」

「あ……そっか……」

確かに、と思った菅谷はスカートに手をかけたが、慌てて円香はその手に自分の手を乗せる。

「待って。なんでここで脱ぐの……!」

「あ、ご、ごめん……」

「もう、本当に……いま、ズボン持ってくるから待ってて」

「はーい……」

小さくため息をつきながら、部屋に戻る。……とはいえ、今回の自分も悪い。もっ

とよく確認してから手渡してやるべきだった。

扉を開けると、小糸が頬を赤らめながらビクツと肩を震わせる。

「……」

「……」

「……小糸？」

「びゃっ……な、何……？」

「違うから」

「な、何が……？」

「何もかも。別に変な関係とか、女装趣味とか、そういうんじゃないから」

「……う、うん……大丈夫っ。円香ちゃんが、どんなことが好きでも、私はずっと友達、

だから……！」

「だから違うって……」

……いや、もう何を言っても信じてもらえない気がする。いつそ、訂正は諦め、口止めした方が良いかもしれない。

「分かった。もう小糸が思ってる事（菅谷が女装趣味）が真実でも良いから、雛菜には言わないで」

「え、い、良いの……？（円香ちゃんは女装させるのが好きって事？）」

「ん。だから、誰にも言わないで」

別に菅谷が女装趣味と思われようが知ったことではないが、それに自分が協力していた、と思われるのはいただけくない。

「わ、分かった……」

「ん、ありがと。ごめんね、勉強しに来たのに変なこと教えちゃって」

「だ、だいじょうぶ……！ 秘密の共有って、なんかすごい親友感あるから……」

秘密って言う程のものではないが、まあ結果的に守られるものを考えれば秘密と言える。

そう思いながら、円香はダンスからとりあえずズボンを取り出す。……とはいえ、身長差は明確なので、そのまま履かせたら間違いなく裂ける。Tシャツもダボダボな奴を選んでいなかったらパツツンパツツンになっていただろう。

「……ジャージでいつか」

そう決めると、菅谷と虫取りに行くことになった時用を買っておいた、虫刺され防止のジャージがある。割と最近買ったものだが、まさか最初に履くのが自分じゃなくなるとは思わなんだ。

それを持つと、廊下に出て菅谷に手渡した。

「はい。これ」

「ありがとう。なんかごめんね」

「いや、いい。適当に選り過ぎた私も悪かったし。着替え終わったら入って来て。もう勉強始めてるから」

「はい」

×そんなわけで、ようやく勉強会がスタートした。

×

×小糸は、なんだかソワソワしていた。目の前でレディースの服を着ている菅谷が気になるのではなく、むしろ円香。まさか、円香にそんな趣味があつたなんて。

正直、勉強どころではない。問題を解きながら、チラリと円香を見上げた。

「? 何?」

「な、なんでもないよ……!」

「分かんないところある?」

「……え、えつと……特には……」

「そう」

強いて言うのなら、円香に何があつたのかが分からない。

「ねー、マドちゃん。俺の出番まだー?」

「黙っててムシキング」

「その名で呼ぶなら、ポポって呼んでくれた方が良いなあ」

「誰それ？」

「え、知らないの？ 初代ムシキングのマスコットキャラクター」

「知らない。ていうか、初代ムシキングって何？ 何代とかあるの？」

「昆虫と同じ大ききで生活してる妖精みたいな奴。俺もあのくらいの大ききなら、自然の中で動物と生きていけるのに」

「何一つ共感出来ないんだけど……怖っ」

そして、目の前の二人の関係性も分からない。円香のベッドの上で、円香の私服に身を包み、円香と仲良さげに話している二人の距離感は、少し斜に構えた恋愛モノのカップルのようだ。

「あつ……ここ、なんだっけ……」

「ん……どれ？」

「あ、え、えつと……knowが入るのは分かるんだけど、その過去分詞系が……」

「ああ。……リカ、knowの過去分詞系は？」

「え、分かんないの？」

「あんたが教えないと来た意味ないでしょ」

「あ、なるほど。カプトムシで考えれば楽勝だよ。ヘラクレスオオカブト、ヘラクレス

リッキー、ヘラクレスオキシデンタリスで考えりや一発でknowって出るよ」
「あ、ありがとうございます……」

この人は本当に何を言っているのか分からない。何が一発で出るのだろうか？ 特
に最後の歯磨き粉みたいな名前のヘラクレスと「知る」の過去分詞系になんの因果関係
があるのだろうか？

「小糸、真に受けちゃダメ。そいつの覚え方、樹海の神秘と同じくらい謎だから」

良かった。そこは円香も理解しているわけではないようだ。……とはいえ、なんだか
話を聞く度に思うのが、円香も割とたまによく分からない例えをしている気もするが。

とにかく、分からない。この二人がどんな関係なのか。友達、という枠では括れない
関係になっている気がしないでもない。

とにかく、集中出来そうにない。そんな風に小糸が少しドギマギしていると、小糸の
スマホに電話がかかって来る。

「あつ、わ、私だ。ごめんね……！」

慌てて廊下に出てから相手を確認すると、市川雛菜からだった。

「も……もしもし、雛菜ちゃんっ？」

『あは、小糸ちゃん。青と緑、どっちが良い？』

「何が？」

『ヘアピン。お土産、小糸ちゃんと円香先輩に買って行くから、どっちが良いかな〜って』

「じゃあ……青？」

『は〜い。じゃあ、円香先輩は緑だね〜』

えっ、と小糸は声を漏らす。

「あ、じ、じゃあ……円香ちゃんにも聞いてみる、ね……？」

『え〜？ 大丈夫だよ、どうせ「なんだって良い」とか冷たいこと言われるだけだし〜』
それは確かにそうかもしれない。円香は割と何色でも似合いそうだし……言わなくても良いのだろうか？

「じゃあ……私が青で」

『は〜い、またね〜』

それだけ話し、電話を切った。わざわざ透とのデート中にお土産をくれると言い出す辺り、何か面白い商品でも見つけたのだろう。

少しだけ楽しみな反面、色んな意味で恐怖も覚えつつ部屋に戻ると、円香と菅谷がベッドの上で隣に座り、スマホを見ていた。

その様子は、どう見たって仲睦まじそうにしている二人だ。

「……でさ、これ」

「ああ、良いかも」

「でしよ？」

「じゃあ、少しずらそっか」

……だが、小糸には「この洋服良くない?」「良いかも」「着てみたら?」「サイズ少しずらそっか」に見えてしまう。早い話が、女装の相談だ。

果たして、これは円香がきっかけでこうなったのだろうか? いや、考えにくい。それよりも、菅谷の所為だろう。

……とはいえ、何にしても円香がそれを楽しいというのなら、自分に止める手立てはない。なら、むしろ受け入れてやるべきだ。

ただし、これ以上、変な人にはさせられない。そういう意味では、例えば菅谷が良い人でも見張っておくべきだろう。

その為にも……。

「……あ、小糸来た」

「続きやるかー」

「し、失礼しますっ……!」

小糸は、菅谷と円香の間に座り込んだ。

「? 小糸?」

「ま、円香ちゃん。勉強したい……!」

「するけど?」

「じゃあ……は、早くやろ……!」

「う、うん?」

言いながら、円香の手を引き、ベッドから降りて宿題を進めた。その背中を眺めながら、一先ず菅谷は寝転がって天井を眺めた。

途中でドーナツ休憩を挟んだりしたが、なんだかんだあつて勉強会は無事に終わった。

やたらと菅谷に敵意を放っていた小糸だったが、ドーナツと一緒に出された菅谷が買って来たジュースとポテチに餌付けされ、結局警戒心など消失したりしていた。

で、今は、小糸を家の近くまで送った円香と菅谷の帰宅中。着替えも着れるようになり、菅谷の私服に戻っている。

「借りた服、本当に洗濯しなくて良いの?」

「別に良い。シャワー浴びた後に着ただけだし」

「なんか、ごめんね?」

「別にいい」

さて、そんな話よりも、だ。小糸が廊下に出ていた時に話していたことを改めて話し始める。

「そうだ。お祭りやるんでしょ？ 行くってことで良いなら、別荘行く日ズラすよ」

「うん。お願い」

「よく見つけたね」

「……別に、偶然だから」

本当に偶然だ。偶々、お祭りってワードで検索しただけだから。

「でも、あれだね。福丸だっけ？」

「うん」

「初めてあの子と話したけど、良い子じゃん」

「当たり前でしょ。小糸だし」

円香にとって、幼馴染四人の中では唯一の癒しだ。悪い子なわけがない。

本当なら小糸について語り明かしたいことなど山ほどあったが、早めに聞いておきたい事もあったので延期した。

「ちなみに、いつから実家に帰るの？」

「明日」

「あ、ほんとに8月の頭から戻るんだ」

「父ちゃんがうるさいからね。……はあ、憂鬱なんだけど」

「ホームシックとかないの？」

「え、あんまり……マドちゃんとおるんと一緒だったからその辺はなかったかな」

「……あつそ」

冷たく言いつつも、円香は目を逸らす。もう彼がしれつと恥ずかしげもなく恥ずかしい言葉を言うのを止めることは諦めた。

「で、何が憂鬱？」

「ん……いや、まず一週間、二人と会えなくなることでしょ」

「それは分かったから」

「後、親戚の挨拶回り。なまじお金があるだけあつて、割と面倒くさいんだよ」

なるほど、と円香は理解すると共に、一つの可能性が思い浮かぶ。いつも自由奔放なのは、家でしきたりを守り続けていた時の反動だったりするのだろうか？

「何、もしかしてあんたもそういう場では『お父様』とか言ったりするわけ？」

「いや、小三の時、大事な取引先……だったのかな？ そのトップの人のカツラ取ってクワガタとスズメバチと蛾のオモチャ乗せて『真夏の街灯ごっこ』って言うてから『お前はこういう場で何もするな』って言われてる」

「……」

なんとも言えなかったが、その後どうなったのかは知りたい所だ。

「昔からバカだったんだ……」

「自由研究では毎回、賞取ってたけどね」

もう何にもツツコミを入れないことにした。それは頭の良さとは違う、何か別の良さだ。

「正直、何も喋らない場に行かされても、暇なだけだし……こういう時、スマホゲーにハマってれば、それでも無いんだろうけど」

「……そう」

お金持ちにはお金持ちの悩みがある、ということだろうか？ それでも、菅谷なら平気でサボりそうなものだが、参加だけでもしているあたりは偉いと言うべきか。

「それなら、いつでもグループにチェインして」

「え？」

「暇な時なら、いつだって相手になるから。……私も、浅倉も」

「……」

「ま、暇な時があるかは別として」

円香も実家に帰ったり、雛菜や小糸と遊んだりするので暇な時は割と限られているかもしれない。……という理由を使って予防線を張った自覚はあった。ホント、情けな

い。

「……マドちゃんってさ、やっぱ優しいよね」

「……別に、優しくないし」

「夜とかなら比較的空いてると思うから、その時は電話するね」

「……ん」

そんな話をしながら歩いていると、円香の家がある通りと駅に向かう道の分かれ道に着いた。もう歩いて1分かからない位置まで来て、家の前まで送ってもらおう必要はない。

「……までで良いから」

「あ、そう。じゃ、また……一週間後くらい？」

「ん」

軽く挨拶して、駅の方に走って行く菅谷の背中を見送った後、円香は帰宅しようとする。りの方へ振り向いた……直後、透がいた。

「……浅倉？」

「やつほ。今日、リカと遊んでたんだ？」

「と言うより、小糸の勉強の面倒見てた」

「なるほどね」

小糸の勉強を見る、と言うのは知っていたからか、すぐに納得いったような返事をした。

「そつちは何処行くの？」

「ん、コンビニ。アイス食べたくて」

「あつそ。……じゃ、私も行く」

「どうぞ」

二人で並んでコンビニに向かう。外は割と暗くなっていて、街灯と星灯り以外、街を照らすものはない。

やはり、真夏の夜に散歩するのは、何処か風情を感じられる。

「そういえば……こんな月だったな」

「何が？」

「リカの頬に、チューした時」

「……」

そういえば、そんな話をしていた。事故とはいえ、そんな恥ずかしい思い出をよく恥ずかしげもなく何度も言えるものだ。

「あれから、割と夢に見るんだよね」

「何を？」

「あの時の光景。……リカの横顔が、すごく近くにあって」

「……」

少し、複雑だった。恋愛の経験がない円香にはよく分からないが、キスというのはそんなに思い出に残るものなのだろうか？

……いや、まあ写真まで撮っていたし、当然と言えば当然かもしれない。

「あつ」

「?」どしたの?」

写真で思い出した。そういえば今日、女装した菅谷の写真を撮っていた。これ、どうしたものか。

消してしまいたいのが、消すにはなんか惜しい気もする。具体的には、何かに使えそうな、そんな気配。

……いや、今はそんなことではなく、キスした、と報告を受けた日、透から写真まで見せてもらった。おそらく、あの時の意図は「三人で仲良くしたい」という想いから、打ち明けてくれたことだろう。何もかも打ち明けることなんてないと思うが、そちらがそういう対応をするのなら、こっちもそれ相応の対応をするべきでは……。

「……」

「樋口?」

……いや、キスをした、と、女装させた、は全然違う気もするが……いや、自分の服を着せた、という意味ではやはり言うべきか……。

しばらく考え込んだ後、とりあえず話してみることにした。元々、見せる予定で撮ったものだし。

「浅倉、その時の写真、見せてくれたでしょ？」

「ああ、うん」

「だから、私も見せる」

「キスしたの？」

「いや、してないけど」

言いながら、円香は写真を見せた。直後、透は半眼になった。

「……え、着せたの？」

「……まあ」

わざとではないが、そう言っても言い訳くさくなるだけだろう。

「……樋口ってそういう趣味？ それともリカの趣味？」

「どう解釈しても良いけど一応言っとく。どっちでもない」

「ふーん……」

……やはり、見せない方が良かっただろうか？ しかし、見せないままでも自己嫌悪

に耽りそうな気もするが……。

「ありがと、樋口」

「? 何が?」

「見せてくれて」

……なんか、真っ直ぐ言われた。これは、やはり言つて正解だった奴だろうか?

そう思つた直後、なんかフルフルと透の体が小刻みに震える。それとほぼ同時に、お腹と口を押さえて前屈みになり始めていた。

「つ……ふっ、ぐめっ……もう、限界……!」

……間違いない、と円香は先程の自らの内心を否定する。これは……。

「スカート、リカ……無駄に、似合う……ふふっ……!」

見せて正解だった奴だ。もう死ぬほど笑わせてしまつていた。

ツボに入って静かに爆笑する透を見て、なんだか円香も笑いが込み上げてくる。しばらく、二人のJKが女装した友達の写真で笑うという、中々に畜生な絵面になったが、止める者は誰もいなかった。

備えあれば憂いなし。

浅倉透は、少しウキウキしていた。何につて、菅谷の反応である。いつもいつも円香一人、或いは自分と一緒に菅谷の部屋に行っていたが、今日は自分一人というレアケース。もしかしたら、とても驚きながらも喜んでくれるかもしれない。

洋服も、万が一掃除を手伝うようになっても良いように動きやすいものにしたし、昨日、雛菜と一緒に買ったヘアピンもつけ、誕プレでもらったピアスもつけ、準備は完璧である。

そう思つて、マンションの真下でナンバーを押した。しかし、応答が無い。まだ寝ているのだろうか？

もう一度、鳴らしてみるが、反応がない。

「……」

まあ、せつかく来たし、もう少し待つてみることにした。

それから30分ほど経過し、再び鳴らす。……だが、やはり応答はなかった。何かあったのかな？ と、思ったタイミングで、スマホが震えた。

「もしもしっ……」

『浅倉？ 今、どこにいんの？』

「リカのマンション」

『は？ リカもう実家に帰ったよ』

「え、なんで？ ……まさか、転校？」

『いや、夏休み中に一回、顔見せに行くとか言ってたでしょ』

……そういえば、言われた気がする。……でも、せめて一言くらい言ってくれば良かったのに。

なんだか八つ当たりに近い感情が沸々と湧いて出てくる。

「……リカ、許さん」

『いや、自業自得でしょ。良いから家戻って来て。話あるから』

「はーい」

×とりあえず、戻る事にした。

×

×集合場所は近くのカフェ。どちらかの部屋でも良かったのだが、勉強に付き合うならともかく、駄弁るだけならクーラー代の節約させろ、とのことで外で待ち合わせる事になった。

透が紅茶を買って店内に入ってきたのに気付き、円香は軽く手を振る。

「で、話って？」

「ああ、リカの別荘に行く日、少し遅らせるって話」

「？　なんで？」

「8月2周目の金、土、日曜にお祭りやるの。行きたいから、別荘に行く日、ずらしてもらった感じ」

「こういう時、別荘というのは便利なものだ。持ち主である家族以外の都合とかお構いなしだから。……まあ、そもそも身近に別荘を持つ友人がいること自体がちよつと普通ではないのだが。」

「ああ、なるほどね。うん、全然平気だよ」

「ん」

「お祭りかあ……なんか、去年も行ったのに久しぶりな気がする」

「二回も行ったのにね」

「え、そうだっけ？」

「学祭と夏祭りだ二回」

「いや、なんか違うじゃん。夏祭りと学祭は」

「まあ、そうかもね」

「言わんとすることは円香にも分かる。正直、円香にとつてはどつちも似たようなもの

である感じは否めないが。

「……そういえば、樋口。うちの高校の学祭いつだっけ？」

「9月の後半じゃなかった？」

「何やるとか決めたっけ？」

「この前のLHRで決まった。執事喫茶だっけ」

「……なにそれ？」

「男子を執事にして喫茶店じゃないの？ 知らないけど」

クラス委員がゾルディック家オタクな事もあって、男子だけでなく女子も執事にさせられる事を、二人はまだ知らなかった。

「でも、それなら私達の出番は無さそうだよな」

「うん。……リカはその限りじゃ無さそうだけど」

「そっか……そうだね」

「……」

「……」

二人揃って、腕を組んで頭の中で何が起こるかを想像する。

はい、ほわん、ほわん、ほわわくん……。

……

……

……

円香と透が黒と白を基調に飾り付けられた店内に案内されると、まず出迎えてくれたのはクラス一番のイケメンだった。

普段の天然パーマがまるで浮かかないようにセットされ、黒い執事服に身を包んだ菅谷が、何故かモノクルを片目に装備して頭を下げる。

『おかえりなさいませ、お嬢様方。荷物を、お預かりいたします』

言われるがまま荷物を手渡すと、菅谷は引き下がりながら店内にご案内する。

『あー……えつと、なんだつけ？ ……ああ、御席へご案内致します。あちらへどうぞ……え、俺が連れて行くの？ てかもう、良くない？ クラスメイトだし。マドちゃんとおるん。こつちこつち』

……

……

……

なんかいつもの無表情に戻り、すぐに化けの皮が剥がれるのだった……。

……

……

「……やっぱなんか平気そうだよね」

「うん。モテそうとかいう心配はなさそう」

シミュレーションしやすい男である。後は、当日の衣装の良さがどれだけ菅谷のダメなところをカバーし切るかによる。

これ以上は考えても無駄な気がするので、話題を変えてみた。円香には、ちようど透の顔を見た時から気になっていることがあった。

「そういえばさ、浅倉」

「うん？」

「いつツツコもうか、ずっと考えてたんだけど」

「うん」

「その前髪についてるの何？」

今日の透はいつもと違って、別れている前髪の左半分を白いヘアピンで止めている。

「ん、昨日、雛菜と出掛けた時に買った。……あ、忘れてた。これ」

「？」

急に何？　と思った円香に、透は鞆から小さな紙袋を出した。

「お土産」

「え、なんで急に？」

「ちようど四色で可愛いのがあったから、四人でお揃いにしようと思って。私が白、雛菜が赤。……で、小糸ちゃんが昨日、聞いたら青が良いって言うから、樋口は緑」

「別にいいけど、なんで私だけ余り物なの」

昨日の電話を脳裏に浮かべつつ聞いた。多分、小糸が途中で廊下に出たのはそれだろう。

「ん、まあ……なんか流れで？」

まあ、二人が買って来たものだし、年下の小糸から選ばせてあげた、ということだろうし、別に気にしないが。

「あ、折角だし私がつけよっか？」

「……んっ」

普段なら断っていたが、まあ今日くらい良いか、と気まぐれで思い、円香は目を閉じて額を透の方へ近付ける。

「キス待ち顔みたい」

「……頭突きの構えなんだけど」

「嘘、ごめん冗談です」

なんて話しながら待っていると、透は円香の前髪をいじる。

基本的に円香は普段からヘアピンをしているので、一度それを外される。そして、また同じ箇所はそのヘアピンをつけてもらった。

……少し重い。というか、どんなピンなのかまだ見ていなかった。

「おっけ」

「どうも」

「写真撮ろ」

「ん」

話しながら、透がスマホを構え、それに身体を寄せて画面を見る。直後、画面に映っていた自分の額には、小さなカナブンが乗っていた。

「はっ!?」

虫がついてる、とパニックってピンを払い除けようとするが、その手が透の顔面に直撃したため、不発。

それに気付かず、円香はピンを今度こそ握って外した。

「ち、ちよつと何これ!?」

「……目に入りかけた……後少しズレてたら即死だった……」

「い、い、か、ら!」

「可愛いでしょ? カナブンのヘアピン」

「可愛くない!」

「私のも生き物だよ」

「は? 何処に……!」

言われて目を凝らすと、滅茶苦茶小さな飾りは確かについている。……これは、ミジンコだろうか？

「どんなヘアピン？」

「雛菜のはてんとう虫、小糸ちゃんのはゲンゴロウだよ」

「……」

自分よりもハズレクジがいた。要するに生き物をモデルにしたシリーズ、ということなのだろう。

ま、それは別に構わないのだが……。

「ていうか、何自分たちだけまともなの持ってるの？」

「え、嫌だった？ カナブン」

「嫌」

「でも、リカはかわいいって言うと思うよ」

「そ、それはそうかもだけど……って、なんでリカが出てくるわけ？」

あれにどう思われようが知ったことではない。……はず。

だが、透はそんな指摘などまるで無視して、再びスマホを構えて言った。

「撮って見せてみようよ」

「絶対に嫌」

「なんで？ 本当に似合ってたのに」

「リアル過ぎるの、これ」

サイズは本物より小さいが、ちよつとリアル過ぎる出来に引いている時だった。「三馬鹿姉弟」という名前のグループチェインに一通のチェインが届く。

L I K K A ☆ 『暇』

また良いタイムミングでぬかすものだ。暇な時ならいつでも相手になる、と言った手前、無視しづらい。

「ほらー、撮って見せようよ」

「……分かったから」

仕方ないので、写真を撮った。まあ、確かに大袈裟に嫌がる事でもないのかもしれない。いい。

改めて写真を撮り、それを透がメッセージと共に送ってみる。

『とおるん が 写真を送信しました』

とおるん 『ヘアピンお揃い』

同じシリーズのものを「お揃い」と言つて良いのか分からないが、円香は何も言わなかった。

すると、菅谷から僅か5秒で返信が届く。

LIKA☆『カナブンとミジンコ？ 可愛い』

樋口円香『なんでミジンコまで見えるの』

直で見た円香でさえ、視認するのに時間を要した飾り付けだ。もちろん、本物のミジンコよりは大きいですが、それでも普通に見づらいサイズと色調のはずなのに。

LIKA☆『普通に似合うよ。二人とも』

「……ほらね？」

「……っ」

なんか、悔しい。特に、透のドヤ顔が鼻につく。少し悔しかったので、八つ当たりした。菅谷に。

樋口円香『女の子に虫が似合うって褒めてるつもりなわけ？』

LIKA☆『うん』

樋口円香『ならもう少し褒め言葉について勉強して』

LIKA☆『でも可愛いものは可愛いし』

「……」

「……っ……」

笑いを漏らす透を、眼力で黙らせる円香。分かっている、カウンターパンチをもらい、ダウンしている自覚はある。でも、ムカつく。

とおるん『私はー?』

L I K A ☆『綺麗』

あれ、なんか自分と違う。それは透も感じ取ったようだ。

とおるん『え、なんか樋口と違くない?』

L I K A ☆『だって違う人じゃん』

円香としてはどっちでも良いが、透は納得いつていない様子。もしかして「可愛い」と言われたいのだろうか? だとしたら、15年間一緒にいて、新たな可愛い所を見つけてしまったかもしれない。

L I K A ☆『あと、ヘアピンも違うものだし。比較実験は比べる所以外の条件は揃えないと意味ないから』

いや、これはまず実験ではない。前提が違う……が、それを言う前に向こうから返信が来た。

L I K A ☆『まあ、とにかく二人とも似合ってるよ』

「……」

「……」

なんだかんだ一番言われたかったことを改めて伝えられてしまえば、二人とも黙り込むしかないわけで。

LIKA☆『あ、ごめん。呼ばれた。また後でね』

それだけ言って立ち去って行った。透も円香も、そのまましばらくドリンクを啜る。円香は、少し気を落ち着かせる。菅谷がこの街にいない機会。この時に、色々と考えておきたい事もあった。

菅谷からの褒め言葉が、やたらと嬉しい理由だ。もうここ最近、ずっとである。

いや、褒められればそりや嬉しいものではあるのだろう。しかし、自分の感情の上下があまりにも激しい。心音の鼓動なんて爆速で動くことの方が多いくらいだ。

「ねえ、樋口」

「な、なに？」

思考の途中で、透が口を挟んでくる。

「そういえば、前から気になってたんだけどさ。樋口はリカの事、どう思ってたの？」
「……………え？」

まさかのピンポイントな話題だった。思わず心臓がさらに加速する。

「別に、どうって……………友達でしょ」

「でも、その割に甲斐甲斐しくお世話するよね」

「まあ……………一人暮らし大変そうだから」

「……………ふーん」

それはウソではない。最近は何事も自分の生活ペースが出来てきたみたいなので行くことも減ったが、まだ掃除と料理だけは油断出来ない。

しかし、そう嘘ではないことを自分に言い聞かせ続けている自覚はあった。だから、次の透の問いは、素直に胸の奥に突き刺さった。

「好きなんじゃないの？」

「っ」

息を呑んだ。目を見開いて。口の中に含んだ抹茶オレが、喉に流れず口内に残る。

キュツと捻られ、勢い良く放水していた蛇口が堰き止まるように、円香の思考も何もかもがフリーズする。

「……………樋口？」

「っ、な、なに……………顔近い」

気がついた時は、透が自分の顔を覗き込むように顔を寄せて来ていて、慌てて背けながら飲み物を飲み込む。

「で、どうなの？」

「何が？」

「好きじゃないの？ リカ」

「っ……………くだらないこと聞かないで。大体、あんたに言われたくないし」

カウンターを放つつもりはなかった。しかし、透は驚いたように目を丸くしてしま
う。その質問は想定していなかったようだ……が、いつもの様子で微笑んだ。

「ふふ、やっぱそうなんじゃん」

「何言ってるの？」

「なんでもない」

この時、円香は自分の言動が、一体どういう意味を指していたのか理解していなかつ
た。だから、キョトンとしてしまっている。

「ね、それよりさ、今日この後、どうする？」

「帰る。別にする事もないし、来週お祭り行くなら、お金節約した方が良いでしょう」

残念ながら、高校生の財力は一ヶ月間好き勝手遊べる程の余裕はない。今年もらった
お年玉は割と貯金していたが、それでも無理なものは無理だ。

「いや、実はさ、それに備えて私、こんなの見つけて来たよ」

言いながら透は、鞆の中から一冊、雑誌を取り出した。みんな大好きタ○ンワークで
ある。

「本当はリカも誘おうと思ってたんだけど……これ」

その中からパラパラとめくり、角に折り目をつけてあるページを開く。

「短期のバイト。やらない？」

「珍しい……そういうの、探して来るなんて」

いや本当に意外だった。透なら絶対、夏休み中盤から「お金ないわ」ってなると思っ
ていた。

「だって、新しい水着欲しくない？」

「別に。……そっちと違って、去年までの入ると思うし」

「でも、今年はリカと一緒に、別荘で貸切の海だよ？」

「……」

それを聞くと、まあ確かに新調した方が良い気もする。海の貸し切りなんて滅多にあ
ることじゃないし、それも三浦半島にある海らしい。

文字通り、白い砂浜と青い海が広がり、真夏の日差しは暑苦しきだけでなく、爽やか
さと心地良さを提供、人目を気にすることなく、好きなだけはしやぎ放題。

そんな環境に、幼馴染の透だけでなく、異性の菅谷も……。

「……って、リカは関係ないでしょ」

「いや、あるでしょ。男の子だし」

「……」

絶対、含みがある気がしないでもないが、今は金の話だ。確かに、新調したいのかも
……しれない？

「……どんなバイト？」

「交通量調査」

「それ二人で出来るの？」

「あとはウ○バーイーツ」

「……他にないの？」

「イベントスタッフ、プールの監視員、チラシ配り、引越し作業員、着ぐるみ風船配り」
「……」

つまり、交通量調査以外は地獄だ。……いや、この炎天下の中、じつと車を数えるのも同じくらい地獄である。そもそも、真夏の短期アルバイトなんて地獄じゃない方が珍しいとも言える。

「……どれにする？」

「なるべく二人でできる奴にしよっか。慰め合える」

「いやらしい言い方しないで」

そんなわけで、交通量調査はボツ。ウ○バーイーツも、同じ現場に派遣されることはないだろう。

「引越し作業員、男性のみって書いてあるよ」

「ていうか、書いてなくてもそれは無理でしょ。死ぬ」

「だよね」

さて、他ならまだマシかもしれない……が、あとはどれも同じレベルな気がする。

「プールの監視員もやめた方が良いかも」

「なんで？」

「ナンパ男が多そう」

「……なるほど。それなら、チラシ配りもじゃない？」

「確かに」

円香の案に、透が頷く。夏休み前、あれだけアピールをもらったのだ。学外に出れば、もつと増えてもおかしくない。

「着ぐるみもキツそうじゃない？」

「それ思ってたんだけど、ここお昼フードコート無料券くれるんだって」

「あー、なるほどね」

他のところならお弁当が関の山だろうに、魅力的ではある。

「あと、顔隠れるからナンパとか無さそう」

「ね。これにしちゃう？」

「そうしよつか」

と、いうわけで、早速電話して履歴書の準備を始め、採用された。と言うより、され

てしまった、と表現するべきだったことに、二人はまだ気付く由も無かった。

××「……死ぬ」

「ほんと、死ぬ……」

短期バイトは全部で三日。今日はその初日。二人は女性であるにも関わらず、上半身は真つ黒なノースリーブ姿、下半身は半分だけ脱げて着ぐるみ姿で、更衣室で項垂れていた。

ナンパ野郎もないしお昼は好きなものを無償で食べられた……が、にしてもキツい。何が楽しくて、真夏の外で全身フル装備のまま風船を配らないといけないのか。

「これを後二日も……」

「死んじゃうって……」

「お疲れ様〜」

真つ白に燃え尽きている二人の元に、デパートの店員さんが顔を出す。

「大変だったでしょ？ でも、こんなに若い女の子達がやり切ったの、すごいと思うわ」

「……はあ、どうも……」

本当にお礼を言いたかったが、死にかけているのでつれない返事になってしまう。

そんな二人を見て、店員さんはわざとらしく意地悪そうな声を出す。

「あら〜？ そんな態度で良いの〜？」

「……なんですか」

「せつかく、差し入れ持つて来てあげたのに」

そう言いながら店員さんが二人に見せたのは、棒のハ○ゲンダツツだった。それにより、二人は瞳に輝きを放たせながら、一気に顔を上げた。クールに見えて、素直で可愛い女の子達である。

「「ありがとうございます」」

「いえいえ。あと二日だけ頑張つてね」

そう言った店員さんの目に入ったのは、二人の着ているシャツ。おそらく、着替えて帰るのだろうが、絞つたら雑巾のように汗が出て来そうなものだ。

「そうそう、ここシャワールームなんて気の利いたものはないけど、近くに銭湯ならあるわよ」

「銭湯、ですか？」

「ええ。今の時間ならあんまり人もいないだろうし、さっぱりしてから帰つたらどう？」

「……」

「……」

透と円香は顔を見合わせる。着替えを持って来てはいるが、確かにもう全身汗だく

だ。このまま持つて来た着替えに着替えれば、またバタバタにしてしまうだけだ。

「じゃあ……そうする？」

「うん」

「すみません。ありがとうございます」

「いいのよ。明日からもよろしくね」

それだけ話して、とりあえずアイスだけもらった。

店員さんが出て行った中、二人でアイスを分け合う。わざわざ高いハ○ゲンダッツを買ってくれた辺り、感謝しかない。

着替える前に食べることにして、改札の中の椅子に腰を下ろし、一口。直後、揃って目を見開く。

「お、おいひい……!」

「最近のハ○ゲンダッツすごい……」

「いや、昨日お母さんのハ○ゲンダッツ勝手に食べたけど、こんなに美味しくなかったよ」

「今日、家から追い出されてもうちを頼らないでね」

なんてやりとりをしつつ、さらにアイスに食いつく。しかし、不思議なものだ。身体中に冷たさと糖分が行き渡るのを感じ、舌から全身に身悶えが行き渡りそうになるのを

堪える。

同じように味覚の快楽に身を委ねている透が、ふと思ったように呟いた。

「……もしかして、働いた後だから、とか？」

「……かもね」

疲れた体に全てが染み渡っているのは間違いない。大人達が労働後のビールを何より楽しみにするのが分かってしまった気がする。

「ね、リカに写真送ろうよ」

「ん……良いかもね」

何せ、彼にはこの良さは分からないだろうから。全力の自慢と煽りを見せてやるつもりで、二人で並んで、アイスを掲げる。

透がカシャッと写真を撮った。ついでなので、クマとウサギの頭部の着ぐるみも映るように。

とおるん『バイト終わりのアイス最高』

それを送ってから、またアイスを齧った。

「棒アイスってさ、当たり外れなくても棒を見ちやうよね」

「いや、見ないでしょ」

「えー。あ、当たり」

「ないから」

「ちえっ」

そんなどうでも良い話をしていると、菅谷から返信が来た。

「あ、返事」

「ちゃんと煽った？ 『あなたには分からない味がここにある』みたいな」

「いやそんなこと言っていないけど……」

なんて話しつつ二人してチエインを開く。

LIKA☆『いや、送ってくれるのは嬉しいんだけど……』

LIKA☆『うん。ちよつと……何？』

LIKA☆『下着が見えてるから反応に困るといっか……』

LIKA☆『あ、アイスは美味しそうだね』

「……」

「……」

確かに、ノースリーブの隙間から、ブラの紐や布地が見え隠れしている。透の胸元からは谷間さえ見えていた。

とおるん『えっち』

樋口円香『最低』

LIKA☆『いや検閲してから送ってよ……』

速攻でトークルームから削除した。

二人はとりあえず上着だけ着てその銭湯に来た。中は割と古風な感じで、番台さんが真ん中において、左右に「男」と「女」の暖簾が掛かっている。

なんだかんだ銭湯の経験は多くないため、なんだか新鮮に感じてしまった。

「すごい。レトロ?」

「いや……なんか違う言い回し無い?」

「古風?」

「趣じゃない?」

「あ、なるほど」

なんて話しながら、お金を払ってタオルを借りて早速、中に入った。早めに裸になり、浴室の中へ。いかにも銭湯、という感じで広かった。

「たまにはこういうのも良いかも」

「ね。てか、貸切じゃん」

とりあえず、身体を流す。もうとにかく早く湯船に浸かりたい所だが、身体を洗わずにそれはマナー違反の上ないため、速攻で洗い尽くした。

「……シャンプーとボディソープ微妙」

「洗顔もないし、これ家帰つたらもつかいお風呂だよね」

まあ銭湯にそこまで求めるのは違うのかもしれない。……というか、本来ならその辺も持参する必要があるものだ。

何にしても、汗は流れたので、後はのんびりするだけ。早速、二人は湯船につま先をつけた。

「あつつー！」

「いや、ちょうど良いでしょ」

「樋口すごい。江戸っ子じゃん」

「意味分かんない」

無視して、湯船の中に入る円香。遅れて、透も慎重な動きで肩まで浸かる。

「……………ふう……………」

揃つてため息が漏れた。心地よい。これが「疲れが取れる」感覚というものだろうか？ もうこのまま寝れそうなまでである。

「最高……………明日も来ちゃう……………」

「それなら……………洗顔とか、シャンプーも持ってこないとじゃん……………」

「それも、辞さない……………」

「分かる……」

いつにも増して中身と覇気がない会話だった。というか、改めて考えれば、夏はシャワーで済ませる事も多かったから、湯船に浸かることが久しぶりだ。

本当に眠気が襲ってくるが、風呂場で寝たら終了である。寝ないようにするには、会話をするしかない。

「……ねえ、浅倉……」

「何〜?」

「なんでバイトなんて探してたの……?」

「ん〜? そりゃ、やっぱり夏休みに遊び倒すため〜……」

「……だよね……この前聞いた……」

「なにそれ〜……」

ダメだ、円香も頭が回らなくなってきた。

ふにやふにやしている間に、透がしれつと続けて言った。

「後は〜、リカの部屋に〜……私物、いくつか置いたため〜……」

「なんでそんな事……?」

「だって〜……せつかく、夏休みだし〜……一回くらい、泊まりでオールとかしてみたいな〜……つて〜……」

「なるほど……」

「樋口もしないく……う？」

「んく……考えとく……」

この時、割ととんでもない許可を出したことに円香が気付く事は、その私物を買いに
行く当日になってからのことだった。

フルコース全て強い味ではなく、侘び寂びが大事。

菅谷は、退屈していた。それはもう、何も無い空間に一人、放置されているように。

やはり、親戚絡みの付き合いというのは面倒だ。どんな高校だったの、とか、部活とかはやってるの、とか、成績はどうなの、とか、そんなのばかり。ハッキリ言って、どうでも良い。別に良い成績取れるとか言って褒められたいわけでもないし。

何より、父親が自分の代わりにほとんど話してしまう。まあ、やらかした事件の大きさも今となつては分かるから、別にそれでも構わないわけだが。

「はあ……」

さて、そんな退屈な日々もあと少しで終わりである。明日のお昼には、東京に戻る予定だ。

その為、今はのんびりと実家で過ごす。新居はそれなりに広くて色々と慣れなかったが、流石は自分の両親が作ってもらった家なだけあって、すぐに慣れた。なんかジエツトバスついてたし。

あれからほぼ毎日、円香と透の二人とは連絡を取っていたから、あまり寂しい感じはしなかった。……その分、二人からの写真を見るたびに「うわ、いいな」と思うこと

は多かつたが。

「……今、平気かな」

そう思つて電話しようとした時だ。父親が声をかけて来た。

「明里、今良いか？」

「？ 何？」

「いや、悪かつたなつて。せつかくこつち戻つて来たのに、挨拶回りばかりだったろ？」

「平気。慣れてる」

「……」

そう答へつつ、菅谷は手元のタランドウスオオツヤクワガタのオモチヤをいじる。

「……一人暮らしは、大変か？」

「んー……まあ。でも手伝つてくれる子もいるし、平気。成績も良いでしょ」

「まあ、な……」

そんな返しをしながら、タランドウスを机の上に置いた。

「明里。何かあつたら言えよ」

「え？」

「一人暮らししてるからつて、親に頼つちやいけないつてことはないから。前は護身術代わりに柔道教えたけど、今は先に手を出した奴より怪我をさせた奴の方が悪い世の中

だ。イジメでもなんでも、反撃する前に相談しろ」

「え……金で解決とかやめてよ?」

「そんな事しない。弁護士で解決する」

「……う、うん……?」

それはそれでどうなのか……と、思わないでもないが、まあお言葉に甘えることにする。いじめられたことはないが、似たようなことになれば面倒だ。

その父親は懐から封筒を取り出した。

「これ、持って行きなさい」

「? 何それ?」

「俺のへそくりだ。……もし、何かあったとしても、お前がここまで帰ってこれる金額が入ってる」

「え、お金? いいのに、別に」

「良いから持っとけ」

「……あ、ありがとう」

「……そんだだけだ」

それだけ言うと、父親は自分の元から離れ、リビングを出て行った。もしかしたら、少し心配をかけている、のだろうか? 高校生で一人暮らしって、もしかしたらレアケー

スなのかもしれない。

何にしても、このお金は確かに使わない方が良いかも、と思い、明日東京へ引き返すための鞆にしまう為、部屋に……。

「あつ、明日戻る準備してない」

×大慌てで鞆に荷物を詰め込み始めた。

×今日は、菅谷が帰ってくる日。と言っても、別にわざわざ出迎えにはいかない。単純に、ここ一週間は充実していて、少し疲れただけだ。

と、言うのも、バイトして宿題も（自分がやる分は）終わらせて、田舎への帰省もして、そして小糸や雛菜の勉強と遊びもこなして、中々充実した一週間だったんじゃないかと思う。

「……」

でも、やはり何か足りない。それは何か、すぐに分かった。それは「表裏一体のバカさと母性」である。そして、その特性を持つ者は、この世に一人しかない。

透からバカさ、小糸から母性を感じることは可能だが、表裏一体のそれを同時に感じさせるバカは一人しかない。

「……はあ」

我ながら、難儀な性格に変わったものだ。なんか、待ち遠しく感じている、小さくため息をつきながら、円香は本を閉じる。

飽きたので、とりあえず何か連絡でも取ってみようか？ いや、でも当日に連絡なんてしたら、なんか「帰ってくるのを待ってた」なんて思われそうだ。……いや、事実ではある……いや、やっぱ事実と認めたくない。

最近の自身の情緒に不安を覚えつつも、円香はとりあえず暇なので菅谷に電話してみることにした。ここ最近、暇な時は菅谷の暇潰し相手になるのが日課になりつつあった。

「……って、いやいやいやいや。違うでしょ」

や、だから菅谷に連絡取るのは嫌だって、さつき思ってたばかりだ。何だか思考が微妙にぶれているのに気がする。

というか、透に連絡すれば良い。今日は透も暇しているはず。そう思い、スマホの画面をツイツイといじる。

「……」

透の名前を押そうとしたところで、指が止まった。……別に、透に用事があるわけでもない。

というか、何だか自分の行動がさつきから言い訳だらけに見えて仕方ない。

「……はあ」

「どうしたの？」

「いや……なんか、変に最近、リカに連絡するのを意識しちやつてるだけ。なんか連絡するのも少しドギマギするとうか……」

「へー、意外。別に樋口、そこまで他人に緊張するタイプじゃないのに」

「別に他人に緊張してるとかじゃなくて、なんかリカが相手だと自分がどう思われるか考えちやうと言うか……」

「やっぱり好きなんじゃな」

「それはない」

「うわ、食い気味じゃん。ウケる」

「うけないから……」

と、言いかけた所で、ふと円香の口が止まる。というか、自分は誰と話しているのか？ いや、あの会話の具合から一人しか思い付かないが。

声のする方を振り向くと、予想通りの人物がニコニコして立っていた。

「……なんでいるの？」

「ん、いや暇だったから来てみた」

「せめてノックしてから入って来てくれない？」

「むしろ気が付かれなかったことに驚いてるんだけど……もしかして、リカのこと考えてた？」

「っ、な、何言ってるの？ 意味わかんない」

そうは言ったが、透は「わあ、ビンゴ？」と言わんばかりにニコニコしていた。この女ホントムカつく。

「大丈夫、私も同じこと考えてたから」

「は？」

「今夜、リカ戻って来るらしいじゃん？」

「うん」

「だからさ、やろうよ。サプライズ」

「はあ？」

また急な話である。思わず「何言ってるのいきなり？」と言わんばかりに片眉を上げてしまう。

「……サプライズって……どうやって？」

「駅で待ち伏せ」

「時間によるけど、補導されるでしょ」

「大丈夫。こっちに戻る時間は聞いてあるから。ほら」

そう言いながら見せられたのは、二人のトークルームだ。

.....

とおるん『とりあえず、毎晩恒例の』

『とおるん が写真を送信しました』

LIKA☆『りよ』

『LIKA☆ が写真を送信しました』

《今日》

とおるん『今日、何時に戻ってくる？』

LIKA☆『分からん』

とおるん『教えて』

LIKA☆『いや分からんて。21時までには戻着くと思うけど』

とおるん『りよ。正確にわかったら後で教えて』

.....

「いや、待って。まずこの写真何？」

円香がツツコミを入れたのは、おそらく昨晚のチェイン。なんか菅谷と透が、二人で自撮りを送り合っている。別にエッチな写真とかではなく、寝る前に少し撮ったみたいな感じの写真だ。

「……あ、そっか。これグループのじゃなかった」

「は？」

「五日位前かな。寝る前に二人でチェインしてた時、なんかやつば顔見えないの寂しいねって話になってさ。お互いにその日の写真を送り合うことにしてた」

「いや、これその日のつていうか、送るために撮った奴でしょ」

何せ、二人とも寝間着姿だ。しかも、二人とも中学時代の体操服である。同じ中学出身とは言え、恥じらいはないのか。

「昨日と一昨日は、特に自撮りとかしなかったからね。……というか、リカは毎日、撮るものなかったっぼくて毎日パジャマだったよ」

言いながら、しばらくスイスイと画面をスワイプしたあと、また別の写真を見せて来た。

「ほら、これとか可愛くない？」

カブトムシのサナギ寝袋に包まれた菅谷だった。これはもはや自撮りではなく、間違はなく協力者がいる。

「や……可愛くはないって言うか、気持ち悪い」

「えー。……まあ、うん。可愛くはないわ」

あつさりと自らの感性を覆した透だった。

「そっか……ラスト二日は樋口も混ぜればよかったね」

「? 何でラスト二日だけ?」

「いや、その前の三日は樋口とか雛菜とか小糸ちゃんと遊んでたから、割と送る写真多かつたから。樋口とか毎回、映ってたし」

「人の写真、勝手に送らないで」

「良いじゃん。リカ、喜んでたし」

「……」

喜んでた、なんて聞いて少し嬉しそうに頬を赤らめる円香は、相変わらずの自分のチヨロさが嫌になつてしまう。

「他の写真も見たい?」

「別にいい。それより、サプライズはどうするの?」

また自分が嫌になつて来て、目を逸らしながら話題を逸らす。

「うーん……とりあえず、めっちゃ振ったメントスコラ渡してみる……とか?」

そつちのサプライズか、と円香は内心で呆れるが、まあこういうわけわからないことを当然のように言い出す時、透には透に意図がある時だ。

……例えば今回の場合は、これまで菅谷の周りに足りていなかった「バカさ加減」を、補充するつもりだろう。

「どうせなら、ファミマにしか売ってないペ○シでやらない？ あれ確か普通のペットボトルより大きいから」

「お、良いね」

「なら、たまにはノって一緒にやらかすのもアリだろう。冬ならあれだけど、ちょうど夏だし。」

「顔面シユークリームは？」

「あんまり無駄遣いは出来ないでしょ」

「あ、そっか」

「何せ来週からお祭りなのだから。まあ正直、円香はお祭りで何かやりたい屋台があるわけではないのだが。」

「で、どうやってメントスコーラ渡すの？」

「え？ 改札で」

「それだと、なんか不自然じゃない？」

「どうして？」

「だって、あんたあんまりカに差し入れとかしてないでしょ」

「いや、そうだけど……でもリカだよ？」

「こういうのは少しでも警戒されたらダメな奴だから。完全に油断してる時に手渡さな

いと」

「じゃあ……樋口ならどうするの?」

聞かれて、円香は顎に手を当てる。自分ならどうするか……しばらく考え込む。菅谷の習性を考え、どう動けば良いのかを分析し……よし、理解した。

「~~任~~せて。最高のメントスコアを用意する」

菅谷は、それはもうウキウキしていた。父親との挨拶を終えて、帰宅の電車で揺られている。

今日は家でのんびり出来たから特にストレスはないが、割とストレスがエグい日もあったりした。だから普通に疲れていたのに空いている席が優先席しか無かった為、仕方なく立ったまま乗っていた。

大きな荷物を持って、地元に着し、菅谷は軽く伸びをする。

「ん〜……着いたあ……!」

さて、明日からまた遊び倒す。今日まで、透と円香は二人でイチヤイチャ楽しんでいた写真を毎日のように見ていたため、なんかもう羨ましい。バイトも買物も受験生の後輩の息抜きも、全部やりたい。

暇な間に宿題も実家で少し進めておいたし、本当にエンジョイ出来る。

改札を出て、帰路につく。いつものルートで公園の前を通りかかった時だった。

——ピチャツと、首のサイドから冷たい棒状の何かを押し当てられる。

「ひゃうっ！」

思わず変な声が漏れてしまった。

慌てて距離を置きながら振り返ると、ここ一週間で何度も見たいと思っていたツラが、ニコニコしながらコーラを構えてピースしている。

「やつほー、リカ」

「おかえり」

「つつつくりしたあ……何してんの」

「迎えに来てもらって随分なご挨拶じゃん」

「え……来てくれたの？」

「うん。樋口が行きたいって」

「言ってるじゃない」

「マドちゃん……！」

「……うるさい。ほんとに言ってるじゃない」

本当に言ってるかどうかは分からないが……その気持ちは嬉しい。感極まり、思わず円香の両肩に手を当ててしまった。

「ありがとう……マドちゃんっ。マドちゃんが実家に帰るときは、俺も迎えに行くからね」

「それ、送りに行くの間違いになる。……ていうか、離して」

少し照れたように目を逸らされてしまう。異性間で距離が近かったかもしれない……と、反省する反面、ちよつと可愛いな、と思つてしまつたり。

その二人の間に、透がコーラを突き出して入る。

「はい。コーラ。とりあえず……公園でのんびりしようよ」

「あ、うん。そうだね」

「……んっ」

そんな話をしながら、公園のベンチに三人で座つた。三人掛けとはいえ、結構キツイ。真ん中に菅谷が座り、その両サイドに二人が座つた。

「乾杯」

と、ボトルを三人でぶつけ、キャップを緩めた直後、両サイドの二人は一気に逃げる。「へ？」と声を漏らした直後……顔面にコーラが襲いかかつて来た。

「ブツ……！」

見事に鼻の頭により分散し、目、口、そして鼻の穴に侵入。耳から出るかと思つたほどだ。

お陰で後ろにひっくり返り、背中を地面に強打した。

「……………あがつ……………背中つ、ぐほつ……………」

荷物は透の提案でベンチの横に置いておいたわけだが、大正解である。コーラは地面を転がり、本人はそのまま転げ回った。

この噴射の勢い……………間違いなく *take in* メントスだ。そして、売る前からメントスが入っているコーラが、あるわけがない。つまり……………。

「ぶつ……………ふふつ……………」

「モロ……………狙い通りに、モロ……………」

どちらか……………いや、両方の仕業だ。何処から計画に入ってたのかは知らないが、ここまで精密な作戦を透が立てられるとは思えない。

つまり……………。

「お前らー!」

「ぐえつ! く、苦しい……………」

まずは発案者っぽい透の首に腕を回し、頭を締め上げる。

「ぶつ……………人からもらったコーラを信用した自分が悪いでしょ」

「お前もだろー!」

「えつ、ちよつ……………」

さらに、そのままもう反対側の腕で円香の首にも回し、2人同時にスクラムを組むように組み伏せた。

「ちよつと嬉しかったのにお前らー!」

「うぐえつ……ちよつ、締まつてる締まつてる……!」

「ていうか……ちよつ、距離感……!」

「うるせー!」

吠えまくる菅谷。

薄い胸に顔を押しつけられながら、円香は苦しさより照れによって頬が赤くなる。そんな中で、ふと菅谷の顔を見ると、言ってる言葉の内容の割にとても楽しそうな表情をしていた。

なんだかんだ言っただけでももらえたのなら、とりあえずサプライズの意味があったことに胸を撫で下ろした。

「ごめんって。お詫びに夕食、リカの方も奢るから」

「もう食べたし」

「じゃ、デザート」

「この時間に食べたら太る」

「女子か」

「体型に男子も女子もないから」

「じゃあ、どうしたら良いの？」

なんかいつのまにか透が下手に出ていた。菅谷は何も許さんとも殺すとも言っていないのに。

円香は黙ってそれを聞いていると、菅谷はスツと手を離す。

「明日、三人で遊びに行こう」

「そんなので良いの？」

「良いの」

「それが良いの。そのあとにはうちに来て、またご飯食べよう」

本当に、素直な子は可愛いものだ、と円香は少し笑みをこぼす。その隙に、先に透が返事をした。

「……私はそれで良いよ」

「……んっ」

二人とも頷く。明日はちょうど、予定は空いている。空けておいたのではない。断じて。

「じゃ、今日は解散しよっか。駅まで二人とも送るよ」

「ありがとう」

「それはこっちのセリフ」

そんな話をしながら、三人で駅まで戻った。

円香と透の首は、少しだけ熱を帯びていた。細かい場所を指摘するならば、菅谷に絞められた辺りである。

あんなに至近距離で密着したのは、円香にとつては初めての経験だった。怒った菅谷の様子は、あれはあれで可愛いものがあつた。思わず、また見たいと思えてしまう程度には。

「……」

また、機会があればこういうサプライズを試してみるのも悪くないかも、なんて思ってしまった。

×

×

それから、毎日のように三人は遊び倒した。一週間、会えなかつた反動が出たかのようになり、それはもうほぼ毎日のように顔を合わせていた。一日だけボウリングに行つてしまったが、そこで「や、だから金使うなつつの」となつて、結局は缶蹴りとかリ〇グフィッシュトとかしていたが、意外と普通に楽しかつた。

さて、明日はいよいよお祭りである。公園で遊び疲れ、ベンチに座つて飲み物を飲んでみると、透がふと思つたように言つた。

「そろそろ帰る?」

「だね」

それに菅谷が頷く。しかし、円香だけは微妙に納得いかなさそうにしている。いや、まだ疲れてないからとかではなく……何となくそう思った。

一人、立ち上がる前に、ふと気になったので後ろから聞いてみた。

「所でリカ。あんたちゃんと宿題やってんの?」

「えっ、急にどうしたの?」

「や、私と浅倉の宿題、半分以上、握ってるわけだし、確認」

しれっと透の名前を出す事で味方につけつつ問い詰める。

「ちゃんとやってるよ。実家で割と進めたし」

「……浅倉、信用出来る?」

「えっ?」

ほとんど話を聞いていなかった透が片眉を上げながら聞き返して来たので、もう一度同じことを聞いた。

「リカがちゃんと宿題やってる、って信用出来る?」

「え? いや別に全然……」

それを言われて、透はふと円香の顔を見る。実際、出来るか出来ないかで言えば出来

る。何せ、成績は割と真ん中をキープしている菅谷だし、何より成績がないと困るのは菅谷だ。

しかし、円香の表情は、本当に信用の有無を聞いているわけではなく「出来ないと言え」と言っているように見える。その理由は、この後の展開を少し考えれば分かった。

「出来ない」

「えっ？」

「はい、2対1。今から確認しに行くから」

「えっ、ちよっ……ダメだって」

「? なんで? ほとんど出来てるんでしょ?」

「で、出来てるけど……」

「じゃあ良いでしょ。部屋に行くくらい」

「そろそろ帰らないとご両親心配しない?」

「まだ18時過ぎだし平気」

「とおるんは?」

「余裕」

「……」

なんか、やたらと部屋に上げたがらないのは何故なのか。いや、まあどう良い。いや

やっぱ良くない。案外、誤魔化そうとしているということとは、本当に宿題に手をつけていない可能性もあるし。

「はい、決定」

「え……あの、俺の部屋なのに俺の意思は……」

「今のうちに宿題やってないこと白状したら許してあげるけど？」

「いや、それは本当にしている。その事じゃなくて……」

「行こう、浅倉。リカの右腕掴んで」

「はいはい」

「自分の部屋に連行される家主とは一体……」

そのまま、部屋まで一緒に行った。

15階まで来て、早速唾然とした。まず玄関の前に出されているゴミ袋が四つ……つまり、それは実家から戻ってきて経過した日数を指している。つまり……この男、ゴミ出しを一回もしていない。

「……」

「……」

「あの……二人とも、無言で部屋の方に連れて行くのは怖いから……」

無視である。面白いから黙っている透とは違って、円香はおこだ。

玄関の前に立つと、円香は菅谷の腕から離れた。

「開けて」

「え？」

「二度も同じこと言われないと理解できないわけ？」

「……開けます」

開けた。流石に異臭や悪臭は無かったが、廊下に散らばっている靴下、そして奥に進めば進むほど落ちているのは、洗濯されていない衣類に、この前実家から戻ってきたときに持っていた鞆をそのまま放置している跡、机の上にはカップ麺のゴミである。

まるで入学当初に戻ったようなその様子に、円香は眉間の皺と額の青筋を隠そうともせずに菅谷を睨む。

逃走を図ろうとするが、そもそも透にしつかりとホールドされていて逃げようがない。

「……リカ」

「……はい」

「何これ？」

問い詰めると言うより、もはや追い詰めるように尋ねると、菅谷はもはや開き直るように朗らかな笑みを浮かべた。

「いやー、一度崩れた生活リズムってのは、戻すの大変だよなあ。向こうにいた時はゴミ出しも洗濯も掃除も料理も全部やってくれたからね。俺がやろうとする前に。おかげでもう家事スキルも何もかもが鈍っちゃってね。しかし、人というのは甘やかされた環境にいるとすぐに出来たことが出来なくなる罪な生物……」

「ビンタされるのと素直に謝るの、どっち？」

「ごめんなさい」

「じゃ、一発で済ませてあげる」

「結局ぶつの……ぶっ！」

KOした円香は、小さくため息をつく。一応、窓を開けてある辺り、全く不潔にしているわけではないのだろう。

しかし、何にしても片付ける必要がある。このままお祭りなんてあり得ないが……ちよつと今日中に終わらせられる気がしない。

「浅倉も手伝って。とりあえず、今、回せる分の洗濯物はリカにやらせるから、浅倉は洗い物して。私はゴミをまとめる」

「えー、私もー？」

「バカ。あんたも早く立って。明日、朝からここ来て掃除するから。夕方までに終わらなかつたらお祭りなしだから覚悟して」

「ええっ……!!」

「は？ 文句あるわけ？」

「ないです」

自分がしつかりしなければ、と円香は強く思った。少し家事をしなくて良い期間が続いただけでこの始末……やはり、菅谷を支えるのは一時も油断ならない、そう心底理解した。

誰でも出来るナンパの撃退方法。

翌朝、円香はリュックに荷物を詰めて、家を出た。透も一緒である……が、透は少し眠そうに欠伸をしていた。

「別に寝ても良いと思うけど？」

「いや……乗りがかった船だし……」

しかし、遊んだ時より、その後の掃除の方が疲れた。何せ、ゴミを全部、袋にぶち込んで廊下に出し、細かいゴミはルンパで吸い、床の汚れは雑巾で拭き、その上で落ちている洗濯物は全部、菅谷に投げつけた。

透は透で洗い物をなんとか頑張ってくれたが、その後は洗濯物を手伝わされていて、もう大忙しだった。

「それに、お祭り行きたいし」

「ぶっちゃけ、明日も明後日もお祭りやるし、今日中に掃除終わらなくても行けなくなることはないけど？」

「うーん……まあ、そうかもだけど。……でも、やっぱ一緒にいたいし」

「……あつそ」

……どうやら、なんだかんだ透も先週は寂しさに近いものがあつたようだ。しかし、普通にそういうことを口にできる性格は素直に羨ましかったり、妬ましかったり。

さて、菅谷の部屋に到着した。ナンバーを押そうとした所で、ウィーンと自動ドアが開く。両手にゴミ袋を持った菅谷だった。

「あ、もう来たの？」

「ちゃんとと言われる前に始めてて偉い」

「え、そ、そう？」

珍しくハナっから円香に褒められたからか、菅谷は少し嬉しそうにする。

「まあ、幼稚園児レベルの採点基準だけど」

「……」

「ぷふっ……まあ、実際いつも観察しているアリのの方が、まだリカより働いてそうだし」

透にまで言われ、菅谷は小さく項垂れた。すると「あ、そうだ」と菅谷は一度、ゴミを床に置いて、ポケットを弄る。

そして、円香の方に取り出したそれを投げた。

「はい、これ」

「鍵？」

「先入ってて、部屋」

それだけ言うと、菅谷はゴミ捨てに向かった。

「……」

チャリン、と手の中にある鍵を見下ろす。いや、分かっている。どうせ後ですぐ返すものだし、ゴミ捨てから戻って来るまでの間。

……しかし、自分の家の鍵をこうも簡単に渡すのは、少し不用心な気がしないでもない。

「? 樋口?」

「あ、ごめん。あがろっか」

「うん」

そのまま自動ドアを抜けてエレベーターに乗った。ウィーンという音と共に15階に上がる。……さっきの両手いっぱいゴミだが、まだ玄関に二つ残っていた。

「私、捨ててくるよ」

そう言ったのは透。ゴミ袋を両手に持とうとしたので、その前に円香は手を差し出した。

「じゃあ、リュック。預かる」

「お、さんきゅー」

荷物まで持って上り降りすることはない。差し出された手にリュックを引っ掛けた

透は、ゴミ袋を持ってエレベーター前に立つ。

円香は預かった鍵で玄関を開けると、部屋の中に入った。

「……」

他人の部屋に自分一人……もう割と経験してきたのに、この感覚は意外と慣れてなかったりする。何か盗みたくなるのかそう言うのではなく「変に自由」と言う感覚だ。

……とはいえ、まあその自由も汚い部屋を見れば「とりあえず掃除から」となつてしまふわけだが。

「はあ……」

昨日、ある程度は掃除したとは言え、埃や洗濯すべきものを考えると、まだまだ時間は掛かりそうだ。

散らばっている洗濯物は全部、洗面所に束ねてあるので、そこから始めることにした。洗面所に入ると、洗濯機はもう回されていたようで、もう静止していた。そのため、中のあるものをカゴの中に入れて、そのままベランダへ運ぶ。

この際、彼のパンツを干すことも辞さずに手を動かしていると、ふと真下に知り合い二人が見える。透と菅谷だ。

「……」

何か話しているようで、楽しそうに何かしている。すると、なんか二人で手を繋ぎ始

めた。え……何してんの？　と思ったのも束の間、二人はそのまま両手共繋いで何を思ったのか、社交ダンスのように踊り始めた。カケラの知識もなかったからか「それほどさ」しか出してない所が腹立たしい。

「……何サボってんの」

イラツとしたので、円香は一度、指を舐めると、上に向ける。風速と風向きを何となく測定すると、洗濯物のパンツを手に取った。

そして、ポジションを取り、二人の真上より若干、左側に構え……そして。

「投下」

落とした。2枚。元々、洗濯から上がったパンツのため、水分が吸収されている。その上、ほぼ無風なこともあって大きな影響は受けていない。

ヒラリヒラリ……と言うより、真下に猛然と突き進むように落下し、そして直撃させた。

「っ!?？」

二人揃って肩を震え上がらせながら背筋を伸ばす。頭を押さえながらあたりを見回すザマを、円香はベランダの手すりで頬杖を突きながら冷徹に見下ろす。

まず二人は、頭の中に何が落ちて来たかの確認。結果、地面に落ちているそれをつまみ上げた直後、パンツだと理解し、菅谷が透の分を奪いに行く。

が、見切った透はそれを避けた。そのまま顔を真っ赤にした菅谷と透の追いかけてこ
が始まる……のは勝手だが、あいつら何遊んでんの？ しかもパンツで、と円香の眉間
に、さらに深い皺ができる。

また頭に来たので、今度はパンツを丸めてボールのようにし、落下ではなく投げつけ
た。とりあえず、透の顔面目掛けて。

高速で射出されたそれは、見事に直撃。透はひっくり返り、その隙に菅谷はパンツを
回収する。

「っっ！」

「……？」

二人が何を話しているのか知らないが「っっかそもそなんで落ちてきてるの？」と
いう話題になったようだ。正しい。それでようやく、自分がいる方向を見上げたから。

「……」

「……」

「……」

殺意の波動をこれでもか、と言うほど放って睨むと、二人ともすごすごとマンション
に戻ってきた。

ま、どんな事情があるにしても、人を放置して掃除をサボった罪は重い。後で雷を落

とす。

×

「怒られちゃったね……」

「うん……」

円香が引き続き洗濯をする中、菅谷と透はのんびりと床の掃除。ルンバくんはリビングで仕事のため、廊下を透、寝室を菅谷が雑巾で拭いている。

「……しかし、マドちゃんは相変わらず怒りっぽいなあ。どうしていつもああなんだろう？」

「何でだろうね」

「もしかして……本当は一緒にバカやりたいけど、素直になりきれないとか？」

「あー、ありそう。さっきだってパンツ投げなくても下に降りて来ればよいだけの話だもんね」

「……むしろ、パンツを投げたかった？」

「わお、すごい性癖」

「いやさつき人のパンツ盗んでた人のセリフじゃ……」

直後、透の真上からバサバサバサつと洗濯物の山が降って来る。円香がわざと真上でカゴをひっくり返した。

たまたま近くにいた透が被害に遭ったが、その表情は怒り一色だったため恐怖は菅谷にもビンビンに伝わっていた。

「……聞こえてるから」

「……」

聞かれていた。これは流石にまずい、と思った菅谷は、慌てて部屋から出てくる。

「あ、洗濯物俺拾います」

「10秒以内。じゃないと許さない」

それを聞くなり、速攻で菅谷は土下座でもするかのように這いつくばって洗濯物を拾った。

国王に献上でもするかのように頭を下げて膝をつきながら差し出すと、円香はそのままの足でベランダに向かう。

流石にそろそろ懲りて掃除した方が良いかも……と、菅谷は思い、部屋に戻る。ベランダなら声は聞こえないとか、そう言う事じゃない。

が、懲りていないのか、透がまた声を掛けてきた。

「実際、寂しかったのかもよ」

「いや、とおるん……また怒られるって……」

「や、ほんとに」

「……」

言われてみれば、最近透と写真を送り合ったり、さつきも下で社交ダンスごっこしてたり、今も廊下で少しおしゃべりしてたりと、透と絡んでいたことが多かった気がする。

「……なるほど。よし……じゃあ、今晚のお祭りは、三人で遊べるところろう」

「うん」

そんな話をしながら、二人は掃除を続ける。

ふと、菅谷が気になったように「そういえば」と声を漏らした。

「二人は今日、浴衣着るの？」

「え？ あー……どうしよ」

「あ、決まってるじゃないだ」

「あれ歩きにくいんだよね。割と小学生から着てなかったりする」

「ふーん……マドちゃんも？」

「え……どうだろ。聞いてみたら？」

言われて、菅谷はチラリとペランダの方を見る。よく漫画で見る「プンスカ！」という擬音と共に出てくる謎の噴火が、円香の頭からも出てる気がする。

「聞いてくるね」

「いつてら」

お構い無しだった。のうのうと円香の元へ歩き、声をかけた。

「マドちゃん」

「……何？」

不機嫌そうな顔で振り向かれても平然と聞いた。

「今日、浴衣着るの？」

「……急に何？」

「え、だってお祭りだし、マドちゃんの浴衣姿見たいなつて」

その言葉に、円香はピクつと少しだけ反応を見せる。

「……見たいわけ？」

「見たいけど？」

「……あつそ。まあ着ないけど」

「えー、なんで？」

「良いから、まず掃除して。ホント夕方までに終わらなかつたら行かないから」

そう言つて、ベランダの入り口から追い出される。「もしもし、お母さん？ うん。

あつたらで良いんだけど……」なんて電話し始める円香の声が耳には届いたが、着てくれないそうなのでしょんぼりと肩を落として廊下へ出た。

「なんだって?」

「着ないってー。……あーあ、マドちゃんかとおるん、どつちかで良いから見たかったなー」

「……見たかったの?」

「え? うん。まあ、二人とも絶対、似合いそうだし」

少し透は笑みを浮かべる。良いこと思いついた、と言うように。

「ちよつと電話してくるね」

「あ、うん。どしたの?」

「ん、急用」

×それだけ言って、透はスマホを取り出し、一旦部屋の外に出て行ってしまった。

×

「終わったー……」

そう瀕死の雄叫びを轟かせたのは菅谷。円香と透も、疲れきったように椅子でへたり込んでいる。

途中、円香がわざわざ持参したエプロンを使ってお昼を作ってくれたりして、本格的に丸一日、3人揃って家事で終わってしまった。

「お疲れ……」

「何したらこんなに汚れるの……」

透と円香は、いつにも増して疲弊していた。特に意味はないが、少しでも早く終わらせるためにすごく頑張ったからである。や、ホント特に意味はないが。

しかし、おかげで15時前に終わらせることが出来た。

「どうする？ 少し早いけどお祭り行つちやう？」

「あーごめん。それは18時くらいからでも良い？」

「私もそれくらいが良い」

「え、なんで」

二人揃って言われた菅谷はキョトンとした顔を浮かべる。

「すぐ行くと思つてたのに……もしかして、今日用事あつた？」

「や、そういうんじゃないよ」

「女の子には準備が必要な事くらい分かるでしょ」

「あ、もしかしてシャワーとか？ 別にうちの使つても良いのに」

「いや、着替えがないから」

「あ、そか」

それだけ言うと、円香と透はソファからすぐ立ち上がる。こんな所でグデつとしてる場合じゃない。

「お祭り、隣の駅だっけ？」

「うん」

「とりあえず、18時に駅前が良い？」

「良いよ」

すぐに約束し、円香と透は部屋を出ていった。

のんびりとエレベーターに乗ってぼんやりしていると、円香の隣に佇んでいた透が、フフツと笑みを漏らす。

「何？ 怖いんだけど」

「いや、我ながら分かりやすかったかなって」

「……別に、浅倉だけじゃなかったでしょ」

まあ、彼が見たいと言うから、まあ着てやつても良いかと思い、着ることにした。幸いというか何と言うか、透の母親の知り合いがやっている浴衣のお店で、この時間からお祭りの待ち合わせ時間までに買えることになった。奇跡である。

円香が電話した時、母親はもう既に何の用事にかけて来ているのか分かったようで、引くほど早く話が進んだ。掃除しに行く、と言って出掛けたのに、である。

「……」

母親は一生越えられない壁のようなものなのかもしれない……なんて思いつつ、円香

はため息をついた。ちなみに、菅谷から「みたい」と言われた直後から着る気満々になつてはいたが、つい「着ない」なんて言ってしまったのはわざとではなく、照れ隠しなのは言うまでもない。

そして、透とのやり取りから分かるように、二人ともお互いが着る気満々なのに気付いていた。

そうなれば、透も既に母親に連絡していたわけで。なんか、自分達の両親の察しの良さが、もはや恐怖だった。

さて、そんなやりとりはともかく、だ。二人とも着るつもりだったのであれば、お互いに情報は得ただろうから。

「浴衣の好みとか聞いた？」

「うん。私は色とか聞いた。洋服の話題から、私と浅倉のイメージとか」

「なんだって？」

「浅倉は青、私は紫とオレンジの中間とかよくわからないこと言われた」

「おお……でも的確」

「そっちは？」

「ん、どんな浴衣が見たかったか聞いたよ」

直球過ぎる。しかも、その質問はおそらく……。

「……で、なんて?」

「浴衣の形はどれも一緒じゃないの? って」

「でしようね……」

「その後、調べてみたけど生地が違うって分かって、それ以外はよく分からなかった」

つまり、情報はないわけだ。……いや、逆説的に言えば、生地は自分たちが好みの奴を選べば良い。せっかく買うのなら、やっぱり気に入る奴を選びたいから。

「……」

そんな中、ふと円香の中に疑問が芽生える。……なんか、普通に菅谷の好みに合わせようとしているが、何でそうなるのか。いや、それ以前に、だ。そもそもどうして菅谷のために浴衣を買おうと思っっているのか。

なんか……今まで散々「いきなり一人暮らしは大変そうだから」とか言い訳してきたが、今回は言い訳出来ない気がする。

「あー、なんか今からリカが驚くところ見るの楽しみじゃない?」

「……ん。まあね」

自分の胸の奥底に秘めた感情に気付かないようにしながら、円香は適当な会話をし
て、透と歩いた。

×××

さて、18時。円香と透は、浴衣に身を包んで待ち合わせ場所に向かう。ちゃんと二人とも着付けを済ませた。浴衣の色もちゃんと好みに合わせた。柄は、円香は梅、透は蝶にした。

整えたのは浴衣だけではない。二人とも髪を弄り、円香はシニヨンスタイルと呼ばれる纏め方。短い髪でも出来るよう、お店の方がやってくれた。

一方で透は、お団子に簪を刺して纏め上げた。これも綺麗にお店の方がやってくれて、普段の透とは違うイメージができた。

二人ともガラツと普段の雰囲気とは違う見た目を作り出し、お互いの顔を見ても頬を赤らめてしまうほど似合っていた……のだが。

「……」

「……」

新しい自分を、仮にも一番仲良い異性に見せる時というのは、とても緊張するものだ。そんなわけで、なんか自分達が思っていた以上に破裂しそうな心臓を抱えた二人は、いつも以上に口数が少なかった。

だが、それでもここで引き返しては意味がない。下駄だからとか、浴衣だから、とかではなくゆったりした足取りながらも、きちんと待ち合わせ場所に向かっていた。

「……ね、樋口」

「っ、なに……?」

「(こ)まで、緊張させてるんだし……あいつも、緊張させてやらない?」

「……」

……確かに、何故あの野郎だけしやあしやあととして、自分達ばつか緊張しないといけないのか。むしろ、緊張するべきは向こうだろうに。

「……良いよ」

「やった。どう行く?」

「ググろう。そんなのいっぱい出てくるでしょ」

「良いね」

そんな話をしながら、もうすぐ待ち合わせ場所に到着という辺りまで来ても、スマホをいじって歩いていると、前方から影が刺され、足を止める。

「わお……ねえ、姉ちゃん達。女の子二人?」

「せっかくだし、俺らと遊ばね?」

分かりやすい連中である。軽薄で馴れ馴れしくて軽々とした連中……つまり、円香が一番嫌いなタイプだ。

「わ、これナンパ? ウケる」

「そう言う事目の前で言わない。……人と来てるので。失礼します」

そう言つて透の腕を引いて、円香は過ぎ去ろうとする。が、その前に男達は立ち塞がった。

「……なんですか？ 日本語がお分かりでない？」

「いやいや、ならその子も一緒にどうぞよ」

「いえ。この際だから言いますけど、あなた方では……」

バカ2人に対応しきれない、と言おうとした時だった。

「おい。マドちゃん、とおるん！」

言いながら、男子と女子の間に割り込むのは、菅谷明里。多分、ナンパされていたという認識さえないだろう。

だが、思わず円香と透はそれについてツツコミを入れる隙もなく啞然としてしまった。

何故なら……何故か、菅谷まで甚平を着ていたからだ。

「……」

「……」

余りに似合っていて、息を呑んだ。緊張させるつもりが、緊張させられてしまうインパクトだ。だから不意打ちはほんとやめて欲しいといつも言っているのに。

しかし、それは菅谷にとっても同じ事。いつもとは違う二人が並んでいるのを見て、

思わず唾然としてしまった。

「……」

「……」

「……」

三人とも、しばらくお互いを見つめ合ってしまう。思わず揃って頬を赤らめてしまう。もうナンパ男達など背景の一部にしか見えなくなっていた。

まず口を開いたのは菅谷だった。とりあえず「褒めたい」という意識が頭の中で働いた。

「っ、ふ、二人とも……綺麗じゃん……なんか、いつもと雰囲気違うっつーか……」

「っ……り、リカこそ……なんか、見違えた……というか……な、何？ ……イケメンがイケメンに見える……」

透が、それに応じるように称賛する。内容はアレだが。

円香も、同じように褒め言葉を浮かべようとした。実際、脳内には言葉は浮かんでいなかった。

しかし……それを言うのはどうしても照れに近い部分に憚られてしまう。

そして、その結果……。

「ふーん……ホストかアイドルが天職って感じ」

結局、憎まれ口を叩いてしまう。そんな自分の言葉を聞いて円香は心底、自身が嫌いになりそうになってしまった。何故、こんな言葉しか吐けないのか。素直に、カツコ良いと言えれば良いのに。

しかし、そんな自分に菅谷は、微笑みながら答えた。

「うん……マドちゃんも綺麗。その……何、モフ髪アップ？ 可愛い」

「……！」

直球で返して来る。完全に頬が真っ赤に染まり、円香はそれを隠すために鞆を抱き抱えた。

「わっ、樋口顔超真っ赤じゃん。ウケる」

「……！」

横からの透のセリフが、脳裏に響き渡り、今度こそオーバーヒートした。突如、アクセルを踏み込んだ車のように熱を帯びた身体が、反射的に抱えていた鞆を投射させた。菅谷に。

「俺……ぶっ＝っ！」

直撃し、後ろにひっくり返った。フーツ、フーツ……と、獣のように荒い息を円香は鎮め、加速する鼓動を抑えるために、胸に手を当てる。

手まで震えそうなほど、心音は激しい。このまま首振りエンジンに出来そうなほどの

加速と激しき。頭の中まで真っ赤になり、鼻血が出てもおかしくない程だ。

『うん……マドちゃんも綺麗。その……何、モフ髪アップ？ 可愛い』

如何にも菅谷が言いそうな、菅谷らしい褒め言葉だ。率直に言つて、死ぬほど嬉しい。でも、死んでも口に出来ない。

「……ねー、リカー。私はー？」

「とおるんも、おだんごと蝶々、メツチャ綺麗。可愛……いや、やっぱり綺麗」

「えー、可愛いが良い」

「じゃあ可愛い。……俺があげたピアスにも合う」

言いながら透の耳に手を当てる菅谷。それに応じるように、透も菅谷の耳に手を当てた。

「ふふ……リカも、合ってる。その浴衣とピアス」

「え？ これ甚平」

「ジンベイ？ サメ？」

「大体合ってる」

そんな力の抜けるやりとりを見て、円香は少し気を持ち直した。落ち着きを少しずつ胸の奥で取り戻し、深呼吸をする。

……そういえば、そもそもナンパされている最中だった。そう思つてあたりを見回す

と、どこかで見た背中が退散して行くのが見えた。

「だめだ、あれはダメな空間」

「みつともなく散るより、遠目から見守ってた方が良い奴」

「デナトニウム陽イオン食べに行こう。祭りにあるかな？」

「絶対無い。コーヒーもなさそう」

××結果的に、ナンパ男を撃退できて、今はひとまず良かったと思っておくことにした。

××さて、お祭りをエンジョイ。まずは腹拵え……なんて計画性はなく、グルリと回りながら目についたものを全てを遊んだ。

特に、バイトしてまで金を溜め込んだ円香と透は、ここぞとばかりに使いまくった。

まず手に入ったのはわたあめ。口の周りがギトギトになるから好きではなかったが、

今日はそんなのお構いなし。吸い込むように口の中に啜った。

引き続き、射的。理科系を極めつつある菅谷の物理演算が火を噴いた。まさかのス〇

イダーマンのゲームソフトを落とした。これをやる筐体がないが。

さらに、りんご飴のくじ。透が適当に引いたら、一回300円で6個引いた。最初は

テンション上がったが、2個目は割とキツかった。

さて、その次は型抜き。菅谷も透も良いとこまで行っただが、型抜き屋のおっちゃんが

「あーこれ髭少しだけ欠けちゃってるよ」と難癖。そういうのが嫌いな円香が怒りの集中力で文句無しの3000円をぶち抜いた。

さらに、たこ焼き食べて焼きそば食べてかき氷食べてタピオカ飲んで……と、とにかくいろんなものを食べ漁った。

「ふい〜……食ったあ……てか、食べてばつかあ」

「お祭りなんてそんなもんでしょ。……ちよつと食べ過ぎかも」

「樋口、口の周りソースついてる」

「え、うそ」

そんな話をしながら、ひとまず会場の公園から抜けた。口元を拭った円香が、一通り回り尽くしたので、意見を聞く。

「この後、どうする?」

「花火あるらしいよ」

「え、マジ? 行く?」

「いや、もう場所空いてないでしょ」

そう言いつつ、円香は場所取りを忘れていたことを思い出す。少し迂闊だった。

「うちの屋上は?」

「……ああ」

そういうえば、菅谷のマンションから隣の駅だし、アリかもしれない。学校と違って閉鎖されているわけでもないの、ある意味VIP専用の絶景かもしれない。

「行ってみよっか」

「うん」

そんなわけで、ゴミだけゴミ箱に捨てて菅谷のマンションへ。まだ花火が始まる前だから、電車の中も空いていた。

電車で揺られながら、本当に今更ながら思ったことを円香が聞いた。

「そういえば、リカ。あんたどうして甚平なんて着てきたの？」

「ん、あー……ぶっちゃけ、入学前から持ってた」

「え、なんで？」

続けて聞いたのは透。菅谷は少し恥ずかしそうにしながらも、すんなりした口調で答える。

「お祭り、三人で行きたいと思ってたんだけど……その時、少しでも楽しみたいなって思ってたから。俺、家族と室寺さん以外とお祭りとか初めてなんだ」

「……ふーん」

「にしても、入学前は気が早すぎでしょ」

それで行かないことになっていたらどうするつもりだったのか……いや、来年行くだ

けなのだろうが。

しかし、それで自分達に浴衣を持っているか聞いたのか、と変に腑に落ちてしまった。さて、駅に到着し、途中でコンビニに寄って飲み物だけ購入し、マンションに向かった。

屋上まではエレベーターで行けない。一度、最上階で降りて、階段で上がる。すると、透と円香の間にいた菅谷が、自分の両肘を軽くあげた。

「んっ」

「? 何?」

「いや、掴まって。階段だと、浴衣って歩きにくいんでしょ?」

「……生意気」

「母ちゃんに聞いた」

「それ、言わなくて良い。ホントのことでも」

何でも正直でいた方が良いわけではないのだ。……まあ、気遣いを覚えていただけでも、褒めてあげないこともないが。

ありがたくその肘に手を通し、ゆっくりと階段を上がる。

「……ふふ、リカ。両手に花じゃん」

「……」

「あ、照れた」

「……うるさい」

「そういうところ、可愛い」

「つ、ま、マドちゃんまで……!」

少し、からかつてやろうか。そんな風に思い、円香はちよつとだけ菅谷の方に身を寄せる。胸が当たらない程度……それでも照れちやうのだから、やつぱりウブだ。

「マドちゃん……」

「良いから、ちゃんと私達の杖になつて」

「……はい」

絶対に逃がさない良い機会だ。そのまま屋上に到着した頃には、既に花火は上がつていた。

ドオオオオンツツ……という胸に響く爆音の太鼓のような音と共に広がる火薬の花が、3人を照らした。

「わっ、遅刻」

「時間的に始まつたばかりでしょ」

「あの……もう屋上だし、離れても良いのでは……」

「だめー」

「えー……」

「うん。しばらく、このまま」

透も円香も、さらに身を寄せた。もはや観念するしかない菅谷は、ドギマギしながら花火から目を逸らす。

左右にいる二人を、交互にチラ見した。……やつぱり、綺麗だ。少し遠くで打ち上がる花火より、ずっと輝いて見える。それが、あのナンパ男達を引き寄せたのだろう。

「……」

「? どしたの?」

透が、ふと二人から目を逸らした菅谷に気付いてしまった。どう言おうか悩んだが……とりあえず、言ってみることにした。

「二人とも……今日は、家まで送るよ」

「え?」

「あんた家ここでしょ。別にそこまでしなくて良い」

「いや……させてよ」

そう言われ、円香と透は頭上に「?」を浮かべる。いつもは駅までしか送らないのに、どうしたのだろうか?

「……また、さつきみたいな人達が来ても困るし」

「……」

「……」

それを聞いて、二人の脳裏に浮かんだのは、あのナンパ男達。なんか去っていく時は何かに納得していたが、アレ以外にもナンパしてくるような輩はいるかもしれない。

……しかも、その時には菅谷はいない……なんて事を思ったわけでなく、もつと根本的なことを思っていた。

もしかして、だが……。

「……あれがナンパだって気づいてたの？」

「……」

透が聞くと、菅谷は頬を赤くしたまま俯いた。おそらく、花火の所為ではなく、羞恥によつて染まった紅だろう。

それを見て、円香も透も、少し嬉しくなる。この男も、少なからず自分達を意識している。それは、ボディタッチ以外でも言える事のようにだ。

「……じゃ、お願いしようかな」

「勿論……このままでね」

「それは……ちよつと、心臓もたないです……」

そんな話をしながら、しばらく夜の空を照らす火薬に目を移した。

猫は心を許している人の前でのみリラックスする。

もう直ぐみんなで菅谷の別荘へ行く日。それに伴い、各々は色々準備しなくてはならない。

男性且つ自分の家の別荘、ということであまり荷物が多くない菅谷はともかく、円香と透は色々と持っていくものは少なくない。

と、言うのも、海で遊ぶのは決して楽しいだけではない。紫外線、海水の影響、陸では基本砂浜、などなどと美容への大敵が多い。

日焼け止め、ラッシュガード、ビーチガウン、各種タオル、サンダル……などなどと購入する必要がある。……まあ、もうほとんど家にあるが。

それに追加し、泊まりに必要なシャンプー、リンス、或いはトリートメント、ボディソープ、洗顔などを用意したい。

……のだが、円香は透と一緒に今日も菅谷の部屋へ来ていた。まず部屋番号を押し、扉を開けさせる。

「リカ、来た。開けて」

『ふわああ……あーい……』

もう「何で来たの？」と聞くこともなく、菅谷は自動ドアを開ける。慣れた様子で透と円香はエレベーターを上がり、インターホンを押す。ガチャつと鍵が開く音がしたので、部屋の中に入った。

「おはよ〜……」

「ん」

「おはよー。寝起き？」

「うん……」

如何にも寝起きという顔をしている菅谷に、透が聞く。今日のパジャマは、男が着るとは思えない花柄……かと思いきや、ちよいちよいミツバチが見えるので、花粉を運ぶミツバチ柄、と言うべきか。

こういうパジャマを普通に着て寝ている辺りが可愛いわけだが、とりあえずもう10時回っているので、いつまでも寝かしておくわけにもいかない。

持参したまま置いておいたスリッパに履き替えながら聞いた。

「もう少し寝たい？」

「……寝ふあい……」

「ダメ。浅倉、部屋に叩き込んで着替えさせて」

「え……いい、良いけど……」

「ん」

それだけ指示すると、円香はまずリビングに向かった。ベランダの窓を大きく開け放ち、洗面所で洗濯物を全部、洗濯機の中に叩き込み、お祭りの前に掃除した日に置いていったエプロンを装備し、朝食を作り始める。

「……」

手際良く味噌汁、炒め物、白米を用意し、とりあえずこんなもので良いかと思い、味噌汁の火を消して、炒め物は弱火にする。せつかくなので温かいうちに食べてもらいたいが、菅谷がリビングに来ない。

「？」

何やってんの、と思いつつ、部屋の方へ歩くと、何やら声が聞こえて来る。

「じ……じゃあ、リカ……脱がすよ……」

「や、でも……俺、別にもう目、覚めたし……」

「いや、でも樋口に言われたから……それに、まだ少し寝ぼけてそう、だし……」

「……っ、わ、分かったよ……でも、濡れてるし……汚いよ？」

「リカのなら、汚くない……」

直後、反射運動で扉を開いた。勢い良く蹴破る勢いで飛び込むと、少し恥ずかしそうに頬を赤らめている透が、同じく羞恥心から頬を赤く染め、ベッドの上で座っている菅

谷の汗によつて湿っているパジャマのボタンを両手で外している。どう見たつて、腕がそうとしているようにしか見えない。

「……何、してるの」

「え、着替えさせようと思つて……」

「は？」

「樋口が着替えさせろつて言うから……」

「……」

言つた。確かに言つたが……。

「そうじゃなくて……部屋の中に入つ込んでおいてくれれば、後は勝手に着替えるでしよ」

「ああ……そういう事ね。ごめん、リカ。やっぱり自分で着替えて」

「う、うん……」

それだけ言つと、透は手を離して部屋から出る。

続いて、円香はとりあえず用事だけ伝えた。

「もうご飯出来るから。早く着替えて」

「あ、はい」

そんな話をしながら、一先ず部屋から出て行つた。台所にて火を再び強くしてしばらく

く焼いてから火を切った。

お皿の上に盛り付け、完成である。

「…………ふう」

一息つきながら、机の上に料理を並べて行った。

「おお…………美味しそう」

「あんたのじゃないから」

「え、朝ご飯抜いてきたのに？」

「知らない」

言いながら、次はお味噌汁を注ぐ。

「…………実はさ、リカの胸触っちゃったんだけど…………胸筋、控えめだけで割と硬くて」

「そんなの教えられたってあげないものはあげないから」

「けち」

というか、なんの勝算があつてその情報を前払いとしようとしたのか分からない。

思春期だし、異性の体に興味がないわけではない…………が、でも別にそんな変態的な情報が欲しいわけではないし、増してや筋肉フェチというわけでもないのだ。

それに、この辺は菅谷の家にある食材で作ったものだし、自分に交渉されても困ると言うものだ。

何より、人の家で食べる朝食をあてにしないでもらいたい。

……。

……。

……。

……大胸筋、硬いんだ。どんな感じなのだろう。

「あつつー！」

「樋口？」

ほんの一瞬だけ顔を出した煩惱が、油断を誘った。味噌汁のお椀を落としてしまい、床に飛び散ってしまう。

「大丈夫？」

「っ、へ、平気……」

「冷やしておいでよ。私、拭いとくから」

「ありがとう」

掛かったのは脚だ。靴下の上からもらってしまったので、冷やすには風呂場に行くのが手っ取り早い。

透が雑巾で拭いている間に、円香は立ち上がって洗面所に向かう。

「……浅倉」

「何?」

「……ご飯、私のじゃないから。食べたかったら、リカに聞いて」

「うん」

結局、許可に近いことを言い放って移動した。風呂場にある腰をかけるプラスチックの椅子に座り、シャワーから放水して足に注ぐ。

その円香の背後から、扉が開く音。菅谷が伸びをしながら入ってきた。

「あれ、マドちゃん。どうしたの?」

「ん……ちよつと」

「もしかして、味噌汁落として火傷でもした?」

「何でわかるの……」

「ワカメがついてる靴下、落ちてるから」

なるほど、と円香は理解する。

「大丈夫?」

「平気」

「ん……ちよつと待ってて」

「?」

何を思ったか、菅谷は洗面所から出ていく。言われるがまま待機していると、すぐに

戻つて来た。熱冷〇シートを持って。

「これ、使えるんじゃないか？」

「……別にいいって」

「いやいや、大事になつてからじゃ遅いから」

「じゃあ……お願い」

たまには甘える側になるのも悪くないかも、と思いつつ、シャワーを止めて足を差し出した。

それを、菅谷の足の上に乗せる。袋の中から菅谷が湿布を出そうとした直後、円香の目に、ふと気になる文字が入った。

「ちよつと待つて」

「? 何?」

「それ、火傷には使うなつて書いてない?」

「え?」

言われて菅谷も確認してみると、確かに書いてあつた。

「うわ、あつぶね。ごめん」

「……医療品は使う前に確認して」

薬の誤飲とか、やらかしたら終わりである。病気を治すためのものが毒になること

だってあるのだから。

「それより、朝ご飯冷めるから早く食べて」

「あ、うん。いつもありがとね」

「……」

お礼を言いながら洗面所を後にする菅谷。お礼の言葉を聞く度に、円香は「次は何作ろうかな」なんて考えてしまう。菅谷にそうさせる魔力があるのか、それとも自分がちよろいだけなのかは分からなかったが、何にしても嬉しいことに変わりはなかった。

まあ、この後、おかずで焼いたベーコンの最後の一枚を取り合うバカ二人を見て、すぐ××にその気持ちも失せたが。

×× 朝飯を食べ終えてから、歯磨きと洗濯物干しを菅谷がやっている間、円香は透と一緒に食後のコーヒーを啜る。

「……美味っ」

「じゃないでしょ。あんた、朝から来るなら少しくらい何か手伝ってくれない？」

「いや、だからリカの着替え、手伝おうとしたじゃん」

「まずその指示をそう捉えたのなら、疑問を抱きなさいよ」

それはそうか、と透は頷く。……ふと、チラリと二人で菅谷の方を見る。洗濯物を干

すので忙しそうだ。

すると、ふと透が向かいの席に座っている円香に手招きしてくる。

「? 何?」

怪訝そうな顔で顔を近づけてる。おそらく内緒話がしたいのだろう。透も同じように顔を近づけてきて、ヒソヒソした声で話す。

「さつき……リカの部屋にさ……」

「うん?」

「……『好きなあの子へのアプローチ』って本があつて」

「……は?」

言わんとしたいことが、円香にも伝わった。それはつまり……菅谷に、好きな子がいる事を指している。

「……マジ?」

「でさ……ぶつちやけ、私と樋口以外、あり得ないじゃん?」

それはその通りだ。だから、胸の奥の痛みが少なかった。……いや、何となく円香にはわかっていたが。おそらく、口うるさい自分なんかより、透の方が好きなのだろう。

「この後、色々日焼け止めとか買いに、一緒に出掛けるわけだけど……その時にリカの様子見て、どっちの方が好きか、見極めてみない?」

「……」

面白そうではある。だが、それと同時に怖かった。何故かわからないが、もし透のことが好きだったら、より、自分のことが好きだった時の方が恐ろしい。

何せ、見ていれば分かる。透も、菅谷のことがおそらく好きだ。周囲から分かりにくいと思われていそうな透だが、一度理解してしまえば、むしろ分かりやすく見える。

一方で、別に自分は菅谷のことなんて好きじゃない。友達としては好きな部類と言わざるを得ないが、恋人にしたいとは思わない。透と自分以外の女の子と仲良くしてるとムカつくし、歯が浮くようなセリフを言われると弾けるほど嬉しいし、なんか放つておなくていつも世話を焼いてしまうが、別に好きなんかじゃない。ホントに。

だから、三角関係になるのが怖かった。そしたら、今の関係も変わってしまうかもしれない。

「……その本、私達も目を通さないと無理でしょ」

「……にあるよ」

「……盗ったの？」

「借りの」

ものはいよいよである。裏を返せば、透は知りたいのだろう。菅谷の心を射止めた人物を。だが、自分だとは思っていない。じゃあその後、どうするのか？ 多分、何も考

えていない。自分が菅谷のことが好きな自覚がないから。

念の為、円香はジロリと透を睨む。

「……良いの？」

「何が？」

「……」

まったく、自分の気持ちにも気づけないなんて、本当に面倒な幼馴染だ。

しかし、まあその不安もいらぬ心配なのだが。何せどの道、両思いではあるのだから。

「……分かった」

なら、自分はキューピットになっても良い。親友二人がくっつくのなら、それ以上に幸せなことはないのだから。関係は崩れるかもしれないが、それならそれで小糸と雛菜の面倒を見れば良いし、全然平気。

そう、自分の中で思ってもいない言い訳と誤魔化しを繰り返しながら、コーヒーを啜った。

×

×

さて、三人で歯磨きを終えて、出発。菅谷の部屋から盗ん……借り受けた本は透の手元にある。

「で、俺は荷物持ちで良いの？」

「うん。精々こき使うから、筋肉痛覚悟しといて」

「え、何買うの？ ダンベル？」

「あ、私欲しいかも。10キロくらいの」

「じゃあ俺20キロ買う」

「じゃあ私30」

「何キロ買つても良いけど、リカが全部持つのは変わらないから」

なんて話しながら歩きつつ、透は頭の中で考え事を続ける。

多分、菅谷と円香は両思いだ。まああれだけ世話を焼く、焼かれるの関係があつて、両思いじゃない事はないだろう。

それを止めるつもりはない透から見れば、二人の行動は焦つたものだ。さつさとくっ付けこの野郎、と思わずにはいられない程、分かりやすい。

しかし、その反面で……もし自分の事も好きだったらなあ、なんて思う自分もいた。自分が菅谷の事を好きかどうかは分からないが、少なくとも嫌いではない。というか、好きではある。友達として。ホントに。

もし、菅谷と円香がくつつく事になつても、自分と距離が開くのは嫌だが、その心配はしていない。あの二人なら、自分との遊びにも付き合ってくれるはずだから。

そして、好きな人が自分だったとしても、円香も一緒に三人で遊びたい。誘える自信がある。

だから……まあ、興味本位だ。今回、彼の好きな人を探ろうと思ったのは。

「てか、日焼け止めってどこに売ってんの？」

「ん……普通にドラッグストア」

「へー」

そんな話を聞きながら、円香がチラリとこちらを見る。それに伴い、透も頷いた。

菅谷からパクツ……借りた本によれば、男が女の子から好かれるには、僅かな変化を見逃さない事らしい。まあ、あながち間違いではない。

そのため、円香が隙を作っている間に、透は自身に変化をもたらしした。

「ね、リカ」

「何ー？」

「どう？」

横から菅谷の袖を引き、顔を見せた。……道端にいた、カナブンを頭に乗せて。

この変化を褒めないような菅谷ではない。絶対、何か言う……だから、円香にはお願いしたい。そんなに女の子がしちやいけけない眼力でこちらを睨むのはやめて、と。

さて、どうなるか……菅谷の反応は？

「わっ、可愛い」

「でしょ?」

「うん。でも生き物で遊ぶのはやめてあげて。俺達にとっては脇腹を突くのと同じ感覚でも、向こうにとっては目の前に怪獣が現れたのと同じだから」

「ごめんごめん」

言いながら、透は円香にアイコンタクトを行う。

どちらのことが好きなのか、それを知るには円香も同じように小さな変化をつける必要がある。

……でも、カナブンを頭に乗せるのは無理。というかあれ可愛いのか? 菅谷の感性大丈夫? と眉間に皺を寄せる。

「……ね、ねえ、リカ」

「ん?」

「これは?」

とりあえず、パツと思い付いた事をしてみた。ヘアピンをつける方向を真逆に変えてみる。

「わっ、鏡(こ)つ(こ)?」

「うん、それで良い」

「ふーん……うーん……いつものマドちゃんのが可愛い」
「……」

なんだろう、この感じ。褒められてはいないのに嬉しいこの感じ。褒められたけど注意された透よりもプラス査定な気がする。

少し照れているその隙を、基本的に人の良い所しか見ない男は逃さない。円香に手を伸ばし、ヘアピンを取ると反対向きに付け替えた。つまり、いつもののである。

「……うん。こつちの方が合う」

「っ……ば、バカ……」

「え、な、何が？ ……って、いふあふあふあふあー！」

突如、後ろから頬をつねられる菅谷。後方に控えている透が、納得いかなさそうな笑みでつねり回した挙句に離された。

「とおるん……な、何いきなり……？」

「別に」

「……ふふんっ」

×ある意味では競い合いでもある為、円香は少し得意げな表情を浮かべていた。

×

×一回は1対0。なんか野球の試合のようになってきたが、二人ともツツコミを入れる

ことなく、買い物は進む。

次にやるのは「女の子と遊ぶ時は花を持たせるべき」。例で挙げられているのは、ボウリング。完封で負かしたりすれば盛り下がってしまう……だそうだ。

間違いいはないが、そもそも遊びに行つたゲームの勝敗に、そこまで熱くならない、と言うのが二人だ。自分のスコアが良ければ良いし、一緒に遊んでる友達がナイスプレー、或いは高スコアを取れば一緒に喜ぶ。そうやって盛り上がるものだ。

むしろ、接待なんてされたらその方が腹が立つし、楽しくない。

とはいえ、今は内容よりも、これを読み込んだ菅谷がどちらにこの対応をするか、だ。「ね、これやらない?」

円香が指さしたのは、バスケットのゴールだった。制限時間内にシュートを何本決められるか、という奴。

「二人用だけど……というか、マドちゃんそう言うの好きなの?」

「ん……まあ、たまには体動かしたい時くらいあるから」

「じゃ、私見てるね」

菅谷が乗り、その筐体の前に立つ。お金を入れて、菅谷と円香……二人並んでゲーム開始。

お金を入れたことにより柵が消え、転がり落ちてくるボールを手に取り、一斉に投げ

始めた。

「いよつ、とつ、ほっ！」

「ほいつ、とつ、そらっ」

二人して中々のペースでボールを放り続ける。二人ともほぼ同じ速度で投げ続けるが、円香のボールは時々入らない。そもそも、菅谷の反応を見るのだから、少し自分が負ける程度でないと意味がない。

少しずつ点差が開いていく中で、菅谷がどう動くか、二人して見ているときだった。隣の菅谷から、ニヤリとほくそ笑んだような声が漏れる。

「マドちゃん、意外とヘタクソなんだ」

「……は？」

直後、プライドが目的を追い抜いた。

本気になった円香の目つきが変わる。両手がまるで無くなったかのように加速し、目の前に溜まっていたボールが姿を消す。

あれ？　なんか2本ずつ加算されてない？　と思ってしまうほどの速度。

「うわ、樋口ガチになった」

「面白くなって来た……！　アルパカモード」

菅谷の目つきも変わる。アルパカモードとは、ものすごい速さで唾を吐き捨てるアル

パカの習性をモチーフにして、投擲の精度を上げる今作ったモードである。

お互いに手が消えると言うか、むしろ千手観音の如く増えているように見えるが、透は動画を撮りながらのうのうと眺める。

そして、時間はとうとう……終焉を迎えた。

『ゲームセット!』

その声で、二人してスコアを眺めた結果……勝ったのは円香だった。

「はい……勝ちっ……!」

「負けたかあ……やっぱ、カメレオンの方が良かったかなあ」

肩で息をしながら親指を立てる円香。煽られたお礼にドチャクソに煽り返してやろうと菅谷の方を睨みつけると……菅谷はむしろめっちゃ楽しそうな笑みでこっちを見ていた。

「あはは、やっぱ本気でやり合った方が楽しいよね」

「っ……」

やられた、と円香は少し頬が赤くなる。手加減していたのがバレたようだ。勝負に勝って器で負けた……なんて少し思い、項垂れる。

何より、意外と手加減がバレてたことに少し驚いてしまった。人を見ていないように、やはりよく見ている子だ。

その円香の横で、透が菅谷の袖を引いた。

「ね、次。私とやろ」

「や、腕死んでるから少し休ませて……」

「バスケじゃなくて良いから。ホッケーとか？」

「腕使うじゃん……」

「行こう」

「聞いちゃいねえよ……」

「待って……私も普通に疲れたから……」

円香も同じくらい疲弊していたため、少し休んでから改めてエアホッケーの場所へ。

ホッケー台の前で、円香に二の腕のマッサージをもらった菅谷は、肩を軽く回しながら透と向かい合った。

「よし、やるか」

「んっ」

コキコキと首を鳴らしながら、向かい合ってマレットを手にする。

「準備は？」

「いつでもっ！」

「おーけー」

1000円玉を投入し、早速ゲームスタートした。パックが射出されたのは透の方。ありがたく受け取りながら軽く腕を引くと、思いつきり一発かました。

キュンつというビームの音が聞こえそうなほどの一撃は、菅谷に手をピクリとも動かさせず点数となる。

「先手必勝だから」

「……やるね？」

さつきの円香を見た以上、同じミスは犯さない。なんだかんだ、菅谷が望んでいるのは本気の削り合い。拮抗した実力があれば、最後の最後で勝ちを譲るかは後になれば分かる。

ふと円香を見ると「うわずるっ」と言いたげな顔をしていた。無視である。

続いて、菅谷の方から。パックをマレットで押さえて手を控えめに引いた菅谷を見た直後、透に見えたその菅谷の瞳には、数式が映っているように見えた。

「……」

「……だ」

放たれた一閃。あまりに緩やかな一撃が、バウンドしながら透に迫る。そして、それを打ち返そうとした直後、その透が振るったマレットを避けるように、パックは曲がり、ゴールに収まった。

「は……?」

「うしつ、いける」

「ねえ、あんた何なの? コナンの劇場版シユート?」

「むしろホークアイ」

化け物である。理系が得意にも程がある。数学は出来ないが。

速度の透と、トリツキーな菅谷のラリーが続く。点差は菅谷が優勢。なんかもう円香の目には、2人とも本気になりすぎな感じがしないでも無いように映っている。透とか本来の目的を忘れていそうだ。

点差は菅谷が少しリード。透も負けじと追い縋ろうとマレットを握る手を動かす。

「あ、やべっ」

計算でもミスったのか、速度はあるがカーブの利きが甘い一撃が来た。それは、一番打ち返しやすい一発だ。好機、と睨んだ透は一気に腕を振るった。

その直後、ズルつと汗で手元がブレる。滑った、と理解したのはすぐその後だった。爪が、パツクとの間に挟まれた。

「痛っ……!」

打ち返した球は指が挟まったことによりイレギュラーが発生し、変な方向へバウンド。菅谷でも読み切れなかったそれは、ゴールの中に収まる。これであと1点差であ

る。

「うおつ、と……?」

「つしや、怪我の功名」

控えめにガッツポーズした直後、ズキッと指先が痛む。爪に、亀裂が入っていた。

深く割れたわけでは無いが、せつかく綺麗に育てていたのに、少しシヨックを受けつつ、とりあえずマレットを握り直す。せつかく温まってきた所だ。追いつくチャンスはまだある……と、思ったのだが。

菅谷が、机の奥から聞いてきた。

「今、指挟んだでしょ」

「……え?」

「見せて」

遠目から指を差し出す。

「割れてるじゃん。大丈夫?」

「ん……や、まあ後で爪切るし」

「いや、今切りなよ」

「爪切り無いから……」

「俺ある」

「え……なんで？」

「え、基本持ち歩かない？ 爪切りとか絆創膏とかテーピングとかムヒとか」

言いながら、菅谷は鞆の中を弄りながら、その救急セットを取り出した。そのまま透の手を取った菅谷は、慣れた手つきで爪切りをセットする。

あ、やってくれるんだ、と思いつつ、透は自分の手を握る菅谷に聞いた。

「なんか、慣れてる？」

「昔はヤンチャしてたから」

「今でもしょ」

しれっと円香からツッコミが入るが、菅谷は首を横に振るう。

「今はカブトムシの観察のために木の上に一時間留まったり、サファリパークの窓から飛び出してライオンの観察とかしないよ」

「よく生きて帰ってきたね……」

彼の父親が過保護な親バカになるのも領ける。

引き気味に言った透の爪の、割れた部分が綺麗に切られる。

すると、菅谷は手を止めて、円香の方を見た。

「俺、爪割った事ないから分からないんだけど、この後どうしたら良いの？」

「私もない。ググろうか？」

「お願い」

円香が調べてくれたので、それに従って処置を行う。取り返しがつかないレベルではなかったため、手持ちのアイテムで何とか処置を終わらせることが出来た。

「よし、終わりっ」

「……ありがと」

シレつとお礼を言いつつも、透の耳は少し赤い。こうやって怪我の処置を菅谷にしてもらうのは初めてのことで、ちよつと嬉しかったり。

その直後だった。ビーツとブザーの音が鳴り響く。試合が終わってしまったようだ。勝ったのは菅谷。まあ仕方ないと言えば仕方ない。

「あーあ……負けた」

「いや、今のはノーゲームでしょ。また来てやろうよ」

「……ん」

「……」

そんなやり取りを眺めながら、円香は少しむすつとした。勝ちを譲られた（正確に言えばブン取った）のは自分なのに、なんか結果的には勝ちを譲られなかった透の方が上に見える。なんか……納得いかない。

「ふんっ」

「うおうっ？ ま、マドちゃん？」

「……終わったなら、そろそろ買い物行くよ」

×二人の手首を掴んで、買い物に引き戻した。

×それから二人の試行錯誤は続いた。……が、結局の所、どちらか片方に鼻戻してこの本を実践しているような点を見られるような事は無かった。

結局、もう帰宅の時間。今日は荷物がたくさんあるので、このまま自宅に帰る事になった。

「ん〜……疲れた」

「……」

「……」

結局、菅谷の好きな人がどちらなのか分からずじまい。……いや、なんなら自分達ではなく、お隣さんの可能性さえ出てきた気がする。何せ、少なくとも自分達に対する態度が、いつもと変わることはなかったのだから。

何にしても、ここまでしたのになんの成果もないのはごめんだ。二人とも顔を見合わせる、いつそのこと聞いてみることにした。

言い出しつぺであった透が、咳払いをすると珍しく緊張気味に聞いた。

「ね、リカ」

「んー?」

「リカはさ、私と樋口、どっちが好き?」

「え? 両方だけど……なんで?」

「……」

まあその返事は来ると思った。相変わらず何も分かっていない男だ。

透の隣にいた円香が、透の鞆から本を取り出して聞いた。

「これ」

「あれ、なんでマドちゃんが持つてるの?」

「そんな事どうでも良い。……この本持つてるって事は、好きな人がいるってことなんじゃないの?」

切り札を一気に放って問い詰める。そうでなかったら、そもそもこんな本は買わないだろう。

そう思って追い詰めるような気迫を放って聞くと、菅谷は相変わらず能天気な顔で答えた。

「ああ、それ違うよ。文化祭の執事喫茶に備えて、自分でちよつと勉強しようかなって思っただけ」

「……………はい？」

え、今なんて？　と言わんばかりに二人とも片眉をあげる。

「執事喫茶つて言うからには、ほとんどメイド喫茶のホスト版みたいなもんでしょ。どうせなら売上伸ばしたいし、こう……何？　リピーターを増やせば良いなーと思つて」

「……」

「……」

この野郎、と八つ当たりに近い……というか八つ当たりの感情がフツフツと二人の奥底から煮えたぎる。

「……………じゃあ、なんでこれに書かれてる事、私達に実践しないの？」

聞いたのは透。それでは、まるで自分達にはモテたくないみたいだ。

しかし、それに対しても菅谷は真顔のまま答えた。

「え？　だって、二人には自然体でいたいし……え、もしかして、二人ともこういう扱ひされたかった？」

「……」

「……」

今度は少し胸の奥が穏やかになる。確かにその通りではある。……つまり、菅谷には

別に好きな人がいるわけではない？ と、二人してホツとするような結論が導き出される。

ちようど、二人の家の近くまで来ていた。ここまで持ってきてもらった荷物を、円香と透は預かった。

「……それなら良いけど」

「？ 結局、なんだったの？」

「なんでもない」

「じゃ、また」

「次は、海だよね」

「あ、うん」

そんな適当な挨拶を交わしながら、透と円香は逃げるように走って帰宅した。

次は、いよいよ海だ。それも、三人しかいないビーチで、三人しかいない別荘を泊まりで満喫する。

一時のテンションに身を預け、若気の至りと思われる様な行動をしないように心がけるばかりだ。

ラツキースケベは実際に起こると全然ラツキーじゃない。
い。

別荘。その響きだけでお金持ちを想像する人は少なく無いだろう。実際、間違いない。別宅を持つなんてそれなりにお金がないと出来ない事だ。

それを持たない人にとっては、その家を持つ人はまさに別世界の住人に見える事だろう。

だが、そんな事を気にするタマではない円香と透は、当日になっても普通にリラックスしていた。

待ち合わせ場所は、二人の家の前。てつきり電車で行くと思っていたから意外に思えてしまったが、まあ移動の手間が掛からないだけラツキーと見るべきだろう。

「リカ、遅くない?」

「ね。いつもならいの一着に來てそうなのに」

「……今のうちに、忘れ物ないか確認したら?」

円香は、幼馴染のそう言うところに関しては信用していない。むしろ、必ず何か忘れ物があるという点での信用はあるが。

「いやいや、流石に今日は忘れ物してないから。自信ある」

「水着持った？」

「一番忘れないでしょそれ」

言いながら、透は大きなボストンバッグの中を見た。しばらく弄った後「あつ」と声を漏らす。

「水着ないわ」

「お礼はスイカ割りのスイカ役で良いから」

「え……そんなにギルティ重かった？」

「良いからまず水着を取ってきて」

「はーい」

そのまま透は家に引き返した。全くもって、少しは考えながら生きてほしい幼馴染である。せつかくこの日のために買った水着をお披露目しないとか、もはや何しに行くか分からないままである。

……そう思いつつも、円香も忘れていたら嫌なので、自分の鞆の中を覗いておく。うん。五日間かけて選んだ水着がちやんと入ってる。

そんな時だった。家の前に車が止まる。……まさかのリズムジンが。

「…………え」

「おーい、マドちゃん」

開かれた助手席から降りて手を振って来るのは菅谷。そして、反対側には菅谷の父親では無い男性が座っている。

「……あ、お、おはよう……」

流石に動揺してしまった。まさかとは思うが、これで別荘に行くつもりなのだろうか？

「とおるんは？」

「今、忘れ物取りに行ってる」

「あそう。じゃあ……室寺さん、先に紹介しときますね」

この人が室寺さん？ と、円香が小首を傾げている間に、菅谷はそのまま言う。

「この子が樋口円香。クラスメート」

「ふふ、初めまして。樋口さん。室寺です」

「は、初めまして……」

思った以上にシユツとした人だ。如何にも仕事が出来そうな空気で、ダンディな空気を身にまとっている。

「……ふふ、可愛らしいお嬢さんじゃないか。明里、お前こんなレベル高い子と泊まりで行くの？ 嘘でしょ？」

「そうですよ」

「いい加減にしろよお前ホント」

「良いでしょー？」

「よし、お前だけ走って行け」

「嘘嘘ごめんごめん」

なんか冗談言い合えるほど仲良さそうだ。父親の職場の人、とのことだが、どうにもそれだけじゃない気がする。

「あの……失礼ですが、リ……明里くんとの関係は……」

「わっ、今初めてマドちゃんに『明里くん』って言われた。もっかい言って？」

「黙ってて」

「はい」

黙らせると、改めて聞こうとした……が、聞く前に察した室寺は微笑みながら答えた。「そうですね。他の方から見たら俺と明里の関係は普通では無いかもしれませんが。しかし、それでもこのように友人でいられるものですよ」

「……」

そういうもの、なのだろうか。まあ、そもそも男の子である菅谷が女である自分と透にかなり懐いているわけだし、そうなのかもしれない。男一対女二……これも、周りか

ら見たらかなり奇怪なことだ。

「とにかく、乗って。マドちゃん。室寺さんが送ってくれるから」

「……良いんですか？」

「良いのいいの。……明里を送る代わりに、リムジン好きに使って良いって約束したし。これで関東一周旅行を計画中です」

イケメンにはロクな人種がないのだろうか？ この人も割とおかしい。

まあ、なんにしてもお言葉に甘え、リムジンに乗り込むことにした。

「あ、荷物ちょうだい。トランクに詰め込む」

「ありがとう」

乗り込む前に、車から降りた菅谷に荷物を預けた。内装は、それはもうドラマでよく見るような豪華な物。本当にこんなに乗っていいの？ と思う程だ。

「……すごい。車内にフルーツと冷蔵庫が……」

「食べてていいよ」

「ていうか、明里も後ろ行っていいよ」

「え？ でも父ちゃんがお前は助手席に座っててやれって」

「そんな気を使わなくていいから。元々、お友達同士で遊びに行くって話だったんでしょ？ 3人で仲良く後ろにいてくれていいから」

「……そう?」

「うん」

「じゃあ……そうする。ありがとう」

その言葉に室寺は片手をあげて返事をする。

後ろの席に来て円香の隣に座った菅谷は、真顔のまま言った。

「そんなわけで、来ちゃった」

「いや、あんたの家の車だし」

来ちゃった、とか待ち合わせしてないけど来ました、みたいに言われても困る。

「……すごいね。リムジン」

「うん。普段はあんまり使わないんだけどね。でも、今日はほら、特別だし。そしたら室寺さんが『色んな地方を回って昆虫採集に行く車を借りたい』って言って来たから、ついでに送ってもらったことになった」

「そうなの。……帰りは?」

「帰りは電車」

「あ、なるほど」

まあそれくらいは仕方ない。……というか、室寺さんは何を考えているのだろうか?

この人の虫好きも行くところまで行っている気がする。

「初めて座ったけど、座り心地もすごい」

「うん。ふつかふかでしょ。俺も乗るの久しぶり」

「そうなの？」

「うち、車たくさんあるから。……母ちゃんが運転趣味で」

「明里、あの人の運転についてどうこう言うのはよせ……」

「うん……」

「？」

運転に何か問題でもあるのだろうか？ まあ今はないのでどうでも良いが。

「まあ、母ちゃんの運転のおかげで遅刻しないで済んだことは何度かあった、っただけ言っておくね」

「……ああ」

つまり、F1ドライバー的なアレなのだろう。怖い。

「その催しがあった時、私は絶対に誘わないで」

「大丈夫。慣れれば楽しいから」

「慣れたら終わりでしょ」

なんて話しながら、ふと窓の外に目を向ける円香。家から出て来た透が、物珍しそうに車を眺めていた。

「あ、きた」

それに気づいた菅谷が車から降りる。

「あれ、リカ？ 今、この車から降りてきた？」

「え？ うん。乗って。……あ、この人、運転してくれる室寺さん」

「あ、よく話に出てくる？」

「こんにちは。あなたが浅倉透さん、かな？」

「よろしくお願いします」

「……明里、お前ホント大概にしろよ。美人ばつか引き連れやがって」

「どっちかっていうと俺がついて行ってるんだよ」

「？ お互いについていってない？」

「え？ じゃあどこに向かっているの？」

「？ 分かんらん」

「なるほど、よく分かった」

すぐに二人のアホなやりとりを見て関係を理解するあたり、室寺さんも流石、菅谷と長く付き合っているだけのことはあった。

「とにかく、乗って」

「はい」

「とおるん、荷物もらう」

「え、あげない」

「いやいらないけど」

「え？」

「トランクに乗せた方が良くない？」

「あ、うん。よろしく」

そんなところで一々、かみ合いの齟齬を発生させるな、と思っただが、何も言わずに円香は鏡を取り出す。最後に顔や髪型をチェックしておく。

「ありがと、樋口。さっき助かつ……うわ、内装もヤバっ」

「分かる」

同じリアクションを浮かべる透。その後が続いて、菅谷も車の中に乗り込んだ。

さて、改めて発進である。

「じゃ、出すよー」

「「お願いしまーす」」

×その一声で、とりあえず挨拶して出発した。

×最初こそ「車の中でフカフカのソファー」というものに慣れなかったものの、室寺の

運転があまりに緩やかであった為、すぐに慣れた。リムジンの中では飲み物をもらった
り、三人で「フルーツを放って口でキャッチする」なんて遊びをやっていたら、知らな
いうちに慣れていた。

流石、基本的に自分達の世界で仲良くやる子達だ。どこで過ごしたって、すぐに自分
ん家状態である。

途中、サーブスエリアによって山の風景やら何やらをバックに写真を撮ったり、地味
に美味しいそこでしか食べられないラーメンを食べたりして、何とか別荘に到着した。

「うおー、着いたー」

「途中、めっちゃ綺麗な海見えたよね」

「あの海を、貸切……」

本当に贅沢な限りを尽くせそうな時間になりそうだ。

「明里、これ」

「あ、鍵？」

「ああ。帰りはちゃんとお前の手からお父さんに返すんだからな？ 失くさないでよ

？」

「余裕」

「……樋口さん。あなたに預かってもらっても？」

「……様子を見て考えます」

とりあえず、即答はしないでおいた。

鍵を預かった菅谷に、さらに室寺が続ける。

「明里、先に荷物運び込んでおいて」

「うい。……え、なんで先に？」

「俺が見て回った先に特大のオオクワガタとかいたら、動画で送ってやるから」

「任された」

すぐに領き、トランクを開けて、荷物を運び始めた。車の中からまだ降りていなかった透と円香の方に、室寺が振り向く。

「今日……というか、今後も明里のことよろしくね」

「? なんですか? 急に」

「いや、あいつは俺も生まれる前から知ってるから、僭越ながらほぼ父親みたいな想いもあるんだけどさ……やっぱ、友達みたいな関係になっちゃってんのは、俺がアイツと距離近すぎたからなんだよな。……もつと、同い年の友達を作らせるべきだったなって」

父親の秘書をしているらしいこの人は、ずっと菅谷の面倒も見ていたらしい。

「俺が構ってやってたから友達なんていらなかったみたいだし、あれだけ広い家に友達も連れて来なかったから。……だから、君らがあの子の初めての友達みたいなどこある

んだよ」

「……はあ」

「異性の友達なんて、尚更驚いてるよ。今まで女の子と仲良くなつたこともなかったから。だから、まあ……なんだ。あいつとずっと、仲良くしてやって」

それだけ言うと、室寺は運転席を出て、荷物の積み下ろしを手伝いに行つた。こういうこと言うの、キャラじゃないから少し逃げるように出て行つたのは気の所為では無いのだろう。

残された円香と透は、顔を見合わせる。

「そんなこと言われても……ね？」

「うん。当たり前だよね、そんなこと」

二人とも、菅谷に対して縁を切りたい、なんて気持ちを抱いた事はない。言われるまでもないことだ。

さて、揃つて車を降りて、軽く伸びをした。磯の香りが鼻腔を刺激する。海に来た、という感覚が胸の奥底から湧いて出てきた。

「ん……最高」

「なんか、日差しが鬱陶しくない……!」

汗でベタベタしないのが最高だ。これから、ここで一泊……いや、二泊でも三泊でも

出来るらしい。

「いつ帰る？」

「一年後」

「アリかも」

そんな話をしていると、荷物の運び込みが終わったのか、二人とも戻って来た。

「じゃ、俺そろそろ行くから。楽しんでって」

「ありがとね、室寺さん」

「ありがとうございます」

それだけ挨拶して、車は発進した。

さて、残った透と円香は、菅谷の案内の元、改めて別荘に向かった。

「よし、おいで。案内するから」

「広いの？」

「見ての通り」

「……大きい」

自分達の家と同じくらいのものだ。別荘で。なんか、本当に住む世界が違う人だったんだな、と思ったが、まああの本人の中身がこれなのでやっぱり気の所為だ。

別荘の周りは森林に囲まれていて、すぐ出ると海。なんというか……海で気兼ね一つ

する事なく、エンジョイするに適しすぎている環境だ。

「ほら、早く」

いつの間にか玄関の方に移動していた菅谷に手招きされ、二人ともおそおそとそちらへ向かう。

中は少しアンティークな木製となっていた。ヒノキの香りがプウンと漂っている。

「荷物、一応リビングに置いてあるから。泊まりたい部屋に持って行って」

「え、一人一部屋？」

「うん。……あ、二人一緒の方が良い？」

透の質問に菅谷が応じると、真顔のまま透は答えた。

「二人ってどうか、三人一緒が良い」

「え……」

「ちよつと、浅倉」

「いやいや、プライベートの旅行でまで、律儀に校則守らなくて良いでしょ。去年の修学旅行だって、リカだけ部屋別で寂しそうだっただけ」

「そうじゃなくて……」

そういうの、菅谷は苦手だったはず……と、思いながらチラリと見ると、目を輝かせていた。

「良いの？」

「もちろん」

「じゃあ、朝までトランプとかやつちやう？」

「良いね」

「……はあ、まあ良いか」

「この様子なら、変な事はしないだろう。……いや、元々変な事するような子じゃない。考えてみれば、そういう行為に至らなければ同室だろうが問題はないのだ。」

「でも、三人で寝れる場所なんてあるわけ？」

「父ちゃんと母ちゃんのベッドならでかいよ。もう何年も使っていないけど、この前、掃除しに来た時に洗濯したから大丈夫」

「……そう」

「いや、別に気にするようなことではないかもしれないが……若かりし頃の夫婦が使っていた、と聞くと少し恥ずかしくなってくる。」

「どうする？ 海もう行く？ それとも、ここももう少し見る？」

「私、少し見ておきたい」

「あ、じゃあ私も」

との事で、とりあえず各々で家の中を見て回ることにした。

廊下を歩いた先にあるのはお風呂場だった。しかも、ジェットバスがついている上に余裕で4人くらい入れそうなほど広い。

「わっ、すごい……」

「雛菜と小糸ちゃんも一緒だったら、久しぶりに四人で入れたね」

「父ちゃんに頼めば連れて来てもらえると思うけど」

「は？ 女の子これ以上、増やす気？ 深夜アニメのポスターでも目指してるわけ？」

「二人とも受験生だからダメ」

「……何もそこまで言わなくても……なんで怒るの？」

「うるさい」

「黙ってて」

黙らされた。

引き返しながら戻ると、途中の扉を菅谷が開いた。中は和室になっていて、古風な火起こしがある。

「ここは母ちゃんの希望。父ちゃんが言うには大和撫子だから。車の爆走大好きだけど」

「会ってみたいわ。あんたのお母さん」

「何、花嫁修行？」

「リカ……!」

「俺何も言つてないけど……?」

とぼつちりをもらいながら、その部屋は唯一布団があることを教えておく。

その部屋を後にしつつ、ついでに一階のトイレの位置も伝えた。

そのトイレの向かい側にある部屋の扉を開けると、思わず二人とも目を丸くする。

ダーツ、ビリヤード、ルーレットなど、ワンランク上のお店の遊びが揃えられていた。

「わっ……すご。ゲーセン?」

「その表現は初めて聞いた」

「どれもやったことないんだけど」

「見た目より簡単じゃないけど、思ったより難しくないよ」

「なるほど……しっくりきた」

「浅倉、騙されないで。そいつ適当に言ってるだけ」

「てへっ」

「あ、可愛い。ね、樋口?」

「……」

「なんでそこでマドちゃんに振るの……ブチギレてるじゃん……」

「どうだろうね」

そんな話をしながら、部屋を出た。

さて、いよいよ二階である。階段を上がると、目に入ったのは四つの扉。階段から見て一番遠い扉を菅谷が指さして先に言う。

「あそこの扉はトイレだから。行きたい部屋はそこ以外から選んで」

「じゃあ、(ハハハ)」

透が選んだのは、そのトイレの隣の部屋……つまり、階段から一番遠い部屋。

扉を開けてみると寝室だった。ダブルなのに、ダブルより遥かに大きく見えるベッド。

「(ハハ)、両親の寝室」

「ふ、ふーん……」

「広いね……」

「うん。なんかよく分かんないんだけど、俺ってこの部屋が無かったら3月31日に生まれてなかったらしいよ。この前、父ちゃんに言われた」

よく分かんないんだけど、とバカは言うが、意味することは二人には分かった。つまり、ここでのソレで目の前の男は生まれた……かもしれないという事だろう。

一体全体、なんて話を目の前でするのか、と思った二人の行動は早かった。こうして考えると、むつつりスケベより純粋少年の方が余程、タチが悪い。

二人から繰り出された裏拳とフックが、バカの顔面とボディを抉り、壁に叩きつけた。「ちよつ、なんつ……バフオつ!!?」

殴つてから「ん？」と、二人とも気付く。つまり……この部屋が無かつたら、そもそも菅谷は自分達とは違う学年になっていたかもしれない。何せ、誕生日が3月31日という事を示しているのだから。

「……」

「……」

その事に少しだけゾツとしつつ、とりあえず気分を変えるために透は別の部屋を指さした。

「次、見に行こつか」

「うん」

馬鹿を捨ててもう一つの部屋に入る。そこも寝室だった。だが……部屋全体がジオラマになっている。樹海の。何処を見渡しても何かしらの虫が飛んでいたり、壁についている樹液のペイントに群がっていたり、場所によつては猿や熊、鳥もいた。ここでは絶対に寝たくない。

菅谷が言っていた寝れる三箇所は、ここかダブルか下の和室かなのだろう。

だが、まあ変な意味ではないが、感謝の念を込めて、やはりダブルの部屋を使ったかつ

た。

さて、いよいよ最後の部屋。つまり、リビングだろう。いよいよ階段に一番近いドアノブに手をかけた直後、起き上がってきたあほの子が声を掛けてくる。

「あ、もうリビング行く？ もう一つの寝室見た？」

「入ろっか。浅倉」

「うん」

「ねえ、聞いてる？ ジオラママの部屋……」

無視して部屋を開けると……思わず、目を見開いてしまった。中にはソファア、テレビ、机に椅子、台所とシンプルなものしかない……が、ベランダに出れる窓から見える風景は、広大な海が広がっていた。

「わっ……すごっ」

「綺麗……！」

シンプルだからこそ、海が放つ輝きが余計に美しく感じられた。キッチンから見え、調理中にも海が見えるように配置されている。

おかげで、自分達の荷物がソファアにあるのよりも、海が気になってベランダの方へ駆けてしまった。

「ちなみに、ベランダに階段あるから、そこから海に行けるよ」

「それ良いね。超便利じゃん」

「ここで夕食食べたら美味しそう」

「いやー、そうでもないよ。夜になると波が激しくなつて、割と喧しいから。夜は海も暗くて見えないし」

「へえ……そういうもの？」

「うん。食べるなら夕方……遅くとも18時前には食べないと」

「じゃあ……今晩はそうしよっか」

「夜中、お腹空いたらお菓子食べれば良いしね」

のんびりと予定も決めつつ、のんびりと見て回る。ベランダには机とパラソルが置いてあるし、外でも食べられそうだ。

……そういえば、食べる事を気にはいたが、食材はあるのだろうか？

「リカ、ご飯あるの？」

「あるよ。冷蔵庫見てみ」

言われて三人でなんかやたらとでかい冷蔵庫を開くと……炭酸だけでなく紅茶やコーヒーといった大量の飲み物や、卵にハム、ウインナー、チーズなどが入っている。

気になって冷凍庫を見てみると、大量の肉がある。パツと見ただけでも牛、豚、鳥が入っている上に、肉を包んでいるラップには「羊」やら「鹿」やら「猪」と書かれてい

た。

さらにその下を開けると、そこは野菜室。多種の野菜が大量に入っている。

「……す、すごい……」

「父ちゃん、気合い入れちゃったっぼいな」

「まあ、しばらく食事には困らないね」

そんな話をしながら、とりあえず冷蔵庫を閉めた。本当に二泊泊まるのも考えて良さそうな気がする。まあ、その辺は後々決めることにした。

さて、これからどうするか。サーブエリアでラーメンは食べたが、時間が早かった為、今も食べようと思えば食べられる。

「ご飯食べてから海行く?」

「良いね。軽く食べようか」

「何にする?」

「カレー」

「決定」

× そんなわけで、3人で料理を始めた。

× みんなで作った料理というものは、それはもう美味しいものだ。それは精神論などでは

なく、おそらく心理学的な物なのだろう。

実際、同じクッキーを一枚入りと10枚入りに分けて、何も知らない人に食べさせる実験があった。一枚入りの方が美味しいと答える人の方が多かつた事から、状況によって味が変化したように感じることもあるものだ。

だから、透も円香も今日のカレーの味は一生忘れないことだろう。

さて、そんな昼食を終えて歯磨きを済ませ、いよいよ海の時間だ。

「よし、行こっか。海」

透の案に、円香と菅谷は頷く。このままのんびりしててもそれはそれで楽しそうだが、やはり海に来た以上は泳ぎたいものだ。

「一応、ボートと浮き輪とビーチボールとバレーのネットと木製バットとスイカあるよ」
「全部やろうか」

「いや、木製のバットでスイカ割りって、衛生的にダメでしょ」

「大丈夫、新品だし袋から出してないから。それでもアレなら洗えば良いし」

「んー……まあ、それなら」

「というか、その品揃え……絶対、今日の為に買い揃えた奴だ。本当に気合が入っている。」

まあ、それをやるにしても、まずは着替えなくてはならない。

「……じゃ、リカ。着替えるから出て行って」

「はーい。……終わったら呼んでよ？」

「ん」

それだけ言って、菅谷は部屋から出て行った。

「……よし、着替えよつか」

「うん。でもその前に、日焼け止め忘れないようにね」

「あ、そっか」

「塗るから。脱いで」

「いやん、えっち」

「頭皮から塗って欲しいならそう言って」

「嘘、ごめん冗談」

話しながら、ソファアに座っている透は上半身の服を脱いでブラを外し、背中を隣の円香に向ける。

「ふふ……今から楽しみじゃない？」

「リカがどんな反応するか？」

「そう」

「……まあね」

何せ、ほぼ彼のために水着を新調したようなものだ。照れるなり恥じらうなりを見せてくれれば、何日もかけて選んだ甲斐がある。

「……すこし、からかつてみる？」

「例えば？」

「たとえば……日焼け止め塗ってもらおうとか」

「……それはパス。今塗ってるし」

「いや、ほんとに塗ってもらうんじゃないくて、言ってみるだけ」

「……」

最近、少し透は菅谷に対し、意図的であれ偶然であれ、そういう面で距離を詰めようとする人が多い気がする。

別に菅谷が照れようが恥じらおうが円香には関係ないどころか一緒にあっていじくりたい所だが、そういう事をあまり多くしていると必ずしっぺ返しが来る。

「やめた方が良いでしょ」

「えー、でもせつかく水着なんだしき」

「リカはそういうの苦手だし、からかうならもう少し別の方向にしたら？」

「言うだけなら大丈夫でしょ。……ていうか、普段から肩組んだりおんぶしてもらったり、割と距離近いし」

「……」

まあ、そう言われればその通りなのだが……と、思いながら手に日焼け止めクリームを馴染ませている時だった。

「やつべ、水着忘……あつ」

「えっ」

「……」

シンプルな部屋にはもう一つ、弊害があった。入り口から部屋のどこもかしこも丸見えな所だ。ましてや、ベランダに出る窓もガラスだし、背中を向けても無駄だ。……まあ、今回は逆に窓の方を向くと開放感がすごいので、むしろ扉の方を向いていたわけだが。

つまり、透のマウスパッドは正面から菅谷の方を向いている。

それにより、透も流石に顔が真っ赤に染まる。

「ウツ……!」

「ーっ……!」

本人である透より先に円香が胸を両手で隠す。そこでようやく、菅谷も意識が戻った。

「っ、あ、え……っ、やばっ……!」

テンパっているのか、言語能力が終わっていた。

正直、透はこの時、恥じらいもあつたが「まあ、良いか」とも思っていた。先にかおうとしていたのは自分だし、それに何より相手が菅谷ならわざわざ怒らなくてもノックをしなかつたことは水に流そうと思っていた。

「あゝ……リカ、落ち着……」

「つ、づ、ごめんなさつ……うわっ?」

「あつ」

慌てた菅谷は、盛大に足をもたらさせ、後方に「おととつとつ……」とバランスを崩す。そして、その真後ろにあるのは、階段。

「ちよつ、危なつ……!」

「ぎやああああああ……!」

盛大な転がる音に、円香も透もキュツと目を瞑つた。とりあえず具合を見にいかなければならぬ為、服を着ている円香が先に慌てて階段を降りる。

「……大丈夫?」

「……平気」

言いながら菅谷は立ち上がろうとする。階段の上から下まで一気に落ちたのに、スクッと立ち上がって首をコキコキと鳴らす。

「……うん。身体は平気……」

「あんな普段、身体に溶かした鉄でも塗ってるの？」

普通、無事じゃ済まない。でもまあ、バカンスが始まる前に大事にならなくてよかった……と、円香はほっと胸を撫で下ろす。

「二応、手当てするから。救急箱くらいあるんでしょ？」

「大丈夫だよ別に」

「良いから」

そう言いながら、円香は菅谷の腕を引き上げる。このまま何かあっても困る。

そんな時だった。

「リカ、平気……？」

「！」

透の声が響いてきて、菅谷の表情が急変したのを円香は見逃さなかった。

ひよこつと階段の上から透が顔を出した直後、菅谷は円香の背中に隠れてしまった。

「リカ……どしたの？」

「……リカ？」

「……」

円香が顔色を窺うように後ろを見ると、菅谷は顔を真っ赤にしたまま顔を上げない。

「……いい」

「え？」

しかし、何かボソボソと言っているのは聞こえてきた。聞き返すと、またボソボソと囁くように言った。

「……………ない」

「聞こえない」

「……………さっきの、思い出しちゃって……………顔、見れない……………」

「……………」

まるで小学生のような文章に、円香はただただ呆れると共に、疲れる予感をピンピンに感じ取っていた。

恥での逃げは役立たず。

男女で海に来て、まず重要なのが水着のお披露目である。大抵、男はそうでもないが女の子の水着は双方にとって特別なもの。

その為、円香も透も気合を入れて選び抜いた。ただ好きなものにするのではなく、ちゃんと自分に似合うものを選択して。

『と、いうわけで、雛菜。私と樋口の水着、一緒に選んで』

『え、円香先輩も？』

『……』

小糸だけ来れなくて雛菜と3人で勉強した日、そんなお願いをしてみた。雛菜の成績ならたまにはこつちに付き合ってもらっても問題ないし、雛菜ならそういうの選ぶのが得意だ。

『別に良いけど……なんで今年に限って？』

『ん？ ん……まあ、見せたい人がいるから、かな』

『……ふーん、円香先輩も？』

『……まあ』

その素直な返事に、雛菜は目を丸くしていた。この人、本当にあの円香なのだろうか？ それとも……素直にならざるを得ないほど、菅谷のことが好きなのだろうか？

『あは、分かった』

『ありがと、助かる』

なんて一幕があつて、ようやく選んだ水着に身を包んだ。日焼け止めも塗り終え、既に外で待機している。

まだ菅谷の姿は見えない。着替えに手間取っているとは思えないので、おそらく外で遊ぶ物に空気を入れているのだろう。

……手伝つてあげれば良かっただろうか？

「私、ちよつと見てくる」

「あ、じゃあ私も……」

「浅倉は待つてて」

「え、なんで？」

「……さっきの件、あつたでしょ。向こうかなり気にしてたし、一応様子見も兼ねてるから」

「あー……うん。分かった」

一応、意見を飲んでくれた。さて、改めて円香は近くにあるUVカットのガウンを羽

織って、ビーチから離れる。

確か、ああいった遊び道具は一階の遊戯場にあると言っていた。おそらく、そこで膨らませていることだろう。

玄関から入り、一階のその部屋の扉を開けると、中で菅谷は水着の上にパーカーを羽織った姿でダーツをしていた。

「……」

文句が出るより先に、見惚れてしまった。その眼差しは真剣そのもので、意外とこういうワンランク上の遊びがとても似合ってしまった。

それは、容姿もさることながら、まるで経験があるかのような佇まい。部屋の中を見ると、浮き輪とビーチボールの膨らましは終わっていたので、休憩がてらにダーツをしていると思うことにして、せめて三投くらい待つてやる事にした。

少し緊張気味に唾を飲み込み、一投目を待つ。

真剣な表情をする菅谷の手が、狙いを定めるように微妙に揺れ始めた時だ。何故か、菅谷の頬が赤らんだのを、円香は見逃さなかった。

直後、放たれた一投は明後日の方向、ダーツの筐体の角にあたり、天井に向かって跳ね返り、浮き輪に直撃し、パンツと破裂させた。

「……やめときゃ良かった……」

「全くでしょ」

声を掛けると、顔を向けた菅谷は驚いたように目を丸くする。

「わっ、やっべ……」

「何遊んでるの」

「や、これは……ちよつと、呼吸が疲れちゃって」

「膨らますなら砂浜に持つてきて。私も手伝うから」

「う、うん。……今の、見た？」

「見掛け倒しも良いとこだったとか思っていないから」

「違うから。俺、普段ならダブルブルとか余裕で……」

「はいはい」

適当に返事を一蹴しながら、円香はため息を漏らしつつ、菅谷の方へ歩き、とりあえず破裂した浮き輪の破片を拾う。

「これ、捨てちゃって良いのね？」

「あ、うん。ね、マドちゃん」

「……何？」

改まったような声の掛け方……言われることは予知出来る。なんなら、改められる前に分かっていた。だからこそ、思わずボートを膨らませるより破裂した浮き輪の片づけ

に意識が向ってしまったわけだが。

その自分の褒められ慣れてなくて他のものに逃げ込んだ感じが非常に情けなくて嫌だった。

そんな自己嫌悪を吹き飛ばすように、菅谷はおそらく笑みを浮かべたまま告げた。

「その水着、とつても似合ってるよ」

「……………んっ」

そんなストレートでなんの捻りもない感想が、とつともなく恥ずかしくて、嬉しさを噛み殺すのに必死になりながら、10秒で拾えるゴミを30秒かけて拾った。

少しプルプルとかなり小刻みに身悶えさせつつも、何とか気を落ち着ける。小さく悟られないように深呼吸をし、胸の鼓動を抑える。

そして、照れを誤魔化すように聞いた。

「…………それより、あんたちゃんと日焼け止め塗った？」

「え？ 塗ったよ？」

「ん。ならさっさとボート膨らませて」

言いながら、まだ赤くなってる顔が収まらないので、顔を見せないまま部屋の中のゴミ箱に向かった。

その中に捨て、改めて向き直る。こうなった以上、もう真っ赤になっている顔を菅谷

の方へ向けるしかない。

だが、まあさつきよりは少し落ち着いているので、少しくらいの照れは自然だと開き直り、顔を向ける。すると、視界に入ったのは、同じように真っ赤に染めた菅谷の顔だった。

「……なんであんたの方が照れてるの」

「っ……………だ、だって……………肌の方が、布より多いから……………」

「……………それはあんたも一緒でしょ」

改めて円香にも菅谷の水着姿が見えてしまう。パークの下から見える海パンは黒い布地の上に南国の葉を白で描いたシンプルなもの。男の水着に感想を言っただけでも男のなにか分からないが、普通に似合っていた。

だが、それ以上に顔を真っ赤にしている菅谷が気になってしまう。

「……………良いから、早く準備して。浅倉が外で待つてるから」

「っ……………う、うん……………」

「ビーチバレーのネットどこ？」

「あ、重いからそっち俺やるよ。マドちゃん、膨らませてて」

「ありがとう」

なんて言いながら、各々に別れて準備を始めた。

一通り揃ったので、それらを持って家を出る。ビーチの方へ歩いて行くと、透が退屈そうに準備体操しているのが見えた。

「ごめん。お待たせ」

「あ、遅い……リカ？ 何してんの？」

透がまず気がついて顔を向けて来た。円香も気になつて隣を見ると、いつの間にか隣に菅谷はいなくなっていた。代わりに、自分の両肩に手を置いて背中に隠れ込んでしまっている。両手に持っていた荷物は、足元に落として散乱していた。

「……リカ？」

「…………ない」

「え？」

「顔……見れない……」

一瞬、自分を見た時とのリアクションの差に少しだけショックを受けた。だが、すぐに事情を続きから話してもらえて納得した。

「………さっきの……その、胸が……頭に浮かんじゃって……」

「……」

なるほど、と円香は変に納得する。まあ、三人しかいない空間で、あれだけガッツリ

見てしまったら、意識してもおかしくないのかもしれない。

それを察しているのかいないのか分からないが、とにかく感想が欲しかったのだろう。透が、ひよこつとその菅谷を追うように、自分の前から顔を出した。

「ね、リカ。水着、どう？」

「っ……」

「？ リカ？」

一步、円香を中心に逃げるよう隠れてしまう菅谷を、透はさらに後から追う。

が、また一步、隠れてしまう。何でも良いが、自分を挟まないで欲しい。

2〜3周ほどぐるぐる回った後、焦れつたくなつた透は、少しムスつとしてとうとう手を伸ばしてしまった。

菅谷の手首をギュツと掴むと、自身の方に引き寄せる透。

「ね、リカ。どう？」

「っ！」

「ちよつ、浅倉……」

今更になって止めようとしたが、遅かった。菅谷と透はガツツリ目が合ってしまった。しかも、ほぼ半裸の水着姿で。

さつきまでの光景をより鮮明に思い出してしまったのだろう。オーバーヒートした

菅谷は、手を強引に引き剥がす。

「つ、ご、ごめん忘れ物した!」

そのまま別荘の方へ逃げ込んでしまった。その背中をぼんやり眺めながら、ポツンと取り残された透は数回、瞬きする。

「……そんなに刺激強い水着かな?」

「強かったのは水着じゃなくてきつスキの光景でしょ」

「……え、まだ気にしてたの?」

「普通、気にするから……」

過去最高クラスに面倒な事になりそう……と、円香は内心で強く思いつつ、とりあえず今の菅谷の心情を説明した。

「何×とか円香の口利きで、菅谷は戻って来た。とりあえず慣れるまでの間は透にパーカーを着てもらおう事にする。……つまり、これだけ暑いのに海に浸かれなかった。」

そのため始まったのは、まさかの初手からスイカ割りである。冷蔵庫に冷やしてあったウォーターメロンと、木製バットを持って砂浜に置く。

「誰割る?」

「私」

「俺。……あ、とおるん、どうぞ」

ずっと円香の背中に隠れている菅谷に遠慮してもらったので、透はバットを握り、円香に目隠しをしてもらった。

「よし、おっけー」

「わっ、ホント見えん」

「ちゃんと誘導するから、聞いててね」

「いや、去年私恋占いの石で極めてるから」

「木に直進してたでしょ」

そうツツコミをくれたのは菅谷だった。目を隠していて顔が見えないからか、それもパーカーを着ているからか、あるいは両方か……なんにしても、普通に話せた事が少し嬉しかった透は、とりあえずバットを構える。

「よし、めっちゃ割ろう。粉々にするから」

「食べる分は残してよ」

「あとあんま散らさないように」

「任せて」

なんて話しながら、いざ開始。フラフラと歩きながら、スイカの方へ向かう。

「もっと右、右」

「いやむしろ左」

「後ろ」

「上」

「昨日」

などと早くも好き放題言い始めていた。当然、透も当てにするのをやめて、直感を信じる。

ふと、目隠しされている中で目を開けると、思わず驚いた。この布薄くて、割と前が見える。

「……」

そんな中、ふと良い案が浮かぶ。今、このままなら、菅谷の方に近寄れるのではないか？ と。

そう思うと、善は急げだ。フラフラしながら方向を変え、菅谷の方を見る。

「……え、なんかこっち見てない？」

「……浅倉、後ろ後ろ」

「え、後ろ？」

言われて、180度の旋回を行なった。二回言われたので二回。

「ねえ……なんか、やっぱこっちきてない？ あいつの方向感覚ヤバない？」

「浅倉、ステイ」

「聞こえない。指示は？」

「だからステイだつてば」

「ていうか、アレ見えてるでしょ」

「樋口、危ないよー」

「狙いは俺か!?」

「ちよつ、浅倉……何考えて……」

……確かに、近付けてもどうしたら良いんだろう、と透はふと思つてしまった。今の状態では、水着も見られていないし「似合つてる」とは言われないうらさう。

少しどうしたものか悩んだ時だ。砂浜から顔を出していた貝殻に足をつまずかせた。

「あつ」

ドシャツと前方に転がる透。

「危なつ!?」

慌ててバットから避けると同時に、倒れる透の身体を支えに行つた。砂浜なら転んでも平気だとは思ふが、それでも抱えてくれる気持ちは嬉しかった。

なんにしても、調子に乗り過ぎた自分が悪い。謝ろうと思ふ、目隠しをとりながら言つた。

「ごめんごめん、大丈夫？ リカ……」

「っ……………」

しかし、忘れていた。今の菅谷には、自分の顔でさえ特攻が入る事を。その上、この距離である。

顔を真っ赤にした菅谷は、目をグルグルと回し始める。

「……………あつ、大丈夫？」

「きゆう……………」

「……………あーあ」

失神してしまった。今更だが、胸を見られた側じゃなくて、何故見た側が顔を赤くするの……と、少し思ってしまった。

困ったように顔をあげると、円香が呆れた様子で透を睨んでいた。

「……………何してんの？」

「やっちゃった」

「……………バカ」

仕方ないので、しばらくシートの上で寝かせてあげることにした。とりあえず、スイカはしまっておく事にした。

××

ほんの10分ほどで目が覚め、再び遊びを再開……したが、円香は気まづかった。

とりあえず、次はビーチバレー。ネットは張らずに、準備運動がてら三人でトスを上げ合うことにした……のだが。

「……なんで縦並び?」

円香を間に挟み、何故か一直線に並んでいた。リレーの練習でしか、この並びは見られないだろうに。

「あんたら、これからやるのなんだか分かってる?」

「分かってるよ」

「じゃあ、三角形になって」

との事で、透が移動を開始する。すると、菅谷はその対角線になる方へ移動した。

「……」

「……」

「……」

仕方ないので、逆回転を試みる。しかし、それでも逆側に移動するだけだ。

……まあ、ただでさえ特攻入ったのに、あんな距離に近づいて身体に触れ合うようなことがあれば、と思うと気持ちは分かる。

「……このままやろう」

仕方ないので、円香は真ん中から菅谷にトスを上げた。それに伴い、菅谷は対角線側にいる透に飛ばす。その透は円香に返す。

「……なんでこの並びで成立するの」

そう言いつつ、円香はまた菅谷に渡し、菅谷から透へ行き、透から円香に戻る。

そんなループを繰り返す中、透はふと思った。今ならボールに視線が集中しているし、近寄れる。

近寄ったら、言えば良い。お願いだから、あまり意識しないで、と。難しいかもしれないが、いい加減海に入りたいものだ。

何度かラリーを続けつつ、少しずつ距離を縮めていく。まるで分針と秒針である。

さて、そのまま二人の距離は少しずつ縮まって行く……と、思いきや、菅谷も少しずつ離れていた。よくよく考えれば、菅谷から透にボールを射出するわけだし、気付いて当たり前だ。

「……」

「……」

「……」

なんでそれだけ動きながらトスしてミスらないの、という円香の感想は置いて、少しずつ透に焦りが出る。このままでは、差が縮まらない。

それを思ったのは、透も同じだ。なんだか「そこまでして自分から逃げたいのか」と思い、ムスツとする。

こうなったら、もう強引な手に出る他ない。円香に向かって、大きく一発あげる。それにより、菅谷と円香の視線はそのボールに向く。

その隙を突いて、スタートダッシュを切った。円香を避けて、菅谷の方へ走る。

「ーっ!!? な、何……!!?」

「逃がさない」

ヤバっ、と思った菅谷も逃げ出す。が、スタートダッシュが命運を分けた。慌てて後ろを振り向く菅谷の背中を、透は思いつきり捉え、後ろから抱きつくように押し倒した。

それを眺めた円香は、一瞬だけ心配になり、駆け寄ろうとした。……が、ふと透の背中が何かを語ろうとしているのに気付き、足を止める。「手出し無用」と言われた気がした。

「っ、と、とおるんっ……な、何!!? ていうか、胸が……!」

「待ってよ。いい加減」

「……っ、い、いや……でも……」

「……逃げられる人の、気持ちになつてよ」

「……」

言われて、菅谷は少し黙る。透にも、今の自分の気持ちがよく分からなかった。傷付いているのか、緊張しているのか、なんか知らんけど嬉しいのか分からないが、まず間違いないある気持ちは「このままは嫌だ」だった。

せっかく泊まりで遊びに来た、という点を除いても、一瞬でも避けられるような事態が続くのはゴメンだった。

「…………ごめん」

「許した」

「…………いや、逃げてる方だけじゃなくて」

「おっぱい見た件も許した」

「…………直球やめて」

「…………とにかく、全部許すから。逃げないで、普通に遊んで」

「…………正直、まだ少し恥ずかしいんだけど。ダーツのマト見ても思い出すぐらいだし」

「…………どうしたら、解消される?」

「…………」

如何にも二人らしいやりとりである。ただ、思った事を言い合うだけ。つまり、本音のぶつけ合い。考える前に口になっている。

しかし、透の問いを即答するのは、いくら菅谷でも難しかった。どうしたら解消され

るのか、そんなの自分が聞きたいくらいだ。

それを察してか、透も返答を待ちながら、頭の中で提案すべきことを考える。

しかし、よくよく考えたら難しい事だ。逃げられた理由として一番大きいのは、やはり照れだ。罪悪感もあるのだろうが、ウブな菅谷の弱点を、女性の生乳というのはあまりに的確にエグリ過ぎた。

だから、透に思いつく手は一つだけだった。

……もう一度、同じ衝撃を与えること。

いや、そんなビツチみたいな事はしたくないが。流石に言葉に出る前に堪えた。……だが、万が一、菅谷の方からそれを頼まれた暁には……。

なんて思っていると、菅谷は真剣な表情で顎に手を当てたまま答えた。

「……生で野生のヘラクレスオオカブトを見るとか……」

「……は？」

今度は、純度100%でイラツとした。

「……コーカサスオオカブトとか、タランドウスツヤクワガタとか……あ、カブトムシやクワガタじゃなくても、タガメとかでも良いかも。流星にホツキョクグマを見たいとか言い出すほど命知らずじゃないけど……」

「……本気？」

「うん」

「それはつまり……私の胸は虫以下だと？」

「え？」

もしかして、ブチギレていらっしやる？　と言わんばかりの菅谷の声音が鼻につく。この男、本当にこういう所だ。

ちようど良い所に、自分は今、うつ伏せの菅谷を後ろから組み伏せている。……つまり、制裁を加えるにはあまりに完璧なシチュエーションというわけだ。

「い、いやそんな事ないよ！　とおるんの胸の方が上！」

やばいオーラを感じ取ったからか、大慌てで言うが、そんなものは逆効果。透は苛立ちを隠すこともせず聞いた。

「……どんなところが？」

「えっ、ど、どんなんて……」

「5、4、3……」

「カウントダウン!?　え、えーつと……」

「2、1……」

「と、とおるんの胸だったとこ！」

「……」

それを聞くと、透の中の凍りついた殺意が一気に消え失せる。つまり、他の女の人の胸とはまた違う、ということ伝えられたわけだ。

……まあ、そういう、ことなら、許してやらん、わけでも、無い感じ。

「……今日一日、私に絶対服従」

「え？」

「それで、許したげる」

「……まあ良いけど……」

「じゃ、まず最初の命令」

そう言うのと、透はパーカーのチャックを下ろす。それにより、はだけた隙間から水着越しの胸が溢れるようにはみ出る。

直後、菅谷はすぐに目を逸らした……が、それを透は許さない。パーカーを脱ぎ捨てると、両手で菅谷の顔を掴み、キスでもするかのようにな自分の方へ向けた。

「っ、と、とおるん……!」

「褒めて」

「え、胸を？」

「え？ 胸でも良いけど？」

「……り、立派だね……とか？」

「ありがと。さ、そろそろ海に入ろう。もう体焼ける」

なんかもう胸でも良いや、と思った透はそろそろ円香も混ぜないと待たせすぎると理解した。多分、自分でなんとかしようとしているのを察して、何も介入して来なかったのだろう。

そのまま走って円香の元へ向かおうとした時だ。

「あ、とおるん。待って」

「? 何?」

「水着、とつても綺麗だよ」

「っ……」

褒めて、なんて命令するまでもなく褒めてくれた。

なるほど、と透は理解する。円香がよく喰らい、そのあと愚痴る「不意打ち」とはまさにこの事なのだろう。これは確かに腹が立つほど嬉しい。

「……ありがと。リカも海パン、似合ってるよ」

「男の海パンって、似合わない人の方が少くない?」

「まあね」

××× そんな話をしながら、円香と合流した。

「よし、というわけで、今から海の遊びをやり直します」

さつきまでオドオドと挙動不審にしていた菅谷の姿など微塵もなく、体育座りをして
いる二人に言い放つ。

「いや、その前に海、入りたいんだけど」

「ね、いい加減暑しいし」

「……はいはい。海に入りますよー」

あらかさまにテンションが下がった菅谷だが、素直に従う。円香はともかく、透の言
うことには従わないといけないから。

軽く準備運動してから、サンダルを脱いで波打ち際に爪先を漬ける。普段なら冷たく
感じていたであろうが、ずっと水に浸かっていかなかったただけあって、むしろ心地よかつ
……。

「浅倉ポセイドン」

「樋口リヴァイアサン」

「おぶあつ!!?」

後ろから盛大に二人の女子から背中を押され、水の中にダイブした。

メチャクチャ溺れたかのようにしばらくゴボゴボと泡が立ち、鼻や口に水が入る。

ようやくと水面から顔を出すと、そこで立ってこちらを見ているのは、ニヤついてい

る幼馴染二人組がこっちを見ている。

「……なんの真似？」

「ごめん、手が滑った」

「足が滑った」

「技名も聞こえたんだけど」

「口が滑った」

「それ別の意味だから！」

やり返すように水を思いっきりぶちまけた。それによってスイッチが入った二人は、指をコキコキと鳴らしながら迫ってくる。

「ふふっ、やったなー」

「悪いけど、今日は二対一だから」

「えっ、な、なんで……？」

「避けられた」

「待たされた」

「……」

確かに二対一になるだけの事はあった。

「上等だよ。かかって来なさい」

「言ったな？」

「よし、袋叩きだ」

そのまま二人との水かけつこが盛大に始まった。もちろん、ボロカスにされた。

それはまるで暗殺者の如く。

さて、夕方。早めに上がった三人は、まずシャワーを済ませる。や、三人一緒にじやなくて。

で、次はいよいよ晩飯である。自分達がシャワーを浴びている間に、菅谷がその準備をしてくれたらしい……と、ソワソワしながらリビングに来ると、目を剥いた。ベランダに出されたバーベキュー用の机、そして奥に見えるのは、夕焼けを見事に反射した海面だった。

「わお……ビツクリ」

「綺麗……というか、もはや優雅」

「ね」

絶対、夕食用にこの風景が見れる向きにベランダと窓を作った。

そのベランダにせっせと水着姿のまま食材を運んでいる菅谷が、窓を開けて部屋の中に入ってくる。

「あ……二人とももう上がったの？」

「お疲れ。代わろうか？」

円香が声をかけるが、菅谷は控えめに首を横に振るう。

「大丈夫。二人はお客さんだし、少し待ってて。俺が風呂入ってる間に先始めてて良いから」

「いや、それはダメ」

「え、だ、ダメ？」

意外に口を挟んだのは透だった。普段なら「よろしく」とだけ言つて席に座つていそうなのに。

「みんなで遊びに来てるんだから、みんなで用意しようよ」

「マドちゃん」

「分かつてる。浅倉、おでこ出して」

「いや、熱ないから」

自分の額に手を当てながら手を伸ばしてくる円香の手を避けて、透はそつぽを向きながら「あー……」と声を漏らしつつ、とりあえず面倒になったのか、言った。

「命令。リカ、先にお風呂入ってきて」

さつき「なんでも言うこと聞く」という命令を使つてのセリフだった。そんな風に言われてしまえば、菅谷も従うしかない。

「わ、分かつたよ……」

それだけ言うと菅谷はお風呂に向かう。その背中を眺めながら、円香は透に聞いた。

「で、どういう風の吹き回し?」

「ん? や、言つたじゃん」

「……」

おそらく、本音なのだろう。少なくとも円香にはそう見えた。しかし、やはり透のキャラじゃない気がして仕方ない。

とはいえ、まあ心がけ自体は悪いことではないし、円香としても菅谷だけに負担をかけさせるのは嫌なので賛成ではあるのだが。

さて、そのまま二人で準備する。とりあえず、今出ている食材や食器から逆算して、必要になりそうなものを台所から持ってきて並べていった。

ほとんど菅谷がやってくれたから、あとは彼が来るまで待つのみである。少し暇になったので、円香からさつき気になった話を振ってみた。

「……どうやって仲直りしたわけ?」

「え?」

「リカと。押し倒してから」

「普通に話しただけ」

「……ふーん」

そう言いつつも、円香の目には透の中で何かが変わったようにしか見えなかった。まるで、今まで自覚していなかったものを自覚したような、そんな感じ。

海で遊んでいる時も、水かけつこの他にスイカ割りやビーチバレー以外に、潜水して魚の観察とかヤドカリの観察とか、菅谷しか楽しめそうにない遊びも透はずっと付き合っていた。

それが悪いとかでは無いが、何か変わった気がする。それこそ、透が変わったというより、菅谷に対する想いが変わったと言うべきか……。

「……浅倉、もしかして……」

「ん？」

「ごめんっ、お待たせ」

直後、扉から菅谷が入ってきた。身体をまだかなり濡らしたままの状態。髪の毛も乾かしていないし、二の腕や脹脛から水滴が流れ落ちていた。

それにより、呆れ気味の円香が諭す。

「ちよっ、あんたまだ濡れてるじゃん」

「大丈夫、それより食べよう。夕焼け終わっちゃおう」

「いや、風邪引くから」

「こう見えて頑丈だから。風邪とか効かないから」

「リカ」

が、透が口を挟んだ。

「良いから、樋口に乾かしてもらってきて」

「っ……は、はい……」

「……？」

まるで命令され、従うような二人の関係が益々、気になった。……というか、なんで自分が乾かしてやらないといけないのか。

「そんなわけで、樋口。よろしく」

「なんで私？」

「リカの世話を焼くのは樋口の役割でしょ」

「いや、そんな役割、請け負った覚えないんだけど？」

「じゃあやらないの？ こんな機会、滅多にないよ」

……それは確かにその通りだ。普段、菅谷と一つ屋根の下に泊まることなんかない。

「……リカ、こっちきて座って」

「え、や、やるの？」

「文句あるわけ？」

「……な、ない……」

仕方なく、円香は菅谷の腕を引いてコンセントが届くソファに座った。まずはタオルで腕や足を拭き、ついでに背中も拭いてあげる。半日、ほぼ水着で過ごしていたから、目の前の菅谷の服をめくってもあまり抵抗はなかった。

しかし、それは円香だけのようだ。

「……あの、マドちゃん……背中、少し恥ずかしいんだけど……」

「さつきまで散々、半裸ではしゃいで何言ってるの。はい、次頭ね」

ぶおおおおと頭に温風を浴びせる。髪をぐしゃぐしゃといじってあげながら、ようやく乾かし終えた。

「終わり」

「……あ、ありがとう……」

「……んっ」

そんなわけで、早速食事である。透が待っている席に戻り、改めて夕食にすることにした。

「あ、来た」

「ごめんね、なんか」

「いやいや、風邪ひかれる方が怒るから」

そんな話をしながら、火を起こした鉄板の上に肉を置く透と、野菜を置く菅谷。その

横で、円香が三人分の飲み物と白米と焼きタレを用意する。

「今、なんのお肉？」

「分からん」

「いや、とおるん見ながら焼いてよ……鶏肉は火、通りにくいし」

「いや、見ればわかるでしょ。樋口なら」

「私任せ？」

「これが猪で、これが鹿だね」

「リカ、分かるの？」

「え、分かるでしょ」

「一応、生物の範囲内だからね……」

「ああ」

なんて話をしながら、まずは野菜が焼けた。適当に切ったキャベツを摘むと、菅谷は円香のお皿に乗せる。

「はい、マドちゃん。さっきのお礼」

「それなら肉よこしなさいよ……」

そう言いつつ、円香はキャベツを口に運ぶ。ちよつととつてもらえたのが嬉しかった。

「どう?」

「ん……なんか、シャキシャキする。美味し」

「リカー、私も」

「はいはい。あと玉ねぎとピーマンもいけるよ」

「んー……じゃあ、ピーマン」

「ほい」

「さんきゅ」

二切れほど箸で摘み、透のお皿に乗せる。が、それに透は箸をつけず、代わりに菅谷の方に口を開けて待機した。

「あー」

「え?」

「食べさせて」

「命令?」

「うん」

そのやりとりが、なんだかやたらと円香の視界に入っつて。どうせ仲直りのためにした約束の一部だと察してはいるが、一応聞いてみた。

「あんたら何してんの? さっきから命令とかなんとか」

「とおるん、あーん」

「あー………ん、リカは今日一日、私の言う事なんでも聞くの」

「はあ？」

概ね予想通りの内容だったが、それでも少し驚いた。そんな安直な話になっていたとは。………それと同時に、普通に「あーん」を済ませている二人のしつくり来てる感じも、少し羨ま………ムカついたり。

「じゃ、今度はリカに………あーん」

「あーん………んっ、玉ねぎ甘っ」

「………」

「樋口もやる？」

「やらない」

意地を張った。そんな言い方されたらやりたくなくなる。いや、どんな言い方をされてもやりたくはなくなっていただろう。

………というか、透はやりたい放題過ぎな気がしないでもない、と円香は少し控えめに引いてみたり。仲良さそうにしているし、菅谷も楽しそうにしているから良いが、なんだか少しモヤモヤする。

そんな円香の気を知ってか知らずか、菅谷はのうのうと二人に声をかける。

「あーん……あ、そうだ。お風呂どうだった？」

「あー、んっ。……あ、ジエツトバス？ 良かったよ」

「うん。意外と気持ち良かった」

「すごかったよね。腰の辺りが、こう……ゴーって」

「浅倉、全然かわってくれなかったから」

「樋口だって一回、代わってから、お尻から根っこでも生えてたみたいだったじゃん」

「……いやらしい言い方しないで」

今まで行った大衆浴場に、ジエツトバスがなかったわけではないが、やはりオーダーメイドだけあって質が違った。

「結局、二人とも使えたの？」

「最後には並んで入ったよね」

「え、あの狭い中に？」

「私も樋口も細いから」

「……かなりギリだったけどね」

おかげでバランス良く後ろから当たる、なんてことはなかったが、まあお互いに納得した事だ。……あんな近く裸でこの幼馴染といたのは久しぶりだ。それこそ、小学生の時、一緒にお風呂入って以来だろう。

「久しぶりに、樋口とあそこまで近くにいたよね。裸で」

「……一々、言わなくて良い」

「良いなあ……」

しれつと漏れた菅谷の呟きに、透と円香の視線が集中する。

「……すげべ」

「ヘンタイ」

「え？ ……あ、いや、そういう意味じゃなくて」

じゃあどう言う意味で言ったのか。誰がどう聞いたって「俺もお風呂で肌を寄せ合いたい」と言っているようにしか聞こえない。

そんな風に思っていたのが顔に出ていたのか、菅谷はすぐに弁解する。

「や、だって俺も女の子だったら、変な事意識しなくても二人と一緒に、もっと色んなこと出来たんだろうなって」

「……ああ、そういう意味」

確かに、それはそうだろう。お風呂だけでなく、水着選びや中学であった球技大会……いや、それ以前に一人暮らししているアパートでの泊まりも可能だろう。

そう言う意味だと、厄介なものだ。異性というものは。どんなに仲が良い友達でも、同性の友達と同じようにはいられない。

「でも……女の子のリカ、かあ……」

隣の透が顎に手を当てて、口に焼けた野菜を運び、菅谷を眺めながら考え込む。

「……なんか、胸は小さそうだよね。樋口より」

「えっ」

「不要な比較はしなくて良いから」

「あと、背も低そう。小糸ちゃんと樋口の間くらい」

なんで私をいちいち引き合いに出すの、と思ったが、的確なので何も言えない。三人の中では一番、背が高い菅谷だが、男子の中では平均並みだろう。

円香も少し考えてから、ふと思ったことを口にする。

「でも、運動神経は良さそうじゃない？ 球技は下手だけど、走るだけとかボール投げるだけとか、そう言うのは出来そう」

「あー分かる。あと虫とか普通に触れるあたり、無神経そうだよね」

「ごめん。俺褒められてるの？」

「中間」

「ええ……っていうか、聞いている感じだとそれ、女の子感くない？」

「まあ元が男だからね」

すると、透が真顔のまま少し菅谷の顔を眺める。あの顔、真顔に見えて実は口クでも

ない事を考えている事を円香は知っている。

何一つ察していない菅谷が、菜箸で鉄板の上をいじりながら二人に声をかけてくる。

「あつ、この肉いけるよ」

「じゃあ、私もらう」

「はいはい。お皿出して」

言われた通り、透はお皿を持つ。すると、何を思ったか立ち上がった。円香も菅谷も、キョトンと首を傾げる。と同時に、少しだけ嫌な予感。

スタスタと歩いた透は、菅谷の膝の上に腰を下ろした。

「……ちよつと」

「と、とおるん……?」

「はい。ちようだい」

円香の怪訝な声も、菅谷の狼狽えも無視。お皿を差し出しながら、笑みを浮かべる。

「一緒にお風呂は無理だけど、こういうのは平気でしょ? 私達なら」

「……あー、うん」

少し恥ずかしそうにしているが、菅谷も微笑みながら受け入れている。確かに、もう今までおんぶだとか色々してきていたから、今更この程度の事は慣れてしまっているかもしれないが……少し、円香の胸の奥は痛んだ。

「ていうか、食べさせて」

「ええ……なんでもた」

「命令」

「……あーん」

「あー……ちよつ、そこ鼻」

「この辺？」

「そこサノス」

なんてやりながら、食べさせることにさえ悪戦苦闘している二人……だが、ふと気付く。透の表情を。

アレは、もう完全に好きな男子と近い距離にいられて、幸福を感じている女子のそれだ。

本人に自覚も有りそうなものだ。好きだとわかっていて、アプローチしているようにも見える。

その透が、口の周りをベタベタしながら肉をようやくやく一枚、食べ終える。

「んー、美味」

「もー、口の周りベタベタだよ」

「拭いて」

「甘えん坊か」

「命令」

「はいはい」

言いながら、ティッシュで口元を拭おうと透の顔に向ける菅谷。

「だからそこ鼻」

「()?」

「そこはだから………ていうかわざとでしょ」

「バレたか」

「はい、命令違反。罰として貧乏ゆすりの刑です」

「ちよつ、揺らさないでつて。鼻に手が……」

「あだつ!」

……案の定、と言うように鼻の頭に菅谷の手が直撃する。そんなやり取りを、円香はぼんやり眺める。

甘えん坊か、と言うツツコミがあつたように、本当に菅谷に甘えていた。まあ、うまく甘えられているかどうかは微妙な所だが。

その二人の様子を眺めながら、円香はため息をつく。その円香に、透は微笑みながら聞いてきた。

「そうだ、樋口も座る？　リカの膝」

「うん」

と言うか、どんな神経で聞いてきているのか。他の女の子と菅谷が至近距離にいるの、嫌では無いのだろうか？　……いや、大体わかるが。このまま本当に三人で仲良くいるつもりなのだろう。

「……」

……まあ、お言葉に甘えよう。少し仲睦まじくし過ぎている二人を見るのも、別に嫌ではないのだ。腹は立つが。

とはいえ、菅谷の膝の上も腹立つ。立ち上がった円香は、スタスタと歩いて透の膝の上に乗った。

「うぼっ……っ？？」

「座るなら、浅倉の上に座る」

「良いね」

「あの……流石に二人は重」

「「あ？」」

「……なんでもないです……」

椅子は三つ出ているのに、一つしか使っていない奇妙な状態のまま、三人の夕食は続

いた。

さて、夕食が終わり、後片付けをして、いよいよ寝室に入った。3人で寝るためのベッド……とは言っているが、果たして今日眠るかは分からないのが実際のところだ。

既にこの部屋に、三人の荷物は置いてある。円香と透がそれぞれ持ち寄ったお菓子を鞆の中から漁る中、菅谷は部屋を出て行った。

「ごめん、俺ちよつと戸締りしてくる」

「はい」

菅谷が出て行き、二人は先にベッドにダイブする。

「おお……フカフカ」

「すごい。すぐ眠れそう」

「ダメだよ。これからお菓子パーティーだから」

「分かっている」

そう返事をしつつ、ベッドの上で円香はお菓子を広げる。

その円香に、透は正面から告げた。

「ね、樋口」

「何？」

「今日のいぎこぎで分かったんだけど、私ってリカの事好きっぽい」
「……知ってる」

自覚したんだ、と円香は内心で頷く。

「え……なんで？」

「見てれば分かる」

「あ、じゃあ樋口もリカのこと好きなの、自覚してる感じ？」

「……………は？」

「こいつ今、なんつった？ と円香はたじろぐ。

「好き？ 誰が？」

「樋口が」

「違うから。いい加減なこと言わないで」

「えー、そうなの？」

「そうに決まってるでしょ」

あくまで平静を装って言ったが、内心はかなり動揺していた。

好き？ 自分が？ 菅谷を？ あり得ない。あんな一人じゃ何も出来なくて、頭が悪

くて、小さな事にも気がついてくれて、人を褒めるのは欠かさなくて、ああ見えて男が
気遣うべき仕事は全てやってくれて、自分より他人に気を利かせてくれる男を好きにな

る事はない。

「大体、それを私に言っただろうっての？　もうリカとベタベタ触れ合うとかそういう事？」

「ううん、逆。教えておきたかったんだけど、それでも樋口も一緒に仲良くしたいから」
「今更でしょ」

「そう？　樋口なら、勝手に遠慮とかして、距離おきそうな気がしたから」
「……」

確かに、その節はあるかもしれない。

「私はリカが好きだけど、三人でいる時間も好きだから」

「……あつそ」

「全然、樋口もリカの膝の上に座ったりとかしてもオツケーだから」

「それはノーサンキュー」

まあ、そう言ってくれるなら、なるべく今まで通りに振る舞うが。

……そんなことよりも、だ。胸の奥に引っかかっているのは、さっきの言葉。……自分、菅谷のことが好きとかそんな話。

そんな戯言が、胸の奥に突き刺さるとは。まるで、凶星を突かれたような、そんな感覚だ。

「樋口？」

「っ……」

声を掛けられたものの、円香は気づかない程、動揺していた。

違う、絶対好きなんかじゃない。別に一緒にいてドギマギもしないし、特別な感じはしない。むしろストレス溜まる事が多い。

……そう強く思えば思うほど、自分で自分に嘘をつくときの、あの嫌悪感が強くなっている。

イライラが溜まり、少しなんか恥ずかしくなつて顔を膝と膝の間に入れて隠している時だった。

「二人ともー。お待ちせ」

「っ!!？」

後ろから張本人の声が聞こえて、思わず肩を震わせて振り返ってしまう。

「うおっ、マドちゃん？ どしたの？」

「っ……な、なんでもない……」

「顔赤いよ？ 熱でもある？」

「ないから……」

その気遣いが、なぜかむかつく。自分でも分からないが、わなわたと肩が震えてしま

う。

「いや、普通に心配なんだけど。枕投げしようと思って、枕いっぱい集めてきたけど……やめといた方が良い？」

「あーごめん。もうお菓子広げちゃったから……」

透がそう呟いた時だ。円香が、ゆらりと立ち上がって枕を握った。ちようど良い。八つ当たりでもなんでも良い。とにかく自分の頭を空っぽにしたいと思っていた。

「良いよ。闘ろうか」

「わお、樋口やる気。ちよつと待って、お菓子粉々になるから」

「ん」

×そんなわけで、大暴れした。

×

×さて、それから30分後。もうお互いの間の照れも何もかもがりセットされ、三人はいつもの状態でお菓子＋トランプパーティーを始めていた。

ベッドの上で寝転がる菅谷の腰に、同じく寝転がりながら足を乗せている透、そして膝を折り曲げて両足を左右に開く女の子座りをしている円香の手元にはトランプが握られ、三人の中央には裏返しのカードとチョコやポテチの袋が置かれている。

「いやー、やっぱ良かったね。海。7」

「でしょ？　2人が来たかったら、毎年来ても良いよ。8」

「もう海行く時はここになっちやうよね。9」

「少し歩けば街にも着くけど、明日はそっちも見たい？　10」

「確かに海が綺麗なところに来たし、魚も食べたいかも。樋口はどう？　11」

「私もそれでおっけー。12」

「じゃ、決まりだな。13」

「ダウト」

「……」

無言で中央に回収する菅谷。その様子を見て、透と円香はほくそ笑んだような笑みをこぼす。

「リカ、弱過ぎ」

「ね。顔に出てる」

「えー……俺、割と他の人には『何考えてるか分からない』って言われるんだけど……1」

「ダウト」

「え、なんでよ……」

すぐに見切られてしまう。ポテチを一枚摘んだリカは、小さくため息をついた。

「……はあ、なんか二人は俺のことよく知ってるっぽいけど……俺は二人のウソ、あんま

見切れてないなあ。 1」

「ふふ、まあそこがリカの良いところだから。 2」

「まあね。 3」

「え、騙されやすいところが？ 4」

「ん〜……まあそうかな？ 5」

一人、キョトンとしている菅谷だが、円香にも透の言わんとしている事はわかる。

要するに、人の良い面は目に入るが、悪いところはあまり見る奴じゃないのだ。だから、嘘ついてる顔とかは分からない。

勿論、そう言うところは円香も好きな面ではある。……だが、まあそれと同時に自分がその面でカバーしないと、と思う所でもあるのだが。

「……リカはそのままでいて 6」

「大丈夫、私と樋口が守るから」

「え、それ俺のこと騙す宣言？ 7」

「そんな事しないから。 8」

「ね。……えーつと、9?」

「あつ、ダウト！」

「残念」

「今、騙したじゃん……」

自分の簡単な演技に騙された菅谷がシヨンポリと肩を落としながらカードを集める姿を見て、二人ともやはり微笑ましく思つて笑みを浮かべた。

「マドちゃん、意外と意地悪だよね……。10」

「そういうゲームだから。11。上がり」

「12。上がり」

「ダウト」

「はい、どんまい」

「ぶふっ……カード全部、手元に来てるし……!」

「あーあ……もう、ダウトやめよ。他の何かない?」

「さつきから全部負けてるじゃん」

「ね」

単純に向いていなかった。お金がかかるゲームはやっていないが、ブラックジャックやポーカーなんて始めたら、まずボロカスにされるだろう。

「下にある遊戯室のゲームなら、俺全部勝てるよ」

「さつき盛大に外して浮き輪破裂させた癖に何言つてんの?」

「あ、あれは少し動揺してたから……」

「何の話？」

「リカがダーツ下手だって話」

「へえー、意外……でもない？」

「いや、意外って言つてよ。俺ほんとは上手いんだから」

「そういうのは上手いところを見せてから言つて」

流石に今から下行くのは少し面倒だが、まだ明日がある。

そんな中、透がポテチの袋を覗き込む。中は、もう残りカスしかないため、口の中に

流し込んだ。

「ん、終わっちゃった」

「そろそろお菓子やめて歯磨きだけしちゃう？」

「……だね」

チヨコレートの方は袋包みに一つずつ入ってるから、このまましまっても問題ない。

折り畳むと、ゴミ箱にゴミを捨てて、三人で歯磨きをしに行く。これから寝る、とい

うのに、三人の間に変な意識はかけらもなかった。

シヤコシヤコシヤコと口の中を泡だらけにしてから、歯ブラシを洗って口をゆすぎ、

寝室に戻る。

「さて、次何やる？」

「ウノ」

「花札」

「よし、両方だ」

なんて話しながら、部屋に戻った。またベッドの上で寝転がり、トランプをしまつて先に花札を始める事にした。

「リカー、腰」

「はいはい」

またうつ伏せになった菅谷の上に、仰向けに寝転がった透が足を置いた。樋口も同じように座り、手札を眺める。

三人でそのまま花札を続けた。花札には二種類、ルールがあるが、今やっているのはコイコイではない方。三人に7枚ずつ手札を、そして場には6枚カードを出し、1ターンずつ手札から一枚と山札を捲って一枚、場のカードを獲得して行く。

運要素も少なからずあるが、それでも大部分は頭を使わなければ勝てないゲームである。

さて、そのまま三人でしばらくカードを切り合う。役を揃えつつ、高得点のカードを巡って心理戦が行われるが、そういうの弱い奴がやはり一人、いるわけで。

すでに点差は大きくなりつつある中、ドシヤツと天然パーマの男が突つ伏した。

「？ リカ？」

「……………寝落ち？」

心理戦とかではなく、眠かっただけのようだ。崩れ落ちたリカは、うつ伏せのまま肩で息を始める。

「……………寝てる？」

「……………予想しちやいたけど、やっぱり朝まで起きるって張り切って最初に寝落ちするタイプだった」

「あ、樋口もそう思ってた？」

寝てしまったものは仕方ない。とりあえず、ゲームはお開きである。

「リカ、どうしよっか」

「三人で寝るって言ってたんだし、布団の中に入れてあげた方が良いでしょう」

「そっか」

「私がリカ持つてるから、布団めくって」

「はい」

言いながら、透は菅谷の上から足を退かし、円香が菅谷の脇の下から腕を通し持ち上げる。

「っ……………お、重っ……………」

「私、足持とうか？」

「お願い……」

とりあえず、二人で菅谷の身体をなんとか持ち上げ、床に寝かせた。

その後で布団をひっぺがし、再び持ち上げ、真ん中に寝かせる。

「……ふう、よし」

「意外と重かった」

「ま、男の子だし」

「……どうする？」

「私達も寝よつか」

との事で、二人もベッドの上に寝転がって布団を持った。三人の体を覆うようにかける。

「んく……やばっ。やっぱフカフカだ」

「ちよつと気持ち良すぎる奴」

「それ。……もしかしたら、リカの部屋のベッドもこんななのかな」

「じゃない？ この性格だと、ご両親が親バカになるのはこれが悪いし」

今にして思えば、一人暮らしの部屋を決める際、お隣を試すような真似をするのも頷ける。子供の頃は「お菓子あげるからついておいで」と言われれば、迷わずついて行く

子だったのだろう。

ふと、横を見ると、仰向けにして寝かせた菅谷の寝顔が、天井を向いている。生まれ
た時のパラメータを外見に10割振っているだけあって、やはりその寝顔は綺麗なもの
だ。

その菅谷の寝顔の向こう側では、透がこちらを見ている。……いや、こちらと言うよ
り、菅谷を見ているのだろう。

「……そんなにこれが好き？」

「え？ うん」

「……普通に答えないでくれない？」

「なんで？」

「……」

照れ臭くて、羨まし……ではなく、妬ましいからだ。

「だから、今日はめっちゃ幸せだった。幼稚園の頃からの幼馴染と、中三からの短い付き
合いで好きな人と、こんな豪華な別荘で丸一日、いられて」

「……あつそ」

しつかりと自分を入れているあたりが小憎たらしい。

……こんな風にわざわざ言わなくても良いことを言うということは、本気で三人一緒

で今後もいたいということなのだろう。仮に、透と菅谷が付き合い始めたとしても、だ。その気遣いではない気持ちだが、嬉しかったのかもしれない、普段なら絶対に口走らない事が、ポロツと漏れた。

「……それは、私もだから」

「え？」

それを聞くと、透は意外そうな顔をする。その直後、ニンマリと微笑んだ。

「……私もつてことは、樋口もやっぱリカ好き？」

「そういう意味じゃない」

「じゃあどうということ？」

「……寝る」

×言わなきゃ良かった、と後悔しながら、二人に対して背中を向け、目を閉じた。

×時刻は深夜二時を回った。三人で睡眠を始め、早一時間経過、といったところか。

部屋に備えついている出窓からは、おとなしくなった波の音と月明かりが照らし出され、淵に髪の毛の長い女性を座らせれば絵になりそうな光景を作り出している。

幻想的……それはつまり、少しだけ怪異的ということ。もしかしたら、このまま起きていたら外で狼男でも歩いて来るかもしれない。

そんな時刻、ベッドを使っている二人から外れ、窓際に椅子を置いた円香は眺めていた。

「……」

困ったことになっている。全く眠れない。透と間に挟んだ菅谷を意識してしまっているのか、それとも同じ布団に入っていると言うプレッシャーなのか。

どちらにしても、目を閉じていると胸の痛みが強くなるばかりだ。

「はあ……」

水を飲んでみたり、頭の中で羊を数えてみたり、或いは「考えるな」と唱え続けても無駄だった。やはり最後のは他人にやってもらわれないと意味ないのかもしれない。

「……ふう」

とはいいえ、いつまでもこうしているわけにはいかない。一先ず、やはりベッドに戻ろうかと思い、ちらりとベッドの方へ目を向けた時だ。カシャつという音が聞こえる。

顔を向けると、菅谷がスマホを構えてこちらを見ていた。

「……はっ」

思わず声を漏らしたが、菅谷は無言のまま小さく俯くと、布団から出てスマホをポケットにしまう。そして、鞆の中からミネラルウォーター入りのボトルを二本、手に取り、窓側へ歩いた。

「眠れないの？」

「いやいやいや、何普通に話進めてんの？ 今勝手に撮ったでしょ」

「綺麗だったから」

「っ」

照れている間に、リカは椅子をもう一つ、窓際に置いて、向かい側に座ると、窓の淵にボトルを二本、おいた。片方は円香の近くへ置く。

「はい」

「……………どうも」

受け取り、もう写真のことをどうこう言うことはなく、ペットボトルを開ける。

「……………なんで起きてんの？」

「俺は目が覚めちゃって。そしたら、真横でおるんが寝てて……………もう、ガッツリ目が覚めちゃって……………」

「ださ」

「う、うるさい……………」

自分のことを棚にあげて、苦言を漏らしながら水を口に含む。

「もし眠れないなら、下で少し遊ぶ？」

「……………遠慮しとく。そういうのは、浅倉も一緒じゃないと」

「あ、そっか」

普段なら遊んでいる所だが、今は二人きりで遊ばない方が良さそうな気がしてしまふ。透の気持ちを知ってしまった今、三人一緒である事はともかく、二人きりになることは避けたほうが良いかもしれぬ。

そんな中、ふと菅谷が窓の外を眺めながら声を掛けてきた。

「すごいね。この窓、絶景」

「……知らなかったの？」

「うん。この部屋、夜は来た事なかったし。自分の部屋からは見えなかったし」

「あの虫の模型だらけの部屋？」

「そうそれ。……あ、見たの？」

「見た。見なきゃ良かったけど」

「どうしてさ」

「模型とわかってても気持ち悪いから」

残念ながら、やはり虫はどうにも好きになれない。カナブンのヘアピンも、菅谷がいる時にしかつけないし、菅谷と一緒にでも必ずつけるとは限らない。

「ホントはこの辺りもすごいんだよ。虫、というより、ヤドカリとかの甲殻類が。今日遊んだところからもう少し……あの、ほら。ちょうどここから見えるあの岩のところ。あの辺

まで行くと、カニとかいるよ」

「ふーん……良いね。見てみたいかも」

「ホント?」

「社交辞令」

「……はあ」

「……別に、見に行くだけなら構わないけど?」

「……それも?」

「ホント」

「じ、じゃあ……明日!」

「ん」

そんな約束をしながら、キラキラと目を輝かせて語る菅谷を、微笑みながら眺める。深夜に二人で話す、なんてシチュエーションだからだろうか。円香は、いつもより自分が素直に受け答えしていることに気付いていなかった。

「リカはさ、なんでそんなに生き物が好きなのわけ?」

「ん? んゝ……可愛くてカッコ良いから?」

「そういう小学生みたいな答えじゃなくて。何かきつかけとか」

「ああ……それは、まあ人間の友達はいつの間にかいなくなるけど、虫の友達は探せばい

るから」

「……なるほど、と円香は少し理解する。それはつまり……もし、菅谷から離れない人間の友達がいたら、その友達にやたらと懐くのも頷ける。

「……じゃあ、リカから絶対に離れない、私と浅倉か生き物、どっちの方が好き？」

「それは勿論、マドちゃん達だよ」

「……どうして？」

「ん〜……やつぱり、動物達の観察をするのとマドちゃん達と遊ぶの、どっちが楽しいかって聞かれたら、マドちゃん達の方が楽しいから」

「……」

そう、と、円香は目を閉じる。今日の円香には、少しだけ余裕があった。だから、直球で言われてもいつものように顔が真っ赤に染まることはなかった。

「……そのセリフ、私と浅倉以外に言わないでね」

「言わないよ」

「……そういうのは信用出来ない」

「だって、マドちゃんとおるんは、特別だから」

「……それは、どう言う意味で言っているのか気になる所だったが……まあ、今は気にしない事にした。突っ込めば、眠るどころではなくなる。」

そんな風に思っていると、少しだけぼんやりして来る。眠気がでてきた。

「……そろそろ寝る？」

「……んっ」

意外と周りをよく見ている男だ。

二人してベッドの方へ戻り、また菅谷が真ん中に行くように腰を降ろす。寝転がってから、菅谷はハツとする。普通に真ん中に来てしまったが、やはり両サイドに二人いられるのは眠れそうにない。

「マドちゃん、場所変わらない？」

「ダメ。浅倉拗ねるよ」

「えっ、な、なんで？」

答えるのが面倒だった円香は、菅谷の腕をホールドする。

「逃がさない」

「……っ」

「……大丈夫、眠れるまで……手、繋いでてあげるから」

そう言いながら微笑む円香だったが、菅谷には逆効果だった。胸の奥底でドキッと強く狼狽えた菅谷は、顔を真っ赤にして俯いてしまう。

なんだか、ようやく菅谷を照れさせることが出来た気がした円香は、少しだけ満足げ

に微笑む。

その直後だった。その照れながらもこちらを向いている菅谷の後ろから、ガツと両腕が回された。

ビクツと菅谷が肩を震わせるのと、円香が「あつ」と声を漏らしながらその後ろを覗き込むのと同時だった。綺麗なグレイの瞳を不気味に輝かせながら、透が顔を覗かせた。

「……いつまで二人きりでイチャイチャしてるの」

「っ、と、とおるん……?」

「あんた起きてたの?」

「眠れるわけないじゃん。リカと同じベッドの上で」

「……」

それを聞くと同時に、透は両腕の力を込める。ぎゅううつとする事によって当然、密着度も上がり、背中越しの胸の感触も強くなる。

菅谷の顔が真っ赤になるのを見た円香は、相変わらずの深夜テンションのままクスッと微笑むと、菅谷の方へ手を繋いだまま距離を詰める。

「嫉妬される男の気分はどう? ミスター朴念仁」

「えっ……いや、ちよっ……」

思わず視線を下にして逸らした時だ。円香は、寝るときに胸の下着はつけない派だった。綺麗に胸の谷間がTシャツの隙間からチラリズムし、それと同時に透も同様であることを悟った時が限界だった。

沸騰したお湯につけた温度計のように赤みが下から顔を包み込み、ポフンと煙を吹かせ、そのまま気絶してしまった。

「……浅倉も来ればよかったのに」

「いや、あそこは樋口二人きりが良かったところかなって」

「まあね」

「お、素直？」

「深夜だからね」

「じゃあ、リカの好きなどで山手線ゲームしようか」

「それは無理。そんなに多くないし」

「そっか」

そんな話をしながら、今度こそ眠りについた。勿論、翌日になって記憶が綺麗さっぱり消えたバカ以外は、爆照れして行動不能になったのは、言うまでもない。

形に残る思い出は思い出しやすい。

翌朝、一番最初に目を覚ましたのは円香だった。ぬぼーつとした表情で瞳を開けると、真横にあつたのは菅谷の寝顔だった。思いつきりこつちの方に体ごと向けて寝ている。

「ーっ！」

直後、脳内で蘇ってきたのは昨夜の記憶。深夜のテンションで、なんかだいたい言わなくて良いことを言った記憶がある。

特に最高に恥ずかしいのがこれだ。

『……大丈夫、眠れるまで……手、繋いでてあげるから』

全然大丈夫じゃない。主にこつちが。

あまりの恥ずかしさに、頭の中を真っ赤に染めて布団の中に潜り込んでしまう。しかし、目の前にあるのは布団の中で寝転がっている菅谷の身体。どちらにせよ心臓が悪い。

「……っっっっ！」

死にたい。今にも爆散したい。ホント、なんであんなテンションになってしまったの

か。恥ずかしさと後悔で顔を両手で覆ってしまふ。

とりあえず、さつさと起きて朝飯の準備……と、思った時だ。手が離れない。自分の右手と繋がっている方を見ると、菅谷の左手と握り合っていた。そうだ、手を繋いだまま眠ったのだった。

「ちよつ、リカ……離して……」

「すびー……」

「っ……」

すびーじゃねえよ、と思ったが、起こせない。なんだか惜しい気がして。心臓の鼓動が繋がっている手を通して菅谷に伝わらない事を願いつつ、とりあえず目を閉じた。

その僅か五分後、次に目を覚ましたのは透だった。現状、自分は思いつき菅谷の背中に抱きついているのを自覚し、秒で目が覚めた。

「っ……？」

というか、深夜の自分を思い出し、さらに顔が赤く染まる。昨日は散々、自分が菅谷に構ってもらったため、深夜に目が覚めていた二人がセンチメンタルに浸るのに混ざりはしなかった。

だが、ベッドの上でまでイチヤつき始めた時は流石に羨ましくて混ざった。自分にも構って欲しかったから。

問題は、その後。ノーブラに薄いTシャツ一枚で背中に抱きついたのはやり過ぎだった。胸を見られた後だから、もう見た目も感触も完全に菅谷に知られてしまったことになる。

「……………」

死にたい……と、透は菅谷から両手を離して自分の胸を抱く。

……まだ、菅谷は寝ているようだが、円香も寝ているのだろうか？ だとしたら、なんかここでベッドから退くのは嫌だった。死ぬほど恥ずかしかったけど……今後、菅谷と一緒にいる以上、もしかしたら恥ずかしい行為はするかもしれない。

ならば、せめて今くらいその恥を堪えるべきだろう。そう決めると、透は菅谷の片手を握り、自分の方へ引き寄せた。

「……………」

反対側で菅谷の手を握っていた円香は、なかなか眠れずにいる中で、急に引つ張られる感覚でさらに覚醒した。

何事かと思ったが、多分菅谷が寝返りでも打ったのだろう。さつきまでこちらを向いていたのに、仰向けになっている。

「……………」

なんか腹が立った。自分が避けられている、みたいな感じがして。

背中を向けるように脇の下へ潜り込みつつ、菅谷の腕を引きながら上腕二頭筋に頭を乗せて目を閉じた。

「っ……っ？」

それに、反対側の透が気がつく。今、菅谷が動いた気がした。

慎重に身体を起こして菅谷を見ると、反対側で円香が菅谷に腕枕してもらっているのが見えた。

「……」

樋口も思いつきり甘えてんじやん、それも寝ながら、と透は微笑ましく思いながらため息をついた。

まあ、その気持ちは分からないでもないのですが、邪魔しないことにした。ただし、勿論自分もこの機を逃すつもりはないが。

「んっ……」

透は起こした身体を、そのまま菅谷の膝の上に置いた。そつちが腕枕なら、こつちは膝枕である。ギユツとズボンを握り、目を閉じた。

そんな風に、人を抱き枕にし過ぎたからだろうか？ 本当に枕が寝返りを打った時、二人とも反応する事はできなかつた。

「え、マジすか室寺さん」

「えっ?」

菅谷が透がいた方へ寝返りを打った。つまり、腕の上にいる円香の身体は持ち上げられ、透は太ももの間に首を挟まれる。

「おっふー!」

「グエツ!」

二人して悲鳴が漏れる。だが、バカの奇襲はそれだけで終わらない。持ち上げられた円香を、菅谷は強く抱き締める。いや、それは円香だけでなく、太ももの間にいる透の頭もだ。

「っ、ち、ちよっ……リカ」

「お、お尻……目の前に、桃尻が……!」

「夢だったんですよねマジで。キリンの首に登るの!」

「どんな夢見てるのよ……!」

円香が眉間にシワを寄せながら苛立ちを隠さない声で言う。だが、声音の割に円香は何一つ抵抗を見せなかった。透も同様だ。なんでだろうね。

しかし、そんなやり取りも長くは持たない。

「え、キリンの角にキスして良いんですか?」

「えっ?」

そして、菅谷の目の前にあるのは、円香の顔。透の位置からはその絵面こそ見えないものの、なんとなく察してはいた。

「樋口ー！ 狡いー！」

「ズルも何もないでしょ?!? ていうか、私だってこんな形は嫌……！」

「あ、じゃあどんな形が良いの？」

「聞いている場合じゃないでしょ?!? このままじゃホント……！」

食われる、と、思った時だった。寝ている菅谷が、クンクンと円香の額の辺りで鼻を鳴らす。

「……なんか、このキリン良い香りすんな……！」

「えっ」

「獣臭がないし……あとなんか抱き心地が良過ぎるし……もしかして、これ……夢？」

「すげえなこいつ、と円香も透も半眼になる。夢の中で夢であることに気が付いたよ、と。」

「……夢って事は、割とやりたい放題出来るんじゃない？ 例えばほら……マドちゃんや

とおると、あんなことやこんなこと……！」

「ー！」

こいつもやつぱり男か?!? と、二人の間に更なる緊張が走る。

「それこそ、昆虫探索とかバードウォッチングとか行けるんだ」

気の所為だと思わないと死ぬしかなかった。こいつもしかして性欲を何処かに落としてきたのだろうか？

早速、それを実行しているのか、途端に静かになる。動物は音に敏感だから、観察するとき黙るのは当たり前だ。

「……樋口」

「……うん」

別に、そんな現実の自分達でも全然付き合う。勝手に「行かない」と思われたことに少し苛立った二人は、とりあえず菅谷を起こすことにした。

「リカ、起きて」

「リカー」

円香はホールルドから、そして透は足を持ち上げてなんとか抜け出すと、両サイドから菅谷の頬をぺちぺちと叩く。

「よっしゃ、アクティオンゾウカブト……ん？」

そこでようやく目を覚ました。本当にムカつく顔をしているものだ。円香も透も、呆れてしまう程だ。

「やっとなら起きた？」

「……とおるんと、マドちゃんど……マルスは？」

「スマブラの？」

「え？ いやまあムシキングじゃ、つよさ200を誇つてたから参戦しても不思議はないけど……」

「あるでしょ」

ツツコミを入れつつ、円香はため息をついた。

「着替えるから一旦、出て行つて。まずは朝ご飯」

「あと着替え、置いていかないように」

「あ、そっか」

昨日と同じ愚は犯させないため、透が釘を刺すように言つて着替えを持って行かせた。

その後、浜辺の奥にある岩の下で本当にヤドカリやカニを見に行ったり、午前中は水着を干している間に街の方に出て色々、小糸や雛菜へのお土産を買いに行ったり、室内のビリヤードやダーツで遊んだりして、また最後に海である。一通り遊び倒し、気がつけば15時を回っていた。帰るなら、そろそろ帰らないといけない。

「そういえばさあ、昨日の深夜……マドちゃんと窓から海の景色見てて。もうめっちゃ

綺麗だった」

「ふーん……私も見るだけ見ておけば良かったかな」

「え、起きてたの？」

「え？ 起きてたじゃん」

「や、なんか寝る直前の記憶だけなんかなくて。もしかして、マドちゃんに後ろから暗殺とかされたかな」

「されてたら今、ここにいるリカは誰？」

「え、俺は俺じゃね？」

「え？」

「え？」

相変わらずのペースで会話をしながら、砂浜に座って砂のお城を作る二人に混ざっている円香は、とりあえず聞いてみた。

「今日、この後どうする？」

すると、菅谷と透は揃って肩を震え上がらせ、二人して座ったまま両手を組んでぶるぶると震える。表情こそ変化はないが、帰りたくない、と言う意思が見て取れる。

……なんか、菅谷と一緒に高校へ来てから、透はリアクションが大きくなつた気がする。それが嫌だとかではなく、なんかちよつと可愛いな、なんて幼馴染ながらに思った

りしたが、今はスルーした。

「帰りたくないのは分かったけど……それなら、親に連絡しないとじゃない？」

「よし、じゃあ早速……」

「いや……がえろうツ!!？」

菅谷にしては重たい声が届いて、今度は円香がビクツとしてしまった。

「いや……そんな帰りたくないオーラ出しながら言われても……」

「ていうか、二泊して良いって言ったのリカじゃん」

透も少し不満げに言うが、菅谷は正面から答えた。

「でも……やっぱ急に未成年が泊まり延長とか、両親心配するでしょ。俺の親なら怒る

と思う」

「まあ、確かに」

そう納得したのは円香。特に高校生同士。いくら信頼関係のある仲でも……いや、信頼関係が築かれているくらい仲が良いからこそ、心配してしまう点もある。思春期かつ、異性間であるが故の事で、だ。

「もしかしたら、俺達が強盗に押し入られて誘拐されたーとかいらぬ心配かけさせるかもでしょ?」

「あ、そつち?」

「え、他にどんな意味が？」

「……最低」

「なんでっ？」

たじろぐ菅谷だが、気持ちが変わる透は砂山を作りながら、そのバカを見る。

「……でも、名残惜しくない？ リカだって超帰りたくなさそうじゃん」

「うっ……ま、まあ……また、一人暮らしのマンションに戻るの、ちよつと退屈になりそうだし……」

「じゃあ良いじゃん」

「でも、俺と違って二人はやっぱ家から出て来てるし……帰った方が良いと思うツツ

……!!？」

「いやだからそんな歯が砕けそうな強さで食いしばりながら言われても……」

とはいえ、菅谷が正しい、と円香も理解している。節度を守れ、とは親からも言われていた。

男1対女2……方に一つの可能性として、不純異性交遊をしていると思われる、来年もまた来るどころではない。菅谷と関わるのも止められそうだ。

「浅倉、帰ろう」

「えー、樋口まで」

「大丈夫だよッ、とおるんッ。また来年……ッ、来れば良いんだからッ……！」
「その喋り方やめて」

円香から冷たいツツコミが入り、項垂れる菅谷の様子を見て、透は冷や汗をかく。もしかしてこの子、ホントは自分より帰りたくないのかもしれない。

まあ、確かに帰ったら透は隣に円香がいるが、菅谷は隣の駅まで行かないと一人のままだ。

そう思うと、なんだか目の前の男が微笑ましく思えて来る。仕方ない、ここは仮にも（いや本当に仮にも）姉として、こつちが大人になるべきかもしれない。

「大丈夫だよ、リカ。向こうに戻っても電話とかで相手してあげるから」

「え、なんでそつちが上からになってるの？」

「めつちや帰りたくなさそうにしてるから」

「お互い様でしょ」

「や、本当にお互い様だから。良いから、二人とも帰るならこつち来て」
「？」

言われるがまま、円香の方へ歩く。海をバックに三人で横並びになる。もういつの間にか水着という薄着で、生肌の肩が当たっても大きな動揺はしなくなった。

さて、そんな中で円香はスマホを構えた。

「撮るよ」

そのままパシャッと写真を撮った。その写真を、円香は手早く三人のグループに送信する。

「……これで、とりあえず思い出にはなるでしょ」

「……樋口」

「……もうほんとに姉の貫禄……」

「樋口姉？」

「いや、円香お姉ちゃんが照れそう」

「……やめて」

「あ、ホントだ。円香お姉ちゃん」

「円香お姉ちゃん」

「分かった。泥団子食べたいんだ」

「嘘です」

黙らされた。……そういえば、ここに来て二日目なのに、水着の写真は初かもしれない。せっかくだし、チェインのトップ画にしよう、なんて円香は思った。

さて、名残惜しいがそろそろ浜辺を後にしないといけない。何せ、海に入った以上はやはりお風呂に入ってから帰らないといけないから。

帰ると決めた以上は、気が変わらないうちに行動に移すしかない。そんな時だった。「あ、そうだ」

透が何か思いついたように呟いた。

「三人でお風呂入らない？」

「「えっ」」

「こいつ何言ってるの？　みたいな声音が漏れる。なんで最後にそういう事を言い出すのか。」

「ほら、せっかく三人しかいないんだし」

「いやいやいやいや、それは流石にまずいでしょ」

「そ、そうだよ……。ちよつと俺もそういうのは……」

「いやいや、水着あるじゃん」

それを聞くと、円香と菅谷はハツとして顔を上げる。確かに、と言わんばかりだ。

「アリかも」

「でしょ？」

「行こっか」

×××
××× すぐに行動に移した。

しかし、まあそもそも海に入った後に浴びるシャワーは海の汚れを落とすためのものであつて。温まるためではない。

その為、身体を流すわけだが、その時は裸にならざるを得ない。

そのため、まずは透と円香が身体をシャワーで流した。それが終わってから、菅谷が後から入る。二人はお湯に浸かりながら、背中を洗い場に向け、その間に菅谷は身体を洗う事になった。

それが終わってから、改めて湯船に入った。

「ふおおお……あつたか」

「それな」

「夏の湯船も良いかも……」

並んでホッと一息つく。もう少し照れることもあるかも……なんて透は思っていたが「一緒にお風呂」というよりは「健康ランド」って気分であまり変な感覚はなかった。……更衣室の扉一枚隔てた先で裸になる、或いは後ろを振り返ると裸の菅谷がいる、という感覚はあつたが。

「ぶっちゃけ、別荘の浴槽だからできることだよな」

「それな」

「リカはジェットバスとか使わないの？」

「それなー」

「全然、聞いてないんだけど」

「もしかして、割と照れてる？」

「……」

本当に、弟っぽい精神年齢である。何処までウブなのか。

ニヤリと微笑んだ透は、隣から菅谷に聞いた。

「じゃあ……入っちゃう？ 横並びでジェットバス」

「っ、む、無理でしょ……」

「浅倉」

「冗談だから。樋口は入らない？」

「私もいい」

昨日で十分楽しめた。それに、あんま目の前で肌を寄せ合おうと菅谷も困ってしまうだろう。世の中には「百合萌え」という人種もいると聞いた事がある。

「あ~~~~~……ささいこ~~~~~……」

本当に気持ち良さそうな表情で、透から声が漏れる。気持ち良さそうにするのは結構だが、少し色っぽさが出ているため、水着を着ているとはいえ菅谷の頬は赤くなる。

その気を逸らすように、円香が菅谷に声を掛けた。

「そういえば、夏休み終わったら文化祭あるけど、どうするの?」

「え、ど、どうするって………何が?」

「前、読んでたでしょ。なんかモテる男の作法とかなんとか」

「ああ……あれやめた」

「やめたの……?」

透からの問いに菅谷は頷いて答える。

「なんかあんな風に使おうのしんどいし、そもそも別にモテたいわけじゃないし」

「いや、お店だから。一応、気は使わないといけないと思うけど?」

「俺は俺の魅力で勝負する」

「それはダメ」

「えっ、だ、ダメなの……?」

揃って否定されて狼狽える菅谷だが、透も円香も言い切る。

「あんたはその残念イケメンのまま中身を知られて絶望されて」

誤魔化すように円香は言う。実際のところ、正直、菅谷の中身なら素でいけば失望はされるだろう。こいつの良さは長く向き合えないとわからない。

しかし、問題は……。

「や、ていうか、リカのお客さんがイケメン好きのギャルとかになったら困るから」

「えっ……」

全部、透が直球で言ってしまった。

「? なんぞ?」

「なんでつて……リカ、自分のこと分かってる? イケメンで照れやすいとか、ビッチにとつては格好のカモだよ?」

「……どういふこと?」

なんで分からないの、と透は説明を諦め、一瞬だけジェットバスから出て菅谷の手首を掴み、自分の方に引き込み、膝の上に菅谷を乗せた。

なんとなくやりたいことが分かった円香は止めなかったが、菅谷は大きく狼狽える。

「ちよつ、とおるん……つ」

「……ほら」

「え?」

「顔、真っ赤。私達より胸が大きかったり、スタイルが良い人達にこれやられたら、ちゃんと拒否できる?」

「……え、出来ると思うけど」

その返事には、円香もいらつとした。思慮が浅い奴は正確な想定ができない。

「無理でしょ。浅倉はともかく、スタイル抜群ってほどじゃない私にも照れるんだし」

「それはマドちゃんだからだよ」

「……は？」

「俺、マドちゃんもおるんも、外見だけを見て好きになった事はないよ。その水着も、なんか二人らしくて可愛いなって思ったし」

「……」

「……」

直後、円香はお風呂の蓋に身を預けるようにして顔を背け、透は片腕を上げて顔を隠す。

何事かと思った菅谷は、とりあえず透から距離を置いた。

「ど、どうしたの二人とも……？」

「うるさい」

のぼせそうなほど、ダメージが熱となって迫り上がってきていた。

もうこいつある意味じゃ歩く爆弾である。どこから爆発するか分からない。というか「好きになった」ってなんだ「好きになった」って。言葉選びをもう少ししっかりして欲しい。どうせそういう意味で言ったくないくせに。

とりあえず、これ以上のダメージは避けたい所だ。今はもうそつとしいて貰うため、円香がなんとか声を振り絞って言った。

「リカ、出てって」

「えつ、お、俺そんなひどい事言った？」

「……どうせ着替える時は別で行動しないとでしょ」

「あ、そつか。じゃあ、先にも上がるね」

それだけ言つて、天然ボケ男はお風呂から上がった。ホント、ムカつく男だ。もう少し考えてから言葉を発しろ、と心底思いながら、二人はとりあえずのぼせるまでお風呂に浸かった。

さて、お風呂を終えて、いよいよ別荘を後にしなければならない時間。とりあえず、円香と透はソファアールの上で倒れているので、菅谷は冷蔵庫の中にあつたキャベツとキュウリの塩揉みを作つて二人の前に出し、何とか落ち着いた。

「リカ、こんなの作れたんだ」

「そりゃ、マドちゃんにいつまでもお世話になるわけにいかないから」

「……（別にそれくらい良いのに、と言いたいけど言えない顔）」

「リカ、樋口が『別にそれくらい良いのに』って顔してる」

「浅倉……！」

「マドちゃん……じゃあ今後、毎朝お味噌汁作りに来て」

「っ、殺すよ」

「私にもー」

「あんたは関係ないでしょ」

そんな話をしながら、とりあえずようやく頭がフラフラする感覚が消えてくる。
すると、透が菅谷に声を掛けた。

「……ね、リカ」

「何？」

「さっきの話なんだけど」

「殺気？」

「いやお風呂の」

「お風呂の殺気？」

「私と樋口を外見だけを見て好きになった事はなくて、水着とか私達らしくて可愛
なって思っった話」

「……あの、やめて。思い出すと恥ずかしくなるから」

「ダメ」

「え、だ、ダメって何……？」

「リカは、どんなイメージで水着が似合ってると思っただの？」

「…………え」

その質問に、円香もピクツと小さく反応する。確かに、気になる。

「そ、それ話すの…………？」

「だって、気になるから」

「…………」

円香は我関せず…………のフリをして耳を傾ける。気になる。非常に。

「普通に恥ずかしいんだけど…………」

「あー、ヤバいわ。また頭痛くなって来た。もしかしたら、リカが話してくれないからかも」

「いやそれは嘘で…………！」

「樋口もだって」

「えっ」

「バカ言わないで」

「だよね」

「私は吐き気がしてる」

「ええっ!?？」

ノツた。褒められたいだけでなく、それ以上に菅谷をアタフタさせたい。さっきの仕

返しだ。

「……わ、分かったよ……」

「じゃ、まず私からー」

まあ、順番くらいは良いだろう。その話題を振ったのは透だし。

今は私服姿だが、ついさっきまで見ていたわけだし、水着に関してはよく覚えてる。黒いビキニの下に、南国を想起させるヤシの実の葉柄のようなビキニ、下半身は黒などなく、完全にヤシの実の葉だ。

色はオレンジと紺が使われていて、透にしては派手な気がしないでもない、と言う人もいるだろう。

「とおるんは……平熱系に見せかけて、エンジヨイする時は割と全力な人だから、落ち着いた色に隠れて『これから楽しむぞ』って言う外と中身のギャップが表れてる感じ?とおるんが自分で選んだのか、誰かと一緒に選んだのか分からないけど、後者ならよく知ってる人と一緒に選んだらだろうなって」

「っ……」

「やっぱ、よく似合ってたよ」

「……ありがとう」

よくもまあ照れもせずに言えるものだ。この男のメンタルがよく分からない。言う

こと言えるのに見えるのは恥ずかしいとかどういふことなのか？

これは、むしろ自分は聞かない方が精神のためかも……なんて円香が思ったのを、まるで察したようなタイミングだった。

「じゃあ、樋口は？」

「ちよつ、浅倉……」

「マドちゃんは……そうだな」

円香の水着を、思い浮かべる。おへそが見えるキャミソールのような形をした黒いビキニは、肩で紐を結ぶようになっていて。下の方はレースのようになっていて、無地に見えて薄白い白の花柄デザインとなっている。

下半身はスカートのような形になっていて、同じように裾がレース状になっているが、その下のピッチリと下半身を隠す布の部分がチラチラ見えるような形状となっている。

「黒と薄い白の花柄で大人っぽさが演出されてるけど、胸元とスカートの裾をひらひらしてるレースが、マドちゃんの割とムキになったり、クールっぽく振る舞って大人っぽくしようとする子供っぽさが出てて、なんかもう水着そのものがマドちゃんそのものに見えな」

「うるさい！」

直後、円香から枕を顔面に飛ばされた。似合ってた、と言われる前に吹っ飛ばされた菅谷はそのまま後ろにひっくり返る。

「樋口、顔真っ赤」

「あんたもうるさい！」

元凶もついでに排除しておいた。全くもって厄介なコンビである。これだから、天然が揃うと厄介なのだ。

「……良いからもう帰るよ。あんたらも早く来ないと置いていくから」

「あ、待つて樋口」

引き止める透。

「何？」

「最後だし、写真撮ろうよ。ベランダで」

「……」

まあ、それは構わないが。

そんなわけで、三人揃ってベランダに集まった。

「俺撮ろうか？ 一番、背高いし」

「ん、よろしく」

「あんた撮れるわけ？」

「撮れるよ。こんなの買っちゃったから」

そう言いながら鞆から取り出したのは、自撮り棒だった。

「使いたかっただけでしょ」

「うん。存在忘れてて」

「ちゃんと掛け声かけて撮ってね」

「んー、バズーカ」

「いやそれタイミングの取りようが……」

ほんとに撮ってしまった。三人とも笑う余裕もポーズを決める間もなく、半端な顔で写真を撮るハメになった。

まあ、こういうのはこういうので三人らしい。写真を撮った菅谷は、これを後でチェインのトップ画にすることを決めた。

××
帰りの電車の中。もう乗り換えはなく、最後の一本だ。そんな中、限界が来たのだから。真ん中に座っている透は微動だに出来なかった。

「……すう、すう……」

「……すびー」

左から円香、右から菅谷が肩の上に頭を置いて眠っていたからだ。しかしまあ、円香

が寝てしまうなんて、よほど疲れたのだろう。

「ま、そりやそうか」

多分、一番負担がかかっていただろう。自分の胸の件で特に。

たまには、自分が円香の世話を焼くのも悪くないかもしれない。まあ世話を焼くと言
うか肩を貸しているだけだ。

……それにしても、と思いつながら透は人が自分達しかいない車内で、向かい側の窓を
見る。片側に円香、片側に菅谷……なんか、両手に花とはこのことか、なんて少し嬉し
くなってしまう。

なんにしても、これは保存しないと損だ。スマホをポケットから出すと、菅谷の鞆か
ら自撮り棒を盗み、セット。慎重に打点を合わせた。

「……よし」

パシヤリと一閃。悪くない。これはチェインのトップ画にしよう、と心に決めた。

そんなわけで、三人の別荘でのイベントは幕を閉じた。

怒られやすい奴はどんな道を選んでも怒られる。

夏休み、それも残り僅か。そのため、菅谷はそろそろやり残した事を片付けることにした。いや、宿題はちゃんと終わらせた。ほぼ毎日、家に来る円香と透に監禁されながら。

さて、では何をやり残したのか？ それは勿論、自分の趣味に関わる事である。

「……よし、行こうか」

真夏の昼間。今日は透も円香も後輩の面倒を見る、とのことで遊べない。その為、菅谷は一人で行く事にした。

集合場所は学校の最寄駅近くの公園。そこに行くと、町内会っぽい人達がそこそのの数、両手に軍手をつけて集まっている。

しばらく待機していると、中央に立っているお爺さんがスピーカーを持って全員に声をかけた。

『えー、みなさん。こんにちは。本日はお集まりいただき、ありがとうございます』

それに伴い、菅谷も含めた全員はお爺さんの方へ顔を向け、ちらほらと「こんにちは」という挨拶が飛び交った。

『えーでは、早速ですが、町内ゴミ拾いを始めたいと思います』

集まった理由は、ボランティアである。町内ゴミ拾い大会……いわば、定められた範囲内で自由に立って、支給されたトングとビニール袋にゴミを入れていく大会である。

と、言うのも、近くの中学が代々、イベントとして川限定とはいえゴミ拾いをしていくのに、町内に住んでいる人達が何もするのは如何なものか、ということが始まったイベントである。

菅谷がトングとゴミ袋をもらいに行くと、配布係のおじさんが「おつ」と声を漏らした。

「明里、今年も参加してくれるのかい？」

「はい」

「ありがとうね。終わった後、みんなに配るかき氷、大盛りにするからね」

「や、いいですよ別に。好きでやってる事なので」

「いやいや、若くてご両親が引越しても参加するなんてなかなかできる事じゃないよ。

……あ、でも今年は明里の他にも若い子がもう一人参加してるから、その子と一緒に拾ったらどうかな？」

「マジすか。意外。じゃあそうします」

「はい。じゃああつちで待ってて」

前までは一人でゴミ拾いをしていた。別に誰かと一緒にゴミ拾いしたいとかなかったし、自分の事に夢中だったからだ。

だから正直、一人でゴミ拾いしたいと思わないでもなかったが、まあ去年まで若いのは自分しかいなかったし、若い子にも今後参加して欲しい、そのためには若者同士でやって欲しい、という意思なのだろう……なんて菅谷が察する事はなく、単純に友達ができてから一人よりみんなで拾った方が楽しいかも、と思ってOKした。勿論、自分の趣味を妥協するつもりはないが。

言われたところで待っている、同年代と呼べるか微妙なラインの女の子がやってきた。

「わっ、ホントにイケメンさんっす!」

「ん?」

「はい! 初めまして、芹沢あさひっす!」

そう元気な挨拶を見せてくれる少女は銀色の短い髪をなびかせ、綺麗な碧眼を見せて菅谷を見上げている。イケメンだと言われたが、この子自体も十分、可愛い方だろう。

「菅谷明里だよ」

「よろしくお願いするっす!」

「スルッス?」

「するっす！」

「スルツス！」

「するっす！」

「スルーっす？」

「何言っつてんすか？」

円香がいたら頭痛を発症しそうなやり取りをしつつ、とりあえず菅谷も自己紹介はしておく。

「菅谷明里です。さっそくですけど、俺がいつもゴミ拾う場所で良い？」

「いつも？ 毎回、参加してるんすか？」

「まあね」

「じゃあ、任せるっすー！」

×そんなわけで、二人でゴミを拾いに行った。

×

「そん[×]なわけで、ウブでバカな男子を照れさせる方法募集選挙権、始めたいと思いま[×]す」

そんな頭が痛くなるようなことを議題にしたのは、浅倉透。そして、それを聞いているのは雛菜、小糸、円香の三人だった。

「あはく、なんかいきなり始まったく」

「ぴえっ？ き、急にどうしたの……？」

「……はあ」

三者三様の反応を見せるが、揃って脳裏に浮かんでいるのは「ウブでバカな男子」とは菅谷のことを指している、ということだ。

「いや、なんかここ最近、私も樋口もリカにしてやられることが多くて」

「してやられるって〜？」

「待って。そもそも私はしてやられた覚えがない」

「いやー樋口、私より狼狽えてたでしょ」

「は？ 浅倉よりはマシだから」

「いやいや、絶対樋口のが照れてたから」

「やはく、円香先輩も照れるんだく」

「……うるさい」

どいつもこいつも人をいじる時はイキイキしている連中である。

少しイラつしていると、小糸が口を挟んだ。

「……で、でも、羨ましいなっ。海岸沿いにある別荘で、お泊まりなんて……」

「実際、良かったよ。海も綺麗だったし。……ぶっちゃけ海が良かったってより、リカの

別荘が良かったって感じあるけど」

「で、どうだった？ 雛菜と選んだ水着。気に入ってもらえた？」

それを聞かれると、透と円香は少し顔を赤くして視線を逸らす。脳裏に浮かぶのは、最終日のベタ褒め。あそこまで詳細に褒められれば、いつ思い出しても嬉しさが込み上げてくる。

その反応を見れば、誰だってどういう感情なのか分かってしまう。

「あは~~~~♡ 超喜んでる~~~~」

「そ、そんなに嬉しい褒められ方したの……？」

「うるさい」

こんなに可愛い年上の姿は初めてだった。表情に出ない透と、基本塩対応の円香が爆テレしていた。

そのうちの透が、改まって二人に声をかける。

「……とにかく、こんな具合で好き放題言われてこつちが辱められるのは我慢ならないの。あいつだって照れやすいくせに」

その気持ちは円香にもよくわかる。事故を除いて、こちらが照れさせようとしないと基本的に照れないあのアホンダラは、こちらを素で照れさせてくる。

「つまり……菅谷先輩が顔真っ赤になれば良いって事？」

「……む、難しいね……!」

「じゃあ……まず小糸ちゃん。どうぞ」

「ぴえっ!? 私から!? というか、指名式!?」

言われて、小糸は慌てた様子で返答を考える。「えーつと、えーつと……」と、三人の視線が集中する中、焦って考え込んだ結果、笑顔で言った。

「あつ……熱々のお風呂に入れる……とか?」

「それもうやった」

「え?」

「え?」

「は?」

「あ、やばっ」

直後、ギンツと音がする程、雛菜の「どう言う意味?」という視線と、小糸の「え、お風呂って……え?」という視線と、円香の「なんで言うのなんで言うの」などという視線が透に突き刺さる。

「……透先輩? 菅谷先輩と泊まりで遊びに行っても、えっちなことはしないって言っただけ?」

「し、してないよ?」

「なんで疑問系々？ 自分の行動に自信が持てない典型々？」

「マズイ、と透以上に円香が焦っていた。基本的に、雛菜は透の事が大好きだ。だから、あまり透を責めるような事はしない。」

「つまり、この場合に雛菜の矛先が向けられるのは、当日同行していたもう一人の女子……。」

「円香先輩々、どういうこと々々？」

「こつちに向く。……だが、まあやましい事はないし、普通に言えば良いだけの話だ。」

「別に、雛菜や小糸が思ってるような事はないから。海の近くの別荘なら、みんなで水着を着たままお風呂に入れるんじゃない？ ってなっただけ」

「……ほんとに々々？」

「ほんとに」

「でも……辻褃合わなくない々々？ お風呂に入るってことは、海の後でしよ々？ 体洗う時とかどうしたの々々？」

「時間ずらした。先に私と浅倉が身体洗って、水着着直した後、リカが入ってきて、私達は背中を向けたまま湯船浸かってた」

「……浴槽、そんなに広いの々々？」

「広かったの。ジェットバスとかついてたし」

あくまでも淡々と事実を告げる。嘘かどうかを判断するのは雛菜だが、今更疑われるような付き合いの長さではない。

「……ふうん、じゃあ見てないし、見られてないんだ？」

「そう」

あくまでその時は、だ。嘘は言っていない。

さて、相手は雛菜だ。このまま自分が話題を戻そうとすれば、一部の嘘に勘づかれる。

「で、それよりさ。じゃあ、雛菜は何かない？」

「え〜？ 菅谷先輩の習性がよく分からないから、雛菜なんとも言えないけど……」

「なんでも良いよ。リカ、基本的に照れやすくはあるから。他人を褒める時は照れないくせに、自分が褒められると照れるタイプ」

「ふうん……じゃあ、こんなのはどお？」

×× そう提案する悪魔の囁きに、浅倉透と樋口円香は耳を貸した。

「あ、あさひっち！ 見えてる？」

「は、はいっす！ すごいすごい、こんな近くでセミが羽化してる！」

そうはしゃぐのは、肩車している菅谷と、その上でセミの羽化を見学するあさひ。好奇心旺盛少女とムシキングが重なり合い、普通に意気投合していた。

「あんま大きな声出すなよ。動物は音に敏感なんだから」

「動物つすか？ 虫じゃなくて？」

「動物も虫も人間もみんな同じでしょ。みんな生き物でみんな命一個なんだから」

「なるほど……なんか、カツコ良いつすね！」

「だから大きな声を出さない」

さて、そうこうしている間に、セミの羽化が終わった。肩から降りたあさひは、うーんつ……と伸びをする。

「ありがとうございますつす！ 次の珍百景を探しに行こうつす！」

「いや、ゴミ拾いだから」

「えー、もう飽きちゃったつすよ〜」

「ダメ。こういうゴミ拾いをしないと、もしかしたらセミが絶滅するかもしれないんだから。そしたら、もうこんな光景見れないんだよ？」

「なんでゴミ拾いがセミの絶滅を防ぐ事に繋がるんすか？」

「……」

仕方なさそうに菅谷はため息をつく。この子は中学二年生だが、反抗期というわけではない。純粹な興味で聞いているのだろう。屁理屈からではない。

ならば、だ。自分も真摯に教育してやった方が良い。

「例えば、あさひつち。海にゴミを捨てちゃいけない理由は？」

「え？ 海の生き物が飲み込んだり、身体に引つかかったりして事故に繋がるから……つすよね？」

「そう。でも、そういうことに繋がるって事は、ポイ捨てした人は誰も思っていない。実際、低い可能性なんだけど、それでもその事故が起きて魚が死ぬまで誰も想定してなかった。これだって、それに繋がるかもしれないでしょ」

「……そうつすね？」

「俺はそういう可能性を1%でも除去したいの。だから、あさひつちもボランティアに来た時くらい協力してね。勿論、たまたま面白い光景を見かけた時は、そっち見ても良いから」

「……なんか、明里さんって……カツコ良いつすね！」

「え、そう？」

「明里兄ちゃんって呼んでも良いつすか!?!」

直後、菅谷の心の臓がドクンと跳ね上がる。早い話が「……甘やかす側の立場も悪くないかも」と言わんばかりの感想だ。

「……よし、あさひつち。せつかくだから見かけた虫を俺に出来る限りで教えよう」

「よろしくお願いするつす！」

改めて握手をして、二人でゴミ拾いを続けた。

「………」

「違う。雑菜的には、もうすこしあざとくても良いと思うよ?」

そう言う雑菜の膝の上に頭を置くのは透。上目遣いをするように下から覗き込んでいる。

雑菜の言う作戦とは、いわゆる「甘える」作戦。もう既に何度かやっているが、膝枕に腕枕におんぶに抱っこ……つまり、ボディタッチを含めた甘えだ。

これならば、こちらは自然に顔を隠せるし、向こうの照れた顔を見ることが出来る。

その為に、雑菜を実験台として、透が甘えてみているわけだが……。

「やは~~~~♡」

円香の目には、むしろ雑菜が透に甘えさせるために提案したように見えてしまう。

「(うっ..)」

「良い感じ〜」

「あとなんかない?」

「あととは……相手の背中におでこをつけて、控えめに腰を握ったりとか……あと、座ってる相手の肩に顎置いたりとか……?」

「なるほど」

まあ、もう勝手にして、と言わんばかりに円香はスルーした。……と、言いつつも雛菜のセリフには耳を傾ける。甘える……ちよつと、いやほんとにちよつとだけ興味がある。いやちよつとだからホント。

そんな風にソワソワしているのを必死に隠していると、自分を見てソワソワしている可愛い生き物が目に入った。

「？ 小糸？」

「ま、円香ちゃん……私の膝、空いてるよ……？」

「……は？」

「え……円香ちゃんはやらない、の……？ 菅谷さんに、甘えるって言うの……」

「やらない。私があいつに甘えるとか、天地がひっくり返つても有り得ない」

「……そ、そっか……」

シヨボンと肩を落とす小糸。それを見て、円香は少し黙り込む。まさかこの子……円香が菅谷に甘えるどころかではなく、自分が膝枕したかっただけ？

……まあ、雛菜なら絶対に嫌だが、小糸のためなら頷かざるを得ない。

「んっ」

目を閉じて、小糸の方へ身体を倒した。膝の上に頭を置くと、華奢な柔らかさと硬さ

が顔の右半分に分わる。

「! ど、どお!? 円香ちゃん……!」

「……うん。気持ち良い」

「え、えへへ……そっか、良かった……!」

「……」

本当に意外と悪くないかも、なんて思ってみたり。小糸だからだろうか? 心地良いというか、気持ち良いというか……胸が満たされる。思えば、他人に甘えるのなんて随分と久し振りの気がする。

思わず眠気が襲ってきて、瞼を閉じた時だ。カシャツという電子的なシャッター音が耳に響き、速攻で目を開ける。

正面に座っている雛菜と透が、スマホを構えていた。

「樋口、今超甘えてた」

「やは♡ 円香先輩、こう言う時だけ可愛い♡♡♡」

「遺言はそれで良いわけ?」

「あつ、だ、ダメだよ円香ちゃん……! 眠いなら、ゆっくりしてなきや……!」

「……」

華奢な力で押さえつけられる。撥ね除けようと思えば出来るが、それは小糸を怪我さ

せてしまうかもしれない。

それに、写真撮られるくらい構わない。こんな姿を見せたくない相手は、もうあと一人しかいないし。

「……リカには送らないでくれれば良いから」

「えっ」

「……は？」

何今の反応？ と円香は片眉を上げる。

「手遅れじゃん。ウケる」

「分かった。ブツ飛ばす」

「わー！ 円香ちゃん、落ち着いて……！」

「やは~~~~♡」

「雛菜ちゃん、煽っちゃダメだよ……！」

× 割とマジの喧嘩に発展した。

×

さて、ボランテアも終わりの時間。菅谷とあさひは、ゴミを町内会の方に手渡した。

「よーっし、たくさん拾ったっす！」

「お疲れ様、あさひちゃん」

「あと、セミの抜け殻もたくさん拾ったつす！」

「う、うん……それはもらっても困るかな……?」

菅谷もそれを拾うのは中一で卒業している。

「でも……ほんとにたくさんゴミ拾ったなあ。……どこにDVDデッキなんて落ちてたんだい?」

「地中に埋まつてたつす!」

「え、埋められてたの……?」

「あーはい。くぬぎの近くに埋まつてたんで、カプトムシのお子さんが冬を越す場所を少しでも奪われないために掘り返しました」

「……な、なんか想像以上に頑張ったみたいだね……二人揃つて」

「お兄ちゃんですのぞ」

「あさひつつすから!」

「思った以上に仲良しに……」

ウエイイ、と、言うようにハイタッチする二人。随分と仲良くなった。

「じゃあ、あつちでかき氷配ってるから。食べて帰つてね」

「はい!」

二人でかき氷を貰いに行った。

シロップのバリエーションもそこそこあったので菅谷はメロン、あさひはブルーハワイを選び、近くのブランコの手すりに腰を下ろした。

「ん〜……美味いつすー!」

「働いた後だからね」

「明里兄ちゃんは何処の高校なんすか?」

「ん? 一番近くの高校。ほら、あそこ」

「あ〜……あそこつすか。……明里兄ちゃんみたいな人、多いんすか?」

「え? どうだろ。仲良い二人としかあんな一緒にいないからなあ……」

「そうつすか〜……」

「……あ、その片方からチェイン来てる」

「どんな人つすか?」

送られて来たのは透から。そのチェインを開くと、小糸に膝枕されている円香が写っていた。

「わっ、可愛い」

「ホントつすね……でもなんで膝枕なんすか?」

「さあ?」

正直、羨ましい。あと可愛い。円香はなかなか、自分に甘えるような事はしないから、

少しだけその位置を変わって欲しかった。……まあ、別荘ではそんな一幕が夜中にあったわけだが。

とりあえず、自分も返信しておく。

LIKA☆『マドちゃん、普段は超甘えん坊なんだ。かわいい』

そう送り、スマホをポケットにしまうと、隣のあさひが声を掛けてくる。

「でも、そうつすか。明里兄ちゃん、仲良い女の子、結構いるんすね」

「まあ、うん。あともう一人……というか、チェインのトップ画のこの子」

言いながら、それを見せた。三人で海に並んでいたり、別荘のペランダで並んでたり、電車の中で爆睡してたりしてる写真を見せる。

「……」「股？」

「まだ違うよ」

「まだ？」

「まだ。」

まあ……正直迷ってるんだけどね。中学の時からずっと三人一緒に、ぶつちやけ二人とも好きだから」

「……惚気？ 自慢？」

「ん……まあ、どうとつても良いけど、俺の中では悩みでもあるかな」

言われて、あさひは少し黙り込んだ。まだ一日の付き合いだけど、こんな誠実そうに見える人なのに、意外と女性関係はだらしないのかな？　と思つたが、むしろ誠実だからこそ悩んでいるのかもしれない。

そもそも二股はダメ、と言うのは世間一般のルール。それも、海外では一夫多妻制なこともある話も聞いたことある。

「……まあ、私は恋愛とかよく分からないんでなんとも言えないんですけど」
「だよな。ごめん……」

「でも、明里兄ちゃんは、女の人なら誰でも良いんじゃないかと、その二人だから良いんじゃないか？」

「うん」

「なら、あとは二人の気持ち次第じゃないか？」

「……そっか」

それを聞いて、菅谷は少し胸の奥で荷が降りたような感覚に陥る。開き直るわけではないが、一般論は一般論。やはり、大事なものは本人がどう思うか、という事だろう。

「……ありがとう、あさひっち」

「別に、大した事じゃないっす」

「今度、この辺でクワガタたくさんいるとこ教えてあげる」

「いや、自分で幼虫から育成してるからいいっす」

「見せて!」

「良いっすけど……お礼っすよね?」

× 結局、このあと飲み物を奢った。

× 家まで送ってあげた後、菅谷はのんびり帰宅した。電車に乗ってゆらりゆられ、自宅に到着。

しかし、と菅谷は思う。たまには、甘やかす側に回るのも悪くない。母性、と言うわけではないが、小さな女の子の面倒を見た事で、なんだか胸の奥が変に満たされる感じがあった。今度、透と円香で試してみ……いや二人ともすんなり言うこと聞いてはくれなさそう……。

なんてけつたいもないことを考えながらマンションの自動ドアを潜ると、どこかで見たいケメン美少女が立っているのが見えた。

「え、とおるん?」

「や、リカ」

「市川と福丸と勉強会は?」

「さあ?」

「や、さあ？　つて……」

「お、私のモノマネ上手い」

「でしょー？」

「まあ、来たなら上がって」

とりあえず中へ案内する。15階まで上がり、自室の中へ案内した。

家の中に入ると、もういつもの流れ。手洗いうがいでだけして、干してある洗濯物を二人でしまい、ソファアーの上に重ねると、下着類とパジャマを菅谷が、透が私服等を畳み、しまう。

そのまま、菅谷は腰をトントンと叩く。

「ふいっ……疲れた……ん？」

その直後だった。後ろからズシッと体重を掛けられる。透が、背中に額をつけて両腕を腰に回してきていた。

「……どしたん？」

「ん？　んっ……ちよつと、リカ成分補給？」

「なにそれ。どんな成分？」

「香りとか、匂いとか」

「同じでしょそれ」

言いながら、立ち止まる。……どうすれば良いのだろうか？ 立ったままになってい
るわけだが。後ろにいるから頭を撫でてあげることも出来ない。

……ん？ 撫でる？ と、菅谷は小首を傾げる。どうやら、頭より先に本能が理解し
たようだ。

「もしかしてとおるん、甘えたがつてる感じ？」

「……う、うん……？」

マジか、菅谷は内心で舞い上がる。もしかしたら、母性に近い何かがあるのかもしれ
ない。男なのに。

「分かった。おいで」

「えっ」

そう言った菅谷は、透の腕を引いてソファーに腰をかける。その横に座った透は、横
に身体を倒して菅谷の膝の上に頭を置いた。

「おお……とおるん。どうしたのほんとに」

「別に？」

にこりと微笑みながら、視線だけ向けてくる透に、菅谷は胸の奥をドキリと締め付け
られた。

「……ど、どうしたの？ なんか……もしかして、マドちゃんと喧嘩でもした？」

「した」

「したの？」 なんてっ……………！」

「んー、でも今のこれはあんま関係ないよ。雛菜直伝、男を照れさせる甘え方、なんだけど……………あんまり効いてない？」

「そんな事より、なんで喧嘩したの？」

「ん……………んー、なんか……………リカに送った写真の事で。勝手に送ったら怒られた」

「え……………そんなことで？」

「そんなことまでならよかつたんだけど、その後に来たリカからの『マドちゃん、普段は超甘えん坊なんだ。かわいい』でプチギレちゃって、追い出された」

「……………俺の所為？」

「うん」

「とおるんに言い切られたくないんだけど……………」

とはいえ、そういうことか、と菅谷は小さくため息をついた。どうやら甘えるだけの甘やかすだの言っている場合ではない。

「……………ま、あんまり私は気にしてないけど」

「いや、ダメでしょ」

「いやほんとに。このくらいの喧嘩……………というか私が怒られるような事は初めてじゃな

いから。明日あたり、顔を合わせた時には仲直りしてるよ」

「……」

確かにその可能性はありそうではあるが……いや、まあ確かにその可能性はある。仲良い奴ほどそう言う節はありそうだし、円香の怒りだつて怒りというより恥の方が大きい。そうさ。

「でも、まだ怒ってる時に顔合わせるとやばいかも」

「……なるほどね。それでうちに来た？」

「うん」

「じゃ、しばらくいて良いよ」

言いながら、透の頭を撫でる菅谷。サラサラの髪が指に絡んでは解け、自分があげたピアスが耳に付いているのに目が引かれる。

そこで、菅谷のお兄ちゃんモードは急に途切れた。……つーか、なんで膝枕しながら頭撫でてあげてるの？ と言わんばかりだ。

「あ、あの……とおるん。ちよつと恥ずかしいんだけど……」

「え、今更？」

「う、うん……まあ」

「……ダメ、このまま」

そう言いながら、ズボンをキュツと握る透。逃がす気は無いようだ。

仕方ないので、しばらくはなすがままにされている時だった。インターホンの音が鳴り響く。

「ごめん、お客さん」

「え〜……仕方ないなあ」

「ありがとう」

「おんぶで良いよ」

「……どうぞ」

仕方なく、菅谷は透を背中を乗せる。そのままのつしのつしと歩いて、応対した。

「もしもし?」

『……リカ?』

「つ、ま、マドちゃん?」

驚いた。まさか、会わせちゃダメ、と言われた側から来るとは。透も自分の口に手を当てて黙り込んでいる。

「ど、どうしたの?」

『ん、ちゃんと生活できてるか見に来た』

喧嘩した事は隠すつもりらしい。なんかもう言い分が嘘くさいから。

その表情はかなり……でもないが、それなりに苛立っている。拒否したら菅谷にも当たられそうだ。

「ど、どうぞで?」

「っ!?」

『ん』

そこで自動ドアを開けて、通話を切った。

「なんで入れるのっ?」

「いや、追い返せないでしょ。怒ってるし」

「だからって、まだ熱り冷めてないのに……」

「とにかく、隠れて。俺の部屋にっ」

「わかったよ……」

そんなわけで、大慌てで透を部屋に入れ、靴を隠す。透が手ぶらでできた事は幸運だった。

その直後、ピンポンと再びインターホンが鳴り響く。慌てて鍵と扉を開けた。

「おかえり」

「ただいま……いやここ私の部屋じゃないでしょ」

「あ、そ、そっか。どしたの? 勉強会は?」

「終わった」

言いながら、円香はいつもの流れで手洗いうがいだけして、菅谷と一緒にリビングの方へ。

「なんか飲む？」

「ん……いい」

「そう」

やはり、なんか素っ気ないな……と思いながら菅谷が思いながらソファアームに座った時だ。

後ろから、肩にズシッと体重がかけられる。硬い何かを押しつけられ、痛みが走るが、気にする事なく声をかける。

「……マドちゃん？」

「……あのさ、私って面倒臭い？」

「全然？」

「……考えてから答えて」

「……全然？」

「……」

「どしたの？」

喧嘩したことを悔やんでいる、という事は分かっていたが、一応聞いてみた。

「……さつきちよつと浅倉に言い過ぎたから」

「気にしてないでしょ。とおるんだよ?」

「……毎回、喧嘩する時はこうだから。で、次の日には無かった事になってるから」

「それも仲良いからでしょ。……俺には喧嘩するような友達がいなかったからよく分からないけど……普通は喧嘩したらそのままサヨナラとかになるんじゃないの?」

「……」

そう言いながら、菅谷は手を伸ばして肩の上の円香の頭を撫でる。

「だから大丈夫。……仮に二人が喧嘩しても、絶対に俺がなんとかするから」

「……やっぱり」

「え?」

「……浅倉、この部屋にいるでしょ」

「……………へ?」

急になんの話? と思つた時にはもう遅い。円香の両腕に力が入り、菅谷の身体を離

さない。

「な、なんでわかつたの……?」

「『ここに来た時』とおるんは?」って聞いてこなかった時から違和感があった。今、相談

して確信した。喧嘩の理由とか聞いてこなかったし」

「……」

マズった、と菅谷は大量に汗をかく。演技か……と、思った直後、円香の腕から力が抜けた。

「……ま、でも良いよ。別に、もうあんま怒ってないし」

「ホントっ？ 樋口」

「出てくるの速すぎでしょ……」

てか、ずっと聞いてたっぽい。まあ、菅谷の知ったことではないが。

「とにかく、もういいから」

「ふふ、流石、樋口」

「バカにしてんの？」

「わっ、うそうそ。……あ、そういえばリカ」

流石に今のまま話が続いたら怒られる、と思ったのか、すぐに透は菅谷に声をかけた。

「私が来る前、出掛けてたけど、何処に行ってたの？」

「え？ ああ、ゴミ拾いボランティア」

「真面目か」

「いやいや、実際は中学生の女の子とセミの羽化の観察してただけだよ」

「は？ 今なんて言った？」

「えっ？」

結局、最後に怒られるのはやっぱりバカだった。

大事なのは、咲いた後の話。

夏休み後をだるく感じるのは9月の下旬から。

夏休みが終わり、学校初日。円香は嫌な予感がしていた。何故なら、家の前に透が来ないから。

まあ、そこまでは想定通り。しかし、問題はそいつに似て非なる男の方であつて。一人暮らしのバカタレの場合、起こしてくれる人もいない。

……急いだ方が良さそうだ。その為にも、まずは浅倉に言うことを言う必要がある。そのため、インターホンを押した。

『はい？ あら、円香？』

「透いますか？」

『そういえば、まだ起きて来てないけど……どうしたの？ こんな朝早く』
「いや、今日から学校なので」

お母さんも把握していないのはいつものことである。蛙の子は蛙というわけだ。

だが、切り替えの速さは、やはり娘とは練度がちがう証拠でもある。

『あー……今、起こすから待っててね』

「いえ、私はもう一人の寝坊助を起こすので、いつもリカと待ち合わせている場所で集合、と伝えて下さい」

『そう。分かった』

それだけ話すと、円香は急ぎ足で駅に向かった。すぐに定期をピツと鳴らし、車内で揺らり揺られて学校兼菅谷のマンシヨンの最寄駅へ。

マンシヨンまで急いで来て、部屋番号を押す。……が、応答が無い。予測通りなのにイラつとするのは何故だろうか？

「……はあ」

仕方なく思い、スマホを取り出す。ここで延々と鳴らし続けても良いが、他の人が来たら迷惑なので、菅谷にしか迷惑が掛からない方法を取った。

その名も……「スタンピング爆」である。シユボボボボボつと指を高速で動かしていると、ようやく返事が来た。

LIKA☆『かまちよ?』

後でぶつ飛ばす、と決めつつ返事をした。

樋口円香『違う。今日から学校。開けて』

LIKA☆『了解』

了解、とは言われたが、少しだけ間があった。多分、日付を見たのだろう。今、絶対

焦ってる。

開いた自動ドアを潜り、円香は中に入ってエレベーターに乗って上がり、部屋に到着した。

扉を開け、中に入ると、菅谷が大慌てで部屋のカーテンを開けて布団を干していた。

「そういうのは私がやるから、あんたは自分の支度して」

「わっ、ま、マドちゃん！　ありがとう」

「まったく……いつになつたら慣れてくれるのか……」

やれやれ、と言わんばかりに肩を落として、円香も慣れた手つきで家事を始める。別荘から帰ってきた後も何度かこの部屋に来たので、何をどうすれば良いのかは全然、忘れていない。

布団を干し、洗濯機を回し、ゴミ出しに行き、部屋に戻る。すると、朝ご飯の良い香りが漂って来ていた。本当に料理を少しずつ学んでいるようだ。

「ただいま」

「あ、マドちゃんも食べる？　フレンチトーストとサラダ」

「……私の方も？」

「朝早くから来てくれたし」

「……もう」

歯ブラシもこつちに置いてあるし、何の問題もない。時間は……なんか思ったよりも余っている。洗濯機が洗濯を終わらせるのを待つ以外、やる事はないから。

そんな時だった。ピンポンとインターホンが鳴り響く。見なくても誰か分かった。

「おはよう、とおるん」

『リカー、入れてー』

「はいはい」

言われて、自動ドアを開けた。

「浅倉？」

「うん」

「早っ。寝てたから置いて来たのに」

そんな話をしながら切り分けたトーストを食べていると、すぐにまた呼び出し音が鳴り響く。

「開いてるよー！」

声を掛けると、透が入ってきた。

「おっ、美味しそうなもの食べてる」

「とおるんも食べる？」

「待つて。そんな時間ないでしょ」

直後、透から「ぐうう……」という情けない音が聞こえてくる。

「え、とおるん。朝ご飯は？」

「食べてない」

「……食べる？」

「食べる」

「……急いで。遅刻したくない」

×~~×~~ 円香にも許可をもらい、三人で食べ始めた。

×~~×~~

さて、学校が終わり、下校時間。すぐに菅谷の部屋に帰って来た三人は、まず手洗いうがいをしつつ、帰り道に買った食材を円香がしまい、菅谷は洗濯物をしまい、透は布団をしまつて敷く。

各々がそれを終わらせると、円香と菅谷はエプロンを装備。最近から二人で料理をするようになったのだが、二人ともこの時間が少しだけ気に入っていた。

「何食うかー」

「まだ暑いし、冷たいもの？」

「寿司とか？」

「やってみなさいよ」

「じゃあ……天そば？」

「……まあ、それしかないか。私、かき揚げ作るから。あんたそば茹でて」

「はい」

なんて話しながらテキパキと役割分担をし、実行に移る。その間、透は勝手にテレビを使つてドラマを見始めた。

「リカ、人参取つて」

「はい。……こつちで野菜切ろうか？」

「お願い」

「はいはい。……あれ、おそばどこ置いたっけ」

「はい」

「お、ありがとう」

なんて話しながら料理を続けている時だった。しばらく黙り込んでいた透が、ソファーから立ち上がつて歩いて来る。

「リカ、代わつて」

「え、なんで？」

「代わつて」

「いや包丁使うから危ないよ？」

「代わって」

「玉ねぎとか目に染みるよ?」

「代わって」

「代わつてもらう前に怒つたら?」

割と馬鹿にしているような内容が含まれているのもノータッチ。思わず円香が口を挟んでしまったほどだ。

とはいえ……菅谷も円香との料理は楽しいし……譲りたくないなんて言えば器が小さく聞こえるが……いや、まあ結構夏休みに料理していたし、たまには良いかと思う事にした。

「分かったよ……じゃあ、俺はその間に」

「休んでて良いよ。今、HOROやつてるから」

「やつてるつつーかつけたんじゃ……」

「良いから座って」

とのことで、菅谷はソファに座り込んだ。

一人退屈になりつつも、時折、二人の方をちらりと見る。……羨ましい。もしかしたら、透も寂しかったのかもしれない。

「浅倉、もつとにんじんは細く細かく切って」

「え、もつと細く？」

「あと玉ねぎも。もつと細かくして」

「これ以上、小さくするの？ もう無理じゃない？」

「……リカと代わって」

「あーうそうそ。やるやる」

……大丈夫だろうか？ 少しでも心配になりながらも、しばらく任せてぼんやりした。

それから数分後……ようやく完成したのか、机の上に大量に盛られたそばとかき揚げが運ばれて来た。

「出来た」

「おお……美味そう」

「でしょ？」

「浅倉は野菜大きく切っておそば茹でただけでしょ。かき揚げ作ったの私だから」

「でも、私も作ったから」

「二人ともありがとう」

「……」

お礼を言うと、二人して頬を赤らめる。お礼ひとつでそこまで喜ばれると、逆に照れ

る。

さて、机の上に並ぶそばとかき揚げ。ざるそばなだけあって、汁も用意されていた。

「「いただきまーす」」

挨拶して、そばを汁につけて啜る。

「んっ、美味あ」

「いえーい」

「かき揚げも美味っ……っ、歯茎に刺さった……」

「ふんっ……バーカ」

憎まれ口を叩きながら、円香は自分もザクザクとかき揚げを噛み砕く。意地でも透に細かく食材を刻ませたため、美味しく出来ている。

褒められた事で満足したのか、透がそばを啜ってから二人に聞いた。

「ゾボツ、ゾボボツ。この後、どうしよつか？」

「その啜り方、やめて」

ウザくなる前に円香が言う。その後が続いて菅谷が口を開いた。

「そうだ、そういえばこの前、気がついたんだけどさ」

「？」

「なんか二人とも、うちにめっちゃ物置いて行つてない？」

その一言に、二人ともビクつと肩を震わせる。

「エプロン、歯ブラシ、ジャージ、あとなんか化粧のポーチつぽいの、手鏡……これ二人のだよね？」

「……別にあった方が良いと思っただけ」

先に言い訳……ではなく理由を言い放ったのは円香だった。

「エプロンとか使うし、ここでリ〇グフィットやる時とかもあった方が良いし、ご飯食べ終わった時はすぐ歯磨きしないとだし」

「ね。ダメ？」

「や、置いていくのは良いんだけど……もしアレなら、二人が使う部屋用意しようか？」

「え？」

「いや、部屋一個余ってるから。今は学校関連のあれこれ置いてるけど、俺の部屋に入らないでもないし」

そんなことをほざき始める菅谷の前に、円香と透は顔を見合わせる。いや、まあ正直、魅力的な提案ではあるのだが……。

「もう別荘で一泊しちやってるから言うけど、土日とかは、金土とかに泊まりに来ても良いよ。なんなら市川とか福丸も連れて来て良いし」

「それはない」

「なんで……」

とはいえ、流石にそれはマズい。まだ高校一年生、いくら仲良いと言つても、部屋まで用意されるのは如何なものか。

確かに菅谷の部屋の前の部屋が何に使われているのかいまいち、把握し切れていない二人だったが、自分達のために使う、なんて少し甘え過ぎな気がしなくてもない。

そもそも、この部屋だつて菅谷は大学生になつたら別の部屋か実家に引越すかもしれないのだし、置いてあるものは持て余してしまう気が……。

「私、下着入れる棚欲しい」

「良いよ」

「浅倉……」

いい加減にして欲しいものだ。本当にこの女は。何でもかんでも賛同せず、たまには反論の一つでもしてもらいたいくらいだ。

「どうせいつか泊まることになるだろうし、安いのも買っておきたいかな」

「はいはい。じゃ、それ買いに行こつか」

「樋口も買うでしょ?」

「……」

まあ、2人がそう言うなら、買つても良いかもしれない。いや別に泊まりたいとか、泊

まる機会があるかもとかではなく、あくまで2人がそう言うのならアリと言えばアリなのかもしれないみたいな感じみたいな。

「……買う」

「よし、決まり！」

×そんなわけで、買い物する事になった。

×

×さて、場所は百均。二人が使う部屋とはいえ、基本は菅谷が使っているマンションの一室なので安物を買う事にした。

「なるべくなら、目立たない感じのにしてね。……男の部屋に女の子の下着が置かれるわけだし」

「ファンシーなのにしよっか」

「うん。キラキラしてる奴」

「勘弁してよ……。もし、有栖川さんとかが下着泥棒されて警察がうちに捜査協力をお願いしに来たら、逮捕されるの俺なんだから」

「どういう想定？」

そんな話をしつつ、プラスチックの小さな棚を見にくる。

「まあ、真面目な話すると透明なのはちよつとね……」

「うん。リカから見えない方が良い」

「俺もそうしてくれると助かる。……家の中にいながら、変に緊張とかしたくないし」

「匂いとか嗅いじやダメだからね」

「? パンツに匂いとかあるの?」

「え、そ、それは……」

「浅倉、無謀な勝負に挑むのはいい加減、諦めたら?」

「……?」

本当に分かっている菅谷を見て、やはり透は何処か納得いかなさげだったり。

「ああ、でもそういうことか」

「? 何が?」

「下着泥棒って、匂い嗅ぎたくて盗むんだ。あれ全然意味わからなかったんだよね。欲しけりや買えば良いのについて思ってた」

「いやあれは……というか、この話題やめて。何の話か分かっている?」

円香が言うのと、菅谷はハツとする。生物について学んでいたような顔から、一気に照れた頬が赤く染まっっていく。

「っ、ぐ、ぐめん……」

「おお……すごい、樋口。リカに一発お見舞いした」

「ふっ、楽勝」

「いや、何を誇ってるのマドちゃん……」

だが、少なくとも二人の間では、口で菅谷を照れさせるのは凄腕の技術である。

そうこうしているうちに、プラスチックの棚が置いてある場所に到着した。

「……よし、着いた」

「あんま種類ないね」

「百均だからね」

「適当に選べば良いよね」

「ん」

そう話して、適当な棚……というより箱を選ぶ。円香も透も、特に「これ可愛い」みたいなものがあるわけではなく淡々と選んでいると、円香の肩にチョココンと何か乗せられる。

それを見た透が、ちよんちよんと肩を指した。

「樋口、肩」

「ん？」

顔を向けると、そこにいたのはカマキリのおもちやだった。

直後、それを振り払う事なく円香は菅谷の首に手を伸ばした。

「おぐっ……!! な、なんっ……!!?」

「何の、真似……!」

「いや、ちよつと、かまって……欲しくて……!」

「……あつそ。じゃあこのままあんたが死ぬまで構ってあげる」

「待つて待つて樋口。割と人の視線集めてる」

珍しく透が止める側に回っていた。仕方なく円香は手を離す。

「まったく……あんたは。てか、暇ならあんたも選ぶの手伝ってくれない?」

「いや選ぶほどバリエーション無いし」

「まあそうかもだけど」

その直後、透が菅谷の後ろから体重をかける。それと同時に、透は顎を菅谷の肩に置き、両腕を肩の上に置いた。

「リカ……ちよつとで良いから、おとなしくしてて?」

「っ、お、おう……?」

以前習ったテクニクを見事に活かし、菅谷を封殺する。その様子を眺めながら、円香は内心で「やるじゃん」とか上から目線で感心してしまった。自分には絶対そんな真似できない。

「で、どれにする?」

「というか、下着類どれくらい置くの？」

「そんなしよつちゆう泊まることないし、2〜3日分もあれば良いと思う」

「なら、二人で一つで良いかもね」

「いや、ジャージとかパジャマも置くでしょ」

「パジャマはリカの借りれば良くない？」

そこから先はサクサクと話が進む。菅谷が黙るとここまで話が進む。

結局、選んだのは大きめ且つ中に仕切りがつけられるタイプ。円香と透のものを二分できるようにするためのものだ。

「よし、行こう」

「ん」

「あの……とおるん、俺を挟んで下着の話するのはやめて……」

「嫌ー」

×× ラッパのような返事をして、そのまま三人で購入を終えた。

×× その後は、わざわざ下着が売っているお店に寄った。流石に菅谷を連れ込むのは酷な気がしたので、その間、菅谷は外で待機。近くにあったゲームセンターに立ち寄っていた。

で、今は新たな二人の部屋。そこをリフォームする。まずは中に入っているものを全て出す。

「……結構、物あるじゃん」

「後で片付けるの手伝ってくれる、んだよね？」

「私、このあと仮眠の用事ある」

「私も樋口と添い寝の用事ある」

「その部屋使つて良いから」

「いやベッドが良い」

「分かった。今日の晩ご飯も食べて行つて良いから」

「冗談だから。そんな必死にならなくて良い」

そう言いつつ、泊まり用にあらかじめ用意されていた布団の運び込み。二つ重ねて三人で運ぶ。

人で運ぶ。

部屋に運び込むと、ドサドサとハジに寄せて置く。それとタオルケットも。

「……寒くなつて来たら掛け布団も出そうか」

「ん。今はいい」

「じゃあ、下着しまうから出て行つて」

「はいはい」

普段は洗濯するとき、菅谷の下着を見ることは多いくせに、自分達のは見せたくないようだ。

出て行く菅谷の背中を眺めながら、二人はでっかい箱の中に仕切りを三枚置き、パジャマや下着をしまつていく。

「よし、こんなもんでしょ」

「ホントはもう少しモノ置きたくない？」

「いや私達の部屋であつて私達の部屋じゃないし。あんまり多く物置いたら迷惑でしょ」

「ま、そっか」

そんな話をしながら、二人は箱をハジにおく。

「よし、良いよ。リカ」

声を掛けると、中に入つて来た。ガチャつと扉が開かれ、ヌツと顔を出したのは……
てんとう虫だった。

「えっ」

が、それはモチツと左右から押されて潰れる。そして遅れてヒョコツと顔を出した菅谷が、それを二人の間に放つた。

「はい、これあげる」

「わっ……もちもち」

「これ、どうしたの？」

「あとこれも」

「わ、ちよっ……！」

さらに遅れてダンゴムシが放たれる。

円香がてんとう虫、透がダンゴムシをキャッチして、少し狼狽えたように聞いた。

「これ……どしたの？」

「さっき、ゲーセン行ってる間に取った。部屋、殺風景じゃつまんないでしょ？」

実を言うと、透との誕生日デートの後から、たまに一人でゲーセンに行つてクレールンゲームを練習していた。成功率は決して高くはないが低くもない。今日のは、まさにその成果だった。

わざわざ新しい物を用意なんてしなくても……と、思いつつも、なんだかんだ言つて嬉しくて、円香はぎゅつと抱き締めてしまう。

「……自分の趣味全開じゃん」

「ありがと。リカ。意外とダンゴムシも可愛いかも」

「いいえいえ」

素直にお礼を言つた透とは対照的に、まず憎まれ口が出る自分に嫌気がさす円香だつ

だが、菅谷は自分と透、二人に笑みをこぼしてくれる。そんな優しさがやっぱり少し怖いと感ずることもあった。

まあ、次の一言を聞けばそんな気も失せるのだが。

「ちなみにマドちゃんにあげた方のでんとう虫はナナホシテントウって言って、赤い羽に7つの黒い紋が……」

「詳細はどうでも良いから」

「ね。……さ、続きやっちゃおう」

「もうやる事もないでしょ。荷物が少ないんだから」

「良かったら、俺の部屋から虫のフィギュア持つてく？」

「いらない」

そんな話をしながら、三人は新学期をスタートさせた。

※前書きの内容が物語の内容となっているわけではありません。

LHR……つまり、ロングホームルーム。この時間では、今日は文化祭の準備である。そのために決める事は、まずは役割分担であった。学校が始まった直後の席替えで、運良く同じ辺りに集中した円香、透、菅谷は文化祭実行委員会が進める会議の様子をぼんやりと眺めていた。

「えー、では……めんどくせーから、役割は全てこちらで指名しまーす……が、その前に部活の出し物とかもあるだろうから、三日間ある文化祭のうちダメな日は今、言ってくれや」

なんか途中から普通にタメ口になりながら、男子の実行委員がそう言い、女子の実行委員は黒板に「1、2、3」と数字を書く。

その様子を眺めながら、菅谷は円香と透に声を掛ける。

「……ダメな日とかある？」

「ない」

「同じく」

「じゃあさ、三日目は三人で空けておこうよ」

「良いね」

「最後だし」

部活とかの出し物、と言っているのに菅谷は平然とそれを提案し、二人は何食わぬ顔でOKする。

「はい」

「何だ末っ子。言つとくけど、お前らは三日間出てもらうからな」

「え、なんで？」

「当たり前だろ。うちの看板だぞ、そこの三馬鹿姉弟」

それを聞いて、ピクツと円香も反応する。

「え……待って。女子なんだけど、私と浅倉」

「男よりイケメンだろ、浅倉は。けどその二人コンビを店に出してみろ。何が起こつてもおかしくねーし、コントローラーが必要だろうが」

「はあ？」

「それに、樋口の執事服も絶対似合うね。……なあ？」

「うん。男のあんたより絶対似合う」

「う、うん……」

書記役をやってくれてる子にズバツと言われ、少し狼狽えていた。

「えー、でも俺らだつて文化祭見て回りたいんだけど」

「じゃあお前ら……そうだな。三日目の夕方、二日目の夕方、どっちが良い？」

「え、だからどつちか片方なの？」

「美男美女が出る執事喫茶なんだから仕方ねーだろ。大いなる力持つ者として責任を果たせ」

「顔つて大いなる力なの？」

「力だろうが。宝具になる奴だつていんだぞコラ」

「知らないけど……」

とりあえず「どうする？」みたいな表情で菅谷は透と円香に顔を向ける。

「どうするも何も、断れなさそうでしょ」

「私は別に良いよ。三人一緒なら」

「とおるん……。……や、でも市川と福丸と回る日とかないの？」

「あ、そっか」

「じゃ、それは二日目のお昼にするから」

そう話して決めると、菅谷が再び言った。

「じゃあ、三人一緒の休みは三日目の夕方、マドちゃんとおるんは二日目のお昼もお

休みで」

「どう思う?」

「良いんじゃない? 要するに菅谷くんは姉二人が遊ぶ時間を身体で稼ぐって事でしょ?」

「だな」

「だって。なんか旦那みたいじゃない?」

直後、透と円香から顔面へ消しゴムと定規が飛んで来て炸裂した。

そのまま他の生徒の予定も黒板に埋められていく。そして次は各々の役割分担であつたが、いつの間にか三人は普通に執事役で落ち着いたので特に何もなし。

さて、授業で使われる時間は終わった。帰りのホームルームを挟んでから、次は青春の代名詞、放課後の作業時間である。

「そういえば、シャ○チー公開されたけど、とおるん見た?」

「あ、まだ」

「マドちゃんは?」

「まだ」

「じゃあ見に行こうよ」

「良いね」

との事で何食わぬ顔で荷物を担いで帰ろうとする三人……だが、その間に実行委員の男が入った。

「いやいやいやいや！ 何普通に帰ろうとしてんだ？！ お前らはうちの目玉商品って言うってんだろ！」

「目玉親父？」

「おい、リカ郎（裏声）」

「リモコン下駄！」

「痛っ。……ちよつと」

「わっ、ごめん。大丈夫？」

「謝るなら浅倉の後ろから出て来て」

「映画でチユロス奢るから許して」

「……んっ」

「じゃあ私もー」

「えっ、とおるんはカンケーないじゃん……ま、良いや。行こう」

「いやいやいやだから！ 何で普通に行こうとしてんの？！ どういう流れで目玉親父出て来たか分からんがか？！」

「わお、土佐弁」

「わし、映画の前にタピオカ買うて行きたいわ」

「良いかも」

「その流れも面白いから！」

強引にバカ達の会話を打ち切る。

「お前らにも仕事あるに決まってるだろ!!? 普通に執事服の採寸とかもしないだし」

「「えー……」」

「三人揃って嫌そうな顔と声を出すな！ 樋口、お前までなんだ!!?」

そうは言われても、基本的に樋口はノリとしてはむしろ二人の方が琴線にあっっている。二人ほど身投げしていないだけで。

「とにかく、まだ帰らせねーぞ。あつちで衣装係の女子が待つてつから、はいいけ」

そこまで言われては仕方がない、と最初に思ったのは円香だ。ため息をつく、菅谷と透の間に入って両腕に自分の腕をかける。

「仕方ない……行くよ、二人とも」

「えー、映画ー」

「シャ○チー」

「リカ、あんたの大好きな学校ならではイベントだけど？」

「……あつ、そっか」

「浅倉、リカは行くって」

「じゃあ、私も行く」

しれつと扱うと、そのままその女子の群れへ。近づいてくるのに気が付いた女子が控えめに手を振った。

「あ、おーい、そこの美男美女」

「こっち来て」

言われて、三人ともそこへ向かう。男子の相手をする係と女子の相手をする係に分かれてるようだ。

菅谷と適当な挨拶だけした円香と透は、女子達に話す。

「スリーサイズは？」

「私は80／57／76」

「私は76／56／73」

「りよー」

なんてやってる間に、チラリと円香は菅谷の方を見る。

「じゃ、制服のサイズ見せて」

「良いけど、大きめの買えって父ちゃんに言われたから、サイズ大きいよ」

「あーそつか。じゃ、測らないと。足の長さ見るから動かないで……」

「ウエストと股下なら私が知ってるから、後で教える」

「え？」

「え？」

思わず口を挟んでしまった。実際、何度もズボンやら服やらを畳む機会があつたし、把握しておいて正解だった。

「そ、そう？　じゃあ、上着を……」

「トップスも知ってる」

「……どういう関係？」

「……別に何だって良いでしょ。リカ、そう言うわけだから少し待つてて」

「あ、うん？　……俺だって自分のサイズくらい把握してるんだけどな」

なんて言いながら、やる事がなくなった菅谷はポツンと待機するしかなかった。

一応、採寸をするとのことで、円香と透は一度、教室を出て女子トイレに行ってしまった。

しばらく待つていると、菅谷の元に女子生徒がやってくる。

「菅谷くん、ちよつと来て」

「？　何？」

「執事喫茶なんだから、執事っぽい仕草も練習しなきゃでしょ」

「え？ あーうん？」

「叩き込んであげるから。ゴトーになるまで」

×そう言つて、連行されてしまった。

×

「ふう……思ったより時間かかった」

「胸、水着買った時よりまた少し大きくなつてた」

「……それ、太っただけでしょ」

「大丈夫、樋口もいつか大きくなる」

「喧嘩売つてんの？」

そんな話をしながら、二人で廊下を歩いて教室に向かう。

「ていうか、映画どうする？」

「無理でしょ。休みの日に行こう」

「だよね」

「大丈夫でしょ。リカ、たまに洗面所でシャ○チーの構えの練習してるし」

「私もしてるよ？」

「歳いくつ？」

まあ、行ける日はいくらでもある。菅谷もどうせ暇だし。

そんな事を思いながら教室内に入った直後だった。あまりに華麗な仕草で円香の手をやたらとキメ顔の菅谷が取り、甲に唇を触れるフリをした。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「っ」

すんつ、と円香は白目を剥き、それとは対照的に顔が真っ赤に染まる。今にも失神しそうなほどだ。

「私めが、お席へご案内いたします。どうぞ、こちらへお越し下さい」

その無駄に良い顔から出される無駄に良い声が、作り物だと分かっているにもかかわらず、円香の胸の奥をキュツと掴んだ。

その後、キリツとしていた表情をいつもの真顔に戻した菅谷が、円香の目前にまで迫って聞いて来た。

「ね、どう？ どうだった？ 役になり切れてた？」

「……」

「？ マドちゃん？」

「リカー、私にもやって」

「あ、うん。じゃあドア開けて」

と、話して、一度扉を閉めて、円香とは反対側の扉から開けた。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「おかえりなさいませ」

「……そこは何も言わないですよ」

「あー、ダメだよ菅谷くん。だから執事になった以上はどんな時でも臨機応変に対応して！」

監督をした女子生徒が口を挟んだ時だ。バタンッと何かが倒れる音がする。顔を向けると、円香が顔を真っ赤にして後ろに倒れてしまっていた。

「え、樋口？」

「マドちゃん？」

二人して顔を向ける。何が起こったのか分からないが、ヤバそうだ。

「どうしたんだろ？」

「とりあえず、保健室運ぼうよ」

「そうだね」

そう話し、菅谷が円香をおんぶしようとした時だった。

「待って！」

口を挟んだのは監督の女子生徒。二人して顔を向けると、その女子生徒は腰に手を当

てたま言った。

「ダメだよ。運ぶ時もちゃんと執事の気持ちになって！」

「えー、どういう事？」

「だから、つまりね？」

××

「……でき、土曜で良い？」

「良いよ？ 全然」

呑気な話し声が耳に届いて、円香の意識は少しずつ覚醒する。いつ眠ったんだっけ？
と思ったが、思い出せないのもどうでも良い。

そんなことよりも、だ。眠っていたのに、今の自分は歩いていないのに身体が前に進んでいるような感覚があるのが不可思議だった。車の中？ いや少なくとも学校にいたのに、それはおかしい……。

「あ、樋口起きたよ」

「マジ？ ……うっ、うんっ」

バレたので思い切って目を開けた時だった。目の前にあるのは、菅谷の顔面だった。それも、メチャクチャに至近距離。

歩いてないのに進む身体、ぶらぶらと揺れる両足と片手。何よりなんか仰向けみたい

になつてる……まさかこれ、お姫様抱っこ？

そう自覚した直後、菅谷から再びイケメンボイスが放たれる。

「お目覚めですか？　我がお嬢様。……残念、もう少しその無防備で口にしたくなるような寝顔を、拝見しておきたかったのですが」

「~~~~っ!!?　……きゆう」

「あつ、また」

いやあんたさつきまで雑談してたでしょ、なんてツツコミを入れる余裕もなく、再び失神してしまった。

顔の良さ、とは実に厄介なのだ、と何度も円香は実感していた。それは浅倉透だけでなく、自分にも言える事だ。ぶりっ子、と言うつもりはないが、大して話したこともない男子に何度も告白されれば、嫌でも顔の良さを自覚してしまうというもの。

だが、その厄介さは決して自分や同性だけでなく、異性でもその通りのようだ。

さつきまでの光景が脳裏に焼き付いたのか、夢にも出て来てしまい、慌てて飛び起きた。

「っー」

身体を起こした直後、布団が大きく捲れ上がる。その自分の両肩に、そつと手が添え

られた。誰が当てた手かなんて、見なくても分かる。

「ち、ちよつと……いい加減にしてよ……い！」

「ダメですよ、お嬢様……まだ、お顔が赤いようですよ」

「っ……？」

声が違う。ハツとして振り向くと、そこにいたのは透。油断……っ？ と、振り返った直後、ベッドの真横にいた菅谷が自身の頬に手を当てる。

「そうです、お嬢様……熱がない、などと嘘を言っても無駄ですよ？」

「っ、ま、まさか……い！」

言いながら、一度だけ小さく深呼吸をしてから顔を近づけてくる菅谷の前に、円香は狼狽える。キスされる、なんて思ったわけではない。熱を測られるわけだ。

しかし、どちらにせよ顔が至近距離にまで来るのは事実。恥ずかしさのあまり、顔が見れずにキュツと目を瞑った時だ。

「……」

「……」

「……」

額にいつまで経っても何かが当たったような感触が来ない。恐る恐る目を開けると、菅谷も片手を顔に当てたまま頬を赤く染め上げて目を逸らしていた。

「ち……ちよーつと、俺にこれはハードル高いかな……なんて」

「ちよつとー、台無しじゃん。せつかく二人でセリフとか考えたのにー」

「いやだから、とおるんがこつちやつてって言ったのに」

「私じゃインパクト足りないじゃん。同性だし」

「……」

「この野郎ども……まさかとは思うが、途中からわざと自分を照れさせるためにそんなことをしていた？」

「ていうか、熱をおでこで測るとか、模擬店で実際に使うことあるの？」

「さあ……それは実行委員の人の指示だし」

あくまで二人はセリフの練習のつもりだったようだ。……それが尚のこと腹立った。自分は練習段階の不意打ちで二度も失神させられたのか、と。

というか、そもそも面食いでもないのに何であんなバカに失神させられたのか。こんなんじや、本当はなんだかんだ言って菅谷のことが好きな面倒臭いツンデレという、円香が一番嫌いなタイプの女みたいだ。

恥ずかしさと怒りから少しずつ熱が上がっていく。ゴゴゴゴツという擬音が実際に聞こえ、何なら見えそうなほどのオーラを放つ円香は、菅谷と透を睨みつけた。

当然、気付いた二人は、お互いに体を向け合って両手手を繋ぎつつ、顔だけこちらに

向けて怯えている。

「わーお……………もしかして、怒ってる……………?」

「れ、練習台にしたのは悪かったから落ち着いて……………」

「……………絶対に嫌」

本当に熱でもあるかのように、フラフラと立ち上がる円香。今にもこの世の全てを消し去りそうなオーラでさえある。

「ど、どうしようか……………リカ……………?」

透が気圧されながらそう言う中、菅谷は少し決心したように深呼吸すると、シャア専用みたくなっている円香の額に手を当てた。

「……………何の真似?」

「やっぱり熱あるじゃん。ぶっ飛ばしても良いけど、その前にちゃんと寝てなきやダメだよ」

「……………」

「ただでさえ、前にも風邪で学校休んでるんだし、ちゃんと安静にしてて」

「……………」

これから怒られる立場のくせに、そもそもお前の所為で2回も気絶させられたのに、確実にそんなこと言えた口じゃないはずなのに、そして、それら全てを理解しているの

に、それを言われて感情が昂ってしまっている自分が、なんだかもうわけわかんなかった。

唯一、分かったのは、さっきまでのキャラ作りなんて比較にならないオーバーキルが、心身共に襲いかかった。

また気絶する。そう理解したが、その前に円香は菅谷の両肩に手を置く。そして、とても嬉しそうな表情のまま言い残した。

「……ホント、最低……！」

「へ？」

再びベッドの中に沈んで行った。

その円香を眺めながら、菅谷はとりあえず円香の身体に布団を掛け直す。その言葉を言われるのは何度目か分からないので平然としていたが、その菅谷に透が言った。

「すごいね、リカ」

「？ 何が？」

「今の樋口を鎮める方法を本能で理解してるあたりが」

「え、だって寝かせてあげないと。二回も失神してるし」

「まあ、うん……とりあえず、しばらくここで執事ごっこしてよう」

「うん」

×× 執事ごっこを始めた。

時刻は19:30……つまり、最終下校時刻である。部活をやっている生徒も後片付けを終わらせていないと怒られる時間。保健室では、ようやく円香が目を覚ました所だった。

「お嬢様、こちら執事と遊べるオプション表でございます。私どもが僭越ながら、お嬢様方の委屈凌ぎになれるよう考え、編み出した遊戯を記したものでございます。どうか、この中からお好きなものをお一つ、お選び下さい」

「じゃあ、このコインって奴で」

「了解致しました。では、私の手元をよーくご覧になって下さいませ」

言いながら、菅谷は手のひらを両手とも広げて透に見せる。左手にだけコインが乗っていた。

それを宙に投げると、目では追いきれない早さで両手を高速で動かし、左右に拳を作って開いた。宙に投げたはずのコインは消えている。

「どちらに入っているでしょうか？」

「分かん」

「いや選んでよ」

「ていうか、リカそれマスターするの早すぎだから」

「……あの二人、何しているのだろうか？ 一応、あれも執事の練習とか？」

正直、理解不能……と、思っていると、時計が目に入る。最終下校時刻になっていた。

「……あ、マドちゃん起きた」

「ホントだ」

「熱平気？」

「コイン遊びやろう。ちゃんと教えるから。リカが」

起きたことを気づかれてしまった。ため息をつきながら、思わず悪態をついてしま

う。

「……何遅くまで遊んでるの。先に帰ってて良かったのに」

「やだよ」

「ね。気絶させたのリカだし」

「……そういえばそっか」

「い、いや……ていうかなんで気絶したの？」

「っ……」

それは、円香にも分からない。なんか、今日はよく気絶する日だ。……主に、顔だけは良いバカのおかげで。

にしても、今まで同じベッドで寝たことがあっても気絶なんてしなかったのに……何だかこの前、部屋を作ってからやたらと菅谷を意識してしまう事が多くなった気がした。

「……なんでもない。それより、帰ろう」

「え、待つてよ。コイン遊びのオプシヨン、練習しなくて良いの?」

「今度やるから」

それだけ話して、三人は保健室を出た。

帰る頃には、外は真つ暗。いつも明るいうちに帰っていたので、こんなのは随分と久しぶりだった。それこそ、受験シーズン以来かもしれない。

「わお、外暗っ」

「久しぶりだよね。こういうの」

「……うん」

たまには居残りというのも悪くない。受験シーズンだって、本当は辛いものはずなのに三人で頑張ったからか、なんだかんだ楽しかった思い出になっている。

「マドちゃん、本当に体調平気?」

「平気だから。別に体調悪くて倒れたわけじゃないし」

「その方が怖くない?」

「浅倉は黙つてて」

余計なことを言う幼馴染である。なんなら、その何か知つていそうな笑みが非常に腹立つ。

「よし、じゃあ今日は俺が二人を家まで送ろう」

「はあ？」

「いや、いつもは俺が家まで送ってもらつて、部屋でまったりしてから帰つてるでしょ？」

「それはあんたのマンションのが学校から近いからでしょ」

「それに、毎度駅まで送つてくれてるし」

「体調悪い時くらい良いでしょ。俺、執事だし」

「何あんた。それ気に入つてんの？」

「じゃあ、私も執事だから、樋口家まで送る」

「あんたは元々、隣でしょ」

少し暗い夜道にテンションが上がりながらも、夜道を歩いていった。

例えば、高校から暗い夜道を歩いて帰宅するのは初めてかもしれない。

「そういえばさ、今年夏つぽいことつて、まだひとつだけしてなくない？」

そんなことを言い出したのは透。円香と菅谷は揃つて小首を傾げた。

「肝試し」

「……ああ」

確かに、と、言うように二人とも頷く。

「やりたい？」

「いや別に」

「機会があつたら？」

正直、三人とも怖くはない。基本的に冷めているのである。

「小糸ちゃんが入学してからやってみよっか」

「殺すよ」

「あー、確かに福丸はビビり散らして破裂しそう」

「破裂……する？」

「しないでしょ」

「いや涙腺が」

「それはしそう」

なんて話しているうちに、駅に到着した。そのまま三人は電車に乗る。

「懸垂して良い？」

「良いよ」

「一駅しか移動しないんだから、我慢しなさい」

姉の貫禄が炸裂しつつ、すぐに降りた。スーパーを見るなり、菅谷は聞いた。

「ご両親に菓子折り持ってた方が良いかな……」

「送ってもらおう立場で菓子折りなんてもらえないんだけど」

「むしろ渡されるかもよ？ 結構な頻度でご飯食べてってるし」

「いや、作ってるの私だから」

「……よくよく考えたら、マドちゃんってタダで料理の練習出来てるわけだよ。本番でマドちゃんの本気手料理とか、割と楽しみかも。多分、来年のおるんの誕生日あたりかな？」

「……あーあ」

「あふんっ!? い、痛いんだけど……」

「うるさい黙って」

「な、なんで怒ったの……?」

なんて話しながら、二人の自宅の前に到着した。

「……改めて見ると、お隣同士って羨ましいなあ」

「リカもうちに来る?」

「良いの?」

「良いわけがないでしょ」

「あ、透……と、円香とリカくん？」

声を掛けられ、3人が振り返ると後ろには透の母親がいた。

「……あ、どうも」

「こんばんは」

「こんばんは。随分遅かったね」

「文化祭の準備で」

「ふーん……懐かしい。私も文化祭で遅くまで残ったこと……あつたっけ？」

「え？ 知らない」

「私も覚えてないわ」

似た者親子のようだ。

「いつもありがとうね。うちの子、よくお宅にお邪魔してるんですよ？」

「あーいえ。別に大したことしてないんで。飯もマドちゃんとおるんに作ってもらっ

ことが多いですし」

「そうなの。……うちの子がねえ？」

「……別に良いでしょ」

チラリと透を見て、透の母親はクスツと微笑む。

「とにかく、リカくんもいつでもうちにおいでね？ 今日はお父さんがいるから殺されちゃうかもだけど、いない日ならいつでも歓迎するから」

「？ お父さん、ゾンビか何かなんですか？」

「うーん……まあそれで良いわ」

「うん。じゃ、また明日ね。リカ、樋口」

「ん」

「またね」

母親が来たことにより、透は一足先に自宅へ引き返した。

さて、それなら自分もそろそろ帰ろうか、と思った菅谷は、円香に顔を向ける。

「じゃ、俺もそろそろ帰るね」

「待って」

「？」

「たまにはうち寄って行かない？」

「え、なんで？」

「これからうち帰ってご飯用意するの面倒でしょ？」

本当は透も誘う予定だったが、まあ流れるに仕方がない。

「そんな事もないけど……でも良いの？」

「平気。今日、うちはお父さん仕事のはずだから」

「え、マドちゃんのお父さんにも歓迎されてないの？」

「おいで」

「否定してよ……？」

とりあえず、半強制的に菅谷の腕を引いて、家の中に入った。

「お帰りなさ……あら、リカくん」

「お邪魔します」

「珍しい。どうしたの？」

「マドちゃんがどうしてもって言うか……げふっ！」

「私の所為で最終下校時刻まで残らせちゃったから。そのお詫び」

それっぽい理由を言いながら、先に家の中に上がる円香。その後が続いて、菅谷も靴を脱いだ。

「ご飯、もう出来ちゃってる？」

「ん、まだ。ご飯は炊いてあるけど……作る？」

「……んっ」

あつさりと看破され、そのまま家の中に案内してもらった。手洗いうがいだけして、とりあえずリビングに入る。

円香が料理を作っている間に、菅谷は緊張気味に食卓に座った。その正面に、円香の母親がついて、目の前にコーラが置かれる。

「飲んで」

「ありがとうございます」

ありがたくもらい、一口、口に含む。

「……ホント、顔はイケメンなんだ」

「? ありがとうございます?」

「どう? 高校とか一人暮らしは慣れた?」

「はい。マドちゃんとかとおるんとか、いつも来てくれますし、正直助かってます。俺、家のこととか前までほとんど母親にやってもらってたから、頭の中ではやることを理解してても、手際良くとはいかなくて」

「そうでしょうね。わざわざうちの子達と離れないために一人暮らしなんて、相当勇気があるんだ?」

「や、むしろ臆病だからだと思いますよ。あの二人と別れることを考える方が怖かったですし」

言いながら、菅谷はコーラを口に含む。

「そんなに好き? うちの子も透も、別のベクトルで気難しいでしょ」

「全然。それを心配してるのはこっちです。俺、昔からずっと嫌われやすい体質ですから」

「……そんな事ないんじゃない？」

「いや、今なら分かりますよ。他人に無関心を貫き過ぎた結果なんだなって。中三の時だって、たまたまとおるんと趣味が映画で共通のものだったから良かったけど、そうじゃなかったらクラスメートのお宅にお邪魔するなんて事、なかったでしょうし」

またコーラを飲んでから、菅谷は続けた。

「俺なんか結構してくれるマドちゃんにもとおるんにも、感謝してます」

「……ふふ、そう」

樋口の母親は、実に愉快そうに自分のコーラを飲んだ。

「……でも、たまにうちの子もキツイこと言うでしょ？」

「そこが可愛いんですよね。なんか、こう……言葉選びとかが楽しいです。むしろそれが聞きたくてわざとボケることもありますし」

「何それ。かまってちゃんなの？」

それを正面から言われて少し頬が赤くなる。良い歳して恥ずかしいが……まあ事実ではあるのだから仕方ない。

「まあ……そうですね。たまに本気で怒られますけど」

「良いよ、別に怒らせちゃって。あの子、なんだかんだ面倒見良いから」

「分かります、それ。なんだかんだ、うちでご飯作ってくれる時とか、好みに合わせてくれますし」

「あら、分かってたの」

意外そうな顔で見られたが、バレバレだ。

「言ったら『は？ 偶々だから。勘違いしないでくれる？ ミスター自惚れ屋』って怒られましたか」

「あ、言いそう。……実は、あなたのために家事とか好きな料理とかも覚えてたんだよ」
「なんか照れますねー。幼馴染にとおるんがいるとあんなに面倒見良くなっちゃうんですね」

「それは違うでしょ」

「え？」

「あの子がそこまでやるのは、あなたが……」

「お、お母さん！」

その直後だった。コーラのペットボトルを持って円香が割り込んできた。

「つ、よ、余計なこと言っていないでコーラおかわりしたら？」

「ありがとう」

「リカ、あんた人の家来て何寛いでんの？」

「え……だめなの？」

「手伝つて。働かざる者は食うべからずだから」

「え、これお礼だったんじや……」

「今からお隣行つて浅倉のお父さん呼んでこようか？」

「わ、分かったよ……」

仕方なく、菅谷は立ち上がって台所に向かった。

とりあえず手を洗い、家の中のエプロンを借りた。

「何作るの？」

「……唐揚げ」

「よっしや。俺、何すれば良い？」

「私がタレ作るから、あんたは肉切つて。ちゃんとフォークも通してね。終わったら、

私が揉み込むから、キャベツ千切りにしておいて」

「はいはい」

それだけ話して、テキパキと手を動かし始める。レンジで解凍された肉を取り出すと、まな板の上で包丁をクルクルと回して構えてから刻み始めた。

「危ないからやめて」

「ごめん。実は家で練習してて何回か指切ってる」

「バカなの？ ……そういうの、ホントやめて」

「お、心配してくれてるの？」

「……それで良いからやめて」

「はーい」

「……」

「……」

そこを注意されると、しばらく黙り込んでしまった。……そんなに包丁の件、心配されたのだろうか？

片眉を上げてしまうと、円香がボソツと呟くように言った。

「……本気にしなくて良いから」

「？ 何が？」

「お母さんが言ってた事」

「え？ ……ああ。あの事。え、全然そんな事なかったの？」

「そういうこと」

「なーんだ……そうだったんだ」

「……」

少し、しょんぼりしてしまう。過去に自分のために色々してくれる人なんて家族が室寺しかいなかったから、少し嬉しかったのに。

「……やっぱり、どう思っても良いから勝手にして」

「え？」

「だから……べ、別に……その、お母さんと話してた通りに思っても、良いから……」

「……はい？」

「……もうなんでもない」

「ねえ、それってやっぱあつてたつて事？」

「し、しつこい……！」

「教えてよー」

「良いから！」

「教え……あつ、ゆ、指切った！」

「……自業自得だから。……指見せて」

そんなやり取りを眺めながら、円香の母親は色々と思うところがあつた。「普通に認めてしまえばそんな恥はかかなくて済むものを」とか「一度言つたことはどんなに恥ずかしくても伝わるまで相手に言えば良いのに」とか「そもそも普通に抜群の息の合い様ですな」とか「自業自得なのに手当てはしてあげるんだ」とか色々。

でも、だからこそこれ以上、余計なことは言わないことにした。娘の恋路が上手いくように祈るのみだ。娘が幸せを感じられるのなら、例えどんな形であつても。

嫌よ嫌なの、いやほんとに嫌だからマジで。いやいやいやいや、フリじゃなくて嫌よまで言っようやく好きのうち。

クラスに手芸部兼コスプレガチ勢がいてくれたことが幸いし、執事服は全員分、オーダーメイドの上に費用もそこまでかからなかった。

そのため、料理や飲み物にお金をかけられる。さて、そんなわけで、三人はお使いへ行くことになった。

買うのは練習用の食材。なので、一人暮らしで近くのスーパーのセールなどを完全に把握している菅谷と円香が選ばれたわけだ。透は「二人が行くなら私も行く」と駄々をこねて同行。

で、スーパーで買い物しに来たのだが……。

「とおるん、試食のウインナーバカ美味しい」

「ん、食べさせて」

「はいはい。あーん……」

「あー……んっ、あっふ！」

「つ、に、肉片がつ……鼻の穴に……！」

「斬新な間接キス」

「世界初じゃない？」

「いえーい、ギネス」

「ナイス、ギネス」

「ちよつと君たち。斬新ないちやつき方を試食コーナーですのやめてくれない？」

店員さんに怒られたので、円香が二人の襟を掴んで売り場から離れる。

「……何バカなことしてんの？」

「したのはとおるん」

「リカだつて鼻から食べかけ食べて嬉しそうだったじゃん」

「別に嬉しくはないから。面白かっただけで」

「普通、面白いとも思わないけどね」

しれつと円香が口を挟む。円香なら普通に怒るとこだが、何食わぬ顔で笑って流せるのは、果たして器が大きいのか、それとも単純に頭が悪いのか。まあ、おそらく両方なのだろう。

「ていうか、早く食材探して」

「えー……でも、帰ったらアレでしょ？ また執事の練習」

「ね。どんな風にやったって一緒なのに、なんであんな拘るかなー」

「……」

円香も口に出して賛同はしなかったが、内心では同意している。クラスの女子の圧力が凄いのだ。こだわりを持つのは分からないでもないが、わざわざ黒執事を見せられたりするのには普通にかつたるい。

……そう思う一方で、だ。その効果は円香も感じてはいた。こういう普段の菅谷を見ている時と、執事をやっているときの菅谷のギャップがすごい。

ギャップを感じると言うことは、執事の時はかなりカツコよく見えているということなのだろう。……まあ正直、菅谷にカツコ良さは求めていないわけだが。

「ま、当日のためでしょ。一応、出し物のジャンルごとに優秀賞とか出るらしいし、それ取るつもりなんじゃない？」

「そういや、うちの高校にミスコンとかそういうのはないの？」

「あー、そういえば去年は出たっけ。ミスコン」

「他所の高校のね。……あれはあれで斬新な祭り荒らしだったのかも」

「やばっ。私達、斬新尽くしじゃん」

「それな」

「要するに素数って事だから、あんたらは」

つまりは、普通ではない人というわけであつて。ホント、人目を気にしないタイプにも限度があるというものだ。

「でも、マドちゃんもそんな大差ないよね」

「あー分かる」

「その過去稀に見ない侮辱は何？ 今ならタピオカLサイズ奢りで手を打つけど」

「やっす」

「毎日一つずつ一ヶ月間」

「え」

「待つて。俺一人暮らし」

「やめて欲しければ理由を言つて」

言われて、二人は顔を見合わせてから、まともな声で言つた。

「……だつて、マドちゃんも割とサボり魔だし」

「宿題の割り勘を言い出すのも基本、樋口だし」

「基本的にマドちゃんもおかしいよね。そこが好きだけど」

「分かるわー」

言われてみれば、円香にも思い当たる節はあつた。しかし、円香はおそらく三人の中

では比較的、一番プライドが高い。つまり、そういう子に限って、正解を突かれると余計に機嫌が悪くなり、ルールを問答無用で変えてしまうこともあるわけで。

「……タピオカ」

「え？」

「全然、納得いかないから。奢り」

「え、うそだ。凶星つかれて恥ずかしくなった時の顔してる」

「意地でも認めない時の顔してる」

「二ヶ月にされたいわけ？」

「ま、マドちゃん……」

「もしかして、ブチギレてる……？」

嫌な予感に脳裏が包まれた結果、二人は顔を見合わせ、そして頭を下げた。

「今日一日、なんでも言うこと聞くので許して下さい」

「……じゃあ、まずは二人で買い物済ませて来て」

「御意」

「一日、イケメン二人を好き勝手できる権利を得た円香だった。」

××

「浅倉、そのキャベツより横の方が大きい」

「リカ、醤油はお得用にして。これ前も教えた」

「浅倉、そのチョコとつて。それは私のおやつ。あなたのお金で買って」

「リカ、飲み物。果汁入りのオレンジジュース。は？ 高い？ だからそれにしたに決まってるでしょ」

見事な女王様っぷりで、見事に買い物を終えた。教室で使う大きい荷物を持たされている菅谷と、円香が個人的に使う飲食物を持たされている透は、円香を先頭にしてスパーを出る。

「あー、楽出来た」

「容赦なかったね……」

「よほど、ご立腹だったのかな……」

「何?！」

「な、なんでもないです!」

思わず敬語で返してしまった。まだ御立腹の様子だし、ここはなんとかご機嫌を取らないと、主に学校に帰ってからの怖い。嫌な執事の練習の最中に何されるかわからないから。

まず動いたのは、透だった。

「そ、そうだ。お姫様……じゃなくて、樋口」

「どんな言い間違い？」

「学校までの道のり、リカにおんぶしてもらったら？」

「は？」

「え？」

巻き込まれた菅谷もハツとして顔を向けるが、透は目も合わさずに続けた。

「リカのおんぶ、それはもう乗り心地良いよ。猫バスと同じくらい」

「何急に？」

「ここまで疲れたでしょ。わざわざ学校からスーパー来てまた学校行くなんて面倒だし、片道くらい楽しんで良いんじゃない？」

「いや、リカ荷物持ってるし」

「それは私が持つから」

透にしては強引なその行動に、菅谷はすぐにピンと来る。つまり……これは、透なりに接待している。怒られないために。なんで菅谷がおんぶになるのかはおそらく普通に自分が重たい思いをしたくないからだろうが、とにかくそういうことなら自分も乗るしかない。

透に荷物を預けると、菅谷は円香の前に背中を向けて片膝をついた。

「よし、ばっちいい」

「……まあ、そこまで言うなら？」

とりあえず、と言うように円香は菅谷の方へ体重を預ける。二人の意図などイマイチ理解出来ない円香は、少し頬が赤くなる。透と違い、初めてのおんぶだ。つまり、胸がほぼゼロ距離で背中に当たるわけで。

……胸の辺りが何か足りないとか言ったらブツ殺す、と心に決めながら、肩から両手を垂らす。

「……じゃあ、お願い」

「マドバス、発進します」

「なんで乗ってる人の名前がつくのよ……」

弱々しいツツコミを入れつつ、円香は至近距離にある菅谷の顔から視線を背ける。おんぶって、思ったより顔近い。

なんとなく恥ずかしいのは顔の距離だけではない。密着した体、そして身体を持ち上げるために太腿に添えられた両手、全てがちよつとだけ近過ぎて恥ずかしかった。

「マドちゃん……いや、マド様」

「何。……あと様って何？」

「乗り心地は如何ですか？」

「……普通」

塩対応……に見せかけて赤くなつた頬を見せないようにする。……が、視線の先には透が立っているのが目に入った。

今日に限つて、茶化すような顔ではなく真顔でこちらを見ている。茶化してくれれば言い訳つけて降りられるのに。

……いや、でも別に降りたいわけではない。降りれば、メンタル的に楽になるのは分かるが、その後はなんだか後悔しそう。

なんだろう、本当に最近の自分はなんだろう。円香の頭の中で、色んな感情がグルグルと渦巻く。胸の奥が締め付けられるように痛い。

その円香を背負っている菅谷が、何一つその複雑な感情を理解していない様子でしゃあしゃあと聞いた。

「……マド様、喉はお乾きではございませんか？」

「……」

……なんだか、これはこれでちよつと悪くなかつた。つくしてくれる辺りが、ちよつと心地良い。

「じゃ、袋から飲み物出して」

「御意」

「樋口……いや、樋口様。私は？」

「浅倉は……じゃあ、浅倉が飲ませて」

「御意」

たまには、こういうノリに付き合うのも悪くない。透が袋からペットボトルを取り出す。

「リカ、足止めて。飲ませるから」

「マド様、一時停車してよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

「樋口様、口開けて」

「………ていうか、自分で飲む」

「あ、そう？ まあそうしてくれた方がありがたいけど」

「ん」

足を一旦止めて、飲み物を飲んでからまた動き始める。

しばらく歩いていると、もうすぐ学校という辺りまで来た。流石に学校の人にまで今の自分を見られるのはアレなので、そろそろ降りることにした。

「……リカ。もう大丈夫だから下ろして」

「いえ、そうは参りません」

「………は？」

何が大丈夫？　なんて思ったのもつかの間、菅谷はすぐに続きを言った。

「今日はマド様の執事ですので。このまま教室までお運びします」

「えっ、いや……いいってだから。ていうか執事なら言うこと聞いて。重いでしょ？」

「いえ、女性を持つことに対してそのような感情を持ち合わせてはおりませんので。とおるんでさえ怒りを露わにする地雷でございます」

「知らない所で過去の失敗談を活かしてくれやがって……と、円香の頭の中で焦りが出るが、菅谷はお構い無し。

そのまま校門を潜ってしまった。学祭の準備期間中で、外に出店する予定のクラスや部活生は、屋台を置く面積を測ったりしていた……が、男の子におんぶされている女の子が目に入ると、人目を引いてしまう。

「ち、ちよつと……！　周りの人から見えてるってば……！」

「マド様がお甘えになられるのがレアだからではないでしょうか？」

「そうじゃないでしょ……！」

「樋口、めっちゃ嬉しそう」

「う、嬉しくないから……！」

なんてやっている間に、昇降口に着いた。ここから下ろさないと靴を履き替えられない。

チャンスと思ったのも束の間、透が円香と菅谷の下駄箱を開けて上履きを並べた。
「どうぞ」

「ありがとう、とおるん」

「あんた……覚えてなさいよ……!」

透はともかく、菅谷は本気でこれで接待しているつもりなのだから夕チが悪い。

そのまま三人は自分たちの教室に戻った。

「ただいまー」

「買って来たよ」

「あ、おかえ……り?」

クラスメートがぐるりと振り返る。円香はそれにより顔を菅谷の肩につけて隠すが、到着した事により菅谷は円香を降ろしてしまう。

「お着きになりましたよ、マド様」

「っ……!」

「ねえねえ、なんで急におんぶして帰って来たの?」

「ついに付き合っただの?」

興味本位で目を輝かせながら聞いてくるクラスメート達。それに対応したのは、買って来たものを手渡した透だった。

「いや、樋口がガチで怒って毎日タピオカ奢らせて来そうだったから、接待してたの」
「それでおんぶ……………」

「この子達、鬼……………」

普通に引いてしまっていたが、透は「なんで？」と言わんばかりに小首を傾げる。中学の頃から、割と普通におんぶとかしてもらっていたからか、透も何も分かっていない様子だ。

そんな中、ガツ、ガツと力強く二人の肩が後ろから掴まれる。振り返ると、円香が羞恥より怒りが勝った形相で睨みつけて来ていた。

「マド様、如何でしたでしょうか？」

「……………とり、あえず……………ピンタ、させて……………！」

「え」

ギロリと音がしそうな視線で言われた時には遅かった。ピンタと言われた割にゲンコツが二人の頭に降り注がれ、大きなたんこぶを作った直後、ちょうどそのタイミングで、衣装を掲げた女子生徒が入って来た。

「とりあえず、樋口さんの衣装出来たよ……………何事？」

「……………何でもない」

クラスメート全員が首を横に振る中、とりあえず円香は衣装を持って更衣室に向かっ

た。
××

「なんで怒ったんだらうね」

「さあ……」

本当に分かっていない表情で、二人は更衣室前で待機していた。執事姿は、クラスメート以外には当日まで非公開。その為、着替えが終わったら二人とも更衣室に入る。

まあ、要するに他に使う人がいない上に、先生が更衣室前を通らない間にしか実行出来ない事だが、その辺を「平気でしょ別に」で堂々として出来るのは流石、菅谷と透と円香ならではの事だろう。

二人以外に待機している実行委員の男子が、呑気な会話をしている二人に言った。

「良いか、お前ら。ちゃんと樋口が出て来たら褒めるよ」

「そりやまあ似合つてれば褒めるよね」

「ね」

「万が一、似合つてなくても、だ。自分らが何しでかしたか分かってんのか？」

「マドちゃんが少しでも楽出来るようにバスになった」

「樋口とリカがすんなり学校に来れるように、障害を取り除いた」

「これを本気で言っているんだからタチが悪いのだ、このバカ達は。」

「あのな、普通に考えてみる。お前らが人前でおんぶとかされたらどう思うよ？ それも異性に」

「俺はされた事ないから分かんないけど……とおるんはもう結構、何度もしてるよね」
「えっ？」

「ね。リカのおんぶ、意外と乗り心地良いんだよ。柔道やってたからか安定してるし」
「……」

「こいつらの距離感が怖い、と男子生徒は戦慄する。これで付き合っていないの？ ともちろん思ったが、それ以上にそのレベルの距離感の女子が二人いる菅谷が怖い。」

「なんにしても、分らないならもういい。とにかく、今は怒っている仲良しもう一人のために、今は褒めさせるしかない。」

「……とにかく、褒める。仮に『似合っていない』なんて言っでご機嫌崩される方が困るだろ？ と言うか、そのためにお前らをここに呼んでんだから」

「どゆこと？」

「仲良し同士に限って、喧嘩になるとクラスの空気が重くなんだから」

「放課後、残って作業するのに楽しくなかったらやっていられない。実行委員として、なんて言うつもりはないが、やるからには楽しい方が良いと考えていた。」

しかし、アホ二人には伝わっていないようで、また顔を見合わせてからこっちを見る。

その仕草が、本当に腹立たしく思えて来た。

「いやいや、マドちゃんにそれは地雷でしょ」

「ね。似合っていないのに似合うなんて言ったら、樋口怒るよ」

「はあ？ んなわけないだろ。褒められて怒る女子なんて……」

「？ いないの？」

「少なくとも、私は別に適当に褒められても……あ、でもリカとか樋口からなら嬉しいかも」

「じゃあ褒めようか？」

「カモン」

「顔綺麗、校則違反とか知らんけどピアス似合ってる、髪サラサラ肌で感じたい、ぼーつとしてるように見えて仲良い人のことはよく見てる、なんかもう普通に好き」

「えへへー。攻守交代？」

「俺はいいや。なんか普通に恥ずかしいし」

「……」

もうダメだ、こいつら。第一、今のも適当じゃなくて全部的確なことを言っていただろうに。

こことこうなった以上、コイツらをなんとかするよりクラスメートに注意喚起をした方

が良いのかも……と、思った時だ。ガラツと少しだけ更衣室の扉が開く。顔を出したの
は、手芸部の女子だ。

「準備は良い？ 着替え終わったけど」

「え、もうか？」

「見たい！」

「楽しみ！」

さつきまで怒られてた二人とは思えない反応である。もうどうにでもなれ、と思うの
と同時に、手芸部の女子生徒が扉を開いた。

「じゃーん！ サイズびつたりー！」

そこに現れたのは、黒の上着に白のブラウス、グレーのベスト、下半身は上着と同じ
黒に身を包み、首元にはクロスタイを付けた円香だった。

「おお……似合うじゃん」

声を漏らしたのは実行委員の男子生徒。なんとなく似合っている気がする。女の子
に執事服って、正直不安な気がしなくてもないが、普通に可愛らしい。……まあ、二人
の顔を見るなり眉間に皺が寄ったわけだが。

これなら二人も褒めるしかないのでは？ そう思ってチラリと菅谷と透を見ると、顎
に手を当てたまま固まっていた。

「おい、お前ら……」

「これ、髪型いじらないの？」

「ね。せつかく女の子が執事なんだし」

「む……確かに」

女子が頷くと、菅谷と透は更衣室の中に入る。女子更衣室の中に。

「もつとこう……シヨートでも男に比べりゃ長いし、束ねたら？」

「うん。あと耳出した方が良くもする」

「良いね。任せて」

「ち、ちよつと……サイズの確認だけじゃ……？」

「十分、綺麗だけど、もつと似合うようにするだけだから」

「つ、ば、バカ……！」

そのまま扉が閉められる。仕方ないので、残った少年はどうしたものか考えながらも、とりあえず見張りをすることにした。女子更衣室の前にいる自分もやばいが、中にある菅谷はもつとやばい。

ドギマギしながら待機していると、中から四人の声が聞こえてくる。

「どうすんの？ 私はポニテで別に良いんだけど」

「いや、ありきたりでしょ。もつと凝ったやつが良い」

「はい、じゃあマドちゃんに似合う髪型を募集します。俺、詳しくないから、三人の中
ら、俺がフィーリングで選びます」

「あんたが選ぶわけ？」

「よし、のった」

「日福さん（手芸部の女子生徒）まで……」

「ルールを説明します」

「なんでルール？」

「大喜利にならない事。アフロとかリーゼントとか選ばないように」

「浅倉限定のルールじゃん」

「あ、あはは……」

「見てみたくて、俺もそれ選んじやうから」

「あんたらのそういうとこ、ホント信用ない」

「あ、あはは……じゃあ、選ぼっか……」

……なんか、とてもさっきまで喧嘩していた三人組とは思えないほど楽しそうな声
聞こえてくる。もしかして、あまり怒っていなかったのだろうか？

しばらく調べている最中なのか、声がやむ。が、すぐに聞こえて来た。

「私、決まった」

「私も」

「じゃ、見せて」

「はぐ」

「……とおるんのがなんか編み込んでる奴で、もう片方が……アニメのキャラ？」

「ギブソントックね」

「え、私の方のベディ知らないの？ 執事服の霊衣が解放されて私聖杯ぶん投げたんだけど」

「知らない」

「いや、そんなのいいから、早く選んで。この格好、この季節は割と暑い」

「え？ あー……じゃあ、両方やってみてくれる？ なんか両方似合いそうだし」

「あんたいる意味なさすぎるでしょ……」

「仕方ないじゃん。より良いマドちゃんのために」

「……私を商品みたいな呼び方しないで」

「オーダーメイド樋口」

「浅倉、あんたほんとあとで覚えてて」

「じゃ、やってみよっか」

……やっぱりまだ怒ってはいえるようだ。それなのに、お構いなしと言わんばかりに髪

型をいじれる二人のメンタルが知りたい。

「出来た。まずはギブソンタックね」

「わっ……可愛い。女性執事っぽい」

「ホント。マドちゃん、一生俺の部屋で家事して欲しい」

「わお……」

「大胆……」

「……どこぞのご主人様に選ばれてほんとに身に余る光栄。思わず余り過ぎて拳が飛び

そうなほど」

「え、ゲンコツされるの俺……？」

「樋口、比較用に写真撮るから。こっち見て」

「え、ちよっ……勝手に……！」

ピロン、と電子音がする。

「まずはこれが、ギブソンタックの樋口ね」

「……ん」

「じゃあ、次はベデイの樋口さんに……あ」

「どしたの？」

「髪の毛長さ足りないかも」

「……」

「ギブソンタックで決まりだね」

「……なんか消去法みたいなんだけど」

「大丈夫だよ。マドちゃん。執事さんみたいでとっても綺麗でカッコ良いから」

「……女の子への褒め方じゃないし」

ドア越しでしかそのセリフを聞いていない少年にも、その声音は満更でもないニユアンスが含まれていたことはすぐに分かった。

何となく、理解した。多分、三人の中では、もうお世辞を言うとか、そんな間柄ではないのだろう。何もかも本音で言い合える、そんな仲だ。

確かに、ここまでの会話の流れや円香の態度を聞いていると、お世辞を言った方が機嫌は悪くなりそうな感じはあった。

「ていうか、いい加減暑いんだけど」

「ああ、ごめん。じゃ、俺教室行ってるね」

「ん」

それだけ言いながら、菅谷だけ更衣室から出てくる。

「なんか、悪かったな」

「何が？」

「さつき、余計なこと言った臭くて」

「別に？」

「教室戻らだろ？ 行くぞ」

「んー」

×そのまま二人で先に引き返した。

×

×今日の作業を終え、その日は解散になった後。円香は結局、恥をかかされた事に関しては何も解決していないため、一ヶ月間タピオカ入手権を手に入れた。

透と菅谷から一日交代で、放課後にタピオカ。今日も早速、それを購入してから帰宅した。

帰ってきて家に到着し、ご飯とお風呂を終えて、あとは寝るだけ……なのだが、何となく気に掛かったのは、夕方の執事服の件である。

似合っていた、と褒められはしたが、菅谷の反応がいつもより薄かった気がする。普段なら、赤面して目を逸らしながら褒めるのに、今日は普通にナチュラルな感じで褒めて来た。

「……」

いや別に反応が薄くなったことに不満があるだとか、もしかしたら本当はあんま似

合ってなかったのかも不安があるだとか、そんな事は決してない。

ただ、まあ、ちよつとだけ思わないでもないが……いや、だからこの心の矛盾はいつたい何？　そもそもなんであのバカといえるだけでたまに緊張することも増えてくるわけ？　などなどと、悩みがフツフツと膨らんできてしまう。

特に、夏休みの別荘の夜あたりから、菅谷の事で悩む事が増えた。

そもそも、あのバカが自分と透以外と仲良くしようとするのを見ると、何故か異常に不愉快になるのも謎だ。

自分は一体、菅谷の何が気に入らないのか。

自分は一体、菅谷に何を求めているのか。

考えれば考えるほど、自分が嫌になっていく。自分の本当の感情も理解出来ないのに、とりあえず菅谷に当たる自分が情けなく思えて。

そして、おそらく察したわけではないだろうに、こういう時に限ってあの男はタイムリグよく声を掛けてくれるのだ。

「……チェイン」

届いたのは、菅谷からのメッセージだった。

L I K A ☆『マドちゃんの写真に剣を持たせてみました』

送られて来たのは三人のグループ部屋。執事服姿の円香の写真だった。棒立ちな訳

だが、両手を手元に組んでいる辺りに短い短剣を握らされていた。

とおるん『わつ、すごい似合う』

どういう意味？ と円香が片眉をあげている間に、菅谷からすぐ返信が送られてくる。

LIKA☆『でしょ？』

とおるん『こうして見ると、樋口ってバトル漫画とかに出てそうだよね』

LIKA☆『分かる。バトル漫画あんま読んだことないけど』

とおるん『良いなー。私もなんか執事服着るの楽しみになって来た』

LIKA☆『とおるんは髪型とかいじる事なさそう』

とおるん『えー、私も耳出したい』

LIKA☆『耳に髪かけるだけでだいぶ変わるでしょ』

とおるん『ふーん』

『とおるん が写真を送信しました』

LIKA☆『わ、耳かけてる。可愛い』

とおるん『でしょ？』

なんてアホな会話を、しばらく眺めながら、また悩みがなんかどうでもよく感じて来てしまった。

いつもこうだ。こうして悩みがどうだって良くなる。だが、今回はどうでも良くするわけにはいかない。菅谷に対する自身の感情がどういったものなのか、いい加減把握する必要がある気がする。

そのため、チエインは無視してそのまま考え込んだ。

LIKA☆『マドちゃん、今お風呂かな？』

とおるん『そういえば来ないね』

とおるん『珍しい』

LIKA☆『天岩戸作戦する？』

とおるん『良いね。褒めちぎれば来るでしょ』

LIKA☆『いつも面倒見てくれて優しい』

とおるん『面倒見は良いけど要領よくサボろうとするの最高』

LIKA☆『たまに呼ばれる英語のミスターなんか大好き』

とおるん『別荘に行くと決まってから、お肌のケアと体型維持めっちゃ頑張ってたの可愛い』

LIKA☆『どおりで綺麗だったわけだ』

無視するわけにはいかなかった。いい加減、このバカ達を黙らせないと考え事に集中出来ない……なんてセリフが言い訳じみたことを自覚してしまった。

まるで、本心は別にある、そんな感覚だ。とりあえず、もつと自覚してみることにした。

「……………」

褒められるのが恥ずかしいから？ それもあるだろうが、それ以上に「嬉しさに耐えられない」という感覚に近いものがあるかもしれない。

……いや、でも嬉しさに耐えられないってなんなのだろうか？ そんな大袈裟に嬉しいのは何故なのか……。

……まさか、自分も菅谷明里のことが好きだから？

「……………」いやいや、いやいやいやいや……………」

そりやまあ今まで会った男の人の中では一番好きだが、そもそも今まであった男の人がみんな父親か教員かほとんど話した事がないのに告白してくる学校の男子生徒の誰かしらだし、別に恋愛的なそういうあれじゃないし、そもそも好きになる理由が無……………いやそこは割とあるが。

「ツ……………」

ダメだ、やつぱり考えちゃダメだ。そう思い直し、円香は枕に顔を埋める。

L I K A ☆『マドちゃんの泣きぼくろもアレだよ。チャーミングなんたら』
とおるん『超良い位置にあるからね』

LIKA☆『そういえば、そろそろマドちゃんの誕生日?』

とおるん『何あげるの?』

LIKA☆『クワガタの大顎とか?』

とおるん『やば。色合い的には似合いそう』

こんなバカ達が好きだなんて、もはや恥でさえある気がする。何より、菅谷のことは透が好いている。それが分かっただけで、自分まで菅谷が好きになってどうなのか。

樋口円香『あんたら明日、ぶっ飛ばすから』

それだけ送信し、早めに眠る事にした。

素直さといじっぱりさは紙一重。

異変はその翌日に起こった。

円香と透は、いつものように集合場所へ向かっていた。珍しく円香がギリギリの時間に家から出て来たため、割と待ち合わせ時間ストレスの時間だ。

「樋口、なんかあったの?」

「別に。ちよつと寝坊しただけ」

「なんか疲れてる?」

「疲れてない」

寝不足なのだ。あの後、あんまり眠れなかった。なるべく雑菜のムカつくダル絡みを思い出して菅谷の事を抹消してたら眠れた。

「……そう。まあそういうえば、今日は私の執事服出来てるかな」

「さあ?」

「めっちゃ楽しみ。リカ、褒めてくれるかな」

「さあ?」

「と言うか、そもそも私に似合うかな。執事服」

「さあ？」

「ふふ、めっちゃ聞いてない。ウケる」

まあ、でも結局、自分の菅谷に対する想いなんてその程度。あれ以上にムカつく奴のことを考えれば忘れられるのだ。だから、全然大丈夫。とにかく、悟られないようにすれば良い。

「……リカ関連？」

「は？ 何が？」

「あ、反応した。当たりだ」

にこりと微笑まれ、苛立ちが増す。実際、正解なわけだから尚更というのもあったが、それ以上に透にハメられるなんて屈辱どころの騒ぎではない。

「どしたの？ もしかして、昨日褒められまくったのまだ怒ってんの？」

「むしろ今から怒りそう」

「あー、嘘嘘。……じゃあ、どうしたの？」

「何でもないから。気にしないで」

そう言えば、透は引き下がる……そう思ったのだが、甘かった。菅谷と関わって、僅かであっても変化を催していた。少しくらい他人に興味を持ち、三人一緒にいられために努力をしようとする事もあった。

なんとなく嫌な予感がしたのか、透にしては珍しく追撃する。

「もう認めちゃえば良いのに。リカのこと好きだって。多分、向こうも樋口のこと好きだし」

「……は？」

直後、円香の顔は再び赤くなる。羞恥以上に怒りが勝ったような色。思わず透は「やばっ」と声を漏らす。

「何なの？ 違うって言うてるでしょ」

「いや、もう無理でしょ。別に好きになる事くらい、恥ずかしくないと思うけど」

「うるさい。しつこい。ていうか、あんたこそあのバカのこと好きならさっさと告白でもなんでもして付き合えば良いじゃん。……あいつ、何処からどう見たってあんたの事好きだし」

「……あつそ」

ピリツとした冷たい声音が、透から漏れた。言い方が気に障った。

円香自身、言わなくて良いことまで言ったかも、と内心で少し後悔が満たされる。透の割にしつこく言って来たのは、透なりの心配だったかもしれないのに。

駅に到着した。無機質な音と共に開かれたドアを潜り階段を上がりつつ、鞆の横にっいているパスケースを持つ。

「……」

「……」

改札を抜けて待ち合わせ場所に着くまで、二人は一言も会話をすることはなかった。到着したものの、円香はそのまま素通りして歩く。

「？ 樋口？」

「先行く。あんたらだけで仲良く来たら？」

「……」

そのまま歩いて円香は学校に行ってしまった。透は仕方なくその場で待機。ぼんやりと菅谷を待っている、僅か一分もしないうちに到着した。

「お待たせ。とおるん」

「ん。おはよ」

「マドちゃんは？」

「先行った」

「……喧嘩でもしたの？」

「んー……まあ？」

喧嘩というか、慣れないことをした結果、と言うべきか。さつきは少しだけイラつきましたが、今はもうあんまり怒っていない。むしろ、怒らせたことをちよつとだけ後悔し

ていた。

……が、まあああなると円香は少し面倒臭い。ここは時間をおいた方が良さかも……なんて透が思っていると、ギョツと手を握られる。

「え？」

「じゃ、急いで追いつこうよ」

「や、待つてよ。それは……」

「早く仲直りした方が良さでしょ。今日のお昼、俺なんか朝早く目が覚めたから、珍しく弁当作ったんだよね。とおるんにもマドちゃんにも、味見して欲しいし」

×大丈夫だろうか？ と、透の胸の中に不安が渦巻きながらも、とりあえず後を追った。

×「はあ……」

やってしまった、とし円香はため息をつく。透は単純に心配してくれていたのに、突っぱねてしまった。

自分のそう言うところは本当に良くない……と、思いつつも、向こうのデリカシーの無さにはやはり少しだけイラつともする。

しかし、それよりも、だ。透から見ても、やはり自分は菅谷のことが好きに見えるよ
うだ。

「っ……」

それが、なんだかとても癪だ。自分は別に本当にあんなバカな事が好きではない……好きではない、はずなのに……そう思えば思う程、嘘をついている時の罪悪感が胸の中を締め付けていく。

「……何なの……？」

もう、訳が分からない。自分で自分の頭の中がグチャグチャになるのをしみじみと感じる中、とりあえず今は落ち着く事にした。透を置いていったのだから、せつかく忘れかけていた菅谷のことをどう思っただのかをまた思い出してしまったから、今、本人の顔を見るわけにいかないと思っただけだからだ。

勿論、単純に透がムカついたから、というのものもあるが。

だから、まずかった。後ろから、今一番聞きたくない男の声が聞こえて来たのは。

「マドちゃん」

「っ……？」

「追いついたあ……朝から走っちゃったよ」

「いや、ホントに……」

しかも、聞きたくない声ランキング堂々の二位である透でセットだ。

「っ、り、リカ……何？」

「何？　じゃないでしょ。とおるんと喧嘩したって？」

「……別に、喧嘩じゃないし」

「いやいや、こうして別々にわざわざ登校してる時点で喧嘩でしょ」

「っ……」

やめて欲しい、お願いだから。

今、自分に優しくするのは。

今、自分に親切な態度で接するのは。

それをされる度に、胸の奥が痛む。

「はい、そういうわけで何が原因か知らないけど、仲直りしよう。で、一緒に登校しよう」

「っ……」

「とおるんもそれで良いでしょ？」

「うん」

一緒にとか、仲直りとか、簡単に言わないで欲しい。原因はお前の事なのだから。

バカにはわからないかもしれないが、喧嘩の仲直りというのは歳を重ねるほど複雑で、簡単な事ではないのだ。

「仲直りの初歩は、とりあえず『ごめんなさい』でしょ。まだ誰とも喧嘩したことない俺でも、それくらいは知ってるよ」

それはその通りだが、それは子供までの話だ。どうか、さつきから元凶が、的外れなことをいつまでも言うのか。

円香の中で、少しずつ苛立ちが強まっていく。

そんな中、菅谷は握っていた透の手と、円香の手を握った。

「はい。そんなわけで、仲直……」

「……うるさい」

「え？」

思わず眩きが漏れた時には遅かった。カツとなつて手を引き抜いた円香は、そのまま菅谷に向かって言い放った。

「……たまには一人で登校したって良いでしょ。……もう、放っておいて」

「……え？」

「……じゃ」

素つ気なくそう言い放つと、円香はスタスタと歩き去って行ってしまった。

そして、早くも後悔していた。自分は、一体今、何を言ったのか。そして、どう言うつもりで言ったのか。

素直な性格の菅谷の事だ。もしかしたら、今の態度で決別するハメになってしまうかもしれない。

せつかく同じ高校にまで来たのに、たった半年くらいでこれである。胸の痛みがさらに大きく広がり、思わず体調不良となつて体にさえ影響して来そうに感じていた。

「……ほんと、バカ……」

××今日、初めての本音が、口から漏れた。

××昼休み。菅谷と透は二人で食事にする。二人だけで、だ。

場所は屋上（無断）。何となく二人で伸び伸びしたいと思ひ、二人で広く明るい場所に行きたかつた。

登校中、円香にバツサリ切り捨てられた菅谷は、徐々にうぎぎぎつと唸りながら頬を膨らませていた。

『上等だよチクショー！　こーなつたら、とおるんと二人きりでイチヤコラしてやるかなコラー！』

と、怒号をあげていた。怒り方まで子供である。

で、今日一日、二人は本当に一言も話さなかつた。席は隣同士であるにも関わらず、菅谷は円香の後ろの席に座っている透にばかり話しかけ、休み時間中、円香は決まつてトイレに出ていた。

透自身、何か思うところが無いわけではなかつたが、まあ自分が口出す事でもない、な

んで自分と円香の問題さえも解決していないことを忘れて呑気に思っていた。

「ほら、見てとおるん。これ、俺が揚げたカラアゲ」

「唐揚げとか作れるんだ」

「うん。めつちや頑張った。一つどうぞ」

「ありがと。じゃ、これ私から。学食の焼きそばパンに挟まってる青ノリ付きの紅生姜」

「わお、超嬉しい」

「良いんだ」

「良いの。どっちかって言うとおかず交換をやってみたかっただけだから」

「じゃあ、パンの表面の皮膚もつけてあげる」

「え、これ皮膚なの？ グロ」

「え、知らないけど」

仲良くやりながら、おかず交換を行う。のんびりともっさもっさと食べながら、透はふと気がついたように言った。

「……この唐揚げ、冷食じゃない？」

「あ、バレた」

「やっぱり」

「料理って難しくてさあ。一応、作ってはみたんだけど、全部炭になったのに中まで火が

通ってなくて、嫌になってこっちのおかずの箱は全部、冷食にした」

「おかず全部、冷凍とか。ファミレスじゃん」

「それな」

2段弁当を見せてそんな話をしながら、菅谷はぽつりと呟く。

「……一人で料理できる気になってたけど、マドちゃんいないと何も出来ないなあ……」

「……」

「あ、いや、別にマドちゃんなんていなくても全然、平気だけどね！ ていうか、料理してた段階じゃ、マドちゃんと喧嘩する前から何も出来てなかったわ。うん」

「めっちゃ気にしてんじゃん。ウケる」

「……」

今の今まで、話題にすら出なかった円香の事を思い出して、少し菅谷は黙り込んでしまふ。

「はあ……気になるよ、そりや……。俺、余計なことしちゃったのかなあ」

「うん」

「やっぱりかあ……。他人の喧嘩を仲介なんてしたことなかったから」

「え、仲介すんの？」

「あれ、仲介じゃなかったっけ？ なんか間に入る奴」

「ちゅ……耐ハイじゃない？」

「じゃあ耐ハイ」

仲裁は耐ハイにされてしまったが、話は進んだ。

「ていうか、リカの耐ハイは余計なことをしたと言うか、本質を捉えてなかったのが良くなかっただけでしょ」

「え？ 本質？」

「そう」

言われてみれば、菅谷は喧嘩の原因を何も知らない。それなのに、一方的に「ごめんなさい」はおかしい、と今更になって分かった。もしかしたら、透が一方的に悪かった可能性もあるのに、円香にまで謝罪を要求したわけだから。

「……で、その喧嘩の原因は？」

「それは言えない」

「え、なんだそれ？」

「樋口の許可なく、言える内容じゃないからね」

「も、もしかして……」

「……」

気付いたか？ と、透は少し身構えてしまう。知られたら、まるで無理矢理、告白さ

せたような事になってしまいうから。

「……し、身体的特徴の事？ だったら……俺も、知らない方が良いかも……」

「……」

バカで良かった。マジで。

「とにかく、私と樋口のこととは心配いらないから」

「分かった。任せた」

「？ 随分とあっさりじゃん」

「だって、俺じゃさつきみたいに失敗するかもだし。……それに、とおるんなら何とかするでしょ？」

「……」

ほんと、良くわからない理由で人を信用する男だ。今まで裏切られたことだって少なくなかっただろうに。

けど、純粹真つ直ぐなアホな子だからこそ、そういうセリフは沁みるものだ。

「……うん。任せられた」

「あ、力借りたい時はいつでも言ってるね。なんでもやるから。耐ハイでも仲裁でも」

「ん。……ん？ 仲裁？ あ、仲裁！」

「あ？ ……ああ！」

××× どうでも良い真理に辿り着きつつ、食事を続けた。

樋口円香は、人がいない空き教室で一人、執事の練習をしていた。練習と言っても、動画とか見ながらたまにそれをしたたり、やっぱりやめたりの繰り返しである。

今日1日、結局二人から声を掛けられることはなかった。いや、なかったと言うより自分が逃げ続けていた、と言った方が適切だろう。

話をかけられる前に、教室から出て一人になる……それじゃ何も解決しないことは理解していたが、なんだかそれで良い気もしていた。

仮に、万が一にも自分が菅谷を好きだとしても、透だって好きなのだ。結ばれるのはどちらか一方だけ。実際、自分は透と菅谷がベタベタくっついていても不快ではないし、逆もまた同様かもしれないが、そればかりは真実なのだ。二股なんて、周りによく見られるかわかったものではない。

「……………」

なら、これはむしろ良い機会な気さえしていた。透と菅谷が結ばれるため、少し距離を置くには持つてこいだ。

そもそも、前からちよいちよい思う所はあった。菅谷が良い奴であることは認める。透に似ているとはいえ、素直で努力家で好奇心旺盛で人を見ていないようで見ている。

たまにイライラさせられるけど、あれは自分より他人のために力を発揮するタイプ。その上、イケメンでお金持ちの息子というおまけ付き。自分には、少々もつたいない気さえする。

「……透と、ずっとお幸せに」

そんな眩きを漏らした時だった。教室の扉が開く音がした。入って来たのは、文化祭実行委員の男子生徒だ。

「あ、いた」

「? ……ああ、文事くん」

「妹と弟が探してたぞ」

「別に、妹でも弟でもないから。それやめて」

「……なんかあったのか?」

「は?」

「今日は1—2名物、姉弟コントがなくて教室が平和だったから気になってただけど」

「……別に、何にもない」

「わ、分かりやすつ……!」

「……」

意外と腹立つこいつ。というか、自分達のアレがコントとして扱われていたのも腹が

立つ。

「で、何があったの？」

「……別に、何もないって」

「大丈夫だって。あいつらには言わんから」

「……しつこいのが最近の男子の流行りなわけ？」

「いやいや、困るんだよ。話してくれないと。俺は文化祭実行委員だし、結構この出し物に気合入ってるし。そういうイベントに、お前らだけ喧嘩中つてのもアレだろ」

「……」

友達というわけでもないのに、わざわざ気にかけてくれるのはありがたいが……。

「……俺はな。昨日、お前を怒らせた後のあいつら二人を見たよ」

「はあ？ ……ああ、おんぶの後」

「俺はお前がすぐに怒るんじゃないかねーかって思ったから、あいつらに『執事服が似合ってるかろうと似合ってるよと褒める』って言ったよ。機嫌崩されてクラスの空気悪くなるのはごめんだったからな」

「……で？ 感謝でもしろって言うの？」

「ちげーよ。でも実際、あいつらは褒めるより髪型いじれとか真面目な顔で言ってる？」

「……」

言われてみればそうだった。あの二人は基本的にどんな時でも本音ばかり口に出す。その分、嘘が下手くそだ。

「つまり、お前の事を理解し切ってたよ。完全に、とは言わなくても、あの場でヘラヘラとお世辞を言うより『これはこれ、それはそれ』って切り替えて話した方が良い、ってな」

「……結局、何が言いたいわけ？」

「俺には、そんな友達はいない。普段、つるんでる連中と話す時も、相手を気遣って傷つけるような事は言えないし、言われても文句は言えない。喧嘩になるのを避けるために笑って誤魔化すんだ。……だから、お前らの仲を見ると少しだけ羨ましくなったりすんのよ」

「……別に羨むような仲じゃない。ほとんど、尻拭いばかりさせられてるし」
「でも、その分楽しかった思い出も多いんじゃないの？」

その直後だった。ヴーツと動画を見ていたスマホが震える。送り主は「バズーカ」なんてよく分からない掛け声で撮ってくれたおかげで、透と円香の表情がぎこちないまま撮られている写真がトプ画になっている菅谷から。

そして、送られて来たのは写真。透の執事服姿だった。やっぱりイケメンなのが少し

ム力つく。

「……」

でも、確かに楽しい思い出は多かつた。まあ、それも今後、生み出されることは無くなるわけだが……。

「まあ、喧嘩の原因を知らねー俺はこれ以上、言えることはねーけど、そんな友達同士なら、さっさと仲直りしないと、せつかくの文化祭なのに勿体無いんじゃないかね？　って思うけどな。俺は」

「……」

「じゃ、とりあえず俺、教室……あー、あいつら今、試着中だから、更衣室に戻るから。自分から戻るんなら、二人には何も言わないでおくけど、どうする？」

「それで良い」

「はいよ」

それだけ言つて、文事は出て行つた。

残つた円香は、顎に手を当てて考え込む。正直、別に喧嘩の原因が解消されたわけではない。大元は、菅谷のことが好きか否かだ。

けど、透と色々あつて、菅谷とも色々あつて、少しナイーブになり過ぎて来たのかもしれない。少なくとも、二人とこのまま距離を置く、なんて考えは消え去つた。

そうだ、いつもいつもあのバカ達に迷惑は掛けられている。それなら、あの二人がくつついたとして、そのおじやま虫になろうとも引つ付き続けるくらい許されないと割に合わない。

そう強く思った円香は、一先ず朝、態度が悪かった件は謝る事にした。腹を決めた以上は、さっさと一人での練習をやめて更衣室の前に向かった。

「……て言つても、なんて言つたものか……」

身体の神経の90%が無神経の二人組だ。解決したと分かるや否や、まず間違いなく「で、結局なんで機嫌悪かったの?」と聞いてくるのは目に見えている。

そつちに関しては、菅谷が好きかも……なんて言えるはずもないので話にもならない。い。

それに、今でも菅谷の顔を見ると、また鼓動が加速して来そうなものだ。

うだうだ考えながら歩いていると、いよいよ更衣室近くに来てしまった。とりあえず、まだ二人がいるかどうかだけ確認しようと、壁際から覗いてみると……執事服姿の透が血の水たまりを作つて倒れていた。

「はっ?」

思わず慌てて駆け寄つたのと、ほぼ同時だった。男子更衣室から、見てはいけないものが出て来たのは。

「ちよつ、とおるん!?？」

「げっ……………」

「あ、マドちゃ……………」

「菅谷くん、執事語」

「あ、そつか。お帰りなさいませ、お嬢様」

直後、円香の目に入ったのは……………昨日の自分と同じ執事服姿の菅谷明里の姿だった。元々、イケメンな上に、おそらく日福がいじつたであろう髪も綺麗に執事らしく整えられていて、その破壊力は水着姿の菅谷を遥かに凌駕して余る威力が、それにはあった。

おそらく、透もこの爆弾を目撃してダウンした、と容易に想像できる。当然、それは円香にもクリティカル・オーバーキルダメージとなつて直撃する。

「……………コフツ」

「ま、マドちゃん……………!?? じゃなかった。お嬢様、如何なさいましたか? 鼻から水風船が溢れたかのようなですよ?」

言葉選びは最低だが、もうそんなの関係なく、円香の鼻から血が漏れ、その場に倒れ込む。

「……………なんかこれ、執事の真似してる場合じゃなくない?」

「そうね……………」

「ま、マドちゃん？ とおるん？ 大丈夫？」

片膝について心配してくれる菅谷。その肩を、円香はガツと掴む。その手には、ぷるぷると強すぎる力が込められている。

本当に、本当にこの男は何処までもタイミングの悪い男である。せつかく好きかどうかを保留にし、とりあえず謝ろうと思つて顔を出したと思つたら、一目惚れ以上のインパクトを誇る外見でまた好きと言う気持ちを押し上げてくる……もうわざとか、とツッコミを入れたくなるほどだ。

「もう……あんた、ホント……嫌い……！」

「え……？」

×結局、溝を埋めるどころか掘り続けてしまった。

×

×その後、失神した円香は、保健室で目を覚ました。最終下校時刻とまではなっていないが、割とギリの時間。教室内に人の姿は見えない。菅谷と透の姿もなかった。

まあ、アレだけの事を言つてしまえば当然かも……と、思い、仕方ないので一人で帰宅することにした。

鞆を持ち、保健室の先生とお話だけして挨拶し、昇降口で靴を履き替え、学校を出て行く……円香の姿を、透と菅谷は後ろからつけていた。

「リカ……ホントにやるの？」

「うん。このまま家まで見送る」

「普通に一緒に帰れば良くない？」

「いや、もう嫌いって言われたから。嫌いな人と一緒に帰りたくないでしょ」

「だからって尾行する？」

「こんな時間に女の子一人で帰るのは危ないでしょ」

なんて斜め下の解答をした菅谷を、少し引き気味に透は見つつも、とりあえず一緒に円香の後ろをつける。

「気づかれちゃダメだからね」

「分かってる」

「……また嫌いって言われたら、絶命する自信がある」

「どんな自信？」

あの後、菅谷も一緒に失神し、顔面偏差値高い三人が一斉に保健室へ運ばれた。

で、最初に目を覚ましたのは透。鼻血もしっかり止まっていて、もうけろりとしているのは流石だった。

続いて菅谷。ここは保健室の先生がかなり有能で、透に見せる前に執事服から制服に着替えさせた。

で、嫌いと言われたショックから泣きそうになったが、ふと目に入った時計を見て、後をつけると言い出したので透は付き合う事にした。

「そもそも、本音かどうか分からないじゃん」

「……でも本音だったら怖い」

「……まあ、分かるけど……」

そう言うところ繊細なんだ、と思わないでもなかった。とはいえ、自分も菅谷に嫌いと言われたら、真偽は怪しくとも確かめるのは怖いだろう。

夜道を歩きながら、円香の背中を追う。

「……はあ」

「！」

その円香から唐突に漏れたため息に、菅谷ははつと顔をあげる。

「とおるん。今、ため息ついた。前方確認」

「前方、特に異常ありません。どうぞ」

「了解、引き続き監視任務を続けます。どうぞ」

「この無線、私もリカも同じ場所から同じ方向を見ているので意味ありません、どうぞ」

「なんなら無線も使っていません。どうぞ」

本当にこいつら何を言っているのか、と円香がいたらツツコミを受けそうなものだ

が、いても前を歩いているのでそれは来ない。それが、透には少し寂しかった。

菅谷と透の間で始まるポケ合戦。それも今日は何か足りないと思っていたが、やはり円香のツツコミがあつてこそなのだと思い知る一日だった。

「……ねえ、リカ？ やっぱりちゃんと話さない？」

「……」

「リカ？」

ふと顔を上げると、菅谷の目尻には涙が浮かんでいた。

「えっ、ちよっ……リカっ？」

珍しく焦った透が声を漏らすと、菅谷は鼻を吸る。

「ど、どうしたの……？ 花粉症？」

「いや……今、マドちゃんがいたら『どうぞどうぞうるさいです。次言ったらビンタします。どうぞ』ってツツコミに見せたポケでもかますんだらうなって思ったら、なんか……寂しくなっちゃった……」

「いや、泣くくらいなら樋口と話したら？」

「……」

ちよつと冷たい言い方になってしまったが、正論ではあるだろう。そもそも、解決させたのかさせたくないのかイマイチわからないのは困る。

少しだけ菅谷は考え込んだ後、菅谷は結局「仲直りしたい」と思ったのか、透の両肩を掴んだ。

「よし、とおるん」

「何？」

「作戦がある。付き合って」

×

「はあ……」

円香は、自己嫌悪に暮れながら帰宅していた。この前はわざわざ暇潰ししながら待たててくれたのに今日はいない辺り、嫌いと言われて向こうもこちらを嫌いになったのかもしれない。

いや、もう終わったのだ。もう、今後自分ができることは何もない。嫌い、なんて思ってもいけないことを照れ隠しで言ってしまったのだから。

胸の痛みがすごい。吐き気となって身体にさえ現れそう、正直今日の夕食は喉を通りそうにない……そんな気分だった。

でも……まあ、もしかしたらこれで良かったのかもしれない……なんて、思いたくなくなかったことさえ思い始めてしまった時だった。

ふと目に入ったのは、道端で倒れている人と、その心臓マッサージをしている人

だった。

「だ、大丈夫^{!!}? 心音が弱まり始めてるよ!」

「グツ……お、俺はもうダメかもしれない……! まさか、奇病『デイスライクドウ・シツク』にかかるとは!」

……何しているのだろうか、滅多に出さない大声を出してまで、あの奇人二人は。

「でいつ……でいつ……デイスティニー・キック、とは^{!!}?」

それ普通に必殺技の名前になってる、なんてツツコミが浮かんだが、とりあえず黙ってその茶番劇を眺める。

「え、デイス……デイストラクシヨン・チックとは……」

お前も間違えるのかよ、と笑いが出そうになるのを堪えた。

「す、好きな女の子に嫌われた男が発症する病気でツ、治すには……その好きな子と仲直りするしかない呪われた病気である……!」

「な、なん……なんて病だ!」

「しかし……こんな夜更けにそうそう、運命的に俺の前にその子が現れるとは思えない……もはや、ここまでか……!」

「……」

そこで、チラッとこつちを見る。その動きがまた面白くて、笑いが出そうになるのを

片手を口に当てて堪えた。もう今のでどういうつもりなのか分かってしまった。

「そんな……ちなみに、仲直り出来なかつたらどうなるの?」

「え? えー……は、破裂する」

考えてないんだ、とグダグダな演劇にまた笑いが出そうになる。

「地球を巻き込んで」

「わお、全人類のピンチ!」

無駄に壮大な話になった。もしかして、脅しのつもりだろうか? というか、チラチラとこつち見んな、と思わないでもない。

「とにかく、いないかなー俺と仲直りしてくれるマド……女の子。もういないと……」

「デイ、デイ……デイストピア・ピックが……」

「……はあ」

本当に思う。こんなバカを相手に悩んでいたのか、と。仲直りしたいのなら素直に言ってくれば良いのに。……いや、素直に言われても自分は拒否したかもしれない。

こういうツツコミという形にしてくれるのは、むしろありがたい。まあ、狙ってやっているわけではないのだろう。

「……分かったから。とりあえず、話せる場所に行こう」

「ホント!?」

「病気は？」

「あ……グエツ」

「……さつきまで悲鳴とか上げてなかったでしょ」

とうとうツツコミを入れてしまったがなんか少しだけ楽しく思いつつ、とりあえず三人で話せる場所に向かった。まあ、この近くで落ち着いて話せる場所なんて、おのずと一択に限られるわけだが。

××とりあえず、そのまま三人で菅谷家に向かった。

××菅谷の部屋に到着し、三人は席に座る。透が気を利かせて飲み物を用意してくれて、二人の前に置いた。

「そんなわけで……なんか、ごめんねマドちゃん。朝、余計なこと言っちゃったみたいで」

いきなり本題である。謝らなければならぬのは自分の方なのに。

「勝手かもしれないけど、俺は言いたい事だけ言うから」

「……どうぞで」

「マドちゃんがどんなに俺のことを嫌いでも、俺はマドちゃんのこと好きだから」

「……はっ!?？」

急に話ぶつ飛んでない!?? なんて思った時には遅い。

「それだけ。……もし、マドちゃんが俺のこと嫌いじゃなくなったら……その時はまた、一緒に遊ぼうよ」

「……」

「じゃあ……今日はそれで」

「待って」

「え?」

……この男は、良くもまあ平気でそう言うことを言えるものだ。そんなの、結局は菅谷が一番損しているだけ。自分を勝ち逃げさせるような提案を、平気で出来るのだ。

しかし、そんな事は許されない。何より円香自身が嫌だ。そもそも前提が間違っている、円香は菅谷を嫌ってなんていないのだから。

「ホントは、私が謝るべきでしょ。リカに、変な誤解させてるんだから」

「誤解? ……あ、もしかして、もう俺を嫌いじゃなくなることはないって事?」

「違う。ちよつと黙ってて」

そのネガティブな思考は割と腹立つ。

「私は、そもそもリカが嫌いじゃない」

「え? だって、さつき……」

「アレは、その……照れ隠しみたいなもんだから」

「照れ隠し？　なんで？」

「……あんたの執事服姿、バカみたいに似合ってたから」

「え？　……あ、ありがと……」

そこで照れるな、母性本能が……と、円香は思いつつ「とにかく」と話を続けた。

「それに、他にも謝りたいことはあるの。今日は色々と態度悪くしちゃったから」

「……そんなの別にいいよ。機嫌が悪い日くらい、たまにはあるでしょ？」

「……」

そういうんじゃないのだが……でも、今は良い。正直、素直になるなら無い以前に、本人を前に好きかもしれないなんてどちらにせよ言えない。言えば、菅谷にも大ダメージが入ることだろう。

何にしても、そつちに話が逸れる前に、言うことを言うことにした。

「とにかく、私……勝手な言い草だけど、明日からもまた三人一緒になるから。……それだけ」

「あ、それはダメ」

「え？」

え、ダメなの？　と、狼狽そうになったが、菅谷は真顔のまま続けた。

「今日からじゃないと嫌」

……そういうことか、とホツとすると同時に少しだけ苛立つ。紛らわしい言い方やがって、と。

いつの間にか、透はテレビで勝手にドラマを見ている。まあ、あの様子ならしばらくはこちらに介入してくることはないだろう。

「……今日からで良いのね？」

「うん」

「じゃ、まず服脱いで」

「……え？」

そう言いながら、円香は立ち上がって菅谷の背中に回り込む。

「さつき制服のまま外で寝転がってたでしょ。すごく汚れてる」

「……え？」

「ズボンも。一旦、叩いて土汚れ落とすから。早く」

「い、いや……でも、それはちよつと恥ずかしいと言うか……」

「あと、ゴミ箱の中に冷食のゴミあったんだけどどういうこと？」

倒れずつとそれで済ませるとかないでしょうね？」

まさか、最近は料理面

「や、それは……」

「とにかく、今日からって言われた以上は全部、また面倒見るから。早くして」
「……」

そんなわけで、とりあえず解決した。

三人の中ではまともに見えるだけ。

文化祭とは、基本的に青春の代名詞である。みんな夜遅くまで居残って準備をし、クラスの輪が広がる。もちろん、参加しようとしなないとその恩恵は得られないし、必ずしも上手くいくとは限らないが、少なくとも上手くいけば友達も増えるし、人によつては恋人も出来るだろう。

そんな文化祭準備期間も、今日で最後。円香と透と菅谷は仲直りを終えて、教室内の飾り付けを手伝っていた。

「とにかくシツクなイメージだから。黒とグレーを中心に仕上げて」

「机は4個1セットで、テーブルクロスかけて。シワ作らないように」

なんてテキパキと指揮する実行委員二人の下働きを、執事役三人は一つのテーブル席にテーブルクロスを敷きながらぼんやりと眺める。

「ホント気合入ってるよね」

「分かる。そんなに楽しみだつたのかな」

「……一応、気負ってるからでしょ。文化祭実行委員だしって事で、少なくとも文事の方は成功させるって躍起になってたから」

「……マドちゃん、あいつと話したの？」

「え？ うん」

「……ふーん」

なんか急に声が冷たくなった気がした。菅谷にしては珍しいことだ。

「や、別に良いけどね。マドちゃんが他の誰と仲良くするかなんて俺が決めることじゃないし、うん。良いけど」

「……リカ」

「そもそも、別に俺とおるんだだけのものってわけじゃないからね、マドちゃんは。いやホント全然、問題ないから。いやあるっちゃあるけど別に、うん」

「だから、リカ」

「ただまあホント、もし他の男が好きになったのなら言ってくれば俺は全然……あれだし」

「リカ、手が全然、言ってることと噛み合っていない」

「え？」

言いながら、円香は自分の手を胸前くらいの高さに上げる。その手は、菅谷にしつかりと握られていた。

「……や、違うからね？ これは別に……こう、なんか別に違うから。いや違う無いけ

ど」

「ふふ……そう」

にこりと円香は悪戯っぽく笑みを漏らす。その笑みが、なんだか少し菅谷の羞恥心を掻き立てることに成功したようで、顔を赤くして言い返してきた。

「つ、ほ、ホントだから。別にマドちゃんが他の男と仲良くするのが嫌なわけじゃないから」

「はいはい」

「友達が増えるのは悪い事じゃないし、俺と遊んでくれなくなるのが怖いとかないから」

「はいはい」

「さつきから何その返事？ 全然信じてないでしょ」

「はいはい」

「とおるんまで混ざらなくて良いから」

珍しく菅谷がツツコミ役というコントが繰り広げられつつある中で、三人に声がかける。

「そこ！ イケメン三人も、コントしてないでさつきと仕事して！」

「はいはい」

怒られたが、何したら良いのか分からなかったので、とりあえず掃き掃除をした。

さっさと箒で掃きながら、菅谷は感慨深そうに呟いた。

「ついに明日かあ……」

「ね。なんか意外と早かったよね」

「いや、あんたら練習足りないから。結局、セリフ全部覚えてないでしょ」

「そんな事ないよ。俺完璧だから」

「私も」

「さっきまで『お帰りなさいませえ、お嬢しやま』つてめちやくちや簡単なセリフを囁んで怒られてたのは誰と誰？」

「とおるん」

「リカ」

「正解。だから明日はボロ三回までに抑えるように」

「じゃあマドちゃんて練習させてよ」

「そーだそーだ」

「……駄目」

「「なんで？」」

「浅倉？」

「やめときな、リカ」

「え、裏切るの早くない……?」

なんてやりながら、菅谷が持つちりとりにゴミを集めていく。

その菅谷に、円香は少しだけ真剣な表情のまま言った。

「……リカ、あんたは本当に気を付けなさいよ」

「? 何を?」

「だから……ボデイタッチが多いタイプの女に唾付けられないように」

「とおるんみたいなの?」

「え、私多いの?」

「だって俺何回おんぶした?」

「浅倉とは別のベクトルの……仲良くもないのに肌押し付けてくるタイプとかのこ
と」

それは正直、円香だけでなく透も心配だった。結局、嘔むし、キャラもできてないし、少しの動揺で崩されたら、その手の女子には恰好の獲物にされてしまうかもしれない。

「大丈夫だから。色仕掛けとか俺効かないし。執事だから」

「……」

「……」

その自信は本当にどこから来るの? と言わんばかりに円香が呆れる中、透が動い

た。

横から、むぎゆつと擬音が視認出来そうな仕草で、菅谷の腕にしがみつく。当然、胸が当たっていた。

「つ、と、とおるん……ど、どうしたの？」

「ん、なんかリカにくっ付きたくなつて」

「えつ、い、いや……そんなつ、俺湯たんぽじゃないからそんな言われても……」

「嫌？」

「や……嫌というか……」

「ほら見ろ」

「え？」

真つ赤になつた菅谷の顔を覗き込んで、透はいつもの無表情なのに何処かニヤついたような笑みを浮かべている。

「超狼狽えてんじゃん。ウケる」

「……とーおーるーんー！」

「ぶつ、ふふ……！」

「マドちゃんは何がおかしいんだちくしょう！」

二人に憤慨するように怒る菅谷を、円香がどうどうと止める。

「とにかく、今ので分かったでしょ、ミスターチョロイン。あんたはすぐに赤くなるんだから、ホント気をつけて」

「ちよろいんって何？」

「ハロウインのチョロい版？」

「俺がチョロいと言いたいわけ？」

「うん」

偶然にも大体、合っている意味で確認を受けたので頷いておいた。ハロウインのチョロい版って何？ とならない辺りは、もはや流石である。

実際、あの話の流れから急に腕にしがみつかれたと言うのに「試されてる」と思う余裕もなく狼狽えていた時点でお察しである。

「……もしかして、何も言い返せない？」

「そゆこと。だから、ホント気をつけて」

「うーん……でもなあ……」

「何。もしかして不可抗力なら女の子にくつつ付かれてたいむつつりすけべ？ ……ていうか、浅倉もいつまでくつついてるの」

「あうっ」

ぺしつと透を引き剥がす円香に、菅谷は真顔のまま言った。

「そういうんじゃないなくて、なんて言って離れば良いのかなって。一応、相手はお客さんなのに」

「そんなの、普通に……」

あんまりくつつかないでつて言えば？ と、円香が言おうとしたところで口が止まる。

実際のところ、なんて言って引き剥がせば良いのか。執事風に自分が考えたセリフを修正すると「失礼、レディ。私はお嬢様専用の抱き枕ではございません。節度と多少の距離感を以つてお楽しみ下さいませ」と言った所か。

しかし、菅谷にこんな風にセリフを変換させる能力はない。その上、弱点である女性との至近距離だ。

『あ、あのつ……すみません、そういうのはちよつと……普通に恥ずかしいんで……』
なんてキョドリながら言う未来はハッキリ見える。それは逆効果となるだろう。

前にも同じことを思つた気がしたが、やはりそれしかないようだ。

「……うん。やつぱり私と浅倉で守るから」

「リカは無理しないで何も喋らないで」

「え、執事喫茶なのに……？」

「そこの三人。いい加減にしてね」

×また怒られたので、手を動かした。

×さて、翌日。文化祭当日。朝の短い時間で最後の仕上げ……と言っても、そんな大袈裟なことではない。飲食をやる所は仕込みである。

執事喫茶をやるわけだが、接客担当の三人は着替えを済ませて、教室に集合。菅谷が先に済ませて教室で待っていると、透と円香がばっちりメイクを終わらせて戻ってくる。

「リカー」

「お待たせ」

「あ、来た。遅いよ、二人とも……」

振り返ると、思わず菅谷は言葉を失う。二人の髪型が、この前試着した際と全然違ったからだ。

透は短い髪をポニーテールのようにまとめ上げている。綺麗にはなく、敢えて少しだけ雑にまとめ上げることで、イケメンっぽさがさらに増すよう引き立てられている。

そして、円香はわざわざエクステまでつけて、三つ編み状にまとめめた後、二つに分けてお下げのように垂らし、髪の毛の長い執事のような見た目になっている。

二人揃って以前までと違い、格好良さに可愛さまで兼ねてきた。

「……えっ、なんっ……!」

「わっ、めっちゃ顔赤っ」

「ふふん」

見事に急襲が炸裂し、透どころか円香まで得意げな表情を浮かべる。その後ろには、もう一人日福さんがドヤ顔でいた。

「っ、ふ、二人とも……なんで……!」

「似合う?」

「え、そりゃ綺麗だけど……」

「……あなたにばかり気絶させられるのは腹立ってただけ」

「ーっ……」

何その可愛い理由、仕返しのもりだったの? と頭がぐらりとフラつく。その菅谷に、透がトドメと言わんばかりに手を差し出し、強引に菅谷の肘を掴み、自身の方へ引き寄せる。

「おおつと、大丈夫でしょうか。お嬢様」

「ちよっ、浅倉それは……」

「え、誰がお嬢……」

「体調が優れないのでしたら、是非とも私の膝の上でお休み下さいませ」

言いながら、透はくいつと菅谷の顎に手を添えて、自分の方へ向ける。昨日までの執事の練習は、まるでこの時のためのものだったんじゃないだろうか？ と不安になるレベルで完璧な声音と仕草。

膝を掴んでいた腕はいつの間にか菅谷の肩に回され「あれ？ 性別逆転した？」と言わんばかりの破壊力があつた。

側から見ていただけの同性である円香や日福さえ頬を赤らめる一発。直撃した菅谷はただでは済まなかつた。

「……びよえ」

失神した。本番まで、残り10分で。顔を真っ赤にして目を回す菅谷を片手で抱き抱えている透に、さつきまでのイケメン力はない。代わりに大量の汗が浮かんだ。

「り、リカ……?」

「私知らないから」

「私も仕事しなくっちゃ」

秒で裏切つた幼馴染と衣装係。そして、代わりにやってきたのは、鬼の実行委員（女子）である。

「……何してんの?」

「やり過ぎちゃった」

「子供の言い訳聞いてるんじゃないんだけど」

「……どうしよう？」

「目を覚ますまで浅倉さんが面倒見て。この教室で」

「え、保健室は？」

「あんたらうちのクラスのエースって言うてるでしょ。休ませないから。……時間までに起きなかつたら、浅倉さんは膝枕したまま接客して」

「……え」

「誰が気絶させたの？」

「……」

「あそこの席なら使つてて良いから。休ませてあげて」

指差す先にある席は、一番真ん中に設置されてる特等席である。本当に看板として使うつもりだ。

……まあ、でも役得と捉えよう、と楽観的に考える事にした。せつかく菅谷を休ませると言う大義名分で膝枕してあげられるのだ。この機会を活かさないと手はない。

そんなわけで、早速気絶した菅谷を持って席に着き、自分の膝に頭を乗せてあげた。

……うん、やつぱりなんか役得感ある。準備もサボれるし。

そんな風に思つて、少しソワソワし始めた時だった。自分の前にぬつとルーズリーフ

が差し出される。ビニールテープで輪をつけられ、首から下げられるくらいの大きさのものだ。

そこには「私は報復の度が過ぎて、本番前に親友を失神させました」と書かれている。そして、それを持ってきたのは樋口円香だ。

「何これ？」

「つけて」

「え？」

「つけて」

「どこに？」

「つけて」

「……」

有無を言わさない。透は仕方なく首から下げた。それを見ると、円香はスマホを構えてその間抜けな絵面をスマホで撮影。満足げな顔で頷くと、そのままポケットにスマホをしまい、仕事に戻った。

「……」

なんか、ちよつとだけ恥ずかしさを感じ始めた時だ。膝の上の菅谷が寝返りを打った。顔を透のお腹の方へ向けて「んうっ……」と声を漏らしながら執事服の裾を握って

顔をお腹に寄せてきた。

その子供っぽい仕草が、格好のスマートさとのギャップを生んだ。

「ゴフツ……！」

銃弾でも浴びたかのように身体をのけぞらせ、そして反動で前屈みになった透は、そのまま首と腰を折り曲げて同じように失神した。

さて、馬鹿達が相討ちになった7分後。円香は一仕事終えてようやく待機。バカ達は今頃何しているのか……というか、何ならまだ寝ているのだろうか？　と思いつつ、教室の中央を見ると、菅谷が寝ているはずの膝の上に、透が顔を重ねていた。

すぐにわかった。「ああ、あれは寝てキスっぽく見えてるんだな」と。でも、腹立つものは腹立つのである。人が働いている間にいちやつきやがって、と言わんばかりに。

「樋口アルティメット」

クロスチョップが透の意識を戻し、ビクツと膝を持ち上げたことにより、菅谷の意識も戻った。

××文化祭開始。生徒だけでなく、一般客もだ。菅谷も円香も透も、外見だけは良かっただけに、前評判はアホほど高かった。

何せ、三人とも三人の世界を構築してただけあって、誰もが近寄りがたかったから。

しかし、それも今日は違う。客と執事である以上、もてなしてもらえない。執事喫茶、という名前だけあって最初こそ女子が多かったものの「樋口さんと浅倉さんにももてなしてもらえない」の噂で男子も集まって来ていた。

……のだが。

「「おかえりなさいませ、お嬢様。旦那様」」

右から、ツインサテライトキャノン、石破天驚拳、ハイマツトフルバーストである。圧倒的顔面火力で入り口から生徒達を撃墜していった。

「えげつねえな……」

「ゴレイヌ？」

「三人いるから？」

「いやそつちだったらそつちだったでえげつないけど」

第一印象は完璧と言えるだろう。男であれ女であれ、頭上にハートが浮かんだまま中へ案内される。

勿論、男子も来るようになった今、異性には異性をぶつけて接客するため、文句は出ない。……というか、女子の中には「菅谷より浅倉が良い」という人もいたりする。

一方で、男子は樋口の指名率が高かったりする。エクステ装備による長い髪が、周りにはノリノリに見えたらしい。

はい、褒めるのはここまで。実際に接客となったらこのザマだ。

「本日は、私達のお店へ遊びに来ていただき、誠にありがとうございました。ごさいますしゅ」

「あ、リカ噛んだ」

「浅倉、流して。一々、言わなくて良いから」

「そーだよ。とおるんだってさつき噛んでたじゃん」

「いやあんたもだみやって」

「あ、樋口も噛んだ」

「てか、マドちゃんか『みや』っていうとかわいい。もっかいやって」

「私も聞きたい。もっかい」

「……は？」

「もーいつかい、もーいつかい」

「お客さんも聞きたいでしょ？」

「え？ あ、うん」

「アンコール、アンコール。一緒に」

「あ、アンコール、アンコール？」

「アルコール、アルコール」

「あんたら後で覚えてなさいよ……！」

客そっちのけどころか巻き込んでいちやつき始める。巻き込んだだけでメインではないあたりが最悪である。

もちろん、うまく行く時はうまく行き、練習しまくったコイン遊びの成果でかなり楽しんで帰ってもらえたこともあった。

そんなわけで、5か0かの評価しかもらえず、顧客満足度は2.5と言えるだろう。

「……あんたら、ホント台無しにしてくれるよね」

「リカが嘸むから」

「浅倉が嘸んだ事いじるから」

「マドちゃんが可愛く嘸むから」

「「は？」」

「みんな一緒だから黙って」

怒られたので黙った。

「とにかく、次からはもつと慎重にやって。これだけのポテンシャルが集まって五分五分の評価って中々ないよ。サ○ラ革命じゃないんだから」

「何それ？」

「知らない」

「サービス終了したゲームか何かじゃない？」

「お口チャック！ 実行委員が説教してる！」

もう一回、黙らされる。本当に周りから見れば円香もアホ二人も大差なかった。

「とにかく、せめてあんたらのイチヤイチャに巻き込まれる人を減らして。良い？」

言うだけ言われた時だった。店の入り口から「お客様入りまーす！」の声が聞こえて来る。

そんなわけで、三人とも応対に向かった。

「足引つ張らないでね」

「こっちのセリフだから」

「どっちのセリフでもないから」

「三人、誰のセリフでもないから。……女性のお客さんだからね」

そんな話をしながら入り口前に立ち、出迎え準備。まあ、いい加減にしないと確かに一生懸命準備したクラスメートにも悪い。

コホン、と各々が咳払いをした直後、教室の扉が開かれる。

「「おかえりなさいませ、お嬢さ」」

「あつ、明里兄ちゃんつす！」

「ま……ん？ おつ、あさひつち」

「……兄ちゃん？」

「あさひっち……？」

急に爆心地と化した執事喫茶にいた全生徒がため息をつき、透と円香から黒いオーラが漏れる……それに何一つ気付くことなく、バカと現れた少女……芹沢あさひはハイタッチした。

「アクティオン？」

「マルス？」

「エレファス？」

「アヌビス？」

「ゾウカブトー！」

何処の部族の挨拶だろう……と思う間に、二人はニコニコ微笑みながら話を始めてしまふ。

「どうしたの、あさひっちこんな所で」

「なんかやってたからっす！ 兄ちゃんが言ってた高校と同じかなーと思って」

「よく覚えてたね」

「そりゃ、私の虫の師匠ですから」

「うむ。じゃあ、後で一緒に回る？」

「いいっす！ 友達ときてるから！」

「お、おう……え、じゃあその友達は？」

「逸れたっす！」

「じゃあこんなところにいる場合じゃなくない？」

「そうっすか？」

「ま、いつか。もしかしたらここ来るかもだし。よし、遊んでいけ。俺が奢る」

「やったー！ 超ラッキーっす！」

「では、ご席にご案内致します。お嬢様」

優雅に礼をしてあさひを席まで案内しようとした時だった。振り返ると、誰もいない。いや、いる。二人だけ。それを残して、無人である。

そして、その二人は過去類を見ない真顔で菅谷を睨み付けていた。

「うおっ、ま、マドちゃん……とおるん……？」

「誰その女」

「ひえっ……」

直球……これ程、尋問に適したものはない、そう強く思った菅谷だった。

料理を作る人や飲み物を用意してくれる人も、ついでに外にいた客も軒並みいなくなった教室なので、そのへんの準備も自分たちでやるしかない……が、絶対に円香も透も動いてくれなかったので、菅谷がやるしかない。

三人分の飲み物と料理を用意した。

「お、お待たせしました……」

「遅い」

「鈍い」

「ありがとうっすー！」

素直にお礼を言ってくれるのが一人しかない。もはや涙目である。

この執事喫茶、ほとんどホストクラブのような作りになっていて、どの席も並べた机をL字型になぞるように椅子が配置されている。

つまり、基本的に横並びに座るしかないわけで、なんか怖かったので、一番端っこにいたあさひの隣に座ろうとした。

「ロリコン」

「ゴミカス」

「……ど、何処に座ったら良いでしょうか」

すると、透が立ち上がる。席を譲ってくれたのかと思い、そこに座ろうとすると、片腕をホールドされた。

「えっ?」

「座って」

「……あの、尋問でもされるの俺？」

「当たり前。座って」

「当たり前!?？」

が、もう遅い。座らされてしまう。円香はわざわざ菅谷の腕をホールドするような真似はしない……かと思つたら、しつかりと手を握られ、ぎりぎり崖に落ちそうな人を助ける勢いで手のひらを絞めつける。

「で、リカ。この人は？」

「紹介してくれる？」

「あの……その前に、マドちゃん。手、痛い……」

『手、痛い』さん。変わった名前」

「……芹沢あさひ。夏休みのボランティアで一緒だった子」

「ああ、セミの羽化見学してた」

「こんな可愛い子だったんだ」

「で、あさひっち」

「チツ」

「や、その『つち』じゃなくて。……えっと、こつちが浅倉透で、こつちが樋口円香。友達」

「よろしくお願いするっす！」

「……よろしく」

年上としての矜持が、かろうじて挨拶をさせた感じだった。

さて、まずはどう話を進めるか……なんて二人が思っている時だった。

「お姉さん達っすか？ 明里兄ちゃんが好きな女の子二人って」

「そうだよ」

「……あんた、だから言い方」

「言つとくけど、今日はそんなのじゃ騙されないから」

まあ、そう言いつつもなんだかんだで二人とも内心、喜んでしまっているわけだが。

第三者からの情報というのはそれだけ大きいものだ。

声をかけてくれた事で復活した透が先に聞いた。

「で、まずバ……リカ」

「今、バカって言いかけた？」

「なんで兄ちゃんって呼ばれてるの？」

「それは、まあほとんど二人でゴミ拾い回ってたからね。年上として面倒見ないわけに

いかないから」

「明里兄ちゃん、飲み物とか奢ってくれて、虫のことたくさん教えてくれたっす！」

「……ふーん」

「……へー」

「……あ、もしかして二人も教わりたかった系？」

「別に」

しれつと冷たく返される。とはいえ、まあ面倒を見ていたら、なんかお兄さんっぽくて「兄ちゃん」となったのだろう。

続いて、円香が冷たい口調のまま聞いた。

「で、なんで『あさひっち』なの？」

「……ちよろちよろしてて可愛かったから？」

「それどう言う意味っすか？」

「や、よく動いて色んなものに興味持って、なんか子供みたいだったから」

「お前が言うな」

「それどういう意味？」

円香も透も、少しショックだった。まさか、自分達以外の女の子を見て「可愛い」と思うとは。やっぱり、菅谷も男の子という事だろうか？

なんて思っていると、爆弾が新たな爆弾を生み出した。

「じゃあ、私と二人はどっちが可愛いっすか？」

なんてこと聞くのか、と円香と透は大量に汗を流す。この女の子、アレだ。まともじゃない。いや、ゾウカブトの挨拶をかましてる時点で察してはいたが。

とにかく興味持ったことにはいくらでも原爆を産み落として置くタイプらしい。

お陰で不要な緊張を感じる事となった。万が一、万が一にも自分達よりあさひの方が可愛いなんて言われた暁には……。

胸の奥をドギマギさせつつも、不思議と自分たちの念が腕にこもってしまふ。菅谷の手と腕からミシミシと音が聞こえるが、菅谷は特に気にする様子無く答えた。

「いや、マドちゃんとおるんに言う可愛いは、チヨロチヨロとかそういうんじゃない……こう、何？ もう女の子として可愛いみたいな可愛さだから」

「ブフオツ！」

吐き出す二人。顔が真っ赤に染まり、思わず両手から力が抜けて顔を背けてしまふ。

こいつ、ホント平気でそう言うことを……しかも、よりによって執事の見た目で。

完全に溝尾に入った感覚で二人揃って蹲る。机の上に額を当てて倒れ込むしか無かった。

「二人とも？」

相変わらず純粋な声音で声をかけてくる奴の顔を、二人はジロリと見上げる。

「これで勝ったと思わないでね……！」

「マジ、ホント後で大逆転するから」

「いつから闘いに……?」

そんな話をしつつ、とりあえず自分達のことは女の子として可愛いと言ってくれただけでも良しとする事にして、とりあえずそのまましばらく歓談した。

×

さて、あさひが友達と合流したことによつて、ようやく教室にまた店員が戻ってきて、

チラホラとお客さんも来始めた。

しかし、それでもさつきまでに比べて人は少ない。そんなわけで、実行委員は円香か透に指令を下した。

『どっちか。プレート持つて呼び込み行つてきて』

目玉商品三人のうち二人女子。唯一の男子は出すわけにいけないので、円香か透が行くことになった。

で、まあジャンケンするまでもなく円香が買って出たわけだ。ちよつと気疲れしたので、気分転換も兼ねて。

だが、それは失敗だった。

「ねえ、呼び込みなんて怠いでしょ。俺らと遊ばん?」

「だーいじよぶだつて少しくらいサボつたつて」

「文句言われたら俺らがなんとかしてやるから。な？」

「……おそらく、上級生だろう。非常に鬱陶しい。」

「……仕事なので結構です」

「そう言うなよ。疲れた顔してるじゃん」

「分かった。後で店行くから」

「しつこい。少しはキツク言った方が良いでしょうか？ ……いや、逆上されたら面倒だ。」

「何とかしないと……と、思っている時だった。遠くから「あ、いた」と声が聞こえてくる。顔を向けると、透が走って来ていた。」

「樋口。教室戻ってきて。なんか人いっぱいきた」

「もう?」

「うん。流石、樋口の呼び込み」

「いやプレート持って歩いてただけなんだけど」

「珍しくタイミングが良い。急な仕事な諦めてくれるだろう……と、思ったのだが。」

「お、こつちの子も可愛いじゃん」

「ね、俺らと遊ばん?」

「奢るから」

いやもう空気くらい読んでほしい、そう思ったのだが、こう言う時の透はとても頼りになるものだ。

「え、やだ」

「え？」

「てか誰？」

「……」

「いこ、樋口」

「ん」

そのまま二人は教室へと引き返した。プライドが高い上級生を、結果的に煽るような形になった事にも気が付かないまま。

たまには損得勘定を弾け。

一日目の午後も、残り僅か。夕暮れの文化祭、という言葉を示すのにピッタリな情景が窓の外から見えていて、それに伴い一般客が減って来て、もう今うろうろしているほとんどのはこの学校の生徒だった。

それは執事喫茶も例外ではなく、客はもうほとんどいなかった。まずまずの売り上げとなり、なんだかんだ良いスタートではなかったのだろうか？

「ふいふ……疲れたあ」

「お疲れ、リカ」

「明日、明後日も私達、これやるのかあ……」

そう言いつつも、なんだかんだ楽しかったのが透の表情から見て取れる。

三人揃って椅子に座っているのを見た文事が、三人の前に飲み物を差し出す。

「お疲れさん。俺の奢りだ」

「わお」

「良いの？」

「マジ？」

「ごめん。半分は笠井に出してもらった。高校生に450円は重い」
笠井とは、文化祭実行委員の女子の方だ。

三人全員にコーラを買ってきてくれたので、ありがたくいただいて口に含んだ。
「どうだった？ 初日は」

「もう人來すぎ。なんで同じ学校なのに人こんなに来るわけ？」

円香が愚痴るように返す。

「ね。ていうか、俺の顔ってそんなに良い？」

「それは良い」

「……まあ、悪くはないと思うけど」

「え」

「ははは、隙あらばイチャつくなお前ら。殺すよホント」

そう言いつつ、文事は続けた。

「ま、とにかく明日もあるから。今日は片付けは俺らでやつとくから、執事役はみんな先
帰って良いよ」

「マジか」

「ありがと」

「サンキュー。……あ、俺トイレ行きたいんだけど平気かな？」

「良いんじゃないね。誰か来たら言っとくよ」

「どうも」

それだけ話して、菅谷は教室から出て行く。まあ、割と忙しかったしそのくらいは仕方ないだろう。

色々あったが、まああさひも結局、妹というかペットというかみたいない扱いであることが分かったし、ひとまず円香はホツとする。

その様子を見て、隣から透が声を掛ける。

「何のため息？」

「え？ ……疲れただけ」

「ホントに？」

「……………どう言う意味」

「や、別に？」

「……………」

分かってている。意味くらい。菅谷とあさひが何の関係もないと知って、ホツとしたと言いたいんだろう。

でも、違う。あれは菅谷がロリコンでない事にホツとしただけだ。だから、深い意味も変な意味もない。

「……樋口つてき、面倒臭いよね」

「は？ 急に何？」

「別にー？」

……ムカつく。この幼馴染。

「別に樋口の好きにすれば良いけど。……でもあんま意地ばつか張つてると損するよ」

「……うるさい。別に、意地なんて張つてないから」

そもそも、この幼馴染もどういうつもりなのか。透だつて菅谷の事が好きなくせに、何故そんなに自覚させようとするのか。

……まさか、二股とか考えている？ そんなの、少なくとも樋口は……いや、まあ三人でよく遊んで部屋に押しかけて家事とかしている時点で、もしかしたら見ようによっては二股だし、もしかしたら肩書きが変わるだけなのかもしれないが。

いや、何にしても、だ。そもそも自分が菅谷に対し特別な感情があるわけでもない限り、何を考えたつて無駄である。

「はあ……」

ため息をついて、とりあえず文化祭終わった後ももう少し考えないと……と、思っている時だった。

唐突に、ガラッと強引な感じで扉が開かれる。はい出た、教室の扉を騒がしく開ける

奴ーと思って目を向けると、嫌そうな顔が出来てしまった。入って来たのは、さっきのナンパ三人組である。

「おいおい、執事喫茶で執事が寛いでるってどう言うことよ？」

「それな」

「遊びに来たよー。さっきの可愛い子ー」

うーわ……と、声が漏れそうになる。面倒臭い。来てなんて言っていないのに。

まあ何にしても、今はとりあえず透をあつ男達の前に出さないことを先決だ。自分が接客し、気を逸らす。

「おかえりなさいませ。ご主人様」

「うお、積極的」

「自分から来たよこの子」

そりゃ仕事ですからと内心で呟く。

真ん中にいる男が、ぐるりと教室内を見回す。分かりきったことだが、ほとんど人はいない。

「ていうか、もう閑古鳥じゃん。これなら、俺らと少しくらい遊びに行つたって良くね」

「それな。行こうぜ」

「そこのお前も」

目を向けられたのは透だ。キョトンとした表情で言い返す。

「え、なんで？」

「つかさつきから思ってたんだけど、お前なんでタメ口聞いてんの？」

「俺ら先輩だから。敬語で話せ」

ジロリと睨まれ、透は黙る。そして、背中から回して文事にサインを出した。理解した文事は教室から出ていく。これで、もうすぐ先生が来ることだろう。

その隙に、透が余計なことを言う前に、円香が口を挟んだ。いい加減、イライラがピークに達しつつある。

「あの、なんなんですか？ いきなり勝手に入ってきて失礼ではありませんか？」

「……あ？」

思わず口走った正論に、男は容赦なく食いついてきた。

「だから、わかってんのか？ 俺ら、先輩の上に客なんだけど」

「もしかして、礼儀を知らない奴？」

「わからせた方が良いんじゃないかね。上下関係」

「……だな」

勝手に話が進んだと思ったら、ガツと円香の手首を掴む。思った以上に強い力。今更になって、こいつら口では引かない、と思わず畏怖を覚えるほどの。

「っ、ち、ちよつと……離して……!」

「樋口……!」

「おつと、そうだ。お前も来い。さつきからナメた口聞いてたろ」

「っ……!」

その視線は、まるでべつとりとまとわりついて来るような鋭い視線。蛇でも絡み付いているのかと思う程だ。

透でさえ少し恐怖を覚えた隙をつくように、別の男が歩き始めた時だ。

「この手は何?」

直後、あまりに近くから声が聞こえる。円香や透だけでなく、男達でさえビクツと背筋を伸ばす程、近くから。

反射的に顔を向けると、そこには菅谷が円香の手首を掴む男の手首を掴んで立っていた。
た。

5×××
5分ほど前。

廊下を走っていた文事は、走っていた。早く教員を呼ばないと、何が起こるか分からない。
ない。

そんな風に思っていると、見覚えある執事が欠伸をしながら歩いて来てるのが見え

た。

「あつ、す、菅谷！」

「あ、どうも。……ちよつと聞いてよ。入った個室の中にゴキポンがいて……俺、ゴキポンと一つ屋根の下で……」

「んな場合じゃねえよバカ！」

「？ 君もゴキポンとなんかしたの？」

「樋口と浅倉が危ないから！」

「……と言うと？」

「上級生のナンパだよ。結構、強引に迫ってきて、ヤバいかも！」

「……」

直後、文事は背筋に冷たいものがコンマー秒ほどで流れた。菅谷が、見たことないキレ顔を晒したからだ。

「……まだ教室いる？」

「いる！ 俺、先生呼びに行くから……」

「うん。でもものんびりお茶してきてからでも良いよ」

「は？！？ お前、何言つて……」

「大丈夫、逃がしやしないから」

「え、に、逃がす……う？」

逃げるんじゃないくて？　と言うツツコミを入れることも出来ず、菅谷はそのまま走つて教室に戻つた。

で、今に至る。ギリギリと万力で押し潰すかのような力の入れよう。その菅谷に、男は尋ねる。

「誰お前？」

「手を離せ」

会話が成り立っていない。円香だけでなく、鈍い透でも「怒ってる」とすぐに理解した。

「言葉わかんねーの？　誰だつて聞」

「あと一回しか言わないよ。手を、離せ」

直後、男が先に動いた。菅谷の腹に思いつきり蹴りを入れた。菅谷の手に力が抜け、後方に飛んで席を崩して背中を強打する。

「！　リカ！」

「離れたのお前じゃん」

「ぶふっ！　ダサッ！」

あからさまに小馬鹿にしたような笑いが出たのも一瞬だった。机の群れから菅谷が飛び出した。

円香の手を握っていた男も喧嘩慣れしている。カウンターに合わせるつもりのように、ギリギリまで引きつけてから足を引き上げようとした。

が、菅谷の足はそれを上から踏みつけて封じる。その隙に、左手で円香の手首を握っている手を、右手で胸ぐらを掴んだ。

「痛ッ……！」

掴んだ左手で、親指の付け根を圧する。それで、強引に手を離させつつ、その手首を引つ張って重心を崩す。

それと同時に踏みつけていた足を離して前方へ振り上げると、踵で踵を打ちつけて薙ぎ倒した。

大外刈り……文字通り足元を刈り崩す技だ。体育の柔道でさえ習う技だが、その性質は恐ろしく、背中から足元を持っていかれて地面に落ちる。……つまり、受け身を取らなければ怪我では済まないことだつてある。

「ツツ!!？」

男が強打したのは背中だった。だからまだマシだった。痛みで気絶した程度で済んでいる。

「！」

「こいつ……！」

「マドちゃん、下がってて」

「っ……！」

次に来たのは、透の方へ歩いて行っていた男。姿勢を低くして、両手を広げて構えている。

「柔道なら俺も中学で黒帯取ったぜ。受け身さえとれりゃ怖くねえ」

「……」

無視である。男がこちらに襲い掛かって来るのよりも早く懐に潜り込み、相手の腕と腰に手を添えて、真上から投げ込んだ。肩から床に落とすし込む。

大腰……最初に習う、相手を担ぎ上げる技である。

菅谷の柔道は護身用のもの。つまり、試合でレフェリーがつくためものではない。相手に受け身なんて取らせない速さで仕留めるようにできている。

さて、残りは一人。ギロリと視線をやると、残りは戦意を失っているからか、後退りした。

「っ……！」

「……」

そこで、ふと菅谷は我に帰る。ちよつと、やり過ぎたかも、と思い、改めて辺りを見回した。自分より背が高い男が二人とも伸びている。

正直、円香と透に手を出そうとした時点で万死に値するが、まあこの辺で許してやつても良いかもしれない。

そう思い、さつさと帰るように言おうとした時だ。

「おい、なんの騒ぎだ!」

「……あつ」

そこに現れたのは、文事が呼んだ教員。それも、教育指導の先生だ。視界に入っているのは、上級生を薙ぎ倒した自分の姿。まずい、と思つた菅谷は、反射的に反対側に入り口を指さした。

「あつちに逃げました!」

「指導室に来い!」

そのアホ回答に円香と透は全力でため息をつきつつも、いつの間にか菅谷の後ろに回り込み、ギョツと執事服の裾を掴んでいた。

嘘なんてつけば当然、疑われるわけで。ただまあ、新品の衣装についた蹴りの跡、残り一人、無事だった上級生の証言から3対1だった事、女子生徒を庇つた事と目撃証言

で、何とか停学は免れた。柔道を習っていたのか、という点は「昔見様見真似で練習したことあるだけです」と頑なに誤魔化した。

で、今は保健室。

「いだだだだだ！ 沁みる、沁みるって！」

菅谷は、円香に湿布を貼ってもらっていた。

「……………うるさい。蹴り飛ばされて背中から突っ込んだのに、腰に負担かかる技使うとか……………バカでしょ」

「いやー、柔道やってたとは聞いたけど、強かったんだね」

「いやまあそれなりに実践向きに習ったから……………だから痛いから！」

「我慢して。……………蹴りの方が痛かったですよ」

「いやあんま覚えてない」

正直、痛みより殺意の方が多かった事しか覚えていない。

「つて、ま、マドちゃんだから痛いって……………！」

「……………うるさいってば」

「と、とおるん！ なんとか言っつてよ」

「じゃあジュース買ってくるね。助けてくれたお礼」

「いやそうじゃなくて……………」

それだけ言って、透は保健室を出て行った。全くもって冷たい人である。そう思った直後だ。さつきままでとは比べ物にならない重みが背中に響いてきた。

「いぎつ……だ、だからマドちゃん……！」

「うるさい」

「うるさいじゃなくて……」

そこで、ふと異変に気付く。背中 of 激痛などではなく、腰から回された両腕に。そして、背中 of 生肌にあたる、円香の髪 of 感触。何より気になったのは、それらが全て小刻みに震えていることで激痛を産み落としていた事だ。

震えに気が付いてしまえば、流石に「痛いから離れて」とは言えない。

「……マドちゃん？」

「……怖かった」

「え……あの連中が？」

「そんなのより……リカが」

「え、俺？」

「……怪我したかと、思った。あんな勢いで、ヤンキー漫画みたいに机の中に突っ込んだから。目の前で、あんなの目にした人の気になって」

「……ああ」

前に階段から転げ落ちた時とはまた違ったのだろうか？ まあ、他人にやられたものと勝手に事故つたものでは違うのかもしれない。

「その後も、怖かった」

「俺の？ 何処が？」

「怒るにしても、後先考えて怒って。……今回は大目に見てもらえたかもしれないけど、相手が再起不能の怪我とかになってたら、あんた退学じゃ済まなかったでしょ」

「……あー、うん」

「あんたがいなくなったら、助かって嬉しくない人がここにいて、ちゃんと理解して。その小さい頭に、しっかりと叩き込んで」

そう言いながら、ギユウツと抱きしめる。罵倒が入り混じっているのも、その中できちんと心配してくれているのも、おそらく本心だろう。

「ごめん」

そこまで考えていなかった。いや、考える余裕がなかったと言うべきか。ここに来て普通じゃない学園生活をしてきたツケが回ってきた感覚だ。

小さくため息をつき、助けたつもりが不安を煽る結果になってしまったことに心底後悔する。こんなんだから、自分はダメなのだろう。

小さくため息をつき、自分の迂闊さをのろっていると、後ろからさつきまでより遙か

にか細い声が聞こえてきた。

「……………でも、ありがと。助けてくれて」

「……………はえ？」

「カツコ良かった」

「……………へ？」

直後、頬が熱くなるのを感じる。褒められたのに、なんか気恥ずかしい。褒められたのに、吐血しそうになる。

洗濯物を干す際、パンツを見られた時より、上半身裸を初めて見られた時より、何より恥ずかしかった。

……………いや、違う。嬉しいんだ、多分。それがオーバーヒートして、羞恥心となってる。何せ、円香から外見以外で「カツコいい」なんて言われたのは初めてだから。

「……………にへ、にへへ……………」

「……………少しくらいカツコつけていられないわけ？ 男が出して良い笑い方じゃないから」

「はっ」

今更になって、今日はもう少しカツコつけてた方が良いことを把握する。考えてみれば、やり過ぎとはいえ女の子を危ないところで助けたのだから。

「いや、もう遅いから」

「あ、あはは……やっぱり？」

「あんたにそういうカツコ良さ求めてないから、それで良い」

「ええ……ん？　じゃあどういいうカツコ良さ求めてるの？」

「……」

「……？」

「……言わない」

「えー、なんでさ。俺はマドちゃんの可愛いとこ割と聞かれてるのに」

「あんたが勝手にベラベラ言うからでしょ」

「嫌なら言うのやめるけど？」

「……」

「……あ、あの……マドちゃん？　背中痛い……」

「うるさい」

「あ、さっきのうるさいと違う！　いだだだ！　わざとだこれ……！」

「うるさい」

なんてやっている時だった。ガラツと扉が開く。

「リカー、飲み物ー」

「菅谷、怪我平気か？ お菓子買ってきた」

「菅谷くん、おにぎりもあるけど……」

「あっ」

直後、視界に映ったのは、透と実行委員二人と手芸部。が、上半身裸の男の背中におでこを押し付けている円香を見て、透を除く三人はフリーズする。

ツカツカと何一つ気にしていない透は、食べ物と飲み物が入った袋を持って来る。

「はい。これ」

「……あの中に平気で入っていける、だと……う？」

「つまり……もはやアレは日常の一部……」

「大人になったとかじゃなく、もう完全に三馬鹿姉弟だった……う？」

菅谷も透も理解していない。この子達、何言ってるんだろうと思っている。

だが、感性が比較的まともな円香はそうもいえない。クラスメートに目撃された危機感をちゃんと持っていた。

菅谷の背中に額を押し付けたまま。真っ赤になった顔で睨みつける。

「誰かに、言ったら、殺す……！」

「「イエス、マムっ」」

三人ともこれでもかというほどの敬礼を放ち、逃げるように解散した。

×××
さて、帰宅。二人とも菅谷のマンションに入る。菅谷がもらった食べ物三人で分け
たため、夕食はいつもより控えめにした。量的には。
手間的にはそれなりに掛かった。……何故なら。

「おー。美味しい、この炒飯」

「流石、樋口が焼き豚から作った奴だよな」

「…………どうも」

助けられたお礼ってわけでもないが、少し気合入れた結果である。時間は掛かった
が、その手間に見合ったものが出来た。

「いや、ホント美味しい」

「ふーん…………」

興味なさげに返事をしつつ、円香は内心では緊張気味に唾を飲み込む。今日の席順
は、円香と菅谷が隣同士で、お向かいが透。

円香は、腹に決めたことがあった。今日、もし菅谷がやられていたら、或いは菅谷が
やっちゃってて学校からいなくなるハメになっていたら。

自分の中には、絶対後悔が残る。これまで、もうたくさん全力で楽しんで来たつもり
だが、これからは128%を取る。その為には、やはり自分に素直になるしかない。

彼がいなくなるかも、その時に感じた恐怖が、それを呼び覚ました。

覚悟を決めると、内心ではドギマギさせながらも、身を菅谷の方へ寄せた。

「うえっ?」

「……………んっ」

肩と肩が触れ合う。別に肌を寄せ合うくらい、もう何度もしているのに、なんだか今日は緊張する。

それでも、それに負けじと顎をくいつと上げて目を閉じる。

「……………な、何?」

「言わなきゃ分からないの? 美味しい炒飯だけ貰って何も返さないなんて、さすが女の子二人侍らせてる良い御身分の人。言葉にしないとコミュニケーションが取れない子供じゃないんだから、私が何して欲しいかくらい察して」

「……………」

勇気を振り絞っているのだから。分かりやすいかもしれないが、他の方法など思い付かないのだから仕方ない。

撫でやすいように頭を差し出しているのだから、察してもらおうまで待機する覚悟だった時だ。

喉を、二本の指でこしょこしょと撫でられた。

「ひゃあああああんつつ!!?」

「ぷはっ……何今の声……!!」

「それな」

「じゃないでしょ! なんで喉!!?」

笑った透に同意した菅谷の胸ぐらを掴む。

「え、違ったの?」

「猫か私は!!? 頭撫でて欲しかったの!」

「な、なるほど……」

「頭でも猫っぽいよね」

「あ、確かに」

「浅倉うるさい。……リカ、良いから早く撫でて」

「はいはい……ん?」

そこで、菅谷は今更になって意外そうな顔で円香を見る。

「……え、マドちゃんが?」

「……悪い?」

「い、いやいや……それくらい良いけど」

「なら早く」

また喉を撫でられないように、今度は少し俯く。その頭の上に、菅谷は手を置き、優しくブラシを通すように撫でた。

「いつも美味しいご飯、ありがとう」

「……………」

……………思つた以上に恥ずかしい、と言うのが二人の感想だったが、少なくとも円香はまだ余裕があつた。……………何せ、今まで透ばかり甘えて自分は意地はつて我慢してきたのだ。どんなに触つても触り足りない。

次の案を思いついたので、円香はとりあえずスプーンを持つ。

「痛つ……………」

「ど、どしたの？ マドちゃん」

「……………さつきあの男に腕を握られた時、ちよつと痛めたみたい」

「わかつた。そいつの腕も折ってくれば良い？」

「そうじゃないでしょ。そんな事したつて私の腕は治らないし、食べづらい現状も変えられない」

「……………つまり？」

「聞く前に考える事をしない脳みそを無用の長物というのでは？」

「……………」

言われて、菅谷はしばらく考え込んだ後、スプーンを円香の炒飯の中に突っ込み、掬う。

そして、そのまま円香の口元へ運んだ。それを前に、円香はまた頬を赤らめる。……何せ、この薄らバカは気付いていないだろうが、そのスプーンは菅谷のものだ。そんなもので食べさせてあげるとか、間接キスを無理矢理されるようなものである。

だが、まだ口にはしない。出来なくなるからだ。

「はい、あーん」

「あーん……んっ、美味しい。流石、私が作った炒飯と、あんたが使ったスプーン」

「え？ ……あっ」

「じゃ、そのままそのスプーン使って。後は自分で食べるから」

「……あの、とおるん」

「ダメ」

「マドちゃんが答えるんだ……」

先読みは容易い。

円香が、それはもう実にツヤツヤした表情で、菅谷にベタベタと甘えながら食事をしている時だった。

お向かいにいたはずの透が、いつの間にか椅子ごと菅谷の反対側に持って来て移動し

ていた。

「リカー。私も撫でて」

「え、喉？」

「うーん……じゃあ喉」

「良いよー。おいでー」

「ゴロゴロゴロ……」

言いながら、透は目を閉じて、菅谷の膝の上に頭を置く。

「あ、それはダメ。牛になる」

「猫なのに？」

「それもそっか」

「いやダメでしょ」

口を挟んだのは円香。普通に牛になられても困る。

そう言いながら炒飯を掻つ込む円香に、透はニヤニヤしながら言った。

「ふーん……樋口、羨ましいんだ？」

「……別に。今は私ももう満足したし。……それに、その辺は後でちゃんとリカに平等

に摂取させてもらうから」

「えっ」

「……なるほど。そういう感じか」

「どういう感じ?」

一人いまいち理解しきれていない菅谷を置いて、透と円香は微笑み合う。わざわざ取り合うなんて馬鹿げている。元々、三人一緒にいても全然不愉快ではない仲だし「羨ましい」と思うことはあっても「邪魔」と思うことはない。

「じゃ、今日は樋口の日ね。どうぞ。リカのこと好きに使って」

「……良いの?」

「勿論」

「あの……俺は何に使われるの……?」

「じゃ、ソファァ使って。私、洗い物するから」

「ありがと。来て、リカ」

「あ、うん」

……そのまま説明もなく、菅谷を連れて円香はソファァの方に向かい、座る。隣に菅谷も座らせると、肩の上に頭を置くように寄り掛かった。

「んっ……」

「あ、あの……マドちゃん。どうかしたの?」

「何が?」

「何がって……色々。なんか、こう……ちよつと恥ずかしいんだけど」

「そう。良いザマ」

「え……ま、またそんな意地悪を……」

「嫌ならやめるけど？」

「……んっ、嫌じゃないよ」

……嫌じゃないなら構わない。円香は引き続き、菅谷の方に身を寄せ続け……。

「終わったー」

直後、ガバツとジャンプして来たのは、透だった。二人の膝の上にダイブするようにヘッドスライディングした。

ソファアーに座る二人の膝の上で寝転がる透。……が、自分でそれをした割に動かなくなつた。

「浅倉？」

「お腹、打つた……リカの膝硬い……」

「……だ、大丈夫？」

「リカ。気にしなくて良い。自業自得だから」

無視したまま、透は菅谷に身を預け続ける。

「……一応、もっかい言つとくよ。リカ」

「な、何……?」

「私も浅倉も、あんたがいなくなったら嫌だから。……それだけは、ホントに覚えておいて」

「……ん」

まるで、絶対に離さないと言わんばかりに円香は菅谷に体重をかけ続けた。

しばらく、このまま食休みだろう。せつかなので、何か見ても良いかもしれない。

「なんか見る? ドラマ」

「何でもいい」

「じゃあ、アントマン見たい。複雑な家庭っぽいし」

そんな話をしながら、割と遅くまで長居した。

無理がある、それは無理がある。

文化祭も、最終日となった。二日目は順調に進んだ。お昼時に女子二人が後輩二人と遊びに行ったので、そこで男性客は減ったものの、その後はなんだかんだ稼げた。

そして、最終日の夕方。文化祭が三日間あったにも関わらず、ここに来てようやくの休み時間である。

「よし、二人とも。全部回るよ」

「良いね」

「いや無理でしょ」

もう執事服のまままでいないと時間がないので、三人はそのまま回ることにする。

さて、まずは隣のクラスから。

「隣、何やってんの？」

「お化け屋敷だって」

「行こう」

「なんでよ。この中で怖がる人いないでしょ」

「良いじゃん。三人なら何処だって楽しいし」

「はいはい……」

「じゃ、入ろう」

そんなわけで、中に入った。受付を済ませて、三人で緊張気味に扉を潜る。

「おお……」

「思ったより暗いね」

「それ」

コメントのわりに、三人ともサクサクと進んでいった。所々、灯りはあるが、その真下にフランス人形やら骸骨やら人の身体の一部やらと置いてあったが、悲しいかな。三人とも無反応だ。

それなりに雰囲気は出ていて、実際、教室内にドライアイスやら何やらを使って冷気も演出しているのだが、相手が悪かった。

「すっごー。さっきの落ちてた腕、本物みたいだった」

「ね。断面とか筋肉と骨ちやんとあつたし」

「猟奇的な会話やめて」

「あれ欲しいなあ。内臓の勉強になりそう」

「袖からあそこだけ出して握手とか……あと、天井から落ちてくるように仕掛けても面白くない?」

「今後、そういう真似を私にしたらあんたらぶつ飛ばすから」

ビビるかどうかは別として、別にそういうイジられ方をしたいわけでもない。……なんて思っている時だった。唐突にガタツと横から音がして、三人とも足を止める。

顔を向けた方向には、作り物の窓があるだけだ。

「……なんか出るよこれ」

「来るのわかっているなら怖くないよね」

そう言う菅谷と透を見て、円香は少し複雑そうな表情をする。文化祭、自分のクラスの実行委員は頑張って張り切っていた。それはどのクラスも同じかもしれない。

しかし、こういう反応をすると向こうもやりがいなくなるだろう。そんなわけで、ここは一つ客がお化け屋敷に手を貸すことにした。

「わっ!」

「ッ!!??」

「プフツ、良いザマ……」

「ま、マドちゃん……」

「不意打ちはズルでしょ……」

「浅倉までビビると思わなかった」

「私だって、樋口がそういうことすると思わなかった」

直後、背後からガシヤアアアアアンツツと作り物の窓が壊され、ゾンビのような何かが飛び出して来た。

「アアアアリガドオオオオオオヒグチザアアアアアアン!!?」

「ツツ!!?」

「どういたしまつぐえっ」

完全に不意をついた形になり、透と菅谷は円香の腕を引いて逃げ出した。とりあえず肩で息できるところまで逃げてきて、走りから歩く。

「ふう、はあ……ま、マドちゃん……」

「ビックリした……」

透はどちらかと言うと、円香がああいうことをしたことに驚いた。自分からあの手のちよつかいを出すとは……やはり、菅谷に素直になつた事が原因となつていのだろうか? 嫌ではないが。

その二人を眺めて、一人落ち着いている円香は言った。

「浅倉までビビると思わなかった……というか、二人ともいい加減離れて」

「「え?」」

暗闇でよく分からないが、二人とも円香にしがみついていた。

「あと、どつちか知らないけど変なところ触らないで」

「変なところ？」

「肩甲骨とか？」

「違う……」

まあ、肩甲骨とか硬いところを言ったのは菅谷だし、多分胸とお尻に触っているのは透だろう。次の明かりがあるオブジェクトポイントまで歩いて二人を落ち着かせよう……と、思っていると、灯が見えた。

そこまで行つて、二人の頭に手を乗せようとした時だ。自分の胸に手を当てているのは、菅谷だった。

「……………え」

「ん……………あれっ、これ……………なんか肩甲骨にしては柔らかか」

拳で、菅谷が「胸を触っている」と意識する前に突き放した。

吹っ飛んだ菅谷を前に、円香はフウツフウツと威嚇をする猫のように胸を抱いて距離を離す。

触られた、ちよつと気を許すとこれだ……と、自らの迂闊さを呪う。この男、基本的にマヌケでドジを踏むのが上手いものだから、こつちが気をつけないといけないのに。

「樋口？」

「な、何……………」

「良いお尻してたね」

「あんたも引つ叩かれないの?」

「ご、ごめん……?」

××とりあえず、菅谷を捨て置いてそのままお化け屋敷を出た。

「ちよつとお腹痛い」

との事で、菅谷がトイレに行き、円香と透は男子トイレの前で待機。その間、ふと透がスマホをいじり始めた。

「何見てんの?」

「ん、写真。見る?」

言われて見てみると、そのアルバム名は「高一」と書かれていた。

「……意外。浅倉、こういうの作るんだ」

「うん。この写真が定期的に見たくなるから、せっかくだし作った」

その写真とは、この前の別荘での写真。三人で海をバックにしたり、二人が爆睡してるときにこっそり撮ったりした時のやつだ。

「ふーん………良いじゃん」

「でしよ?」

透は透なりに、思い出を大事にしているようだ。こういうこと、前まではしなかったというのに。

「そんな中、ふとスワイプしていると出てきたのは、透が誕生日の時のキス写真だった。……」

ムカつく、とかはない。ただ少し羨ましい。開き直った今、その感情しかない。

そんな風に思い、その写真で動きを止めてしまったからだろうか？ 基本的に何も考えていないはずの透が声をかけてきてしまった。

「樋口もしちやえば？ キス」

「……はっ？？」

「もう好きって認めてるんでしょ？ しちやえば？」

「い、いや……む、無理でしょ……付き合ってるわけじゃ、ないんだし……」

「事故でほっぺなら平気でしょ。私もやってるし」

「それ言っちゃってる時点で事故じゃないから……」

「ふふ、やっぱりまだ素直じゃない」

「……うるさい」

「これはそういう問題じゃない気もする。

「ま、その辺は樋口に任せるけど。……でも、キスした時は教えてね。コソコソされるの

今、やっているのは演劇。どういうチョイスなのか知らないが、城下町のダンデライオンをやっていた。三人とも全然知らないアニメである。

「はい、とおるん。マドちゃん。たこ焼き一つずつ」

「どうも」

「ありがとう」

呑気にそんなことを話しながら、のんびりと眺める。このアニメは、とある王家に姉弟が九人いて、その中から国王を選ぶ物語である。

「九人かあ……すごいよね。姉弟間で恋とか始まりそう」

「あるのかなあ。そんなこと。俺、姉妹いないから分かんないけど」

「そういえば、私達みんな一人っ子だよね」

「まあ姉弟なんて呼ばれちゃってるけど」

「本当の姉弟ってこんな感じなのかな。あんま二人とも姉感ないけど」

「姉感って何？」

「姉っぽい感じじゃない？ 私もりカが弟感……あるかも」

「えっ。俺そんなに弟っぽいのか？」

「ほいでしょ。ね、樋口？」

「ほい」

ま、いつかは二人にとって弟じやなくならせるけど、なんて考えながら、とりあえず食べ物空になるまで見学を続けた。

さて、食べ終わると体育館を出て、また見学を始めた。

残念ながら、時間が来てしまった。休み時間が短かっただけあって、全部回るのは無理だった。まあ分かっていた事だが。

で、後夜祭も終わって、片付けの時間。時間をかけて飾りつけただけあって、それそれなりにかかる。

円香と透は、更衣室で着替えていた。執事服を着替え終え、制服に戻った。

軽く伸びをしながら、透は少し寂しそうに呟く。

「あーあ……今日で執事も終わりかー」

「もつと着てたかったわけ？」

「うーん……まあ、どっちでも？ でも、着心地良かったよね」

「そりやそうでしょう。何せ、その辺も拘って作ったからね」

「そう言うのは、衣装を回収するために同行した日福だ。」

「うん。すごかった」

「ちゃんとポケットとかつけてくれたから、不便とかもなかったし」

「その辺、拘るのがベテランの技って奴ですよー」

チツチツチツ、と言うように指を振っておちやらけて見せる。

「それに……二人とも、菅谷くんが良いところ見せられたっばいしね」

「……え、何急に？」

「ふふ、2人のこと見てればすぐわかるよ。好きなんですよ？」

「……」

「……」

向こうの事見ても両想いである事は分かる、というのは黙っておく。

「大丈夫、Twitterに流れる漫画とかなら、割と女2対男1とかその逆とか、あとそれ以上にやばい10歳差ロリモノシヨタモノ、或いはJKとオジサンとか、男の子が女の子になつちやつてーとか色々あるから！ 私は応援するよ！」

「……いや、あんま大きな声で言わないで欲しいんだけど……」

円香が言いつつも、オタクスイッチが入った日福は止まらない。

「大事なのは尊さだよ。それを理解してるから……少なくともうちのクラスの人は何も言わないんじゃないの？」

何せ、不倫とは違って付き合う前からもうそんな感じになっているのだから。

熱弁させて、円香と透は顔を見合わせ、そして少しずつ頬を赤らめ、目を逸らす。

「……でも、まあ……リカがどういふつもりか分かんないし……」

「……あいつが私のこと好きな保証はないし……」

「いや……それはこっちのセリフなわけで……」

「は？ あんた自覚ないの……？」

「何言ってるんだお前ら」

唐突に口調が崩れた日福のツツコミを受け、二人とも黙るしかなかった。

さて、着替えを終えて教室に戻った。扉を開けると、中では既に着替えを終えて制服になった菅谷が、文事の胸ぐらと手首を握っていた。

直後、円香の熱は一気に上昇する。

「何してんのあんた？」

「え、柔道」

「一昨日、あれだけ退学になるような事はするなって言ったのになんでそうなるわけ？
もしかしてあんた退学になりたいわけ？」

「え、なんで？」

「は？ 分かんないわけ？」

「あー、待って樋口。これ単純に柔道の技、教わってただけ。……お前もちゃんと説明しろよボケ」

「いや、でもちゃんと教えるのに集中しないと危ないよ。怪我するの文事だし」
「そりゃ分かるけどよ……」

宥められて、ようやく円香は理解した。友達っぽいことをしてるようで何よりだ。思わず、ホッと胸を撫で下ろしてしまう。

「ふふ、樋口超必死だった」

「……うるさい」

「ただだけ愛が重いのか？」

「日福さん……」

痛烈に恥ずかしい思いをしてしまった。いくら素直になると言っても、人前で好き好きアピールが出来るほどではない。というか、それは流石に見境が無さすぎる。

「ていうか、いいからあんたら片付けして」

「へー」

軽い返事と共に、言われるがまま二人とも片付けに戻る。まあ、友達が出来たことは悪い事ではないのだろう。

とりあえず、そのまま円香も片付けに参加する中、透がふと思いついたように言った。

「ね、樋口。この後三人で打ち上げしない？」

「この時間から？」

「どうせ明日、振休じゃん。少しくらい遅くなっても平気でしょ」

「……まあ、そうかもしれないけど」

「じゃ、決まり」

「……」

どうせ菅谷のことだし暇でしょ、と言う計算で家に行くことになった。

「……じゃ、晩御飯何にするか決めないとね」

「焼肉？」

「お店行ったほうが良いでしょそれは」

「じゃあ……鍋？」

「それなら良いかも」

「じゃ、帰りにスーパーだね」

「んっ」

そう勝手に決めながら、スマホで何鍋にするか調べつつ決めながら、適当に片付けもこなした。

×

× さて、解散となり、元執事三人はスーパーに寄って食材を買い、菅谷の部屋に来た。

今日ばかりは家事は抜きで、三人ですぐに手洗いうがいだけした直後、食事の準備

をした。

面白そうな鍋を見つけたので、早速それを三人がかりで作り、完成させた。思ったよりうまくいき、後は実食してみるのみ……なのだが。

「……これ、大丈夫なの？」

「めっちゃ赤いね」

「あんたらがノリノリだったんだからね」

そう、火鍋である。別に炎をそのままぶち込んだわけではない。香辛料をぶち込み、火のように赤くなった鍋である。栄養は間違いなくあるが、舌と喉が死ぬアレである。

「誰から行く？」

「リカ」

「いや俺ですか」

「こういうのは男からでしょ」

「言い出しっぺじゃないの？ とおるん」

「いやむしろ長女からでしょ。樋口」

「私、長女じゃないし」

全力で拒否し合っていた。このままでは埒があかない、そう思った菅谷が「よし」と声を漏らした。

「どの道、乾杯もしないといけないわけだし、ここは火鍋のスープで杯を交わすのは如何だろう?」

「えっ」

「良いね。それ面白い」

「浅倉……まあ良いわ、それで」

最初こそ文句が出そうになった円香だが「まあ平等だし良いか」と思い、承諾した。どの道、みんな食べるのだから。

「じゃ、俺注ぐね」

「ありがと」

「ん」

二人のお椀に注いだ後、最後に自分のお椀に垂らす。2〜3滴。

「よし、飲もう」

「「いやいやいや」」

「? 何?」

「分かった。注いであげる。表面張力が働くくらい」

「嘘です、ごめんなさい」

円香が脅すと、ちゃんと今度は一人前、注いだ。

さて、改めて三人はお椀をコツンとぶつけた。木製の地味な音が部屋の中に響く。

「文化祭、お疲れ様でした」

「「かんぱーい！」」

そして三人で口をつけ、そして三人でコップに手を伸ばし、そして三人とも中身がコーラで舌が二度死に、そして三人でひっくり返った。

「……かつつら、いやかつつら……」

「舌、燃えてないこれ？」

「豆板醤の味、やたらと濃いんだけど。誰入れたの」

「私じゃないから……」

「分からん……」

「「浅倉ア……！」」

「え、なんで分かるの」

秒だった。とはいえ、作ってしまった以上は仕方ない。もう食べる他無いのだから。グツグツと煮えているので、仕方なく肉を一枚取る。菅谷がそれを米の上に乗せ、口は運んだ。

「……うん。味は良いから、覚悟を決めた上で生きる為と割り切って辛さを無視出来れば食べられる」

「ここは戦場の食卓?」

「リカ、超涙目じゃん。ウケる」

「ウケるな。とおるんが」

やらかした本人に笑われたくない。

さて、改めて三人とも頑張つて食事を進める。その際、会話はなかった。カニを食べ、無口になるのとは別の理由で、辛くて喋りたくないからであった。

ようやく、鍋の中の具材が減ってきて、口の中の辛みも引いてきた頃、三人は割と疲弊していた。

「ふう……食事して疲れたの初めてなんだけど……」

「俺は家族でわんこそば食べに行つて以来」

「あれどんな感じなの?」

「無限地獄」

「……」

なんか普通に会話出来ているが、円香にとっては謎でさえあった。舌が痛くてそれどころではない。

しばらく口を開けてペロを出しておかないと、割と厳しい。けど、そんな顔を見られたくないの、円香は机に伏せて顔を隠してしまった。

そんな円香を見て、なんとなく心配になった菅谷が声を掛ける。

「マドちゃん、泣いてるの？」

「……」

「そんなに辛かった？ お水入れてこようか？」

「……へ、へいひ……」

「え？」

「……へいひ……」

「とおるん、なんて？」

「分からん」

「よく分かんないけどダメそうだね。上向いて。お水飲ませてあげるから」

「っ！！？」

この野郎は本当に回してくれた気がいじめに変換されてしまう可哀な男である。

こっちの気も知らずに、菅谷は台所で水を汲んでくる。

「飲んで」

「っ……」

「いやいや、じゃないの。伏せるほど痛いならヤバいつて」

「っ、へ、へいひははら……！」

「戦場ヶ原？ どうしたの急に。思ったより普通の草原だよあそこ」

言つてない、というツツコミも出来ない。とにかく顔を見せたくなくて俯いて抵抗している、菅谷は透に声を掛けた。

「とおるん、顔上に向けて」

「はいはい」

そこまでするか！ と思つた時にはもう遅い。透は後ろから円香の両肩を掴み、自分の方へ引き寄せる。

「んっ……つて、重っ。樋口、上向いて」

「……ふ、ふりっ……」

「え、何。フリなのこれ？」

そのフリじゃない、と思つても無駄である。発声出来ない。

すると、ふと肩の上から透の手が消えた。もしかして、諦めてくれたのだろうか？

何にしる助かった、なんて気を抜いた時だった。脇の下に指が差し込まれた。

「ひゃんっ……っ？」

くすぐったさから、唐突に体を逸らしてしまった。

直後、菅谷の目に入ったのは、真つ赤な顔で涙目になったまま、舌を出した円香の顔だった。

「あれ……な、なんか……変な顔して……」

「樋口、なんで恍惚としてんの？」

「っ！」

×ゴツンゴツンとゲンコツが二人の頭に降り注いだ。

×頭にたんこぶを作ることもあったが、長い時間をかけてなんとか食べ終えた。

飯の後は、さらにスーパーで買った小さなチーズタルトをコーヒーと一緒にいただく事になった。

それに備えて、菅谷がコーヒーを淹れて、透が用意した。やらかしたただけあって円香を働かせることはできなかった。

「あれも美味しかった。茶道部のお茶」

「あ、分かる。とおるんだけ手え滑らせて落として飲めなかった奴」

「いや、手元で何度も回してたら落とすでしょ」

「作法だからあれ。そういうことじゃないから」

「大丈夫だよ、とおるん。お茶は苦いだけで、どっちかって言うとお饅頭の方が美味しかったから」

「や、あんた本当にお金持ちの息子？」

「そういうとこだよね。リカが全然、お金持ちに見えないとこって」

「いやだつて苦いもん。お金持ちとか関係ないから。スタークさんだつてチーズバーガー好きでしょ」

「そっか」

なんて話しながらデザートを食べ終えた時だった。ふと円香は、時計が目に入る。時刻は、21時半を回っていた。

もう帰らないといけないうちどころか、未成年は表を出歩いてはいけない時間だ。とはいえ、まあ隣の駅まで移動して家に帰るだけなら許容範囲ではあると思うが。

……しかし、それを口にするのは少し嫌だった。このまま気付かないふりをすれば、もう少し長く一緒にいられる。

そのため、次の話題に移ろうとした。ほとんど教室にいたわけだが、雛菜や小糸と遊んでいた時の写真を使えば、まだまだ会話は引き延ばせる。

そう思つてスマホを手に取つた時だ。

「あれ、もうこんな時間じゃん」

だが、菅谷が先に時計を見上げてしまった。

「そろそろ帰らないと、二両親心配するんじゃないの？」

「……まあ、そうだけど……」

「?」

いつもロクなことに気が付かないくせに、余計な事にばかり気がついて……いや、余計な事ではないかもしれない。自分や透を氣遣つての台詞だろう。

實際、別荘にいた時も、メチャクチャ悔しそうにしながら帰宅を勧めてくれた。今だつて、本当は帰したくないのかももしれない。

そんな中、透がふと思いついたように言った。

「じゃあさ、泊まつちやう? 部屋」

「えっ」

「こういう時のために、下着とパジャマ、置いてあるじゃん」

「……それは、そうだけど……」

「大丈夫かな……?」

一応、親には「リカの家で打ち上げる」と連絡はしてある。だが、泊まるとは言っていない。

「いや、でもその場のノリで泊まる、なんて言つたら、リカの家に行くのダメって言われるかもよ」

「大丈夫でしょ。友達の家泊まるくらい。一回、泊まつてるんだし」

「それはそうだけど……友達なのに男の家に泊まるの? ってならない?」

「なるかもだけど……大丈夫でしょ」

ダメだこの幼馴染。泊まることしか考えてない。それとも、自分が考え過ぎなのだろうか？ ……いや、考え過ぎなわけがない。未成年の寝泊まりは、それだけ大人にとつてはデリケートな問題なはず。こちらに一切、そんな気はなくとも、ご近所の評判もあるから。

有栖川夏葉なら何も言わないかもしれないが、あんまり騒ぎ過ぎて上の部屋や下の部屋の人にバレたら。或いは、何かの間違いで円香や透のご近所に知られたら。

そう考えると、やはりせめて自分達も自立してから……と、思っていると、円香のスマホに着信。母親からだ。

「ごめん、電話」

帰りが遅いからだろうか？ 黙って泊まろうとするのが一番まずいのは分かっている。ヤバいと思いつながら応答した。

「もしもし？」

『泊まってきて良いよ。節度を弁えるなら』

「……なんで」

『この時間まで連絡がないから、迷ってるんだらうなって』

「……」

『でも、もう一度言うけどちゃんと節度は持つてね。キスまでなら良いけど』
「はっ？ な、何言ってるの？」

何もかもバレバレであった。この親、もう怖い。

『透のご両親にも連絡しなさいね』

「うん」

そこで電話は切れた。まあ、許可が下りたのなら、これ以上遠慮することもないのだから。それに、文化祭中から考えていたことを実行する良い機会でもある。

とりあえずスマホをしまうと、二人に言った。

「泊まる」

「はいはい。じゃ、俺お風呂沸かしてくる」

「浅倉、あんたもちゃんと連絡して」

「分かってるよー」

「今」

菅谷がリビングから出ていくのと同時に、透も出て行った。

自分も、コーヒーはまだ残っているが、ケーキのお皿は三人とも空なので、それだけ片付けておく。

ふと、部屋のほぼ全てが見渡せる台所に立って、円香は思ってしまった。もう何度も

来ている部屋だが、改めてここは菅谷が毎日暮らしている部屋。この前の別荘と違い、菅谷の生活感が溢れている場所だ。

そんな所で一泊すると思うと、なんだか前とは違う意味で緊張が高まった。だが、それではダメだ。何故なら……どうせ透と菅谷は緊張なんてしないから。

何せ、バカだし。

自分だけ意識するのは、なんだかバカバカしい話だ。

「ふう、よし」

洗い物を終えると、二人が戻ってきた。

「よし、じゃあどうしようか」

「とりあえず、なんか映画見ようよ」

「何にする?」

「たまにはアニメとかどう?」

「例えば?」

「ガンダムとか?」

「良いね」

「え、私よく知らないんだけど」

「三部作の映画あるんだって」

「ふーん……まあ、私はそれでも」

「俺も」

×そんなわけで、三人でガンダムを見始めた。

×

「ガンダム……ヤバい」

「ていうかシャア……エグい」

「やばっ、面白すぎた」

割と中途半端なところで終わって三人とも固まってしまったが、面白かった。特に、ガウがホワイトベースに突っ込む所は、思わず円香は菅谷の手を強く握ってしまった。

「ていうか、リカも殴られたことなさそうだよね」

「あるよ。サファリバスから飛び降りたり、イルカのふれあいコーナーで水の中に飛び込んだりした時は、普通に殴られた」

「そりゃ殴られるでしょ……」

「ね、二人はどのモビルスーツが好きだった？ 私、ガンキヤノン」

「続編もあるし、まだモビルスーツ増えるでしょ」

「今のところ」

「……グフ？」

「あー、樋口っぼいわ」

「どういう意味」

「マドちゃんの刺々しいところ？ サーベルにムチに指の銃とか、マドちゃん超使いこなせそう」

「分かるわ」

「は？ てか、浅倉こそでしょ。序盤で適当にぶちかまして弾切れになるとことか」

「確かに。とおるんって撃墜されずに撤退しそう」

「分かるわ」

「あんたが分かるな。……てか、リカは？」

「ザク」

「ぼいわ」

「なんて話ながら、透がリモコンをいじる。半端なところで終わったから、早く続きが見たかった。」

「じゃ、次行くよ」

「あ、待ってとおるん。その前にお風呂入って」

「えー」

「いや、マンションだから、あんま遅くにお風呂入るとご近所に迷惑かかる」

そういう理由なら仕方ない。透も納得した。

「じゃあ、私先に入るね」

「一応、言つてくけど、別荘と違って広くないから、二人一緒は無理だよ」
「分かつてる」

そのまま透は先にお風呂場に向かった。残つたのは、菅谷と円香のみ。そろそろコーヒーも飲み過ぎると眠れなくなりそうなので、歯磨きをする事にした。

「マドちゃん、歯磨きする？」

「ん……うん」

「待つてて」

菅谷が歯ブラシを流しから2人分、用意する間に、円香は軽く決心する。もうこの機会、逃すのは勿体ない。

歯ブラシを手渡してきた菅谷が隣に座ると、円香は隣に体重をかける。

「マドちゃん？」

「ん……」

「またナデナデ？」

「一々、確認しないとダメなわけ？」

「ごめん……」

歯磨きをしながら、撫でてもらう。

「良い子良い子」

「子供扱いはやめて」

「いや撫でて欲しい癖に……」

「……ねえ、写真撮りたい」

「良いけど、どうしたの？」

「いや、考えてみれば、あんまりカと二人きりの写真とかなかったから」

そう返事をしたまま、シャカシャカと歯磨きを続け、うがいをしてソファアに戻った。

「リカ、スマホ構えて」

「俺が撮るの？」

「そう」

まあ良いけど、というように菅谷はスマホを持つ。呑気に自撮りモードにして構える。菅谷を横に、円香は緊張気味に頬を赤らめる。

「マドちゃん、顔赤いけど……どうかした？」

「別に。気にしなくて良いから、撮って」

「う、うん……？」

とりあえず、と言うように菅谷がスマホのシャッターボタンの上に手を添えた時だっ

た。

円香が菅谷の顎に手を添え、頬に唇をつけた。眉間に皺を寄せ、頬を真っ赤にした上で行われている。なんか、悔しそうに見える顔だ。

「ほへっ……?」

「っ……!」

キスされていると言うのに、あまりにも間拔けな声が漏れた直後、カシャつとシャツター音が聞こえる。

プハッ、と頬から口を離し、円香はそのままソファーから立ち上がる。流石に、羞恥で破裂しそうであったが、素直になった今、どうしても透のキスの写真が羨ましかった。そのまま早足で歩きながらソファーの後ろに回り込み、廊下に繋がる扉の前に立つ。

「っ、ちよっ……マドちゃ……!」

「事故だから」

「はっ……?」

「事故、だから。セーフだから」

「や……」

「お風呂」

まだ透が入っているだろうに、円香は後ろからドシャツと倒れる音を無視して、本当

にお風呂場に向かった。

洗面所の扉を開けると、透が裸で身体を拭いていた。

「っ!?」 つ…………くりした、樋口か…………って、どしたの? 顔赤いけど」

「……………した」

「え?」

「……………キス、した…………」

「……………は?」

「大丈夫。頬にだから。前の浅倉と同じ感じ」

その表情は、恥ずかしいだろうに、なんだかんだ思惑が上手くいっていて嬉しそうな表情だ。それを、さらにまた噛み殺して隠そうとしている。本当に面白い幼馴染である。

何にしても、透がかける言葉は一つだけだ。

「良かったじゃん」

「……………ん」

「写真は?」

「……………あ、リカのスマホ」

「ま、送って貰えば良いでしょ」

「……ん」

××それだけ話して、二人は入れ違いでお風呂を入れ替わった。

×さて、入れ替わった透はのんびりとソファの方に行く。ソファの真下で、菅谷は気絶していた。本当にウブな男だ。このメンタルで一体、どうやって生きてきたのか。

とりあえず、自分はソファの上に座り、のんびりと菅谷の身体を持ち上げ、膝の上に頭を置いてやった。

「……ふう」

今日で、今更ながら文化祭は終わり。だがその間、菅谷はずっと、どちらかといえば自分より円香の方が多く構っていた気がする。

まあ、仕方ないと言えば仕方ない。円香が素直になれるかなれないか、その瀬戸際の話だったのだから。

けど、それももういいだろう。キスマでしたらしいし、まだ素直になれずに拗れる、という話はないはずだ。

「……だから、明日からはまた、遠慮しないからね……？」

言いながら、透は菅谷のスマホを拾い、円香と菅谷のキス写真を、円香のスマホに送信しておいた。

見えないものの成長が大事。

大学生あたりになったら苦勞しそうだよね。彼女の方が。

健全な男子高校生とは何を指すのか、それは勿論、様々だろうが、単純に考えれば「勉強も運動も程よくこなして友達付き合いもできる高校生」だろう。

だが、それは男子高校生に限った話でなく、全学生に言えることだ。つまり、男子高校生ならではの項目がそこにはある。

趣味？ 違う。彼女？ 違う。それは、菅谷に唯一、欠けているものでもあった。

「頼む！ 菅谷！」

頭を下げているのは、文化祭をきっかけにそれなりに仲良くなった文事。放課後の校舎裏で紙袋を差し出していた。

円香と透に知られたくない話のようで、二人には先に帰ってもらっていた。

「これ……来週の月曜日まで預かって欲しいんだ」

「何これ？」

「……エロ本」

「ブツ！」

思わず吹き出してしまった。なんてモノを預けて来るのか、この男は。

「な、なんつ……!」

「正確に言えばエロ同人誌。この前、コミケでつい出来心でな……」

「? どーじんしって何?」

「あ? あー……まあ、エロ本」

「やっぱりかよ……」

説明が面倒だったのか、ぶん投げたような言い方だが、間違いではない。中のものは

18禁のものばかりだ。

「え……文事って今いくつ?」

「同じクラスの奴にそれ聞かれたの初めてだわ」

「18歳未満じゃん。何してんの?」

「そんなの律儀に守る奴いないだろ。……え、お前エロ本読んだことないの?」

「ないよ。そんなのにかけるお金もない」

「……ホモなの?」

「帰るね」

「あー嘘です待って!」

帰ろうとする菅谷の肩を慌てて掴む。というか、文事にとつても想定外だ。まさか、エロ本を買った事はなくとも、せめて興味くらい持っていていそうなものだが……。

「ていうか、そんなの買つてまで女の人の裸見たいの? 最低」

「何その女子みたいな言い分! お前本当に男子高校生?!?」

「俺はエロ本買うくらいなら、昆虫図鑑買うね」

「女の裸は昆虫以下か! ……え、ていうか浅倉と樋口は? ……こういう言い方し

ちゃアレだけど、そういう目で見えたことないの?」

「? そういう目? ……ああ、かわいいよね」

「いや違くて。……だから、こう……胸大きいな、とか……」

「え、あの二人のことそういう目で見たの? 殺すよほんと」

「いい、一回くらいあるだろ! プールの時とか、体型がスク水でモロに出るわけだし!」

「ないよ」

「……カッコつけてる?」

「え、俺今カッコよかった?」

少し苛立ってきた。こいつとの会話は疲れる。

「……でも、とにかく待っていてくれ。今週の土日、従兄弟がうち来るから、探されたら最

悪だ」

「えー……でもうちだって……」

「一人暮らしなんだろう？」

「や、まあ……でもうちにも……」

「え、誰か来るの？」

……そこで、菅谷は口を止める。ダメだ、二人が割と部屋に来てるなんて言えない。

「……たまに、親が」

「たまになら良いだろ？」

「……」

ダメだ、引き受けるしかない。今の流れで断ったら怪しまれるかもしれない。

仕方ないので、その紙袋を受け取る。中はなるべく見ないようにしつつ手に持つと、

文事は続いて言った。

「あ、それ俺がお前に預けたこと、誰にも言うなよ。女子の情報伝達力はお前の大外刈り

より速いんだから」

「わ、分かったよ……」

とりあえず、それを受け取っておいた。文化祭では、円香と透のピンチをいち早く知

らせてくれたし、世話になった礼だ。

×それに、家にあつたとしても見なければ良いだけの話だ。

×さて、翌日。本当に菅谷は一度もそれを見ることなく眠りにつき、目を覚ました。というか、朝食食べながら部屋の真ん中に置いてある紙袋を見るまで思い出す事もなかった。

まあ、そもそも別に興味もないわけだが。それよりも、今日は円香と透は何をしているのだろうか？ 暇なら遊びに誘ってポウリングでも行きたい所……と、思っている時だ。インターホンの音が鳴り響いた。

「来たのかな？」

応答すると、カメラに映っているのは円香と透。いつもの二人だ。

「はーい？」

『部屋、見に来た』

『顔じゃなくて？』

「今、開けるね」

裏拳を貰う透を無視して、自動ドアを開ける……そこで、ハツとした。あのエロ本、どうしよう……と。

「マズイ、何せ文事から「俺のだって言うな」と言われている。見られるわけにはいか

ない。

まず、部屋の鍵を閉めた。隠し場所を探さないといけないから。

「え、えつと……」

ベランダ……はアウト。まだ家事は朝飯食べるくらいしかやっていない。円香ならば団を干したりしてくれてしまう。

台所……もアウト。いつも二人が来て掃除が終わったらコーヒーを淹れるが、たまに気まぐれで透がやってくれる事もある。

自室……もダメ。洗濯物の関係で割と人の出入りがある。

となると……お風呂場しかない。そうと決まれば、すぐに紙袋を置きに行つ……。

「あ、ダメだ」

いつも洗濯する時、お風呂の水を使つてる。やばいやばいやばい、と焦りが頭の中で反復してきた。そんな中、ピンポンとインターホンが鳴る。

「うそつ……も、もう来た……!!?」

こうなつたら仕方ない。とりあえず、二人があまり寄り付かないミミズの抱き枕の中に隠しておくことにした。掃除中はなるべく、自室に入れないようにして、その後は外に遊びに行けば良い。

そう決めて、隠し終えてから慌てて菅谷は応答した。

「はーい？」

『開けて』

「はいはい」

さて、コホンと咳払いして玄関を開ける。

「掃除。手伝いに来た」

「いつもありがとね」

「お邪魔しまーす」

呑気に挨拶しながら、二人は部屋の中へ。

「なんだ、あんま汚れてないじゃん」

「だいぶ一人暮らしに慣れてきたって事でしょ」

「ま、まあね。じゃあ……俺、布団干すから、マドちゃんとおるんは他のことお願い」

「？ どうしたの？ 指示出すなんて珍しい」

「普段は浅倉とサボるからね」

「い、いや……なんとなくだよ」

「……」

言われるがまま、透は洗濯機を回し、円香はルンバをかけつつ、ルンバで吸いきれないゴミを拾って捨て始めた。

それを横目で見つつ、菅谷は布団を干す。テキパキと働く中、菅谷はチラチラと二人の様子が気にかかる。万が一にも抱き枕に触られたらアウトだ。

「……ま、マドちゃん？ ソファアの下には何も無いよ？」

「いや、なんかゴミあつたら困るでしょ」

いつもよりチェックが厳しい気もするのは、気の所為だろうか？

「とおるん、そこの棚も洗剤しかないけど……」

「……ふーん」

透も、お風呂掃除用の棚の中をやたらとチェックしている気がする。……隠しものがバレていて、何か探されているような疑心暗鬼に陥りかけていた。

割と気が気じゃなくなりつつも、二人がミミズの抱き枕に近寄ることはなく進んだ。

さて、ようやく家事終了である。菅谷が淹れたコーヒーを三人で啜り、ホッと一息つく。

「さて、今日はどうしよつか？ ボウリング行かない？」

「夕方から雨降るらしいけど？」

「え、そうなの？」

まずい、外出出来ないかもしれない。いや、それ以上に、その時間までには洗濯物をしまう必要がある。

「ていうか、そもそも私、午後から小糸と勉強するから」

「あ、そうなんだ」

「だから、これ飲み終わったら帰る」

「とおるんは？」

「私は午後も平気」

「じゃあ、あれやろ。父ちゃんにもらった古いスマブラ」

「良いね」

なんて話しながら、コーヒーを飲む。何とか自室から二人の意識を逸らすことに成功した。

ホッと一息つきつつ、とりあえずトイレに行きたくなった。

「ごめん、トイレ」

「いってら」

この調子ならエロ本の件はバレないかな、と思いつつ、菅谷はリビングを後にした。

××

「……」

「……」

残された円香と透は、黙り込んだ後、お互いに顔を向ける。

「何か隠してる」

「ぼいね」

バレていた。

「いつもは力仕事の、お風呂の水を洗濯機に入れる必要がある上にパンツを見られる可能性がある仕事はリカがやるのに、今日は浅倉にさせてた」

「うん。なんかやたらと私達の行動をよく見てたし」

「見られたくないものがあるっぼいよね」

「探した方が良い。何を隠してるのかは知らないけど」

「私達にまで隠し事とか、ムカつく」

とはいえ、午後は円香にも約束がある。菅谷が隠しているものを堂々と探すわけにもいかない。好きであると認めたら、嫌われては意味がないのだ。

「樋口、帰る時にリカの事、外に連れ出してよ」

「……なるほど。でも、30分が限界だと思うけど」

「あ、そっか」

「……一応、目星はついてるから、そこ探して」

「何処？」

「寝室」

「りよ」

そう決めた時だった。バシヤアアアツとトイレを流す音が聞こえる。出てきた菅谷が、手を拭きながら二人に軽く手を振った。

「ふう、お待たせ」

「おかえり」

「じゃ、私帰るから」

「えっ、もう?」

早速、コーヒーを飲み干しながら立ち上がった円香が、そう言つて鞆を持つ。

「言つたでしょ。小糸の勉強見ろつて。遅れるわけにいかないの」

「あ、そ、そっか……じゃあ、駅まで送るね」

向こうからそれを言つてくれるとは思わなんだ。ありがたいけど、なんだか少し悪い気もする。

「とおるん、何か食べたいものとかある? ついでに買つてくるよ」

ホント、こちらがツイでに頼もうと時間を稼ごうとしていたことを向こうから言つてくれるあたりは良い人なのだ。

「じゃあ、お好み焼き」

「嘘でしょ……」

「嘘。冷凍で良いから今川焼き食べたい」

「あつたらね。……あ、無いと思うけど、もしお客さんとかきても無視して良いからね。両親でも室寺さんでも」

「? なんぞ?」

「俺以外の男がおると二人きりなんて万死に値するから」

そういうとこ、もはや可愛げさえ感じる。

さて、二人が出かけたのを見て、透は少し時間を置いてから、出発した。円香が言うには、菅谷の寝室にあるらしい。

この部屋のどこにあるかが疑問だが……なんとなく目についたのは抱き枕のチャックだった。

「この中とか……あ、これかな」

紙袋が入っている。こんな不自然なところにある時点で、ほぼ確定だった。早速開けて中を見ると、思わず硬直した。

「……………え」

何故なら、中に入っていたのはやたらと薄い本だったからだ。しかも「ナースに搾取される本」というタイトルで、文字通りナース姿の女性が男の人の尻を踏みつけ、片手に浣腸、片手に何故か蠟燭を持ってサディスティックな笑みを浮かべていた。左下に

は「R18」の文字が書いてある。

エロ本な上に、明らかにアブノーマルな内容が含まれていそうなものだ。

「え……リカ……え？」

その手の漫画を見たのが初めてな透は、思わず頬を赤らめて目を逸らしてしまう。信じられない。なんでこんなのを、あの菅谷が……この表紙……え、そういう趣味？ と、もはやエロ本を持っていること自体への違和感を吹き飛ばす程の威力だった。

……いや、まだわからない。表紙の内容と中が合致しているとは限らない。大丈夫、もしかしたらR18（G）かもしれない。人体の勉強の為に。

ゴクリと唾を飲み込み、透は中を開く。内容は、もはや表紙の通り。筋肉がある男子高校生が入院し、ナースにあんなことやこんなことをされる。

割と現実的に出来ないことを平然とやってるな……なんて、次第に透は夢中になって読んでしまっていた。

「……もしかして、リカ……」

そういうの、さりたい人なのかな……なんて思ってしまった。いや、そうでなくとも、恋人になったとしたら、いつかは菅谷ともそういう事をする日が来るのだろうか？

菅谷ももしかしたら、こういう形のアレを……と、思った所で連絡が来た。海での写

真をアイコンにしている菅谷からだ。

LIKA☆『ラッキー！ たい焼きの屋台がスーパーの前にできてる！』

……そうだ、こんな純粋な子をえつちな目で見るのは、流石に良くない。これを持っている理由は……そう、単純にクラスの誰かに「預かって！」とでも言われたのだろう。部屋に彼女が来るからなのか、それともお客さんが来るからなのかは分からないが、そういう事だ。

「……よしっ」

とりあえず、見なかった事にした透は、それを紙袋に戻し、元の場所に戻した。これが方に一つの可能性として菅谷のものでも、何も思わない。そう心に決めて。

とおるん『カスタードで』

所望して、しばらく待機する事にした。

とりあえずリビングに戻り、菅谷に言われた通り、スマブラの準備を始める。すると、またスマホが震えた。今度は円香からだ。

マドちゃん『何か見つかった？』

どうやら、円香も知りたがっているらしい……が、果たしてこれは伝えて良いものなのか。菅谷にとつても円香にとつても、言わない方が良い気がする。

その為、誤魔化すことにした。

とおるん『禁断の果実があった』

マドちゃん『は?』

マドちゃん『なにそれ?』

とおるん『知らない方が良いよ』

マドちゃん『ちゃんと言つて』

マドちゃん『ねえ、何それ』

マドちゃん『未読無視しないで』

途中から既読をつけるのをやめて、通知をオフにした。

×

電車の中。

「……わかった。明日、自分で探して真相を知れてことね」

×口数の少なさは、いつの時代も仇となるものだった。

×

×スマブラの準備を終えてしばらく、ガチャッと玄関が開かれる音がする。

「あ、おかえりー」

「ごめーん、とおるん。タオルある?」

「あるでしょ」

「いや、ごめんけど持って来て」
「？」

前に雨が降ったからか、今日は日本晴れなのに……何かあったのだろうか？

言われるがままタオルを持って迎えに行くと、菅谷の左半身が派手にびしょびしょに濡れていた。

「うわ……どしたの？」

「……車に水溜りはねられた」

「あーあ……はい、これ」

「ありがとう……」

「洗面所までタオル敷いて、床濡れないようにしようか？」

「お願い……あ、これ。たい焼きは無事だから」

「お、流石」

さっきの衝撃があまりに大きかったからだろうか？ 透は少し気がきくようになっていた。

たい焼きを預かり、適当な所に置いてから、タオルを取りに行くために洗面所に引込む。確か、パジャマとかが入っている棚の上に……と、思い、そこからタオルを取って洗面所から出ると、菅谷は上半身裸になっていた。

直後、フラッシュバックしたのは、さつき読んでしまった漫画。上半身裸の筋肉男だ。

「つ、な、なんで脱いでるの……?」

「え、いや脱ぐでしょ……風邪引くし」

「や、まあそうだけど……」

海と泊まりを経験したからか、上半身裸を見せることくらい、なんとも思わなくなっている。

……しかし、透の目にはそれだけでなく、ズボンのベルトとおへその間にある、パンツのゴムも目に入っている。もうパンツは何度も見ているが、履かれているパンツを見るのは初めてだからか、割と衝撃が来た。

その上、あのイケメンが左半身だけとはいえ、ずぶ濡れの状態……水も滴る良い男、とはよく言ったものだ。

「つ……は、早くシャワー浴びて……」

「? う、うん?」

一人、何も分かっていない様子の菅谷は、そのまま洗面所に引っ込んだ。

リビングに戻り、自分の胸に手を当てて、気を落ち着かせる透。大丈夫、あれくらいの映像、下半身が海パンと思えば何度も見てきた。気にするほどの事ではない。

……自分に見せたかったのかな。いやだから、それはない。前までは履いてないパン

ツを見られただけで赤面する男だったのに、僅か数ヶ月でそんな趣味に染まることはない。

だから、自分も全然、性欲を掻き立てられるような事になっていない。

「……………ふう、落ち着いた」

そうと決まれば、スマブラでもやろう。Wiiのスマブラは、ソロのコンテンツも充実している。その辺やって、気を紛らわせよう。

しばらく手元でカチカチとボスラッシュを相手に、ゲームキューブコントローラを弄っていると、ヌツと後ろから菅谷の顎が自分の肩の上に置かれる。

「おっ、もうやってんの?」

「わっ……………リカ。もう上がっ」

反射的に振り返ると、また上半身裸だった。シャワー後とはいえ温まって出て来たからか、湯気を身に纏っていて少し色っぽさがある。

「っ、だ、だから……………なんで裸で……………?」

「え? いや、パジャマのズボンがあっただけど、着替え洗面所に持っていくの忘れたから、干してある奴、もう乾いてたらそっちで良いかなーって」

こ、この男……………! こういう時に限って無自覚にすけべになるのはなんなのか。

「……………いいから、服着てきて」

「分かってるよ。ちよつと話しかけただけなのに……もしかして、たい焼きダメになつてた？」

「いいから」

「う、うん……」

いつになく語気が強くなつてしまい、追い返すような形になつてしまった。

仕方なさそうに菅谷が着替えを取りにベランダへ行くのを見ないようにしつつ……。

「いや待つて。そのままベランダ出るの？」

「え、なんで？」

見ないようにするのは無理だった。いや、男の人なら裸のままベランダに出るのもあるかもしれないが……でも、他の人に見られたらと思うと、それを許すのは癪だ。

「どうせ乾いてないから。干したばっかでしょ。部屋から取つてきたら？」

「えー、見てみないと分からなくない？」

「いいから」

「……はーい」

追い出した。これでようやく、何も考えずにいられる……そう思い、ポーズ画面を押し、また戦闘を開始した。

「……」

……ダメだ。悶々とする。ちよつと集中出来ない。

一旦、休憩し、映画を見ることにした。こういう時は、コメディものの映画を見るに限る。

「あれ、スマブラやめちゃったの？」

……が、着替えを早く済ませてきたバカは、それを許してくれなかった。ジャージを着てリビングに入り、隣に座る。

「やろうよ」

「……んっ」

まあ、対戦でも亜空の使者でも、白熱すれば忘れられるか、そう思い、透はとりあえず一緒にやることにした。

「何する？」

「対戦。ボツコボコにするから」

「え、う、うん……？」

なんかやたらと殺気立ってしまったが、とりあえずゲーム開始である。

隣に座る菅谷からは、シャンプーとボディソープの良い香りがする。透が使っているのと同じなのは内緒だ。

それがなんだか気になって、微妙に集中できない。

「いやー、にしてもあれだよ。とおるんと二人きりなんて久しぶりだよ。」

「まあね」

「そうだ。なんかマドちゃんに写真送ろうよ。驚かせるような感じの」

「まあね」

「? どしたの? 熱ある?」

「まあね」

「えっ、あるの?」

「ないよ」

額に伸ばして来る手を避けてしまう。その時、ふと見えた。見えてしまった。半端な位置まで閉ざされたジャージのチャックの隙間が。

見えたとか、そういう事ではない。時には、衣服を着ている方がえつちに見えるという話だ。

……つまり、菅谷はジャージの下に何も着ていない。そこが、透には限界だった。

もはや羞恥と苛立ちが重なり、色んな火が引火した。

ゲームなどそつちのけで、両膝の上に両肘を置き、項垂れる透。それを見て、心配になつたのか、菅谷が声をかけた。

「とおるん、どうしたの?」

その直後、グワツと血に飢えたゾンビのように透は菅谷の両肩に手を置き、そのまま馬乗りになる勢いでマウントをとる。

ソファアーの上に背中を打つ菅谷と、その上に跨り、両腕を頭の両隣に置く透。どう見たって、男を押し倒している女の絵だ。

「と、とおるん……？」

まるで顔色を伺うように自身を呼ぶ菅谷の頬に、指先のみをツツーつとなぞるように添える。

「ふふ、リカつてさ……ホントに、バカだよ。もしかして、わざとやってた？」

「わ、わざとって……何が？」

「だとしたら、虐められることに快感を覚えるタイプの人なのかもね。……ま、遠回しに言ってもわからないだろうから率直に言うけど……マゾだったりするのかも」

「つ……ま、マゾ……？」

「例えば……」

なぞっていた指先は、いつの間にか菅谷の胸元のチャックに添えられている。人差し指と親指に摘まれた直後、菅谷は何をされるのか理解したようで、慌てた口調で言った。
「あ、あの……とおるん。脱がされるのは、恥ずかしいんだけど……」

「さつきからアレだけ、裸でうろついてた癖に何言ってるの？ ……それとも、嫌よ嫌よ

も好きなうち、つて奴？」

「っ……ち、ちがつ……」

「なら、抵抗したら？ ……このままじゃ、胸元がはだける一方だよ？」

じーっ……と、チャツクを下ろす音が耳に響く。男らしい大胸筋から腹筋にかけて、肌色が徐々に露わになっていく。

抵抗……正直、しようと思えば出来た。だが、最近、上級生を学祭で病院送りにしたこともある、透に對し力づくで何かをするのは絶対に嫌だった。

だが、このままだと……。

「もしかして……もう、脱がされること覚悟してる？」

「ーっ……ーっ」

「女の子に脱がされても抵抗を諦めるなんて……やっぱリカは……リカ？」

そこから先は、言えなかった。赤く染まる、と言うよりも、赤く光っている、というようにさえ見ええた菅谷の顔は、ちよつと眩しいくらいだ。

それと共に、ツウっ……と、一滴の赤い液体が、鼻から流れる。

「……えっ」

もしかして、と言わんばかりの声を漏らした時は、透はもう完全に正氣に戻っていた。目の前の少年は大丈夫なのか？ そして、自分は今、何をするつもりだったのか？

羞恥心が頭の中を染め上げ、その押し倒した状態のまま動けなくなる。

「……」

どうしよう……と、冷や汗を大量に流しつつ、とりあえず菅谷の上からようやく退くことにした。

正直、今でも少し惹かれるものはある。好きなのが、無防備な格好で気絶しているのだから。だが、それ以上に自分がやろうとしたことが恥ずかしかった。

とりあえず、何にしてもこのままというのは厳しい。自分的にも、ちよつと嫌だ。何より、帰ろうにも玄関の鍵を閉められないし。

そんなわけで、菅谷の鼻血をティッシュで拭いてあげてから、下ろしたチャックを上げて、部屋から毛布を持ってきて掛けてあげた。

「……はあ」

ため息をつきながら、透は自分の中の熱をなんとか冷めます。菅谷に対し、初めて自覚するほどのムラつと感が来たわけだが、まだ自償の念の方が大きい。

……もし、菅谷が目を覚ました時、やはり少し気まずさが残ってしまう気がする。こんな感覚、透には初めてだった。気まずいって、こう言う感じのことを言うんだ、と。帰るわけにいかない。でも顔を合わせるのは緊張する。どうしたものか……と、透が頭を抱えていると、ふと目に入ったのはスマホ。そういえば、円香とチェインしてた。

この際、相談するしかないと思い、さつき一方的に会話を打ち切ったのも忘れて連絡した。

とおるん 『樋口ー』

とおるん 『相談があるんだけど』

既読がつかない。さつきの件が頭に來ていて無視しているのか、それとも小糸の勉強を教えていて忙しいからか。いずれにしても、次の一文を送ればそうもいかない。

とおるん 『リカを押し倒したら氣絶しちゃったんだけど、どうしたら良い?』

マドちゃん 『は?』

マドちゃん 『あんた何してんの?』

マドちゃん 『ちよつと』

とおるん 『ちよつと、昂っちゃって』

とおるん 『性欲が』

マドちゃん 『猿か』

いや、ツツコミは良いからどうしたら良いのか教えて欲しい。

それを察してか、次に届いたのはメッセージではなく電話だった。

「もしもしっ。」

『小糸に少しだけ時間もらったから。……で、何があったわけ?』

「あく……多分、リカにとっては知られたくないことだと思っただけ……」
『隠し事のこと？』

「そう。……知りたい？」

『関係してるなら』

「……」

しばらく黙り込む。が、円香には時間がない。どの道、明日円香もおそらく探す気はあるんだろうし、言ってしまうことにした。

「エロ本があった」

『は？』

「リカの部屋に。それ、読んだ後に、びしょ濡れになってたりカがやたらと裸で出歩くから、私もちよつと変な気分になって」

『……』

おそらく今、円香は何かあったのかをギリギリ自分が想像し得る可能性を模索しているのだろう。そして、それは当たりだ。それくらい、自分のことも菅谷のことも理解している。

『……なら、少なくともリカは覚えてないでしょ。オーバーヒートして気絶したあの力は、その前の記憶消えるし』

それはその通りだ。この前、円香が菅谷の頬にキスしたのもまるつきり忘れていた。

「でも、そういう問題じゃないと思う」

『浅倉が気まずいと思ってるんでしょ?』

「当たり前」

『当たり前、じゃないから……』

少なくとも、あのバカツタレにも性欲がある事は十分、分かった。でも、彼が自分達をそういう目で見ないようにしているのは、一人暮らしを今後も続行する為だろう。間違いがあつたとしたら、即転校だ。

しかし、自分達から襲いかかったとなれば、彼が抵抗してくれるかは微妙な所だ。慣れれば、気絶もしなくなるだろう。

高校生活が始まって、まだ一年も経たないうちにコレはまずい。

まあ、透はそこまで考えておらず、単純に今後、菅谷をどういう目で見れば良いのか困るというだけだが。

『……私がよくやる方法で良いなら、教えるけど?』

「やるって?」

『リカを変に意識しない方法』

「あ、聞きたいかも」

そんな方法あるんだ、と思いつつ聞くと、円香は淡々と告げた。

『あいつ、こっちの心臓を締め付ける時と、ムカつかせる時の差が激しいんだから、過去一番、ムカついた時のことを思い出せば良いでしょ』

「……なるほど」

脳裏に浮かんだのは、別荘の時。人の胸を見たとき、男の癖にやたらと逃げ回ってくられたのはイライラした。それはもう、思わず避けられてこちらが悲しくなる程に。

「……ありがと、樋口」

『別に良い』

「でももしかして、結構リカの事、そういう目で見たことあるの？」

ぶちつと通話を切られた。

ふと、菅谷の方を見る。まだほんのりと頬は赤いが、気絶してるのに気持ち良さそうに安眠しているように見えた。なんか、もうこれはこれで腹が立つ。そもそも裸で出歩いてるのはそっちなのに、なんでこっちが意識しないといけないのか。

「ホント、アホの子」

寝てる愚弟の鼻を摘みながら、そう声を漏らして、珍しく姉のような笑みをこぼしながら寝顔を見守った。

××

月曜日。また校舎裏にて。

「はい。エロ本」

「おー、さんきゅー。助かったわ。……誰にもバレてないだろうな？」

「バレるようなところに隠してなかったからね」

「え、隠してたん？」

「うん。一応ね。ミミズの中に」

「え……ど、どういうこと？ えいりあん？」

「え、ミミズってエイリアンなの？」

「いや銀魂の……や、なんでもない」

紙袋を手渡され、文事はとりあえず受け取る。

「……で、中見た？」

「何の？ エイリアン？」

「ちげーよバカ。これに決まってるだろ」

「見てないけど？」

「え……マジ？」

「うん」

「いや、使えよ！ こちとら布教するつもりも兼ねてたんだぞ！」

「え、何に使うのエロ本。ドミノ？」

「どんな発想だ！ 銀魂かよ、だから!?!?」

「じゃあトランプタワー」

「ある意味変態的な発想！」

「確かに。エロ本のトランプタワーとか見たくない」

「まずトランプですらないからね！」

やはり、このばかたれとの会話は疲れる。これに長いこと付き合える上、惚れた姉二人の気持ちは永遠に理解できなさそうだ。

「……あ、もしかしてページの間にお金とか挟んでた？」

「どんな裏取引だよ！ てか、もういいから！ そのエロ本活用シリーズ！」

「まあ、やるなら別にエロ本じゃなくても良いしね」

「あーもう、いいわ。俺、とりあえず帰るから」

「ん。また何か隠したいものあったら言ってね。ミミズの中に隠すから」

「お前の部屋どうなってんだ！」

ツッコミが、もはや捨て台詞のようになりながら、文事は校舎裏から出て行く菅谷を眺めた。

まったく、疲れる男だが……まあでも、隠し事には使える男ではある。次はこっそり

買ったギャルゲーでも隠してもらおうかなーなんて思っていると、後ろから肩を掴まれた。振り返ると、姉二人が鬼の形相でこちらを睨み付けていた。

「え……………な、なんで……………」

「あんたの所為か……………あの子があんなもの持ってたのは」

「ふーん……………」

「……………」

ヤバい、ガチおこだ。本当に弟にエロ本を貸した同級生を追い込む姉のようになってしまっている。それもかなりのプラコンっぷりだ。

ガツと肩を掴む力が強くなる。耳元で悪魔の囁きの如く告げたのは、透だった。

「……………一度しか言わないから。よく聞いてね」

「っ……………！」

「次、変なものをあの子に預けるような真似したら、その趣味全部先生に言うから」

「預ける、だけじゃなく、貸し出す、あげる、売るも全部ダメだから……………なんて言うまでもない事は分かってるよね？」

円香がさらに追い討ちをかける。なんならこちらが命を差し出す必要がありそうな空気だ。

「……………じゃ、また」

それだけ話して、二人は先を歩く菅谷を追い掛ける。

あまりの迫力に「なんで君ら二人まで知ってるの？」と言う疑問が芽生えなかったのは幸いだった。

秋といえば芸術、食欲、紅葉、スポーツ、そしてコーディネート。

高校に行くと、芸術科目が絞られる。正確に言えば、選択式になるわけだ。音楽、書道、美術の三つのうちから一つ選ぶ。

三人は当然、どれも興味ない。強いて言うなら音楽だろうか？ しかし、三人は何となく察していた。高校の音楽は中学までとは違い、合唱も演奏もなく「音楽の歴史」を学ぶためにあると。

従って、絵の具を買わされる芸術の方が内容的には面白いのだと読み、そこにした。「と、いうわけで、来週までに風景の写真を撮ってきて下さい。それを風景画の題材として描いてもらいます」との事だ。

そんなわけで、三人はその写真を撮る場所を探しに行ったのが一ヶ月前の話だ。全く同じ写真を3枚用意した三人は、それを三等分し、続けて画用紙を同じように三等分し、各々が担当した部位を描き、コピーして切り貼りして作品を仕上げた。

『美術の授業は共同アート展じゃないから。お前らだけ描き直し』

との事で、あつさりとバレてやり直しを食らった。それも一週間以内である。写真はまだ三人とも新たに撮ってきて、今日は円香の家で絵を描く。

「……なんで私の部屋なの」

「たまには良いじゃん。とおるんの部屋でも良かったんだけど……」

「私の部屋、汚いから」

「てなわけで」

「……はあ」

円香はため息を漏らすしかなかった。制服が汚れたら嫌なので、三人ともジャージに着替えてから、のんびりとペタペタと絵の具で画用紙に絵を描く。

「わっ、とおるん。その青綺麗」

「でしょ?」

「ちようだい」

「やだ」

「えー、けち」

「いや、その筆でここにつけたら色混ざるし」

二人揃ってそんな話をするのを眺めながら、円香は淡々と絵を描き続ける。こんなの、クオリティは求められていないのだから、さっさと終わらせた方が良い。

……と言うことにも気付かず、バカ二人はどんどん、脇道に逸れていく。

「リカ」

「? 何……わっぷー!」

「青、欲しがってたから」

頬にペタツと筆の先がつけられた。顔に、確かに綺麗な青色がなぞられている菅谷の顔は、中々面白い事になっていた。

「とおるんは何色欲しい?」

「え、いらぬい」

「つまり、とおるんがいらぬさそうな色ってことね」

「え? いやそうじゃなくて……」

「ピンクとか絶対、いらぬさそう」

「や、ちよっ……待っ」

ぺたっ、と今度は透の顎に筆がヒットする。こうなったら、もう戦争である。透も菅谷も両手に筆を持ち、構える。

「行くよ」

「いつでもどうぞ」

直後、一気に二人の戦闘は始まった。それはもう絵の具を絵の具で洗う絵の具戦争。

髪の毛やら顔やらジャージやら、何を間違えたのかおへそやらにぺたぺたと絵の具がくつつきまくっていた。

この戦闘を全く持つて無視できる円香も、中々すごいメンタルをお持ちだが、それも自分に被害が及ばないまでの話だ。

透の一閃をぬるりと躲しながら、透が持つ二本の筆を弾き飛ばした菅谷は、後ろから透のお腹に腕を回し、軽く持ち上げる。

「よーしもらった」

「わっ……いい、今本気だった」

「本日はどのようなペイントをなさいますか？ お客様」

「うぐっ……ガヴッ！」

「あいつた！」

やらしくゆつくりと筆を近づけた腕を、噛みつかれてしまった。おかげで手元から筆を落とし、抱えるように持ち上げていた身体を落としてしまう。

「あいたっ」

「いい、今噛んだ!? 嘘でしょ？」

「愛の証」

「重いよ。あと、人の顎の力は指二本くらいなら噛み切れるんだから危ないでしょ」

「上から舐めても良いよ、そこ」

「し、しないよそんなこと……」

なんて、少しずつ戯れてんのかいちやついてんのかわからなくなってきた時だ。

ようやく、石像神が動き出した。

「……ちよつと」

「? ……あつ」

揃って顔を向けると、同じく揃って狼狽えたような声を漏らす。円香の頭頂部に、筆がべつたりと乗っかっているからだ。

マズイ、と二人揃って大量に汗をかく。この中で一番怒ると強いのは、間違いなく菅谷だろう。武道をやっていたのだから当然だ。

しかし、一番怒ると怖いのは、言うまでもなく面倒見役の次女である。それこそ、ヤバげなオーラを全身から漏れ出させながら、ゆらりと立ち上がって指をコキコキと鳴らし始めている。

「……覚悟できてんでしょうね」

「ごめんなさ」

「やだ」

ダメだ。もう口じゃなんともならないところまで来ている。立ち上がった円香は、ど

うするつもりなのかパレットを2枚、手に持った。

そして、無言のままそれを掌の上に乗せ、二人の前に立ち上がる。

「あ、あの……マドちゃん……？」

「そのパレット……どうするつもり……？」

「樋口レインボー」

××ダクシユートでもしたかのように、二人の顔面に虹が咲いた。

×

×さて、顔面がカラフルになった二人は、当たり前のように円香がシャワーを浴びてい

る間、そのまま部屋の片付けをする。あれだけ元気に暴れ回って、部屋に被害が出ていないわけもなかった。

「結構散ってるじゃん。ウケる」

「それな。床は新聞紙敷いというて良かったやつだね」

他人事の言うに言うが、汚したのは二人である。ベッドまで飛んでいたら、手洗いコースだっただろうが、その辺セーフだったのは幸いだ。

そんな中、ふと菅谷の目に入ったのは、勉強机の上の小さなカレンダーだ。10月27日のコマに、シンプルな丸が入っている。

「ねえ、とおるん」

「何？」

「今月の27ってなんかあったっけ？」

「え？ さあ？」

「誰かの誕生日とか？」

「違うと思うけど……あー、嘘。てか、そうだった。樋口の誕生日だ」

「へー……えっ？」

はっ？ というように後ろを振り向く。そういえば確かに10月、円香の誕生日という話を聞いたような……。

「ヤバっ。どうしよう。何も考えてなかった」

「私も。パーティーとかやるかな」

「……あ、そっか。福丸と市川呼んでいつもやってるんだっけ」

「リカも来る？」

「ん？ ……んー、俺は別でまた祝うよ。とおるんの時みたいに」

何せ、他二人は受験生だ。誕生日パーティーをやるということは、その時はゆつたりと休むということ。友達に友達に來られても困るところだろう。

「そっか。分かった」

「マドちゃんに聞かないと。前日空いてるかっけ」

「空いてるでしょ。樋口、周到だし」

「じゃあ、後で誘ってみよ。とおるんも来る？」

「ん、ん〜……やめとく」

「え、どうして？」

「私の時は二人だったから」

「？」

別に円香もそんなこと気にしないだろうが、まあ、そういうところ平等にしておきたかった。

「とにかく、二人で誘った方が良いよ」

「あ、うん。分かった」

透にしては強く釘を刺して来たので、とりあえず信じることにした。

「でも……誕生日かあ。今回は割と日が空いてるし、ちゃんと考えようかなあ」

「うん。その方が喜ぶんじゃない？ ま、私も嬉しかったけどね」

「毎日つけてくれるもんね。そのピアス」

「リカもでしょ」

校則なんて知ったことではない、と言わんばかりに二人はほぼ毎日、ピアスをつけている。

お揃いで、お気に入り、色違いのピアス。これを見ると、いつも透はあの日のキスの感触を思い出ししてしまう。

……本当なら、もう少しキスするシチュエーションでしたかったものだ、と、今になって思う。

今から……してしまおうか？ どうせ、キスしたらこの男、気絶して記憶飛ばし、それくらいならアリかもしれない。

「ねえ、リカ」

「ん？」

チラリと顔を向けると、すぐ正気に戻った。自分もバカも、顔面が絵の具まみれだから。

流石にあの顔にキスは……と、思っていると、ふと良い事を考えた。今は自分も顔が絵の具まみれ。ならば……至近距離で頬をくっ付けても、菅谷は照れるどころか遊びと勘違いしてくれるのでは？

さつきだって、割と至近距離にいられたし……ワンチャンある。

そう判断するや否や、すぐに動き出した。正面から顔を寄せたらキスになってしまうので、菅谷の両肩を掴み、後ろを向かせる。

「わっ？」

「よいしょっ」

そのまま、両腕を肩の上から垂らし、おんぶでもしてもらおうように頬を頬にくっつけた。

「ちよっ……と、とおるん？」

「絵の具まみれだから、ほっぺくらいくっ付けても平気ですよ？」

「っ、そ、そんな事ないよ……。とおるんは、いつでも綺麗だもん」

「……………へ？」

唐突に言われた褒め言葉。チラリと至近距離にいる菅谷の横顔を見ると、真っ赤に染まっていた。それはもう、絵の具の色なんかまるで無視して、赤くなっている。

「……………そ、そう……………ごめん」

結局、照れさせちゃったな……と、この前のこともあって少し反省しながら離れようとする、垂らした両腕をキュツと掴まれる。

「？ リカ？」

「……………も、もう少し……………このまま……………」

「……………」

菅谷から、そういうことを言うのは珍しい。思わず、胸の奥がキュンツと高鳴る。普段から素直な彼だが、こんな風にいつまでもくっ付いていたい、と、なんだか恋人のよ

うに伝えてくれるのは、とても嬉しい事……と、思った所で、透の頭の中に「ん？」と疑問が芽生える。

よく思い出した方が良く。菅谷に恋愛的な情緒が芽生えているとは思えない。多分、円香と自分のことは好きなのだろうが、それを自覚しているのかどうかは別問題だ。つまり、さっきの台詞を言葉通りに考えたと……。

「もしかしてリカ……寒いのか？」

「え？」

「いや、珍しいなって」

「……」

当たり前かな？ と思ったのも束の間、プクーンと頬を膨らませている菅谷が目に入り、透の脳裏に焦りが浮かぶ。もしかして、違ったのだろうか？

「り、リカ……？」

「離れて」

「えっ？」

「離れて」

「もしかして……違った？」

「違うよ」

「あ……じゃあ、あれ？ 胸がもう少し当たってた方が良かったとか？」

「とおるん嫌い」

「えっ」

「離れて」

離す前に、ぬるりと脱出されてしまった。すると、ちようど良い……いや、透にとつては最悪のタイミングで円香が部屋に戻って来た。

「次、お風呂空い……どうしたの？」

空気の悪さを一瞬で感じ取るスキルは完璧だったが、そんなもの気にしない菅谷が、円香の前に移動して微笑んだ。

「マドちゃん、お誕生日の前日、デートに行こう？」

「っ、で、デートっ……？ いや、良いけど……」

「じゃあ、決まり。プレゼントは当日、直接買うか事前に買っておくか、どっちでも良いから、考えておいて」

「え？ あ、うん」

「じゃ、次お風呂、俺借りるから」

そう言つて、部屋から菅谷は出て行つた。その背中を眺めながら、円香は透に尋ねた。

「……どうしたの？」

「……しでかした」

「いや、ごめん。ていうか、あんたらなんでまだ顔拭いてないの?」

さっきまでご立腹だったはずなのに、もう円香は二人の心配に移ってしまっていた。

さて、顔を拭いてから改めてさっきまでの経緯を説明する。すると、円香は眉間にシワを寄せたままため息をついた。

「乙女チックな話。……性別が逆なら」

「それ私も思った」

「いやあんたは思う立場にないから」

「……だよね」

「まあ、悪かったと思ったんなら、謝れば良いでしょ。リカは基本的に優しいし、なんなら今頃、自分で反省会してるかも」

「分かった」

それはその通りかもしれない。嫌い、なんて言われたのは初めてだ。嫌い、嫌い、か……。

「ちよつ、浅倉。涙涙」

「ごめん。今更、嫌いって言われたのが響いて来てる」

「本当に今更じゃん」

結構、キツイものだ。本気でなくてもそう言われるのは。割と泣きそうになっていると、円香が続けて言った。

「あー……でも、良かったでしょ」

「何が？」

「あの子も、なんだかんだ言っただけのこと異性として、あと恋愛的な目で見てるって事じゃないの？」

「……あ、そっか」

……そうだ。つまり、自分が言った二つでないとしたら、素直に考えた場合の奴だろう。

なんか……恥ずかしい。思った以上のダメージが胸の奥に突き刺さってくる。

「……泣いたり照れたり、忙しい人」

「いや……リカからそういうの……あんま無かったから……」

「ウブか」

「樋口も言われてみれば分かるから。次、デートする時、ちよつとあざとくなつて見たら？」

「……考えとく」

まあ、円香は素直になったと言っても、そんな素直に甘えるタマではないから無理だ

と思うが、と心の中で思っていると、円香のスマホが震えたらしく、ポケットから取り出した。

「……誰から？」

「リカ。体操服、絵の具まみれだからジャージ貸してって」

「え、サイズ合わなくない？」

「大きめのスエット持つてくから、待つて。あと、掃除続けて。まだ机に少し飛んでる」

「あ、うん」

言いながら、タンスからスエットとパーカーを持って、円香は部屋から出て行った。

さて、今のうちにどう甘えるかを考えなければ……いや、方法は一つだろう。前に雛菜に教わった方法。扉のハジに隠れて、部屋の中に入って来た直後、背中に額をつけて抱き締める……完璧だ。それでも怒っている様子なら、そこで謝る。

「よしっ……」

そう決めると、すぐに扉の傍に隠れる。

しばらく待っていると、扉が開かれた。来た、と口元に手を当てて息を潜めていると、菅谷が部屋の中に入って来た。

「……とおるんっ？」

返事はしない。背中からじゃないと、あの甘え方は出来ないから。

「いないのかな……」

部屋の中に入ってきた菅谷を視認。円香のスエットに円香のパーカーつてそれ女装になつてる自覚あるのかな可愛いじゃなくて、一気に強襲し……！

「あ、いた。つて、あぶなっ」

「え」

まさかの振り返られ、ぬるりと避けられた。作戦失敗……どうしよう、と冷や汗をかいていると、菅谷の方から透の手を握つて来た。

「ご、ごめん、とおるん。俺、やっぱとおるんのこと好きだから……」

「え、そっちから謝るの？」

「？ だつて、嫌いって言ったの俺の方だし……」

「……じゃあ、許したげる」

「じゃないでしょ」

スパンと透の頭を叩いたのは円香。

「あんたも謝る」

「あ、そつか。ごめんね、リカ」

「いいよ」

秒で解決した。一体、なんだったのか。

「じゃ、お風呂行つてくる」

「行つてら」

サクサクと透は円香の横を通り抜けて、お風呂場へ行く。その背中を眺めてから、円香はふと菅谷の方を見た。

その菅谷は、円香のベッドに腰を下ろしていた。貸したパーカーの両腕の袖をまくり、チャックを薄い胸筋の谷間が見えるくらいまで下ろし、シャワーを浴び終えた直後だからか、身体からほんのりと蒸気を漏らして、足を組んでいる。

……なるほど、と円香は理解する。これは確かに、えつちな本を読んだ直後の浅倉が血迷うのが分かる程度にはえつちだ。

「？ マドちゃん？」

この気が抜ける声と呼び方が無かったら、自分も少し危なかったかもしれない。

本当に顔が良い男というのはロクでもないものなのかもしれない。……にしても、本当に今のあの外見は腹立つ程、男っぽい。

長いこと黙っていたからだろうか。菅谷は手招きして来る。なので、円香も菅谷の隣に座った。

「どしたの、ぼーっとして。誕生日の話しようよ。どこ行く？」

「……んっ。何処でも良い」

「とおるんとは買い物行つたよ。時間も無かつたから、とおるんが欲しいものを誕プレにするために」

「……じゃあ、私はあなたがあらかじめ買つておいて。場所も任せる」

「えー良いの？ 昆虫博とか？」

「ぶっ飛ばすよ。任せるにも限度あるでしょ」

あ、そっか、と菅谷はすぐに理解する。

円香としては、たまには遊園地とか、たまにはアミューズメントパーク的な所も良いかもしれない。ここ最近、はしゃぐことが少ないから。

「少し考えるよ」

「そうして」

……いや、菅谷の「考えるよ」は良くないかもしれない。動物園や水族館なら当たりだが、何処かの大学の昆虫研究室とか連れて行かれたら最悪だ。

釘をさしておいた方が良い。

「……一応、言っておくけど、生物系から離れて」

「虫とか？」

「いや……動物園も博物館も水族館もダメ。……それくらいの考えで選んで」

「……もしかして、動物嫌い？」

「そういうわけじゃないけど……それくらいのつもりでいて、って事」

生物系全部を封じるくらい勢いのが良いだろう。このバカのイメージネーションは銀河の彼方から降りてくるものなのだから。

「分かった」

「ん……」

言いながら、菅谷の方に身体を傾ける。隣に座って、こうやってくっつくのはもう何度目かさえ分らないので、流石に慣れて来たようだ。

「……マドちゃん、良い匂い」

「変態的なこと言わないで」

「シャンプーの香り」

「……シャワー浴びた後なら当たり前でしょ」

少し落胆した。いや別に全然、素の身体の匂いが良いと思われたかったわけではないが。そんな事になったら、変態的なのは自分の方だ。

「……ねえ」

「ん？」

「私にばかりさせてないで、たまにはないわけ？」

「え？」

「聞こえてるでしょ。いや別にそっちが私にばかり甘えられたいって言うならそれでも良いけど。ミスター父性」

「……」

要するに、たまには甘えて欲しい、と言っているのだ。ご飯作ったり、部屋の掃除をしたり、洗濯をしたり、もう割と大分甘やかしているのだが、円香の中では、もはやそれは自分の趣味の一環になっていて、甘やかしている感覚はない。

だからこそ、仮にも姉のようになっていいる身分として、もう少しこう……来てほしかった。

それが通じたのか、菅谷も円香の方に身を預けていく。

「甘えん坊」

「はいはい」

甘えろ、と言っておきながら、そんな憎まれ口を叩く自分が、なんだか恥ずかしくなってきた。

「マドちゃん……」

「何」

「やっぱり、マドちゃんは俺より妹だと思う」

「それは絶対にない」

×そんな話をしながら、その日は結局、絵が完成することはなかった。

×その日の夜、円香は一人でベッドの上に座った。脳裏に浮かぶのは、菅谷とのデート。ほとんど透とのくだらな喧嘩がきっかけではあったが、それでもデートの約束には変わりない。

「つゝ……！」

楽しみ過ぎて、今からニヤついた笑みを噛み殺すのに必死だった。この部屋には自分しかないのだから、隠す必要なんてないのかもしれないが、それでも誰もいない空間でニヤつく気持ち悪い自分を客観視すると、やはり噛み殺したくなる。

「……つ、ふう……！」

とりあえず、落ち着かせる。この胸の高鳴りは、割と苦しいものなのだ。

それにしても、デート……彼は、一体どこへ連れて行ってくれるのか。……正直、動物園と水族館を封じたのはちよっぴり後悔してたり。あの子が大好きな生き物を見て少年のように瞳を輝かせている所なんて、それだけでも飯三杯いけるって透が言っただ。ご飯三杯もお代わりしたことないくせに。

だが、言わんとする気持ちはわかる。それくらい、なんかもう大好きだ。

「……あ、そうだ」

今のうちに、どんな服を着ていくか考えないといけない。いや、まだあと二週間あるのだから、少し浮かれ過ぎだろうか？

……そんなことはない。せっかくのデートだ。備えておいて悪い事なんて何もないだろう。

何なら新調するか……いや、夏休みのバイトで稼いだお金のあまりも、もう無くなつて来てる。当日のために取っておいた方が良い。

「大丈夫……なんだかんだ、洋服も可愛いのがたくさんあるし」

何せ、高校に入学してから、まだ菅谷のことが好きだと自覚する前、自覚してないながらに「誰かに見せるための可愛い服が欲しい」と思つて色々、無理ない程度に洋服を買った。

その中から厳選し、今のうちにコーディネートを決める。

「……まずは、スカートかパンツか……」

女の子らしく見せるならスカートがベスト……しかし、割と活発な菅谷の事だ。動きやすい格好が良いかもしれない。ロングスカートなんて履いていたら、運動系は軒並みダメだ。

なら、パンツとして……それでも、色気を出したい。そんなわけで、ショートパンツ

に決定。10月後半には厳しいかもしれないが、まあオシヤレと機能性は相反するし仕方ない。ザクだってあんなにカッコ良いのにやられメカだ。

さて、パンツといえばロングカーデイガンだろう。赤と黒の奴。

「……」

しかし……もう少しなんか良い感じのコーデネートにしたい。この服装じゃ、なんかいつも通りな感じがある。

……そうだ。ヘアピンも考えないといけない。カナブンのヘアピンは確定として、他にもう一つ……なんだか、楽しくなってきた。

もしかして……菅谷も同じように、楽しみにしてくれてないかな……なんて、思ってみたり。

「……ま、あいつの事だし……こっちが思うまでもないか」

とりあえず、頑張ることにした。せっかくの機会だ。誕生日である事を全力で利用し、一気に距離を縮める……!

そう「これ以上、距離縮めてどうすんの？ めり込む気？」と、クラスメートが聞いたらツツコミを入れそうな決断をして、円香は私服を選び続けた。

演技力は大事なところで使え。

円香の誕生日の前日。菅谷はめざましによつて目を覚ました。ピピピピと脳に響く音がやたらと鬱陶しく感じる。まあ、早朝なんていつもこんなものだ。

身体を起こすと共に布団を剥がす。10月下旬だからか、冬に近づいて来ているような肌寒さを感じつつも、身体を起こして伸びをする。

寝惚けた表情のまま伸びをしつつ、くあつと欠伸をして洗面所に入った。顔を洗えば眠気も落ちると思つたからだ。

……というか、ついでにシャワーを浴びることにした。温まりたい。

「……………」

現在、朝9時。昨日の夜中はソワソワして眠れなかった。まあでも、今日は結局、遊園地に行く事にしたし、眠気なんてすぐに吹っ飛ぶ。

……ありきたりではなかっただろうか？ いや、でも一生懸命考えた結果だ。二人で楽しめるところを自分なりに選んだし、あとは普通に楽しむだけ。プレゼントも買ったし。

そう思考を放棄しながら、とりあえずぼんやりとシャワーを浴び続けた。

「……ちよつと早く着きすぎたかも」
×××

そう思っているのは、樋口円香。待ち合わせ場所のカフェに、一時間前に到着して、今はそれから30分経過した頃だ。

……流石に早かったな、と思った。普通に。ここまで55分経過するのに、体感時間的には三時間かかった。

しかし、それでも時間が早く進むことはない。あくまで表には出さないようにしながら、暇つぶしに過去の思い出データを眺めている時だった。

「おはよ、マドちゃん」

「……遅い」

「え、あの……5分前……」

「私は55分前に来てた」

「え、そんなに？」

「それより、言う事ないの？」

言いながら、円香は立ち上がり両手を広げて一回転する。今日のために一生懸命考えた服装の感想だ。

結局、今日は遊園地に行くので、ショートパンツはやめ、ジーンズ生地のみ

ニスカートに白いシャツの上に赤と黒のカーデイガンを羽織る。靴下はやめてタイツを履いた。

これならば、動きやすきは少し下がるけど、少し大人っぽく見せるおしやれ感が増した。綺麗な最大公約数となった。

「うん。可愛いよ。マドちゃん」

「つ……よく言えました。ミスターチャラ男」

「大人っぽくて、本当にお姉さんみたい」

「お姉さん……」

少し落胆する。姉弟的な意味か、と思つてバレないようにため息をつこうとすると、続けて言った。

「一個上の彼女とかいたら、こんな感じなんだろうなあ」

「……」

ずここーつと、中のカフェオレが空になると共に、円香は立ち上がる。

そして、片手にお盆を持ってツカツカと歩きながら、菅谷の隣を通り過ぎつつ、腕を握つて引つ張る。

「つ、ま、マドちゃん？ どしたの？」

「何でもないから。早く行くよ」

「あ、うん」

俯きながら、トレーを返却口に返して店を後にする。やっぱりダメだ。素直になる、と決めても嬉しさから来る羞恥心はどうしようもない。

そして、やっぱりたかだか言葉だけでこんなに舞い上がってしまう顔なんて、見せたくないかった。

×素直になるのも、大変だ。

×遊園地のアトラクションは、何に乗っても基本的には困らない。何せ、客がやる事なんて何も無いからだ。乗って、興奮と刺激をもらって、それで終わり。

まあその刺激が強すぎるかどうかで好みが決まるわけだが、要するに何も考えずに楽しめる良い所なのだ。デートでここを使った場合のタブーなんて一つしかない。

そんなわけで、やって来て菅谷は早速、何も考えずに指を指した。

「観覧車乗ろうー！」

「バカなの？」

そのタブーを何食わぬ顔で犯していた。そう、唯一のタブーは「観覧車は一番最後」である。

「良いじゃん。俺、高いところ好きなんだけど」

「あ、やっぱりバカなんだ。流石、高いところ好き。ジェットコースターでも高いところに行けるでしょ」

「いや、それ一瞬じゃん」

「じゃあ、スカイフラワー」

「……なるほど」

指さす先にあるのは、三角屋根がついたカゴが高い位置から落下するアトラクション。

本当に高いところ行きたかっただけなんだ、と円香は呆れてしまったが、とりあえずそれに乗ることにした。

「じゃ、行くよ」

「良いの?」

「ん」

二人でそのまま、スカイフラワーに向かった。

さて、二人で早速、その列に並ぶ。幸運なことにあんまり混んでいなかった為、すんなりと乗ることができた。

「どれくらい高いのかなあ」

「少なくとも、過去に乗ったどのアトラクションよりも高いでしょ。それが売りだと思

うし」

「飛行機より？」

「それアトラクションじゃない。お金持ち特有の価値観やめて」

「なんだ。じゃああんま高くない？」

「……なら、その高さから急降下した事あるわけ？」

「……怖かったら、手握つても良いですか？」

「それ男が聞くの？」

「情けない……と、思う反面、やっぱり何処か抜けてる所が良い、なんて思ってみたり。ま、見たところシートベルトとかないつぽいし、身体が浮くほどの速さじゃ落ちないでしよ」

「だ、だよね。大丈夫だよねっ。うん、全然余裕だよね？」

「いや私に聞かれても……」

「そうこうしているうちに、動き出した。ガコンと落下前の脱出ポッドのような音と共に、二人のカゴは浮かび上がる。」

「これは本当に手とか握られちゃったりするかも……と、少しだけ期待した。勿論、そんなの10秒もしないうちに打ち切られるわけだが。」

「おおー、たっけー」

「……」

引くほど普通にエンジョイしていた。楽しそうで何よりである。いや本当に。

「見て見て、マドちゃん。あそこ、俺ん家」

「……嘘でしょ？」

「嘘だよ。信じちゃって可愛い」

「いや、あんたの家ならあり得るから」

遠くに見えるデカい家を指さしてそんなことを言う。本当は写真を撮りたい所ではあるのだが、物を落とさないようにスマホの撮影は禁止されている。

「でも、本当に景色すごいね。富士山見えそうじゃない？」

「あれは？」

「え、見えるの？ うわ、ホントだ」

「富士山とか行ったことあるの？」

「あるよ。頂上まで」

「え……あれ結構、大変じゃない？」

「うん。でも、柔道の足腰の特訓って事で。俺も野生の動物みれるかもってウキウキしてたし」

……なるほど、と円香は理解する。変な所で忍耐力と度胸があるのは、そういうところ

ろから、来てるのか、と思った。

「でも、良いの?」

「何が?」

「そろそろだよ、落ちるの」

「え?」

その直後だった。急降下が始まった。

「うおっ……………」

「手、握る?」

「キッツ…………いや、平気……………」

「…………顔色青いけど?」

「や、やっぱり握る……………」

「…………はい、素直でよろしい」

「マドちゃんに言われたくない」

「やっぱり触らないで」

「嘘です、ごめんなさい」

「ていうか、なんで手袋してるの? まだ早くない?」

「え、そう…………てか、そんなこと言ってる場合じゃ……………」

結局は手を貸してそのまま地上まで落下した。

× × 飲み物を買ってから、次のアトラクションに向かった。

「次、どうしよつか？」

「ん……任せる。観覧車以外」

「はいはい……」

それは何も考えていないのではなく、単純に菅谷と一緒になんでも楽しめる確信があったからだ。今のスカイフラワーでそう思った。

だから、本当になんでも良い……と、思っていると「きゃああああ！」という悲鳴が耳に入る。ジェットコースターだ。

そういうえば、ジェットコースターで悲鳴とかが上げたことない。なんなら、一緒に行つた事あるはずの透も悲鳴はあげない。雛菜は「やはくく」とかよく分からない何かを上げる。小糸は「ぴやああああ!!？」と、悲鳴というか断末魔を上げる。

菅谷なら、どんな反応をするんだろう……と、思っていると、菅谷が握っている円香の手を引いた。

「じゃ、次はジェットコースターだね」

「大丈夫？」

「何が？」

「急降下した後でキツイんじゃない？」

「平気。それに、マドちゃんが乗りたそうにしてたし」

「……」

過去を思い出してただけ……いや、菅谷なら、とか考えてた時点で、乗りたがっていたのだろう。

「じゃ、行い」

「うん」

そのまま二人で列に並んだ。

そこそこ並んでいたわけだが、まあ10分待ちで乗れるなら早い方かもしれない。

「マドちゃんって遊園地とか、よく来てた？」

「そうでもない。……来る時は大体、浅倉とか雛菜とか小糸とかと一緒にだから」

「へー……市川とかはよく行きたいとか言い出しそうだけど」

「ま、言い出しつぺは雛菜だったかもね。……たまに、小糸がデ○ズニーの広告を見て、

私が行くかって声掛けるか」

「やっぱり、面倒見が良いんだ」

「……そんなんじゃない。私は別に……」

四人で一緒にいたかっただけだ。小糸と雛菜と透と離れるのが怖かった。だから、金の糞みたいにくつついていただけ。

そんな風に思っていると、隣の菅谷がキョトンと小首を傾げながら返した。

「? でも、俺はマドちゃんに面倒見てもらって、とても助かってるよ?」

「……」

「いつも、三人で一緒にいるために、一番頑張ってくれてるのはマドちゃんだから」

「……バカ」

「え、違った?」

握ってもらっている手を、キュツと握り締め、少しだけ身を寄せる。

思えば、この男はいつも自分のことを肯定してくれる。他人の良いところばかりを見つけて、ボロクソに褒めてくれて……なまじ純粋なだけあって、持ち上げてるのではなく本心なのがタチが悪い。

そんな所が、円香は死ぬほど好きだった。

「あんだ、ホント天然たらし」

「え?」

「……なんでもない」

「でも、マドちゃんも天然たらしだよね?」

「……………は？ 何処が？」

急になじられてイラっとした。自分は男に対して、ドギマギさせるようなことは言っていない。まさか、顔狙いで告白して来た男子達を見て言っているのだろうか？ だとしたら、顔面が良い菅谷に言われたくない。

「いや、だって結構、マドちゃんも俺をドキッとさせるような事言ってるし」「いつの話よ」

「いやいつでも。もう何回、好きになっちゃってるか分からないくらいだよ」

「はいはい。そう言う口説いてるようなセリフを吐く暇があるなら……………」

と、言いかけた所で、円香の口が止まる。

ふと、思ってしまった。たらし、という言葉の後にそのセリフ……………なんか今まで、もう何度も「好き」と平気で言われて来たが……………もしかしてそれって、そのまんまの意味で言っていたのか？ と。

要するに……………もう何回も愛の告白を受けて来たのだろうか？

「……………え、リカ？」

「何？」

「その……………好きって、どういうこと？」

「哲学？」

「い、いや……だから」

LOVEかLIKEか、を聞こうとした所で、声を掛けられる。

「次の方どうぞ?」

「あ、きた。乗ろ?」

「う、うん……」

渋々従い、乗り物に乗った。隣同士の席に座り、背もたれに身を預けると、上からバーが降りて来る。

「この緊張感……これこそジェットコースターだね」

「う、うん……」

「あ、もしかして、怖がってる?」

「は? そんなわけないでしょ。あんたこそ顔色悪いけど?」

「え、う、嘘……?」

「ほんとにビビってたわけ? ダサ」

「う、意地悪め……」

そんな話をしつつも、円香は自分の方がよほどダサイ気がした。リカが自分……いや、自分と透、二人のことが好きなのかも、と思った時点で、胸の奥がドキドキと高鳴り始めたことを。こんな事で動揺しているようでは、ダサイのはむしろ自分の方だ。

……この後、どうしよう、なんて考えてしまう。自分の気持ちを伝えても良いものなのだろうか？ いや、しかし菅谷が「二人とも好き」みたいなことを言っている以上、なんだか抜け駆けみたいになってしまう。

告白するなら透と二人で？ いやしかしそれでは二股……別に周りの目なんてものは気にしないが、それは他人での範囲。例えば、親はなんていうだろうか？

いや、親を説得すれば……いやいやいや、なんて説得をする？ 「二股ゆるして下さい」って？ 普通に考えて無理だろう。特に父親が。

グルグルと頭の中で渦巻いている時だった。ふと視界に入ったのは、良い景色。いつの間にか、コースターは頂点に達していたようだ。

「えっ」

「ゴクリ」

「待っ……きやあああああああ！」

×初めてジェットコースターで悲鳴を上げた瞬間だった。

×

「あはは、マドちゃん悲鳴あげてたじゃん。可愛かったよ」

「う、うるさい……」

いやほんとにうるさい。誰が蒔いた悩みの種で油断してたと思っているのか。

現在、ベンチの上。二人で並んで座って、飲み物を飲んでいる。

「はい。飲み物」

「ありがと……」

円香の鞆から飲み物を抜いてくれて渡してくれたので、それを受け取って一口、口に含む。

思わず、円香は菅谷の方へ体重をかけようとしてしまう。が、その前に菅谷が自分を止めた。

「……何？」

「待って。休むなら、膝の上おいで」

「ば、バカじゃないの？ こんな人前で……」

「嫌なら甘えさせてあげない」

「っ……じゃあいい」

「残念」

流石にそこまで出来るほど素直にはなれない。というか、それは素直とかじゃなくて別の何かな気がする。

いや、それよりも、だ。この男……急にどうしたのだろうか？ 膝枕なんてそんな事を強引にさせるキャラではないだろうに。

甘えさせたい、というあれが働いてる？ いや、にしても急だ。少し不審に思いながら、ふと顔を見上げる。顔色が悪い、と思っていたが、本当に悪い気がする。

その上、なんか汗かいてるし……もしかして。

「……リカ、動かないで」

「え？」

「動いたらビンタするから」

言いながら、円香は立ち上がると、菅谷の両頬に手を当てる。温かい。と言うより、熱い。

そのまま、顔を近づけた。顔が近くて照れるとか、キスでも出来そうとか、そんな考えは一切浮かばなかった。

コツン、とくっ付けたのは、おでこ。菅谷の顔は真っ赤になるが、その前から十分、熱かった。

もはや、疑う余地などない。

「いつから？」

「な、何が？」

「熱あるでしょ」

「な、ないよ」

「……」

惚けるんだ、と思ったが、そうはいかない。円香は菅谷の手首を握り、持ち上げる。

「これ」

「て、手袋が何？」

「この手袋、本当は素手で触らないようにするためだったんでしょ。体温高いのバレるから」

「……」

「往生際が悪いの、嫌いなんだけど。……で、いつから？」

「……朝起きた時から」

この男……と、思わず頭に血が昇る。それと同時に、思わず手が出ってしまった。

パアンつと、空気の入った袋が潰れたような音が響き渡った。

「……先に言つてよ。無理なんてして欲しくないんだけど。ミスター猪突猛進」

「でも……楽しみにしてたから。この二週間、ずっと……」

「っ……」

そんな風に言われては、これ以上、責められない。祝われる本人と同じくらい、舞い上がっていたと言う事だろうか？

気持ちは、痛いほど分かる。自分も、こここの所ずっと楽しみではあったから。悟られ

ないようにしていたけど、服も前日まで悩んでいた。自分でも無理して来てしまうかもしれない。

でも、それとこれとは話が別だ。風邪引いたのなら、休んで欲しい。

思わず、正面から両手を広げて抱き締めてしまう。

「つ、ま、マドちゃん……風邪、移る……」

「言つたでしょ。どこでも良いって」

「え？」

「……風邪ひいたなら、あんたの家でも良いから。デート」

「……」

すると、菅谷も同じように抱きしめ返して来た。

……なんにしても、自分も迂闊だった。割と朝から、体調悪そうなヒントはあった。

菅谷なら、5分前どころか10分前には来ててもおかしくないし、割とらしくないセリフも多かった気がする。

「……ごめん。気付けなくて」

「え、いややめてよ。マドちゃんは何も……」

「とにかく、帰るから。……それまで気絶しないでよ」

「え……でも、観覧車は？」

「そのまま天国まで登りたくなかったら、私の言う事従って」

「は、はい……」

×仕方なく、二人は撤退した。

× 割と辛かったのを無理していたからだろう。菅谷のマンションに着くなり、彼は前のめりに倒れた。

「っ、り、リカ……？」

「……へ、へいき……こう見えて、俺はインフルエンザとか効かない人だから……」

「はあ……説得力皆無だから、もう喋らないで」

うつつ伏せになっている菅谷を円香は強引に起こそうとする。……が、重たい。最初からうつつ伏せに倒れている人間を持ち上げ、おんぶするのは大変だ。

足の指先を、ほぼ引き摺らせたまま、とりあえずリビングに運んだ。エアコンがある部屋が、ここしかないからだ。

何とかソファアールの上におくと、そのまま菅谷のベッドから毛布と掛け布団を持って来る。

上からかける前に、一度、菅谷を着替えさせることにした。

「リカ、着替えて」

「え……」

「汗すこい。風邪引く」

「(う、う)で？」

「は？ 何か問題ある？」

「い、いや……」

「着替えられないなら、私が脱がすけど」

「だ、だいじょうぶです！」

男の沽券が働いたのか、素直に従った。

時刻はもうお昼過ぎ。ついでのので、昼飯を作つてやることにした。台所に立ち、食材を確認した。

……というか、朝飯を食べた形跡がない。多分、朝から食欲も無かったのだろうが、食べるものを食べないと治らない。

おかゆ……と思つて炊飯器の中を見たが、空っぽだった。冷蔵庫の中を漁ると、蕎麦を見つけた。

「まったく……！」

食材だけは一丁前にあつたので、野菜の蕎麦を作れば良い。

食材を出し終えたところで、そろそろ着替えが終わつたかなと思つて、リビングの方

を見る。菅谷は、こつちを見ながら着替えもせずにはんやりしていた。

「……何してんの？」

「え、いや……いつ出て行くのかなって」

「は？」

「いや着替えるから……」

いつもの円香なら「まあ、そうか」と納得し、一度部屋から出て行くところだ。何せ、相手は純情に純情を掛けた上に純情を足したような男だ。照れるのは目に見えている。

しかし、今の円香は、完全に「おかんモード」と呼べる何かに入っていた。つまり……「んなこと言ってる場合か」とイラツとした。

「分かった。脱がす」

「えっ？」

「動かないで」

「ち、ちよつと待って！ 分かった、分かったよ。着替えるから……」

「ダメ。体調悪いの無視して遊園地なんてハードなアミューズメントパークで無理するミスター仙人みたいな人の言う事、信じられない」

「え、いやっ……ごめんなさい。ごめんなさいって……！」

「知らない」

「ちよつ、待つ」

容赦がなかった。一気に間合いを詰めると、まずは上着を引き剥がす。どんなに柔道が強くとも、手負のバカなど一人で十分と言わんばかりの動きだ。

そのままTシャツを無理矢理、バンザイさせて脱がすと、布団と一緒に用意した寝巻きを頭から被せる。お腹が冷えないよう、パジャマっぽいTシャツを被せてから、上を着させた。

「待つて！ し、下は勘弁して！」

「転ばないようにして」

無視である。ベルトに手を掛けると、シウルツと緩やかな動きで抜き、ズボンを下に下げる。流石に履かせるのは難しいので、ズボンを手渡した。

「はい」

「……もうお婿にいけない……」

「大丈夫、私と浅倉がもろうから」

「ぶえ？」

今なんて？ なんて声音にも反応する事なく、円香は脱がした服を畳み、とりあえずソファアの背もたれの上に置くと、菅谷に言った。

「着替えて寝てて。今、ご飯作るから」

「は、はい……」

何故か顔を真っ赤にした菅谷が渋々従うのを眺めつつ、円香は料理を再開した。

ニンジン、大根、長ネギを具材にした蕎麦が完成した。一応、自分もお昼がまだなので、二人分用意した。

「リカ、出来た。……食べられる?」

「た、食べられます……」

「なんで敬語?」

「い、いえ……なんでもございませぬ……」

オドオドしているが、何か怖いことでもあったのだろうか?

とりあえず、無視してソファアの前に設置してある机の上に蕎麦を置いた。そして、箸で蕎麦を摘み、レンジにスープを少量、溜めると、その上に蕎麦を置き、柔らかめにしたニンジンと箸で割り、ネギと一緒に乗せ、ふうーっ、ふうーっとならすために息を吹きかける。

「ま、マド……円香さん?」

「マドちゃん、でしょ」

「アツハイ」

「あーん」

「ホワイ？」

「体調悪いでしょ」

「や、何も両腕使えない程じゃないんだけど……」

「あーん」

「ていうか、マドチャンのお蕎麦伸びちや」

「あー、ん」

「……あーん」

「どう？」

「……おいひいです」

「あなたのペースで良いから、食べたい時に言つて」

×そう言つて、しばらく菅谷の食事に付き合つた。

×

×食事を終えた菅谷は、そのまま睡眠。その間に円香は自分も蕎麦を食べ、洗い物をし、そこでようやくカーデイガンを着たままであつたことを思い出し、脱いでハンガーにかけ、ようやく一息。

そして、蘇る本日の記憶。

「私は一体、何を……」

菅谷のズボンを脱がせたことが一番、大きな破壊力だった。死にたくなるのを必死で抑えながらも、やはり普通に死にたくなって来ている自分の気持ちから分らないまま、食卓に額をつけて後悔していた。

「はあ……いや、でも仕方ないか……」

何せ、あのバカタレが相手だったのだ。面倒を見過ぎて悪いということはない。

……とはいえ、ムラムラしないかと言われれば嘘になるが。だが、ここで一人で発散しては猿と同じ。そもそも、本当に彼の服を脱がしていた時、下心なんてかけらもなかったのだ。

ここは我慢だ。……そうだ。我慢の前に、一度やることだけやろう。そう思い、透に電話を掛けた。

「もしもし?」

『早いね。報告。ベロチューでもしたの?』

「違う……。……その、リカが風邪引いてた」

『あー……どんまい』

「いや、遊園地には行つたの。風邪引いてる癖に来たから、今あいつの部屋」

『あそう。でも、私も行けないよ。小糸ちゃんと雛菜と一緒にだし』

「ん。あー、で。その……あいつ、家帰って来て倒れたから……脱がせて、着替えさせた。

パンツ以外」

『あー……うん。分かった』

「で、夕方まで看病していくつもりなんだけど……来れたら来る？」

『え？ うーん……いい』

「えっ」

意外な返事だ。絶対、来たがると思った。

「なんで？」

『今日は、樋口の日でしょ』

「や、でも……」

『あ、でも襲うなら私も行くけど』

「いや襲わないし……」

『せっかくの機会だし、たまには二人でいたら？』

「……ごめん。ありがと」

『ん。あ、泊まって来ちゃえば？』

「うるさい」

それだけ話して、電話を切った。2人きりのが良い、というわけではないが、まあ滅多にない機会ではある。この際、堪能しよう。

そう決めて、とりあえず食事が続けた。

食べ終わると、菅谷の様子を見に行く。ソファで眠っているが、やはりどこか苦しそうに見える。……無防備な寝顔だ。こうして寝ているだけでは、イケメンなだけあって色つぽさがある。喋り出すとお馬鹿、とはまさにこいつの事を言うのだろう。

「……」

頬をツンツンと突く。ぶにぶにしている。あどけなさがなんとなく見えるのは、彼の中身が関係しているのだろうか？ まあしているのだろう。

なんにしても、しばらくはこのまま頬をツンツンし続ける。なんか癖になって来た。

「んっ……」

そんな中、菅谷が吐息を漏らし、手を引つ込めた。起こしてしまつたら意味がない。……というか、この様子だと今日やる予定だった家事は軒並みダメそうだし、代わりに自分がやっておくことにした。

洗濯、掃除……と言つても、これくらいか。それらを全て片付け、リビングに戻ると、菅谷が目を覚ましていた。

「おはよ」

「……うん。おはよ」

「眠れた？」

「いや……あんまり」

風邪引いているから当たり前と言えば当たり前だが、元気がない。……いや、楽しみにしていたと言っていたし、当たり前前だろう。

それだけ楽しみにしてくれていたのは正直、嬉しい。気持ちも分かる。だから、もう説教は控えた。

「……別に、これが最後の機会つてわけじゃないでしょ。遊園地くらい、いつでも行けるし、そんなに落ち込まないで。鬱陶しい」

「……いや、遊園地とか別にいいんだよ」

「は？」

「ただ……マドちゃんのお誕生日なのに、何したんだろうなって。……あれだけ祝うって張り切ってたのに……情けない」

「……」

なるほど、と円香は理解する。だけど、まだ理解してくれていないらしい。さつきも言っただけの言葉を。

……いや、まあ自分でも「気を使ってそう言ってくれてる」と思う。信用してるしてないではない。その時に心が弱っているか弱っていないか、だ。

菅谷でも弱ることはある。自分が風邪引いた時に来てくれたように、こちらもまた、

勇気づけてあげないとダメだ。

そして、それは行動で移すのが一番だ。

「……………リカ」

「ん？ ……んっ！」

身体を起こしている菅谷の唇に、自分の唇を押しつけた。深い方ではないが、唇を押し付ける事、約数秒。ようやく、唇と唇が離れた。

「っ、ま、まど……………ちゃん……………？」

真っ赤な顔で唇を押さえる菅谷。爆照れしている顔だ。茶化してやりたいところだが、円香自身も顔が真っ赤である。

眉間に皺を寄せ、羞恥心によつて歯を食いしばりながらも、それを押さえつけて言うべきことを言った。

「……………(ういうい)と」

「な、何が……………？」

「……………分かるでしょ。……………あんたと一緒なら、ここでも遊園地でも一緒って事。……………だから、もう無理しないで」

「……………は、はひ……………」

「ん、良い子」

頭を一撫でして、円香はリビングを出て行く。後ろからドシャツとソファアの上で暑れる音が聞こえる。

リビングを出たのは、別に何かやる事があったわけではない。

「……………っ！」

死ぬほど恥ずかしかっただけだ。体育座りし、膝と膝の間に顔を埋める。流石にキスはやり過ぎだったかもしれない。

……………いや大丈夫、どうせもう気絶してるし、起きたら忘れてるんだから。そう強く思
い込み、円香はとりあえず透に報告した。

×

翌朝、何か寝苦しくて、円香は目を覚ました。なんだか少し暑い気がする。蒸し暑さ
とか、暖房がききすぎな暑さではなく、人肌があまりに近くにある時の暑さ。

ぼやける視界が、少しずつ回復していく。それと同時に、思考も少しずつ戻っていく。
……………というか、昨日、家帰ったっけ？

「……………びえ？」

声が漏れる。何故なら、目の前で寝ているのは、こちらに顔を向けて横になっている
菅谷の顔。……………しかも、一センチ近づけば口と口がくつつく距離。

そして、何故か両手を繋ぎあったまま目を閉じている。

「…………え、まさか…………」

何より気になるのは、自分の服装。ブラをつけてないまま、何故かワイシャツを着ている。

節度を持って、という母親の言葉が高速で頭の中で渦巻いた。

酒飲めない年齢でよかったね。

ワイシャツの下は白いTシャツ一枚。ノーブラだが、透けて胸が見えるようなことはなくて良かった、とひとまずホッとする。

いや、にしてもこの状況は普通じゃない。下半身はどうなってる？　と思うと、脚はパンツだった。

「嘘……!?」

真っ赤になつて真っ青になつてまた真っ赤になる、と愉快的な顔色になつてしまう……が、よく見たら、足首の辺りにズボンが引つかかっている。自分のスエットではないため、菅谷のを借りて、緩くて落ちてしまったのだろう。

パンイチでなくて良かった……と、思いつつ、冷静に何があつたのかを思い出すことにした。

昨日、円香は夕方まで菅谷の部屋にいた。起きてから帰らないと、鍵を閉められない

から。

だから、せめて目を覚ますまで待機していた。

「んっ……」

すると、寝ぼけたような吐息が耳に入る。菅谷が目を覚ましたようだ。

「おはよ」

「……マドちゃん……?」

「そう。よく寝た?」

「……」

身体を起こした菅谷は、ぼんやりした表情で円香の顔を眺める。寝ぼけてるのかな? と思ったのと束の間、その表情は徐々に赤くなり、そして唇に手を当てる。

「っ……ま、マドちゃん……さつき、チュー……」

「っ、お、覚えてるのっ……?」

つられて円香も真っ赤に染まった。完全に予想外だった。どうせ記憶なんて消滅するものだ……。

「……わ、忘れられるわけないでしょ……チューなんて、初めて……」

「いや、あんた散々キスしてるでしょ……」

「し、してないよ!」

「……」

ムカついた。自分……いや、自分と透にとつての初キスが忘れられてる、と言うのは割と腹が立つものだ。どんな形であれ、初めては初めてなのに。

ここは一つ、透の仇を打つためにも、スマホをいじり、画面を見せつけた。まずは、自分が頬にキスしてる写真。

「っ!?」

「あとこれも」

トドメは、透がジャングルジムでキスしてる写真だ。一気に菅谷の顔は真っ赤になる。それと同時に真っ青にもなった。

「っ、お、俺は……なんて事を……! 二人の女の子に、手を出すなんて……」

「いや、出されてるんだけど。……別に、それはいいの。私も浅倉ももうお互いに何してるか知ってるし」

「……へ?」

「……」一応、言っとくけど、私も浅倉もそのつもりだから」

「その……?」

「今は、考えなくて良いけど……あとは、あんた次第だからね」

「……」

何せ、風邪ひいてる時に出す話題じゃない。下手したら上がってしまふ。

「とりあえず、今は休んで」

「……う、うん？」

「じゃ、私帰るから」

「えっ、か……帰っちゃうの？」

「そりゃ帰るでしょ。泊まっていけっつて？」

「……そっか。もう18時か。こんな時間までありがとね……送って行くこうか？」

「死にたいわけ？」

頼むから体調を考えて欲しい。そんなのこちらが頼めない。

……いや、それ以前に、だ。その寂しそうな表情の方が余程、堪える。なんでそんな顔するの、と狼狽えてしまふ。

だが、親にも何度も言われている通り、節度が大事。今日は泊まりの予定なんてないし、下着はあるけど着替えもない。

「……じゃ、また」

「うん。またね。気を付けてね」

「……」

全然「気を付けてね」って顔をしていない。「置いていかないで」と言わんばかりの顔

だ。気持ちは分かる。自分も菅谷にそれをやったのだから。

だが、ここは心を鬼にしなければ。気を強く持ち、鞆を持って部屋を出た。のんびりと歩いて、エレベーターのボタンを押す。

……ソワソワする。どうしても気になる。あのバカの事が。いや、でもだから節度だから。ダメなもんはダメだから。一人暮らしなのに風邪だと大変とか、そんなの関係ないから。

「……」

一階に到着し、歩いて外に出る。駅に向かつてのんびり歩いている時だ。ポツつと鼻の頭に水滴が落ちる。

「……は？」

空を見上げると、雨が大量に降り始めた。

この量……濡れ鼠になる。いや、というか電車に乗れない。仕方ないので、一度マンションに引き返した。いやホント仕方ないからだから。

なんて言い訳くさくさ考えながらマンションまで引き返していると、スマホが震えたことに気付いた。

「？」

菅谷からだ。

LIKA☆『傘いる?』

LIKA☆『ベランダから落とそうか?』

……本当に何処までも人のことばかりだ。風邪であることを理解した上での提案だろうが、そんな真似したら下にいる人が……いや、菅谷の演算力なら割となんとかなりそうだが、それでも傘が壊れ……いや、開いたまま落とせば何とか……。

……なんにしても、服がずぶ濡れだし、着替えないと帰れない。……帰れなくて良いのでは? なんて一瞬、思ったが、節度である。

樋口円香『部屋まで戻るからいい』

それだけ返して、マンションまで戻った。下着は部屋にあるし、服を借りて帰れば良いだろう。

びしょびしょになりながら、服を絞って水気を取る。今日のために着てきた服も台無しだ。

だが、不思議と悪い気分ではない。ナンバーを押し、菅谷を呼び出す。

『もしもし?』

「服、貸してくれない?」

『……うん』

自動ドアが開く。なんだか決意が揺らがされた気がした。せっかく帰ると決めたの

に、もう降られるなんて。

エレベーターに乗り込み、15階まで上がる。

そして、到着するなりインターホンを鳴らした。玄関が開けられると、菅谷が立っていた。

「おかえり」

「すぐ帰るから。服借りたら……んっ」

「……帰らないで」

「……え？」

「……ごめん。ホントに情けないと思うんだけど……一人だと、いやだ」

「……」

……困った。ホントに。こんな風にお願ひされると、断り切れる自信がない。

「……りか」

「まだ……プレゼントも、渡してない……」

「っ……」

理由までつけてきた。そんなの、もらってから帰れば良いだけの話なのに。

……ダメだ。断れない。自分が菅谷の立場だったらどう思うか、それを考えると、断る選択肢は薄れてしまう。

「……お母さんと浅倉に電話してみる」

「……ごめん。困らせて」

「まったくだから」

×言いながら、円香はスマホを取り出した。

×

×許可をもらった。母親と透から。後者には羨ましがられ、母親には「節度を持って」と毎度言われることを念を押された。

さて、とりあえず大急ぎで外に干してある洗濯物を室内に干し、着替えをしないといけない。タンスを開けると、少し驚いてしまった。ズボンは複数あったが、上に着る物が白いTシャツしかない。

「……リカ、洋服ないの?」

「洗濯中かも……」

外に干してある洗濯物はまだ乾いていない。困った。

「あ……ワイシャツならある、けど……」

「……それ着ながら寝ろって?」

「……だよね」

「貸して」

「え？」

「それしかないんでしょ？」

彼シャツ、というやつだ。……白いTシャツがなければ、寝る前はノーブラでこれをつけることになってたと思うと、少し恥ずかしい。

「……じゃ、シャワー浴びてくる」

「うん。俺は……」

「寝てて」

「は、はい……」

泊まるからには、明日までに治させないといけない。元々、寝てないとダメなのだ。

菅谷がソファーに向かったのを確認しつつ、円香は洗面所に入る。

借りた洋服を近くの棚の上に置くと、まずは上半身から脱ぎ始めた。カーディガンを脱ぐと、もう洗濯しないとダメそうなので、洗濯機の中に入れた。

続いて、タイツとスカート。紫のパンツが露わになり、少しだけ恥ずかしくなる。ここは菅谷の部屋のお風呂場。ちよっとだけ抵抗があつたり……というか、洗面所に鍵がないのが少し気になってしまう。

「……」

続いて、上半身。Tシャツを脱ぐと、その下はもう下着だ。紫色の下着が露出する。

ふと、鏡に映った自分を見る。……別に小さいわけではないだろう。高一なら平均レベルのはず。しかし、透や雛菜を見ていると、やっぱり小さいのでは？　なんて思ってしまう。特に、雛菜。アレ絶対中三のサイズじゃない。

……菅谷は、どんなのが好みなのだろうか？　いや、あいつの事だし、前の水着の時みたいに「外見と中身がマッチしてれば」とかなんとか言い出して褒めるだけな気が……。

「……………」

いやいや、待て待て。それでもし自分が褒められたら「マドちゃんの性格なら慎ましかかな方が良いよ」とか言い出すつもりか？　どういう意味だそれ。

……なんか、腹立ってきた。

と、今はそれよりもシャワーだ。裸でほんやりしていたら、こっちまで風邪をひく。

下着も外し、お風呂場に入った。まずはシャワーからお湯を出す。サアーツと頭からお湯を浴びつつ、目を閉じた。この季節のシャワーは心地良いものだ。

「……………」

しかし、二人でお泊まりか、と円香は少し頬が赤くなる。今まで、もうそういう行為に走ってもおかしくない状況になりながらもならなかったのは、三人一緒だったからだ。

三人だからなんでも出来る気がしていたが、三人だからできないこともあったわけだ。

……だが、今は二人きり。風邪をひいているから菅谷から何かをしてくることはないだろう。……つまり、円香次第という事だ。

「……はあ」

チャンスと捉えるべきか、こういう行為はやはり逆に三人揃ってからのほうが良いのか……いや、そんなの後に決まっている。あとは、己の理性次第だ。

おそらく、菅谷は自身の色気を抑えることなんてできない。風邪引いてるんだから。だから、円香は強く気を引き締めることにした。

「……大丈夫」

節度を持つ。それが大事だ。……でも、実際、何歳になったらそう言う行為に臨んで良いのだろうか？ そういう決まりがあるわけでもあるまいに。

「っ……」

またなんか屁理屈みたいなことを考えてしまった。ダメだ、一人でいると変な事考えてしまう。

さつさと全身を洗って、湯船でゆっくりしてから上がることにした。

お風呂から出ると、こちらに置いてある自分のバスタオルを取って体を拭く。それを

終えると、円香はまず下着を……。

「あつ」

下着、部屋から取ってくるの忘れた。どうしよう、と冷や汗を浮かべる。……いや、菅谷はソファアの上で寝てるはずだし、自分と透の部屋に行くくらい、すぐだ。

……でも、裸のまま彷徨く勇氣はないので、服を上から着る。まずは上から白のTシャツを羽織り、その上からワイシャツを着る。袖も裾も襟も、全体的に長い。ズボンがいらないうわいではないが、普通にミニスカートくらいの長さはある。

しかし……中三の時は菅谷もそんなに背が高いわけではなかった。が、いつの間にかワイシャツのサイズも随分と差が開いたものだ。

改めて異性ということを実感しそうになったが、実感してはまた変な気分になって来るので、すぐに目を離した。

……が、その先にあるのは鏡。自分を客観視することができるガラスだ。

「……………」

彼シャツ……思った以上にえつちな格好かもしれない。下にTシャツを着ている、とか関係ない。裾が長いお陰で見えていないとはいえ、パンツを履いていないのなら尚更だ。

恥ずかしくなったので、さっさとパンツを取りに行こう、と思い、まずはスエットを

履こうとズボンに手を伸ばす。が、そこでまた手が止まった。

男のズボンで直パンは割と恥ずかしいかもしれない……。なんというか……。これはもう感性の問題だろう。円香的には恥ずかしい。

「っ……」

いや、しかし履かないとパンツを取りに行けない。パンツがないと、菅谷の部屋でノーパン生活である。それは絶対に嫌だ。

仕方ない、ここは我慢してノーパンで取りに行く。いやズボンは履くが。そう決めると、ズボンを履いた。

「スースーする……。というか、緩い……」

まあ、ウエストが違うから仕方ない。紐がついていればまだマシだったが、残念ながらゴムだ。

とはいえ、ポケットに何かものを入れなければずり落ちるほどではない。さっさと隣の部屋に入り、パンツを履き替えた。

なんで着替えひとつでこんなにドギマギしないといけないの……。と、思ったが、簡単だ。異性と一つ屋根の下、泊まりだからである。

「はあ……」

いや、だがこれからだ。ちよつといつもと違う感じから、変な気分陥りそうには

なったが、まだ仕事はある。特に、菅谷の身体を拭いてやらなければならないのは大仕事だ。

「ふう、よし……」

気を落ち着かせ、リビングに入った。中に入ると、菅谷はパジャマのボタンを止めているところだった。

「……リカ、何してたの？」

「え……？ 身体拭いてた。マドちゃんに……頼りっぱなしは嫌だから……」

「……」

×残念なんかじゃない。全然、残念なんかじゃない。

×その後、食事を終えて、いよいよ就寝。夜くらいはソファで寝かすわけにもいかなので、ベッドに移動させた。

布団をかけてあげると、円香はそのままベッドの横に腰を下ろす。

「眠れそう？」

「……うん。へくちっ」

「……寒いのか？」

「平気……」

「……じゃないでしょ」

どうにかしないといけないが……布団を増やす？ いや、もう増やせる分は増やしてある。湯たんぽでもあれば良いが……多分なさそう。

……。

……。

……。

一応、思いつきはした、が……いや、これはさすがに節度に引つ掛かる気がする。他の方法を……と、考えている時だった。

「あ……そうだ……」

「何？」

布団の中から手を伸ばし、ベッドの横に置いてある鞆に手を伸ばした。そして、チャックを開けて何を出すかと思ったら、差し出されたのは小さなプレゼントの箱だった。

「……はい、これ……」

「なんで今？」

「ご、ごめんね。ムードもへったくれもないけど……思い出しちゃったから……」

手渡され、円香は中を開ける。中に入っていたのは、イヤリングだった。ただし、穴

を空けるタイプではなく耳たぶに留めるタイプ。ニホンヤモリの形をしている。

「これ……」

「ホントは俺もお揃いで買ってたんだけど……つけてくるの忘れた」

そう言う通り、机の上に別の色のヤモリのイヤリングが置いてあった。ヤモリのイヤリングなのに、気持ち悪さとかを一切感じさせないどころか、愛嬌があるデザインになっていた。

「気に入らなかつたら付けなくても良いけど……多分、似合うと思うから。大事にしてね」

「……ホントバカ。あんたからもらったもの、気に入らないわけないでしょ……」

……ヤバイ。泣きそうだった。わざわざ、自分に似合うものを選んでくれただけでなく、おそらく「菅谷がつけて欲しい」と思うものを含めた最大公約数を選んでくれた辺り、もう爆発寸前だ。

だが、泣かない。ちよつとだけ、やっぱり悔しいから。何とか堪えて、泣きそうな顔を見られるのを隠すように、それを開ける。

そして、耳に着けてみた。

「……どつどつ……」

「うん……やっぱり、綺麗……」

「……バカ」

照れ隠しであることは、菅谷にも伝わっていた。本当はしばらくつけたままにしたいが……そうもいかない。寝ながらつけていたら、無くしてしまうし、壊してしまうかもしれない。

「……ありがと。大事に使う」

「ん……」

笑みを浮かべてお礼を言いながらイヤリングを外すと共に、決心した。やつぱりここまで想ってくれている相手が寒がっているのなら、暖を取るのを協力するのはもはや義務だ。

イヤリングを机の上に置くと、ベッドの上に腰を下ろした。

「リカ、少し詰めて」

「え？」

「……寒そうだから」

「……端っここで寝ると暖まるの？」

「人肌の抱き枕、いららないなら退くけど？」

「……ぴよえ？」

もうこのリアクションは今日だけで何度目か。だが、この機会、逃すのは勿体ない。

「ほ、本気……?」

「勿論」

「で、でも……」

「えつちなこと、する気?」

「そ、そんなことは……」

「なら、人命優先でしょ。……それとも、寒がつてるあんたを、私に見捨てさせる気?」
そんな風に質問されたら、もう菅谷に断る術はなかった。無言のまま、端の方による。一人用のベッドだからか、狭そうだが、細身の円香なら入れそうだ。……いや、無理すれば三人いけるか。

布団の中に入り、円香は菅谷の方を向く。が、菅谷は背中を向けてしまっている。

「……男は背中を語って奴? 真っ赤な耳が隠れきれてないけど」

「……でも、風邪うつしちゃう」

「照れを隠すための言い訳でしょ、それ。……それに、リカの風邪なら、移っても平気だから」

「……」

すると、モゾモゾと布団の中で動いて、円香の方を見た。至近距離で顔と顔が向き合う。菅谷だけでなく、円香の頬も赤い。二人の差は、余裕の有無だった。

「……リカ、顔真っ赤」

「……マドちゃんこそ」

「……まだ、寒い？」

「むしろ……その、熱い……」

「でしようね」

「……でも、とおるんだけ仲間外れなのが……少しだけ引つ掛かる、かな……」

「……リカは、私か浅倉か、選ぶつもりあるの？」

「え？ な、ないけど……選んだ方が良いの？」

「ないなら、何も悪くないでしょ。……後日、浅倉にたつぷり構ってあげれば良いんだから」

「……そう、なのかな……」

どうやら、自分と透以上に二股の負い目を感じているようだ。まあ、それはそうだろう。実際、周りに知られたら、一番責められるのは菅谷であり、そして迷惑がかかるのは菅谷の父親だ。

まあ、その辺の決心が果たしたら言ってくれば、円香も透もいつでも構わないつもりだ。……あんまり遅くならなければ。せめて、大学受験するまでには返事が欲しいものだ。

すると、菅谷がまた少し困ったように言い始めた。

「……でも、どうしよう……かえって眠れそうにない、かも……」

「……」

それは少し本末転倒な感じがある。仕方ない、と円香はため息をついた。

「リカ、まだ鳥肌立ってる」

「え？」

「もつと、こつちに寄って」

そう言った直後、円香は菅谷の方へ身を寄せた。胸板に、頬を寄せる勢いで。

頭頂部がちょうど、菅谷の顎の下に収まる。鎖骨少し下に当たっている耳が、爆速で

動いている心臓を捉える。

「つ、ま、マド、ちゃ……」

「おやすみ、リカ」

「………びゅほ」

失神した。これで菅谷も眠れたはず。後は、自分も眠るだけ……。

—

—

—

そうだった。深夜テンションでつい、添い寝なんてしてしまったのだった。自分の大胆さ、そしてムツツリさに嫌気がさしてしまおう。

……いや、改めて考えても恥ずかしい。昨日の自分のテンション。いやほんと何考えて生きてんの自分。馬鹿なの？ 死ぬの？

「つゝゝゝ……ううゝ……」

言えない、これはいくらなんでも誰にも言えない。いや、でも透には言わないといけないのだ。……なるべくオブラートに包んで言わないと、嫉妬で拗ねられるかもしれない。

そんな時だ。スマホが震える音が耳に響く。

「っ、電話?」

とりあえず、応答しようと手を伸ばした。大丈夫、許可は取ったはずだから。

そう思い、応答して耳に当てる。相手は透だった。

『もしもし?』

「も、もしもし……浅倉? どうしたの……こんな朝早く……」

『え?』

「え?」

『……なんでリカのスマホにかけた電話に、寝起きの樋口が出るの?』

「え？ ……あつ」

慌ててスマホを見ると、菅谷のスマホだった。

思わずスマホから耳を遠ざけてしまう。

『ねえ、もしもし？ もしかして一緒に寝てた？ ちょっと』

「……リカ、電話。浅倉から」

「んうっ……まどちゃん……？」

『聞ってる？ まさか……やったの？ 私そこまで許してないんだけど』

「たんじょうび、おめでどう……」

「……」

そこじゃない、嬉しいけどそこじゃない、と円香は真っ赤になった顔を隠すようにしながら呟く。

『……おめでどう、樋口』

透も釣られて言っちゃうし。やっぱり基本的には良い人達だ。

とりあえず、照れを誤魔化すように、円香はスマホを菅谷に手渡す。

「電話」

「まどちゃん……さむい……暖めて……」

「は？」

『は？』

寝起きとはいえ、本当に色んなものを爆発させるのが上手い男である。

寝惚けた様子のまま、菅谷は身体を半分だけ起こしている円香の袖を引っ張り、自分の胸元に引き寄せた。

「ちよつ、リカ……………」

「ん……………あつたか……………」

「やつ……………ちよつ、ダメだつて……………浅倉透とツ、電話してるのに……………」

抱き枕にされ、昨日と違うテンションの円香は抵抗しようとするが、不思議と抵抗する気概を起こせない。出来るのは、抵抗のフリばかりだ。でも、このままだと本当にマズイ気がする菅谷の汗の匂いすごい。

そんな時だった。

『樋口。今からそつち行くから』

「り、リカ……………離れてつてば……………」

「良い匂い……………」

『……………(ブツツ)』

電話が切れた。ヤバイ、と円香は大量に焦りを浮かべる。声で分かる。透、ブチギレてる。何もえつちなことはしていないと説明はするが、信じてもらえるだろうか？ 菅

谷の胸が至近距離すぎてヤバイ。

「お、起きないと……浅倉来るって言おうし……で、でも……」

このホールドされた状態から抜け出せる気がしない。……というか、このままだと本当にマズい。寝癖だらけの顔を菅谷に見られる（混乱による今更感の喪失）。

「り、リカ。起きないと……」

「ん……？」

薄らと目を開ける菅谷。今がチャンスと思い、声を掛けようとする前に、菅谷が抱きしめている自分の顔に手を当てた。

抱擁されるように顔に触れられたと思ったら、親指で目尻をなぞられる。

「ふふ……まどちゃんの目やに、超レア……」

「ーっ……」

恥ずかしい……恥ずかしいはずなのに、抵抗出来ない。幸福感で満たされてしまっている。

……もう、菅谷がちゃんと起きるまで、為されるがままでも良いかも……なんて思った時だ。顔に触れていた菅谷の手が動いた。

「布団から出そうだよ……もつと、こっちおいで」

「っ……う、うん……」

結局、流されるがままになろうとした時だ。その動いた手は、円香の太ももに当たられる。……まだズボンを上げていない生の太ももに。

直後、一気に円香の意識は覚醒した。いや、円香だけでなく菅谷もだ。

「ん……………？ 何、この感触……………？」

「っ—！」

「…………中にナマコのフィギュアでも混入しちゃったかな…………」

そう言いながら布団の中を覗こうとしたので、それを円香は手首を掴むことで慌てて止める。

「ッ、な、何……………？」

「…………中、見たら、殺ス…………」

「え？！」

「…………これは、私の落ち度だから…………触った事は、水に流すから…………」

「え、まさかこれ、太も…………」

「喋らないで…………—！」

「っ」

黙らせると、円香は布団の中で身体を丸めてズボンのゴムに指を掛け、腰まで持ち上げる。

「……なんか、ごめん……」

「……いい。私の方こそごめん……」

×何もしていないのに、ナニかした後のように気まづくなっていた。

×「ふーん……で、つまり何もしてないけど、一緒に寝た……と？」

「はい」

15分後。時空を越えたとしか思えない速さで透が来て、風邪が治った菅谷と、アレだけ近距離にいて風邪が移らなかつた円香は正座させられていた。

「……隠し事は何一つないから」

「それはそれで問題なんだけど」

「え？」

どう言う意味？ と、円香が片眉を上げると同時に、透は突然、本音をぶちまけた。

「……羨ましい」

「え？」

「私、リカに誕生日、そこまでしてもらってない」

その表情は、透らしくなく眉間に皺を寄せ「むゝ……っ」と唸りそうに唇をへの字型に曲げていた。

当時は透にも自覚はなかったし、それに菅谷も風邪を引いてなかった。

「いや、そこまでするも何も……むしろ色々してもらったのは俺の方なんだけど……」
「リカは黙ってて。バカなんだから」

「バカなんだからって……」

あまりにも自然な言い様だが、円香は何も言わずにスルー。

透の気持ちも分かる。こればかりは先に誕生日が来る人の損というべきか。仕方ないからこそ納得いかないことだってある、ということだ。

仕方なさそうなため息をついた円香は、そのまま提案した。

「じゃあ、浅倉もしたら？ 同じこと」

「……良いの？」

「私は良い。……リカは？」

「良いけど……今日？ マドちゃんの誕生日は？」

「それは勿論、やるから。別の日」

「ハロウィンでも行ってきたら？」

「良いね。行こっか。リカ」

「……マドちゃんは、良いの？」

「私が行ったら何の為か分からないでしょ。……それに正直、私はああいうの好きじゃ

ないし」

身内で仮装するならまだしも、仮装というよりコスプレ大会に近いアレは好きではない。
い。

「……わかった。じゃ、行こっか。とおるん」

「衣装、今から間に合うかな？」

「そこまでしなくても良くない？ もしくは、軽くローブと帽子だけ被ればそれっぽくなりそうだし」

「なるほど……あ、じゃあハリポタのグッズ買おっか」

「わお、手頃。でも高そう」

「浅倉。写真、よろしく」

一応、これで丸く収まりはした。

その事にホツと胸を撫で下ろしていると、透が円香の顔を眺める。そして、耳たぶに手を当てた。

「……これが、誕プレ？」

「そう。……変？」

「……ううん。良かったね」

透が「変じゃない」と言うなら本当の事なのだろう。円香は胸をホツと撫で下ろしつ

つも、自分も耳に手を当てる。改めて触れても、昨日の嬉しさが込み上げてくる。

「じゃ、帰ろっか」

「ん。……正直、色々疲れた」

これでは、まるつきり朝帰りだ。ため息をつきながら、円香は透と一緒に玄関へ向かう。

「マドちゃん」

その円香に、菅谷が声を掛けた。

「看病してくれて、ありがとうね」

「……んっ」

ありがとう、当たり前の一言なのに、こんなので嬉しくなってしまうあたり、やはり自分はチョロい女なのかもしれない。

そんな事を思いながら、円香は透と帰宅した。

学校の七不思議を生まれるのは、学校に忍び込んだ奴が七人いた時。

11月1日。つまり、ハロウィン翌日。一時間目がロングホームルームで、教員がまだ来ない教室の中、円香と菅谷は困っていた。

……何故なら、透が拗ねていたからである。もう朝、一緒に登校を約束してから、学校に到着し、今に至るまで、机におでこを擦り付けたまま微動だにしない。

「はーあ……」

「ま、まあまあとおるん。そんなに落ち込まないでよ」

「そうだよ。来年は行けるでしょ」

昨日のハロウィンが雨天中止となった。

もう色々と考えていた透のハロウィンイチャイチャ大作戦は全てダメになり、せめて構ってもらおうと思ひ、雨の中、傘も刺さずに外出したら電車に乗るのも止められ、仕方なく帰宅した。

「……はあ」

「落ち込まないでよ、とおるん。そうだ、放課後にみんなでタピオカ飲まん？」

「私も空いてるし、行こっか」

「……リカは平気そうだね」

「え？」

机に突っ伏している透から、そんな声が漏れる。

「……せつかくのお出掛け、中止になったのに」

「？ だって、あの後結局、二人で遊んだじゃん」

そう、あの後、菅谷は透の家に行つて、二人でずっと駄弁っていた。

「そんなにハロウィン、楽しみだったの？」

「……違うけどさ……ちよつと納得いかないだけ」

「？ 何に？」

「……リカに」

「え、俺？」

「……なんか、ズルい……樋口も、リカも……」

言われて、菅谷は小首を傾げるが、円香はなんとなく言わんとすることがわかった。確かに、いちやつきたくてハロウィンに行くことになったのに、結局は家デート……それも菅谷に自宅へ来てもらったため、親の手前、過激なことが出来ないようでは、結局いつものデートと同じだ。

そんな話をしていると、教室に先生が入ってきた。

「……あ、来た」

「そうだ、とおるん。もしあれだったら、タピオカ奢るよ」

「……ありがと」

今は、透と菅谷は席が近く、円香だけ遠い。正直、円香からすればそれはそれで羨ましい案件なのだが、まあそれはそれ、これはこれという事だろう。

自分の席に戻ってボンヤリと待機していると、先生が全員に言った。

「日直号令」

挨拶を終えると、先生はチョークを持って黒板に文字を書き始めた。書かれた文字は「職場見学」の文字。

「はい、というわけで、今日はこれについて説明するから」

そういえばそんなのやるって言ってたつけ、と円香は頭の中を切り替えた。透は基本的にホームルームの話の聞かない。菅谷が最近は聞くようになったが、中学までは自分しか聞かなかつた癖で、他人の分も理解しておかないと、と言う癖がついていた。難儀な癖である。

話を要約すると、職場見学に行く場所は大まかに分けて六箇所。その中で興味がある所に各々が見学するというもの。

「で、この紙配るから。希望の場所にチェック入れて、明後日のLHRまでに持って来るように」

なるほど、アンケート方式か、と理解した円香は、先生に配られた紙を見る。

正直、どこでも良い。まだ進路とか決まっていないから。

まあ、こういうのは透か菅谷が決めるだろう。ここは黙って待機……と、思っているときだった。

「……あ」

×これ、使えるかも。

×

夜中、透は少し傷が癒えていた。帰りに菅谷がかなり盛り上げてくれたので、なんだか楽しい放課後を過ごせたから。

まあ、そもそも三人一緒に今後も付き合っていくつもりだし、今思えばそんなに悲観的になる事ではないのかもしれない。

この先、円香と同じような機会はいくらでもあるはずだ。そう強く思い込んだ時だ。スマホが震えた。円香からだ。

マドちゃん『そういうえば、二人は職場見学何処にすんの？』

職場見学？ 何の話だろうか？

とおるん『何それ？』

マドちゃん『一時間目に話してたでしょ』

マドちゃん『ていうか、明後日に提出だけど、まずちゃんと持って帰った？』

とおるん『何を？』

LIKA☆『プリントでしょ』

言われて、鞆の中を確認した。だが、それらしいプリントは入っていない。

とおるん『ないわ』

マドちゃん『学校に取りに行った方が良いんじゃないの？』

明後日提出なんじゃないの？ と入力しようとしたが、その前に円香が連続して送信してきた。

マドちゃん『リカ。あんた、一緒について行ってあげたら？』

その時点で入力していた文を消した。言わんとしていることが理解できたからだ。

……つまり、二人で出かける口実が出来た。何せ、菅谷が住んでいるマンションの最寄駅⇨学校の最寄駅だ。何の問題もない。

LIKA☆『良いよ、俺は』

菅谷からの許可も出た。後は、自分がOKするだけ……なのだが。

「……」

……なんか、今更になってちよつとヒヨった。いや、ヒヨるといふより、遠慮したくなつた、と言ふべきか。

わざわざこんな風にお膳立てされなくても、もう自分の中で吹っ切れた後なのだ。わざわざ、本当は行きたいであろう円香に気を遣つてもらつてまで、二人きりになる事はない。

……あとは、まあ、なんだ。万が一、そういうちよつとえつちな展開になつたら、深夜テンションでもない限り破裂するかもしれない。

とおるん『じゃあ、今から行くね』

とおるん『樋口と一緒に』

マドちゃん『は?』

×× 少し肝試しみたいで楽しくなってきた、と思ひながら、透は円香を連れて家を出た。

×× 「あんた、どう言つつもりな訳?」

聞いたのは円香。せつかく、提案してあげたのに、なんで自分を巻き込んだのか、という所だ。

「別に? ……ただ、今後長い付き合いになるし、私にもいつか、そういうことがあるでしよつて思つたら、わざわざ気を遣つてもらふこともないのかなつて」

「……あつそ」

まあ、そういう風に割り切ってくれたのなら、円香としてはもう何も言うこともない。そうだ、別にあの日の夜だって思い出と言えば聞こえは良いが、1日に偶然が重なって出来たイベントに過ぎないのだ。

どう足掻いたって完全に公平にはならないし、不公平な日だって増えるだろうし、透だけが得する日も増えるかもしれない。

……ただ、強いて言わせてもらおうのなら。

「じゃあ別にプリント、明日取りに行けば良かったんじゃないの？」

「……」

身も蓋もない一言だった。結果的に見てみれば、一人の忘れ物に二人が付き合う形になっっている。

だが、今から帰るにしては、もう親に「忘れ物取りに行ってくる」と言ってしまったているし、その上で隣の駅まで来てしまった。

「おーい、とおるん。マドちゃん」

そんな中、菅谷が手を振って駆け寄ってきた。

「あ、リカー」

「さっきさぶり」

「うん。なんかこの時間に、いつもの場所に集まるのって新鮮だね」

……まあ、菅谷がこんな様子で何も考えていないのなら、別に細かいことを気にする必要もないのだろう。

「幽霊とかいるかなあ」

「いるんじゃない？」

「だよ。七不思議とかないの？」

「聞いたことないけど……あ、作っちゃおう？ 七不思議」

「良いね。めっちゃ怖い奴」

「樋口も作ろう」

「……眠れなくなっても知らないから」

との事で、三人ともノリノリで校内探検に向かった。

しかし、三人は忘れていた。……夜の学校とは、怪談話の代名詞になり得ると言うこととを……。

×

×

夜の学校の何が怖いか……それは、人工物なのに薄暗く人気が少ないところである。人がいた痕跡、と言うのは「なんで人がいなくなつたの？」と言う想像力を働かせることにより、人々を恐怖へと掻き立てるのだ。

それも、普段賑やかなのに夜になると静かになる所なら尚更のインパクトがある。さて、そんな夜の学校を怖がらないコツがある。それは……何も考えない事だ。

「どんなのが良いかな。七不思議」

「やつぱり、ラップ音とか、花子さんとか？」

「ベタ過ぎでしょ。捻りがないと、今時の高校生は怖がらないから」

「じゃあ……POP音とか、花男くんとか？」

「いやそうじゃなくて」

「何それめっちゃ怖そう。教室の机がPOP歌うの？」

「それ怪談じゃなくてTOY STORY」

なんて話しながら、校内を回っていた。

「とりあえず、夜の教室を見てからじゃないと、雰囲気掴めくない？」

「だね。じゃ、まずは図書室から行こっか」

「良いね」

いやまず教室行って忘れ物回収しろや、と誰もが思う所を、三人とも平然とスルーしていた。

さて、本当に図書室の前に来た。扉を開けようとしたが、ガキッと引つかかる音。

「鍵閉まつてる」

「……そりやそうか」

「え、どうすんの？」

「図書室は無しで」

割とメジャーな所が早くもダメになってしまった。

「とうか、普通に考えて、何処も閉まってるんじゃないの？」

「あー……確かに」

「じゃあ、他の設備とかで決めるしかない？」

「と言うと？」

「トイレ」

「廊下」

「階段」

「……三不思議にする？」

「トイレの花男くん？」

「老化が止まらない廊下」

「怪談が止まらない階段」

「ダジャレじゃん。……てか、怪談が止まらない階段って何？」

「夜にその階段を登ると……口が勝手に怪談話をするようになる……」

「笑い話じゃん」

なんて、話しながら歩いていると、トイレの前に来た所で、菅谷が二人に声をかけた。

「ごめん、トイレ行ってくる」

「いつてら」

「ついて行つてあげようか？」

「とおるんのえっち」

「いやそういう意味で言っていないんだけど……」

「てか、それだから男のセリフじゃないって」

なんて話しながら、菅谷がトイレに行くのを眺めながら二人は待機する。

「でも……なんていうか、ホントに緊張感無いよね」

「分かる。夜中の学校でトイレに普通に入れるって、ちょっとおかしいでしょ」

「そんな事ないよ。二人だつて入れるでしょ」

「早っ」

「じゃ、行こう」

もう戻ってきたので、改めて教室に向かって歩き始めた。

三人のクラスの教室まではあと少し。そろそろ夜の学校の散策にも飽きてきたが、このままではあまりにも得るものがない。

そう思った透が、振り返りながら提案した。

「ね、二人とも。最後に屋上で星を見に……あれ、リカ？」

振り返ると、菅谷が窓の外を眺めているのが見えた。

その視線の先には、満月が浮いている。それを見て、透が声をかけた。

「リカ？ どうしたの？」

「え？ いや」

「満月？」

察したように円香が続ける。その後から、さらに透が聞いた。

「そういえば、リカって理科系得意だけど、地学もいけるんだっけ？」

「いや、流石に無理」

「やっぱりかー。興味ないこともないんだけどね。星とか綺麗だし」

「それならプラネタリウムでも行けば良いでしょ」

「あ、良いねそれ。今度、三人で行く？」

「じゃ、私探しとく」

そんな話をしながら、緊張感のかけらもなく三人は進んだ。もう他の教室も開いていない、と理解した時点で、すぐに忘れ物がある教室に向かった。

「着いたよ」

「教室は開いてるんだ」

「ね」

三人で中へ入った。のんびりと伸びをして。透が机の中を覗き込む。

のんびりと黒板を見ている菅谷を見て、円香が横から声をかけた。なんだか今日は大人しくてボケつとしてる事が多くて、気になってしまった。

「怖いのか？ リカ」

「え？ あ、いや……」

「あつたよ」

透が声を上げる。すると、菅谷が二人に声をかけた。

「ね、二人とも。写真撮らん？」

「どうしたの急に？」

「や、夜の学校なんて中々ないでしょ。来ること」

「確かに。撮りたい」

そんな話をしながら、三人で黒板の前に立った。スマホを構えるのは菅谷。真ん中に透が立ち、ピースをして、円香はウインクした。

「……撮るよー」

「うん」

カシャッとシャッターを切った。

「後で送って」

「今送るよ」

「じゃ、帰ろっか」

そんなわけで、帰ることになった。なんか、行けるところが少なくて思ったより刺激はなかった。雰囲気くらいだろう。

歩きながら、ふと透が言った。

「結局、何も出なかったね」

「まあ、簡単に出たらお化けじゃないでしょ」

「えー。でもせっかくの夜の学校なのにさー」

「お化けなんていないってこと」

「まあ、だよね」

しかし、だからこそ三不思議を作ると面白いかも、なんてことも思ってしまった。

「で、どんなのにしよっか。三不思議」

「まだそれ考えてたんだ」

「三人で一つずつ作ろうよ」

「……何処だっけ？ トイレと階段と廊下？」

「そう。花男さんはつまんないから無し。……で、私が老化が止まらない廊下で、リカが怪談が止まらない階段」

「じゃ、私トイレが止まらないトイレ」

「いや怖いけども。駄洒落にもなつてなくない?」

「怖いなら良いでしょ。怪談じゃないのこれ?」

「うーん……リカはどう思う……あれ、リカ?」

「?」

二人とも菅谷の方を見たが、そこにバカな姿はない。

「逸れた?」

「まさか。どうやって学校で逸れるの。どうせ何処かに隠れてるでしょ」

なんて話しながら辺りを見回すと、さっきの教室に入っていくのが見えた。

「隠れるところ見られてるし……」

「忘れ物したんじゃない?」

「一応、様子見に行く?」

「うん」

まあ、驚かすつもりなら、掛かってやるのも一興かもしれない、なんて思いながら、二人で教室まで戻った。

「リカー。帰るよー」

「てか、何してんの?」

なんて声をかけながら扉を開けると、意外にも菅谷はポケットに手を突っ込んだまま、月明かりを浴びながら窓の外を見ていた。その様子はサマになっているが、てつきり悪戯するつもりだと思っていた円香としては少しだけ驚いてしまった。

声を掛けたのに、菅谷は無視して月光を浴び続ける。その格好良さを自覚しているような素振りが苛立ったのか、透がすぐに言った。

「リカ、無視? 聞こえてたでしょ?」

「……」

しかし、何か違和感がある。さっきまでの菅谷との会話に。けど、菅谷は、地学は出来ないと言った。確か前に、正確には、宇宙は何キロ上空から先のことを言うか、みたいなのを教えてくれた覚えがあるのだが……あれは地学の範囲ではないのだろうか?

「リカ……!」

「浅倉、待って」

「何?」

「あのリカ……なんか、肌白くない?」

「……え？」

言われて、透も目を凝らす。確かに……なんか、肌の色が悪い気がする。月光を浴びているからだろうか？

すると、菅谷がこちらに目を向けた。その表情は、あのバカとは思えないほど落ち着いた様子で爽やかな笑みを浮かべていた。

「……あれ、リカ……？」

「いや……違うでしょ……」

「……じゃあ、誰……？」

「知らないけど……弟とか？」

「仮にそうだとすると……なんで……この高校にこの時間にいるの？」

「だ、だよね……」

ただ分かるのは、二人ともまずいものを見ているような、そんな予感だ。

そして、その男はゆらりと身を揺らしてこちらに歩み寄り始めていた。

「二人ともやつと見つけたああああ!!？」

「おぎやああああああ!!？」

「え、何？ 生まれたて？」

突然、後ろから大声が聞こえ、二人とも大声を上げて教室の中に飛び込んでしまった。

心臓をらしくなくバツクンバツクンに加速させながら、尻餅をつきながら後退りし、教卓に背中を強打、倒してしまいなながらも気にする余裕もなく、二人で上半身だけ抱き合いながら、頬をくつつけて顔を上げる。

そこに立っていたのは、いつもの間抜け面とイケメンを兼ね合わせた不思議な顔の菅谷である。

「もー、なんで二人とも置いて行くの。トイレから出たら誰もいないんだもん」

「……へ、と、トイレ、から……？」

「さ、さつきまで話してたよね……普通に……？」

なんとか声を絞り出して、円香と透が確認するように聞く。が、菅谷は相変わらずキョトンとした表情で小首を傾げた。

「え？ いや俺ずつとトイレにいたよ。小便したらお腹痛くなって個室に入って……あ、そうそう。なんか隣の個室にも誰かいたみたいでさ。スズメバチ談義で盛り上がったよ。いつの間に出ていったのか、最後に『ありがとう』とかお礼言われて、知らない間にいなくなってたけど」

「……」

「……」

「あ、もしかして話し声聞こえてた？ だから先に教室来てたの？ だったらごめんね」

「……………」

「……………」

「いよいよもって二人とも汗も出ずに、ただただ真つ青になってしまっている。「じゃあさつきまで私達が一緒にいたのは誰？」みたいな。「て言うか、お前も不思議体験してんじゃん」みたいな。

「そこで、ハツとした円香と透が、もう一人の菅谷の方向を見る。これ、もしやドツペルゲンガー？ と思ったからだ。ドツペルゲンガーであれば、菅谷とどちらかが消えねばならない。しかし、菅谷は強いから、消えるのはドツペルゲンガーの方だ。

「だが、そこには誰もいなかった。……と、いうことは、やはり……霊的に何か、菅谷に化けていた……ということに……。」

「……………」

「二人とも、どしたの？ なんか顔色悪いけど……。」

「シバきたい。八つ当たりといわれようと、目の前のバカと同じ格好した奴にビビらされた身として、一発ぶつ飛ばしたい。」

「……だが、しかし。それは後だ。二人とも顔を見合わせて頷き合うと、僅か一秒で菅谷の前後に移動し、透は前から、円香は後ろから飛びついてサンドイッチの如く挟んだ。」

「ち、ちよつ……ふ、二人とも!?」

抱つことおんぶを同時にやるハメになり、片腕ずつでなんとか二人を支える。

「連れてつて」

「早く」

「な、何……どうしたの？ お化けでもいた？」

「……」

「……」

「あがががつ！ し、絞まつてる！ 首が折れちゃう！ 分かった、学校出るまでこのま

ま行くから……！」

「落としたらブツ飛ばすから」

「覚悟しといて」

「じゃ、しつかり掴まっててね」

そう言いながら、菅谷は微妙に震えている二人の体に片手を一本ずつ当てて運んだ。

たつたそれだけで震えがおさまってしまったのだから、自分達はやはりチョロいのか

も……なんて思いつつ、透と円香は、前後から両サイドの肩に顎を置いた。

××

「はあ？ 俺にそつくりのお化け？ ……プハツ」

校門から出た帰り道、二人を降ろして事情を聞いた直後、笑みをこぼして二人に殴られた。

「笑い事じゃないから」

「ホント、あんたムカつく顔してる」

「えー。なんでそんなこと言うの」

「前から思ってたんだけど、顔と性格があつてないの」

そんなこと言われても、菅谷は困るだけだ。

「でも、俺も見てみたかったなあ。俺にそっくりな相手」

「ドツペルゲンガーに会いたいか、頭おかしいでしょ」

「まあ、リカよりオーラはイケメンだったけどね」

「よし、絶対に会う。そして殺す。ドツペルゲンガーは殺しても罪にならないよね？」

「浅倉、余計なこと言わないで。こいつのマンション、学校に近いんだから。これから毎

日、夜中に学校、通われるでしょ」

というか、普通に閉じてる校門をよじ登って侵入してしまったが、怒られたりしない

だろうか？

「はーあ……でも、楽しかったね。こういう探検も」

「私は二度とゴメン。まさかあんな幽霊に出て来られるなんて……」

「幻覚だと信じたいけど……私と樋口が二人で見ちゃってるからねえ」

「逆に、幽霊見た後なのによく二人とも平気でいられるね」

それを言われ、二人とも思わず口を閉ぎす。確かに、と思つたからだ。自分達の大切なバカに化けて出てこられ、あのまま何をされていたのか分からないと言うのに、割と平常心だ。

……もしかしたら、隣の阿呆が助けてくれたからだろうか？ 文化祭の時も、今回も、なんだかんだ言つて彼は助けてくれた。だから、今後も万が一の時は、なんやかんやで助けてくれるかもしれない、そんな信頼があるのだとしたら……ちよつと、口にするのは憚られる。

「リカが助けてくれたからだよ」

と、思つてたら、透は普通に言つちやつた。ほんとそう言うところ羨ましい円香だった。「え、俺？」

「うん。私、同じ顔でもあんなシュツとしたリカより、今の間抜けなリカの方が好きだよ」

言いながら、透は菅谷の正面に立ち、両頬に手を当てる。そして、その手を両肩に置くと、ジャンプして一気にしがみついた。

唐突に抱っこを強要されたものの、菅谷は上手いこと支えてみせる。

「ありがとう、リカ」

「つ、う、うん……」

頬を赤らめて目を逸らす菅谷。……正直、円香としては、ちよつとえつちな事になるより、ああしてナチュラルにボディタッチし、本音を本音のまま伝える事ができ、周りの目を一切、気にすることなく甘えられる透の方が、よほど羨ましいってものだ。

「じゃ、リカ。このまま家までお願い」

「家まで？ や、あの……それだと、電車……」

「知らない。嫌なら落としても良いよ。私の尾骶骨骨折しても良いなら」

「うぐつ……」

「んっ」

「い、今ほつぺに口つけた？」

「ダメ？ 樋口とはマウストゥーマウスする癖に」

「だ、ダメじゃないけど……」

「ほら、このまま進んで」

……ちよつとやり過ぎではないだろうか、なんて円香は思ってしまった。自分では人前では絶対に出来ないことをされて、思わず憎たらしく思ってしまった。

そう思った時には遅かった。菅谷の背中にドスツと額を置いてしまう。

「つ、ま、マドちゃん……?」

「私も怖かったからおんぶ」

「えっ……」

「行くよ。ちゃんとおぶつてくれないと尾骶骨折するから」

「いやいやいや! 流石に駅まで二人まとめて担ぐのはキツ……」

「よっ」

「ちよっ、待っ……!」

「樋口と私、どつちが重い?」

「なんでこのタイミングで原爆落とすの!?!」

「浅倉でしょ?」

「樋口でしょ?」

「ど、どつちも重い!」

「どつちも軽いと言え」

「どつちも……!」

結局、駅員にキセルだと思われそうになって、途中で降り、家まで再び二人とも持った。知らない間に家まで送ることになっていた事に疑問を持たなかったのは、言うまでもない。

約束とフラグは紙一重。

ペットは身勝手なものであり、それを許すほど人としての器は広がる。

色々あつた高校最初の二学期も、残り僅かとなつた。と言つても、まだ一ヶ月あるが。体育祭も終わり、残りのイベントは期末試験のみ。11月下旬で「まだ秋」と言い切れる時期だが、肌寒さは「もう冬」である。

そんな冬にも近い季節。従つて、そろそろコタツが欲しいとか考えていた反面、もう少し後に出さないと電気代が終わるとも思つていた菅谷は、休日は気晴らしに表に出るのが日課になっていた。

と言ふのも、なんだかんだ動いていれば身体は温まるのだ。単純な身体の作りをしてゐる。あとこの季節にしか見られない虫とかもゐるし、何一つ問題はない。

そう思つて、今日も玄関を出た時だった。ちようど良いタイミングで、お隣も出てきた。ランニングウェアに身を包んでいる上、大好物が一緒だ。

「あ、カトちゃん！ あと、有栖川さん、こんにちは」

「ついで?」

「ワン!」

菅谷を見るなり、カトレアは駆け寄ってきて、爛々とした瞳を向けてくる。菅谷もそれに對し、しゃがんで頭と顎を撫でながら抱き締めた。

「おー、よしよし。お前もう朝飯食った? 何、ドッグフード? あれ不味いよね。俺、前に食べた時吐いたし」

「あなた何してるのよ……ていうか、動物相手に普通の高校生みたいな会話してどうするの」

「何言ってるんですか。動物が相手だろうと、幽霊が相手だろうと、自然体で対応しないと意味ないでしょう」

「待って。あなた幽霊と会話したの? やめて。そんな靈感強い人と隣にいて……」

「いや幽霊と話したのは、とおるんとマドちゃんですけど」

「どつちにしろ怖いわよ!」

実を言うと菅谷も話したどころか成仏させていたのだが、それに本人は気付いていなかった。

「明里も走りに行くの?」

「はい。コタツ出すか悩んでたんですけど、電気代を考えると表に出て暖まった方が良

いかなって」

「偉いわね。一緒に行く?」

「え……有栖川さんと、ですか……?」

「今ならカトレアも一緒だけど?」

「行きます」

秒殺だった。お前それで良いの? と思われるまである。

エレベーターに乗り込み、そのまま一階へ。その間、アキレス腱を伸ばしたり、膝や足首の準備を整える。

一番下に到着し、エレベーターを出た。

「よし、じゃあ行くわよ」

「どれくらい走ります?」

「軽く10キロくらい。行ける?」

「カトちゃんが一緒なので」

「……」

これで本当に行けるのだからタチが悪い。一人の時はそこまで走る体力は無いが、犬と一緒に走れるのはわけがわからない。

早速、二人と一匹でジョギングを始めた。

×××
大分、汗をかいたわけだが、本当にカトレアと一緒に走り切ってしまった。

マンシヨンの前に到着し、軽く伸びをした。

「ん〜……走った。つい、12キロくらいやっちゃったわ」

「カトちゃんも調子良さそうでしたからね」

「わふっ!」

「……」

息を荒くしながら、カトレアは菅谷を見上げている。それを見て、思わず菅谷はウズウズして来てしまった。

「……あ、あの……有栖川さん……」

「何?」

「最後にもつかい、もふもふしても良いですか……?」

「良いけど……もう飼ったら? 犬でも猫でも」

「嫌です。動物は自然の中にいるのが一番だと思うので」

「いや、頬擦りしながら言われても説得力ないわよ」

わしやわしやと撫でまわしているその姿は、もうブリーダーにしか見えない。カトレア自身も撫でられて気持ちが良いのか、ペロペロと菅谷の頬を舐め返す。

「あ、別にペットを飼っている人を否定してるわけじゃないですからね。カトちゃんとか見てると、人と一緒でもやっぱ幸せそうだなって思いますし、俺の知り合いにもクワガタのブリーダーいますし」

「なら尚更、飼えば良いじゃない」

「学校へ行く時『行かないで』と足を甘噛みされた時、抵抗できる自信がありません」

「……そんなに好きなの」

実際、また最近は少し考えが変わってきていて、里親募集とかあったらむしろ引き取ってあげた方が良くもする。保健所に預けていては、いずれ殺されてしまうのだ。ならば、自然の中にいられなくとも命を繋いだ方が良くもする。

だが、それで自分のことがダメになっては本末転倒も良いところである。

「カトちゃん、よしよしよしよし」

「……」

いや、でもやっぱりそんなにモシヤモシヤと撫でくりまわすなら、やっぱり飼えよ、と思わないでも無かった。

××……というやり取りを、アポ無しで遊びに来ていた透は、物陰からジッと眺めていた。

「ふう〜……少し張り切り過ぎたな……」

足が痛くなるまで走ってしまった。冬が近いとは思えないほど汗をかいてしまった後で、今はシャワーを浴びている。

……いや、割とマジで走り過ぎた。明日は筋肉痛かも……と思っではいるものの、動物と久しぶりにゼロ距離で触れ合えて、満足はしているのだが。

あのモフモフの毛だるまの中に顔を埋められる機会なんてそうそうないので、もうホクホクだ……なんて思いながら、シャワーを浴び終えてバスルームを後にした。すると、そのタイミングで呼び出し音が鳴り響く。

「はい……あ、とおるんとマドちゃん」

『開けてー』

「はいはい」

遊びに来たのかな？ と、すぐに察して扉を開ける。その間に着替えだけ済ませると、すぐに扉の前のインターホンが鳴り響いた。

「はい」

鍵を開けると、扉が開かれた。そこにいた透と円香は……。

「わん」

「……に、にゃあ……」

何故か、犬耳と猫耳をつけていた。

「……何してんの？」

「わん」

「……なう」

「いや、分かんから」

いや、本当に何しているのか。可愛いのが少し困るが、多分、今「可愛い」とか言う
と、円香に引っ搔かれる。

「リカ、犬と抱き合ってたから」

「……なんで私まで……」

どうやら、さっきのカトレアとの一幕を見られていたらしい。

「え……俺の犬になりたいの？」

「わん」

「わん、じゃないでしょ。言い方」

「マドちゃんは猫？」

「……別に、私は猫になりたいわけじゃないし」

見た感じ、ほぼ透が無理矢理、自分のノリに乗せさせたのだろう。流石にハロウィン
が終わった後に猫の仮装は恥ずかしいのか、円香は頬を赤らめて目を逸らしている。
……いや、なんならやりたくないのかもしれない。

「じゃあ、とおるん。おいでー」

そんなわけで、透にだけ構ってあげることにした。今、円香も一緒に呼んでしまうと、多分恥ずかしさでオーバーヒートする。

「わん」

返事をしながら、透は靴を脱いで自分の方に歩いて来る。とりあえず……カトレアと同じことをすれば良いのだろうか？

透の事を正面からハグし、頭と顎を撫で回す。

「よーしよしよしよし」

「わん」

「よしよ……あ、耳取れた」

「えっ。痛い」

「痛いで済んじやうの?」

「つけて」

「……脱着可能な怖いんだけど」

「うるさい。良いから構って。犬は寂しいと死んじやうだよ」

「それ兎じやね?」

もう既にグダグダになりつつある中、菅谷と透は部屋の中に入り、円香も猫耳をとつ

て奥へ進んだ。

犬耳を付け直した透は、ソファアの横に来るなり、菅谷に飛びかかった。

「わん」

「うおっ……と」

そのままソファアの上に押し倒す。仰向けになる菅谷の上に、透は四つん這いになった。

「と、とおるん……どしたの？」

「わん」

「え……まさか、これも犬ごっこの延長？」

「わん」

「あ、あの……流石に少し恥ずかしいんだけど……」

「わふっ」

透は強引に、菅谷の胸の上に顎を置いた。あまりの顔の近さと、犬耳の可愛さに菅谷は頬を赤らめる。今にしても思えば、透は確かに犬っぽい。分かりにくいだけで感情を隠しているわけではないし、いつでも素直にしている。

こうして耳を作り物とはいえ具現化されると、胸の奥に来るものがある……いや、それどころかブンブンと左右に揺れる尻尾さえ見えて来るような……。

……いや、透だと思いうから恥ずかしくなってくるのだ。これは透にそっくりな犬……よく聞く「ケモミミ娘」という奴だと思えば良い。

つまり、犬、犬……よし。

「よしよしよし、とおるん。良い子。今日のお昼何食べたー？」

「わん」

「まだ食べてないの？ 俺もだわ。これから何か作ろうかと思つてたんだ。一緒に食べる？」

「わんわん」

「よっしゃ。何食べたい？ やっぱドッグフード？」

「グルルルツ……」

「あ、そこは犬じゃないのね。よしよし」

言いながら、頭、喉、背中、頬を撫でくりまわす。透は透で、恥ずかしさ以上に心地良さが優っているのか、目を閉じたままそれはもう甘え切っている。

……なんかほんとに犬に見えてきた。さっきまで女の子として可愛く見えていた視線が、徐々に犬に対する視線に変わっていく。

「とおるーん、もふもふして良い？」

「わん！ ……わん？」

「んー……」

「ひゃうつ^{!!}？」

菅谷が、透の肩と首の間に顔を埋め始めた。

「とおるん……もふもふ」

「ちよつ、り、リカ……！　そこ、肩……」

「とおるん、今犬でしょ。口答えしない」

「えっ……ちよつ、さすがに恥ずかしいと言うか……そ、そこまでなりきらなくても良くない？」

「とおるん。ワンワンでしょ」

「え、いや……あの……」

「……」

「……わ、わん……」

「よしよし」

先に犬から人に戻った透が、頬を赤くしながら菅谷の胸の上で顔を隠すしかなかった。
×××

××× 円香はリビングに入る前、トイレに入ってから来た。直後、扉のガラスの部分から二

人の様子を眺める。声までは届いて来ないが、見た限りだとかなりレベル高いことしている。

幸せそうな顔で身体を撫でてもらう透と、背もたれで顔は見えないが、わしゃわしゃと両手を動かす菅谷。

……いや、別に全然、羨ましくなんかない。アレを羨ましいと感じてしまったらおしまいな気がする。だから、全然ウズウズなんかしていない。

透がどんなに満たされた顔をしていようが、全くもって羨ましくなんか……。

「……………」

菅谷が透の首と肩に顔を埋め始めた。アレは……何をしているのか？ まさか、自分を抜きにしてえっちなことを……？

そんなの許されない。や、別に羨ましくなんかないけど、ちよつとズルいだけ。

そうと決めたら、すぐに部屋の中に入った。

「え、いや……あの………」

「……………」

「……………わ、わん……………」

「……………」

透を全力で愛で続ける菅谷の枕元にそそくさと移動する。自分が入って来たのに、気

付かない菅谷に苛立ちつつ、でも少しだけエツチなことをしているわけでもなさそう
でホツとしつつ、なんやかんやで背後に回る。

……直前になって、少し恥ずかしくなり、顔がほんのりと赤く染まる。それでも、
控えめに手を伸ばして、菅谷の背中を掴むように握り、引つ張った。

「？ マドちゃん？」

「あ、ひ、樋口……」

「……………に、にゃー……………」

悲しいかな、結局の所、透の犬っぽさより、円香の猫っぽさの方が大きく優つてしまっ
ていた。

お陰で、菅谷はさらにスイッチが深く入る。

「ひ、樋口……………？ どうしたの？」

「マドちゃんも、おいで」

「……………何処に？」

「とおるんと一緒に、膝の上」

「……………にゃう」

「樋口……………」

だめだった。ソファアの上に寝転がる菅谷の上に、二人のJKが強引に乗った。

「マドちゃん」

「……なーう」

「良い子」

左手で円香、右手で透の頭を撫でる菅谷だったが、円香には透がフニャツと力が抜ける理由がよく分かってしまった。この男、撫でるのが上手すぎる。気持ち良いとかそんな次元ではなく、抜群の撫で加減でこちらの身体の芯、全てを腑抜けにされてしまいうなほどのテクニックを叩き込まれていた。

「ふあ……」

「はふん……」

「めっちゃ気持ちよさそう。ウケる」

二人揃って為すがままにされていた。しかし、まあ当たり前の事ではあるが、こういう特殊な空気というのは長くは保たないわけであって。

5分後、三人一緒に正気に戻った。それはもう、三人とも羞恥からしばらく黙り込むしかなかった。

「で、二人とも今日はどうしたの？」

何事もなかったかのように三人で飯を作って食べ始めている席で、菅谷がふと気に

なつたように二人に聞いた。

何しに来たのか、と問われれば遊びに来たのだろうが、まさかペットになりに来たわけでもないだろう。

「あ、そうそう。冬休みの予定、決めたくて」

「冬休みかあ……」

「そう。夏休みはぎっくりでも予定決めたり楽しかったし、それに倣おうって浅倉が」

「え、とおるんが？ 熱でもあんの？」

「喧嘩売ってる？」

そうは言うが、浅倉が予定を立てる事自体がレアなのだから仕方ない。

たった二週間ちよいの休みでも、普通の休みに比べたら長いのだから、いまのうちに計画を立てるのは賛成ではあるが。

「てか、冬休みいつから？」

「24でしょ」

「わお、イブじゃん」

「二人とも、福丸とか市川との予定はないの？」

「あるの？」

「二人はそろそろ受験も本格化してる頃でしょ。遊びたくても遊べない」

「あーなるほどね」

つまり、三人で遊ぶにはもってこいというわけだ。

「何処いこつか？」

「てか、イヴにする？ 当日にする？」

「両方でしょ」

「一泊二日？ ……は、金銭的に無理か。うち泊まる？」

「リカの部屋、マンションだから騒げないでしょ。やるなら、私か浅倉の家、どちらかが良いと思う」

「じゃあ、今回は私の部屋にしようか」

「良いの？」

「うん。前に美術の課題やった時、樋口の部屋汚しちゃったからね」

これまた珍しい気遣いをするものだ。透にも何か目的がありそうなものだ。

「リカも、うちに泊まって行って良いよ」

「え、ま、マジ？」

「大丈夫、私の部屋のベッド、雛菜と小糸ちゃんと樋口と私が入れるくらい広いから」

「え、同じベッドで寝る気？」

「………ていうか、それ中二の時の話でしょ」

「平気でしょ。多分」

「プレゼント、全員で枕元に置くようにしよう」

それがやりたかったのね、なんてすぐに思惑を理解した。円香も菅谷も小さく笑みを漏らす。円香の部屋のベッドよりは大きいのだろう。

プレゼント、の言葉を聞いて、菅谷は顎に手を当てる。

「はいはい。……何にしようかなあ、プレゼント。何か欲しいものある？」

「お任せ」

「じゃあ、とおるんにはクワガタの模型あげる」

「いやお任せというか、そういうのは当日に開けるから盛り上がるんでしょ」

「あ、そっか」

なるほど、と菅谷は理解する。そういうことなら仕方ない。

「まあ、その日はプレゼント交換やるとして……他に何しよっか？」

「ていうか、クリスマス当日も遊ぶんでしょ？」

「そっか。むしろ、24日の夜に集まって泊まって、次の日朝から遊べば良いんだ」

「良いね、それ」

「じゃ、決まり」

思いのほか、スイスイと話が決まっていく。全員、食事を終わると、食器を片付け始

めた。

その後、食後のコーヒーを淹れ、ホツと一息吐く。

「ま、クリスマス当日は三人でイルミネーションでも見にいこつか。飽きたらボウリングでもすれば良いし」

「私もそれで良い」

「私もー」

「じゃ、決まりだね」

楽しみになって来た。正直、菅谷は冬休みを憂鬱に思っていたのだが。まあでも、しみなんて作ろうと思えば作れるのだし、ネガティブな思考は消すことにした。

そんな中、透がふと思ったように聞いてきた。

「そうだ、リカ。お正月は？」

「あーごめん。正月は無理。実家戻る」

「あー……そっか」

そういうえば、そういうの厳しい家だった。いや、高校生ならむしろ当たり前かもしれない。

「……ま、顔見せられる時に見せといた方が良いでしょう」

「マドちゃんとおるんも一緒に来る？」

「遠慮しとく」

「面談とかされそうだもんね」

「え？ 誰に？」

「お義父さんに」

「??？」

一人何もわかっていないバカだったが、円香も透も何も言わない。多分、父親が親バカとか知りたくないだろうから。

「いつ帰ってくるの？」

「三日の夜くらい」

「じゃ、その日以降だね。リカと初詣行くのは」

「え、いつてくれるの？」

「当たり前でしょ」

「来年も三人一緒にいられますようにってお願いしないと」

「……ありがとう」

「まあ、でもそれならそれで私と樋口は雛菜と小糸ちゃんとお参り行くと思うけどね」

「合格祈願で」

「……」

じゃあやつば初じゃないじゃん、なんて思ってしまったが、まあ2回目なのに一緒に
行ってくれると感動しておいた方が良い。

「じゃ、俺も地元の神社探して行ってみよ」

「良いじゃん。……てか、リカは地元の方が詳しくないんだもんね」

「割と田舎なんだっけ？」

「うん、夏休みに何回か見て回っ……てないや。てかあんまゆつくりする余裕もないか
も……」

「……」

正月なのに忙しないのだ。お金持ちの家というのは。

「でも……二人の振袖、見たかったなあ……」

「なんでたかだか高一の正月で振袖なんて着るの」

「持つてないよ、私も樋口も」

「あれ、そうなの？ なんだ」

それは少しシヨックだったのか、それとも少しだけほっとしたのか。まあ、どの道見
れなかったのなら、損はしていないのだろう。

「ま、じゃあ予定はそんなもんだね」

「うん。……あ、何かしたいことある人とかいる？ タコとか独楽とか」

「小学校の社会の授業じゃないから」

「俺、餅つきで父ちゃんの手をついちゃって以来、お正月のイベント苦手なんだよね」
「え……それ平気だったの？」

「一番、予測されやすくて起こっちゃいけない事故じゃん」

「俺の父ちゃんだよ？ 咄嗟に握り拳作って杵の方が砕けた」

「何それ……」

「怖い……」

人間じゃない、なんて思ってしまったが、菅谷もそう思ってる。自分はそこまで鍛えられなくて助かった。

まあ、何にしても予定は決まったし、とりあえず今日の予定を決めたい。

「よし、じゃあ今日はこれからどうしよう……か？」

と、言い出した菅谷の頭に、ちよこんと乗せられた犬耳。乗せたのは透だ。

「……え、何これ？」

「決まってるじゃん。犬耳」

「……な、なんで？」

「私達にだけペットやらせて、自分だけ飼い主はするいでしょ」

「……確かに」

円香にまで頷かれ、菅谷はたらりと冷や汗をかく。

「リカも十分、わんこタイプだし、犬耳で良いよね？」

「は？ 何言ってるの？ 両方やらせるに決まってるじゃん」

「いや……っていうか、勝手にペットになったのは二人の方じゃ……」

「は？」

「あ、いえ……なんでもないです……」

ほとんど恐喝だったが、もう仕方ない。それに……その、何。菅谷も別に触られるのは嫌じゃないというかなんというか……。

そうこうしているうちに、向かい側に座っていた円香が、菅谷の隣に椅子を置く。二人で挟み込むように座った。

「はい、リカちゃん。良い子でちゅねー（棒読み）」

「よしよしよしよし」

「……あ、あの……なんで挟むの……？」

「は？ 何喋ってるの？」

「わん、でしよ？」

「……わん」

「はい、よちよち」

「良い子ー。お手」

「……」

菅谷はこの日、決めた。何が起こっても絶対に二人とペットごっこはしない。そして、迷った。その為なら、マジでペット飼おうかな、と。

実験と一緒に、同じ事をしてる時にこそ性格の差が出る。

「「終わったー」」

と、三人揃って期末を終え、両拳を空に突き上げた。試験の返却が終わり、これで二期終了である。

さてさて、こうなったら後残るはメイスイベントだけ。……つまり、クリスマスイブである。

「そんなわけで、二人とも。17時半に私の家ね」

「はいはい」

「おっけー」

「へっくち」

「とおるん、風邪？」

「わからん」

そんなわけで、珍しく一緒に帰らず、お昼だけ食べて三人バラバラに動き出すことになった。五時間後に、浅倉家で！

××

現在、13時。目的地への移動に少し時間が掛かったが、円香はシヨツピングモールに来た。

とりあえず二人へのクリスマスプレゼントだが、割と難易度ハードモードである。何せ、喜ばせる対象が、頭の中が銀河の彼方にある二人組だ。慣れれば行動パターンは読みやすくとも、プレゼントとなればまた話は変わる。

何が喜ばれるのか、それを考えるのは少し難しい。

「……ま、何だって良いか」

あの二人のことだ。何を買ったって喜びそうだし、何だって良い。ただ、まあどうせお金を使うなら喜んでもらいたい。何より、あの二人だつて妥協しないだろうし、劣るのはゴメンだ。

結局、つまり何だつて良いわけではない結論になったことにも気付かず、円香はシヨツピングモール内を見て回った。さて、改めて何を買おうか。

とりあえず、フロアマップを見る。渡す物も、服は控えたほうが良いと思つた。理由は単純、大きいから。枕元に置けるものじゃないとダメだ。

しかし……そうなるとアクセサリー……大きくてもマフラーや手袋、帽子くらいだろう。少し、ありきたりな気がする。

……菅谷なら蛇のマフラー？ いや、確かに喜びそうだが、円香が渡したくない。

せつかくなら、円香のセンスで選びたい。

「……ま、適当で良いでしょ」

そう、適当で良いのだ。わざわざクリスマスなんて毎年、同じ日に全員平等に来るもので、凝ったものを渡す必要なんかない。ましてや、相手はお金持ちの息子。必要なものなんてないし、実用的なものも選びようがない。

だから、選ぶのならデザイン重視、それも見た目だけなら落ち着いてる奴だし、落ち着いた印象の色……と、やっぱり適当とは思えない真剣な表情で見て回っていた。

そんな時だった。

「……」

ふと目に入ったのは、カジュアルな男性向けの洋服屋……というより、革製品の店だ。革ジャン、靴、鞆など様々なアイテムがある。

こういうの、見てくれだけは良い菅谷のことだし、割と似合うかもしれないと思い、中に入った。

「いらっしやい」

声を掛けてくれたので、会釈だけして中を見て回る。革製品……なんだかシックで大人のイメージだ。

例えば……革ジャン。この茶色い奴は、なんだか西部のアウトローを想起させ、菅谷

の天然パーマと少しだけマッチする……気がして頭の中でシミュレーションしたのだが、何だか合わない。何故だろうか？

「……………」

まあ、革ジャンなんて高くて大きいもの、そもそも買うつもりはないから良いのだが。このお店の製品は他に小さなものといえば、パスケースやお財布なのだが……うん、革製品だけあって普通に高い。

「何か、お探しかい？ 嬢ちゃん」

店員に声を掛けられ、ドキツとしてしまう。しまった、声をかけられる前に店を出るべきだった。

「い、いえ……」

「珍しいね、女の子のお客さんは」

「私が使うものではありませんので」

「ほう、すると何か？ 男に何かくれてやるのかい？」

「……………」

「おや、当たりか。可愛いお客さんも来るもんだねい」

……まずったと、円香は冷や汗を流す。バレたことよりも、他人に男にプレゼントを渡す、という事がバレるのが、思った以上に恥ずかしかった。

せつかく声をかけてくれた店員さんに、冷たく「あの、大丈夫ですのよ」と言っただけで逃げない。事実を言うことにした。

「……でも、困ってるんです。こちらのお店の商品は素敵ですが、あの子には合わないかな、と」

「ほう……どうしてそう思うの？」

「分かりません。……見てくれただけは良い人で、実際、想定してみても似合っているように見えるのですが……何故か、しつくり来なくて」

なので失礼します、という前に、男の店員さんは小さく微笑んだ。

「ハッ……そりゃあ、その男の中身を、嬢ちゃんが知っちゃってんのが原因さ。要するに、見た目は良いけど中身は残念な奴なんだろう？」

「いいえ、彼は中身も優しくて、自分の好きなことに夢中な所も可愛くて、見た目の割に中身はウブでそれはつまり誠実さを示していて、女の子……いや男の事も含め全員を見ただけでなく中身から評価してくれる子なので、全然残念なんかじゃないです」

「お、おう……」

残念ながら、円香は自分はボロクソに言うくせに他人が悪く言うのは許せないワガママガールだった。思わずダンディーな店員さんも引いてしまうほど。

「でも……今の褒めてたつもりかもしれないけど、要するにガキだつてことしか伝わら

なかつたんだが……」

「それは……そうですね。良くも悪くも子供ですね、彼」

それはちよつと否定できなかつた。別に、それが嫌なわけではないし、子供っぽい彼だからこそ、伝わる優しさや気遣いがあるのも確かだから。

「だから、そういうその子の面をお前さんは知ってる。だから、見た目だけ大人にしたって違和感が出ちまうんだよ」

言われて、円香は目を丸くする。夏休みに菅谷が自分と透の水着を褒めてくれたのと同じ理屈だったからだ。

「お前さん、良い子だな。だから、店員の身でこんなこと言くとバチが当たるかもしれないねえが、お前さんの男にうちの商品は合わねえよ」

「……そうかもしれませんね」

……良い店員さん、と言うより、プロ意識の高い店員さんというべきか。売上より、お客様のことを考えてくれている。

「すみません。ありがとうございます」

「いいつてことよ」

こういう人もいるんだ……と、少しだけホツとしつつお店を出てから、また新しい商品を探しに……行った所で、円香は足を止めた。

そして、ツカツカと歩いてさっきのお店に戻る。

「いらつしや……あり？ さっきの嬢ちや……んつ？」

「まだ私の男つてわけではありませんから」

「お、おう……？」

それに、どの道、自分だけの男というわけではない、ということをもっと赤な顔で強く訂正してから、円香は再び店を出て行った。

さて、改めて仕切り直し……と、思っていると、電話がかかってきた。菅谷からだ。

プレゼントを選んでいるハズなのに、なんか用だろう？ と思つて応答した。

「もしもし？」

『……マドちゃん？』

「な、何……どしたの？」

『……俺に「虫と私、どっちが大事なの」って言つて』

「……………は？」

なんだろう、その頭の悪い質問。……いや、本当に何だろう。まあ、よく分からないけど、無駄に時間を取られるよりはマシかもしれない。

「虫と私、どっちが大事なの？」

『マドちゃん！』

「っ……」

返事は分かっていたはずなのに、何故か嬉しい。まさかこいつ、わざと照れさせるためにそんな問いをしてきたわけじゃないでしょうね、と頭の中で八つ当たりが浮かんだ。

「……何なの？」

『ありがとう。吹っ切れたよ』

「こつちが吹っ切れてないんだけど」

『よし、良いプレゼント探してくるね』

「あ、ちよっ……」

切れてしまった。本当に子供みたいな子だが……まあ、でもあそこで自分を選択してくれる辺り、やっぱ嬉しい。多分、自分の趣味で虫関係のプレゼントを渡すか、それとも別のを考えるかを考慮した結果、虫関係のものをやめようと決断するための物だったのだろう。正直、ありがたい。

誕生日にもらったヤモリのイヤリングは可愛くてお気に入りだけど、流星に二度続けてその手のアイテムはちよつと、と思ってしまう。

「……まったく、バカ……」

自分のためにそこまで悩んでくれることに嬉しく思いながら、また別の店を探し始

めると、ふとまた良さそうなお店が目に入った。

そこはガラス製品のお店。アクセサリーが並んでいて、ブローチやネックレスが多かった。

お店の前から、中をチラリと覗く。どれも、確かに菅谷には似合いそうだが、やはりあのお店のおっちゃんが言つてた通り、想像してもしっくりこない。少し、大人っぽ過ぎるのだろう。

「……はあ、なんか面倒臭くなってきた」

そもそもなんで自分がこんなに悩まないといけないのか。そう、何だつて良い、何だつて良いはずなのだ。だから、まあある程度、菅谷の喜ぶ顔が見られればそれで十分だ。

そんなわけで、決めた。直感的に、適当にピンとくる奴にしよう、と。まあ、多少の吟味はするが。

そう強く思った円香は、ツカツカとまたショッピングモール内を歩く。すると、ふと目に入ったのは、ピアスのお店だった。

「……」

あそこ、もしかして……と思ひ、中に入る。やはり、透に菅谷がピアスを買つたお店だ。同じものだけど色違いがある。

何だかちよつとだけ不思議な感覚だった。知り合いが知り合いに送った物が売ってるお店を見つけてしまうのは。

まあ、菅谷の両耳はもう埋まつてるし、あまり用はないかな……と、思っていると、ふと一つのピアスが目を引く。シンプルな白い丸のピアス……なのに、何故かやたらと目を引いた。

……これは、もしかして似合うのではないだろうか？ 透に。

「……良いかも」

何が良いって、片耳だけで販売されている事だ。透の耳は半分、埋まっているが、もう半分に付けられるのではないだろうか？

……いや、何なら、自分の分も買ってしまおうか。三人でお揃いの耳というのも良いかもしれない。

「すみません」

買った。片耳ずつを二つ。箱を鞆の中にしまい、一仕事終えた顔でお店から出た。

お店から出てしばらく歩いたあと、ふっと円香は俯き、自嘲気味に笑みを浮かべた。

……結局、幼馴染のバカよりも、お金持ちのバカの方が手間掛かるな、と……。

菅谷は同じショッピングモールに来ていた。場所はたまたま見かけた模型屋。その

レジに置いてある一番くじの棚だ。

「しまった……今日発売日か……!」

昆虫の。これには流石に度肝を抜かれてしまった。超引きたい。コンプしたい。しかし、今日は二人の誕プレを買いに来た日。時間とお金の無駄遣いは避けなければならぬ。

「つ……ぐつ、い、一回だけか……!? いや……絶対に外したらもつと引きたくなる……これでもし、マドちゃんとおるんへのクリプレが、このスズメバチのハンカチとかなったたら……」

嫌われる、間違いなく。もう嫌われる自信がある。特に円香から。

……ダメだ。このままだと、引かなかつたことを未練がましくだらだら引きずりそう。今度、引けば良い事なのだ。

とりあえず吹っ切る為、円香に電話をすることにした。

『もしもし?』

「……マドちゃん?」

『な、何……どしたの?』

「……俺に『虫と私、どっちが大事なの』って言って」

『……………はっ?』

意味わからないって反応だ。そりやそうだが、とりあえず形だけでも聞かれることが大事だった。

『虫と私、どっちが大事なの？』

「マドちゃん！」

『っ……』

「……」

言ってから少し恥ずかしくなった。自分は何をしているのかと。……いや、少しどころか普通にかなり恥ずかしい。

ちよつと電話してるのも恥ずかしく思えてきたので、勢いで乗り切ることにした。

『……何なの？』

「ありがとう。吹っ切れたよ」

『こつちが吹っ切れてないんだけど』

「よし、良いプレゼント探してくるね」

『あ、ちよつ……』

切つて、恥ずかしさを拭うように歩き始めた。

さて、改めてプレゼントを考える。円香と透に渡すものは同じものにするか、それとも別のものにするか。

顎に手を当てて、考え込みながら歩いていると、ふと目に入ったのは……本屋だった。
「……あれ、今日って……」

何となく嫌な予感がして、中に入る。早足でスイスイと進み、見かけた先にあったのは……「冬眠する動物図鑑（小○館）」だった。

「し、しまったああああ！」

客の視線が一斉に集まるのも無視して、菅谷は顔を両手で覆う。これも今日発売日だった。知識よりも、動物の寝顔がアップになった写真が掲載されているため、写真集として欲しかった。

どうする、買ってしまおうか？ いやしかし、だから買うにしても二人のプレゼントを買ってからだってば。

……でも読みたい。寝てる動物を見て、ほっこりしたい……。

いや、だから、これで二人のプレゼント良いのあったのにお金足りないとかなったらどうするの。泊まりなのに会わせる顔なくなっちゃうよ。

「クソっ……かくなる上は……！」

スマホを取り出し、透に電話を掛けた。1コール、2コール、3コール……あれ、出れないのかな？ なんて思ったのも束の間、応答があった。

『ふあい……へつきしー！』

「あ、とおるん。……寝てた？」

『寝てないけど……ふわああ』

「……」

寝てたんじゃねえか、と思いつつ、要件を終わらせることにした。

「あのさ『私の寝顔と動物の寝顔、どっちが大事なの』って言って」

『良いけど……え、何それ。どういう事？』

「それで吹っ切れるから」

『え、何が吹っ切れるの？』

なんか急に目が覚めたみたいだが、どうしたのだろうか？ まあよく分からないが、

誕プレを買うのが優先だ。

『……言わなきゃ、駄目？』

「駄目」

ハッキリ言うと、少し透にしては歯切れが悪い声音で答えた。

『……わ、私の寝顔と動物の寝顔、どっちが大事なの……？』

「とおるんの寝顔！」

『っ……あ、そう……』

「よし、吹っ切れたよ。ありがとう」

『う、うん……』

そのまま電話を切った。よし、吹っ切れた。菅谷はサクサクと歩いて本屋を出て行った。

浅倉透は、シヨップینگモールに来たものの、眠気が襲ってきた。お昼ご飯食べたばかりだからだろうか？ 普通に眠くなってきた。

プレゼント選びは……まだ移動時間含めて4時間と20分あるし、少し仮眠を取ってからで良いかもしれない。

と言っても、ぐっすり眠れる場所なんて……と、思いながら歩いていると、マッサージ機を見掛けた。一時間300円らしい。

「……」

先にお昼寝することにした。鞆から財布を出し、ちようどあった300円を入れて腰を掛ける。

コースは……よく分からないので全身。疲れてないけど。強度は……寝たいし優しい。

なんて決めながら、瞳を閉じた。

〈20分後〉

ふと、胸ポケットに入れていたスマホが震えた振動で目を覚ました。せつかく安眠してたのに、誰起こしたの……と、思いつつ、とりあえずスマホをポケットから抜いて画面を見ると「L I K A ☆」の文字。すぐに文句は消えて出る気になった。

「ふあい……へつきし」

『あ、とおるん。……寝てた?』

「寝てないけど……ふわああ」

『……』

バレバレの嘘をつきながら、透は目をかきながら返事を待つ。

しかし、今日は何だかやたらと冷える。特に下半身が。

『あのさ「私の寝顔と動物の寝顔、どっちが大事なの」って言って』

「良いけど……」

……ん? 寝顔? と、小首を傾げる。まさか見られてる? と、辺りを見回すが、菅

谷の姿は見えない。

「え、何それ。どういう事?」

『それで吹っ切れるから』

「え、何が吹っ切れるの?」

それは本当に意味が……え、まさか……今晚のお泊まりの時、何かするつもりだろう

か？ いやしかし何で動物……いや、まさかこの前のペットごつこの時、なんだかんだ楽しそうにしていたし……まさか、何かに目覚めさせた……？

え、でも初体験であんな特殊なプレイは……。

「……言わなきゃ、駄目？」

『駄目』

容赦がない返事……と、透は頬を赤く染める。

「……わ、私の寝顔と動物の寝顔、どっちが大事なの……？」

『とおるんの寝顔！』

「っ……あ、そう……」

こ、この野郎……マジで何買う気なの？ 犬耳か猫耳……は家にあるので、尻尾か首

輪か……両方か。

『よし、吹っ切れたよ。ありがとう』

「う、うん……」

考えている間に、電話は切られてしまった。まさか、まさかまさか……とうとうその気に？ それならせめて菅谷の鞆にして欲しいところだ。

羞恥心から顔が赤く染まり、項垂れるように肩を落とす。……いや、まあ望む所ではある。そうだ、今のうちに自分は自分でやれることをしよう。

……たとえば、その……何？ 避妊具を買うとか？ それを決めて、透は席を立った。もう眠気なんか無い。まだ時間が余っているが、さっさと店内を見て回る事にした。いつの間にか握り込んでいた鞆を持って、歩き始めた。

でも……その、何？ ゴムがどんなお店に売っているのか知らない。……円香なら知っているだろうか？ あの割と備えあれば憂いなしタイプの幼馴染なら、以前の風邪の時から備えている理由も十分ある。

「……」

そうだ、その手の行為をするなら、どうせ円香も一緒にやるし、報告するついでに、聞いてもらった方が良い。

そう思い、円香に電話を掛けた。流石、二人の保護者。1コールで出た。

『もしもし？』

「あ……樋口。あのさ、避妊具って……へくしっ」

『風邪？』

「や、なんでも無い。どこに売ってるか分かる？」

『待って。あんた何渡そうとしてんの？』

速攻で止めが入った。当たり前だ。

「え……だ、だって……リカがそういうのしたいって……」

『は……………？ う、嘘でしょ……………？』

「嘘じゃ、ない……………」

少しずつ言ってる内容が恥ずかしくなり、透の口調は少しずつ弱々しくなっていく。

『……………まず、何があったのか、一から説明して』

「え？ いや……………あー、うん」

まあ、あの菅谷の事だ。また別の意図があつての発言かもしれない。

事の顛末を説明すると、円香がすごく呆れたようにため息を漏らした。

『……………あんた、バカでしょ』

「え、なんで」

『ちようどさつき、本屋にいたんだけど……………今日発売の本でこんなのあつた。「冬眠する

動物図鑑（小○館）」』

「……………」

『つまり、これ……………誕プレ買いに来たのにこれ欲しくなつたから、煩惱打ち払つただけ

じゃない？ 煩惱まみれなの、浅倉だったわけだけど』

クリティカルヒットした。羞恥心から、顔が真っ赤に染まり、それと共に紛らわしい

言い方してきたバカに殺意が芽生える。

「……………ごめん。落ち着いた」

『ん。じゃ、いつまでも寝てないでちゃんとプレゼント買うように』

「え、なんで知ってるの？」

『さつき前、通り掛かった』

「……」

『ヨダレ垂れてた』

「嘘」

『じゃ、後で』

「ちよつ、待つ……へくちっ！」

電話を切られてしまった。痛烈に恥ずかしい思いをしてしまったことに、少しだけ後悔しつつ、とりあえずプレゼント探しを始めた。

樋口円香は、菅谷のプレゼントを探すため、のんびりと歩いていた。しかし……難しいものだ。中々、こう……ピンと来るものがない。透の方がすんなりと決まったのは、透の事の方が菅谷より詳しく知っているからかもしれない。

どうやってプレゼントを探すものか……なんて考えていると、前から走って来る大学生くらいの男と肩がぶつかった。

「いった……！」

「あ、すんません」

茶髪のチャラチャラした男。店内を走り回るんじゃない、と思ったものの走ってきつさどどこかへ行ってしまふ。

割と、ガキっぽい男は多いのかもしれないが、菅谷はああいうガキっぽさじゃなくて良かった、とホッと胸を撫で下ろしながら歩いていると、見覚えのある奴がマツサージチエアで寝ているのが目に入った。

「……………くかー」

……同じところでプレゼント買いに来てたんだ、と思いつつ、とりあえず気持ちよさそうに寝ているので起こすことはしなかった。でも寝顔だけ写真を撮っておいた。涎を垂らしているのは割とレアだ。

その写真を雛菜と小糸と菅谷に拡散しながら、とりあえず横に置いてある鞆は盗まれないように、透の手の中に握り込ませておいた。

その直後、すぐに連絡が来た。

ひななく♡ 『めつちや寝てるゝ涎垂れてるゝ』

福丸小糸 『それどこで寝てるの……………?』

L I K A ☆ 『めつちや可愛い。涎垂れてる。やっぱ俺よりとおるんのが弟っぽい』

……三者三様のお答えだが、とりあえず適当に返事だけして……………と、思った時だ。

ふと、菅谷に合いそうなものが浮かんだ。それはつまり……ちよつとバカっぽいものだ。見ての通り、学力が生活に活かされない（理科系科目以外）バカ丸出しの菅谷なので、そういうのが似合うかもしれない。

そう思つて、本屋に来てみた。円香自身はその手のアクセサリーやファッションに詳しくないので、一度調べてみようと思つたからだ。

さて早速、雑誌コーナーに向かおうとすると、ふと目に入ったのは新刊の図鑑。

「……」

冬眠する動物図鑑（小○館）、本日発売らしい。菅谷が好きそうなものだが……これは絶対に渡さない、と強く決めた。

そんなのは無視して、雑誌を見て回っていると……ふと目に入ったのは、模型の雑誌だった。

こういうのもありかもしれない。この前、三人でガンダム見たし、こう……ガンダム関係のものでも良いのかもしれない。

そう決めて、模型屋に行つてみることにした。せつかくなので色々調べながらいこうと思ひ、スマホを取り出した時だ。透から電話だ。どうやら、目を覚ましたらしい。

「もつもつ」

『あ……樋口。あのさ、避妊具つて……へくしつ』

「風邪？」

『や、なんでもない。どこに売ってるか分かる？』

「待って。あんた何渡そうとしてんの？」

思わずこっちまで頬を赤く染めてしまう。

『え……だ、だって……リカがそういうのしたいって……』

「は……？ う、嘘でしょ……？」

『嘘じゃ、ない……』

……いや、落ち着け。どうせ変な勘違いだ。バカとバカのやり取りだ、まず間違いない。くだらない話に間違いない。

そう思いつつ、内心では「何で自分にはその誘いがなかったのか」なんて考えながら、透に話を促し、耳を傾けた。

聞くとところによると、透に「私の寝顔と動物の寝顔、どっちが大事なの」って言わせたらしい。

……ほんとにくだらない勘違いだった。それどころか、どこかで聞いた覚えすらある。

「……あんた、バカでしょ」

『え、なんで』

紛うことなき本音だった。というか、もうちよつとドキツとさせやがって、と苛立ちも強くなる。

「ちよつどさつき、本屋にいたんだけど……今日発売の本でこんなのがあった。『冬眠する動物図鑑（小○館）』」

『……』

「つまり、これ……誕プレ買いに来たのにこれ欲しくなったから、煩惱打ち払っただけじゃない？ 煩惱まみれなの、浅倉だったわけだけど」

意地の悪い言い方になってしまったが、まあ仕方ない。

『……ごめん。落ち着いた』

「ん。じゃ、いつまでも寝てないでちゃんとプレゼント買うように」

『え、なんで知ってるの？』

「さつき前、通り掛かった」

『……』

「ヨダレ垂れてたよ」

『嘘』

「じゃ、後で」

『ちよつ、待つ……へくちつ』

少し意地悪を言いながら電話を切った。全くバカなことどころかをドギマギさせてくれる。

……避妊具、か……なんて頭に少しよぎる。が、とりあえず購入は控えた。少なくとも、今のあの子じや裸を見た時点で鼻血噴出失神病院ルートなので、必要はなさそうだ。そう強く決めて、模型屋へ歩いた。……というか、なんかやたらとくしゃみしている気がする。やはり風邪だろうか？

のんびりと歩いていると、菅谷が正面から歩いて来た。

「あ、リカ」

「マドちゃん。ちょうど良かった」

「? 何?」

「ちよつとハグさせてくれない?」

「は……!?」

直後、菅谷は両手を広げて正面から抱き締めた。

「つ!?」

「うーん……身長、157センチくらい?」

「な、何を……!」

「いや……もう少し小さいかな。まあどっちでも変わらないか」

なんか勝手に納得した菅谷は、すつと円香から離れた。

「ありがと。じゃね」

「……」

なんだったのか……と、円香は思いながら自分の身体を抱きつつ、顔を赤らめる。……まあ、プレゼント関係と思えばムカつきはしないが。

さて、また歩き始め、模型屋の前に到着した。この手の世界観には割とついていけないのだが、それでも菅谷のためと割り切り、中を見て回る。

売っているのはプラモデルやフィギュア。特に、フィギュアは中古のものも売っているようで、透の誕生日にももらった弥生のフィギュアも売っていた。円香も律儀にあのフィギュア、いまだに飾ってある。

そんな中、目に入ったのは、昆虫の一番くじだった。

「……そういうことね」

あのバカが、自分にさつき電話して来た理由がよく分かってしまった。要するに、透と同じ理由だろう。

……まあ、あの程度でプレゼントを優先してくれたのなら良しとしよう、と思う事にして、自分もプレゼントを探す。

そんな中、ふと目に入ったのは、ザクのマフラーだった。

「っ……っ……」

つい、来てしまった。円香の「菅谷に似合うセンサー」に。確か彼はザクが好きだったハズ。そして、そのザクのモノアイをデザインした黒を緑で挟んだ横長の模様。黒い部分の真ん中にはピンク色のモノアイ……このバカっぽさと、色合い的な落ち着きの良さは間違いなく菅谷に似合う。

……でも、これで良いのか、女子高生樋口円香。仮にも好きな人にあげるプレゼントがガンダムって……。

「……」

いや、大事なのは「菅谷が喜ぶか」だ。目を瞑り、覚悟を決めるようにそれを手に取った。

さて、購入を終えた。物珍しそうな目で店員から見られたが「プレゼント用で」の一言で今度は同情的な目になられた。違う、別に嫌々買わされてるわけではない。

とりあえず、一仕事終えた気分でお店を出て、小さく伸びをした。

これからどうするか……一足先に透の家に帰っても良いが、しばらく暇潰しに施設内を見て回ることにした。

そんな時だった。幼馴染から電話がかかって来た。

「もっもっっっ」

『あー……樋口?』

「何?」

『どうしよう。リカ、死んじゃったかも』

「……は?」

何があつたのかわからないが、とにかく走ることにした。どうして他二人はいつもいつも目を離すと事件に発展するのだろうか?

なんかこれイチャイチャとか二股とか、そういうんじゃないよね。

菅谷は呑気に店内を見て回っていた。円香へのハグを終えた。身体のサイズが知りたかったからだ。主に身長を。

二人への誕生日プレゼントは以前から決まっていた。パジャマパーティーならではのそれは、喜ばれるよりその日の夜を楽しむためのものだ。

そのために必要なのが身長だった。

鼻歌を歌いながら透の事を探していると、すぐに見つけた。何となくいそうだなーっ
て思った所に行けば一発だ。

「とおるん」

「あ、リカ。どしたん？」

「ハグさせて」

「え？ 良いけど」

直後、一気に襲いかかった。そして透も両手を広げ、お互いに抱き合った。

「んー、あったかー」

「とおるんは……身長、159くらい?」

「そうだけど、何で?」

「ん、知りたかったから」

「ふーん……ひぶしっ!」

「……とおるん」

「あ、ごめん」

顔面に思いっきり鼻水をかまされた。まあ、透と円香の鼻水くらいは構わないが。

「ほんと、風邪引いてるんじゃないの? 無理はやめてよ?」

「リカには言われたくない」

「良いから。……あ、ハンカチ借りるよ」

「ん」

透の制服のポケットからはみ出していたハンカチを、菅谷はさらりと抜いた。随分と変わった形のハンカチだ。三角形? と、小首を傾げながら、とりあえず自分の顔についた鼻水を拭く。

その後で、透の鼻も拭いた。

「むぎゅっ……えー、鼻水ついたハンカチで拭くの?」

「誰の鼻水?」

「はいはい……」

「にしても、とおるんもハンカチとか持ち歩くんだね。少し意外」

「は？ 私だつて女子だから。それくらい、無意識に持ち歩いてるから」

「つまり、ポケットに入れた記憶はないと」

「じゃあ誰が入れたの？」と思いつつとベトベタだから洗つて来たら？」

「はい。……ちよつとベトベタだから洗つて来たら？」

「えー……なんか今日冷えるから濡らしたくない」

「暖房入つてるけど」

「なーんか肌寒くて……ん？」

「どしたの？」

「なんかこれ、ハンカチっぽくないっていうか……」

「言いながら、透は手元の変つた形のハンカチを開いた。それはハンカチではなく、三角形のパンツだった。」

「え」

「あ」

「菅谷にもしつかりと見えてしまった。」

その後、透は自分のスカートの中をチラリと覗く。

「あ」

「え」

嫌な予感がする。そんな菅谷を無視して、透は怒りと羞恥を通り越し、何処か悟りを開いた表情で聞いた。

「リカ。これで顔拭いた？」

「うん」

×××
ビンタが菅谷の意識を飛ばしたのは、そのわずか0.5秒後の話だった。

×××
現れた円香に一通りの説明が終わった透は、今は気絶した菅谷をマッサージチェアに寝かせてある。ここなら、人が一人寝てても不自然ではない。

「……バカなの？」

「ごめん」

「私じゃなくてリカに謝って。……というか、スカートの下、今どうしてるの？」

「スースーする」

「……まず履きなさいよ……」

言いながら、円香は鞆から持って帰る予定だった体操着の短パンを差し出した。

「はい。応急処置」

「直パンだけど良いの？」

「あんたん家で洗濯して」

「へーい」

そう返事はするものの、脇腹を突いてもピクリとも動かなくなつた菅谷を見た時は本気で焦つた。

さて、何にしてもパンツは買いに行かないといけない。

「樋口はもうプレゼント買ったの？」

「買った」

「じゃあ……悪いんだけど、リカの事お願い」

「はいはい……」

そんなわけで、透は一足先に買い物に出掛けた。なんだかんだ、一時間経過してしまつたし、そろそろ真剣に探さないと何も見つからない。

……まあ、その前にパンツなわけだが。とりあえず適当なランジェリーショップに向かう。

しかし……今、落ち着いて一人になると、改めて思い出してしまふ。菅谷に……自分のパンツを、顔に当てられた事を。

まだ脱ぎたてホヤホヤでなくて良かったが、もしそうだとしたら……いや、そうでな

くても恥ずかしい。水色のリボンがついたパンツを菅谷の顔に……。
「……………」

しかも、鼻水をそれで拭かせるなんて……なんかもう、女の子として正気の沙汰ではない。なんか、今になってとんでもないプレイをしたことに気がついてしまった。

だが、やってしまった事は仕方ないのだ。今は忘れて、さっさといまだにノーパンである状態を打破しないと……。

「……………」

……ていうか、あれ何で制服のポケットに入ってたんだろう。いつ入れたっけ？

あ、今朝か。確か、部屋の隅っこにパンツが落ちてて、洗濯に出そうと思ったまま持って来ちゃった奴……。

つまり、履いた後の奴だアレ。シミとかついてたら最悪だ……！

……だから、今更になってまた思い出しちゃダメだつて。なんて情緒が少しずつ乱れていく。

とりあえず、下着が売っている場所に来たので、安い下着を購入する。

それを持って、レジへ並んだ。

「お願いします」

「いらっしやいませ。お預かりいたします」

「すぐ使うのでタグとか取ってもらえますか？」

「かしこま……え、すぐ使うって……アツハイ。かしこまりました」

スルースキルを発動する店員さんには助けられた。

「……お客様。あちらに見えますお手洗いなら、ベビーシート付きの広い場所がありますので、お着替え出来ると思います」

「あ、どうも」

しかも、わざわざ気を利かせてくれた。恥ずかしいけどありがたい。

さて、そろそろプレゼントを買いに行かないといけない。何せ、まだ何も決まってい
ないのだから。

「マドちゃん、すっごい……マツサージチエア……」

「おっさんみたいな感想やめて」

目を覚ました菅谷は、そのままマツサージチエアに夢中だったのを、円香はぼんやり眺める。

「……そろそろ代わってくれない？ お金出したの私なんだけど」

「後で払うから……もう少しだけ……」

「いや、そのお金は浅倉から貰うからいい」

気絶させられた上に、勝手に使わされたマツサージエアのお金を取るのは、少し申し訳ない。……まあ、菅谷はそういうの気にするタマではないのだろうか。

その菅谷が、少し頬を赤らめてため息をついた。

「でも……なんか我ながらすごいことしちゃったよね……」

「まあ、普通は手に取った時点で分かると思うけどね」

「いや……でも、制服のポケットにパンツが入ってると思う？」

「浅倉だから」

「ああ……」

どうせ、床に落ちてた履いた後のパンツを一階に降りた時に洗濯に出そうと思って忘れたのだろう、とすぐに理解出来る。

「でもまあ、今回は流石に浅倉も懲りたでしょ」

「懲りたって？」

「もう少ししっかりしようと思うんじゃない？ 寝惚けててもノーパンで外出はない」

「うん……くしゃみが多いわけだね。パンツ履いてないだけでそんなに寒いものなのかな」

「さあ。私はノーパンで外出したことないし」

「あーでも……スカートだもんね。空気が直で入ってきそうではある」

「……」

この男、割とえっちな話になっているのに気付いているのか……いや、まあ子供にとっては、女性の股関節の間にあるものは「秘部」ではなく「男にあるものがない」程度の印象なのかもしれないが。

……もう少し性欲を高めて欲しい。そういう意味では、使わずとも部屋に避妊具を置いておくだけで効果はあるのかもしれない。

「……ちなみに、リカ。パンツを見ちゃったこと自体について、思うところはないの？」
「え……そりゃ、後で謝らないと、とは思うけど……」

「それだけ？」

「え、だけって？」

「男の子は、女の子のパンツを見たら喜ぶモノだと思うけど」

「？　なんで？」

「……なんでもない」

半端なところで会話を切ってしまったが、なんか通じそうになかったので仕方ない。

……でも、正直そういう感じだと少し心配……。特に、三人で付き合ってからが。自分も浅倉も普通の人よりは控えめだろうが、菅谷よりは性欲あるだろうし、高校のうちにはあれでも大学生とかになってからとかが少し気になってしまったり……。

とりあえず、ゴム作戦は少しやってみても良いかもしれない。親にバレないよう部屋に置いておくだけならなんの問題もないものだし。

「リカ、もう一人で立てるでしょ？　ちよつと買い物行ってくる」

「あれ、もう買うもの買ったんじゃないの？」

「ん、せつかくだし色々見て回りたいから」

それも嘘ではない。というか、透に言われて思ったが、どんな店に売ってるのかも知りたいところだ。

「うん。……あ、マドちゃん」

「何？」

「マッサージチェア、代わってあげられなかったから、後で俺がマッサージするね」

「……レートが全然、違うでしょ」

「嫌？」

「痛くしたら怒るから」

それだけ返して、円香は少し家に帰るのを楽しみにしながら、その場を後にした。本
当に釣り合っていない。機械のマッサージと菅谷のマッサージ。どっちが良いかなん
て決まり切った話だ。

××

それから、約一時間が経過した。買い物を終えた菅谷は、そろそろ透の家……に行く前に自分の部屋から荷物を取ってこないといけないため、早めに出て行く……前に菅谷は一度、ショッピングモール内の吹き抜けにあるツリーを見に来た。

せっかくなのだから、見ていかないと損だと思い、足を運んだ。そして、それとタイミング良く現れるもう二人のベっぴんさん。

「ん？」

「あつ」

ほぼ同時に、ショッピングモールから透と円香も出て来た所だった。

「二人も見に来たんだ」

「うん。帰る前に見ておこうと思って」

「私も」

「……」

「……」

「……」

あまりにタイミングが良過ぎた。しかも、目的まで完全に一致と来た。

「やっぱ、タイミング完璧じゃん」

「ね」

「……時間ずらそうと思ってたのに」

「もー。なんでそういうこと言うの、マドちゃん」

「ツンデレ大魔神」

「二人とも叩きのめすよ」

頬を赤らめながら目を逸らした円香が時間をずらそうとした理由は、一時間本当に買ってしまうか悩みに悩んだゴムが鞆の中に入っているからだ。勿論、買ってから後悔した。今は済ました顔をしているが、心臓バクオングである。

「俺、一旦家寄って帰るよ」

「どうぞ。私は先に……」

「じゃ、私達も寄っていくー」

「手間でしょ？ 良いの？」

「良くない。私は帰」

「いや、だって今日は割と三人バラバラな行動だったし、少しでも一緒にいたいなって」

「あ、それ俺も正直、思ってた」

「私はいい。先帰る」

「えー、なんで？」

「ねー、なんで？」

「あんたらが鬱陶しいから」

「ホントは寂しいくせに」

「分かる分かる。マドちゃん、基本的に素直じゃないもんね」

「素直になって良いわけ？」

「じ、冗談だから……」

「真顔で指を鳴らすのはやめて……」

三人揃った時点で、三人ともセキが切れたように喋り倒している。今日、三人バラバラになって行動したのも、なんだかんだ楽しかった。商品を選ぶ時は、三人とも残り二人のことばかり考えていたから。

だが、やはり……無意識下では、何か足りない感じがしていたのだろう。ちよいちよ顔を合わせたりはしていたが、その時は三人ともやたらと遠慮がなかった。菅谷のハグに平然と応じたぐらいだから、その時からもう色々と滲み出ていた。

そんな中、真ん中にいた透が、両サイドの菅谷と円香の手を握った。キュツと握られ、菅谷だけでなく円香も胸をドキツと高鳴らせる。

「でも、三人で見られてよかったね」

「……うん。綺麗だし」

「……まあ」

そのツリーの周りにいるのは、カップルばかり。当然ながら、男女1：1だ。間違つても、2：1ではない。

なのに、三人とも何一つ気にすることはなかった。2：1で、周りから「え、堂々と二股?」「それとも修羅場?」なんて視線が向けられる事もあったが、そもそも視界に入っていない。

そんな中、菅谷が「あつ」と声を漏らす。

「ね、写真撮らない?」

「良いね」

「……ん」

返事をする、さつそく近くを通った店員さんに、菅谷が声を掛けた。

「すみません、撮ってもらつて良いですか?」

「良いですよ」

スマホを手渡すと、三人は横に並ぶ。で、透が何処かで聞いたような質問をする。

「ポーズ、どうする?」

「またそれやる?」

「前は統一感なかったから……今日はそれつけようよ」

「例えば?」

「リカ、言い出さっぺ」

「じゃあ……組体操」

「どうやって」

「あの、私仕事なので早めに……」

怒られてしまったので、もはやそれで行くしかない。とりあえず、一番体重が軽い円香が上。

菅谷と透がしゃがむと、円香は靴を脱いで、まず菅谷の肩に足を置いた。

「落とさないでよ……!」

「俺は平気。とおるん、気を付けて」

「私も余裕だから」

「落としたら耳にタピオカ詰めるから」

「この前、鼻からタピオカ出すタピオカ屋さんの夢見た」

「何それ詳しく」

「言わなくて良い」

「ていうか、本当に組体操やるんですか?」

乗せられた足を菅谷が支えると、今度は透の肩に足を乗せる。その足を、透が支えた。これで、円香は二人の肩の上でしゃがんでいる状態だ。

「立つよ、マドちゃん」

「樋口、平気？」

「多分……一応、掛け声お願い」

「じゃあ……とおるん。掛け声」

「サバンナ！」

「溜めない奴？！」

それでも、倒れることなく立ったのだから見事なものだ。菅谷と透が立った最後に、円香も肩の上で立ち、とりあえずポーズと言うように、両手を広げた。

「……この人達おもしろ過ぎない？」

「店員さん、お願いします」

「はいはい。じゃあ、撮りますよー。はい、チーズ」

カシャッとシャッター音が鳴り響いた時だ。グラッと円香の身体が後ろに揺れる。

「っ……………！」

思わず円香の脳天がヒヤリとした。これは落ちる……と、キュッと目を閉じた時だ。ぽふっ、と床に直撃したにしては優しい感触が、腰と背中、首を支えてくれる。

恐る恐る目を開けると、顔が良いイケメン男女が、両サイドからお姫様抱っこしてくれていた。

「あぶねー」

「無事？」

「ーっ！」

顔が真っ赤に染まり、恥ずかしさで拳が出る。二人の顔面にボグツと直撃し、二人とも後ろにひっくり返る。当然、円香もそのまま自由落下するわけで。

三人揃って背中を床に打ち、しばらくその場で悶えるしかなかった。周りからの視線も「二股とかじゃなかったね」「三姉弟のコントだね」「インスタ映えだね」と言った視線が変わる中、店員さんが三人にスマホを差し出した。

「あの……撮れましたよ」

「ありがとうございます……」

受け取ろうと、とりあえず三人とも起き上がり、スマホを見る。そこに映されていたのは、お姫様抱っこされている円香の写真だった。

「店員さんナイス！」

「ですよね!?」

「リカ、後で送って！」

「消せー！」

なんてドタバタやってるのを、周りにいたカップルは生暖かい視線で見守った。

×××
クリスマスイブ、それはクリスマス前夜。子供にとっては、イブの方が盛り上がるものだったりする。

要するに、多くの子供にとってクリスマスとは「プレゼントがもらえる日」なのであり、その他はおまけなのだ。

そして、そのイメージのまま大人になるから「特別な日」と勘違いする。

だが、まあ勘違いであっても、イベントなんて楽しければそれで良いのだ。恋人が相手でも友達が相手でも姉妹や兄弟が相手でも、特別に感じられるのなら、それに越したことはない。

まあ、三人は明日、盛り上がる予定なので、今日は程々にするつもりなのだが。

「ごちそうさまでした」

菅谷は手を合わせて挨拶する。続いて、透と円香も手を合わせた。

その様子をニコニコしながら眺めていた透の母親が、三人に言った。

「お粗末様」

「美味かったです。遺伝子って必ずしも遺伝するとは限らないんですね」

「突然変異種がなんか言ってる」

「どっちもどっちだから黙ってて」

思わず円香はため息をついてしまう。

「にしても、すみません。お宅にお邪魔して泊まらせていただくなんて」

「気にしなくて良いよ。うちの子、ここ最近はずっと円香とあなたの話ばかりだし」

「そうなんですか？」

「ええ」

「まあ、学校じゃリカとか樋口以外と話さないしね」

「？ 部屋でよく妄想してるじゃん。なんだっけ……もし、リカが天然の皮を被ったド

Sだったらみたいな……」

「ちよつと待つてお母さん聞こえてるのそれ？」

「お風呂沸いたよ。入って来たら？」

「お母さん。泣けば許してくれるの？」

なんかとんでもない暴露をされた。恐る恐る菅谷の顔を見ると、キョトンとした表情で瞬きしている。

「どえす？ ドレッドノート級の菅谷？」

「なんでド級がドレッドノートの略だつて分かつて、サディストが分からないの」

「面白い子じゃない」

「夏休みの自由研究で観察日記つけられそうだよね」

なんて話している間に円香が黙っているのは、リカが超優男だった妄想を家でしているのがバレないようにするためであった。

やがて、母親が立ち上がった。

「じゃあ、私はそろそろ失礼するから。朝まで起きてても良いけど、避妊はしっかりしてね」

「な、何言ってるんですか!」

「あら、そういう意味はわかるの。意外と難しい子」

そう言いながら、透の母親はリビングから出て行った。残った三人はどうするか……と、顔を見合わせると、まず円香が口を開いた。

「リカ、先にお風呂入ってきたら?」

「え、俺先で良いの?」

「浅倉、良い?」

「良いんじゃない?」

「じゃ、お先」

「私の部屋にいるから」

そう言つて、菅谷もリビングから出て行く。その後が続いて、円香と透も寝室に向かった。

明日も遊ぶため夜更かしの予定はないが、お茶だけ持って行った。

「ふう……お母さん、余計なことばかり言うなあ」

「浅倉ってマゾなの？」

「は？ 違うし。リカってどっちかって言うとMっぽいから、ギャップを想定してみただけ」

「ふうん……は？ リカはむしろ天然ドSだから」

「いや全然違うでしょ。樋口普段のリカの何を見てんの？」

「こっちのセリフだから」

「……」

「……」

お互い、睨み合いが始まるが、透にはそんな事よりも先に聞きたい事があった。

「まあその話は置いて……それより、樋口。どしたん？」

「何が？」

話を露骨に逸らされ、円香は小首を傾げる。

「いや、リカにお風呂入らせてたから」

「ん……気付いてたんだ」

「うん」

「……」

歯切れが悪い。言いにくいことなのだろうか？

「前置きとして言つとく。……別に、これを使いたいとかじゃないから。あくまでも、置いとくだけだから」

「？ うん。……どれ？」

「これ」

言いながら、円香が鞆から出したのは、ゴムの箱だった。

「え……買ったの？ 人にあれだけ言つといて？」

「うるさい」

「むつつり」

「あんたが言うな」

妄想してゐる時点で同じ穴の貉である。

「……買ったのには理由があんの」

「え、どんな？」

「今日、浅倉ノーパンだつて分かつた時あつたでしょ？」

「え、何急に」

「その時に、リカに聞いたの。浅倉のパンツを見ちゃったんだし、何か思わないの？ つ

て」

「何かって……ムラムラとか?」

「……まあ、端的に言えば」

もう少しオブラートに包め、とはこの際言わなかった。思ったけど。

「で?」

「でも、まず『後で謝らないと』だって。ラッキーとか、そう言う感覚はまるでないみたい」

「あー……困るね」

「でしょ?」

えっちな事がしたい、とかじゃない。ただ、少しくらいすげべになって欲しい。前まではハグとか腕組みとかで頬を赤らめていたはずなのに、今ではもう慣れてしまったよ
うで、平然とそれを返すようになってしまった。

「だから、これをとりあえず部屋に置いておきたい。……で、意識させてやりたいと思う
んだけど」

「良いけど、それで意識するの?」

「……分かんないけど」

「もう腕を組んで押し付けるとかじゃなくて、触らせるしかないんじゃない? 手のひ

らとかで」

「それ出来んの？」

「……無理」

「だから、こういうジャブしかないでしょ」

「……まあ、そうか」

確かにそれしかない。そもそも、菅谷自身があんまり節操がない形でアピールされるのは好きじゃなさそうな感じがある。

「でも、分かった。じゃあ、部屋の何処かにこれ置いておけば良いのね？」

「ん、よろしく」

「適当に……机の上で良いや」

透は箱を勉強机の上に置いた。

「……ま、それくらい適当な方がナチュラルかもね」

「でしょ？ ……あーでも、枕元の窓際のが良いかな」

「それはちよつと露骨過ぎ。私はその辺に投げといても良いと思うけど」

「いや、部屋片付けたのに一つだけ落ちてるのも変でしょ」

「そっか。……じゃあ、やっぱ机の上？」

「ん。未開封ね」

「そうする」

などと真剣に考えつつ、とりあえず意見がまとまる。

すると、透が改まった様子で声を掛けた。

「所で樋口」

「何？」

「やっぱり、リカはマゾだから」

「は？ サデリストでしょ」

「こつちが抱きついたりした時、照れてるのになんだかんだ言つて満更でもなさそうにしてたじゃん。あれホントはもつと抱きついて欲しいってことでしょ」

「慣れてきたら何食わぬ顔で……いや、慣れてくる前から割とカウンターパンチを天然で放つてくるあたり、生まれつきのサドでしょ。それ照れてるのは受けに回ると弱いだけだから」

「いやいや、そうじゃなくても私とか樋口をいじった時『ビンタするよ』って言われるまでする時あるじゃん。あれ逆説的にビンタされたいって事でしょ」

「全然違うでしょ。自分の身に危険が降りかからないようギリギリまで人をいじつて楽しんでるだけだから」

少しずつ二人とも早口になっていった。

× × ×
「……で、何で喧嘩してたの？」

菅谷がお風呂から出て、なんか喧嘩みたいになっていた雰囲気になり、声をかけた。が、二人とも目をふいつと逸らして答える。

「別に」

「いや、別にじゃなくて」

「解釈の不一致だから」

「……」

解決しようと思ったのだが、そう冷たくあしらわれ、透がお風呂に行ってしまった。

その背中を眺めつつ、菅谷は小首を傾げる。

「で、どうしたの？」

「ほんとになんでもない。リカにも分かるように説明すると、虫が気持ち悪いか気持ち悪くないかの議論」

「人によるでしょそんなの」

「つまりそういうこと」

それなら、まあ自分が口を挟めることはないのかもしれない。

「にしても、お泊まりかあ。なんか友達の家で泊まりなんて初めてだから、なんかワクワク

クが止まらないよ」

「そんな特別な事ないから。リカの部屋で泊まるのと一緒」

「そんなもんかなあ」

「私は2回ともお客さん側だから」

「あ、そっか」

そんな話をしていると、菅谷が急に立ち上がった。

「よし、じゃあマドちゃん」

「何？」

「約束。マツサージするから、ベッドでうつ伏せ」

「は？ ……ああ」

そういうえば、そんな話をしていた。円香としては完全に忘れていた話なのだが。

「忘れてた。別に凝ってないし」

「え、いらんない？」

「そんなこと一言も言っていないでしょ」

答えながら、円香はベッドの上でうつ伏せになる。上着を脱いで、目を閉じて待機した。これはちよつと役得かもしれない。気持ち良さとかは別に良くて、菅谷からのマツサージ、という点が少しソワソワしてしまう。

すると、菅谷が自分の太ももの上に体重をかけないよう腰を下ろし、両手を背中の上に置いた。

……ちよつと、無抵抗で身体を触られるのは気恥ずかしいかもしれない。

まずは、肩甲骨のあたりを真上から手のひらで押してくれる。

「たまに父ちゃんとか母ちゃんにやってあげてた時、評判良かったんだよ」

「へー。まあ両親は効いてなくても褒めてくれるから」

そうは言ったが、悪くはなかった。まあ元々、凝っていないというのもあるが、ちよつとだけ痛いかもしれない。

「もうちよつとだけ優しく」

「あ、ごめん」

「謝らなくて良い。……気持ち良いから」

「良かった」

、少しずつ、肩甲骨から下に降りて行く。この素人感ある手つきが、正直知り合いからのマッサージの醍醐味だよね……なんて目を閉じてリラックスする中、ちよつとだけ違和感。主に、押されている部分の少し外側あたりが。

「でも、母ちゃんからは二度とやらなくて良いって言われたんだよなあ」

「え」

嫌な予感……と、思ったのも束の間、グリグリと掌で押されるたび、脇腹にわずかに何かに触れ、くすぐったさが響いて来る。

これ……まさか、と円香はすぐ理解した。両手の指先を左右に開いて掌で押してくれているのだろう。その為、指先に力が入っておらず、半端に閉ざされている。その先端の爪が、脇腹にちよつと触れては引つ込まれる。

そしてこういうのは、理解してしまった直後にその部位が敏感になってしまうものだ。

「っ……ちよつ、リカっ……待っ」

「? 何? マドちゃん」

「ひゃんっ……いい、イカっ……くしゅぐっ……」

「もつと強く?」

「ひ、ひがっ……」

「よっ……と」

「っ!」

この野郎、痛くないギリギリの強さをもう覚えてくれやがった。お陰で脇腹に当たる指先もちよつとだけ強くなる。

それと同時に、手のひらが少しずつ下に降りていく。そこは腰、もつと下に行ったら、

お尻を触られてしまう。

「っ……い、イカ……！　そこは……！」

「どしたの。……あつ、気持ち良いんでしょ？」

「ひゃいつ……や、ひがふへ……！」

「もう少し待ってて」

「っ……！」

もうお尻を触られるしかないのか……と、覚悟を決めて目を瞑った時だ。お尻の縁、ギリギリで引き返し、再び肩甲骨に手のひらは戻って行った。

「っ、な、なんで……！」

「え、何が？」

「く……っ！」

この野郎、間違いない。やつぱり天然サドだ。後で絶対、ぶっ飛ばす。

さて、その触られるかと思ったら触られないお尻と、指先が強弱をつけて僅かに食い込む脇腹を攻められ続けること、約10分。ようやくマッサージが終わった。

「ふう……疲れた。どうだった？　マドちゃん」

「っ、っ……！」

涙目で真っ赤になった顔を見られないように、円香は顔を両手で隠して肩で息をす

る。

「……………てい」

「え？」

代わりに声を絞り出しながら、何とか顔を横にして目だけを菅谷の方に向けた。

「……………さいつてい……………！」

「え、なんで？」

「お風呂！」

「あ、ちよっ……………」

円香はツカツカとベッドから飛び降り、お風呂場に向かった。まだ透が入っているのに。

×と×にかく、確信した。やはりあの野郎、天然サドである事を。

×「リカー、樋口と何かあった？」

お風呂から戻つてくると同時に、透が声を掛ける。

「マッサージしてあげただけ……………なんか、あんまり気持ち良くなかったみたい」

「あ……………（察し）。大丈夫、死ぬほど気持ち良かったと思う」

「え、そう？」

「そう。だから、あんま気にしないで」

「でも、10分は長かったかなって」

「あー、それはあるかもね」

そう言いながら、透はベッドに座っている菅谷の後ろに腰を下ろした。両足で菅谷を挟むように足を垂らし、肩に手を乗せる。

「? とおるん?」

「じゃ、私がリカの事、マッサージしたげる」

「え……良いの?」

「うん」

言いながら、透は菅谷の肩を指で圧する。何度かおんぶしてもらった時から思っていたが、菅谷の身体は割と硬い。流石、柔道をやっていただけかあるくらいだ。

「どう?」

「うん。気持ち良い」

「でしょ? ……というか、マッサージしてたのなら、疲れたの両手でしょ? 腕やったげる」

「ありがと」

「腕、上げてて」

言いながら、透は肩から菅谷の腕をマッサージしていく。あんまり力の加減とか考えていないが、適当に握力で圧するようにマッサージする。

後ろから流れてマッサージすることになったから、少しずつ透自身も菅谷の身体に密着させないとマッサージ出来ない。

とりあえず、顎を肩の上に乗せて、肘、手首の方へと手を伸ばしていく。

そんな中、ふと目に入ったのは、菅谷の真っ赤な横顔。

「? リカ?」

「あ、あの……とおるん……ちよつと、距離近いかなつて……」

「そう?」

「む、胸が……その……」

いつもの事じゃん、と思ったのも束の間。お風呂に入った後だから、透はノーブラなのだ。

思わず一瞬、羞恥心で透の耳まで赤く染まる。菅谷がノーブラであることに気付いているのかは知らないが、何かいつもおんぶしている時と感触が違ったのは察知したのだろうか。

その様子の菅谷を見て、透は羞恥心より嗜虐心が勝ってしまった。

「なんでー? いつもおんぶしてる時と同じじゃん」

「つ、そ、そうかもだけど……その、なんか……違くて……」

「何が違うの？」

「や、柔らかさと……何か当たってる感じが……」

「何か？ 何かって？」

「わ、分かんないけど……」

「ふーん……嫌なら離れるけど？」

「……」

返事がない。本当にここまで分かりやすい子もいない。さて、そろそろ仕上げだ。

一度、手を離して後ろから離れた。

「ま、腕マッサージするのに後ろからやる必要ないもんね」

「あつ……」

「どしたの？」

「……つゝゝゝ！」

トドメ、と言うように、一度離れた透は後ろからまたくつつつき、耳元で囁いた。

「……樋口には黙っててあげるから、本当はどうして欲しいのか言ってみ？」

「っ！……きゆう」

気絶させてしまった。でも、透は満足げに頷く。可愛かったし、スッキリした。

それと同時に確信したのは、菅谷はやつぱりMだということ。あれだけ言われて責められたのに、最後まで「嫌」とは言わなかったあたり、もはやお察しである。

「……ホント、可愛がり甲斐がある」

××「そう言いながら、気絶した菅谷の頭を膝の上に乗せて、しばらく頭を撫で続けた。

××それから10分後。円香が戻って来て、菅谷の意識も戻って来て、でも菅谷の記憶は戻って来なくて、そのまま三人でしばらく話し込み、歯磨きを終わっていいよ就寝時間。

「よし、じゃあ寝よう」

「うん」

「ね」

「その前に、クリスマスプレゼントだよね」

「あ、そっか」

「これに二人ともプレゼント入れて」

透が出したのは、大きな靴下の形のビニール。クリスマスに使っていた奴だ。

その中に三人でプレゼントを入れていく。

「わ、リカの大きい。中身何？」

「言っちゃって良いの？」

「ダメでしょ」

なんて話しながら、準備を終え、いよいよ三人でベッドの中へ。そこで、菅谷が足を止める。

「誰真ん中？」

「リカ」

「……本気？」

「じゃ、私奥ー」

無視して透が奥へ行く。その後が続くように、円香が菅谷の背中を押した。そして最後に円香が入る。

肩と肩がぶつかるところか、ギユウギユウに絞められる感じがしてすごい。

「やっぱ狭くない？」

「じゃ、私横になる」

「私も」

「俺も……」

「あんたは動かない」

「……」

菅谷の方を向くように、透と円香は横になる。正直、一番感じたのは圧力だった。

「あの……眠れなさそうなんですけど……」

「黙って目を閉じて」

「リカの腕太い」

「マドちゃん、顔真つ赤じゃん」

「うるさい……」

「リカもだよ？」

「そりゃ赤くなるでしょ……」

「浅倉も耳赤い」

「え、嘘……？」

「あ、ホントだ。とおるんも照れてる」

「余裕こいてたくせに」

「っ……後ろ向こう」

「ダメだつてば」

「リカ、浅倉こつち向かせて」

「……こういう時ばかり結託して……」

なんて話しながらも、また透は菅谷と円香がいる方を見る。

「浅倉、あんま動かないで。こつちギリだから」

「ていうか、一番細いマドちゃん真ん中のが良くない?」

「あ、わかった。樋口、リカの上で寝たら?」

「良いかも」

「良くないよ。潰れるよ」

「は? それ私のこと重いつて言ってるの?」

「乗っちゃえ、樋口。……あ、でも片腕は私に貸してね。腕枕欲しい」

「いやもうそれ俺が布団みたいに……うぶっ」

「リカ、胸筋硬い。柔らかくして」

「どんな注文……あ、マドちゃん、シャンプーの香りする」

「リカ、腕枕。早く」

「……はい」

もう三人とも、いつの間にか深夜テンションでやりたい放題だった。

結局、菅谷の上に円香が仰向けで乗り、腕の上に透が乗る形で落ち着いた。

そんな中、透が感慨深そうに声を漏らす。

「……ふふ、やっぱ……ずっと三人でいたいわ」

「……うん」

「……二人にその気があるなら、楽勝でしょ」

そんな話をしながら、目を閉じる。

さてこの後、まず透が寝息をたて始めるまで5分。

その後、円香が中々眠れなくて胸を高鳴らせ始めるまで10分。

菅谷を眠気が襲って来るまで15分。

ようやく円香が眠れそうな時、寝相を崩した菅谷が円香を透の上に落とすまで20分。

当然、喧嘩になり、結局菅谷だけ床に敷いた布団で寝ることになるまで、25分。

そして、誰も机の上にゴムがあることに気がつくことなく、落ち着いて眠りに落ちた。

クリスマスあんな関係なくなっちゃった。

翌朝、最初に目を覚ましたのは菅谷だった。結局、布団で寝たはずなのに、何故かくつつかれてる感じがして暑かったからだ。

目をうつすらと開けて左右を見ると、円香と透が自分の片腕ずつを拘束して両サイドで眠っている。

「……………」

ベッドの方を見ると、がらんとしていた。この子達、わざわざ潜り込んで来たのだろうか？

何にしても……………その、なんだ。少し緊張する。もう遠慮なく胸を当ててしがみつぎなのだ。嫌なわけではないが、その……………ちよつと朝からインパクトがすごい。

とりあえず起きようと思い、二人から抜け出そうと両腕を動かす……………が、それをさせまいとするように、左腕に力が込められる。

「……………」

全体重をかけんばかりの重みに、冷や汗が流れる。そつちを見ると、円香がメチャクチャ不機嫌そうな寝起きの顔でこちらを睨んでいた。

「……寒い」

「えっ？」

直後、若干上がった菅谷の頭を再び枕に押しえつけた。そして、少しだけ乱れた布団を自分と菅谷にかけ直し、再び腕にしがみついて瞳を閉じる。

な、なんだろう……その、過去類を見ない険悪な感じ……寝起き機嫌悪そうとは思っていたが、ここまでとは。……そんなの、尚更喜欢きになつてしまう。

「~~~~っ！」

態度がやたらと可愛くて、菅谷は目を閉じて天井に顔を向け、爆散する照れを放出する。

なんだこれ、なんかかわいい。普段の憎まれ口より可愛い。

もう少なくとも二度寝でなんとかなるレベルの威力ではなかった。仕方ないので、透の方の腕を抜く。上手いこと誘導して、透と円香を抱き合わせれば問題ない……！

そう思ったのだが。

「……リカ、らめー……」

寝ぼけた透が、腕どころかズボンに手を回してホールドしてしまった。

「え、えっち……」

「……すびー」

また寝られてしまった。

正直に言ってしまうと、嬉しかった。何故なら、二人に甘えられる事なんて滅多にないから。弟とか言われる自分に、仮にも姉二人がここまでベタベタくっつくのは、割と気持ちが良い。

でも、やっぱり恥ずかしい。甘えられると嬉しい反面、距離が近いだけあって緊張してしまう。

「……はあ、どうしよう……」

菅谷だって男だ。あんまりそこまで近くにいられると、変な気分にはなってしまう。それが「ムラムラ」という感情であることはあいにく分かっているのだが。

とりあえず、気を落ち着かせるために、頭の中で恐竜を数えることにした。

そんなわけで頭の中で始まった「白亜紀限定、肉食恐竜ゲーム」。ルールは簡単。片っ端から、白亜紀に生きていた肉食の恐竜の名前を言うだけ。

セーの、ティラノサウルス……。

「はむっ」

「はうっ!?」

唐突に、横から耳を噛まれた。

「っ、と、とおるん……何して……!」

「リカの耳〜……」

「ホントに耳だから！ 夢でも囁んでんの？」

歯は立てないようにしてるけど、そういう問題ではない。耳に何か触れる時点でゾワゾワと背筋が立ち、胸の動悸が強くなる。

そんな菅谷の口が、横からグワつと塞がれる。

「っ？？」

隣をチラ見すると、寝起き不機嫌モードの円香が自分の口を塞いでいる。

「……………うるさい」

「……………ごめん」

「っこうしてやる……………」

直後、円香は菅谷の耳を囁んでいる透の顔ごと自分の胸前まで抱き寄せた。つまり、当たり前だが菅谷の顔も円香の胸に押しつけられるわけで。

「……………っ？？」

顔が一気に真っ赤に染まる。その菅谷をお構いなしに無視した円香は、布団を自分の肩当たりになままで上げて目を閉じた。菅谷の足だけ布団から出てるわけだが、12月の寒さは感じない。普通に熱い。それはもう、サウナにいるんじゃないか、と思うほど。

そして、それが限界だった。あれ、首の下ガス台の上で熱してる？ と錯覚する程、熱

が込み上げてきた。

「コツフ……！」

×ドピユツと鼻から血を噴出し、そのまま失神した。

「ん×……？」

目を覚ましたのは、円香だった。なんか胸の前に温かいのが付着した気がして、ぼんやりと目を覚ます。

とりあえず、そろそろ起きようと思い、身体を起こした時だ。目に入ったのは胸元。血だらけである。

「……え」

思わず頭の中が真っ青になった。胸に大量の血……病気？ でも、口の中に鉄の味はない……胸から？ Tシャツの下を見るが、痛みもなければ傷もない。

一体何の……と、思つて隣を見ると、菅谷が白目を剥いて鼻から血を垂らしながら気絶していた。これは、いつもの失神とはわけが違う。白目を剥いてる時点で、ちよつとただ事ではない。

「リカ？ ちよつ……ど、どうしたの？」

「っ……っ……」

さて、案の定、菅谷から記憶は無くなっており、何事もなかったかのように三人はプレゼントを開ける時間になった。

三人で、結局使わなかったベッドに下がっていた袋を手に取り、開封の儀を開始する。「どうやって開ける?」

「一斉にひっくり返そうか」

「じゃあ……樋口、掛け声」

「ラーメン」

「もうそのネタ良いから」

言いながら、一斉にひっくり返した。透と円香の目に、まず目立ったのは、やっぱり大きい袋だった。

「これ、リカのだよね。何これ?」

「開けりや分かるよ」

との事で、二人ともまずは大きいのを開けた。袋をほどくと、中から出て来たのは動物の着ぐるみ。パジャマだった。猫と犬の。

「パジャマパーティと言え、やっぱりこういうのかなって」

「それは、寝る前に渡さないでしょ」

「バカなの?」

「……あつ、そっか」

ほんとのバカだった。

「じゃあ……する？ もう一泊」

「良いの？」

「いや、ここで決めて良いことじゃないでしょ。……ていうか、許可出てもダメだと思う」

「だよねー……住んでるの、とおるんだけじゃないし……」

そうは言うものの、菅谷は肩を落としていた。

その菅谷に、円香は続けて言う。

「で、リカ。あんたのプレゼント、どっちか開けたら？」

「あ、そっか。うん」

返事をしながら、菅谷もプレゼントを開けた。ビニールの方を開けると、中から出てきたのはザクのマフラーだった。

「わあ、何これ。カッコ良」

「樋口から？」

「……たまたま見かけたから」

ガッツリ選んでいた事を無かったことにして、円香はそっぽを向いて素っ気なく答え

る。

「すっげー。カッケー……巻いてみても良い？」

「どうぞ、ご勝手に」

言われて、菅谷はマフラーを首に巻く。……まあ、服装はパジャマだから、そういう意味じゃ似合うも何もないのだが。

「どっ？」

「巻くと、意外とザクって分からないかも」

「でも、普通に似合ってるじゃん。流石、樋口チョイス」

「にへへ。実家でも巻いてよう、これ」

「ね、私のも開けてよ」

透に言われ、菅谷はもう片方のプレゼントを手取る。大きき的にはマフラーより大きい袋。

開けてみると中から出て来たのは、着ぐるみパジャマだった。うさぎの。

「え、なんで？」

「リカがこれ買ってるの見たから、三人お揃いにしようと思って。でも、寝る前に渡さないの意味なかったね。てへ」

「あ、可愛い」

「じゃないでしょ。あんた少しはツツコミ入れて」

「なんでウサギなの？」

「捕食されそうだから」

「どう言う意味……？」

「……」

「……」

火花が散らされたのは、透と円香の間。菅谷の取り合いなんてバカらしい、と平和的に仲良く半分こするとか言ってた二人とは思えない冷戦だった。

何一つ事情を理解していない菅谷は、キョトンとした表情で小首を捻っている。知らぬが仏である。

「でも、暖かそうだね。モコモコしてるし」

「でしょ？」

まあ、菅谷が喜んでいるのなら、円香としては何も言うことはない。

さて、残りは透と円香がお互いに送ったプレゼント。やたらと小さい箱。それもそのはず。円香が購入したのは、ピアスだから。

とはいえ、まあ箱を見れば大体、透が何を買ったのかは想像ついた。

二人はその箱を手にとると、同時に開けた。

「わお……」

「……やっぱり」

驚きの声を漏らした菅谷とは対照的に「予想通り」と言うように透と円香は呟いた。

それに、思わず菅谷は「えっ」と声を漏らしてしまう。

「分かってたの？」

「箱見た瞬間に」

「被ったなって」

そう、中身は透も同じようにピアスだった。デザインも一緒。違うのは色だけだ。

「……あ、そっか。二人とも俺とはお揃いのつけてるけど、二人はないもんね」

「でも……まさか被るとは」

「……どうしよっか」

何せ、耳は一つしかない。透と菅谷の片方の耳には二つついているが、それはリングの形だからだ。球状のものなだけあって、パンクロッカーでも目指さない限り二つはちよつと嫌だ。

そして、買った以上はお揃いででないという意味がない。つまり二人とも、お揃いにしようとする自分にも買った方のピアスが余ってしまう。

少し気まづくなっていると、菅谷が口を挟んだ。

「? どうするもこうするも……とつとけば良いじゃん」

「いや、そうだけど……」

「似たようなの二つあってもさ」

「あつても良いじゃん。とおるんとマドちゃんが相手を想つて買ったものだし、使わなくてもとつとけば意味あるでしょ?」

「……」

「……」

たまにこういうことをサラツと言うから、この男は狡い。それは確かにその通りかもしれない。気持ちを含めたプレゼントは、実用性など気にする必要はないのだから。

……だから、円香は今だに弥生のフィギュアを取つてある。

「……なんかムカつく」

「分かる」

「なんで?」

言いながらも、透はピアスを机の上に飾り、円香は鞆の中にしまい始めた。

「じゃ、そろそろ朝ご飯行こうか」

「リカ、私と浅倉着がえるから、先に下へ行つてて」

「俺の着替えは?」

「廊下で良いでしょ。今頃、親は下で朝ご飯の準備してるし、上来ないよ」

「部屋の前に置いといてくれればパジャマ、部屋の中入れとく」

それだけ話して、着替えを持って廊下に出た。

とりあえず、菅谷は言われた通り着替えを済ませて、先に下に降りることにした。リビングに入ると、そこにいたのは透の母親。机の上には、紙袋が置いてあった。

「おはようございます」

「おはよう。朝ご飯、食べる？」

「あ、はい。いただきます。……あの、それは？」

「ああ、これはあなたのお父さんから。お世話になつてますって……お土産？ もらつた。おかげで、うちの旦那もご機嫌で仕事に行つてたわ」

良いとこの和菓子だった。しかし、いつの間に関自分の父親はここにお菓子を届けにきたのか……いや、まあ多分、早朝なんだろうな、とすぐに分かつたが。

「昨日はよく眠れた？」

「あ、はい」

「うちのベッド狭かつたでしょ？ 三人なんて尚更」

「いえ、俺だけ布団で寝ましたから。……まあ、後になって二人とも結局、こつちに潜り込んでましたけど」

「そうなんだ。モテモテ」

「モテてるんですかね、これ。なんか弟扱いされてるだけな気がしないでもないんですけど……」

「そうなの？」

「多分？」

「ふーん……うちの子、意外と素直じゃないんだ」

素直じゃないと言えば素直じゃないのかもしれない。まあ、基本的にはやっぱり素直なんだけども。

そんな話をしていると、着替えを終えた二人がリビングにやってきた。……菅谷があげた、着ぐるみを着て。

「おはよう、お母さん」

「おはようございます」

「あら、二人とも。おはよ……わ、素敵な格好してる」

「かわいい」

円香は少し気恥ずかしそうにしてるが、透はニコニコしてピースしている。

「イエーイ、透犬復活」

「復活？」

「何でもないです」

余計なことを言いかけたバカを、円香が黙らせる。流石にあの時のことはちよつと言えない。

その二人を眺めながら、菅谷が少し意外そうに言った。

「なんか……思つたよりこう……マスコツト的な可愛さないなあ……。普通にとおるんとマドちゃんだから？」

「本当に流れるように可愛いつて言つちやう子なんだ」

「うん。だから嬉しい。めっちゃ」

「ね、リカくん。私のことも褒めて」

「え？ お綺麗ですね？」

「菅谷」

「うおつ、こ、怖っ」

ギロリと睨まれ、肩を震わせる。殺されるかと思うほどドスの効いた声だった。

「ふふ、やつぱりモテモテ」

一人、傍観者の母親はニコニコ見ていた。

「じゃ、朝ご飯出すから」

「手伝いますよ」

「いいから。お客さんなんだし、ハーレムしてて」

「え、ここキヤバクラ？」

「は？ あんた私達がキヤバ嬢って言うてんの？」

「殺すよ」

「いや……言われたことのものの例えなんですけど……あ、でもその格好で怒られても、怖さ半減ではあるかも」

直後、二人の獣はバカに襲いかかった。椅子を押し倒す勢いでひっくり返し、頬を引つ張り回したり、脇腹を突きまくったり、関節を逆側に曲げたり。

×その様子を眺めながら、透の母親は食事の準備を進めた。

×
×
「よし、遊ぼうか」

朝ご飯を終えた三人が来たのは、遊園地だった。理由は単純。今日という日まで何処で遊ぶか何も決まっていなかった三人だが、思いついたように菅谷が「この前のリベンジ」といつて提案したのが通ったわけだ。

三人とも、三人で揃いのアクセサリーを耳につけ、菅谷はマフラーを装備して、円香と透は着ぐるみから私服に着替えてやって来た。

「何乗る？」

「ジェットコースター」

「いきなり？ 良いけど」

「最初に悲鳴あげた人、罰ゲームね」

「OK」

またバカなことを提案する透だった。そして、それに乗ってしまう二人も中々である。

すぐにジェットコースターの列に並び、のんびりとコースを見上げる。円香と菅谷にとっては二度目のはずだが、菅谷が改まった様子で聞いた。

「……こんなおっかなそうなコースだったっけ？」

「覚えてないわけ？」

「なんでか分かんないけど、なんか印象と違う」

「風邪引いてたからじゃない？ ……ていうか、風邪ひいててジェットコースターとか

正気？」

「楽勝だったよ」

「玄関で倒れた人のセリフじゃないでしょ。……ホント、次ああいう無理したらぶっ飛ばすから」

「当日、もうぶっ飛ばされた気が……」

「は？」

「いえ、私が悪かったです」

素直に謝る。怒られるから。

そうこうしているうちに、自分達の番になった。並んでいる順番的に、円香と透が二人で並び、菅谷はその後ろに知らない女性の隣に並んだ。

「ほええ、これが都会んジェットコースターか」

「ジェットコースター、乗ったことないんですか？」

「いや、こつちに来てからは初めてっただけばい。楽しみやなあ」

「結構、怖いですよ。俺、二回目ですけど、隣に乗ってた友達が可愛すぎて怖かったです」

「それ、怖さば示す経験談と……？」

「見てると面白いですよ。ちようどその時、悲鳴をあげたのが、前に乗ってる左側の子で。もしかしたら、これから悲鳴あげるかも」

「それは楽しみばい」

なんて話している時だった。ジロリと視線が突き刺さる。前に座っている二人が、菅谷の方を睨みつけていた。

「……リカ」

「殺すよホント」

「……」

「た、たしかにえすかジェットコースターばい……」

そのままコースターは動き出した。

ガコンつと音がし、ゆっくりと動き出す中、それに気付かず二人は後ろを向いたまま呪いの言葉を吐き続ける。

「ふーん……ナンパ？ 良い度胸してるね、ホント」

「女の子がいたら誰彼構わず声かけるのやめたら？ ミスターモンキー」

「いや、二人とも前……」

「そもそも、普通知らない人に声掛ける？ どういう神経？」

「二人でも普通の人に比べたら多いのに、まだ足りないとかどういいう神経？」

「ちよつ、そんな言い過ぎ……ていうか、だから前……」

「前？」

言われて顔を向ける二人。目の前には、以前見た気がする富士山が見えた。完全に油断した。透はともかく、円香は2回目である。似たような油断の仕方をするのは。

「わお、目前」

「きゃあああああああ！」

「とおるん、すごいな……これでも悲鳴あげないんだ……」

××そのまま急降下して行った。

「はい、樋口罰ゲーム」

「つ………今のはズルでしょ………」

「え、俺ズルした？」

した、と言いつつ切りたい所だが、透が悲鳴を上げなかつた時点でそうとも言い難い。………というか、あれで悲鳴を上げない透がおかしい。

「罰ゲーム何にする？」

「………あんま変なのと、お金関係はやめて」

「これ」

言いながら透が鞆から取り出したのは、猫耳のカチューシャだった。

「………本気で言ってるの？ てかなんで持ってきてんの？」

「面白いじゃん」

「大丈夫だよ。マドちゃんなら何つけても可愛いから」

「………はいはい。もうその手のセリフ飽きた」

「樋口、耳は赤いよ」

「浅倉、ブツ飛ばすよ」

「じゃ、つけるね」

菅谷が、透の手からカチューシャを取って円香の頭に猫耳をつける。普段の私服に猫耳が生え、恥ずかしさから頬を赤らめる円香……菅谷も思わず頬を赤らめてしまうインパクトだった。

「やっぱり可愛い」

「……はいはい」

「喉撫でようか？」

「調子に乗らないで」

「俺も撫でたい」

「浅倉にも撫でさせないから。……ほら、早く次行くよ」

意外にも、猫耳をつけた後なのに、積極的だった。透も菅谷もキョトンと顔を見合わせながらも、とりあえず後に続いた。

「じゃ、次は……」

到着したのは、お化け屋敷。そこそこの大きさで、当たり前だが学祭の時以上のクオリティなのは確実だ。

「最初に悲鳴あげた人、罰ゲーム」

「……」

そこかよ、と思いつつ、円香のオーラは有無を言わさない様子だ。仕方ないので、透も菅谷も後に続いた。

さて、三人でそのお化け屋敷に突入。ここから先、円香はどうするか、澄ました顔をしながらも考える。

どうせ、この二人はお化け屋敷じゃ怖がらない。それはもう過去の経験から分かっていることだ。自分が何かすれば悲鳴を漏らすこともあつたが、同じ手が二度通用するとは思えない。

つまり……悲鳴を上げさせるには、最初の一発目が重要……！

「とおるんの脇の下に……ブルロック」

「ひゃうっ！ ……リカ」

「はい、悲鳴あげた〜」

「今のはダメでしょ。……ね、樋口？」

「ダメ」

「え、意外な返事」

人の作戦を台無しにしおってからに……と、円香は内心で奥歯を噛む。

とりあえず、標的は決まった。菅谷をビビらせる……！

「わっ！」

「あれ？ とおるん、後ろに……」

「リカ、お化け来てる」

「あれ？ なんかあそこに白い人影……」

「ワアツ!!?」

「今の悲鳴？」

「じゃなくて脅かそうと……」

などと、お化けそつちのけで三人で脅かし合っていた。

このままじゃ、もう誰も驚く事なんてないかも……と、円香は悔しげに奥歯を噛み締めた結果、強引な手に打って出ることにした。

後ろから……首筋に手を当てる……！ そう決めて、慎重に忍び寄り、手を伸ばしかけた時だった。

「あ、出口」

「えー、もう？」

「……」

着いちやつた。なんかもう、円香は悔しくて頬を膨らませ、握り拳を強く作り、菅谷の後ろから飛びついて首に手を回した。

「うぐえっ！ な、何すんのマドちゃん……！」

「なんか……腹立つ」

「なんで!?？」

「だって……腹立つ」

「いや全然理由になってなくない……?」

「で、今の勝敗は?」

「いや、今のは勝敗もクソもないでしょ」

「次行こう」

×××なんて話しながら、三人は別のアトラクションに向かった。

×××さて、そこから先はどのアトラクションでも、常に全員で全員を脅かそうと隙を伺いあっていた。

その結果、各々の頭には獣の耳が仲良くつけられたまま、遊園地をエンジョイしていた。

残念ながら、時刻はもう夕方。一通り乗り物は乗り尽くしたし、もう帰らないといけない。

夕焼けを眺めながら、菅谷が感慨深そうにぼつりと呟きを漏らす。

「……もう夕方かあ」

「じゃ、最後行こっか」

「最後？」

「観覧車」

「あ……うん」

透と円香に言われ、少しだけ嬉しそうに菅谷は頷く。前に乗れなかった観覧車。いよいよ、三人で乗れるわけだ。

列は幸いにも空いていて、三人はすんなりと乗ることができた。室内に入り、椅子に腰をかけると、ゆったりと車体は動き始める。

「おお……すっげえ」

「リカ、めっちゃソワソワしてる」

透が茶化すように言うが、菅谷は座つたのにすぐ立ち上がって窓の外を眺めながら、目を輝かせる。

「いや、だって……少しずつ上に上がっていく様子が感じられるのってあんまないでしょ」

「はいはい。いいから少し落ち着いて。……なんか気疲れしたし」

円香が注意すると、おとなしく座つた。実際、円香はいつの間にかデスゲームになっていたクリスマスに、少し疲弊していた。結構、気が抜けなかった。まさか食事中に菅

谷と透から同時に変顔されて、嘔き出させられるとは思わなかった。

「おおく……ほら、あれ！ ……あれ何？」

「いや何指差してるのか分からないし」

「あつちに東京タワー見えるよ」

「あ、ホントだ」

透が教えた方向に、喜んで目を向ける。

「すげー、あの赤いのが返り血ってマジ？」

「誰から聞いたのそれ」

「え、なんか文事が言ってたけど」

「あいつもつかい殺すか」

「あ、スカイツリーじゃん。今度、月島行かない？ もんじゃ焼き食べようよ」

「考えとく」

少しずつ高くなるにつれ、見えてくる建物も増える。子供のようにはしゃぐ菅谷を眺めながら、円香と透も席を立った。

菅谷を真ん中に挟むように立ち、窓の外を眺める。

「お、2人も見る？」

「ん」

「ホント、リカって子供だよね」

「え、そう？」

「とりあえず、今は座って」

「はいはい、こつち」

「えっ、わっ……！」

二人に両腕を掴まれて、片方の椅子に座らされた。

「ど、どしたの？」

「ホント、バカは高いところ好きだよね」

「なんでなじるの？」

「観覧車は、景色見るためのものじゃないから」

「じゃあ何のため？」

「ん、チューするため」

「は？」

透がそう言った直後、唇と唇が触れ合った。ホント、全然そんな空気でもなかったのに、急に透に唇を押し当てられる。……いや、押し当てられただけじゃない。口の中に、舌が入ってきた。口内を舐め回され、舌と舌が絡み合う。

その隣にいる円香は、窓の外を眺めながら小さくため息をついた。まるで「やると

思った」とでも言うように。

そこでようやく、透は菅谷の口から離れる。つうつ……と、口と口を繋ぐように糸が引く。

「とっ……とおるん……？」

大丈夫？ と心配になるくらい顔……というか頭を真つ赤にした菅谷が、クラクラしながら声を掛ける。

……が、透はいつもと同じ笑みなのに、何処かやらしく見える笑顔を浮かべて答えた。

「ふふっ、唾繋がってる」

「え、舌入れたの？」

反応したのは円香。ペロチューを知らない菅谷は、キョトンと小首を傾げる。

「し、した……？」

「うん。なんか入れたくなった」

「ちよつと待つて。私そこまですてないんだけど」

「樋口は添い寝したじゃん。二人きりで」

「だ、だからって……いや、まあそうだけど」

なんだか、まるで元々の予定だったかのように話が進んでいく。

渋々ながら納得したのか、円香は透と一緒に自分の方を向く。思わず菅谷は胸の奥で

ドキツと心臓を高鳴らせる。

「で、リカ」

「私達からキスしたけど？」

「……え？」

「リカからは？」

「……聞いてないんだけど、あの……そんな制度……」

「言つてないからね」

「ていうか、前から思つてたんだけど、あんたいい加減、照れて気絶して記憶なくなるの
なんとかして」

「え？」

円香から急に怒られ、ゾツとしてしまう。

「少しは耐性つけてつて言つてるの。キスとかしたとき、恥ずかしいのがそつちだけだ
と思わないで」

「つ……は、はい……」

それはその通りかもしれない……と、菅谷は少し反省する。なんだか、それは男とし
て情けない話なのかもしれない。

しょぼんと肩を落としていると、その菅谷に透がそのまま言った。

「……で、キスは？」

「え……いい、今やるの……？」

「……」

聞くと、二人とも黙って目を閉ざし、若干、唇を尖らせる。その顔を見て、なんだかやたらと色つぼく見えた菅谷はまた頬を赤らめる。ここは観覧車の中、逃げられそうにない。

……いや、そもそも逃げる必要なんかない。自分は二人が好きなんだし、もうここま
で言われてまだ逃げるのは、男として違う。

そう、気合を入れよ。男として、ここは逃げてはいけない……！

ゴクリと唾を飲み込み、まずは透を見る。先に唇をつけられたのは透だったからだ。
緊張気味に顔を近づけ、唇に照準を合わせる。

今から、キスを……キス、よく外国の映画にある餌を蒔いた池の鯉のようなキスを
……。

……。

……。

……。

ていうか、まだ付き合ってもないのに自然とキスするのおかしくない？

なんで今更、正論が頭に浮かんでしまった結果、菅谷の照準はズレ、透と円香の頬に一回ずつ、唇をつけた。

「……………え」

「……………は？」

「……………あ、あの……………今日の所は、これくらいで勘弁してください……………」

「……………」

目を開いた二人はすぐ半眼になる。透でさえジト目だった。だが、まあ菅谷にしては頑張ったと思われたのだろうか。二人して頭に手を置いた。

「はいはい。ゆっくりね」

「今更、キスより高度なこととしておくせに何言ってるのって感じだけどね」

「……………はあ」

恥ずかしさで頬を赤らめるしかなかった。その菅谷に、透と円香は笑みを浮かべたまま続けて言った。

「大丈夫だよ、リカ」

「そういうところ、嫌いなわけじゃないから。……………今後とも、3人でゆっくり慣れていけば良いよ」

「とおるん、マドちゃん……………！」

感極まった菅谷は、両サイドの二人の首に腕を回し、抱き寄せた。こういうことができるのに、キスは出来ないってどういうことなの……と、円香も透も思いながらも、とりあえずされるがままになっていた。

人生は山あり谷あり。

12月28日……年末も年末。円香は既に部屋の掃除を終えて、部屋でまったり過していた。

コタツ……これは人類史上、生み出された悪魔の兵器と言える。一度入ったが最後、身も心も抜け出す事を拒む戦略級兵装。恐らく、人類が退化するとしたら間違いなくこいつが原因の一端を担うことになるであろう……なんて円香は馬鹿なことを考える程度には、コタツに囚われていた。

しかし、何の罪悪感もない。冬休みに宿題なんてないし、やる事も全部終わらせた。後顧の憂いを断つて、こうしてボンヤリ出来……。

「樋口、樋口」

「……なんでいるの」

「? 玄関から来たから?」

……ない。幼馴染の方のバカが来てしまったから。

「何? 今、まったりしてゐるんだけど」

「部屋の掃除、手伝って」

「嫌」

秒殺である。人がまったりこいている間に何なのだろうか、この幼馴染は。

「手伝って」

「嫌」

「……手伝ってくれないと、お母さんが部屋に来ちゃうんだけど」

「あんたもうちにきてるから大丈夫」

「そしたら、この前買ったゴム見つかっちゃうんだけど」

「……」

「隠す場所、考えて」

「……」

ほとんど脅迫だった。いや、なんなら割とマジで助けを請いに来ているかもしれない。
い。

何にしても、買ったのは自分とはいえ、部屋に置くように言ったのは自分だし、放つてはおけない。

「……わかった」

「ついでに掃除も……」

「それは知らない」

「えー、リカの掃除はいつも手伝うくせに」

「あの子は一人暮らしでしょ。……それに、あんたと違ってちゃんと毎回、感謝してくれ
るし」

そんな話をしながら、渋谷コタツから出て行つた。

隣の家に行くために、まずは靴を履いてからのんびりと歩く。

「そういえば、リカは今頃、何してるのかな」

現在、菅谷はもう実家に戻っている。年末年始は夏休みの時以上に催しが多いらしい。

「さあ？ まあ、もしかしたら色んな忘年会に参加してるかもね」

「あー……あれか。お酒のつきあいつてやつ」

「リカは飲まないでしょ」

「でも、周りの人は飲んでるんですよ？ 無礼講だーとか言つて飲まされてるかもよ」

「リカのお父さんは、それを許すタイプじゃないと思う」

「あー……見た感じは厳しそうだなだもんね」

「うん。だから、心配しなくて平気」

「……してるように見えた？」

「見えた」

こう言うところを見ると、透も本当に菅谷のことが好きなんだと実感してしまう円香だった。本当に、隣の幼馴染とも変な関係になったもんだ。

そのまま二人は浅倉家の中に入る。

「ところでさ、樋口」

「何？」

「今更なんだけど……私達とリカって付き合ってるのかな」

「は？」

「や、だってまだ告白とかしてなくない？」

「……」

確かに、と円香は押し黙りながら思ってしまった。

「もうこれ恋人？」

「……まあ、その辺はリカが戻って来たらハッキリさせれば良いでしょ」

「そうなんだけどさ……あ、それならさ、ロマンチックにしない？」

「どういうこと？」

部屋に向かいながら聞き返すと、透はすぐに説明した。

「だから、どうせ付き合う事は決まってるんだからさ、シチュエーションは凝ろうよつて」

「いや、二股の時点でロマンチックも何もないんだけど」

「じゃあ……良いの？ このまま『どうせ私のこと好きなんですよ？ もう付き合おうよ』みたいな感じで」

「……………嫌」

「じゃ、考えよう」

「……………はあ」

まあ、一理ある。ここまでキスだの添い寝だのしてきて、他の女に取られることはないだろうが、かと言ってそんなぐだぐだな付き合い方はごめんだ。

「まずは日にちから決めよ」

「……………バレンタイン当日とか？」

「えー、普通過ぎない？」

「ロマンチックってそういうものでしょ」

まあ、何にしても、帰ってくるまでまだ日はある。どうやって付き合うのかは、ゆっくり考えれば良いだろう。

「私としてはホワイトデーに向こうから告られたい」

「向こうからってかなり難しくくない？」

「上手いこと仕掛ければ何とかなるでしょ。樋口が」

「ブツ飛ばすよ」

なんて話をしながら、透の部屋に入ったときだ。透の母親が、部屋の中に入っていた。……ゴムの箱を持って。

「……これ、何？」

「あつ」

××「一方、馴染みのない実家に戻った菅谷は、意外と暇していた。というのも、今日予定していた忘年会が急遽、中止になってしまったからだ。

なので、仕方なく実家がある街を散策していた……のだが。

「はあ……暇」

やることがない。さつき、父親に「だからお前、電気代使い過ぎだつーの。寝る前は暖房とかタイマーかけろつて言つてんだろ」と怒られたばかりだったのもあつて、小遣いを減らされてしまった。

しかし、父親が言うことがもつともなのも分かる。たまに暖房をつけたまま学校に行つてしまう事もあるくらいだ。

というか、菅谷自身も、夏休みには透や円香がバイトしていたと聞いた時から、自分も自分の小遣いくらいは稼げるようになりたいと思つていた。

けど、まあ面接受けるなら一人暮らしのとこ戻ってからかなーと考えているので、今は節約中である。

まあ、そんなわけで、のんびりと表を歩きながら暇をしているわけだ。

「はあーあ……」

表を出歩いているものの、あまり虫や動物もいないし、本当に暇だ。

そんな呑気な事を考えながら歩いているときだった。何やら忙しく走っている男の人と目があつた。

「おっ……」

「？」

「君、今時間ある？？」

「え、ありますけど。なんでですか？」

「モデルに興味ない？」

「ないです」

「勿論、お金は出すから手伝って！」

「名刺も渡さない社会人にはついて行っちゃダメだつて父ちゃんに言われてるので」

「あー、失礼。私、こういうものです」

受け取った名刺を見る。菅谷でも聞いたことあるモデルの事務所だった。

「今日、来る予定だった人が急に来れなくなっちゃって……代役になりそうな人、探してたんだよ」

「そうですか。じゃあ、俺はこの辺でそろそろ……」

「なんでよ！ 少しくらい聞いてよ！ さっきも言ったけど、ギャラ出すから！」

「はあ……」

だが……まあ暇してたのも事実だ。お金も欲しいし、少しくらいなら付き合っても良いだろう。

「分かりましたよ。何処で撮るんですか？」

「近くの河川敷。案内するから来て！」

「はいはい」

そんなわけで、スタッフさんと一緒に現地へ向かった。

場所は本当に河川敷。カメラを持ったスタッフや、黒い傘みたいなのなど、たくさんの方がいた。

その中で、一際輝いて見えたのが、背が高く髪が長い女性だった。それこそ、円香や透に負けず劣らずの美人さんだ。

「すみませーん、代役さん連れてきました！」

「来たか。……うおっ、超イケメン!?？」

「なんか歩いてました!」

「よくやった!」

偉い人なのだろうか?

その人がこちらに歩み寄ってきて、名刺を渡してくる。

「初めまして。私、こういう者でございます」

「あ、どうも」

「急な話で大変申し訳ありませんが、来月発売予定の我々の雑誌に、載ってはいただけな
いでしょうか?」

「ギヤラは?」

「……これくらい」

電卓を弾いて見せられ、思わず目を丸くした。あまり金を使わない菅谷としては、普通
通に二ヶ月分くらいのお小遣いにはなる。

「良いですよ」

「よっしゃ。じゃあ、こちら共演者の方です」

「初めまして。凛とした少年……私は、白瀬咲耶です」

「あ、どうも。綺麗なお姉さん。菅谷明里です」

「ふふ、綺麗な名前だね。まるで少女のように」

「そちらこそ、花畑に舞う紋白蝶みたいに美しい名前ですね」

そんなやり取りを眺めながら、スタツフから「おお……」と声が漏れる。

「すげえ……初見で咲耶ちゃんと鏝迫り合いしてやがる……」

「何者だよ、あの子……？」

「とうか、あのイケメンが野生でいたの？ ラティオス？」

××なんて声を無視して、菅谷は咲耶と握手した。

×

「あつぶなかつたね……」

「未開封で良かった……」

ぎりぎり、怒られなかった。と、言うのも「学校で仲良くなった女子に万が一の時と
か要らない世話を焼かれた」と言い訳したからだ。

多分、嘘であることはバレていたが、少なくとも使うつもりはない……いや避妊しな
いでつて意味でなく、活用する場がないという意味で使うつもりがないことは伝えたか
らセーフだったと言えるよう。

……とはいえ、円香の目の前にいる奴は、菅谷を押し倒した女でもあるわけだが。

「はあ……結局、掃除手伝っちゃってるし」

「そこはほら、樋口だから」

「帰るよ」

「わー、うそそうそ」

「こういうところも、菅谷と透の差だろう。……なんて思っていると、透が少し拗ねた様子で返した。」

「でも、少し羨ましいとか思ったりしてるから」

「? 何の話?」

「リカにばかり世話焼いて、樋口あんま私の世話焼いてくれないし」

「まず世話を焼かさないで」

「私、樋口のこと好きだから」

「はいは……は?」

「部屋、片付けよう」

「……ん」

今の言い方……気の所為だろうか? 気の所為と思いたい所だが……いや、今は考えるのはやめておこう。

それよりも、掃除だ掃除。さっさと終わらせて、コタツの中でダラける。そう決めて、せつせと手を動かした。

元々、ゴムを隠したいというだけで呼ばれたので、あまり散らかった部屋ではない。

そんなに時間は掛からないだろう。

窓を拭いて、ゴミをまとめて、掃除機をかけて……と、手際良く進める。

「流石、樋口。もうほとんどお嫁さんじゃん」

「……いいから手を動かして」

「あ、照れた？」

「帰るよ？」

「あ、うそそうそ」

透が布団を干してパンパン叩きながら埃を払っている間に、円香は年末の大掃除なので、ベッドの下とかの埃も出して……と、思いながら、ベッドの下を覗き込んだ。

そのときだった。ふと見えた、プラスチックのケース。なんであんな所に雑誌が？
と思い、手を伸ばして取ってみる。

「な、に……これ？」

手元まで引き寄せると、そこにあったのは……。

「え……」

その直後だった。ガツと手を肩の上に置かれる。後ろを振り向くと、そこに立っていたのは真顔の透。いつもの表情なのに、見下ろされているからか、やたらと背筋が凍りつく。

「……見たな？」

「……」

× ×

車に乗って着替えを済ませた菅谷の服装は、真冬のアウトドアっぽくコーディネートされた服装だった。流石、イケメンな上に柔道出来る程度には筋肉もあるだけあってよく似合っている。……中身を知らなければ、の話だが。

「じゃあ、写真撮るよ。咲耶ちゃんと菅谷くん、早速歩いてみて」

「歩くって、川沿いですか？ 水の中ですか？」

「バカなんですか？ 服濡れるでしょ！」

そっか、と菅谷は納得すると、隣の咲耶が菅谷の肩に手を乗せる。

「ふふ、緊張しているのかい？ 大丈夫、リラックスして。私がいるから」

「え？ あ、いえ。水の中歩くんだったら冬だと嫌だなんて思っただけです」

「そ、そうか……ユニークだね？」

「にしても、白瀬さん背高いですね。羨ましいです」

「そうかい？」

「はい。背が高い上にかっこよくて、ユニークですよね」

「……ふふ、ありがとう」

褒めてるつもり……というよりも、何も考えず適当に会話している菅谷だが、咲耶でなかったら「なんだこのガキ可愛くねーな」となってもおかしくなかった。

とりあえず、二人並んで歩いていけば良い、との事なので、川岸を歩き始めた。

「菅谷くん、もつと格好つけてみて」

「格好?」

「そう!　なんか、好きな俳優さんとかいるでしょ。そういうのモデルにして」

いるにはいるが高〇一生、小日〇文世、田〇正和なので、年代的に参考にならない。

……なので、文化祭での経験をもとにやってみることにした。つまり、執事の歩き方である。ちようど、隣にお嬢様がいるのだ。

優雅に咲耶の前でお辞儀した菅谷は、そのまま手に触れた。

「では、お嬢様。参りましょう」

「おや、エスコートしてくれるのかい?　ありがとう」

「はい。お手を拝借致しますよう。お嬢様」

「お嬢様、か……そう呼ばれるのは少し新鮮だね。なんだか、照れくさいよ」

「お戯れを……」

直後「真冬のアウトドア」の写真の撮影のつもりで来たのに、いつの間にか「お嬢様と執事のお忍び旅行」のような絵になってしまった。

しかし、スタッフは誰一人として止めなかった。何故なら……絵になりすぎて
いるから。

「……これはこれでありだな」

「というか、あの連れてきた子、何者よ」

「ダイアの原石だろ」

「ダイア？ ダイヤじゃないの？」

「え、うそだあ」

「俺はダイヤ派」

「どっちでも良いわ」

なんて話をしながら、二人の様子を撮影し続けた。

×

「ねえ……あ、浅倉本気で見る気……？」

「見られたもんは仕方ないし、一緒に見る」

「や、私は別に見たくないんだけど……」

「ダメ。……それに、リカの性癖のためだし」

「せ、性癖とか言わないで……！」

「恥ずかしいの？ それとも怖いの？」

「つ、そ、その言い方……ホント、ズルい……!」

「あ、始まるよ」

直後、画面に映ったのは……グンタイアリの群れだった。

『特集! グンタイアリの恐怖!』

まるで風に吹かれた草原の絨毯のように揺れるくらいの群れに、ゾワゾワつと背筋を凍りつかせる円香。

「や、やつぱり見たくない……!」

「ダメ。人の部屋、勝手に物色した罰」

「掃除でしょ!」

「あそこまでやるには家主の許可ないとダメでしょ」

正論はごもつともだが、そもそも顔が少し楽しそうなのでダメだ。絶対、それほど気にしてないくせに、完全に楽しむ気満々でいじつてきている。

「ていうか、なんでそんなの持ってるの」

「古本屋で安かったから。リカがうちに来た時のため」

「なんであんなところに隠したの?」

「いや、床に置いたいたら、蹴っ飛ばしていつの間にか隅の方へ」

要するに、よくあることだ。これでもまだマシな方で、中学の時は靴下片方無くすと

か、ネクタイが机の裏から出て来るとか頻繁にあったのだ。

さて、そんな二人のやりとりをよそに、DVDは続く。

『グンタイアリの恐ろしさは、如何なる壁が待ち受けても突き進み、食い尽くす事である。たとえ相手がライオンのような肉食動物であろうと、ゾウのような巨大なフィジカルを誇る動物であろうと、恐れず突き進むのです』

「っ……き、気持ち悪い……」

「バイオミたい。ウケる」

「ウケない」

二人してウジャウジャと動くグンタイアリの波を、円香はもう見ていられなくなり、透の肩に額を置いて顔を背ける。

「樋口？ もうギブ？」

「うるさい……！」

「でも、ホラー映画より怖い気持ちはわかるよ。私、絶対アフリカに行きたくなかったし」

「行くことなんてないでしょ……ていうか、もういいでしょ」

「だめ。もう少し……」

なんて言っているときだ。ピロンッと電子音が耳に響く。円香も聞いたことあるよ

うな音だ。

「あれ？」

「何？」

声を漏らした透が、テレビの方に歩く。テレビの真下に手を伸ばすと、スマホが出てきた。

「うわ、容量オーバーかー」

「は？」

「動画、リカが寂しがると思って撮ってた」

「……」

今度は怒りが恐怖を凌駕した。ゆらりと立ち上がると同時に、透へ飛び掛かる。

「消して！」

「おっと、危ない」

「そんなの送らないで！ よりにもよってあいつに」

「いや、あいつだからこそでしょ。もし、次の機会があつたら、向こうから甘やかしてくれるかもよ？」

「……。……いやダメだから。恥ずかしいものは恥ずかしいから！」

「少し考えたでしょ」

「とにかく消して」

「おつ、と。身長と胸は私の方が大きいから。無理無理」

直後、円香の中で何かブチっと切れた気がした。ぬくぬくしてる中、引つ張り出されて、怒られかけてすけべがバレ……いやすけべと思われるものを買ったことがバレて、結局掃除を手伝わされた挙句、見たくないもの見せられ、その上また辱められそうになり、終いには貶された。

つまり……小柄には小柄の戦をしろと言うことだろう。かの有名な豊臣秀吉から神託を受けた気がした円香は、透の胸を正面から掴みに行った。

「樋口ゴツドフィンガー」

「えっ……」

むにゅつという柔らかい感触（腹立たしいことに）を掴みながら、ソファアの上に押し倒す。

そのまま馬乗りになり、胸から手を離しながら、見下して告げた。

「……これで、私の方が大きい」

「っ、あ、やばっ。もしかして、激おこ？」

「聞かなきゃ分からない？」

言いながら、円香はワキワキと指を曲げて伸ばし、また曲げて伸ばす。

「そんなに大きい胸が偉いなら、どれだけすごいものか見せてもらおうから」

「いや、偉いとかじゃ……」

「樋口ダークネスフィンガー」

「さつきから思ってたけど、それ頭じゃ……あつ」

ヒュボツ、と火がついたような音と共に両手で胸を揉みしだかれた時だった。

「透、部屋の掃除終わっ……あ」

「? あつ」

×鏡餅を買いに行っていた透の母親が、ガサツと手からビニールを落とした。

×

「へえ、高校生で一人暮らしか……」

撮影の休憩中、歳が近いこともあり、菅谷は咲耶と一緒にお話ししていた。

「はい。ようやく慣れてきたところですけど」

「すごいね。私は一人暮らしは……少し考えられないかな」

「いやいや、俺だって一人じゃ無理でしたよ。けど、マドちゃんとおるんがすごく手伝ってくれて」

「? 友達かな?」

「はい。友達……なのかな」

キスしちゃったけど、それも二人ともと。なんて頭の中で付け加える。というか、キスとかしてしまっただけ以上は、二人とも友達では終わらない関係になったと言わなければならないだろうか？

「ふふ……そつか。羨ましいな。そんな友達と二人も出会えるなんてね」

「はい。ラッキーでした。マドちゃんはいつも厳しくてよく怒られちゃうんですけど、その反面、ちゃんと家事を手伝ってくれて……というか量と質的には俺が手伝ってる、みたいになっちゃってて、とおるんは最初の方はうちに来てもしっかり勝手、映画見てるだけだったのに、今じゃしれっと手伝うようになって……なんか、もらってばかりで俺は何もあげられてなくて……」

「待った。話の腰を折ってすまないが、その二人は異性ではないのかい？」

「そうですよ？ ……あ、写真見ます？ ほらこれ」

見せたのは、この前のイブで組体操をしている写真だ。直後、咲耶は思わず半眼になる。

「これは……何処で撮ったのかな？」

「ショッピングモールですよ？」

「えーつと……店内でこれを？」

「はい」

「……ところで、ツリーが見えるがクリスマスを一緒に過ごしたのかい？」

「そうですね。三人で」

「修羅場にはー……ならなかったのかい？」

「？ なんで？」

「……ところで（2回目）、普通に上に乗っている少女……」

「あ、こつちがマドちゃん」

「マドちゃんさんの脚を普通に握っているが、嫌がられたりとかはしなかったのかい？」

「いえ、割とマドちゃんもノリノリでしたし……」

「そうではなくて……距離が近いな、みたい……同性ならともかく、異性で」

「そうですか？ 普段から、腕組んで歩いたりとかしてますし……とおるんなんかはよくおんぶを強請って来ますし……」

「……おんぶ……」

「？ おんぶ知らないんですか？」

「……」

しばらく、咲耶は黙り込んでしまう。何かまずいこと言ったかな、と思った菅谷は、そこでようやくハツとした。……自分が言った話、まるで二股を開き直っている男のようなのでは？ と。

つい、友達自慢をしたくなってペラペラ喋ってしまったが、普通に考えたらだめなやつかもしれない。

「あ、いや……別に二股とかじゃ……」

「……菅谷くん。一つだけ、忠告させてくれ」

「つ、な、なんです……?」

「二股は良くない。結局、一番傷つくのは彼女達なのだ。どちらから愛され、どちらのことも愛しているとしても、どちらかを選ばなければダメだ」

「……? 傷つく、んですか?」

「当たり前だろう。君ならどうだ? 他の男ともし、二人がくつついていたら……」

「や、くつついてないですし……」

「気付かないうちに、だ」

「二人とも気付いてますよ? というか、しよっちゆう三人一緒ですよ?」

「え」

すると、咲耶は顎に手を当ててまた考え事を始める。やがて、少しずつ自分と透、円香の関係が分からなくなったのだろうか?

その咲耶に、菅谷はすぐに続けた。

「分かっていますよ。二股がダメなことくらい」

「え？」

「でも……まだ付き合ってるわけではありませんし……それに、二人が二人とも、気を使ってるわけじゃなく『三人で一緒にいたい』と言ってるんですから、なら男として根性見せないとダメでしょ」

「……そうか。当人達が良いのなら、良いのかもね」

「はい」

咲耶も納得し、微笑みながら言う。良いこと言った風で落ち着いたが、この男は先日、根性が足りなくて二人にキスもまともに出来なかつた男であることを、忘れてはならなかつた。

「……正直に話して。あなた達とリカくん、どういう関係？」

「襲っているように見えたのだろう。全くの誤解で怒られてしまった。」

「いや、だから……」

「普通に二股ですけど……」

「じゃあさっきの何？ ……まさか、リカくんは遊びであなただが本気なんてことはないよね？」

「どんな発想？」

「そんな人でなしじゃないです」

「もっかい聞くけど、じゃあさっきのは何」

「あれはー……」

マズイ、と円香は冷や汗を流す。何せ、自分が透の胸を襲ったのは事実だから。

それは透も同じはず。同性愛者への非難ではないが、勘違いされるのは誠に遺憾である。

どうする？ と、透の様子を伺おうとチラ見すると、透は真顔のまま告げた。

「樋口が急に襲ってきました。私は無罪です」

「なんで切り離し作業に移ってるの!」

「事実だし。本当は三人で付き合いたかったけど、樋口が先走った以上は仕方ないね」

「流れるように裏切らないでくれる!?!」

「そもそも、樋口が買ったものを私の部屋に置いて行って親に怒られた時点で、割と裏切られてる」

「……あーそう、そういうこと言う? 言っちゃうわけ。リカのこと押し倒した癖に」

親の前で、爆弾に火を付けた。直後、透も眉間に皺を寄せた。

「……さすが、リカと添い寝した人は言うことが違うわ」

「……はっ!」

「ちよつと、二人とも……」

× 暴露大会が始まった。

×

「いやー、ありがとね。菅谷くん」

「いえ。良い暇つぶしになつたんで」

軽く手を振りながら、お金をもらう。現金払いじゃないと信用出来ないから。

すると、偉い人は少し考え込むように顎に手を当てたあと、改まった様子で声を掛けて来た。

「なあ、君」

「はい？」

「もし良かったらなんだが……また頼つても良いかな？ その……モデルに」

「無理です」

「相変わらず返事が早い……」

「や、そういうんじゃないくて、俺一人暮らししてるから、こつちにはいないんですよ」

「そ、そうなのか。ちなみにどこ？」

「もつと都心の方……えーつと、〇〇あたり」

「そこなら、うちの事務所も近いんだけど……ダメかな？」

「お話は嬉しいんですけど、俺友達と遊ぶ時間なくなるのはちよつと……それに、俺も親に相談して見ないことには……聞いてみますね」

収入源になるのはありがたいし、もしかしたらカッコ良い洋服を着た自分を、透や円香に見てもらえるかもしれない。

けど、勝手に決められる話ではない。それに、菅谷の勝手なイメージは「モデル↓芸能界↓ドラマデビュー」とかで時間取られるの嫌だ」というざつくりしたイメージがあった。

そんなわけで、スマホを取り出し、電話を掛けた。

「もしもし、父ちゃん？」

『どした。迷子か？』

「なんかモデルにスカウトされちゃったんだけど。どうする？」

『詐欺だ。室寺を送るから、お前は逃げろ』

「いやもう撮影したあとなんだけど。あ、一緒に撮影した人、白瀬咲耶って人なんだけど、調べてみ？」

『……なるほど。お前はどうしたい？』

「ん、ん……忙しさによるかなって。マドちゃんとかとおるんと遊ぶ時間減るのは嫌だけど、でも父ちゃん達に頼らないで小遣い稼げるなら、それも良いと思う。だから、週

に2〜3回くらいなら」

『いや、シフト制じゃないから週に2〜3回とかそんな風には決められないと思うよ。あと、バイトしてようと、それが成績落ちた時の言い訳にはさせないぞ』

「大丈夫……だと思う。成績見たでしょ？　すげくね？　マジで理科系科目、今のところ100点以外取ったことないよ。てか100点以外の取り方を知りたい」

『……わかった。責任者の人と代わって』

とこのことで、菅谷はスマホを偉い人に差し出した。

「何？」

「代わってって」

「え、お、親父さんど？」

「うん」

そんなわけで、電話に出た。しばらく話したと思ったら、急に電話越しなのにペコペコと頭を下げ始めた。なんの話をしているのかは分からないが、よほどの内容なのだろう。「え、す、スポンサーの……社長？　あ、はい。ええ、週に2〜3回……はい。はい。あとバレンタイン、ホワイトデー、クリスマス、3月31日、5月4日、10月27日は必ず空ける……はい、はい。分かりました。……え、万が一の時？　キン肉バスター？　それ一応、プリンスカメラハメから授かった殺人技……あ、いえ、何でもないで

す。分かりました。失礼しました」などという話が聞こえてきて、ようやく電話が戻ってきた。

「父ちゃん、何の話してたの?」

『何でもない。じゃあ、頑張れよ』

「あーい」

それだけ話して、電話を切った。

「よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくお願ひ申し上げます」

「どしたの?」

「どうもしてないのでございます」

そんなわけで、バイトする事になった。

便利な時代になった。

12月31日。ようやく煩わしい忘年会などから解放された菅谷は、のんびりと伸びをしながらい実家のコタツに籠る。

三人のグループトークルームに、久しぶりのメッセージを送った。

LIKA☆『こんばんは』

LIKA☆『起きてる?』

その直後だ。グーツグーツと二回、スマホが震える。しかし、トークルームを開いたままの時は、スマホは震えない。

つまり、二人以外からのメッセージになる……と、思い、トークルームを選ぶ画面に戻った。

「?」

不思議なことに、円香と透、個別のルームでメッセージが届いていた。

マドちゃん『起きてる』

とおるん『起きてるよー』

……なんで別々で? と、片眉を上げる。しかし、全く同じタイミングで送れるもの

だ、もしかしたら一緒にいるのかな？　なんて思ってしまった程のタイミングだった。

とりあえず、グループプチェインにそのままメッセージを流した。

LIKA☆『なんで個別でメッセージ？』

LIKA☆『何かのドッキリ？』

しかし、二人は相変わらず別のメッセージで流して来る。

マドちゃん『は？　何が？』

とおるん『ん、なんとなく』

理由をはつきり言わないあたり、深刻だなと菅谷はすぐにピンと来た。

とりあえず、二人に自分も個別でメッセージを送信した。まずは、上の欄に来た円香から。

LIKA☆『何かあった？』

続いて、すぐに戻って透のトークルームに戻り、メッセージを送る。

LIKA☆『何かあったの？』

すると、円香からすぐに返信が来たのか、ヴァツと震える。

マドちゃん『別に何も無い。気にしなくて良い』

LIKA☆『いや何も無いことないでしょ。気にしないのも無理だよ』

それを返事した直後、今度は透から返事が来た。

とおるん『喧嘩した。樋口と』

L I K A ☆『え、何があったの？』

すぐに脳を切り替える。ホント、幼馴染でなんでここまで反応が違うのか気になるところだ。

……が、気になつても気にする余裕もなく円香から返事のバイブが来た。

マドちゃん『あんたには関係ないから』

マドちゃん『それより、そっちは平気だったの？ 色々と』

L I K A ☆『平気だったけど平気じゃなくなつたよ』

L I K A ☆『関係ない事ないから』

なんで一々、そうやって素直に話さないで話を逸らそうとするのか。もう透から喧嘩したと裏は取れてるし、確認する必要が……あ、また透から返事が来た。

すぐにトークルームを戻って内容を確認する。

とおるん『ちよつと意地の張り合いになつて』

とおるん『三日くらい喋ってない』

L I K A ☆『え、なんでそんなに……』

とはいえ、意地の張り合いになつたのなら、もう原因は割とどうでも良いのかもしれない。

なら、普通に謝れば良いことでは……と、思ったが、それが出来ないから意地の張り合いになっているのだろう。

どうやって解決しようか考えていると、またすぐに円香から返事が来て、脳内を切り替える。……なんの話してたっけ？ と、ログを見ながら、新着メッセージも覗く。

マドちゃん『ないでしょ。関係なんて。あんたはそっちにいるんだから』

LIKA☆『何それ。別々の場所にいれば無関係とか、そんな薄い縁だったの、俺達』
少しイラツとして、棘のある返しをしてみました。慌てて自分を落ち着かせて続きを送る。

LIKA☆『マドちゃんが三人でいられるようにしてくれてるみたいに、俺も三人でいられるように手を尽くしたいから』

LIKA☆『だからそんな事言わないで』
ふう、と少しため息。透と円香の喧嘩を仲裁するのに、自分まで喧嘩腰になつてどうするのか、と落ち着かせる。

……と、透から返事が来た。落ち着きと一緒に、そつちとどんな会話してたか思い出した。

とおるん『部屋の掃除を手伝ってもらったのに、少し嫌な態度とつただけ』

とおるん『そのうち仲直りできると思ってたんだけど、機会がなくて話せなかった』

そういうものなのだろうか？ と、二人以外に友達はいなくて、その上で拳で語る以外の喧嘩をした事もない菅谷は、どうしたら良いのか考える。

とりあえず……素直になれば良いのでは……いや、だから意地の張り合いみたくなくなるのなら、それは無理だ。

素直にさせるしかない。……つまり。

LIKA☆『じゃあ、冬休みの間、俺が戻るまでずっとそのままが良いの？』

LIKA☆『市川と福丸の合格祈願に、四人で初詣行くんでしょ？』

それだけ送った後で、円香からまたメッセージが届く。……二人同時にチェインでやり取りするの、思ったより大変だ。

さっき何を話して……そうだ。ちよつと言いたいこと言ってしまった後だ。

マドちゃん『声聞きたい』

「えっ」

ちよつ、透とも今やり取りしてるからそれは難しい……と、思っていると、透からもすぐにメッセージが届いた。

とおるん『構って』

とおるん『電話したい』

お前もかよ！ と頭の中で焦る。正直、菅谷も声は聞きたいが、二人いつぺんに一人

で電話するのは……いや、やる前から無理だと諦めるのは違う。何せ、ここは実家。家電話もあるのだから。

LIKA☆『ちよつと待つてて』

二人にそのメッセージを送ると、部屋を出てリビングに向かった。家電話の前に立つと、右耳にスマホ、左耳に電話の受話器を当てて、二人に電話をかけた。

『あ、リカ?』

『もしもし』

「もしもし、菅谷だけど」

『……何この番号?』

「実家のだよ」

『実家? あ、今?』

「そう」

会話が齟齬が起こらないよう返事をしつつ、頭の中で「自分は聖徳太子……」と言い聞かせる。

「で、どうしたの?」

『どうしたら良いの?』

『確かに、このままは嫌だなんて』

二人の言葉は確かに聞こえた。さて、二人に対してどうやって返事をしたものか。さつきみたいな会話を続けければ、いずれ二人同時に会話をしている事がバレる。

「なら、簡単でしょ。とりあえず、今まで通り一緒にいなよ」

『え、なんで?』

『どういう事?』

小首を傾げているであろう二人に、続けて菅谷は言った。

「三日間も口聞いてないから解決してないだけだから。二人で何かしても良いし、何もなくても良いし、いつもみたいに言いたいこと言っていれば良いじゃん。とおるんとマドちゃんなら、それでなんとかなるよ」

『……』

『……』

割と本気で思ったことを言った。幼稚園から一緒なら、喧嘩だってそれなりにしてきてただろう。今更になって他人にどうこうしてもらうより、自分達で話あってくれた方が絶対に良い、と思った。

すると、スマホに連絡が届く。グループチャットに、二人から連絡が来た。

とおるん『起きてるよ。もうすぐ年末だし』

マドちゃん『リカこそよくよく夜更かし出来てるじゃん』

何事も無かったかのように会話を始める二人。それはそれで結構だが、それなら通話には要らない気がする。

正直、せつかく久しぶりに声が聞けたのだ。このまま切るのは惜しいが、せつかくなので二人で仲直りしてから、改めてグループ通話してもらいたいものだ。

「二人とも、そつちで会話するなら、電話切つて良いよね？」

『二人とも？』

「あつ……じ、じゃあ仲直りしたらまた電話してね」

半ば、誤魔化すようにそう言つて電話を切つた。これで、なんとか仲直りしてくれる事を祈るばかりだ。

まあ、心配ないとは思うが。必要なら自分に電話してくれば良い。そう思つて、しばらく待機した。

×× 今年も残り30分。円香と透はコンビニまで行こうと思ひ、家を出た。すると、お互いの家からお互いが出てきたものだから、目を丸くする。

「……浅倉」

「樋口……」

「何処行く気？」

「コンビニ。そっちは？」

「……同じ」

「わお、超奇遇」

とのことで、二人でコンビニに向かった。言えない、一応謝る為、何かコンビニで買って、それをお詫びのつもりで持っていこうと思つてた、なんて言えない。

「……一緒に行くこうよ」

「……んっ」

透に声を掛けられ、円香は従つた。二人並んで、のんびりとコンビニに向かう。

「さっき、リカと電話してた？」

「うん。家電に掛けて」

「やっぱり」

「……てことは、そっちもあれに相談したんだ」

「した。……というより、聞かれたから話した」

「ふーん……まあ、私もしつこかったから話してあげたけど」

一体どのスタンスで話しているのか、と本人がいたら怒られそうな会話だったが、いないので問題ない。

「……ごめん」

「許した。ごめん」

「許した」

「はい、終わり」

「……んっ」

終わった。秒だった。もうあんまりキツカケとか関係なかったので、当たり前と言え
ば当たり前だが。

「そういえば、結局掃除は終わったわけ？」

「うん。私の部屋、超ピカピカ」

「ふーん……ま、なんでも良いけど」

「ちゃんと飾ってあるよ。樋口とお揃いのピアス」

「あ、そう。そんな高くない奴だけど」

「別に、値段は求めてない」

正直、この歳になるまでずっと一緒にいて、またお揃いみたいな真似をすることにな
るとは思わなかった。そういうのが再び出来るのは、菅谷という異分子が入ってきたお
かげかもしれない。

「ね、樋口」

「何？」

「やっぱ私、樋口のこと大好きだわ」

「っ…………な、何急に…………」

「ん…………いや、リカが実家戻って、樋口とも喧嘩して。なんか…………ずっと、暇だったから」

「…………リカがいなかったからでしょ」

「そんな事ないよ。夏休みの時は別に寂しくなかったし」

それは正直、まだ好意を自覚する前だからだと…………いや、そういうのは無自覚だろうと自覚してしようと、寂しさは感じるものだろう。

その時の差は、やはり自分がいたかいないか、ということだろうか？ だとしたら…………少し気恥ずかしい。なので、話題を変えた。

「…………ていうか、ここ数日くらい、何してたの？ 暇だったって言うけど」

「掃除。あとはずっとコタツにいた」

「一緒か」

「樋口も？」

「私がダラダラしてたのは31日だけだけど」

透の母親経由で添い寝したことが母親にバレた円香は、父親に黙ってもらったために、大掃除を割と色んな場所、手伝い続けた。

おかげで綺麗にはなったが、円香は割と疲れた。

「ふーん、お疲れ」

「うるさい」

「じゃあ今日はわりとゆつくりできたんだ？」

「出来た。……でも、暇だった」

「一緒じゃん」

菅谷は菅谷で忙しかったのだろう。チェインが来る事はなかった。だから、向こうからチェインが来たさつきはとても嬉しく思ってたりする。

そうこうしているうちに、コンビニに到着した。

「樋口、何食べたい？」

「別に、特にない。……あんたは？」

「私も」

「……なんでもいいから」

「じゃあ、樋口もなんでもいいから言ってよ」

一応、二人とも仲直りは済んだとはいえ、お互いのために食べ物を買ってきたのは変わらない。

そして、今のやり取りでお互いに何をしにきたのか分かってしまった。本当に分かりやすい幼馴染である。

そんなわけで、まずは透が食べたいものを言った。

「じゃ、私は肉まん」

「この時間から？」

「大丈夫でしょ、一日くらい」

「年明けにリカとあつて『とおるんって……そんなだった？』って言われても知らないから」

「大丈夫でしょ。そんな言われたらとつちめるし」

「あつそ」

菅谷が大丈夫ではなさそうだが、円香はスルーする。菅谷がどうなっても知ったことではない。

「樋口は何食べる？」

「……ピザまん」

「私より太る奴じゃん、それ」

「うるさい」

話しながら、お互いに買うものを購入した。コンビニを出ると、そのまんじゅうをお互いに交換する。

「はい。お詫び」

「なんの茶番？」

「自分だつて買つてゐるくせに」

「……まあ。こういうのは形が大事でしょ」

「ぐだぐだだけどね」

話ながら、家の前で二人で並んで食べる。ハムつと頬張り、咀嚼した。

「美味し」

「……こういうのも、たまには良いかも」

「うん。暖まるね」

「それは微妙」

「あれ」

何せ、見上げれば真つ暗な冬空だ。雲がちらほら見えるが、それは寒さに拍車をかけるだけなのだから、なおさらだ。

「……来年も、一緒にいようね」

「リカも入れて三人で？」

「うん。……あ、やっぱ五人？」

「雛菜と小糸も？」

「いた方が良いでしょう。リカと仲良くするのは許されないけど」

「……まあそうだけど。でも、雛菜とか絶対言うこと聞かないと思うけど」
「平気でしょ」

「あんただけならまだしも、私も一緒だし」

「え？ 樋口と雛菜、仲良いじゃん」

「……」

もう訂正するのもやめた。どこをどう見たら仲よく見えるのだろうか？

「小系ちゃんの方が強敵になるんじゃない？」

「何処が？ 小系は平気でしょ」

「いや、ペットっぽいから。なんかの間違いで猫耳か犬耳がついた時には」

「……つけなきや問題ないから。絶対につけないで。つけるなら私の前だけにして」

正直、見たい円香だった。

さて、そうこうしている間に食べ終えてしまった。ゴミをくしゃつとまとめて、二人とも各々のポケットにしまう。

それと同時に、ポケットからスマホを取り出す。菅谷からメッセージが来ていた。

LIKA☆『仲直りしたー？』

LIKA☆『したら教えてー』

LIKA☆『久々に声が聞けて嬉しかったからー』

自分達で解決させた割に、かなり気になっていようだ。
電話しても良いのだが、そろそろ普通に寒くなってきた。

「帰るね」

「私も」

「樋口、良いお年を」

「……ん」

×それだけ話して、二人は家の中に戻り、電話をする事にした。

×さて、それから数日が経過した。菅谷はようやく一人暮らしの地に戻って来る。

荷物を背負って、疲れた顔で自宅に入る。もう昔からとはいえ、やはり正月が一番、疲れものだ。

もう荷解きする元気もなく、菅谷は手洗いうがいだけして、コタツの中にモゾモゾと入った。

今日は、ここで寝ようかな……なんて思いながら瞳を閉じて、本当に意識を失うまで早かった。

そのまま眠りこけてしまった。

〈12時間経過〉

ふと目を覚ますと、朝になっていた。ちゅんちゅんと鳥が鳴……いてるわけではないが、中途半端に開いているカーテンの隙間から日差しが差し込まれ、眩しさが鬱陶しくて意識を取り戻さざるを得ない。

ノロノロと身体を起こし、伸びをしながらコタツから脱する。

「いちち……背中と腰が、痛い……」

身体がなんか固くなった気さえする。というか、何時間寝ていたのだろうか？ 昨日、こちらに付いたのが0時半ごろで……現在は……。

手元にあつたりモコンでテレビをつけて時間を見ると、思わずビツクリ。

「……え」

1月4日、12:30。寝過ぎた……以前に、だ。昨夜の透と円香とのチェインの内容を思い出す。

とおるん『じゃ、明日は12時に駅前ね』

マドちゃん『遅れたら眼球にデコピンするから』

「……」

既に、30分の遅刻である。それも、昨日風呂にも入らずに家に帰ってきて、速攻寝込んだ体で、だ。控えめに言って大ピンチである。

「やっぱああああー！」

まずはスマホを見ると、チェインからメッセージが。

『新着メッセージが62件あります』

つまり、同じ所からの新着が多すぎて表示しきれない時に出るアレである。というか、これは少し送ってきすぎではないだろうか？

ちよつと恐怖を覚えながらも、恐る恐る中を開く。

↳前略

マドちゃん『ちよつと。だいぶ時間過ぎてるんですけど』

とおるん『?? (ω??) (↑スタンプ)』

マドちゃん『せめて既読くらいつけたら?』

とおるん『? (, ω ,) ?』

マドちゃん『遅れるなら連絡くらいしてくれない?』

とおるん『 (, | ,) ッ 』

マドちゃん『分かった。迎えに行つてあげるから』

とおるん『 (() (*) *) (*) () () () 』

マドちゃん『今、自動ドアの前。開けて』

とおるん『 ? (. | . ⊠) ? 』

マドちゃん『開けて』

LIKA☆『分かった。お年玉あげるから』

LIKA☆『お年玉って言ってもゲンナマジじゃなくて、落としたダイヤモンドの玉』

LIKA☆『嘘嘘、落とした純金の玉』

LIKA☆『分かった。落としたサファイアの玉がついた指輪』

そこまで言つて反応がなくて、そろそろ首を括ろうかと思つた時だった。返事が来たのは。

ただし、チェインではなくインターホンで。

「げっ」

まさか、いるとは。

慌てて玄関を開けると、何も考えてなさそうな薄い笑みの透と、涙目で拗ね散らかしたような表情の円香が立っていた。

「おはよう、ミスター寝坊助。流石、モテる男は少しくらい女性を待たせても物で釣れば何とかなると考えているようで何よりです」

「イ、イヤ、その……そんなつもりは……す、すみません……」

「何その寝癖だらけの顔と頭。本当に今起きた所でしょ。そんなツラでよく私達の前に顔出せたよね」

「や、そ、それは……」

「まあ、あなたは社交辞令の渦の中でお疲れだったんだから仕方ないんですけど。見たところ、昨日の夜、何一つ家事をすることなく眠りこけた様子だし、相当お疲れだったんでしょうね」

「う、うん……うん？」

「とにかく、まあ第一声が謝罪だった事と、まだ疲れが残ってる汚い顔から事情を考慮してあげるから、まずは人前に出れる身なりにしてきて」

「……？」

あ、あれ？　なんかこれ、別に怒られてるわけじゃない？　と、菅谷は少し困ったように冷や汗をかく。

……というかこれ、なんなら労われてる？　透もなんだか楽しそうにニヤニヤしてるし……。

なんてボケつと考えている間に、ジロリと睨みつけた円香が続けて言った。

「早くして」

「あつ、はい！　す、すみません……あ、その前に」

「何？」

「あけましておめでとう、とおるん。マドちゃん」

「……ん」

「おめでと」

×それだけ言って、とりあえず菅谷はシャワーを浴びに行った。

×「あはは、結局新年から何も変わってなかったね」

「笑い事じゃないから」

「ホント、すみませんでした……」

菅谷がシャワーを浴びている間に、円香と透は菅谷の荷物を開け、洗濯物、実家から新しく持ってきた衣類と消耗品などに小分けし、それらをしまい、ついでに朝食も作ってあげていた。ちようど、ついでに透と円香にとってはお昼にもなるし。

身支度が終わったので、ようやく外出である。ただし、もう時刻は14時近くだが。

「ていうか、そんなに疲れたの?」

「疲れたよ……。もうホント、気を遣って気を遣って気を遣って……。途中で気を遣うの飽きてグンタイアリの動画見てたら怒られて……」

「自業自得も含まれてるけど」

「うわ……。でも、大変だったね」

「いや、大変だったから実際。ほんとに」

「私達との約束すっぱかして寝こけられるくらいなものね」

「や、だから悪かったって……」

そんな話をしているうちに、神社に到着した。三人で鳥居を潜る。

「二人とも、初詣行つたんでしょ？ おみくじどうだった？」

「私、大吉」

「私も」

「……れ、恋愛のところは？」

ソワソワした様子で聞かれ、透と円香は顔を見合わせたあと、真顔なのに意地悪そうな表情になる。

「ん……知りたい？」

円香に聞かれ、菅谷は控えめに頷く。

「人のおみくじ知りたがるのか。やらし」

「ね。人に言ったら叶わないのにな」

「それはお賽銭でしょ」

「あれ、そうだっけ？」

「いやあの……教えてくれないの？ 結果」

「別に、あんたが気にするほどのことじゃないから」

「ね」

実の所、二人とも結果には困惑していた。書かれていたのは、円香が「いい加減にしろ」で、透が「あんま長引かせると逆に付き合えなくなるよ」と書かれていた。つまり……なんか、神様に怒られたわけだ。

言われた通り、今年……いや、今年度中に勝負を決めた方が良いのかもしれない、とは思っていた。

「でも……去年の俺のおみくじは大当たりだったからなあ」

「そうなの？」

「なんて？」

「選ぶ必要はない、って」

「……………ふーん」

確かに大当たりである。

「ま、ほんとに気にしないで。どうせ近いうち、意味なくなるから」

「うん」

「え、ど、どういう事……？」

「気にしないで」

話しながら、三人でお賽銭を済ませる。円香と透は二度目だが、以前は小糸と雛菜の合格祈願をした為、今日はまた「三人でずっと一緒にいられますように」と願った。

「何お願いした？」

「や、だから言ったら叶わなくなるから」

「おみくじで良い恋愛の結果が出ますようにって」

「小さ」

「もうそれ叶わないよね」

「いや嘘だから」

さて、続いてはそのおみくじである。ぶつちやけ、初詣の楽しみっておみくじだけだったりする菅谷は、ソワソワしながらそれを引いた。

四角の箱から、にゆるつと手を引き抜く。

「どうだった？」

「ちよつと貸して」

「え、まっ……」

菅谷が見る前におみくじを奪われてしまった。二人ともソワソワしながらおみくじの中を眺めた。

中吉。そんなのどうでも良い。それより恋愛の所……あった。

『男は度胸と器量だよ』

なんで神様に勇気づけられているのか、と呆れてしまった。というか、この神社のお

みくじ、フランク過ぎない？ それとも自分達が引いた奴だけ？

「どうだった？」

「男は度胸と器量だつて」

「……どういうこと？」

二股に備えろつてことだろう。おみくじを返し、菅谷が読んでいる間に円香と透は先に進んだ。

「ほら、帰るよ。リカ」

「え、も、もう？」

「久々に会えたんだし、リカの部屋でダラダラするから」

「リカが疲れてるからつて」

「マドちゃん……！！」

「……浅倉」

それに感動し、菅谷は慌てて後を追う。三人で並んで帰宅した。そんな中、ふと円香の脳天に当たった軽い感触。手を当てると、指の先端についていたのは、溶けた後の雪だった。

「え……」

「どしたの？」

「雪が……」

「え？」

三人揃って空を見上げる。ちらほらと、大きな埃のような雪が落ちて来るのが目に入った。この勢いは積もりそうだ。

「やばっ、雪じゃん」

「明日、やる？ 雪合戦」

「良いね」

子供二人が楽しそうな感想を漏らす中、円香は小さくため息をつく。楽しそうなのは結構だが、雪合戦は普通に嫌だ。このクソ寒い中、何が悲しくて冷たい塊を投げ合わないといけないのか。

「マドちゃんも明日、雪合戦ね？」

「負けたら、罰ゲームだから」

「……」

……でも、二人揃ってにこにここと微笑みながら誘われれば、断る気も失せるというものだ。当日は精々、防御を固めさせてもらおう。

「……まず勝ち負けの判定を教えて」

「お、ノったな？」

「命3個、最初に無くした人の負け」

「意外とシンプル……」

「あっ」

「リカ、どしたの？」

「洗濯物！」

「……なんで今思い出すの」

「じゃ、急ごっか」

「やべー！」

慌てて三人で走って帰った。

理屈と感情は別物だから、最大公約数を探せ。

冬休みが終わり、学校初日。まだまだ雪が残った住宅街で、円香と透はのんびりと待ち合わせ場所で待機する中、透が手元をすりすりさせながら呟いた。

「う〜……さっむ……」

「言わないで。尚更、寒く感じるから」

「樋口はタイツ履いてるじゃん」

「ま、浅倉よりは寒くないけど」

「ふふ、ムカつく」

「悔しかつたら自分も履いてきて」

「触らせて」

「は？ ちよつ待つ……何して……!」

「おお……絶景。エロい黒タイツの下にクマさんパンツ」

「言うな! ていうか、潜るな!」

透がしやがみこんで円香の脚にしがみついている時だった。たっただと走って来る足音が聞こえて来る。

「マドちやーん、とおるーん。お待た……何してんの？」

「私に聞かないで」

「樋口の熊さ……んっ！」

蹴り上げられ、ひっくりかえる透を無視して、菅谷は缶コーヒーを二人に差し出した。

「遅れてごめんね。これ、お詫び」

「ん、許す」

「とおるんも……大丈夫？」

「心配が遅い……」

「ていうか、背中濡れちゃうよ。風邪引くよ」

「うう……優しいのか冷たいのか分からない……少なくとも背中も冷たい……」

「いいから立ったら？」

円香に冷たく言われ、菅谷の手を借りて立ち上がった。

「はい、とおるんもコーヒー」

「ありがとう……おんぶ」

「はいはい」

「リカ、あんま浅倉を甘やかさないで」

「いや、樋口だってコーヒーもらってるじゃん」

「いやその件じゃなくて」

「マドちゃんもおんぶ？」

「私はいいい。人前で表立っていちやつきたくない」

「えー、マドちゃんの方が軽いのに……」

「……リカ、どういう意味？」

「あいだだだだ！ う、嘘ですスミマセン！」

おんぶしている透に髪の毛を引っ張られ、慌てて謝る。離されたと思ったら、今度は円香が菅谷の頬をつねった。

「は？ 嘘ってどういう意味。私の方が重いつて言いたいわけ？」

「ひ、ひふあふつへ！」

「リカー、早く歩いてー。遅刻しちゃうー」

「あーもうっ、分かったよー」

そのまま三人で学校に向かった。

歩きながら、菅谷が小さくため息をつく。

「今日から学校かー……なんかしんどいなあ」

「リカ、学校嫌なの？」

「というより、試験が面倒というか……勉強、やっぱ頑張ると疲れるから」

「浅倉と違つて、ちゃんと勉強してるから、リカは」

「勉強しないと二人と一緒になれないもん」

「紛らわしい言い方しないです。今でも一つにはなつてないから」

「え、紛らわしい言い方してるの樋口じゃん」

「浅倉うるさい」

言葉の意味がいまいちわかっていない菅谷らしい言い方だった。おかげで、円香のストレスは今日も元気に溜まつてしまふ。

「はあ……なんか、あんたらといるとホント疲れる……」

「え……マドちゃん、俺と一緒にいるの嫌……?」

「わつ、酷い樋口……弟に向かつてそういう事……」

「そういうところが疲れる。特に浅倉」

「マドちゃん、お姉ちゃんにそういうこと言っちゃダメでしょ」

「それでしょ」

「……そもそもなんで私が妹?」

なんて、のんびりと話しながら、学校まで歩いた。普通になんかもう姉弟であることは否定しなくなつてきていた。

校舎が見えてきて、なんだか久しぶりの学校に、なんだかんだ言つてソワソワと楽し

みに思えてきていると、ふと円香は視線に気づく。見られている。

……いや、そりやおんぶしながら学校に来れば目立ちもするだろうが、それにしても見られすぎな気がしないでもない。

「とおるんさあ、もしかしてお正月、お餅とかずつと食べてた？」

「うん。なんで？ ぶつよ？」

「聞いたのにぶつの……？ ……い、いや、デリカシーがないかもしれないけど、これとおるんのためを思っ言ってるわけで……」

「言うつてことは、ダイエツト付き合ってくれるんだよね？」

「あ、ほんとに太ったの？」

「……」

「いだだだ！ せ、背中叩くのやめて！ 分かった、付き合う……付き合うからー！」

なんてやってる二人は周りで見られている自覚があるのだろうか？ いや、ないのだろうか？……にしても、今日はやたらと注目を浴びている気がする。新年だからとか？

昇降口についていたので、透を下ろして三人で教室へ。自分だけ離れた席に座った円香は、すぐに立ち上がって透と菅谷の席に向かった。……が、そこにいたのは透のみだ。

「リカは？」

「トイレ」

「ふーん……」

「見られてるよね」

「え？」

「リカ」

「うん」

確かに、なんかやたらとジロジロ見られている気がする。菅谷が。見られるのも領けるレベルのイケメンだが、もうこの学校の生徒なら慣れたはずだ。

改まってここまで注目浴びるほどのことは……と、思っている時だった。ふと視界に入ったのは、隣の席の女子の机の上に置いてあるファッション雑誌。

手に取って中を覗く。そこに載っていた見開き2ページには……どこかで見たイケメンが、見覚えのないイケメンと一緒に土手沿いを歩いている写真が載っていた。

「……は？」

「どしたの」

「これ」

「……は？」

なにこれ……と、色々と思うところはあつた。まず隣の巨乳は誰なのか、そしてなんで雑誌にあのバカが載っているのか。

だが、一番気にかかったのは、なんで隠していたのか、だ。モデルなんてやるのなら、言ってくれば良い。まあ、止めたが。何せ他の女の子に菅谷の見てくれだけは良い顔が知られてしまうから。

……でも、だからってコソコソされるのはもっとムカつく。

「後で尋問するから」

「うん」

なんにしても、まずは尋問……というか、菅谷が戻ってくるの遅い。

あの変なところで勘が良い男は、もしかしたら尋問されることを先読みして逃げたのかもしれない。

「行こっか。こっちから」

「ん」

透の案で、2人で男子トイレの方へ向かった。

すると、そこへ向かう道中、女子生徒に囲まれている菅谷の姿が見えた。

「あ、あの……ここに、サインお願いします！」

「や、だからサインとかなないから……」

「この雑誌、見ました！」

「あそう。あの、教室戻りたいんだけど」

「あと咲耶様のサインもお願ひします！」

「それは白瀬さんに聞いてよ」

……なんか、囲まれている。どちらかと言うと一緒に写っていた人のサインが目当てっぽい。

「リカ」

「あ、とおるん。マドちゃん」

「何してんの？」

「いや、ちよつと捕まっちゃって。雑誌で一回、モデルやっただけなのに」

「ほんとにモデルやってたの？」

「あれ、言ってなかったっけ」

「聞いてない」

少しイラツとした。こいつの中では言ったことになってたのか、と。

「俺、モデルになつたんだよね。年末に歩いてたら、スカウトされちゃった」

「……ふーん」

「モデル、ねえ？」

……つまり、この野郎、自分達に何の相談もなくそういうところに行つたのか、と思つてしまった。……いや、スカウトされたと言っている以上は、不可抗力なのかもしれないな

いが。

「つ、な、何……怒ってる?」

「別に」

二人揃って拗ねたように言ってしまった。ちよつと色々納得いかなかったりするから。

「……相談くらいしてくれても良いのに、つて思わないでもないだけ」

「いや、そんな時間なかったんだよ。父ちゃんには一応、聞いたけど」

「ふーん……」

「大丈夫だつて。ただのバイトだし。それに、マドちゃんとおるんがいるから、白瀬さんとも連絡先交換とかしなかったよ」

「つ……」

そんなことを言われれば、二人とも何も言えなくなる。それと同時に、少しは自分達との関係を意識してくれているみたいで嬉しく思えてしまったり。

「とにかく、俺がモデルなんてやったつて、二人とはずつと遊んでいたいと思ってるから。だから怒らないでよ」

「……嫉妬してる、みたいな言い方やめて」

「ね。モテたらムカつくけど、それ嫉妬じゃないから。なんかムカつくだけ」

「え……いやそんなつもりはないんだけど……ただ、俺なら遊ぶ時間減るのは嫌だつて思うから」

「……」

ダメだ。やはり無意識の菅谷には、口で勝てる気がしない。

二人とも、もう黙ってほんのりと頬を赤く染める中、菅谷は女子生徒に顔を向けた。

「で……なんだっけ。サイン？」

「いや、あの……もういいです。なんか、バカバカしくなるくらいお似合いの方々がいたのを忘れてたので……」

「え、そう？」

「はい……」

そのまま立ち去っていく背中に、菅谷はひらひらと手を振る。気楽なものだが、透と円香は眉間にシワを寄せる。なんだかお似合いとかなんとか抜かしていたが……まさか、ファンになったとかそんな話だろうか？

中身を知って幻滅する前に諦められて良かったね、なんて呑気なことを言っている場合ではない。

二人が見かけた雑誌は、名前だけは知っている有名なファッション誌。偶々、スカウトされて雑誌に載ったからか、デビューから有名な雑誌に出られたわけだ。

しかも、隣に並んでいた歳上つぼい方も、サインを強請られるくらい有名な人……そんな人に、少なくとも二人の目には負けていないわけで。

つまり今後、多くの人の目に止まる機会が少ないわけではないわけで。

なんなら、もう多くの人に見られてるわけで。

「……リカ」

「何？」

声をかけた円香の顔を見て、透は思わず目を逸らした。その円香の目が、保護者モードの円香の目になっていたからだ。

「サインの練習くらいして」

「え……やだよ、恥ずかしい」

「恥ずかしくない」

「え、それマドちゃんが決めることじゃ……」

「芸能人になったのなら、いつでも恥ずかしくないようにして。じゃないと、私達が恥ずかしい」

「え、な、なんで？」

「それは勿論、あんたのか……」

「か？」

「……姉として」

「え、『か』じゃないの？」

「うるさいだまつてばか」

「う、うん……？」

やはり、素直になりきれないところはあるようだった。ここは本来、嫉妬する場面なのだろうが、やはり円香が相手だと微笑ましくなってしまう透は、そのまま見守った。「ていうか、樋口。リカのファンが増えることに関しては良いの？」

「別に平気ですよ。リカも、ああ言ってたし」

「まあ、そっか」

そう、菅谷だつてそれなりに意識は芽生えている様子だし、共演した女性との連絡先も控えたくらいなのだから、少しくらいは信用しても良いだろう。

ならば、だ。今度は姉として弟を恥ずかしくない姿でメディアに出してやる事が大事になる。

そう決めて、二人揃つて菅谷の手を掴んだ。

「そういうわけだから、これからちゃんと恥ずかしくないようにしてもらわないとダメだから」

「良いね。面白そう。私もリカがネットとかで叩かれるの嫌だし」

「え、俺ってそんなに性格悪いの？」

「合う人と合わない人がいるって事」

「ね。リカ、普通に目上の人に失礼なところあるし」

「とおるんにだけは言われたくない」

「それはそう」

「え、樋口まで？」

「とにかく、教育するから。私達に出来る範囲で」

「お母さんかよ……」

「いや、お姉ちゃんでしょ」

「うん。お母さんはやめて」

×なんて話をしながら、教室に戻った。

×

×
昼休みになった。菅谷と透がくつつけた机で食事を終えた三人は、早速ノートを広げる。

「そんなわけで、サインを考えます」

円香がそう言うと、透がパチパチと拍手する。

その隣の菅谷が、少し恥ずかしげに呟いた。

「あの……なんかたまたま大きな雑誌出られただけで調子に乗ってるみたいで恥ずかしいんだけど」

「だから、恥ずかしくないようにして」

「どんなサインにする？」

「なんか、二人ともノリノリだった。なんだかんだ言つて、モデルをやるのなら菅谷には恥をかいて欲しくないのだろう。」

「英語と漢字、どっちが良い？」

「どっちでも良い」

「真面目に考えて」

「誰のためにやっていると思ってるの？」

「正直、二人がやりたいだけに見えることはないが。とはいえ、菅谷もやはりご厚意を受け取ることにして、改めて考える。」

「やっぱり英語が良いなあ。なんかカッコ良いし」

「英語じゃ、やっぱり筆記体だよね」

「筆記体、書けるの？」

「書けないよ？」

「ダメじゃん」

「練習。今学期の英語の試験、全部筆記体で答えられるくらい練習した方が良い」

「え、そ、そんなに……?」

「わお、藪蛇じゃん。ウケる」

「やっぱ漢字」

「もう遅い」

これ単純に円香が菅谷のことをしごきたいだけにも見えた。

さて、言ってしまったからにはもう遅い。英語でサインを書く人を、透は調べ始めた。

「どんなサインがあるんだろうね」

「なるべく簡単な奴が良い」

「わお、見てこれ」

透がスマホで見せてきたのは、とある芸能人のサイン。なんだか線がグニグニと曲がった後に、漢字で「緋田美琴」と書かれている。

「漢字と英語の合体技」

「すごっ。カッコ良い。でもなんて書いてあるの?」

「……Aじゃない? 緋田の頭文字」

「俺、こういう方が良いかも」

「ふーん……まあ、たしかに見てくれだけ良いって点では、頭文字だけスタイリッシュな

のはリカに合ってるかも」

「マドちゃんって、もしかして俺のこと嫌い？」

「は？ そんなわけないでしょ。怒るよ？」

「え、俺が怒られるの……？」

酷い言い草に、思わず狼狽えてしまった。最近、円香は遠慮がなくなつて、メチャクチャな言い分が増えた気がする。

その隣で、透が口を挟んだ。

「でも、私も良いと思うよ。……なんなら、精神年齢的には漢字じゃなくて平仮名とかカタカナでも良いと思う」

「漢字にさせて、せめて。カッコ悪いの嫌だ」

「書き方次第で、カタカナでもカッコよくなると思うけど？」

「ひらがなは？」

「可愛くなる」

「それはそれでアリだと」

「嫌だよ！」

否定しつつも、頭文字だけアルファベットは確かにカッコ良いからアリな気もしている。

「リカの場合、菅谷だから……S?」

「ただS書くだけじゃダメだから。この人みたいに、かつこよく」

「これカツコ良いの? ミミズにしか見えないんだけど」

「数ある紐状の生物から、なんでミミズをチョイスするの……。虫の例えはやめて」

「マドちゃん、やっぱり虫嫌い?」

「……正直」

目に入った時点で、もはや小糸に頼らないと何もできなくなるレベル。

「だからもし、昆虫園のチケットとか手に入っても、私は誘わないで。行くなら浅倉と行って」

「ちなみに、生き物全部ダメ? 爬虫類とか両生類とかセーフ?」

「なんで絶妙に気持ち悪いとこばつかチョイスするの。ダメじゃないけどなるべくなら水族館か動物園にして」

「とおるんは?」

「私は全部いける」

「やった」

盛り上がるのは結構だが、そろそろサインに話を戻したい。円香が軌道修正しようと思つた時だった。

ふと視界に入った、黒く小さな生き物。それが、廊下から教室内に侵入して来る。
「つ、いやっ……!」

思わず声を漏らし、椅子から立ち上がって菅谷の背中に隠れた。

「? どしたの?」

「つ……ご、ゴキつ……!」

「え……うわっ、マジじゃん」

透も慌てて仰け反りながら、菅谷の背中に隠れる。それを見て、菅谷は吞気に視線を落とした後、それを正面から見下ろす。

直後、カサカサと動いていたものが急に足を止めた。まるで、蛇に睨まれた蛙のよう
に。

そんな中、菅谷の背中にいる円香が、グイグイと腰のあたりを引っ張る。

「つ、り、リカ何してんの? は、早くなんとか……!」

「ん、待ってて」

「はあ? 待つても何も……!」

「下がってたほうが良いよ」

飛びかかってきたらどうするの、と言う前に、菅谷がそう言っただけ動いた。立ち上がり、教室のドアへ向かう。

円香と透は菅谷から離れる。教室のドアの方へ歩いた菅谷は、それに向かつて人差し指を立てると、ちよいちよいと自分の方を指した。

それにより、何が起こったのか、それは菅谷の方へついて行った。

「え」

何今の、と思ったのも束の間、そのまま教室を出て行った菅谷は、人差し指を上立てる。その上に、飛んだそれが止まった。

そして、窓を開けるとそのまま指の先から飛び出していた。

「またおいでねー」

挨拶して、窓を閉めた。その様子を、教室の入り口から隠れながら見ていた円香と透は、思わず眉間に皺を寄せて、固まってしまっていた。

それに目を向けた菅谷が、怪訝そうな顔で小首を傾げてくる。

「大丈夫？」

「こっちのセリフ」

「え、な、なんで……？」

「いや、あんたホントなんなの？」

「今、まさか対話でもしてた？」

「まさか。ただ、出ていくようにお願いしただけ」

「それ対話じゃ……」

「化け物……」

「なんで?」

あんまりな言い草に、シヨックを受けてしまっていた。

いや、それ以前に、だ。円香も透も、とりあえずそういうのはやめて欲しかった。害虫を蹴散らしてくれるのは結構だが、だからと言って虫と対話できるのはやめてほしい。

「それ、人前でやらないようにね」

「え、な、なんで?」

「モデルがGと対話とか、普通に怖いから」

「えー、でもだからって殺すのも嫌じゃん」

「嫌なの?」

「嫌だよ。余程なことがないと」

本当に何処までも博愛主義者な奴である。まあ、そういうところも嫌いじゃないが。

すると、その菅谷に透が言った。

「でも、ありがと」

「別にいいよ」

「……どうでも良いけど、手は洗ってきて」

「あ、うん」

そのままトイレに行く菅谷を眺めながら、とりあえず円香と透は、あんなんでも頼りになる事を改めて実感した。

×

放課後。学校が終わり、円香は透と菅谷の席に向かう。

「帰ろ」

「ん」

「どっか寄る?」

「良いよ」

なんて話しながら歩いていると、菅谷のスマホが鳴り響く。

「ごめん、俺だ。……もしもし?」

『もしもし、明里くん?』

「あ、どうもーお世話になってます」

『いえいえ。さっそくだけど、来週の日曜日は平気?』

「良いですよ」

『じゃあ、その日にちょっと撮影したいから来てもらえる?』

「分かりました」

『詳細は後でメールを送るので、ちゃんと確認してね』

「はい」

『では、失礼します』

「あい」

それだけ話して、電話を切った。

「何？」

「日曜日、撮影だって」

「へー……」

「ふーん……」

やはり、二人とも少し不安だった。大丈夫だろうか。恥かかないだろうか？ もしくは、本当は悪いバイトで変な写真とか撮らされたりしないだろうか？ いや、菅谷の父親が絡んでいる以上、変な事はないのだろうか……。

「……」

「……」

「いくらもらえるんだろ」

ダメだ、この子お給料にしか興味ない。流石の透も心配にな……。

「リカ、前はいくらもらえたの？」

「えーつと……いくらだっけ……たくさん」

「マジかー。じゃあこの後、タピオカ奢って」

「良いよ」

「やったね」

いつもの透だった。本当にどいつもこいつも、と言う感じだ。

……いや、多分さっきの不安は全部、建前。結局、自分の中で嫉妬に近い理由はあるようだ。自分達と遊ぶ時間はわずかであっても減る、それが嫌だ。

でも……両親に頼らないでお小遣いを稼ぎたいと言う気持ちもわかる。それ故に、思わず後ろからキュツと円香は菅谷の裾を握る。

「？ マドちゃん？」

「……」

「あ、そうだ。じゃあ今日は、三人でリカの部屋行こうか」

透が提案して、円香は少し嬉しそうな無表情に変わる。

その後に続いて、菅谷は小首を傾げた。

「良いけど……なんで改まって？」

「ん、樋口が行きたそうにしていたから」

「……別に家じゃなくても良いし」

「え、うち来たくない？ 実家がふるさと納税でもらった北海道のどつかのいくらあるんだけど」

「……行く」

そんなわけで結局、菅谷の部屋に行くことになった。

三人揃つてのんびり歩いていると、菅谷が「あつ」と声を漏らす。

「どしたん？」

「その前に本屋、行っても良い？」

「なんの凶鑑の発売日？」

「え、なんで凶鑑ってわかるの？」

「わかるから」

本当に分かりやすい男、と円香はため息をついた。

さて、そんなわけで本屋へ。店内に入り、サクサクと菅谷は自分が買う予定の本が売っている場所に向かう。

その菅谷の背中を眺めながら足を止める円香を見て、透が聞いた。

「どしたの？」

「店から出るとき教えて。虫の本なんて見たくない」

「分かった」

そんなわけで、円香だけで別の自分が興味出そうなファッション誌の方へ向かう。モデルの彼女の片割れになるのなら、自分も恥ずかしくない服を着ないと……と、思っている、ふと目に入ったのは、菅谷が載っている雑誌。

……そういえば、さつきは一瞬しか見ていないから、改めてどんな様子なのか見られていない。

「……」

いや、でもなんかこれで買うのはなんか好きな子が映ってる修学旅行の写真買うみたいで恥ずかしい気がする。特に、菅谷や透にばれた暁には死にたくなる事は必須だ。

「……………」

や、でもバンドやってる友達のリブチケット買うとかはよくある話だし、別にそこまで意識しなくても良い気がする。特に、自分は本当に菅谷のことが好きなのだから、周りやバカ二人の目なんか気にしなくて良い気はする。

「……………」

しかし、自分のスマホと家に隠してある秘蔵の写真を収納するファイルには、菅谷と透との思い出が大量に詰まっている。誰でも手に入る写真をお金を出してまで手に入れる必要があるのだろうか？ それも、お金以外にも大きなリスクを払ってまで。母親

にバレても死にたくなるだろう。

「……………」

いや、逆に誰にでも手に入る写真を入手し損ねて、果たしてファンと言えるのだろうか？ せっかくの彼のデビュー雑誌……手元に残しておきたい。雑誌というのは基本的に期間限定。発売期間に買っておかないと、もう手に残せないのだ。もし、万が一、他の菅谷ファンと話す機会があつて「え、デビュー誌持っていないんだ（嘲笑）」なんて言われた暁にはブチギレる自信がある。

「……………」

とはいえ、やはり……いや、しかし……待て、それはつまり……と、頭の中で言い訳に言い訳を重ね続けた結果……雑誌を三冊手にとつた。

それを制服の下に隠し、辺りを見回しながら慎重にレジへ向かう。周りから見たら万引き犯だろうが、それ以上に妹と弟に知られる方が嫌だ。

さて、レジに到着。幸い、誰も並んでいなかった。円香はさつさと服の下から雑誌を出す。

「お願いします」

「お、お預かりします……？」

怪訝な様子で雑誌を受け取られ、思わず聞いてしまう。

「……なんですか」

「いえ、なんで服の下からなのかと。後なんで同じものを三冊なのかと」

「違いますから」

「はい？」

「別にこの雑誌のモデルの方のファンとかではありませんから」

「あつ……（察し）」

すぐに察されてしまったような反応だ。言わなくて良いことを言った、と円香も少し反省する。

そんな中、店員さんが気を遣ったように話をかけてきた。

「カッコ良いですよね。白瀬咲耶様。分かりますよ」

「は？」

しかし、それは逆効果。円香はジロリと睨み付けてしまう。そんな女より、よっぽどカッコ良い奴が隣に映ってんだろ、と言わんばかりだ。

「ぜんぜん違います。その人じゃありません。いいから早くして下さい」

「は、はあ……」

万引き手前かと思っただけなら急に自白し始め、その後否定した言葉を否定すると言う困った客になっている円香だった。

店員さんも一周回って微笑ましくなりながら、レジを応対した。お金を払い、それをすぐにカバンにしまう。

レジから出ると、ふと目に入ったのは透の姿だった。

「何か買ったんだ？」

「つ、う、うん……悪い？」

「別に？」

「リカは？」

「今、並んでるよ」

「……あ、そう」

そのままとりあえず二人で菅谷を待った。とりあえず、家に帰るまで鞆は開けられない、そう強く思いながら。

妄想毒身。

帰った円香は、すぐに後悔していた。今日、バレなかったのは奇跡だが、それでも今後、家に置いておく以上はなんとかバレたくない。

さて、買ったのは三冊。まず一つは、読む用である。これは、隠し場所が見つかったら読むとして……次の一冊。これは、保存用である。これも、隠し場所を探すまで待機。さて、残りの一冊。これは、菅谷の写真を切り抜くためのものだ。そして、それをノートに貼り付けてスクラップとして保存していく……完璧だ。

とりあえず、のんびりと作業を進める。まずは雑誌から菅谷が載っているページを探す。

「……あつた」

見つけたので、早速ハサミで……と、思ったところで手が止まる。モデル誌の菅谷の写真は、白瀬咲耶と一緒に。その仕草……やたらと作つたようにカッコよく見えるのは、執事の経験を活かしてのことだろう。

そして、隣にいる白瀬咲耶も、ネットでは「王子様」と呼ばれている（さつき調べた）程度にはイケメン美少女だ。

だから、執事の仕草がやたらと映えて見えるのだろう。

「……」

なんにしても、作り物の仕草に嫉妬する程、円香は子供でもなければ盲目でもない。菅谷の良い所はそこではないから。

だから、そのページをぼんやり眺めているのは、単純に見惚れているからだった。

というか、なんなら白瀬咲耶に関しても、なんか普通にカッコ良いな、と思わないでもなかった。ふたりそろって、絵になり過ぎている。

それに引き換え……自分は、菅谷の隣に立てるほど、ビジュアル的に映えているのだろうか？ と、少し不安になってきた。

……にしても、やはりプロのコーディネートで合わせられているだけあって、カッコ良い……なんてブーツと見惚れている時だった。

「円香。お風呂……」

「っ！」

「……何見てるの？」

「っ、ちがつ……こ、これは……！」

入ってきた母親の目に入ったのは、同じ雑誌が三つ。そして、円香の手元の菅谷の写真だ。

その時点で、頭の中で「娘の彼氏（実質）がスカウトされた↓突発的なスカウトで有名な雑誌に載れた↓それを知った娘が保存用、観賞用、スクラップ用の三冊を購入した」のチャートが組み上がったようで、母親は真顔のまま告げた。

「……円香。気持ちには分かるけど……ストーカーみたいには、ならないようにね」
「違うから。全然。ホントに」

「あと、隠し場所はあまりガッツリ隠さない方が良いから。隠そうとすると、不自然さが際立つからね」

「だから、違……！」

「お風呂冷めちゃうから、早めに入りなさい」

言いたい放題言って、部屋から出て行ってしまった。本当に腹立たしい親である。

……だが、まあバレた以上は、逆に考えて今すぐに隠し場所を探す必要は無くなった。お風呂に入りながら、ゆっくりと何処にしまうかを考えることにした。

さて、日曜日。菅谷はその日に撮影。従って、今日は菅谷と遊ぶことは出来ない。

なんだか、ソワソワソワしてしまう。何がソワソワするって、なんかもう色々ソワソワする。ソワソワソワソワする。大丈夫だろうか？ 自分と透以外に人は来るわけだけど、ちゃんとやれているだろうか？ やっぱり、ソワソワする。

この前、雑誌を隠した部屋の中で一人、ウロウロと歩き回っていると、スマホが震えた。透からだ。

とおるん『樋口、今日暇？』

……暇ではあるが、落ち着いていない。いや、透と一緒になら落ち着くかも、と思ったので、そつちにいくことにした。

マドちゃん『そつち行く』

こつちに來られると困る。一応、隠してあるとはいえ、菅谷の雑誌を隠しているから。だが、次に來た返事は、思わず円香の胸をドキッと高鳴らせるものだった。とおるん『ごめん、もう部屋の前にいるわ』

「……は？」

嫌な予感がして扉を開ける。本当に透は立っていた。

「何してんの……？」

「ん、暇してるかなって」

「……してたけど」

「もしかして寝てた？」

「寝てない。……まあ、入って」

とりあえず、中へ招き入れた。大丈夫、隠したんだしバレやしないはずだ。

「で、何しに来たわけ？」

「だから遊びに」

「その鞆の中、数学の教科書？」

「そう。宿題を写させてもらいに」

「それ遊びじゃないでしょ」

「良いじゃん。見せて」

「……」

この幼馴染は本当に困ったものだ。少しは菅谷を見習った方が良い……というか、本当に菅谷の方が兄で透が妹と言った方が良い気さえするというものだ。

「じゃ、はい。宿題」

円香は鞆からノートを取り出して貸した。まあ、万が一見つかった時のために、今は貸しを作ったほうが良い気がしたからだ。

「サンキュー」

「じゃないから。今回だけだから」

「分かってるって。次は私が宿題見せる側だから」

「期待しないで待ってる」

なんて言いながら、透が宿題を写し始める。ま、この様子ならばれることもない。

そのまましばらく透が宿題する様子を眺めた。透が来て、少し変な不安は和らいだ。やはり、誰かと一緒にいられると安心する。

「浅倉、何か飲む？」

「ん……ウーロンハイ」

「バカ言わないで。てかそんなもんない」

「じゃあ、コーヒー」

「ん」

それだけ言って、円香は部屋を離れた。今頃、菅谷は写真を撮っている頃だろうか？中々、近況報告が来ないのは菅谷らしくない気もするが……まあ、そんな暇はないのかもしれないし、気にしないようにするが。

……出る杭は打たれていないだろうか？ それとも、実はものすごく苦勞していないだろうか？

「~~~~っ！」

ダメだ、一人になると色々考え過ぎてしまう。あのバカ、なんでいない時まで人を心配にさせるのか。

モヤモヤしながら、とりあえず透でストレス発散する為に、さっさとコーヒーを淹れてしまうことにした。

お湯を沸かし、コーヒーの粉が入った袋を裂き、マグカップ二つに注ぎ、お湯が沸くまで待機。

「……………」

菅谷は、変な女に引つかかっているのではないだろうか？

「つ、いやだから……………」

別のことを考えなければ。

頭の中で源氏物語の序盤を唱えながら沸くまで待機し、終わったらお湯を注いだ。

カフェオレを二つ用意し、それを持って自室に戻った。とりあえず、透と話してあんまり菅谷の事を考えないようにする。

「お待たせ。カフェオレ……………」

「あっ」

「は?…」

透は、隠しておいた雑誌を読み耽っていた。

「すごいね、樋口。超ファンみたいじゃん」

「……………なんで見つけてるの」

「え? 引き出し漁ってたから見つけた」

「なんで勝手に引き出し漁るの」

「いや昨日、三冊買ってるの見えたから。樋口ならどこに隠すかなって」
「……」

結局自分の所為だったことに心底腹を立ててしまった。迂闊だった、いやほんとに。……いや、どちらにしても部屋を勝手に漁るのはやめて欲しいわけだが。見られて困るものはたった今なくなったわけだが、透の場合、漁ったものを元に戻さないから。

「……言つとくけど、リカに言つたらぶつ飛ばすから」

「分かってるから。これ、口止め料でしょ」

「そういうこと」

宿題を指しながら、透は理解したように告げていた。ついでにコーヒーも口止め料 (part 2) である。

× そのまましばらく宿題を片付けた。

×

さて、それから二時間。透と円香が一緒にお昼を食べ終えた頃の時間。三人のグループチェインに、一通のメッセージが届く。

LIKA ☆ 『終わった』

LIKA ☆ 『二人とも何処いる?』

いるのは家。来たいのなら来ても良いだろう。

とおるん『家』

マドちゃん『あんたのじゃなくて私のでしょ』

L I K A ☆『行くから』

L I K A ☆『待つてて』

なんか、いつもより淡泊な気がする。何かあったのだろうか？ ……まあ、文面だけ

らかもしれないが……。

とおるん『何かあったの？』

こう言う時、のうのうと聞ける透の性格は便利だったりする。すぐに返事が来た。

L I K A ☆『何もないから』

「うわ、あつた奴じゃん」

「ね。分かりやす」

秒で看破した。何にしても、愚痴りたいことはたくさんあるのだろう。なら、たまには聞き手にまわってやっても良いかもしれない。

とりあえず「おいで」とだけ送っておいて、しばらく待機することにした。そこでふと思ったのは、自分の雑誌が今度は菅谷にバレるかもしれないと言うこと。

割と恥ずかしかったのに、それが本人にバレるかもと思つたら、その破壊力は計り知れない。

「浅倉、集合場所そつちの部屋じゃダメ？」

「？　なんで？」

「リカに雑誌、バレたくない」

「あー……良いよ」

そんなわけで、チエインで集合場所を変更した事を送る。

すると、透が「あつ」と声を漏らした。

「そうだ、樋口。うち今、お菓子ないんだけど」

「良いでしょ、別に」

「や、リカうちに久しぶりに来るし」

「クリスマス以来でしょ」

「いつもご飯とか食べさせてもらってるから、その辺しっかりしたい」

「……」

ホント、透のこういうところが変わったのは、おそらく菅谷の影響なのだろう。意外で仕方ないのだが、悪い変化ではない。少し癪だが。

「……はいはい。じゃ、行こっか」

「ついでに私も雑誌買いたい」

「……そつちが目当て？」

「バレた」

前言撤回。基本的に何も変わってない。強いて言うなら、遠回しな表現はするようになったかもしれない。つまり、前より腹立つ。

「……ま、良いけど。ていうか、なんなら私の一冊あげる」

「え、良いの?」

「保存用とか買ってみたけど、冷静に考えたらよくわかんないし」

「確かに」

次に雑誌に載る時は、スクラップ用と読む用の二冊にすると決めながら、とりあえずお菓子だけ買いに行った。

さて、改まって透の部屋。バイトの疲れは透も円香も真夏に嫌というほど味わった。もしかしたら「何かあった」というのも単純に疲れただけの可能性を考慮し、労う準備はバツチリだ。

机の上のお菓子、座布団、温かい紅茶……などなど。バイトの疲れは何も内容だけでなく、慣れない環境での精神的な面が大きいのだ。

だから、まあ今日くらいは二人とも甘やかしてやるつもりだ。しばらく待機していると、インターホンが鳴り響く。菅谷だ、とすぐにわかった。

「開いてるよー!」

声を掛けると、ガチャつと扉が開く音。そして、迷いのない足音でここまでドスドスと上がってくる音を聞く。

そして、部屋の扉が開かれた。

「ただいま!」

「お、おかえり……?」

激おこだ。かなり。これはもう、本当にマジギレしてるレベル。透と円香を見比べるなり、思いつきりハグしてきた。

「もおおおお! あいつ嫌い!」

「はいはい、どうしたの?」

「落ち着いて」

「俺が代理で出た撮影に本来出る予定だった奴! あいつ逆恨みで俺の仕事取ったとか言つて、人の邪魔めっちゃしたり、スマホ勝手にロック解除しようとしたりしやがって……」

「うーわ……」

「大変だったじゃん」

透でさえ同情したような声を漏らした。確かにそれは逆恨みだししんどい。

「はあ……まあ、他の人はみんな親切にしてくれたんだけどさ……腹立つんだよな、あーいうの」

「まあ、そう言う人もいるって思うしかないでしょ。……それに、リカが何かしたわけじゃないんでしょ？」

「え？ うん、まあ」

「……何かしたの？」

「いや、揉めてたらスタッフさんが仲介に入って、その人連れて行かれた」

「……」

恐らくスポンサーの息子であることを知らされているのだろう。クビにならなかつたら良いね、と言ったところか。

実際、権力ある者の脅しではなく、単純に菅谷が悪いわけでもなかったので、自業自得というべきだろう。

「はーあ……その時にさあ……俺の頭、陰毛って言われてさあ……」

「……」

「……」

「そんなに汚らしいかなあ……天然パーマ」

珍しくシユンとしていた。いや、実際はあんま傷ついてないけど、とにかく思ったこ

とを色々と言いたい気分なのかもしれない。

なら、付き合ってやれば良い。ベッドに座り直した円香は、自分の膝をポンポンと叩いた。

「ん……………来る？　膝」

「……………行く」

素直に菅谷は円香の膝の上に頭を置き、目を閉じた。

「あ……………柔らかい」

「樋口、足太いって」

「は？」

「ち、違うから……………頭の置き心地が良いって事」

「柔らかく大きい枕と同じ感想」

「殺す」

「違うよ、マドちゃん。それむしろとおるんが太いって言うてる」
「え」

「なるほど」

「でも動かないで。……………ちようど、眠くなってきた……………」

「……………ぶふつ、ほんとに動かないんだ」

「……仕方ないでしょ」

本当にお疲れだったのだろう。もう寝息を立ててしまっていた。

「あーあ、寝ちゃった」

「ま……仕方ないでしょ。私達も最初のバイトの日、銭湯行ったし」

「あーね。懐かしいわ。……今度はリカも一緒に行きたい」

「いや、お風呂別れてるから」

「一緒に入っちゃわない？ 混浴」

「………無理」

「考えたでしょ」

「………水着アリなら」

「それはもうやった」

と言うか、やっぱり普通にお風呂は無理だ。提案した透も、冗談のつもりだったから、普通に恥ずかしいので無理だ。

ま、そう言うのは、もう少し菅谷が大人になったら……なんて思っている時だった。

「……あの、お二方、眠れなくなるのでそういう会話は俺がいなくて……」

「……」

「……」

結局、辱められ、ゲンコツを二発、振り下ろした。

さて、もう眠気なんて飛んでしまったので、改まって三人でのんびりとお菓子を食べて始めた。

そんな中、ふと透が机の上のお菓子に手を伸ばす。摘んだのは、ポッキーだ。

「そうだ、リカ。ポッキーゲームやらない？」

「ポッキー……？」

「知らない？」

「知らない。ポッキーで魔法使うゲーム？」

「それ誰も出来ない」

ツツコミを入れた円香は、そのまま透の顔を見上げた。

「ていうか浅倉、いきなり何言い出してんの？」

「ん……：そういうえば、11月はやり損ねたなって思つて。今日、1月11日だし」

「で、ポッキーゲームって何？」

円香の質問にあっさりとは答えると、菅谷が改まった様子で聞いた。まあ、そうならもう円香は関与をやめた。もうオチが見えているからだ。

言い出しつぺの透が、説明し始めた。

「これを両サイドから食べていって、ビビって顔を背けた人が負け」

「度胸試しって事?」

「そう」

「良いよ!」

本当にバカだなこいつ、と円香は思った。度胸試しの一点に夢中で、どちらもビビらなかつた場合を予測出来ない。

「あれ? でもこれ両方ともビビらなかつたら、勝ち負けどうなんの?」

気になつてはいる様子だが、勝敗に夢中らしい。それで良いのか、15歳。

「あー……じゃ、その時は多く食べた方の勝ち」

「なるほど……待ちの戦法は使えないってことか」

そこを深読みするくらいなら、もつと根本的な部分を意識した方が良い。

透は透で土壇場でビビる菅谷が見たいのか、説明する様子を欠片も見せずに、何故か肩と肘の関節を伸ばして準備運動をする。

「悪いけど、勝つよ私」

「いやいや、俺より度胸ある人間見たことないから」

「どの口が言ってるの?」

「サファリパークで仲良くなつたライオンと鼻チューした口」

「私だつて負けないから。樋口、審判」

「何、審判って」

「ポツキー持って。両サイドから啞えるから」

との事で、樋口はポツキーをつまみあげる。透と菅谷が、両サイドから啞えた。

この時点で、円香はさつき浮かんだオチが外れることを察した。……何故なら、菅谷の瞳が爛々としているからだ。透も何も察していないように、無表情のままニヤついている。

「よいい、スタート」

その直後、アホほどの勢いで菅谷がサクサクと迫った。

「ふえっ、ひよっ……!」

一気に半分くらいまで食べ尽くしてくる勢いに負け、透は思わず口を離して仰け反ってしまった。

ちょうど折れた地点でポツキーは床に落ちそうになるが、引くほどの瞬発力で床に這いつくばり、それを口でキャッチする。

「はい、俺の勝ち。とおるん、ビビリ」

ニヤリ、とほくそ笑みながら、ピンつと啞えたポツキーの先端を真上に立てる。仕草だけ見ていればカッコ良いけど、色々と勘違いしててやっぱりカッコ良くない。

これは、透の満たしたかった部分も満たされていないのでは？ と、円香は透の顔を

チラ見すると、真顔だけどキレ顔で新たなポツキーを摘んだ。

「あーそう、そう言う感じで行く」

「だってこれが必勝法でしょ？」

「良いよ？ そつちがそういう気なら」

もう完全に別の競技に変わりつつあった。

ポツキーを受け取り、円香は二人の間に再びセットする。

「構えて」

なんだか円香は円香で、次どうなるか見てみたくなり、ノリノリになってきた。

その号令で、二人は両サイドからポツキーを啜える。それにより、円香は手を離れた。

「スタート」

その直後だ。かじり始めた菅谷とは真逆に、透はポツキーを一気に吸い込んだ。

口の中へ一気に吸引される。なるほど、と円香が思ったのも束の間、先端が喉に刺さったらしい。一気に顔が真っ青になると同時に咳き込んだ。

「ゲホッ！ エゲホッ！ ……オエッ！」

咳き込みながら途中で粉々になって発射されたポツキーの食べカスが、真逆に菅谷の顔面に直撃する。

「…………おるん」

「つ……ふふつ……！ ……あ、浅倉、これコーヒー……！」

「あ、ありがと……！」

笑いを堪えながらコーヒーを渡すと、慌ててそれを飲んだ。

「あつっ！」

「プフツ……！」

しかし、ホットである。何を一人でドタバタやっているのか、と円香はまた吹き出してしまった。

しばらく後ろにひっくり返ったまま悶えている透を他所に、菅谷はハンカチで顔を拭く。そして、怒りを露わにしたままひっくり返っている透の上に乗った。

「とーおーるーんー……！」

「い、いちおう……わたしのかち……！」

それは煽りだろうか？ もう菅谷の瞳に迷いは無くなった。

「人の顔に吐き出す奴があるかあああああ！」

「わひやつ！ ち、ちよつ……リカ、今くすぐりはやめつ……あはははっ！」

「樋口レクイエム」

「ひ、ひぐつ……ひぐひ！ あひはらめつ……はははははっ！ へいうか、なんれひぐひま

でだ……ははははははっ！」

そのまましばらく透をいじめた後、ひゅーっひゅーっ肩で息をする透を捨て置いて、改めて円香がお菓子に手を伸ばすと、菅谷がポツキーを自分に差し出した。

「ん」

「え？」

「マドちゃんもやる？」

「え、私はいい」

そう言う子供っぽい遊びは好きではないし、目の前の惨事を見て尚更、やりたいと思わなくなった。今度は自分が吐かれるかもしれないから。

だが、円香も菅谷と会ってから大人っぽさは下がったのだ。つまり、挑発されれば簡単に乗ってしまうわけで。

「ふふ、アム口にビビって戦場にすら立てないジオンの兵士みたい。このままじゃ、この中で一番、度胸があるのは俺かとおるんになっちゃう」

「……………は？ 上等なんですけど」

秒だった。よりにもよって、観覧車でキスをビビって頬にするようなチキン野郎よりビビりと思われるのは死んでも嫌だ。

改まって、二人でポツキーを両サイドから啜える。……やはり、ちよつと顔が近い。少し頬を赤く染めながらも、円香は眉間に皺を寄せて負けじと菅谷を睨みつける。

「……やるよ、リカ」

「かかって来いや」

「じゃ、私審判」

復活した透が、手を挙げた。

「よーい、スタートー！」

直後、二人揃って一齐にサクサクとポツキーを齧り始める。少しずつ顔が近づいて行き、その度に円香は顔が赤くなる。対するバカは競技としてしか見ていないのか、楽しそうだ。

……腹が立つ、人がこれだけ意識しているのに、この野郎は何一つ意識していないことが。こんなバカに、絶対に負けたくない。

そう強く思った円香は、さらに一気に加速し、唇と唇をくっ付けた。

「んっ……んっ？」

文字通りゼロ距離に顔がある菅谷は、そこでようやく顔を真っ赤に染め上げた。これがこのゲームの醍醐味であることを理解したらしい。

それでも円香は離さない。どちらが多く食べたか分からないが、このバカに負けるのだけは御免被るから。

そのまま菅谷の口内のポツキーを、舌で全部回収し、そこでようやく離れた。つうつ

……と、唾液が吊り橋のように繋がり、それをも円香は吸い込み、口元を拭う。

目の前にいる菅谷は、さっきまでの自信満々の表情とは真逆で、目をグルグルと回したまま顔を真っ赤に染め上げていた。

「……はい、私の勝ち」

「……………も、もひかひへ……ホッキーへームっへ……」

「こういうゲームだから」

「……………」

今にも気絶しそうだ。まあ、もう勝つたし、寝るのは好きにしたら良い、と思いつつ円香は何もしなかった。自分も割と大胆なことをした自覚が後になって分かり、オーバーヒート寸前だからだ。

後ろに倒れそうになる菅谷……だが、それを許さない最初の相手。透が菅谷の胸ぐらをつまみ、自分の方へ引き寄せたところで矢神はキャンセルされた。

「っ!?? え、え……………!??」

「ズルイ」

「な、何が……………」

「なんで樋口だと競技になるのに私とはならないの」

「い、いや最初に説明してくれれば……」

「私もリカを照れさせたい」

「そつちが本音!?」

酷い女もいたものである。しかし、こうなったら透は止まらない。というか、円香としても気持ちに分からないわけでもないので、皿の上のポツキーを手に取った。

「両者、構えて」

「ほ、ほんとにやるの……?」

「じゃあ、リカが一番ビビリね」

「……わ、分かったよ……!」

言われて、菅谷がポツキーを啜える。それを見て、透も啜えた。しかし、もうさつきまでの菅谷と違い、真つ赤な顔でサウナから上がった後みたいになっている。

それを見て、透はふふんと鼻を鳴らした。これは勝った、と理解したのだろう。

さらにそれを見た菅谷は少しカチンと来た様子で、少し表情を引き締める。

今度こそ、円香はオチが見えた気がした。

「スタート」

直後、一斉に二人で両サイドから啜えていく……が、菅谷が透の後頭部を掴み、少しずつ上の方から食い込むように食べて行ったことで、状況は変わった。

照れより負けん気が勝ったのだろう。照れで逃げようとする透だったが、腰にまで手

を回され、逃げられなくされる。

もう8割近く菅谷が食い尽くしたが、さらに進み、透の唇に唇をつけた。それでも菅谷は離れない。見開かれた透の瞳は、そのままグルンと暗転し、白目を剥くように上を向いた。

舌を入れている……そんなのを見せられ、思わず円香まで恥ずかしくなった。透が「自分も」と言った気持ちがかかってしまう。

ようやく、プハツ……と離れた。それを見て、円香は頬を赤らめたまま聞いた。

「……なんで舌入れてるの？」

「え……そういうゲームなんじゃないの……？」

「私が入れたのは、同じくらい食べてたから勝敗がつかないと困ると思ったから」

「……え、じゃあ今の俺……」

「オーバークル」

さらに菅谷の顔が真っ赤になる。本当にどこまでもバカな男の子だ。

恐る恐る、と言った様子で抱き抱えている透を見下ろす菅谷。真っ赤になった透は焦点が合わなくなったまま、半開きになった唇から涎を少し垂らしている。

その明らかに普通じゃない様子の透の鼻から、つうつ……と、赤い液体が流れて来た。

「ちよつ……と、とおるん……？」

「ふ、ふふっ……ひぐち……っ？」

「な、何……っ？」

自分に声掛けるの？　と思ったのも束の間、弱々しく袖を握りながら、忠告してきた。「リカの、きす……やばいから、きをつけて……」

それだけ言つて、ガクツと失神した。

「と、とおるん？　とおるん……っ？」

「……」

慌てて抱き抱えている透に声を掛ける菅谷を眺めながら、円香は自分の中で肝に銘じた。

それも、これからモデルの仕事が続けて、菅谷はどんどん見た目も良くなるだろう。もし、その時が来たら、円香も覚悟を決めないとまずい。

そう強く思いながら、とりあえず透をベッドの上に寝かせて、初めて人を気絶させてどうしたら良いのかわからなくなっている菅谷を落ち着かせた。

雪の日を嫌って良いのは社会人か休校にならない学校の学生のみ。

ある日の休日、菅谷はコタツムリだった。昨夜、また新たな雪が降り積り、外は白銀の雪景色。この東京にウサギやキツネ、ホッキョクグマがいるのなら遊びに出るが、いないのならコタツから出る理由はない。

まあ、強いて言うなら透や円香の家になら行きたいものだが、二人は自分と違って実家だし、突然お邪魔すると失礼だろう。

従って、コタツムリである。スヤスヤと寝息を立てたいが、なんとなく寝てる時間が勿体無い気がして、なんとか起きていた。

そんな中、震えるスマホ。透からだった。

「……もしもしー?」

『あ、リカ? 外出てきて』

「やだよ。寒いもん」

『雪合戦やろう』

「聞いてた?」

会話が成り立っているとは思えない返事だった。人の話を聞いていたのだろうか？

「でも良いよ。あそぼつか」

結局そうなった。

「待ってて。今、防寒してから降りるね」

『んー』

そんなわけで、すぐに下に降りた。さつきまでコタツムリだったのにすぐ動く辺り、やはり菅谷も透が大好きだった。

着替え、コートを着込み、円香にもらったマフラーを装備し、財布と家の鍵だけ持って部屋を出た。

エレベーターに乗って、そのまま一階へ降りる。自動ドアから出て、マンションから出て行った直後だった。

「とおるぶっ！」

「いえーい、ヘッドショット」

「……」

顔を見る前に顔を汚された。こうなっちゃった以上、菅谷もヒートアップするしかない。

無言のままその辺から雪を拾い、丸め、そして透へ目を向けた。

「分かったよ……開戦の狼煙ね？」

「え……ま」

直後、顔面に雪玉が発砲された。透に直撃し、後ろに怯む。

「やったな……！」

「先やったのそっち」

そのまま開幕雪合戦が開催された。二人揃って真冬に汗かくまで雪玉を投げ合う。

透の連続攻撃を、菅谷は引くほどの反射神経と瞬発力で回避し続け、その後でカウンターを放つように雪玉を放る。それを透はギリで回避しつつ、また連続で投げ返した。

手数は透の方が多かったが、精度は菅谷の方が高かった。

そんな時だった。

「わっ」

菅谷の一撃を避けた透が、足元を滑らせて転びそうになった。それに伴い、菅谷は超速で距離を詰めて手を繋ぎ、なんとか転ばさないように支え、自身の元に引き込んだ。

直後、透は手を繋いだままクルクルと回り、菅谷の胸前に身を預ける。背中を逸らし、

菅谷と顔を見合わせた後、二人で手を繋いで、少しだけ凍っている道路の上で二人で回りながら踊り始めた。

クルクルと回り、回り、回り……回るしか知らない二人はとにかく回り、途中で力なく動きを止めた。

「……酔った」

「それな……」

「ていうか……なんで途中からスケート?」

「とおるんが回りながら来るから……」

二人揃ってバカだった。そこで、ツツコミがないことに気がついた菅谷が、三半規管を整えながら聞いた。

「……てか、マドちゃんは?」

「家。雪の日は外出たくないって……」

「なんで?」

「雪合戦になる気配がするからだって」

その第六感、正確にも程があった。

「で、だ。リカ」

「何?」

「樋口に、めっちゃかまちよしない?」

「……」

それを聞いて菅谷は親指を立てた。

「よし、行こう」

「うん」

××そんなわけで、二人ですぐに円香の家に向かった。

円香は、リビングでコタツムリしていた。今日は寒い。雪が昨晚、新たに降り積もつてくれたおかげで、行動力が消滅した。

たまには、バカとバカのお世話から離れて、ゆっくりとこうして休息するのも悪くない……なんて自堕落を正当化しながら、とにかくぬくぬくしている時だった。

スマホが震えた。バカ(♂)からの電話だ。流星に無視は気が引けたので、仕方なく応対する。

「……もしもし」

『お前の可愛い彼氏は預かった』

低い声を作っているが、幼馴染の声を聞き間違える事はない。すぐにバカ(♀)である事を理解した。

『返して欲しければ、我々と雪合戦を』

そこで切った。付き合いきれないし、だらだらしたい。そう思って目を閉じた時だ。

またスマホが鳴り響いた。顔を向けると、写真が送られてきた。雪の中に大の字で寝転び、そこに向かってビームライフル型の水鉄砲を構えている透の姿があった。

「やっっちゃってどうぞで」

そう言いつつ、返信もしないで保存だけして、再び目を閉じる。とにかく、今は相手にしない事だ。

そう思ったのだが、さらに写真が届く。開くと、菅谷がその向けられているライフルに対し、起き上がりながら回避する仕草を見せている。透はカメラ目線のまま……つまり、油断している。

「……」

すると、すぐにまた写真が来た。中腰のまま、余所見している透に構えをとっている。危ない、後ろだ後ろ。戦闘中に油断するな……というか、だからツツコミを入れるな、自分。こんなの無視が一番なのだから。

なんて思っていると、また写真が来た。今度は、菅谷が後ろから透を抱き締めている……というより、捉えている様子だ。腕ごと押さえているので、ライフルの銃口も下に向けられてしまっている。

言わんこっちゃない……と、思ったのも束の間、だからコメントを頭に思い浮かべるな、と自分に怒る。

その後、また写真が来た。今度は、菅谷が透を持ち上げていた。割と高くまで持ち上げるのは結構だが、ミニスカートがめくられてパンツが見えている。これは後で透に送ってやろう……と、思いつつ、手に汗握る展開に、少しだけ夢中になってしまっていた。

「つ……て、いやだから……!」

何を少し胸熱になっっているのか。今日は本当にだらけると決めたのだ。なんならこのまま眠りこけてやろうかと思いつつも、すでに眠気なんて無いことに気づかないでいると、また写真が来た。

二人揃ってひっくり返っている。透の抵抗により、自爆させてバックドロップを回避した後のような状況。代わりに、お陰で透の手からライフルは離れている。

すぐに次の写真が来た。

今度は、二人とも距離を置くために雪の上で真逆の方向にローリングして受け身を取っている。そして、偶然か必然か、ライフルは二人の真ん中に落ちている。

「つ……」

先が見えたとはいえ、円香はゴクリと唾を飲み込む。なんで紙芝居を見せられているのか、とか考えなくなった。

次の写真は、透のみ。姿勢を低くしたまま構え、不敵に笑っている。

その次は、菅谷のみ。同じように低い姿勢を保って、同じように笑みを浮かべる。

そして、次の写真。二人ともライフルに向かって走り出した。次で決着が決まる……そう思った直後、新たなチェインが届いた。

LIKA☆『続きは外で!』

メキツとスマホの画面に亀裂が走るほど握りしめてしまった。こいつら……大概にしろよ、と。どんだけ自分を巻き込んでまで遊びたいんだ、と。

というかこれ、2人とも写ってるけど誰が撮っているのか……と思っていると、またメツセージが来た。

LIKA☆『撮影協力：とおるんママ』

なんて良いタイミングで送ってくるのか。ていうかこれ、後ろの背景、浅倉家の真前でなく、自分の家の前だ。ご近所さんの目があるからやめてもらいたい。

とにかく、無視だ無視。一々、反応なんてしていたら、本当に外に出て遊ぶハメになる。

そう決めて、スマホを放置した。

その時だった。コタツがあるリビングにある出窓から見える庭、その端っここから、ムーンウォークをしながら現れる愚弟。無駄に上手いのが腹立つ。

「……なんでそんな元気なの……」

今度は何……と、思っていると、その後が続いて透が現れる。声は聞こえないが、二

人ともやたらと楽しそうにダンスを舞っている。それこそ「何処かで御経験でもあったんですか？」と聞きたくなるほどだ。

すると、なんか聞き覚えがある曲が流れてきた。いや、窓を閉めているから、大音量でスマホから流している音楽が、うつすらと耳に届いているというだけだが。具体的には、砂糖の歌と苦い足踏み。

そして、菅谷が右端でポケットに手を入れ、軽くステップを膝で踏み始めた。

その後、今度は左端で透が踊る。ポケットに手をつ込んだまま、身体を揺らして踊る。

その後、今度は菅谷が指を鳴らしながらリズムを取る……などと、無駄にクオリティ高くダンスは進んだ。

やがて、サビに入る。二人が腕を組んで歩きながら足を上げ始めた時点で、ウザくなつた円香は渋々、コタツから出た。

そして、モソモソと二人の方へ歩く。それに気づいた二人が、窓の外で円香を出迎えるように両腕を広げた直後だった。

「不法侵入」

言いながら、カーテンを閉めた。こいつら、ホントいい加減にしてほしい。

こうなつたら、とことんだらけてやる。そう強く決め、コタツから出たのを機に部屋

に戻った。

こうなったら、もうお布団に入るしかない。いや、まあ正直、少し楽しそうだな、と思わないでもないが、ここまで意地でも外に連れ出そうとされると、逆にこちらも意地を張りたくなる。

なんとなく、天照大御神の気持ちを理解できた気がした円香は、スマホを持ってぬくと暖まった。

……次はどんな手を使ってくるのかなー、なんてちょっぴり楽しみになっている時だった。

スマホが震える。また次の手段？　と思い、画面を見ると、小首を傾げてしまった。何故なら、クラピカの「命をかける」というセリフがあるコマの写真だったからだ。

「？………ツツ？」

何の話？　と、思った直後だ。ズンツツと、やたらと大きな重低音が聞こえた。と
いうか、ベランダに小さな隕石でも落ちてきたかのような衝撃だ。

慌てて布団から出てベランダの窓を開けると、菅谷が透の家のベランダから、こちらに飛び越えてきたかのように立っているのが見えた。

「………何してんの」

「遊びに来たよ」

「リカー、次私行くから、ちゃんと受け止めてー」

「良いよー」

「ダメに決まってるでしょ！ 分かった、開けるから玄関から来て！」

× 早くも折れるしかなかった。

×

さて、そんなわけで、身を折った脅迫によつて円香はようやく外へ……とはならなかつた。

その前に、まずは二人とも説教である。

「とにかく、次にベランダとベランダを渡するような真似したら、ホント許さないから」

「すみませんでした」

「よし」

怒られたので、二人とも素直に頷いた。自業自得である。

さて、そんなわけで、改めて外での遊びである。三人揃つて着込んで表へ出た。

「で、何するの？」

「わっせろーい！」

「あぶなっ!?」

怒られた直後とは思えない掛け声と量の雪を、円香の顔面に散らかされた。

「ちよつと、危ないんだけど……」

「第二波」

今度は当たった。透の一撃が。顔面に。

「はい、これで樋口の命、残り二個ね。私、1ポイント」

「一番ポイント少ない人が罰ゲームで、この後ラーメン奢り」

「良いね」

人に意見を聞かず、人を勝手に家から連れ出し、人にいきなり顔面に雪をぶつけ、競技開始をルール説明の前に宣言する……流星に円香も殺る気が出るというものだ。

「……分かった。じゃあ、本気で行くから」

「良いね、マドちゃん。やるならカモツ、カモツぶへっ!」

一撃で顔をクルルに狙われ、鼻の中を上った。あまりの威力と唐突な呼吸困難に、思わずひっくり返ってしまう。

「というか、単純に威力と速度もエグかった。ここバッティングセンターだっけ? と、透が思う程だ。」

「カモンって言うから行ったのに。ま、これで1ポイント」

「樋口、協力しよう。リカを集中狙いで。報酬はリカからのラーメン奢りで。実はさっきまでのかまちょも全部、リカから助力を求められました」

砂で裏切る透だった。しかし、残念ながらそれをやるには、透も目立ち過ぎた。

「で？」

「え？」

「分かってないみたいだから言い直す。ボコボコにした上にラーメンも奢ってもらうから」

「待って、降さ……んっ！」

結局、雪玉を浴びた。透も同じように菅谷とひっくり返る。すぐに分かった。本気の円香を倒すには、共闘するしかない、と言うことを。

その円香は、ラスボスのオーラを放ちながら、指をゴキゴキと鳴らして二人の方へ歩み寄る。

「ほら、続き」

「とおるん……」

「うん、分かっている」

「よし、じゃあここは……！」

「一時、共闘で」

そう言つて、透が雪玉を持って走り出し、円香もそれに応じるよう、雪玉を構えた直後だった。

ぼすつ、と優しく背中に何か当たる感覚。振り返ると、菅谷が雪玉を投げている。
「……へ？」

「いや、さつき嘘ついて人を売ろうとしてたのムカつく」

「や、あれは不可抗力でぶへっ！」

「はい、浅倉アウト」

円香の一撃が、透の額を穿ち、終わった。

さて、残りは菅谷と円香。正直、菅谷はもう勝ち負けなんてどうでも良かった。何せ後一回、円香に当てれば2ポイントで透の奢りになるから。

「よし、やろっか」

「ん……覚悟して」

×そのまま戦闘が始まった。

×結局、透の奢りにな……ると思いきや、覚醒した円香の前に手も足も出せず、1ポイ

ントも取れないまま負けてしまった。

そんなわけで、二人で円香の分を半額ずつ出す事になり、とりあえず雪遊びである。

「リカー、大きいの出来たよー」

「はいはい。こっちも行くよ」

言いながら、菅谷が胸前に抱えて大きな雪玉を持って来た。が、それはどう見ても菅谷の上半身を隠すほどの大きさを誇っている。

「……いや、大き過ぎない?」

「そう? 土台どこ?」

「もう少し前」

円香のツツコミをスルーして、透が誘導する。

「枝とか用意した?」

「出来てる。後あんたの頭を乗せて足と枝詰めるだけ」

「え、俺の頭に……?」

「いやそうじゃなくて。良いからもう少し前」

「この辺……あつ」

直後、菅谷は足を滑らせた。思いつきり転んで、でっかい雪玉を持ったまま前に置かれて土台に突っ込んだ。雪玉は二つとも粉々に四散した。

「……」

「……」

「いってえ……あ」

「……リカ」

「あーあ……」

「へぶしっ」

× 結局、雪だるまは諦めた。

×

さて、一通り遊び尽くし、三人はラーメンの前に円香の家に引き返した。と、言うのも、バカ二人は割と雪の上で転がったりしていたので、このままでは風邪を引くかもしれないからだ。

透は自宅で準備。菅谷は円香の家のシャワーを浴びて身体から雪や汚れを流し、私服は円香が誰のためにどんな事を想定して用意したのか知らないが、偶然あった男性用のスエットとTシャツとトレーナーを着込んだ。不思議だね。

「いやー、マドちゃんの服の趣味すごいね。意外とメンズ服とか着るんだ。もしかしてパジャマ用？」

「死ねば？」

「え、ひどい」

「こういう時のためでしょ」

「……あ、あー……え、なんで俺の服のサイズ知ってるの？」

「誰があんたの洗濯物干したりしてたの？」

「……」

なるほど、と頭の中で理解する。それと同時に、どこまで準備が良いのか、と少し嬉しい反面、気恥ずかしくなるが。

「あ、ありがとう……」

「別に」

お礼を言いながら、外に出た。家の前では、既に透が待機していた。

「お待たせ」

「ううん。リカ、着替え持って来てたの？」

「いや、マドちゃんがこう言う時のために用意しといてくれたみたい」

「……行くよ」

「ほんとにお姉ちゃんじゃん」

「ね」

「うるさい」

本当に口が減らない二人だ。切実にムカつく。

早速、と言うように透がまず聞いた。

「何ラーメンにする？」

「あんまこってりしたのは嫌」

「マドちゃんが勝ったんだから、マドちゃんが選んで」

「勝ったって言うか、蹂躪された感覚だけ……というか、私はリカに背中刺されたし」「自業自得でしょ」

「ごめんって。今思えば大人げ無かったよ。替え玉ならとおるんも食べて良いから」

「マジ？ ラッキー」

「こういうところ、菅谷は甘い気がする。とはいえ、まあラーメンまるまる一杯ではないのでスルーするが。」

それ以上に気になる点があったので、そこを口にした。

「替え玉って言うてる時点で博多確定になってるでしょ」

「じゃあ、サイドでも良いよ。餃子とかチャーハンとか」

「チャーハンは太るからなあ……餃子で」

「浅倉、リカの前で餃子食べて良いの？」

「なんで？」

「口臭」

「……あー」

それは確かに困るかもしれない。

「？ 好きな食べれば良いじゃん」

「いや、だからニンニクとニラを混ぜたものなんて食べたたら、気になるでしょ」

「大丈夫だよ。俺はとおるんが例え毒ガスを撒き散らかす超生物になっても、ずっと好きでいるから」

「何言ってるの?」

「ブツ飛ばすよ」

「あれっ?」

言いたいことはわかるが、言い方が悪かった。なんにしても、円香はなんか話してたらこつてりするものが食べたくなったので、とんこつにする事にしたが。

ちようど、美味しそうな匂いを毎回、駅で垂れ流すお店がある。お陰で学校帰りはバカみたいにお腹が空くものだ。特に、菅谷の家で食べていかなかった時は飯テロレベルである。

「ここにしよう」

店に到着し、円香が言った。

「良いの? とんこつだけど」

「平気」

「じゃあ替え玉かー」

なんて話しながら、入店した。各々、買うものを購入し、席に座る。カウンターでは

ない四人がけの席に座らせてもらい、腰を下ろす。

すると、透がふと思つたように言った。

「今更だけどき、あんまりカ、街歩いててもキャーキャー言われないよね」

「そりやそうでしょ。一回、雑誌に載つただけだし」

「自意識過剰……いや、自じやないけど、意識し過ぎ」

「だって、学校では一回、バレたじゃん」

「アレは偶々でしょ」

「ね。リカと浅倉は学校で有名だし」

「樋口もでしょ」

「なんで自分だけしれつと外してるの？」

「誠に遺憾だから」

「……」

「……」

円香はここまで目立つつもりはなかった。知らない間にこんなことになってたのは、果たして誰の所為なのか。

思わずジロリと二人を睨むと、菅谷と透がすぐに返事をした。

「いやいやいや、俺とおるんの所為じゃないから」

「樋口も十分、変だしね」

「あんたらがそのポテンシャルを引き出すからでしょ」

「いや、その語彙力とカタカナ好きは俺らの所為じゃなくない？」

「ね。大雑把に言うのと、ツツコミなんて『なんでやねん』で事足りるし」

「じゃあそれで良いのね？ 今後」

「ダメ」

なんなのコイツら、と円香はため息をつくが……まあ、その異常さは自分でも自覚はある。特に、カタカナはともかく、あまりにも面倒を見過ぎている点とか。

菅谷も透も、基本的にはバカなのに顔が良くて高校をウロウロすると言う、アマゾン川に放り出された薩摩地鶏みたいなものだ。心配にならないはずがない。

世話焼きと言われようと、絶対に自分が目をかけておかないと……と、思っている時だった。

「でも、マドちゃんのそういうところ、俺好きだから」

「私もー」

「……」

「こいつらホントそういうところ……と、円香は顔を赤くして目を逸らす。

「ひゅう……言うね、あの男」

「あれ、てかあの男の子、どこかで見たことない？」

「なんだっけ……」

「ラーメン屋で告白？ わ、あの子顔真っ赤じゃん……」

「て言うか、なんで三人？」

周りのヒソヒソ声は耳に響く。ホント、こういうとこだ。

辱めはやはり怒りに変わり、赤くなった円香はそのまま菅谷に言った。

「替え玉」

「え？」

「私にも替え玉奢って」

「な、なんで？」

「人前で辱められたから」

「良いけど……体重平気？（小声）」

「小声で言えば配慮したつもりになってるわけ？」

「え？ いっだ！」

脛を蹴られた。

「……前から思ってたんだけど、なんで体重って指摘しちやいけないの？」

「デリカシー」

「傷つく」

「そういう……もの？」

「そう」

でも、傷ついた時にはもう遅い時だつてあるような……なんて菅谷が思っているうちに、三人の元にラーメンが運ばれてくる。

「おまちつ、とんこつ三つです」

「おー、きたきた」

「浅倉、ごち」

「味わって食べて。本当に」

三人で麺を啜るに啜った。

なんだか、幸せだった。いまだに付き合っていないけど……というか、もう形だけ友達みたいな関係だけど、こうして天気が悪くてもバカみたいにはしゃいで、服やシャワーを貸してでも次の行動に移れて、一緒にこうしてラーメンを食べられることが、なんだか幸せに感じた。

それは、円香だけでなく透と菅谷も同様だ。本当にこのまま三人でずっとバカやっていられたら、そんな風に思えて仕方なかった。

「ね、リカ」

声を掛けたのは透。頬にラーメンのスープをつけていて、それを円香に拭いてもらっている菅谷が「ん？」と聞き返すと、すぐに続きを言った。

「モデル、あんま売れないでね」

「なんで？」

「困るから。一緒にいられなくなると」

「大丈夫。俺別にそこまでモチベーション高いわけでもないから」

「ならよし」

「それに、リカなら売れても一緒にいてくれるでしょ」

「お、樋口、理解度高い」

「分かっているじゃん」

「……うるさい」

それだけ話しながら、三人でラーメンを啜った。ちなみに、他のお客さんは知らない間に全員いなくなっていた。

三人揃って満足した様子そのまま帰宅していた。と言っても、円香の家に、だが。透は言わずもがな隣だし、菅谷も着替えを回収しないとイケない。

家の近くまで行くと、ふと目に入ったのは、円香の母親。家の前で誰かを待っている

ように腕を組んでいる。

「樋口ママ？」

「どうしたんだろ」

「リカの荷物があつたからでしょ。許可なく家に入れちゃったし」

「え、俺怒られるの？」

「怒られるのは私だと思う」

なんて話しながら、家の前に到着した時だった。ふと自分達に気付いた樋口の母親が、三人に言った。

「おかえりなさい、どこ行ってたの？」

「ラーメン屋」

「そう。たくさん動いたから、たくさんお腹がすいたってこと？」

「え、知らないけど……動いたって？」

「なにせ、荒らすだけ荒らして雪かきも何もせずに遊びに行っちゃったくらいだしね？」

「「あっ」」

今更ながら、雪だるまの後に雪合戦で、飛び散った飛沫が円香の家の車や壁にめっちゃ附着していた。

「……」

「……」

すぐに逃げようとする透と菅谷。だが、その襟を円香が掴んだ。

「三人一緒にいるんでしょ……！」

「たまには一人になりたい時もある……！」

「私もランニングに行きたい……！」

「スコップは三人分あるから。サボった子はうち出禁ね」

そう言われてしまえば仕方ない。三人でスコップを受け取り、雪かきを始めるしかなかった。

「はーあ……雪浴びてシャワーの後にまた雪かあ……」

「文句言わない。誘ってきたあんたとリカが悪いんでしょ」

「いや樋口もノリノリだったでしょ……」

「うるさい」

なんて話しながら、二人で雪を一箇所に集める。一方、菅谷だけその様子を眺めていた。

それが目に入った円香が、文句ありげに聞いた。

「何してんの？ 早く手伝って。終わるまで帰らせないから」

「いや、雪かきって俺初めてだから。そこに集めれば良いの？」

「そう」

「へー。初めてなんだ」

「うん。必要なかったから」

大体、室寺と父親と母親がやってくれていた。一回だけ手伝っている間に、一箇所に積み上がった雪の山を見て「あそこなら家の二階から落ちても怪我しないんじゃないかね？」と思つて飛び降りて怪我をしてから、やらせてもらえなくなつた。

「あ、そだ。せつかくだし、俺あれ作りたい。かまくら」

「ああ、良いかもね」

「雪かきしろつて言われたばかりでしょ」

「かいた雪はどうしたつて良くない？」

「やるなら楽しい方が良いでしょう」

「……はあ、全くバカなんだから……」

「まあ、仕事が早く進むならなんだつて良い」そう思つた円香は、渋々参加した。

大体、一時間後。透だけでなく菅谷がいたので、手作りのお菓子でもどうかと思つてクッキーを焼いた円香の母親が様子を見に行くと、雪かきは終わつていて、三人はかまくらの中で缶コーヒーを飲みながら談笑していた。

雪かきも終わっている様子だし、三人ともにこにこと楽しそうにしているし、何より

娘が幸せそうにしているので、しばらくそっとしておく事にした。

チョコより豆派。

菅谷が載った雑誌パート2が発売された。今回は円香はちゃんと発売日から入手し、スクラップ用と読む用の二冊を入手。やる事をやって隠し場所に隠した。

さて、そんな話とはもなく、二冊目の影響は思ったより大きかったようだ。今回も白瀬咲耶の隣だったから尚更。

珍しく先に待ち合わせ場所に来ていた菅谷を見て、透と円香は半眼になった。……何故なら、三人くらいの女の子に囲まれていたからだ。

「あの……菅谷明里さんですか？」

「そうですけど？」

「握手して下さい」

「え？ 握手？ 良いですけど……」

「ありがとうございます！」

「でも俺そんな大した人間じゃないですよ。名前だけ有名だけど中身は割と温厚なタラシンチュラみたいなものです」

「？ よく分かんないですけどお願いします！」

……何をやっているのか、あのバカは。

結局、握手をする中、その菅谷の元へズンズンと風を切って歩くのは、浅倉透だった。もう何一つ迷いのかけらもなく、ゴールテープを切るようにその間に突撃した後、強引に透は菅谷の手を握り、自分の方に抱き寄せる。

「は？　ちよつ、何あんた……！」

「これ、私のだから」

「へ……？」

「ていうか、私達の、ね」

ファンがいる以上、ファンサーブスくらいは仕方ないと思って出遅れて混ざったのは円香。言うまでもなく、内心穏やかではなかった。

「え……どゆこと？」

「まさか……二股？」

「うわ……この男やば」

「いや、弟」

「ダメだから。うちの弟誘惑したら」

「……あ、なるほど。尊い」

それで誤魔化したのは、もはや奇跡だった。追っ払ってしまい、円香と透は続いて菅

谷を睨む。

「何デレデレしてんの？」

「いやそんなつもりは……」

「うん。デレデレはしてなかった。でもムカつく」

「直球?？」

もはやただの暴言である。でも、仕方ない。むかついたのだから。覚悟はしていたが、いざ目にするのと腹立つものがある。

「あーあ……だから有名にならないでって言ったのに……」

「まさか雑誌二冊でこんなことになると思わないでしょ」

「それは分かるけど……」

まあ、キヤーキヤー言われなかったら、それはそれでムカつくのだが。私達の（未来の）彼氏はそんなに魅力ないか、と。

つまり、二人とも複雑なのだ。複雑だから、ある意味では売れすぎた……或いは売れなすぎた時より腹立たしい。

「でも、大丈夫でしょ。仕事をもらったからにはちゃんとやるつもりだけど、俺よりモチベーション低い奴なんていないと思うし」

「それはそれでダメ。私達のか……弟が不人気とかムカつくから」

「それ。常に120%を意識して」

「ええ……それで人気が出ちゃってきつきみみたいになったらどうするの」

「それもダメ」

「……」

困らせている自覚はあったが、どっちもダメなのだから仕方ない。その上、円香としてはファンを大事にしないのもダメとか言い出すから困ったものだ。

円香は分かっていた。だから、菅谷を落ち着かせてやらないといけない。

「はあ……」

「そんなに心配しないでよ。俺、ホントどんなにモテても2人から離れたりしないから」
そう言いながら、円香と透の頭に手が乗せられる。それが、なんだか非常に腹立たしい。

何とかしないと、と円香は強く思いながら、ふとスマホを見た。今日の日付は、二月二日。

それを見て「あつ」と声を漏らし、それに反応した菅谷が聞いて来た。

「どしたの?」

「なんでもない」

そうだ、そういうえば二月になっていた。そして、二月と言えれば外せないイベントがある。

「浅倉」

「何？」

「放課後、姉会議」

「はいはい」

「え、何その会議」

「行くよ」

×菅谷の反応をまるで無視して、円香は透と午後から約束を取り付けた。

×時早くして放課後。菅谷を家まで送り、そのまま帰宅。姉会議があると決まった今、

菅谷と一緒にいるわけにはいかない。

「で、どしたの？ 樋口」

「ん……バレンタイン。どうする？」

「ああ……そっか、もうそんな時期か」

今思い出した、という感じの透。まあ透ならそんなのいちいち、気にしないと思った。

そういう意味でも、今のうちに声をかけておいて正解だったようだ。

「一緒のものあげる？ それとも、別で作る？」

「あー……どうしよつか」

「なんにしても、美味しいものを手作りにした方が良いと思うんだけど」

「なんで？」

正直……改まってこんなこと言うのは恥ずかしいのだが、まあもう開き直ると決めて長く経つ。それに同じ感情を抱いている透なら、分かってくれる……と、思い、言った。
「……リカがどんなにファンにモテて、それを全く相手にしなかったとしても、私と浅倉が許さなかったら困らせるだけでしょ」

「それは……そうかもね」

「だから……まあ、自己満足かもしれないけど、せめて私達がリカに出来る限り好きなことを伝えて、自分達の中で気持ちを落ち着かせるしかないと思ってる」

「それで、美味しい手作り？」

「そう」

「……なんか、ホント重たいね樋口」

「は？ 何処が？」

「……」

無自覚かい、と透は頭の中でツッコむ。やはり、円香も普通におかしいのは言うまで

もなかった。まあ言えば喧嘩になるから言わないが。

「……で、どうするの？ あんたも一緒に作る？」

「んー……うん。まあ、じゃあ一緒に作ろっか」

「ん。じゃ、まずどんなチョコにするか決めるから」

「リカなら、クワガタの形とか喜ぶんじゃない？」

「絶対に嫌。あと形の話じゃなくて、チョコの種類の話」

「あー、なるほどね」

そんなわけで、とりあえずチョコの種類を考えることにした。

「まあ、合作にするなら大きいのにしたいよね。なんか、その方が合作感あるし」

「何その理由……というか、大きいのってサイズの話？」

「うん」

「……じゃあ、ケーキとか？」

「お、良いね」

「でも、腐るかも。当日、平日だし、そもそも大き過ぎると持っていきにくい」

「あーそっか。じゃあ……やっぱり普通にチョコ？」

「うーん……ググろう」

「それ」

と、言うわけで、色々と探す。ケーキも小型化しようと思えば出来るようだが、合作なのに超小さいのは二人としては避けたい所だった。なんかダサい。

そんな中、透が「あつ」と声を漏らす。

「じゃあそこそこな大きさの同じチョコを作つて味だけ変える?」

「それ同じチョコじゃなくない?」

「や、だから……メ○ティーキッスみたいに同じ形でバリエーション増やすの」

「ああ、なるほど」

抹茶とかイチゴとかそういうことだろう。それはそれで面白いかもしれない。

「じゃあ……そうしよつか。でも、メ○ティーキッスを作るのはかなり難しいと思う」

「だから、まあ……普通のチョコで良いんじゃない?」

「普通じゃダメでしょ」

「や、だから種類は普通で超おいしく、みたいな」

「まあ……良いかもね。じゃ、次は形」

× × ×
「なんで、二人の女子は珍しく乙女らしく考え始めていた。」

× × ×
翌日、結局、形は決まらなかつた。円香は一人、離れた席から菅谷と透の様子を眺めつつ、現代文の授業中の黒板に顔を向ける。

手元を動かしているのは、板書だけではなく、ノートの上の部分に少しだけ空いてるスペース。チョコの形について落書きしながら考えていた。

せつかく、合作にするのだから、なるべくなら凝った感じにしたいが、どうにも良い案が出ない。味で差別化するのは結構だが、なんだか壮大な手抜きになりそうな感じはある。

その見掛け倒しは少し嫌だった。円香としては、やはり拘りたい。結局、バレンタインとはお世話になってる人にチョコを贈る日でもあるので、そういう意味でも菅谷には良いものを渡したいと思っっているからだ。

「……はぁ」

ふと、透と菅谷の方を見る。授業中だが、おしゃべりしていた。相変わらず呑気なものだ。あれで菅谷は成績が良いんだから不思議なものであ……いや、よく見るとノートはちゃんと取っている。器用な男だ。

恐らく、透は何も考えていないし、ここは自分だけで何か考えなければ。そう思っている、菅谷がスマホを見下ろしたのが見えた。

そして、その後が続いて円香のスマホに連絡が届く。

LIKA☆『今日、よかつたらうち来ない？』

どうしたのだろうか、急に？

マドちゃん『良いけど』

マドちゃん『何？ 改まって』

L I K A ☆『いや、今日も妹会議やるのかなーと思って』

マドちゃん『姉会議』

L I K A ☆『アツハイ、姉会議』

まあ、今日もやって良かったかもしれないが、誘われてしまった以上は仕方ない。行った方が良いだろう。

……もしかして昨日、珍しく集まらなかったのが、少し寂しかったのだろうか？ 割とそういうところあるし、あり得ない話ではない。

マドちゃん『今日はやらないから安心して』

L I K A ☆『りょー』

本当に可愛いところある男である。なんて少し頭の中でニヤついていると、不意に声が聞こえて来た。

「じゃあ、樋口。ここの主人公がバレンタインデーに、恋人に渡そうと思っていたもの、なんだと思う？」

「っ、は、はいっ。えーつと……私と浅倉で味が違って同じ形のを渡そうと思つてます」

「誰もお前らの話はしてねえ」

言われてから、教室中で笑いが巻き起こる。しまった、と円香は口を塞いだ、もう遅い。何もかも詳らかに喋ってしまった。

痛烈に恥ずかしい思いをし、顔を真っ赤にして俯いた。つつい気を抜きすぎた……いや、逆だ。無駄に考えすぎた。

ヤバいかも、と思つて恐る恐る透と菅谷を見た。

「ぶつくくつ……！　ちよつ、無理……！」

「あはつ、あつはつはつはつ！」

あの野郎ども、なんで他人事みたく笑つてんの？　と、眉間に皺がよつた。特に弟、お前その笑い方わざとだろ、と言いたくなる。

「授業に集中してないと、どんな目に合うのか、身をもつて実感できたな？」

「……はい。すみません……」

とはいえ、反論の余地はない。顔を赤くしながら、席に戻つた。

「よし、じゃあ菅谷。お前廊下に立ってなさい」

「えつ、なんで俺……？」

「姉のケツは弟が拭けよ」

「それ言われたら仕方ないですけど……」

「いや仕方なくねーし、冗談だから真に受けるな戻れ」

そんな風に、いつのまにかいじりの対象は菅谷に向いていた。そういうことか、と後になつて円香は理解した。ホント、余計な気ばかり回してくれる。そう言うところが、割と好きで、たまに何故かムカついたりするのだが。

×

さて、放課後。菅谷の自宅に向かいながら、菅谷が言った。

「でも、そつかー。二人で俺にバレンタインくれるんだね」

「あーあ、樋口の所為でバレちゃった」

「うるさい……」

透にまでニヤニヤしながら言われ、円香はため息をつく。透にも飛び火すれば良かったのに、と思わないでもなかった。

「ありがとう、二人とも」

「別にいいよ」

「ホワイトデー、三倍返しで良いから」

「頑張る」

「樋口、そう言うこと言うとホントに三倍返しされる」

……何せ、金持ちの息子の上にモデルだ。しかも有名雑誌からのデビューという幸先

の良いスタート。金ならあるわけだ。ちよつとあんまり豪華なものだと申し訳なくなる。

しかし、透がそういうのに遠慮するのは意外……。

「だからもつと言おう。リカ、とびつきり愛情込めて」

「任せろ」

「……」

そういうね、と円香は頬を赤らめた。

さて、そんな話をしている間にマンションに到着した。エレベーターに乗って15階まで上がり、部屋の鍵を開ける。

「でも……そつか。昨日の妹会議……」

「姉会議」

「アツハイ。姉会議……バレンタインの話だったんだね」

「そうだけど？」

「何か問題？」

「いや……まあ大したことじゃないんだけどさ……」

話しながら、部屋の中に入った。すると、そこに置いてあったのは……黒いモジャモジャのツノ付きのカツラと、おもちゃの金棒である。

「節分の話でもしてるのかと思って、用意しちゃった」

「……なんで節分なのよ……」

「豆まであるじゃん。ウケる」

全くもって変な男である。二月に対する感性にブレが生じているのがよく分かってしまった。

そんな中、透がのうのうと二人に声をかけた。

「じゃあ、せっかくだし……やろっか」

「え……この歳で？」

「よし、やろっ！」

二人がノリノリなので、仕方なく円香もやる事にした。まあ、昔はよく豆まきしたし、決して嫌なわけではないから良いが。

「じゃあ、鬼役じゃんけんね」

「え……本気？」

「そりやそうでしょ。鬼二人だったら絶対勝てないでしょ」

「いやまず勝ち負けをすることがおかしい……というか、鬼役がいること自体おかしいから。何処の幼稚園のイベント？」

「あるもんは使わないと」

「じゃ、じゃーんけーん……」

「ちよっ、まっ」

鬼役が決まった。

〜10分後〜

リビングに入って来たのは、ツノが生えたアフロに金棒を担いだ円香。そして、それを見て早くも爆笑しているのは、豆入りの箱を取った透と菅谷だ。

「つ……ふふっ、に、似合う……!」

「ぶっ……くくっ……!」

「……」

円香はとて女子高生がしちやいけな表情で、二人を睨みつけていた。じゃんけんだから仕方ない、仕方ないとはいえ……やはり普通にムカつく。

「あ、マドちゃん。これグラサン。目に入ったら危ないから」

「……」

「ぶはっ! ね、鼠○輩じゃん……!」

さらにサングラスを装備した円香を見て、さらに透が吹き出した。

「よし、じゃあ……やるよ」

「うん」

「……」

「スタート!」

菅谷の号令で、円香に透と菅谷が豆を投げ始める。加減はしているものの、物を投げられるのは普通に不愉快である。

なので、円香は金棒のグリップではなく中心を持って構えた。指と指で挟んで、グルグルと回し始めた。

「え」

「ばけもの……?」

それにより、豆は弾かれる。だが、長さが足りずに下半身はガラ空きである。

「そー!」

すぐに弱点を見抜いた透が、サイドスローを放つように豆を放つ。それを読んでいたように、円香はジャンプしてソファアの上に飛び乗り、さらにソファアを踏み台にしてジャンプ、空中に舞い上がると、金棒を投げ付けた。

「あぶなっ。なんでそっちが投げてんの?」

「投擲には投擲を、だから」

躲した透にそう言い返ししながら、床の上に着地した直後だ。足の裏に、豆が直撃。

「いっ……?」

思わず足の裏を抱えるように持ち上げた時だった。バランスを崩し、後ろにひっくり返りそうになる。

ズルリとサングラスが目元から落ちるが、気にする余裕もない。

「! マドちゃん!」

声が出たと思ったら、ふわっと後ろから抱き抱えられる。お尻も下についたが、床ほど硬い感触ではなく、柔らかすぎない感触。

ふと、後ろを見ると、自分の真後ろに菅谷の顔があった。お尻の下にあったのは、菅谷の太ももである。

「っ……………!!?」

「危なく……………だ、大丈夫?」

「へ、平気……………」

しまった、と思わず頬が赤く染まる。つい笑われてムカつきすぎたが、また周りが見えなくなっていた。

そんな自分のために、わざわざ骨を折ってもらってしまった。……………というか、距離が近い。後ろから菅谷に抱きしめられるのは、少し気恥ずかしさがあった。

頬が赤く染まりながら、控えめに俯く。

「マドちゃん?」

「っ……も、もう少しだけ……このまま……」

「え？ い、良いけど……」

言いながら、円香は自分の胸の上にある菅谷の手をキュツと握り締める。暖房をつけているとはいえ、真冬なのにやたらと暑く感じる。体温が胸から伝わって来て、思わずポカポカと暖かさがさらに……ん？ 胸から？ と、胸元を見下ろす。自分の胸を、まるで貝殻のビキニのようにしつかりとカバーしていた。

「——っ!!?」

「リカ、リカ」

自覚し、さらに顔が赤くなった直後、透が自分の後ろで自覚なく胸に手を置いている男に声を掛ける。

何をするつもりか？ と思ったのも束の間、透は手をグツパツと閉じて開く。それをどう理解したのか、菅谷は自分の胸元の手に力を込めた。

「きやつ……!」

「? 柔らかかつ、何これ……ん?」

自分の肩の上から、手の上を覗き込む。そして、胸を包んでいる事を自覚されてしまった。

「……スケベ」

「つ、う、うそつ……つ、や、やばつ……！」

「自覚したなら、離して」

「び、ごめん！」

慌てて手を離し、菅谷はそのまま離れた。

正直、恥ずかしさがないわけではないどころかメチャクチャにオーバーヒート仕掛けていたが、菅谷の方が顔を真っ赤にしているので、逆に落ち着いてしまった。

菅谷は自分の手のひらを真っ赤な顔で見下ろした後、少しワキワキと手を動かす。おそらく、自覚しているのだろう。

その直後で、さらに顔が赤く染まり、菅谷は恐る恐る円香を見る。そして、グルグルと目が回り始めた。

今まで、腕や背中に胸が当たることはあっても、器用に物を扱うメインウエポンである手で触れたことはない。つまり、それだけ詳細に形を把握してしまったわけで。柔道をやっていた手なら尚更のことだろう。

ふと、透が円香の肩に手を置いた。姉会議で定めた緊急用ハンドサイン。「あれ、パニック」だ。

察知した円香が、すぐに菅谷の前に移動する。そして、菅谷の顔をぎゅつと胸前で抱き締めた。

「おやすみ、リカ」

「つ、む、むね……マドちゃんの……こふっ」

そのまま気絶させた。

「……ふう、考え得る最悪の事態は避けられた」

「ね。リカなら最悪、自殺とかしかねないし」

落ちて着かせてから、改めて円香は頬が赤くなる。まさか、もう胸を揉まれる羽目になるとは……と、俯いてしまった。

いや、まあ自業自得なのは理解している。所詮遊びなのに、笑われて頭にきすぎた。まあそれくらい恥ずかしい格好ではあったのだが。

「はあ……ごめん、浅倉」

謝りながら、カツラを取る。

「平気。……ていうか、樋口こそ平気？ ガッツリ揉まれてたけど」

「……あんたが揉ませたんでしょ」

「や、あれは揉んでることを自覚させようと思って。そしたらまさか更に揉み始めるからビックリした」

「いや、紛らわし過ぎるから、そのサイン」

言いながら、円香は自分の胸元を抱きしめる。あの手のひらの感覚……そして、口か

ら漏らした声……少し気恥ずかしいのに、嫌悪感だけは出なかった。

「……で、樋口。どうだった？」

「は？ 何が？」

「胸、揉まれた感想」

「……どうもこうもないから」

「気持ち良かったとか……」

「……浅倉」

ギロリと睨まれ、透は目を逸らす。

そもそも、あんな風に何の自覚もなく揉まれて、快感もクソもない。そもそも胸を揉まれただけで気持ち良くなるという話が眉唾物だ。

「とにかく、リカ寝かせてあげないと。コタツでも良いから」

「んー」

話しながら、二人で菅谷を引きずってコタツに入れる。起きても、どうせ胸のことは覚えていないのだろう。少しムカつくが、思い出してまた変に面倒なことになるよりマシである。

さて、これからどうするか……とりあえず、豆の片付けでもする事にした。

「浅倉、豆片付ける」

「はーい」

話しながら、床の豆を拾い始めた。床には埃一つついていないあたり、昨日、落ちた豆を食べる事になっても良いように掃除したのだろう。まめな男である。

そう思っている中、ふと目に入ったのは、半分に割れた豆。それを見て、思わずピンと来てしまった。

「あ」

「?」どしたの?」

「チヨコ、良いの思いついた」

「へえ」

×

×

それから、約一時間後。鍵を持っていない透と円香は、無断で帰るわけにもいかない。本当なら、思いついたチヨコを早速、練習したかった為、今日の所は帰宅したかったのだが仕方ない。しばらく家事を済ませたり、映画を見たりして待っていた。

そんな中、ようやく目を覚ます菅谷。

「ん……あれ、寝ちやつてた……?」

「あ、起きた」

「……おはよ」

円香は少し胸を揉まれたことが頭の中に残っていて、気恥ずかしくなる。

一方で菅谷は、ボンヤリと透と円香の顔を眺めたあと、やがて円香を見る。直後、ほんのり頬が赤くなつた気がした。

「？ リカ？」

「つ……な、なんでもない。ふ、二人とも今日はご飯どうする？」

誤魔化すように微笑むと共に、声を掛けてくる。残念ながら、この後はチョコ作りだ。何せ、二人で作らないと絶対、成功しないチョコを作るのだ。練習時間は多い方が良い。

「あー、大丈夫」

「また今度で。リカのチョコ、練習しないとだから」

「あ、そ、そっか……分かった。駅まで送るよ」

「ありがとう」

「えー、もう少しコタツムリしてたい」

「ダメに決まつてるでしょ」

無理矢理、透をコタツから引つ張り出し、駅まで送ってもらつた……が、この時、迂闊だった。菅谷の顔色の変化を見逃してしまったからだ。

××× 気付いてやるべき点を見逃し、そのまま帰宅してしまつたのだから。

夜。もう後は寝るだけの時刻。菅谷はずーっと頭の中が悶々としていた。

……それは、手のひらの中に円香の胸の感触が残っていたからだ。あの柔らかさ……
その中にある張り、そして形が……どうにも消えない。

「っ……………」

頭の中で打ち消そうとした。この世に存在するカブトムシの種類を全て詠唱したり、スマホで動物の動画を漁ったり、部屋の中の動物のフィギュアを整理したりと、とにかく手は尽くした。

それでも、消えない。それはそれ、これはこれ、と言われている気分だった。

「このクズが……………」

それは、自分に対する言葉だった。事故だから、と許してもらえたのに、もう一度触りたい、なんて本能的に思っていることを自覚しているからだ。

なんとかかしないといけない。自決も考えたが、別に二人とお別れしたいわけではない。許してくれた以上、そんな事しても何にもならない。

でと、この「触りたい」と思ってしまったっている感じは、なんとかする必要がある。

「……………手を切断するのは最終手段だよね……………」

何せ、手持ちの道具ではどうしようもない。腕には橈骨と尺骨という、二本の太い骨がある。包丁なんかではかなり勢いをつけないと落とせない。

頭の中でグルグルと回しながら、なんとかしたいと思つてスマホで調べ続ける。

そんな中、ふと見かけてしまった。「おっぱいマウスパッド」というものを。

「これだ！」

×これらしい。

×翌日、土曜日は学校が休み。円香は、歩いて買い物に来ていた。透はチョコの材料を買いに、そして円香はチョコの型を買いに行ったのだ。

チョコの型取りと言えば、やはりドンキだろう。特に、珍しいものがあるここなら、おそらく確実にあるだろう。

そう思い、店内に入つて、早速と言うように見て回つてみると、ふと菅谷が目に入つた。

「…………？」

珍しい。こんな虫とは一番、無縁そうな店にいるとは。何か買いに来たのだろうか？

声を掛けようと思つたが、まだ形は菅谷にバレていないので、サプライズにしたい。スルーして、型取りが売っている場所へ向かった。

それから、約10分ほど経過。円香は無事に目当てのものを購入することが出来た。

お店を出て帰宅しようとする、ふと菅谷が目に入った。少し頬を赤らめたまま、買った商品を大事そうに……というより見られないようにして抱えていた。嫌な予感がした。

「リカ」

「っ!?」

声を掛けると、ビクツと肩を震わせている。あからさまに怪しい。

「何してるの? こんな所で」

「ゲツ……ま、マドちゃん……」

「……『ゲツ』?」

やべつ、と声を漏らして口を塞ぐ。ギルティである。

「それ、何買ったの?」

「……」

「言えないもの?」

「……」

「黙ってないでなんとか言ったら?」

「……俺の家でも良いですか」

「どうぞ」

××とのことで、菅谷の部屋に向かった。

「……何これ」

「すみません……」

「すみません、じゃなくて。何これ？」

円香は怒り浸透だった。袋の中身は「おっぱいマウスパッド」。名前の通りの代物である。

正直に言っつて、裏切られた気分だ。こんなものを、菅谷が購入したなんて。こんなものに頼らないといけないほど溜まっていた？ それとも、異性に興味が出て手を出した？ 何れにしても、簡単には許せない。

「こんなもの買ったんだ。バイト代で。いくらしたわけ？」

「……いえ、その……」

「最低」

「——っ……」

「まあ良い、一応聞いてあげる。なんで？」

「その……昨日の、マドちゃんの胸の感触が、離れなくて……なんとか、頭から消したくて……あと、一回揉めばなんとかかなると思っつて……それで……」

「は？ 私の胸は、このガラクタと同じだって言いたいわけ？」

「そ、そんなつもりは……」

「そういうことでしょ」

「っ……」

久しぶりに、この男に本気でキレ散らかしたくなっていたが……それと共に、原因は自分であることを思い出し、なんとか抑える。

……それと、まあ……何。あの生き物バカの菅谷が、異性に興味を持った事に少しだけ感動してしまったり。

なんにしても、ギリギリセーフでもあり、良い機会でもあった。没収したマウスパッドは後で埋めるとして、続けて言った。

「あと一回、揉めば良いわけ？」

「え？」

「どうなの？」

「た、多分……」

「じゃあ、私の使って」

「……はっ……」

言いながら、円香は上着だけ脱いだ。正直、恥ずかしいが、自分の代理を物で満足さ

れるよりマシだ。

「早くして」

「え……いや、ドユコト?」

「だから、私のなら揉んでも良いって言ってるの」

「……え、いや……え?」

「嫌なわけ?」

「い、嫌じゃないけど……」

「なら、早くして」

「っ……」

頬が真っ赤に染まる菅谷だが、自分も同じだ。こんな変態的な台詞を吐くことになると思わなかったが、まあどの道、こうなっていたのは間違いない。それが今日だっただけの話だ。

そう心の中で決心して、両手を背中後ろに回し、正座している菅谷の前で正座し、背筋を伸ばす。偶然にも、今日の服装はボディラインを強調するセーターだった。つまり、胸の形は分かりやすい。

それを見て、菅谷は手を伸ばしてくる。真っ赤になった顔で、胸に向かってプルプルと手を振るわせて。

が、直後、グツと菅谷は握り拳を作り、急カーブさせて顔面に直撃させた。

「何してんの？？」

「ごめん……マドちゃん」

「鼻血出てる！」

「俺今、最低な事しようとしてた」

「いいから鼻血！」

慌ててティッシュで菅谷の鼻を拭いてあげる円香に、菅谷は続けた。

「俺、危うく『性欲が昂った』とかふざけた理由で最低なことするとこだった。そういうことするために、父ちゃんから一人暮らしを許可されたわけじゃないのに」

「……」

「もう決めた。どんなにまた、こう……揉みたくなくても、絶対に我慢してみせる。腕を折ってでも」

……本当に理性が強いのか弱いのかわからない男だ。まあ、それが出来るなら最初から買うな、と思わないでもなかったが、そもそも伝えたい所はそこじゃない。

「……別に、エッチな気分になるのは悪い事じゃないから」

「え？」

「だって人間だって動物だし。3大欲求くらい、生物が得意なら分かるでしょ」

「うん」

「けど、私と浅倉以外で発散するのはやめて。物を使うのも禁止。……どうしてもって時は、私か浅倉に言っつて」

「え、言っつてどうするの?」

「……じゃ、帰る」

「え、ちよつ……マドちゃん?!? ていうか、帰つちやうの?」

「浅倉とチョコ作りの約束してるから」

それだけ話して、円香は帰宅した。透に今日の事話したら「ふーん、えつちじゃん。面白そう」って感心されたのは内緒だ。

期待してる程度じゃ貰えない。確信がないと。

なんかやたらと周りがソワソワしてんな、と菅谷が思ったのは、おそらく気の所為ではないだろう。

学校の最寄駅での待ち合わせということは、この辺にいと自分と同じ高校の生徒が学校へ向かう為、それらの様子をよく見ることが出来るのだが……特に落ち着きがないのは男子だ。

……もしかして、バレンタインデー当日だからだろうか？

今まで「チョコをもらう」という発想が無かった菅谷には、その気持ちが分からない。今年貰えるわけだが、事前にそれは把握してしまっているし、特にソワソワすることなんてない。

そんなわけで、呑気にスマホをいじって待機していると、円香と透がやって来る。

「おはよ」

「お待たせ」

「あ、おはよ」

「早速で悪いんだけど、リカの部屋寄ってくれない？」

「チョコ、保存しといて欲しいから」

「……」

仮にもバレンタインなのに、本人の家でチョコ冷やしておきたいとか、もう風情とかかけらもなかった。

けどまあ、透は何も考えていないのだろうが、円香のことだ。多分「チョコが溶けるかも」と言うことを危惧しているのだろう。

「良いよ」

「ん」

「やったね」

そんなに溶けやすいチョコなのだろうか。まあ、どんなのでも二人が作ってくれたものなら嬉しい。

ワクワクしながら、三人で自宅に向かった。

「……ちなみに、どんなチョコ？」

「言うわけないでしょ」

「放課後のお楽しみ」

「そこは言わないんだ……」

そんなわけで一度、部屋に戻ってから登校を再開した。

とりあえずチョコを冷蔵庫に入れて、改めて出発した。正直、かなり気になると言え
ば気になるのだが、まあ仕方ない。

「……バレンタインかあ……なんか、結局今年もあんまドキドキしなかったなあ……」
「確定だったもんね。樋口がバラしたから」

「まだ言うのそれ……いや、まあ実際そうだけど」

「あーあー、俺サプライズされたかったなー」

「樋口がちゃんと授業受けてなかったからなー」

「二人とも、今日の晩御飯にタバスコ一本入れるから」

「えっ」

あまりにも容赦がない制裁だった。二人とも揃って冷や汗をかいてしまおう中、無視し
て円香はサクサクと先に進んだ。

そんな時だった。透がふと思ったように菅谷に聞いた。

「そういえばさ、リカ」

「何ー?」

「樋口に聞いたんだけど、おっぱいマウスパッド買おうとしたんでしょ?」

「ブフォツ!!?」

当然、吹き出した。いきなり何を言っているのか、この野郎は。

「マドちゃん！ 言ったの!?!」

「そりや言うでしよ。私と浅倉の間で、リカのこと情報共有しないわけにいかないから」
「つ……お、俺のプライバシーはどこへ……」

「他の人には言つてないんだから良いでしよ」

そういうものなのだろうか……と、思ったが、そういえば二人は二人で自分を勝手にDSにしたりドMにしたりして妄想していることを知ってしまったのだから、仕方ないとさえ言えれば仕方ないのかもしれない。

「その時にさ、どうしてもムラムラした時は私か樋口がエロい写真送るんでしよ?」

「浅倉、言い方」

「ていうか、頼まないよそんなの!」

結局あれ以来、何か頼んだことはない。スマホでこっそりその手のエロ画像を調べたこともないし、ちょっとそんな気分になった時は座禅で誤魔化している。

「いや、そんなのどうでも良くて。知りたいのは、リカのタイプ」

「タイプ?」

「例えば……胸とか。大きいのと小さいの、どっちが好き?」

「つ、な、何聞いてんの!?!」

「だから……浅倉」

なんでそんな男子高校生のような話題を好きな人としなければならぬのか。というか、透の発想が最近、割と男子高校生過ぎて困る。

「そんなのないから。俺は別に……」

「いや、あるでしょ。少しの好みくらい」

「ないってば」

「むう……強情」

そんな言われても、ないものはない。そもそも、円香と透が相手でなかったら、異性に興味さえ無かったのだ。仕方ないと言えば仕方ない。

「じゃあ、例えば胸が大きい人と小さい人が裸で目の前にいたら、どっちを見ちゃう？」

「え、何その質問」

「例えば、の話」

「そんなの聞かれても……目を合わせないように通報すると思うけど」

「……あー、そうなる」

「浅倉、もう諦めて。本当にそういう人なの、リカは」

そう言いつつ、円香は冷や汗をかいていた。それ逆に言えば「女の子を性格でしか見てないから、自分と透の二人を好きになっっている」のかもしれない。

今後、気に入った性格の女性が現れたら殺してでも好きにはさせないとして……も

し、菅谷が小学生の頃から女の子と友達になつて遊び慣れていたら、同時に何人と恋愛されてたか分かったものではない上に、全員をまじで面倒見始めそうでさえある。

「リカ」

「何？」

「浮気したらホント殺すから」

「しないよ……え、俺そんなモテそうに見える？」

「……」

そうだった。そもそも、性欲と引き換えに動物愛を手にしたような男だった。自分と透以外に、この男を好きになる女はいない。

大事な事を改めて思い出している間に、校門に到着した。昇降口から入り、下駄箱を開いていると「何これ？」と、少し離れた場所にいる菅谷が声を漏らす。

「どしたん？」

隣の透が聞くと、下駄箱の中から箱を取り出した。何処かのお店で買ったものなのだろうが、綺麗に包まれている。

「えっ」

「誰からだろ……『雑誌読みました。応援してます』だって。え、これもしかして……」

「……ふーん」

「つ、と、とおるん?」

それは、間違ひなく透と円香の鞆から、白銀の刃を抜かせた。

二人揃つて顔を見合わせると頷き合う。これはおそろく、単純にファンとしてだったのかもしれないが……その中に自分達2人の壁を突破したがる身の程知らずがないとも限らない。

×とりあえず……今日一日、絶対に離れないことを心に決めた。

×一時間目、美術。つまり、移動教室である。他のクラスとも合同でやるこの科目は、いつもより隙が多くなる。

そのため、透と円香は両サイドから菅谷の動きを封じるように腕を掴み、そのまま移動していた。

「……あの、とおるん? マドちゃん?」

「こちら、浅倉。周囲に女子生徒の気配はありません、どーぞ」

「こちら、樋口。左にも女子生徒の反応、ございません、どーぞ」

「トランシーバーもないのに、なんの『どーぞ』?」

などと話しながら、二人は移動していて、正直、菅谷は困ってしまった。普通に歩みにくいし、他の生徒からの視線がまた痛い。

さて、移動を完了し、席に座る。移動教室の先では席替えなんてないため、初期の出席番号順に座らせる。

透と菅谷は比較的に席は近いが、円香は少し離れた位置になってしまっていた。

「浅倉」

「任せて」

「何を……？」

その反応を無視して、菅谷と透は席に座った。

「……あの、とおるん。俺別に……」

「ダメ」

「まだ何も……いや、何でもないや、もう……」

「ちなみにリカ。さっき下駄箱に入ってたチョコ、どうするの？」

「え、そりや食べるけど……」

「ふーん……食べるんだ」

「一緒はどう？」

「美味しそうだったら食べる」

直球である。これでもか、と言うほどに。

そうこうしている間に、先生が教室に来る。挨拶だけして、授業が始まった。

「えー、では今日も前回の続きです。教室内の像をデッサンして下さい」

鉛筆とパンの耳で描くあれである。教室内の像とは、どこかの神殿においてありそうな、人物の腕と下半身がない像のこと。それをモデルに、絵を描かないといけない。

勿論、一つの像を全員で描くわけにいかないのです、複数種類あるものの中から選べる。当然、円香と透と菅谷は同じものだ。

で、いざその像を囲んで絵を描くのだが……。

「……あの、近いんですけど」

「知らない」

「我慢して」

「……」

椅子を自由に移動させて良いからか、菅谷の肩に二人の肩がくつつく距離でデッサンを始めた。

「あの……お二方？」

「は？」

「殺すよ」

「なんで？？」

菅谷以上に、周りの女子生徒の方がいづらかった。

×××
休み時間。トイレに行きたくなった菅谷が席を立った直後、透と円香も席を立つて教室を出た。

「あの……何？」

「そつちこそ何？」

「私達の許可なくどこ行くの？」

「トイレに許可が必要だったの？？」

「いいから早く」

「……」

この人達は、一体全体どうしてここまでついてくるのか……いや、わかるにはわかるのだが、普通に少し居心地が悪い。

「あのさ……別に俺、チョコもらったからって浮気とかしないよ？」

「そういう事じゃないから」

「隙だらけのお馬鹿さんにチョコを渡したいのなら、面接しないとダメでしょ」

「え、め、面接するの……？」

そんなに嫌なのだろうか？ 自分にチョコが渡るのが、と思うと少し不安になる。そもそも、関わったことない男子にチョコ渡す奴なんて、そうそういるとは思えないのだ

が……。

「リカ、想像して。もし私とか樋口が、ホワイトデーにチョコあげてもない男子から何か貰ったら？」

「コクピットだけを、狙えるのか……!?」

「要はそういうこと」

なるほど、と渋々納得した時だった。トイレの前に到着する。

「じゃ、待ってるから」

「さっさと済ませて来て」

「覗かないでよ？」

「さっさといけ」

「あつ、ハイ」

怒られたので、さっさと用事を済ませることにした。しかし、たかだか小便に一々、ついて来られるのは、少し居心地が悪いというものだ。

ここは一つ、少し悪戯でもしてみようか。その名も、バレずにトイレから脱出作戦。

そうと決まるや否や、どうするか考える。上着を脱ぐ？ いや、ダメだろう。それだけじゃバレる。

隠すにはやはり、顔を隠さないといけないわけだが……。

「……」

こっさり出て行くのはやめた。逆に驚かせてみることにした。顔に、包帯のようにトイレットペーパーを巻いて、ミイラっぽくってみる。これで逃げてくれれば、少しは一人の時間も確保できるというものだ。少なくとも、トイレの時間くらいは。

ちやうど鏡があるので、瞳だけ出すように巻いて……そのまま、突撃する！

「ブルアツ！」

「っ!!? ……な、なんだ。リカか」

「何してんの？」

「……なんでわかるの」

「声」

「匂い」

「体格」

「かわいさ」

「待つて。マドちゃん、匂いと可愛さってなに？」

「用が済んだのなら、早く教室戻るよ」

「もしかして俺、臭い？」

「それはない」

それをするのは結構だが、そもそも体育の授業中にチヨコは渡せないだろうに……。まあでも、割と学校で三人一緒にずっとバカやってるので、今更気にもないか、と思い直し、改めて構える。折角、見られているのだ。少しは良いところを見せておきたい。

そうと決めた直後、味方がサーブを放った。

向こうのコートに飛び、レシーブ、オーバーハンドパスと繋ぎ、最後の一撃が来る。素人にとってスパイクは割と難易度高いのだが、それでもかなり早い一発。

「菅谷！」

「はいはい」

すぐに落下点に入る。とりあえず、レシーブで大きく上げて、向こうに返せれば仕事としては十分だろう。

そう判断し、両手を組んで打ち上げようとした時だった。

「リカー、点取ったら恐竜の化石発掘チヨコ奢ったげる」

その余計な一言が透から飛んできた時点で、構えは変わった。スパイクを打つためのような姿勢になり、手のひらを掌底でも放つかのように閉じて構える。

「バカ、普通に返せ！」

「恐竜！」

「この生き物バカ……!」

もう何も見えていなかった。菅谷は、降ってくるボールにタイミングを合わせ、思いつきりボールを引つ叩いた。

しかし、力の加減を間違えたのか、他の加速が予想を超えた。

向かってくるボールに対し、早すぎるタイミングでの手の振り……つまり、中指を持っていかれるわけで。

ボールは無事に敵の陣地へ勢い良く戻っていった。でも、中指は戻らなかった。

「今、すごい音しなかった?」

「ね。割と洒落にならない音」

「木琴みたいだな」

「そんな良い音だった?」

そんな会話が周りから聞こえる中、菅谷は黙って自分の中指を見下ろす。……逆側に90度曲がった指。

「ちよつ、リカ……!」

「うわ、やっぱ」

「菅谷、大丈夫か?」

体育教師と透と円香が駆け寄って来る。が、菅谷は真顔のままその中指を掴んだ。

「大丈夫大丈夫。脱臼くらいならこうすればすぐ治るから」

「「は？」」

「よっ、と」

メキツ、と強引な音と共に指を元の位置に戻す。直後、ぐっぱつと開いて閉じて、また開いてみせた。

「ほらね？」

「樋口、浅倉。保健室へ連れて行け」

「はい」

「え、な、なんで……？」

×連行された。怒られた。

×

×少なくとも、女子はその様子を眺めていて、強引に脱臼を直した菅谷にドン引きしていたので、結果的に透と円香の作戦は上手くいったと言える。

そんなわけで、その後も円香と透の執拗なブロックは続き、バレンタインのチョコレートは結局、今朝にももらった一つだけ。多分、前に握手を求められた少女だろう、と予想しつつ、三人で菅谷の部屋へ帰宅した。

ちなみに、菅谷の指は本当に何ともなかった。化け物である。

「はあ……にしても、体育の時はほんと、心臓止まりかけたわ」
「まったくだから」

「え、二人ともそんなに心配だった？」

「どちらかと言うと頭がね」

「私も」

「え、酷い……」

「そりやそうである。少なくとも「酷い」なんて言う資格はないというものだ。

「ていうか、それもお義父さんから習ったわけ？」

「え？ うん、まあ」

「私達のお義父さん、何を想定してるんだろうね……」

なんて話しながら、とりあえず手洗いうがいを済ませた。

「で、チョコー！」

「……なんかもう、風情もへったくれもないけど」

「まあいつか。去年は感激されたしね」

とのことで、二人は冷蔵庫に向かう。揃って箱を取り出すと、床に座っている菅谷の元を持って行った。

「はい」

「ハッピーバレンタイン」

「ありがとう」

お礼を言いながら、菅谷はそれを机の上に置く。さて、どちらから開けるか？ ……
こういう時、少し困るかもしれない。両方同時に開けられれば良いのだが、どちらかを選べど優先順位がついているみたいになってしまふ。

そんな菅谷の悩みを見透かしたかのように、いつのまにかコタツに入つて頬杖をついている円香と透が微笑みながら言った。

「もちろん、私の中から開けるでしょ？ あげるつて言ったの私だし」

「いやいや、私の中からでしょ。私が先にキスしたし」

「うぐっ……」

「冗談だから」

「そんな真剣に悩まなくて良いよ」

「ほっ……」

「で、どっちっ？」

「……じゃあ、下駄箱の中に入つてた……」

「あ？」

「嘘嘘！」

マジの殺意だった。先にいじって来たのはそっちなのに。

まあ、でもそういう話なら、とりあえずチョコをくれる、と言い出したらしい円香のものから開けることにした。

袋を開け、綺麗にラツピングされた中から顔を出したのは、半分に割れたハートだった。微妙にピンク色である。

あんまりな形に、思わず頭の中が真っ青になった。

「え……もしかして、失恋……?」

急に涙目になった菅谷を見て、円香は少しピンと来た表情になる。

「……そうって言ったら……どうする?」

「え……」

直後、菅谷の目尻に涙が浮かぶ。どうしたら良いのか、ワタワタと手元が空を切るように忙しく動くが、やがてしよぼんと力なく項垂れた。

「……分かりました……どうぞ、俺のことが嫌いになったのなら、いつでも……わっ、わがれでぐれでもッ……!」

徐々に歯を食いしばり始め、流石に普通じゃない様子に狼狽えた円香は、慌てて声をかけた。

「いや、冗談だから泣かないでくれる? そもそもまだ名義上、付き合っではないし」

「……じょう、だん……？」

予想以上の反応に、円香は少し狼狽える。菅谷は数回、瞬きしたあと、透の方を見た。透は真顔で小首を傾げているが、なんとなくのノリで手を広げた。

その中に、菅谷は抱き抱えられに行き、お互いに強く鬱陶しく抱き合う。

「とおるんー！」

「ねー、今のは樋口良くないよねー」

「自分が言われてたら絶対キレる癖にねー！」

「キレるところか『次やったら別れるから』って宣言しそうなどこあるよねー」

「……あんたら……」

結束すると面倒臭い。呆れてしまったが、まあ今のは自分が悪いかも……と、思い直し、円香はため息をついた。確かに自分が似たようなことをやられたら、ついうっかり「別れる」なんて言って、最悪解決までに時間を要しそう。まさか、泣かれると思わなかったし。

「ごめん。もう言わない」

素直に謝ると、もう許したのか、泣きそうだった顔が急に戲けた表情になり、透の方に身を寄せ、ヒソヒソ話をするように話し始める。

「……どう思います？ とおるんさん」

「これは、あとでお仕置が必要ですね」

「例えば？」

「ポツキーゲーム」

「え、いやそれはちよつと俺も恥ずかしいから……」

「バカ二人、調子に乗らないで」

さて、とにかくチョコである。菅谷は改めて、円香からもらったチョコを開けようとしたが、それを見て透が止めた。

「あー、待った。私の方も開けて」

「え？」

「食べる前に」

言われて、菅谷は透のも開けた。すると、次に出て来たのは、抹茶っぽく緑色に染まったハートの片割れ。

それを見れば、流石に理解してしまった。つまり、これとこれは……。

「合体する……ってこと？」

「そう」

「わおっ……すごい……！」

直後、菅谷は瞳をキラキラと輝かせ、二つとも出して皿の上に乗せた。慎重に二つの

ギザギザした断面を繋ぎ合わせる。プラモデルではないので「カチっ」という合体音があるわけではないが、ぴったりハマった。

「おおー！ 色違い！」

「大変だったんだよ。それ作るの」

「ホント。どうやっても大きさま変わっちゃうし。少しでも欠けるの嫌だったし」

「練習用のチョコ食べ過ぎて、お父さんと小糸ちゃん鼻血出すし」

「……私達も少し太るし」

その「合体」というエンタメ感がかなり気に入ったのか、菅谷はめっちゃ嬉しそうにチョコをくつつけては離し、またくつつけるを繰り返している。

ちなみに朝、チョコを先に家に置きに来たのも、少しでも欠けるリスクを回避するためである。

「ちなみに、緑が抹茶。ピンクは苺味ね」

「凝ってるなあ……ちなみになんで緑とピンク？」

「ん……チョコにした時、美味しそうな味にしたくて」

「二人で別の味にしたかったんだよね」

なるほど、と頭の中で理解する。同じ形で別の味、ということだろう。二人で一人の相手にあげるにはもってこいの案だ。

「ちなみに、樋口これ豆蒨きの時に思いついたんだって」

「豆……ああ、節分の時の？」

「そう」

「え、じゃあこれもしかして……ハートじゃなくて、その……むね、だったの……？」

「違う、すけべ。割れた豆を見て思いついただけ」

「あ、だ、だよね……ビツクリした」

ちなみに、作っている最中に「ひっくり返したら胸に見えるかも」と実際、円香が思っていたのは内緒だ。

少しエツチな発想をしてしまったのか、それとも当日の手の感触を思い出してしまったのか、菅谷は誤魔化すようにスマホを取り出した。

「……あ、そだ。写真撮っちゃお」

「女子高生か」

「リカってそういうところ女々しいよね」

「思い出だから」

「……でも、撮りすぎでしょ」

「一枚ずつに割れたパターンに合体したパターンとか、いろんなバリエーションはいいから食べてよ」

と言われても、煩惱を払うためでもあるので、簡単にはやめない。4〜5枚、撮った後、確かにそろそろ食べた方が良いと思ひ、自分も準備にかかった。

「あー……じゃ、ちよつと待つてて」

「え、待つどの？」

「溶けちゃうよ？」

「1分かからないから」

そう言うのと、菅谷は立ち上がる。その様子を見て、円香と透は小首を傾げる。何かあつたのだろうか？

何を思ったのかペランダに出た菅谷は、ガサツと何かを取ってくる。そして、袋に入つたそれを、円香と透に一つずつ手渡した。

「はい。俺からも、ハッピーバレンタイン」

「え……」

「リカから……?」

「うん。多分、美味しいから」

それを言われたものの、円香と透は頭上に「？」を浮かべてキョトンとする。

「なんで？」

「今日クリスマスじゃないけど」

双方からプレゼントを交換する機会ではない。

だが、菅谷もキヨトンとした顔で言い返す。

「え？　男がチョコあげちゃダメだって誰が決めたの？」

「……」

「……」

今度こそ、二人とも思わず目をパチクリさせてしまった。バレンタインのことなんて「聖バレンチヌスの命日」くらいしか知らない二人だからこそ、妙に納得してしまった。実際、アメリカの風習では男がチョコを贈る風習があるらしい。

そのチョコを2人揃って開けると、中から出て来たのはキラキラした小袋に入った、一口サイズの生チョコ。それが三つずつ入っている。

素人臭のするラッピングを見て、円香が小首を傾げた。

「これ……手作り？」

「うん。一応」

「わお……リカの、チョコ」

円香も透も、感動したようにそれを眺めた後、菅谷の方を見た。

「？」

菅谷が「何？」と聞くように小首を傾げた直後だった。二人揃って、その無垢な少年

に思いつきりハグをした。

「っ、ちよっ……二人ともっ？」

「……逆チョコとか、気持ち悪い」

「ふふ、一生推すわ」

「う、うん……あの、流石に少し恥ずかしいんだけど……チョコ、溶けちゃうし」

「うるさい……ミスター女子力」

「ふふ、リカ心臓爆速」

「……あ、でもこれでホワイトデー何もしなくて良くなっちゃうのかな」

「は？ ……あー」

「じゃあ、ホワイトデーは遊びに行けば良くない？」

「お、良いね。何処行く？」

「適当に」

「ホワイトだし……雪祭り」

「良いね」

「何でもかんでも肯定しないで。ぎりぎりやってたとしても北海道になっちゃうで

しょ」

なんて話しながら、そのまま三人でチョコを食べた。

人付き合いに興味持たないところなる。

ようやく雪も溶けてきたのに、寒さは引かない季節になった。従つて、こたつをしまうのもまだまだ先。

樋口、浅倉、両家とも、未だにこたつをしまうという事はなかった。

ホワイトデーが過ぎ去り、三人でのデートを終えて、これからしばらく予定無し……とは、そうは問屋が卸さなかつた。

浅倉家のコタツで温まっている円香と透が、早速声をあげた。

「で、リカの誕生日が近いじゃん」

「うん。次こそはリカのサプライズに負けないで行こう」

何せ、バレンタインでは見事なカウンセターをもらつてしまった。アレはおそらく、菅谷自身も「マドちゃんとおるんのことしか見てないよ」という意思表示で渡してくれたものなのだろうが、はつきり言つて負けた気がした。

だから今回こそこちらが喜ばせる、そう思っていた。

とりあえずサプライズは無理なので、特に菅谷に隠す事なく準備を進める。

「場所はリカの部屋でしょ?」

「うん。サプライズなんてする気ないから、当日堂々と上がり込んでガン無視決め込んでセッティングしよう」

「ん。で、何使う？」

「やっぱくす玉？」

「あれ意外と高いから。というか、なんなら外で軽く遊びに行っても良いし」

「あー、私達の時みたいに？ リカなら昆虫園とか喜びそうじゃない？」

「は？ キレそう」

「冗談だから」

「あの〜……」

相談している中、やんわりとした声が二人の間に入る。コタツを挟んでみかんを摘みながら相談をする二人に、同じように温まっている菅谷が口を挟んだ。

「……その、そういうのは……俺がいなくて話してくれませんか……？」

「は？ なんで？」

「嫌だよ。どうせ隠し切れないし」

「恥ずかしいんだけど……」

「知らない」

無視である。そもそも、菅谷だって大体「祝ってくれ」って事くらい理解している

だろうから、隠す理由もないのだ。

「そうだ、リカ。あんた行きたいところなの？」

「俺に聞くの？」

「あ、そうじゃん。それ一番、手取り早い」

「じゃあ……昆虫博」

「は？」

「う、うそです……」

余りの円香からの圧に、菅谷は狼狽える。

まあ、流石にどこに行くかを聞いたのは冗談だ。行先くらい自分達で決めなくてはならない。

すると、コタツの中でいづらそうにしている菅谷が、ポツリと呟くように言う。

「うーん……でも、そんな俺の誕生日なんか気にしなくて良いのに」

「は？ 殺すよ？」

「なんで私達がやりたい事、リカに否定されなきゃいけないの？」

「そ、そんなに怒らなくても……」

そのセリフに二人揃って切れ味鋭く反応する。

「……あ、あー……じゃあ、俺も何かお礼を……」

「ダメ、やめて」

「それ、もらつても雛菜と小糸にあげるから」

「……」

「というか、誕生日なのに祝う人達に何かを送るって正気だろうか？ 逆子ヨコならまだしも、誕生日でそれはちよつと違う。」

「……そういえば、とおるんとマドちゃんと知り合つて、もうすぐ二年かあ……」

「早いよね。時間」

透が頷きながら呟く。

「うん。良かったよ。俺、映画が趣味で」

「そういえばそうだったっけ」

「トムの話ですつと盛り上がってたよね、あんたら」

「そうだったっけ？」

「あんま覚えてない」

あの頃は、二人ともこんなことになると思つていなかったから、仕方ないと言えば仕方ない。

「ねー、リカ」

「んー？」

「キスしたい」

「んー……ん？」

今なんて？ と小首を捻ったのも束の間、コタツの中に潜り込んで菅谷がいる面から、唐突に透は身体を出した。

「えへへ、捕まえた」

「待つて、さつき何したいって……」

「んー」

「んっ……んっ？」

唇が唇が触れ、離れる。舌が入ってきたわけではないが、しっかりと唇の柔らかさを同じ唇で感じてしまう。

「相変わらず真っ赤になるの早っ」

「あ、あの……普通にキスするのはちよつと……」

「出会った時のことを思い出して、したくなつたんだから仕方ないじゃん」

「で、でもほら……まだ俺からキスしようとしたことはないし……というか、まだできないし……あんま慣れてないし……」

「いや、もうリカからもキスしてくれたじゃん。それも、深い方」

「え……し、したっけ？」

「は？」

直後、会話に入ってきたのは円香。聞き捨てならない。

「何それ、聞いてないんだけど？」

「え？ だってこの前、したじゃん。ポッキーゲームの時」

言われて、円香と菅谷は当日のことを思い返す。確か、ポッキーゲームの最終戦。お互いにポッキーを両端から食べていた時、確かにキスするまでがゲームだと勘違いしていた菅谷が、透を逃さないように頭に手を添え、口の中を舐め回し……。

「あ、ホントだ」

「っ……………」

思い出し、頬を赤く染めた菅谷がビクツと肩を震わせたのは、円香が「確かに」と言うように思い出したからだ。

その後は早かった。透と挟み込むように、円香がコタツの中を移動してくる。

そして、菅谷の方を見て目を閉じ、少し唇を尖らせる。

「ん」

「……………し、しろと……………」

「ん」

「あの、そんな急に……………」

「ん」

「……恥ずかしいんだけど……」

「ん」

「有無を言わさない……」

完全にする気満々である。その圧力は、キス待ち顔とは思えないレベルの覇気を放っていた。

「がんばれー、リカー」

「う、うるさい……誰の所為でマドちゃんの変なスイッチが入ったと……」

「は？ 入ってないし。割と常にこんな感じだから」

「えっ」

聞きたくないことを聞いた、と言うように菅谷は冷や汗をかくが、円香は自分に言ったことにも気付かずに目を閉じてキスを待つ。

しばらく菅谷がどうしたものかわたわたと焦っていると、後ろから透が菅谷の頭を掴んだ。

「じゃ、手伝ったげる」

「え？」

「は？」

「ぶっ！」

そして、それを前方へ加速させた。お陰でキスどころか、額と額が衝突し、二人とも後方にノックバツク。菅谷の後方には透の頭があり、額に後頭部が衝突。三人とも死んだ。

「……浅倉……！」

「とおるん……！」

「リカ……！」

「いやお前の所為だから！」

「わっ、やばっ……！」

逃げようと思った透は、コタツの中に引つ込む。しかし、良いところで邪魔をされた。立腹の円香が逃さない。コタツの中へ追いかける。

その間、待っていた菅谷の真後ろに、透をホールドした円香が顔を出した。菅谷と挟み込むように。

「リカ」

「流石、やっっちゃおっか」

「え、ま、まって。前後挟むのはズル……」

「樋口アースクウエイク」

「菅谷霸王幻影弾」

「ツツツ!!？」

二人に狭い空間で脇の下に手を挟まれ、指先を高速かつ優しいタッチで動かされる。

「っ、ちよっつ……やめっ……!」

「ごめんなさいは？」

「ひよっ……ひよへんなひやっ……!」

「なんてー?」

「聞こえない。やり直し」

「くくくっ!」

そのまましばらく二人がかりでイジメ、真ん中の透が珍しく身体を全力で悶えさせて暴れている時だった。

さつきまで笑いで顔をほんのりと赤らめていたのが、急に真っ赤に染まる。

「っ、ま、待ってっ。リカ、待って……!」

「ごめんなさいは?」

「や、違っ……だから、ホントのやつで……!」

「いや、私達もホントのやつだから」

「ねー?」

「つ~~~~~！」

しかし、らしくない反応に菅谷は何事かと思った。が、自分はちゃんと胸やお尻に手がいかないように気を付けているし、変な所は触ってないはず……と、思っていると、暴れ過ぎて自分のポケットからスマホが落ちた。

暴れてる透に踏まれて画面が割れるかも、と思つて拾うことにした。

「ごめん、マドちゃん。スマホ、ポッケから落ちたから拾う」

「ん」

「ちよつ、らめらつへ……！」

「うるさい。謝つて」

止めようとする透を円香が止めている間に、菅谷はコタツの中に引つ込んだ。掘り炬燵の中に潜り込み、落ちている光る板に手を伸ばす。

それをポケットにしまった直後、踵が迫つて来ているのが見えた。

「あぶなっ！」

悶え過ぎている透の一撃を、しゃがんで回避する。直後、首の周りに何か布が引つかかる。

なんだ？ と、思いはしたが、とりあえずコタツから出てから取ろうと思ひ、顔を出した。

「ふう……危なかった」

「スマホあった？」

「うん」

「……ていうかあんた、それ何首から下げてるの？」

「分かんない。とおるんの踵避けた時に引かかった」

言いながら、首からその布を外した菅谷は「なんだこれ？」と小首を傾げる。何処か見たような気もするし、やっぱり気の所為な気もするよう……なんて考えながら、それを外して床に置いた。

「え、それ……浅倉のスカートじゃない？」

「え？」

言いながら手を止める円香と、キョトンとする菅谷。

まさか、と思つて二人が肩で息をする透を見下ろす。その透は、真つ赤になつた顔のまま、ウギギツと言うような表情で菅谷を見上げた。

ギョツとすると同時に、嫌な予感がする菅谷。それは正しかった。頭にきていた透は、コタツの布団をペラリとめくつた。まるで、わざと下着を見せつけるように。

「~~~~つ!?」

「浅倉！」

「リカが悪い」

×失神した菅谷と、ビッチみみたいな真似をした透に怒る円香だった。

×「……俺が悪いのかな……」

「お互い様だと思うけど……まあ、理屈じゃないから。こういうのは」

お詫びのためにアイスを買に行くことになり、円香はそれについて行った。少しでも好きな人と一緒にいたい乙女心♡ などではなく、透が円香にも怒っていたので、少しづらかったからだ。

「で、どうだった？」

「何が？」

「浅倉のパンツ」

「……水色」

「すけべ」

「聞いたのマドちゃんでしょ！」

「前までのあんたなら、まず『何聞いてんの!?!』ってなってたでしょ」

「っ……」

それはその通りかも……と、頬を赤らめて俯く菅谷を見て、円香はため息をつきなが

ら言った。

「別に、悪いとは言っていないでしょ」

「え？」

「ようやく普通の男子高校生っぽくなってくれたってだけ。……少しくらいすけばになっただけで、引いたりしないから」

言っても、いまいちピンと来ていない顔。まあ、気持ちは分かる。自分も思春期はそうだった。口ではそう言うけど、実際はどうなの？ と。性的な事なら尚更だ。

やがて、菅谷はそんな表情のまま小首を傾げて聞いてきた。

「……もしかして、マドちゃんもパンツ見せたいの？」

「……」

全然、違った。こいつの頭はどうなっているのか。イラツとしたので、円香はその場で足を止める。

「あつそ。じゃ、先に戻ってるから私のアイスもお願い」

「わー！ 嘘嘘、嘘だから一緒に来て」

本当にバカな男である。もう少し礼儀を学んだ方が良い。

仕方ないので、とりあえずそのまま一緒にコンビニへ向かう。

「でも、俺はマドちゃんにもとおるんにも、何度もパンツ見られてるんだよねー」

「履いてない奴でしよそれ。いくらこつちが思春期でも、洗濯したてのパンツに欲情なんてしないから」

「そうなの？」

「あんたは雑巾みたいになってる。パンツを見て変な気分になるわけ？」

「……よくよく考えたら、パンツって何がえっちなんだろ」

「……さあ……」

「なんだか話が変わる方向に逸れていったが、まあ円香は乗ってやることにした。菅谷とこういう話になるのはレアケースなので、逃す手はない。

「あれじゃない？ やっぱり……肌が一番長く密着してる布だから、とか」

「えー、でも排泄物を出すところだよ？ たまにクラスの男子が『レムりんのおしっこならかけられても良い』とか言ってるけど、普通に嫌だよ俺」

「ていうか、レムりんって誰」

「いや知らないけど……女の子でしょ、多分。俺、マドちゃんとかとおるんにそんなのかけられたくない」

「まあ……それは私も嫌」

「やっぱり、別にパンツってエロいものじゃないよね」

「じゃあ、家に戻ったら私のパンツ見る？」

「え、いやそれはちよつと恥ずかしいとかむしろ恥ずかしくないの？　　とうか
……」

「つまりそういうことですよ。エッチはエッチって事」

「……うーん、難しいなあ」

そんな話をしながら、コンビニに到着した。アイスを選びながら、菅谷は顎に手を当てる。

「あ、もしかして……」

「何？」

「隠されると見たくなるのでは？」

「……じゃああんた、私がガンダムのTシャツ着てて、でも恥ずかしいから隠してて、いざ見ちゃった時に欲情するわけ？」

「……あー」

話しながら、アイスを選ぶ。透に頼まれたガ○ガリくん（うめ味）と、菅谷のパ○ム（ほうじ茶味）と、円香のク○リツシユをカゴに入れる。

「良いよ、マドちゃんの分も一緒で」

「え、良いの？」

「うん。……とおるんには内緒ね？　一応、お詫びで買ってるから」

「……んっ、ありがとう」

話しながら購入を終えて、コンビニを出た。

浅倉家に向かいながら、今度は円香が声を漏らす。

「……もしかして、面積じゃない?」

「え?」

「ほら、布の面積。肌を隠す面積が少ないから。だから、下着姿は恥ずかしい」

「あー……なるほどね」

「実際、女子って真夏に汗でブラウスから下着透けてもあんま気にしないし。ジロジロ見られると不愉快だけど、くつきり肌が見えなければ、正直、気にならない」

「それか……じゃあやつぱり、基本的には肌を見られるのが恥ずかしい……ってことね」
「それで良いと思う」

なんか結論が出ていた。少しスッキリした様子のまま、二人は帰宅し、浅倉家に戻った。

女の子の下着の話で盛り上がったのに、あまりエッチな雰囲気にならなかったな、と円香は少し自分で自分に困惑していると、ふと菅谷が自分の方を見ているのが目に入った。

「? 何?」

「いや、でもマドちゃんの肌は綺麗で、隠すのは勿体無くなって」

「つ……ふーん、そう。じゃあつまり、あんたは他の男にも私の肌、見せて良いと思ってるわけね」

「あ、そ、そういう意味じゃないよー」

やはり、こいつの直球に全て素直に応じることは出来ない。思わず捻くれた返しをしてしまい、菅谷は困ったように笑みを浮かべながら、円香の頬に手を添えた。

「……俺とおるんにだけ見せてくれれば、それで良いって意味」

「バカ……ホント重い、そういうとこ……」

「マドちゃんと同じだよ」

「一緒にしないで……」

赤く染まった頬を隠すように目を逸らす円香だが、それをさせまいと菅谷は自分の方に向ける。

その視線はまっすぐと自分に向けられ、じつと瞳を見つめられる。

え、まさか……と、円香は冷や汗をかいた。ここでキス？　なんて思ってしまったが大変困ったことに否定をする理由はない。

いや、特に困ったことはないのかも……と、思い、黙ってキスを待とうとすると、菅谷が照れたような笑みを浮かべた。

「なんて……ごめんつ。無理矢理、空気を作ろうと思ったんだけど……やつぱり恥ずかしいね」

「……」

笑みをこぼして、手を離されてしまった。正直、お預けを食らった気分だ、少しムツとしたが、菅谷なりに努力をしたと思えばそこまで腹を立てることはない。

……むしろ、今こちらから手助けしてやれば、キスしてもらえるかも、そう思った円香は、菅谷の頬に手を当てた。

「……バカ。どうせするなら、最後まで責任持つて」

「え……で、でも……」

「……強引に迫られて困った顔してたのか、彼女の顔をよく見るこくくらいしたら？」

「……」

言われて、菅谷は再び円香の頬に手を当てる。ゴクリと唾を飲み込み、顔を向ける。円香が目を閉じると、菅谷はそのまま顔を近づけようとした時だった。

「へー、人のスカートを二人がかりで脱がしてそのペナルティで買いに行ったアイスを届けることもなく、人の家の玄関でマウストゥーマウス……流石、肝が太いね」

ビクツ、と二人揃って肩を震わせる。らしくない長つたらしいセリフ……間違いなく透の声だ。

確かに、無神経だったかもしれない……というか、無神経だった。その透は、いつもの笑顔さえ消えて、真顔のままこちらを睨み付けている。

「……アイスだけ置いて帰ってくれる？」

×慌てて二人とも謝り倒した。

×

「リカー、アイスー」

「畏まりました」

結局、コタツの中で透を膝の上に乗せることで許されることになった。菅谷への命令だけで円香も許されたのは正直、菅谷としては納得いかないが、まあ仕方ないので受け入れた。

膝の上の透は、菅谷にアイスを食べさせてもらいながら、ぬくぬくしている。

「透様、お味の方は如何でしょう？」

「んー、微妙。バカが食べさせてくれるから」

「……」

やはり、割とブチギレている。だが、まあ怒っても仕方ないのかもしれない。

「リカ、撫でて」

「はっ」

「んー、43点」

厳しい……と、菅谷は少し涙目。

一方、円香は向かい側で一人、アイスを齧っている。

「リカー、ハグ」

「畏まりました」

「その口調、面倒だからやめて」

「わ、分かった……」

自分でやらせた癖に……と、思いながらもハグをする。

それを堪能している透は、そのまま本来の話に戻した。

「で、樋口。誕生日、どうしよっか」

「え？ あー、うん」

「やつぱり、リカにも喜んでもらいたいし、リカが喜びそうなのが良いよねー」

「……動物園とか？」

「いや、昆虫博とか」

「っ……」

「冗談。そういうところ」

「……ほっ」

「リカ、最近むつつりっぽいし、池袋でやってる性いっばい展とか連れてってみる？」
「……んー、良いかも」

「あ、あの……だから、俺の前でそういう話は……」

「これ、夜のつていうのがキャッチフレーズっぽいけど、昼もやってるのかな」

「調べれば出るんじゃない？」

ガン無視である。知ったことではない、と言わんばかりの反応に、菅谷は項垂れてしまふ。

「リカ、アイス」

「あつ、ハイ」

そういう時だけ声を掛けてくれるものだ。

流石にその菅谷に同情した円香が、代案を出した。

「あー、でも今の季節、暖かくなって来たし、外歩く動物園の方が良いんじゃない？」

「あー、確かに」

「あと、私達の時は次の日に雛菜達とケーキ食べたけど、リカの時はそうもいかないし、日帰りで行ける場所が良いと思う」

「じゃあ、やっぱり動物園とか水族館だね」

「そうなるかな」

「あの……別に外出なんてしなくても、普通に家で良いけど……」

「浅倉はシヨツピングモール行ったんだっけ？」

「うん。誕プレ買ってもらうついでにね。急だったから」

その意見は円香も無視した。この男、自分は気を使う癖に気を使われるのを嫌がるのは少しムカつく。あれだけ最高の誕生日を祝ってくれて、何もしないわけがないのに。

「じゃ、動物園で。とりあえず」

「決まり。リカ、アイス。あとナデナデ止まってる」

「は、はい……」

実に菅谷を使いこなして、そのまま誕生日の予定を詰めていた。

ひとまず会議はそこで終わったので二人はそのまま伸びをしつつ、円香が菅谷に言った。

「もう一度言うけど、リカ。あんたから私達にプレゼント用意するのはやめて。バレンタインの逆チョコとは訳が違うから」

「……俺なんか二年間も付き合ってくれてありがとう、っていう意味でも？」

「は？ 俺なんか、って何？」

「それでもダメに決まってるじゃん」

「わ、分かりました……」

「リカ、アイス。最後の一口」

透も追撃するように言いながら、アイスを食べ終える。菅谷が袋の中に棒を入れると、そのまま透は後ろの背もたれに声をかけた。

「リカ、リクライニング」

「え？ あ、うん」

「ウイーン……」

菅谷が後ろに体を倒すのに合わせて、透も菅谷の上で仰向けになった。

「んー、人の上、最高」

「あの、とおるん……まだ怒ってる？」

「どう思う？」

「うっ……ごめん」

「……」

しばらく黙り込む透。が、やがて、少し拗ねた口調で言った。

「……パンツ」

「え？」

「リカの今履いてるパンツ見せて」

「……えっ？」

「それでドローにしてあげる」

円香も声を漏らしたが、菅谷は困ったように冷や汗をかく。……が、許可を出すしかない。

「わ、分かったよ……」

「はい。決まり」

「えっ、嘘でしょ？」

「樋口はもうリカのパンツ見てるでしょ。誕生日に」

「いや見たくて見たわけじゃないんだけど……」

まあ、見たには見たし……と円香は仕方なく黙る。……とはいえ、コタツの向かい側で、見えない二人がパンツを見せ合っている姿の声を耳にするのは割ときついものがあるが。

仕方ないので、円香は目を閉じて寝転がった。少しでも意識を二人に向けたいからだ。

「……あの、自分で脱がさせてくれない？」

「……人のは脱がした癖に」

「いやそれはわざとじゃなくて……ていうか、そうじゃなくて、チャックの真下は、その……」

「……じゃあ、自分で脱いで」

「う、うん……」

だめだ、耳に入ってくる。というか、なんか知り合いの行為を盗み見している気分だった。

「……はい」

「……わお、ボクサータイプ……」

「トランクスだと、スースーするんだよね」

「ふふ、男の子はいろんな種類あるんだもんね。個人的には、ブリーフとか見てみたいかもっ……」

「勘弁してよ……」

「あー……でも、見るなら、トランクスの方が良かったかも……」

「？　なんで？」

「いや割と、ピッタリしたタイプだと、もっこり出ちやうんだね。それ」

「っ……え、えっち！」

「それ、男のセリフ？」

「も、もういいでしょ！　終わり！」

「……」

「……な、何？」

「……」

「とにかく、今日はここまでだから！」

「え、じゃあ次は何処まで？」

「つ……もう機嫌直つてみたいだし、もういいでしょ」

「ちえー」

「もう……マドちゃんも言つてやつてよ。マドちゃん……マドちゃん？」

応答がなかったことを、不審に思ったのだろう。こちらを見るために、身体を起こさないでみられる、コタツの中から覗き込んできた。

いつのまにか円香は、コタツの中に潜つて、二人のやりとりを眺めていた。少し、赤くなつた顔で。

「……何してんの？」

「……別に」

円香はすぐにコタツの中から出て、不貞腐れたように目を閉じた。3人とも、コタツで寝転がったまま沈黙が続く。

……やがて、菅谷がぼんやりした表情のまま二人に呟くように言った。

「……あの、今後うちで泊まるような事があつても、二人とも襲つて来ないでね」

「は？ そんな見境なくないから」

「ていうか、人をすくべみたいに言わないで」

「……」

××どの口が言うのか、と思いつつも、菅谷は目を閉じてそのまま眠る事にした。

××今日、浅倉家に夜まで両親は帰って来ない。透も円香もそれは理解していて、しばらくコタツの中でボンヤリする。

特に、円香は向かい側で寝転がっていたのに、何食わぬ顔で菅谷を挟むように透達と同じ所から身体をはみ出させた。

二人の間には、あどけない寝顔から「すうすう……」と寝息を立てている、二人の想い人がいる。

「……襲うな、とか言われてもさあ」

「こういう、無防備過ぎるところだね」

正直に言つて、二人は菅谷のこういうところを見るたびに少しだけ頬を赤らめる。信用されている、と言われれば聞こえは良いが、だからと言つてもう少し考えてほしい。

高校生は、中学生以上に性行為について理解し始める時期。そして何より、三人の場合は「もう何があつても嫌い嫌われるような事にはならない」「つーかほぼ恋人」「両親

がないない一つ屋根の下にもいつでもなれる」という条件が揃い踏みだ。

つまり、二人の間には、極上の高級タラバガニがあるようなものなわけであつて。

「……」

それでも理性がまだ勝っている。だから大丈夫ではあつた。

そして、その度に思うのは、今後の事。モデルの仕事……バイトとはいえ、芸能界と言えば芸能界。まだ雑誌に載る程度だが、今後どうなるか分からないその道を、こんなバカ一人で歩かせるのは少し不安ではある。

だから、せめて自分達も守れるようにならないといけない、と。

「……浅倉」

「……んっ」

とりあえず、誕生日以外にも色々考える事があることを、改めて実感した。

羊を数えても眠れない。

「いよいよ、誕生日も明日になった。円香と透から聞いた話では、動物園に連れて行ってくれるらしい。」

正直言つて、わくわくソワソワ爆発モノである。好きな場所に、好きな人達と行ける……そんな事、滅多に無い。

とりあえず、明日の夕方は自分の部屋でパーティなので掃除をしていた。それを終えて、今はソファアアの上で映画を見ている。

……何故なら、ワクワクしてしまうと眠れなくなるからだ。遠足前の小学生のようになってるが、仕方ない。楽しみなものだから。

さて、そんなわけで、ズーッとワクワクワクワクしている事もあつて、気を鎮めるために映画を見ていた。バッドエンド映画のミ〇トとかを。

「……つまんな」

飽きて、すぐにお風呂に入った。湯船にのんびりと浸かっていると、ピンポーン、とインターホンの音が聞こえる。自動ドアからではなく、家の前からだ。

「……有栖川さんかな？」

そう思い、仕方なくお風呂から出る。身体を拭き、パンツと寝巻きのジャージだけ羽織って飛び出した。

「はーい？」

「こんばんは」

「いえーい、リカ」

「？ どしたの、二人とも？」

というか、どうやって入ったのだろうか？ 夏葉に入れてもらったとか？ いや、それよりも、もう20時も回っている時間に何しに来たのか？

それを聞くと、答えてくれた。

「決まってるでしょ」

「リカのバースデーヴ」

「……」

「それより、その格好お風呂上がりでしょ」

「エロくて好きだよ、私は」

「風邪ひくから、早く入れて」

そう言われ、思わず菅谷の涙腺は弛みそうになる。わざわざ、ワクワクを抑えるために鬱映画なんて見る必要はなかったのだ。何故なら、どうせ三人集まるのだから。

サプライズはやらない、なんて言っていたのに、まさかの前日サプライズに、もうなにか色々と感じ極まった菅谷は、そのまま玄関の前の二人を強く抱きしめてしまった。

「もう、二人ともホント大好き……」

「はいはい。それは良いから部屋に入れて」

「あと、裸ジャージは水着よりえっちなこと自覚して」

「とおるんはそればっか？」

「浅倉がオープンになったの、リカの所為だから」

「樋口がむつつりになったのもね」

「あの……分かったから、一先ず中に入って」

「それさつき私が言った」

なんて話しながら、二人を部屋の中に招き入れた。靴を脱ぎながら部屋の奥に案内し

つつ、円香と透がしれつと菅谷に言う。

「ちなみに泊まるから」

「で、明日は朝から遊ぶから」

「ま、マジで……?」

「お風呂、先に入ろっか」

「ね。リカ上がったばかりっぼいし」

「あの……だから目の前でそういう話は……」

「リカ、晩御飯用意しといて。私と浅倉、お風呂入るから」

「……ふ、二人で……?」

本当に風呂に入られ、仕方なく菅谷が晩飯の準備をした。ちなみに、菅谷はもう晩飯を食べ終えているので、マジで二人の分を用意するハメになっていた。

× × ×
お風呂と食事を終えた三人は、洗い物だけ済ませて寛ぐ時間となった。ソファアに座ろうとする菅谷を、円香が止めた。

「待った。リカ」

「ん?」

「今日はあるたのイヴで来てるから」

「知ってるけど?」

「だから、好きなこと私と浅倉に命令して良いから」

「うん。なんでも言っつて」

急にそんなことを言われたわけだが、思わず小首を傾げてしまう。

「? もう現状が、二人に叶えてもらいたい事なんだけど?」

「言うと思った。ミスター仏教徒」

「そうじゃなくて、膝枕とかそういうの」

「えー、いいよ別に。俺が二人の誕生日イヴの時、そこまでもてなせてないし」

片方は直前で急に知って強引に祝ったし、円香に至っては風邪で途中でダウンした。

しかし、透や円香からすれば「菅谷の所為とはいえ、怪我を隠してた自分にちゃんと氣遣つてくれていた。あとファーストキス記念日」や「風邪引いても誕生日を祝おうとしてくれた。あと添い寝良かった」と本音と建前をきれいに使い分けた思い出がある為、そうはいかない。

「ダメ。もっと欲望に素直になつて」

「本当はやりたいけど我慢してるって、あるでしょ?」

「……」

それを言われると、まるで凶星をつかれたように菅谷は頬を赤らめる。これは……まさかとは思ったが、菅谷にもやはりそういうピンク色な望みがあるということだろうか?

……いや、何にしても望む所だ。円香も透も、ごくりと唾を飲み込んだ。

「良いよ、好きなこと言つて」

「殺人以外ならね」

「じゃあ……ちよつと、待つてて」

何やら道具が必要なようで、部屋に戻っていく菅谷を眺めながら、円香と透は内心リラックスしていた。何をさせられるのか……いや、菅谷のことだからどうせおもちゃを持ってきて「クワガタごっこ」だとかそんなレベルかもしれない。

だからこそ、まあああ言ったものの変態的なものは来ないと簡単に推測できた。

しかし、二人は忘れていた。菅谷と三ヶ月ほど前、ハードなプレイをしまつていたことを。

「お待たせ」

戻ってきた菅谷は、背中に何かものを隠しているように駆け寄ってきた。

「全然待ってないけど……」

「何持ってるの？」

効かれた直後、菅谷から手渡されたのは……犬耳と猫耳だった。

「はい」

「……」

「……」

「さ、おいで」

手渡した後、床にあぐらをかいて座り、トントンと床を叩く。

透と円香は顔を見合わせた。「どうする？」と言わんばかりにアイコンタクトを送る。

何せ、これは完全に盲点。何が盲点って、菅谷は特に変態的なプレイをしているつもりがないあたりだ。

つまり、照れさせられるのは間違いない自分達だけだ。だが……やると言ってしまう以上、やるしかないわけで。

先に動いたのは、透だった。犬耳を頭に装着し、四つん這いになった。

「わんっ」

「とおるーん、おいでー」

「わふっ、わふー」

「よしよしよしっ」

すごい、と円香は素直に感心した。菅谷に頭を撫でられ、顎を撫でられ、抱き締められ、さすられる。されてる事だけ挙げればいちやついてるカップルではあるのだが、犬扱いという大前提を忘れてはいけけない。

にも関わらず、透は恥ずかしそうにしながらも受け入れていた。……少し幸せそうに見えるのは気のせいだろうか？

逆に、菅谷は菅谷で犬扱いと言っても人間という意識があるからか、それとも単純に犬を飼っても芸を仕込むつもりがないのか「お手」「おかわり」「ふせ」「ちんちん」と言っただ芸をさせることはなかった。

「よしよしよし。さつきたくさんご飯たべたねー」

「わん」

「たくさん食べるのは良いことだからね。もっと大きくなろうね」

「すけべ」

「いや、胸の話じゃなくて……俺、動物の背中に乗って野を駆けてみたい。夢だから捨てられてないんだ」

しかし、今の透の「すけべ」だけでどんな勘違いをされてるかは分かるようになったようだ。……なんで同級生の男の子の性への興味の成長を、こちらが気にしなければならぬのか……。

少し呆れながらも、そろそろ円香もゴクリと喉を鳴らす。やる、と言ったからには、菅谷のために恥を忍ぶべきだ。

猫耳を頭に装着し、そろそろ……と、思ったところで、菅谷がふと透の犬耳を外した。

「……ごめん、とおるん」

「わん」

「や、ワンじゃなくて。やっぱり、とおるんとマドちゃんは、人間の方が良いや」

「……」

それを言われて、透は少し目を丸くする。やはり、菅谷は菅谷のようだ。別にこの演

技がどうしても嫌、というわけではないが、そんなセリフで少し嬉しくなってしまうた。
……のは、当たり前だが透だけの話。円香からすれば「私も撫でろ」となるのは必然であつて。

「マドちゃんもそれ外して良いよ」

「……シヤアアアア」

「え、なんで威嚇……」

なんか怒ってる……と、冷や汗をかいたのも束の間、円香は襲いかかつて来た。

「フシヤアー！」

「ちよつ、な、何さ……!」

「にゃー。んにゃつ!」

「いだつ! ひ、引つ搔くなー!」

「……なう」

止めると、円香は一息ついて菅谷の前で頭を差し出す。それを見て、菅谷はどうするか迷うように唸った後、口を開いた。

「もしかして、撫でて欲しかったの?」

「……」

「……猫じゃなくても、撫でてあげるよ」

「……………じゃ、お願い」

菅谷の膝の上に頭を置く円香。その頭を、菅谷は撫でてあげた。

菅谷の意外と硬い手が、自身の側頭部に当てられては離れ、また当てられる。その優しい手つきが、円香は好きだった。あまりの心地よさに、思わず寝そうになってしまった時だ。

「ふふ、樋口もうまんま猫じゃん」

「浅倉うるさい」

「私も撫でてあげる」

「んっ…………」

菅谷の膝の上に頭を乗せ、二人がかりで撫でられる円香。たまにはこんなのも悪くないのかも…………と、目を閉じているときだった。

「つて、違うでしょ。今日は私達が甘やかすんだから」

急に顔を上げた円香が、ハツとしたように言った。しかし、菅谷も透も膝の上にそれを押し付けるように戻す。

「良いから良いから、ゆっくりしてて」

「ね。リカは私達のどちらかを撫でてあげたいんだから」

「うっ…………」

「とおるんも。膝来る?」

「え、良いの?」

「うん」

「じゃあ……お邪魔します」

×二人揃って、しばらく菅谷の膝の上を堪能した。

×

さて結局、円香と透は甘やかすどころか甘えてしまい、就寝時間になった。菅谷の寝室について来た円香と透を見て、菅谷は少しだけ困ったように尋ねた。

「……俺のベッドで寝るの?」

「もちろん」

「勿論、じゃないよ……」

流石にそればかりは照れてしまうのは当たり前だ。だが、二人とも退きそうになり。い。

しかし、まあ仕方ないと言えば仕方ないのかも……と、思い、もう三人で寝るのも三回目なので、なんとか気を落ち着かせる。

「……よし、寝ようか」

「お、覚悟決めた」

「珍しい」

「……うるさいよ。いざとなったら、自分で自分を絞め落とすから」

「それをしたら私達、ベッドから出るね」

「死なれたら困る」

「大丈夫だよ。窒息死には段階があつて、最初の方なら……」

「聞いてないから」

「死のリスクがあるのはやめて」

怒られたのでやめた。まあ、元々冗談のつもりだったのだが。

改めて、三人でベッドに入る。少し暑そうな菅谷が、パチパチと瞬きを繰り返し、ポ

ツリと声を漏らす。

「……狭い」

「リカ、また背伸びたんじゃない？」

「私も思った」

「え、そう？」

「うん。よしよし」

「えらいえらい」

「え、俺子供？」

「そう。子供の上に弟」

「……」

……まあ、もうそれで良いや、と思い、菅谷は目を閉じた。

両肩に当たる柔らかい二人の肩の感触にも、少しずつ慣れてきた。そして、慣れてきてもその温もりを真横で味わえる事に、いつまで経っても幸福感に満たされていた。

そんな菅谷に、透から声が届く。

「……リカ、まだ起きてる？」

「うん」

「しりとりしよ」

「え、なんで？」

「ドキドキして眠れないから」

「嘘だあ。もうキスもしてるのに」

「いや、添い寝ってキスの先にあるでしょ」

「え、そうなの？」

「そう」

「マドちゃんは どう思う？」

「……知らない。ていうか、寝かせて」

「あ、ごめん」

「あ、樋口起きてたんだ」

しかし、やたらとリラックスしている菅谷が異常なだけで、普通は簡単に眠れない。さて、とにかくしりとりである。しりどりの「り」から透が始めた。

「じゃ、私から。リカ」

「カリウム」

「……紫式部」

「ブラジル」

「ルイージ」

「自動ドア」

「浅倉」

「あー、それ俺言いたかったのに。……落雷」

「入間」

「円香」

「あー！ だからー！」

「リカうるさい。寝るためにやってるんですけど」

円香に怒られたので、仕方なく黙る菅谷。とにかく、何か言いたい……そう思った結

果「あつ」と声を漏らした。

「かなり可愛い透」

「は？」

「つ……ふふ、ヤバつ。照れる」

「ほら、次マドちゃん」

言われて、円香は小さくため息をつく。まったく、くだらない事を考えるものだ、と言わんばかりに呆れてから、すぐに次を言った。

「……ルビー」

言うのと、今度は透が顎に手を当てて思い返すように呟く。

「い、いー……犬より可愛い樋口」

「……浅倉。それ褒めてるつもり？」

「お、良いねー。じゃあ俺は……チャーミング過ぎる透」

「てへへ」

「はい、次マドちゃん」

「……」

まあ、乗ってやるのも一興かもしれない。元々、菅谷をもてなすために来ているわけだし、仕方ない。

「……あ、樋口。リカは私、私は樋口だから、樋口はリカね」

「……あつそ」

褒めてあげるくらい何だつて良い。とりあえず、適当に言った。

「……ルビーより綺麗なりカ」

「え、なんでルビー？」

「適当に選んだんでしょ」

「そつか……俺つてマドちゃんにとつて……」

「……分かったから。言い直すから」

仕方なく円香は考え込む。る、る……と、腕を組んでから、ゆつくりと答えた。

「……瑠璃色の瞳が綺麗で、汚らしくないむしろどこかオシャレに映る天然パーマ、服の上からでは分からない細くもがっしりした身体、そしてそれらと綺麗にマッチしない可愛い性格、トータルしてギャップ萌えの塊と呼べる愛しいりカ。……これで満足？」

「……ぐー」

「……すやすや」

「……あんたらぶつ飛ばすよ……」

どう考えても寝たふりだったのが、また腹立たしかつた。隣から菅谷の頬をムニツと抓つて続けた。

「ねえ、あんたらが言わせたんですけど」

「……いや、だつて言い過ぎだし……」

「……普通に恥ずかしいよ……」

「……」

確かに、と思わないでもないけど、でも言わせたのはお前らだろ、という感想が拭いきれなかった円香は、拗ねたように菅谷と透に背中を向けた。

「……なら、あんたらだけで勝手に惚気ててどうぞ」

「わー、ごめんマドちゃんっ」

「リカ、樋口真ん中にして。超愛でよう」

「は？」

「りよかい」

「ちよつ、待つて。やだっ……どこ触つてんの……!」

「お腹。……あ、大丈夫。ポヨンとしてないよ」

「うるさい……!」

「とおるん、布団持つてて」

「はいはい」

脇の下から手を通して円香の身体を持ち上げると、透が両手で支えている布団の中で

方向転換をして、真ん中に移動させた。

「いらっしやい、樋口」

「……来たくなかったんですけど」

「今だ、愛でろ」

「ラジャー」

「ちよっ、やめっ……」

「よしよしよし」

「よしよしよしよし」

「んっ……」

「よしよしよしよしよし」

「よしよしよしよしよしよし」

「変なところで競わないで」

そう言いつつも、円香は抵抗しなかった。どうせ言ってもやめないし、黙ってされることがまにされていよう……なんて言うのはそれこそ言い訳だった事に気付いていなかった。なんだかんだ、気持ち良かったからだ。菅谷からだけでなく、透からのそれも。

××× そのまま、なんやかんや一番美味しい思いをしたままゆっくりした。

翌朝。まず目を覚ましたのは、珍しく透だった。自分の腕の上に円香が頭を置いて目を閉じている。

その円香の背中に、菅谷が抱きついて寝息を立てている。少し微笑ましく感じた。

「ふふ、やつぱ……私の方が姉じゃん。樋口」

なんだかんだ二人とも可愛らしく見えてしまうものだ。甘えん坊二人を相手にする姉のように笑みを浮かべた透は、身体を横にして片手を円香の頭に寄せ、軽く撫でる。

さて、たまには自分が朝飯を用意しよう。そう思った透は、実に器用に円香の頭の下から腕を退かし、代わりに枕を設置。そのまま布団を出て行った。

適当にお味噌汁とサラダを用意し、あとはパンを焼くだけ。メニューはあまり時間がかかるものではなかったが、何処に何があるのか少しだけ悩み、結局時間はかかってしまったが、なんとか用意できた。

「よし、完了」

そう思った直後、ちょうど良いタイミングで円香が起きてくる。

「……………おはよ」

「あ、おはよう」

「浅倉……………？ 何してんの？」

「朝ご飯の準備。あとパン焼けば終わりだけど」

「……どしたの急に」

「いや、何となく。二人の寝顔可愛かったし、先に目が覚めたから」

「……あそう」

とりあえず、ちよつぱりサプライズは成功、という事だろうか？ サプライズとは今

決めたわけだが。

さて、家主はどうしたのだろうか？

「リカは？」

「まだ寝てる」

「ふーん……先に食べちゃう？」

「いや、せつかくだし待てば良いでしょ」

話しながら、円香は洗面所の扉を開ける。中に入る直前、透に言った。

「寝癖、直すだけ直したら？」

「あ、そっか」

なんだかんだ、二人とも女の子だった。時間があるのなら、みつともない顔は見せた
くない。……まあ、割と泊まりとか色々しているから、今更な感じはあるわけだが。

二人で持ってきた荷物の中の櫛やら何やらで髪を整えていると、透が円香に言った。

「樋口」

「何？」

「やっぱり、私が姉で樋口が妹ね」

「は？ それはないから」

「いや、身長と心情的に」

「……あつそ。もう勝手にして」

そんな話をしながら整え終わると、続いてアクセサリーを装備。完全にいつもの二人……となった所で、扉が開かれた。

「はよ……あれ、二人とも早いね」

「あんたが遅いんですよ」

「おはよ、リカ」

何にしても、眠そうなので二人は菅谷に挨拶する。

「リカ、誕生日おめでとう」

「おめでとう」

「え？ ……あ、そつか。ありがとう」

お礼を言いながら、顔を洗うために流しの前に立った。

「これで俺も16歳かー」

「そんな感慨深くないでしょ」

「まあそうだけどね。でもやっとマドちゃん達と同年になれたなーって」
「気にしたことない癖に」

とはいえ、円香には少し気持ちも分かる。透と五ヶ月誕生日がズレているだけあつて、子供ながらに「今日から年下だから敬語ね」なんてネタをやっていた事もある。

菅谷もそういうの、よくやられた口なのか……いや、友達いなかっただけならいいし、それはないだろう。

「んーっ、目が覚めた」

「リカ、朝ご飯できてるから、食べよ」

「マドちゃんが作ってくれたんでしょ」

「は？ 違うから」

「作ったの浅倉だから」

「……熱あるの？」

「ブツ飛ばされるよ」

「いや樋口も似たような反応してたから」

なんて話しながら、三人は洗面所を出た。

まずは朝食。三人で席につき、パンを焼いてから食べ始めた。まずは味噌汁から。菅谷が口をつけるのを、透はソワソワしながら眺める。

「んっ……美味しい」

「当たり前じゃん。私が作ったんだし」

「いや、とおるんが一人で料理してるとこ初めて見たから」

「そうだっけ？」

「多分そう」

「ま、何にしても美味しいから」

「……へー」

「浅倉照れてる」

「……樋口」

「とおるん可愛い」

「……うるさい」

なんて話しながら、箸を進める。

「うーん、にしても美味しい。マドちゃんとおるんで、毎朝交互に作って欲しい」

「……強欲」

「ほんとに」

「いやいや、二人だけにやらせるつもりはないよ。晩御飯はその分、俺が毎晩作るから」

「いや、それじゃあんに負担偏ってるでしょ」

「ね。やるなら……シフト制が良いんじゃない？ 月、火、木、金が樋口で、水と土がリカ。日曜は暇だったら私やるよ」

「それとおるんほとんど何もしてないじゃん」

「てか、なんで私にばっか負担かけるの」

「それは樋口のご飯が一番、美味しいからでしょ」

「……ホント、ずるい奴」

そんな言葉一つで作る気になってしまっている自分が嫌だった。

すると、菅谷がクスツと笑みを漏らす。透と円香が、それに対して小首を傾げた。

「何？」

「どしたの？」

「いや……なんか、楽しくて。もし、マドちゃんとおるんと三人で一緒に暮らせる日が

あったら……こんな感じなのかなーって」

「……ふふ、確かに」

「それは嫌。絶対、私に負担偏るし」

「えーそんなことないよ」

「ちゃんと手伝うから、リカが」

「その時点で私とリカに負担偏ってるでしょ」

そんな話になった直後、菅谷がふと顎に手を当てたまま言った。

「……実際の所……三人で暮らすことになったらどうしよつか？」

「最短でも6年はそんなことにならないから……」

「今のうちに役割決めとく？」

「そうだね」

「……浅倉」

「じゃ、私はゴミ出し」

「じゃあ……俺はルンバ」

「他全部私にやらせる気なわけ？ てか、ルンバの役割って何、ルンバって。ボタン押す

だけとか言ったらぶっ飛ばすよ」

……この二人の厄介な所は、変な所だけ記憶力が良い所だ。つまり、万が一にもこの二人と暮らすことになったとして、今話していることが実践される可能性は十分ある。

そうならない為に、上手いこと誘導した方が良い。

「リカは洗濯でしょ。力仕事だし。あとゴミ出し」

「えー、いや良いけど……でもそれだと俺、二人の下着とか干すことになるよ」

「あー……いや私は良いけど」

「私も、別に気にしない」

「分かった。……あ、確かお袋が昔、下着洗濯してた時さ、ブラジャー洗濯ネットに入れてたと思うんだけど……あれって二人の時もやった方が良いの？」

「え？ あー……どうだろ」

「そういうのは必要な時に言うから。今心配しなくて良い」

「へーい」

というか、と円香は続ける。

「一応、言つとくけど、衣服だけじゃなくて、ベッドのシーツとか洗えるもの全部だから」

「ん」

「え、それは私、自分でやるからいい」

「？」

「なんで？」

「樋口はリカに洗ってもらって良いの？」

「……やっぱり自分達の分は自分でやる」

「え、なんで？ 俺全然……」

「いいから」

「声を揃えて！！？」

二人揃って止めると、円香がすぐに話を移した。

「浅倉はお風呂とか部屋とかの掃除」

「え、どうして？」

「私の朝、昼、晩の食事係と洗い物と交換する？」

「分かった。十年経つても新品みたくしてやるから」

「これで、とりあえずなんか将来結婚しようみたいなの約束をしている子供の会話は抜け出せた。」

さて、朝ごはんを食べ終えた。そろそろ、今日の本題である。

「で、何処に行くの？」

「動物園」

「やったぜ！」

「何その直球の喜び方。小学生なの本当に？」

「ていうか、リカ。動物園行くのは良いけど、ちゃんとルールは守ってね」

「ルール？」

「動物の檻の中に入らない、手懐けない、触れ合わない」

「そんな事しないよ」

「信用ならない」

「え、なんで？」

「とにかく、移動する時は私か浅倉、どっちかが手を繋ぐから」

「俺は子供かよ……」

「それでしょ」

「……とにかく、準備しようか」

食器を片付け始めた。

円香が食器を洗っている間に、菅谷は着替えに行き、透は歯磨きをする。円香も手早く終わらせると、歯磨きを始めた。

それを完了すると、自分達が使わせてもらうためなのにほとんど使っていない部屋で着替えを始めた。

二人とも気合を入れた私服に身を包んだ後、最後に手に取ったのは、耳につけるピアスとイヤリング。誕生日に菅谷からもらったものと、クリスマスにお互いに送ったものだ。

「よしっ」

「行こっか」

何かに気合を入れるように言った二人は、部屋を出て、菅谷と合流した。

ふとした時が一番のきっかけ。

動物園とは、さまざまな動物を見学することが出来る場所である。日本にはいない動物を間近で観察することが出来て、動物好きには堪らない場所となっている。

チケットを購入し、三人で中を見て回った。

「あの……やっぱりに間に挟まって手を繋ぐのは……」

「走るからダメ」

「リカは嫌？」

「……嫌じゃないです」

わざわざ腕組みではなく手繋ぎなのがキツかった。久しぶりに来たが、やはり中は広い。

三人をまず出迎えた動物は、レッサーパンダ。普通のパンダに比べて当然、小柄なわけだが、それ以上の特徴は茶色と黒のモコモコした毛だろう。

「おお……レッサーパンダ。可愛い」

「……茶色い。意外と爪尖ってない？」

「そりゃ、主食は笹だけど鳥の糞とか卵を食べることもあるし。あれよく見ると足の

裏も毛で覆われてるでしょ。あれで寒さを凌いでるんだよ。野生だと標高15000、4000メートルの森林に暮らしてるから、割と厳しい環境に身を置いてるんだよね。絶滅危惧種だから、こういう所で保護するのも大事になるのよ」

「……詳しい」

「……ミスターウ○キペディア」

「え、いや今のは基本情報だよ」

「ありがとう。続けて」

「え、聞くの？」

「うん。リカが満足するまで」

透にそれを言われて、円香は思わず押し黙る。確かに、今日は元々、菅谷の誕生日、菅谷を楽しませるために来ている。

……それに、興味が無い話でもないの、無理矢理聞いているということもない。

「で、リカ。他には？」

「このレッサーパンダはシセンレッサーパンダって種類で、世界で日本が一番、飼育してるんだよ」

「へえ……驚いた」

「簡単なの？ 飼うの」

「いや、てか飼えないから。ワシントン条約で禁じられてる」

しかし……動物好きなら当たり前なのかもしれないが、よくもまあそんなにサクサクと答えが出てくるものだ。完全に頭に入ってるんだな、と理解する。

「さて、そろそろ次行く？」

「もう良いの？」

「うん。レッサーパンダは人気の動物だからね。それだけ多く人が集まってくる。多くの人間に囲まれた時ほど動物がストレスを感じる時はないよ」

「……それはまあ優しいこと。流石、ミスター博愛主義者」

そんな話をしながら、次の動物を見学に行った。

しかし、透と円香は少し安心していった。思った以上に、菅谷は大人しくしてくれている。

これなら手を繋ぐこともないのかも……と、思いながら隣のアライグマを見に行く。

「おおう、アライグマ」

「小さいよね」

「小さいからって侮れないよ。気性が荒いオラオラ系のクマだから。基本的になんでも食べるし、やっぱりクマはクマだよ」

「へえ……凶暴なんだ」

「可愛いのに」

「マドちゃんと一緒に」

「ぷふっ……」

「リカ、頬出して」

「え、何何？ キス……ぶへっ！」

「私、気性荒くないから」

「今ピンタしたのに……？」

頬を腫らせたまま、次の動物を見に行く……などと、色々動物を見て回りながらも、円香と透は少し意外そうに菅谷を眺めている。やはり、なんか大人しい気がする。隣の部屋のカトレアを見ただけでわしやわしやする菅谷が、なんか今までと一緒になのが。

……正直、面白くない。なんかもつとこう……今までにはしやぎ方をしている菅谷が見れると思ったのに。いや、いつもより口数は多い気がするでもないの、やはり普通にテンションは高いのだろう。

円香も透も、ほんの少しだけ不満そうに顔を見合わせる。

「お、あれコツメカワウソじゃん。絶滅危惧種なんだよなあ、あの子も。主食は水中の生き物……魚とかかなんだけど、歯が丈夫で甲殻類や貝殻も噛み砕くのはマジで強い」

「へえ……でも口の中、切りそう」

「私達なら絶対やらない」

なんて答えながら、もしかしたら菅谷はまだ遠慮しているのかも……と、二人とも思ったり。

とりあえず、円香が菅谷に聞いてみる事にした。

「ねえ、リカ」

「何？」

「まだあんまはしやぎ切れてないでしょ」

「え？」

「というか、我慢してる」

透も援護射撃をする。

「……そ、そう？」

「そう」

全く分かっていない。今日はいつたい、誰の誕生日なのか。勿論、節度を持ってくれないと困るが、もつとテンション上げてくれても構わないのだ。

「もう少しはしゃいでくれて良いから」

「何考えてんのか知らないけど、リカを楽しませるために来てるの分かってる？」

「え、でも……二人に迷惑かけちゃうかもだし……」

「大丈夫。割と普段からかけられてる」

「浅倉、あんたが言うな」

「っ……」

そんな風に言われ、菅谷はちらりとコツメカワウソを見上げる。割と水辺で遊ぶことで有名なそれは、水中を泳いだりしてはしゃいでいる。

もしかしたら、自分もあんな風に……と、思った時には遅かった。繋がれている二人の手からするつと抜けて、二人の腕をギュツと組んだ。

「じゃあ、次行くよ」

「えっ」

直後、とても一人の人間が二人を引いているとは思えない速度で動き出した。

「よし、ならまずは行きたいエリアがあつたんだよね」

「? 何処?」

「月毎にイベントをやつてるところ。好きな爬虫類と触れ合えるんだつて。蛇とかトカゲとか」

さあーつと血の気が引いたのは円香。秒で後悔したが、もう遅い。菅谷の瞳は爛々としてしまっている。

「え、待っ」

「行こう。爬虫類……特にへびに触れる機会なんて滅多にないんだから」
 「ふふ、樋口真っ青」

透が言った直後、菅谷は足を止める。そして、少し落ち着いた表情で円香の顔を見る。
 「……あ、マドちゃん……苦手だった？　じゃあ、やめよつか……」

しゅんつと肩を落とす菅谷。そんな顔されたら、円香としても肯定するわけにもいかないわけで。

「……そ、そんなわけないでしょ。行くなら、早く行つて」

「！　だ、大丈夫だから。何があつても、俺がマドちゃんを守るからね」

「……あつそ」

「リカー、私も苦手ー」

「じゃあ、とおるんも守るー！」

××　なんて話で盛り上がる中、円香は強く心の準備を始めた。

××　さて、その爬虫類と触れ合うコーナー。三人で列に並び、先頭を眺める。動物園の係の人が、トグロを巻いたアオダイショウを持っている。

「ほあああ……か、可愛い……！」

「え、可愛いのあるれ？」

「可愛くはないでしょ……」

「何言ってるの？ あんな小さい頭と細い体……ぎよろつとした蛇特有の瞳、ペロペロと出たり引つ込めたりする舌……可愛さしかないじゃん！」

スイッチが入ってきた菅谷の方が可愛い……という言葉を二人は呑み込む。さほど怖くない透はともかく、円香は割と心の準備が必要なため、菅谷をからかっている場合ではない。

そうこうしているうちに、順番が回ってきた。まずは菅谷の番。職員の手元のアオダイシヨウに手を伸ばす。

背中に触れ、優しく、それでももって丁寧に、まるでツボでも押しているかのように的確なナデナデをこなす。

すると、目を開いていたアオダイシヨウが不意に目を閉じ、首を持ち上げる。そして、菅谷の腕に巻きついた。

「お客様……！」

「大丈夫ですよ」

「はい……？」

身体に巻きついたアオダイシヨウは肩のあたりで首の部分だけ巻きつきを外し、口を伸ばして菅谷の頬にキスをした。

「……手懐けてる」

「意味わかんないほどメロメロにしてる」

「なんなのあの客」

やがて、菅谷の手から離れたアオダイシヨウは、職員の手に戻って再びトグロを巻いた。

「はふう……満足。……ね？ マドちゃん。全然、蛇なんて怖くないでしょ？」

「どちらかと言うとあんたの方が怖い」

「え……そ、そんな事ないよ？」

「あるよ」

「とおるんまで!?？」

地味にシヨックを受けながら、菅谷から順番を譲られた円香は、緊張気味にゴクリと喉を鳴らす。

……菅谷は手懐けていたが、正直最初は首を絞められるのだと思つてヒヤリとしたものだ。

そして、十中八九、自分に巻きついてきたら、間違いなく絞められる。懐かっていた菅谷が異常なのは重々承知していた。

守るとは言ってくれたが、正直……やはり怖い……と、目を瞑った時だ。ふわりと、羽

のように優しい手つきで後ろから手を握られる。

「落ち着いて、マドちゃん」

「っ……………り、リカ……………？」

「俺がいるから平気って言ったでしょ」

言いながら、円香の手を握った菅谷が、ゆっくりとアオダイショウに向けて伸ばす。

身体に触れ、蛇特有の冷たさが手の感触を奪う。ツルツルしているようでザラザラしているようで……………なんとも言えない感触があつたが、自分の手にはもう一人の想い人の感触もあつたため、不思議と恐怖も嫌悪感もなかつた。

数回、撫でた後、手を離れた。

「……………ね？ 怖くなかつたでしょ？」

「……………うるさい」

「はいはい」

すると、菅谷に頭を撫でられる。弟の分際で……………と、少し癩に障った円香だが、抵抗はしなかつた。

「……………蛇に絡まれた腕で撫でないで」

「あ、ごめん」

「は？ 何勝手にやめてんの？」

「え?」

代わりに、理不尽に当たり散らしてやったが、菅谷は終始、優しく頭を撫でてくれた。
いた。
いた。

さて、続いて三人が訪れたのは、肉食動物のエリア。そこはやはり、迫力と見応えのあるコーナー。

その中でも特に肝を冷やすのが、サファリパークと言えるだろう。そして、そのバスに三人とも乗っていた。

「おお……なんか、ワクワクしてきた」

「ね。俺も」

「お子様ども……」

正直、高校生三人でサファリパークに来ている人はいなかったもので、恥ずかしくないと言えば嘘になる円香だが、まあ気にするほどのことでもないとも思っている。

さて、そのバスが発進し、園内を車が動く。

「……にしても、ライオンかあ……」

「あ、私知ってる。オスは狩りをしないで、多くいるメスに餌を狩らせてるんでしょ?」
透が言うとう、菅谷は頷いた。

「まあ、でもそんなニートみたいな事はなくて、オスライオンは群れを守るのが仕事だから。というか、守れなかったら自分が死ぬし」

「え、どういうこと？」

聞いたのは円香。

「俺もあんま詳しくないんだけど」

「信用ならないセリフ」

「オスのライオンの基本的な敵つて、同じオスのライオンだから。他所のオスライオンが絡んで来て負けたら、群れごと取られるんだよ」

「え……そ、そうなの？」

「怖っ……」

「うん。負けたオスは別の群れを探るか死ぬしかないから。動物は純粹、とか言う人いるけど、そうでもないから。シンプルに悪どい事をやってたりするし」

菅谷の説明に、二人ともドン引きである。自然界、シンプル故に怖い、と思わないでもない。

そんな中、透がふと気になったように聞いてくる。

「え……じゃあ、サファリパークのライオン同士で喧嘩とかは？」

「あるんじゃないの。縄張り争いとかは普通に」

「み、見たくない……」

「ていうか、リカ。そのサファリパークの中に飛び降りたって正気？」

「いやいや、俺じゃないよ。過去の俺」

「同じでしょ」

なんて話している間に、いよいよバスはライオンが見える範囲にまで来た。

「おお……見えて来たよ見えて来たよ！」

「でも、リカは安心してね」

「？ 何が？」

テンションが上がった菅谷の耳に、不意に飛び込んできた透の声だが、特に何か反応することはなかった。何が？ とは聞かれたものの、顔はライオンに夢中だ。

その菅谷の耳元で、透が囁くように告げた。

「……リカの縄張りが荒らされても、私と樋口がその男について行くことはないから」

「つ、そ、そっか……にへ、にへへっ……」

にやけ始める菅谷。本当に素直に照れる菅谷を見て、ちよつとだけ変な気分になった透は、隣で真顔のまま声を掛けた。

「もし心配だったら、マーキングでもすれば？」

「心配なことなんて何も……え、マーキングって……おしっこ？ どういう事？」

「人が人にするマーキングなんて、一個しかないでしょ」

「??」

分かってない菅谷に、透が横から口を近づけた時だった。その襟を円香が掴む。

「浅倉、ここ外。そういうのは後にして」

「ちえー」

「? 何する気だったの?」

「気にしないで」

そんな二人がかりで隠されつつも、とりあえず菅谷の解説を聞きながらライオンを眺め続けた。

そこ××から、さらに鳥のゾーンや猿山、草食動物、マイナーな動物など、屋内の施設など、色々な動物をとにかく見て回り、気がつけば夕方になっていた。

その為、三人はそろそろ帰宅。菅谷が「せっかくだし、市川と福丸に何か買って行ったら?」と提案し、お土産コーナーを見にきていた。

「どんなのが良いと思う?」

「食べ物でしょ。あの二人だし」

「この動物園なら、パンダのフンっていう生チョコが美味しいよ」

「なんで動物園のお土産コーナーにまで精通してるの……」

何度も通つていれば覚えるものなのかもしれないが、それならそれで「どんだけ動物園行つたんだよ」と。

そんな時だった。ふと菅谷の目に入ったのは、見覚えのない筐体。プリクラだった。

「え……あんなのあつたっけ」

「何がー？ つて、ホントだ」

「プリクラ……」

見た感じ、後から落書きできるスタンプは全部、動物関係のものらしい。その反面、ライオンやらレッサーパンダやらアライグマなど、さまざまなのが多種多様にある……というもののようだ。

「撮りたい！」

「それリカが言うの？」

とはいえ、まあ動物関係のものにこの男が興味を持つのは、必然といえれば必然だが。

「まあ良いけど」

「そういや、私達もプリクラとか初めてだよな」

「前に雛菜と撮つたでしょ。三年くらい前」

「あれ、そうだったっけ？」

なんて話しながら、三人で筐体に入る。中に入ると、確かにゲーセンでよく見るタイプのそれではなく、草や木々っぽい緑や茶色の柄の壁があったり、カメラの形が一眼レフっぽくなっていたり、本当に動物園仕様に見た目を変えたような感じになっている。

お金を入れて、菅谷が声をかける。

「よし、撮ろう」

「じゃあ、真ん中の人ポーズ決めて、一枚ごとに変えよう」

「は？ なにそれ」

「良いね」

「決定」

「……ちよつと」

しかし、問答無用である。すぐに三人並び、まず真ん中は透。

「じゃ、とおるん。選んで」

「じゃあ……ドム」

「動物無関係か」

そうは言いつつも、決まったものは仕方ない。三人とも何も言わず縦に並ぶと、ジェットストリームアタックの構えをとった。勿論、縦並びだと誰も映らないので、先

頭の円香はサーベルを斬り終えた後、真ん中の透はバズーカを撃ち終えた後、そして最後の菅谷は両手を組んで振り上げている所で止まり、写真を撮った。

「わお、息ピツタリ」

「樋口も完璧じゃん」

「これどうやってスタンプ貼るの……」

さて、次は円香が真ん中。少し考え込んだが、なんだかもう一枚目の時点で真剣に悩むのもバカらしくなり、適当に言った。

「じゃあ……カバデイ」

「それも動物関係くない？」

「いや、クマを素手で捕獲する方法が根源だから、あながち間違っていないよ」

そんなわけで、三人とも腰を落とし、中腰のまま両手を広げ、向き合う。

「カバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバデイカバ」

そこでシャッター音が切られる。三人とも「ふう……」と息を吐きながら、改めて顔を向け合った。

「何このプリクラ？」

「どういう宗教？」

「リカ、お題追加。今日一日に関係あるやつにして」

「はい」

言われて、菅谷は顎に手を当てる。今日は色々あった。レッサーパンダを見て、アライグマを見て、コツメカワウソを見て、へびに触って、サファリパークを見て……と、ここで思い出したのは、サファリパークの車内でのことだ。

「そういえば、とおるとマドちゃんが言ってた『人が人にするマーキング』って言うのは？」

「……」

「……良いのね？」

「うん。知りたいから」

菅谷の頭の中では、人の手とかに名前を書くとか、そんな可愛いものだと思っていた。しかし、それは思った以上に大人向けな行為で。円香と透は、菅谷の両腕をまず掴み、逃さないように抑えた後、上着の袖を執拗に引いた。まるで、下に着ている袖をも引く強度で。

それにより、首筋から襟が露出する。そこに向かって、両サイドから二人は顔を伸ばした。

「ちよつ、ふ、二人とも？ 何してんの……」

有無を言わず、鎖骨付近に口をつけた。そのまま、唇の痕どころか歯形をつける勢いでギユツと嘔み締める。

「痛ッ……！ ふ、二人とも……！」

そのまましばらく唇をつけ続けつつも、二人の視線は流し目でカメラに向いている。

やがて、カシャつとシャッター音が鳴り響いたと思つたら、2人の口は離れた。つうつ……つと、唾液が後を引き、袖を戻せばギリギリ隠れるか隠れないかの位置に出来たそれはくつきりと残ってしまう。

「っ……な、何を……」

「これが、マーキング」

「一つ賢くなったじゃん。ミスター小学六年生」

「……ひいん……」

ジェットストリームアタック、カバデイ、マーキングと統一性のかけらもないプリクラを撮り終えた三人は、そのままペイントだけして筐体を出た。

×

さて、帰り道。この後は菅谷の部屋でパーティである。予約しておいたケーキを購入し、あとは夜までしゃぐだけ……なのだが、困った事になった。

菅谷が、ずーつと上の空だった。何故なら、キスマークをつけられた鎖骨の熱が保温

されたまま冷えない。

「リカ、帰ったら料理だから」

「何か食べたいものある？」

「……え？ あ、いや……えつと……な、なんでも良い、かな？」

「そういうと思ってたこ焼きにしてあるから」

「来年からは希望を言うように」

「うっ……ご、ごめん……」

会話もままならなかった。少し動揺してしまっている。まるで、自分の知らない世界をのぞいてしまったかのような感覚だった。

その菅谷にお構いなしに、二人は両サイドから腕を組む。

「そう言えば、まだプレゼントも渡していないよね」

「楽しみにしてて」

……家族以外に、ここまで祝ってもらうのが初めてな菅谷は、少しだけヒョってしまっていた。

なんだか、逆に気を使わせてしまっているような気がして、少しだけ胸の奥が痛んだ。二人してここまで自分に懐き、もてなし、喜ばせようとしてくれるが、自分はそれほど大それた人間なのだろうか？

なんか変な罪悪感が少しだけ芽生えてしまっていた。

「あー……ごめん。二人とも。変なこと聞いても良い？」

「ん？」

「何？」

「なんか……俺の何が良いのになつて。たかが誕生日なのに……ケーキに、プレゼントとか……あと、その……二人揃って、その……」

やたらと熱が込められている気がする鎖骨に手を当てる。自分達の関係が異常である事は、重々承知している。今日も、歩いているだけで周りから（特に男から）、やたらと視線は感じていた。

その問いに対し、二人はキョトンとした表情を浮かべる。顔を見合わせた後、少し苛立った表情を向けた。

「は？ 説明して欲しいわけ？」

「そんなの、言うまでもないでしょ」

「え……いや、そうじゃなくてき……。なんか、ちよつと……」

「アンタのために誕生日を盛大に祝われて申し訳なく思ってるんでしょ」

分かるのか、と菅谷は肩を震わせる。

「ほんとそういうとこムカつく」

「ね。ほんと自己評価低いよね。女の子二人も侍らせておいて」

「私も浅倉も、別に仕方なくとか嫌々とか、そんなんでやってるわけじゃないから」

「そうだよ」

「リカに子供みたいに喜んで欲しくてやってるだけ。だからいらぬ気なんて使わなくて良い」

「そういうこと」

「……浅倉、あんた今、ほとんど何も言っていないんだけど」

「あ、バレた。樋口が全部言っちゃうから」

「少しは何か言ったら？」

「何かって……ワシントン？」

「今、各国の首都を当てるクイズはやってない」

いつの間にか、菅谷を置いていつもの調子で話し始める二人。それを見て、菅谷は少しだけ胸の奥で何かが引つ掛かる。

わかってた話とは言え、改めて実感した。もう円香も透も、完全に二股でいくという覚悟がある。自分もそのつもりでいる……と思っていたが、まだ決心しきれていなかったのかもしれない。

……いや、しきれていなかったと言いつ切るべきだ。だから、今の今まで告白もしない

で中途半端な関係が続けていたのだろう。

それを払拭するには、やはり自身の中で今度こそ決意を固めるしかない。

「……」

そうこうしているうちに、マンションに着いてしまった。三人で部屋まで上がっている間も、菅谷はずつと顎に手を当てている。今日中に告白してしまいたいとさえ思っているが、どのような告白したら良いのか……と、少し悩んでしまう。

そんな菅谷を他所に、部屋の中に入るなり透が伸びをしながら呟いた。

「ふーっ、なんかもうここに来ると言いたくなるわ。ただいまって」

「一年くらいで大袈裟」

「えー、でも樋口もごく自然に靴脱いで荷物肩から外してるじゃん」

「……そりやほぼ毎日来てたらそうなるでしょ」

「じゃあ、ただいまって言っても良くない？」

「……まあ、仮にも姉弟だし」

なんかその会話が少し嬉しかった。しかし、それと同時にどうやって告白までの流れに持っていくか悩んでしまう。

ずつと難しい顔をしている菅谷の前で、円香が言った。

「じゃ、私と浅倉でタネ作るから、リカはたこ焼き器用意しといて」

「あ、うん」

「よっしゃ。隠し味にサバ入れてみない?」

「アレンジは自分だけでやって」

そんな話をしながら、まずは手洗いうがいをして、三人で支度を始めた。菅谷は言われた通りガスコンロとたこ焼き機と、あとついでに器と串と箸も用意した。

さて、しばらく待機出来るのは良い時間だ。いつ告白するかを考える。プレゼントをもらった後とかだと、なんだか少しやらしい気がする。特に、二人からもらえるわけだし……まあ、二人に限ってそれはないと思うが「プレゼントを二人からもらえるから二股しよう」みたいに見えるのはゴメンだ。

かと言って、プレゼントをもらう前でも変な気がする。何せ、今日は二人に祝われる日。こちらはもてなされているわけだし、空気はどちらかと言えば作ってもらう方だ。

……あれ? なんか自分の誕生日に告白するのって、意外と難易度高くね? なんてことを考えている間に、円香と透がタネを運んで来てしまった。

「お待たせ」

「出来た」

「っ、お、おお……よし、焼こう」

「がつつかないで」

円香と透も椅子に座り、三人でのんびりと焼き始める。

「この角の一つ、私が育てるから」

「はいはい……じゃ、これ私」

タネを流し込んだたこ焼き器の上で二人がそう決めている間も、菅谷は何も話すことなく、何かを考え込んでいた。

そんな菅谷を見て、透が「あつ、そだ」と声を漏らす。

「樋口、忘れないうちに渡しちゃう？」

「え、もう？」

「うん。あんまり溜めるものでもないし」

「……まあ、良いけど。じゃあ、リカ」

「……」

「リカ？」

「つ、な、何？」

「プレゼント」

「えっ、も、もう？」

「もう」

そう言いながら、円香は鞆の中からプレゼントの箱を取り出した。透に持たせなかつ

たのは失くすからとは言えない。

まだ何も決まっていけない菅谷だが、とりあえず今は思考をやめて、二人の方を向き直る。

「そんなわけで、リカ。はいこれ」

「二応、二人から……だから」

「開けて良い？」

「どうぞ」

小さくて、二人から一つのもののようなようだ。ちよつとホツとしてしまったが、なんであれとりあえず開ける。

堤を剥がし、箱の中を覗くと……中から出て来たのは、キーケースだった。それも、革製の。それなりに値段がしそうなものだが……と、菅谷は少しだけ狼狽える。

「樋口の家だよ。ちなみに……ほら、これ」

「二応、私たちもおそろい」

二人とも、同じキーケースを鞆の中から出す。とても綺麗なケースで、自分にしては少し大人向けすぎる気もするけど、今後マストアイテムになるかもしれない。

けど、なんでだろう？　と思わないでもない。

「ありがとう。……でもこれ高かったでしょ。どうしてキーケース？」

聞くと、透が円香の体を肘で突き、その円香は少し頬を赤らめる。答えるか答えないか少し悩んだ後、呟くように答えた。

「それは……まあ、その……家族になった時、同じ鍵を、同じケースに入れられるように、みたいいな……」

「実質、プロポーズ」

「あ、浅倉……！　そこまで考えてないから……！」

「えー、ほんとにー？」

「ほんとー！」

なんてやりとりを眺めながら、あらためて菅谷は思った。もうタイミングとかムードとか、そんなのどうだって良い。大切なのは、二人に気持ちを伝えることだ。

今後、弊害は増えるだろう。普通の恋愛ではないから。周りの見る目も変わっていく。それも、自分は仮にもモデルだから尚更。

それでも、自分達は自分達のやりたい事をする。そう決めて、二人に声をかけた。

「マドちゃん、とおるん。ありがとう」

「……別に」

「樋口照れてる」

「照れてない」

「それでー……俺からも話あるんだけど、たこ焼き焼きながらで良いかな？」

それを言われて、二人ともピクツと反応する。その二人に、改まった様子で告げた。

「俺、二人のこと好きだよ。……だから、二股になっちゃうけど、二人一緒に付き合つて欲しいな」

しれつと言った。いや、菅谷の中では一大決心だったのだが、割と不意打ちだったかもしれないと思っている。

言われた二人はほんの少しだけ頬を赤らめるが、すぐにいつもの真顔に戻った、

「……遅いから」

「ね。やつとかーって感じ」

「ご、ごめんね……？」

「なんで相思相愛を半年も続けなきゃいけないの」

「かなりもどかしかった」

「うぐつ……ご、ごめん……」

ボロクソだった。でも、それはオツケーと裏返し。分かっていたとはいえ、了解を受けて少しだけ嬉しかったり。

ホツとしていると、円香がたこ焼きを返し始めたので、菅谷も手伝い始める。

「ね、リカー」

その菅谷に、透が声をかけた。

「何ー？」

「私と樋口、どっち先に好きになったのー？」

「浅倉……そういうこと聞く？」

「良いじゃん、記念に」

「んー……先だったのは、マドちゃんかな。……ぶっちゃけ、中学の夏休み前には好きだった」

「え……そ、そんな早くから？」

「執念深っ」

「俺なんか結構してくれる人、滅多にいなかったから。でも、なんかずつと一緒にいてとおるんの事も好きになっちゃってー……なんか、二人とも大好きになってた」

「うわ、テキトー」

「いや、浅倉もリカのこと好きな理由なんてそんなもんでしょ」

「ね。二人はいつから？」

「えーつと……」

なんて、たこ焼きをひっくり返しながら、三人の夜は続いていった。

家族や塾講師が言う「大学に行ったら遊べるか」はアテにならない。

日々、変化するのは人間関係も。

三月。それは出会いと別れの季節。まあ別にそれは透と円香と菅谷にとって大した問題でもないのだが。来るもの拒まず、去るもの追わずの三人であって、友達を作ることも向こうから来るなら全然応じるつもりだったが、高二から関係が加速した三人の間に、入ろうとする人が少なかった。というか、雛菜と小糸しかいなかった。

さて、まあそれはともかく、だ。三人はとある一軒家の中に来ていた。周りには、ダンプボール等に入った荷解き前の荷物が大量に置かれている。

その部屋の中を、浅倉透と菅谷明里は物珍しそうな顔で見回していた。

「うおー、久しぶりの一軒家ー」

「感慨深い感じ?」

「そりやもう。めっちゃ深い。あれ……マリアナ海溝くらい深い」

「わお、めっちゃ深い奴じゃん」

「そう、めっちゃ深い」

「中身のない会話してる暇があるなら、さっさと荷解きして」

円香がバカ達の会話を打ち切る。そして呆れ気味にため息をつきながら、続けた。

「言つとくけど、今後シェアハウスで暮らす以上、あんたら今までみたいに暮らせると思わないで」

「……」

それを言われて、二人とも少し頬を赤らめて目を逸らす。

「何照れてんの？」

「……や、なんか……」

「三人しかないシェアハウスって……早い話が、同棲だよねって……」

「……まあね」

浅倉透、樋口円香、菅谷明里、三人とも今年の4月から大学一年生。三人が二股カッブルとなつてから、二年が経過していた。

ピユアっぷりは相変わらずで、少しだけ照れているように……いや、よく見ると透は「あんなことやこんなことが起こるかも……」と妄想していたが、とにかくモジモジしている二人に、円香は言った。

「特に透。夕方からレッスンだから、さっさと準備して」

「あ、そっか」

「今日のレッスンは、プロデューサーも見に来るって」

「あれ、今日だけ？　じゃあ、さっさと終わらせないと」

「……」

そして、透と円香はアイドルになっていた。

円香に続いて透もテキパキと動き始め、明里も仕方なく荷解きを始める。残念ながら、引越しの日だからって都合良く休みを取って丸一日、使える余裕は、三人にはなかった。

「じゃ、俺飯作って待ってるから」

「よろしくー」

「カツパ麺とかやめてね」

「そんな事しないよ。とおるんとマドちゃん体調がかかってるんだし」

「私はするけどねー」

「それ、やった数だけ次の日の透のおかず減らすから」

「えっ、円香冷たい」

「うるさい」

話しながら、三人でダンボールを開放していった。

× × ×
樋口円香と浅倉透がアイドルになったきっかけは、偶然だった。高二の夏頃、283プロのプロデューサーに透がスカウトされ、アイドルになることを承諾。マジギレした明里と円香が、後になって283プロにカチコミをかけ、スカウトしたプロデューサーを明里が背負い投げし、円香がその明里を羽交い締め。

プロデューサーも社長もバカみたいに良い人で、仮にも芸能界の事務所同士での裁判になってもおかしくないところを話し合いの席を設けてくれて「決めるのは本人の意思じゃないの？」と言う話になり、透に委ねられる。

で、透はといえば「芸能界でもリカを守る良い機会」というのが理由の8割を占めていた為、円香にもその事情を説明し、巻き込む形でアイドルになると言った。

それでも納得しない明里だったが、そこは円香が手腕を発揮。とりあえず、試着という形でアイドルの衣装を試着。

それを見た直後、鼻血を出しながらも「いや、でも肩出てるし、他の男に見られるのは……」とバカ強い理性がガッツを発動してきたので、ダメ押しでプロデューサーが「売れば彼女達オーダーメイドのさらに綺麗な衣装も見られるよ」の一言で陥落した。

で、なんやかんやで今に至る。幼馴染の雛菜、小糸も含めた四人でユニットを組み、順調に活動していた。

「ふう……疲れた」

「プロデューサー、どうだった？」

ダンスレッスンを終えて、円香は小さくため息をつき、透はプロデューサーに声を掛けた。

それを見て、雛菜と小糸も声を上げた。

「あは〜〜♡ 雛菜のことも褒めて〜〜」

「わ、私はっ……褒められるまでもないと思いますけどっ！」

「ああ、三人とも……いや、円香もカッコよかったぞ！」

「……それはどうも。ミスターワンパターン」

嬉しくないわけではない……が、どちらかというと苛立つ円香。正直、自分のプロデューサーは好きではない。人間的な欠陥があるわけではないが。

「もう少し具体的な感想は述べられないのですか？ 何の参考にもならない意見を寄越すのは三歳児でも出来ませんが」

「あ、あはは……相変わらず、いやいつもの三倍くらい手厳しいな……」

「円香先輩、ツンデレだから〜」

「はっ。」

「それはそうかも」

「ぴえ……」

「その男に限って私がデレたことなんてないでしょ」

「あ、そうそう。参考になるかは分からないけど、円香。今日のレッスン、少し力が入りすぎてなかったか？」

「……以後、気を付けます」

「やは♡ プロデューサーが見に来てたから？」

「違う。あり得ない。200%」

「そ、そこまで否定しなくても良いんじゃないか……？」

不機嫌そうに言う円香の頭の中は、明里のことではいっばいだった。……と、いうのも、荷解きの最中、なんか静かだと思つて様子を見ると、虫の図鑑を読み耽つていたのだ。

罰としてリビングに置く細かい家具の設置を帰ってくるまでに終わらせてなかったら、耳にドライバー入れると言つて出て来た。

本当に好奇心が一番強い男は困る……と、思いつつ、ため息をついた。

「私、先にシャワー浴びて着替えます」

「あ、ああ。お疲れ様、円香」

それだけ話して出て行く円香。その背中を眺めていると、プロデューサーのスマホが鳴り響く音がする。

「? あ、社長が呼んでる。悪い、俺も行くから! 思ったことは、後で資料にしてまとめとくから、目を通してくれよ!」

「あ、ありがとうございます!」

「あ、やばっ。飲み物、空だ」

「じゃあ、雛菜のスポドリあげる♡」

「ふ、二人とも……ちゃんと挨拶しないとダメだよ……!」

そのままプロデューサーも出て行つた。相変わらずのマイペースであったが、少し嬉しそうな表情を浮かべる透に、雛菜が聞いた。

「透先輩、なんか円香先輩、機嫌悪くない?」

「え? あー……そうかも?」

「な、何かあったの……?」

「まあ、普通にリカ関係」

「あ、そ、そういえば……今日、三人引越しの日、だっけ……?」

「うん」

「やは~~~~♡ 雛菜も行きたい」

「あー……じゃあ、来る? 小糸ちゃんも」

「え、い、良いの?」

「うん。みんなでご飯食べよっか」

「やは~~~~♡」

「じ、じゃあ……お邪魔しようかな……!」

なんて、誰に相談することもなく勝手に決めながら、三人でシャワールームに向かった。

××

×× シェアハウスは大学の近くを選んだため、事務所までは電車移動。円香と透は、雛菜と小糸を連れて家に向かう。

「……二人とも、来るのは良いけど、あんま部屋は片付いてないから。あと、今日の晩ご飯はリカの担当だから、その辺は期待しないで」

「明里先輩、料理下手なの〜?」

「いや、博打に近い。たまに気合を入れると空回りする」

「ね。去年のクリスマスマスに作ってたクワトロフォルマツジでリカの部屋のオープン、チーズまみれになったしね」

「今日は引越してきた日だし、十中八九やかしてるから」

「びえ……」

二人とも、ゾクツと背筋を伸ばす。

ちなみに、高校にいた間に小糸や雛菜と交流はあったので、円香か透がいる時に家にかかるくらいは問題ない。

意外だったのは、小糸が意外と明里と話せた事。小糸が年上の異性と話せるとは思っていなかったが、まあ明里のすつとぼけた性格に救われた形だ。

恋人になつてから、さらに余裕が生まれた円香と透は、正直、小糸と雛菜が明里と仲良くするともつと不愉快に感じるものだと思っていたが、思いの外、嫌ではなかった。まあ三股や四股を許すわけではないが。

むしろ、仲良い人達が仲良くしてくれるのは、少し嬉しかった。だから、急な話だったのに、二人が家に来ると聞いても「五人で仲良くできる」のが嬉しかった。

円香が鍵を開け、透が挨拶する。

「はい」

「ただいまー」

「明里先輩ー」

「お、お邪魔します……!」

中に入ったが、暗かった。電気がついていない。出掛けたのだろうか？

「あれ〜？ 電気ついてないよ〜？」

「ほんとだ。虫の観察にでも行ったのかな」

「ぴえっ!!? よ、夜に!!?」

話しながら、呑気に家の中に入る。電気をつけると、机の上に一枚のメモ用紙があった。

『急な撮影が入ったので行ってきました。カレー温めて食べてください。P.S. チェインではなく書き置きを残したのは、やってみたかったからです』

そのメモ用紙を、後ろから三人が覗き込んだ。

「あー、なるほど」

「あ……そ、そっか。明里先輩もモデルさんだったね……!」

「カレーなら不味いって事ないでしょ」

そんなセリフが漏れた直後、円香はメモ用紙を握り潰す。思わず小系が「ぴえっ!!?」と悲鳴をあげるほどの圧を放ちながら。

「……そう言うことはチェインで言えっつーの……!」

これでは、頑張り甲斐がない。せっかくの三人暮らし初日なのに。その横で「近くにいたらやばい」といち早く判断した透が言った。

「雛菜、カレーあっためるから、手伝って」

「はい」

「小系ちゃん」

「な、何？」

「円香の相手よろしく」

「わ、私が!?」

×× 実に身勝手に、小糸に一番面倒な女を押し付けた。

×× さて、それから約二時間後。小糸と雛菜を駅まで送り、透と円香だけ残っている家中。

洗い物を終えて、円香は透と一緒にテレビの前のソファで寛ぐ。

「小糸ちゃん達、来てくれてよかったね」

「まあね」

それは事実だ。いなかったら、もっとテンション下がっていただろう。

「カレーは美味しかったのにね」

「まあ。雛菜と小糸にも好評だったし」

「とうか、よかった。気合入ってなくて」

「それは私も思った」

話しながら、テレビの角に表示されている時刻を見る。もう21時を経過していた。

「……遅い」

「ね。せっかくの初日なのに」

「連絡も出来ないわけ？ あいつ」

「もしかしたら、珍しい蝶でも追いかけてるんじゃない？」

「本当にお花畑に行きたいのかも」

「よし、ドッキリやろう」

「……何する？」

「ここは一つ、脅かしてやることになった。さて、どうやって驚かすか、が問題だ。ホラーも虫も効かない鈍感バカを驚かすのは……」

「ね、円香。良いこと思いついた」

「？ 何？」

「レズセ〇クスしよう」

「………は？」

「あ×××……疲れた」

撮影を終えた明里は、帰宅してきた。慣れない一軒家の前に立ち、鍵を使って中に入る。

「ただいまー……あれ？」

なんか、電気がついていない。というか、リビングの電気だけ豆電でついていた。
「なんだろ……」

気になったのでその部屋に向かうと「ひやつ……」という、やけに色っぽい声が聞こえてくる。円香の声だ。思わず、明里の頬も赤く染まる。

「っ、ちよつと、透……」

「どうしたの？ 円香」

「もう少し、優しく……」

「優しくされても、嬉しくない癖に？」

「っ……そ、そんなわけない、んんっ……！」

「ふふ、気持ち良さそうじゃん。さつきより……激しくしてあげたのに」

何をしているのかすぐに理解した明里は、思わずリビングの扉を開けてしまった。

「マッサージしてるなら手伝うよ！」

「なんで分かるの！」

「ブハッ！」

二人がかりで投げつけられたクッションが、顔面と腹部に直撃した。

「男ならそこは妄想してくれない？」

「勘違いしてくれないとならないでしょ。ドッキリに」

「……なんの、話……」

そのままガクツと力尽きそうになるのを堪えつつ、明里は立ち上がる。それと同時に、リュックから袋を取り出した。

「あ、それよりさ、初日なのに急に出掛けてごめんね。これお詫びにプリン買ってきたよ」

「……」

「……」

それを見て、円香は心底、思ってしまった。

この男、ほんとに狡い。こういうとこだほんと。無意識にやってるそう言うところ、ほんとそういうところ。

だが、長く付き合っていれば、それだけ耐性も出来る。つまり、簡単には誤魔化されない。

「モノで釣ろうとしないでくれる？ ミスター二股男」

「やった、ラッキー。わ、種類めっちゃあるし」

「好きな選んで良いよ」

「……」

しかし、もう一人のバカ馴染みは籠絡されていた。お陰で、簡単には許さないとか意

地張ってた自分が馬鹿らしくなる。

「マドちゃんはどうかが良い？ いちごはとおるんに持っていていかれちゃったから、ミルクか抹茶」

「……」

でも、このまま素直になるのもむかつく。せめて、困らせてやる。

「いちご」

「え？ や、それはとおるんが……」

「いちご」

「うん、だから繰り返されても……」

「いちご」

「……」

困った様子で、明里は隣の透を見る。が、もういちごのプリンを食べ始めてしまっていた。

「……コンビニまで買いに戻らせていただきます……」

「ん。じゃ、待ってて。上着だけ取ってくる」

「え、来るの？」

「プリンはおまけでしょ。私、元々あんたがあんなふざけた書き置き残して何時に帰っ

てくるかも連絡しなかったことに怒ってるから」

「あ、そ、そっか……ごめんね？」

「は？ 謝るなら一人で行く前提で出掛けないでくれる？」

「う、うん……え、えっと……」

「……コンビニまで行くのに同棲してる彼女一人、誘えないわけ？」

「あ、じゃあ……一緒に行くっか……」

「はい、よく出来ました」

良い感じに困らせてやる事が出来て、澄ました顔はしていても内心はホクホクであつた。

「とおるんも来る？」

「んー……私はいい。メンドい」

「あ、うん。わかつた」

その返事は円香にとつても意外だつた。てつきり、来るものだと。

二人で玄関を出て、コンビニに向かう。実際、まだ越してきたばかりなので、少しこういつた夜間に、ぶらぶら外出することに慣れておきたいと言うのもあつた。

外に出ると、明里が円香の手を横から握る。こう言う恋人っぽい仕草にはいい加減慣れてきてくれて、正直嬉しい。

「もう3月後半なのに、まだ少し肌寒いよね」

「そういう理由で手を繋いでるなら、今すぐに離して」

「そんな事ないよ。マドちゃんと繋がりたいから」

「……なんでえつちな表現するの」

「え、今のえつちだった？ どの辺が？」

「蹴るよ」

「ご、ごめんなさい……？」

本当はなんで謝ってるのか分かっていない癖に。まあ、未だにこの汚れのなさは良いところでもあるのだが。

高一から高三にかけて、明里はさらに背を伸ばした。おかげで、三人の中で一番背が低い円香は、菅谷の脇の下辺りまでしかない。

だから正直、腕組みの方が楽なのだが、今日は明里から手を繋いでくれたので、手繋ぎのままが良い。

「そういうえば、どうだった？」

「何が？」

「今日、プロデューサーさんがレッスン見に来てたんでしょ？」

「……ああ。別に私はいつも通りだけど」

「マドちゃんダンス、綺麗だからなあ……セクハラされたら言うてね。山嵐かましに行くから」

「どんな理由があつてもそれやりに行つたら別れるから」

「じ、冗談だから……」

「あんたがプロデューサーに背負い投げした時も割と別れてもよかつたんだから、その手の冗談やめて」

「ご、ごめんなさい……ちゃんと父ちゃんに連絡して社会的に抹殺にします……」

「ん、よろしい」

あの時の明里はまだ若く、頭に血が上つて一直線だった事と、自分が「透がアイドルになるかも」と教えたことと、普通に別れなくなかった事を踏まえて別れなかったが、自分や透がきっかけで明里が犯罪者になるかもしれないなら、別れる覚悟はある。

「とおるんは？」

「透もいつも通りだったけど？ ……いつもより集中はしてたかもだけど」

「とおるん、集中力すごいからね。……集中できたときは」

「……大学受験は苦労したよね」

「本当に……」

ちなみに、三人とも同じ大学だが、明里だけ学部が違つたりする。本当は同じ学科に

誘われたのだが、流石に円香には生物学部は無理だった。

というか、割と将来、やりたいことが決まっている人でないと生物学部は無理なので、透もついて行ったりはしなかった。

「でも、とおる人も飲み込みは早いから良かったよ」

「あんたは推薦で受験もしなかったしね」

「理科系、小中高全部満点は伊達じゃないよ」

「本当に伊達じゃないのがムカつく」

と言うか、気持ち悪くさえ思うが、まあ勉強ができる事自体は悪い事ではないので、ここは何も言わない。

「ていうか、あんたこそどうだったの？」

「何が？」

「白瀬さんが事務所抜けて結構経つけど、平気？」

「うん、全然平気。なんか最近、モデル以外の仕事持つてこられるし」

「え……ど、どんな？」

「仮面ライダーとか、スーパーヒーロー戦隊とか」

「……聞いてないんだけど」

「え、だつて嫌だったから断つたし。特に、去年は推薦とはいえ受験生じゃん。夏休みに

はまだ決まっていなかったし、普通に無理でしょ」

「……………ふーん」

しかし……………逆に、円香は興味津々だった。仮面ライダーの明里……………是非とも見てみたい。もう二度とやって欲しくはないが、大外刈りも大腰も背負い投げも、どれもカッコ良かったから。

あれを裁判にならず見られるのなら……………。

「次からは受けてみたら？」

「え？」

「これからは大学生だし、時間も空くでしょ。せっかくの機会なら、やってみても良いんじゃないの？」

「意外。マドちゃんなら止めると思ってた」

「……………別に、リカの成績なら単位落とす心配もないと思ってるだけ」

「えー、そう？」

実のところ、見てみたかった。明里の「変身」を。歴代仮面ライダーなら、どんなのが似合うだろうか？ 見た目だけならカッコ良いのだし、スタイリッシュな……………いや、柔道を活かすのならゴリゴリのパワーライダーでも……………あ、いや武器を使うライダーは似合わなさそう……………なんて、妄想している時だった。

「マドちゃん、着いたよ。コンビニ」

「っ、そ、そう……」

「いちごプリンで良いの？」

「抹茶で」

「家にあるじゃん……何しに来たのこれ」

「ん、リカと散歩したかっただけ」

「……もー、それなら先に言つてよ。公園とか行つてもよかつたのに」

「戻ろ」

「んー」

そんな話をしながら、結局何も買わずに二人で家に引き返した。

さて、家の前に到着し、明里が家の鍵を取り出す。自分と同じ鍵穴に刺さる鍵……今更になって、同棲が始まったことを意識する円香。今後、もしかしたら裸を偶然、見られることもあるだろうし、こちらが目撃することもあるだろう。

お互いのプライバシーが限りなく消失していく……それなのに、恥ずかしさより嬉しさの方が遥かに優っている。

……なんか、キスしたくなってきた。

「……リカ」

「んー？」

「こつち見て」

「何……んうっ!?？」

玄関の前で、唇に唇を重ねる。舌を入れるとかはしなかったが、唇で唇の感触を三秒ほど堪能し、離れた。

「これからよろしく」

「っ……う、うん……」

「今更、キスで照れないでくれる？」

「マドちゃんも耳赤いよ」

「……」

「ごめんなさい」

「早く入ってプリン食べるよ」

「うん」

二人で中に入った。

靴を脱いで手洗いうがいをしてから、リビングに入る。

「おかえりー」

「ただいま」

「どこ行つてたの?」

「コンビニ」

「と、玄関でキス」

「へー。あ、お風呂沸かしといたよ」

「じゃ、私先入る」

との事で、円香が洗面所に入り、明里は台所の冷蔵庫を開けてミルクプリンを取り出す。

「リカ、どっち食べるの?」

「牛乳」

「ふーん……美味しいの? 牛乳のプリンって」

「美味しいよ。甘いだけじゃなくて、牛乳のトロみがあつて」

「トロみ? 大トロ的な?」

「え? うん。多分」

「……ふーん。大トロ」

そんな会話をしながら、明里はソファに座った。蓋をペリペリつと剥がし、スプーンでスケートリンクのように白く光沢のある表面を掬う。プルンつと揺れて、ふるふると震える。

それを見据えて、口の中に運ぼうとした時だ。そのスプーンの後ろに、透の顔がじーつとこちらを眺めているのが見えた。

「……食べたいの？」

「うん」

「……体重平気？」

「ぶつよ？」

「いや、ほんとに。アイドルなんでしょ？」

「平気」

「……」

正直、透のそういうところは信用していない。円香が明里の事を「恥かかないように」と気にかけてくれていているように、明里も「どうせやるなら恥かいて欲しくない」と二人に対し思っている。

つまり……太るかもしれないことに協力は出来ない。

「ダメっ」

「えっ」

「俺はおるんが太っても好きだけど、それでファンが減つちや意味ないからっ」

「……」

……しかし、透にそれは逆効果だった。意地悪された、と思った透は、目の前でプリンを頬張る明里の唇に、強引に唇を重ねた。

「んぐっ……………!?」

「んーっ……………んっ」

そのまま口内を、まるで何か手探りで探すように舐め回した後、プリンを発見し、舌で包み、口を離した。

「んーっ……………おいしっ」

「ーっ……………な、何してんの……………」

「ん？ プリンくれないから奪った」

「……………くっくっ」

「ふふ。顔真っ赤」

「ど、どいつもこいつも……………」

もう恥じらいとかないのだろうか？ いや、まあ三人しかいない部屋の中で恥もクソもないのかもしれないが……………にしてもだ。

まあでも、わざわざ言わなくても良いかな、なんて思いつつ、隣同士で座っている。

「そうだ、リカ。今日、レッスンでプロデューサーが見に来てさ」

「ふーん……………そうなんだ」

「すごく集中してやったら、褒められた。やっぱり、嬉しいよね。そういうの」
「……どんな人なの？ その人」

「ん、んー……なんか、一生懸命で、鈍くて……変な人？ でも、良い人だよ」
「へー……」

「あ、後あれだ。変態的な人とかじゃないから、立場を利用してエロいこととして来たりはしないんだよ」

「そんな事されたら、うちの父ちゃんとその最強弁護士軍団が立ち上がるから言ってね」
「う、うん……」

「ついさつき柔道の禁止技で応じる冗談を言ったら怒られたので、今回は普通に答える。まあ、そんな気分じゃ無かったというのもあるが。」

「……少し、ムスツとしながら、思わず手が伸びてしまった。キュツと、控えめに透の袖を掴む。それに気付いた透が、キョトンと小首を傾げながら手元を見下ろした。」

正直、恥ずかしい。嫉妬なんて、男らしくない子供みたい。カッコ悪いことは重々承知している。

これは、からかわれるかも……と、覚悟を決めたように目を瞑った時だ。その透が答えた。

「どしたの？ 寒いのか？」

「……」

ムカついた。明里はムスツと頬を膨らませると、両手を伸ばして透の両頬を抓る。

「いふあいふあい！ ほ、ほうひはの？」

「とおるんのアホー！」

「なにふあ……!?」

× しばらく顔をシワクチャにしていた。

×

結局、晩御飯もその後のデザートも何もかも一緒にこなすことはなかったが、なんや

かんやで就寝時間になった。

一応、各々の部屋は用意されていて、布団や机など、最低限の家具は置かれている。

……のに、円香の部屋の前では、明里と透が集っていた。

「……よし、行くよ」

「うん……！」

何せ、二人とも実を言うとは荷解きがまだ完全に終わっておらず、床に布団を敷く隙間も無かった。

そのため、円香の部屋で寝させてもらうことにしたのだ。

「3……2……1……！」

「GO！」

一斉に飛び込んだ。中になだれ込むと、布団の中にいた円香はビクツと肩を震わせる。

「はっ!? な、何……!」

「布団を発見しました、隊長！」

「よし、潜り込むぞ。明日の朝まで、寝息を立てて」

「イエス、マムツ！」

「何してっ……きやつ……!」

二人して布団の中に突撃した。円香を挟み込むように潜り込むと、そのまま両サイドから円香を通して手を繋ぐ。

「あ、あんたら……何してんの？」

「ん、いやせつかく三人で暮らしてるのに、今日何も一緒に出来なかつたから」

「一緒に良いじゃん。寝るときくらい」

「はあ……別に今後、いくらでも機会はあるでしょ……」

「最初の一日は今日だけでしょ」

「ね」

「……もう勝手にして」

もはや否定する理由もその気も無くなつた円香は、目を閉じて自分のお腹の前で手を繋いでいる二人の結び目に、自分の手を添える。

一緒に暮らせば、今まで気付いていなかったお互いの嫌な面とかも見えてくるかもしれない……が、それでも一緒にいたい欲が勝つてしまった。

何があつても一緒にいる第一歩……そのつもりで、三人とも眠りに意識を委ねた。

勿論、翌日。実は荷解きが終わつていなかったことがばれ、二人とも雷を落とされた。

いつも一緒に良いことばかりじゃない。

大学の授業は基本的に自由……なんていうのは、親や教師や塾講師の戯言である。必修授業は数多く、自由と言っておきながら生徒を縛りつけ、結局はあまり自由ではないのだ。

しかし、円香は元々「自由」なんて謳い文句に騙される程、素直でもお人好しでも無かった。

何となく予測はしていた為、特に不具合なく、隣の透と授業を決めていく。要するに、必修授業の確認を進めて行った。

さて、そんな事をよりにもよって学内のカフェですれば、当然新入生兼アイドルの二人は狙われるわけで。

「ねえ、その君達」

「これから合コンやんだけど、一緒に来ない？」

「いやいいです」

「行きません。男の人に興味ないので」

「え、なになに。百合ってヤツ？」

「じゃあ証明してみろよ」

「は？　なんであなた達に証明しないといけないんですか？」

「……円香には裸を見られても良いけど、あんたらには見られたくないとか？」

「透、黙ってて」

「そりゃ同性だからだろ」

「ん？　てか、透に円香？　二人ともどこかで……」

なんて話していた時だ。遠くから「とおるーん、マドちやーん」というとても大学生とは思えない素直な呼び声が聞こえてくる。

円香はわざわざ顔を向けることなく履修科目表に目を落とすし、透は逆に顔を上げる。

「あ、リカー」

「ごめんごめん、お待たせー」

「ホント遅い。何してたわけ？」

「階段混んだ。あとサイン頼まれてた」

「だからサングラスでも帽子でも被れって言ったでしょ」

「もしかして、されたかったの？　ちやほや」

「いや、そんな気ないけど」

そう言いながら、明里がしれっと二人の席に座る。そして、円香はジロリと男二人を

見上げた。

「とにかく、私と透は男に興味ないから。分かったらどっか行って」

「お、おう……」

説得力などかけられも無いのに、圧力だけは確かにあつた言い様に圧された男達は、言われるがままどこかへ立ち去っていった。

今来た……というか、男二人なんて視界にも入っていなかった明里が、小首を傾げながら聞いた。

「知り合い？」

「違う」

「なんだったの？」

「ナンパ」

「ふーん、身の程を知れと？」

「そんなとこ」

何せ、明里がいなくても遊ぶつもりなんてサラサラないのだ。出直して欲しい。

「で、二人は何してたの？」

「取る講義選んでる」

「ほとんどあれだけ。必修」

「あー、まあ一年だしね。必修じゃない日、合わせようよ。この時間のスポーツとかいけるよ」

「そういえば、大学は体育、男女一緒なんだ」

「それは俺もビビった」

「じゃ一緒で。そこ」

なんて話しながら、予定を詰める。しかし、やはり学部も学科も違うだけあって、合わせられる日は少ない。三人で一緒に受けられる授業は三つだけだった。

「……はあ、なんか意外と世知辛いね。大学生生活」

「仕方ないでしょ。学部が違うんだし。実質、別のクラスみたいなものだから」

「まあ、私と円香は一緒だから。あんま寂しくないけどね、実際」

「いーなー。俺も一緒が良かったなー」

とはいえ、仕方ないと言えば仕方ないのだが。とりあえず、一応三人とも芸能人であるため、最悪、出席出来なくても試験、或いはレポートで単位が取れる講義にする事にした。

「この後どうする?」

「帰る。そろそろスーパーストックの特売でしょ」

「あ、そっか。もう三人とも自分たちの稼ぎで食べないといけないんだもんね」

シェアハウスを行うにあたり、親からの仕送りは断った。もうほとんど社会人みたいなものだし、高校でたくさん助けてもらってきたし、そろそろ自立したいと言う考えのもとだ。あとは、親に助けてもらおう時というのを、父親の最強弁護士達に色々お願いする万が一の時に取っておくため。

さて、そんなわけで、3人でスーパーに立ち寄ることにした。

「今日、晩飯何にするかー」

「私、もぎたて♡にーちゅ食べたい」

「じゃあ俺、コンペイトウ☆キスで」

「……言ったな？」

「嘘です」

腕がれる、或いはキスされる、とすぐに理解した二人は慌てて口を塞いだ。

「……明日仕事の人とかいる？ いないなら、餃子にするけど」

「お、良いねー」

「俺もそれでー」

「じゃ、決まり」

口臭を犠牲にする事で、満足感を特殊召喚する最高の一手である。もう三人とも、お互いの家に入り浸ったり、泊まりの旅行とか行き過ぎて一々、餃子を食べた後とか、少

しだけ寝癖がついてるとか、三人しかいない時は気にしない仲になっていた。

勿論、外に出る時はお互いにお互いと一緒に行っても恥ずかしくない格好を心がけてはいるが。

「冷蔵庫に何あったっけ」

「牛乳」

「フアンタ」

「餃子の具材の話に決まってるでしょ、バカ二人」

「あ、そっか」

「なるほど。オツケーオツケー」

「透には聞いてない。どうせ覚えてないだろうし」

「は？ 私こう見えて、ちゃんと親元を離れて生活する自覚とか芽生えさせてるから」

「じゃあ答えてみ？」

明里にも言われて、透は真顔のまま答えた。

「長ネギ」

「あったっけ？」

「ないよ。ひき肉とニラとニンニクはあったと思うけど、長ネギは昨日使い切った」

「私今ないもの言ったから。これから買う奴って意味で」

「あ、ごめん嘘。ないの玉ねぎだ。長ネギはある」

「ブハツ……………」

円香が思わず吹き出した時だった。透が明里の背中をポカポカと叩き始める。

「とおるん、普通に痛い」

「殴ってるからね。普通に」

「透、今のはあんたの負けだから。その辺にして」

円香に言われて、渋々離れる透。でも最後に一発、肩にお見舞いした。

「痛っ！ 肩パン上手っ！」

「でしょ？ ザマー見ろ」

「で、リカ。じゃあ無いのは長ネギと餃子の皮で良い？」

「うん。…………あーでも、ついでだし飲み物とか買っちゃわない？」

「…………無駄遣いはやめて」

「いやいや、牛乳とか必要でしょ」

「ああ…………そう。じゃあ、見つけたらカゴに入れて」

なんて、いつのまにか円香と明里だけで話を進める。元々一人暮らししていた明里と、いつでも明里と透の手助けが出来るように、母親に（側から見たらどう見ても）花嫁修行を受けていた円香が手際よく買い物を進める。

その様子を眺めながら、透は少しむすつとして、二人の間に割って入った。

「うわ、とおるん?」

「何?」

「……ずるい」

「何が?」

「なんか、ムカつく。私だけ家事しない夫みたいで」

「そうじゃん」

「夫ではないけど」

「そんなわけで、みんなで買おう。バラけて」

「なんでバラけるの。一緒に買いに来たのに」

「大体、持ってきたもの被ったら戻す手間が出るでしょ」

「10分後に円香の所に集合で。じゃ、かいさーん」

「ちよつと」

×身勝手に、透によって三人はバラバラの方向に別れる事となってしまうた。

×

「ふう、こんなもんかな」

5分が経過した頃、明里はカゴに野菜を入れて戻ってきた。適当な数、入れて持って

きた野菜だが、ちゃんと安く重たいものを選んだ。このチョイスなら、円香も何も言わないだろう。……まあ、この人參だけは安さだけを見たら割とグレーゾーンな気がしないでもないが。

それにしても、我ながら随分とこう言うスーパーでの買い物に慣れたものだ、と少しだけ感心してしまう。昔は円香に随分と怒られたのに。

しかし、今にして思えば、あの頃、厳しく怒られていた内容も全て、自分を想つてのことだったのだろう。

それを自覚すると、少し気恥ずかしいような、でも嬉しいような……あと、同い年なのになにちよつとだけ情けないような。

まあ、何にしてもこれからは、世話になつていた分、自分が恩を返せば良い……そんな風に思いながら、最後に牛乳を見に行こうとした時だ。

「リーカッ」

「つ、と、とおるん。ビックリした」

手ぶらの透に、後ろから両肩に手を置かれた。というか、あれから5分は経過しているのに、何故この子は手ぶらなのだろうか？

「……なんで手ぶらっ？」

「来て、こっち」

聞いてくれない。そういうところが家事をしない夫のような気がしないでもないが……まあ、透の良い所はそこじゃないし、と思う事にして、後に続く。

「実はさ、買いたいものがあるんだよね。円香が許してくれるか分かんないけど」

「何？ あんま無駄遣いはダメだよ？」

「分かってるから。ただ、大人になったら絶対、飲まなきゃいけない奴」

「？ 何？」

なんとなく嫌な予感はしていたが、黙って後に続く……しばらくして「じゃんつ」という可愛い声と共に見せてくれたのは、缶ビールだった。

「やつちやう？ 一杯」

「……まだ今年で19でしょ」

「いやいや、平気でしょ。少しくらい」

「……」

……正直、興味が無いと言えば嘘になる。大学生になったら、割と一年の時から飲んだりする人もいるという話も良く聞かし、一本くらい有りだろうか……いや、やはりダメだ。

正直、身体に悪いとか、そんな心配はしていない。19だろうが20だろうが大差ないので、目安として「ハタチ」というルールにしているのは分かるから。

しかし、そのルールが厄介なのだ。何せ、そのルールとは法律を意味するから。

「飲みたかったら、ハタチのお祝いで室寺さんに買って持ってきてもらおう」

「お、良いねー。ちなみに、どれにする？」

「違い分かるの？」

「分からん。でも、なんかあるでしょ。美味しいの」

「なんか親が好きなのは恵○寿だよ」

「うーん……なんか名前の響きの、のど○しも美味しそうじゃない？」

「あー、確かに。……あ、室寺さんはプレモルが好きらしいよ」

なんて、ビールを手に取りながら会話する。金色の炭酸、と聞くだけで、正直美味しい。そうないメージはあった。そういえば興味はあったのに、親が飲んでる時に「飲ませて」と言ったことはないことを思い出した明里は、徐々に興味が強く湧いてきた。

「ね。せっかくならさ、全種類一本ずつとかは？」

「なんで？ ……あー、飲み比べ？」

「そういうこと」

「良いね。あ、なら買っちゃおう？ 樽みたいなコップ」

「あー、海賊が使う奴？ 良いね」

「よっしゃ」

なんて、ビール持ったままノリノリで語っていたのが運の尽きだった。

「へえ、未成年がアルコールの購入……それもアイドルとモデルが。流石、大学生」

「……あ、やばっ」

「ま、マドちゃん……」

その形相は、もうマジギレとかじゃない。虫を見る目だった。

「一応、聞いてあげる。チャンスは一回ね。どういうつもり？」

「いや、これは別に今買おうって話じゃなくて……」

「社会勉強みたいなもんだから。どれか飲んでみようねって」

「とおるん、それマドちゃんの疑惑全肯定の答え」

「分かった。二人ともぶっ飛ばす」

指をゴキゴキと鳴らし始めてしまっていた。

それから約10分後、スーパーから出てきた時には、先頭を歩く手ぶらの円香と、その後ろからとぼとぼ付いて歩く、スーパーの食材を詰め込んだ鞆とタンコブを作った透と明里が出て来た。

何れにしても、カップルではなく手間のかかる二児と母親にしか見えない3人組だっ

た。

×××

円香に怒られたので、二人が夕食の準備をして、今は食事中。三人で羽根付の餃子をつまみながら、透がふと思いついたように声をかける。

「そういえばさ、リカは友達出来た？」

「どしたの、急に」

「いやー、気になったから。リカ、結局高校じゃ友達いなかったじゃん」

「ああ、まあ友達なんていないよ。まだほとんど初日みたいなモンだし。そっちは？」

「円香」

「透」

「それは姉妹でしょ」

「うるさい」

「バカ」

ぶつちやけ、円香と透も友達は基本的に少ない。それこそ、ノクチル以外でも283プロにしかないレベルだ。

「あ、でも俺、女の子には何度か声掛けられたよ」

「ふーん……」

「で？ だから何？ 俺モテますアピール？ ミスター女たらし」

「いや、なんかとおるんを紹介してくれませんか？ 言われた。あの綺麗な顔の女の人

に抱かれないとかなんとか」

「え、何それ。怖」

「良かったじゃん、透」

「良くないよ！」

「リカが答えるの？」

「ていうか、リカも私の事、抱きた……」

「とおるんを抱き枕にして寝て良いのは俺とマドちゃん……あと、一応雛菜と小糸ちゃんだけだから」

「そっちの抱く？」

「……リカは今後、それをするの禁止する」

「どうして!!?」

「今のはリカが悪い」

「マドちゃんまで！」

なんて話を脱線させながら、三人で食事続ける。

「でも、そっかー。私もモテモテなんだー」

「ていうか、なんでリカと透が知り合いなの知ってたわけ？」

「なんか一緒に歩いてたの見てたんだって。ちなみにマドちゃんの紹介は言われなかつ

たよ」

「聞いてないしどうでも良い」

「マドちゃんも可愛いのにね」

「そういうこと、軽く言えるあたりが全然、信用出来ない」

「円香嬉しさのあまり耳赤いよ」

「透、殺すよ」

赤くなつたまま、円香はぱくぱくと餃子を口に運ぶ。

「ま、リカがバカみたいにモテてないなら何より」

「俺だって心配してるんだからね。さっきだって食堂でナンパされてたんでしょ？」

「その時は、円香とキスするから大丈夫」

「え……二人ともキスとかよくするの？」

「信じないでくれる？」

さて、そんなぼんやりした話題でしばらく盛り上がった後、食事を終えた。もう円香の怒りも収まっていたので、いつの間にか普通にか普通にいつもの流れで円香と明里が二人で洗物をして、透は先にお風呂に入る。

そんな中、円香がふと思ったように聞いた。

「そういえば、リカ」

「何ー?」

「お酒に興味あるの?」

「その件はすみませんでした……」

「いや、別に責めてるわけじゃなくて」

というか、誤解は普通に解けている。基本的に何も考えていない透はともかく、明里が今すぐに興味があるからって酒をかうとは思えないから。

「ただ、リカもそういうの興味あるんだってだけ」

「まあね。こう見えて、俺大人の遊びとか興味津々だよ」

「は?」

「とおるんと初めてピアス買った時とかも、普通に『大人っぽいから』って思ったのもあるし」

「……いちいち、えっちな反応しないと気が済まないわけ?」

「え、どの辺がえっちな部分なの?」

「……」

頼むからもう少し大人に……いや、もう二年付き合っこの純粹さのままでは、明里だけの責任ではない。

そりゃ勿論、明里にだって少しずつえっちな部分が出て来た。最近じゃ、キスやハグ

程度じゃ気絶しなくなった。

しかし、それでも「小学生が青年漫画を読んでは、エッチなページだけやたらと覚えてる」程度の性欲なわけで。

つまり、円香も透も処女のままである。

「……」

まだ、えつちな経験をしたことないから「いやもうマジめっちゃしたい」と思うわけではない。経験が無いから、あんまり期待するとそんなに良いものでもないかもしれないからだ。

だが、何も全くシたくないわけでもない。それも、誰でも良いわけではなく、明里とが良いわけで。

大学生の上に同棲さえしてしまえば、その手の行為を全くしなくなるなんてことはないだろう……が、そう思っていると何もシないまま卒業してしまうかもしれない。

だが、酒の力があれば……。

「成人した時、最初にお酒を飲むときは、三人一緒に良いかもねって話がいんだけど？」

「え？ あ、ああ。勿論」

酔わせて食べる、という作戦でいくしかない。そして、それには透も混ぜる。

「でも俺、年度最終日が誕生日だから、お酒飲むのかなり後になるよ」

「……」

そうだった。この子の誕生日は遅い。それ故に弟、と言う感覚が無いわけでもないのだから。

「成人式に飲むから」

「え、いやだからその時は未成年だから」

「少しくらい平気でしょ」

「あ、さつき怒ったのに？」

「さつきのは、つまらない事で周りに目をつけられたくないって意味。未成年が外でお酒買うわけにも、お酒を外から家に届けてもらおうわけにもいかないでしょ」

……まあ、確かに？　と言うように、明里が頷くのを眺める。

さて、洗い物は終わりだ。水気を払うように手を軽く振りながら、円香は明里に言った。

「ま、成人式が終わった後でもあんたが二十歳になった後でも良いけど、私も透も、あんたが飲むときにならないと飲まないから。それだけ覚えといて」

「……ん、ありがと」

なんて話していると、ピーピピッピーっと電子音が鳴り響く。お風呂の呼び出し音

だ。

「今日は先お風呂入ったら？」

「良いのー？」

「なんでもレディファーストなんて遠慮してたら、一緒に暮らしててストレス感じるでしよ」

「もう、とおるんが入ってるけどね」

「あれは例外」

そんな話をしながら、明里は洗面所に向かった。

呼び出し音が鳴った以上、もう入って平気だろう。そう思ったのだが……念の為、ノックはすることにした。

「んー？」

「あー、もう着替え終わった？」

「まだー。次、リカ入るの？」

「うん」

「じゃあ、あと10秒待って」

言われるがまま、明里は待機する。……この扉を一枚隔てた向こうでは、透が着替えているらしい。下着姿でいるのか、それともまだ裸なのかは分からないが、想像すると

少し胸が苦しくなる。

なので、すぐに想像をやめるように首を横に振る。その明里に、透が聞いた。

「あ、覗いても良いから。見たかったら」

「っ、み、見たくないよ!」

「本当に?」

「……そ、そこまでして見たくないよ」

「それはそれで傷つくわ。……開けちゃおつかな?」

「……え?」

なんだか透にしては意地悪そうな声音が聞こえて、少し背筋を伸ばす。嫌な予感がした時にはもう遅かった。

ドアノブが、カチャツ……と斜めに下げられる。

「えっ、ちよっ……とおるんっ?」

それと共に、まるで開け放たれるように扉が少しずつ開放されていった。

「ちよーっ、ダメだつてとおるん俺別にそう言うのが見たくてシエアハウスを始めたわけじゃないって言うかいやホントマジでやめてとめてやめてとめて……!」

目を隠しながら、指の間から見えないようにしつつ、もはや悲鳴のようにそう言っている間に、洗面所から出て来るように足音がギシギシと聞こえて来る。

本當に出て来たよ！ 恥じらいというものが無いのか？ と、頭の中が真っ赤に染まっている時だった。

「リカー、目を開けなくて良いのー？」

「良い！」

「ふーん……まあ普通に、服着てるけどね」

「え？」

なんか聞き捨てならない台詞がしれつと聞こえて、はつと顔を上げる。普通にパジャマ姿の透が立っていた。パジャマのボタンの隙間から胸の谷間が見えてはいる。

「つ、や、やっぱりちよつと見えてるじゃん！」

「いやこのくらいは一緒に暮らしてる以上、仕方ないでしょ……」

「ボタン掛け違えてるし！」

「え？ ……わお、マジじゃん」

「め、目の前で直すなー！」

「透、その辺にして」

リビングから円香が顔を出してそう言う。

「聞いてた？」

「ていうか、聞こえてた。あまりからかわないであげて。毎日、顔合わせる場所でないじり

過ぎるとストレスになるでしょ」

「はい」

親しき仲にも礼儀あり、というものだろう。本当に透が反省しているのかは分からないが。

ボタンを直し終えた透がリビングに戻る直前、スツと明里の肩に手を乗せ、耳元で囁いた。

「見たかったら、言ってくればいつでも見せるからね」

「っ……」

やっぱり全然、反省していない。いや、正直おふぎけなのは分かっている。でも、やっぱりイラツとしたので、円香に声を掛けた。

「先生ー、とおるんが『見たかったら見せてくれる』とか言ってきましたー」

「透、集合」

「げっ、なんでチクるの……」

×それだけ言うと、明里はお風呂に入った。

×

「とにかく、必要以上からかうのはやめてあげて。苦手な人は苦手なんだから」

「はい」

本当にわかっているのだろうか、このバカちゃんは……と、思ったりはしたものの、とりあえずそれ以上は言わないでおいた。

洗い物を終えた後なので、とりあえずのんびりするためにコーヒーを飲んでる。

「にしても、始まったねー。大学生」

「何、改まって」

「いや、何となく。あるじゃん、そういうの思う時」

「……まあ」

何せ、それもシェアハウスと同時に、だ。家賃も食費も三人で払っていて、なんだか本当に結婚とほぼ感覚は変わらない。

だが、まあそれが正しいのかどうかはわからないが。

「……ねえ」

「何？」

「サークルとかどうする？」

「無理でしょ。アイドルあるし」

「リカが入りたいって言ったら？」

「その時は別。入る」

「ふふ、爆笑」

「あんただってそうでしょ」

「まあね」

話しながら、学校のパンフレットを開く。

「入るなら、どのサークルが楽しいかな？」

「どこでも良いでしょ。何にするにしても、リカと透がいるなら大差ないし」

「えー、でも噂に聞いた話だと、ヤリサーっていうのもあるらしいよ」

「何それ？」

「だから、エッチなことをやるサークル」

「そんなのを大学が黙認してるわけ？」

「いやいや、そういうんじゃない。例えば、テニサーなんだけど、実態はエッチなこと

……みたくない？」

「実在するわけ？ そんなの」

「知らん」

とはいえ、円香もそんなサークルはゴメンだ。というか……本当にサークルに興味なんてないし、なるべくなら入りたくない。

「ていうか多分、来年は小糸と雛菜も大学来るし、サークルはやめた方が良くと思う」

「まあ、そっかー。それに、困るしね。リカにモテられると」

「そういうこと」

まあそれで良いや、と思いながら話している時だ。透のスマホが震える。スマホのトップには「プロデューサー」の文字。

「あ、プロデューサーからだ」

「なんなの、休みの日まで」

「分かん」

とりあえず、応答することにした。

「もしもし?」

『お疲れ様、透。急に悪いな』

「全然平気。余裕。余裕の余裕ちゃん」

『ははは、それ普通に余裕じゃないか』

少し楽しそうにしている透の姿を、円香は見逃さなかった。何となく……透はかなりプロデューサーに懐いている部類の人間に見えていた。

『近くに円香もいるか?』

「いるよ」

『……背負い投げの彼は?』

「今、お風呂」

『じゃあ、スピーカーにしてくれる？』

言われて、透はスピーカーにした。

「何？」

「樋口にも話だって」

「……こんばんは」

『ああ、円香。ごめんな、オフの日に』

「まったくです。姉弟水入らずでまったりしてる時に……」

『姉弟になっちゃってるんだな、普通に……まあ良いや。大学はどうだ？』

「前置き代わりの世間話は結構です。リカに上がって来られると厄介なので、本題に

入ってください」

『そ、そっか……』

実を言うと、プロデューサーも明里が苦手だ。というか、背負い投げの彼、で覚えて
いる時点で割と全てを察せるレベルである。

『明日も休みなのに申し訳ないんだが……283プロでやってるT w i t t e rの「ア
イドルの一日」のキャンペーン。本当はアルストロメリアが明日の予定だったんだが、
急な仕事でノクチルに変わってもらえると嬉しいんだが……T w i t t e r投稿用の
スマホを取りに来てもらっても良いか？』

「……本当にスマホを取りに行くだけで良いんでしょうね？ 晩御飯、餃子にしてしまっているのですが」

『大丈夫だよ。……ただ、なるべくならノクチルみんなで動いてくれていると嬉しい』

「浅倉、良い？」

「え？ 何が？」

「大丈夫です」

『わ、分かった。じゃあ、よろしくな』

それだけ話して電話を切ろうとした時だった。

「それより、プロデューサー」

『え、それより？ 一応、仕事の話でもあるんだけど……』

「プロデューサーは大学の時、どんなサークル入ってた？ ヤリサー？」

なんか普通に雑談を始めてしまった。あと話題があんまりだ。

『え？ いやそんなの实在するわけないだろ。俺は普通のサークルだよ』

「そういうのでき、恋愛とかに発展したことあるの？」

『あ、あー……そういう人もいたな。俺は別に無かったけど』

「……ふーん」

『あの、そろそろ切らないと背負い投げの彼が戻ってきたりとか……』

「俺が戻ってきちゃ悪い話してたんですか？」

直後、電話の向こうのプロデューサーだけでなく、円香も肩を震わせる。洗面所から頭を拭きながら出てきた明里は、少し機嫌が悪そうだ。

「なんの話してたの？」

「ヤリサーの話」

『おおい、透お前ホントそういうところ……』

「浅倉、違うでしょ……リカを煽るのやめて」

「……ヤリサーってなに？ 槍で突くサークル？」

「え？ いや違……」

『大体合ってる。だから、透は余計なこと言うなマジで』

「プロデューサー、うちの子に変なこと教えないでくれる？」

『……過保護な姉が多い……もういい。明日、よろしくな』

「出かけた時の領収書、取つといたほうが良いですか？」

『頼む。……あんま遠出するなよ？』

「はい」

それだけ話して電話を切った。すると、明里が二人に聞く。

「……明日って？」

「T w i t t e rに一日の行動をアップするの。ノクチルで」

「そんな話してたっけ？」

「ふーん……俺も行く」

「どうぞ。でも、あんたのことは投稿しないから」

「やった。じゃあ明日、5人でお出掛けね」

三人とも全く違う表情を浮かべながら、その日はベッドに入った。

ラッキースケベはすけべをラッキーと思える人には訪れない。

さて、翌日。事務所からスマホを受け取った円香と透は今日一日、雛菜や小糸と出掛けることになった。

Twitterのキャンペーンで、それに関するツイートをするためだ。……なのに、何故か一人、アホな弟もついてくることになって。

「はい。リカ」

「? 何?」

「今日に変装して」

「……え〜」

円香は帽子を明里に手渡した。

「ダメ。透と雛菜は顔隠さないし、二人が顔隠さないと私と小糸が顔隠しても意味ないし、せめてあんなだけは隠して」

「……」

渡されたハンチング帽子を、手に取らずに困ったように明里は狼狽えている。明里が

帽子を嫌いなのは、円香も分かっていた。なんか、頭がゴワゴワするから苦手らしい。だが、サングラスも嫌いらしいので、どっちが良いか考えた結果、ハンチング帽子の明里を見てみたいと思ひ、それにした。

仕方ないので、その帽子を強引に明里の頭に被せた。

「うええ〜……せつかく、髪型整えてきたのに……」

「私も被つてはいるんだから、我慢して」

「とおるんはー?」

「え、面倒い」

もう透は諦められていた。

今日は雛菜と小糸も一緒なので、ピアスやイヤリングは外して来ている。三人だけ揃いのものを付けるのは、何となく気が引けた。

それに合わせて、なるべく地味な服を選んできたので、ここまですれば透がいつも通りでもバレないはず……そう思っている時だ。

「明里せんぱい、久しぶり〜。透先輩は昨日ぶり〜」

新たな阿呆の大きな声で、円香は片手を顔に覆つてため息をついた。

明里と透は何一つ気にした様子なく、片手を振りながら応対した。

「おーつす、雛菜ー。小糸も、おはよう」

「おはよ、二人とも」

「お、おはようございます……!」

四人で仲良くハイタッチをしていた。あの閉鎖的な雑菜と臆病な小糸の心を開かせた明里のコミュニケーション能力もそうだが、やはり人柄の良さだろう。283プロの中でも、芹沢あさひ、有栖川夏葉、白瀬咲耶など、割と変な人と仲が良いので、もしかしたら変わり者と仲良くするスキルがあるのかもしれない。

一応、あんまり大きな声を出さないように注意した方が……いや、でも雑菜の場合は自分が言っても逆効果感ある。

どうしようかな……なんて思っている間に、透が聞いてきた。

「で、円香。どうすんの? 今日」

「適当に散策すれば良いでしょ。とりあえず、ツイートしない」と

自分達が映っている写真は撮れない。だから、基本的にツイートは文面に徹する。

『樋口円香です。今日はノクチルが担当する事となりました。』

よろしくお願いします。

#ノクチル #樋口円香』

とりあえずそれだけツイートしておく。透に持たせておくとツイートを忘れそうなので、自分か小糸がスマホを預かっておくしかない。

「じゃあさ、私あれが良い」

「何？」

「コナン」

「あゝ、雛菜もそれ見たい♡」

「どうやら映画に行きたいようだ。雛菜もノリノリだ。まあそれは別に自分も何も問題は無い。というか、緋色の弾丸は円香も見たいと思っていた。

「え、映画にするの……!?」 でも、したらツイートは……」

小糸の懸念通り、問題はそこだ。まあ昨日の放クラのツイートを見るに、何も一時間おきとか、そう言う風に時間的間隔が決まっているわけではなさそうだが……。

「大丈夫でしょ、多分」

結論を出す前に透が返した。

「やは♡ コナンとか久しぶり♡」

「俺もだわ……いや、去年行ったわ」

「ふふ、面白かったよね。京極さん」

「ほとんどビルドナックルだったよね」

当時の映画を見た時のことを思い出す年長者二人。円香はその様子を横目で見つつ、とりあえずスマホで席の確認をする。一応、空いてそうではある。

「じゃ、映画で」

「あ、円香せんぱうい、雛菜がツイートしたーい」

「あつそ。じゃ、よろしく。……分かってると思うけど、リカの事はツイートしないで」

「はーい」

そんなわけで、円香は雛菜にスマホを預けた。

さて、映画館へ向かった。電車に乗る必要があるわけで、まずは駅に入り、改札を通った。

先頭を歩くのは、明里と小糸。久しぶりに会うのだから、一緒に並んで歩くくらいは、円香も透も気にしなかった。

「あ、明里先輩……透ちゃんは、迷惑かけていませんか……？」

「ん？ 全然、平気だよ。滅多に家事はしないし、頼んだゴミ捨ては忘れられるし、洗濯したまま干さずに部屋出たりされてるけど大丈夫」

「ぴえっ……な、なんか……すみません」

「小糸の所為じゃないよ。……どちらかと言うと、ここまで甘やかしたマドちゃんが悪い」

「あ、あはは……」

「は？ それはあんたまでしょ」

聞き捨てならないセリフが聞こえたので、そこは口を挟んだ。残念ながら、中三から知り合っている以上、もう自分だけの責任ではない。

「じ、じゃあ、今はやっぱり円香ちゃんが家事を……？」

「うん。あと俺も。二人だから、全然楽ちん」

「そ、そうなんだ……」

「小糸も、受験平気？ 来年にはうちの大学来るんでしょ？」

「だ、大丈夫です……！ ちゃんと勉強しているので、どんな科目も余裕です……！」

そう言いつつも、小糸には何処か疲れが見えていた。今日遊ぶため、昨日は遅くまで勉強していたのかもしれない。

「じゃあ問題」

「ぴえっ？ も、問題？」

「マレーガビアルなどのワニの口は細長くなっていますか、何故でしょうか？」

「え、えーつと……獲物が魚だから、水中でも獲物を捕らえられるように」

「正解」

「え、小糸ちゃん今のわかったの？」

「良くできましたー」

「え、えへへ……」

わしゃわしゃと、小系の頭を撫でてあげる明里。その様子を見て、円香の表情は、無表情なのに激変した。

相変わらず、あの男は女性の気持ちについて何も分かっていない。もう、そういう星の下に生まれているのだろう。そう言う行動を軽々しくできるのは、もはやタラシと言う他ない。

円香の好きな人が、円香が一番可愛がっている後輩に問題を出し、答えられたら褒めて頭を撫でてあげる……そんなの……。

——メチャクチャ尊いに決まっている。

思わずキュンッとして、顔に出ないよう全力で堪えている。

まあ、嫉妬しないわけではない。円香や透でさえ、明里に頭を撫でられることは少ないのだ。

だが、もし……もし小系が自分達の娘であったなら、と思えば、尊さが醜い嫉妬心を打ち払うわけで。

「円香、良いの？」

「娘と父親にしか見えないからセーフ」

「ふふ、ガバいわ。その判定」

とはいえ、透も邪魔しようとする様子は見せない。多分、透の場合は「家帰ったら存

分に甘えさせてもらおう」とか考えているのだろう。自分と同じだ。

しかし、そんな円香の平穏も続かない。何故なら、歳下は一人じゃないから。

「明里せんぱーい、雛菜にも問題出して〜?」

「え? じゃあ……ニプラムス類の特徴を……」

「知らなくい。答えたから撫でて〜♡」

「答えられてないでしょ……別に良いけど」

「やは〜♡♡ 撫でるの上手〜♡。じゃあ、雛菜からもお礼〜♡」

「はうっ……あ、あの……胸を押し付けるのは……」

一気に表情が激変した。無表情ではなく、普通にキレ顔である。

「明里、あんた何デレデレしてんの?」

「そんなにおっぱいが好きならマウスパッドでもしやぶってたら?」

「な、なんだよ急に二人して!?!」

しかも、明里にキレた。腹立ったのは、雛菜のハグではない。もう今に始まった事ではないから。

それよりも、自分達より大きな胸に反応した事がムカついた。

「ひ、雛菜ちゃん……! 怒られちゃうよ……!」

「大丈夫だよ。怒られるのは、明里先輩だから〜」

「そ、それ大丈夫なのかな……」

小糸が雛菜をたしなめている間に、円香と透はツカツカと明里に詰め寄り、二人がかりで壁ドンした。

「そんなに大きい胸が好き？ あるよ、私もそれなりに」

「それとも爆乳じゃないと気が済まないわけ？」

「いや、そんなつもりじゃなくて……」

「は？ 普通に反応してたじゃん。すけべ」

「それとも、私達が改造手術でもして胸を整形すれば良いわけ？」

「わ、悪かったから！ ちよつとビックリしただけなので怒らないで下さい！」

なんとか謝り倒させると、とりあえず解放する。周りに人が少なかったのは幸いだった。

「じゃ、行くよ。映画」

「次はないから」

「怖かった……」

「大丈夫？ 慰めてあげよつか？」

「ひ、雛菜ちゃん……！」

そんな呑気な話をしながら、電車に乗る為、階段を上った。

×××
さて、映画館に到着した。チケットを5枚、購入する。

雛菜がツイートを終えると、透が四人に言った。

「どうする？ 席順」

「俺は一番、ハジで良いよ。四人並んで見た方がツイートしやすいでしょ？」

「雛菜、透先輩の隣」

「わ、私はどこでも良いよ……！」

「なら、小糸は真ん中に座ったら？ 隣、私座るから」

などと円香は上手いこと一番、得する席をゲットした。

続いて、五人で売店のカウンターに並ぶ。映画と言えば、ポップコーンとコーラだからだ。

のんびりと並んでいると、明里がパネル板を見上げて呟く。

「わお……映画館に生ビールあるんだ。飲んでみようかな」

「びえっ……」

「リカ、やめて」

「映画館でビールって……嫌じゃない？ なんか、トイレ近くなりそうで」

「雛菜、コーラの方が良い」

「冗談だから。だからツイートしないでね」

「あ、あはは……そういえば、雛菜ちゃん。ツイートしたの？」

「してた。もうめっちゃ来てたよ。リップ」

「……ホントだ。映画行くついでだけで、こんなにたくさんの人が……」

「雛菜もビール飲む？」

「いや俺飲まないよ？」

「だ、ダメだよ……！」

「ダメ」

「ウケる」

なんて暢気な話をしながら、全員でポップコーンと飲み物を購入する。ふと、円香の視界に入ったのは、明里の飲み物。珍しくブラックコーヒーを購入していた。

「……リカ。ブラック？」

「え？ あー、うん。ちよつと……」

「もしかして、眠いの？」

「いや、そんな事ないよ。大丈夫、一時間半くらい……」

「眠いんじゃない」

「……」

「告白が早い。マツハである。他三人が前を歩いている間に、円香は聞かれないように明里に言った。」

「もし眠かったら、予告の間は寝てて。始まったら起こしてあげるから」

「……良いの？」

「映画の感想語る時、混ぜれなかったら寂しいでしょ？」

「……ありがと」

そんな話をしながら、スクリーン前の座席に座った。

割と良い真ん中の席に座れて、腰を下ろす。まだ予告も始まっていない段階。そこで、既にうとうととしていた明里は、円香の方に体重を預けた。

「ごめん……ちよつと、肩借りるね……」

「ん」

そのまま自分の肩に頭を置いて目を閉じる明里。少し、円香の頬は赤くなる。もう慣れた事なのに、距離が近くなるというだけで少し嬉しい。

「なんか面白そうなのあるかな。映画」

「今年からマーベルとかまたたくさんやるんでしょ？」

「ふふ、超楽しみ。リカもマーベル好きだから、めっちゃ見に行ける」

自分の隣の隣では、映画の話で盛り上がった。そもそも透と明里が知り合うきつ

かけとなったのが映画だったので、今でも二人でちよいちよい見に行ったりしているらしい。

円香も誘われるが、興味ない奴はパスしていた。二人ともI M O Xとかで見に行くから高いのだ。

「小糸ちゃんは、映画とか見ないの？」

「こ、今年は厳しいかな……受験だし……」

「小糸の成績なら、推薦でいけるでしょ」

「い、一応それは狙ってるんだけどね……!」

「雛菜も楽勝で、同じ大学行けるよ〜?」

「あなたの話は聞いてないし分かってるから」

「私達は苦労したよね。めっちゃ」

「あなたの所為でね。受験以外も、長期休みの度に宿題後半までやらないで……」

「と、透ちゃん……」

「大丈夫だから。大学で立場逆転するから」

「ならまずは家事から覚えて」

「透先輩の料理、雛菜食べたい〜」

「じゃあ今晚、来る?」

「ダメ。明日は朝早いでしょ」

なんて話している間に、映画館内が暗くなる。マジの予告パート2のようだ。

それに伴い、四人のおしやべりも止まる。ボンヤリと円香はスクリーンを眺めた。今年もたくさん映画をやるようで、寝ている明里の代わりにどの映画をやるか、覚えておいてあげることにした。

まあ、正直なんでも見る男の子なのであんまり意味ないかもしれないが、その中に円香にも興味湧くようなものがあれば、一緒に見に行けるかもしれない。

そんなわけで、なんとなく眺めている時だった。コテン、と肩に何かのしかかる感覚。横を見ると、小糸が自分の肩に頭を置いていた。

「すぴー……」

「え、こ、小糸……?」

寝てる? いや、寝てる。昨日、夜遅くまで勉強していたようなので、仕方ないといえは仕方ない。

そこで、気づいてしまった。今、自分の両肩には、円香が知る限り人類で最も可愛い二人が、頭を乗せて寝息を立てている。

そのことを自覚し、胸の鼓動が激しくなりつつあった。ヤバい、天国はここか、とこれから死神が活躍する映画が始まるうとしているにも関わらず、思ってしまった。

そんな中、自分の左肩から声がする。

「ん……マド、ちゃん……」

え、私の夢？ と、いうか、映画館で寝言？ と、少しだけ狼狽える。

「とおるんに……手押し相撲、勝った……」

ただだけ日常に沿った夢を見ているのか。と言うか、それを聞いて自分はこうしたら良いのか？

けど、まあそういう全然、年相応じゃないところも……なんて思っていると、今度は反対側の肩から寝言が漏れる。

「まどか、ちゃん……私、大きくなりたいたいよ……」

それはやめて欲しい。小糸はいつまでも小さく可愛いままでいてほしい。

「それで……明里、先輩に……」

え、なんでリカが出てくるの？ とうろたえる。もしかして、小糸まで明里を……。

「……人の、撫で方を教わって……円香ちゃんを、撫でてあげたい……」

どんな夢だ、と二度目の感想が漏れる。そんな未来は一生訪れないから安心して欲しい。

なんにしても、ちよつと起こしづらくなってしまった。このままじゃ二人とも映画を観ることはできない……が、もう少しこのまま二人に身を預けられていたい……そんな

風に思ってしまった。

× 雛菜と透が、予告には目もくれずにバッチリ観察してきていることにも気付かず。

× 映画が終わった。

「起こしてよ！」

「……ごめんって」

ばっちりエンドクレジット直前まで寝過ごしていた二人から、円香は怒られてしまっていた。

起こすって言ったのに起こしてくれなかった明里は勿論、自らの不注意とはいえ、つい夢気分で寝こけてしまっていた小糸までもが、不満げに円香に言っていた。

「まるまる良い環境で寝息立てちゃってたよ！」

「ま、まったくだよ！ お金払って二時間寝てたよ！」

「だから、ごめんって……」

「ふふ、めっちゃ怒られてるじゃん」

「あは〜〜♡ 円香先輩、超幸せそうだった〜」

「二人とも黙って」

今回ばかりは反省している様子の円香を眺めながら、透は少しだけ羨ましかった。ど

うせなら、自分が円香のところに入りたかったからだ。

その自分に、雛菜からスマホを差し出された。

「はい、透先輩〜」

「何これ？」

「ツイート〜」

「あ、あー。そっか。映画終わったし、するか」

そう呟くと、とりあえず文面を入力した。

『浅倉です。』

映画見ながら、円香が小糸ちゃんを横で寝かせてた。

#ノクチル #浅倉透』

わざとである。その呟きを自分のスマホから見た円香は、すぐに透の肩に手を置いた。

「ねえ、どういうつもり……!」

「事実じゃん」

「別に寝かせてない」

「起こさなかった時点で同じでしょ」

「マドちゃん、まだ話は終わってないから!」

「そ、そうだよ！ 逃げないで！」

「もう……謝ったでしょ。なんなら、お金出すからもう一度見てきたら？」

「え、いや別にそこまでしなくても……」

「う、うん……行くなら、円香ちゃんも一緒じゃないと……」

流石、良い子二人である。すぐにヒヨった。だが、別にヒヨらせるのが目的ではなかった円香が、ため息をつきながら言う。

「じゃあ、今度3人で行こっか。私もほとんど見れてなかったし」

「え、なんで？」

「幸福で」

「行こう。次の場所。お腹空いた」

なんか勝手に三人でのデートの予定を決められたので、透は少しイラつとしながら間に入った。

「どこ行く？」

「任せる。俺、ノクチルじゃないし」

「わ、私も特に……」

「じゃあ、雛菜ラーメン食べたらい」

「じゃ、それで」

「小系ちゃん、次のツイートよろしく」

「う、うん……!」

アイドルがお昼のツイートにラーメンを写す、ということに誰も異議を唱える事なく、ラーメン屋に向かった。

食事を終えた五人は、ボウリングをしに来た。映画館のポップコーンとコーラに追加し、お昼のラーメン……アイドル的にも女の子的にも運動しないわけにはいかない。

さて、五人でボウリング……なのだが、基本的にノクチルの四人が主役でツイートしなければならぬ上に、1レーンで遊べる人数は四人までのため、明里一人とノクチル四人に分かれることになった。

「なんか……ごめんね。リカ」

「いや全然。隣だし。なんなら四人で楽しんで」

「じゃあ、一番負けた人は罰ゲームね?」

「ぴえっ!?」

「ダメ。小系が負けるから」

「ま、円香ちゃん!?」

「逆、逆。1番勝った人が、リカに飲み物奢ってもらえるとかは?」

「それならアリかも」

「え、俺の意思は？ 別に良いけど」

「じゃ、スタート……の前に、ツイートツイート」

今の係である透がスマホをいじっている間に、まずは雑菜から投げ始める。

その様子を、透の後ろで明里が眺めていた。

「ポウリングかあ、久しぶりだよね」

「うん。今日こそ勝つから」

「俺は勝つても得しないんだけどね……」

一応、順番に投げるつもりのように、明里はまだ投げる様子を見せない。とはいえ、あまりモチベーションは上がっていない様子だ。

それをぼんやり眺めつつ、透が明里に笑みを浮かべながらお告げのように言った。

「じゃ、リカが一番だったら、私から景品あげようか？」

「お、何？ ……て言っても、こつちが飲み物出すんだから、そつちも飲み物だよね」

「一緒にお風呂、入ってあげる」

「……………ひよっ？」

言つてやると、ポカンとした表情になる。その間の抜けた顔が少しだけ可愛くて愉快だった透は、クスツと微笑むと立ち上がった。

「私の番?」

「そう」

「が、頑張つて、透ちゃん……!」

心底、楽しそうな透は、エールを受け取るとボールを一つ手に取った。

高二や高三の時、実は何度かボウリングにはいつている。その時、明里は相変わらずイカれた演算能力を駆使して得点を重ねていった。

つまり、やる気さえ出させれば、明里の勝ちほぼ確定的である。だが、別に一緒にお風呂入るくらい良い。もう既に一回入ってるし。

少しでもソワソワしながらボールを指に嵌めて、一気に転がしに掛かった。

カーブを利かせ、鮮やかな曲線を描いてピンに向かっていく。そして、パツカアアアンつと景気の良い音。握り拳を作った透は、真上に突き上げて歩きながら戻った。

「イエーイ、初手ストライク」

「やはくくくさすがくくく♡」

「と、透ちゃん。すごーい……!」

「ふふ、でも爪割ったわ」

そう言う通り、握り拳から一滴の赤い液体が流れ落ちる。

「はあ……バカ」

「あ……と、とおるん。爪切りあるから。切っちゃいな」

「うん。超痛いわ……あ、じゃあり力が切って」

「え……お、俺？」

「そう、俺」

何となく、色々と言いたい気分だった。なんだか、少し円香とついでに小糸と雛菜も羨ましくて。いや、正直、小糸と雛菜が甘えるだけなら良い。おっぱい以外は「まあ久しぶりだしね」というスタンスを保てる程度には大人になった。

では何がダメなのか？ 同じ立場である円香が甘えているところである。ならば、話は別だ。自分も言えたい。

「良いけど……じゃあ、手貸して」

「はい」

透の指を取り「え、あなた看護の学生でしたっけ？」と聞きたくなるほど適切かつ迅速に処置してくれる。

……なんか、思ってたのと違う。指から血が出ると言えば、あのイベントだろう。

「はい、終わり」

「舐めないの？」

「は？」

「だから、指から血が出てるのに舐めないの？」

「え、俺って吸血鬼だったの？」

「いや、バイ菌が入らないように……」

「いやもう消毒液使ったし。そのあと舐めたら、むしろ俺のお腹がビチャビチャになる」

「……まあ良いけど」

……なんか違う。なんか違う。なんでこんなにあつさりと……。

「……あ、そうだ」

すると、明里もなんか急に声を漏らした。何を思ったのか知らないが、下らないことを思いついているのか、それとも別のことを考えているのか……。

そんなふうにいるときだった。四人の投球が終わり、次は隣のレーンの明里の番だ。

「じゃ、リカ。頑張って」

「うっ……頑張らないとダメですか……」

「一緒に入りたくないなら、頑張ることなんてないけど？」

「……」

まあそれならそれで良い。どうせ明里の事だし、チキただけだろうから。

そんな風に思っていると、明里はボールを手にした。両腕を回し、腕をクロスさせて

肘と筋を伸ばし、首を左右に倒してゴキゴキと鳴らす。彼らしくない仕草に、透も円香も小首を傾げた

そして、ボールを持った直後、見据えるは10本のピン。その直後、一気に明里はボールを転がした。肘で挟むように抱えたボールを、腕ごと捻るようにレーンの左端から投擲。ボールは、ミニ四駆のコースのようにえげつない角度を描いて曲がり、ストライクを取った。

「え」

「わっ……上手……！」

「俺の技術じゃないよ。どれだけの摩擦と回転をかければどの程度の力が出るか、ボーリングの球の重さを基準に算出しただけ」

「やはくキモくい♡」

「リカ、本気？」

「うん。特典がついたから」

言いながら明里は透の後ろの席に座る。そして、優しく自分の割れた爪を持つ手を伸ばした。

「大丈夫？ 痛くない？」

「大丈夫、余裕」

「無理しないでね」

「しないから」

こう言う仕草も彼らしいといえれば彼らしい……のだが、何となく嫌な予感がする。背筋がザワザワするというか、何をされるか分からないというか……その予感は当たった。少し赤くなつた頬のまま、耳打ちするように言われた。

「……そつちが先に振つてきた勝負だからね」

「ふふつ、上等」

……しかし、そこまで一大決心されるとは。おかげで、照れが少しだけ移された気がした。

さて、ゲームセット。透は……いや、透だけでなく円香も雛菜も小糸も啞然としている。

何故なら、明里のスコア表には、角がある蝶々が十匹、舞っていたからだ。

「こんなことあるの……?」

「本気過ぎない……?」

「物理お化け……」

なんて感想を聞きながら、透は普通に照れた。まさか、そこまで一緒にお風呂に入り

たがられるとは……流石にマジ過ぎて恥ずかしくなる。

さて、そんなことは知る由もない雛菜が、第二ゲームを提案する。

「よし、じゃあ次〜」

「あ、ごめん。俺、電話」

「は〜い」

一時、レーンの前から外れて、スマホを耳にあてがう明里。

さつきはドギマギしたが、まあ普通に考えれば明里に限ってそれはない。あの子が、一緒にお風呂に入りたがるわけがない。こちらから言い出したこと……なんて言われはしたが、どうせ明里の事だ。何か思いついていたし、どうせ「ドクターフィッシュがいるクアハウス行きたい!」とかそんなだろう。

だから、期待しないようにしていると、明里が戻ってきた。

「ごめん、俺また急な仕事入った。帰るね」

またか、と透は少し事務所のブラックさ加減に引いてしまったり。

「ええ〜、帰っちゃうの〜?」

「そ、そつか……残念だな……」

「じゃ、最後に写真撮る?」

「撮ろっか」

それだけ話して、5人で自撮りをするように集まり、スマホを構える。そして、パシャリと写真を撮った。

「よし、おっけー」

「じゃあ、ごめんね」

ちようど、明里が一人だったので、会計は自分でこなせる。正直、モデルの仕事がつまらないわけでも無い明里は、もう普通に文句も不満も出さずに笑みを浮かべていた。

それに、今日はノクチルが四人で集まらないといけない日。ちようど良いと言えばちようど良い、とも思っているのかもしれない。

……いや、にしてもあつさりと承諾した事に意外に思ってしまったり。

去り際、明里は荷物をまとめ終えてから、ふと近くにいた透の肩に手を置いて、耳元で囁いた。

「……夜、話あるから。起きててね」

「っ……う、うん……」

やはり、どっちだ……？ と、透は内心ドギマギしながら思った。

×× さて、夜。時刻は21時を回った。透と円香はテレビを見ながら、ぼんやりと天井を

見上げる。

「どしたの？ 透」

「んー……ちよつと、今日これからリカとお風呂入るから」

「……は？」

「勿論、水着着るけど」

「……ボウリング、やたらとリカが本気だったのってそれ？」

「そう」

それが楽しみでソワソワしている。

「円香も一緒に入る？」

「わけないでしょ。お二人でどうぞ」

「ちえー」

「ていうか、あの男と一緒にお風呂で本気になると思う？」

「でも、言われたから。リカが撮影に行く時」

「何を？」

「夜、話があるから、って」

「……ふーん」

そんな時だった。ガチャつ、と玄関が開く音がする。すぐに透は飛ぶように廊下を走っていった。

「ただいまー!!」

「おかえりー。ね、ご飯にする? お風呂にする? ……それとも……あれ、私もお風呂じゃんそれ」

「あ、お風呂? 良いねー。はいこれ」

「? 何?」

言いながら見せられたのはスマホの画面。そこに写っているのは、ドクターフィッシュがいるアクアハウスの情報だった。

「これ、三人で行こう!」

「……なんでこれのために夜まで待たせたの?」

「え、この情報、事務所の人に聞いてきたからだよ」

「……」

ブチツ、と、透の中で何かがキレる音が聞こえた気がした。

「その話は、後にしようか」

「あ、うん。ごめんね、帰ってきてきて早々」

「それより、早くお風呂入って」

「え、臭い?」

「違うけど、良いから」

「あ、うん」

明里をお風呂に叩き込んだ。さて、口調の割に実はブチギレている透は、それはもう秒で自室に引っ込み、水着を引っ張り出し、頃合いを見計らって突撃した。

「ふい〜……」

急な仕事とはいえ、時間はあんまり長くなかったので、明里はあんまり疲れていなかった。

しかし、楽しかった。なんだかんだ、Twitterを覗いてみてもノクチルのキャンペーンは大成功。色んなファンの人からコメントをもらっていた。

その上、自分も一緒になって楽しめたんだから、中々良い休日だったと思う。……まあ、自分は今日仕事になった分、明日も休みだが。

唯一、惜しかったのは、映画だろうか？ 中身を見れなかったのは残念だ。

ま、何にしても、次のドクターフィッシュを楽しむしかない……なんて思っている時だ。普通にお風呂のドアノブが下がったのが視界に入り「はえ？」と声を漏らす。

「お邪魔します」

「はい、ー」

吹き出してしまった。何故なら、水着姿の透が入ってきたからだ。

「っ、な、何してっ……!!」

「一緒にお風呂入る約束」

「いやクアハウス……!!」

「私、そこに行くって言った？」

「っ……」

「じゃ、背中流してー」

「俺が勝ったのに俺が流すの……？」

「うん」

「……」

仕方なさそうに、明里はお風呂から上がった。しかし、忘れていた。透が水着を着ているからって、自分が水着を履いているとは限らない事を。

湯船から立ち上がるなり、顔を真っ赤にしたのは透。その視線の先は、自身の脚の間。

「えっ」

「？ 何……あ」

「っ……あー、私……あんま男の、それ見たことないけど……そんなん、なんだ……」

「っ……き、きやああああツツ!!？」

「女子か」

そう言う透も、頭の中では男子高校生のように「良いものみた」と言わんばかりに顔を真っ赤にしていた。

訪れる試練は大体、間の悪さ。

ある日、今日もお仕事で、今は帰り道。透と円香は伸びをしながら帰宅していた。

「ゴールデンウィークも真つ最中だというのに、毎日のように仕事があるのは嘆くべきか喜ぶべきか。いや、思ったより充実感がある以上、喜んで良いところなのだろう。」

「……でも、流石に疲れた……」

「ふふ、円香めっちゃ歩くの遅いじゃん」

「疲れたものは仕方ないでしょ……あんたがもう少し家事をしてくれればもう少し疲れないんだけど」

「最近はしてるでしょ。ここ最近は洗濯物私がいまってるから」

「洗濯物途中で落として外に出て拾いに行つて戻つて洗濯物をしまい始めてようやくリビングに戻つた時には、私とリカは家事二つは終わらせてるから」

「ふふ、めっちゃ厳しいじゃん」

「普通だから」

なんて話していると、ふと透が声を漏らす。

「……はーあ、プロデューサーは優しいのになー」

「……」

そのセリフを聞いて、ふと円香は思ったこと……というより、前から気になっていたことを聞いてしまった。

「……透、前から気になってたんだけど」

「ん？」

「プロデューサーと前から知り合ってたの？」

聞いた直後、ほんの一瞬だけ表情が固まった。が、すぐにいつもの笑顔っぽい無表情に変わる。

「あー……うん。まあ」

「どういう関係？」

「一言で言うと、幼馴染というか……いや、馴染んではないかな。一回しか会った事ないし」

「どういうこと？」

「子供の頃、一回だけ会ったことあって遊んでもらったっただけ」

そんな事あったんだ、と円香は少し目を丸くする。そんな話、自分だけで無く雛菜と小糸も聞いたことないだろう。

「それで、ほら……私、人の顔見たら大体忘れないから。でも、向こうはいまだに思い出

ささいっぽいから……まあ、それだけ」

つまり、恋愛感情は無いという事だろうか？ まあ、正直、円香は気にしていない。だが、一人だけ気にしそうな男がいるのを忘れてはいけない。

「その話、リカにはしたの？」

「してないけど？」

「なんで？」

「いや、言ったらプロデューサー死んじゃうんじゃないかなって」

透の言い分も、正直わかる。明里はああ見えて嫉妬心も独占欲も強い。殺す、とまでは行かなくとも、バックドロップとか柔道関係ない技を叩き付けそうだ。

「でも、言わないまま変な勘違いされた時の方がまずいでしょ。それに、リカはもうプロデューサーを殺したりしないから」

「あー……うん。じゃあ帰ったら言うわ」

「そうして」

とりあえず、これで一件落着だろう。拗ねたら面倒臭い明里に知られる前になんとか誤魔化すような事をしなくて済んだ……と、ホッと胸を撫で下ろす。

「……一応、聞きたいんだけど、リカよりプロデューサーのことが好き、なんてことはない？」

「は？ いや、プロデューサーのことも好きだけど、異性としてのそれじゃないから。ていうか、9個とか10個上の男の人はちよつと」

人間的には嫌いではないが、少し歳が離れ過ぎていた。それは円香も同じである。……まあ、それは同い年くらいだったらプロデューサーを選んでいた、という意味ではないが。

まあ、そんな事はともかく、家に到着した。玄関を開けて中に入ると、中は暗かった。明里はまた急な仕事なのだろうか？

リビングの電気を点けると、書き置きが残っていた。

『明日、朝早いので先に寝ます。作り置きの晩飯、チンして食べて下さい。』

p s. この書き置きやつぱ楽しいわ』

……だ、そうだ。どうやら、部屋でもう寝息を立ててしまっているらしい。

「……もう寝ちやつたかー」

「そういえば、明日は朝から仕事って言ってたっけ……」

円香も忘れていた。そういえばそんなことを言っていた気がする。まあ、何にしても透が話すべき事は延期になってしまったわけだ。

「……しゃーない。明日にしよう」

「作り置き、何作ってくれたの？」

「さあ……あ、青椒肉絲じゃん。お味噌汁もある。美味しそう」

「……この時間からは太るでしょ……」

「大丈夫でしょ。たけのことピーマンのが多いし」

「あなたは女子の中でも異常な体型してるから平気かもだけど、普通の人は普通に太るから」

「……そう?」

「そう」

「というか、透は特に高二からさらにスタイルにも磨きが掛かり、胸も大きくなっていく。」

結局、明里は胸が大きいのと小さいの、どちらが好きなのだろうか？

「じゃ、チンして来るね」

「ん」

「珍しく透が率先してご飯の準備を始める。さっきの会話が響いているのかもしれない。」

「まあ、それならそれで少しは楽出来るかも……と、思いつつも、身体は勝手にご飯をよくそいに行っていたが。」

手早く準備を終えると、二人でのんびりと食事を始めた。

× × ×
翌日、目を覚ました明里は、ひとり朝の準備をする。現在、午前6時。髪を梳かし、整髪料をつけ、顔を洗い、私服に着替えた。

元々、割とオシャレにも興味があつた方ではあつたが、モデルになつてから数ヶ月経つてから、さらに円香から厳しく指導を受けてきて、とりあえず誰にも文句を言われない程度にオシャレにはなつた。

さて、あとは朝食……と、思いながら、リビングに入ると、円香が食卓でコーヒーを飲みながら本を読んで座っているのが見えた。

「あれ、マドちゃん？」

「あ、起きた。朝ごはんできてるから」

「マドちゃん今日仕事だっけ？」

「オフだけど？」

「じゃあ、なんで」

「たまには良いでしょ」

もしかして……わざわざ自分のために早起きしてくれたのだろうか？ やはり、円香のこういう姉気質な点が本当に好きだ。面倒見が良いどころか、普通に世話焼きだ。

「……はい。焼きサバ」

「わっ……ありがとう」

他にサラダ、米、お味噌汁と、旅館の朝食のようなセット。美味しそうで困る。

「マドちゃんはもう食べたの？」

「食べた。だから気にしないで」

「ありがとう」

わざわざありがたい。そのまま鯖に醤油をかけて身を箸で割いてつまみ、口に運ぶ。

「美味し」

「ん、良かった」

無表情だけど、満足そうなのが見て取れる。そういう素直じゃないところが、たまらなく可愛い。

「ふふ、無表情を装ってるけど、嬉しそうなの我慢してるとこ、ほんと可愛い」

「分かった。明日から毒仕込む」

言っちゃったので、怒られた。

「冗談だから怒らないでよ」

「そういうこと言ってるよ、こっちも本気で褒めるから」

「マジで？褒めて褒めてー」

「この前、洗面所で着替え覗いた時、お尻が綺麗で可愛かった」

「そんな事してたの!?!? 普通にシヨックなんだけど!」

「言い出しつぺは透だから、文句はそっちに言つて」

「しかも二人で!?!?」

普通にビツクリだ。プライベートも何もあつたものではない。いや、一緒に暮らしているのにプライベートもクソもないかもしれないが。

「まあ、そんなことよりもね、リカ」

「何?」

「透が話したいことあるつて」

「え、何。改まつて」

「なんだろうね」

「あ、それ知つてる時の顔!」

「なんだろうね」

「NPCみたいな反応やめて!」

なんて話しながら、とりあえず食事を続ける。もう割と長いこと一緒にいるからか、普通に明里が好みの味を覚えられ、それを作ってくれているのが、なんだかたまらなく嬉しい。これだけでも、勉強を頑張つて一人暮らしを許された価値はあつたというものだ。

さて、そろそろ外出の時間だ。食べ終え、歯磨きして出陣である。

「ありがと、ご飯美味しかったよ」

「それはどうも。……仕事、何時まで？」

「午前中で終わり」

「……ん。じゃ、午後は三人で出掛ける？」

「あ、良いね。どこ行こっか」

「ん、ん〜……まあ、適当に」

「決まり」

少しだけにこりと微笑む円香。たまに出るそういう大人っぽい笑顔も、明里にとってツボだった。思わず、胸の奥がドキッと高鳴ってしまう。

「何照れてんの？」

「つ、て、照れてないよ……」

「……ふふ、そう」

「……嘘、照れてる。やつぱり、マドちゃんの笑顔は素敵だね」

「……あの、あんま恥ずかしいセリフを普通に言うのやめてくれない？」

「何照れてるの？」

「……あつそ。仕事終わったら、覚えてなさいよ」

「あはは、ごめんごめん」

そんな話をしながら、玄関に向かう。靴を履き替えて、ドアノブを握ったあと、こちらを振り返る。

「じゃ、行ってくるね」

「いつてらっしゃい」

「……」

「……」

「……」

「何？」

「い………いつてきます、のキス………する？」

「っ………何言ってるの？　そもそもまだ結婚したわけでもないし、そんなアホな風習、したいわけでもないでしょ」

「あ、あはは………だよ。半分くらい、冗談だった」

「………ん」

そう言った割に、円香は瞳を閉じて少しだけ背伸びする。本当に素直な彼女である。

その唇に、明里も唇を重ねた。

「じゃ、行ってくるね」

「……ん」

「照れてる？」

「帰ってきた頃には鍵穴変えといて欲しいならそう言つて」

「あ、嘘です。ごめんなさい」

×それだけ話して、とりあえず明里は出発した。

×

「何今の」

「っ!??!」

後ろからやたらと低い声が聞こえる。この家に住んでいる人間はあと一人しかいない。その一人とは幼稚園の頃から一緒だが、こんな声は聞いたことがないほど低い声。

思わずビクツツとして振り返ると、部屋からもつそい寝ぼけてそうなジト目でこちらを眺めていた。

「……毎朝、してたの？ そんな事。聞いてないんだけど」

「してないから。今日、なんかいきなり言われたからしただけ」

「……ふーん」

「ホントに」

「……ずるい」

「は？」

「私も欲しい……」

「なら、あんたも早起きして。もう朝のやる事、全部やったから……」

なんて話していると、ズルリと透は部屋から出て来る。そして、のそのそと自分の方へ歩いて来た。

なんかゾンビっぽいその動きに、円香の頬に冷や汗が流れる。

「っ……な、何して……」

「んー……」

「んっっ？」

唇と唇が重ねられた。円香の唇に、透の唇が。離れようと思ったのだが、後頭部をがつつり掴まれて逃げられない。

……というか、もう19周年にかかって初めて知った。意外と、透の唇って柔らかいか……じゃなくて。なんでいきなりキスされてんの？ というか、こいつ自分が何してるか分かって……いや、分かってない。寝惚けてるし。なんで寝惚けてるのにこんな力強い……唇柔らかい……や、じゃなくて、今はそんな場合じゃなくて、明里が行った後だからまだ良いけどこんなところが一にも見られたら……。

「ごめんマドちゃん、定期忘れたー！」

「んっ?」

「んー……」

「あえいええ?」

万が一が起こった。円香は背中を向けているから見えないが、後ろから玄関を開ける音と明里の声がしつかりと聞こえている。

「……き、今日くらいは……切符で行っても良いかなー……」

「っ、あ、明里! 待っ……!」

「間接キス……」

「直接でしょうが! ていうか、いい加減にして!」

ゲンコツで阿呆を起こして退かすと、明里の部屋から定期入れを持って慌てて追いかけた。

戻つて来ると、流石に透は起きたようで、一人で朝食を食べていた。

「……」

「あ、おかえりー」

「……」

「ふふ、めつちやシカトするじゃん。ウケる」

ウケない。少なくとも円香にとっては。何が腹立つって思ったより嫌じゃなかった

ことだ。

「……円香、怒ってる？」

「言わなきゃ分かんないわけ？」

「だよね……」

「……」

そもそも、誰のために早起きしたと思っているのか。早い方が良いと思って、わざわざ話の約束を取り付けておいたのに。

「でも、円香の唇柔らかかったよ」

「分かった。ビンタされたいってことね」

「嘘嘘。いや嘘じゃないけど。ふふ、だからその掌をこつちに向けるのやめて。さっきの効いたから、割と」

「……」

透も嫌じゃなかったんだ……なんて変にホツとしてしまったのが、またムカついた。

「ケーキ」

「え？」

「チーズケーキで許してあげる」

「ふふ、オツケー」

なんか、思ったより動揺が少ない。いつかこうなるのかも……なんて思っていたのかもしれない。

まあ、とにかく今はそれよりも、だ。勝手に透が話あるから、なんて言ってしまったが、今日の透の予定を聞いていない。まあどうせ暇しているのだろうが。

念の為、聞いてみた。

「透、今日予定あんの？」

「え？ あー……うん」

「え、何？」

「買い物。ほら、ノクチルでつべのチャンネル開いたじゃん？ それでゲーム実況とか流行ってるから」

「……聞いてないんだけど」

「え、やらない？」

「買う前に相談くらいして」

「分かったー。で、やる？」

「良いよ」

透もいつの間にかアイドルとしてグループのことを考えるようになっていて、少しだけ感慨深かったり。

……とはいえ、明里には少し謝らないといけないことになりそうだが。まあ、そんなに長く掛かるものでもないし、午前中には終わるだろう。

「それ、今日買うの？ それとも、今日は見るだけ？」

「うーん……どうだろ。わからん」

「買うなら、小糸と雛菜とも一緒が良いし、今日は見るだけにしたら？ 私、午後から

リカと遊びに行くし」

「え、狡い」

「だから、午前中に見るだけにした方が良くない？」

「あー……うん。それで」

×そう決めると、とりあえず朝食を進めた。

×

「(X)で……ですか？」

「そう、(X)」

撮影に使われる場所は土手沿い。近くにビ〇クカメラがあり、ここで他の事務所のアイドルと一緒に撮影するらしい。

「しかし、他の事務所の人と一緒かあ……」

「始めたときは全然、乗り気じゃなかったもんね」

「すみませんね」

「いいのいいの。今はやる気満々みたいだからね」

「でも最近、急な仕事多いですよ」

「それはごめん……」

「いえ、良いんですけど……その分、特定の日にお休みはもらってますし」

誕生日やらいイベントがある日などは特に。

そんな時だった。その一緒に出るアイドルが姿を現した。

「久しぶりだね、明里」

「? ……あ、白瀬さん!」

×久しぶりに、2トップのイケメンが揃った。

×

透と円香は、家から近いビ〇クカメラに来ていた。土手沿いにあるそこなら、ゲームも安く買えるだろう。まあ買うつもりはないわけだが。

この手の家電量販店は、基本的に開店時間が遅い為、早起きしたのにここに来たのは10時だった。

なんか休日朝からゲームを買うために、開店時間になってから店内へダッシュ……みたいと思うと少し恥ずかしいが、周りに誰もいないので気にしない。

そのまま一人で中を歩く。

「まず何のソフトにするの？」

「マリオとか？」

「あー、そういう感じ」

「？　どんなのだと思ったの？」

「A○EXとか、D b dとか」

「あゝ……え、そういうのやりたい？」

「いや、よくツイスタのトレンドに上がってるのはこの辺だから」

「……ああ」

なるほどね、と透は理解する。でも残念ながら、その辺はそもそもダウンロードなのでここに来てまで買うことはない。

「マリオとかは正直、賛成。みんな、あんまゲームやったことないし、やるなら操作単純で覚えること少なそうな奴のが良いでしょ」

「それあるわ」

適当に聞こえる返事をしてしまったが、普通にその通りだとは思った。やるからにはぶちかましたいし。

ゲームが置いてあるフロアは3階。そこまでエスカレーターでのんびりと上がって

いる時だ。2階に上がった地点で円香が「あつ」と声を漏らした。

「どしたの?」

「ちよつと待つて。電気ポット安い」

「は?」

「見てくる」

「あ、ちよつ」

慌てて円香の後を追った。型落ち品の売れ残りだろうか? かなりの低価格だ。

その箱を持って、円香は顎に手を当てる。

「うーん……どうしょ。あつた方が便利だけど……」

「買おうよ、いるなら」

「いや、そう簡単にはいかないでしょ。買うからにはみんなで使うし、みんなで使うからには割り勘じゃないと」

「? なんぞ?」

「便利と思ったから買った、じゃリカは気を使ってお礼とか買って来ちやうでしょ。でも後で割るなら、予め相談しないとだし」

「あー……気にしすぎだよね、リカ」

「あんたは気にしなさ過ぎ」

「でもそれならやめれば良いじゃん」

「いや、だつて70%引きなんて中々ないでしょ。欲しいと思つてたし、買った方が良い気もする……」

「じゃあ買えば?」

「は? 7割引の型落ち品なんて、使いにくいかもしれないでしょ。火傷しやすかつたりとか色々。簡単に決めて良いことなわけじゃないことくらい分かつて」

「……」

主婦モードが火を吹いているようで、円香は真剣な表情のまま箱を眺める。

めんどくさつ、と、速攻で思つた透は、こういう時の自分の意見は何にもならないことをよく知っている。

「先にゲーム選んでるね」

「あつそ」

すぐに逃げた。本当に家のことになつたら真剣なんだから……と、呆れ気味に思いつつ3階へ。

意外なことに、3階では飲み物やお菓子なども売っていた。子供が興味ありそうなものは畳み掛けるように同じフロアに置いてあるらしい。

円香のことだ。考え過ぎて上に来た頃には疲れているかもしれないし、甘いものを

買ったといてあげようと思い、飲み物の棚を見にいった。

すると、そこで見覚えあるスーツの男が立っているのが見えた。

「あれ、プロデューサー」

「? ……あ、透。何してるんだ? こんな所で」

「ゲーム買いに来た」

「ゲーム? ゲームとかしてたか?」

「いや、ノクチルのチャネル開設したし、やってみたいじゃん。ゲーム実況」

「そういうのは俺に相談してからにしような……経費で落ちるから」

「マジ? 買ってくれるの?」

「あー……まあ、そういう事」

「やった、アレか。パパ活って奴」

「違うからそういうこと言うのはやめなさい!」

しかし、なんだかプロデューサーは拳動不審である。視線がかなり泳いでいるし、周囲を見回し続けている。

「どうしたの? もしかしてホントにパパ活のつもりだった?」

「なわけないだろ……」

「ていうか、なんでここにいるの?」

「咲耶がこの辺で撮影してるから、少し遅れて見に来たんだよ」

「ふーん。じゃあ、一緒にゲーム選んで」

「話聞いてた？」

「おすすめとかないの？」

「ちよつ、おい透！」

××ぐいつ、とプロデューサーの肘を掴んでゲームが売っている棚の前に向かった。

××

「よし、休憩〜」

監督の一声で、一時休みになった。カメラマンのアシスタントの子が新入りのように、思った以上に時間がかかってしまっているが、まあ仕方ない。

「いやー、しかし映えるねえ。このツーショットはいつでも」

そう言うのはカメラマン。顔だけは良い男と、顔以外も完璧な女が二人並んでいるのだ。そのセリフは出ても仕方ないというものだ。

「ふふ、ありがとうございます」

「どうもー」

「久しぶりに並んでいるところを見たけど、やっぱりちよつと近寄り難いよねー。男としては」

「分かるわ。絶対に一緒にコンパとか行きたくない感じ」

微妙な褒められ方をしてしまうわけだが、それほど顔だけは良いと思われているのなら気にならない。

しかし、基本的にマイペースな明里が、ふと思ったように声をかけた。

「俺、喉乾いたので、なんか買って来ても良いですか？」

「いや、そういうのは経費で落とすから良いよ」

「え、いや別にそれくらい経費じゃなくて良いですよ」

「いやそういう問題じゃないから。もう君何年もこの業界にいてそういうの覚えはない？」

「じゃあこうしましょう。じゃんけんで勝った方が、今日のスタッフさん全員に飲み物奢り」

「なんで急に男気ジャンケンになるわけ!?？」

悲しいかな、このバカを止められる男はこの中にはいなかった。しかし、お金がかかる掛からないではなく、スポンサーの息子さんにスタッフ全員の飲み物を奢らせるのは100パー死ぬ。

あの子のことだ。「最悪、スタッフ全員に飲み物買って金クソ使ったんだけど」ではなく「男気見せて飲み物全員に買ってやったわ」という風に言うだろうが、伝わるか

もしれない時点で終わりだ。

「ふふ、面白そうだね。私も参加しようかな」

「咲耶ちゃん！　今や君は別の事務所なんだからもっとダメ！」

「良いねー、白瀬さん。男気あんなー」

「言葉に気をつけよう、明里」

「よっしゃー、いくよー。おっとこつぎじゃんけん……」

「だーもうっ！　カメラマン、助監督！　みんな参加しろ！　スタッフ10人で挑めば

勝てない方がおかしい！」

「え」

「了解です！」

「「「「じゃんけん、ぼんっ！」「」」」

その時、明里は。実践型柔道によって鍛えられた動体視力と瞬発力に追加し、人体の体についての観察眼、また数学的確率、そして「ぼんっ」のタイミングで繰り出される直前の手の変化を全員分、見切り、最適解を繰り出した。

「よっしゃああああああ!!?　勝ったああああああ!!?」

「お前ら全員、減給だから」

「「「「「えっ」「」」」」」

「飲み物、選ぶの面倒なんでみんなビールで良いですか？」

「誰か見張りについて行って！」

「私が行くよ」

「他事務所の人に行かせられないよ！」

「私が行きたいんだ。良いだろう？」

「もう何なのこのクソイケメンども！」

なんて話しながら、とりあえず明里と咲耶が二人で買い出しに向かった。

「ふふ、相変わらずだね。明里は」

「そう？」

「そうだよ。さっきの、新入りの子が縮こまってしまっていたから、強引に盛り上げようとしたんだろう？」

「あ、あはは……バレた？」

「分かるさ。君は、意外と周りを見ているからね」

「……あはは、なんか普通に恥ずかしいかもそれ……」

あまり他人に親切を褒められるのは得意じゃなかった。不思議と円香や透には褒められたがるのだが。

「……あー、白瀬さん」

「何？」

「プロデューサーさんとおるんって、事務所でどんな感じ？」

「？ 何故そんなことを？」

「いや……まあ、深い意味はないんだけど……」

前から思っていた。透はプロデューサーの話をする時、少し元気になっっている気がする。もしかして、好きなのだろうか？ と。

いや、まあ別にそれならそれで構わない。この世に自分より優れた人間はいくらでもいるし、自分は二股しているのだから引き止められる立場にない。……ただ、まあ……だとしたら、自害も辞さな……あ、いや円香がいるので死にはしないが。

「……あ、明里？ 表情が暗いよ？」

「大丈夫」

「う、うん……さ、飲み物だけ買ってしまおう」

それだけ話して、二人でビ〇クカメラの中を散策した。

「ちなみに、透とプロデューサーは確かに仲良いよ」

「え、そ、そうなの？」

「でも、別に恋愛的那それではないから、安心すると良い。……彼女は、誰にでもあんな感じなのではないのかい？」

「違うよ。少なくとも、俺以外だとプロデューサーさんだけ」

「そっか……まあ、もしかしたら過去の知り合いとか……そういうことかもしれないな」
「やめろよ……俺より前に知り合ってるとか……」

「気にする事ないさ。だって……今は、君が彼氏なのだろう？」

「……まあ」

「ならば、もう少しどっしり構えた方が良い」

それを言われると「確かに……」と思ってしまう。と言うより、その通りだ。男なら男らしく、堂々としていくべきかもしれない。

「ごめん……ありがとう」

「ふふ、気にしなくて良いよ」

そんな話をしながら、エスカレーターを登り切った時だった。

「どうしたの？ もしかしてホントにパパ活のつもりだった？」

「なわけないだろ……」

「ていうか、なんでここにいるの？」

「咲耶がこの辺で撮影してるから、少し遅れて見に来たんだよ」

「ふーん。じゃあ、一緒にゲーム選んで」

「話聞いてた？」

「おすすめとかないの？」

「ちよつ、おい透！」

透？ ていうか、パパ活って言った？ と小首を傾げた直後だ。透がプロデューサーの肘に手をかけて、引き摺っているのが見えた。

大人になる程、仲直りが難しくなる。

ついうっかり、買ってしまった。電気ポット。不良品だったらどうしよう、という不安がないわけではないが、それでもやはり新しい家電を買った時というのはワクワクする。

明里には相談しないで買ってしまったが、まあ許してくれるだろう、なんて実はとても当たり前前の結論に達しながら、とりあえず透がいるであろう子供向けフロアに向かう。

少しいつもの癖でつい見過ぎてしまった。透には悪いことを……と、思つて上のフロアに上がりきつた時だ。

「とおるん、パパ活つて何。どういう事？」

「いや、それは冗談で……」

「正直に言つて、隣の人とどういう関係？ ……もう、俺のことは飽きちやつたの？」

「そ、そんな事ないから100パー……だから落ち着」

「うん、飽きたなら言つてくれれば、もう……うん。もう……」

「え、も、もう……何？」

「……もしかして、やっぱり二股嫌だった？ それとも、俺のことなんて本当は好きじゃなかった？」

「違っ……」

「いや、気を使わなくて良いよ……俺達の三角関係が良い感じに進んでると思ってたの俺だけだったって事だよ……マドちゃんにも相談して……」

「ねえ、違うって言うってんじゃん。人の話を聞く気がないのに何しに来たの。自分だつて別の女の子といっしょのくせに」

「は？ 撮影被って男気ジャンケンで一緒に飲み物買いに來ただけだから。二股してる奴が浮気なんてするわけないでしょ」

「何その言い分。むしろ不安しかないから。いつ雛菜と小糸ちゃんも菅谷ファミリーになっちゃうのか」

「え、そんなふうに思われてたの？」

ヤバい、とすぐにこの流れを断ち切らないと思つた。何でいつの間にか普通に喧嘩になっちゃうてるのか。

二人の透明なのにやたらと濃い圧力に気圧され、周りにいる咲耶とプロデューサーも何も出来ていなかった。

もう何故、明里がここにいるのか、なんて気にする余裕もなく、慌てて二人の間に入

る。

「ち、ちよつと、二人ともその辺で……」

「ま、円香！」

「その大人二人も『助かった』みたいな顔しないで。情けない」

そう言いつつ、透と明里の間に割り込んだ。

「何があつたの。落ち着いて教えて」

「とお（リ）るん（カ）が、パパ（咲耶）活し（侍らせ）てた！」

「だから落ち着いて教えて。一緒にしゃべられてもわかんない」

「じゃあ俺（私）から！」

「分かった。透から聞かせて」

一生、息びつたりと息合わないと理解した円香は、独断で順番を決めた。

だが、そろそろそうもいかないのが咲耶であつて。

「す、すまない、円香……実は、今私達は撮影の合間に男気じゃんけんで勝つてここに来ていてね……」

「後にくれますか？ レジが混んでたとか言つて」

申し訳ないけど、別れるか別れないか、ギリギリの狭間にいるのでそれは困る。

「いや、しかし早く行かないと呼び出されてしまう。理由が理由だし、現場の方々に事情

は説明出来ないだろう？ 三人とも別れるハメになってしまいかもしれないよ」

実際の所、今日の現場は明里の事務所の人が大半を占めているので、問題は無い。それでも、こういう小さな問題の積み重ねが、今後の活動でどう支障をきたすか分かったものではない。

それを考慮した円香は、小さくため息をついた。

「……リカ、行つて」

「え、やだよ」

「行つて。後でちゃんと話すためにも、今は頭を冷やして来て」

「……わ、分かったよ……」

追い出した。プロデューサーにも「行け」と視線で言うと、3人で飲み物を買に行つた。

さて、残りは透と円香。ふと透の方を見ると、相変わらずずっとぼけた表情のまま……なのだが、少しだけ小刻みに震えていた。

「？ 透？」

「ふ、ふふ……初めて喧嘩したわ。リカと」

そういえばそうだ。あまり2人が喧嘩をするところは見た事がない。意外………というわけでもなく、いつか喧嘩するとは思っていたが、少し透の様子が気になった。

「どうしよう。……仲直りできなかつたら」

「……」

思いのほか、ショックを受けていた。というか、目尻に涙が見えるのは見間違いだらうか？

「……ど、どうしよう……」

「……とにかく、落ち着いて。近くにスタバあるから、そこで聞かせて」

「……ふふ、死んじやおつかなー、もう」

「だから落ち着いて。死んだら殺すから」

そんな話をしながら、近くのお店に入った。

さて、改めて話を聞く。早い話が、たまたま会ったプロデューサーに冗談で「パパ活」と言ったら、勘違いされてしまったらしい。

冗談だと説明したが、余程ショックだったのか全然、聞いてもらえずに女々しいことを言い続けた挙句「二股嫌だった?」「ほんとは俺のこと好きじゃなかった?」とか言われてカチンと来て、つい仕事だと分かっているながら咲耶との関係を疑うようなこと言っ
て怒らせてしまったらしい。

「……なるほどね」

まあ、タイミングが悪かったが、明里がいない場であつてもプロデューサーに向けて

「パパ活」なんて言ってしまったのが悪い。

特に、家でも透はプロデューサーの話になると明るくなるし、それに明里も気付いていた節がある。あらかじめ話していれば、そうもならなかっただろうに。

「……じゃ、謝れば？」

「私だけ謝るのは嫌だ」

「は？」

「私がリカの事も円香の事も好きなの、あいつ疑ってた。それはむかつくから」

「……」

その言い分は最もである。疑ってたのか、それとも今回のことで揺らいだのかは知らないが、信用されないのは悲しい事だ。

「なら、後はそれを落ち着いて伝えるだけでしょ」

「……うん。ありがと」

「あとでいちごタルトで良いから」

「えっ」

なんて話しつつも、円香はまだホツとしてはいない。何故なら、明里とはまだ話していないから。彼がどういう状況になっているのか、気にならない理由がない。

「ところで、円香」

「?」

「電気ポット買ったんだ」

「うん」

「これでカツプ麺作りやすくなる」

「そればっか食べて身体壊しても知らないから」

「じゃありかに看病してもらおう」

「させないから」

×××なんて話しながら、とりあえず明里の撮影時間が終わるまで待つ事にした。

×××撮影が終わった。仮にもプロである明里は、ちゃんと撮影中に喧嘩したことは顔に出さないようにしていた。

それらを終えて、帰宅の時間。撮影現場を出てなんとなく散歩したい気分だったので、車の中で着替えて現地で解散させてもらって、土手沿いにある橋を歩き始めた。

頭の中に浮かんだのは罪悪感だった。

「はあ……喧嘩してしまった……」

ため息が漏れる。やっちゃった。つい頭に血が昇るより先に悲しくなり、怒ってしまっただけ。ああ見えて意外とガードが硬い透が、そんなことあるはずなのに。

こんな事になるなんて……と、思いながら、橋から川を眺めた。そういえば、中学の時は3人で清掃ボランティアなんてしてたなあと思つて手すりに寄りかかっていると、手元からスマホが落ちた。

「あつ」

橋の手すりの反対側に落ちてしまったので、飛び越えて取ろうとした時だ。

「あ、あぶなああああああいいい！」

「ズッつふあー！」

後ろからむにゅつと柔らかい感触の割に、やたらと強い力が強引に柵から自分を引き剥がそうとする。

「え、ちよつ……な、何?!? 誰!!?」

「だ、だだだダメだよ喧嘩くらいでっ……じ、じさじさじさっ……自殺なんて！」

「時差? 何の話！」

「話なら聞くからおちつ、おちおちついて! いや、落ちて着いてじゃなくて気持ちも落ち着かせて！」

「いやお前よりは落ち着いてるけど……ていうか、マジで何の話……」

と、思っている間に柵から引き離され、正面を向かされる。そこにいたのは咲耶だった。

「白瀬さん？ あの、何勘違いしてるのか知りませんが……俺はただ……」

「と、とにかく、ちゃんと当人と話し合って！ だから、だから死ぬなんて真似はダメだよ……！」

「っ、ち、ちよつと！ 何して……！」

正面からぎゅつと落ち着かせるようなハグをされた。その圧は、市川雛菜さえも超す大きさと火力。どんな男であっても「ちよつとくらい堪能しよう」と思えるそれは、一瞬だけ明里の意識を持っていきかけた。

「が、この男の理性は人類最強クラス。世界で一番、ルフィや悟空に近い男とも言える。ダメですって、白瀬さん！ こんなところ、とおるんとマドちゃんに見られたら……！」

「……」

「……」

橋の方から、歩いて来る透と円香と目が合った。

「は？」

「は？」

「おお、もう……」

「？ あ、円香。透！ 今実は彼が……」

「最低」

「もう帰って来ないで」

「え？」

「……」

× 帰られてしまった。

×

「はい、カフェオレで良かったかな？」

「どうも……」

場所は、283事務所近くのカフェ。その後、咲耶を探してやって来たプロデューサーに事情を説明し、とりあえず相談する事になった。

隣にいるのは一緒にいた咲耶。とても申し訳なさそうに声を掛けられる。

「すまない……まさか、スマホを落としただけだったとは……」

「いえ、別に大丈夫です……紛らわしい行動した俺も悪かったですから……」

本当に今日は間が悪い日だ。というか、どんだけ本気で自決すると心配されてたんだろう。

「それで、連絡は？」

「全く繋がらないです……」

「そっか……」

プロデューサーさんの問いに、首を横に振って答える。

少し、明里はため息が漏れる。というか、ガツツリ漏れる。透だけでなく円香にも帰ってくるな、と言われてしまった……。

いや、そこはまあ信じている。明里ならそんなコソコソと浮気をするはずない、と思ってくれると。少なくとも、円香なら。

しかし、透は分からない。ただでさえ喧嘩したばかりなのに、あんなシーンを目撃されてはもはや終わりだ。終わりにしないための作戦を考えないといけない。

「菅谷くん」

「なんですか……」

そんな中、プロデューサーが声を掛けてくれた。

「まずは、パパ活の件だが……」

「事実だったら弁護士呼びます」

「事実じゃないって言おうとしたんだけど……うん、まあ事実じゃないよ。透の冗談だ」

「……」

「もしかして、透は家でも俺の話をよくしてるのか？」

「……はい。めっちゃ良い笑顔で」

その返事に、咲耶もプロデューサーも困ったような顔を見合わせる。

「あいつは本当になんていうか……」

「まあ、透らしいと言えばそうかもね。良い事だとは思わないけれど」

透と同じ職場にいて二年目の咲耶も、呆れ気味の声を漏らす。

「でもね、菅谷くん。透は確かによく俺に話しかけてくるけど……その話の内容、ほとんど君と円香の事なんだ」

「……」

「朝ご飯を作ってくれたとか、今日は帰ってもリカがいないとか、大学で円香がナンパされてたとか、そういう話ばかりだよ」

それを聞いて、少し明里は頬がにやける。素直な反応を見て、プロデューサーも咲耶もほっこりするが、そのまま続けた。

「勿論、ああいう冗談は良くないけど、本当に俺とそういう関係はないんだ。いや、まあ本当にパパ活してるなんて思っけないかもしれないけど、別に透が俺のことを好きだとか、そういうこともない。だから、そんなに不安になる事ないよ」

それとも、と、プロデューサーは続けていった。

「俺のことを背負い投げした男は、こんな勘違いで好きな女の子と別れるような、情けない男だったのか？」

「っ……ち、違う！」

「じゃあ、さっさと仲直りして、今日はまだ半日あるし、ゆっくりと過ごさなさい」

「は、はい！」

「まず電話！」

「はい！」

流石、元気と熱意だけで多くのアイドルを育成して来た猛者だ。すぐにバカをその気にさせてしまった。

明里はスマホを取り出し、透に電話を掛け、応答を待った。

『もしもし』

「とおるん？」

『死ね』

切られた。

「……」

「……」

「……」

× 先は長そうだ。

× 仕事の合間に話をしてくれたので、二人ともそのまま解散。残念ながら、何度か透に

連絡を試みたものの返事は無い。

なんかもう今日はダメかな、と思って、公園で寝る事にした。近くにあるそこは、ベンチのすぐ近くに大きな木が並んでいて、割と風を遮ってくれる。

「一日くらいなら風邪ひかないでしょ」

「ひくでしょ」

「!?？」

振り返ると、そこにいたのは円香。腕を組んで、怒りを露わにしている。

「何で帰ってこないわけ？」

「いや、だって……帰ってくるなって……連絡も取れないし……」

「だからって公園で寝る？ あんたほんとどんな頭してんの？」

「い、いや……あ、ま、マドちゃん。それより橋の上のことは」

「白瀬さんから連絡きた。スマホ落として自殺と間違われたんですよ。……まあ、そんなとこだとは思ってたけど」

「だったら連絡してよ……」

「……透にスマホ取られてた。私がりカのことこつそり家に入れないようにするために」

「え、な、何それ……」

「ずっと透、スマホの電源切ってるし、割と本気だからアレ」
「……」

困った。かなり。思わずため息が漏れる。

「じゃ、ついて来て」

「え、ど、どこ行くの？」

「家。こつそり私の部屋に入れてあげる」

「え、い、良いの……？」

「ていうか、そうでもしないと仲直り出来ないでしょ。……一家の大黒柱が、下らない喧嘩で外泊しないで」

「……どつちかって言うと、大黒柱はマドちゃんじゃない？」

「情けなさを自覚して」

「すみません……」

そんなわけで、家には入れる事になった。

そのまま二人で家に向かう。玄関の前に立つと、円香は普通に開けて中に入った。

「ただいま」

「おかえりー。どこ行ってたの？」

「コンポタ飲みたくなって買いに行っただけ、もうなかった」

「あー、まあないでしょ」

透の声はリビングから届いてくるだけ。円香が適当に返事をする間に、明里は慎重な足運びで円香の部屋に向かう。

そのまま部屋に到着した。ふと目に入ったのは、電気ポットの箱だった。

「そんなのあつたつけ？」

「今日買った。安かったから」

「へー……ていうか、マドちゃん達あそこで何してたの？」

「ゲーム見に行つた。実況するかもしれないから。ご飯、悪いけどカップ麺でも良い？」

「あ、勿論」

「じゃあ、取ってきてあげる」

「ホント、ありがとね」

「明日にはちゃんと仲直りして」

「うん」

それだけ話して、円香は電気ポットを持って部屋を出て、カップ麺と水入りの電気ポットを持って戻つて来た。

「とおるんにバレなかった？」

「透には『今日ならリカの布団の匂い嗅ぎ放題だから』って教えておいた」

「何してんの!?？」

「大きい声出さないで。バレる」

数分して戻って来たので、カップ麺をありがたくいただく。

「じゃ、私下にいるから」

「え、行っちゃうの?」

「いつもはリビングで駄弁ってる時間でしょ」

「そっか」

そんなわけで、三人で住んでいる家なのに、一人飯になった。

改めて、思った。三人一緒に付き合えて良かった、と。割と円香か透、どちらかが欠けたらどうにもならない事態は多く経験して来た。二股の利点は、誰か一人が仲裁できる事にあるのかもしれない……。

なんて思いながら、食事を終えた。一々、円香が小まめに部屋に戻るのも不自然な気がしたので、あとで来た時についてに返す事にして、とりあえず待機する。

だが、円香と明里は甘く見ていた。三人暮らしの家で一人がいることを他に一人に隠して生きていることが、どれだけの難関を誇るのか……。

××

リビングにて、のんびりと円香と透が映画を見ていると、ピーピーピッピーと電子音が鳴り響く。お風呂が沸いたようだ。

そこで、円香はハツとする。しまった、お風呂はどうするのか。同じベッドで寝る以上、円香は正直、明里の身体の汚れなら気にしないが、明里が「お風呂には入りたい」と言うだろう。ただでさえ、今日は川浴いでの仕事だったし。

「わお、この映画グロっ。リカいなくて良かった奴じゃん」

透がそんな眩きを漏らす、円香はそれどころでは無く集中出来ない。

お風呂……三人で回して入るわけだが、今は二人。三人目がいたら確実に不自然だ。つまり、まるで一人で入ってるかのように見せる必要がある。

「円香、お風呂良いよ。先に」

「え、あー……う、うん」

よりにもよって先か、と思いつつも、まあ問題ない。トラブルを防ぐために、家の中では次にお風呂に入る人を呼びに行ってから入ってもらうルールを決めている。そんなわけで、円香はまず自室に向かった。

「リカ」

「ん？ あ、これゴミどうしよう」

「後で捨てて。……お風呂」

「え？」

「入る。一緒に。だから水着、用意して」

「あ、あー……出て平気なの？」

「今なら透、映画に夢中だから」

「り、了解……」

仕方なく、覚悟を決めて二人でお風呂。明里がトイレで海パンに履き替えている間に、円香は先に洗面所で着替え、バスルームで待機。

待っている間、どうしたら良いのか分からなかったのも、先に頭だけ洗っておいた。シャンプーを流し切ったあと、遅れて海パンの明里が入ってくる。

「っ……や、やっぱり……綺麗だね……」

「一緒に風呂なんてアブノーマルなことしてる時は褒めなくて良い」

「あ、ご、ごめん……」

ほとんど照れ隠しで言ったのだが、謝られてしまった。

一緒にお風呂に入る、なんて友達同士では何度も経験した事のはずなのに、不思議とどうしたら良いのか分からなくなっていた。

えーつと……そう、小糸だ。ベクトルは違うとはいえ、明里も小糸も動物みたいなもの。確か一緒に入ってる時は……洗いっこしてた。

ダメだ、それは無理。触られるのも触るのもなんか意識する。そうじゃなくて、効率よく洗うには……。

「私、今から身体洗うから、その間に頭洗っちゃって」

「あ、了解」

そう、これだ。合間合間で洗う事。……まあ、せっかくの機会だし、湯船には一緒に浸かりたいとか思ってるし。

さて、これをした理由はもう一つある。身体を洗うには、当然水着の内側も洗いたい。だが、それをしたら見られる。だからその間に顔が隠れる明里に、頭を洗わせた。逆の時？ それは知らない。見られるのは恥ずかしいけど、見る分には問題ないし。

さて、作戦通り、水着の内側を洗う。……明里の後ろで恥ずかしい部分を洗う背徳感はこの際、堪能している場合じゃないと我慢して、何とかトラブルなく終えた。

続いて、洗顔。その間に明里は身体を洗った。残念なんかではない。

そして最後に、自分はトリートメントをして、明里は洗顔……と、順序よく進んでいった。

「じゃ、入るよ」

「うん」

「……先入って」

「? う、うん?」

まずは明里に入らせた。蓋を開けて、明里が中に入る。すると、思わず円香は困ってしまった。何故なら、面積がほとんどなくなってしまったから。

「……これ、何処に入るの?」

「え……は、反対側は?」

「……」

とりあえず、それで入ってみる。反対側に腰を下ろすように足を入れて、座る。足を伸ばそうとした直後、ふとそれが止まった。女の子的に足を開くのは嫌だ……が、かと言って閉じたまま伸ばせば……。

「……背もたれになって」

「え?」

一度立ってから、向きを変えた。ほとんど生肌の背中を、明里の生肌の上半身に乗せるように体重をかける。

「っ、ひあっ……」

「うるさい。変な声あげないで」

「そんなこと言われても……」

「いいから」

円香にもその気持ちはわかる。だからこそやめて欲しかった。この距離と、この肌の設置面……ちよつと、理性を抑えられそうにない。

心臓が高鳴る。胸が苦しい程痛む。頭が熱く重くなる。何もかもが吹っ飛びそうな時、後ろから少し色っぽい声がかけられる。

「マドちゃん」

「……何」

「キス、したい」

「……！」

今、そんなことしたら、確実に止められない。それは明らかだった。断った方が良い、と理性は言っている。

しかし、ふとそこで気がついた。いつの間にか明里の両手が、自分のお腹の前で、まるで逃がさないかのように組まれている事に。

それを理解した直後、自分は無言で明里の肩に後頭部を置きながら、唇を尖らせていた。

そこに降り注ぐ、明里の唇。重なり合い、当然のように舌の侵入を許しそうになった時だ。

——ガラガラつと、洗面所の扉が開く音で慌てて正気に戻った。

扉一枚、隔てた先では透がいる、そう思った直後、二人はわちゃわちゃと慌てた後、明里が湯船の中に潜り、円香はお風呂の蓋を乗せた。

その僅か二秒後、声が聞こえてくる。

「円香ー、お風呂まだー？」

「えっ？ ま、まだ20分くらいでしょ」

「もう40分入ってるけど」

「そつ……そう、ごめん。もう出るから待ってて」

そんなに経ってるの!? と聞きそうになったのを抑えて、謝った。やがて、扉が閉まる音がして、そこでもうやくやく蓋を取って明里が水面から出てくる。

「……」

「……」

「……あ、上がろっか……」

「……ん」

気まずい空気のまま、湯船から出る。

明里は……どういっつもりでキスしたい、なんて言い出したのだろうか？ いや、あのシチュエーションなら一つしかないが、明里の事だ。単純にそれだけの可能性もある。

……だが、万が一にも、そのつもりだったのだとしたら……。

「リカ」

「何？」

「……続きは、部屋で……」

「……う、うん……」

××今度は、こちらから勇気を振り絞ってみた。

××さて、歯磨きを終えて、いよいよ寝る時間。二人は、円香の部屋のベッドで布団の中に入る。

二人とも、これから何かを始める気満々、と言わんばかりに頬を赤らめ、今にもキスをしそうな感じた。……が、少しだけ落ち着いた今、二人の中には引つかかるものがあった。

そう、透のことだ。

透と喧嘩中に、二人でそういう雰囲気になったからってそれをする……というの、なんか違う気がする。

そもそも、さつきまで謝らなかつたのは、一方的に連絡も取れなかつたから。

つまり、今なら謝る機会がある。それをしないと、筋が違う。

それで追い出されたらー……いや、その時のために円香がいるのだ。

二人揃ってそれを決めた時だった。

「円香ー」

「っ!?」

こちらから行こうとしたら、まさかの向こうから来て反射的に明里は布団の中に隠れてしまった。円香の下半身にしがみつくような構図になり、思わず円香は身悶えしそうになる。

明里が布団の中に入ると同時に、円香は身体を起こし、下半身にだけ布団をかけている寝る前の状態にシフトチェンジする。

その後、すぐに透が入ってきた。その服装は、寝巻きの上にジャージを羽織っている。

「何?」

「リカ、探してくるね」

「え、き、急にどうしたの?」

「んー……なんか、落ち着いて来てから、心配になって来て。リカ、公園で寝たりしてないかな」

「……」

「……」

「どうやら、透は透で色々と考えてはいたようだ。……いや、もう何も考えていない昔とは違う。少なくとも、透はユニットと三角関係については考えるようになった。」

何にしても、心配かけさせてしまっている。」

「円香は寝てて。私の責任だから」

「え、いや一人じゃ……」

「いいから。じゃ、おやすみ」

言うだけ言って、透は部屋から出ていく。残った二人は、バサツと布団を剥がした。

「……リカ」

「うん。俺も同じ事思ってた」

「じゃ、続きは後で」

「……ん」

すぐに、後を追った。何にしても、こんな時間に女の子一人で外に出すわけにはいかない。

玄関に行く、透は靴を履き始めている。

「待つて、とおるん！」

「? ……え、リカ。いたの?」

「ごめん、マドちゃんに入れてもらってた」

「……ふーん」

素直に自白したからだろうか？ 透の表情に不快感が出たのは一瞬だった。正直、明里だけが悪いわけではない。だが、もうそういう事じゃなかった。

「ごめん、白瀬さんの事は……アレは」

「さつきチェイン見た。自殺と間違われたんでしょ」

「う、うん……」

「私も、プロデューサーとのことは……」

「聞いた。冗談だったんでしょ。」

「や、それだけじゃなくて」

「？」

「昔の知り合い。子供の時、一回だけ遊んでもらった」

「……そうなんだ」

「うん。だから……別に好きとかじゃないけど、思い出してほしくて、結構距離近くして
た」

「……」

「……」

二人とも、言いたい事は言えた。そして、お互いに事情があることも理解した。そう

なったら、もうやる事は一つだ。

靴を脱いだ透と、一步踏み出した明里が、正面からハグをする。

「いめん」

「いいよ。いめん」

「いいよ」

淡白だが、それ以上に言葉はいらさない謝罪。それ故に、効果は抜群だった。

「……リカがいないと、寂しかった」

「俺も。マドちゃんが色々してくれたけど、やっぱり一人足りなかった」

「……」

「……」

しばらくハグを続ける。そして、至近距離からお互いの顔を見合わせると、コツンと額をくっつけてキスをした。まるで、海外映画のワンシーンのようなその様子に、円香は邪魔をしないようそつと目を閉じる。まったく、世話が焼ける彼氏と彼女である。

……さて、しばらく放っておいても良いが、明日は円香と透は仕事である。そろそろ寝ないといけない。まあ、自分はこの後、リカと……それなわけだが。

「二人とも、もう夜遅いから」

「……あ、そうだね」

「はーあ、リカとの大学生活の、1、460分の1日無駄にした」

「あ、俺はその点無駄ではなかったかな。さつきマドちゃんとお風呂入ったし」

「……は？」

「え？」

「……」

空気が変わった。

「何それ」

「え？ 水着着て、二人で」

「私の時は悲鳴あげて逃げた癖に？」

「それは俺が何も履いてなかったから……」

「……ずるい」

「え？」

「円香、これ私が借りるから」

「えっ」

「えっ」

「一緒に寝るよ、リカ。水着で」

「それ意味あるの!?!?」

「や、ちよつ……」

結局、水着にはならなかったものの、明里は透に抱き枕にされ、円香は溜まったものを何とかした。

バカなら隠蔽なんてしないで素直に謝ろうや。

浅倉透の誕生日会が終わるとほぼ同時に、ゴールデンウィークも終わる。が、まあそれで始まるのは学校くらいで、三人とも仕事はあつたわけだが。

逆に、ゴールデンウィークじゃないのに休みをもらうこともあるこの頃、樋口円香だけが仕事だった。

「皆さん、こんにちは。DJ吉崎の夕方ラジオ。本日のゲストは、今をときめくJDアイドル。ノクチルの樋口円香さんです！」

「よろしくお願いします」

「ごめんねー、忙しい時期に。ゴールデンウィークはどこか行ったりした？」

「いえ、仕事でしたので」

「あーそっかー。忙しかったんだもんね」

「まあ、でも透の誕生日は祝ってあげられたので、そこは良かったです」

「そっかそっか。みんなで祝ってあげたの？」

「はい。雛菜と小糸も一緒に、透の家で」

「何かプレゼントしてあげた？」

「はい。私からは手帳を。……予定を忘れられることも多いので」

「なるほどねー。流石、友達思いだね」

「いえ」

ここまでの会話、実を言うとはほとんど事実を煙に撒いていた。実際、ゴールドデンウィークはゲームを選びに行っていたが、配信するのはしばらく先だから言わないでいた。

そこはともかく、透の誕生日の場所、透の家。自分と明里の家だし、プレゼントの手帳はついで。本当は欲しいと言われたので、明里と円香の写真が入ったロケットをあげた。勿論、言わないが。

「さて、そんな円香ちゃんに今日は、質問のハガキがたくさんきています」

「ありがとうございます」

「では一つずつ読んでいきましよう」

そう言いながらDJの人はハガキを手に取り、内容を読み上げる。

「まずはこちらから。『円香ちゃんの休日の過ごし方を教えてください』だそうですね」

「休日……そうですね。比較的透達と一緒に家にいる事が多いです。外見よりも落ち着がない人も多いので、急にバカやる人達に巻き込まれないよう、無視して部屋の片付けとかをしています」

×××
その日の昼、休みだった明里と透はお昼ご飯を終えると、ダラダラとソファで寝転がっていた。

「とおるーん」

「なーにー?」

「あーそーぼー」

「いーいーよー」

間延びする返事をしながら、ゴロゴロしていた二人は体を起こす。

「何しよっか?」

「んー……王様ゲーム」

「良いね」

二人で王様ゲームをすることにした。そうと決まれば、透が棚から箸を取り出し、明里は油性のペンを持ってきた。

キュツ、と片方に王冠のマークを書いて、それを透は背中でシャツフルして握り締める。

「はい」

「こっち」

「王様だーれだ！」

酔ってる人より酔ってるテンションで王様ゲームを始めた。2人一斉に中を見ると、王様マークは明里の方だった。

「あ、俺だ」

「命令どうぞぞ？」

「じゃあー……とおるんはー」

「番号じゃないとダメだよ」

「じゃあー番の人」

「はい」

「んー……ダンゴムシのモノマネ」

「え、難易度たつか」

「ダンゴムシが丸くなる時は危険から身を守る時だから、背中突くね」

「どうぞぞ」

とのことで、明里は透の背中を突いた。透はその場ででんぐり返しをした。背中を椅子に強打して悶えた。

「大丈夫？」

「平気……でも待って……」

「椅子壊れてない？」

「あ、椅子の心配？」

「背中は一……うん。ちよつと腫れてるかな。湿布いる？」

「大丈夫。それより、二回戦」

「あ、もうやる？」

「当たり前じゃん。負けたまま終わらないし」

「あれ、そんなに闘志燃やす遊びだっけこれ？」

なんて話しながら2回戦目へ。箸を握り、今度は透から引きに行った。

「王様だーれだっ」

今度は透が王様だった。

「はい、私」

「どうぞ」

「んー……じゃあ、私をおんぶしてスクワット」

「え、良いけど……あ、もしかして出来ないと思ってる？」

「10回ねー」

そんなわけで、明里の背中に透はおんぶしてもらう。もう何度もおんぶをしてきたので、背中の柔らかい感触には少しずつ慣れてきたものだ。

「じゃ、行くよー」

「んー」

言いながら、明里は膝を曲げる。ちゃんと腰、膝の角度が直角になるようにだ。

「おおー……すごいすごい」

「とおるん軽いいし、楽勝」

「ふふ、やるじゃん」

続いて2回目、そして3回目……と、スクワットを繰り返す。さて、そろそろ透は飽きてきた。こうもサクサクこなされると面白くないからだ。

そんなわけで、ニヤリとほくそ笑むと、透はギュツと胸を押し付ける。さっきまでも当たっていた事には変わらないのに、これだけで少し耳が赤くなるあたり、本当に可愛い彼氏である。

「どしたー？ あと7回やらの？ スクワット」

「と、とおるん……」

「それとも出来ない？」

「で、出来る！」

そのまま明里はスクワットをこなす。4回目……と、膝を曲げて、それでも立った。

……ゼロ距離パイ圧なんだからもう少してこずれよ、と身勝手にも思った透は、さら

に胸を押し付たまま5回目を待った。

「5、回目……………」

言いながら、膝を曲げた辺りで胸を押しつけたまま背中中少し揺らしてみた。

「ちよつ、とおるん！ 危ないって……………」

「早くー。5回目ー」

「うぐつ……………5……………」

が、揺らされる胸の圧がチラつき、そして……………足元がぐらついた。

「あつ」

「え」

「あぶねっ……………」

後ろに二人揃って倒れ、真後ろにあるのはソファアの前に設置されている木製の机。

そこに倒れ込んだ。

「ゴファアツ……………」

「ぐへっ……………」

透は背中を強打し、明里の頭が透の顎に直撃。

「いった……………」

「だから、危ないって……………怪我は？」

「平気、だと思おう……」

とりあえず、机の上から退かないと……と、まずは明里が起きあがろうとした時だ。下敷きになつている机からミシミシつと嫌な音がした。

「じゃあ、続いでのお便りを読みまーす」

そう声をかけて、次のハガキを手につつた。その前で、円香は音が入らないようにしながら飲み物を口に含む。

『円香ちゃんは面倒見が良い、とよく聞きますが、年下の子との接し方を教えて下さい』
「だそうです」

「年下、ですか……」

確かにあさひや果穂とよく絡んでいる……と言うより、からまれている。果穂は中学二年生、あさひに至っては高校二年生になったのに、二人とも落ち着きというものがあまりないにも関わらず。

「……別に、接し方なんてありません。歳下であろうと自分は自分ですから。その子に對して自分が思つた事を言っているだけです」

「……なるほど。本音で接する、ということかな?」

「まあ、はい。年下だからって特別優しくとか考えなくて良いと思います。普通に友達

に近い距離感なら友達として接すれば良いだけ。……でも、それはダメだと思った事は叱ってあげた方が良いでしょう」

あさひにカマキリのフィギュアを鞆に仕込まれた時はマジギレ寸前だった。後になって、そのフィギュアを貸したのが自分のバ彼氏である事を知り、そつちに雷とゲンコツを落としたが。

「なるほど。大人な意見だね」

「いえ、事務所にも年下が多いので、自分はそうしているのを言っただけです」

「それを言語化できるのも大人ってことだと思っよう」

「……まあ、もう大学生です。あと、透と一緒にいることも多いので。予想外のことをされることも多くて、もう大体のことは受け流せるようになったかもしれませんね」

××
円香の彼氏と彼女は、腕を組んで目の前の残骸を見下ろしていた。

あるのは、ソファーでくつろいだりする時に使う机が見事に折れている絵。武道家が自らの実力を誇示しようとしたのだろうか？ と聞きたくなるような絵だ。

さて、それを前にバカップルは、顎に手を当てて顔を向け合う。

「マドちゃんに怒られるよね」

「うん。最悪、殺される」

別に高い机ではないが、三人で暮らしている家の家具だ。

こうなったら、やるべきことは一つだ。……証拠を隠滅すると共に、机を購入して無かったことにする……！

そう決めると、透が聞いた。

「ゴミ屋さんは？」

「もう行つた。当たり前でしょ」

「とりあえず何処に隠すか、だよね」

「袋にダンクしてベランダ」

「円香、明日休みだよ。仕事の日より朝早く起きて家事しようとするの知ってるでしょ。洗濯物干してる間にバレル」

「それより早く起きて、捨てればいける」

「……よし、決まり」

怒られないようにする作戦に決めた。その為にも、まずは明日の朝までゴミを置いておく必要がある。

「とおるん、袋持ってきて。大きいの」

「何処にあんの？」

「トイレの横の扉の中」

指示を出して取りに行ってもらっている間に、明里は大きな机の残骸をカーペットの上から退かすと、カーペットを持って外に出て干し始めた。

戻ると、透が戻って来ているので、袋を受け取る。

「俺がこれ袋に入れるから、とおるんはカーペット叩いてきて」

「はいはい」

なんでいつもこれくらいテキパキ動かないの？　と言うほど、二人は引くほど素早く動いていた。怒られたくない、その一心で。

とりあえずササクレが危ないと思って机の片付けを引き受けた明里は、手早く大きい部品を袋に叩き込んで縛ると、それをベランダに持っていくと、バサバサつと音がした。

振り向くと、干していたはずのカーペットがなくなっていた。

「ふふ、落ちたわ」

「……取ってくるから、部屋の中、掃除機かけといて」

「余裕」

× 正直、不安はあった。

× 「では、続いてのおハガキいきまーす」

読み上げられるハガキ。たいして面白い返しが出来ている気があまりしていない円香は、こんなんでも良いのだろうか、と思わないでもない。

けどまあ、プロデューサーが言うには「ありのままの円香が見たいはず」との事なので、とりあえずそれに従っておくが。

さて、そんな円香の前で葉書が読み上げられる。

『樋口円香さん、いつも応援しています』

「ありがとうございます」

『ミステリアスなメンバーが多いノクチルですが、どんな家具で部屋をコーディネートしていますか？』

言われて、少し円香は顎に手を当てて、ムツと考える。部屋を細かくいじるのは大学生活がもう少し落ち着いたら、と考えていたが、まさかここで考える機会をくれるとは。

しかし、まだ細かいプランは決めていないが……なんとなく今後、どんな部屋にしたかを考えてみる。

……やはり、落ち着きのある部屋にしたい。周りにいる人間が人間なので、一人の時からいはいは本当に落ち着きたい。

浅倉透↓見た目だけ。カートに乗って爆走したりする。

市川雛菜↓ミステリアスなのは何を考えてるか分からないから。つまり、ミステリア

スじゃない。

福丸小糸↓会話が得意じゃないだけ。つまりミスティアスじゃない（かわいい）。

菅谷明里↓見た目だけ。純度100%の炭酸水（かわいい）。

プロデューサー↓うるさい（うるさい）。

と、まあ偽物のクールばかりだから。それらを総合するに……少し足がぶつかったりした時、大きな音が出る金属製やプラスチック製のものは嫌だ。

「……木製のアンティークなイメージで考えたいです。とにかく落ち着いたイメージで。部屋にいる時くらいはゆつたりしたいので」

「毎日大変そうだもんねー」

「……ええ、ほんとに」

高3の時に免許を取り、父親から「入学祝いだコノヤロー」と大学生活の間、借りる事を許された車を運転して、ホームセンターに来た。

「さて、どんな机に……て、言っても、ほぼ決まっただけだよ」

隠蔽工作のために買いに来たのだ。ほぼ似たような奴にしないで意味がない。

だが、透は何も考えずに呟いた。

「えー、せつかくだし良い奴にしようよ」

「いやいや、それじゃ意味ないでしょ」

「でも買いに来たんだしき。前の机は……そうだな。『Gが出て机の上、歩いてたから買い替えたよ、円香のために』で良いんじゃない?」

「そっか」

「この子達は本当に今年で19歳だろうか、と言う考えが、周りの人間からしたら浮かぶ所だ。」

さて、そんなわけで二人は良い感じの机を見て回る。

「せっかくだし、マドちゃんが気に入りそうなやつにしよっか」

「どんなのしろ」

「落ち着いた色の奴が良いんじゃない?」

「あー分かるわー。円香、アレで厨二などこあるし……黒とか?」

「それとガラス」

「良いね」

と、少し洒落た方向には向かっていた。でも少なくともアンティークではない。

「そういえば、ゲーム実況とかやるんだっけ。それなら、ゲーム機とか置けた方が良いんじゃない?」

「それあるわ。そうする」

「どんなのが良いかな……あ、でもガラスなだけだと冬とか机めっちゃ冷たくなりそう」
「じゃあ、買う？ テーブルクロス」

「最高」

× × などと、早くも落ち着いたイメージ路線さえ崩れ始めていた。

「では、時間も時間ですので、最後のお便り行きます」

そう言うのと、なんだかんだ結構読んできたので、いよいよ最後の一枚。残念ながら、時間的にも全部読むわけにはいかない。

逆に読み切れないほど自分に対するハガキが来ていたことが嬉しい。後で円香はそのハガキを読ませてもらうと決めつつ、とりあえず読み上げを待った。

『樋口円香さんに質問です！ 私も同じ年の大学生なのですが、いまだに恋愛したことがありません。せっかく大学生になったので、そういうのにもチャレンジしてみたいのですが、どうすれば良いのでしょうか???』

女性の方だろうか？ まずこれは円香への質問であって、別に恋愛のQ&Aではない。

「これ、俺も気になってたわ。円香ちゃん、好きな人とかいたことあるの？」

「……」

どう答えるのが正解なのか。そんなの分かっている。いない、だ。

しかし、そう答えるのは何となく嫌だった。何せ、今は絶賛、恋愛中なのだから。まあ二股とかバレたら厄介なのでアレなのだが。

だから、嘘をつかない方向でいくしかない。

「いますよ。高校一年生の時には」

「へえ！ それは初恋って事？」

「はい」

「聞きたいな。どんな子だったの？？」

「普通の子でしたよ。イケメンで、ちよつと頭おかしくて。優しくて」

「ふーん……ん？ 普通？」

「まあ、告白しないで終わってしまったんですけどね」

そう、告白しないまま片想いは終わった。

「そうなの……意外だなあ、なんだか」

「でも、その時に分かりました。恋愛なんて別に焦ってするものでもないって。まず間違いない学んだのは、自分が一番、考えている人……或いは自分の事を一番、考えてくれている人でないと、恋愛は出来ない。……ってことでしようか？」

結果、自分はそういう相手を手にしたわけだが。明里と透、二人も。

「なんか……深いね。俺今日、たまには奥さんの肩とかマッサージしようかな……」
「形に拘っても意味ないですよ」

「……ねえ、この前家のことで喧嘩になったんだけど……靴下を丸めたまま出しただけで怒鳴られたんだけど……そんなに悪いことしたかな」

「毎日、言われていることを繰り返すからでしょう。たまにいますよ、怒鳴られないと『注意されてない』って認識する人」

「……以後気をつけます」

「私じゃなくて奥さんに言ってください」

×もう、なんか普通に怒られてしまっていた。

×2×1時52分。透と明里は無事に机の設置を終えた。後は、疲れて帰ってくるであろう円香に、なるべく自然に接すること。

と、言うのも、よく考えてみたら、Gを潰した机がバキバキに割れているのはおかしい。なので、ゴミ袋だけは絶対に見られてはいけないのだ。

十中八九、机が変わっていることはバレる。その時のリアクションをなるべく自然にしないといけない。

「……よし、練習しよう」

「良いね」

はい、バカである。明里が円香役で、透から練習。家に帰ってくるところから始めるため、明里が扉を開けた。

「ただいま、我が親愛なる姉と弟達……」

「プハっ……！　　そ、それどこの世界の円香……！」

「おやおやおや、どうしたんだい？　このビューティホーな机は。前の安物の机のことなんか忘れて、今夜はこいつの前で語り明かそうじゃないか」

「ふふっ……！　　何で王子様になつてんの……！」

透が静かに爆笑している時だった。スマホが震える音がする。

「あ、ごめん。たんま」

円香からチェインだ。内容を見ると「電車遅れてる。先寝てて」らしい。

「電車遅れてるってー」

「マジかー。行く？　　迎え」

「勿論」

そんなわけで、二人は準備を始めた。

「あ、でも練習どうしよつか」

「何とかするしかない。車の中で」

「よし、やるか」

「なんか、役者みたいじゃない？」

「わかるわ」

××「なんて話しながら「迎えに行くよ」とだけ返事をして、二人で車に乗った。

×「正直、ラジオ疲れた、と言うのが円香の感想だった。そこに来て、まさかの人身事故。勘弁してよ……と、思ったのだが、わざわざ迎えに来てくれるという。

「ふふ……ほんと。そう言うよ」

ラジオで自分が言った発言を思い返し、思わず少しだけ笑みが溢れる。こんな時間以外に出てくるなんて面倒臭いだろうが、円香のことを考えてわざわざ来てくれるのが嬉しかった。

まあ、正直に言うて来るって言うと思っていた。でも、今日は二人で何してたんだか知らないけど、楽しむなら三人で、って考えだからだ。

透にしても明里にしても、本当に良い人達と巡り会えた……そんな風に思いながら、
×××りあえずカフェで待機することにした。

××しばらくして、迎えが来たので車に乗って移動し、家に到着した。車庫に車をしまい、

家に到着。

その直後、透と明里が「あつ」と声を漏らしたのを、円香は聞き逃さなかった。

「何？」

「何でもない。それより、ご飯にする？ お風呂にする？」

「何隠してるのか教えて」

流石の嗅覚だった。が、2対1。すぐに透と明里は誤魔化しに掛かる。具体的には、明里の出番である。

円香の前に立ち、顎に指を添え、頬にキスをした。少し、ほんのりと頬が赤くなる円香。その円香に追撃するように、明里はイケメンボイスを作っていった。

「いけないな、年頃の女性が人混みに紛れてきたままでは……まずはシャワーを浴びて、さっぱりして来なさい」

並の女性なら、これだけでダメーজを受けるところだろうが、目の前にいるのは並の女性ではなかった。

円香はその明里に対し、胸ぐらを掴んで自分の方へ引き寄せ、唇に吸い付いた。

「んんっ……っ？」

ただのキスにも関わらず、長く押し付けること数秒、ようやく離れた。顔を真っ赤にして目をぐるぐる回す明里の横に、さらに手をついて下から睨み上げる。

「何隠してるの？ 言ってる」

「は、はひ……」

「この雑魚キャラ……」

ため息をついた透が、すぐに白状しようとするバカの襟を掴み、自分の後ろに引き摺り込む。

「何、透。邪魔しないで」

「いや、ホント何にも隠してないから。だから絶対、ペランダには出ないで」

「分かった。ペランダね」

所詮はバカが二人、重なっただけだった。ズンズンとリビングの奥に向かう円香。もう安心して何にも考えられていない明里など放置し、慌てた後を追った。

「や、ほんと何も無いから！ ていうか、むしろ別の場所……そう、リカの部屋に隠した！」

その言葉に足を止める円香。聞いてもらえたのかな？ と、透がホツとしかけたのも束の間、円香が足を止めたのはソファアの斜め前。そしてその前にあるのは、買った机。

「机……新しくなってる」

「あ、あ……そ、そう。実はいたの、その上にGが。それで、リカが叩き潰してくれた

んだけど、飛沫がジオングみたいに飛び散ったから……」

まったく聴こえていないかのように円香は机の下に片膝をつく。木のかげらでも落ちていのだろうか？ いや、でも掃除機で全部吸ったはず。カーペットにしても、ちゃんとカケラが出るように外ではたきまくったはずだ……なんて思っていると、円香が撫でたのはカーペットの下の床。

「……凹んでる」

しまった、それはそれで怒られる、と思った透は、もう弁明を諦めた。

「全部、リカがやりました」

それさえも無視してベランダを開け、目に入ったのはバラバラになった机が袋に詰められている姿だった。

「……」

「……」

「……」

沈黙が流れた。透が走って逃げ出した。円香が走って追いかけた。廊下で項垂れていた明里の足に躓いた。その隙を逃さず円香が飛び掛かった。見事なキャメルクラッチが決まった。

××

「……で、なるほど。二人で王様ゲームしておっぱい押し付けて転んで机壊した、と」

「その言い方勘弁して」

「は？ 事実でしょ」

「スミマセン……」

秒で黙らされた。正座させた透に、とりあえず事情を聞き出しているところだった。

そんな中、明里はようやくやくテレがおさまってきた所のように、ハツとして透に声を掛ける。

「そうだ、とおるん。ちゃんと隠せた？ 机の事」

「あ、バーカ」

「……へー。リカも隠す気満々だったんだ」

「え？ え？」

「正座」

「あ、は、はい……」

一緒に並んで座らせる。バカ二人とも、自分がラジオで言ったことを全部、裏切ってくれたものだ。誉めて損したと言うものだ。まあ少なくとも明里の事は言及していないわけだが。

「迎えに来たのもご機嫌取りだったわけね……」

「あ、違うよ、それは」

「……は？ 無理だから。この期に及んで言い訳しないでくれる？」

「いや違って。そこは私が行こうって言って、リカも勿論って……」

「あ、うん。それはまあ……そうだけど」

「……」

ちよつとだけ、円香の頬が赤くなる。自分も最初は「そう言ってくれると思ってた」と思っていたことを思い出す。

そういうところだ。いくら憎たらしい真似をされても好きでいてしまうのは。

「……マドちゃん？」

「超照れてるじゃん。ウケる」

「透うるさい」

「可愛い！」

「うるさい」

「何で俺だけぶつの……」

明里に制裁を加えた後、しばらく俯いて悶える。そんな話を聞いた後では、叱りつけるなんて無理だ。……いや、まあそれとこれとは話が別だが。

「……美談を聞かされても、怒るには怒るから。次、家の備品壊したら往復ビンタね」

「え、お、往復するの……?」

「めっちゃぶつじゃん。ウケる」

「今される?」

聞かれて、二人とも慌てて首を横に振った。

「……じゃあ、今日はもう休むから。あんた達も、明日朝から仕事でしょ。先に寝て。私はお風呂」

「ご飯、用意してあるから。チンして待ってるね」

「話聞いている?」

「待ってるから」

「……勝手にして」

人を労わる時に限って、押しが強い。そんな所も嫌いじゃない。

××そんな風に思いながら、とりあえずシャワーを浴びに行った。

××戻ってきた。今日の晩御飯は何だろう、何でも良いけど、なんてご機嫌になりながらリビングに戻ると……。

「やばいって、早く片付けて」

「分かっているって。一日に二回も備品壊したってバレたら流石に殺される」

「どうすんのこれ？」

「外に埋めよう。どうせ安物だし、明日になって買っておけばバレな……あ」
「……」

皿を割ってしまった尻拭いをする馬鹿達を見つけ、次は容赦をしなかった。

素直さと節操のなさは紙一重。

大学の授業にも慣れてきて、中間考査という、期末考査の成績が全てなのでプラス査定にはならないのにマイナス査定には働くクソ試験を終えた日の事だ。

円香から一通のチェインが届き、明里はそれに視線を落とす。

マドちゃん『試験終わった？』

LIKA☆『終わったよー』

恐らくだが、円香と透も終わったところだろう。別の学科だと時間がずれたりするのだが、今の時間は両者とも同じ時間に行われた試験だったのでお昼を合わせられる。

マドちゃん『お昼。食堂で良い？』

LIKA☆『うん。今から行くね』

さて、そんなわけで待ち合わせ場所に向かう。多分、透も一緒だろう。今日は何を食べようか。ラーメンか、それともそばか……なんて考えながら歩いて、食堂に到着した。入り口の近くで透と円香が待っていたので、手を振って合流する。

「お待たせ」

「遅い」

「お疲れー」

「とおるん、試験どうだった？」

「え、なんで私だけに聞くの？」

「私は出来たって分かってるからでしょ」

「いや、勿論出来たから。余裕だった」

嘘くさ、と思つても口にしない。まあ本人が出来たというのならそれで良いし、それで単位を落としたら手伝つてあげれば良いだけだから。

「まあ、もしピンチの時はいつでも言つてね。俺はあんま力になれないけど、応援はするから」

言われて、透はほわんほわんほわわーんと想像する。応援してくれる明里……今ではもうイケメンから発せられるゆるゆるのホワホワオーラに慣れてきてしまったが、そんな彼からの応援……あーだめだ。可愛い。

「ピンチになつちやおうかな」

「リカ、甘やかさないで」

「えー、でも留年したら困るでしょ？」

「透がね。私もリカも困らないから」

「ふふ、超冷たいじゃん。マドちゃん」

「あんたまでその呼び方しなくて良いから」

透に冷たくそう言い放った後、円香はすすすつと明里の前に移動する。

「それより、いつも真面目にやってる方の彼女こそ、甘やかされるべきなのでは？」

「……」

きゅんつときた。明里の胸の奥に、先端がハートの矢が突き刺さったように、頭にくらつときた。

ホント、円香も素直に甘えるようになったものだ。可愛いったらない。

「良いよ、マドちゃん。おいで」

「は？ 人前で甘えるわけじゃないでしょ。冗談に決まってるじゃん」

「えー……可愛かったのに」

「うるさい」

やはり素直じゃない。「ちよつと惜しいことをした」という表情が見え隠れしている。

そんな円香を嘲笑うかのように、透が明里の腕に自分の腕を絡めて身を寄せた。

「じゃ、私は甘えるー」

「は？」

「おー、とおるん。おいでー」

「……は？」

「わーい」

ぎゅーつと二人で身を寄せ合う……のを、円香は目の前で見物する。とてもアイドルがしてはいけないような形相で。

でも、ぶつちやけて言うのと、素直になりきれなかった円香にも非はあるわけであつて。むすつといつもの細い目をさらに細めた円香は、横から手を伸ばし、明里の頬を抓つた。

「いふあふあふあ！ な、何!?？」

「大きい胸を向こうから押し付けてきてくれて良かったね。むつつり」

「ええっ……な、何その斜め上の罵倒……」

「……家帰ったら覚えてて」

「え、あ、暗殺でもする気……?？」

「どうでしょうね」

「二人とも、早くご飯食べよ」

透に腕を引かれ、そのまま三人で席を取りに行つた。

各々、食べたいものの食券を券売機で購入し、それを食べ物と引き換えて席につく。

「で、リカは試験どうだったの?？」

「多分、満点」

「ホントそう言い切れるのすごいよね……」

そうは言われても、出来は自分でも最高だと思っただから仕方ない。分からない問題がなかった。

「てか、まあ中間考査なんてある科目とない科目ある程度の試験だから、大した問題出なかつただけだね」

「ふーん……良いなあ」

「こっちは普通に応用とか出た」

「まあ、そこは教員次第だから」

なんて話しながら麺を啜る。ふと、透のスマホが震えたので、透はそつちに視線を落とす。

その間に、明里は円香に声を掛ける。

「マドちゃん、今日は予定あるの？」

「ない。午後の三限終わったら帰るだけ」

「じゃあ、待ってるね。図書室で」

「ん」

「知ってた？ この大学の図書室、映画見れるんだよ」

「へえ。何あるの？」

「ナ〇ル殺人事件とか、オ〇エント急行殺人事件とか」

「……要するに、英語の勉強用のやつね」

「面白いよ？ 頭良くなれるよ？ 総理にもなれるよ？」

「なれないしなりたくない」

「じゃあ見ない？」

「……そうとは一言も言っていないでしょ」

「ふふ、じゃあ今度ね」

なんて話しながら、明里と円香は微笑みあう。そんな中、さつきまで携帯をいじっていた透が口を挟んだ。

「私も見たい」

「もちろん。三人で見よう」

「ん。でもネタバレしたらビンタするから」

「ふふ、しないから。そんな事」

×なんて話しながら、三人で食事を続けた。

×

さて、放課後。学校が終わり、今日の晩飯何にしようかーなんて考えながら帰宅していた時のことだ。

「あ、二人とも待った」

珍しく、透が帰宅中に停止を呼びかけた。何かあったの？ と、二人して振り向くと、透は腕時計を見てから辺りを見回した。

「多分、そろそろ……」

「何？」

「なんかイベント？」

「と、透ちゃん……!」

そんな中、ポワポワした声が三人の元に届く。振り向くと、そこにいたのは櫻木真乃だった。

こちらに小走りで駆け寄ってくる見ただけで癒やされる少女に対し、透は片手を上げて構えた。

「あ、来た。いえーい、真乃ちゃん」

「い、いえーい」

なんかハイタッチしている二人。唐突に顔合わせが始まり、少しだけついていけない明里は「えーつと……」と声を漏らす。

「ドユコト？」

「あれ、言っただけじゃなかった。真乃ちゃん」

「あーなんか、聞いたことあるわ。イルミネの」

「そう。かわいいでしょ」

「うん。可愛い」

「は？」

「ええ……そこ怒るの……？ ていうか、してたの？ 待ち合わせ」

「うん。してた」

「そっか。じゃあ、先帰ってるね」

「え？ あーうん。じゃあ私達、後ろ歩く」

「え？ あー、うん。向こう行くのね」

「多分そう」

「櫻木さん、どうしたの？」

バカ二人の頭が空っぽになる会話を無視して、円香は真乃に声を掛けた。

「実は、透ちゃん達を通ってる大学、私も興味があつて……そしたら、大学生活のこと色々教えてくれるって言ってくれてね……！」

「そうなの」

「う、うん……通ってる、先輩3人で……！」

「……そう。ま、それならうちでご飯食べてく？」

「い、良いのかな……」

「全然平気。今日、ご飯の当番、透だしちょうど良い」

「あ、ありがと……!」

話を手早くまとめると、円香はいまだに中身がない会話をしているアホ二人の間に入る。

「透、人呼んでるならそういうのは先に言つて」

「え? あーうん。オツケー。マジ、オケ臣オケ足」

「……ほんとにわかつてる?」

「ふふ、めっちゃ信用ないじゃん」

「リカのパンツが床に落ちてたら、私達以外の人に見られても良いのね?」

「……次から気をつけるわ。めっちゃ」

「あの……なんでいちいち俺を引き合いに出すの……?」

明里の言うことなど無視して、とりあえず真乃に視線を向けた。

「じゃあ、ついておいで」

「は、はい……!」

××

家に向かうまでの途中で、真乃と明里は自己紹介を終えておいた。まあ幸いにも、基

本的に家事ができる人間が二人いるこの家では、透が一人で放っておかれることでもない限り、散らかる事はない。もしくは、明里がバカみたいにコレクションを増やさない限りは。

さて、そんなわけで、家に入った。

「ごめんね、真乃ちゃん。ちよつと散らかってるけど」

「う、ううん……！ 全然、平気」

「散らかす筆頭が謝らないで」

「ま、まあまあマドちゃん。今度、散らかしたら自分で片付けてもらうって事で……」

「だから、甘やかさないで」

「え、あ、甘やかしてるかな」

「……ほんと、自覚がないのが一番の罪……櫻木さん、上がって」

「あ、う、うん……お邪魔、します……！」

……と、真乃を奥に案内する。手洗いうがいを済ませて居間に入ると、真乃は「ほわつ……」と声を漏らす。

「す、すごい……シエアハウス、だっけ……？」

「そっだよ。私達の愛の巣」

「あ、あはは……」

反応に困るのか、真乃は少し苦笑い。晩御飯にするにはまだ少し早いので、大学のことを話す事にした。

ソファの前で、真乃と透と円香が話し始める。

「それで、どんなこと聞きたいの？」

「え、えっと……授業の感じとか、かな。みんなアイドルと普通に両立させてるけど……実際、厳しかったりすること、ないかなって。レポートとか……その、どれくらい時間がかかるのか、とか……」

「どうなの？ 円香」

自分でやるより円香に手伝ってもらう方が多い透に聞かれた円香が、もう慣れた様子で答えた。

「まあ、モノによるけど、まだあんまり難しい科目には当たってないから。……そもそも入る学部によると思うし」

「あ、そ、そっか……！ 一応、生物学部を考えてるんだけど……」

「それなら……」

チラリと二人は台所からおぼんを持ってくる男に視線を移した。その男は、キョトンとした顔で3人の前にコップを置く。

「はい。午後のレモンティーしかなかったから、とりあえずそれね」

「ほわっ……あ、ありがとうございます」

「ううん。あとお菓子用意するから待っててね」

「い、いえ！ そんなお構いなく……」

「いやそんな大したもん出さないから。今あるのは……あ、冷凍に今川焼きあつたつけ」

「結構良いものをいただいでしまうのでは……」

「ていうか、リカ。そっちは私やるから、あんた聞いてあげて」

「用意しようとした明里を、円香が引き止めた。」

「生物学部を考えてるんだって」

「あー……え、それで俺に？」

「そう。答えてあげたら？」

「分かった」

と、入れ替わりで明里は座り、円香が準備しに行った。

真乃と向かいに座った明里は、そのまま自分で淹れた飲み物を飲みながら聞く。

「で、何を知りたいの？」

「あ、は、はい……！ えつと……どんな授業があるか、とか……そういうのです」

「てか、まずなんで生物学部？ 就職するなら他のところ幅広だよ」

「真乃ちゃん、鳥が好きだから」

「は、はい……!」

「美味しい焼き鳥食べたかったら、料理専門学校にした方が良いんじゃないの?」

「あ、そうかも」

「え? あ、あの……いや……」

「でしょ。鶏肉は火が通りにくいからね。それだけ火入れの技術が味に影響しそうな気がする」

「分かるわー。こう……蒸すか揚げるかのな?」

「え、いやムスカ上げちゃダメでしょ。絞めない」と

「あ、絞めてオープンで焼く的な?」

「グロ」

「え?」

「え?」

「……」

ついていけなくなって、思わず困ってしまう真乃。この人達は何の話をしているのだろうか? いつの間にか明後日どころか2年後くらいにまで話が飛んでいる気がする。

そんな中、ふと透が呟いた。

「あー……今日の晩御飯、なんか鳥食べたくなってきたわ」

「良いね。俺もラピユタ見たくなってきた」

「じゃあ、ラピユタ見ながら……タンドリーチキンでも食べよつか。真乃ちゃんもそれで良い？」

「う、うん……ご馳走になって良いなら……」

なんかもういいや、と軌道修正を諦めて、真乃は苦笑いを浮かべた。

そんな中、チーンツと電子レンジの音がする。どうやら、冷食の今川焼きが完成したようだ。

「あ、出来たんじゃね？」

「タンドリーチキン？」

「え、いつ作ったの？」

「分かん。でも円香ならあり得る」

「確かに」

「ふ、二人とも……それはさすがにないんじゃないかな……」

そんな目に見えて困ってしまっている真乃。この二人の会話、あまりにも独特が過ぎる。

それでもそこには、もう一人いる。辛口に聞こえるかもしれないが、よくよく3人のやりとりを聞いていると、むしろ当然のことしか言っていない女性が。

「お待たせ」

「ほわ……あ、ありがとう。円香ちゃん……」

「さんきゅ、マドちゃん」

「ありがとう」

「で、どこまで話せたの？」

「どこまで話したっけ？」

「えーつと……あれ。タンドリーチキン」

「そうだ。マドちゃん、今日の晩御飯、櫻木さんがタンドリーチキンが良いって」

「……つまり、何も進んでないわけね……」

ダメだこいつら、と言わんばかりの表情になった後、円香はオボンの上から自分と真乃のお皿だけ机の上に置いた。

「はい、櫻木さん」

「お、美味しそう、だね……!」

「あれ、私とリカのは？」

「あんたらは相談をちゃんと聞いてから」

「私はないでしょ。関係」

「邪魔したでしょ。確実に」

当然である。

改めて話を聞くことにした。

「で、生物学部にきたいんだっけ？」

「は、はい……………」

「なんで？ 何か将来したいことでも？」

「いえ…………色々とチャレンジしてみたい事はありますけど…………とりあえず、一番自分が興味ある学部に行きたいなって…………」

「あーそっか。アイドルだから、就職先は決まってるのか」

「言い方」

円香が横から茶々を入れる。果たしてアイドルを「就職先」と言つて良いものなのか。

「水を差すようで悪いけど、生物学部なんて余程、目的がないとあんま意味ないよ」

「ほわ…………？」

「分かつてるかもしれないけど、生物学部って別に生き物の生態を詳しく学ぶとかじゃないから。いや、そういう授業もあるけど、基本的にはどの生物にも共通の身体の仕組みとか、内臓の働きとかそういうのだから。割と退屈するよ」

「そ、そうですか…………」

「うん。俺はそういうのも楽しいけど…………フィールドワークとか一年のうちはないし、

数学とか英語もやらないとだし……ま、俺もまだ一年だから詳しい事はわからないけど、決める前に考えといた方が良いよ」

「……ありがとうございます。でも、大丈夫です」

意外と厳しいとか教えるんだ、と円香は明里を意外そうな表情で眺める。何故、それを透にもしないの？ と不思議そうにもなっていたが。

「なら、まあ大丈夫じゃない？ 一年の時は難しい問題でないし。今日、中間あつたけど、多分、俺満点だし大したことないよ」

「ほわっ？ ま、満点……？」

「うん。もし来るなら、色々と楽な授業とかレポートのコツとか教えるよ。……ちゃんと、櫻木さんがアイドルと両立できるように、ね？」

「ほわっ……」

にこりと微笑まれ、頬を赤く染めて目を丸くする真乃。ただでさえイケメンなのに、その上おやつの準備をしてくれる気遣いと、とても彼女が二人いるとは思えない……いや、逆にだからこそなのかもしれない柔らかなく優しい声音……これが年上の男性の包容力か、と思わずときめき掛けてしまった。

当然のことながら、透も円香もビキッと青筋を立てる。

「こんなところで良い？ 他に聞きたい事は？」

「あ、じ、じゃあ……せつかくなので……」

「鳥が好きなんだっけ？ あるよ。鳥類の授業。教科書読む？」

「い、良いんですか……？」

「うん。その方がどんなことするのかイメージしやすいでしょ？」

「は、はい……！」

「じゃ、今から用意す……」

言いながら明里が立ち上がろうとした直後だ。その明里の真横を、張り手でも張る勢いで本が通り過ぎた。風圧だけで耳を取られそうな程の殺気を感じ、思わず明里は静止してしまう。

「はい、真乃ちゃん。教科書」

その声は透の声だった。それも、とびきり冷たい奴。おそらく、明里の鞆から勝手に漁ったものだろうが……なんでそんなにブチギレているのか気になる所だ。

「ありがと、透ちゃん」

「……と、とおるん？ ビックリしたなあ、もく。急に人の横に手を通すの危ないよ」

「じっくり読んで。なんなら持って帰って出しちゃっても良いから。ちり紙交換に」

「よくありませんが……？」

「あ、あはは……そ、それは遠慮しておこうかな……」

割と本気で言っていた。なんでそんな急に意地の悪いことを言うのか……と、明里は透を見るが、こちらに目を合わせようとしない。どうやら、ブチギレている様子だ。

察しの悪い明里でもすぐにわかった。つい、円香や透と同じ事務所の人だし、同じように親切な対応をしてみました。彼女の前でやるのは良くなかった。ん？ でもいい時にそれやっても怒られない？ あれ？ 詰んでない？ と、一人で頭の中がグルグルと回り始める中、円香がさらに口を挟んだ。

「リカ、飲み物。櫻木さん飲み終わってる」

「え？ あ、でも俺、生物学部のこと他に……」

「……」

「行つてきます……」

残念ながら、有無を言わすつもりはなかった。

バカを追い出した後、改めて円香は聞いた。

「他に聞きたいこととかある？ 学校の設備とかについて」

「え？ えーつと……そうだな……食堂のご飯とか、美味しい？」

真乃は真乃で割とドライに追い出された明里の事は気にしていなかった。いや、気にはしていたが、透と円香の手前、気にしないようにしていた。

「美味しいよ。まあ円香とかリカのご飯のが美味しいけど」

「……カフェのケーキ、あれは普通に美味しかったかな」

「う……噂には聞いてたけど……大学って、本当に学内にカフェとかあるんだね……！」

「うん。あるよ」

「ま、学校によつてはあんま美味しくないらしいけど」

「ほわ……じ、じゃあ……そこで勉強して、そのまま事務所とかにも……行けるのかな」

「私と円香はよくやつてるよ」

「ダウト。私は勉強してるけどあんたは寝てる」

「あ、あはは……」

そんな会話に苦笑いを浮かべる真乃。ホント、会話がコントみたいな二人だ。いや、事務所では四人でコントしているし、プライベートでは三人なのかもしれない。

自分にそういう経験があるわけではないが、こういう関係だから二股という普通ならありえない三角形でも成り立っているのかも……なんて少し納得していると、後ろから明里がペットボトルの蓋を緩めながら戻って来た。

「お待たせ！ 持ってきて……うわっ」

「あっ」

が、足を躓かせ、盛大に転んだ。転んでしまった。……円香の頭の上に、ペットボトルの飲み口が下を向いて。

「わ、わー！ ごめんマドちゃん！」

「……最悪」

「レモンもぎたて♡にーちゅ」

「……」

「マドちゃん落ち着いてー！ キレないでー！」

「ふふっ、ヤバっ。殺されるわ」

「笑つてる場合か！」

と、一気に騒がしくなる。ソファアーの上にある抱き枕を大剣のように担いだ円香、それを止める明里、そして逃げる透。

これ、大丈夫なのかな……と、真乃が少しオロオロしそうになった時だ。ふと、さっき自分がときめきかけた明里が再び目を覚ます。

上着を脱いだ明里がそれを濡れたままの円香の頭にかけてと、にこりと笑みを浮かべて告げた。

「マドちゃん。ヤンチャも良いけど、一先ずシャワーを浴びておいで。甘い香りを漂わせたままじゃ風邪引いちゃうから。……片付けは、俺がしておくからさ？」

「ーっ……！」

流石、現役モデルである。その破壊力は、彼の事が大好きな彼女であれば一瞬で焼き

死ぬ程の瞬間火力を誇っていた。

オーバーヒートしてしまった円香は、一瞬にして頬を真つ赤に染め上げると、思わず手が出てしまった。

ヒユツパアンツという小気味悪い音が明里の頬を真つ赤に腫らすと、真つ赤な顔のまま告げた。

「最ツツツ低。そもそも、ボトルひっくり返して甘い蜜ぶちまけたのあんただから。あんたが片付けるの当たり前だから」

「……いい、痛い……」

「シャワー。戻って来るまでに片付いてなかったらアンパンマンにするから」

「だって。リカ、頑張つて」

「透、あんたはどちらにせよアンパンマンだから」

「えっ」

なんて話しながらお風呂の方へ向かう円香。真乃は見逃さなかった。その時の円香の表情は、結局真つ赤に染まっていたことを。

いつも事務所ではクールで、騒がしい子達にも好かれていて、それでいて意外とノリが良い所があるけど、基本的に表情を崩さない子でも、ああいう顔になることがあるんだな、なんて少しほっこりしてしまった。

「……ふふ」

「お、なんか楽しそうじゃん。真乃ちゃん」

大慌てで床とソファアを片付ける明里を眺めながら笑いをこぼすと、透が口を挟んできた。

「うん……円香ちゃんも、彼氏さんの前だと……ああいう顔するんだなって思つて」

「あー、うん。するよ、めっちゃ」

「良い人なんだね、菅谷さん」

「うん。でも……とつたらダメだよ？」

「ほわ？」

そんな声が聞こえて、ふと横を見る。いつもと同じ何を考えているんだか分からないが、おそらく何も考えていない表情……なのだが、ほんのりとピアスがついた両耳だけ赤くなっている。

「透ちゃんも、なんだね」

「うん。超好き」

「あー……そうだ、二人とも。先に飲んで。レモンティー」

片付けている最中の明里が、二人のコップにレモンティーを注ぐ。その明里に、透が声を掛けた。

「手伝おうか？ 掃除」

「いや、いい。余計に汚れそうだし」

「……嫌いだよ。やっぱ」

「えっ」

「と、透ちゃん……」

×今のは明里が悪い、なんて思いながらも、やんわりと真乃は落ち着かせた。

×

×さて、要件は終わり、最後に夕食。それらを終えて、明里が真乃を駅まで送った。

で、家に戻って来るとちちょうど透が洗面所から出てきた所だった。

「おっ、帰ってきた」

「ただいまー」

「おかえりー。お風呂入っちゃえば？」

「んーそうする」

適当に挨拶だけして、明里は洗面所に入った。手早くシャワーを浴び終えて、湯船に浸かる。

しかし、今日は円香や透に悪いことをしてしまったのかもしれない。そんなつもりはなかったのだが、年下の女の子に、普通に接しただけで不愉快な思いをさせてしまった。

いや、あの対応も普通ではなく、ナンパ男に見える行動だったのかもしれない。

自由度の高い大学で別の学部に行つて、少し不安にさせている可能性もあるし、実際自分もあの可愛らしい二人が他の男に言い寄られないか不安でもあるし。

次からはもう少し考えないと……と、思いながらお風呂から出て、身体を拭く。

「とりあえず……何か明日、お詫びでも買つて来ようかな……」

なんて呟きながら、髪を乾かしてパジャマに着替えてお風呂を出た。リビングに戻る、のんびりとテレビを見ていたのは円香だけ。

「ただいま、マドちゃん」

「おかえり」

「とおるんは?」

「寝た。明日、朝早いから」

「そーいやそーうか。……あれ、てかマドちゃんも早くなかつた?」

「ん。だから早く隣座つて」

「? う、うん?」

なんで? と明里が小首を傾げたのも束の間、とりあえず座つた直後に円香は体重を預けてきた。

「ま、マドちゃん?」

「ん、別に私怒ってないから。頑張らない彼女と彼女でもない歳下の女の子を、いつも頑張ってる彼女より優先されても全然、怒ってない」

「うぐっ……………ごめん……………」

「だから、別に怒ってないけど？」

「い、意地悪……………」

「どっちが意地悪？」

「だ、だからごめんって」

「許して欲しかったら……………」

そう言いかけた円香は、そのままスルスルと肩から膝に頭を置いた。

「寝るまでこのまま。私が寝たら、ベッドまで運んで」

「……………」

そのまま、二人でまったりとリビングで過ごした。

勿論、先に明里が寝落ちして、円香が自分の寝室に運んで寝た。

雨の中、ずぶ濡れになろうと効かない奴は効かないから。

親元を離れ、家事を全て自分たちでやらなければならぬ事にも慣れてきた円香は、割とそれくらい楽勝なのでは？　と思うようになって来ていた。

それも当然。去年まで明里のために色々やって来たからだ。家事が出来るのに、それがちよつと環境が変わつた程度では困ることなんて無い。母親からも「これならお嫁に出しても平気ね」と太鼓判を押された程だ。

しかし、それはあくまで通常の流れの話。家事というのはやって当たり前、長く同じことをループさせなければならぬものであつて。

従つて、季節による変化も少くないのだ。

「また雨……サイアク」

そう、梅雨である。ザーザーに降り注がれる雨の中、円香は心底うんざりした様子で呟いた。

これで三日連続の雨。洗濯物は溜まる一方だが、減ることはない。洗つても良いが外には干せなくて、室内に干しても乾くのに時間食うし、イラつく一方だ。

こういう場合は、一人暮らしの先輩に聞くしかない。

「リカ、あんた梅雨の日とかどうしてたっけ？」

「普通に室内に干してたよ。いつもより小まめに洗濯するようにして」

「……あつそ」

「あつ……り、リカつ……もつと奥」

「とおるん、あんま耳掃除つてしない方が良いんだよ。気持ち良いのは分かるけど」

「……」

彼氏に耳掃除をしてもらう幼馴染にちよつとだけイラっ☆ としつつも、とりあえず言われた通りに回すことにした。

小まめに、と言うことは量は洗わないのだろう。干す場所に限りはあるのだから。

そんなわけで、円香は普通の生活の中で特に使うものをチョイスして洗濯機を回す。

「はい、とおるん。終わったよー」

「ありがとう」

「……や、退いてよ」

「やだー」

そんな声が聞こえて来て、少し円香はウズウズしたので邪魔することにした。耳かきを前に設置してある机の上に明里が置いたのを見るなり、廊下から戻って来て突撃した。

背もたれの上によじ登り、身体を横にして転がり落ちる。

その結果……背もたれと彼の背中の方に顔が挟まった。

「……何してんの？」

「もごもごもご……」

「……いやもごもごじゃなくて」

「ふふ、円香超バカになってるじゃん」

「ふがふが」

「今、うるさいって言った？」

「言ってたわ、絶対」

「ーっ！」

「あ痛あ！ た、叩かないでよー」

なんてやりながら、三人でその日はダラダラした。こういう日もたまには悪くない、

そんな風に思いながら。

×

×
だが、そんな日々も長く続けばやはり面倒になるわけで。外に出るのもしんどいの

に、満足に出掛ける気も失せる日々に、円香はうんざりしてしまっていた。

「梅雨最悪……」

「俺、今からカエルかカタツムリ探しに行くんだけど、二人とも来る？」

「行かない」

頼むから年齢を考えて欲しい。なんでそんなに小学生なのか気になるところだ。

「じゃあ良いよ。俺一人で行ってくるから。後でカタツムリ見たくなくても知らないからね」

「ならないから」

どうやったらそんな情緒になるのか知りたい。カタツムリを生で見たくなる感情とか、過去に一度もなかったし今後もし生涯ないと断言出来る。

そんな中、透が手を上げた。

「あ、ついでに買って来て。アイス」

「良いけどいつ帰ってくるか分かんないよ。見つかるまで帰らないし」

「良いよー」

「マドちゃんは何かいる？」

「牛乳」

「お、円香。バストアップ？」

「……」

「いつてきまーす」

後ろで騒がしくなったのを無視して、明里は散歩に出掛けた。

外出自体、別に嫌いじゃない明里は、雨の日だろうとこうして外を歩くのが好きだった。生き物が見られるのなら、どんな天気だつて構わない。

それに、雨の日にしか顔を出さない生き物は頭の中で勝手にSSRだと考えている。写真撮つて送つてあげようかなーとか呑気に考えながら、傘をさして歩く事しばらく。

川の上にかけてられている橋の上を歩き始めた時だ。ふと目に入ったのは、段ボールに入つた犬が流れてくる所。

「ほわっ!!?」

なんてベタな！　なんて思いながらも、明里は川の中に飛び込んだ。六月とはいえ「超暑い！」というより「蒸し暑い！」という季節。つまり、気温は雨の日であることもあつて低め。普通に川の水は冷たかつた。

しかし、そんなこと気にならないのが、スイツチの入つた明里であつて。明里ができる三種類の泳ぎのうちの一つ、バタフライを使用した。ちなみに他二つは平泳ぎと犬かきである。

特に極めに極めたドルフィンキックによつて一気に加速。ダンボールにあつという間に追いついた。

そして、中を見ると……ぬいぐるみだった。

「つ、ほ、本物じゃなくて良かった……」

とりあえず安堵し、身体力を抜いて岸に上がった。雨の日の川の中、普通に泳いで上がって来た時点で割と中々なのだが、どうにもそんな場合ではない。何せ、ずぶ濡れなのだから。

割と土手を通りかかる人から不審者を見る目で見られたが、気にせずに橋の下に入る。慌てていたので傘を持ったままバンザイ飛び込みして、傘をいつの間にか手放してしまった。……まあ、もう傘をさしても仕方ないレベルで濡れているのだが。

さて、この後はどうするか。とりあえず、2人に連絡する事にした。

「……」

樋口円香は、少し後悔していた。一緒に行けば良かったかな、と。もしかしたら、気晴らしのつもりで散歩に誘ってくれたのかもしれないのに、つい「またバカなこと言ってる」と決めつけて切り離してしまった。

確かに、このままずっと家の中でレポートをしても気が滅入るだけだし、気分転換に外に出てもよかったのかも……なんて思っていると、同じ提出課題なのに手を動かしていない透が「あっ」と声を漏らした。

「そうだ。リカにコーヒーゼリーも買って来てもらおう」

「……」

この女は相変わらないうさだ。この子は本当に明里のことが好きなのか怪しい所だ。まあ、その辺読めないのが、透なのだが。

「ていうか、行つちやう？ 迎え」

前言撤回。やっぱり分かりやすい。自分と同じことを考えていた。

「……良いよ。行こうか」

「いえーい、見事に乗せられたー」

「違う。あくまでリカの為だから」

「や、私と円香が。リカに」

「……それも違うでしょ」

乗せられたわけじゃない。あくまでも、なんかパシリにさせたみたいで嫌だったただだ。

そんな中、インターホンが鳴り響く音。お客さんだろうか？ 応答しようとしたが、

その前に大きな声が玄関から聞こえて来た。

「マドちゃんかとおるんー！ タオル、床に敷いといてー！」

「リカ？ 早くない？」

「ずーぶー濡ーれー！」

「えっ」

なんで？ 傘持ってなかった？ なんて思ったのも束の間、扉をとりあえず開けると、プールの中に飛び込んだんですか？ と思ってしまうようにずぶ濡れの明里が立っていた。

「……なんでそんな濡れ鼠？」

「え？ あー……川に落ちた」

「は？！？ 怪我は？！？」

「え？ あーそっか。そうなるか。傘壊れた」

「……つまり、誤魔化さないといけないくらいバカな理由でそうなったわけね？」

「……」

黙った。はい凶星、とすぐに把握した円香は、ジロリと尋問用の視線にシフトチェンジ。

「何したの」

「……ダンボールに乗って流されているぬいぐるみを本物と間違えて川の中、ダイブしました」

「バカなの？」

「うぐつ……」

ぐうの音も出ていない。そもそも明里ならば、よく見れば見分けられたはずだ。

「……透、床にタオル敷いて。リカはそこで待ってて」

「はいはい」

「すみません……」

言いながら、円香も明里のバスタオルを持って部屋の中に入る。頭からバサツとかけると、わしやわしやと両手を動かした。

「自分で拭けるよ、マドちゃん」

「良いから服脱いで」

「あ、これ脱がされる奴だ……了解です」

前の経験を生かしたのか、明里は上半身の服を脱ぐ。その露わになった身体にタオルをかけると、円香はその脱いだ洗濯物を預かった。

「拭いてて。これ洗濯機に入れてくるから」

「あ、うん。ありがと」

「終わったらズボンも脱いじゃって」

それだけ言って、円香は洗濯物を持って洗面所に入る。足場用のタオルを持った透とすれ違いながら、洗濯機にそれを入れた。

しかし……本当によくここまで濡れたもんだ。雨の日に川の中に突っ込んだのだから当たり前だが、これで傘も差さずに表を歩いていたのだから、普通に不審者である。

どうせなら、迎えに来るように連絡できればよかったのに……と、思いつつ次はズボンをもらいに洗面所を出た時だ。

「リカ、動かないで」

「や、そう言われても恥ずかしいんだけど……自分で拭けるから……」

「ダメー。滅多にないから。こんなチャンス」

「え、チャンスなのこれ？」

透が、ズボンを脱がして足を拭いてあげていた。

「……何してんの？」

「びしょ濡れだったから。拭いてる、脚」

「なんで脚限定なわけ？」

「なつたから。気に」

この野郎、羨ま……じゃなくて、普通にズルい。いやそれ同じ意味だ。自分でさえ、一緒に水着でお風呂には入っても、生脚を触ったことなんてないのに。

「じゃあ私も拭く」

「いや、タオル敷いてくれたんだから、お風呂入れてよ……」

「ダメ、リカ。まだ拭き終わってないから、脚」

「や、とおるんも。普通に恥ずかしいし、どうせシャワー浴びるんだから……」

「ダメ」

「や、ダメっていうのは俺の方……」

「ダメ」

「……わ、分かりました……」

強引な透のお陰で、されるがままパンイチの明里は立ち尽くす。

「……バカバカしい」

眩きながら、円香はタオルを一枚、洗面所から持つて来て明里の頭に放った。バサツとかけられ、視界が暗くなったと思った時には、円香は背伸びして明里の頭を拭いてあげていた。

「あの……マドちゃん。頭なら俺、さつき自分で拭いたから……」

「黙って」

「や、あの……と言うか寒いからシャワー……」

「は？」

「……黙ります」

そのまましばらく二人で身体を拭き続けた。

×××
登日。

「へっくち〜！」

風邪を引いた。円香が。

「……何で私なの……納得いかない……」

「俺、身体強いから」

「高校の時、デートの日に風邪引いてたけどね」

ぐしよ濡れになった明里だけピンピンしていて、円香はリビングに敷いた布団の中で寝込んでしまっている。

よりにもよって、外は今日に限って梅雨明けのような快晴である。

「俺、面倒見るよ。大学も今日は休む」

「いや、いい。行つて」

「大丈夫、成績良いから」

「じゃ、残るわ。私も」

「ダメだよ、とおるんは成績悪いんでしょ？ 今日、半ドンなんだし行つて来なさい」

「悪くはないから」

「マドちゃんがいるからだよ、それは」

それはその通りだ。三人でいる努力を割と透もしているし、流石に単位を落とすのはまずいと感じたのだろう。

「……分かった。じゃあ一人で行く」

「ありがとう、とおるん」

「リカ、お礼言うところじゃない」

「ナンパされたら言ってるね。ミンチにしに行くから」

「リカ……けほっ、けほっ……!」

「冗談だから、ツツコミのために無茶しないでマドちゃん」

「あんたが言うな……けほっ」

「じゃ、行ってきまーす」

思いの外、透は早く出て行こうと準備を終えた。おそらく、透なりに気を遣っているのだろう。

……ちよつと申し訳ないかも、と円香は思わないでもない。透にとつては、明里と二人きりのスクールライフを楽しめたかもしれないのに、その明里が看病に残ると言ってしまったから。

それを、明里も理解していたように透を玄関まで見送りにいく。

「とおるん」

「ん？」

呼びかけられた直後、透の頬に触れたのは、明里の唇だった。ほんの不意打ちで、思わず透も頬を赤らめる。

……が、それ以上に明里が頬を真っ赤にしていた。

「いつてらつしやいの、チュー」

「……普通、逆じゃない？」

「……嫌だった？」

「ううん。元氣出た。ありがとう」

そう言うと、透は軽く手を振って家を出て行った。その様子をリビングの扉から見えていた円香が、少しだけ大きな声を出して言った。

「リカ、車で学校まで送ってあげたら？」

「え、でもマドちゃん……」

「私は平気。行き帰りで30分くらいでしょ」

言われて、透と明里は顔を見合わせる。外は晴れているが、少しでも長く彼氏と一緒にいたいのは同じだ。

「じゃあ……リカ、お願い」

「はいよ」

それだけ話して、透と明里は家を出た。

その背中を眺めながら、円香は顔を反対側に向ける。しかし、本当に納得がいかない。何で風邪引くのが自分なのか。と言うか、逆に引かない明里の体質が異常なのかもしれない。

……逆に自分の16歳の誕生日は何で風邪引いたんだよ、と思わないでもないが。

それにしても、良い天気だ。梅雨明けだと言うのに暑過ぎないし。そう言う意味でも、今日は一度、外に出たかった感じである。

「……あつ」

×そういえば、雨が続いて洗濯物が溜まっていた。

×「ごめんね、とおるん」

「いいから、別に」

話しながら、明里は車を走らせる。初心者マークがついているとは言え、手慣れた様子で運転をしていた。

「一人で大学、大丈夫？」

「余裕だから。余裕村の余裕チャンピオン」

「じゃあ、今日の晩ご飯はとおるんが食べたいものにするね。何が良い？」

「あ、マジか。ラッキー。じゃあ……坦々麵」

「ど、努力してみます……」

帰りに買い物して帰らなきゃ……と、思いながら、明里は大学の近くまで来た。

円香であれば危機感を持って近くのコンビニで降ろしてもらおう所だが、二人ともそんなの気にしない。校門前で車を止めた。

「じゃあ、とおるん。頑張つてね」

「リカ」

「ん？ ……んうっ？？」

車の鍵を開ける前に、透が隣の明里の頬に唇をつけた。

「はい。いつてきます、のチュウ」

「……う、うん……」

「照れ過ぎ。ウケる」

そう言いながら、透は車から降りて行った。本当に中身は彼女の方がイケメンである。

車から降りた後でも、途中で振り返りながら手を振って学校の中へ向かう透。車で娘を送る父親つてこんな感情なのだろうか？ 名残惜しさがとても良くわかる気がした。

さて、透が見えなくなるまで眺めた後、車を走らせてスパーへ向かった。坦々麵の

材料をカゴに入れたついでに、ポカリやらネギやらと風邪への特攻を持つ飲食物を購入して家に戻った。

なんだかなんだ50分経過してしまっただが、円香は大丈夫だろうか？ ちゃんと看病してあげないと……と、思いながら家の中に入った。

「ただいまー」

玄関を開けて手洗いうがいがだけ済ませてからリビングに入ると、ベランダの窓が開いて、洗濯物を干すように動いている影が見えた。

「何してんのマドちゃん!?」

「……あ、おかえり……けほっ、けほっ……」

「じゃないよ！ 寝てないとダメだって！」

「いや、天気良いのに洗濯しないの勿体無い……」

「アホか！」

「あんたが言うな」

「言うわ！ 俺やるから寝ててって！」

慌てて買って来たものを床に置いてベランダの円香を連れてリビングに戻し、布団に寝かせる。

「もー、熱上がつっちゃうでしょ」

「つ、ついでに……布団干して、クーラーの掃除もして……」

「埃舞うからダメ！ マドちゃん、それ吸ったら治らないでしょ！」

思った以上に家事脳になってしまっていた。自分も同じくらい家事をしているはずなのに、何故こうなるのか……いや、それは簡単だ。一人暮らしの経験があるかないかの差だ。

「もう、マドちゃんも全然、人のこと言えないじゃん……」

「……このくらい、風邪引いてもできるでしょ」

「できるできないじゃなくて、安静にしていなさい」

「それもあんたに言われたく……けほっ、けほっ」

ため息をつきながら、咳き込む円香に布団をかけた。

とりあえず、先に円香の処置をするため、買って来たアイテムの中から冷えピタを取り出した。

「マドちゃん、冷えピタ貼るよ」

「ん……」

前髪を上げると、目を閉ぎす円香。別に目を閉じる必要などないわけだが、まあ顔をいじられる時は目を閉じてしまうのは何となくわかる。

円香にしても透にしても、顔だけを好きになつたつもりはない……とは言っても、

やっぱり綺麗な顔してるなあ、と心底思いながら、冷えピタを貼った。

「つめたっ」

「我慢」

「分かつてる」

その冷えピタの上に手を重ねて撫でるようにダメ押し。

それを終えると、明里は立ち上がって冷蔵庫に向かい、氷をコップに入れて買ってきたポカ리를注いで、ストローを入れた。

「はい、喉乾いたら飲んで。ストローあるから」

「ん……ありがと」

「俺、洗濯物干すね」

それだけ言って、洗濯物を干し始めた。

まったく、円香にも困ったものだ。身体が弱っている時にまで、わざわざ無理して……少なくとも、家事よりも大事な誕生日デートに来た時、叱りつけて来た人の行動とは思えない。

そんなことを思いながら、洗濯物が入ったカゴの中に手を入れて、適当な布を一枚、手に取った時だ。出て来たのは、女性モノのパンツだった。

「っ!?」

今更ながら、洗濯をしていたのは円香。つまり当然、女性モノのあれこれも入っているわけで。

「ま、マドちゃん！」

「な、何……」

「ば、パンツ……どうしよう」

「？ 干せば？」

「え、いや……いい、良いの？ 俺がそれ、干しちゃっても……」

「私はよくリカのパンツ干してるけどね」

「……」

今まで明里が洗濯するときは、下着類は円香や透に代わってもらっていた。だからこういう時は割とピンチだったりする。

……しかし、いずれ慣れないといけない事、と思えば、少しは覚悟も決まる……そう思い、明里はパンツを手を取った。

そのままなるべく意識しないようにサクサクと干していつていると、ふと視界にたまたま手に取った黒いブラジャーが入る。おそらく胸をしまう布が丸く膨らんでいる形状のつなぎ目が切れてしまった。

「いっ……っ……っ？」

やばい、壊れた。よりにもよって下着が。

慌てて寝てる円香の元に戻った。

「ま、マドちゃんごめん！ 下着壊れちゃった！」

「……寝かせる気あるわけ？」

「ご、ごめんって……ほ、ほら、真ん中の部分……！」

「はあ？ ……っ、そ、それ……！」

直後、円香は慌てて布団から出て来た。

「だ、ダメだってだから布団から出て来たら！」

「そ、そのブラはダメ……!!」

「え、そ、そんな大事な奴なのこれ？」

「そ、そうじゃなくて……っ……っ……っ、へ、ヘンタイ！」

「ヘンツ……」

ガーン、と音がしそうなほどに、明里は狼狽えて動きを止めた。その隙に円香は下着を回収し、外に干してから布団に戻る。

「……あ、ほ、干すの？」

「あれ、フロントホックって言って、前側で下着を止める奴」

「じ、じゃあ……壊した、とかじゃないのね……？」

「……」

「つ……………ごめん……………」

風邪引いている円香に、自分はなんて真似を…………と、少し頬が赤くなる。確かにこれは変態と言われても仕方ない。すごすごと逃げるように洗濯物を干すのに戻った。

仕事を終えて、とりあえずリビングに戻ると、円香は相変わらず目を開けている。眠れないのだろうか？

「何か音楽とか聞く？」

「……………ねえ、リカ」

「ん？」

「どう、思った？ ……黒のフロントホックのブラ、見て…………」

「えっ」

どう思った、とか言われても…………さつき変態と言われた手前、下手なことは言えない。正直、大人っぽいな…………と思わないでもなかったが、また変態と言われる。ただでさえ風邪を引いているのに、熱を上げるわけにはいかない。

なるべく変態的な答えを言わないよう、言葉を選んで答えた。

「マドちゃんのお気に入りなブラ、壊さなくて良かったなって」

「……………！」

完璧、と思ったのも束の間、円香の顔が怒りと羞恥で真っ赤に染まったのを見て、すぐにまた間違えた、と理解した。

「ま、マドちゃ……」

「出て行って……!」

「えっ」

「あんたがいると、熱が上がる……!」

ヤバい、激おこだ。何が地雷に触れたのか分からないが、まずいつてことだけはよく分かった。

「ま、マドちゃ……」

「出て行って。家事はしないって約束してあげるから」

「や、そんなことが気になってるわけじゃ……」

「じゃないと……私が出ていく」

「っ、わ、分かったよ……!」

風邪を引いている円香を外に出すわけにもいかない。仕方なく、明里は慌てて家を出て行った。

× 浅倉透は、スーパーで買い物を終えた。風邪を引いた円香のためにポテチとコーラを

購入して、歩いて帰宅。本当は明里にでも迎えに来てもらおうと思っていたが、看病で忙しいと思うので控えた。

さて、家に到着。鍵を開けようとポケットを弄るが、何も入っていない。

「ふふ、鍵ないわ」

仕方ないので、インターホンを押す。すると、応答がない代わりにドタドタと足音が近づいてきた。

ガチャツつという開かれる音と共に、中から出て来たのは円香だった。ふらふらした今にも倒れそうな足取りで、実際倒れ込むように透へ両手を広げて体重をかける。

「わお、円香？ リカは？」

「……最低」

「……」

一発で分かった。これ、自分自身に対して言っているセリフだ、と。相当な自己嫌悪に陥った後、円香はすぐ透か明里に甘えに来る。

円香がここまでのストレスを溜める相手は2人しかない。明里かプロデューサーだ。数の割合的には明里2割、プロデューサー8割なのだが、プロデューサー相手の時より明里が相手の方が、ストレスの上限の振幅は大きい。

何より、明里ではなく透に来ている時点で、今回は明里関係と見るのが正解だろう。

「はいはい。聞くから、とりあえず戻ろう。部屋」

「……ん」

そのまま肩を貸す形で円香を連れて布団に寝かせた。先に手洗いうがいだけして、改めて枕元に座って話を聞く。

「で、どしたの？」

「……追い出した。あのバカ」

「わお、なんで？」

「……バカだったから。いつまでも人の気持ち察しないで、余計なことばかりするバカに。……でも」

「そういう奴だつて知つてて付き合つてる自分にムカつく？」

「……」

黙つたまま、布団の中で寝返りを打つ円香。何があつたのか知らないが、何となく分かつたのは、幼馴染のなせる技と言えるだろう。

察した透は何も言わない。無言のまましばらく隣に座つた後、何を思つたのか、その布団の中に潜り込んだ。

「つ、な、何……？」

「や、昔はよく一緒に寝たから」

「狭いんだけど」

「成長したから。ずっと一緒だから分かんないかもしれないけど」

「……中身は全然だけどね」

別に、透は慰めるつもりもアドバイスのつもりもなかった。ただ、一緒にいた方が良
い気がして、とりあえず普通に眠かったし、布団に潜り込んでみただけだ。

が、それがヒントになり得るのだから、天然タラシは恐ろしい。

そう、羞恥心と覚悟が伝わっていなかった事から、フロントホックの黒いブラを見ら
れて腹を立ててしまったが、そもそも明里がそんなものに気付くはずがないのだ。性欲
が控えめにも程があるバカタレなのだから。

彼に下着を褒められる機会なんて、こちらが問い詰めない限りないと思った方が良
い。

「……透」

「ん？」

「リカ、探して来て……」

「任された」

それだけ話して、透は布団から出た。さて、探すのは良いが……それは結局、仲直り

が出来ただけで根本的な解決にはならない。

そう思った透は、円香に声を掛けた。

「ね、円香」

「何？」

「乗る？ 作戦」

「？」

××

透が~~透~~出掛けてから10分後。透が明里の思考を正確にトレースした結果、おそらく円香のためにスイーツか何か買っていると思い、駅に行ったら案の定、いたので「大丈夫だから。私も謝ってあげるから」と子供を諭すように言つて、ケーキだけ買つて明里を連れて帰宅。

リビングの扉の前で、風邪を引いている彼女の様子を眺めながら明里は透に聞いた。

「……怒つてた？」

「分かんらん」

「……」

そこはノーヒントかよ……と、思いつつ、明里は透に別の苦言をする。

「ちよつと……頼むよ。一緒に謝ってくれるつて言うから、勇気を振り絞つてるのに。」

野宿する覚悟はできてたんだよ？」

「普通、野宿の方が勇氣振り絞らない？」

「それでもなくない？」

「や、知らんけど。……ま、私の言う通りにすれば大丈夫」

「……ん」

そう言うのと、改めて二人はリビングに入った。

慎重な足運びで、円香の布団近くに歩く。透の指差による指示で、寝ている円香の足元に立たされた。

「で、どうするの？」

「突撃」

「はっ」

直後、どんつと背中を押された。思いつきり前のめりに倒れ込み、明里はまるで寝込みを襲っているかのように、円香の上で四つん這いになる。

「ちよつと……とおるん……！」

「わお、大胆」

「誰の所為で……?!?!」

と、すぐに明里が起きあがろうとした時だ。真下の円香が「んっ……」と声を漏らし

て寝返りを打つ。横を向いていたのが、仰向けになった。

直後、パジャマの上から三つ目のボタンまで止められておらず、はだけた事により、下着が目に入った。

黒いレースがついた、胸と胸の間を繋ぐ部位にリボンが付いている下着。黒なのに、何故か派手に見えるその下着に最初こそ目を背けた明里だが、やたらと目を引かれてしまっていた。

「……………つ、ど、退かなきゃ……………」

慌てて上から退こうとした直後だ。円香が目を開けた。

「……………あ」

「……………今、三回チラ見してたでしょ」

「……………え？」

「すけべ」

「……………っ！」

真つ赤になる。ハメられた、とすぐに理解した。すけべはどつちだよこの野郎、と思わないでもないが、とにかく明里は顔が真つ赤に染まった。

その明里に、円香は追撃するように聞いた。

「……………」

「つ、な、何が……?」

「さつき、ロクな感想もくれなかった下着」

「~~~~~!」

すぐに分かった。さつき追い出された理由も、円香は褒められたのかもしれない。その他の下着に比べて妙に大人っぽい下着を。

……正直に、言ってしまったても良いものなのだろうか? いや、それを期待されているのか? しかし「下着が似合っている」なんて褒めるのはやはり変態的な方……。

ぐぬぬつ……と、迷った結果、真つ赤な顔のまま目を逸らしてポツリとつぶやくように言った。

「……お、大人っぽくて……素敵だと、思います……」

「……ん、よろしい」

そう呟くと、円香は布団の中から手を伸ばし、明里の頭を撫でた。

「さつき、態度悪くしてごめん」

「え? いや……いいよ。風邪ひくとナイーブになるのは分かるし」

「……ありがとう」

「いや、ホント気にしないで」

そんな話をしている時だ。後ろにいた透が、さらに明里の上に体重をかけて来た。完

全に油断していて、そのままべちゃつと潰される。

「ぐえっ……………」

「ぐふっ……………」

「私もあつたまりたい」

「…………と、とおるん……………」

「重いんだけど……………」

「円香も寒いでしょ。挟んであげる。私とり力で」

「…………2人でも狭かったのに何言ってるの？」

「あ、そつか。マドちゃん、お熱出てるんだもんね」

「言い方。私は園児か」

「じゃ、私右から」

「俺左ー」

「もう勝手にして……………」

諦めて、モゾモゾと布団の中に入ってくる二人とぬくぬくした。

渡る大学生生活は毘ばかり。

上手く断る方法もコミュ力の一つ。

梅雨を抜けて、季節は蒸し暑い季節へと移行した。

その季節の中、生物学部でも普通に友達が出来た明里は、その友人と教室を出た。

「いや〜……あつちいなあ、オイ……」

「分かる。しんどいよね。洗濯物はよく乾くけど」

「それは確かに助かるよな……ここのとこ、雨だったし」

友達も一人暮らしをしているため、ウンウンと頷く。

そんな中、そいつはポケットからタバコの箱を取り出した。

「すまん、喫煙所行つても良い?」

「あーうん」

一浪しているその友達は、普通に喫煙者だった。もちろん、大学の喫煙スペースは限られているので、そこに行かないと吸わないわけだが。

正直、苦手である。臭いし副流煙のおかげで肺がんになるかもだし、行きたくはない。

しかし、大学では交友関係も大事だ。モデルの仕事があるならば尚更なこと。

仕方なく付き合うことにした。

「てか、お前も吸う?」

「いやいい。未成年だし」

「バツカお前大学生になつたら問答無用で20歳だろ」

「え、そうなの?」

「とにかく、一本やるから。興味出たら吸ってみ」

「や、だからでも俺別に……」

あんまり興味ない。啜えるだけならカッコ良いと思わないでもないが、火をつけて吸うのはちよつと怖い。

「良いから、ほれ。こういうのは、その場のノリと勢いで試してみるもんだよ」

強引にパーカーの内ポケットに入れられてしまった。

喫煙……と、少しだけ嫌そうな顔が出てしまう。身体に悪い、だとか、周りの人にも迷惑、とか、そんな意見が頭に浮かぶ。

その明里に、友人は続けていった。

「確かにこいつは身体には悪いかもしれないけどねーけどよ、そう悪いことばかりでもねーんだぞ?」

「一時の快楽的な意味?」

「いやいや、そうじゃなくて。これは俺の先輩から聞いた話なんだけどよ……喫煙所つてのは、基本的に上も下も無い場所らしいんだよ」

「え、そうなん？」

「ああ。目上の人も目下の人もみんなそこに来るからな。ここ最近では喫煙者を減らしてーのか、喫煙所の数も減って来てるし、エンカウント率はさらに上がってる」

それはその通りかもしれない。

「で？」

「だから、普段は滅多に会えない人にも会えるんだよ。その上、喫煙者にとつて喫煙は至福の時間だからな。器も大きくなる。俺の先輩は提出期限が半日、遅れたレポートを喫煙所で受け取ってもらえたこともあるらしいし、レポートのヒントをもらったこともあるらしいぜ」

「……ふーん」

確かにそれは喫煙者ならではの、なのかもしれない。そういう利点もあるのか……と、思つた反面、やはり自分は成績優秀なので関係ない。

「それは社会でも使える……ま、裏技だな」

「ふーん……」

「ま、無理強いするもんでもねーのは確かだし、お試しのつもりでこいつは持つとけよ。」

興味あるなら、いつでも付き合うから」

そう言いながら、友達は明里の背中を叩いた。

実際、悪い人ではない。仕事で出れなかった授業のノートは見せてもらえるし、プリントも確保してくれる。

だから……まあ100パー無いし、あつても成人してからだけど、顔を立ててもらっておくのも良いかもしれない。

×そう思いながら、捨てるような真似はしなかった。

×「プロデューサー、臭いです」

「え、死んじやおうかな……」

そう冷たく毒を吐いたのは円香。わかりやすく傷付いたのはプロデューサーだった。

「……一々、ガラスのハートにヒビを入れないでください、鬱陶しい」

「いや銃弾撃ち込んだ人のセリフか？ それ」

「私が言っているのはタバコ臭さの方です」

「え、そ、そう？」

タバコ苦手な癖に、喫煙所に他所のテレビのお偉いさんがいるのを見つけて営業にも行っていたのだろう。そういうことを平気で出来る人間が多いのだ、円香の周りに

は。まあ多いというか二人だが。

「あなたが臭くなるのは結構ですが、大抵の女性は苦手なので、いい加減周りの人間に気遣う事を覚えて下さい」

「す、すまん……」

謝りながら、プロデューサーは淹れたカフェオレを円香と一緒にいる透の前に置く。

「サンキュー、プロデューサー」

「……ありがとうございます」

お礼を言いながら、カフェオレを一口、口に含む。その様子を眺めながら、透はニコニコしていた。

「……何？」

「ふふ、超言いたい放題だなんて。リカにもそこまで言わないのに」

「……リカとその人じゃ全然違う」

「め、目の前で言うんだな……」

実際、リカにも言いたい放題言っている。けど、切れ味が違う。まあ単純に、あんまり強い悪口を言いたくないというだけだが。

そんな中、プロデューサーが気になったのか、軽いノリで聞いて来た。

「そういえば、二人とも後一年でハタチだな。お酒とかタバコ、興味あるのか？」

「私は飲みたい。お酒は」

「タバコはパス。臭いがきついのは好きではないので」

「なるほどなあ……菅谷君は？」

「リカもお酒は興味あるんじゃない？」

「かもね。……でも、安心して下さい。うちの子に未成年飲酒も喫煙もさせないので」

「あれ……彼氏彼女の関係じゃなかったっけ……？」

いざとなったら姉弟の關係に落とし込むつもり満々の三人なので、明里が末っ子という設定も消すつもりはない。

カフエオレを口に含む二人に、プロデューサーは続けていった。

「なら、気をつけて見てあげた方が良いでしょう」

「どういう意味？」

「男子大学生って基本的にバカで無責任だから。……もしかしたら、本人にその気が無くて、周りから勧められるかもしれないよ。確か、学部も違うんだろ？」

「……」

言われて、二人とも顔を見合わせる。まさかりカに限って……と思いつつも、男子大学生経験者のプロデューサーが言うなら、無視するわけにもいかない。

「……」自身の経験談ですか？

「いやいや、俺はちゃんと法律は守ってたよ。……あ、いや割と勧められたって意味じゃ経験談かな？」

「そうですか。あなたでも断れるなら、リカも断れます」

「でも、彼の場合は二人と一緒でモデルだろ？ 休んだ授業のプリントとかもらうのに、友達付き合いでそういうの誘われることもあるんじゃないか？」

「……」

ありそうで怖い。透でさえお酒に興味津津なのだ。明里の場合、もし誘われたりなんてしたら……。

「……帰ります」

「え、いやこの後レッツスンじゃ……」

「ストレス性急性胃腸炎で帰ります」

「いやちよつと!!? いや、半分くらい冗談だから！ 落ち着いて！」

「大人なら自身の発言に責任を取ってください」

「いや、そうかもしれないけど……!」

「帰ります。ダツシユで」

「胃腸炎は!!?」

「じゃあ、私が帰るよ」

立ち上がったのは透だった。

「今日のレッスン、ダ○スの子達と一緒にでしょ？　じゃあ、良いじゃん」

「……」

ホント、こういうところ狡いのだ。幼馴染は。何も考えていないと思つたら、こういう時に急に「え、それ君把握してたの？」っていう情報を使つて最高の提案をしてくる。

「私、先に戻るよ。部屋」

「……よろしく」

「んー。帰り、気を付けてね」

×それだけ話して、透は事務所を出て行った。

×先に帰宅した透は、とりあえず伸びをしながら家の中を見回す。まだ明里は帰っていないように、朝着ていたパーカーの姿はない。普段、ソファアの背もたれにかけて置いてあるものの匂いを嗅ぐのが習慣になっている透にはすぐに分かった。

実際、透も少し不安ではあった。あのバカつたれ、基本的に自分より他人を優先する。虫関係以外。

だから、勧められたら思わず吸いかねない点はある。まあ、正直、透は明里がタバコを吸おうが吸うまいが知ったことではないわけだが。

すると、良いタイミングで玄関の扉が開かれる。

「たっだいまー……つて、二人ともレッスンか」

「おかえりー」

「あれ？」

「私は15時で終わりだから。円香はもう少しメンバーとやるらしいけど」

「そうなんだ」

話しながら、透は出迎えに行く。この手の情報、高一の時に文事から預かったエロ本の件もあるし、彼自身は持つていても覚えていないだろう。

つまり……とりあえずさりげなく身につけているものを預かり、物色すればすぐ見つかる。

「上着、預かるよ」

「え……どうしたの、とおるん。そんなこと今までしたことなかったのに。もしかして、俺の虫フィギュア壊した？」

「……」

日頃のダラダラした行いがこれでもかというほど火を吹いていた。

しかし、それを自覚することはない透は、少しイラつとしながら聞いた。

「は？ 何それ急に」

「いや……媚びてんのかなって」

「違うから。良いから、ちようだい。上着」

「やだよ。なんか怖いよ。怒らないから、何したか言つてごらん？」

「は？ 何その言い方。どのスタンス？」

「や、だつて気になるし……」

「姉は私の方なただけど」

「いやそれならもう少し姉らしい振る舞いというものを……」

「良いから、上着」

「ええ……まあ良いけど」

言われるがまま、明里は上着を脱いだ。もう既にさりげなさのかけらもないが、透はパーカーを預かった。

「ん〜……」

「？ 何してんの？」

「物色」

「何も入つてないよ別に」

「ほんとだ。返す」

「いや何のために預かったのパーカー……てつきり、新妻みたいにハンガーにかけてく

れるのかと」

「新妻……」

とりあえずなかつたことに安堵しつつ、新妻と呼ばれて嬉しかったりもした。なので、新妻っぽいことを言ってみることにした。

「じゃあ、お風呂にする？ ご飯にする？ ……それとも、私？」

「じゃあ、とおるんで」

「はいは……え？」

え、マジ？ と思つて少し顔が赤くなつたのも束の間、明里は透の手を取つた。

「たまには二人で行こうよ、デート」

「あつ……うん。まあ良いけど。じゃあ、準備するから」

「はいはい」

「パーカー返す」

「や、今日暑いからいいや。どつか投げといて」

「はい」

話しながら、透はパーカーを預かつた。

さて、とりあえず自室に戻り、香りの確認。……少しタバコの臭いがして、眉間にシ

ワを寄せる。

もしかして……ホントに吸ってた？ いや、しかし円香の話ではプロデューサーも喫煙者ではないのに喫煙所に行く事もあるらしいし、まだ分からない。

そう自分に言い聞かせつつ、とりあえずタバコの臭いを取るために窓際に干しておくことにした。

ハンガーに掛けようと上着を広げた時だ。ふと目に入ったのは、内ポケット。ヒヤツと寒気と嫌な予感が同時に襲って来る。

「……」

中を、弄ってみた。すると、出て来たのは一本のタバコだった。

「……………えっ」

動揺したような声が漏れる。……え、まさかホントに？ てかなんで一本？ いやそれより、何故こんなものを明里が持っているのか。

まさか……本当に、隠れて喫煙……。

らしくなく焦り始めた。吸おうが吸うまいがどっちでも良いと思っていたが、いざ見てみると動揺が大きく広がっていく。

これは……円香に聞いてみるべきか、それとも聞かないべきか。いや、円香に言ったほうがマズイ。未成年喫煙なんて、三人でいることを一番考えている円香に知れたら……。

「……」

まずは、吸ったかどうかをさりげなく探る……！　これからデートなら、簡単にそれ
も出来る。

そう決めて、透は準備を済ませて部屋を出た。

「お待たせ。どこ行く？」

「映画行こう」

聞くと、今の短い時間でデートプランでも練っていてくれたのか、すぐに答えた。

「何か見たいの？」

「や、別に。たまには見たいの不见いけど見てみるのも良くない？」

「ん。確かに用もないのに喫煙所に行くみたいで良いかも」

「え……とおるん、行くの？　喫煙所。やめな？」

お前が言うな、というツッコミが喉元まで出かかったのを飲み込み、首を横に振った。

「いや行かないけど。プロデューサーが行くんだって。営業で」

「へ……そういうのもアリなのか」

「アリって？」

「や、なんでもない。行こっか」

「……」

ない、と思つている年下の女の子だ。

「……ほんとに何でもない」

「もしかして……何か気になる事でもあるの？」

「……」

「相談してよ！ わたし達、円香の味方だよ！」

言われて、少し円香は悩む。まあ、抱え込んでも良い結果にはならないことは分かっているし、今はノクチルではない方のユニットメンバー。

なので、仕方なく聞いてみた。

「二人とも……未成年喫煙つてどう思う？」

「絶対にダメ」

「……や、私じゃなくて」

強く肩を掴まれたので、とにかく誤解を解いた。

×

「映画、微妙だった……」

「ね」

もうリサーチを忘れていた透は、純粹に映画の感想をカフェで語り合っていた。

「全然、後始末しないんだもん……」

「分かる……シンゴジラくらい、厳格な空気の中でギャグやると思ってた……」

「あ、でも主演の人はカッコよかった」

「分かるわー。やっぱ、似合ったよね。あの役は」

「うん。好き。かなり」

「……好きなんだ」

「え？ ……あ、いや好きってそういうんじゃないから」

「ほんとー？」

疑い深そうな目で問われたので、少し透はクスツと微笑む。おおらかに見えて独占欲は強い所を可愛いと思ってしまうあたり、自分も相当やばい。

さて、とりあえず目の前の心配性の小動物のような男子を落ち着かせないといけな
い。そう思い、席から立って、前のめりに顔を近づけた。

「リカ」

「っ、な、何？」

「んっ」

「っ………！」

そのまま、鼻の頭にキスをした。柔らかい感触が鼻の頭にくる……そんな予想外の出来事に、明里はさらに顔を真っ赤にした。

その様子を見て、再びクスツと微笑んだ透は、笑顔のまま明里の頭を撫でた。

「こんなこと、しないでしょ。リカにしか」

「っ……え、えっち……」

「えっ、ど、どの辺が？」

「なんか……人前で、鼻にキスは……」

「耳でもおでこでも首でもお腹でもできるよ」

「お腹はやめて！ こんな所で脱げないから！」

「ふふ、冗談だから」

話しながら、透は座り直す。

「ていうか、カッコ良いは良いけど、好きはダメなんだ」

「いや、ダメっていうか……見た目とかはほら、俺だっけかわいいなって思う女優さんと

かいるし良いんだけど……」

「ふーん……誰？」

「え？」

「見た目可愛いなって思う女性」

「え……とおるんと……」

「マドちゃん以外で」

封殺した。知らず知らずのうちに、真剣な表情になつてしまふ。

「え、えーつと……あ、小糸と雛菜……」

「も外して。あとあさひちゃんと真乃ちゃんと夏葉と咲耶も」

「……」

知り合いを全消しした。とにかく吐け、と言わんばかりである。

「あつ、仲良くなりたくなつて思つたのは、小宮さんかな」

「生き物を飼つてるからつて理由じゃなくて、見た目の話してるんだけど」

「な、なんでわかるの……」

「11より簡単だから」

「そんなに!?」

分かりやすいからである。そんな事あどーでも良いから、さっさと吐いてもらいたい。
い。

しばらく明里は唸り続ける。そんなに難しいことを聞いたつもりはない。マジで人を中身でしか見ていないのかもしれない。

やがて、答えが出たようで、おそろおそろ眩くように答えた。

「……とおるとマドちゃんのお母さん、とか?」

「もういい」

「え、お、怒った!?？」

「別に怒ってない」

というか、これでちよつとだけ安心もした。本当に見た目だけで人に釣られることはなさそうで、これ以上に浮気の心配がない彼氏も嬉しいものだ。

そのことが嬉しくて、少しだけフツと微笑みながら飲み物を口に含んだ時だ。

「あれ、明里兄ちゃん！ 透ちゃん！」

「ん？ おー、あさひっちー！」

そんな声が聞こえた。高校生になって、アホほど育ち、今やバストやヒップは透を追い抜いてしまった芹沢あさひだ。

「久しぶりっすー！」

「久しぶり！ 高二だっけ今？ 綺麗になったじゃん」

「ほんとっすか!?？」

ベコつ、と透がカフェオレのカップを握り潰したことに気付かず、明里はお兄ちゃんムーブをかます。

「どう？ 学校。楽しい？」

「はいっす！ 雛菜ちゃんも小糸ちゃんも優しくしてくれるので！」

「ごめん、俺の後を追ってわざわざ同じ高校にきてくれたのに、一年しか一緒にいら

れないで」

「大丈夫つすよ！ 今も普通に楽しいし！」

「ならよかった。また何か知りたい事あつたら言つてね。理系科目なら、基本満点しか取れないから」

「はいつす！」

「じゃあ、今デート中だから」

「そうつすね。謝つた方が良いつすよ」

「え？」

「じゃ、透ちちゃんも。またね！」

「……うん。またね」

元気よく挨拶してお別れした。ギツギツギツ、と壊れたおもちゃのように明里が振り返る。今の自分を見た直後「ひい！」と声を漏らして肩を震わせた。

いつも浮かべている笑みもない。透明どころか深海の奥底のような青く黒い瞳が、真つ直ぐと明里を突き刺していた。

確かに綺麗になった。成長が遅い方だったあさひは、高校に入ってからZZのモバイルスーツ並みに爆発的な成長を見せた。

だからつて……デート中に挨拶代わりに褒めるだろうか？ いや、見た目だけで女性

に釣られないから故の言動だろうが、それが裏目に出ることもあるようだ。

「……」

「ご、ごめん……とおるん……」

「……やだ」

「ええっ!?? そ、そんなあ……」

「今日1日、ずーつと構ってくれなきややだ」

「わ、分かった!」

「じゃ、まずは円香が帰ってくるまで、とりあえず連れ回して」

「い、良いよ。どこ行く?」

「連れ回して」

「あ、俺が決めるってことね。了解です」

×そのまま二人でカフェを出た。

×

×
 レッスンを終えた円香は、疲れ気味にシャワーと着替えを終えた。結局、後半からは切り替えられたが、モヤモヤだけは晴れなかった。お願いだから悪い影響を受けるのはやめて、と本当に母親のようなことを思いながら、事務所を出て、さっさと家に帰った。

「……はあ」

ため息をつきながら、電車に乗った。座れたので、ありがたく腰を下ろす。

透から、まだ報告は上がらない。うまく聞き出せていないか、ミツシヨンを忘れて遊んでいるかだ。後者ならカメラクラッチ。

とにかく、こんな無駄な不安を与えてくれたプロデューサーが憎いくらいに悩んでしまっていた。

「はあ……何なの……」

そんなため息が漏れた時だ。隣に女性が座った。その人から、ふわつとタバコの臭いが香って来て鼻腔を刺激される。

そこまで臭い、とかではない。けど、やはり不愉快な臭いだ。女性でさえこの臭い……これが、たまに一緒に布団で寝ることも、水着を着ているとはいえ一緒にお風呂に入ることもある明里から漂って来ると思うと……。

「……無理」

そうだ、やはり止めよう。個人の自由なんて言葉は同棲していない奴のセリフだ。同じ屋根の下で暮らしていれば、限度はある……！

よし、決めた。円香はギョツと済ました顔なのに心の中で握り拳を作ると、明里の部屋を物色することを決めた、

虫のフィギュアがたくさんあるとか、そんなのにビビっている場合ではない。

ちようど、最寄駅に到着した。

「……探す」

××そう決めて、家に戻った。

××さて、二人は家に戻つて来た。あの後、ゲーセンに行つて歸つて来た。円香のお土産に、ゲーセンにあるお得用っぽいポテチをとつた。

手洗いうがいを終えた後、明里はそのまま晩飯の準備をしに行き、透は一旦自室に戻った。

そこで「あつ」と声を漏らす。明里のパーカーが目に入つて全部思い出した。そうだ、タバコの件聞かなきゃ。

そう思った透は、タバコを摘んでリビングに持つていった。

「リカー」

「ご飯もうすぐだから、お菓子はダメです。待てないようなら、みかんなら許可します」
「最近流行つてんの？ お母さんキャラ」

まずはそこを注意しておきながら、さらつと聞いた。

「タバコ、パーカーに入つてたけど、何これ？」

「タバコ？ ……ああ、こつちの学部の人にもらったんだよね。興味出たら吸つてみ

ろって。悪い人じゃないから、捨てるに捨てられなくて」

「ふーん……吸うの?」

「いや、ライター持ってないし。記念にストラップにでもしようかなって思ってる」

「わお、斬新」

秒で問題は解決してしまった。当たり前すぎる答えがきたが、とうの昔に興味は失せていたので、透は特に何も思わなかった。

しばらくタバコを見つめた後、ニヤリとほくそ笑んでから、タバコを人差し指と中指で挟んだ。そして、眉間にシワを寄せた。

「リカー」

「んー?」

「こっち見て」

「何さ」

明里が顔を上げた直後だった。難しい顔のまま、唇を尖らせて息を吐いた。

「ヒュフー……」

「……」

「似合う?」

そして、ドヤ顔で聞いて来た。それを見た明里は……。

「可愛い！」

ノリノリになってしまった。

「可愛いのか？ カッコ良い、じゃなくて？」

「どつちかつて言うとか、大人に憧れてるバカな子供みたいだった」

「へー、言うじゃん。そこまで言うからには、リカは似合うんだよね？」

「いや俺はいいの。とおるん、長めのカーデイガン着て……あと、サングラスして」

「え？」

「どうせなら、カッコ良くしてみよ」

「……良いね」

話しながら、透も乗った。二人でそのままコーデイネットをする事、数分。梅雨明けの季節にコートを着込んで、サングラスにハンチング帽子を被り、黒のグローブを嵌め、ゴルフバッグを背負った透が、電信柱に背中を預け、人差し指と親指でタバコを挟んで、息を吐いた。

——そう、まるでこれから気が進まない仕事に向かう掃除屋のように。

「とおるん、良いよ良いよ！ カッコ良い、惚れ直しちゃう！」

「君のハートにワンシヨット☆」

「Fooooooooo！」

もう二人とも完全に楽しくなっちゃってしまっていた。やたらとテンションが高く撮影会をしていた。

「ねえリカ、そろそろ交代しない？」

「え、お、俺はいいよ。タバコなんて似合わないし」

「いやいや、そんな事ないから。リカだって絶対、似合うよ。こういうの。中身はまだ赤ちゃんだけ」

「赤ちゃんなの？？」

ちよつとそれはひどくない？ というリアクションを取るが、掃除屋ASAKURAは無視して明里と肩を組む。

「ねえ、良いじゃん。一回だけだから」

「えく……ちよつとなあ」

「大丈夫。周りにいないし、誰も」

「でも、とおるんがいるし」

「それはほら、私が吸ってるとも見られたし」

「関係くない？」

「ほら、ちよつとだけ」

「ほ。」

「え、歯痛いの？」

「俺何も言つてないけど？」

「え？」

「え？」

言われて、二人ともハツと顔を上げる。辺りを見回すと、目に入ったのは樋口円香。過去に見たどの円香よりも恐ろしい形相で、自分達の方を睨みつけていた。

透と明里の間には、一本のタバコ。冷静に思い返すと、タバコを無理強いしている二人にしか見えない様子。

それを見て、円香は改めて現実を認識したように、もう一度声を漏らした。

「……はっ？」

ガス抜きせず溜め過ぎるところなる。

透は、自分と同じ立場だと思っていた。なんだかんだ一番、危うい明里を、危ない道から回避させる立場。

……しかし、それはどうやら幻覚だったらしい。まさか、透がタバコを嗜み、そして明里に勧めているとは夢にも思わなかった。

故に、二人の面倒を見る立ち位置にいた円香は、シヨツクのあまりふらりと足元をもつれさせ、倒れながらつぶやいた。

「二人が、グレた……」

「マドちゃん!?」

「ふふ、ぶつ倒れた」

「笑い事じゃねえええええ！」

×すぐに家に運んだ。

×

×翌朝、目を覚ました明里は、隣を見る。その後、透の提案で一緒に寝ることにした円香が、隣で寝息を立てている。

あれから、気絶した円香は目を覚ますことはなかった。明里の（無駄な）生物学の知識で何かの病気でないことはわかった。

裏を返せば、自分と透がタバコで遊んでいたのは、それだけのシヨックだったことになる。

反省しないと……考えてみれば、撃つ撃たないに限らず、拳銃を持っているだけでも良くない事だと言うのに。

「はあ……やっぱ断ろう」

友達関係より恋人の方が大切なのは分かりきった事だろうに。ため息を漏らしながらそう決めた時だ。

ふと、円香が目を覚ます。

「んっ……」

「あ、マドちゃんおはよう。……あの、昨日の件なんだけど……」

「昨日？ 何の話？」

「え？」

あれ、そんなはずない。昨日「グレた」とか言われたし。

もしかして……もう別れるから惚けるとかそう言う事なのか？ だとしたらヤバイ。

何とかして謝らないと……！

「あ、あーいやマドちゃんホントお願いだから聞いて話を……」

「いいから早く朝ご飯作って、お兄ちゃん」

「あ、うん。まずは飯で……今なんて？」

「すんごい……すんごい聞きなれない言葉が耳に入って来た気がする。一瞬、声音として飛んできた空気の振動に不具合が生じたのかと思っただけだ。」

しかし、反射的に聞き返したが故に、まだ心の準備が出来ていなかった。次の次の次の円香の発言は不意打ちとなった。

「は？ 聞こえなかったわけ？」

「あ、うん。それで良いや」

「ご飯作って」

「そつちじゃなくて、その後」

「？ お兄ちゃん？」

眉間に皺を寄せて小首を傾げて言われ、それは明里の胸を強く抉り込むように抉り込んで抉り込んだ。

異常事態……なのに、可愛い。本当に妹に見える。喀血したように、そのままベッドの上につつ倒れた。

「いや、そういうのいいから早く作って。朝ご飯、作ってくれるまで布団から出ないか

ら。お兄ちゃん」

「ゲフっ……!」

ダメだった。破壊力が強過ぎる。何があつたのかわからないが……いやまあ十中八九、昨日の件のお陰だろうが、そのオーバーキルレベルのダメージは、もう明里を起き上がらせることを許さない。

そんな時だった。ガチャッと部屋の扉が開かれる。

「おはよー。起きてる?」

透の声だ。中に入ると、起きているのに布団の中で丸まっている円香と、ボディブローを受けたように丸まっている明里の姿。

「……どうしたん?」

そう聞いた透に、円香が声をかけた。

「あ、お姉ちゃん。珍しく早い」

「そりやそうでしょ。昨日いらぬ心配をかけ……今なんて?」

「は? お姉ちゃんも? 二人揃って難聴にでもなったわけ?」

そう聞いた後、円香は少し不愉快そうな表情のまま言った。

「お姉ちゃんは、私の着替え手伝って」

「ゴッフアアッ……!」

×二人揃って、吐血したようにその場でくの字を描いて床に倒れた。

×朝食の時間。とりあえず、明里が作った軽い朝ごはんを三人で食べる……が、気まずい沈黙が流れる。明里はともかく、透でさえそれを感じていた。

「二人ともどうしたの？　なんか変だけど」

お前が一番変なんだよ、と二人揃って思っても口にしない程度には異常事態だった。何せ……自分が姉だと言って譲らない円香が、透はおるか明里さえ「兄」と呼んでいる。

「な、なんでもない……」

「うん。気にしないで。お兄ちゃんが作ってくれた料理、美味しいね？」

「……ん」

「と、とおるんまで……！」

「いいから」

抗議の視線を送るが、透には透の考えがある様子で睨み返される。なので、何も言わないでおいた。

さて、問題は山積みである。まず、今日は学校だ。そして、その後には仕事だ。どれも問題だらけである。

今から考えるだけでも頭が痛くなっている明里の頬に、円香は手を置いた。

「？」

「お兄ちゃん、どうしての？ 具合悪い？ 眠いならちゃんと寝てたら？」

「……」

でも、やはりクソ可愛い……と、頬が赤く染まった。なんというか……新鮮すぎて死んじゃう。

なので、思わずキメ顔を作つて答えてしまった。

「大丈夫だよ、円香。心配かけさせてごめんな」

「は？」

「え」

「マドちゃん、だから」

「……」

ダメだ、やはりかわいい。この威力……耐え切れる気がしない……！

×ゴフツと吐血しながら後ろにひっくり返った。

×

朝食を終えて、諸々の準備。まだ着替えを終えていない明里がパンツ一枚で自室で私

服を選んでいると、不意に部屋の扉が開かれる。

「リカー、今平気？」

「きやあああ！　ち、ちよつと……ノックしてよ！」

「いや今更何言ってるの？　同棲してるのに」

「ぱ、パンツ一枚は流石に恥ずかしいから！」

適当なTシャツを引つ剥がして、身体を隠す。というか、普通に気恥ずかしいのだ。

もう私服を選んでいる場合でもなくなり、とりあえず適当な服を羽織る。

「で、どうしたの？」

「ん、円香のこと。どうする？」

「あー……」

わざわざ心配するなんて、透らしくない……と思い、聞いてみた。

「なんでわざわざ？　とおるん、そういうの気にするわけ？」

「さつきさ、円香の着替え手伝ってる時さ」

「？　うん？」

着替え手伝って、とそもそも円香からあり得ない言葉が飛んできたものの、流れで手

伝うことにしてしまった透は、その時はまだ樂觀的に捉えていた。

まあ、別に手伝うくらい良いかー的な感覚で、何も考えずに円香の部屋の筆筒を開ける。

「円香、何着たい？」

「お姉ちゃんが選んで」

「私？」

「うん。動きやすい格好で。あと女の子らしく……それこそリカの彼女に見える感じ。あと、それでいて清楚な感じで。胸元の強調とか、リカ以外に見られるの論外だから」

「……」

めんどくせえ、と素直に思った。というか、すつつつごいワガママ。そこまで言うなら自分でやれば良いのに。

実際、言ってみた。

「自分で服決めたら？」

「は？ お姉ちゃんの方がコーデのセンスあるし、少しでもお兄ちゃんに可愛く見てもらいたい。お姉ちゃんだって同じなんだし、別に良いでしょ」

「……」

直球である。透の方がその手のセンスがあるかは知らないが、それよりもその澄まし

た顔で普段、絶対言わない可愛い事言われるのは、普通に破壊力があつた。幼馴染の自分でさえ、思わず心臓止まるかと思う程度には。

「……仕方ないな」

「朝ご飯までには決めてね」

「はいはい」

そのまま、円香の要望通りの服を選んだ。ほとんど直感に身を任せて「これならとりあえず要望通りになるんじゃないかね？」と思つて選んだ結果、結局は円香が普段、着ている私服とほぼ同じになった。

鏡を見て、映っている自分を、くるりと回つてチェックした後、円香は満足げに頷いた。

「ん、おっけー」

「じゃあ、終わり。ご飯食べよっか」

「後でお化粧もして」

「はいはい」

ちよつと可愛過ぎて、つい生返事をしてしまった。本当に何が起こつたのだろうか？
本当に甘えてくる妹のような感覚だ。大崎甘奈に甘える大崎甜花のような……あれ？
あれ妹どつちなんだっけ？
なんて思いながら、部屋を出ようとした時だ。

後ろから、肩にポンつと手を置かれる。何？ と無言で振り返ると、頬に唇が当てられた。

「っ！」

唇を当てられた頬に手を当てて、少し顔を赤くしたまま仰反るが、円香は相変わらず澄ました顔。

この子、何してんの……？ と、透らしくなく思ってしまう中、円香は真顔に近い笑みで告げた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「ー」

目の前でスタングレネードでも転がってきたかのような衝撃を受けた。

「ー」

「ー」

「ー」

「と、いうわけで、私円香のお姉ちゃんになるね」

「あ、今のそういう話だったんだ」

予想外の点に落下され、少したじろぎながらも続ける。

「いや、まあ姉になるのは別に良いんだけどさ」

「うん。なる」

「確固たる決意も結構だけど……元に戻さないわけにはいかないでしょ？」

「まあね」

「……」

ダメだ、よほど嬉しかったのか可愛かったのか、姉の顔をしている。透が。

まあ、でもあの甘えん坊になった円香の面倒を見てくれるなら、明里としても問題はない。自分が面倒を見たい、と言う気持ちがないわけでもないが、それ以上に異常事態の解決に走らないといけない。

透に聞いても無駄だろう。「私自身が、姉になる事だ」みたいな感じだし。しばらく、小糸や雛菜に相談しつつ、一人で考えた方が良くも……と、今後のことを考えながら、とりあえず一番、重要なことを言った。

「マドちゃんのカスズるい。俺も欲しい」

「や、いつももらってるじゃん。今日は私の番」

「いつもとか関係ないから」

「私にしてくれたカスはあれ初だから。譲って」

「……」

「……」

直後、同時に部屋を出た。リビングで待っている円香の元へ駆け込み、ソファアームに座っている円香の前へ片膝をついた。

「円香！」

「マドちゃん！」

「え、何？」

「キスして！」

「え……せがまれると嫌なんだけど」

「……」

どうやら、別に幼児退行したわけではないようだ……と、思いつつも、それはそれであちよつと嫌だ。

二人して頷き合うと、円香を挟むように腰を下ろし、サンドイッチするようにハグをしながら頬をくっ付けた。

「ねーえー、とおるんにはチューしたんでしょー」

「今まで、円香と私間ではなかったじゃんー。キスー」

「良いから早く準備しないと、遅刻するけど」

「俺は別に成績優秀だから良いもーん」

「嫌だったらキスしてー」

「……バカ達……」

ため息をついた円香は、上半身を後ろに仰反ると同時に、二人の胸倉を自分の方に引き寄せた。

二人の姿勢が崩れたのを狙い、頬に軽く唇をつける。

「これで満足？」

「もっかい！」

「調子に乗らないで」

結局、もう一回してくれて、一限は遅刻した。

×

さて、大学に着いてから円香は透に任せて、明里はまず小糸に電話をした。既に遅刻している一限だが、正直今は妹……じゃなくて円香の事の方が大事だ。

幸いにも、出席を取らないテスト一発の授業なので、正直一回くらい行かなくても問題ない。

『も、もしもし……？』

「あ、小糸？ ごめんね急に。今、平気？」

『う、うん……！ 仕事の前だから、長くは無理だけど……』

「ごめんごめん。すぐ済むから」

そう言いながら、本題に入った。

「マドちゃんが妹になったんだけど、どうしたら良い？」

『えっ……ど、どうにかしたほうが良いのは、菅谷先輩だと思うけど……』

ちよつと説明が足りていなかった。

改めて説明を……と、思つて口を開きかけたが……なんて言えば良いのだろうか？

妹になった、くらいにしか表現しようがない。

壊れた？ いや、そんなことを言えば「壊したの？」つてなるかも……。

『菅谷先輩？』

……とりあえず、何か言うしかない。ありのまま起こったことを話してみることにした。

「朝、同じベッドで目を覚ましたら、俺とおるんの事を急に兄とか姉呼ばわりするよう

になつて……」

『ぴえっ!?? お、同じベッド!??』

「?」

『てことは……き、兄妹プレイ……』

「何言つてんの？」

『そ、そっか……三人とも、大学生だもんね……そ、それにしても……円香ちゃん達が、

大人に……』

なんか急に歯切れが悪くなった。何を言っているのか分からないが、とりあえずスルーしておいた。

「とにかく、どうしたら良いのか……」

『ひ、避妊はしっかりした方が良いと思うよっ！』

「否認？ ……ああ」

もしかして……昨日の夜、タバコを見られたのが問題だったのかもしれない。自分が透がタバコを吸っていた。最後の言葉は「グレた……」だったし、これから自分や透がタバコを吸って生活すると勘違いし、その自分達の面倒を見ないといけない、とシヨックを受け、それなら自分が面倒を見られる側になる、とでも思ったのかもしれない。

人は誰でも、普段とは別の人格をもう一つ、持っているらしい。二重人格とは別の話で「本当はこう言うことをしたい」とか「こうなりたい」みたいな。

もしかしたら、円香も本当は甘やかすより甘えたいと思っている面もあるのかもしれない。

「……なるほど。そういうことか」

『な、何が……？』

「分かった。とりあえず、否認から始めるか」

『い、今までしてなかったの!?!?』

そう、なんだかんだ、まだタバコのことは否定出来ていない。

「これからするから大丈夫だよ」

『お、遅くない!?!?』

「大丈夫。任せて」

『い、いや任せられないよ! 今まで、何やって……!』

「ありがと。ごめんね、お仕事前に」

『……………びえ』

そのまま通話を切った。やることはハッキリした。存分に円香を甘やかした上で、昨日の誤解を解く……!

今日は残念ながら円香と透はレッスンで、次に会うのは夜になってしまうが、それくらいなら問題ないだろう。

× 気合を入れた明里は、今日の事を考えておく事にした。

× 二限が終わったら午後からノクチルみんなでレッスンなので、透と円香は学校を出て、近くの駅から電車に乗った。

さて、約時間にして三時間、一緒にいたわけだが……とおまどはどうなっていたのか

と言うと……。

「お姉ちゃん……眠い。肩貸して……」

「良いよ。全然。なんなら膝でも」

「そうする……」

そう話しながら、透は円香の肩に手を乗せると自身の方へ引き寄せ、円香はそれに合わせて身体を倒し、電車の中で膝枕してもらう。

周りの視線などお構いなし。むしろ、割と周りにとつても目の保養になっていた。

しばらく揺られ、駅に到着。

「円香、着いたよ」

「ん……おはよ」

「おはよ。行こ？」

言いながら、二人で立ち上がって電車を降りた。腕を組み、少しだけ透に甘えるような姿勢で円香は歩く。

そのまま改札を出て事務所に向かう。何も考えていない透の頭の中では「事務所に着いたらみんな驚くだろうな」程度の考えしかない。

なので、思わぬエンカウントの時も堂々としていた。

「あれ、透と円香。偶然だな」

「あ、プロデューサー」

「……姉妹仲良く出勤中、急に声を掛けてくるとは流石ですね。ミスター無粋男」

「え？ 姉妹？」

「そう。円香が妹」

「お姉ちゃんがお姉ちゃん」

「うん。今日は二人とも休もう。な？」

「ヤダ」

何があった、と呆然とするプロデューサーと二人は事務所に向かった。

×

×

到着し、階段を上がり切つて中に入ると、プロデューサーの視界にまず入ったのは小糸と雛菜だった。透達と目が合うなり、雛菜は相変わらずにへらつと微笑み、小糸は何故か頬を赤く染めて俯いた。

「あ、おはよう♡ とおる先輩、プロデューサー」

「お……おはよう、ございまして……」

「お、おはよう。雛菜、小糸」

「？ 小糸ちゃん、何かあった？」

「なっ……何でもないよっ!!？」

なんかやたらと小糸だけ照れているが……まあ、いつものことと言えばいつものことだ。スルーして、そのまま二人で後輩達の前の席に座る。

プロデューサーは、なんかカオスな気配を感じ取り、長期戦に備えてコーヒートの準備をした。何が起ころるか分からないが、ノクチルの会話に常人が入るのは難しいからだ。

「ていうか、円香先輩どうしたの？」 透先輩にべったりだけどく」

「別に。お姉ちゃんと一緒にいたいだけ」

「……はー？」

「ぴえっ……」

プロデューサー的には、雛菜の「理解不能」と言う声は初めて聞いた気がした。そして本当に何故か顔が真っ赤っかなままの小糸も気になる。いつもなら、会話を繋ぐ小糸も今日は変だ。

「どういうコト々？」

「は？ お姉ちゃんはお姉ちゃんだけど？」

「じゃあ、雛菜も円香先輩の姉になる？」

「あんたは年下でしょ」

「円香、私も円香と同年」

「？ 同年だと妹になれないの？」

おつと? と、いよいよインスタントコーヒーを淹れ終えたプロデューサーの眉間に皺がよる。小糸と並ぶ2トップの常識人、円香の頭もいよいよ壊れ始めているように見える。

理解する前に、さらに雛菜が畳み掛けた。

「じゃあ、歳下の妹にならないのもおかしくない?」

「……まあ」

「それにー、少なくとも外見は円香先輩より雛菜の方が年上っぽいよ?」

「……」

何故黙る円香? と、プロデューサーはさらに冷や汗をかいた。そこは文句を言うところだろう。そもそも見た目とか年齢に関係ないし、何より円香なら何かしら言うところのはずだ。

やがて、円香は腕を組んだまま不愉快そうに告げた。

「雛菜を姉呼ばわりはやっぱりムカつくから無理」

「やは~~~~♡ 雛菜もムカつく~~~~」

そこはいつも通りなんだ、と何故かホツとしてしまった。いや、いつも通りで喜んで良いのかは微妙だが。

何にしても、そろそろ話をする必要がある……と、思ったのだが。キッチンから出よ

うとする自分の前に、小糸が立っているのが見えた。

「つ、こ、小糸？ どうしたんだ？」

「わ、私……知っています。円香ちゃんが、おかしくなっちゃった理由……！」

「ほ、本当か小糸……？」

「こ、ここじゃアレなので……その、別の部屋で……」

「わ、わかった……」

とりあえず、話を聞けるだけでもラッキーだと思ふ事にした。何せ、あのクレイジークールジャングルの中に入り込まずに情報を得られるのだ。

×一 先ず、別室に入って話を聞く事にした。

×さて、レッススが終わった。帰宅しなければならぬ時間となり、透と円香は帰宅した。

その後、それはもう大変だった。プロデューサーが。

レッスン中も、どこか甘えん坊になった円香は、透に甘えて結局、雛菜にも甘えさせられて、小糸には甘えなくて、プロデューサーには意地でも甘えなくて……と、割と半々なながらもいつもと違う円香は、その場にいた全員に「ギャップ萌え」と言う性病を植え付けた。

なんか……甘えなかった二人には、やたらと身体のことを心配された円香だが、何にもないのだから冷たくあしらうしかなかった。

さて、そんな日もいよいよ夜になり、自宅の最寄駅に到着。すると、駅前の改札口に見覚えある男が立っていた。

「お、リカ」

「お兄ちゃん？」

「迎えに来たよ」

「サンキュー」

「ん、ご苦労」

素直に英語でお礼を言う透と、割と何様感ある妹らしい返事をする円香。それに対して苦笑いを浮かべながら、明里は二人と帰宅。

駅から出ると、円香に声を掛けた。

「マドちゃん」

「何？」

「疲れてない？」

「ん、疲れてるけど……それが？」

「おんぶしようか？」

「……ん」

素直に甘えた。

自分の前で背中を向ける明里の両肩に手を置いて、フツと軽く飛んで背中にしがみつく。

「はい、出発」

「進行」

「リカー、私もー」

「いや二人同時は無理でしょ……」

そう言いながら、三人で帰宅。明里の細身に見えて割とがっしりしている背中にしがみついて、円香は少しだけ控えめな笑みを溢す。

すると、ふと視界に入ったのは透の顔。少しだけ、羨ましそうにこちらを見ているので、ふふんと鼻を鳴らした。普段、自分の方が人目を気にして我慢しているのだ。たまには良い薬である。

……そこで、ふと思い返す。そういえば、自分はなんで普段、我慢してたんだっけか……と。

そうだ。アイドルとモデルだからだ。なのになんで自分は……。

「リカー、そろそろ交代ー」

「今日はマドちゃんの番でしょ」

「私がおんぶしたい」

「あ、そつちですか……やばっ、はずっ」

「お姉ちゃんのおんぶは事務所から駅までで楽しんだからいい」

「えー」

けど、まあ……幸せだしいつか、みたいな深く考える事なく、明里の背中に揺られたまま自宅に向かった。

さて、そうこうしているうちに、自宅に到着。手洗いうがいを終えた後、明里が用意しておいた晩ごはんの時間だ。

時間が時間なので、明里だけ先に食べてしまったが、温め直して二人の前に出してあげると、円香も透も美味しそうに食べる。

「円香、あーん……」

「あー……んっ」

「おいしい？」

「……食べさせてもらっただけで、味が変わるわけないでしょ」

「あの、とおるん？　なんで本当に姉になろうとしちゃってんの……？」

「や、だつて滅多にない機会だし」

なんかノリノリで少し困る。全力で甘やかしていた。

……というか、円香も円香で絶対に嫌と言わないあたり、中々である。

でも……これ円香が正気に戻って記憶に残ってたら、絶対に悶絶しそうなんだよなあ……と、明里が少し冷や汗をかいていると、透が続けて言った。

「実際、円香はあんま人に甘えるタイプじゃないから。こう言う機会でもないし休めな
いと思うよ」

「ん？ 可愛いつて話。円香が」

「……んっ」

あ、照れた、と透も明里も可愛さを実感する。確かにこんな風に素直に照れる円香は
レアだ。

……だが、まあそれもここまでにしないといけない。何せ、絶対に仕事には支障が出
るから。急なキャラチェンジと思われても不思議じゃないし、結局の所、明里自身も前
の円香の方が好きだからだ。

「ね、マドちゃん」

「何？ お兄ちゃん」

「おにつ……んんっ！ ……変な話して良い？」

「いつものことですよ」

「……」

ホント、よくもまあ性格だけ変わらずに自分達との関係性だけ変化したものだ。こういう心的外傷があったりするのだろうか？

「まず……ごめんね」

「何が？」

「昨日のこと……覚えてないかもだけど、タバコの件」

「……………は？」

あ、冷たさが戻った、と少しだけ冷や汗をかく。この子、普通に怒ると怖いのだ。特に、オーラが。

それでも、負けじと続ける。

「昨日のタバコ、実は……その、とおるんと……カッコ良いポーズ大会をしてたっただけで……吸ったりとか、買ったりしたわけじゃないんだ。……ね？」

「あー……うん。ちよつと、調子に乗ってた。……円香、頬についてる。おべんと」

透からも援護射撃が入る。ありがたいが、こう言う時は姉モードを解除していただきたい。

「だから、変な誤解で傷つけちゃったかもしれないけど、許して欲しいな。……ごめんな

やう」

「じめんね」

一緒に謝る透。すると、円香はしばらく黙り込みながら、顔を横に向ける。比較的長い前髪で視線がどこに向けられているのかも分からない。

しかし、目は合わせられないのだろう、となんとなく分かっていた。

多分、今の円香には何の話か分からないのだろうが、それでも何となく分かっているのかもしれない。

だからか、ポツリと呟くように答えた。

「……一緒に寝て。三人で。それが、許す条件」

それを言われて、透も明里も顔を見合わせる。

……そして、頷き合うと、微笑みながら円香の方に向き直って答えた。

「もちろん」

× × とりあえず、丸く収まったことに、二人とも……特に明里はホツと胸を撫で下ろした。

× × さて、翌朝。寝た場所はリビング。三人で布団を敷いて、円香を間に挟むようにして、

睡眠を取った。

最初に目を覚ましたのは明里。ぼんやりした表情で、隣で寝息を立てている円香、さ

らにその隣の透を眺める。

円香は……元に戻っただろうか？ まあ、どっちの円香も愛せる自信はあるが、やはり元の方が良いと思ってしまうのが本音ではある。

まあ、戻らなかつたら戻らなかつたで、また別の方法を考えよう……なんて思いながら、とりあえず横になったまま円香の頭を撫でた。

すると「んっ……」と円香から不機嫌そうな声音が聞こえる。その後、遅れて寝起きブーストによるいつもの倍近く不機嫌そうな視線が、ぬぼーつと開かれる。

「おはよ、マドちゃん……起きた？」

「んっ……リカ？」

あ、戻った、と一発で理解した。お兄ちゃんとは呼ばれなかつたから。

「なんで……同じ布団で……あれ、ていうか……昨晚……」

少しずつ……少しずつ、思い出していつているのだろう。比例して顔が赤くなつていくのですぐ分かつた。

やがて、寝起きから一気に真っ赤に染まり上がる。そして、両手で顔を覆いつつ、指と指の隙間からギロリと睨まれた。なのに、全然怖くない。

「っ……わ、わたっ……わたしっ、何を……！」

「大丈夫？」

「大丈夫なわけっ……な、何がお兄ちゃ……ゴフツ……！」

「マドちゃん!?？」

吐血するように布団の中で蹲る円香。ちよつと心配になり、明里も布団の中に潜り込もうとした直後だ。

「大丈夫……グエツ！」

両手が伸びてきて、胸ぐらを掴まれた。

「忘れて……！」

「ちよつ……苦しッ……！」

「わ、す、れ、て……ッ！」

「待っ……ぎ、ギヴっ……死ぬ……！」

パンパンっ、と円香の手を叩くと、なんとか離してもらえた。けほっけほっ、と咳き込みながらも、ふと円香の顔を見る。真っ赤である。ものっそい形相をしているのにちつとも怖くないくらい真っ赤。むしろ愛おしさを感じてしまった。

なので……不謹慎、というか良くないこと、と分かっている、つい言いたくなり、言ってしまった。

「もう一回だけ、お兄ちゃんって呼んでくれたら、忘れてあげる」

「っ！っ！っ！」

再び胸ぐらをつかまれるが、それをハグホールドによって凌ぐ。

「ごめんごめん。冗談だから」

「最ツツツ低……！」

「俺もお姉ちゃんって呼ぶから怒らないで」

「あんたはいつもの事でしょ……！」

「え、呼んだことあつたっけ？」

ないことはないかもしれないが、いつもの事は言い過ぎな気がしないでもない……
が、とりあえず話を逸らす。言わない方が良い事言っちゃったわけだし。

「まあそのネタを抜きにしても、今後はもつと甘えてくれても良いからね。マドちゃん、外だとちよつと気を張つてるとこもあるから」

「……うるさい」

「ごめんごめん」

頭を撫でてあげながらそう誤魔化すと、円香が胸の中で蹲つたまま掠れたような声を漏らした。

「……………つたの？」

「え？」

「……………ちゃん……………つたの？」

「ごめん、マジ聞こえない」

「つ、だ、だから！」

「つ、な、なにさ？」

声を上げられ、こっちもビククリしてしまう。

そのビククリした声に円香は一瞬だけ冷静になり、再び掠れた声に戻しながら、おずおずと聞いてきた。

「……………お兄ちゃん呼び、可愛かった……………の……………？」

「……………今が可愛い」

「聞いてない死ね」

「あーうそうそ。……………そ、そりやまあ新鮮でとても可愛らしかったと思いますが……………」

答えると、円香は黙り込む。そして、丸まっている頭を少しだけ上に向ける。相変わらずの眼力でこちらを強く睨み付けていたが、やはり怖くない。というか、さっきの倍くらい顔が赤い。

何を言いつ出すのだろうか？ 少しソワソワしていると、すぐに円香はポツリポツリと声を掛けてきた。

「おつ……………おにゅつ……………つ……………おにい、ちゃん……………」

「……」

やはり、可愛過ぎた。無理しなくて良いのに、と思う反面、やはり可愛いものは可愛かった。

もう三回呼んで、なんて言いそうになったのを今度はグツと堪え、また頭を撫でた。

「マドちゃん、一生愛してる」

「……うるさい、しね」

「俺も呼ぼうか？」

「………いいい」

なんて、朝から誰にも言えない糖度を発している時だった。円香のパジャマの裾を後ろからきゅつと掴まれる。

円香がそれに気づいて振り返り、明里も釣られてそっちを向くと、透が寝惚けた顔で

円香を見ていた。

「………ずるい」

「はっ」

「私も、お姉ちゃんって呼んで」

「………は？ (マジギレ)」

勃発した。

よそに飛んで大きくなった火種は返ってくる。

福丸小糸は、サングラスにマスクを装備してゲームショップに来ていた。ノクチルの放送以外でゲームをあまりやることがない小糸だが、どうしても調べなければならぬことがあった。

……そう、乙女ゲーである。それも、ただの乙女ゲーではない。姉妹間モノの乙女ゲーだ。

何故、こんな暴挙に移ったのか、それはここ最近の出来事に遡る。

最初聞いた時は「びえっ？ ふ、二股？」とは思ったが、それでもまあ某画像のように「でも幸せならOKです」と、透と円香の顔を見て少なからず思ったので流した。

しかし、驚いた。その彼氏の口から聞いたが、三人は既にエッチなことを経験している、しかも何を思ったのか兄妹プレイに手を出しているらしい。

透は……まあ、多分あれで案外、切り替えられるから良いとして、気を許した相手には驚く程、ちよろい円香にはマズイ。実際、この前は異変が出ていた。

そのため、今日はまずその「兄妹プレイ」とはなんなのかを理解しにきた。元に戻すには、理解することである。

で、まあ……ちよつと今、18歳未満禁止のものを見るのはあれなので、先に全年齢版の兄妹ものの乙女ゲーを探しにきたわけだ。

「……」

が……分からない。自分にお兄さんはいないが、妹はいる。異性ではないが、どう考えたつてそれを恋愛対象としては見れない。妹を仮に弟として見たとして、その上でメチャクチャイケメン、勉強も出来て柔道もアホ強く、頼り甲斐しかない天然として見ても無理だ。ましてや、エッチなことをするなんて確実に無理。

はあ、とため息が漏れる。だが、まあこの手の感情はそもそもやってみないと分からないものだ。

「……よ、よし……!」

とりあえず……「店員のおすすめ評価☆5」の奴を手にとってみた。裏表紙を見ると、日本人の兄のはずなのに、やたらと髪の色が賑やかな人、にクールな髪の色なのにキザツたらしく見える男の人、そして髪の色自体は普通だけどメガネをかけてジョジョ立ちのようなポーズをしている三人が映っている。これを自分は兄と見て、誰か1人を落とさないといけないらしい。つーか、兄妹なのに全然、似てない。

「……菅谷先輩に似てる人……って言ったたら、賑やかな人かな……」

髪の色ではなく、性格が一番、明るそうだ。さて、これを持ってレジに……と、思っ

たところ、棚の前から離れると、見覚えのあるスーツの人とメガネの人とぼったり遭遇した。

「あつ、いとちや……えつ」

「小糸？ こんな所だな……えつ」

「ぴえつ」

目の前にいたのは、三峰結華とプロデューサーさん。

変装しているのに正体がバレた上に、兄妹ものの乙女ゲーを持っているところを見られた。

コミュ障とか内弁慶とか、そんなん関係なくフリーズしてしまった。

「え……いとちちゃん、そういう趣味……？」

「い、意外だな……いや、意外でもないのか……？」

「い、いやっ……そ、その……これは、違っ」

「だ、大丈夫。三峰は何も誰にも何処にも呟かないよ。ノクチルの三人にも言わない。うん。性癖は人それぞれだから」

「い、いえ、ですから違」

「ただ……本当に兄がいる身として一言だけ言わせて」

全く話を聞く気がない結華は、ガツと小糸の両肩に手を置いた。意外な力強さに「ぴ

えっ」と声が漏れる。

そして、メガネ越しにらしくなく鋭い視線を自分の視線に合わせた結華が、やたらと実感のこもった声で言った。

「……兄にそんな感情を抱く妹はいないから。それだけは忘れないで」

「ぴえん……」

思わず涙が流れそうになった反面、ふと思ったことがあった。

「そ、それ……義兄とかでも、ですか……？」

「……」

すると、結華はとつても意外そうな表情になる。自分がそんな事を呟いたのが意外だったのだろうか？ いや、意外だそれは。

が、やがて結華は両肩にあつた手を顎に当てて目を逸らす。

「……考えた事も無かつた……義兄、か……お兄ちゃんと血が繋がってなくて……日常生活を送る……」

「は、はい……」

「……もしかして、いとちゃんそういうの興味あるの？」

なんて答えようか……いや、普通にないわけだが。だが、円香を元に戻すため、目の前のサブカル女子から色々と話を聞くのはアリかもしれない。

「……は、はい！」

「よし……今度、良かったら良い感じの乙女ゲー探しに行かない？」

「良い、感じ？」

「義兄ものの」

「……いきます！」

「えっ!?」

声を漏らしたのはプロデューサーだった。

「い、行くのか……？」

「は、はい……！ 私には、道に戻さなければならぬ人がいるので……！」

「え、教員目指してる？」

そんなツツコミも無視して、結華と小糸は握手をした。

「じゃあ、次の休みに……新しい道を模索しよう！」

「は、はい……！ では、私はこれを使って先に勉強しておきます！」

「待った、いとちゃん！」

「な、なんですか……？」

「兄と義兄じゃ全然、違う。実際に実の兄がいる三峰が言うんだから、間違いない」

「そ、そうなんですか……？」

「そうだよ。……だから、お宝は私と出かける時に、至高の一品を掘り出そう」
 「は、はい……！」

頼りになる……！ と、普段のコミュ障も忘れて目を輝かせる小糸と、新たな道とそ
 の布教を同時にこなす結華の姿を、プロデューサーは複雑そうに眺めた。

「ふっふっふー、ついに追い詰めたぞ。ライダー」

「現れたな……怪人、クリアサイダー！」

七月手前になって、そろそろ暑くなってきた頃。シェアハウスで暮らす馬鹿二人は、
 良い歳して暴れていた。

「ライダー……変、身！ どうっ」

ポーズを決めた明里は、ソファーの上から両手を上に伸ばしてジャンプした。指先が
 天井に直撃し、ボギツと嫌な音がした。

「痛っ……」

「隙を見せたな、ライダー！」

「え」

割とシャレにならない音が聞こえたのだが、蹲っている明里に透は聞く気もなく詰め
 寄ってくる。

「ちよつ、今突き指したから待って……」

「いないでしょ。突き指したから待って待ってくれる怪人」

「や、安全を考慮して特訓しないと……」

「浅倉レインボー」

「や、待つ……あひやひやひやひやひや！」

脇の下に指を挟まれ、小刻みに指先のみで振動される。しかも、蹲っている背中の上に跨つて、だ。

「し、死ぬつ！ とおるつ……や、やめつ……！」

「わ、今呼び捨てした？ 新鮮。もっかい」

「もつがいじやなくなつてつひやつひやつひやつ！」

なんていう馬鹿をやっている二人を眺めながら、円香は小さくため息をついた。本当に元気なものだ。

今度、明里が仮面ライダーをやる事になったらしいので、その練習を二人でやっているらしい。大学生のアイドルと大学生のモデルが二人揃って仮面ライダーごっこ……流石に円香は付き合いきれないので、無視して明里が出ているファッション誌を読み耽る。

「……」

……えっちだ。夏に向けての特集らしいが、爽やかな青いシャツを第二ボタンまで開けて、胸元の大胸筋をチラつかせ、その胸元にサングラスを引っ掛け、アンニュイな視線を空に向けている。……えっちだ。

えっちだ、が……これが……。

「こつ、の……そつちがその気なら……！」

「わっ……すっごい力……！」

「ライダープロペラ！」

「おごっ……？」

どうやっているのかは知らないが、透の下で高速回転して体を上に向けた直後、両腕で透の脇の下に手を差し込んで持ち上げると同時に担ぎ上げ、フル回転し始めた。

「ちよっ……やめっ、よ、酔う……！」

「やめなかったのはそつちが先だから……うげっ、俺も酔ってきた……」

「アホー！」

あのたまに出る人間離れした瞬発力と身体能力はもちろん、仮面ライダーの役者に向いているが、今気になるのはそこではない。

……あの、バカなことしている子が、この雑誌のクールな青年と同じ人……ホント、人は見た目通りとは限らない生き物である。

「……はあ、まあ良いか」

こういうアンニュイな明里は新鮮だから、別に良い。こんな顔で明里にふまれるのも悪くないかも……なんて魔が差して呟きながら、雑誌を閉じた時だ。スマホが震えた。

「……二人とも。静かにして。プロデューサーから電話」

「え……それ、私らが出て行かないといけないの……？」

「いいよ、とおるん。ついでに休憩しよう。コンビニでアイス買いに行かない？」

「お、良いねー」

「マドちゃん、今から会えない？ みたいな電話だったら俺に言ってね。何もしないけど明日には彼の身に何か起こってるから」

「はいはい。私、パ〇ムのほうじ茶で良い」

二人で部屋を出て行くのにリクエストをかました円香は電話に出た。

「もしもし？ プライベートな時間に何か御用ですか？ ミスターお節介」

『お節介でも良いから聞いてくれ。緊急事態なんだよ……！』

「そうですか」

『……小糸が今度、結華と乙女ゲーを買いに行くらいんだ……！』

「……は？」

『それも……義兄モノの』

「……エイプリルフルなら終わりましたが」

『本当だつて！　こんな嘘、円香につくほど命知らずじゃない』

「どういう意味ですか？」

『円香↓菅谷くん↓大外刈り』

「……そうでしたね」

なんていうか、すごく話が分かりやすい男だ。

「それで……何故、そんな事に？」

『俺にも分からないけど……でも、円香には伝えておいた方が良いかな、と思ったんだが

……余計なお世話だったか？』

「いえ……あなたにしては良い判断だったと言えるでしょう。……その日はいつですか

？」

『次の休みって言ってたよ』

「……となると、小糸の休みは来週の土曜。ありがとうございます」

『え、どうするの？』

「それはあなたには関係ないので。情報には感謝します」

『う、うん？』

それだけ話して、電話を切った。さて、そうと決まれば、協力者を募ろう。そう決め

て、すぐにコンビニまで出掛けることにした。

×××
さて、土曜日。駅前のロータリーで、小糸は少し緊張気味に肩から下げている鞆の紐を握っていた。

つい、勢いで了承してしまったが、ノクチル以外の人と二人きりで外出なんてあまりない。いまだになれない事だ。

だが、それでも円香を元に戻すため、覚悟を決めるしかない。
すると、その自分の前にサイドカー付きのバイクが止まる。

「おつまたせー、いとちやーん」

「あ、は、はい……………！ 結華さん……………か、カツコ良いですね……………」

「え、そう?」

少し前までは原付だけだったはずだが、進化していた。乗ってみたいと言えば乗ってみたい。

「いとちゃんも……………少し、私服大人っぽくなったじゃん」

「え、そ、そうですか?」

「うん。三峰はもう20超えたおばさんだからよく分かりますよー」

「そ、そんなことないです！ 結華さんも……………全然、お変わりなくて……………!」

「……胸もね」

「ぴえっ……っ？」

しまった、と小糸は声を漏らす。結華はすぐにへらつとした笑みを浮かべて続けた。「なーんて、じよーだんだよ。……でも、いとちゃんもそのまま成人までお変わりなかつたら、283事務所貧乳同盟を作ろう」

「び、ぴえー……」

「ちなみに、ひおりん、りんりん、じゅりちーも呼ぶ予定です」

嫌だ、と率直に思ってしまったが、もし加盟することになった場合、その三人にも変わってほしくないと思ってしまう程度には小糸も成長が無かった。

「よし、じゃあ行こう。最高のそれを探しに！」

「は、はい……！」

そうだ。最高のそれはともかく、円香の性癖のためだ。頑張らないと、と気を強く引き締めて、小糸は結華からヘルメットを受け取った。

×

「小糸を、サイドカーに乗せてる……羨ましい……！」

「ねえ、マドちゃん。これ俺何してんの？」

「いいから車出して。見失う」

その二人が出発した少し後ろで、車の運転席に乗っている明里に円香が命令を下す。後ろの席に透も座ってはいるが、スマホをいじっている。

仕方なく、明里は車を出し、そのまま二人の後をつけた。

「……三峰さん……あの人が、小糸の性癖を……せめて、義兄じゃなくて義姉を勧めてくれれば……！」

「いや、そっちの方がヤバくね？」

「アホは黙ってて」

「……」

あんまりな言い草に、明里は思わず黙り込んでしまうが、円香には関係ない。羨ましいこと山の如しだ。

「……私もバイクの免許取ろうかな……」

「やめといた方が良くないんじゃないの。危ないし、事故率高いし」

「取ったら、リカもサイドカーに乗せて連れ回してあげるけど？」

「いや、それ俺が連れ回すべきなのでは？」

「……リカは弟でしょ？」

「その前に彼氏のつもりなんだけど……それに、たまには俺が兄貴になっても良いんだけ……」

「……」

この前のことを揶揄われているのかと思つたが、おそらく違う。むしろ「たまには自分に甘えろ」と言つてくれているのかもしれない。

だが、分かつていない。今この瞬間が、既に甘えている状況であることに。

「……バカ」

「えつ、なんで？」

「リカー、私も乗せてー？」

「三人乗りは無理でしょ……やっぱ車で良いよね」

「それなー」

話しながら、後を追つた。

×

到着したのは秋葉原。やはり乙女ゲームを買うならここだろう。

近くのバイクも停められるパーキングにそれを止めると、そのまま二人で秋葉原の街並みを歩いた。

「す、すごい……秋葉原つて、大きい建物が多いんですね……！」

「まあね。一つの建物にいろんなジャンルのもの売ってるし、見て回るだけでも面白い

「よ」

「へ、へえ〜……」

あまり興味はなかったが、少し出て来た。こうして見回すだけでも、建物の看板やら何やらに二次元の美少女やイケメンがデカデカと貼られている。

そんな中、ふと目に入ったのは、頭から馬耳を生やした女の子だった。

「あ……この子、円香ちゃんに似てるかも……」

「ん？ あー、タイシンね。……確かに超似てるかも」

「こ、これ、なんのアニメの子ですか？」

「ウマ娘。ウマが女の子になるの。最近、アプリも出たよ」

「え、ウマが……なんで？」

「そこは突っ込んでいけないうところから」

よく分からないが……そう言うなら従っておいた方が良い気もする。それより、少しだけゲームに興味が出た。

「ど、どんなゲームなんですか……？」

「ウマ娘を育成するゲームだよん。面白いよ？」

「わ、私が……円香ちゃんを育成？」

「や、タイシンね。……それに、割とかなり沼ではあるけど」

「沼？」

「あー……まあ、始めたら止まらないというか……むしろ止まれないというか……割と地獄が待ってる感じはある」

「そ、そうですか……」

「とりあえず、おすすめはやめておくね。責任取れないから」

「わ、分かりました……」

そう返事をしつつも、小糸の視線はその大きなナリタタイシンの絵柄に向く。かなり気になってしまう。このツンデレっぽさが特に。

それを敏感に感じ取った結華は、少しクスツと微笑むと小糸に声を掛けた。

「ま、推しを愛するのは何もゲームをやることだけじゃないからね」

「あ、愛するなんてそんな……」

「同人誌とか見に行ってみる？」

「同人誌って……なんですか？」

「二次創作って言って、他の人のキャラで漫画を描くの。……ま、見てみた方が早いよ」
そう言って、二人でそのお店に向かった。

高いビルのお店に入る。小糸にとっては見たことのない建物だ。

「お、大きい……」

「ぎ、入ろう入ろう」

話しながら、エレベーターに乗って六階に到着した。中に売っていたのは……薄い本が大量に置かれている本棚だった。

「こ、これが……同人誌、ですか？」

「そうそう。ウマは……こつちかな？」

話しながら歩いてみると、ウマ娘の同人誌が置いてあった。

結華が手に取ったものの表紙には、どこか違う気がするけど、さつきと同じナリタタイシンが写っている本。

「なんか……さつきの子と少し違う？」

「そりやねー。これ書いたの、さつきのと違う人だし。ゲームをやっている人とかアニメを見た人が描いたんだよ」

「へえ……」

「気になるのがあったら買って見たら？ 高いものでもないから」

「は、はい……」

×× こういう創作もあるんだ……と、少し感動ながら、そのフロアを見て回った。

×

× 「これと私、どこが似てる？」

「何もかも」

「あんたら後でご飯抜きだから」

ナリタタイシンのデツカイ絵の前で聞いたが、二人に口を揃えて頷かれたので、少し半ギレした。

「ていうか、いいから小糸の後追うよ」

「いやマドちゃんから話振ったんじゃん」

「……にしても、似てるね。円香とこの、ナリタ……ダイジン？」

「タイキンじゃなかった？」

「ガイジンだった気もする」

「いいから早く来て」

そもそも自分はこんな仏頂面じゃない。……まあ、表情が変わりやすいわけではないという自覚もあったが。

そのまま三人で、慎重に気づかれないように後をつける。バレたらさすがに怒られるだろうから。

そんな時だった。

「ご主人様、よろしければメイド喫茶で休んでいかれますか？　こちらサービス券をお配りしております♡」

「サービス券って……ラーメン大盛り無料とか？」

「は？ あんた何興味持つてんの？」

「大丈夫です」

「あ、すみません」

街で営業していたメイドさんを、秒で二人が追い返した。あまりに鉄壁なガード且つコンビネーションに、メイドさんはすぐに引き下がる。

「あんた……いい加減にしてくれる？」

「あんまモテられると困るんだけど」

「え、もしかして俺、怒られてる？」

「当たり前でしょ」

「ええ……」

理不尽なことを言っている自覚はあったが、どうにもやはりこうなってしまう。

それでも明里は特に不満を抱いている様子はなく、二人に声をかけた。

「しかし……賑やかな場所だよ。なんか……ちよつと変な臭いするし」

「まあ……確かに。結構、道端にタバコの吸い殻とか落ちてるし。ね？ リカ」

「わ、悪かったってこの前は……」

「ホントだよ。リカ」

「とおるんだってノリノリだった癖に……」

話しながら、横断歩道を渡った。結華と小糸の二人が渡ったからだ。

だが、正直円香としては思ったより普通の街な感じがする、というのが正直な感想だった。もつとこう……女の子の絵柄が描かれたTシャツを着ている奴がいたり、渦巻きが書いてあるメガネをかけている奴がいたりするものだと思っていたからだ。

むしろ、割とオシャレな人もいて驚いている。

そんな中、透がポツリと呟いた。

「にしても……小糸ちゃんが乙女ゲーかあ……なんか、感慨深いよね」

「は？ 大ピンチでしょ。あの小糸が乙女ゲーなんですけど？」

「まあ、円香は小糸ちゃんの事、大好きだからね。昔から」

あの小動物を嫌いになる人間はいない。いたら普通に頭おかしいとさえ思ってしまう。

まあ、何にしても円香の中で乙女ゲー……それも義兄とか少しレベルが高そうに見えるものの良いイメージはない。まずはどういう理由でそれが好きになったのかを知りたい。

「ちなみに……リカは恋愛ゲームとかやったことあるの？」

「ないよ。マドちゃんとかとおるんと出会う前は恋愛なんて興味なかったし。二人は？」

「まったく」

「だよねー。なんかそんな感じするし」

円香も、恋愛なんて興味なかった。それこそ、明里と出会うまでの間は。

「わお、見てリカ」

「んー？」

「これ、ヒグチタイシンのぬいぐるみじゃん？」

「ほんとだ。やつば超似てる」

「そこ、うるさい」

……何度も何度も、好きになる相手を間違えた、と思う事はあっても、別れてやりた
い、と本気で思ったことは一度もなかったのだが……やはり不思議なものだ。色々。

とりあえず、そのヒグチタイシンという言い草はやめてほしいものだ。普通に恥ずか
しい。

「……二人とも、次にヒグチタイシンとかほざいたらビンタするから」

「えっ」

「いいから、まじめに小糸を追って」

そのまま二人の手を引いて、円香は小糸と結華の背中を追う。

しばらく歩いていると、二人が入って行ったのは、大きな建物だった。壁にはま○だ

らけ総本店と書かれています。

「うおー、すげー。総本店だって。なんかすごそう」

「わかるわー」

「……こんなオタクオーラがすごい建物に、小糸が……」

感動する二人を捨て置いて、円香は奥歯を噛み締める。何やら垂れ幕には「同人誌」という言葉があったが、脳裏に浮かんだのは明里のガンダムエロ同人預かり事件である。

つまり、同人誌という言葉にあまり良いイメージがない。

「よし、行くよ」

「せっかくだから、色んなもの見てみたくない？」

「うん。良いね」

「……そういうのは二人がいるフロアで見て」

三人とも建物の前で隠れていると、エレベーターに乗り込む二人が見えたので、扉が閉まった後に何階に向かったのかを確認する。

「六階……割と上の方行ったな」

「階段で行くから」

「えっ」

「当たり前でしょ。バレるから、エレベーター使ったら」

「……………」

円香がサクサクと階段を使って登り始める中、二人は仕方なさそうに階段を使った。

……方が一、えっちな同人誌があったら、その時は明里の目を塞がないといけない。そういう時のためでも、円香は先に登る必要があった。

さて、せつかくの休日とか、知ったことかと言わんばかりにサクサク階段を登った円香は、目的の階に上がる。

「着いた」

一応、ここに上がってきたはず……と、思いながら、中を覗き込む。

「気になるのがあったら買って見たら？ 高いものでもないから」

「は、はい……………」

慌てて引っ込んだ。ウマ娘、だっただろうか？ その同人誌コーナー、思ったより階段の近くにあったからだ。

隠れて、中の様子を眺める。小系はいつもショッピングする時と同じように、見ていた。

……まあ、正直オタク文化に小系が触れてると思うと少し複雑だが、それでも楽しそうにしている分には見守った方が良い気もする。あの表情だと、この前のようにえっちなもの、というわけでもなさそうだし。

とにかく、同じフロアにいるのは危険だ。ここは、店の入り口で中を見物するのがベストだろう。

「リカ、透。しばらくここで……あれ？」

振り返ると、いなかった。二人とも。は？ と、すぐ眉間に皺がよる。あいつら何してんの？ と思ったのも束の間、スマホに連絡が来た。何やら形容し難い怪獣に電線が通り、コントローラーに結ばれているおもちゃの写真だ。

LIKA☆『見てこれ！』

LIKA☆『10万円だって！』

……だから何なんだろうか？ この男は……。あと、写真に透が映っているのも謎だ。

何にしても、せめて寄るなら一言声かけてくれれば良いのに。絶対に引き止めたから。

……まあでも、確かに秋葉原なんて滅多に来ないし、二人とも興味あるのなら仕方ないのかも……と、少し理解しようとしながらも、とりあえず、という風に続けて返信しておいた。

マドちゃん『早く上来ないとピンタするから』

素直さにも種類はある。

それから、色々なお店を回った。せっかくの秋葉原なので、メイド喫茶にゲームセンター、よく分からないフィギュアのお店に、あと何故か味と看板が濃いラーメン屋……などなど、とにかく沢山だ。

それはそれで楽しかったのだが、そろそろ本題に入りたい。

「ゆ、結華さん……そろそろ」

「ああ、乙女ゲーね。りよーかいりよーかい」

元々の目的はそれである。そんなわけで、結華の案内でそのゲームが売っているお店へと向かった。

……しかし、なーんか誰かに見られている気がする。秋葉原に着いてから気が付いた事なのだが、不思議とその視線に嫌悪感は感じなかった。

でも……気になる。嫌悪感がしないだけなら良いのだが、その理由が自分ではなく結華に向けられているからだとしたら、やはり嫌だ。

……言った方が良いだろうか？ いや、結華を不安にさせてしまうかもしれない。

「………気付いた？ いとちゃん」

「え？」

「……つけられてるよね、ずっと」

「え、あ、はい。……気付いてたんですか？」

「そりや、分かりやすかったし」

マジか、と少しだけ小糸は意外そうに結華を見上げる。いや、前々から割と色んな細かいところに気付く人だとは思っていたけど、後ろの尾行にまで気付くとは。

まあなんにしても、それなら話は早い。

「ど、どうしましょう……」

「うーん……まあ、放っておいても問題はなさそうなんだけど……これ以上、ついてこれてもねえ」

「……は、はい……」

「よし、一旦別れよつか」

「え？」

「まあ、三峰を信じて？」

「は、はい……！」

×× そう約束すると、二人は次の曲がり角で小糸は真つ直ぐ歩き、結華は左へ曲がった。

「……疲れた」

「ちよつと休みたい……」

「二人ともうるさい」

ぴーこらぴーこら言い出した二人を円香が黙らせる。お願いだから、尾行に集中して欲しいものだ。

「……ていうかマドちゃんー、別に乙女ゲー買うくらいなんてことないってー。もう俺達も秋葉原楽しもーよー」

「……うるさい。それ私とか透が乙女ゲー買うのをスルーするのと同じだから」
そんな風に言われては、明里も従うほかないわけだが……少し狡いと思わないわけでもない。

すると、透がふと気がついたように「あつ」と声を漏らす。

「なんか二手に別れた」

「え?」

「……どうする?」

「私と透で小糸を追うから、リカは三峰さんをお願い」

「テキパキしてる……」

「ね、指揮官みたい」

「え、なんの指揮官?」

「なんかの」

「任務中にお喋りとは良い度胸だな二等兵達」

「ご無礼をお許してください」

速攻で謝った。さて、とりあえず命令通りに二手に分かれた。透と円香は真つ直ぐ歩き、小走りで小糸を追う。

しばらく小糸を追っていると、コンビニの中に入ったのが見えたので、その中に透と円香も入る……が、その中で小糸は腰に手を当てて仁王立ちしていた。

「! 小糸……!」

「わお、やられた」

「本当に円香ちゃんと透ちゃんだった……」

小糸も驚いていたので、すぐに理解した。これは結華が考えた作戦……そして、それはつまり……結華が進んで明里と二人になったことを指し示す……。

「リカが危ない?!?!」

「びえっ?!?! ど、どうしたの二人とも……ていうか、どうしてあとつけてたの?」

「後で話すから」

「リカ探さない」と

「だ、ダメー！　まずはなんでつけてたのか説明して！」

相当気になっていいるのか、小糸にしてはしつこく二人の手首を掴んでいる。

どうする？　みたいな視線のやり取りをしたあと「ここまで食い下がられると無視で
きなくない？」「小糸ちゃんには甘いね。相愛変わらず」「うるさい。私が話聞くから、透
は後を追って」「りよかい」と、視線だけで0.2秒間、会話した後、頷き合つてすぐに
提案した。

「じゃ、透だけでも先に行つて」

「りよ」

「ダメー！　二人で説明して……！」

「……」

「びえっ……」

ちよつと睨んでしまった。まあ、ストーキングしてた自分達が悪いのだからお門違
なのだが。

もうこうなつた以上は、さっさと説明して後を追つた方が良い気がする。

「実はね、小糸……」

「うん？」

そう、元はと言えば小糸が義兄モノの乙女ゲーを買うという話。この際、直接聞いて

みても良いかもしれない。

「小糸は……義兄が欲しかったの？」

「……ま、円香ちゃんは何を言っているの……？」

ちよつと聞き方を間違えた。とはいえ……どう聞いたら良いのか分からない。こういう性的な話は、オブラートに包んで聞かないとならないから。

頭の中で言葉を選んでいると、透が一刀の元、斬り捨てに掛かった。

「プロデューサーから聞いたんだって。小糸ちゃんが買おうとしてるとこ」

「ぴえっ……な、何を？」

「義兄モノの乙女ゲー」

「ぴゃんっ!!？」

「……まあ、そういうこと」

特にフオーする事なく、円香も頷いた。何せ、真つ赤になつた小糸はそれは可愛らしかったから。

「な、なんでそれを……!!？」

「や、だからプロデューサーから聞いた」

「ち、違うの、二人とも！」

「否定しなくても良いよ、小糸。私も透も何も言わないから」

「っ……………」

すると、小糸はちよつとだけ腹が立ったように眉間に皺を寄せる。あれ、今そんな腹立てるようなこと言った？ と、円香が小首を傾げると、小糸は顔を真っ赤にしたまま怒鳴った。

「そ、そんなの円香ちゃんに言われたくないよ！ 本当は菅谷先輩のこと、義兄にしたいと思つてるくせに……………」

「……………は？」

「ぴえっ……………」

思わず眼光を鋭くギラつかせてしまった。殺意の波動を何とか抑えながら顔を向け聞き返す。

「違うから。リカは弟だから」

「じゃあなんでこの前、普通にお兄ちゃんとか呼んでたの!?？」

「っ……………」

思い出してしまった。トラウマに近い感情を。いや……………まあ、悪くないと言えば悪くないのだが、それにしても的確にレバーを何度も狙われたように吐血しそうになる。

「こ、小糸、やめて」

「私は円香ちゃんがおかしくなっちゃったんじゃないかと思つて、まず理解しようと頑

張ってたのに……!」

「小糸」

「ていうか、そもそも弟って言うのもよく分からないから! 同い年なのに……性癖変なのは円香ちゃんだよ!」

「……小糸。周り見て」

少しずつヒートアップしていくに連れて、周りの人の視線が向けられていく。ここは、秋葉原の街中なのだ。

ハツとした小糸は、周りを見る。確かに、ちよつと声が大きかったかも知れない。

「とにかく、落ち着けるとこ行こう」

「何処?」

「じゃあ、義妹喫茶で。さっきはメイド行っただし」

「ええ……」

困った顔をしつつも、二人ともとりあえず透の案に従った。

×

× 一方、その頃。

「えっ、モデルの菅谷明里さん!?」

「えっ、知ってるんですか俺のこと?」

「知ってるよ〜！ さくやんが出てた雑誌に出てる子でしょ〜？ ていうか、一時期並んで出てたって聞いているし。……え、なんで」

「ここにいるか、とかですか？ まあちよつと、マドちゃんが狂って……あつ、これ言っちゃダメな奴だった」

「え、まどちゃんって……樋口円香？」

「そうですよ。それと、とおるん……浅倉透も一緒に」

「……え、二人と一緒に？ どういう関係？」

「口止めされてるんですけど……」

「内緒にするから〜……イロイロ聞かせて欲しいなー、なんて三峰は思うわけですよ？」

「えー……どうしようかな……」

「実は三峰……とおるんとまどちゃんが事務所のソファァーでキスしそうな距離感で寝てる写真を持っていまして……」

「どこで話します？」

円香と透の危険察知能力は見事に的中した。ちゃんとおしやれ雑誌などをチェックしていた結華は、円香と透と一緒にいた男がまさかの相手で、自分の中で芽生えていた「ノクチルにちよつかい出そうとしてる危ない男説」を早くも忘れていた。

さて、どうせ円香と透と積もる話もあるだろうし、敢えて小糸にはしばらく連絡しな

かった結華は、明里と義妹喫茶に入った。

看板に義妹体験ができるとか書いてあり、結華は誘われていたがお断りして、席に着いた。

適当に注文を終えて、ワクワクした様子で結華が聞いてくる。

「で、ぶつちやけどどういう関係？ 二人と」

「付き合ってます」

「ほほう……ズバリ言うねえ。どっちと？」

「どっちとも」

「またまたあく、そういうの良いから本当の所を……え、本気で言ってるの？」

「はい？」

「……ふ、二人と？」

「いや、二人とって言い方は語弊があります。三人で、です」

「……」

なんだろう、この感じ……と、結華は冷や汗をかく。内心、おふぎけで「そうだったら面白いな」とか思っていたが、いざ本当にそうだと知ると、ちよつとどうしたら良いのか分からない。

「な……なんで？ つまり、どういう事？」

「え、いやですから」

「二股?」

「まあ……そうですね。それより写真下さい」

「あ、うん。はい。チェイン……QRコードプリーズ」

「はいはい」

そのまま連絡先を交換し、写真を送った。すると、明里は何を思っているのか、少しだけ微笑んだ。

「ふふつ……二人ともやつぱり、事務所でも仲良しだなあ」

「知らなかったの?」

「いや、知ってたけど、こうして俺がいない時の二人は見る機会がないので。……二人とも、二人でいるのが当たり前だから、あんま写真とか撮らないんですよ」

「そうなんだー」

気がつけば明里のペースで話が進んでしまっていた……が、良い機会でもあるので聞いてみた。

「ちなみにだけど……どうして、その……二股? って関係になったの? ていうか、い

つからの付き合いなの?」

「中三ですよ。とおるんと隣の席になったのがきっかけでした。そしたら、マドちゃん

もとおると基本一緒にいるから、そのまま三人で仲良くなりました」

「へ、へえ……そのまま、恋愛に？」

「はい。なんか、三人で一緒にいたいなーみたいに見える。こんな言い方したら変ですけど……マドちゃんとおるんも、俺を独り占めしたい……みたいなこと言わなくて。俺は二人が他の男の人と一緒にいるのを見ると朽木倒ししたくなるのに」

「それ禁止技じゃなかった？」

「? え、護身に禁止も何もないでしょ？」

「……」

……もしかして、この子だろうか？ 二年前に事務所に乗り込んできてプロデューサーに背負い投げをかました、283事務所で伝説になつていくケメンというのは。

「ふふ……こがたん、さくやん、まみみん、きりりん……三峰は今、伝説と一緒にいるよ……」

「え、いやそんな大袈裟な……」

「ね、写真撮らない？ 記念に」

「あの、俺別に天然記念物とかじゃないですよ？」

「ん、良いじゃん。一応、芸能人同士の記念つて事で」

「まあ良いですけど……マドちゃんとおるんには見せないで下さいよ」

……お、意外な反応……モデルなんてやってるんだし、二股状態だし、あまり気にしないのだと思っていた。

「……ただでさえ二股をしているのに、他の女の子とも仲良くするんだ？　って、殺されるので……」

「でもそれ事実じゃない？」

「いやあなたが誘って来たくせに……それに、とおるんとマドちゃんと同じ事務所の方からのお誘いを断るわけにはいかないでしょう。俺、尾行してた側ですし」

「あ、それ一応、聞いておかないと。なんでつけてたの？」

「マドちゃんが『小糸が乙女ゲーをかうなんておかしい』って」

「ああ……それは三峰も思ってたけど、まあ良いんじゃない？　性癖は人それぞれだし」

「そうですよね」

なんて話していると、隣を義妹喫茶の衣装である高校や中学くらいの制服を着た女性が横を通りかかった。

「あ、すみません。写真撮ってもらって良いですか？」

「……………はっ」

「……………あら」

横を通りかかったのは、円香だった。声をかけられた事により、円香の眉間に皺がよ

り、額に青筋が立ち、口元が引き攣る怒りの円香三点セットを發揮。

ヤバい、と結華は冷や汗を流す。修羅場だ。それも、超弩級の。例えるならそう……
光秀、秀吉、信長の同窓会のように。

ヤバい……と、結華は思わず目を逸らした時だ。

「わっ、マドちゃんセーラー服も超似合うね！」

「……は？」

「えっ」

何一つ理解していないような男は、純真で純粹で純白な笑みを浮かべてそう言った。

「ていうか、どうしたのその格好？　なんでコスプレ？」

「お店の義妹体験で……いや、そんな事より、なんで三峰さんと二人で写真……」

「ああ、なるほど。言われてみれば、マドちゃんまだまだ全然、高校生にも見えるもんね」

「い、いやだから、そんなことよりもなんで……」

「ね、写真撮ろうよ。二人で……あ、三峰さん。写真お願いします」

「え、今頼もうとしたの三峰達……」

「マドちゃん、隣座つて。で……なんかこう、妹っぽく甘えて」

スゲエ、と結華は変に感心してしまった。最初はゴリ押しで誤魔化すつもりかと思つたが、これを演技でやっているのなら、モデルより役者をやった方が良い。

案の定、円香は。最初こそ怒っていたはずが、最初の一言で顔を真っ赤にし、その次の質問で冷静さを取り戻したものの、また褒められて赤くなる。青筋も引き攣りも取れて、最後に残ったのは眉間の皺だけだった。要するに、一番可愛い奴である。

で、結局……。

「……………妹っぽく甘えるって何」

「それは……………マドちゃんが一番、甘えたいポーズで」

「ミスター無責任」

明里の隣に座りながら「お願いします」と呟きながら、円香もしれつとスマホを結華に手渡していた。

……………ダメだ、この子……………可愛過ぎる。思わず、嗚咽が漏れそうになる程。

「三峰さん？」

「は、はいはい……………じゃ、撮るよ？」

話しながら、円香は明里の方に体重を預け、肩に頭を置いた。妹……………というより、恋人にしか見えねえ……………と、思いつつも、まあでも兄妹の甘え方なんて割とあんなもんかもしれない、と思いい直す。

「じゃ、撮るよー」

「……………リカ」

「んー？」

「……お兄ちゃん」

「はうっ……」

自分は何を見せられているんだ……と、少し嫌そうな顔になってしまった時だ。

「ほ……ほら、やっぱり円香ちゃんも義兄が性癖なんじゃん……」

「は？」

「え？」

「いとちや……え、なんでスモッグ着てんの？」

それもまさか衣装？ このお店の妹の範囲広過ぎない？ と、結華が思うのも無視し

て、円香はまた顔を赤くしたまま続けた。

「違うから、小糸。これは別に……」

「な、何が違うの……!? 今、お兄ちゃんって呼んでた……」

「小糸も思わん？ 俺、やっぱり弟より兄だよね」

「あんたは黙ってて」

素直さはこういう場合、マイナスに働くんだな……と、結華はもうなんか傍観者の心地で二人を眺めていた。

そんな時だ。いつの間に、と思うほどいつの間にか、白セーラー服の透が明里の隣の

席に座っていた。

「ふふ、おにーちゃん」

「わお、とおるん？ とおるんは、白いセーラー服なんだ。可愛い」

「いえーい」

そう言いながら、透は明里に体重をかけ、腕を腕に絡める。本当に二股だった。そして、本当に二人とも明里を仲良く半分こしていた。

すごいな……と、変に感心している場合でもない。透は明里に甘えはじめて、円香は小糸に迫られているカオス状態。周りの客の視線も集めてる……というか、どの義妹がいる机よりもこの机にいる女の子達が一番可愛い面白い。

なんにしても、落ち着けないといけない。

「まどちゃん、いとちゃん」

「なんですか？」

「ま、円香ちゃん！ 話はまだ終わってないよ！」

「座ったら？ とりあえず」

「……」

すると、円香は自分の反対側を見る。隣にいる透が明里に甘えていた。それを見るなり、円香もススつと明里に身を寄せた。

「人が怒られてる間に他の妹とイチャイチャですか、ミスターブラザー」

「おにーちゃん」

「や……あの、ちよつと……」

「なんがこの男は……と、結華は思わず冷や汗を流す。何そこ、天国？　というか理想郷？」

「なんだこの男、前世でどれだけの徳を積んだらこうなるのか？　……いや、むしろ今世で積んだのでは？　ゴキブリも殺さない博愛主義で生きて来たのか、それとも無知でありながらも親切心からペットシヨップの生き物を自腹切つて購入して野に放つたりとかしてたのか……どちらにしても、この二人の間に挟まれる人間、そうはいない。」

だが、本人の女性耐性は低いのか、二人の唐突なお兄ちゃん呼びに狼狽していた。

「あ、あの……二人とも、胸があたつてるから……」

「そこかよ！　てかそこは喜ぶとこだろ！　と結華は頭の中でパニくる。なんだろう、この純情さ。大学生だよな？　現役バリバリの盛り盛りだよな？　なんて逆にこつちが恥ずかしくなつて来ていた。」

さて、一方で結華の隣に座つた小糸が、頬を赤くして口を挟む。

「ま、円香ちゃん！　聞いているのっ？」

「……うん、もう性癖義兄つて事で良いから、少し放つておいて」

「ええっ!??」 だ、だから私はその変な性癖を止めるために……
「いとちゃん」

口を挟んだのは結華。今のはちよつと聞き捨てならない。

「それはだめだよ。いとちゃん」

「えっ……ゆ、結華さんまで……!??」

「義兄が好きで、何が悪いの? 世の中には、シヨタコンと言つて12歳までの男の子じゃないと勃たない女の子もいるんだよ?」

「た、たつ……? 何が……?」

「心のナニかが」

「マドちゃん、何が立つの?」

「……知らない」

「あれじゃない? 藍染」

「私が天に立つ……なるほど。つまり、12歳の男の子を見るとBLEACHを思い出すと。……や、だからなんで?」

「日番谷?」

「それか」

なんて馬鹿二人が盛り上がるのを無視して、結華は続けた。……というか、男の子が

理解できないのにおかしい。

「で、でも……」

それでも納得できない様子の小糸。まあ、この子の性癖はおかしくないのでろうし、その手の話になった事もないのだろうから感覚は分からなくもない。ある意味では、目の前の二股とかおかしな事してるのに性癖は曲がっていないクソモテ男と同じだ。

ここは一つ……納得させてあげるしかない。じゃないと、この義妹喫茶で自前のアイドルに義妹になつてもらつて気が触れた話を大きな声でして周りの視線を集めてある意味営業妨害みたいになつている状況を打破出来ない。

許せ、我が同志……と、思いながら、結華は机に肘をついて手を組み、その上に顎を乗せて隣の小糸に告げた。

「ところで、いとちゃん」

「な、なんですか……?」

「いとちゃんにとつて、ふゆゆつてどんな人?」

「え? ふゆゆつて……冬優子さんですか?」

「そう」

言われて、小糸は少し考え込んでから言った。

「優しくて気品があつて……面倒見が良い方、でしょうか?」

「そのふゆゆの性癖が、成人済みで捻くれ拗らせ生意気アホグレボーイだとしたらどうするっ？」

「え……な、何ですかそれ……？」

「……」

言いながら無言で結華が見せた写真は、リデイ（黒）の等身大パネルと写真と写っている冬優子だった。

「え……ふ、冬優子さん……？」

「要は、どんなに良い子でも、性癖はどうしようもないって事だよ。だから、義兄萌のまどちゃんも、変なわけじゃないよ？」

「な、なるほど……」

「というか、そもそもその話、だ。」

「それに……どちらかと言うと、まどちゃんもおるんも……その、義兄と言うより、菅谷くんに萌えてるような気がするかな……」

「……」

それはその通りだった。小糸と一緒に、正面に座る男を見る。

「お兄ちゃん、お腹すいた。奢って」

「おにーちゃん、私もー。甘いもの食べたい」

「お兄ちゃんは財布？」

「お兄ちゃん、お姉ちゃんに口答えしないで」

「おにーちゃん、絶対だから。姉の言うことは」

「あれ？ お兄ちゃんなのにお姉ちゃん……？」

なんか頭悪い会話してんな、と思わず冷や汗をかいてしまった。まあ、何にしても、小糸も納得してくれたようだ。

「……すみません。その通りみたいでした……」

「じゃあ……どうする？ この後の乙女ゲー」

結華的には沼に嵌めたい気持ちがないわけではないが……その、小糸の場合、こうして心配して見に来た保護者が三人……いや、そのうちのおそらく一人だろうが、とにかくいるのでヘタは打てない。

断つてくれても結構だが……なんて思ったのがフラグになったのだらうか？

「い、いえ……その……それは正直、興味ないこともないので……お願いします……」

「……ふふ、良いだろう」

ただし、そちらが望むのであれば話は別である。良かろう、その覚悟……決まる前から受け止めたり。深淵まで、ソナタをご招待しよう。

××

さて、なんやかんやで解決したので、小糸は理由を話さぬまま結華について行き、二人で至高の一品を探しに行った。

で、円香と透と明里はせっかく秋葉原に来たので、そのまま少しだけ色々見てみることにした。

しかし、明里としてはなんやかんや楽しかった。色々とおたくっぽいお店を回れたし、メイド喫茶なんか入っちゃったりして。なんか周囲の客はすごい睨んで来ているが、覚えがないので無視。円香と透が楽しそうならなんだって良いのだ。

そのまま見て回っていると、円香が商品棚を見てポツリと声を漏らした。

「……これの何が良いんだか」

「え、何かあったの？」

「リカには早い」

「ぐえっ」

顔に張り手をもらい、首を真後ろに向けられた。お陰で振じ切れんばかりだ。

「あー、美少女フィギュア？」

「そう。それも水着」

「確かに早いかも」

「あの、俺同い年でお兄ちゃんなんじゃ……」

「は？　いつまで夢見てんの？」

酷い言いようだった。まあ別に見たいわけでもないのだが。

「そもそも、前からリカに聞きたかったんだけど、ファイギュアって何が良いわけ？」

「え、なんで俺？」

「あんた虫のいっぱい持つてるでしょ」

「ああ……いや、俺の場合はこう……自然の中を少しでも感じたいから飾つてると言うか……」

「……ふーん。意味分かんない」

「そういえば、リカの部屋またもの増えたよね。観葉植物。それにてんとう虫のちっさいおもちゃ飾つてた」

「どんだけよ……」

「う、うるさいな……」

というか、自分も別にファイギュアが良いと思ってるわけではない。生き物が良いと思っっているのだ。

だから……まあ、正直、美少女ファイギュアの良さは分からなかった。二次元のキャラに興味がないからだろう。

そんな話をしながら歩いている時だ。ふと目に入ったのは、芸能人の稼動ファイギュア

が売っている場所。思わずたまげてしまった。こんなものもあるのか、てかすごくリアルだ。

「……へえ、こんなのもあるんだ」

「あるよー」

「知らなかったの?」

「うん。全然」

……なんか、ちよつと夜中とか一人でに動き出しそうで怖い……なんて思っている時だった。

そのコーナーから出て来た男の人が抱えているフィギュアが目に入った。「立体ノクチル、浅倉透」と。

「……え」

「? リカ?」

「何かあった?」

「い、いや……」

え、出てるの? と少しだけ冷や汗をかく。どうしよう、本人達はそれを知っているのか……いや、知らなかったら問題だ。

……どうしよう、美少女フィギュア欲しい……! だが、こんな二人の前で買えな

い……………!

かくなる上は……と、思った明里は二人に声をかけた。

「……………ごめん、トイレ行つてくる」

「あー、私も」

「行こっか」

×性別の壁を利用し、購入した。

×

×その日の夜、円香はふと目を覚ました。現在、深夜二時……なのだが、なんか騒がしい。声ではなく、足音が。ギシギシと音がしてる気がした。

しかし……この時間はもう明里は寝ているはずだし……まさか、泥棒？ だとしたら

……警察……いや、通報して間違いとかだったら笑えない。一般人ならともかくアイドルだから。

……なら、仕方ない。まずは明里を起こして助けてもらおう。大丈夫、あのご飯に接着剤をかけて食べてるような頑丈で最強の子供なら何とかしてくれる。

そう思つて、部屋から出て、慎重な足運びで明里の部屋に向かう。

……だが、その物音は明里の部屋から聞こえて来ていた。まさか……明里の部屋から侵入したと言うのか？ だとしたら……寝てる明里が危ない！

「リカー！」

「ふあつ^{!!}?」

「えっ」

開けると、なんか部屋の灯がついてるところか、明里は部屋の真ん中で胡座をかいていた。

手に握られているのは、透とトンボのフィギュア。そして……その明里の前に置いてあるのは、カマキリの背中に跨っている円香のフィギュアだった。

自分が、虫の背中に……と、思うと鳥肌が立つ……と、共に少し苛立つ。こいつ何してんの？ と。たか、手元のそれは何？ と。そして、なんで自分がカマキリなの？ と。

それら全ての意味を込めて聞いた。

「……………何してんの?」

「……………いや、その……………」

「……………」

「……………か、かいました……………今日」

「……………」

気に入らない、何もかも気に入らない。私に虫を触らせるな、と言うか跨らせるな、と

か、いろいろ思ったが、まず口に出たのは自分的にも恥ずかしい事だった。

「……………本物がいれば十分でしょ。ミスターコレクター……………」

「……………そう、ですね……………」

「分かったら、早く布団に入って詰めて」

「え、詰めるの？」

「理解したかどうか分からせるから」

「は、はあ……………」

翌朝、透が起こしに来て揉めに揉めた。

「童心に帰った時ほど心は弾む。」

ようやく、大学生の夏休み。初の期末試験は余裕のよっちゃん、といつの時代の余裕の表現なのか、と言う言葉を思い出す程度には出来た明里は、とりあえず元気でいた。

それは、円香はもちろん、透も同じ。「勉強しなくても良いけど、とおるんが留年しても俺とマドちゃんは卒業するよ」のセリフが効いたようで、持ち前の集中力を活かして完璧な回答で提出したらしい。

さて、そんなわけで、今日は休み。明里は少し退屈そうに家でのんびりしていた。

「うーん……暇だし『マドえもん、透と昆虫大決戦』のジオラマでも作ろうかな」
「何それ。めっちゃ楽しそう」

同じように暇していた透が食い付いた。ちなみに、円香はお仕事でいない。

「よしっ、やるか。とおるん」

「うん」

「でもそのためには、マドちゃんの部屋からそれを取ってこないといけない」

「え、円香の部屋にあるの？ 虫のおもちゃ」

「え？ 虫のおもちゃもあるの？」

「え、ないの？　じゃあ何取りに行くの？」

「マドちゃんとおるんのおもちや」

「え、何それ？」

「探そうぜい」

「あー、うん」

と、嘸み合っているんだか嘸み合っていないんだか分からない会話で、そのまま円香の部屋へ。

円香の部屋に入ると、やはり綺麗なものだ。普通の部屋。前々から思っていたけど、少し特徴が無さすぎる。唯一、特徴的なのは壁にかけられたコルクボード。自分達三人と、ノクチルの思い出写真を画鋏で止めて貼っつけてある。

普段、ドライで冷めているように見えて、こうして思い出を大切にするあたりは本当に表には出さない人である。

勿論、明里も写真は飾っているが、こんなにたくさんは出してない。カマキリが持っているように見える写真立てなどだ。

「何処にあるかな？」

「んー、まあ適当に」

「だね」

ちなみに何故、円香と透のフィギュアがここにあるかと言うと、当たり前のことながら没収されたからだ。普通に恥ずかしかったらしい。

でも、正直割と高かったので返して欲しい所だ。そんな風に思いながら、透と二人で部屋の中を見ていると、目に入ったのは本棚。高校の卒業アルバムだ。

ずっと三人……途中から五人でいたわけだが、他に友達からメッセージとかもらつてののかなーと思いつながら取り出し、四角い箱の中からアルバムを取り出すと、中身は卒アルじゃなかった。

「え」

プラスチックのカバー背表紙には「明里の切り抜きVol. 1」と書かれていた。その隣には透の名前もある。

え、俺ら？　と思いつながら開いて中を覗くと、出て来たのは、デビュー誌の自分の切り抜きだった。

そこから全ての自分の切り抜きが、紙に貼り付けられて、その紙がファイルの中のビニールシートの中に入れられていた。

「……わお」

「何見てるの？　……わあ」

透も後ろから覗き込んで、声を漏らす。なんか……見ちゃいけないものを見たような

気がする。

こんなの見たって、もし円香にバレたら……いや、そうでなくても、明里の部屋は勝手に物色するが、自分の部屋を搜索されたらマジグレしそうな円香に現状をバレるだけで終わりだろう。

「とおるん……」

「ん」

見なかったことにして、立ち去ることにした。うん、やはり勝手に人の部屋を漁るのは良くない、と思いながらお互いに頷き合う。とりあえず……。

「今日の夕食は、マドちゃんが好きなものにしようか」

「うん」

なんて話しながら、無言で部屋を出た。

さて、そうなる何して遊ぶか、だが……二人とも、夏に備えてお金は使いたくないため、外に出るのは控えていた。

どうするか悩んでいると、透が「あつ」と声を漏らした。

「そうだ、リカ。なかったつけ、プール」

「や、だからお金使うのは……」

「じゃなくて。家に」

「……ああ、ビニールの?」

「そう」

確か、父親に貰った奴があつた気がする。早速、二人で見に行つてみた。倉庫のように使つてゐる押し入れを開けて、それっぽいのを探す。

上の方に大きな箱があつたので、二人で領き合つと、まず明里がしやがんだ。その肩の上に透が跨り、明里は足を握つて立ち上がる。

「肩車。力持ち」

「とおるん軽いから」

「ふふ、ナイス氣遣い」

「え、いやホントに。高三の冬に比べると全然、軽」

「えいつ」

「痛いよ……」

余計なことを言う馬鹿を黙らせて、棚の上の方に手を伸ばす。そして箱を両手で持つと「取つたよ」と合図を送り、降ろすために屈む……が、透はそれを拒んだ。

「このままがいい」

「え?」

「はい、リビングまで。出発進行」

「はいはい……」

言われるがまま歩き出す明里。とはいえ、170ちよいある身長の明里が、決して背が低いわけではない透を肩車しているので当然、普通にリビングには入れないのだが。

ドアノブを開けた時点で、透がゴツと頭をドアの縁にぶつけた。

「ごめん、おろして。やっぱり」

「はいはい……」

降ろしてから中に入る。

さて、改めて箱を開けた。中に入っているのはビニールのプール。綺麗に折り畳まれていて、足で踏むタイプの空気入れもセットになっていた。

「どうする?」

「やっっちゃう? 家プール」

「でも……どこで?」

「リビング。外はあれだし」

「え、家濡れない?」

「ビニールシート敷けば良くない?」

「そうね」

すぐに方針は固まった。二人とも頷き合うと、テキパキとリフォーム開始。

まずはソファアを端に寄せ、ソファアの前の机も寄せて、食卓に使っている机と椅子も壁沿いへ。

その後は、テレビなどの濡れたら困るものに布を被せ、床にビニールシートと新聞紙で二重にして敷いた。さらにその付近をタオルなどでとにかく広範囲に守りを固めていった。

あと、壁もハンガーと洗濯バサミを用いる事でガード。これなら、まあ多少は濡れるかもしれないがそんなに大きな被害は出ないだろう。

さて、最後にプールを膨らませる。

「俺やるから、とおるんは水着に着替えておいでよ」

「サンキュー」

これは一人では出来ないの、着替えにおそらく時間がかかる透を先に行かせた。シユコシユコと空気入れを踏みながら、ちよつとだけワクワクしていた。こんな風に乗るプールで遊ぶのなんて初めてだ。

その楽しみがエネルギー源となり、空気入れは加速して行った。速攻で終わらせ、ホースを蛇口から繋いで水を入れ始めている時だった、

「わあ、もう終わってんじゃん」

後ろから声がかかり、振り返る。そこにいたのは、当たり前だが水着姿の透だった。

首の後ろと腰を紐で結ぶタイプの白いシンプルな水着。

思わず、見惚れてしまった。去年と同じ水着であるはずなのに、やたらと色っぽいその姿に。

あ、あれ？　なんで？　と、明里は少し狼狽える。ここ数年はほぼ毎年、海とかに行っていたのだから、慣れてきたはずなのに……もしかして、普段水着でない場所で水着になっているから、だろうか？

しかし、円香と一緒にお風呂に入った時も水着だったはず……リビングと洗面所の差だろうか？

顔が真っ赤になった明里は、目を逸らす。それを見るなり、透はニヤリと微笑む。

「照れてる？」

「……うん。その……家の中で水着でいるって、ちよつと変な感じがして……」

「すけべ」

「う、うるさいな……」

「うん、自分で言つてあれだけど、リカ全然すけべじゃないよ。もう少しすけべでも良いくらい」

「えっ、や、やだよ……」

「……」

本当に自分で言つてアレな話である。言動が自由にも程がある。

「と、とにかくもう少し待つて。もうすぐ入れ終わるから」

「私、替わるから。着替えたら？」

「良いの？」

「ん」

「じ、じゃあ……行つてくる」

それだけ話して、明里は自室に戻つた。いや正直、助かつた。さっきのは不意打ちだったが、心の準備をすれば打ち払える程度の煩惱だったから。

深呼吸して、自分も去年の海パンを引っ張り出して着替えを終えた。ついでなので、タオルとかも用意してリビングに戻ると、水は程良く入つていて、ホースは丸めて出窓から外に置いてあり、透は既に入水していた。

うん、大丈夫。精神統一のお陰で。

「やつほー、おいでリカー」

「どんな感じ？」

「グーだと思ふ」

「じゃあ、俺も入るね」

そんなわけで、明里も入水。少し冷たいが、クーラーは切つてあるしちょうど良い。

とりあえず、お風呂の要領で肩まで浸かろうと足を折り曲げる……が、水の中の約3割を透の脚が占めていた。たかだか3割と思うなかれ。割合で言えばその程度でも、円形のものに二本の棒状のものを入れれば、こちらの範囲も限られたものになるのは必然だ。

それに気付いた透は、膝を折り曲げてお尻の横に両足首を置く。

「いえーい、いらっしやいー」

「……」

「? リカ?」

思ったより、その……近い……。それも、水着のまま。あまりの至近距離に、目のやり場に困ってしまった。何せ……透の胸は高3からさらに育つて来たのだから。

「あ、撮るか。写真」

「あ、う、うん……」

透に肩を寄せられ、写真を撮る。透がスマホを構えたので、とりあえずそちらに顔を向けた。

「おお……よく撮れてる」

「よ、良かったね……」

スマホをいじる透の横で明里は頬を赤らめたまま俯いた。

水着によって締められ、以前より強く象徴されている谷間を見ないように目を逸らし
ていると、その明里の顔面に水がスプラッシュ。

言うまでもなく、いつの間にかスマホを遠くに置いて来た透の仕業である。

「もがっ!?」

「隙アリ」

「……」

一秒で照れから戦闘モードに移動した。ニヤリと微笑んだのは明里も同じ。

「やったなー?」

「やったー」

「覚悟しろー!」

「良いだろう……ただし、貴様を倒す覚悟ならな」

「どこで覚えたのそのカッコ良いセリフ」

なんて話しながら、水かけつことが始まった。至近距離の掛け合いなので、お互いに
ノーガード。とにかくバシヤバシヤと掛け合いになった。

「浅倉スプラッシュ」

「菅谷オブ・ジ・アース」

「浅倉ビッグサンダー」

「菅谷オブ・テラー」

「浅倉スペース」

「菅谷アクアトピア」

二人を知らない人から見れば楽しんでいるようにはとても見えない様子だが、知っている人間からすればこれ以上なくらいにエンジョイしてしまっているわけだ。

ふと明里が手を止めると、中の水が半分以上、溢れているのが見えた。

「ごめん、とおるん。ちよつとたんま」

「浅倉ハニー……え、何？」

「水、ほとんどないんだけど」

「……あ、ほんとだ」

辺りを見回す。家の中にいながら、水溜りが数カ所にできていた。下準備をしておいて本当に良かったと思ってしまうほど。

……というか、よくよく見ると透の肌は鳥肌が立っている。まあ、夏とはいえ当然ながら温水プールではないし、当たり前だ。

「少し、休憩しよつか。タオル用意してあるから……」

「んー、タオルはいいや」

「え？」

そう言うと、透は明里の上半身に倒れ込むように抱きつき、そのままプールの縁に二人揃って体重をかける。

それと同時に、両足は反対側の縁からはみ出させ、だらしなく伸ばし、思いつきりラックスするような姿勢になる……が、もちろん明里は水着という薄着すぎる透が密着して来ているので落ち着かない。

「あつ……あの……とおるん……う？」

真つ赤な顔のまま、透の方へ顔を向ける。自分の肩に頭を置いた透が、相変わらず綺麗すぎる笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「ふふ、あつためて。リカが」

「つ……あ、あの……」

恥ずかしいんだけど……なんて言葉が出そうになったのも束の間、目に入ったのは、ピアスが外された透の耳。それは、中三のボランテアの時に見た時のように赤く染まっていた。

おそらく透も気恥ずかしくはあるのだろう。好きな人同士とはいえ、異性とここまでくっ付いているのだから当然だ。

それでも……やはり、くっ付いていたい。お互いにお互いの温度を感じていたい。その一心でここまでしてくれている。

なら、明里も「恥ずかしいから離れろ」とは言えなかった。

「とおるん」

「ん？ ……んっ」

むしろ、なんか可愛かったので、思わず唇を重ねてしまった。透の顔の赤みが、耳から全体に広がる。

唇を離し、プハッ……と息を吐く。5〜6秒ほど押し付けて離しただけだが、つうつ……と、二人の口を繋ぐように垂れていた唾液が、そのまま落ちて明里の肩の上に落ちたが、気にすることはなかった。

「……あつたまつた？」

「ふふ、顔真っ赤。ウケる」

「とおるんも一緒だよ」

「む……じゃあ、今度はこつちの番」

少しむすつとした透が、今度は明里にキスをする。やはり、明里より男らしく、わざわざ顎に手を添えて、足を絡めてからそれをしようとしてきた。

明里の頬が赤く染まる。ホント、なんで自分に対してだけそんなに負けず嫌いになるのか……と、思っている時だった。なんか太ももに「じよりっ……」と言う変な感触。

それと同時に、透が「んっ……」と、やたらと色っぽい吐息を漏らした。え、何今の

……と、少し思うのと同時、透もやはり顔を赤くしている。……それも、さつきと比にならない程。

その後、ぷよぷよと二人の体の間を通って流れて来たのは、紐が解けた透の水着（下半身）だった。

「えっ」

「あー……そういうノリ？」

反射的に揃って下を見た直後、視認した時点で明里の鼻から赤い液体が漏れ出すと同時に意識を失った。

「や×××だから気絶したいのこっちなんだけど……」

目の前でぶっ倒れた明里を見て、透はため息をつく。いつ明里に襲われても良いように生やしっぱなしにしていたわけではないが、まさかこんな形で見られるとは……去年のとはいえ、ちよつとキツくなっている水着を無理矢理、着たのは失敗だったということだろう。

さて、どうしたものか……正直、さっきの一瞬だけ生じた快樂は、過去に自ら行つて来たもののどれより大きかった。

……もう一度だけ、試してみようかな。なんて思ったが、すぐに訂正した。そういう

のは、三人いる時だけだ。

理性で反応を抑え込むと、とりあえず下半身に水着を履かせる。気絶しているとはいえ、下半身丸出しで横にいるのは恥ずかしいものだ。

というか、そろそろ水遊びも終わりかもしれない。このまま明里を放置すれば確実に風邪を引くし。

そんなわけで、透はまずプールの中から明里を引っ張り出した。床の上にはビニールの上なのでびしょ濡れだが致し方ない。

続いて、プールの中の水は庭に捨て、そのまま放置して乾かす。その間に、防水に使っていたタオル系を床に敷いて、その上に明里を置いた。

「よし……」

……先に、明里の着替えを済ませよう。と、決めて海パンを脱がそうと思った時だ。

「ん、う……」

「え」

「あえ……とおるん？」

目を覚ますの早い、と少し狼狽える。確かに五分で目を覚ます時もあるが、長くて半日以上、寝ていることもあるのに。

「お、起きた？」

「……あれ、おかしいな……プールの中で寝ちやったのかな」

「は？」

まさかこいつ……記憶がまた飛んだのだろうか？ いやいやいや、待て待て待て。こちららデリケートゾーンをゼロ距離で当たっちゃったのに、自分にだけ記憶があつてそつちにはない？ そんなな、納得いくはずがない。

もう一度、何かしてやろうか……と、思った時だ。何も分かっていないアホタレは、腕を組んだまま呟いた。

「なんか、ここう……申し訳なささとラツキー感が混ざり合つたようなことがあつた気がするんだけど……」

「……」

今、なんと言つた？ 申し訳なさ……ラツキーさ？ あの明里が……自分のソレに太ももが当たつた出来事をラツキーと？

なんだろう……この、なんだろう……なんか、変な親目線になつてしまう感覚は。嬉しさと……心の成長を感じた。

「ふふ、リカ。愛してるわ」

「えつ、な、何急に……？」

「3000回」

「じゃあ……俺は3001回」

「ふふ、嘘。私は3003回かも」

二人揃ってアホな事を言いながら、クスツと微笑んだ。

さて、これからどうするか、だが……せつかく目を覚ましたのだ。もつと遊びたい。

「じゃ、リカ。もつかいプールやろつか」

「良いね。ていうかせつかくだし……使っちゃう？ 屋上」

「……良いね」

そうだ、そこなら真夏のビーチの完成だ。少しワクワクして来た。

× そのまま二人で屋上が上がって、水かけっこを全力でエンジョイした。

×

「……で、そのまま屋上で遊んで水の中で気持ち良くなつて二人揃って居眠りこいてリ

ビングの片付けも忘れた、と？」

リビングにて、カンカンに怒っているのは帰ってきたヒグトラマン。そして怒られて

水着のまま正座しているのが、ブラックアカリとトオツル星人である。

「バカなの？ 年いくつ？ なんちゃいでちゆか？」

「19ちゃい……」

「18ちゃい……」

「何その口調。バカにしてんの？」

「すみません……………」

お前も使ってただろ、なんて言おうものなら終わりだ。実際、円香は自分達バカを叱っているのだから。

「とにかく、さつさと片付けてまずはご飯を食べられる状態にしてご飯を作つて。仕事して帰つて来た人に家事をやらせるようなことはやめて」

全くもつてその通りである。今日、休みだった二人は子育てや家事に勤しんでいたわけではないのだから。

「じゃあ、まずは着替えて来ます……………」

「私も……………」

「は？」

「え？」

「先に片付けてご飯作つて。それから着替えに決まつてるでしょ。何甘つたれてんの？」

「え、いや……………あの、流石に風邪……………」

「……………」

「さ、先に片付けます……………」

無言の圧力に負けて、二人で片付けはじめた。

まずは床のビニールシートから水を落とさないように運び、流し出す。

「とおるん、反対側持って」

「はいはい。ゆっくり」

「丁寧に……よし」

「まだ水滴残ってる」

「……もういい？」

「ん。あとは干しとこう」

そのまま竿に干しておいて、次は新聞紙を束ねて破棄。

「よっ、とっ……ほっ」

「とおるん、集めた奴もらうよ」

「ありがとー。このまま拭いちやう？ 窓」

「良いね」

と、ついでに軽く掃除も済ませて、ゴミ袋に放り込んだ。

続いて、防水用に使っていたタオルで床や壁を拭き始める。水滴が飛んでいるかもしれないから。

案の定、細かい飛沫が床や壁だけでなく机や椅子、ソファーなどにも飛んでいたので、

念入りに拭き取る。

「リカー、タオルどうする？」

「もらう。洗濯機入れるから」

「じゃあ、一緒に運ぶわ」

「え、なんで？」

「ん、円香と二人きりになりたくない……」

「ああ、うん……」

「ご立腹だから。」

そのまま二人はタオル類を洗濯しに行く……その様子を眺めながら、円香は不愉快そうに立ち上がった。

気に入らない。結局、自分を抜きにして楽しそうにしているのが心底、気に入らない。

ツカツカと歩くと、まずは屋上に向かう。狭い正方形に見えるスペースに、まだ片付けられていないプールがあった。

「……」

残っている水にぶかぶかと水鉄砲やらアメンボのおもちゃやらが浮いていて「楽しかった後」と言うタイトルで絵を描いて夏休み後の美術の課題で提出すれば入賞できそうな絵が目の前にあった。

その後、自室に戻った。そして、去年の水着を引っ張り出す。去年の水着を見てみた。……まだ、着れるだろうか？　せめて、明日だけでも……うん、トライしてみよう。とりあえず、上半身の服を脱いで、下着も外し、その上からビキニを……と、思つて腕を通した時だ。

「そうだ、マドちゃん。晩ご飯何が良……え」

「……はっ」

バカが入つて来た。ノックしろコラ、とかは言わない。正直、もう襲われる覚悟も襲う覚悟もあるので、下の毛のケアさえしっかりしている始末だから。

円香にとつて恥ずかしかったのは……羨ましきの余り、水着をいじっているところを見られた所だった。つまり……。

「っ……っ……っ！」

「わ、わわっ……ま、マドちゃんまつて……ごめんなさ」

「ノックくらいしろミスターピュア魔神！」

「ぐへえっ!!？」

××近くにあつた枕を放り投げて追い出してしまった。

××そんなこんなあつて、食事を終えてお風呂。明里が海パンのまま後片付けをしてくれ

ている中、円香はお風呂に入った。

今日は色々疲れたので、ぬるめのお風呂を溜めて湯船に浸かる。いやホント、どちらかと言うと仕事の後の方が疲れたが、まあどうでも良い。バカ達が反省したのなら、今は何も言わないでおく。

しかし……明日は言えば自分もプールに入れるだろうか？ お願ひしてみ……るのは癪なので、普通に脅迫する事にした。

なんて考えている時だった。お風呂の扉が開いた。

「やつほー、円香ー」

「……何」

裸で入って来たのは透。ひらひらと手を振りながら、シャワーをキュツと捻る。

「良いじゃん、たまには。あれ、背中流そうと思って」

「……もう洗い終わってるんだけど」

「じゃあ流して」

「絶対に嫌」

なんでこつちが流さないといけないのか。絶対に頭おかしい。

向こうも本気で言ってなかったのか「知ってる」みたいな顔をして体を流し始める。

「で、何？」

「何が？」

「なんでお風呂一緒？」

「んー、なんとなく」

「……」

嘘ではないのだろう。透の行動に一々、意味なんてない。あつたとしても、行動した時には忘れている可能性が高い。

まさに今がそのパターンだ。……多分、円香だけ仕事で自分達だけアホなエンジンジョイをしていたから、仲間はずれにしないため、みたいな考えだったのだろう。

……ま、もう忘れてるので、こちらから余計なことは言わないが。

「そういうえば、透。今年はどうする？」

「何が？」

「夏休み。リカの別荘？」

「あーどうするか」

「私はどこでも良いけど」

「毎年海だし……今年は何の？」

「例えば？」

「沖繩」

「それ結局海でしょ」

「じゃあ、石垣島」

「何も変わってない」

「宮古島？」

「もう分かったから」

分かっててやってているのだろう。だから腹立たしいのだが、まあ透を前にしてその程度のことで腹を立てるのは中学を上げる前にやめた。

「ていうか、まず雛菜と小糸も一緒にするか、でしょ」

「あー……あ、そうだ。円香」

「何？」

「今日なんだけどき、見られたわ」

「何を？」

「ん、(んんん)」

透の指差した先を見て、思わず吹き出してしまった。……何故なら、透の全身で唯一、陰毛が生えている箇所だったからだ。

「は？？」 あ、あんたら……な、何して……！」

「今日着てた水着、キツくて。はしゃいでたら脱げたわ」

「いや『脱げたわ』じゃなくて……!」

なんだその状況。逆に下半身見られて何もなかったのだろうか? ……なさそう。あのバカ、失神するし。

「大丈夫、その後すぐにリカ失神したから何もしてない」

ほら見たことか。

それで良いのか、男子大学生……と、思いながら、とりあえずシャンプーを手に垂らしてシヤカシヤカ手を動かし始める透に聞いた。

「え……なんでそんな事になったわけ?」

「聞こえん」

「後で聞いわ」

終わるまで待機。ホント、透もなんだかんだ女の子で、ちゃんと髪を傷つけないよう

丁寧に洗っていた。

さて、ようやく終わったので、また聞いてみた。

「で、なんで?」

「トリートメントしてからで良い?」

「……さっさとして」

「どうもー」

よかった、ぬるま湯で。あつたかい奴だったらのぼせてた。

さて、トリートメントを終えてようやく話が進む。体を洗い始めた透に、改めて聞いた。

「で、なんで？」

「何が？」

「股間見られた理由（直球）」

「ああ、なんでだっけ……あ、そだ。去年の水着着てはしゃいでたら解けたんだ」

「……」

明日、やはりプールに入るのはやめておこうか……。

「でー……なんだっけ。それでなんか言おうとしてて……」

「報告じゃなくて？」

「忘れたわ。なんかあったんだけど……」

話しながら、透は悩み始めつつ、わしゃわしゃと身体を洗う。

しかし……と、円香は透の身体を眺めながらつくづく思った。女性の身から見ても、透のスタイルは抜群だ。胸も高3を経て大きく育ち、お腹周りはいうっすらと割れているほど細く、腰回りは再び大きく主張。足も細く長く、腕も肩から指先まですらりと細く長いしなやかなレイピアのように伸びている。

……これのえつちな部分を見て発情するより気絶するとか……もしかして、明里って……性的興奮を催さない人なのだろうか？

「透……もしかしてリカってき……」

「ん？」

「なんかそういう……ゲイとかじゃなくて、性欲がない人とか？」

「あ、思い出した」

「は？」

「リカ、気絶して目を覚ました時言ってたわ。『なんか、こう……申し訳なささとラッキー感が混ざり合ったようなことがあった気がするんだけど……』って」

「……それって」

「そ。一応、ラッキーとは思ってたみたい」

なるほど、それならやはり性的興奮くらいはあるのか、と少しホツとする。……とい
うか、なんか心の成長を感じて涙が……。

「ぐすつ……あの、リカが……」

「分かるわ、気持ち。私も感激したわ」

およそ彼氏に抱く感情ではない自覚はあったが、仕方ない。あの異常な男が相手では。

「でさ、円香」

「何？」

「今年の夏休みの旅行で、リカのこと襲っちゃおうよ」

「……は？」

「や、危なかつたんだよね。見られて、リカが失神した時。今ならやりたい放題できる、的な」

「……」

なるほど、と少し理解したように円香は頷く。……確かに、一緒に暮らしていれば、自分も今日裸を見られたし逆もまた然り……というか、そんな性欲の限界がどうこう以前に、健全な大学生カップルが三ヶ月一緒にいて何もしてないってどういうことか。

「うん。襲い掛かろう。ガバっと」

「向こうから絶対来ないしね」

なんで結託して、とりあえず今年は別荘にすることにした。ホテルとかにしちやうと、ベッドが汚れてしまうかもしれないから。

とおるん、誕生日おめでとう。

夏休みの予定を決めるために、明里は撮影前の現場でスマホをいじっていた。やはり……海だろうか？　しかし、毎年行っているし、たまにはこう……別の場所にも行ってみたい。

自分は両親と夏休み、どこに行っていただろうか？　確か、割と自分が行きたい所に連れて行ってくれた。小笠原諸島、鳥取砂丘、知床、イースター島……なんか、どれもあんまり参考にならない気がする。

そんな中、ようやく一緒に共演する人が来た。全身を怪人の格好をして来た男の人だ。

「よーし、明里くん。やるよー」

「あ、はーい」

返事をしながら、明里は横に置いといた仮面を被った。……仮面ライダーの。

実を言うと、首から下も仮面ライダーだ。仮面ライダージユウド、という柔道をもチーフにしたゴリゴリのインファイトスタイルのライダーである。

「よろしくお願いします、明里せんぱい」

それと、明里の妹役、市川雛菜も。

「よろしく、雛菜」

「は〜い」

まさかのキャストイングだった。

さて、では早速、撮影開始。早速、ライダーと怪人の戦闘シーンから。殺陣に関して
は割と練習して来たので、現地での撮影でも問題無さそうではある。

地面に尻餅をついて座り込む雛菜。そして、その前に立ち塞がるライダーと、対峙す
る怪人。

ライダーは構えることなく片手だけ腰に当てて、怪人を睨む。

夏休みのことで悩んでいたが、今は工作中。切り替えなければ。役になりきれ、今の
自分は仮面ライダージュード。

妹とキャンプに来て、怪人に襲われる。人間のままでも強い主人公は、柔道技を駆使
して雑魚怪人をフルボッコにするが、卑怯な罠にハマり、ボス怪人にやられ、致命傷を
負う。

その過程で、キャンプ場の立ち入り禁止エリアにある祠に落ちて帯にそっくりのベル
トを拾う。

主人公を殺した、と勘違いしたボスは妹を殺しに行き、絶体絶命。そこに、ベルトに

よって覚醒した主人公が登場。そのまま怪人を倒し、妹に正体を明かさなまま、またキャンプを続けようとする……ん？ キャンプ？

それ、良いかも。川沿いの。水遊び、釣り、肝試し、虫取り……は円香がいるから無理として……あとは、あれだ。

「……バーベキューとか良いかも。焼き火して肉を焼くんだ」

皮肉にも、たまたま口から漏れてしまったこの言葉が「殺気高い主人公の遠回しな戦闘前のセリフ」とアドリブを取ったと捉えられ、オンエアでそのまま使われたのは、また別の話である。

休憩中。流星に真夏にライダーの衣装は暑く、明里は一度、それらを脱いで短パンにタンクトップ姿で木陰に項垂れる。

疲れた……まあ、でもこのくらいまだまだ。怪人役の人の方が大変だろうし、若い自分根を上げるわけにはいかない。この辺は根性だ。

そんな明里の頬に、ピタッと当てられる冷たい棒状のもの。

「ひゃわっ!?」

「やは〜♡ 可愛い悲鳴〜」

「ひ……雛菜か」

「差し入れもらってきたよ〜?」

渡されたのはスポーツドリンクだった。ありがたく受け取る。

「ありがとう」

「ねえ、さっきの何〜?」

「? さっきの?」

「ほら、バーベキューがどのーとか言ってた奴〜」

「あ、ああ。あれ」

聞かれてたか、とまあまあデカイ独り言だったことを忘れていた明里は思います。

「いや、マドちゃんとおるんと何処行こうかなって。夏休みだし。で、ちようどここ

キャンプ場だから、キャンプ良いかもって思って」

「あは〜〜楽しそ〜〜♡」

「でしょ?」

「雛菜も行きたい〜」

「良いね…:あーでも、一応マドちゃんとおるんに聞いてみないとかな」

「ちえー」

少し不満げな顔をしつつも、雛菜は反論する様子を見せない。まあ、それなりに長い付き合いではあるし、なんなら許可なんて必要ない気もするが…:…なんか最近二人とも

やたらと自分を見てきている気がして仕方なかった。

特に、風呂上がりで寝起き。あと休みの日は透は自分の布団の中に毎回、潜り込んできているし、円香も薄い部屋着を着ている時に限って、一緒にソファに座っていると肩に頭を乗せるどころか、膝に乗せてくるし、ちよつと色々困っている。

なので、少し慎重になっておきたい、というのもあった。

「とりあえず、聞いてみるよ」

「ありがとう」

「でも、行くならどこのキャンプ場が良いかな……」

「どこのつて〜？　ここじゃないの〜？」

「や、せつかくだし良いところが良いかなって。父ちゃんに聞けば分かるかな、そういうの

……」

「じゃあ〜……富士山の麓とかは〜？」

「あー……面白いかも」

あの辺は割と景色の良いキャンプ場が多かった気がする。まあ、今は撮影中なので調べたりしないが、ちよつと考えてみても良いかもしれない。

「ありがとう。ググってみる」

それだけ話していると、監督の呼び出しで二人とも再び撮影に戻った。

い。

「……」

……いや、それはそれでアリなのかも……なんて迷っている間に、明里が結論を求めようように聞いてきた。

「じゃあ、雛菜と小糸も誘っちゃって良い？」

「おっけー」

「え？ あ、ちよっ……」

「じゃあ、俺はキャンプ場探すね」

結局、キャンプになってしまった。嫌なわけではないが……いや、まあ良いかと思うことにした。

そのまま明里はとりあえず円香が作った麻婆豆腐を食べ続ける。

「じゃ、とりあえず明日はテント、買いに行かないといけないね」

泊まりの仕事だったこともあって、明日は休み。流石にキャンプグッズは持ってきてきかなかった為、必要なものは買ってこないといけない。

「明日行くの？」

「休みじゃん」

円香だけでなく、珍しく透も心配そうに声をかける。

仮面ライダーの撮影や打ち合わせや練習やらが結構、続いている為、明里はしばらく忙しくなる。

その上、キャンプグッズを買うとなると車での移動が必須だ。

しかし、明里は首を横に振った。

「大丈夫だよ。俺、体力だけはあるから」

「じゃあ、後でマッサージしたげる」

「あと、運転私するから」

「ありがとう。ご馳走様。美味しかったよ、マドちゃん」

「……ん」

食べ終わった明里は直球で褒めてくれて、円香は少し頬を赤らめて目を閉じる。ほんと、こういうところ欠かさないの、作り甲斐がある。

「食器、私片付けるからリカはマッサージしてもらって」

「え、なんかごめんね？」

「別にいい」

「じゃ、リカー。ソファで足伸ばして」

円香が明里の食器を持って台所に戻り、使われたレンゲをちよつとだけ舐めてる間に、透は明里とソファに座った。

「リカー、どこ疲れてるー？」

「うーん……脹脛？」

「はいはい。じゃあ、うつ伏せになつてー」

「え、食べたばかりだからそれはちよつと」

「あー……じゃあ、まず肩からで」

「はいはい」

ソファアの背もたれと明里の間に透は入り込み、両手を肩に当てて揉み始める。

「どうー？」

「もつと強くても良いかなつて」

「アイアンクローくらい？」

「アリアンロッド？ よく分かんないけどそれで」

「はいはい。……よつ、と」

「あだだだだ！ 肩取れる、取れちゃう！」

「え、肩取れるの？ あ、脱臼的な？」

「いや知らんけど……も、もう少し優しく！」

「はいはい、優しく」

「ひゃふううん……や、優しく過ぎい……くすぐりたいよ……！」

「ふふ、何今の声。かわいい。こんな感じ?」

「ひゃんっ……ら、らめらつてば……!」

少しずつなんかマツサージではなくなっていく。肩やら脇の下やら首筋辺りに、触れているか触れていないかギリギリの強度で揉まれていく……つまり。

「ひゃっはっはっはっ! し、死んじやう、死んじやうっひゃっひゃっひゃっ!」

「痒い所はごさいますか?」

「なんで美容院になつてんのっはっはっはっはっ!」

「……何してるの」

洗い物を終えた円香が二人の元に訪れる。いつの間に明里の背中の上に馬乗りになつていた透にくすぐらわれている明里を見て、円香は引き気味な声を漏らす。

「マツサージ」

「マツサージって笑いが漏れるものだっけ?」

「ま、マドひゃんっ! はふっ……たふけて……!」

「……」

マドひゃん、が良くなかった。どちらかというとうとMの円香の中にあつた僅かな嗜虐心をくすぐり……そして。

「透、押さえておいて。リカ、足疲れてない?」

「ちゆつ、ちゆかれてるけど……まず退けて……！」

「じゃ、やってあげる」

「話聞……わひやひやひやひや！ あ、足の裏はらめ！ らめらから……！」

辛いなど忘れて、虐められていた。

そのまましばらく虐められた後、ようやく解放される。力を入れるわけにもいかなかったのか、明里は本当にされるがままだった。

ひい、ひい……と、真つ赤な顔のまま肩で息をする明里に、やり過ぎたと思った円香と透は少し恐る恐る声をかける。

「あー……大丈夫？」

「ごめん、やり過ぎた」

「……大丈夫なわけ、あるか……」

虫の息のまま、ボソボソと答えた。

さて、流石にこのまま放置するわけにはいかない。マッサージをしてみるとすぐりで終えたら、性格悪いにも程がある。まあ、マッサージをすればいい出したのは透なわけだが。

「透、そろそろ普通にマッサージしてあげて」

「えー、疲れた。手」

「は？ くすぐったからでしょ。勝手に」

「いや……もう二人ともいいから触らないで……」

かすれかすれな声で聞こえてきたそれに、思わず円香も透も少しだけ傷ついた。自業自得とは言え「触らないで」と言われるとは……。

これは弁解の必要があると思ひ、透はコホンとわざとらしく咳払いをして言った。

「ごめんごめん、ちゃんとやるから」

「……ほんとに？」

「ほんと」

仕方なさそうに透に脹脛をマッサージしてもらい始めた。

足を手のひらで圧迫するように押しながら、透が聞いた。

「で、昨日今日はどうだった？」

「楽しかったよ。着ぐるみ相手に柔道技かけられるか分からなかったけど、意外と余裕だった」

「今時珍しいよね。なんか最近のは武器とかアタツチメントとかウエポンとか持ってた前だし」

「透、それ全部一緒」

なんだか仮面ライダーというよりはアメコミのヒーローのようだ。

「ていうか、着ぐるみ投げて中の人は平気なの？」

「今日に備えて、畳とかの上で練習してたからね。俺も受け身が取れるように速度を落としてたし、怪我はしてなかったよ」

「へえ……そもそも、リカがライダーの中の人もしてるんだ」

「最近の仕事はスタントの練習も入ってたし。俺今、バク転もバク宙も出来るよ」

「見たい」

「ちよつと。今はリカ休息中だから。休ませて」

× 円香が止めると、そのままマツサージを続けてもらった。

×

翌日、円香の運転で三人は出掛けた。小糸と雛菜の許可ももらい、必要な器具は三人が揃えることになった。

と、いうのも、テントは一つ両親から送られてくる、ということなので、そのテントは小糸と雛菜に貸すことにして、残りは自分たちで使う二つを買うからだ。

あとは寝袋と、バーベキューもするから携帯用のセットは決まっている。

「あと、どうしよつか？」

「一応、川で遊んだり釣りとか肝試しとかしたいなーって思ってたよ、俺」

「じゃあ……浮き輪とかボートとか水鉄砲？」

「全部、川関係でしよそれ。それだけやるのも良いけど、車に乗るくらいの量にして」
「あー、そっか」

円香からのツツコミを聞いて、二人とも顎に手を当てる。車は五人乗り。何一つ成長していない小糸がいるから、後ろの席に三人は座れるだろうが、トランクが狭い。各々の荷物があると思うと、もつと乗らなくなるだろう。

……ぶっちゃけ、テント三つも乗れるか不安なまでである。

「……父ちゃんからリムジン借りようかなあ」

「良いんじゃない？」

「良いわけないでしょ」

透の賛成を速攻で抑えた円香が言う。運転するのはおそらく明里なのだろうが、汚した時の事はちよつと考えたくない。特に、キャンプ場なんて汚して当然の場所だ。

そんな中、透が提案した。

「レンタカーは？」

「あー……まあ、ありっちゃありかな？」

七人乗りのワゴン車を借りて、後ろの席も荷物置き場に使えば良い。お金は掛かるけど……まあ仕方ないだろう。必要経費だ。

「レンタカーにしよっか」

円香も賛同し、これで荷物の制限は緩和された。

「でも、ボートと浮き輪はどっちかじゃない？」

「うん。水鉄砲も小さいの五つね。アサルトライフルの形とか駄目」

「釣竿は……やめとこうか」

「そうだね」

と、サクサク計画は進んでいく。それとほぼ同時に、キャンプグッズが売っているお店に到着した。

「着いた」

「よし、降りよう」

「俺のテントは小さめで良いよね。一人だし」

「ダメ」

「え、な、なんで……？」

二人には二人の計画があるからだが、まあ詳しくは言わずにお店に入った。あまりキャンプ用具のお店など行ったことはない三人だが、なんかこう……木製の作りになっているのがキャンプ感あって少し楽しかった。

「おお……広い」

「ね。なんか木の匂いするし」

「え、気の匂い？ 悟空？」

「え、悟空つて木の匂いするの？」

「え？」

「え？」

二人を無視した円香がサクサクと中を見に行ったので、二人とも後に続く。こうして見ると、テントにも様々な種類があるようだ。まあ、一人用というつもりはないが、可能な限りコンパクトなものにしなければならぬのだが。

「鍵付きが良いよね」

「うん」

「？ 大丈夫だよ？ 貴重品盗みに来るやつがいても、俺起きれるし」

「鍵付きにするから」

「ま、まあ……刃物とか持つてたら危ないもんね……う？」

そうじゃないが、テント選びは慎重になった。あと、布地が薄いのもダメだ。中が見えるかもしれない。

なんて真剣に選んでいる中、透が「あつ」と声を漏らす。

「見てこれ、なんか部族みたい」

そう言いながら指差した先にあるのは、三角形のテント。縦に長く、入り口が上にク

ルクルと巻かれるように開くタイプのテントだった。

「おおー……良いねこれ」

「革製？」

「いや、流石に布っぽいけど」

明里と円香も興味を持つ。流石にこれを買うということはないが、まあこうして見てみるのも楽しみの一つだ。

「中、入っても良いって」

「マジか。見よっか」

「ん」

透が靴を脱ぎ、ビニールシートの上上がった。そして、テントの中に入って寝転がる。

「おおー……良い旅部族気分」

「カルチャーショック？」

「リカと円香もおいでよ」

「はいはい」

円香のツツコミを無視して、三人で中に入ってみた。寝転がると、意外と狭い。形にこだわって性能自体はそうでもないのかもしれない。天井が高いのは良いが。

でも、狭さは割と悪くない。肌を寄せあつてる感じが……こう、良い。

「……おお、なんか良いかも……」

「分かるわ。近いよね」

「……普通に暑苦しいけど？」

「マドちゃんは素直じゃないなあ」

「いや、むしろ素直じゃん？」

「あんたら帰り走る？」

「「めんなさい」」

話しながら、そろそろ出た。まあ、値段を見たらちよつと笑える金額ではなかったの
で買えないが。

「高さがあるのは良いかもね。あれなら椅子を中に置いても良さそう」

明里に言われて、透と円香は顔を見合わせて想像する。ただでさえ狭い空間に、椅子
……。

「……いや、邪魔でしょ」

「寝れないし」

「そっかあ……」

その通りといえばその通りなのかもしれないが……なんというか、二人の様子がいつ

もと違う気がする。

いや、まあ割とドライな二人なので気の所為かもしれないが。少しだけ気になっていると、透が自分をじっと見ているのに気が付いた。その視線は、もう何度も実感している事だが、透き通るように綺麗で美しく、何も考えていない空っぽの中身まで丸々、映しているようで。

それに少し頬を赤らめていると、透は明里の頬に手を当てて控えめに微笑んだ。

「ふふ……暑苦しくても、悪くないかも」

「ーっ……そ、そうかもね……」

「イチャつく暇はないから。ウインドウショッピングより自分達の用事を済ませてくれるっ。」

円香が後ろから言うと、二人ともとりあえず身体を起こした。

さて、テントから出た三人は改めて店内を見て回る。やはり、まずはテント。それは鍵付きのものがあつたので、それにとりあえず決めておいた。

「これなら……うん。広過ぎず狭過ぎずだし」

「ね。ちよつとくらい激しくても平気そう」

「え、テントの中で枕投げでもする気なの二人とも?」

なんて話しながらも決め、続いてテーブルである。折りたたみ式のものじゃないと車

に乗らないので、コンパクトなものを選ぶ。

「バーベキューする時、鉄板と網どっちにする?」

「普通に鉄板でしょ」

「焼きそばとか食べたい」

「だよね」

多分、朝食も鉄板で食べることになるだろうし、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

でも、それはそれでトランクのスペース取るだろうし、本当に大きめの車を用意しないといけない。

上手く運転できるかは心配だが……まあ、なんとかなる。

さて、続いて携帯用の椅子。

「こんなに細く折りたためるんだ……」

「ね。でも五つでしょ」

「ていうか……やつばこれ普通に全部、車に乗せるの無理じゃない?」

「キャンプ場でバーベキュー用品の貸し出しとか出来ないかな」

「俺、そこ探そうか?」

「よろしく」

さて、それなら鉄板など必要ないので、椅子も五つ入るだろう。……とはいえ、食材

とかも入れるので、結局はぎゅうぎゅうになりそうだが。

と、こんな具合に必要なものを見繕い、メモをしていった。

さて、[×]買った、買った物を終えた。とりあえず、購入したものは全て車に詰め込み、明里と円香と透は帰宅した。

荷物を一度、家の中に入れて、とりあえず三人とも疲れたように座り込んだ。

「ふう……思った以上に重かった……」

「分かる……というか、これ本当に車に乗るのかな……」

「どうだろ……」

でも、まあとりあえず今日のところは良いだろう。後は、まあ当日に使う食材や水辺で使うものを用意すれば良い。

「じゃあ……俺、キャンプ場探してくるね」

すぐに明里が立ち上がり、パソコンをいじりにいった。予約が必要な場合もあるから、急いだ方が良いと思つての事だろう。

その様子を見て、透も身体を起こした。

「じゃ、私も探すー」

「お、珍しい」

「私は少し休むから……そっちはよろしく」

それだけ話して、明里の部屋に二人で入り、パソコンを覗いた。

「えーっと、なんだっけ。条件」

「川の近くで、バーベキューセットの貸し出しが出来るところで一泊二日」

「あー……探すか」

いまいち、理解してるのかわからない透だったが、とりあえず明里は検索してみる。

その明里の横で、肩に頭を置いてもたれかかる透。……ちよつと、距離近いなーと明

里は少し緊張気味に汗を流すが、透はそんなのお構いなしだ。

「ところで、リカ」

「んー？」

「やりたいこと言ってた時、虫取りのこと言わなかったけど……良かったの？」

「……あー」

言うのと、明里は少し冷や汗をかく。不自然に感じたのは、おそらく透だけではない。

その透も、理屈より直感で「あれ、言わないのかな」と思ったただけだ。

案の定、少し狼狽えた様子の明里はすぐに答えた。

「まあ……その、何？ マドちゃんが嫌がるかなって思ってた」

「……あー、虫苦手だから？」

「そう。ただでさえ山の中なのに、もつと嫌がるでしょ」

苦手どころか嫌いなのだ。むしろ、明里としては夏の山といえればカブトムシやクワガタ……つまり少年の夢が詰まっているだけでなく、地域によつてはミヤマクワガタやオクワガタも見られるかもしれないし、なんならコガネムシとかもいるかもしれない。しかし、円香は少しでも透と自分と一緒に良いだろうし、小糸や雛菜もいるとはいえず、離れ離れにはなりたくないと思っているだろう。

……と、思ったのだが、透はよくわかっていない様子ですぐに答えた。

「そうかな。割と一緒にくるかもよ」

「いや流石にそれはないでしょ……もしかしたら、ゴキブリもいるかもしれないのに」

「その時は、リカが守ってあげれば良いじゃん。謎。パワーで」

「まあ……そうだけど……つて、謎。パワーじゃなくて対話ね」

そのツツコミを「それにね……」と鮮やかに無視して続けた透は、隣で机に伏せながら顔だけを明里に向けて微笑んだ。

「正直、虫は嫌いかもしれないけど、それでも円香はリカの趣味くらいは理解したいと思ってるよ」

「……そうかな。俺の虫のフィギュアも触りたがらないし……」

「絶対思ってるよ。だって、私も思ってるし」

「っ……」

そう言うのと、明里は少し照れたように顔を背ける。……まあ、あれで円香は努力家だ。高校の時は、自分の一人暮らしをサポートするただけに、家事やら何やらのコツを覚えてくれたし、聞いた話では虫の本とかも読んでいたこともあるらしい。

「……そうかな」

「あ、でも連れていくなら虫除けはしてあげてね」

「そりゃ分かってるけどさ……とおるんも行く?」

「うん。……だって、リカも行くんでしょ?」

……その「明里が行くなら当たり前のように行く」という考え……気恥ずかしくなるから本当に面と向かって言うのは勘弁して欲しかったのだが……まあ、でも嬉しいので受け入れた。

「……じゃあ、虫眼鏡とミツも用意しておこうかな」

「網は?」

「俺、虫取りはしないから」

「あ、そっか」

「昼のうちに仕掛けて、夜に見て回るよ」

「ふふ、ちゃんと守ってね? ナイト様」

「……はいはい」

……本当に、可愛い彼女が二人もできたものだ、と少し明里はニヤついてしまった。さて、何にしてもその為ならば、まずは場所を探さないといけない。

「ちなみに、とおるんは行きたい場所の希望とかある？」

「ないかな、特には。あ、自然が綺麗なところ」

「キャンプ場は大体そう」

「確かに」

なんて話しながら、二人でキャンプ場を探した。

幹事役のコツは父親になる事。

旅行の朝は、普通に仕事がある日より早い。何故なら、混むのを避けないと予定が遅れてしまうから。早く着く分には構わないが、遅く着いたら遊ぶ時間が減ってしまうから。

さて、そんなわけで、明里達は朝六時に家を出て、小糸と雛菜を拾いに行った。

レンタカーは前日のうちに、借りておいたので早朝から出発できた。まずは雛菜の家からだ。

「いえーい。いくぜー」

「うえーい」

「はあ……」

と、明里の運転で、雛菜の家に向かう。借りたワゴン車は割と大きめで、必要な荷物は全部詰め込み、後ろで少しガタガタと音がする。

「なんか……重いな、こう……重量感が」

「運転してるの？」

「いや、あるんだよ。車でも重さを感じるよ。ねえ、マドちゃん？」

「うん。ある。……知りたかったら、透も運転して」

「お、良いね。やっちゃおう？」

「やめて」

「ふふ、ウケる」

なんて話しながら運転する事しばらく、ようやく市川家の前に着いた。今更ながら、受験生なのに大丈夫かな……と、思わないでも無かったが、よくよく考えたら二人の成績なら普通に推薦でいけそうだ。

「俺は車に乗ってないといけないから、二人とも迎えに行つてあげて」

「はい」

「……ん」

話すと、透と円香が雛菜を迎えに行つた。車から降りると、インターホンを鳴らした。

「おはようございませす」

「雛菜迎えにきましたー」

『あは〜おはよう。今、雛菜呼んでくるわね〜』

その数分後、玄関が開かれる。出て来たのは雛菜とその母親だろう。本当は明里も挨拶しておきたい所だが、ここを通る車がいたら迷惑だし、降りるわけにも行かない。

「雛菜、おはよ」

「透センパイおはよう……ふわあ……」

「おはようございます。おばさん」

「おはよう、円香ちゃん。透ちゃん」

挨拶した後、雛菜の母親らしき人は車の方を見る。運転席の明里も軽く会釈した。

「おはようございます」

「今日明日は娘をよろしくお願いします」

「任せて下さい。チャラチャラしたナンパ野郎は、次の日には水死体に……」

「バカが問題起こさないように、私が面倒を見ます」

「うん、よろしく」

明里の台詞を遮って円香が口を挟んだ。それと同時に、明里に強い視線が突き刺さる。超睨まれてしまったので、目を逸らす。

「じゃあ雛菜、気をつけてね」

「はーい、じゃあねお母さん」

間伸びした挨拶と共に、雛菜を連れて車に乗った。

「荷物は後部座席に置いて。あとは好きな席で良いよ」

「やほー♡ じゃあ、透先輩の隣で」

「おいでー、雛菜」

「円香先輩はトランクで良い〜?」

「良いわけではないですよ」

話しながら、円香は助手席に座った。それを横目で見ながら、明里は声を掛けた。

「マドちゃん、別に俺に気を遣わないで後ろで良いんだよ?」

「は? 絶対嫌」

「え、なんで?」

「うるさいから」

……まあ、確かに騒がしそうではあるし、なんならとても疲れそうでもある。

「やは〜〜♡ 円香先輩、そんなに明里先輩の隣が良いんだ〜〜」

「……は?」

「え、そうなの?」

「……うるさい。いいから出して。時間押して道が混んだらビンタするから」

「う、うん?」

あ、顔赤い、と明里は気付いてしまった。まあ、あんまり恥をかかせるのは好きじゃないし、微笑んで車を出すことにした。でも可愛い……なんて思っていると、後ろからさらに声が聞こえた。

「円香先輩、超素直〜彼氏の前だとそんななんだ〜♡」

「ね、可愛いよね。彼氏の前の円香」

「ノクチルだとずっと強気なのに、彼氏の前だとデレデレ」

「デレ円香だ、デレ円香」

「……ほらうるさい……」

「ほ、ホントだね……」

ノクチルならではのノリだろう。見ている分には面白いが、円香が困っているのなら、放置も出来ない。

「じゃあ、マドちゃんは今日、ずっと俺の隣にいて良いよ」

「わお……」

「やは~~~~♡」

「ーっ……き、急に……何言ってるの!?!?」

「え、あ、そっか。小系ちゃんも来るから、その時は後ろでも良いよ?」

「……うわお」

「やは~~~~♡」

「……ホント何言ってるの?」

「え、な、なんで怒ってるの……?」

一人、何もわかっていない奴がいたが、なんか空気が重くなったので車を走らせた。

× × ×
「間もなく福丸家、福丸家。お出口は、両側です」

そんな気が抜けたアナウンスと同時に、また家に到着した。車を止めると、小糸とその母親は律儀にも家の前で待っていた。

「こんにちは」

「おはようございます」

「やはやおはようございませう」

「おはようございます」

各々、挨拶すると、小糸の母親も軽く手を振った。

「お、おはよう。透ちゃん、円香ちゃん。それと……菅谷くん？」

「お、おはよう……！」

「ふ、二日間……この子の事よろしくね？」

「はい。私とリカでしっかり見ておきますので」

「う、うん……！」

「初めまして。菅谷明里です」

「初めまして……って、す、菅谷明里って……あの……？」

「えっ？」

突然の大声に、思わず背筋を伸ばしてしまう。車の扉を開けて、小系の荷物を預かっていた透でさえ顔を上げたほどだ。

「ぎ、雑誌で見ました！ 娘から名前は聞いてたけど……まさか、モデルの人とは……」

「え、言っただけなの？」

「そ、そういうえ言っただけなのかも……」

「あ、あの……握手してもらって良いですか？」

「良いですけど……ごめん、マドちゃん。前後から車来ないか見といて」

「……ん」

サイドブレーキを上げて、ギアをPのところに入れて降りた。

「あ、あの……雑誌読み始めたのは最近ですけど、ファンです！ き、今日は娘をよろしくお願いしますー！」

「ありがとうございませう。今日は任せてください。例え熊が襲ってきても、ちゃんと優しく諭します」

「え……さ、諭す……？」

リカなら出来そう、なんて思いながらも、とりあえず円香は黙って見守る。明里がモデルとしてモテルのは不愉快ではない。……モデルとして、ならば。

「お、お母さん……そろそろ……」

「あ……え、ええそうね。ごめんなさい」

小糸に促されて、ハツとして離れた。さて、握手も終えたし、再び運転席に。

「じ、じゃあ……行つてきます！」

「うん、気をつけてね」

と、話して車を走らせた。

緩やかな動きでワゴン車は公道を走り、近いうちに高速道路に乗り込む。それまで言うことは言わないといけない。

「四人とも、トイレ行きたい時は早めに言つてね。お腹空いたり喉乾いたりしたら俺の鞆に入ってるから」

「「はーい」」

「ちよつと……お昼もあるのに食べさせないで。自然薯そば食べるんでしょ？」

「大丈夫でしょ。もうみんな子供じゃないし、ペース配分くらい考えられるよ。とおるん以外」

「はあ……もう」

「マドちゃんも食べて良いからね？」

「いらない」

「えー、俺が食べたいとき、食べさせてもらいたかったのに」

「……ならその時に言つて」

「ありがとう」

そんな話をしながら運転していると、後ろで黙つて聞いていた女子組からぼつりと声が漏れる。

「……ふ、夫婦みたい、だね……」

「あは、若奥様と旦那さんみたい」

「……ふーん」

若干一名、羨ましそうな声を漏らしていたが、そのまま道路を走つた。

「あ、そうだ。あとお菓子食べるなら、なるべく食べカス落とさないでね。これレンタカーだから」

「は、はい。やは、アルフォートある。透先輩と小糸ちゃんも食べよう？」

「う、うん……じゃあ、明里先輩、いただきます」

「小糸ちゃん、お茶も飲む？」

「ありがと、透ちゃん」

後ろでガサガサと音を立てながら、雛菜が聞いてきた。

「そういえば、雛菜いま、明里先輩の妹なんだよね？」

「あー、うん。そうね」

「ごくつ、ごくつ……ぷはっ。さ、撮影どんな感じなの……？」

「小糸ちゃん、サイダーもあつた」

「あ、ありがと」

「雛菜もサイダーが良い。明里先輩の役、設定が強すぎるから面白いよ？ 生身で

怪人倒せるし」

「……それ、変身する必要あるわけ？」

円香が聞くと、明里はすぐに答えた。

「や、まあ、強い怪人も出てくるしね。変身すると体重が150キロに増えてさあ。フィジカルが強過ぎて、並の怪人じゃ『ライダー大外刈り』で一発だよ」

「何それ……」

「早い話が、相手の足元を足で払って崩してその隙に地面に落とすんだけど、ジュウドの場合は払った相手の足を折っちゃうの。だから、同じくらいのフィジカルの怪人じゃないと勝負にならないんだよ」

「怖っ」

「小糸ちゃん、と○がりコーンあつた。食べる？」

「う、うん。……それ、教育委員会から怒られないかな……子供が柔道技を真似したらどうするの、みたいなの……」

「大丈夫でしょ。ていうか、それを止めるのが教育委員会の仕事でしょ」

最近は何でもかんでも禁止しているが、それじゃ子供は何も覚ええない。「禁止されているのには理由がある」なんて考えるほど大人ではないからだ。

その考えには円香も頷く一方で、ポロツとこんな苦言も漏れる。

「ま、そう言う何処かの誰かさんは、小学生の頃は随分、やんちゃしたらしいけど?」「うぐつ……お、俺の話はいいでしょ……」

「クラスで飼ってたメダカの飼育に全力を注ぎ過ぎて繁殖し過ぎて、学校の庭にあった池で他クラスも巻き込んで飼いはじめ、さらに学校規模に膨らんだ挙句、卒業する時には飼育委員が出来てたんだけ?」

「今でも元気らしいよ。その時の子孫が」「聞いてないから」

他にも色々動物関係の武勇伝はあったりするが、今はその話ではない。

「雛菜、明里先輩が技かけるところ見るの好きだから、もし放送中止とかになられたら困る」

「大丈夫でしょ」

「と、透ちゃんはどう? 楽しみ? 明里先輩の仮面ライダー」

「え? あーうん。楽しみ。リカのライダー。……はい、小糸ちゃん。と〇がりコーン

あった」

「あ、ありがと……？ あ、の、透ちゃん。どうしたの……」

「はい、あーん……」

「あ、あーん……」

「やは〜じゃあ雛菜も〜」

「良いよ」

さつきから甘い飲み物としよっぱい食べ物のコンボをもらう小糸。なんとなーくおかしい、というのは明里の隣の円香も思っていた。

「でも、雛菜が妹って割としっくり来たんだよなー。なんか知らないけど」

「え〜？ そお〜？ でも、雛菜〜明里先輩の姉の円香先輩より、身長も胸も大きいよ〜？」

「喧嘩売ってんの？」

「いやいや、体格じゃなくてさ。……こう、何。キララ的などこ？ 甘え上手だし」

「やは〜♡ じゃあ雛菜、今日から明里先輩の妹ね〜？」

「ダメ」

お断りを入れたのは透と円香だった。

「え〜？ なんて〜？」

「私と円香の妹ならアリだけど」

「リカの妹はダメ」

「君達何言ってるの……?」

「バカは黙ってて」

円香にピシヤリと黙らされる。ちよつと泣きそうだったりしないわけでもない。

「でも、雛菜もう妹役やってるよ〜?」

「それは仕事だから仕方ないの」

「ちえー、まあ良いか〜」

そんな話をしながらも、後ろで咀嚼音が聞こえてくる中、明里は少し小腹が空く。

……というか、後ろから漂ってくるお菓子の香りが、普通に飯テロである。

「ごめん、マドちゃん……」

「あ、あの、明里先輩」

「ん、なに?」

しかし、小糸の台詞に遮られ、とりあえず聞く。小糸は若干、モジモジした様子で言った。

「そ、その……お手洗い……」

「ああ、りよかい」

「まだ保ちそう？」

「う、うん……30分くらいなら……」

「マドちゃん」

「分かってる」

円香はカーナビで近くのコンビニを調べてくれていた。ありがたい。

さて、割と近くにあったので、そこに向かって車を停めた。

「はい、行っておいで」

「小糸、一緒に行こう」

「ありがと、円香ちゃん……」

「とおるんと雛菜は平気？」

「降りよつか、雛菜」

「は〜い」

「じゃあ俺も。みんな。ついでだしトイレ入っただけでね」

それだけ話して、全員で降りることにした。そのままコンビニの中を見て回る。

トイレは男女共用と女性専用の二つしかないの、先に女性陣に譲ることになっている。明里の目に入ったのは、トランプだった。

「とおるん」

「なにー?」

「トランプもって来たっけ」

「分からん」

「だよね」

「あ、雛菜持って来たよ?」

「あ、そうなの。ありがと。……じゃあいいか」

「買わずにすんだ、と少しだけホツとしたり。」

すると、円香と小糸が戻ってきたので、トイレタイムチェンジ。トイレ借りた以上は何か買わないとなーと思いつながら明里が店内を見て回っていると、円香が声をかけてきた。

「リカ」

「ん?」

「この後は予定通りで良いの?」

「うん。途中で寄り道して、行きたいお店あったら覗いて、キャンプ場にはお昼過ぎに着けば良いかなって」

「ん。了解」

「小糸ちゃん、何処か行きたい場所は?」

「特に聞いてない」

「分かった」

なんて軽く打ち合わせしつつ、円香に聞いた。

「何か必要なものとかある？」

「ないけど……なんで？」

「いや、トイレ借りたから」

「あー……じゃあ、ム〇か蚊取り線香は？」

「良いね」

なるほど、あつて困らないものか、と理解し、頷いておいた。

医療品コーナーかな？　　と思い、その辺を見ていると、また円香が声をかけてくる。

「……ねえ」

「ん？」

「さつき……その、夫婦みたいって言われた時……どう思った？」

「あー……うん。嬉しかったよ。ホントに、とおるんも三人でそうなれたら良いなって思った」

「……そっか。なら、良かった」

もしかして、それが用事だったのだろうか？　　なんか、本当に可愛い人だな……なん

て少しほっこりしてしまった。実際、子供がいたらあんな感じなのかな、なんて少し考えてしまったし。

さて、すると透と雛菜が出てきたので、最後に明里が入らないといけない。財布から千円札を円香に手渡した。

「マドちゃん、これで買つといて」

「良いの？」

「もちろん」

「……ありがと」

それだけ話して、トイレに向かった。さつさと用を出し終わると、手を洗ってトイレから出る。買い物を終えたみたいで、円香はお店の前でポケットに手を突っ込んで待っていた。

「遅い」

「ごめんごめん。みんなは？」

「もう車」

「はいはい」

話しながら、二人して前の席に座ろうと、車を挟んで扉を開けた時だ。

「はい、ワイフポジションオンチェンジ」

「……」

「わお、良いよ」

明里は気付いていなかったが、円香は秒でピンときた。この野郎……わざわざ席替えするために小糸にお菓子と飲み物食わせてたのか、と。

「さあ、行こうぜダーリン」

「了解だハニー」

「はあ……ホント、バカップル……」

その一員になっている自分にも少し嫌気が差す中、円香はとりあえず後ろの席に座つた。

××

さて、ここからはすぐに高速に乗って、山の中を進んで降りた後は割と食べ歩き紀行。

色々と豆腐のドーナツだの自然薯そばだのとお昼も交えて都会じや食べられなさそうなものを食べ歩いて移動し、予定通りにキャンプ場に到着した。

川沿いで山の中にあるキャンプ場。他に客もちらほらいるが、お盆前だからか、そんなに多くない。

さて、エンジンを切った車の中で明里はハンドルに両腕を置いてもたれかかる。

「ついたー」

「つ、疲れた……」

「お疲れ様ー」

流石に明里は虫の息だった。初めての長距離運転……途中で透が肩とかマッサージしてくれなかったらもつと疲れていただろう。

だが、だらつとしてゐる暇はない。これから、テントを立てないといけないのだから。「あ、明里先輩……大丈夫、ですか？」

「大丈夫だよ。小糸ちゃんのみんなと着替えてて。俺、テントとかやつとくから」

「ええっ!?」だ、大丈夫ですよ！ 自分達のテントくらい、自分で立てられるよ！」「いやいや、こういうのは男の役目だから」

そう言いながら、明里は車から降りようとする。その様子を見ていた円香が、助手席から声を掛けた。

「リカ、そういうのみんなでやるのもキャンプの醍醐味だから」

「そうなの？」

「だから、とりあえず今は外で待つて。あと、勝手にトランク開けたら私たちの裸、外に大公開だから」

「……はーい」

話しながら、明里を外に追い出した。ちゃんと釘を刺しておいたので大丈夫だろう。

もちろん、四人で着替えるのは無理なので二人ずつ。まずは円香と雛菜から。抜かりなくタオルでカーテンを作り、フロントからは見えなくする。他の窓はマジックミラーのようになっていて、強引に見ようとすれば外のメンバーが黙っていないだろう。

そんなわけで、円香は上半身の服を脱いで、着替えを始めた。

「あは〜♡ 相変わらず、円香先輩ちいさ〜い」

「うるさい」

というか、雛菜と透が育ち過ぎなのだ。ちよつとムカつくほど。……いや、まあ自分もそれなりに育っている自覚はあるのだが……巨乳と呼ばれるほどではない。

「ちなみに、明里先輩はどんなのが好みなの〜?」

「私と透の胸だつて」

「は〜? 両極端じゃんそれ〜」

「そんなに小さくないし、私」

「でも、結局のところ、円香先輩は気を遣われてるだけじゃないの〜?」

「っ……」

その可能性は……ない、とは言い切れない……。あの男に性癖なんてものはないのはわかる。だからこそ、いざ裸を見られたら、シンプルに巨乳好きなのだろう……。とは、察しがついている。

一応、ゴムは持ってきてきてあるのだが……なんだか、単純にちよつとだけ透の隣に裸で立つのが恥ずかしくなってきた。

「……ま、別に全然、気にしてないけど」

「やは~~~~♡ 超してる~~~~可愛い~~~~」

「……………ほんとうるさい」

少し苛立った様子で返してしまつたが、まあ雛菜だし良いだろう。

そのまま二人で着替える。円香は自分の胸のビキニを目の前に広げて見る。……ちらりと雛菜の胸を見る。水着越しでも分かるくらい、揺れてる。超揺れてる。

いや、別に羨ましくなんかない。全然……と、思つてる時だった。

「あは~~~~♡ 円香先輩、雛菜の胸見てる~~~~!」

「つ、別に見てな……………!」

「明里せんぱ~~~~い! 円香先輩が、雛菜のおっぱい見てた~~~~!」

「言うな……………てか、開けるな! 私まだ着替え中……………!」

「え?」

が、明里は顔をむけてしまつていた。見えているのは円香の上半身裸。直後、顔を真つ赤にしたまま音速でこちらに走つて来た。それと同時に、上着を脱ぐ。

「え、ちよつ……………!」

なんでそんならしくなく血相変えて……しかもなんで服脱いでいるのか。まさか、こんなところで襲う気……!??

なんて、やや猥談じみたことを話してただけあつてそんな妄想をしてしまった。

しかし……相手は、明里であることを忘れてはいけなかった。一点の汚れもないその男は、車の中に乗り込むと脱いだ服で円香の体を包んで、ドアを閉めた。

「やは♡ 大胆♡」

「じゃないでしょ！ ダメだつて、こんな所で女の子の裸を公開しちゃー！」

「えー、でも明里先輩に伝えたくて……見たかつたでしょ？」

「見たつ……じゃなくて！」

「へー……見たいの？」

「い、いやそれは……」

意外な反応である。てつきり「見たくなんかないよ！」つて言われると思つたが……顔を真っ赤にして目を逸らして……なんか、普通の男子大……いや、男子中学生？ くらい反応を……。

ここは……押すべき場面だろうか？ ここで少しでも意識させて、夜にその気にさせるのも悪くない……！ この上着、剥がしてしまえ……！

……！

………！

………いい、いやでもやっぱ普通に隣に雛菜いるし無理……と、言い訳がましく諦めようとした時だ。

「やは〜手が滑った〜♡」

「っ、ばか………！」

「えっ」

雛菜が、後ろから円香の背中を押した。明里が慌てて入ってきたことで忘れていたが、18と19の男女がワゴン車に横並びになっている。そんな至近距離で、女子は下着同然の格好でいる上に、片方は下着同然というかそれもつけていない格好。

それが押されたことにより、円香の身体からパーカーは剥がれた上で、ドアに背中をつけた明里に迫っているような格好になってしまったわけだ。

「っ………ひ、雛菜………！」

「え〜？ だって、円香先輩ビビってたんだもん〜」

「別にビビってないし………！ そうじゃなくて………」

「じゃあ何〜？」

聞かれたので、円香は目の前の明里を指差す。顔を真っ赤にし、白目をむいて鼻から血を流してダウンしていた。

「やは〜♡ 噂通り〜」

「どうすんの、もう……」

「でも、円香先輩が言ってた通りだったね〜」

「? 何が?」

「円香先輩より胸が大きい雛菜も水着だったのに、全然見向きもされなかったから〜」

「……」

顔が赤くなる。言われてみれば確かに……といった感じだ。ちよつとだけ明里を疑ってしまったが、改めて身体だけを見ているわけではないことを理解してしまった。

「ふふ、超愛されてる〜」

「……うるさい……」

×とりあえず、明里を放置して着替えを済ませた。

×

×さて、まあ明里が寝てしまったのは円香的にもありがたいわけで。今のうちに、長距離運転転をしてくれた明里を休ませて、キャンプに使う道具を組み立てた。

それから、しばらく四人で水掛つことか色々、遊び回った。そんな中、車の扉が開かれる。

「ふわあああ……なんか、寝ちやったあ……」

「あ、リカー」

「ん……あ、とおるん。それ新しい水着？ とっても綺麗だよ！」

「いえーい、ありがとー」

平然と答えているが、透の頬はほんのりと赤い。超喜んでる、と円香も雛菜も小糸も理解する。

「ね、何処が綺麗？」

「水色のパレオがとおるんっぽいなって。でも、流されないように気を付けてね？」

「ありがとー。リカは水着に着替えなのー？」

「あー、うん。その前に俺、クヌギ探して来たいんだけど……」

なんて話していると、真横から声が届いた。

「なんでクヌギ？ 聞かなくても大体、わかるけどね」

「うおっ……ま、マドちゃん……？」

いつの間にそんな近くに……と、思いながら、頬を若干、赤らめた様子の円香は腕を組んだまま自分を睨みつけている。

「特製カブトムシゼリー作ってきたから塗りに行きたいんだけど……」

「……ふうーん？」

「……あ、一緒に来たい？」

「言われなきやわからないんですね。彼女に褒め言葉の一つも掛けられないとは、相変わらずの朴念仁。そんなんで二股しようなんてホント笑わせる」

「あ、あー！ 水着！ ご、ごめんね。なーんか、マドちゃん見ると水着どころじゃな
いもの見た気がして……」

「つ……ま、まあ……それなら、仕方ないかもだけど……」

え、仕方ないの？ と、明里は小首をかしげるが、実際、円香に関してはさつきとん
でもないものを見てしまったような気がしてならない。

「…………ごめんね。でも、マドちゃんの水着も、とつても似合ってるよ。綺麗」
「…………ん」

そう言いながら、なんかその態度が可愛らしくて頭を撫でてあげてしまった時だ。そ
の横から、雛菜が両手を上げて声をかけてきた。

「明里せんぱーい！ 雛菜はー？」

「ひ、雛菜ちゃん……今は……」

「うん。雛菜も小糸ちゃんも可愛いよ？」

「……」

「びえ……」

「ばか……」

「ひえっ……」
怒られた。

幹事に大事なのは労い。

キャンプの醍醐味は、昼ではなく夜にあったりする。遊び終えた後の食事は当然ながら、お金を払って外食、あるいはホテルのビュッフェを食べるわけではなく、みんなが用意する。

それ故に、パーティメニューらしいものが選ばれることが多い。今回は、バーベキューだ。

キャンプ場にある木造の屋根の下、バーベキューセットとも言える鉄板と木製の机に透、雛菜、小糸の三人で座った。

「雛菜、透先輩の隣」

「おいでー」

「あ、あれ、円香ちゃんと菅谷先輩は……？」

「食材取りに行った」

「と、透ちゃんは行かなくて良いの……？」

しれっと答える透に小糸は少し困惑した様子で聞くが、まあ一応年上として年下を見ている、という立場で来ているのであながち間違いいではない。特に、雛菜はともかく小

糸は未だに中学生くらいに見えてしまうくらい成長がないから。

「何食べられるかな〜」

「やっぱりお肉じゃないかな……!」

「買ってくれたの、透先輩たちでしょ〜? どんなのある〜?」

「あー、分からん」

「え、ど、どうして……?」

「お金は出したけど。二人だから、選んだの」

「……そ、それ大丈夫なのかな……」

「? 何が?」

思わず不安げな声を漏らした小糸に、透が片眉を上げる。

「い、いや……二股とかよく分からないけど……そういうの、三人一緒じゃないと……透ちゃん、一人になっちゃうんじゃないかな……?」

「え……そういうもん?」

「その時は、雛菜が透先輩もらうね〜?」

それを聞きつつも、透は少し困ったように顎に手を当てる。確かに、旅行の準備も自分と一緒に回って回ってはいしたが、ほとんどあの二人が決めていたかもしれない。

……いや、今からでも遅くない。とにかく少しでも二人を手伝おう。そう決めて、席

を立った時だ。

「お待たせー、持って来たよ」

「食器も」

「あ、ありがと……!」

「何のお肉あるの〜?」

「……」

来てしまったが……まあ、仕方ない。とりあえず、透は席に座り直す。さて、どんなものがお手伝いになるのかを考える。

バーベキュー……そんなに経験があるわけではないが、高一の時の別荘の時にやった。あの時はほとんど明里が用意してくれたことを思い出す。

早い話が自分達で焼いて自分達で食べるもの……つまり、焼けば良い……と思っていると、自分の前に焼きタレが垂らされた皿と箸が回ってきた。

「はい、透先輩〜」

「……ありがと」

円香が用意したものが回って来たらしい。そうだった、それもバーベキューでは必要だった。

さて、ぼやぼやしている間に、明里が鉄板の用意を始めてしまう。このままではまず

い、置いていかれる、と思ったものの、大丈夫とすぐに安堵する。

せつかくなら、このまま明里と一緒に食材を焼けば良いのだから。

「リカ、肉焼くんでしょ？」

「バーベキューだからね」

「手伝う」

「え？ いやいいよ。みんなおとなしく座ってて」

「手伝う」

「大丈夫、ちゃんとお肉は四人均等に行き渡るようにするからね」

「なめてる？」

なんだその宥め方。仮にも姉に向かって。自分は子供じゃない。

すると、その間に全員分の飲み物を用意していた円香が口を挟んだ。

「リカ、別に手伝うのは良いでしょ」

「えー、でも……」

「やはくくく♡ じゃあ、雛菜も焼くくくく」

「じ、じゃあ……私もやります……！」

「いや菜箸2セットしかないから……」

「じゃあ、誰に焼いてもらいたいか選んであげたら？」

円香がそう口を挟むと、明里は困ったように苦笑いを浮かべながら軽く答えた。

「じゃあ……早かったとおるんと雛菜に任せようかな」

「よっしや。任せられた」

「やは~~~~♡」

「雛菜、たまに小糸ちゃんと交代してあげてね」

「分かった」

「あ、ありがとう……!」

「いやそれこっちのセリフだから」

そんな話をしながら、透は肉を焼き始める。やはり……どちらかという子供扱いさ
れていることにも気付かず。

「~~ぴ~~やっ……お、おいひい……少し独特の歯応えだけど……これ、何のお肉？」

「鹿」

「え……し、鹿?」

明里のしれつとした答えに、小糸が少し引いてしまう。初体験だが、そもそも鹿肉つて高いのでは? と思わないでもないから。

「キャンプ行くつつつたら、父ちゃんが送ってくれたんだ」

「ホント、お世話になりっぱなし。お義父さんには」

円香がしれっと口を挟む。

「良いんだよ。父ちゃん、二人のこととっても気に入ってるから送ってくれるんだよ。二股のことも許してくれてるし。最初は怒られたけど」

「……あつそ」

そう冷たく返しつつも、円香の頬はほんのりと赤く染まった。

すると、その明里のお皿に、透が菜箸を持って肉を乗せる。

「リカ、はいお肉」

「ありがとう。でも、とおるんちゃんと食べてる？」

「うん、平気。さつきロース食べた」

「さつき食べてたのカルビだよ。……ていうか、あれ以来食べてないの？」

「あー……うん。焼いてるから。みんなの」

「代わるから、ちゃんと食べて」

「いや、平気」

「なんか……と、円香は少し怪訝そうに透を見る。やたらと肉を焼きたがっているが……どうかしたのだろうか？ いや、まあ大体察しはしているのだが。」

どうせ「なんか明里と円香ばつか働いてて、二人親と三人娘みたいになっている」の

が嫌だったのだろう。

そう思うのは結構だし、ここは自分の出る幕ではない。岡目八目とはこのことか、と思う程度には、すぐに明里が何をし始めるのか理解出来た。

鉄板に目を向けた明里は、焼けてそうなお肉を箸でつまむと、自身のお皿のタレに漬けてから、手をお皿にするように下に添えて透の口元に運んだ。

「とおるん、あーん……」

「え？ いや、焼いてるから」

「……あーん？」

「うっ……あ、あーん……」

らしくなく強引な明里に気圧されたのか、珍しく少しだけ頬を赤くした透は素直に口を開けて、お肉を食べた。

「どう？」

「超美味しい」

「じゃあ、もつと食べて。みんなで食べないと」

「……うん」

「ん、良い子」

透の頭を一撫でしてから焼く係を交代する明里と透。

ほら、やっぱり出るまでもなかった、と円香は控えめに笑みを浮かべる。何を悩んでいるのか知らないけど、明里なら何とかしてくれるだろう。

「小糸ちゃん、そろそろ雑菜と交代する？」

「あ、う、うん……！ 任せて……！」

透が焼かなくなったからか、雑菜は小糸とチエンジしている。

その様子をのんびり眺めながら、円香も野菜を頬張った。残念ながら、自分は食べても太らない体質ではないので、お肉よりも野菜をメインで食べるしかない。

「明里先輩、雑菜にお肉ちょうだい？」

「良いけど、ちゃんと野菜も食べてる？」

「え、雑菜お肉の方が良い」

「マドちゃんを見てみなさい。野菜の方を多く食べてるでしょ？」

「あは、だから雑菜より胸も身長も小さいんだ」

「……は？」

よりにもよって明里の前でそういう話、とギロリと視線を向けるも、雑菜は何一つ動じた様子を見せずにニコニコしている。

「え、でもマドちゃん、家でしてくれる家事、誰よりも大きいよ？」

「つ……り、リカ……」

「それ、胸と体が小さいこと否定してないよ〜？」

「リカ……………」

「い、いや……………だつて、身長はそりゃ俺よりは低いし……………」

「胸は？」

「お、俺マドちゃんのこと胸で判断してないから」

「……………」

まあ、もういいか、と円香はため息を漏らした。明里がそういうタイプでないことは理解しているし、何より悪いのは雛菜なのだから。

「冗談。気にしなくて良いから、お肉ちようだい」

「やは……………♡ やっぱり気にしてる〜」

「雛菜にはピーマンを」

「え……………!?？」

「はいはい」

要望通りに、まずピーマンを雛菜のお皿に乗せた後、明里は続いて肉を円香のお皿に乗せようとする。

それに対し、円香は無言で口を開けた。

「あー」

「え？」

「あー」

「焼き肉の菜箸であーんはダメでしょ」

「……」

「プハッ」

「……ま、円香ちゃん……どんまい……」

××食べさせてもらえず、普通に拗ねた。

××テントは、円香と透、小糸と雛菜、そして明里と三つに分かれている。表向きは。

理由は勿論、夜這いである。今回の旅行、最大の目的であり、様々な覚悟を決めた上での、二人の結論。そのために、明里には少し広めのテントを買わせた。

「どっちから行く？」

「……まあ、ジャンケンじゃない？ リカ、選ばないと思うし」

「円香、先にしたら？」

「え、なんで？」

「前言ってたじゃん。リカが先に好きになったのは円香の方だって」

確かに言っていた気はする。でも、そういう理由があるなら尚更円香は嫌だった。

「……あつそ。じゃあ、じゃんけんで」

「え、きいてた？」

「聞いてたからじゃんけんって言うてんの」

「は？」

理解していない様子で啞然としているので、円香は透を正面から見据えて言った。

「あのね、私達は二股してるの。つまり、私と透は対等な立場。それなのに、理由をつけて優劣をつけるような真似してどうするの」

「……それは、まあ……」

「私と透でリカ関係の話なら、大事なところこそ対等な運試しで決めるべきでしょ」

「……」

言うのと、透は少し驚いた様子で円香を眺めた後、何か腑に落ちたのか、すぐにいつもの真顔っぽい笑顔に戻った。

「ふーん……それで、私が勝っても代わらないからね」

「負けないから大丈夫」

「言ったなー？」

「じゃんけんはリカの前ですから」

「了解」

話しながら、二人で明里のテントに入る。準備万端、覚悟も決めたし、必要な物も持って来た。

後は……明里を納得させるのみ……！　そう決心し、テントのジッパーを開い……たのだが。

「あれ、いない」

「え、うそ？」

中はがらんとしていて灯りもついていない。寝袋の中は空だし、鞆は置きっぱなし。気になる点といえば、さつきまで着ていた寝る直前の服が綺麗に鞆の横に折り畳まれていることだろうか？

「誘拐？」

「まさか。誘拐犯より強いでしょ。仮面ライダーだし」

「え、狭いテントの中で柔道？」

「柔道には寝技もあるでしょ」

「そっか。……え、じゃあなんでいないの？」

「……」

透がテントの中に入り、せっかく畳んである上半身のパジャマの匂いを嗅ぎ始める中、円香は冷静に思考を巡らせながら、下半身のパジャマの匂いを嗅ぐ。

どこへ行ったのか冷静に思考。夜中……それも、予定が終わった後に外出。つまり一人で片付けなければならぬこと。

その上で、今日は保護者に徹していたにも関わらず単独行動したい衝動に駆られる事……その上、着替えが必要になるもの……そこで、理解した。

「透」

「何？」

「分かった。行き先」

「お、すごい。何処？」

「森」

「あつ」

察した。つまり、虫取り……いや、取らないと思うので、おそらく虫観察。なんだろう虫観察って、なんて二人が思うのは野暮だ。

「どうする？」

「決まってるでしょ。追いかけて食べる」

「ふふ、行こっか。ウマシカハント。でも平気？ 夜の森」

このキャンプ場は、カブトムシ取りに行きたがる子供が一定数いることを考慮し、森の中を歩けるように通路を作り、街灯もそれに沿うように設置されている。

透の心配は、円香への虫特攻だ。万に一つの可能性でゴキブリなどを見ることがあれば……。

「は？ 別に平気。リカがいない方が平気じゃない」

腕を組んだまま円香はそう告げるが、透の目には少しだけ組んでいる事で肘に隠れている手が震えているのが見えた。

やはり、虫は怖いらしいが……それでも明里と一緒にいたいらしい。気持ちは分かる。だから、透も止めなかった。

「行こっか。じゃあ」

「その前に虫除けだけ」

「ん」

テントで虫除けスプレーを吹きかけて、出発した。

ああ見えて、破天荒な男だが、そんな馬鹿みたいに森の奥に行くことはないだろう。

とりあえず、通路から見える範囲で木々の中を搜索。すると、割とすぐに元気な声音が聞こえて来た。

「……ほら、見てみ。静かに。……」

「わあ……！」

バカが指差す先にいるのは、とあるクヌギ。そこで、自分の胸くらいまでの身長しか

ない少年二人と並んでいる。

「樹液のために、色んな昆虫が集まって食べてるでしょ？　でも、そろそろこのカブトムシとノコギリクワガタが……」

「わあ！　戦い始めた！」

「頑張れ……！」

「はい、応援しない。これ虫達には善も悪もない今日の夕食をかけた真剣なインフアイトなんだから。この虫達には『帰ったら温かいご飯を用意してくれてる親』はいないんだよ」

「……そっかあ」

「じゃあ、真剣なんだね」

子供達に自然の厳しさを教えているのは明里。そして、楽しそうに声を上げているのは、同じキャンプ場で遊んでいた子供達のようだ。

思わず円香は半眼になる。意外と年下に好かれるの上手い……とか思ってしまったが、おかげで予定は狂いつぱなしだ。

どうしたものか考えつつ透の顔をチラリと見ると、少しだけ嬉しそうに見えるのが見えた。

「何嬉しそうにしてんの？」

「ん、いや……貴重だなんて。ああいうリカの顔」

「は？」

「今日、ずっと動いてたから。私達のために」

「……」

確かに、言われてみればその通りだ。普段はああいう顔しているけど、今回の旅行に限っては、どちらかと言うと運営の方に回っていた。もちろん、川で遊んでいる時やバーベキューの時もはしゃいでいなかったわけではないが、あそこまでではない。

……だが、今虫が嫌いな円香が出ていたら、また明里は保護者モードになってしまうかもしれない。

彼の時間くらい、彼に使わせてあげよう……そう思った時だ。

「……」

「なんか、やな音しない？」

透も同じことを思ったらしい。なんか、近くから「ブウウウウウン……」と低く響く音……円香にとって「カサカサカサ」と「ふうううん」と並ぶレベルで嫌な音。

恐る恐る二人して振り返ると、スズメバチが真後ろを飛んでいた。

「わお、でつか」

「~~~~つ!?」

呑気な感想を言う透の首根っこを掴んで、慌てて逃げ出す円香。やばいやばい、と柵を飛び越えて森の中を突き進む。

「円香、すごいパワー。でも足引きずってる」

「黙って!」

そのまま走っている中、違和感と痛み……そして、つま先が後ろに持つていかれたような浮遊感。

やばい、転ぶ、と頭がひやつとした時だ。正面から、抱き抱えてくれる影。円香と引きずられていた透を左右の腕で受け止めたのは明里だった。

「リカ?」

「何してんの二人とも……」

「っ、り、りかつ……スズメが……蜂の方の……!」

「はいはい」

そう返すと、明里は後を追ってきたスズメバチをジツと見る。スズメバチも不意に動きを止めて、ジロリと明里を睨み返した。

そこから先、何をしていたのかはその場にいるメンバー全員にも分からない。もしかしたら、人間には聞き取れない周波数で会話をしていたのかもしれない、なんて思ってしまう程度には、常軌を逸脱した行為だろう。

透を抱えた方の手の人差し指を立てると、ついつと左側に動かす。スズメバチも、左側に動いた。続いて、右側。同じように右に旋回。

「じゃ、そろそろ帰りなさい」

そう言うのと、スズメバチはどこかへ立ち去って行ってしまった。

それを眺めてから、明里は円香の背中をポンポンと叩く。

「大丈夫だよ、マドちゃん。もう行ったから」

「……ありがとう」

「すごいね、リカ。今、何話してたの？」

「あと4〜5分でここ退くから、それまで樹液待つてつて」

「……意外と細かく」

話しながら、明里は後ろにいる子供二人に声をかける。

「そんなわけで、二人ともそろそろ親御さんのとこに戻りなさい」

「えー」

「まだ一匹もとつてないのに」

「でも、黙って出てきたんでしょ？ 怒られるよ」

「……はーい」

「仕方ないなー」

「写真だけでも撮っていったら？」

「！ そうするー！」

と、子供達は手に持っているスマホで写真を撮り始めた。相変わらず、年下の扱いがうまい……と、少し感動した。

そのまま、五人でキャンプ場に戻り、親御さん達の元まで送ってあげる。挨拶だけで別れて、三人になった。

円香と透は、ゴクリと唾を飲み込む。なんだかんだ言つて、この後こそ本当に自分達の目的だ。

何も知らずに自分達の半歩前を無防備に歩く男は、伸びをしながら声を漏らす。

「んく……楽しかったあ……！」

「良かったじゃん。楽しくて」

「すごかったよ！ ミヤマクワガタとかいたし。あんなの都心じゃ絶対見れないからね」

「……そう」

「あ、写真撮ったけど見る？」

「後で」

そう、今はそんな場合ではないのだ。特に、円香は胸の奥底がドキドキしている。

さつき、明里に受け止められた時、改めて彼の身体の力強さと逞しさを理解してしまつたから。

これから、そんな彼と……と、思うだけで胸の奥が高鳴る。

そんな中、明里が二人に声をかけた。

「そういえば、二人はなんで森の中にいたの？」

「えっ？ あー……」

「普通に夜の散歩」

透が口を滑らせる前に、円香がしれつと答えた。下手に「夜這い」とか直球で言われるよりは良いと思つての答えだったが、明里はそれに目を輝かせてしまった。

「じゃあ、三人でしようよ。散歩」

「……」

どうする？ と、二人は顔を見合わせる。だが、散歩と言つてしまった以上、ここで断るのは難しいだろう。

「分かった」

「よし、じゃあ行こつか。星、超綺麗だから」

「……ん」

確かに綺麗ではある。こういう自然の中の夜の散歩は中々、出来るものではないし、

文句はない。

三人でそのまま並んで歩きつつ、川沿いの岩の上に腰を下ろした。

「綺麗だねー。空」

「ん……」

「リカも同じくらい綺麗だよ」

「え？　なんで急に口説かれたの？」

透の性別無視したセリフに、円香は何一つ触れることなくスルー。実際、綺麗だから仕方ない。

「それに、俺なんかより二人の方がよっぽど綺麗だよ」

「ありがとう」

「歯の浮くようなセリフ、ご馳走様」

「だって、川遊びしてる時、見惚れてたもん。俺」

「……」

「……ふふ、超ベタ褒め」

二人とも、頬が赤くなる。それ故に、これ以上のシチュエーションはないように感じた。

円香も透も、明里の方へ体重を預ける。円香は膝の上に、そして透は首筋にキスする

ように。

「? 二人とも?」

「今日は、甘えたな日」

「だから、甘えたくなるような感じ দিয়ে」

「ええ……そんな言われても……アイアムユアマザーとか?」

「なんでよ」

「ママじゃなくて彼氏だから」

怒られつつも、今の明里は昆虫達と触れ合ったからか、少し賢者に近い状態だった。

素直すぎる勢いで甘えてくる二人に対し、明里は頭と喉を撫でながら対応した。

「愛すべき猫が二人もいる」

「にゃー」

「……にゃー」

「あ、今日はマドちゃんもノリノリだ」

「普段は羨ましそうにしてるから。出さないけど」

「透、黙って」

話しながら、しばらくそのままのんびりする。空を見上げて、月と星が点々としてい
るのをぼんやりと眺めた。

暗闇の中の山中にいますというのに妙に穏やかに感じるのは、夏だからこそちやうど良い気温と涼やかな風、そして揺れる木々と水面に反射する月と星のお陰かもしれない。

爽やかな自然は、いつでも人の心を穏やかにするものだ。

「二人とも、今日は楽しかった?」

その二人に、さらに穏やかな声音が入り込んできた。

「楽しかったよ。お陰様で」

「何処かの誰かが幹事に徹してたおかげで」

「徹してた、って程じゃないよ。マドちゃんだって手伝ってくれたし」

「リカは?」

「楽しかったよ。川で泳いだのなんて初めてだから」

「え、意外」

「川の中の生物探すのにボートに乗ったまま水中を水上から覗くゴーグルで覗いてて3キロくらい流されたことならあるよ」

「それ大事件じゃん……」

「流石に肝を冷やしたかな……ちゃんと見てろって父ちゃんにブチギレてた母ちゃんに」

「そこ?」

はつきり言って、自然の遊び場に安全な場所などない。川も海も山も何処だって危険なのだ。

もしかしたら、明里はその辺も気にして幹事をしていたのかもしれない。

「でも、普通にやっぱり楽しめたよ。とおるんも手伝ってくれてたし」

「……そっか」

正直、自分も円香と明里にばかり任せつきりで一人になるのを恐れただけだったのだ。が……でも、そんな風に誉めてくれたのなら、やってよかったというものだ。

すると、その明里の太ももがキュツと抓られる。顔を下に向けると、円香がジトーつと睨みつけてきていた。

「……まあ、いつも頑張ってる人よりたまに頑張る人ばかり褒め称えるジャイアン好きな人ならそれで良いけど」

「？ マドちゃん、ジャイアン好きなの？」

「……もういい」

「違う違う、リカ。円香も褒めてもらいたいんだって」

「ああ、そういうこと」

「……そんなこと一言も言ってない」

「じゃあ違うの？」

「……そうとも言っていない」

そんな返事を聞いて、明里は思わずクスツと笑みを漏らす。本当に、損得勘定を弾いた時は素直な返事を返してくれる彼女だ。可愛いにも程がある。

「マドちゃんがいなかったら、俺の日頃の疲れは倍だよ。今日だって、ここに着いた時には体力を使い果たしてたかも」

「……ん、よし」

正直、褒められたりなかった円香だが、とりあえず満足しておいた。透も同じくらいにしか褒められていないし。

その透が、その後すぐに言った。

「でも、今日一番頑張ったのは、やっぱりカだよね」

「それはそう」

「そんな事ないよ?」

「ある。やつすい謙遜はやめて」

「疲れてるの、バレてるから。結構」

「……やっぱり、分かる?」

「早起きして長距離運転した後、みんなの為にご飯や水遊びの準備して、疲れてないって言う方が無理あるから」

「あはは……ごめんね、もつと上手く隠せたら良かったんだけど」

その発言には、少しだけ円香も透もイラっとする。

「は？　なんで？」

「隠す意味が分からない」

「え……でも、せつかくの旅行で疲れた顔でいるのは……」

「誰と誰と一緒にいるか考えてくれる？」

「良いよ、もつと甘えても。全然」

「……そう？」

「当然」

声を揃えて言った直後だった。円香と透が体重をかけていた明里の脇が、少しずつ下がりはじめた。

「実は……今、結構眠い……」

「ま、もう夜だからね」

「……そんな風に我慢しなくても、全然付き合うから」

「だって……今日、朝ぶりの三人きりだから」

「はいはい、良いから寝て。テントまでは運んであげるから」

「あり、がと……」

そこで「すう、すう……」と、寝息を立てつつ、前のめりに身体が倒れる。

それを聞いて、円香と透は身体を起こすと、左右から明里の左右の腕を首の後ろに回し、持ち上げた。

少しだけ上げた後、透がおんぶしてあげてテントに向かった。

相変わらず寝息を立てているのを眺めつつ、円香が声をかけた。

「どうする?」

「何が?」

「予定」

「今日は……寝かせてあげよ」

「ん。どうせ、帰ればまたチャンスはあるからね」

「うん、だよな」

それだけ話して、二人でそのままテントまで運んだ後、そのまま二人とも明里を挟み込むように寝転がり、一人用のテントで身を寄せ合って瞼を閉じた。

怒られる、と思っている人達は本当に困らせる要素を作る。

しかし、透、円香、雛菜、小糸の四人は腕を組んでいた。やった。やってしまった、と強く思う。

わざとではない。しかし、結果こうなってしまったのだから仕方がない。どうするべきか、四人で考えるしかない。

何せ、旅行の予定を決めてくれて、キャンプ以外に立ち寄れそうな場所も下調べしてくれて、行き帰りの運転までしてくれた人の……アメンボ水上ビニールボートに穴を空けてしまったのだから。

「……あー」

「……」

「あはく……」

「ぴえ……」

四者四様のリアクションをするしかない。

何故、こんなことになってしまったのか……それは、朝に遡る。

「リカ、そろそろ起きて」

「う〜ん……」

珍しいことに、明里が全く起きる気配がなかった。テントの中で、ずっとゴロゴロして動かない。

既に円香が外で五人分の朝食を作ってくれていて、透がずっと起こしてくれているのだが、起きない。

多分、昨日よほど疲れたのだろう。何せ、三人で一緒にいるときに寝落ちしてしまったほどだ。

でも、円香に怒られるのは自分だし、起こすしかない。

「おい、リカー。起きないと襲っちゃうよー」

そんなわけで、ゆさゆさと身体を揺すり続けていた時だ。ガツ、と透の身体を明里がつかむ。

「えっ」

そして、そのまま引き込まれてしまった。ぎゅっ、と抱き締められ、そのまま抱き枕

にされてしまう。

浅倉透は、こういう時の切り替えは非常に早かった。

「仕方ないなあ」

すぐに明里の胸前で自分も丸まり、目を閉じて胸板に頬を押しつける。

「……二度寝……」

「んん……」

本当に幸せかも、なんて透は目を閉じて思う。こんな風に、好きな人と至近距離で眠れる……それも、キャンプ場で。

それが、なんだか心地良くて、気持ち良くて。まあ、ぶつちやけ季節が季節だけに暑苦しくもあるわけだけど。

「……でも、良い機会だ。堪能しないと勿体な……」

「何してんの？ 浅倉」

久しぶりに苗字で呼ばれる時というのは、マジギレのサインでもある。恐る恐る目を開くと、円香がテントの入り口で自分達を睨んでいる。

「……鳩尾に発勁で起こそうかと……」

「じゃあどうぞ。続けて？」

「え、じゃあ……発勁」

あっさりと両手の平を、明里に向けて突き放った。奥へ転がり、ぶもつとテントの中に顔を埋めてしまう。

「ぶこっ……な、なんだ……!!?」

「朝だよ、リカ」

「いつまで寝てんの？」

「え……え、今何時……」

「9時」

「っ、ぶこ、ごめん！ 今、起きるから……!」

慌てて明里は身体を起こし、着替えを始めた。上半身の服を脱いだところでハツとする。まだ二人ともテントの中にいた。

「あっ、ぶこ、ごめん！」

「いやどうぞ」

「遠慮せず続けて」

「こ、このすけべども……」

「はっ?」

「な、なんでもないです……」

そのまま着替え始める明里を二人で眺める。すると、ふと明里がまた欠伸を浮かべ

た。

「眠いの？」

「うん……ちよつと」

「もう少し寝てる？」

「いや、大丈夫。せつかくの旅行だからね」

そう言いながら、明里は着替えを再開した。その様子を眺めつつ、円香と透は顔を見合わせる。

それはその通り……なのだが、まあ疲れているのなら寝かせてあげたほうが良い気がする。何せ、帰りの運転中に事故でも起きたら大変だ。

頷き合うと、円香が提案した。

「じゃあ、とりあえず朝ご飯だけ食べて、その後ももう少し休んだら？」

「……良いの？」

「勿論。帰り、温泉施設とか寄るから、その時にもゆっくり休んで」

透も言うのと、明里は少し考え込むように黙り、そしてにこりと微笑んだ。

「ありがとう。……じゃあ、そうしよつか」

「ん……じゃ、早くきて。朝ご飯できてる」

「食べよう」

「うん。……ね、とおるん。マドちゃん」

「?」

改まつて二人とも顔を上げると、微笑んだまま明里は言った。

「俺、二人が彼女で良かった」

「……何恥ずかしいこと言ってるの」

「お互い様だよ」

「うん。……にへへ」

話しながら、三人でテントを出た。

さて、朝食。円香が作った焼きそばを食べながら、明里は今日の予定を全員に話す。

「とりあえず、この後は午前中だけ川で遊んで、その後は軽く温泉行って帰るけど、それで良い?」

「雛菜は良いよ」

「わ、私もそれで良いです……!」

「途中、行ってみたいところあったら言って。全然、寄って行くから」

「じゃあ、雛菜北海道行きたい」

「考えとく」

「リカ」

考えないで、という意味で名前を呼ばれ黙った。

「じゃあ、午前中は川かあく。雛菜、暑かったから助かるく」

「俺はちよつと休んでるから。楽しんでて」

「え……も、もしかして菅谷先輩……まだ、少しお疲れですか……？」

「心配しなくて良いよ、小糸ちゃん。事故は起こさないから」

「は、はい……」

「というか、そのためのチャージ期間だったりする……のだが、そこで雛菜が声を漏らした。」

「えー、雛菜今日は明里先輩にかまちよししようと思つてたのに……」

「え、あー……じゃあ、少しは……」

「リカ、ダメ」

「休まないで、事故起こされても困るから」

「あはく冗談く。二人とも可愛いく」

遊ばれた、と透は「まあいつか」みたいな感じだが、円香はむすつとしながら顔を赤くするのを見て、雛菜は満足そうに頷く。

「まあ、じゃあ……これ使つて良いよ」

言いながら明里は、一度車に戻つてからビニール袋に入ったものを持つてきた。

「何それ？」

「アメンボ型ビニールボート」

「いやほんとになにそれ……」

「結構おつきいよ。三人くらいまでなら乗れるかも」

「じゃあ、小糸ちゃんと透先輩と乗る。円香先輩だけトナカイね？」

「なんでサンタが三人もいるの。季節真逆だし」

なんて話しながら朝食を終えた。

で、川遊びである。明里が「良いよ」と言ってくれたので、とりあえずアメンボのボートを膨らませる。

円香としては、形に抵抗がないわけではないが、でもただのボートなのだし、気にしなれば良い。明里の部屋の虫フィギュアコレクションに比べれば楽勝だ。

「出来た」

「雛菜乗る」

「じゃ、私も」

「じ、じゃあ……円香ちゃんと私で押そうか……」

「むしろ流して放置しても良いけど」

「だ、ダメだよ！ そしたら、菅谷先輩が大事にしてるボートも無くなっちゃうよ！」

「そん？」

だが、その通りだ。仕方ないので、二人を上に乗せる。アメンボの胸と胴体の上に二人揃って跨った。

その下に、円香と小糸は潜って、前足に手を置く。その際、円香は小糸に耳打ちした。

「じゃあ出発〜」

「いえ〜い」

「はいはい。セーのっ」

「ご、ごめんなさい！」

直後、二人は手に持っていた足を持ち上げてひっくり返した。当然、アメンボの形をしたボートなんてアンバランスなものだし、少し力を入れればひっくり返すのは簡単だった。

ブクブクブク……と、沈んだ二人は、少ししてからジト目だけ出してこちらに向けてくる。

小糸は「ぴええええ……」と狼狽えていたが、円香は冷たい目で睨み返した後、ふっとほくそ笑んだ。

それに伴い、当然二人とも黙っていないわけ。

「あー……なんか、トナカイの方が好きだわ。サンタより」

「円香先輩、乗らない〜?」

「ノーサンキュー」

「雛菜、乗りたいって」

「乗せてあげよつか〜」

「は? ちよつ……!」

直後、二人は円香の両腕を掴み始めた。

「ていうか、なんで私だけ……!?」

「小糸ちゃんは謝ってたし」

「可哀想だし〜」

「さ、三人とも落ち着いて……!」

小糸が止めようとするが、もう遅い。雛菜が円香の上半身を抑え、そして透は潜って

円香の脚を掴み、持ち上げる。

「ちよつ……あ、あんたら本気で……!」

「これどうやって乗せる〜?」

「……投げちゃう? このまま」

「は!?」

「せーのっ」

「いい加減……ぶべっ！」

乗せられることもなく、放り投げられた。ボートの近くに落下し、揺られたボートはそのまま川の向こう岸に流される。

この川沿いのキャンプ場は、そこそこ上流の方にあるため、川岸は一つしかなく、もう片方は森から生えている木々がはみ出ている。その木の方へ流されてしまった。それなりの勢いで。

「げほっ、げほっ……あ、あんたらホント……！」

「やは、円香先輩の髪、わかめみたい」

「ウケる」

「ふ、二人とも煽らないで……！」

なんて始まった時だった。なんか、プシューツという音が円香の耳に届く。なんか、ヒヤリとするほど嫌な予感。思わずバカ二人を気にする余裕もないほどに。

「何の音？」

「何が？」

「……あ、ほ、ホントだ……。なんか、空気が抜ける音が……」

「……あつ」

その方向を見た直後、四人とも固まった。

と、いうわけである。プシューつと空気が抜けて、今やその枝に干してあるように、アメンボは萎れてしまっていた。

「あー……どうしよつか」

「畳んどけばバレなくない？」

「だ、ダメだよ雛菜ちゃん……！」

「でも、実際それ以外どうしようもないでしょう」

と、話す中、透が珍しく重々しく口を開いた。

「リカって実は、高校の時に三回、暴力振るってるんだけど」

「えっ、そ、そんなに？」

「一回目が、文化祭。二回目が事務所で。……で、三回目は、修学旅行」

「何があつたの？」

「北海道の密猟者を相手に暴れてた。3対1で勝ってた」

「……」

どういふ状況かは問題ではない。問題なのは「動物を意味もなく殺すことにマジギレ

する」ことにある。三人とも病院送りにして、警察には表彰されたが、教員と父親と円香にはしこたま怒られてた。

いや、まあ流石にビニールのボートと北海道の動物を比べてはいけない気がするが、それでも万が一はある。

どうしよつか……と、四人が悩んでいる中、ふと四人は後ろに目を向ける。明里は用意した椅子の上で寝息を立てていた。

「……とりあえず、抜こう」

「円香先輩のすけべ」

「は？ そつちじゃない」

「な、なるべく、穴が広がらないようにしないと……！」

「一気」

「と、透ちちゃん聞いてた!?？」

もう見事にバラバラである。本当に幼馴染？ と思われてもおかしくない程度には何もあつていなかった。

とりあえず、ボートは回収出来た。四人とも川から上がって、萎れたアメンボに視線を落とす。

「どうするかー」

「謝るしかないでしょ」

「でも今寝てるし」

疲れてるから寝かせてあげてるのに、わざわざ起こして残念なプレゼンをするのは少し申し訳ない。

「じゃあどうすんの？」

「起きた時に言えば良いんじゃない〜？」

「で、でも……菅谷先輩が、謝る前にビニールボートに気付いたら……その、かなり心象悪いんじゃない……」

それもその通り……つまり、結局隠すしかない。方針は決まったので、とりあえずたたみ始めた。

小糸が明里を見張りつつ、雛菜と透と円香で手早く片付ける。何せ、この様子を見られたら、隠蔽工作真っ只中だと思われるから。

「で、問題はこれだよ。どこに隠す？」

「うーん……まあリカが起きても目に入らない場所……」

「埋める〜？」

「いやいや、返す時に掘り起こすの見てリカどう思うのよそれ。もう少しまともな案出して」

「は〜？ 元々、円香先輩が穴開けたんでしょ〜？」

「……は？ あんた達が私を投げたからでしょ」

「でも最後に触れたのは円香先輩じゃん〜」

「それ、人を殺したのは引き金を引いた人間じゃなくて、銃弾を発射した銃が悪いって
言ってるのと同じなだけど？」

「何その喩え〜。厨二くさ〜い」

「ふ、二人とも……落ち着いて……！」

少しずつギスギスしていく。こういう時の雛菜と円香は困るものだ。おそらく、諫められるのは一人だけなのだろうが……その一人は、ビニールシートの上に石を積み重ね始めていた。

「と、透ちちゃん何してるの!?!？」

「え、埋めるのかなって」

「それはダメって円香ちゃんが言ってたでしょ！」

「あつ」

アンバランスな岸の上で、アンバランスな石をいくつも置いていたからだろう。穴の上に石を重ねた直後、石が転がり、足の角が引っ掛かってそのまま穴を広げてしまった。

「わお」

「ぴ、ぴえええ……」

「……………」

あ、悪化した……と、ふらりと小糸は頭をクラつかせ、倒れてしまう。

円香はジロリと今度は透に目を向ける。

「……あんた何してんの？」

「いや、埋めるのこなって」

「それを今、雛菜と議論してただけど、なんで勝手にやるわけ？」

「やっちゃった」

「じゃないでしょ。なんでそんな勝手に考えなしに動くわけ？」

「え、いやだつて早めに動いた方が良くはなかって……」

「透のそれは何も考えてないだけでしょ。そもそもあんた二股つてわかってる？ 前々

から思つてたけど、あんたがそんなじや長くこの関係も続かないんだけど」

「いや、私だつて考えてるから。少しは」

「少し過ぎるつて言ってるんだけど」

「ふふ、めっちゃ怒るじゃん」

「は？ 何笑つてんの？」

普段、円香にとって愛すべき小糸と明里が揃いも揃つて寝てしまっているため、もう

止める人はいない。

むしろ、油を注ぐ奴ばかり残っていた。

「円香先輩、うるさくいい。透先輩、もう雛菜と遊ぼく？」

「え、いや待って雛菜……」

「ていうか、透先輩髪にゴミついてる。雛菜が洗ってあげるね？」

半ば強引に、雛菜が透を連れて行ってしまった。

その様子を見ながら、円香は思わず舌打ちを漏らしてしまう。

「……もういい」

その言葉は誰に言ったのか分からない。だが、二人の後を追う事なく、とりあえず倒れている小糸を椅子の上に寝かせてあげて、穴の空いたボートを一人で畳んで置いておいた。

「ん……なんか、よく寝た気がする……」

声を漏らしながら目を覚ました明里は、軽く伸びをする。時計を見ると、予定より20分くらい早い目覚めだ。

体力は回復できたし、20分くらいは遊んでも全然平気だろう。そう思いながら川の方を見ると……川で雛菜に引き摺られる透と、寝ている小糸の面倒を見る円香……と、

完全に二手に分かれてしまっていた。

「…………えつ、なんかすごいギスギスしてる?」

「あ、起きた」

その声の主は円香。その表情は、それはもうあからさまに不機嫌だ。

「な、何かあったの?」

「何にもない」

「それは無理あるから…………」

「それより」

と、円香が言葉を遮って立ち上がる。そして、畳であるビニールボートに手を伸ばした。

「ごめん、リカ。みんなで遊んでたらこれ、穴空いちやった」

「え? あ、あく…………いや、いいよそんなの。それよりどうしたの?」

「大事なものなんじゃないの?」

「大事だけど、四人のことが大事」

「…………」

その直後だった。じわつ…………と、今まで不機嫌にしか見えていなかった円香の涙腺が弛む。お陰で明里はギョツとしてしまった。

「あ、あれれれっ？ ど、どうして泣くの？ どこか痛いの？」

「泣いてない」

「だ、大丈夫だよ、俺がいるからっ。みんなもいるから、だから泣かないで？」

「泣いてない」

「大丈夫！ マドちゃん、強い子っ。よしよしっ、ギスギスした空気なんかには負けない強い子っ。だから泣かない泣けない泣いてないっ」

「黙って」

そう返されつつも、頭を撫でてくる明里の手を跳ね除ける事はなかった。

そのまましばらく撫でてあげながら、改めて話を聞く。早い話が、ボートの穴を開けてそれをどうするか悩んだ後、喧嘩になった、と。

それを聞いて、最初に明里は落ち込んだ。

「……俺、ビニールのボート壊されただけでブチギれるキャラだと思われてたの……？」

「……ごめん。今思えばそれはなかった」

「わざとじゃないんでしょ？ なら怒らないよ」

「でも、リカあれ新品でしょ？ 一回も乗ってないのに良かったの？」

「壊れちゃったのなら仕方ないでしょ」

にしても、まさかそんな事で喧嘩になるとは……もしかして、ノクチルって落ち着き

の割に大人じゃないのかもしれない。

でもまあ、逆に言えば事の発端は、自分がボートを壊されたらブチギレると思つていた事。それがなかった今、喧嘩の原因なんてない。……もしかしたら、言い争いの時にいらんこと言ったのかもかもしれないが、それは喧嘩両成敗。故に、お互いにごめんなさいで済む。

早速、行動に……と、思っていると、円香が頭を明里の胸に置いた。視線を合わせようとしないうちあたり、少し申し訳なく思っているのかもしれない。

「……ごめん。リカ」

「? 何が?」

「せっかく休んでもらつたのに、また疲れさせるようなことして」

「そんな事、気にしないで。そんなこと言つたら、俺とおるんはしよつちゆう、マドちゃんを疲れさせてるでしょ」

そう言いながら、また頭を撫でる。そして席を立とうとすると、自分達の前に透と雛菜が歩いて来ていた。

「円香」

「円香先輩」

「……何」

「ごめんね」

「ごめんなさい。ちよつと言い過ぎた」

「別にいい。……こつちこそごめん」

秒で仲直りし終えた。これなら自分いらなかったんじゃないかと、思わないでもないが、まあその辺は気にしない。

すると、透と雛菜は明里にも頭を下げて来た。

「あとリカも。ごめん」

「これ……穴空けちゃった……」

「ああ、いいよ。気にしないで。……ねえ、俺ってそんなに物壊されて怒りそうないメー

ジ？」

「ものつていうか……生き物全般？」

「正直、怒られるかもって思ってた。……でも、雛菜怒ってる明里先輩も見てみたかったかも」

「それはやめて。本気で怖いから」

それはそれでショックなのだが……しかし、そんなに自分が怒つてるところを見たかったのなら、怒ったふりだけでもしてみても良いかも……何せ、自分は仮面ライダーになるのだ。少しはそういう練習してみても良いのかも……と、思った時だ。

「う〜……んっ、あれ……私、寝ちやつてた……？」

小糸が目を覚ました。そういえば、あの子はなんで寝ていたのか。

その小糸が四人の方を寝ぼけた様子で眺める。そんな中、明里を視界に収め「びえつ」と声を漏らした。

「す、菅谷先輩……起きてる……？」

そういえば、当然ながらあの子も自分が怒ると思ってるんだよな……そういえば、ちようど良い。少し試してみようか？

そう思い、近くにあるビニールポートを掴み上げると、無表情のまま小糸に低い声を出した。

「人の大事な大事なビニールポートを穴を空けたのは、だあくれだ？」

「びいつ……？　びつ……びええええ……」

「あつ」

また失神してしまった。やり過ぎたかな、と思っていると、後ろからガツと肩を掴まれる。

円香が、さつきまでとは比にならない怒りを醸し出していた。

「……あ、あれ……お、怒ってる……？」

「ちよつときて」

×連行されて、メチャクチャに怒られた。

×なんやかんやで、川遊びを終えてキャンプ場を出た。明里の運転で出発し、助手席にはまた円香が座る。

そのまま、五人はまず温泉に向かった。一応、キャンプ場の周りに軽く風呂入る場所があったとはいえ、やはり女の子的には物足りないから。透と雛菜がバタフライを始めたので、円香と小糸は他人のふりを結構した。

で、ついでにその施設でお昼を食べた。この辺で美味しい天ぷら蕎麦があるらしいので寄ってみた。山の幸を天ぷらにしたそれは絶品だった。

で、そこで少しゆっくりしてから、再度出発。途中で木彫りの小物を販売している店を見つけ、そこでお手製のおみくじがあったので負けた人がこの店でみんなの欲しいものを奢りゲームをやり、小糸が負けたので円香が男気を見せた。

「……後で俺も半額出すから」

「……助かる」

ボソツと耳打ちしてくれたのは、円香としても助かった。

などなどと、とにかく様々な場所を巡って、記念品とかを買って、そろそろマジで帰るか、となって帰路についた結果……渋滞にハマった。

「あは〜〜♡ 王蟲の群れみたい〜〜」

「分かるわ」

「トイレ行きたい人いない？」

「だ、大丈夫だよ、円香ちゃん」

「行きたくなる前に言うくらいにの心意気でいるようにね」

「ニュータイプじゃん」

「見える……僕にも尿意が見える……！」

「やは〜〜♡ 大佐、邪魔です。退いてください〜」

聞いているのか聞いていないのか分からないが、まあこの様子なら大丈夫だろう。

さて、そんなわけで、しばらく車は動かない。カーナビはついているし、最悪、高速降りた方が良いのかも……と、思ったので、とりあえず相談してみた。

「マドちゃん、高速降りる？」

「んー、どうだろ。同じ考えの人、結構いそうだし。ただ、万が一の時は降りといった方が早く行けそう」

「じゃあ降りよつか。次で」

なんて話している時だった。二人が座るシートの間から、にゅつと透が顔を出した。

「私には聞かないの？」

「え？」

「高速降りた方が良いか」

「？　なんで？」

「……」

聞かれて、透はむすつとする。

すぐに円香は何がしたいのか理解した。さつき、つい口論になった時のことを思い出したのだろう。

『透のそれは何も考えてないだけでしょ。そもそもあんた二股つてわかつてる？　前々から思ってたけど、あんたがそんなんじゃないや長くこの関係も続かないんだけど』

それはつまり、何もお互いに平等に構ってもらったり、何かイチャイチャした時は報告すれば良いだけのことではない。

こういったことの判断や家事など、そういったことをやるかやらないかだけで溝が生まれるというもの。

その上で、とりあえず混ぜろうと思ったのだろう。

それについては謝ったんだし、気にしなくて良いのに……と、思う反面、でも行動する事は悪くないので、気持ちを汲むことにした。

「透はどう思うっ？」

「このままが良い。もう少し王蟲の群れを見てたい」

「降りるよ」

「ん」

「えっ」

人がくれてやったチャンスを簀巻きにして川にぶん投げる人に渡す慈悲はない。

そのまま、しばらく高速で動いているのか分からない体験を小一時間ほどした後、高速を降り始めた。

「今のうちに、親御さんに連絡しておいて。予定より遅くなるって」

「はい」

「わ、分かりました……!」

そう言つて、年下二人はスマホを取り出す。

ハンドルを切つて、高速の降り口へ。そのまま高速を降りた。さて、ここからはサクサク動きはするが、時間は掛かる。信号はあるし、目的地に直行できるわけでもないし、予定外なのでカーナビが必須だ。

その為、帰宅にはそれなりに時間が掛かり、早一時間。

「椎茸」

「ケムツソ」

「ソーラン節」

「すびー」

「すやすやく……」

「あ、寝ちゃってる」

雛菜と小糸が寝息を立ててしまっていた。まあ、長時間車でじっとしていたら、そりゃ飽きるというものだ。

「ま、ほとんど二日間遊び倒してたからね。何かある？ ブランケットとか」

「ないよ、真夏に。円香、この上着借りる」

「……ん」

何とか無事に終わりそうで良かった。ずっと気を張っていたから、明里としては少しホッとしてしまう。

まだ家に着いていないので気は抜けないが。

「どうだった？ マドちゃん、とおるん。楽しかった？」

「ん」

「私もー」

「なら喧嘩するのはやめて……結構怖かったんだけど……」

「「……めん」」

起きた直後にギスギスしていたのは今でも忘れられなかった。

「あの……一応、聞くけど……俺がいなくて仲悪い、とかないよね？」

「ないから」

「それはない」

「なら良いけど……」

まあ、元々仲間内で言えば自分が1番の新参者。だから、自分がいなくて仲悪くなる事はないだろう。

「まあ、仮に喧嘩するにしても、俺がいる前でしてね。知らないところで喧嘩になって、そのままって言うの困るから」

「そのままって何」

「今日、俺が起きるまで二人とも別々になってたし」

「……」

それはそうかも、と二人とも黙り込む。特に、円香は自分の顔を見るなり泣いてしまったし……。

「ぐえっ、う、運転中はやめてよ」

「……運転中に余計なことを思い出さなくて良い。ミスター女泣かせ」

「なんで頭の中で考えてることかわかるの……ていうか、その言い方は語弊が」

「は？ リカ、円香のこと泣かしたの？」

「えっ、いや泣かしたのはどっちかって言うとおるんの方……」

「最低。彼女泣かしたの彼女の所為にするとか」

「ま、マドちゃん……！」

「分かった。ここでリカを殺して私も死ぬ」

「事故らせるのはやめて！」

「ほんとにやめて。それ私も死ぬ」

なんて車の中でイチヤイチヤし始める中、寝ていた小糸はちょうど目を覚ました。
……起きづらかったが。

ちなみに、雛菜はガチ寝で起きる事はなかった。

有名になるとそれはそれで大変。

銃も魔法も無し、ゴリゴリのインファイト。

とあるキャンプ場で、青年はいよいよ背中を地につける。祠を突き破る勢いで吹っ飛ばされた青年……浅口円里は、もはや立ち上がる気力もなかった。

ここで、死ぬしかないのか。あんな訳の分からない連中に敗れて、殺されるしかないのか。

……いや、そうはいかない。自分には、妹がいる。せめて妹が自立し、一人で生きていけるようになるまで……自分は、死なない……!!

そう決意した直後、祠から光が漏れ出し、自身の腰に集い、そしてベルトを形成し始める。

「……………」

なんなのか分からないのに、分かる。こいつが何なのか、そして……どう使うのか。

そして、妹を助けるには……こいつの力を借りるしかない……!!

そう言うと同時に、立ち上がった円里は、その帯のような形をしたベルトをキュツと締めした後、両手をクロスして構えた。

「変身」

『カノウツ、ジゴロオオオウツ!!?』

何処からか、そんな声が聞こえてくる。直後、円里の身体は光に包まれ、それと同時に装甲とも胴着とも取れる新たな肉体が、顕現した。

鬼を想起させる赤い仮面と、黒い二本の角、白い布生地にも筋肉にも見える肉体、そして腰には帯のようなベルト……仮面ライダージユウドが、その場に顕現した……。

××ど、いうニチアサタイムを、二股カップルは朝から見ていた。

「ぶふっ……か、カッコ良いわね……!」

「すごい、ほんとに仮面ライダーじゃん」

「思ったより恥ずかしいんだけど……」

いや、本当に恥ずかしいのだが、円香と透はご機嫌だ。しかし、本当に明里としては
気恥ずかしい。

そんな明里の気持ちなど関係ない。実際に明里がスタントもこなしているライダーは、仮面ライダーとは思えないほど姿勢を低くして、慎重に敵の方へにじり寄っていく。

「野生の獣?」

「むしろ痴漢みたい」

「君達さあ、俺が相手なら何を言っても良いわけじゃないんだよ？」

むしろ実践的と言ってほしい。戦闘スタイルも完全に武闘派である。敵が突き蹴りを繰り返す中、ライダーはそれを冷静にいなした上で強引に掴みかかり、技を掛ける。勿論、技をかけられて敵がブーツとしているわけがないので、すぐに起き上がって距離を置きつつ立て直そうとする。

が、それをライダーは許さない。すぐに距離を詰めて、拳やら何やらをいなしながら敵に技を掛ける。

たった二発の柔道技だが、それら全てがライダーの技でもあるため、敵は既にフラフラと足を止め始める。

「エゲツな」

「これやり過ぎだよね」

「加減してるよ。怪人役の人も湿布二箇所で済んだし」

「貼らせないようになさいよ」

直後、ライダーは怪人を背負い投げした……のだが、地面に叩きつけるのではなく、空中に放り投げたのだ。

そして、それに走って追いつきながらジャンプし、空中で怪人を再び掴む。

『ライダー……二段・背負い投げ』

「え」

「まさか……」

空中で最後、背負い投げをぶちかました。敵怪人は受け身を取る間もなく地面に叩きつけられ、そしてライダーは着地の直後に再び空中に舞い上がり、ヒュルルルツと回転し、着地。

その後、背後で爆発が起きた。

『柔術に……死角無し……！』

それは、決め台詞だろうか？ 円香と透的には理解し難い言葉で、少し笑いそうになってしまふ。

「……二人とも、笑わないでよ……」

「っ……わ、笑ってない……」

「ギリ耐えたから……」

「いやもうその発言が絶対に違うから……」

酷い……と、思っていると、戦闘シーンが終わった後で、妹と合流した。

『お兄ちゃん！』

『！ 緋奈……！』

『『ひっ！』』

そのまま二人はハグをした。これは兄妹愛、これは兄妹愛、これは兄妹愛……と、明里を挟んでいる二人は思いつつも、男の腕を掴んでいる力はミシミシと強くなる。

「……あの、二人とも？」

「そういえば、私達やってないけど」

「ヒーローごっこ」

「いや、これごっこじゃなくて普通に仕事……」

「は？ 私達のことには怪人から守りたくないって言うわけ？」

「雛菜にはやるのに？」

「いやそうじゃなくて……」

「ところで今日、私達三人とも暇だよ」

「天気も良いし」

「分かったよ……」

× そんなわけで、この歳でヒーローごっこをすることになった。

×

× さて、事務所近くの公園を選んだのは理由があった。

「そんなわけで、怪人役のプロデューサーです」

「バチパチパチ」

「え、俺休日に呼び出されて何……?」

「良いんだな? 投げても」

「投げられるの俺?」

ほとんど休日出勤の気分だった。いや、別に暇と言えば暇だったし、全然問題ないわけだが。

そんなプロデューサーの気も知らず、透が司会進行を務める。

「と、いうわけで、私と円香が妹役で、リカが仮面ライダー」

「そうだ、菅谷くん。雛菜はどう? 迷惑かけてない?」

「かけてないですよ。素直だし、俺なんかより演技上手いし、俺がどんなミスしても擁護してくれるし……むしろ俺の方が迷惑かけて」

「そうか、良かった。でも、他の女性との思い出話をする場所は選んだら?」

そう言う通り、後ろから透と円香に肩をがっしり掴まれる。

「へえ、仲良いんだ。雛菜と」

「雛菜が擁護する相手とか限られてるけどね」

「? え、な、何……?」

「彼女二人いてまだ足りない?」

「まだ一回もシてないのに性欲は多いんだ。ミスターモンスター」

「そんな事ないよ。二人も、俺が幼馴染と険悪になるのは嫌でしょ？ ……大丈夫、二人を傷つけるような関係にはならないよ」

「……なら良いけど」

「……バカ……」

スゲエ、とプロデューサーはドン引きする。心が綺麗な人の真心はあらゆる疑念も悪意も消し飛ばすものなんだなあ、と痛感してしまう。

「ていうか、いつも雛菜と俺が現場でどんな話をしているか、とか二人にも話してるでしょ？」

「……んっ」

「ごめん」

「いや、いいよ。俺も二人が他の男の人と一緒にになったら、気が気じゃなくなるから。謝らないで」

肩を掴まれていたはずが、いつの間にか明里が二人の頭を優しく撫でていた。すつかりうつとりしている二人は満足したのか、改めて話を進めた。

「じゃあ、プロデューサーは私と円香を襲って。廃材なんかで」

「どこに廃材があるんだ？」

「リカはそれを助けて。仮面ライダーになりきって」

「良いけど……流石にライダー二段投げはCGだよ?」

「そんな必殺技まで放たれるの俺!? 勘弁してよ!」

なんか少しずつ命の危険を感じつつも、そもそも今回の発端が雛菜の妹役である事を理解する。

仮面ライダーの妹役のオーディションがあると聞いて、その上で明里が出るともわかっていたから、距離が近いノクチルの誰かが良いと思っていた。

で、その時は円香と透は明里の姉を名乗っているとも聞いていたので、真逆の妹役には雛菜か小糸がマツチすると思つて二人に声をかけた結果「えっ……わ、私は遠慮します……」「やはくくく♡ 明里先輩の妹楽しそうくくく」となつて、雛菜が受け、見事に合格したのだが……まあ失敗した。素直に二人を連れて行けば良かった。

……いや、でも二人を連れて行つてどちらかが受かつてしまつたら、三人の関係に何かありそうだし……結局、雛菜がベストではあつたのかも……と、考えていると、ぬつと自分の前に木の枝が差し出された。

「はい」

「え……と、透? これ何?」

「廃材がなかつたから」

「お、おう……」

それを受け取り、開始となった。というか、大学生三人と公園でヒーローごっこって、中々に攻めた時間の使い方がいらないでもない。

いや、これも担当アイドルのため……！ と、強く決意して、ヒュツと杖を鳴らして構える。向けられた刃先にいるのは透。

「うし、やるか……円香は？」

「まずは透の番です。ミスターヴィラン」

一人ずつやるのかよ！ と思っても堪える。……でもこれ、社長にダメ元で休日出勤の時間外手当申請してみよう、と決めた。

さて、そんなわけで演技開始。目の前にいる透に、とりあえずこの前のヴィランのセリフを当ててみた。

「逃げるのはそこまでだ、ジャップめ。貴様ら大和魂を失われたボンクラどもは、我ら秘密結社B・W・A・F（ボクシング・レスリング・アーチェリー・フェンシング）が、骨の髄まで海外武術の虜にしてくれる」

なんだろう、このコンセプト。ちなみに聞いた設定では、その四つの競技から一人ずつ代表して幹部の怪人がいて、そのボスはCQCの使い手らしい。

それらに対抗し、ライダーはジュウド、ケンドウ、テラカ、キユドウの四人が対抗するらしい。

個人的には仮面ライダー対怪人という構成には好感が持てたが、敵の怪人もほとんど見た目はちよつとグロテスクな仮面ライダーなので大差はない。

……まあ、愛国心は少なくとも育ちそうではあるよね、と控えめに納得しておくが。さて、そんなプロデューサーを前に、透は。

「ふふ、かかつてこいやー」

「お前なりきれよ……」

自由にも程がある。ピンチになる妹役をやりたいんじゃないんかい、と。

でもまあ、適当で済むならそれはそれでありがたい。このタイミングで、さつさとヒーローに変身してほしい、と明里の方を見た。

「しよつ……そきよつ、そこまでだー！」

めっちゃ照れてる！ あれが今朝の仮面ライダーの人と同じか!?!? とプロデュー

サーは目を丸くしてしまった。

そんな心のツツコミも届かず、明里は帯のような形をしたベルトがある想定で、腰の辺りをキュツと締めた後、両手をクロスして構えた。

「変身」

それを見て、少しだけ目を丸くする。照れてはいるものの、やはりあの動きは仮面ライダーの変身シーンそのもの。恐らく、体に染み込ませるために何度も練習したのだろ

う。流石、高校から芸能界にいるだけはある……と、ちよつとだけ感心してしまつていると、姿は変わつていないけど変身を終えた明里が距離を詰めてくる。

「！ よく来たなジユウド……え」

「ライダー……払い腰！」

「うおつ!!?」

思いつきり足を払われると同時に体を浮かせられた。やば、また彼に投げられた……!!? と、思つたのも束の間、ふわつと不思議と強打しないように土の上に落とされた。

あまり……というか全く痛くない。

「大丈夫ですよ。怪我しない投げ方を覚えたので」

「そ、そっか……」

少しホツとしてしまつたが……彼ももしかしたら、撮影のために色々と努力していたのかもしれない。これは、現場でも安心して雑菜を任せられる。

投げ終えた明里は、殺されたフリをする自分を置いて、透の元に歩く。

「大丈夫？」

「お兄ちゃん……!」

「え、身バレしてんの？」

「キスは？」

「兄妹なのに!?？」

「ほーらー、はーやーくー」

「わ、分かったよ……」

そして、公園の中心で二人は一瞬だけ唇を重ねた。あんまり人前でそういうのしてほしくないのだが……まあ、公園には誰もいないし、スルーした。

「これで良い? とおるん」

「ん、満足。毎週やろうね、これ」

「えっ」

満足したんだ、と思い、とりあえずプロデューサーも立ちあがろうとする……が、少し足元がフラつとフラついてしまう。

「おっ、と……」

「あれ、どこか痛みます?」

「いや、大丈夫……だけど、急に視界が回ったからかな、少し首痛いかも……」

「え、いついかなる時も護身に備えてストレッチとか朝のうちにしてないんですか?」

「いや俺スパイじゃないから……」

この子の常識を知りたい所だったが、何にしても後は円香の分。次は軽く備えておこう、と軽く筋とかを伸ばしていると、明里が声を掛けてきた。

「俺、一応湿布か何か買って来ますよ」

「いや、大丈夫だよ」

「いやいや、どんなに綺麗な受身をしても確実に安全、なんて技は柔道にはありませんから。念には念を入れた方が良いでしょう」

「じゃあ遊びで技かけないですよ……」

「すみません……」

多分、円香と透が駄々をこねたのだろう、というのには察しているが。

すると、流石に円香も悪いと思ったのか、口を挟んできた。

「リカ、私も行く」

「いや、大丈夫だよ。俺一人で。プロデューサーさんについててあげて」

「……ん」

意外な言葉……と、一瞬思ったが、おそらく透と自分を二人きりにさせないためだろう。

信用がないとかではなく、単純に嫉妬心からというのとは分かる。だからこそ、大人として提案した。

「じゃあ、三人で行ってきてもくれないか？」

「え、怪我人を一人には出来ませんよ」

「大丈夫だよ、ちょっと痛めただけだから。行つておいで」

すると、三人とも顔を見合わせたあと「じゃあ……」というように自分にお辞儀をして三人で行った。

「ついでにお茶買つてきますから」

「どーも」

明里にそう言われて、一先ず三人を見送りながらベンチに座った。三人とも、仲良さそうで何よりだ。正直、二股と知った時はすぐに拗れるんじゃないかと思つたが、ひとまず安心して見送った。

×

「や^Xつち^Xやつたな……まさか、ストレッチしてなかつたとは……」

「普通してないでしょ」

随分とプロデューサーに対して柔らかくなつた、と円香はほつとしていた。明里も基本的には良い子だが、嫉妬心は三人の中で誰より強い。随分と抑えるようになってくれた。

そんな中、透が明里の反対側から声を掛ける。

「にしても、やっぱり柔道やつてるリカはあるよね。ギャップ」

「え、そう?」

「そう。カッコよかったよ、遊びなのに」

「そ、そっか……にへへっ」

「いや、そういうところでしょ。ギャップが生まれるのは」

「えっ」

なんでそんな可愛い笑いが、あのキレのある柔道技を放てる奴から漏れるのか非常に気になるところだ。

そんな話をしながら、コンビニに到着した時だった。自動ドアから出てきた女の子と明里の身体がぶつかった。

「おっ、と」

「きゃっ……」

大学生になってさらに増したガタイの良さが災いしたのか、女の子は後ろに倒れそうになる。

それを、明里は見逃さずに手を握って引き寄せて立たせた。

「大丈夫?」

「すっ、すみませっ……えっ」

「?」

直後、その少女を見て透と円香も目を丸くした。その子は、小宮果穂。そしてその小

宮果穂は、明里を見上げて頬を赤らめ、目を丸くしていた。

「あつ……あ、浅口円里さん!?？」

「えつ……あー、うん」

「わつ……う、嘘……本物? わつ、やばつ……!」

中学生になってからも、小宮果穂の純粋さは変わらない。代わりに、少しだけ口調は年相応になった。

……それ故に、透も円香も嫌な予感がして仕方なかった。

顔を嬉しさと照れのあまり真っ赤にし、あわあわと手を虚空に彷徨わせ、どうしたら良いのか分からないように狼狽えていた。

が、やがて手を握られている現状に気が付き、ハツとして動きを止める。

それに気づいた明里も手を離れた。

「あ、ごめん」

「い、いえいえ! もう少し握っていたら……!」

やはり、危険だ。と、円香と透は固まる。やはり、今朝の仮面ライダーを見たのか、と理解する。

「は、初めまして! あたし、小宮果穂って言います!」

「初めまして。本名は、菅谷明里です」

「あ、あのっ！ あたし、今朝の仮面ライダージユウド見て、今までと違った戦闘スタイルがとつてもカッコ良くて、それで……！」

「うん。分かったから落ち着いて」

困ったように明里は果穂を諭す。すると、果穂はハツとして一步下がった。

「ご、ごめんなさい……！」

「平気」

「小宮さん、こんにちは」

「え？ ……あ、ま、円香さんと透さん……！ ……こんにちは！」

「こんにちは」

今、気付いたように目を丸くする果穂。そして「えっ、えっ？」と、二人と明里を順番に見比べる。

「えっと……えっ？ ど、どういう……」

「知り合い。大学の同期」

円香が言うのと、果穂は「あっ、あ……」と納得する。

円香に、明里は「言わなくて良いの？」と視線を送る。カップルであることを言えば、多少は距離の近さとか保つかもよ？ という意味だ。

しかし、円香も「絶対ダメ。この子、口軽い」と言い返す。なるほど、とすぐに明里

は理解した。

言えないのなら、早めに退散した方が良いのは分かったが……一応、モデルとしての矜持もあるので、ファンの子を蔑ろにするわけにはいかない。

「応援ありがとう、小宮さん。嬉しいよ」

「そ、そうですか？ えへへ……」

「だから、また今度、ゆつくりとお話聞かせてもらえるかな」

「は、はい！ 分かりました！」

その煌びやかな笑顔が、まるで極太ビーム兵器のように放たれるが、明里も純粋なファンサービスを持ってして相殺する。

その様子を、円香も透も浄化されんばかりの勢いで浴びて、眩しさを強く感じてしまった。

「じゃあ、その時によりしくお願いします！」

「うん。またね」

そのピュアワールドは、そのままお別れして幕を閉じた。なんとか、円香も透も不愉快にさせないように別れられただろう……と思つて顔を向けると、二人とも肩を落としていた。

「あ……あれつ、二人とも？ どうしたの？」

「いやちよつと……」

「果穂ちゃん相手に嫉妬した自分が……うん」

「??」

××なんか、凹んでしまっていた。

××

××さて、引き続き円香の妹バージョン。

「良いですか？ 俺が足を払うので、その時に後ろに倒れてください。後は俺が胸ぐら掴んでゆっくり落とすので」

「わ、分かった……！」

「頭打つのは危ないので、ちゃんと顎は引いてくださいね」

なんか割と真剣に殺陣を決めていた。なんで自分ばかりこんな待たされるの……と、円香は腕を組んで少し不機嫌そうにしている。

でも、まあようやくくの妹役だ。せつかくだし、なりきらないと勿体無い。

「じゃあ、スタート」

透の台詞で、演技がまた始まった。

「逃げるのはそこまでだ、ジャパニズムめ。お前ら大和魂を失われたボンクラどもは、我ら秘密結社B・W・A・Fが、海外武術の虜にしてくれる」

「お兄ちゃん、助けてー」

透以上の棒読みになってしまったが、いざ演技をしてみると割と気恥ずかしかった感が否めず、棒読みになってしまった。

そんな自分にも、明里は真剣な表情で参加する。

「そこまでだ、怪人プ・ロデュールウーサ」

「新キャラ？」

「変身」

再び、ポーズを取り、変身。そのまま身構えた。

「現れたな、ライダーー！」

「日本武道に転向するなら今のうちだけど？」

「ほざけー！」

襲い掛かってくるプロデューサーに対し、重心移動でぬるりと捌いた上で、足をはらって転ばせた。ちゃんと今回は加減したし、プロデューサーも綺麗に尻餅をついた。

「ぐああああ！ ドカーン！」

倒し、ポーズを決めたあと、明里は円香の元にきて、お姫様抱っこをする。

「大丈夫？」

「ありがとう、王子様」

「王子様なの?」

「……………んっ」

透がキスされていたし、自分もだろうと思い、目を閉じて若干、唇を尖らせる。

目を閉じているので見えないが、それでもキスされる……と、少しずつ顔が近づいてくるのがわかってきたときだ。さつき死んだはずの声が割り込んできた。

「あ、待って、二人とも。さつきも言おうとしたんだけど、なるべくなら外でそういうことするのは控えてくれると……」

「……………あ、そっか、二股なんだし」

「……………」

止められてしまった。顔を真っ赤にしてプルプルと円香は震え、そしてプロデューサーを睨む。

ギンツ、と音がしそうなほどの眼力に、プロデューサーがゾワツとしたが、もう遅い。明里の上から飛び降りた円香は、両手を振り回しながら襲い掛かった。

その日の夜。円香が控えめに明里の部屋の扉を開けると、中で明里は珍しくスマホをいじっていた。

「リカ」

「あ、マドちゃん。どしたん？」

「……別に」

もう寝てると思ったのに……と、少し残念そうに思いつつも、まあ目的遂行のためなので、とりあえず気にせず明里が座っている椅子の後ろに立つ。

「？ マドちゃん？」

「……んーっ」

唸り声のような返事をしながら、ギユツと強く抱き締める。

「どうしたの？」

「キス」

「え？」

「私だけしてない」

「あ、うん」

話してから、明里は円香の方に顔を向け、円香も口を近づけ……ようとした時だ。

明里のスマホが鳴り響いた。

「……」

「出たら？」

「良いの？」

「少しくらい我慢できる」

「う、うん。ごめんね」

大丈夫、家にいるんだからいつでも出来る。そう思い、一度離れた。

「もしもし……あ、有栖川さん？」

そういえば、高校の時は隣の部屋だったんだっけ、と思い出す。まだ交友関係あるんだ、と少しだけ拗ねそうになる。

「はい……え、仮面ライダー見てくれたんですか？　ありがとうございます。あ、はい。いえそんな……あ、あはは……ちよつと恥ずかしいですね」

この野郎、と円香は眉間に皺を寄せる。何自分と透以外の相手に照れているのか。

「はい……あ、はい。会いましたよ。小宮さん」

は？　あの仮面ライダー好きなお話？　ていうか、長くなる？

「え……ああ、ユニットメンバー……ああ、どっかで聞いた名前だと思ってました。通りで可愛い子だったなと」

限界だった。このやろう、と思った円香は、また後ろから抱きしめた。

「ひゃうつ！！？」

『ど、どうしたの？』

「私のこと喋ったら怒る（小声）」

「な、なんでもないです……」

いや、分かる。こう見えて気も使える人だし、多分電話相手のアイドルのユニットメンバーの女の子と会ったのだから、リップサービスを利かせたのだろう。

でも……気に食わない。

『その果穂があなたの話をしてね、今度会う約束もしたって言ってたんだけど……連絡先を交換してないからいつ会うか決められないって涙目になられちゃってね』

会うの、今後も？ と、思った円香は冷や汗をかく。あいかわらず果穂に甘い放クラのメンバーは、わざわざ果穂の為にアポを取りに来たらしい。

まずい、何せ果穂はヒーロー好き。新しく始まる特撮ヒーローは全て押さえている。つまり今日、新しい仮面ライダーになった明里にハマらない理由がなかった。ただでさえイケメンの無駄遣い二股系男子なのだ。もし……あの純粋な子に惚れられたら……と、思うと思わず唇を首筋につけてしまった。

「きやー！」

『えっ、な、何よ今の甲高い悲鳴……？』

「な、なんでもない……」

顔真っ赤にして狼狽えている。かわいい。少し意地悪したくなってきた。

「んっ……」

「っ……ち、ちよつと……そこ、肩……!」

『肩? もしかして、動物でも飼いだめたの?』

「えっ? あ、あー……いや、まあ大きな猫が一匹……」

「にゃー」

「な、舐めないでよ……!」

そのまま鎖骨のあたりに唇をつける。割と悪くない、この背徳感。

『それで、果穂があなたに会いたがってるんだけど……会える日ある?』

「あ、あー……まあ、撮影がない日なら……っ」

『少しで良いのよ。一緒に写真とか撮るだけで良いから』

「分かりました。高校の時、有栖川さんには助けてもらいましたし」

『ありがとう』

こいつ……会う気が、と円香はムカついた。いや、分かる。気持ちは。果穂ほど純粋な子と約束してしまつたら、少し要望を叶えてあげたくなるのは。円香だつて応じてあげようと思うだろう。

でもやっぱりムカついたので、さらに首筋にマーキング……と、思っている時だ。

自分の唇に、人差し指が当てられた。それと同時に、少し真面目な顔をした明里が真つ直ぐ自分を見据える。

「有栖川さん、一瞬すみません」

『? ええ?』

そして、一旦スマホを耳から離して机に置いた直後だ。円香の方に向き直り、明里にしては鋭い視線で告げた。

「いい加減にしなさい。後で相手してあげるから、あと三分ほど待っているように」
「つ……え、偉そうに……」

「返事は?」

「は、はい……」

顔を赤くして、そのまま引き下がるしかなかった。……ちよつとキツめに怒られるのも悪くないかも。

なんて思っている間に、明里は話を進める。

「お待たせしました」

『じゃあ、今週でも良いのかしら?』

「はい。全然オツケーです」

『果穂、明日か水曜の夕方か、土曜日一日空いてるけど、あなた達は?』

「明日か水曜なら大丈夫です」

『じゃあ明日の、16時くらいに……そうね。事務所近くの公園で良いかしら?』

「あー、はい。分かりました。では、失礼します」

『またね。……あ、それと』

「？」

『不純異性交遊は大概にしなさいよ？　大きな猫さん……どつちか知らないけど、たまにはビシツと言っておきなさい』

「っ!??　ち、違っ……!」

『じゃ、またね』

そこで電話は切れたのか、スマホからまた耳を離す。ようやく構ってもらえる……と、円香がソワソワした様子で明里の顔を見ると、明里は真っ赤な顔でこちらを見ていた。

「っ……な、何……?」

「……」

少し睨まれてしまった……が、明里は小さくため息をついた。そして、ベッドで暇を潰していた円香の方に歩いて来る。

「なんでもない。待たせてごめんね」

「いや……私こそごめん。困らせて」

「うん。じゃあ、こっち見て」

「?」

直後、円香の唇に唇を重ねる。優しく触れ合った後、すぐに離れてしまった。……これのために、いつもしてもらっている事のために、我ながら子供じみたことをしてしまった、と少し反省。

「はい。もう寂しくない?」

「元から寂しくない」

「はいはい。じゃあ寝なさい」

「……んっ。……あ、明日出掛けるの?」

「ああ、そうだ。明日空いてる?」

「私は空いてないけど、透なら」

「じゃあ、ちよつと小宮さんと会うから、俺とおるんで行つてくるね」

「……ん」

自分だけ行けないのは因果応報かも、と思いながら、とりあえず部屋を出た。

性的知識に最も必要なのは性的倫理観。

視界がぼんやりしている。まるで、やたらと眩しいものを見ているように。

頭もぼんやりしている。まるで、頭の中にもやががかかっているように。

そんな朦朧とした意識の中、黒い影が真ん中にぼやーつと現れた。……いや、黒じやない。白？ ふわふわしていて、装飾がたくさんついていて……そして、とても綺麗なものだ。

『菅谷』

名前を呼ばれて、その人影がようやくはつきりする。ぼんやりした影に現れたのは……白いウエディングドレスに身を包んだ浅倉透。いつもの笑みなのに、やたらと幸せそうに見えるのは、服装の所為か、それとも……。

なんにしても、何故そんな格好を？ と、思ったのも束の間、透は自分に背中を向け、視線だけこちらに移したまま告げた。

『私、なるから。幸せに』

『えっ……？』

『今まで、ありがとう』

『ちよつ、待つ……』

そのまま、天に召されるように空に浮かんでいった透に、中途半端に明里は手を伸ばす……そうとした所で、身体を起こした。

「はっ……」

季節は夏……当然の事ながら、自室にいても暑い。クーラーもつけっぱなしでは電気がギャグミたいになるのでそれは出来ない。

いやそんなことよりも、だ。今の夢……ちよつと、嫌だと思った時には、身体は動いていた。

×

「あ……」

そんな眩きと同時に目を覚ました透は、少し不機嫌だった。なんか、日差しとは違う別の暑さに襲われたからだ。

なんだろう……まあ何でも良いけど、クーラー入れるし……と、思いながらベッドの下に落ちているリモコンを取るために少し身体を這わせようとしたが、動かない。後ろに引つ張られる。

「？」

「……」

後ろに視線を向けると、自分にしがみついていたのは明里だった。

「……リカ？」

「……とおるん、行っちゃいや〜……」

……何の夢を見ているのか非常に気になるところだが、まあこんな機会、滅多に無いし、もうしばらくここにいても良いと思う。

それにしても……いつも、甘えてばかりの自分に、リカの方から甘えにきてくれるなんて……。昨日の夜は、確かに一人で寝てたはずなのに。

「ふふ、可愛い。やっぱりお姉さんじゃん、私が」

言いながら、背中側に手を回して頭を撫でてあげた。少し暑いくらい、どうって事ない。

く30分経過く

まだ明里は動かない。肩甲骨の間に明里は顔を埋めていて、強引に背筋を伸ばされていて少しキツイ。

自身に抱きついている明里の両手は、足と足の間の少し上、おへそより下と微妙な位置にある故あって、デリケートな部分に当たりそうで当たっていない状況だった。

つまり……少しムズムズする。ただでさえ真夏に密着していて、身体が火照って来ているというのに。

「リカ……あの、起きない？ そろそろ」

「……」

ダメだ、返事はないどころか、両足を絡めて逃げられなくされてしまう。明里の足の体温が、自分の足を伝って来る。……背中側にいるのに、良い匂いもしてきた。どうか、何でこの彼はこんな可愛い匂いがするのか。可愛い匂いつて何？ と言われるかもしれないが、可愛い匂いとしか言いようがない香りがする。

「ふふ、冗談。もう少しゆっくりしてて」

「……」

そう言いながら、また頭を撫でてあげて、透はとりあえずまた香りと体温を堪能した。くさらに30分経過く

明里の身体は少しずつ上に上がり、透の上半身に超しがみついていた。いつの間にか二人で向き合うように寝転がっていて、透の顔面は明里の胸板にむぎゅつと押し込まれるようにしがみつかれていて、両足と両腕は完全に透の背中側に回されてホールドさされている。

この真夏に、呼吸を塞ぎにくる勢いのホールド……いくら半袖短パンとは言え、流石に息苦しい……のだが。

「ふふ、リカの……お腹の匂い……」

付き合い始めて二年……それまで、一度も性的交わりをしてこなかった事もあって、透と円香の性癖はとつくに壊れていた。

透は、パジャマの裾から頭を潜り込ませて、明里のお腹を直で頬擦りしていた。

「ふふっ……おへそだ。可愛い形してる」

「……」

「……舐めても良い？」

「……」

「返事しないってことは、OKってことだよね？」

眠っているからか、スイスイと勝手に話を続ける透。割と大胆になってきてしまっていた。

そんな中、まあもう一人が一時間も待たされれば黙っていないわけで。

「ちよつと、いつまで寝てん……は？」

ガチャつと扉が開かれたが、透はお腹に夢中で気が付かない……が、明里は違った。Tシャツの中に透を入れたまま身体を起こした。

「つ、ま、マドちゃん!?？ これは違って……！ ちよつと、寂しかったというか……！」

↑彼女をTシャツの中に入れてる彼氏

「うわっ……身体折れそう」↑彼氏のTシャツに頭を突っ込んでいるもう一人の彼女

「……は？」

ブチギレている円香にも、Tシャツの中の透は気がつかない。半分パニックになりながら、モゴモゴと動く。

「ちよつ……とおるん、暴れないで……！」

「出口は……あつた」

言いながら身体をひよこつと出したのは……Tシャツの、明里が頭を出している部分。つまり、一枚のTシャツを二人で着ている状態で出て来た。

それを見るなり、円香は頬に青筋を浮かべる。

「………は？」

「と、とおるん……！ 何して……てか、どっから顔出してんの……!?？」

「ふふ、元気な女の子ですよ」

「喧しい！ ていうか暑い！」

「は？ 人には散々しがみついていた癖に」

「つ、そ、それは……ごめん。暑かった？」

「いや、平気。役得だったし」

「お腹、舐めたかったら舐めても良いけど……俺が寝てる時にしてね。恥ずかしいから」

「は？」

「え？」

今のは聞き捨てならない。というか……そもそも今思えば、円香が部屋に入ってきた時の反応から少しおかしい。

「起きてた？」

「う、うん……」

「最初から？」

「はい」

「……」

直後、透はすくつと立ち上がった。同じ箇所を突つ込んだまま立ち上がれば、当然立たなかった方はTシャツを脱がされるわけで。

明里は上半身裸になるが、今の透はそれに興奮することはなかった。何せ、ブチギレているから。

「知らない」

「えっ……あ、あのっ、待つ」

部屋を出て行くこうとする透だが、明里がすぐに動いて後ろから抱きしめた。

「何？　暑いんだけど」

「ま、待って。行かないで……！」

「嫌。暑い」

「結婚しないで……!」

「……………は?」

その脈絡がなく意味が分からないコメントは、端的に言えば地雷だった。結婚? 自分が明里以外の人間とそれをすると思っているのか……それとも、明里と結婚するなど言っているのか……どちらにしても、透の額に青筋が浮かぶ。

「するから、結婚」

「え…………?」

「円香と結婚するから。リカは出て行って」

「えっ」

「えっ」

なぜか巻き込まれた円香の腕にしがみついた透は、そのまま円香をつれて部屋から出ていった。

何がタイミング悪いって、今日は小宮果穂に会うために、透と明里は二人で出かける日なのだ。残念ながら円香は一緒に行けない。

……………だが、朝食の席では……………食卓で食べる円香と透。そして明里は透によって自室で

飯を食わされていた。

「……ねえ、何があつたの？」

「知らない」

「話してくれないと分からないんだけど。……てか、怒ってるのが自分だけかと思わな
いで」

何せ、円香も朝食を作つて長い時間待たされた挙句、放つて置かれて二人で過ごされ
たのだ。

まあ、冷静になつた今、朝食はともかく二人でイチヤイチャは逆のパターンもあつた
ことだし、そこまで気にしていない。

だからこそ、二人の仲を何とかしてあげないといけないのだが……もう時間がない。
自分は出掛ける時間だし、二人とも果穂に会いに行くのだろう。

なので、一言だけ言つておいた。

「……ま、あんたがそういう感じでいくなら別に良いケド」

「いや、ほんとに知らないんだけど。なんか急にベッドに潜り込まれて恥かかされただ
けだから」

「何にしても、まずは話を聞いてあげるところからでしょ」

「……」

「じゃ、そろそろ私出るから。あとは二人で自由に」

それだけ話して、円香は食器を片付けた。

さて、言われた側の透は、少し悩んでから、とりあえず立ち上がる。まだ残っている朝食のうちの食パンのお皿を持ってリビングを出ると、明里の部屋に入った。

「……リカ」

「分かったら、さっさと行ってきますのキスし……」

「はいは……」

……円香が明里に迫っていた。目前まで顔を近づけて、キスする寸前で止まる。

「……何してんの？」

「行ってきますのチュー」

「……ま、マドちゃん今日、一日仕事だから……」

「……あつそ。お邪魔してごめん」

「わ、わー待つてとおるん！」

部屋を出ようとする透を慌てて追おうとする明里だが、その明里を円香が止める。

「先にキスして」

「あ、ご、ごめん」

「ん……はい、よく出来ましたー。ミスター女たらし」

「ひ、人聞きが悪いな……」

「そうじゃん」

「と、とおるんまで……!」

何せ、二人の女の子を引っ掛けているのだから。二股を認めるなんてなかなかあることじゃない。

「それより、リカ。朝ご飯食べよ」

「え……いい、一緒に食べて良いの?」

「いいよ、嫌なら」

「あ、す、すぐいく。じゃ、マドちゃん、お仕事頑張つてね」

「ん」

明里は慌てて自分の朝食を持って部屋を出た。

で、透と二人で朝食を食べる。揃って食事をしながら、透が声をかけた。

「で、どうしたの?　なんでベッドに潜り込んできたの」

「あー……うん。実は、その……変な夢見て……」

「変な?　私が誰かと結婚する夢?」

「……」

「ふふ、凶星とか。ウケる」

「ウケないよ……心臓に悪かったんだから」

それで自分の背中に朝からしがみつくて……やっぱり可愛いにも程がある。

「ふふ、相変わらずバカで何も分かってないな、リカは」

「えっ、な、なんでなじられるの」

「私がリカ以外と結婚することはないから」

「……ほんとに?」

「疑うなら、私も疑っちゃうぞー。三人目の彼女が出来るかもって」

「えっ……う、嘘。信じる」

「うん。じゃあ、私も信じる」

そう言って微笑みながら、目の前で食事をすすめる明里の頬をむにとつと抓る。

「ふふ、じゃあ……仲直りね」

「……うん」

「仲直りのチュー」

「えっ、な、仲直りは握手じゃないの……?」

「嫌なの?」

「わ、わかりました」

話しながら、明里は透の方へ口を近付けた。

二人とも、とりあえず仲直りできて、テンションは大きく高くなる。さて、この後は果穂と待ち合わせである。

『ごめんなさいね、樹里。果穂の付き添い、任せちゃって』

「急な仕事なら仕方ねーよ」

本当なら今日、果穂が憧れの人に会いに行くのに付き添うのは夏葉だったのだが、急遽樹里に頼むことになった。

「でも、夏葉知り合いなんだろう？　なんだっけ……菅谷明里って人と」

『ええ。気を付けなさいよ？』

「何にだよ。変態とかなのか？」

一応、話は聞いている。後々、ボロが出ないために、一緒に来る予定の透とは恋人同士だと言うこと。

それを果穂には察されないようにする。まあ果穂は隠し事できるタイプの人間では無いし、妥当な判断だろう。

『そうじゃなくて……ちよつと言葉にしづらいけど』

「お、おう？」

『浅倉透が二人いると思っておきなさい』

「……地獄か？」

『あら、ごめんなさい。プロデューサーが呼んでるわ』

「お、おいちよつと待て……！」

『樹里に一番、高いお土産買ってくるから』

「不安を増大させる気遣いはやめろ……！」

しかし、通話はその場で切れてしまった。もう約二年も同じ事務所で活動していれば、同じユニットでなくてもわかる。浅倉透も、ついでに樋口円香も割と普通の人じゃない。悪ノリの度合いで言えば、ノクチルと芹沢あさひは事務所の中でも厄介な方だ。

その筆頭である浅倉透の影分身……嫌な予感しかしないのだが……というか、今更ながら確か事務所に乗り込んできてプロデューサーに背負い投げをかました男だと思いが出す。

そりゃ、確かに要注意人物かも……と、少しヒョッている樹里に、横から果穂が元気に声を掛けた。

「今日はよろしくお願ひします、樹里ちゃん！」

「お、おう……なあ、果穂」

「なんですか？」

「菅谷明里……さん？　ってどんな人だ？」

「カッコ良い人です！」

「……」

参考にするのはやめておいた。多分、参考にならないから。まあ、変態ではなさそうだが、下手なマネをすればこつちがしばかれると思ひ、とりあえず慎重に会話する……と、決めて、樹里と果穂は待ち合わせ場所のカフェに入った。

二人で適当に飲み物を注文し、店内を見回した。

「もうあいっら着いてんのかな」

「あ、あそこです！」

果穂が指差す先では、やたらと顔が綺麗な二人組が座っているのが見えた。

実を言うと、存在は白瀬咲耶と一緒に雑誌に写っていた頃から知っていた樹里は、ちよつとだけ明里の姿を生で見られて感動もしている。

早速、声をかけようと歩み寄った時、会話が聞こえてきた。

「じゃあ、マドちゃんにサプライズでごめんなさいの悪戯を仕掛けると」

「そう。巻き込んだから。やっぱ、私達らしく謝らないと」

「どんな感じにする？」

「やっぱ……驚かす感じ。ストレンジの二作目みたいな」

「ホラーね。OK。夏だし、水鉄砲とか買う？」

「良いね。中の液体、タバスコとか？」

「必殺タバスコ星？」

「ふふ、ウソツプじゃん」

「ラダーだ、右足でラダーペダルを押し！」

「あれ、それウソツプだっけ？」

「知らん」

……なんか、あつたま悪い会話してんなあ、なんて少し引いてしまう。隣の果穂も、二年前ならよく分かっていないで目を輝かせていたかもしれないが、今では少し苦笑いを浮かべている。

「あ、あはは……何の話でしょうか……？」

「知らね。とりあえず、声掛けろよ」

「あ……は、はい……！」

そう言つて、果穂は緊張気味に「あのう……」と声を掛ける。すると、それに気づいたイケメンの天然パーマがこちらに顔を向けた。

「あ、小宮さん。こんにちは……と、有栖川さんの代理の方ですか？」

「あ、ああ。西城樹里だ。よろしく」

「菅谷明里です。こちらこそ」

「浅倉透でーす。よろしく」

「知ってるよ」

「俺は浅口円里でーす。しくよろ」

「何で言い直したお前？」

「じゃあ……菅谷透です。夜露死苦う」

「何で苗字変わってんだ!!?」

「あー……じゃあ、浅倉明里でーす。よろよろ」

「お前まで変わったら意味ねーだろ！」

「樋口透と？」

「樋口明里でーす」

「ヨークシャーテリア」

「なんで犬の名前と円香の苗字が出てきた!!? ていうかなんで犬の名前もしつかりと

ハモるんだよ！」

なんだこいつら、本当に同一人物じゃねえの? と、勘繰るほどに息びつたりである。

そこで、ハツとして自分の左にいる少女に顔を向ける。今のバカ炸裂している会話を聞いたら、流石の果穂の憧れも消えてしまうのでは……と、思いながら横を見ると、案の定苦笑いを浮かべていた。

「え、えっと……仲良しなんですわね……あはは」

「こう見えて義姉弟だから」

「えっ!?? そ、そうなんですわ!??」

軽く引いていたはずの果穂は、一気に食いついた。信じている、姉弟であることを。冗談に決まってるんだろ……と、いつもの樹里なら言うところだが、恋人であることを隠しているあたり、ここは乗っておくのが正解かもしれない。

「ああ、らしいぞ。確か、中学からだっけ?」

「そうそう。あと円香も入れて三人でね」

「先生に一番、目つけられてたもんね」

こいつら、嘘を隠すつもりがあるのだろうか? いや、ないのだろう。本当に呼ばれていたのだろうか、円香も入れて3人義姉弟は無理がある。

「そ、そうなんですわね〜!」

「とりあえず座つたら?」

「つ、す、すまん」

言われて、そこは素直に従って座らせてもらう。二人でバカ姉弟の向かいに腰を下ろした。

しかし……驚いた。まさか、夏葉の言っていた通り、ここまで息びつたりな生写しだ

とは。このカップル、仲良いのは結構だが、割と周りに色々なものをぶち撒けてくれるものだった。

これは確かに気合い入れないといけない……と、同時に、これちよつと良いお土産じゃ割に合わねえぞ夏葉……と、強く思う。

とりあえず、このまま義姉弟トークに花を咲かせたら、話はどんどん逸れるし長くなる。軌道修正を試みた。

「なあ、果穂。それより、菅谷さんに……」

「あ、菅谷で良いですよ」

「そうそう、同じ年だから」

「え、そうなん？ てことは、西城さんも大学生？」

「そう。今年で19歳」

「で、去年受験生？」

「そう。JKからJDになったばかり」

「その中身のない確認やめろ！」

「さつきからツツコむな、すごく……マドちゃんタイプか」

「いやいや、円香も私達の前でしかあんまツツコミ入れないから。小糸ちゃんタイプ体格的にも」

「おいコラ透！ 喧嘩売ってんのか!?!？」

何なのか、この二人の絶妙なコンビネーションは。円香と二人で付き合っていると聞いたが、あの子はこの二人を一人で捌いている？ トリオで芸人目指したらいかげでしようか、と勧めたくなるレベルである。

そんな時だった。隣から少しだけ切ない声が聞こえる。

「良いなあ……樹里ちゃん、ツツコミ上手くて……」

「っ……………」

そこでハツとする。ダメだ、果穂を置いてけぼりにしては。というか、ツツコミを入れたら思う壺だ。

「果穂、菅谷に何か質問とかないのか？」

「はっ……………そ、そうでした……………」

「そうだよ、小宮さん。元々、俺は小宮さんに会いに来たんだから。何か、話したい事とかある？」

その辺はちゃんとしてるんだな……と、少し見直しつつも、樹里は何も言わずに明里を見る。

果穂は少し緊張気味になりながらも、明里に思い切って聞いた。

「あ、あのっ……………明里さん！」

「はいはい」

「彼女はいますか？」

いきなり爆弾ぶつ込んだ！ と、樹里は啞然とした。まさかの恋人関係を隠したことが裏目に出る一撃。お陰で透の顔色も一気に豹変する。

「なんで？」

「い、いえ……その、ファンとして気になると言いますか……」

「いるよ。普通に」

「っ、や、やっぱりそうなんです……」

少しシヨックそうだ。まあ別にガチ恋とかではないのだろうけど……やはり、好きな芸能人に恋人がいたらシヨックなものなのだろうか？ と、樹里は気まずそうに目を逸らす。

「どんな方なんですか？ 彼女さん」

「え？ あ、あ……」

隣隣、とは言えないので、樹里は黙っておく。というか、どっちを紹介するのだろうか？ まさか両方とは言わないと思うが……。

「アホでキチツとしててクールに見えて何も考えてなくて生活力がある人、かな……？」
合体させた！ と、樹里は笑いそうになって手で口を抑える。と言うか、何だそのよ

くわからない人。果穂もピンと来てない様子で眉間に皺を寄せている。

そんな中、隣の透が頬をギギギッと抓る。

「ちよつと、何で私の方だけ悪口ばっか？」

「ひ、ひひふはから！」

「事実じゃないから」

いや事実だろ、と、樹里は思っても口にしない。コーヒーを一口、口に含んで目を逸らした。

その間に、果穂がまた新たに質問をする。

「で、では、見た目はどんな方なんですか？」

「え、み、見た目？」

また困る質問だ。何せ、透と円香は別に似ていない。空気は似ているかもしれないが、見た目は全然だ。クール、の方向性も違う。

その問いに対して明里は……顎に手を当てたまま何とか捻り出す。

「か、髪型は……」

「は、はい……！」

「右が茶髪で左がグレー」

まさかの天使と悪魔が混在！ と、また笑いを噛み殺した。どんなセンスをしていた

らそんな髪型になるのか。パンクロッカーか！ とツツコミが浮かぶ。
透も笑いを堪えている。

「で、顔は……パッチリした透き通る瞳の下に、泣きぼくろがひとつあって……」

また融合させて……！ と、笑いを堪える樹里と透。

「で……身長は、俺の肩くらいまで……あんまり太つてない感じ？」

「な、なるほど……」

結局、最後まで融合させて終わってしまった。こいつ、こういうところ愛おしいな……と、樹里は少し油断してしまった。そのため、果穂が新たな爆弾を投下したのを止められなかった。

「で、では……その……」

「何？」

「え……えつちなことは、したんですか……？」

「「ぶふおっ！」」

果穂は、思春期に入りたてだった。

「お、おい！ 何聞いてんだ果穂！ 失礼極まりないだろうが……？」

「え、そ、そうなんですか？ クラスの子達……『うちの兄貴、彼女とよくやってるらしいぜ』みたいな話を平気でしてるんですが……」

これだから、性的な知識が倫理的な面でも足りない中坊は……と、樹里は焦る。これじゃ、むしろ嫌われるだろ……と、思いながら明里の方を見ると、明里は顔を赤くしながら目を逸らし、透は心底、参った様子で顔に手を当てている。

え、まさか……と、樹里は冷や汗をかく。高二の春から付き合っていて……そして、彼女が二人もいながら……まだシていない……？ と。

とりあえず、と樹里は果穂に声を掛けた。

「そういう質問はやめろ。それ、菅谷だけじゃなくて、私ら放クラのメンバーにも失礼だ」

「ウツ……そ、そうなんだ……ごめんなさい」

「気にしてないよ」

××それだけ話して、とりあえず樹里は後で夏葉に一週間、飯を奢らせる事を誓った。

××さて、その後は仮面ライダーの話で盛り上がり、公園で変身シーンを練習したり、とエンジョイして解散した。数日後、夏葉から「財布を空にさせられたんだけど」と苦情が入った。

まあそんな話はさておき、明里は透と帰宅。円香のサブライズのために、ドンキで買い物をしていった。

「……えっちなことはしたんですか？」

「ブフォツ！」

商品を選んでいる中、突如隣からそんな声が聞こえてきて吹き出してしまった。

「な、なんだよ急に……！」

「いやー？ そういえば、まだシてないなーって」

「……そ、それはそうだけど……」

「いつでも良いから。私と円香は」

「か、からかうなっつーの……！」

そう言っつて、明里は適当なはずらアイテムを探す。悩みながら、明里は顎に手を当てて店の奥に進んだ。

ドンキには、様々なものが売っている。それは、パーティグッズのようなみんなで楽しむためのものから……大人が楽しむためのものまで。

そして、その辺の知識が疎い明里は、一人でいつの間にかエログッズコーナーに迷い込んでしまっていることに気が付かなかった。

「……あつ」

そこで、声を漏らして、一つのアイテムを手に取る。それを持って、透を探しに戻った。

「おーい、とおるん！」

「? 何？」

「面白いもの見つけた！」

そう言いながら明里が持って来たのは、手錠だった。

「……えっ」

「これで、しちやおうぜ。拘束」

「……うん、面白いかもね」

この後、普通にビンタされた。

純粹悪という奴だろうか？

夏休み終盤となり、それに伴って成績表が送付される。当然、三人とも落とした課題などはなく、普通にフルで単位を取れた。

さて、次の単位何とるかーとか考える奴は考えるし、考えない奴は考えないこの季節、当たり前のように三人とも考えることは無かった。

「ただいまー」

明里が撮影を終えて帰ってきて、円香と透はビクツと猫のように耳を動かして身体を起こす。

だが、わざわざ迎えにはいかない。帰ってきたのを待ってわざわざ起きていると思われるのは、少し気恥ずかしいから……なんて思っている円香の横を、透がスイーッと通り過ぎた。

「おかえり、リカ」

「ただいま……疲れた」

「鞆、もううよ」

「ありがと。でも中にお弁当箱入ってるから、それだけ出しといて」

「うん」

そんな声が廊下から聞こえてくる。そういうところ……少し、透が羨ましい。いや、もう好きなことも知られているし自分は彼女なのだから、素直になれば良いのだが……なんか、やはりまだ恥ずかしいのは、自分の性格によるものなのか。

……でも、透が迎えに行ったのに自分が行かないのもちよつとアレなので、言い訳臭くコーヒーを飲んでいたマグカップの洗い物を始めた。「洗い物をしていたので迎えに行けませんでした」と誰かに弁明しているような行動だった。

「ただいま……」

「おかえり」

明里が疲れた様子の声を漏らして部屋に入ってくる。

「疲れてる?」

「うん、まあ……」

「シャワー浴びて来たら?」

「あー……うん。そうしようかな……」

本当にお疲れ気味のように。まあ、仮面ライダーは毎週やるし、その撮影も当然、毎週どころか週に2〜4回はある。

そのまま部屋から出ていく明里。その入れ替わりで、透がお弁当箱を持って出て来

た。

「あ、円香。はい、リカのお弁当箱」

「ありがとう」

ついでにお弁当箱も洗ってから手を軽く流しの上で払うと、軽く伸びをしながらため息をつく。なんか……自分は何しているんだか……と、ちよつとだけ自己嫌悪。

その円香に、透が声を掛けた。

「なんかすごい疲れてた、リカ」

「見れば分かる」

「やっぱり大変なのかな、仮面ライダー」

「炎天下だからでしょ。スタントとか全部、自分でやってるらしいし、疲れない方がおかしいから」

普通、そこまでやらないが、明里の実際の強さあつてのことだろう。最近はや家で筋トレをすることも増えてきた。

けど……心配は心配だ。これから学校も始まるし、温暖化なのかなんのか知らないが、10月も後半にならないと涼しさが増さない。

少しは気が休まると良いのだが……なんて思いながら、とりあえず作り置きしておいた夕食を温める。

すると、透が何か決心したように声を漏らした。

「よしっ」

「どうしたの？」

「明日、甘いもの作ろう」

「急に何？」

本当に。そういうことするのはバレンタインか明里の誕生日くらいだったのに。

「ほら、甘いものじゃん。疲れた時は」

「……そうだけど」

……透なりにあまり家事をしない分、明里に気を遣っているのかもしれない。

まあ……確かに何か最近の明里には労いが必要な気はする。

そうこうしていると、明里がリビングに戻ってきた。

「いやー、やつぱこの時期のシャワー最高だね」

言いながら部屋に入った明里は、軽く伸びをしながら元気な声を上げる。

「二人ともご飯食べた？」

「食べた。あんたのもある」

「いえーい」

話しながら机の上にお皿を置き、ご飯をよそって箸を渡した。

「はい」

「ありがとう」

明里は食事を始める。チンしたご飯なんて出来立てより美味しくないものなのに、幸せそうな顔で咀嚼していた。

「ん〜……美味しい。流石、マドちゃん」

「はいはいどうも」

「ねーリカ。何か食べたいものない？」

「え、今食べてるのに？」

透が口を挟んでくる。そうだ、明日甘いもの作ると言っていた。

「そうじゃなくて。明日、透が何か甘いもの作ってくれるって」

「ほんと？ 大丈夫？」

「ふふ、余裕」

「……マドちゃんも一緒に作るんだよね？」

「食べるのは私じゃないから」

「そんな?!？」

まあ手伝う予定ではあるし、なんなら自分も何か別のものを用意しようかと考えている。

「ふふ、二人とも超失礼」

透が少し拗ねたような声を漏らした。それを聞いて、円香と明里は顔を見合わせる。と、ふつと笑みを浮かべる。

「なら、日頃の行動を直して」

「砂糖と塩くらい間違えないようにしようね」

そんな話をしながら、三人でしばらく歓談しつつも、円香は明日のクッキーについて考える。せつかくだし、疲労回復効果のあるものを用意してあげなければ。

その日の夜。就寝しようとして明里が部屋に戻ったのを見計らい、円香は明里の部屋に入った。

なんか……最近ちよつと、明里と透がどんどん仲良くなっている気がしたから。元々、波長が合うのは明里と透の2人だったわけだが、でもやっぱり羨ましい。

……なので、夜這いではないが、ちよつと構って欲しかった。

「……リカ」

「？ あ、マドちゃん……どしたん？」

「疲れてるんじゃないの？」

「うん、まあね。でも全然平気」

嘘だ。帰ってきてからやたらと元気に振る舞っていたが、円香から見れば真逆であるようにしか見えない。

「ふーん、じゃあマツサージしなくて良いのね?」

「え……ま、マツサージ?」

「足と腰と肩、疲れてるんじゃない?」

誰にも言っていないが、明里が柔道をモチーフにした仮面ライダーに変身すると聞いてから、少しでも柔道のことを調べて、何処に負担が掛かるのかを調べておいた。特に意味はないが。

寝技込みならもつとあるのだろうが、まあそこまで地味な技をテレビでするとは思えなかった。そこは除外して調べたのだ。や、だから特に深い意味はないが。

凶星だったようで、仰向けになっていた明里はそのままうつ伏せになった。

「じゃあ……お願いします」

「疲れてないんじゃないの?」

「うつ……いい、意地悪言わないでよ……」

「素直にお願い出来ない自分を改めたら? ミスターツンデレ」

「え、それマドちゃんが言うの……?」

「……凝ってる」

「ぎにやにやにやにや！　せ、背骨をグリグリしないで！」

人には言つて良い言葉と悪い言葉があるだろうに……と、思いながら、手を離れたあと、改めて腰の上に馬乗りになった。

「どう？」

「んっ……気持ち良い……」

まずは肩から順番に掌で押していく。ぐりぐりぐりつと押すように振動させながら、少しずつ下に手を動かす。

「んっ……気持ち良っ……」

「変な声出さないで」

「え、出してなっ……んんっ、ひゃふっ!?？」

「出すなつて言つてんの」

じゃないと円香も変な気分になるため、脇の下に指を差し込んで黙らせた。

「でも……マドちゃんマツサージ上手だね。このまま寝ちやいそう……もしかして、調べたりしてた？」

「……別に。こういう時のために、素人が下手をして悪化しないように備えただけ」

「そっかー。まあ、アイドルだし、歌つて踊つてると怪我とか疲労溜まるだろうしねイダダダダダ！」

「寝てても良いよ」

「これ痛みによつて失神させる奴……!」

全く誰のためにやっているのか、一番分かつてほしい人に通じないのは本当に腹が立つ。

「……私が生活面で何か新しいことをしようとするの、リカと透のため以外にないから」

「……じゃあ、もしかして……」

「ちゃんと自覚して。ミスター鈍感」

「……そ、そつか……ごめん。ありがと。にへへ……」

「……」

その笑い方、癖ついているの？ と同年代の双子の姉を思い出して、ちよつとため息をつく。

「でも……じゃあ、俺もマドちゃんとおるんのために、何か新しいこと覚えないと」
「別にいい、そんな気負わなくて」

少なくとも、ここ数日はしばらく楽にして欲しい。いつも疲れて帰ってきているのを、頑張つて隠しているのだから。

「リカは……元気でいてくれればそれで良いから」

「……俺はマドちゃんとおるんの息子……?」

「ならむしろマッサージして」

「え……じゃ、しようか？」

「それはまた今度で」

「どっちなの……」

「労われては意味がないので、割とマジで結構だ。今度お願いしたい。」

「……ごめん、ほんとに……寝そう……」

「だから言ってるでしょ。寝てて良いって」

「じゃあ……おやすみ……」

「ん……お疲れ様」

そう囁くと同時に、明里はそのまま寝息を立て始めた。本当に疲れていたのだろうか。

……さて、マッサージすると言ったからには、円香も寝ている間であっても手を休めない。背中を終えて、次は腰回り。本当、こうして触る機会があると、当たり前ながら男の子と女の子の差を理解してしまう。

男の子の腰は、こんなにガッチリしているのか、と少し思う。

「……」

この下、お尻か、と無防備にうつ伏せで主張されているお尻を見る。男の子のお尻……これもまたえっちなだ。

「つ……」

と、ダメだ。ちよつとムラつとしては。自分は思春期か、と強く思いながら、とりあえず腰を終えて、太ももの付け根から念入りにマッサージをした。

翌朝、円香は劣情を抑えるために自室に移動して寝た……のだが、どうやら因果応報というものは本当にあるらしい。

「痛……」

「ふふ、辛そう。めっちゃ」

「……何笑ってんの殺すよホント」

「わお、怖っ」

生理痛である。それも、激痛。頭痛と吐き気と節々の痛みがフルセットで襲いかかってくる。

「じゃあ……当たり前かもしれないけど、お菓子作りは？」

「……一人で作って」

「え、リカと一緒にじゃダメ？」

「リカを労うためのお菓子にリカを巻き込んでどうするの……」

「あれ、働くもの食うべからず」

「なんで働いてるのに食べちゃ……あつ」

やばい……トイレに行かなきゃ……と、焦りが浮かぶが……何よりまずいのは、現状を明里に知られること。女の子的に嫌だ、というのもあるが、何より心配かけたくない。

「……透」

「何？」

「リカとクツキー作って良いから、ちよつと動き止めてきて」

「え……言わないの？ リカに」

「言わない」

「じゃあなんて言うの？」

「……小糸の家って言って」

幸い、明里はまだ寝ている。バカだし全然、騙せるだろう。

「まあ良いけど……怒るかもよ？ リカ」

「怒らないでしょ。私達の身に何か起こらない限り」

「だと良いけど……」

「じゃあ、そういうことで……とりあえずトイレ」

それだけ話して、部屋の扉を開けてトイレに向かった。ダメだ……ちよつとお腹が痛過ぎる。この歳まで性欲が何度も昂ぶっているのに処女を貫いている所為だろうか？

いや、関係ないと思うけど、何れにしてもかなり辛かった。

それから一時間後ほど。ようやく明里は目を覚ました。身体が少し軽くなってる。マッサージしてもらったからだろうか？ 本当に円香には昔から、世話になりっぱなしだ。

だから、あんまり疲れてる姿は見せられないし、そろそろ起きないといけない。

「……ん〜っし、起きるかあ」

身体を起こし、肩と首を腰と足を伸ばしながら歩いて部屋を出る。もう秋とはいえ、残暑の時期の朝は寝汗をかくので、まずシャワーである。

軽く頭から流してさっさと風呂から出て、ドライヤーをかけてリビングに出る。

「はよーっ……て、あれ誰もいないのん？」

「いるよー」

「あ、とおるん。どうしたの台所で。そこ遊ぶところじゃないよ？」

「ビシタしたい」

「えっ」

怖っ、と狼狽えるが、透は明里に目も向けずに手を動かす。

「マドちゃんはっ？」

「今部屋」

「？ まだ寝てるの？」

「ついててあげて」

「……風邪でも引いてるの？」

「それより酷いから、ついててあげて」

「わ、分かった」

すぐに明里は円香の部屋に向かう。扉を開けると、目に飛び込んできたのは……丸まって眠っている円香が目に入った。

「マドちゃん？」

「……」

苦しそうな感じはない。寝ているからだろうか？ でも、お腹を押さえて眠っている。

ついててあげて……というのとは、こういうことか、と明里は理解して、とりあえず手を握ってあげながら円香の顔を眺めた。

眠っている時は必ず取れる眉間の皺、目の下の泣きぼくろ、形の良い唇……性格と面倒見が良い上に美人……そんな子が2人も自分について来てくれるなんて、やはり幸せ者だ。

だからこそ……具合が悪いなら起こしてでも言つて欲しかったとこあるのだが……
まあ、今はいい。

頬に手を当てて撫でる。汗ばんだ額が目に入り、持つているハンカチで拭いてあげた。

「んっ……」

そんな中、円香から声が漏れた。やばい、起こしちゃうかも、と思い、手を引つ込める。すぐに寝息を漏らし始めた為、ほっと胸を撫で下ろして、そのまま円香の寝顔を眺めた。

「……あ、目ヤニ」

こうして寝顔を眺めていると、こんなに完璧な子でも人間なんだな、なんて思う事が多々ある。当然、顔のパーツはどの人間も同じだから。目があつて、まつ毛があつて眉毛もあつて、鼻と口があつて……そして、寒くなれば鼻水は出るし、力が抜ければ口から涎が垂れるし、寝起きは目ヤニが出来る。

……拭いてあげた方が良さだろうか？ いや、起こしてしまうかもしれないし、やめておこう。

そう思つてそのまま全く飽きることなく、ベッドの上に腕を枕にあごを置いて、円香の寝顔をのんびり眺めている時だった。

ふと円香の瞼が開いた。

「んっ…………んっ!!?」

「あ、起きた」

急に顔を真っ赤にする円香。目の前に明里の顔面があって驚いたのだろう。驚愕のあまり、頭突きを額にかまされてしまった。

「いつづあっ…………!!?」

「ぐっ…………お…………!」

自分だけでなく円香にもダメージは入り、ノックバック。そして、急な激しい運動が祟ったのか、お腹を押さえて再び丸くなった。

「だ、大丈夫？ 急性胃腸炎…………?」

「うるさ…………てか、なんでここに…………!」

「ん、とおるんが面倒見てあげてって」

「あのバカ…………!」

奥歯を噛み締める円香だが、その反応で理解した。

「てことは…………俺に具合悪いの内緒にしたかったの?」

「…………別にいいでしょ」

「良くない」

そう言うのは困る。円香だって、自分が色々隠してたら怒る癖に。とはいえ、まあ自分まで怒っても仕方ないし、円香の腕を掴みつつ、自分も枕元に座り、引き上げながら胸元に頭を置かせた。

「で、お腹以外に痛い所は？」

「……なんでお腹って分かるの」

「ずっとお腹押さえてたし」

「……ていうか、透から何も聞いてないの？」

「うん。近くにいてあげてって言われただけ」

「……」

すると、円香は少し黙り込む。頬を赤らめたままどうしようか考え込むように目を閉じつつ、自分に体重をかけた。

「ん……生理」

「え？」

「生理痛……だから、言いたくなかった」

「……」

なるほど、と理解する。女性特有のそれは、かなりキツイものらしい。人によるらしいが、場合によっては頭痛、吐き気なども催したりする。

「…………ごめん」

「別にいい…………心配、かけさせたくなかったから」

「それはバカ。心配かけないでどうするの。同棲してて」

「…………痛っ」

「あ…………だ、大丈夫？」

「…………ごめん、きつい…………寝かせて」

「どうぞどうぞ」

話しながら、円香は身体を横にする。その円香の手を握りながら、明里は言った。

「ごめん、正直に言うとうと生理痛とか俺ないからどれだけ苦しいのかわからないけど…………

だから、なんでも言っつて。なんでもするから」

「…………ん」

そんな話をしながら、円香の頭を再び撫でた。ちょうど良いそのタイミングで、部屋に新たな来訪客。

「やつほー、二人とも。イチヤイチャしてる？」

「してない」

「クツキー作つたよ。朝ご飯まだだし、食べよ？」

「良いね」

「……透一人で？」

「生理の癖になめすぎ」

「……は？」

「ちよつ、やめてやめて落ち着いて」

明里が間に入る中、透は円香机に備えついている椅子を寄せ、円香の枕元に置くと、その上にクツキーを置いた。

「じゃーん」

その蓋の下から出てきたのは……香ばしい香りを漂わせるクツキーだった。

「おお……普通だ」

「……ん、良い香り」

「ふふ、むかつくわ。本当に」

「マドちゃん、食べれる？」

「あんま食欲ないけど……まあ」

「じゃ、朝ご飯にクツキーで」

話しながら、三人で食事を始めた。

×

二股も悪くないかも、なんて円香は改めて実感する。もう前々から似たようなことは

あつたが……まー助かる。何せ……自分は男の人にはなるべく言いたくないお願いも出来るから。

それ以外にも、家のことをやりながら自分の面倒も見てもらえるし、利点が多い。

何より……やっぱり、明里と透の三人でいられると、楽しい。我ながら、恋人と幼馴染、両方欲しいなんて、欲張りだ。

ずっと、ベッドの横で手を繋いでてくれる明里と、珍しく家のことをほとんど引き受けてくれて透が、今は自分の部屋にいてくれる現状を見て改めてそう思った。

「ブラックパンサー」

「アントニー」

「イカリス」

「スターロード」

「ドクター・ストレンジ」

「ジミー・ウー」

……このMCUウルトラしりとりが普通に耳障りだが。結構、メインキャラから一話限りの脇役までスラスラ出てきているのが腹立たしい。明里はともかく、透はそれを勉強に活かしていただきたい。

「はあ……うるさい」

「あ、お腹すいた？」

「ぶっ飛んだ話題」

「何か作ろうか？」

「食欲ないんだけど……」

「ダメ。食べないと治らないよ」

「いやこれ風邪じゃないから」

正直、今何かを食べれば戻してしまふ気がする。そういうのは、明里の前では避けたい。何せ、女の子としてもアイドルとしても恥ずかしいからだ。

「とおるん、こう言う時は食べなくて平気なもの？」

「え、わからん。私、ここまで酷くなったことないし」

「マジかー……じゃあ、ちよつと調べてみよう」

どうやら、どうしても何か食べさせるつもりらしい。気持ちはありがたいけど……でも、無理に食べると胃が受け付けない気もする。

「あ、あの……リカ」

「おお……マグネシウムを摂ると良いって」

「マグネット？」

「アークリアクターじゃん。やばっ」

「やめて。人をヒツピーみたいなきにしないで」

「あ、そうだ。若い時のダンブルドアとかスターク見てて思ったんだけど、俺って髭伸ばしたら少しはカッコ良くなるかな？」

「今のままで十分だからやめて」

「え……だ、ダメなの……？」

それだけはやめて欲しい。いや、髭男が嫌いとかではないが、そういうのは爽やかイケメンはやらない方が良く……いや、水〇ヒロのような爽やかなのに髭が似合うわけわからないタイプのイケメンもいるにはいるのだが。

いや、そんなことよりも

「ていうか……私、やっぱり食欲ないから……」

「大丈夫だよ、生姜とか大豆製品が良いらしいから、冷奴でも作るよ」

それなら最適解、とまあすぐに出てくるものだ。するつと入るし、大豆製品だし、上から生姜をすりおろして醤油をかけて食べるのは最高に美味しい。居酒屋のお通しで出て来そう。

「……まあ、それなら……」

「よし。とおるんは？ 何か食べる？」

「うーん……じゃあ、私は揚げ出し豆腐」

「お、良いねそれ。俺もそれ食べよう」

「……」

……こいつら、当てつけかよ、と思わないでもないものをチョイスしてくれたものだ。冷奴のレベルアップverのようなものである。別に良いけど。

「じゃ、作ってくるね」

「じゃ、私円香見てる」

「……別に平気。一緒に作ってきたら？」

「えー、でも大丈夫？」

「何が」

「急に吐きそうになったりとか……」

「平気だから。……私ばかりに構ってもらってるから、少しは二人でイチヤイチャしてて」

「……ん」

それだけ話して、明里と透は部屋を出ていった。

ふう、と一息漏らす。心なしか、お腹の痛みは少し引いた気がする。割と八つ当たりに近いことも言ってしまった気がしたが、二人とも気にした様子を見せなかった。

「…………ふう」

一息つく。騒がしかった部屋が静かになったが、ずっと騒がしいままなのは流石に堪えるから、たまにはちようど良い。

……そう思う反面、ちよつと申し訳ない気持ちが出てくる。昨日、疲れて帰ってきた明里に、思いつきり世話をかけさせてしまった。

なんか……自分のタイミングの悪さが嫌になる。何故、今日に限ってこんな強烈な生理痛に襲われるのか……もしかして、労うつもりでいながら、本当は明里に甘えたがつていた、と言うことだろうか？

確かに、ここ最近では明里の帰りは遅くなつてはいたが……だからといって、たまの休日くらい、休ませてあげべきだろうに……。

「…………ふう」

……ふと、お腹の痛みが増した気がした。というか、体調も悪くなつてきた。まずい、一人になつてからナイーブになつてしまった。

嘘でしょ、と自問自答する。一人になつたつて……まだ部屋を二人が出ていつてから数分なのに、もう体調に変化が出るくらい寂しくなつてる？　いつから自分はそんなかまつてちゃんになったのか。

「リカ…………あ」

ヤバい……吐きそう。吐き気どころじゃない。洗面器は用意していなかったの、慌てて口を手で押さえて立ち上がる。

ドアノブに手を掛けて部屋から出ようとしたが、間に合わない……と、膝をついた時だ。

「マドちゃん、呼んだ？」

「っ……りっ……うっ」

「え、嘘……！」

やばっ……と、口から出そうになった時だ。自分の口の下に、明里が両手を添えた。

慌てて避けようとしたが間に合わない。そのまま手の上に戻ってしまった。何も食べていないから、物は何もないが、液体が漏れてしまったが……それを、受け止められなかった。

「ふー……セーフ」

「っ……り、リカ……」

「呼ばれた気がしたんだけど……もしかしてこれ？」

「ち、違っ……」

吐瀉物をぶち撒けるために呼んだわけじゃない……と、弁明したいが、吐いてしまったのは事実だ。信じてもらえないどころか……そもそも、嫌われてもおかしくない所

だ。

謝らないと。

「ご、ごめつ……」

「まだ出そう？ スツキリするまで出しちやいな」

「つ……怒つてないの……？」

「？ なんで？」

「つ……」

「この人……何処まで器が広いのか、と、嘔吐したものをかけた身でありながら、頬が赤く染まる。

「大丈夫？」

「へ、いき……」

「生理痛つて大変だね。もうほとんど病気じゃんこれ」

「……」

「あー、ごめん。一応、トイレ行っておいで。俺これ洗面所に流してくるから」

「……あの、リカ……」

「いいよ、気にしないで。こう見えて、中二の時は動物園のヒヨウの体調不良を飼育委員より早く気がついて、檻に入って背中さすってたらゲロかまされたけど俺は吐かなかつ

たから」

「……そう」

それにはツツコミを入れる気力もない。……ダメだ、明里が来ただけで体調の悪さが引いていく。

「……ごめん。ありがとう」

「だからいいって。それより、安静にしておくように」

それだけ言うと、明里は洗面所に向かった。

その背中を眺めながら、自分はトイレに行く。多分、もう吐かないけど、一応トイレに行く。口の周りをトイレトペーパーで拭い、それを流す。

……まさか、ほんとに吐くとは……それも、明里の前で。生理痛ってほんとにキツイ……。

でも……改めて、明里という男を理解した気がする。あの男、自分と透の二人と付き合い、二人のわがままを聞いているからだろうか？ 懐が、かなり大きくなっている。

その事に、思わず円香は久方ぶりに初恋のように胸の奥を高鳴らせた。それと同時に……自分ももつと大きくなるうと思つた。少し一人になった程度で寂しさを感じている場合ではない。

もつと……少しくらい、寂しくても揺れない人にならないと……と、思いながら、お

礼を言うために洗面所の扉を開いた。

そこでは……。

「あっ」

「は？」

手に残った香りを、嗅いでいる馬鹿の姿が見えた。

「ち、違うのマドちゃん！　こんな機会、滅多にないから、ちよつと香りを感じてみたくて……！」

「……」

……完全に純粹な人間なんていない。童貞も拗らせれば歪むんだな、と思いながら、とりあえず無言で寝室に戻った。

酒に強くなるより、飲み方を覚えろ。

大学生活が始まり、夏休みを終えた大学生はひとつ、大人になる……というより、大人になった気になる経験をする。

それは……飲酒、あるいは喫煙である。子供のうちに禁止されていた事をする事で、大人になったと錯覚する……まあ子供みたいな事だ。

それは、夏休み中だけでなく夏休み明けにでもあり得る可能性であつて。

「あ、リカー」

「あ、とおるん」

大学が再開して、そろそろ帰る時間。円香はお仕事でいないわけだが、透はいるので明里を待っている、やつてきたので声をかけた……が、明里は珍しく複数人と一緒だ。

「ごめん、俺今日飲み会行く」

「え、ヤバくない？ 円香にバレたら」

「大丈夫、飲まないから。酒」

まあそれなら良いと思うけど……でも、せつかく二人きりの時間になると思ったのになー……と、少ししよんぼりしてしまう。

その透の頭に、明里は手を置いた。

「ごめんね。今度、時間作るから」

「……明日っ」

「了解。じゃあ……ボウリングでも行く？」

そのセリフに無言で頷いた。キスしたい所だけ……円香にも迷惑が掛かるかもしれない我慢。

「菅谷ー、そろそろ行くぞー」

「あ、うん。じゃあ、とおるん。日付回るまでには帰るから」

「ん」

それだけ話して、明里は他のメンバーと一緒に立ち去ってしまった。まあ、大丈夫。一晩くらい。さらに、男同士での飲みっぱいし……と、思っつてその背中を見ると、後ろの方に女性陣が控えているのが見えた。

「は？ 男女混合の飲み会？ それ合コンでは？ と、一気にイラツとした。

「待って」

「え？」

声を掛けると、明里は足を止める。

「行く」

「え？」

「私も参加する」

「いや、なんで？」

「いいから」

×そんなわけで、二人で飲み会に参加した。

×
「で、潰れたのその子？」

「……ごめん。俺がよく見てなかったから」

明里は宣言通り酒は飲まなかったが、透はハイボールを「何これ、ボールのジューズ？」とジューズと勘違いして一杯半飲んで潰れた。机の上に涎を垂らしながら爆睡していて、他のメンバーも割と引いている。

「俺帰るね……とおるん、送って帰らないとだし」

「お、おう……」

彼氏彼女であることはバレていないが、もう大学で既に「三馬鹿姉弟」の通り名が通っており、それなりに親しいことはバレている。

明里は財布から一万円札を抜くと、今回の幹事に手渡した。

「これ、俺とおるんのお金。お釣りのいいから」

「え、いや貰いすぎだつて。まだ飲み始めて一時間経つてねーぞ」

「迷惑料も込みだから。ホントごめんね、いきなり参加するつて言つて即潰れて」

「いやお前が謝らんでも……」

いや、謝るしかないのだ。だつて自分の彼女のことだし。とりあえず、そのまま透をおんぶしてお店を出た。

しかし……と、少し半眼になる。この後、絶対に円香に怒られる……。ちゃんと周りを見ていた。無理に飲ませようとする奴がいないか、心配なのはそこだけだから。まさか本人から酒を飲むとは思わなかつた。

「……はあ、やつちやつたなあ……」

ちなみに、透は背中ではいびきをかいている。

「ガーゴーガーゴー……!」

「何で酒飲むといびきが変わるのかな……?」

少し引いたような声音を漏らしつつ、帰り道を歩く。こうして透をおんぶして歩くのは割と中学からの恒例行事になっていたりするが、お陰で透の身体の成長には敏感になつてしまった。身長が伸びた、という意味で「重くなつた?」と聞いて怒られたのは一度や二度じゃないから。

でも……こんなに風情がないいびきを聴きながらおんぶをするハメになつたのは初

めてだった。

「……なんか、身体は成長してても、中身はほとんど成長してないような……」
そんな眩きを漏らした直後だった。

「なあんだとおく？」

「げっ……お、起きてたの？」

「おきてちやわるいのかく！」

「わ、悪くないけど……」

「わらしだつて、すこしはしてるから。せいちよー！」

や、ヤバい。なんかすごく荒れてる……これが酒乱か……なんてカルチャーショックを受けている場合じゃない。

「わ、分かってるよ。してるよな、成長。家事、少しずつ覚えてきてるし……」

「なんね保護者目線のほめかたらー！」

「ちよつ、揺らさないで！」

ガックガックと身体を揺らされ、少し目が回りそうになる。

「わたしらつて……わたしらつて……せーちよーしてるからー！　いろいろ……いまちよつと思ひ出せないけど……しーてるーかーらー！」

「わ、わかつたわかつた！　してるよね、いつもとおるんに助けられます！」

「いつ」

「え？」

「いつなの」

……具体例を上げさせられるとは……いい、いつか……そんなの、言うまでもない。

「毎日だよ。とおるんからも、マドちゃんからも、いつも一緒にいてくれてるだけで、モデルも勉強も家事も頑張れるんだから」

本音だ。物理的なものではない。一緒にいるだけで元気が出る、というのは本当にあるのだ。多少、嫌なことがあっても、透や円香の顔を思い出すだけで「ま、いつか」と思えるのだ。こちらの殺意や苛立ちを消してくれる働きを持つ……のだが。

「は？」

「え？」

「知ってるから。そんなの、こどもをこまかすための方便だつてー!」

「い、いやいや! そんなことないから……!」

「どうせつ……ひぐつ、ぐすつ……わたしなんへ……わたしなんへ……リカにもまどかにも役に立ってない、お荷物なんだああああ……!」

「ちよおつ!?! な、何で泣くの何で泣くの何で泣くの!?!」

「ずびびびび!」

「えっ、今背中で鼻かんだ？」

いや、背中なんかよりも透だ。泣かせてしまった、いや自分の所為かは分からんけど……いや、自分の所為だ。何に助かっているか、目に見える実績をあげるべきだった。

「ううっ……ぐしゅっ……わたしなんか、わたしなんか……」

「と、とおるん……落ち着いて……」

どうしよう、酔っ払いのあやし方とか分からない……親に聞いた方が……というか、事前に聞くべきだったか。

何にしても、何とか落ち着かせてあげないと。実際に役に立っているところを挙げるのが吉……と見るべきだろう。

落ち着いて深呼吸してから、透に明里は伝わるように告げた。

「とおるん……落ち着いて。とおるんは、目に見えることでも役に立ってるよ。俺とマドちゃんが疲れて朝遅く起きちゃった時、いつも早く起きてとおるんがゴミ捨てとか朝ご飯とか作ってくれてるでしょ」

「……」

「それ以外にも、とおるんはいつも帰ってきたら、玄関まで出迎えてくれる。俺とかマドちゃんが愚痴ったら、毎回黙って聞いてくれる。遊びに行くの誘ってくれるのも、とおるんが一番多いし、それに……」

と、言っている時だった。

「うっ……」

「う？」

「うええええええ……」

「は？」

おんぶしている肩の真横から、モロモロモロモロつとお昼に食べたと思われるうどんがグロテスクな姿となって流れ落ちた。服は、犠牲になったのだ。

「……え」

「ゆ、ゆれる……きもちわるい……」

「……」

……まあ、飲酒による嘔吐は無い話ではないが、とりあえず家に連れ帰って適切な処置をしてあげなくては。

「とおるん、大丈夫？」

「まだ出そう……」

「あー……」

マジか、と辺りを見回す。公園が目に入った。ちょうど良いので、中に入って公衆便所に入った。男女共用の個室が一個しかないのは幸いだ。入っても問題ない。

「(こ)便器。背中摩るから、満足いくまで出しな」
「う、うん……おええ……」

背中を摩つてあげていると、スマホがポケットで震えたので見下ろす。円香からチェインが来ていた。

菅谷円香 『飲み会了解。楽しんで来て』

菅谷円香 『私は早めに撮影終わったから、帰つてご飯家で食べてるね』

菅谷円香 『一人で』

……すぐく拗ねてる、と少し冷や汗を浮かべつつも、今から帰るのなら電話でれるだろう。電話をかけた。

「あーもしもし、マドちゃん？」

『そう。飲み会の最中に電話してくれてご苦勞様。楽しんでおいで』

「いやもう出て今公園」

『は？ なんで』

「おえええ………」

『……何今の』

ほんと、間の悪さは天下一品である。それに、割と話している場合じゃないし……いや、ここうなったら言うしかないだろう。

「……とおるんがハイボールとジュース間違えて飲んで吐いてる」
『……バカなの?』

「ボールジュースと間違えてた。ねえ、ボールジュースって何?」
『知らない』

はあ……と、ため息をつかれてしまったが、仕方ない。

「ごめんね。俺がちゃんと見てなかったから」

『ん。すぐ帰るから』

「俺はおるんが落ち着いてから戻るよ。晩御飯作っておくね」

『……大丈夫?』

「平気」

「げえええええ……」

『大丈夫?』

「俺は大丈夫、俺は」

服は吐瀉物に塗れたわけだが、自分の服より大変なのは透だろう。仮にもJDが戻しているのだから。

とりあえず、透が満足するまで背中をさすりながら……ふと、クンクンと鼻を動かす。当たり前前だけど、円香と透では吐瀉物の香りが全然違う。

××
 「た××
 だいま」

「あ、おかえりなさい」

円香が帰宅すると、割とひどい臭いがした。自分も最近、吐き出してしまった吐瀉物の香り。

公園で吐いてきたんじゃないの？ と思ったのも束の間、玄関で目に入ったのは、ゴミ袋。白いビニール袋とはいえ中が透けて見えていて、その中に入っている洋服に吐瀉物らしきものがついていた。

顔を出した明里の服は、パジャマだし、多分これ明里の洋服なのだろう。

「お疲れ様、マドちゃん」

「そつちこそ」

「透は？」

「しじみの味噌汁飲まして寝かせた……けど、あんま眠れてないっぽい……」

「リーカー！ 頭痛いく……！」

「ああ……はいはい、待ってて」

なんか……大変そうだ。酔っ払いの始末なんて慣れていないのだろう。気持ちは分かる。

「何か手伝う？」

「大丈夫。シャワー浴びておいで。ご飯出来てるから」

「……………」

とのことで、円香はシャワーを浴びに行く。詳しい話は後で聞くとして、お言葉に甘えて汗を流した。

明里が同じ建物の中にいるのに裸になることにもいい加減慣れてきて、ゆつくりと汗を流す。

全身をゆつくり洗い流した後、バスルームから出て身体を拭いてドライヤーをかけて……………など色々な処置を終えて洗面所を出て、リビングに入った。

「お待たせ」

「うん。晩御飯、用意出来るから食べてて」

「リーカー……………かわいい彼女があたまいたいって唸ってるんだぞー！」

「はいはい……………」

「……………」

頭痛い、酔いは覚めてない、吐き気は催してる……………なんか、散々な症状が出ている様子だ。

「透、大丈夫？」

「あー……まどかだあ……」

「はいはい。まど……んっ!!?」

「え」

キスされた。透に。突然の行動に、円香どころか明里もギョツとしている。

「わ……す、すごいもん見ちゃった……」

「っ……ち、ちよつと……!! 何して……!!?」

「まどかはどうおもう……?」

「はあ……?」

慌てて引き剥がすと、透はウルウルした瞳を自分に向けている。

「……わたし、たつてない? 役に……」

「そ、そんなことないけど……いや、そこじゃなくてなんでキスし……!」

「キスしたら……役にたてる……?」

「何の話……ちよつと、リカ……!」

「好きな子同士のキスって……すごい……もっかい見たい……」

「は? ビンタするよ」

「まどか……リクエスト……」

「ちよつ……や、やめっ……」

「こ、こいつ力強い……！」と、円香は透に両腕を掴まれ、押し倒される。そこで、ようやく明里がハツとして止めに入ってくれた。

「ちよおつ……と、とおるんストップストップ……！」

「なんれ……？」

「はあ、はあ……な、何なの一体……！」

ダメだ、透に酒を飲ませたら危険だ。……いや、別に透とキスするのが嫌とかではなかったが……まあ良い。

というか、透に酒を飲ませてこれなら、明里に飲ませたらもつとマズいんじや……。

「とおるん。もう寝よう」

「えー……なんえ……？」

「眠れるまで、手を繋いでてあげるから」

「いえーい……ぐー」

とこのことで、寝室に明里が透を送り届けるのを、円香はのんびりと眺めた。

×

「で、言い訳は？」

「あんまり記憶にないんだけど……」

「は？」

「ごめんなさい……………」

翌日、透は円香に正座させられていた。

「あの……………まだ頭痛いんだけど……………」

「自業自得でしょ」

「そ、そうなの……………」

そんな事言われても、本当に覚えていない。女の子もいる飲み会に明里が参加するつて言うから、邪魔しにいって……………ポールジューズを飲んでたら、なんか美味しくて止まらなくて……………そこから先の記憶はない。

「そもそも、メニニュー見たら分かるでしょ。どれが酒かなんて」

「いや、意外と分からなくて……………全然、なかったから。興味」

メニニュー表に他にあったのは、カシスオレンジだのジントニックだの何だのと、割と名前の響きだけ美味しそうなものが多かった。

「……………でも、迷惑かけたことには変わりないんだから。特に、リカには」

「そうなの？」

「リカの服、嘔吐した物で汚れて捨てるハメになったんだから、その辺は謝りなさい」

「あ……………そ、そうなんだ……………」

それは……………確かに謝らないといけないかも……………。というか、明里はどこに居るのだろ

うか？

「リカは？」

「寝てる。昨日、相当お疲れみたいだったから」

「……ほんとに謝らないといけないヤツじゃん」

「は？ 最初からそうなんですけど？」

「……もしかして、怒ってる？」

「当たり前でしょ……飲酒して彼氏に嘔吐して強引にキスされて、怒らないと思う？」

「キスはいつものことじゃない？」

「……私がされたんだけど」

「え、うそ……」

思ったほど嫌じゃなかった……とは言えないし言わない。癪だから。

すると、透は何故か少し嬉しそうな表情を浮かべる。

「そうなんだ……じゃあ、する？ もっかい」

「反省って言葉知ってる？」

「あーうそうそ。めんごめんご」

何にしても……こんな時間まで明里が寝ているのは珍しいし、本当に疲れているのだらう。

「後で謝っておくね」

「分かれれば良い。……あと、当たり前だけどお酒禁止だから」

「飲まないよ。美味しかったけど」

「……どうしても飲みたかったら、私が酔っ払いの対処方法を覚えてからにして」

「いえーい」

やったぜーと思いつつも、だ。今後から気をつけるのは当たり前として、実際お酒の名前とかは覚えておいた方が良いかもしれない。しれつと飲ませようとしてくる連中とかいるかもしれないし、それが学校の相手なら「これお酒？」と聞いた上で断れるが、業界人の接待とかなら、近くにプロデューサーとかがいないと厳しい。

「円香」

「何？」

「お酒の勉強しておかない？」

「……は？」

「いや、万が一『これほんとジュースだから』みたいな感じで絡まれた時のために」

「……」

言うところ「割とアリかも」と言うように円香は顎に手を当てる。実際、高校とかで化粧とかは禁止されているが、それは大学に行っても教えてもらえないし、社会に出た時点

で覚えていないと非常識扱いされるもの。

それは、酒も同じだろう。世の中、教えてもらえないことの方が大事だったりするのだ。

自分達も、二十歳になったら勉強する前から知ってる前提で偉い人との飲み会に連れていかれるかもしれない。

「……ほんとに飲まないから。勉強するだけね」

「うえーい」

とりあえず、酒の種類だけでも……と、思っていると、ちょうど良いタイミングで明里が起きてきた。

「ほはよ〜……」

大きめのTシャツが横に逸れて、肩と鎖骨が露出している明里。寝起きでそのまま部屋に来た感じだ。酒を飲んでいたら危ないかもしれない。

「酒封印の理由、もう一つ追加ね」

「うん、この無防備なタコスケを、酔った状態で見たくない」

「俺シャワー浴びてくる……」

×××それだけ言って、明里は部屋を出ていった。

さて、お酒の勉強。今日は三人とも休みなので、とりあえず早速それを試すことにした。

「で、お酒飲むの？」

「飲まない。調べるだけ」

「あそう」

明里の目も覚めたし、とりあえず今日のことを話してみると、明里は割とノリノリだった。まあ、お酒に少しは興味があつたのだろうが……でも、この人絶対に酒弱い。

円香にとっては不安しかなかった。

「でも、飲まないで勉強になんの？」

「味を学ぶわけじゃないから。名前と種類だけ」

「ふーん……俺、種類くらいなら詳しいよ。父ちゃんと母ちゃんが酒好きだし」

それを聞いて、思わず円香は目を丸くしてしまった。意外だったから。

「その俺が言うけど……酒の勉強なんていらなと思うよ」

「はあ？」

「なんでー？」

「二人がそれぞれ二十歳になった時、まず最初に飲みに行くのはこの三人が一緒の時だから」

「……」

「……」

「その時に、俺が教えてあげられれば問題ないでしょ？」

本当にずるい、この男……そういうことをしれつと……。いや、もういいけど。

「……そう」

「ふふ、来年楽しみ。めっちゃ」

「俺の誕生日だけ再来年かー。長いなー」

「もつと早く産まれればよかったのに」

「そんなにお母さんのお腹の中、居心地良かった？」

「まーたそうやってマドちゃんに憎まれ口叩いちやつてー」

「円香はこう見えてかまちよだから。仕方ないよ」

「分かった、あんたらお昼ご飯抜きね」

「嘘嘘」

まあ、何にしてもそれなら今日は普通に休みである。さて、せっかくなのだしどこかで遊びたいかもしれない。

「今日、どうする？」

「どうしよつか」

「じゃあ、リカの洋服買いに行こうよ。奢るから」

提案したのは透だった。そういえば、昨日一番被害にあったと思われるのは明里だし、それもアリかもしれない。

それを理解してか、明里はすぐに首を横に振った。

「え、いやいいよ別に。とおるんこそ辛かったでしょ？ 思いつき戻しちゃって」

「いいから。買わせて」

透にしては強い語気で言われ、明里は少しギョツとしているが、円香には分かる。思ったより、透は申し訳ないと思っっているのだろう。

「……………うん。行こっか、買いに」

なので、円香も口を挟んだ。……………同じ様に嘔吐を受け止めてもらった身として、お礼をしたいた気持ちはよくわかるから。

「もう、マドちゃんまで……………じゃあ、俺からも何か二人に……………」

「いいから」

「早いな……………」

なんでこちらが奢られないといけないのか。生物好きが祟っているのか、この男の異常な心の広さには、甘え過ぎるとダメになりそう。

まあ、何にしても明里に金も手間もかけさせるわけにはいかない。出掛ける支度をし

ながら、透が明里に声を掛けた。

「で、リカ。どんな服が欲しい?」

『『昆虫す〇いぜ!』の衣装!』

「言つたな?」

「着てよ?」

「良いの?!?」

「……ごめんウソ」

「だからそれを選ぶのやめてお願い」

一斉に止めた。それでデートとかに行くことになったら最悪だ。普通は行かないが、

あの男の場合は分からない。

「でも……俺が欲しい服か……」

「モデルでしょ?」

「なんかあるでしょ」

「うーん……でも、大抵は事務所の人がくれたりするからなあ」

「え、そうなの?」

何だろうそれ。モデル特権?

「そうなんだよ。特に女の人が見場のリーダーの時に」

「は？」

「私達以外の女の人からプレゼントもらってたの？」

「いや、プレゼントじゃなくて報酬……」

「うるさい」

「それ全部出して。全部捨てるから」

「捨てないで!!？」

「こうなったら、もう二人のセンスで明里に似合うものを選んだ上でプレゼントするしかない。」

「……よし、行こう」

「うん。早く行こう」

「お、落ち着いて行きたいな……」

×そのまま明里を引き摺って出掛けた。

×

×これ、お礼のプレゼントじゃなかったっけ……？ と、明里は冷や汗をかいてしまう。

「リカ、次これ着て」

「下にこれ履いて」

「あ、これも着て一緒に」

「良いねそれ、円香」

と、まあ、好き放題に着せ替え人形にされていた。試着室の中で、円香と透が選んだ服を持って来ては着ている。

いや、別に構わない。自分も割と服装には気を使う方だから。でも、撮影の度にもらえたりしてしまつて、わざわざ自分で買う必要がなかったりしてしまつていた。

だから……正直、二人からプレゼントしてもらえるのは嬉しい。嬉しいけど……少し、圧が怖い。

「ふ、二人とも……そんな本気にならなくても……」

「黙つて」

「うるさい」

「早く着て」

「ちゃんとして」

「……は、はい……」

有無を言わさない……と、そのまま強引にきさせられてしまった。

これからに向けての秋コーデ。暑過ぎず、寒過ぎずの完璧なコーディネートだった。

「ど……どう？」

「うん……カッコ良い。見てくれだけは、裏稼業を営んでる大学生みたい」

「ね。只者じゃない感じするし、オーラもある。スタイリッシュかつシンプルな感じ」
……ほ、褒め過ぎだと思おう……と、頬が赤く染まったのだが……「けど」と円香が声を漏らす。

「リカの可愛さが出てない」

「ね。これじゃスタイリストさんが選んだ服と変わらない」

「もつと、リカの内面も出さないと……」

「真に似合っている、とは言えないよね」

「いや、そんなガチにならなくても……」

「うるさい」

「……」

ちよつと泣きそうになった。そんなに言わなくても……と、思ってしまう反面、でもそんなに本気になってもらえると少し嬉しかったり……。

「……リカはホントに大事なところわかってないよね」

「うん。バカすぎて困るといふか……」

そのまま二人はまた洋服を探しに行く。……なんか、少し何か企んでるように見えなくもないが……。

なんて思いながら、また二人が持って来てくれる洋服を待った。

さて、そのまましばらく待っていると、また持ってきてくれたのを着る……と、しばらく繰り返す。

でも……やはり、嬉しい。自分のためにこうして手を尽くしてくれる彼女が二人もいるのは。

「はい、次これ」

「あとこつちも」

すぐに戻ってきて、洋服を受け取った。それを手に取ると、明里は二人に笑みを浮かべた。

「……ありがとう、二人共。大好きだよ」

「……」

直後、二人とも真っ赤になった。あ、いつもお互いに言ったり言われたりしていることなのに、何故今だけそんな顔を赤くするのか……。

「どしたん？」

「き……急に何……」

「私も好きだよ……」

「時と場所を考えることも出来ないの？ ミスターたらし」

「キスしても良い？」

「あの……もう少し二人の意見を統一してくれない？　あとキスはもう少し後にして」
話しながら、また試着を続ける事になった。

まあでも……なんだかんだ、二人とも楽しそうにしてくれているし、良かった。

たまにはこんな休日も悪くないかも……と、思いながら着替えを終えてビツクリだ。

「ちよつと二人とも！　何でロングスカート?!?!」

「これ前にもやったと思うけど、何で引つ掛かるの?」

「流石に大学生にもなると似合わないね」

「やらせといて何その塩対応!」

そのまま割と遊ばれたが、洋服は五着買ってもらえた。

我がふり直すには人のふりを見る。

秋……それは、食欲の季節。大人になると、この季節の過ごしやすさ、というものをすごく理解できるようになる。

暑過ぎず、かと言って寒過ぎず……その分、気温に合わせてではなく、着たい服を着ることが出来る。

それと……まあ、下着姿のまま家の中を彷徨く二人の姿も無くなってくるし。何より、ちよつとの掃除で汗をアホみたいにかくこともなくなるのだ。

「ふうく……」

「お疲れ様」

今日は、家を三人で掃除していた。各々の部屋の片付けをした円香と明里は、そのままキツチン、バスルーム、廊下に玄関と掃除していく。

円香は、キツチンを終わらせてから、ついでに水をコップに注いで廊下の掃除を終えた明里に手渡した。

「ありがとう」

「別にいい。廊下、終わった？」

「うん。今」

綺麗になつてゐる……高校時代、円香が母親に叩き込まれたものを、そのまま明里に叩き込んだ清掃術が活きている。

「ふーん……まあまあじゃん」

「でしよー？」

あ、嬉しそう。可愛い、と思いながらも、それを表に出さないように円香は目をそらして続けた。

「それより、透は？」

「まだ部屋の掃除してゐるのかな？」

「部屋、見てみよつか」

「うん」

一人だけ、まず最初に各々で取りかかった寝室から出て来ていない。二人上下に並んで中を覗くと……二人とも半眼になった。何故なら……透は、服の山の中に埋もれ、足だけはみ出させて倒れていた。

「……何してんのあの子」

「知らない」

「ヘルプミー」

との事で、とりあえず二人とも中に入った。ていうか、部屋も全然片付いていないし、今まで何をやっていったのか気になるレベル。

「何してるわけ？」

「……落ちてる洋服片付けようと思つて、両手に抱えて歩いてたらなんか踏んでひっくり返つてそのままー」

「……」

アホか、と円香はジト目で透を睨む。まあ、そういうのこの子に求めていないとはいえ、自分と明里が必死こいて掃除をしている時にこいつは……と、普通に困る。

少し説教してやろうかと思つた時だ。明里が、その前に洗濯物を掘り返し始めてしまった。

「あーもー、何してるの？ ほら、起きて」

「おー、菅谷救助隊」

「遭難者を発見。ただちに救助に入りまーす」

洗濯物を透の上から退かし、手を握ると引き上げて押してあげながら抱きかかえた。

「遭難者一名、救助完了しましたー」

「救助されましたー」

「……じゃ、私リビングの掃除するから」

「うん。よろしくね。俺、少しとおるんのお手伝いするから」

「……………」

「……………」

まあ、この様子では確かに掃除が終わりそうにないし……仕方ないと言えば仕方ないのだが……。

……なんか、ああやって甘やかされるの、少し羨ましい、なんて思わないでもなくて。たまーに、こう……透の甘えている姿を見ると少し狡いなーって思ってしまう。

逆に……円香は、基本的に家の事なら明里以上に出来るから、頼るところか頼られる事の方が多いし……正直、こちらが出来ないことで明里に甘やかされる事はあまりない。

……でも、まあこの前、生理痛の時に散々、甘やかしてもらったし……またあれを望むのは姉二人が妹二人になってしまって、明里にとっても大変だろう。

×なので、少し我慢……と、決めて、とりあえず掃除に取り掛かった。

×「とおるん、これ全部まだ洗濯してない奴ってマジ……？」

「マジ」

朝のうちに着替えたけど、その日は外出なくて「これで洗濯するの勿体無いし明日も

着るかー」という服と、帰ってきてから着替えようと思ったけど、後でコンビニに行くからラフな服を着よう、と思ってたのに結局コンビニに行かず「これで洗濯するの（etc）」で溜まったものだ。翌日には忘れているから溜まってしまふのだ。

「じゃあ、今日のうちに洗濯機回さないとじゃん……俺、洗濯物を洗面所まで運ぶから、とおるんは他のもの片付けて」

「ラジャー」

返事をしておきながら、せつせと働く明里を眺めつつ、少しだけ透はため息が出る。あの酔っ払った日以来……なぜか、こうして世話ばかり焼かせてしまうことに少し、申し訳なさを感じてしまう。

なんか……さっきだって円香にはリビングの掃除を平然と任せられるのに、自分は部屋の掃除でさえ手伝おうとしてくれる……それが、なんかちよつと憎たらしい。自分にも、頼って欲しい……なんて、気まぐれに思ってしまった。

そんなわけで透は一度、部屋を出てリビングに向かった。

「円香ー」

「何?」

「交換しよ、ポジション」

「……何言ってるの?」

流石に通じなかった。というか、なんなら円香に部屋の掃除をしてもらって、透がりビングの掃除をする、という意味で捉えられてもおかしくない。

「いや、ほら。私が明日からやるから、家事。円香は何もしないでダラダラしてて」

「……」

あれ、思ったより怪訝な顔をされない……どころか、むしろ少し「ラッキー」みたいな顔をしている。無表情でも、幼なじみの自分にはわかる顔色だった。

「……良いけど、どうすんの？ 結局、リカに気を遣わせるだけかもよ」

「……あー」

勘は鈍いけど、流石にいきなりしつかり者と頭空っぽを入れ替え、演じたら流石に「この人達、急にどうしたんだろう」と気づかれるのは明白かもしれない。

そんな中、ふと思いつきがあったので、提案してみた。

「じゃあ、こういうのはどう？」

「却下」

「や、聞いてよ。メツチャ良いから」

「………何？」

××明日の作戦を説明した。

××

翌朝、綺麗になった家の中で、明里はうつすらと目を開ける。今日は11時から仮面ライダーになるので、そろそろ起きないといけない……と、思いながら体を起こそうとしたときだ。腕が持ち上がらない。と言うか、今更ながら胸の前あたりで誰かが寝ているのに気がついた。

また透がこっそりと潜り込んできたのだろうか？ それをやると次の日には円香がいたりするんだけどな……なんて思いながら下を見ると、円香がいた。

「……あれ？」

どうしたんだろうか？ 珍しいが……まあ、そういうこともあるか、と思い、そのまま目を閉じて円香を抱き締める。まだ時間はあるし、こういう気分の時くらい甘えさせてあげよう。

そう思ってた頭を撫でてあげている時だった。部屋の扉が開いた。そこに立っていたのは、珍しくエプロンを装備した透だった。

「リカ、透。朝ご飯」

「あ、とおるん。今行……え、今なんて？」

透が……「透って呼んだ？」と、怪訝な表情を浮かべる。そんな明里の気も知らずに、胸前の円香が目を覚ました。

「んにゅっ……リカー、もう少し枕になって……」

「え……な、何その言い方……ま、マドちゃん？」

「何？」

「何故、とおるんが返事を？」

「は？」

あ、あれ……なんか、二人の様子がおかしい……二人して、からかっているのだろうか？

困惑気味に二人を見てみると、いつもより少し冷たい目をしたエプロン透が、そのまま声を掛けてきた。

「何変な顔してんの？」

「え、へ、変……？」

「リカー……もう少し寝かせてー……」

「透、早く起きて。ご飯冷める」

何が何だか分からないが……何故、二人は割と普通に行っている？ 何の遊びか非常に気になるところだが……なんにしても、色々困る。何せ、ダラダラ円香もテキパキ透も普通に普段のギャップから生まれる新鮮味がとても可愛いから。

とりあえず、状況を把握しようと思い、改まった様子で二人に声をかけた。

「とおるん、マドちゃん」

「何？」

「自己紹介をお願い」

「……寝惚けてるの？」

「記憶喪失だ」

「うん、それで良いからお願い」

そう聞くと、円香と透は顔を見合わせた後、静かに語った。

「樋口円香だけど？」

「浅倉透」

「……」

入れ替わってる……と、思う以外になかった。ごつこなのか本当なのかは分からないが……今の所は見た目と話している所以外に違和感はない。それ故に、まず思ったのは「何があったの？」とか「なんでそうなったの？」とかではなく、もっとシンプルなものだった。

「狡い！俺も混ぜて！」

「……」

×××二人とも、揃いも揃ってバカを見る目で明里を睨んだ。

混乱してる、と円香も透も、朝食を食べながらつくづく思った。流石、幼馴染コンビ。息ぴったりで入れ替わりネタを明里にぶつける。

甘やかしてもらい、甘やかしてあげるにはこれしかない、なんて思ってたやってみただが……まだ、効果は見えない。元々、今日はオフというわけではないし、勝負は夜……つまり、三人がまた顔を合わせる時だ。

しかし……向こうが自己紹介を望んだ時は、まさか第一声が「俺も混ぜて！」だとは思わなかった。

多分、何も考えていないのだろうけど、ガチで入れ替わったとしても明里と入れ替わるのは許されない。何せ……性別の壁があるから。

明里が鼻血で失血死する可能性もあるし、何よりこっちが明里の体を手に入れて冷静でいられる自信もない。

まあ、今はそんな例え話より、入れ替わりの演技だ。コホン、とホントは死ぬほど恥ずかしい透の演技を、円香は顔色に何一つ出さずに実行した。

「リカー」

「な、何？ マ……とおるん」

「箸動かすの面倒臭いー。食べさせてー」

とりあえず甘えたい時、適当としか思えない理由を付けるのだ、この女は。

「はいはい。とおるん、あーん……」

「あー……んっ」

「人が作った朝食でバカないちやつき方するのやめて」

「マドちゃんもやって欲しいの?」

「どういう耳してるの、ミスターポジティブ」

……あれ、なんかいぎそうやって自分の真似されると、なんだかすごく気恥ずかしい……つと、顔には出さない、顔には出さない……。

気を落ち着かせながら、すぐに言った。

「えー、じゃあ私食べないよ。ご飯」

「ほ、ほら、マドちゃん。とおるんもこう言ってるし、食べさせるくらい別に……」

「じゃあ、もう一人の彼女に黙ってこっそり布団に潜り込む抱き枕より、朝早く起きて朝ご飯を作った彼女も甘やかした方が良いんじゃない?」

あ、死ぬほど恥ずかしい。自分も食べさせてもらいたかったら素直に言えば良いのに、何故そんな面倒臭い誘い方を……と、円香は顔を赤く染め上げる。え、客観視すると自分ってこんなに面倒臭いの? みたいな。

「……分かった、マドちゃん。ごめんね、とおるん。先にマドちゃんに食べさせてあげても良い?」

ハツとした。自分も今は透。透っぽく返さなくては。

「えー、私が先にしたのにな？ お願ひ」

「あー……じゃあ、二人ともお箸貸して」

言われるがまま箸を渡すと、明里は両手に箸を持つておかずを摘み、それを二人の口元に運んだ。

「はい、あーん」

「あーん」

「……ーんっ」

揃って食べさせてもらう。この無駄に両利きなあたり、本当に明里のスペックはよく分からない。

「んー、美味しい。リカの餌やり」

「餌はやめて」

「喜んでくれて良かった」

……これが、透の立場から、甘える感じ……明里がそれでも甘やかしてくるから悪くない気はしないでもないけど……やはり、ちよつと合わない。何もしないで得られる報酬つて、楽ではあるけど……なんか違う感じがある。たまには悪くないけど、いつもはちよつと困るかもしれない。

そんな風に思っている間に、なんかもう入れ替わりに慣れた様子
の明里は、平然と言った。

「なんか子燕に餌をあげてる親燕の気分だなー」

この野郎……よりもよって、自分を兄と自称するどころか親とか抜かし始めやがった。

イラツとしたので、円香と透は顔を見合わせて頷き合うと、制裁に入った。

「樋口ダイナマイト」

「浅倉ボンバー」

「いった！ 脛いった!?？」 両脛いった!?？」

これで許してやることにした。

さて、食事を終えた後は、各々でまたお互いを演じる。自分は透役なので、のんびりとソファアアの上で寝転がる。今日の仕事は午後からだから。

……その間、気になったのでチラチラと透の様子を見る。何かやらかさないか心配だからだ。昨日の夜に、透に朝食のメニューを叩き込んでおいたくらいじゃないか心配だ。キルを演じられるかは心配だった。

今は、洗い物をしてきているが……食器とか割らないだろうな、とチラチラ見せし
まう。

「…………ふう」

着替えを終えた明里がリビングに戻ってきた。

「じゃあ、そろそろ行ってくるねー」

「あ、うんー。いつてらー。今送るー」

円香は洗い物中とか手が離せない時はしがないが、透はいつも明里を見送っている。なので、円香は立ち上がって見送りに行く。

玄関で明里は靴を履き終えると、最後に自分の方を見る。その直後、自分の顎に手を置いて唇を近づけて来た。

あ…………そ、そういえば、出掛ける時は行ってきますのチューしてるんだっけ…………と、今更になって思い出す。

「んっ…………」

自分も背伸びをして、そのまましばらく唇を押し付け合い、離れた。

真っ赤になった自分の頭に、同じく真っ赤な明里は手を乗せる。

「き、今日の長いね…………」

「っ、た、たまにはね…………」

しまった、いつもより長かったか、と思ってしまう間に、明里は軽く手を振って自分に向けた。

「じゃあ……行つてくるね。……これ未だに慣れないな」

「いつてらー」

取り繕つて笑みを浮かべはするが、だいぶこちらにもダメージが入つた……ま、まあでも……自分がやる時がある時はしてもらえないことを今日はしてもらえて、少し得した気分……になつた直後だつた。大慌てで透が玄関に走つてきた。

「り、リカ……いつてらー」

こいつー！ キスしてもらいたいがために、キャラ捨てて見送りに来た！ と、睨んでしまう。

「ど、どうしたのマドちゃん……そんなに慌てて」

そこで、透はハツとする。今になつてキャラを思い出したらしい。そして、腕を組んで少し不機嫌そうに目を逸らしながらも、頬を赤らめた。

「……見送る為に洗い物をいつも以上に早く終わらせてきた彼女には、何も無しですか。それとも言われなきや分らない？ ミスター受け身」

自分はそんなに面倒臭くない——！ と、流星に円香は啞然としそうになるのをそれでも堪えた。

気が付いた明里は、透にも口を近づけ、キスをした。

「じゃあ……行つてきます」

「う、うん……」

そのまま、少し照れた様子で明里は出かけていった。

しばらく、そのまま二人はフリーズ……が、やがて円香は隣の透を睨んだ。

「ちよつと。わたしそんな面倒くさいキャラじゃないんだけど」

「いや、こんなもんだよ、円香は。ていうか、私こそそんな語尾ずつと伸ばしてバカみたいな感じじゃないんだけど」

「いや、バカでしょ。全体的に何もかも」

「私もつと知的だから」

「は？」

……いや、お互いにムキになっている以上、お互いにこんな感じなのかもしれない。

とにかく、今ケンカしても無駄だ。

ここは抑えて、次の話に移らなくてはならない。

「……まあ良いけど。で、どう？」

「何が？」

「仕事してから褒められて」

「うん。なんか、こう……良かった。いつも無条件で甘えるより良かった。あの面倒臭い言い回しを除けば」

「ついでに」

「ただいはい、どんだい、いじれば気が済むのか。ま、何にしてもお互い新しい発見ではあったのかも
しれない。」

「とりあえず、明里が帰って来たなら、また続行しよう……そう決めた。」

「ふう……」

休憩時間中。ライダーのマスクを外し、身体だけジュウドになっている明里は一息つ
いた。

今日は二人目の仮面ライダー「ケドウ」が参戦したわけだが、剣術と柔術、どちらが
強いのかを揉めてしまう回……なのだが、その途中で怪人が円里の妹を人質に取り、助
けたければ自害しろ、と迫る。

何の迷いもなく自殺を決意した円里は変身を解除し、ナイフを首に近付けた直後、変
身前のケドウが参戦。妹の首を絞めるように腕を回していた怪人の腕を刀で切断して
助けると「武士道は死ぬことと見つけたり」を円里に見たケドウは、協力することを決
意。

そして、二大ライダーによる同時変身の直後、敵の怪人は切断された腕からも再生し、
2対2の展開へ。

最後、ジュウドによるライダー二段投げからの、ケドウのライダー突き面体当たり引き胴からのライダー小手面により、身体をバラバラにした挙句、海に捨てられて再生の途中で窒息死させられた怪人は、そのまま生き絶えた……という壮絶なストーリーの戦闘シーンを終えて、少し疲れた様子の明里は、飲み物を口に含んでいた。

「お疲れ様、明里先輩」

「ああ、お疲れさん」

雛菜がその明里に声を掛ける。そういえば、悩みがあつたので打ち明けてみることにした。

「なあ、雛菜」

「何〜?」

「朝、とおるんとマドちゃんの中身が入れ替わってたんだけど、何か知ってる?」

「何言われているのかも分からないよ〜?」

だよ、と明里は目を逸らす。実際、演技なのだとは思うけれど、でも二人の解像度が高過ぎて本当に入れ替わったのでは? なんて思ってしまう。

「何かあつたの〜?」

「あーうん。実はさ……」

と、今朝のことを語る。急に円香が透を名乗って布団の中に入り込んでいたことと、

透が円香を名乗って朝ご飯の準備をしてくれていたこと。

それを聞いた雛菜は、ニコニコしたまま何かを察したような笑みを溢した。

「あは〜」

「? なに?」

「多分、揶揄われてるんじゃない? 明里先輩、信じかけてたんでしょ?」

「あーうん?」

「普段と違う二人の姿を見せて、照れさせようとしてたのかも。二人共、明里先輩には妙にかまちよだし〜」

「……そういうこと?」

「ありえる……のかも。なんか二人とも自分をいじる時はやたらとイキイキしてるし。」

「むう……そういうことだったのか……」

「それで、明里先輩?」

「何?」

「良かったら……雛菜も手伝うから、仕返ししてみない?」

「仕返し?」

「そう〜」

××× どういうこと？ と、小首を傾げながらも、とりあえず雑菜の案に賛同した。

××× リカ、遅いなー、と透は明日の上で足をぶらぶらさせる。円香と既に帰宅して、とりあえず暇潰しに二人でクロスワードを解いている。

晩御飯を作り始める準備は終わっているし、あとは炒めるだけ。帰って来たら、透が再開して円香は出迎えに行く。

「……、まいたけ」

「？ なんで？」

「舞い上がるほど嬉しいキノコ、だから」

「あー、なるほど。天才」

「リカのキノコも見つけると舞い上がるほど嬉しい」

「う、うん？」

……少しイライラしているからか、円香の口から出る言葉がいつもと違った。と、いつものプロデューサーと少し揉めてしまっていたから。まあ、いつものことといえればいつものことなのだが……。

これ……むしろ、円香が無条件に甘えられるのは、今日は正解な気がしないでもないが……とにかく、今は気にせずクロスワードを解き続けた。

そんな中、ガチャッと玄関が開く音。すぐに円香と透はお互いに頷き合うと、行動に移した。……と言っても、まずは二人で出迎えるわけだが。

透はエプロンを装備してから、円香と並んで玄関に迎えに行く。そこには、雛菜も一緒に帰ってきていたが……二人とも、焦った表情を浮かべている。

「おかえり〜」

「マドちゃん、とおるん!」

「雛菜達〜」

「入れ替わっちゃった〜!」

「……は?」

×過去一、冷たい声が漏れた。

×

×雛菜は、楽しかった。何故なら……。

「あは〜♡ 透先輩と円香先輩好き〜」

「私も超好きだよー雛菜ー」

「良い子良い子」

自分を雛菜だと思い込んでいる彼氏が、雛菜だと思い込んでいるフリをしている彼女二人に、女性ならではの距離感でめちやくちやにセクハラされている。

なまじ女の子になりきっているだけあって、明里も離れられなくなっていた。

「や、やはく……二人とも、そろそろ離れて欲しいなつて……」

「は？ 雛菜はそんなこと言わないけど？」

「どうしたの、雛菜。今日はやたらと照れ屋じゃん」

「や、あの……実は俺……」

「マドちゃん、とおるん。今日は俺が晩御飯作るよ。せつかく雛菜も来てくれてるし、思いつきり腕を振るつちやうね」

「俺のキャラ完コピすんなー！」

本当になんでも出来んのかよ！ と言わんばかりに悲痛な声をあげる明里だが、知った事ではない。元々、これが狙いで雛菜は話を持ちかけた。だって……要するに円香も透も明里にかまちよしいってだけだから。

ゲロ甘空間耐性を持ち得る雛菜は、この中に飛び込むくらい造作もない。

「とおるん、マドちゃん落ち着いてー！ 仲間が入れ替わるようなことあるわけないでしょー！ あた○んちじゃないんだから！」

「二例目じゃん」

「私、透だから中身」

「ちよつ、どつち俺のお尻揉んだの!?？」

「透」

「円香」

「え、えつと……とおるんの中身がマドちゃんだからマドちゃんが……あれ、マドちゃん？ とおるんがマドちゃん……俺がおるん？」

完全に混乱させている……と、思いながらも、雛菜はそろそろ帰ることにして玄関に向かった。晩飯を作ることはなく。良い仕事した、と撮影が終わった時よりスッキリした様子で。

さて、明里はそのまま虫の息のままソファアの上で呼吸を荒げていた。頭は透の膝、脚は円香の膝の上で、もう虫の息だ。

「と、いうわけで、私達を騙すとか百万年早いから」

「身の程を知ろうね、リカ」

「いや先に騙してたのどっち……」

「は？」

「いえ、なんでも……」

「こういうとこ、女性の徒党が厄介と言われる所以かもしれない。別に良いけど。」

「で……二人はもう気が済んだの？」

「んー……うん。まあ」

「微妙かも。いじつてただけだし」

「……じゃあさ、もう二人とも好きな時にかまちよでも甘えるでもしてくれて良いからさ……だから、入れ替わりネタとかもう勘弁して。それはそれで可愛かったけど……やっぱ元のままが一番だから」

「……そういうとこ」

「ミスター素直」

「え、な、何が？」

でも、事実だ。元の二人が一番だとしか言えない。寝転がったまま二人の頭を撫で……てあげようとしたけど、円香の頭には手が届かなかったので、身体を起こしてからハグをした。

すると、二人ともハグをり返してくる。

「それは、リカもだから」

「雛菜の真似をしてるリカも可愛かったけど、やっぱいつも通りが一番良いよ」

「えっ……」

……困った。可愛い、なんて男としては微妙なことを言われたはずなのに、少し嬉しかった。

ちよつと照れてしまい、黙り込んだまま無意識に二人を抱きしめる両腕に力をこめて
しまうと、それが照れていることがバレるきつかけになつてしまった。

「あ、照れた」

「ふふ……リカ、やつぱ可愛い」

「や、やめてや……俺は男だよ」

「関係ない」

「ね。リカはリカだし」

「も、も……」

ダメだ、またいじられるかも。そう思ったので、明里は立ち上がった。

「そ、そろそろご飯にしよう。雑菜、そろそろ出来たでしょ」

「多分、作つてないよ」

「ね。さつきしれつと帰つてたし」

「えっ」

やはり、二人に比べるとまだ雑菜のことはわかっていない。……まあ、あんまり知り
過ぎると、二人と雑菜の関係に亀裂が走るかもしれないからやめておくが。

透も明里の後に続いて立ち上がり、伸びをした。

「それより、今日は私が作るから」

「あ、そうなの？　じゃあよろしくね。朝ご飯も美味しかったし、とおるんのご飯楽しみだな」

「任せて」

「レシピは私だけだど」

「じゃあ二人の合作」

しかし……今思えば朝は本当に二人ともお互いの解像度が高かった。お互いに台本作っていたのだろうか……いや、自分の台本作るとか羞恥プレーにも程があるし、それはないだろう。

「そういえば、二人ともお互いの真似、超そっくりだったねー」

「そう？」

「うん。特にマドちゃんの真似するとおるんの、あのツンデレみたいな甘え方、完璧だった」

突然だが、剣道には残心という言葉がある。それは、相手を斬った後でも最後の最後、猫を囓む窮鼠を警戒し、気を抜かないということを意味する言葉だ。

今の明里は、まさにその状態だった。一件落着しても、新たな一件がすぐにやってきた。

「……はっ」

「え？」

「私、ご飯作ってくる」

切り捨てた透の背中が、やたらと遠くに見えた時には、円香の両手はアホほど明里の肩を握り締めた。

「つまり、リカの中では私があんな面倒臭い女に映ってるってこと？」

「え？ いや全然、面倒くさくなんか……」

「嘘はいいから」

「や、嘘じゃ……」

「ちよつときて。話聞く」

「や、話すことなんて何も……あつ」

連行された。

もはやH2O。

「えっ、明日からとおるんの写真集の撮影？」

そんな声を漏らしたのは明里。それに対し、頷いたのは透だ。

「うん。2泊3日ー」

「え……じゃあ三日間もないの？」

「うん。寂しい？」

「寂しい……」

「私もー。リカー」

「とおるんー」

「ひっっ」

「うるさい」

その馬鹿二人が目の前でハグをしたので、思わず円香も毒を漏らしてしまう。ていうか……自分は良いのだろうか？ 別に良いけど。

なんて思っている、明里が平然とした間抜け顔で言った。

「とおるん、マドちゃんが混ぜてだって」

「カモーン」

「は？ 別にいい」

「そこで発生しましたツンデレ専用ブラックホール。なかなか素直になれないあなたにお届け」

「吸引モードに入りまーす」

「つ、ち、ちよつと………ていうか、動き気持ち悪い……！」

何せ、二人はハグしたまま片手を開け、近寄つて来る。逃げる……いや、逃げるのも面倒くさい、と鼻息を漏らして巻き込まれてあげた。

そのまま二人の間に挟まり、ギューつと抱き締められる。

「捕まえたー」

「ふふ、超素直。本当に混ざりたかったんだ？」

「逃げるのも面倒だっただけ」

「ツン」

「デレ」

「……うるさい」

もう反論もしない。……まあ、その、何……似たような顔の良い男女に挟まれ……

まあ、その……悪い気分でもなかったし。

……こういうスキンシップ……やっぱり悪くない。二股して良かった……なんて思っていると、床についていた足元がふわりと浮き上がった。

えっ、と思ったのも束の間、明里と透が持ち上げているのだとすぐに分かった。

「ちよつと……何して」

「ブラックホールによる時空乱流です」

「衝撃に備えてくださーい」

「ちよつと……あんたらやめ……!」

「ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる」

二人はそのまま回転し始めた。前門のリカ、後方の透に挟まれて回転……しかも、身体が浮いている状態。もう普通に酔いそうだ。

「ふ、2人ともっ……待っ……吐く……!」

「ごめん、私も気持ち悪くなってきた……」

「じゃあ止まりませーす」

流星、柔道で受け身を極めた明里だけ平気そうにしたまま止まった。

「大丈夫?」

「あんたらほんと碌なことしない……」

「まったくくだわ……」

「あんたもだから」

「えっ」

……ダメだ、ふらふらする。曲の中でたくさん回転するような曲もあつたが、ちよつと勢いが強すぎた。

「あー無理……これは今日の晩御飯当番無理」

「えっ」

「あれ、この中で……一人だけ目を回してない人がいるぞー？」

透も狙いに気がついて乗ってきた。

「……分かった。まあ、とおるんいなくなっちゃうしね。とおるんが食べたいもの作つてあげるよ」

「じゃあ……ソテー、フォアグラの」

「あの、パソコンも買わなければならないので、勘弁してもらえませんか……」

「てか今、19時だから」

流星に今から買いに行くのは無理だ。ていうか、そもそも何処に売っているのだろうか？ フォアグラとか。

「じゃあキャビア」

「それならスーパーにあるかも」

「ないでしょ、金持ち坊や」

割とその辺の感覚もズレている。そんな大袈裟なものでもないが、売っているもの勘違いとかはよくあるようだ。この前はスーパードで松茸の初物を探していた。

「とにかく、食べたいもの言って、家庭料理で」

「じゃあ……目玉焼きハンバーグ」

「ダメに決まってるでしょ。写真集を撮る前夜に何重いもの頼んでんの？」

基本、放置するけど流石に看過できない。それはノクチル全体……そして小糸への評価に繋がるかもしれないから。

「じゃあ、目玉焼きハンバーグの目玉焼き抜きで」

「それ普通のハンバーグじゃん」

「ていうか、ハンバーグも重いからダメ」

「えー。全然食べさせてもらえないじゃん」

でも残念ながら、割と前日に食べたものは次の日に響く。透は余程、食っちゃ寝しない限りは太らないが、ドカンとこの時間にタンパク質×タンパク質は身体に出る。

その透が少し困った様子で聞いてくる。

「じゃあ何なら良いの？」

「青汁」

「えー……それは勘弁」

ま、こういう時は隣の理科系雑学王に任せるところだろう。

「リカ、何かない？」

「うーん……猪肉とかなら太りにくいとは言うけど、そんなもんじゃないよね」

「うん」

「じゃあ、チキンカレーにしよっか」

「お、良いねー」

「まあ……それなら」

ハンバーグよりはマシだろう。野菜も多いし、米の量を減らしてもお腹に溜まるし。

「じゃ、待ってて」

「うん」

さて、それからおよそ40分後くらい。机に料理が並べられた。……ホクホクのフライドチキンが乗せられた、スパイシーな香りのカレーライスが。

明らかに明日の撮影を意識した出来栄えではなく、思わず冷ややかな目を彼氏にむけてしまう。

「……リカ？」

「おー、美味しそう」

「ごめん……どうせなら、美味しいって喜んで欲しいなーって工夫してたら……揚がってた」

「なら目玉焼きハンバーグ作ればよかったでしょ」

「味は良いと思うから、おあがりよ！」

「あまりイライラさせないで。……これで小糸の評価まで下がったらほんとに怒るから」

「ご、ごめんって……でも、とおるんに、美味しいもの食べて欲しかったから」

「……」

「り、リカ……えへへ」

「……」

そんな風に言われて、そんな風に喜ばれたら、もう何も言えない。……それに、透は自分より明里の料理の方が良いかな、と思った判断とはいえ、元々当番を代わってもらった立場的には文句は言えない。

「……じゃあ、食べよっか」

「うん」

「良いね」

「でも、終わったら走りに行くから」

「えっ」

×話しながら、食べ始めた。

×

×さて、走り終えてからお風呂を終えて、寝る時間。透は、何となく円香が気を利かせてくれたことを理解していた。多分、明里の手料理を透が食べたいと思つて、みたいな。でも……自分は別に円香の料理でも良かった。何せ、離れ離れになるのは明里だけでなく円香もだからだ。

そんなわけで、これから明里のベッドに忍び込むわけだが……一人で行くのは嫌だった。

「まーどかつ」

「? 何?」

「リカのベッドと一緒に寝に行かない?」

「……行かない。お一人でどうぞ」

「えー」

こつちの意図を理解してだろうか? 既に布団の中にいる円香は自分に背中を向けながら、連れなくそう言う。

「えー、良いじゃんー。一緒に寝よ?」

「私は明日から毎日、リカと一緒に寝るから。今日くらい二人で寝たら？」

「？でも、明日から二日は寝れないじゃん。三人で」

「……」

三人が良いのだ。透は。

それを伝えると、円香は渋々、身体を起こした。

「……甘えん坊」

「三人から一人になるの、ちよつと寂しいよ。想像すると」

「私はそう思わないから」

いや、透には分かる。むしろ一番、寂しく思うのは円香なんだろうな、と。もつとも、

口にすれば一緒に寝てもらえなくなりそうなのでしないが。

さて、二人で明里の部屋に入る。中は暗く、明里は既に布団の中。この時間はたまた

虫のおもちやの手入れをしているのだが、今日はそれはしていないようだ。

ならば好都合。……まずは透が突撃した。

「浅倉プレスー」

「げっふえー！」

「近所迷惑」

真上に飛び乗った。もう季節が季節だけに薄いタオルケット一枚は無理があり、掛け

布団が掛けられている。

その上に飛び乗ったからダメージが少ないようだ。すぐに明里はうつすらと目を開ける。

「とおるん……どしたん？」

「寝にきた。一緒に」

「ん……いらつしやい。マドちゃんも」

「……ん」

寝ぼけた声……割と寝てた所にジャンピングプレスをもらったのに何一つ怒らないあたり、優しいを通り越して悟りの域に達している気さえする。

さて、明里の布団なのに、モゾモゾと動いて、透を挟んで布団の中に入る。

「ふふ、両手に花」

「とおるんー。良い匂い。シャンプーの」

「……暑苦しい。ていうか、たかが出張で大袈裟すぎ……」

「じゃあ円香が出張の時は、一緒に寝てあげない」

「は？ ベつに嫌とは言つてないでしょ」

「よし、じゃあ寝るまでしりとりやろつか」

「良いね」

「リカの提案をなんでも肯定しないで。たまには反論の一つでもしてみたら？」

××そんな呑気な話をしながら、そのまま三人で駄弁って、翌日は寝坊した。

×さて、翌日。二人は透を事務所まで送った。昨日の夜、一緒に寝たからか、別れの時に行きたくないーとか言われなかった。

で……今日から数日間、二人暮らし。その為、円香は……。

「……リカ、今日のご飯当番、私が変わってあげる」

舞い上がっていた。透が普段から邪魔だった、とかではない。……ただ、二人の時間というのとはとても貴重だ。基本はいた方が良いが、いない時も少し欲しかったりしないわけでもなくて。

「? なんぞ?」

「昨日、代わってもらったから」

「まあ良いけど。……はあ、行っちゃったねー。とおるん」

「ん」

……あまり二人きりで暮らす、というのもあったわけでもないの、少し緊張するが……まあ、気にしても仕方ない。

「とおるんも寂しくないかなー」

「大丈夫でしょ。あれでも大人だし」

「え？ いや俺ももう大人だけど寂しいよ？」

「リカは子供だからまだ」

「え、いや」

「子供だから」

「う、うん……」

まだまだ子供である。実際、今年度で19とは言え、大人になったなんて認めるつもりはない。

「さ、帰ろっか」

「ん」

「帰ったら、久々にやらない？ やわらか頭塾」

「良いよ。今日こそ叩き潰すから」

「いやそういうゲームじゃないからアレ……」

明里のアホは、こういうのにも強い。特に、数字と分析と直感が異常に発達している。……とはいえ、このアホの子に負けるのは嫌だから、実を言うと密かに練習していたりするが。

そんな時だった。プチっ、と腰から違和感。何が起こったのかはわからないが、やた

らと恥ずかしいことが起きている気がして仕方なかった。

「ごめん……リカ、ちよつと……」

「? 何?」

「トイレ行きたい……確認したい」

「確認? ……あ、もしかしてとおるんが身に付けてるものに発信器でもつけた?」

「違うから……お願い、コンビニに……!」

なんて話している時だった。スカートの裾から、それが自由落下した。それを見るなり、違和感の正体をすぐに理解した。

これは夏休み前……まだ、明里を襲おうと思っていた時、透とノリで買った紐パンである。

今日、こんな下着履いたっけ? なんて思ったが、思い出した。今朝、つい気まぐれで適当に手に取ったこれを履いてしまったことを。

だが、結んだところが解けたわけではない。紐が、切れた。

「マドちゃん……あつ」

「……!」

見られたつ……と、顔を真っ赤にしてしまう。よりにもよって紐パンを……と、顔が真っ赤に染まって、反射的に拳を握りしめてしまう。

……が、明里が自分の上着を脱ぎ始めたことで拳を解く。何をするつもりなのだろうか？　なんて思ったのも束の間、明里は頬を若干、赤らめたままその脱いだ上着を円香の腰に巻いてくれた。

「……はい、とりあえず隠して」

「つ………か、カツコつけ男……」

「え、このパンツ、もう履けないんだよね？」

「蹴るよ？」

「や、履けるなら余計なことしちゃったから……」

「……」

こいつに憎まれ口はかけらも効かない辺りがまた腹立つて困る。何が腹立つって、これで頬を赤らめている自分に。

「……履けないから、拾っておいて」

「え、お、俺が？」

「このまま私にしゃがめと言うとは……流石、ミスターノーデリカシー」

「あ、そ、そつか………ミニスカートだもんね……！」

こつちだつて彼氏にパンツを拾われたく……いや、悪くない。ある種では悪くないけども、恥はあるわけで。

拾ってもらうと、明里はそれをカバンの中に入らせた。

「じ、じゃあ……帰ろっか」

「無理」

「え？」

「……これから電車乗るのに、ノーパンミニスカートで行けって言うワケ？」

「え……でも、そのままお店に入るの？」

「それしかないでしょ……」

「……え、だ、大丈夫……？」

「平気だから、早く歩かせて。……一秒でも早くノーパンから解放される努力をして」

「あ……う、うん……！」

そんなわけで、半ギレ気味にランジェリーショップに向かった。もう二度と紐パンは

履かない。

×

さて、そんなわけで店に到着した。しかし……と、円香は冷や汗を流す。彼氏……彼

氏なんだから問題ない……と、思い込もうとすればするほど、何故か罪悪感と興奮が際

立つ。

男と二人で女性下着のお店……死ぬほど恥ずかしい。しかも、今すぐに装備しないと

いけないあたりが余計に。

「絶対、店員さんに変なプレイだと思われる……」

「プレイ？」

「いや、だから……や、何でもない」

「……ええ」

「せつかくだから、リカが選ぶ？」

「えっ!!? 良いの!!?」

「冗だ……は？」

冗談のつもりだったが、思っていたのと違う反応に、眉間に皺を寄せる。

「前から思ってたんだ。洗濯してる時とか。マドちゃんの下着……とおるんのに比べて大人っぽ過ぎるって」

「は？」

「フリフリとか……あと、なんていうんだっけ……ボウリングの0点みたいな名前の……あ、ガーターとかそんなの。マドちゃん、まだ今年で19なんだから……その、男を挑発するような下着はやめて欲しかったんだ」

「……は？」

「俺も電車の中でたまにやたらと薄着の女の人の下着が見えたことあるから、もしかし

たら完全に隠すのは難しいのかもしれないけど、それならせめて見られても男が興奮しない下着を選んであげないとなーって思ってたんだ。任せて、良いの選ぶから」

「……………はっ」

苛立ちが増していく。誰のためにその手の下着を買っていると思っているのか。

「よし、じゃあ……………どんなのに…………」

「リカ」

「ん？」

「そこまで言うからには、ちゃんと私に似合う下着選ばないと許さないから」

「……………えっ？」

決めた。こいつにパンツだけでなくブラも選ばせ、性癖の把握に努めてやる、と。

「ほら、早く。人にそれだけ言うんだから、良いの選べるんでしょ？ 言っとくけど、一

切口を挟んであげないから」

「お、おう！ 任せろ！」

「その代わり、私が気に入らなかつた奴を選んだ数×1枚、写真撮って透に送るから」

「え、良いけど？」

「……………言つたな？」

決めた。色んな写真を撮ってやる、と。

さて、そんなわけで二人でノーパンであることを忘れたまま店内を見て回った。

明里も周りの視線なんか気にならなくなったのか、真剣に店内を見回す。

「……うーん、マドちゃんだから……やっぱり、可愛い方が良いよね……大人びてる感じより。でも、下着の可愛さとかよくわかんないんだよな……熊さんとかかな？」

「……」

なんだろう、真剣に選んでくれているのが……なんか余計に恥ずかしい。なんなのこの人、と顔が少しずつ赤く染まる。

「ググってみよう。あまり見られても恥ずかしくない……あ、スポブラって奴がそうなんだ……」

それはそう。でも今はとつても恥ずかしい。周りの視線が視線だけに、円香は思わず口を挟めずに顔を赤くしたまま俯くしかなくなる。

「スポブラ……うーん、有栖川さんに聞いてみるか」

「……」

人に言う気かよ！ と固まってしまふ。しまった、口は挟まない、なんて言うべきじゃ無かったかもしれない。

「もしもし、有栖川さん？ 今、平気ですか？」

『ええ、平気よ。……どうしたの？』

「マドちゃんが下着を選んで欲しいらしいんだけど、スポーツ用の下着で良い感じのな
い？」

『え……どういいうプレイ？』

「？ はい？」

『つ……な、何でもないわ……えつと、下着？』

「そう」

絶対戸惑ってる。明里のリアクションを見るだけで分かる。

そのまましばらく、夏葉にアドバイスをもらう明里。なんていうか……なんだろう、
この公開処刑。どうかしている。

「よし……ありがとう」

『ええ。でも、あまりいじめないであげなさいね？』

「え？ いじめ？ 誰が？」

『うん、何でもない』

「じゃあ、ありがとうございました。今度、何かお礼を……」

『絶対にいらぬ』

「えっ」

電話は切れたようだ。すると、明里はサクサクと選び始め……そして、本当にスポブ

ラとスパッツを持ってきた。

「これでどう!?？」

「もう、なんでも、良いから……早く、帰らせて……!」

「え……な、なんで怒ってるの……?」

「後で覚えといてよホント……!」

ぶっ飛ばす、もうなんでも良いからぶっ飛ばす、そう決めながら、円香は下着を購入し、店員さんに「今すぐ使います」と羞恥プレイにも程がある一言を告げた。

さて、家に着いた。明里と円香、二人だけの夜。ソワソワしていた、円香は。ソワソワソワソワしていた。

なにせ……二人きりだから。何か起こらないな……なんて思う反面、いや、でも可能な限り穏やかに過ごしたい、と思わないでもなくて。

まあ、どちらにしても、ひとまずは落ち着かなくてはならない。とりあえず、二人だけの晩御飯を終えて、お風呂も入ってあとは団欒するだけ。

部屋に戻ると、明里がスマホをいじっていることに気がついた。

「リカ? 何してんの?」

「チェイン。とおるんに。寂しいよーって連絡来てたから」

「……………ふーん」

自分も何かしら反応してあげよう、と決めて、スマホを見てみると……写真が大量に
来ていた。写真集用の写真、こっそりとプロデューサーにスマホで撮ってもらい、それ
を送ってきている様子だった。

その度に、明里が「綺麗だね。グレーのワンピースも素敵じゃん」とか「モデルさん
みたい、そのパンツ履かれると俺なんかより全然格好良い」とか「でも胸元はもう少し
隠して」とか褒められている。

「……………」

いや、気持ちは分かる。向こうは一人、こっちは二人、だからこそ一人の方が連絡で
きる時は構ってあげようと思うのは。

……………でも、せつかくこっちはやはり二人なんだから……生身の方にも構って欲しい。
そんなわけで、自分も自慢することにした。下着を明里に選んでもらうなんて、透
だつてしたことないだろうから。

一度、洗面所に戻り、自分が買ってもらった下着に着替え、そして洗面台の鏡にスマ
ホを向ける。

「……………」

顔を見られるのは恥ずかしいので、口元をスマホで隠して撮った。……中々、えつち

なのでは？ これなら明里も顔を赤らめる事だろう。

そう決めて、三人のグループに送ってみた。

「……」

その、わずか0.000001秒後だった。明里が洗面所の扉を蹴り壊してきたのは。

真つ赤な顔をしてカチコミに來たそいつは、そのままの勢いで怒鳴る。

「マドちゃん！ 何この写真！」

「え、待つて。まだ送信完了したばかり……いや、なんなら完了する前には動いてた？」

「こんな写真、撮るのやめて！ お、俺達だからまだ良いけど……」

「……」

言われて、改めて自分が送った写真を見る。それは、どう考えてもツイスタにたまに上がっている裏アカ女子のそれと同じだ。

……というか、透から返信が來た。

菅谷透『ふふ、裏アカ女子ごっこ？』

菅谷透『超えっちじゃん』

……なんか、今更になって気恥ずかしくなり、頬が赤く染まる。死にたくなってくる……と、同時に「じゃあどうすればよかったの……」という思いがつつつと湧いて出

てきた。

そして……思わず正面から明里を抱き締めてしまった。

「ちよおっ……ま、マドちゃん……その格好で抱きつかれると……!」

「……うるさい」

「えっ……お、怒ってるもしかして?」

「怒ってない。……別に、今は私より遠くにいて、私より素直で可愛げがあつて胸も大きい透の方が目の前にある私より良いって言うならどうぞそれで。ミスターおっぱい星人」

「おっぱい星人って何……おぶっ!」

下着姿のまま抱きしめて、ボディブローしてやった。こいつほんとムカつく。

「せつかくなんだから……こつちにも構ったら?」

「……ごめんで」

「ん」

「だから、その……まずパジャマを着て……」

「……どう? リカが選んだブラとパンツ」

「……お、お似合いだけど……」

「見られても良いように選んでくれた奴なんですよ?」

「そ、それはそうだけど……や、やっぱり……その、好きな人の下着姿は……刺激、強いから……」

「すけべ」

「……その写真を撮って送っちゃう人に言われたくな」

「は？」

「いえ、ごめん……」

いつもの明里に戻り、それはもうキョドって可愛いものだ。

「じゃあ、今日は構ってくれるってことで良い？」

「う、うん……」

「じゃ、着替えたげる」

「そうでなくても着替えて欲しいんだけど……」

「うるさい」

× とりあえず、円香は着替えることにした。

×

さて、そんなわけでその日の夜は、二人で寝る。いや、何がそんなわけなのか全くわからないが、円香の甘えたゲージが溜まるところなるのだ。

二人は揃って……今日は、円香のベッドに入っていた。

「この時期だと、二人で寝ても暑くないね」

「もう涼しくなってきたからね」

「マドちゃん、最初一緒に寝てた時、ずっと体温高かったからなあ」

「……あんたが言わなくて良い」

明里は照れていて体温が上がっていたが、円香は火照っていて上がっていた。同じ現象でも意味が全然違うあたりが憎たらしかったりするのだが、まあそういう男だし仕方ない。

甘えたな日、なだけあって、円香は寝返りを打ちながら、明里を横から抱き締める。もう何度も一緒に寝ているからか、明里も慣れた様子で抱き枕にされた。

「リカ、もつと詰めて。寒い」

「あ、うん」

「は？ そんなに私から離れたいわけ？」

「え？」

壁の方に寄る明里を引き留めるどころか、抱き締めている両腕の力を込める。

「人肌で温め合えば良いでしょ」

「っ………そ、そうだね……」

「そう」

ぎゅーっと拘束するようにしがみついた。……そうだ、せつかくだし……今のうちに明日の予定も詰めてしまおう。

「リカ、明日午前までだよね。仕事」

「うん」

「なら……午後、デートね」

「良いよ。今日はあまりとおるんに二人の写真、送ってあげられなかったもんね」

「……ん」

「どこが良いだろうか？ 今日、買い物とかしてしまっただし、遊びがメインになるようなところが良い。」

「俺、お散歩で良いよ」

「は？」

「散歩。仕事終わった後、待ち合わせした場所から、二人で歩きで行けるとこまで行こうよ。……で、写真撮ってとおるんに送るの」

「……」

面白いかもしれない。まあ、仕事が終わった場所次第だが、例えば隅田川沿い。歩くだけでこの季節は楽しそうだ。

「……良いね」

「でしょ?」

「じゃ、それで」

「ふふ、そういえば二人きりでデートの約束してデートって久しぶりかも」

「毎回、三人だからでしょ。……そういう意味じゃ、透ともちゃんとして来たら?」

「うん。……でも、とおるんは落ち着きあるようでないからな」

「お守り、よろしく」

あれで長女を名乗るとは、片腹痛い。まあ、生まれた順番だけで言えば確かに長女ではあるのだが。

「でも、マドちゃんがない時だからね。いるときは、やっぱり三人で行こう」

「……んっ」

やっぱり……良い子だ。三人であることが当たり前になっただけでも尚、こうして三人であることを望んでくれるのが、もしかしたら長く二股を続けられている秘訣なのかもしれない。

自分も、このままずっと三人でいたい……そんな風に思いながら、目を閉じた時だ。

「あ、でもマドちゃんとおるんは、小糸ちゃんと雛菜も一緒に良いから……五人かな?」

「殺すよ」

「えっ」

やっぱりよく見張っておく必要は十二分にあるようだ。

久々に会うと甘えたが爆裂する。

浅倉透は、少しニヤニヤしていた。何故かって？ それは勿論……写真集の写真だ。プロデューサーに自分のスマホで写真を撮ってもらい、それを明里に送りつける。

R—15と言うほどのものではないけど、それでも何処か官能的な構図の写真を撮ったのだ。これで、真っ赤にしているか、あるいはベタくそ褒めてくれる明里の妄想が出来る。

そんなわけで、休憩時間になり、スマホを手に取った。改めて写真を見ると、我ながら可愛く撮れている。

「……ふふっ。まずはこれ」

もう秋なのに、波打ち際をやたらと薄いワンピース一枚で、裸足で歩く姿。風が吹いて長めのスカートも見えるか見えないか……いや見えないわ、という位置まで捲れている。

これを見てどんな反応するかな、とウキウキしながら送信した。その数秒後……返事が来た。

浅倉明里『可愛い！ 清楚っぽい！』

樋口透『でしょー?』

ぼい、は余計だけど無視した。流石に、一緒に暮らしているだけあって、このくらいで照れることはないようだ。

樋口透『他は?』

浅倉明里『でも、足が泥だらけだよ。今の時期で裸足で歩くのすごいね』

そういうのが聞きたいんじゃない。少しイラツとしたので、すぐに返事をした。

樋口透『褒め言葉以外、受け付けてませんー』

浅倉明里『可愛い! 美人! 好き!』

まずいことになった。頬の緩みが止まらない。ニヤニヤしてしまう……って、違う。向こうをリアクションさせないといけないのに。

そのためにもまずは……やはり、これをこうして、と自撮りモードにする。せつかく今、際どい衣装を着ているし、片腕でこう……寄せるように……。

「……よっ」

自撮りを終えた。胸を腕で持ち上げつつ、少しでも頬を赤らめて目をとろんとさせてみた。これならどうだ……と、写真を送った。

浅倉明里『リカに変な写真見せないで』

……円香にスマホを没収されていた。まあ……普通に送ってから恥ずかしくなった

し、それはその通りと言わざるを得ない。

その直後だった。円香のアカウントから写真が送られてきた。散歩でもしているのか、紅葉をバックに明里の腕に自分の腕を絡ませ、真顔のままウイंकをしている円香とぼんやりした表情の明里が映っていた。

その後で、さらにメツセージが来る。

菅谷円香『デートなう』

「……」

ズキツ、と胸が痛むことはない。でも……羨ましい。狡い、そして……羨ましい。よって、メラメラと闘争心が湧いてきた。

次こそ照れさせる、と思い、別の写真を選んだ。今度のは、カクテルが入ったグラスをパラソルの下で飲んでいる奴。勿論、ノンアルコールだが。

何が色っぽいって、グラスに口をつける直前の唇だ。ウイंकしながら飲んでいて、まるで男を誘っているような飲み口だ。

これならどうだ……と、思つて返事を待つと、すぐに返ってきた。

浅倉明里『綺麗！ 大人っぽい！ 素敵！』

「むっ、ふーん」

それはもう、ピノキオのように鼻が伸びていた。なんかあんま照れてる感じしないわ

けだけど、褒められればそれはもう嬉しさのあまり踊り狂ってしまう。

なんて思っていると、また円香から写真が送られて来た。

菅谷円香『デートなう』

写真には、円香が明里の首筋に唇を当てている写真が送られてきた。

浅倉明里『マドちゃんなんなの急に……恥ずかしい写真撮るのやめてよ』

菅谷円香『うるさい』

こいつら……まさか本当にデートしているのだろうか？ 自分を抜きにして？

……やはり羨ましい。

樋口透『狡い』

樋口透『狡い』

樋口透『狡い』

樋口透『狡い』

樋口透『狡い』

樋口透『狡い』

連打した。すると、やっぱり先に反応したのは円香だった。

菅谷円香『うるさい』

菅谷円香『デート中に投爆やめて』

頭にきた。

樋口透『私も混ぜて。今から帰るから』

菅谷円香『バカなの？ 明日、帰ってくるんだから我慢して』

樋口透『リカ独占禁止法です』

菅谷円香『は？ 別に独占してない』

菅谷円香『そっちが勝手にいなくなっただけ』

樋口透『あ、そういうこと言っちゃうんだ』

樋口透『じゃあ円香が家にいない時、リカのこと食べちゃう』

菅谷円香『は？』

菅谷円香『じゃあ私は今日食べる』

樋口透『狡い』

なんて、少しずつ険悪になっていく中……ふと、そういうえば明里が大人しいことに気が付いた。

樋口透『てか、リカは？』

聞くと、既読がついたまま返信が途切れる。恐らく、周囲に明里がいなくなったのだらう。

しばらく待っていると、写真が送られてきた。

浅倉明里『カマキリいた』

それと同時に、カマキリを肩に乗せた2ショット写真が送られる。かわいい。透にとっては。

菅谷円香『ブツ飛ばす』

浅倉明里『え、なんでチエインで言うの?』

そこで返信は途切れたが、おそらくリアルファイトを行なっていることだろう。羨ましい……と、強く思う。

×休憩時間が終わってしまったので、撮影を再開した。

×さて、翌日。透は不機嫌だった。もう無理、と頭にきているのを隠そうとしないで、駅に到着した。今日は絶対、三人でイチヤイチャしてやる。朝まで。と思いつながら改札を通って階段を降りたときだ。

「とーおーるーんー!」

「リーカー!」

「ひしっ」

「……おかえり」

完全にハグしている自分達を無視している円香だった。透はすぐに円香にも目を向

け、明里と一緒に手を伸ばす。二人の間に引き寄せると、そのまま三人でハグ。

「帰ってきたー！ えつと、あれ……ア・バオア・クーに？」

「あれ？ ルナツーじゃなかった？」

「ソロモンでしょ」

「そう、ソロバン」

「ゾロファン？」

「何でも良いから。リカ、言うことあるでしょ」

「うん。おかえり、とおるん」

「ふっふーん、ただいま」

と、挨拶をする。今日は透が真ん中で三人で手を繋いだ。

「晩御飯、出来てるよ。今日はたこ焼きにした」

「イエーイ、タコパ」

「あとケーキ買ってあるから」

「お、マジ？ 何かのお祝い？」

「何処かの誰かが昨日から拗ねてたから、リカがケーキ用意しようって」

「やった。じゃあもう少し拗ねてよっかな」

「リカ、二人で食べよっか」

「うん」

「嘘嘘。ごめん」

もう怒りなんて何処かに行ってしまった。迎えに来てくれるだけでこんなに嬉しいとは。

三人で手を繋ぎながら歩く中……ふと、父親と母親に挟まれて帰っていた時のことを思い出した。あの時、両手を繋いでぶら下がったりしてたっけ……と。あれ、やりたい。

「ね、リカ、円香」

「何？」

「あれやりたい。ぶら下がる奴」

「何それ？」

「あー、両親とかに昔やつてもらったやつ？ 手のブランコ」

「そうそれ」

「は？ 重いでしょそんなの」

「やーりーたーいー」

「良いよー。ね、マドちゃん？」

「はあ……勝手にして」

やった、と小さくガッツポーズ。透は一步下がって二人と繋いでいる両腕を伸ばす。

「いっくよー」

「はいよー」

「どうぞ」

一気に踏み込み、透は下半身を真上に持ち上げる。両腕を伸ばし切つて、一回転するんじゃないかつてほど持ち上がる。やっぱりこういうの楽しい。

そう思つて、着地のことを考えていなかった。当然ながら、子供時代より腕は長い。つまり、腰以外、足も腕も何もかも伸ばしたままにしていると、まず道路に直撃するのはお尻である。

「ぎにやっ!」

「うわっ、大丈夫? 何でちゃんと着地しないの?」

「バカでしょ」

「お、お尻が……割れた」

「え、おしり割れてない人間つてこの世にいるの?」

「リカ、バカにならないで」

本当にお尻が痛い。思わず彼氏の前でさすつてしまうほど。

「うう……円香のお尻くらい大きかったらもう少しダメージは少なかつたと思う……」

「次、ケツバットにする?」

「え、お尻の大きさに個人差とかあるの？」

「リカ、真に受けないで」

「あるよ。円香のマジで美……嘘嘘、ごめんごめん、ほんとマジで」

指を鳴らし始めた円香に慌てて謝った。殺されかねない気がしたから。なんとか立ちあがろうとするけど……やはり、お尻痛い。立てないかも……と、思っているときだ。明里が自分の前に膝をついて背中を向けた。

「はい」

「おつ、おんぶ？」

「正解」

「いえーい」

そのまま透は明里の背中に乗り込む。ギョツ、としがみついて、持ち上げてもらった。

「リカ号、発進」

「フルアーマーZZガンダム、出るぞ！」

「……待って」

「え？」

止めたのは円香だった。何故か少し頬を膨らませている。そして、明里の正面から両肩に手を置き、軽くジャンプした。

「ちよおっ……!?？」

「フルアーマーなら前もでしょ」

「も、も……甘えん坊なんだから」

「うるさい黙って」

円香もそういうところある。多分、チエインで透ばかり誉められていたのが羨ましかったのだろう。自分だってデートしてたくせに。

明里の頭を挟んで、左右の肩にそれぞれ頭を置いている円香と透はお互いに睨み合っ
た。

「なるべく暴れないでね。あんま暴れると落としちゃうから」

「ん」

「分かった」

つまり、おんぶの独り占めには……暴れば良いという事だ。そのまま円香の脇腹に
手を伸ばした。

「きやうっ」

「ちよっ……マドちゃん？」

「な、何でもない……!」

「な、なるべく……動かないで……!」

「ごめん……」

あ、今睨まれてる、とオーラを感じとった。その後、今度は透の首筋に人差し指の先端が当たる。

「ひやうっ？」

「わちよっ……だ、だからとおるん……！」

「ごめんで」

謝りつつも、ビシッと自分と円香の間に稲妻が走る。面白くなってきた。

「ちよんっ」

「ひやうっ……このっ」

「ぎやひっ！……それっ」

「ふおうっ？」

「ちよっ、二人ともいい加減に……して！」

「えっ」

「ちよっ」

直後、身体が強引に持ち上げられた。何が起こったのか……と、思ったのも束の間、二人揃って両肩に抱えられた。

「ちよっと……！ 仮にも彼女を岡持みたい……！」

「おー、めっちゃ揺れる。……酔う」

「だって二人ともなんか暴れるし。そのまま大人しくしてるように」

「ふふ、担がれてるサバイバーの気分だわ」

「全くなんだけど」

×そのまま帰宅した。

×

「で、どうだったの？ 写真集」

「めっちゃ綺麗に撮れた」

「自信家」

そうは言うが、円香も大成功はしてるんだろうな、と察している。透は顔面の良さだけを使う仕事なら出来るから。

「買っちゃおっかなー、俺もそれ」

「いや、買わなくて良いよ。貰えるから、私」

「そういうんじゃないよ、他の男に少しでも行き渡らないようにしないと。とりあえず、

駅前の文〇堂の在庫は全部買い取る」

「透、発売日教えて。その日はこの男、監禁する」

「わかった」

「えっ、な、なんで……?」

本気でわかっていないトーンである、この男。

「当たり前でしょ。破産したいわけ?」

「そうだよ、リカ。それやると減っちゃうから、私のファン」

少しずつファンとかアイドル業とかを理解し始めた透は、ファンを大切にすることも覚え始めた。つまり……自分の写真集は可能な限り、ファンの人たちにも届けたいと思っていた。

「でも……あ、あんなに綺麗で、その……ちよつと、えっちなとおるん……他の人に見せるんでしょ……?」

「……」

「……」

照れてる、明里が。透から写真を送られた時、素直な褒め言葉しか返していなかった、あの明里が。実はあの言葉には、照れも含まれていたのかもしれない。

それ故に、実は割とちよろい透は、すぐに親指を立てた。

「よし、許可する。買い占め」

「ほいきた」

「いやダメでしょバカども」

透を止めながら、円香はたこ焼きをひっくり返す。

「とにかく、やめて。そういうのは。売上があれば良い、なんてものでもないんだから」
「でも、リカが載ってる雑誌、円香買ってるよね。保存用と観賞用と切り抜きスクラップ用で」

「え」

「透、余計なこと……」

「ふふ、愛が重いわ。こっそりやつてる分、なおさら」

「……」

「あ、あーごめん、嘘嘘」

無言でタコをひっくり返す棒を向けられ、慌ててヒヨる透だった。

「でも、実際マドちゃんこの三日間すごかったよ」

「は？ 何が？」

「ちよつとりカ……」

「すつごく甘えん坊さんで。お風呂にも一緒に入ろうとされて困ったよー」

「……へー」

今度は円香が透に睨まれる番だった。や、だって透がリカを食べるとか言うから……と、言い訳がましいことを頭の中でボヤいていると、透がすぐにいった。

「じゃあ、リカ。私と入ろう、今日は」

「え、マドちゃんとも入ってないけど……」

「いいから」

「じゃあ水着で入ろっか。マドちゃんも久々に入る？」

「私はいいい、三人であの風呂は無理だし。……透、甘えたら？」

「んー……じゃあ私もいいや」

自分も入ろうとしてやめた。けど、透が疑うなら入ったら良い、そう思ってたのだが、逆にそれは看破されたようで、透は首を横に振るった。こういうところ、幼馴染でありながら可愛げがない。

「……あつそ。ま、勝手にどうぞ。リカ、焼けた」

「え、まず私にちょうだいよ。私が帰ってきた記念パーティーでしょ？」

「なんで帰ってきただけで記念になるの。あんたが行ってきたのは戦場？」

「えっ」

我ながらメチャクチャなことを言っている自覚はあつたが、そのまま強引にたこ焼きを明里の皿の上に置く。

「ありがと、マドちゃん」

「マドちゃん、私のはー？」

「はい」

「え……これ焼く前のタネ……」

「ソースかける？」

「いけるかな？」

「やめなつて。お腹壊すよ」

明里がバカを慌てて止めると、自分のお皿の上のたこ焼きを箸で摘み、透の口元に運んだ。

「もう……しよーがないな、二人とも……はい、あーん」

「お、いえーい……あーん」

ま、これくらいの役得は許してやっても良いだろう。そのまま食べさせてもらって……。

「あっつー！」

「とおるん、一口は無理あるよ」

「はふっ、はふっ……！」

「吐くっ」

「っ、っ、っ……！」

「あ、そう。無理しないでね。口の中の火傷って鬱陶しいから」

……騒がしい。やはり、この二人に恋人らしきなど無理なようだ。それは自分も同じかもしれないが……まあ、せっかくだ。そのまましばらく放置した。

「そういうえば、リカは出ささないの？ 写真集」

「いや、俺は所詮、バイトだし。それに、今は仮面ライダーの撮影で忙しいから」

「それ、いつ終わるの？」

「知らない。けど、来年の九月でジユウド終わるし、それまでには」

「ふーん……」

なんて話していると、熱々のたこ焼きをようやく食べ終えた透が口を挟んだ。

「リカ、お水ある？」

「はいはい。これ、牛乳だけど」

「ああ、円香が毎日飲んで、寝る前に胸を揉む為の……あ、ホント嘘だから勘弁して」

「嘘じゃないでしょ、ほとんど言ってたでしょ。そして2回目でしょ」

「マドちゃん、牛乳飲んでなんで腕を揉んでるの？ 疲れてるの？」

「ほら、バカだから通じてないしセーフ」

「リカ、ほんとそのままバカでいて」

「え、な、なんで?!？」

胸と腕を聞き間違えるあたり、耳ではなく頭が悪い。……とはいえ、透がいつ自分の

それをしていっているのを見たのかも気になる所だが。

そんな中、牛乳を飲み干した透が声を掛けてきた。

「……あ、そうだ。円香」

「何？」

「プロデューサーが明日の仕事、仕事なくなっただって」

「は？」

「出るはずだったCMの撮影、延期になったから」

「なんでそれ最初に言わないの？」

「忘れてたわ」

……まあ、次の日にこっちから問い詰めるまで忘れてた高校時代に比べればマシになっただが。

その話に、明里が乗っかってくる。

「マドちゃん、CM出るの？ 録画しなきゃ」

「どうやってよ」

「なんのCM？」

「クリスマスケーキ」

「へー、じゃあそれ買おう」

「いい、買わなくて」

「えー、なんで？」

「作りたくない？ 二人で」

「お、良いね」

「いや私も混ぜてよ」

「何されるか分からないからいい」

「あーそう言うこと言っちゃやうんだー。拗ねちゃおーつと」

「拗ねる前にたこ焼きひっくり返して」

なんて話しながら、たこ焼きパーティーは和気藹々と進んだ。やはり、こうして三人で食事した方が楽しい。

×まったりしながら三人でとにかく食事を続けた。

×

さて、就寝時間。明里は自室のベッドにダイビングして目を閉じた。今日はそろそろ……寝る前のフィギュアの手入れをしないと。

なんて思いながら、こっそり買った円香と透のフィギュアの埃を払おうとティッシュを手にしたときだ。

「おーつす、リカー」

「あっ」

「ん？ ……わお」

バレた。フィギュアのこと。よりにもよって、スカートの中を磨いているときに。

「えっち」

「違うから！ 手入れしてただけで……」

「じゃあ、本物にも手入れしてよ」

「……は？」

何言ってるの……と、思ったのも束の間、床に腰を下ろした透は、明里の膝の上に両足を乗せた。

「マツサージ」

「え……して欲しいの？」

「うん」

「……」

……まあ、それくらい良いけど……でも、生足を揉んでしまつて良いのだろうか……？

いや、まあ致し方ない。とりあえずフィギュアを置いて、乗せられた透の足に手を置く。まずは足の裏から、と思ひ……爪の先端でなぞつた。

「わひゃひゃひゃつ」

「すごい笑い声出したな……」

「何でくすぐっておいてそういうこつ……くはははっ……!」

後ろに寝転がってジタバタするけど、絶対に足から手は離さなかった。なんかこうして爆笑する透は少し珍しくて可愛かったから。

さて、そろそろ嫌われるかも、と思ったのでマッサージを始める。柔道を習っていた頃から、この手のことは割と学んでいた。

「あつ……意外と上手」

「でしょ? ……ていうか、サイズ合わない靴でも履いてた? ……なんか硬いよ」

「サイズというか……普段、あんま履かないのとか。裸足の時もあつたけど」

「そっかー。お風呂入った時にちゃんとマッサージした方が良いよ。指と指の間とか開くように」

「んー……じゃあ、リカやってー?」

「水着着るなら良いよ」

「よし、じゃあ今からやろう」

「えっ、い……今から?」

もうお風呂入ったのに……いや、入ったからこそお湯に浸かるだけとはいえ……なん

て思っている間に、透は立ち上がった。

「着替えてくるから、リカは着替えなくて良いよ」

「うん……いや、俺も着替えるよ！」

「ふふ、待つてる」

たまに、透だけでなく円香もやたらと肌を見ようとしてくるのは何故なのだろうか？
いや、別に嫌なわけではないが。恥ずかしいだけで。

さて、言い出しっぺになってしまった以上は、自分も準備しなければ。まずはお湯を再度、沸かしてから、夏にしまった水着を引っ張り出す。

しばらく待機していると、ようやくお風呂が沸いたので入った。寒いので湯船で待機していると、透が後から入ってきた。

「おーっす」

「う、うん……」

夏と同じ水着……とはいえ、やはりちよつと一緒にお風呂というのは緊張する。

「前、失礼しまーす」

そんな自分の緊張を知ってか知らずか、平気で透はお風呂に入る。そして、自分に向かって生足を伸ばしてきた。

あれ、ていうかこれ……想像していたよりまずい事態なのでは？　なんて冷や汗が流

れる。ほぼ裸の女性の生足を、自分もほぼ裸で揉む……いや、そういう風に捉えるからだ。

えっちな目で見るな……と、言い聞かせつつ、手に取った。

「じゃあ、マッサージするね」

「うん」

そのまま、お湯の中につけたまま親指で圧していく。

「あ、あー……気持ち良い。二重で」

「痛かったら言っつてね」

「うん……んっ」

「……」

女の人が足を自分に向けて開いている……ちよつとえっちだ。だが、何とか気を落ち着かせつつ、続いて脹脛。手のひらで挟み込むように揉みほぐしていく。

「あー良いねージエツトバス感ー」

「凝ってますなー。ちよつと硬いよやっぱ」

「立ってること多かったからねー」

「お疲れ様ー」

なるべく会話すればエッチな目で見てしまうことはない。そんな時だった。透が不

意に、思い出したように言った。

「そういえばさ、リカ」

「何？」

「高一の夏休みで、私のオツパイ見たよね」

「っ、き、急に何?!？」

吹き出すのは何とか堪えたが……にしても、むせそうになってしまった。

「な、何言ってるのいきなり……!」

「いや、あの時やたらと後まで引き摺られて、会話も拒否られたこと思い出しちゃってさー」

「わ、悪かったよ……慣れてなかったんだよ、女の人の……そういうの」

「今もじゃん？」

「そ、それはまあ……」

というか、慣れている方がどうかしていると思う。その手の恥じらいは人間には必要だと思う。

そんな明里に、少しだけ頬を赤らめた透は、上目遣いで声をかけてきた。

「今のうちに慣らす？」

「えっ……」

どういう意味、と聞く前に、透は水着の裾に指を引っ掛けた。

「っ、な、何して……………」

「見る？ 中」

「み、見ないよ！」

「でも、見たくないわけじゃないんでしょ？」

「え…………や、見たくない……………」

「それ失礼。彼女に。本音は？」

「…………み、見たくないことはない、です…………」

それはそう。多分、裸をマジマジ見ると勃つてしまっただろうし。それに…………まあ、何れは見ることになるだろうし…………。

「だからさ、今のうちに」

「…………で、でも…………」

「大丈夫、私も死ぬほど恥ずかしいから」

「…………」

…………どうしよう、見るだけなら良い、のだろうか…………？ 円香も一緒のが良いのだが

…………多分、もう寝ているし…………。

いや、まあ言ってしまうえば既に見ているわけだし、あんまり気にしなくても良い気も

……。

「……」

いや……待て。仮に見るとして……自分が見るだけになってしまつて良いのだろうか？ 男と女の身体は違うし、男の胸なんて同価値とは言えない。

つまり……あくまでも等価交換にするには……手を打つしかない。こちらも、恥を覚悟した上での手を。

「もし、とおるんが胸を見せてくれるなら」

「うん？」

「俺も、下半身を出すよ」

「……うん？」

何言つてんだこいつ、みたいな顔をされた。

「等価交換だよ。……いや、俺の下半身なんか等価と呼べるかは分からないけど、同じ身体の一部という部位的な意味合いと、恥を負うという意味では等価、と考えるしかない」

「え、でも……逆に良いの？」

「うん。覚悟は出来てる」

言われて、透は頬を赤らめ……そして、なんかその時が来たと同時に、やたらとその

赤みが強くなった。

「ま、待った！」

「え、何？」

「……………やっぱり、その……………またの機会に、しよつか……………円香に悪いし……………」

「え……………まあ、とおるんがそう言うなら……………」

……………ちよつと助かった。覚悟は出来ているとはいえ、普通に恥ずかしいし。でも、おかげで吹っ切れた。やはり、まだえつちな目で見るのは早い。

「もう少しマツサージするね。多分、太腿も凝ってるし」

「え、いやあの……………」

「ほら、動かない。疲れは早めに取るに限るから」

「ちよつと待って、まだちよつと恥ずかしい……………」

「いいから。脚は第二の心臓って言われてるんだから、ちゃんとケアしないと」

「あの、待つ」

このあと、メチャクチャマツサージした。透は夜中は眠れなかったらしい。

成長ではある。

ある日の朝、今日は朝食当番は明里だった。その為、それよりもはるかに早く起きて、ランニングの準備に入る。

ここ最近では毎朝ランニング。というのも、撮影が始まってからは割とハードなことも多かつたため、体を鍛えなければならぬ。

そんなわけで、ジャージ姿のまま歯磨きだけして部屋を出ると、珍しい顔が早起きしてきた。

「あれ、とおるん？ おはよ」

「おはよう。リカ……どこ行くの？」

「ランニング。行く？」

「行く……」

「あ、ほんとに？」

「待ってて」

との事で、透は着替えに戻った。意外……でもないのだろうか？ いや、でも意外だ。もう涼しい季節になってきたのに、外に出たいと言いつとは。この家の中で一番、コ

タツムリするであろう透が。

「お待たせー。よし、いこー」

「いや、ストレッチしてストレッチ」

「えー。大丈夫でしょー」

「坐骨神経痛、腰痛、膝蓋靭帯炎、アキレス腱炎、シンスプリント、あとはー……腸脛靭帯炎にならない自信があるなら良いんじゃない？」

「するわ」

と、いうわけで、屈伸、伸脚、前後、アキレス腱などおなじみのメニューをこなしてから、続いて二人で手を繋いで横に並び、逆方向に引つ張り合い、背中を合わせて腕を組んで持ち上げあい、今度は向かい合って肩の上に両腕を置いて、一斉に下を向いたり……と、入念にストレッチをしてから、走り始めた。

「リカー」

「んー？」

「どのくらい走るの？」

「知らん」

「え」

「飽きるまで」

「ふふ、二度寝しようかな」

「えー。まあ嫌なら仕方ないけど……」

「嘘嘘。リカと一緒に走りたいたい」

なんて呑気な話をしながら、スタコラサッサと走る。早朝のランニング……最初はしんどいけど、慣れると心地良さが出てくる。朝から汗を流している感じが悪くなかったりする。

その他にも、人通りの少なさがまた気持ち良さに拍車をかけている。

「なんかあれだね、良いね。ランニング」

「でしょ」

「人少なくて……あれ、なんか……良いわ」

「分かる。非日常感が」

「挽肉感？ ……あー、分かるわ。ランニングの後はハンバーグ食べたい」

……相変わらずの会話だった。噛み合っていないのにそのまま話が続いてしまう。

「ハンバーグかー、朝から重くない？」

「大丈夫でしょ」

「うーん……まあそうか。でも仕込みとかしてないから時間掛かるよ」

「あー……じゃああれ、ハンバーガー」

「同じだから。……あ、買って帰りたいってこと？」

「え？ いや違うけど。リカの手料理が良い」

「りよかい」

話しながら、たつたかたつたかと走る。川沿いに差し掛かり、さらに自然があふれた道を進んだ。

そんな中、前方から走ってくる人影と犬。それを見るなり「あつ」と明里は目を輝かせた。

「ポチー！」

「ワン！」

「あら、明里くん。おはよう」

「おはようございます」

マラソンする時、たまに顔を合わせる女の人だ。同じ大学らしく、顔と名前を覚えられている。

自分と顔を合わせる度、チワワのポチが明里の方へ飛び込んで来た。

「よーし、よしよしよし！ 久しぶりー」

「今日もマラソンしてるの？ 偉いわねー」

「いえ、体づくりなんです。……よーしよしよし」

「ふふ、良いなー、ポチ。明里くんにも撫でてもらえるなんてー」

「いや、先輩は別に撫でられたくないでしょ」

「それでもなかつたりして？」

「はいはい。じゃあ俺、もう行くんで」

「ええ、またね」

そのままポチを撫で抱っこして撫でて撫でて撫でくりまわして、ようやくスキンシップを終えて走り出した。

「とうっ」

直後、普通に後ろから蹴りが背中にめり込んだ。見事に腰にヒットし、そのまま土手沿いの斜面を転がり落ちる。柔道をやっていたら骨折していた。

「いったあ……何すんの？」

「ふふ、こっちのセリフ。それは」

「え、俺とおるんにドロップキックしてないよ？」

「ふふ、バカじゃないの」

「えっ」

「今の人誰？」

「朝、ランニングしてる時に偶々、知り合った人だよ」

顔を合わせる頻度が多かったのと、犬が明里に懐いたのがきっかけでたまに挨拶するようになった。

「ポチが俺に懐いちやつてさー。もう可愛い事可愛い事」

「ふーん」

「あの人も大学同じなんだよね。たまに授業で顔合わせるし。先輩なのに」

「ふーん」

「だから、割と話したりするつていうかとおるん、腰踏まないでなんか痛い痛い重い痛い」

すごい転がっている自分の腰を踵で踏んでグリグリしてくる。ネジを素手で入れるの下手くそな人が無理矢理、ねじ込んでいるみたいに。

「リカはさ、本物のバカなの？」

「えっ、な、なんで？」

「私と円香が知らない所で女の人の知り合い作ってたんだ」

「え、知り合いって……俺別にあの人の名前知らないよ」

ペットの名前知ってて飼い主の名前知らないのはちよつと申し訳ない気がしないでもないけど、何にしても知り合いと言うほどの仲じゃ……と、思っていると、透がジト目のまま言った。

「でも顔は知ってるじゃん」

「えっ、いやまあ……」

「じゃあ、顔見知りでしょ」

そういう捉え方もできるが……まさか、透に論破される日が来るなんて……と、少し冷や汗を流してしまった。

「……で、でも浮気とかじゃ……」

「そういう問題じゃない。女の人と知り合ってたのが問題」

「ご、ごめんなさい……」

「彼氏がそんなんじゃない、彼女達も他の男の人と仲良くなっちゃおうよ？」

「えっ……」

「いや、仮の話だから。しないで、そんな泣きそうな顔」

そうは言われても、そんなことを言われたら不安になる。

「……でも、同じだから。私達も」

「ごめんね。もう会っても挨拶だけにするから」

「うむ」

「あ……じゃあ、お詫びと言っちゃアレだけど、俺の新技見る？」

「見る」

そう言うってから、明里は透から離れて軽く助走のスペースを取る。本当は来週の日曜日にお披露目の技だったのだが、致し方なし。

軽くステップを踏んだ後、両手を綺麗に揃えてロンダート、着地の直後、両足を真上に振り上げてバク宙……ただし、捻りを加えながら再び正面に向いて着地、さらにそこから前方に両手をつけて側転を繰り返しながら、最後に再びロンダートで着地……そして、腰を落として背負い投げのモーションに入った。

「ライダー・ハリケーン背負い投げ」

「おおー、カッコ良い」

「ふっふーん。でしょー?」

「てか、体操部? いつの間にそんなん出来るようになったの?」

「色々あつて」

さて、そろそろランニングを再開しなければ。早く帰って朝食を作る必要もあるから。

「行こっか」

「うん」

二人で走り始めた。

×××

走り始めて、およそ20分が経過した。少しずつ疲れてきて、透は少し息を乱し始める。

「とおるん、平気？」

「うん、平気。アイドルだし」

「おー、流石」

普段はもつと早いペースで走っているのだろう。余裕そうな明里が声を掛けてくれる。その心遣い、嬉しいけど変に悔しかった。なんか弟のくせにムカつく、みたいな。

「まだまだ余裕だから。もつと上げられるから、ペース」

「いやペース上げられそうないペースで走るのがランニングだから」

「いやだから二段階上げられる中で一段階上げられるから」

「いやそれくらいの余裕は取つといた方が良くから」

「いやいいからペース上げて」

「……」

ゴリ押しに弱いのが明里である。ハンターハンターで言うなら、強化系バカに弱いタイプ。従って、明里は仕方なく走りながら肩を落とした。

「分かった。でも泣き言言っても知らないからね」

「任せて」

そんなわけで、ペースを上げられたので自分も頑張っただけでいい。でもヤバイ。思ったより速い。いつも一緒にいたし部活にも入っていなかつたから忘れてたけど……こいつ、体育会系ばりに運動神経良いんだつた。

「……はっ、ほっ……はっ……はっ……！」

「大丈夫ー？」

「楽勝」

「はいはい」

嘘である。割と疲れてきた。だが、もう少し……もう少しだけ頑張らないと……と、自分に言い聞かせた。

そんな時だった。ずるり、と足を滑らせた。わぎとじゃない。でもこのペースで走つてたらいつか転ぶだろうな、とは思っていた。

これで転んで……おんぶしてもらおう……！ と、思ったのだが。

「ほらあ、大丈夫じゃないじゃん」

「っ……」

抱き抱えられるように支えられてしまった。完璧なムーブとキャッチングに思わずときめいた反面……でもやっぱりやって欲しいことは別だった。

「うぐあー、脚捻ったー」

「いや捻ってないよ。いつか転びそうだったからずっと見てたし」
「ひーねーっーたー!」

「いだった。叩くな蹴るな捻った足で」

「とにかくもう立てないから」

「立ってるじゃん」

「フアールフアール」

「……むしろネ○マール?」

その場で膝を抱えて転がり始める透を見て、明里は小さくため息をついた。仕方なさそうに小さな笑みを漏らすと、自分の前にしやがみ、手を貸してくれる。

「もう……分かったよ。要するにこうして欲しいんでしょ?」

「そうそう、そういうこと」

ようやく分かったようで、自分の前にしやがみ込んだ明里は……掴んだ透の腕をぐいっと引き込んで、そのまま正面から抱き上げた。

「えっ……!」

「抱っこして欲しいんでしょ?」

「そ、そっち?」

「違うの? さっき犬を抱っこした時も羨ましそうにしてたし……」

「ち、違くないけど……」

このまま街を走る気なのだろうか？ おんぶならまだ恥ずかしくないけど……なんか、抱っこって恥ずかしい。胸が、胸に当たっている感じがやたらと照れてしまうし、顔が見えないのにおんぶより距離近く感じるし……なんか恥ずかしい。

「あ、あの……やっぱ」

「じゃ、レッツゴー」

「ちよ、え」

そのまま走られてしまった。抱っこだから、自分の視線は進行方向とは真逆を向いている。その状態のまま運ばれているのは小さい頃に、遊び疲れた時の帰り道以来な気がするが、大人になってからも悪くない。なんか空中でムーンウォークしている気分だ。

「……ん？」

そんな中、ふと気になったのは、すれ違う人達の視線。目を合わせないようにしていたのだろうが、明里の視界から消えるとみんながみんな振り向いてくる。

これは……悪目立ちしている。いや、普段の自分なら別に気にならないが、なんか今日はやたらと気になってしまった。

「あ、あのっ……リカっ、流星に恥ずい……」

「大丈夫、重くないよ？」

「いやそんな心配してな……」

「もうすぐ着くから、頑張つて」

「……うぐー」

もうされるがままになるしかなかった。そのまま割と人通りが増えて来た街の中を走られ、たくさんの注目を浴びながらゴールするハメになった。

「ふう〜……」

軽く一息つきながら減速する明里。やがて、徒歩になりながらゆつくりと呼吸を整える。その間もずつと抱っこである。なんだかんだ汗をかいているわけだが、それを間近で吸えるのは悪くない。

「よし……オツケー。とおるん、着いたよ」

「……リカつてさ、ホント意地悪だよね」

「えっ、な、なんで？」

「天然で。天然意地悪」

「そ、そんなに性格悪い……？」

「良いからこのまま家の中運んで」

「あ、うん」

そのまま家の中に入った。

「あ、靴脱がせて」

「はいはい……もう、甘えん坊なんだから」

「今日はそういう日ー」

なんかもう羞恥心が振り切つてどうでも良い気分になって来た。今日は明里の上で大量に甘えてしまお……。

「……おかえり」

「あ、マドちゃん。ただいま」

「っ」

ビクツと肩を震わせてしまった。別に不味くはないけど、置いて行ったのはまずかつたかもしれない。

「どこ行つてたわけ？ 逢引？」

「ランニング。とおるんが急に行きたいってなったから」

「じゃあなんで抱っこする必要があるわけ？」

「とおるんが足捻つて立てないって言うから」

「……ふーん」

……バレてる。嘘が。いやまあかなり強引だったし、円香にはバレて当然なわけだが……。

でも、降りたくない……なんて思っている間に、明里が靴を脱がしてくれて、その後で自分の靴も脱いで家の中に上がる……そんな時だ。

「アウチっ」

「ちよつ、マドちゃん!!?」

ドテツ、という鈍い音が耳に響く。何事?　なんて考えるまでもない。円香が転んだのだろう。

「急に何してんの?」

「抱っこ」

「は?」

「私も転んだから、抱っこ」

「え、なんで家の中で?」

「透は抱っこするのに私はしないんだ。ふーん、別にそういう感じでも良いけど……」

「わ、わかったわかった!　おいで!　今とおるん降ろすから……」

「やだー」

「ちよつ、絞めないで絞めないで……!」

「樋口マウント」

「登って来ないで!!?　危ないから……!」

「やだ」

そのまま二人がかりでしがみついた。

「ちよつ、二人とも重」

「円香、このバカ私達以外に女の子の友達作ってた」

「……は？」

「ひえっ!!?」

しがみつく力が抱き潰す膂力へと変化していった。

「ふ、2人とも痛い！ 重い！」

「重いつて。2人で力士並みに感じるほどだつて」

「樋口&浅倉クリンチ」

「言つてねええええええ!!?」

×そのまま締め上げられた。

×

「つたく……あのバカ」

仕事の円香は、説教をかまして家を出た。あの野郎は本当に色々と無自覚なくせに独占欲だけやたらと強いのだ。

それ、正直どうなのだろうか？ 早い話が、円香と透には可能な限り男と関わって欲

しくないけど、自分は女の人の友達を作ります、って絶対おかしい。

や、もちろんプロデューサーとか社長みたいな仕事上の付き合いは認めてくれているけど、何にしてもなんか釈然としない。

ここは一つ……自分と透ももう少しあのワガママ少年に厳しくするべきか……。

そんな事をしみじみと思いながら、事務所の駅に着いたので電車を降りて、トイレに入った。

用を済ませてから手を洗うと……目に入った鏡の中の自分。新しく出した白いコート姿。それにより、出発前の光景が脳内にフラッシュバックする。

『とにかく、次はないから。ああいう実は危なさそうな人と関わらないで』

『え、あの人別に俺にそんな感情は……』

『抱いてた』

『ギルティ』

『わ、悪かったから！ 早く行かないと遅刻しちゃうよ！』

『ん』

『あ、マドちゃん。白いコート、とても似合ってるね』

『……それはどうも。ミスターKY』

『けーわい？』

『円香、何年前の人？』

『うるさい』

……あんな流れも何も無い状態で出て来た一言で取り乱して古語を使ってしまったり、自分は割と単純なのかも……なんて思いながら、事務所向かった。

駅を出て歩いている途中だった。

「あ、円香」

「……」

明里から許されている数少ない関わって良いとされている男性の声だった。

「おはようございます……えっ」

「ん？」

振り向くと……プロデューサーも、同じ白いコートを着ていた。思わずそれを見て、

円香は「げっ……」と声を漏らす。

「あ、あはは……被っちゃったな……」

「……お気になさらず」

円香はメチャクチャ気にしていた。パールックなんて明里ともしたことなんてない……というの以上に、ヤバイ。もしこの状態をバカに見られたら……。

「プロデューサー、確認ですが本日は私と外出する予定は？」

「あるけど……え、なんで？」

「彼氏を殺人犯にしたくないので」

「あ……なるほど。大丈夫、コート事務所にもう一つ置いてあるから」

「そうですか」

×なら良いか……なんて思いながら、とりあえずそのまま並んで事務所に向かった。

×

×明里の仕事の現場では、明里がアクロバティック背負い投げを披露したところだった。

「ライダー……ハリケーン背負い投げ！」

ぶん投げられた怪人は、爆発四散という演出。ちなみに、他のライダーは他の場所で戦っているという設定。

「はい、カーツト！ そこまで」

言われて、各々は動きを止めた。これで本日の撮影は終わり。軽く伸びをしながら、明里はマスクを脱いだ。

「ふう……」

「お疲れ、明里せんぱい」

「ありがとう」

雛菜と「いえーい」とハイタッチする……が、ハツとした。雛菜は友達とはいえ、あまりこういう仲良しならではの行為も控えた方が良いのかもしれない。

ま、あまりお疲れ様のタイミングで盛り下がるようなことも言わないけど。

撤回の準備を手伝っていると、雛菜が声をかけて来た。

「そういえば、明里先輩。円香先輩、機嫌悪かったけど何かあったの？」

「え？ あー、うん。まあ」

「何したの？」

「とおるんとランニング行って大学の女の人と会ってそれマドちゃんにバラされた。

……でもちゃんと謝ったよ？」

「あは、円香先輩粘着質だから」

酷い言われようだったが致し方ない。この子と円香は、中々特殊な関係のようだから。いや、仲悪いとかでは決してないのだが。

「でも……確かに明里先輩、女の子の知り合い多いからなく。ただでさえ二股してるのに」

「なんか知らないけど男は俺の周りに寄って来ないんだよなあ……」

「なんでかな」

「あは、知らない」

とはいえ、まあ男子大学生的に言えば「モデルのあいつと一緒にいると俺よりあいつがモテそう」てな具合だった。

「あ、じゃあさ、これから円香先輩のどこ行かない？」

「え？」

「機嫌損ねちゃったときは、やっぱご機嫌取りに行かないと？」

「そういうもん？」

「そういうもんだよ。事務所の前までおいで？」

「よっしゃ、行くわ」

×話しながら、とりあえず片付けた。

×

さて、仕事を終えた円香とプロデューサーは、事務所に戻って来ていた。円香はさつさと帰宅するためにコートを着込み、その横でプロデューサーもコートを着た。

「あなたも今帰りですか？」

「いや、俺はこれから別の現場の小糸のお迎えだよ」

「そうですか。遅れたらぶっ飛ばします」

「お、おう……」

本当なら一緒に事務所を出るようなことはしたくない。さすがにプロデューサーも

着て来た白いコートを着ているから、万が一にも明里に見られたら面倒だ。

だが、他の人ならいざ知らず、小糸なら遅れたら万死に値する。それに、たまたま二人で事務所を出た時に何を思っただここのまで来た明里に見られる可能性なんてかなり低いはず。

なんて思いながら、二人で事務所の階段を降りた時だ。

「……あ、来たよ？」 明里先輩」

「マドちゃ……は？」

「……はあ」

よくもまあ百億分の一の可能性を引けるもんだ、と円香はため息が漏れた。これだから困るというものだ、行動が全く読めないバーサーカーという奴は。

ふと横を見ると、プロデューサーは大量に汗を流していた。気持ちは分かる。今回は背負い投げじゃ済まないかもしれないのだから。護身術として柔道を習った明里は、当然ながら競技で出たことがあるわけではない。

つまり、禁止技なんて概念は存在しないのだ。仮面ライダージュウムの進化形態「禁術モード」になった際の必殺技、ライダー朽木倒しなどやられたら怪我では済まないかもしれない。

「あは~~~~♡ 円香先輩とプロデューサーペアリックとか超仲良し~~~~」

「雛菜黙ってお願いだから」

何をあぶないこと言っているのか、あのアホは。プロデューサーも心臓を起爆させるかのように「はうあつ!!？」と声が漏れていた。

一方で、明里は……少し俯いていた。お陰でどんな表情をしているのかは見えないが……まさか、怒りより悲しみが勝ってしまったている？ マズい、朝にあそこまで怒っておいて、そんな思いさせてしまったのは流石にマズイ。

「あ、あーリカ。これ実は別に……」

「お疲れ様、マドちゃん」

「え?」

素敵な笑顔で出迎えてくれた。

「雛菜が『怒らせちゃったらご機嫌取るしかない』って言ってたから、迎えに来ちゃった」
雛菜あんたの所為か、この修羅場……と、思ったが、今は気にしている余裕はない。なんか思ったより爽やかな反応をされてしまった。なんか、それはそれで困った。

「あ、そう……」

「じゃあ、帰ろっか。雛菜ちゃんもうちで何か食べる?」

「食べる〜!」

「は? なんで?」

「いやせつかくここに来させてくれたし」

「あはくくく♡ 明里先輩好きくくく」

「は？」

「お、俺もう行くからな……」

プロデューサーが退散していく中、とりあえず円香は最悪の事態は避けられたことにほつとしておいた。

その日の夜、雛菜に晩御飯をご馳走し終えた後、明里が雛菜を駅まで送り、その間に円香と透は家で待機。その間、二人はのんびりと晩御飯の食器を片付けていた。

「……ね、円香」

「何？」

「良かったの？ 雛菜とリカ二人で出かけさせて」

「大丈夫でしょ。あの二人なら」

とはいえ、まあ明里が二人で出掛けたがったのは気になる。自分から行くと言って、ついて行くこうとすると断られてしまった。

雛菜が相手だし、今朝のこと話したばかりだが平気だと思って許可したわけだが。

何より……その、わざとじゃないとはいえ他の男とペアリックを見せつける形になっ

てしまったから、あまり強く言えない。

でも、あんな風に流せるようになっていたなんて……明里も、もしかしたら知らない間に成長しているものだな……なんて親目線で笑みをこぼした時だ。

「ただいまー」

「あ、おかえりー」

すぐに出迎えに行こうとする透を片手で止めた。

「ちよつと。まだ途中」

「いるでしょ、出迎え」

「じゃあ私が行く」

「えー、珍しい。なんで?」

「なんでも」

そういう気分だから、というだけだ。

「じゃあ、二人で」

「……んっ」

そんなわけで、わざわざ二人で出迎えに行った。リビングを出て玄関まで行く……二人とも固まった。白いコートに白いスラックス、白いシャツに白いベルト、そして白いスリッパを履いた上で白い帽子を被った明里が立っていたからだ。

「……」

「……」

「……どうしたの？」

違った、メチャクチャ効いていた。一周回って冷静になるほど。でも全然、冷静じゃない。まさか、今の一瞬でわざわざ服を全部買ってから帰ってくるとは……。

少し悪い、と思う反面、やたらと安心してしまった。もしかしたら、自分は嫉妬に狂ってバイオレンスになる明里のことも、なんだかんだ好きだったのかもしれない。

まあ……何にしても。

「リカ、今すぐ着替えて」

「えっ……な、なんで？　もしかして……やっぱりプロデューサーと、二人だけの色だった？」

「ダサイ。全身白はない。ウルトラマンみたい。透が笑い死にそうになってる」
「えっ」

お願いだから、その辺考えて欲しかった。

あほばかトライアングル。

樋口円香には、昔から疑問があった。ハッピーハロウィンって、何でハッピーをつけるの？ と。

だって、あれは確か厄除けの奇祭。別に愛でたくない。にも関わらず、毎年毎年想像力が足りないアホな連中が渋谷に集まり、厄除けにならなさそうなコスプレをして事件を起こす……どう考えても普通じゃない。

そんな間抜けな季節がもう少しだ。実を言うと、円香達ノクチルのハロウィンはもう終わった。ついこの前、ナース服での写真撮影を終えた。確かハロウィンに合わせたお菓子の広告用の写真だ。

「……はあ」

プロとしてやらなければ、という意識はあったが、あまり気が進まなかった。ていうか、何でナース服なのか。いや、黒かったりレースだったりで普通のナース服でないことは確かなのだが……。

まあ……何にしても、今日のハロウィンは家から出ないでダラダラしたい……なんて思っているときだ。

コンコン、と言うノックの音がする。どっちだか知らないけど、基本的にノックする
ように言っても忘れられるので、もういいやって感じ。

だから、どっちだかわからなかった。まあどっちでも良いわけだが。

「開いてる」

返事をしたが、またコンコンとノックの音。どうぞって言ったのに何だろう？ と、

片眉を上げる。

「開いてるって」

だが……また帰ってくるのはノックの音。なんだろう、こいつ？ と、片眉を上げる。

なんか……その様子に少し違和感。ノックをする二人じゃないのに、ノックを連発す
るのはちよつとおかしい。ふざけてるのだろうか？ と、少しずつストレスが溜まって
くる中、またコンコンツと言うノックの音。

ブチギレてもおかしくないとこだが、ブチギレるより少しヒヤツとする。ノックの音
が、少し強くなった気がする。

「っ……な、何……？」

なんか……透でも明里でもない気がして来た。二人ともこんな荒つぽい真似はしな
いし。いや、明里はブチギレるとするけど、朝から機嫌が悪いことは滅多にない。

じゃあ誰なの？ という話だ。……まさか、本当に除けるはずの厄がやって来たのだ

ろうか……。

ゴンゴンゴンッ！

「ひっ……！」

とうとう叩き始めた。ちよつと怖くて、布団の中に被ってしまった。何なのだろうか？ 一体何事……もしかして、本当にお化け……というより、妖怪か魔物？ いやどつちも一緒だ。

何にしても……殺されてしまうかも……と、心臓が少しずつ高鳴って来る……そんな中、ガチャッ……と、ドアノブが静かに下げられる音がした。

「~~~~っ ！！？」

ヤバい、と冷や汗をかく。入って来た。どうしよう、ベッドの中に武器になりそうなものは何もない。

ドツドツドツ、と心臓が爆音で鳴り響く。まさか……本当にそう言う奴……？ いや、まだ分からない。雛菜のアホがふざけてる可能性も……と、思いながら布団をほんの少しだけまくって、外をチラリと覗き込んだ時だ。

……そのちようどめくった隙間から、赤く輝く瞳が中を覗き込んでいた。

「っ！！？ っ！！？ っ！！？」

パニックになり、ゾゾゾツと布団の中で身悶えしてしまったのが仇となった。音を大

大きく立ててしまった。

それと同時に、布団が大きく引つ剥がされる。外に立っていたのは、ネジが刺さった頭に包帯を撒き尽くした男と、顔面が狼のマスクを被った男か女か分からない奴だった。

「ハッピーハロウイイイイン……!!?」

「きやああああああああ!!?」

思いつきりらしくない悲鳴を漏らしながら、思わず立ち上がって手元に布団と枕の二刀流。そして、思いつきり振り回した。

「ちよつ、いだつ……ま、マドちゃん待つ……!」

「落ち着つ……あいてつ。円香落ち着いっ……!」

「キヤー! ワー! ピヤー!」

パニックになりながら、怯んだ隙に窓際に倒れるように逃げ込みつつ、タンスを倒してバリケードを作りながらベランダに逃げ込む。

文字だけ見ると割と冷静な行動に見えるが、窓に突っ込んでガラスを割って外に飛び出しているの、割と大慌てである。

「ちよつ、マドちゃんガラス! 散ってるから! 怪我するから!」

「やばつ、マキビシ作戦じゃん」

そのまま、昨日の夜に雨が降っていた庭に出て、足やパジャマが土で汚れるのも気にする余裕なく逃げようとしたが、石に裸足で躓いて転んでしまう。それでも頭を気にしている余裕はない。

「とおるんヤバい！ マスク取ろう！」

「ふふ、めっちゃビビるやん。ウケる」

「ウケるのはさつきまで！」

そう言いながら、頭にネジの方がマスクを取った。それに続き、狼の方も手で自分の口をこじ開け、中から顔を出した。

ガラスを踏まないよう慎重に外に出て来て、焦った様子で笑顔を浮かべて手を振ってくる。

「あかり……とーる……？」

「そ、そう！ イエーイ、マドちゃん！」

「ハッピーハロウィーン。がおー」

「……」

ということとは……ノックも、中に入ってきたのも……布団の中を覗き込んだのも、全部演出……？ くだらない悪戯の……？ と、ホツとすると同時に……苛立ちが急激に増してきた。

この野郎ども……本当にこいつら……と、イライラにイライラが重なって来た。このクソガキども、どうしてくれようか、的な。

「だ、大丈夫？ マドちゃん……」

「朝からめっちゃ泥だらけじゃん」

「正座」

「えっ」

「正座。そこで。今」

「え、あの……ここ、外……」

「このコスプレ、結構高かったんだけど……」

「正座」

「……」

雷が落ちた。

×

「円香ー、おわんないよー」

「……」

自室の部屋からリビングまで透の声が聞こえるが、ガン無視である。透のアホには部屋の掃除をさせている。もうあの布団はダメだ。ガラスが散らばってしまったから、捨

てるしかない。危ない。

で、後は粉々にしてしまった窓。これはもう弁償である。シェアハウスなので、管理人さんに透と明里に割り勘させる。

あと倒れたタンスとか色々と、全部透にやらせている。

そして、もう1人の明里は。

「……お、お待たせ」

「じゃあ、私の体を綺麗にして」

ナース服を着させた。そして、そのまま自分の処置をさせることにした。転んだ時に擦りむいた膝、窓によつて切つてしまった腕、石に躓いた足、泥だらけのパジャマなど、全部。

そのためにわざわざ着替えも何もせずにはリビングで待っていた。汚れたリビングも片付けさせる。

「あ、あの……やっぱ恥ずかしいんだけど……」

「はっ。」

「い、いえ……なんでもないです……じゃあ、その……まずは怪我の処置から……」

着痩せするタイプの明里は、服を着たら華奢な身体に見えるのだ。なので、正直ナース服姿はちよつと似合う。

そんなナースさんはまず腕の怪我から処置。消毒液をティッシュに染み込ませ、傷口を拭いてくれる。

「沁みるんですけど」

「っ、ご、ごめんね？」

予想以上にこつちがビビってしまったとはいえ、やはり結果だけ見ればやりすぎである。そのためマジギレしてやったのだが……その結果、二人とも超従順になった。まずは絆創膏で傷口を塞いでもらう。

さて、続いて足だ。

「あ、あの……次は足を」

「ん」

言われたので、足を差し出した。

「えっ、お、俺が脱がすの？」

脱がす、という言葉に少し違和感がある。裾を捲るのでは無いだろうか？ まあ何にしても、その通りだ。

「ナースでしょあんだ」

「や、まあ……じゃあ、腰浮かして」

「？」

なんで？　　と思いつながら、椅子に両手をついて身体を持ち上げる。その直後、明里はズボンを普通に足首まで脱がし始めた。おかげで、パンツが剥き出しになる。

そのあまりにも堂々としたセクハラに、思わず膝を持ち上げてボディを蹴り上げてしまふ。

「ぐほっ!?」

「何してんのいきなり！」

「え……いやだって、消毒しないといけないし……」

「裾を捲れば良いでしょ！」

「え、膝から下が泥だらけなのにそんな事したら、傷口がもつと汚れちゃうんじゃない？」

「っ……あ、そう」

意外と考えた上での行動だった。流石は生物学部。いや、でもズボン脱いでパンツ丸見えのまま処置を受けるって、どんなプレイ？　と、小首を傾げてしまふ。

こんなの、まともな人では恥ずかしくて処置どころじゃない……じゃな……いや、悪くないかもしれない。

そう思ったので、やってもらう事にした。

「じゃあよろしく」

「う、うん……」

……それに、いい加減明里を目覚めさせるきつかけになるかもしれないし。そう判断して、パンツのまま処置してもらった。

「んっ……沁みるっばだから……!」

「(っ、(っめん)」

……いや、謝られると少し申し訳なくなるが……でも、今もちよつとム力ついているのでつい文句を垂れてしまう。あと……やっぱパンツを下から覗き込まれているみたいで恥ずかしくて。

そんな自分の前に、明里は人差し指と中指を二本立てて差し出してきた。

「っ、な、何……?」

「これ、どうしても痛かったら噛んで」

「え……何それ。私にも吸血鬼のコスプレしろって?」

「いや、何か噛んだりすると痛みとか耐えられる事もあるから。……あ、でも本気で噛まないでね。人の顎も中々なもので、やる気になれば人の指くらいなら噛み切れるから、どうしても我慢できない時まで待って」

「……」

なんでこう……変な方向に優しいんだろう、この男は。もう狂っているまでである。その結果が、さらに際どい変態プレイみたいになっているのは、もはや芸術か何かだ。

正直、冷たい態度をとってしまふことに罪悪感を覚えつつも……そして正直、この機会を逃すと変態プレイの機会はもうないであろうという欲望が掻き立てられる。

そのため、円香は頬を赤らめながら、その指を啜えた。

「……」

「じゃあ、痛かったら噛んでね」

「ふ、ふあい……」

もうなんか主従が逆転しつつあった。不思議だ、ナース服着てる男なのに、やたらと頼り甲斐を感じさせられる。この男の光属性っぷりはどうなっているのか？

そんな中、ふと窓が目に入った。窓ガラスに映った自分は、パンツをむき出しにして、男の指を啜えたまま傷の処置をされている。何故か、指を啜えている顔は上を向かされてしまっていて、窓を見る自分の瞳は横目を見るように映されていた。

それが……なんか自分が責められているような絵で、恥ずかしさで頬が赤く染まるにも関わらず嫌じゃない、なんて自覚してしまつて……何故か、興奮してきて……下半身に、変化が……。

「ふい、ふいふあー！」

「ワールドカップ？」

「ひ、ひがつ……ちよつ、ふあつへ……！」

「ダーメっ、ばい菌入って膿んじやったら大変だよ。擦り傷一つで悪化するとどうなるかわからないんだから」

「つ~~~~~！」

今日ばかりは黒のレースで良かった！ と心底思いながら、そのままされるがままになっってしまった。

死ぬほど恥ずかしいのに、もう少し長く……なんて思ってしまう。まさか……自分は本当にマゾとかいうやつなのだろうか？

いや、そんなのなんか変態っぽくて嫌だ。絶対に……！

「……ちゃん、マドちゃんっ」

「っ、ふぁに……？」

「もう終わったから、指離してくれると嬉しいんだけど……」

「へ……もう？」

確かに、いつの間にか膝は絆創膏が貼られているし、なんなら泥まみれだった汚れも落ちているし、なんなら指先に湿布も貼つてある。これ全部片手でこなしてくれたらしい。ほんとの看護婦さんなのだろうか？

言われて、口を開ける。その間に、明里は口の中から指を抜く。つー……と、唾液が糸を引く。割と長い時間、突っ込んでいたから当然だろう。くつきりといった歯形

が、少しだけまた気恥ずかしかった。

「じゃあ、マドちゃん。着替えておいで。あとパジャマは危ないかもだから……悪いけど捨てよう」

「……着替えるも何も、部屋入れないんだけど」

「とおるんの服、借りてきて」

「……ん」

×そう言われて、とりあえず廊下に出た。

×

「……それでなんで俺の服!?!」

「良いでしょ。どっちの服借りても」

癪だったので、明里の部屋から勝手に拝借した。ダボダボだけど、彼シャツもどきと思えば悪い気はしない。

「じゃあ俺、とおるんのお手伝いして来るから……」

「は? ダメ」

「え、だ、ダメ……?」

「それより、朝ご飯作って」

「あ、あー……うん。でも、部屋なんかしないと、今夜……」

……それはそうかもしれない。泥棒が入ってきたら困る。でも……なんか納得いかない。

「じゃあどうぞ。私はお腹空かせて待つてるから」

「あーもう分かったよ。何食べたい？」

「チャーハン」

「はいはい」

しばらく待機。一人暮らしをしていただけあって、もう手慣れた様子で料理を作ってくれる。本当に頼りになる男の子に育ってくれたものだ。

良い香りが漂ってきて、お腹の減り具合が加速する。ネギと卵とニンニクとベーコン……最後に塩と胡椒をトッピング。

「はい、お待たせ」

「ありがとう」

「じゃあ、ごめんね。行ってくる」

「着替えてから行って」

「え、もういいの？」

「その格好を透に見られたいなら別だけど」

「……あつ、そ、そっか」

「10分後に透と戻ってきてご飯食べて」

「う、うっす！」

そのまま追い出した。

さて、別は大怪我したわけでも風邪を引いたわけでもない円香は、さつさと朝食を終える。美味しかった。その間に、朝のやることをやってしまおうと思い、歯磨きを終わって洗い物をして、テレビをつけた。

すると、そのタイミングでリビングに二人が現れる。

「……ガラス、なくならない……」

「しゃあないよ。ああなったらもう大変だから。濡れた布巾で雑巾掛けするしかない」

「窓外しておくんだっけ？」

「うん。今日中に業者が取り替えにきてくれるって。……窓の代金もその時払わないと」

「はあ……思わぬ出費……そんなに怖かったかな。私達」

なんて話をしながら入ってきて、やっぱりイラツとした。別に怖くない。演出が凝っていたから驚いただけだ。

「そこ、いいからさつさとご飯食べて片付けして私に尽くして」

「うーっす」

「あとついでにコーヒー」

反省しているのか怪しい所だったので、やはりもう今日は二人を顎で使って、贅沢のかぎりを尽くすことにした。

コーヒーを淹れてもらったので、一人ソファで横になりながらテレビを眺める。

その間に、透と明里が自分達の朝食を用意して食べ始めた。

「良かったね、倒れたタンスは中の物ぶちまけられなくて」

「それな。洋服も全部ダメになってたかもだったわ」

「でも、まさかあんなにビビられるとは……徹夜で作った甲斐はあったよね。衣装」

「うん。とおるんの可動式狼フェイスとか作るの大変だったんだから」

「ふふ、リカ本当にすごいよね。生物学部なのに私に似合うように設計とかできちゃうし」

「それは……まあね。でも、似合うのはとおるんが綺麗だからだよ」

「ふふ、ほんと最高。そういうしれっとしたところ」

「……こいつら、何中身のないイチャイチャを続けてんだ……と、徐々に苛立っていく。

「リカ」

「んー？」

「スクワット300回」

「え、今ご飯食べて……」

「は？」

「……は、はい……」

そもそも、この人達の何が入らないって、今日の準備のために前々から二人でココソソしていたと言う所だ。なら、今日くらいは自分に構えと言いたい。

……と、さつき自分から部屋を二人で掃除させておいて勝手なことを思っていると透が余計な口を挟んだ。

「ふふ、円香ってほんと可愛い嫉妬の仕方するよねー」

「あんたは今から腕立て伏せ300回」

「え」

「やらないと許さない」

「……あの、ご飯は？」

「……」

「は、はい……」

×そのまましばらく、筋トレさせた。

×なんとか一日で片付けは終わった。その後、容赦をなくした円香の指揮の元、バカ2

人を酷使して部屋の片付けを終わらせた。

「はい、お疲れ様」

「……し、死ぬ……」

「小さな破片も見逃さない……!」

「人の部屋で寝転がってないで、終わったんなら晩御飯の準備して」

「……来年はサプライズの方向を変えよう」

「同意」

元はと言えば全部こいつらが悪いのだから仕方ない。……とりあえず、次はクリスマスだろうか？ 透の部屋に忍び込んでやろうかな、リカに肩車してもらって巨大サンタでびびらせて……なんて考えながら、二人を引きずって部屋から追い出した。

片付けこそ終わったものの、まだ元には戻っていないものがある。……それは、円香の布団だ。これも2人に買わせなければならぬが、今日はとても無理だろう。

「じゃあ、透。晩御飯」

「え、私？」

「リカは私と布団選んで。ネットで」

「布団？ ……あーそっか。え、じゃあ今日どうすんの？」

「どうすると思う？」

「うちに寝袋あったっけ？」

鼻にストレートを決めておいた。この男はどこまでバカを言えば気が済むのか教えて欲しい。

「ちゃんと一人分空けて寝てね」

「あゝ……じゃあ、たまにはリビングに布団出して、広々使って寝る？」

「……ま、それでも良いけど」

話しながら、二人でパソコンをつけた。まあ……家具といえば二〇リかな？ とのこと、検索して布団について調べ始める。

「そろそろ冬だし、毛布も欲しいよねー」

「いらない。ダメになったの掛け布団と超薄い毛布だけだし、厚い生地のも毛布はクローゼットで寝てる」

「りよかいー。ちなみに、こんなのが良いーみたいなのある？」

「ない。布団なんてどれも一緒でしょ。リカに任せる」

一緒に選びたい、と言う気持ちがないわけでもないが、まあせっかく明里がいるわけだし、理系シジャパン代表みたいな思考で選んで欲しい。布団によつては、重すぎたり暑すぎたりするから。

「いや、マドちゃんのなんだからさ、俺が選んでも……」

「良いから。軽い奴とか温かい奴とか、生地見ればわかるでしょアンタなら」

「無理無理無理。俺そんな業界人じゃないから」

「や、だから……そんな正確な予測が欲しいんじゃない……」

「違うよ、リカ。円香が欲しいのは、もしかしたら今後みんな布団の中でする行為の機会があるかもしれないから、リカの好みを把握したいだけだよ。柄の」

「違う」

「え……マドちゃん、そんな理由で選んだ布団……むしろ普段から使いづらくならない……？」

「違うって言うてるでしょ」

「てかそれなら、とおるんも一緒に選ばないとじゃない？ ねえ？」

「あー……グー」

「何がグーなの。違うって言うてるでしょ。……や、ていうか」

円香は透の方に顔を向ける。

「あんたはご飯作って」

「えー。一人で作ってもつままないー」

「俺、手伝おうか？」

「ダメ」

「じゃあマドちゃん手伝ってあげてよ」

「嫌」

「ちえー」

ブーブー言いながら、透は台所に戻る。……ちよつと冷たくし過ぎただろうか？ その背中を眺めながら、どうしようか迷っている。と明里が口を挟んだ。

「……とおるん、今夜はみんなで寝るから。その時に枕投げでもしよう」

「……うんっ」

「また窓破るつもり？ やるなら別の事にして」

「じゃあ、布団で巻き巻き大会とか」

「何それ？」

「雛菜に小糸がよくやられてた奴」

「円香もやられてたよね。小糸ちゃんに馬乗りになられると機嫌が戻ってたけど」

「うるさい」

小学生の時の話だ。そのまま透は台所に向かった。

「……そんなことしてたんだけ？」

「布団にくるまってたら、馬乗りになられても不思議と重くないし不愉快でもないで

っよ」

「知らない。やった事ないし」

意外とそう言うの、男子もやってるもんだと思って……いや、明里はそういえば友達いなかったんだっけ、と思い出す。

「みんな、修学旅行とかでそんなことしてたのかなー」

「……あんたは何してたの？」

「修学旅行は、夜に宿を抜け出して動物とか探しに行つてたなー。東京にいない動物がいる気がして」

唯我独尊で羨ましいことだ。こいつに限って孤独が寂しいなんてことはなさそうだ。

「でも……まだまだ俺は二人の知らないこと、たくさんあるんだろーなー」

「……子供じゃないんだから、そんな事で拗ねないで」

「拗ねてないよ。羨んでるだけ」

「一緒」

「その点、俺は馴染んでる相手がいなかったから、マドちゃんとおるんが知ってる姿が全部だよ」

「……あつそ」

……無意識にホツとしてしまった。自分も割と独占欲が強い。

それを認めるのが癪で、また思わず捻くれた言葉を漏らしてしまう。

「ていうか、私達は明里が動物園に行くたびに暴走する姿は見えてない」

「え、見たいの？」

「ごめん、何でもないからやめて。お願い。ね？」

「そんな本気で止めに来るなよ……分かってるから」

「ならよし」

「今、そんなことして俺が殺されたら、動物が死罪になっちゃうから」

「死罪にならなくてもやめて。絶対に」

なんて話をしている時だ。机の方へ、透がヨタヨタした足取りで歩いてきた。

「お待たせー」

「お、きたきた」

「何作ったの？」

「火鍋ー」

無限の辛さと引き換えに健康を手に入れる地獄の食べ物だが、なんか癖になる味をしているもの。

中々悪くないかも……なんて思いながら、二人で運ぶのを手伝いに行くと……鍋の中で出来上がっていたのはマグマだった。具材が見えない。

「……」

「……」

「私に作らせたの二人だから。ちゃんと綺麗に食べてね」

×その日は食後のコーヒーは出なかった。

×

×さて、寝る時間。布団を三枚敷いたところで問題が発生した。

「掛け布団足りなくない？」

「それはそうでしょ」

「どうしょつか」

三人で顔を見合わせた。まあ実際の所、今更別に布団が一枚、足りないくらい大した問題ではないのだが。

「あ、じゃあやりたいあれ」

「何？」

「なんだつけ……布団でおしくらまんじゅう？」

「いや、固有名詞はないから」

「あー、グー」

そんなわけで、まずは三人で固まって布団の上で人間ピラミッドになる。だが、そのまま微動だにしない。

「……」

「……」

「……」

「これどうやって包まるの？」

「誰かが丸めない」と

「ふふ、三人じゃ無理だわ」

誰がどう見てもアホ三人である。やる前に分かりそうなものが……悲しいかな、これが大学生だ。

そんな中、明里がピンと来たように提案した。

「いや、いけるいける。俺とおるんが下になるから、マドちゃん上になって、布団の裾掴んで」

「ん、こう？」

「で、どうすんの？」

「で、このまま横に転がろう。俺が持ち上げるから、一気にね」

「なるほど」

「分かった」

それなら確かに可能かもしれない。要するに、海苔巻きと同じだ。

「じゃ、行くよ」

「うん」

「どんどこん」

「せーのっ」

そのままゴロン、と転がり始めた。一気に真横に転がり、三人の体に布団が巻き付く。

「よしよし、これこれ！」

「いけるいける！」

「ちよつと待って、目の前に壁が……！」

直撃した。壁まで転がりすぎて。三人で顔面から衝突し、そのまま固まる。

「……痛い」

「てか、暑くない？」

「うん。寝よっか」

普通に寝た。

ピンチにこそパワーは宿る。

今年も残りわずかの時期になった。クリスマスも過ぎて、今年のメインイベントは後、年末のみ。それに伴い、当然ながら三人の家は大掃除である。

「え、明日？」

「うん。実家戻るわ。二日くらい」

そんな話をしているのは、円香と明里。各々の部屋の片付けはすでに終えていて、リビングで明里がソファアールやテレビなどを退かし、その下を円香が雑巾掛けをするというコンビネーションを発揮しながらそんな話をしていると、廊下から透が声を掛けてきた。

「混ぜて、私もそつちに」

「いいから自分の部屋の掃除して」

「あ、とおるんの部屋、手伝おうか？」

「リカ、甘やかさないで。自分の部屋くらい自分でやるつて決めたでしょ」

透を部屋から追い出す。前に大掃除した時は大変だったので、いい加減あのバカを甘やかすのは控えなくては。

さて、そんな中で円香は明里に声を掛ける。

「で、実家？」

「うん。ほら、うちの事務所、スポンサーが父ちゃんだし、その忘年会に俺も出ろつて言われちゃってさ」

「ふーん……まあ仕方ないけど」

「30には戻れるから、それまでとおるんと一緒に仲良くしてて」

「あんたは親か」

そんな呑気な話をしながら、掃除を続ける。まあ実際、仕方ない。何せ、彼の父親にはとてもお世話になっている。特に長期休暇とかで。

なので、そういう時にはむしろ進んで協力してあげるべきなのだろう。

「……あつそ。なら、頑張つて」

「そう寂しそうでしょ、電話するから」

「は？ してない。死ね。電話しなかったら殺すから」

「うん。可愛いね」

「うるさいばか」

本当に人を嬉しく苛立たせる男だ。困るほど困らせられてしまう。まあ、嫌と言うわけではないが。

「……とにかく、早く帰ってきてよね」
「うん」

そんな話をしている時だった。リビングの扉がまた開かれた。

「リカー、終わらないー。掃除ー」

「もう……仕方な」

「ダメ。今日はリカ、私の部屋で寝るから」

「えー。じゃあ私もー」

「なら部屋片付けて」

「円香の部屋で寝るなら私もー」

「狭いから嫌。あんたまた大きくなったし」

「え、そう?」

「え、とおるんまだ背伸びてるの?」

「そう」

× 適当にアホをあしらっておきながら、とりあえず円香は透を掃除に戻らせた。

×

× さて、翌日の玄関。荷物を軽くまとめ家を出ようとする明里の前に、円香と透は両

サイドからハグをしていた。

「あの……今生の別れじゃないから……」

「うるさいばか」

「聞いてないんだけど、私」

「だから昨日、一緒に寝たじゃん」

結局、三人で寝てしまったわけだが、透にとつては寝耳に水だった。てつきり円香が話したものだと思っていた明里は、ちよつと申し訳なかつたりする。

「ごめんって」

「こんな事なら、昨日こねておけばよかった。ダダ」

「……ちゃんと今日までに掃除を終わらせるように」

この子の掃除は全く終わっていないらしい。途中で漫画読むのに夢中になってしまったそうだ。

まあ、帰って来てもまだ終わっていないかつたら手伝えば良い。そう思って、二人の頭に手をのせた。

「じゃあ、行ってくるね。マドちゃん、家のことよろしく」

「……ん」

「え、私は？」

「掃除よろしく」

「任せて。リビングの床、舐められるくらい綺麗にしとく」

「それももう終わってる。自分の部屋な」

それだけ話してから、明里は二人と離れて家から出ていった。

……その背中を、円香は眺めながらため息を漏らしてしまう。明日の夕方までが待ち遠しい……と、小さくため息をつく。

まあ、彼も割と甘えん坊なので、本当は自分たちと離れたくないのだろうし、ここは我慢だ。

それより、最後まで透にお願いしていた事をしよう。

「透、やるよ」

「? スマブラ?」

「やらないなら良いけど。掃除」

「あー嘘嘘。やる、超やる」

話しながら、二人で透の部屋に向かった。しかし、昨日一日かけて終わらないとか、これだけ散らかしているのだろうか? ちよつと見るのが怖かったりする。

さて、そんなわけで透の部屋に入ると……まー汚れていた。死ぬほど汚れていた。

散乱した教科書に衣服。まあパンツや靴下が散らかっていないだけマシだが、それでも袋が入っていないゴミ箱に直でポテチの袋とかが入っていたりする。

「……ちよつと」

「大学って大変だよな。高校と違って制服ないからさ、悩むじゃん。着る服。で、ダンスにしまうの面倒で……気がついたら」

「じゃあ何？ 着てないのに放置してる服もあるってこと？」

「えへっ」

「……」

「こいつは……と、ため息。まあそこは良い。百歩譲って分からなくもない。特に、あまりお気に入りでもない服は、円香も朝は放置して帰ってきてから片付けたりする。

問題は……と、ゴミ箱を摘んだ。

「これは？ まさか、夜中に食べたの？」

「たまにね」

「……溢れそうなほど入ってるけど？」

「てへっ」

「正月明けに太ってたらタダじゃおかないから」

「えっ」

そりやそうだ。自分達の職業をお願いだから理解していただきたい。

「とにかく、今日中に終わらせるから。終わんなかったら、年末はこの部屋にあんた閉じ

込めるから」

「わ、分かりました……」

そんな話をしながら、二人で掃除を再開した。

まずは衣服から。あまりに散らかっているの、全部洗濯機にぶち込めば散らかっている面積は大きく減るだろう。

「透、洋服全部洗濯機にダンクして」

「ラジャー」

「私が廊下に出すから待ってて」

手分けする。円香は部屋の中の洋服を集め、両手に抱えると廊下に追い出す。途中で袖と裾が絡まっている服とかも出てきたので、少しイラっとしながらも解いて出した。

さて、それが終わった後は布団だ。いつから干していないのか知らないが、一度洗ったほうが良いまである。

「次、布団。洗濯機空いたら洗って」

「あ、うん」

さらにその後は……と、少しずつ落ちていく物を減らしていく。割と時間は食われてしまうが、まあ仕方ない。

そのままえっさっさ、ほいさっさ、と片付けを済ませつつも、次はゴミ拾いだ。全部

ゴミ箱にぶち込み、そのゴミ箱の中身を袋に入れ、ゴミ箱を洗わなければならない。ベタついたゴミ箱ほど汚いものはないから。

その後掃除機をかけて、ようやく一息つける……と、思いながら、ゴミ拾いをして
いる時だった。

目に入ってしまった。触覚を2本、生やした……黒く艶のある節足動物を。

「~~~~っ?!?!」

思わず腰を抜かし、後退りし、背中を壁に強打するも、痛みを感じている暇もなく転がるように部屋の外に逃げ出した。

ヤバい、怖いし気持ち悪いし吐きそう、と涙目になりながら四つん這いになっていると、いつの間にか自分の真下に透がいることに気がついた。知らぬ間に押し倒してしまつたらしい。

「つたあく……どしたの、円香。ゾンビごっこ?」

「ち、違つ……ご、ごめつ……いやつ、虫つ……背中ぶつけて……!」

「ふふ、めつちやテンパるじゃん。ウケる」

「いいからなんとかして! ゴキ……が出た!」

「えっ……」

透の顔色も、さあーつと青白くなる。自分ほど苦手なわけではないが、好きと言うわ

けでも絶対じゃないのだ。

「なんとかして！ あんたが生み出したモンスターでしょ！」

「え、そんなこと言われても……リカみたいに意思疎通出来ないよ」

「そんなの期待してない。殺すしかないでしょ」

「え……リカ怒るんじゃない？」

「バレなきゃ平気だから。それに、夏場は割と私達は蚊とか殺してたけど、あいつ何も言わなかったでしょ」

「そっか……そうだね」

話を終わると、透はいらないと思われる雑誌を丸め、立ち向かった。残念ながら、この家にゴキブリバスターはないのだ。明里自身がゴキブリマスターみたいなどこあるから。

円香は部屋の外で待機。胸前で両手をもじもじさせながら待っている間、中からは「とりゃ」「うわっ」「育ての親だぞっ」と声がする。それ、透が言うセリフでは絶対にはい。

さて、そんな時だった。

「ごめん、円香。行っちゃったわ、そっち」

「はっ！」

その直後、すうつと扉から黒い触覚付きのそれが姿を現す。

「——っ！」

無言でそのままジャンプし、過去最高到達点に達したその飛躍は、天井に頭をぶつけるに至った。でも痛みは感じられないほどである。

「大丈夫？」

「なわけない！ どこ行つた？！」

「え？ えーつと……あ、あそこ」

透の指差す先で、カサカサとそれは動きながら部屋の扉の隙間に入つていった。

「あれ誰の部屋？」

「え？ ……あ」

入つて行つたのは……明里の部屋だった。さつき出て行つた明里が寝泊まりしている部屋。げつ、と円香は冷や汗をかく。

「リカの部屋じゃん。良いんじゃない？ 放つておいても、で、来たら追い出してもらおうよ」

「バカなの？ リカの部屋にじつとしてるわけないでしょ。ただでさえ昨日、片付けたばかりで綺麗なのに」

「あー、確かに。寝てる間に口の中に入つてくることもあるらしいからね、ゴキブリ」

「は？ 何気持ち悪い話してんの。大概にしないとぶっ飛ばすよホント」
「(ハ、ハ)めん？」

そもそも誰があの魔物をサモンしたと思ってるのか。しかも、逃した挙句、他人の部屋になすりつけてそのままなんて絶対ダメだ。

「……仕方ない、私も手伝う」

「え、大丈夫？ どうしたの？」

「あんたの部屋なら別に良いけど、リカの部屋はダメだから。もし万が一にもベッドの上に行かれたら、もうあの上で眠れなくなるし」

「ふふ、了解」

話しながら、二人で丸めた雑誌を構えて部屋の中に入る。ソツと電気をつける。正直、死ぬほど怖い。姿を見るだけでも身震いしてしまうほどだ。

でも……透に任せてはおけないし、ここでやらなければ、明日まで安心して眠れない。ゴクリ、と喉を鳴らし、緊張気味に中を見て回る。……相変わらず、円香から見ると悪趣味な部屋だ。昆虫や動物のフィギュアが大量に並び、本棚にはそれらの図鑑。いや、ホント何度も思うけど、生き物何か飼えば良いのに、と。

……こつちをまじまじと見てはダメだ。戦意が遠のく。まあどこを見てもフィギュアはあるわけだけど、シヨウケースをわざわざ見ることはない。

なので、虫がいない方を眺める。ゴキブリを見つけたら、もう決めた。サーチアンドデストロイ。目に入った瞬間、キングジョーの如くマウントから連打を繰り出す……そう思っている時だった。

「！」

カサカサつと、自分の前に置いてある机の上で動きがあった。綺麗に片付いている机の上で、何食わぬ顔のまま触覚を揺らしていた。

「ぶつ殺す」

「え、いた？」

一気に雑誌をぶち込んだ。ジーンが駆るザクを撃退するガンダムのように。

だが、ジーンとは違いすばしっこいのがゴキブリ。するりと回避してカサカサと動く。

「ツ、ツ、ツ！」

それを、追う。真下に雑誌を振り下ろして。尋問官にバルカンを撃ち落とすガンダム Mk-II のように。

ダンツ、バゴン、ズガンツと、派手な音を大きく立てながら真横に移動し続けた挙句、とうとうパキョツと何かを潰したような音が耳に響く。恐る恐る、雑誌の裏を見ると……足と触覚以外の原型がなくなった亡骸がへばりついていた。

「……」

すぐに視界から消す。そして、透に声を掛けた。

「透、ビニール」

「うん、それは良いけど……」

「早くして」

「死んだの、ゴキブリだけじゃないよ」

「は？」

言われて真下を見ると……そこには、机の上にも並んでいた昆虫のフィギュアが、粉々に砕け散っていた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ビニール取ってくるね」

「…………うん」

××× どうしよう、と頭の中が新たななるピンチを迎え、パニックになりつつあった。

思えば、円香も透も明里が怒りそうなことをしたことがない。割とわざとセクハラして揶揄ったり、普通の人と言われたら怒りそうなことも言うが、明里と自分達の関係なら大丈夫、と言う程度に収めている。

その一方で、ちよつと取り返しがつかないことをしてしまつた……なんて事はしたことがなかった。

一応、粉碎してしまつた虫のおもちやのパーツからゴキブリの肉片は拭き取り、水で洗い、一片のDNAも残さないように綺麗にした。

問題は、この後である。

「どうしよつか……」

「とりあえず……謝る？」

「今、電話出れるのかな」

「さあ……とりあえず、かけてみる」

話しながら、とりあえず壊した円香がスマホを取り出す。まずは社会人として、電話に出れるかの確認だ。

チェインでメッセージを送信。とりあえず、内容は「今、時間平気？」というもの。すると、電話がかかって来た。

「もしもし……」

『あ、マドちゃん？ どしたの？ 寂しくなっちゃった？』

「いや、その……」

『でもごめん、あんま時間取れないから手短にお願い』

「いや、忙しいなら別に……」

『マドちゃんとおるんとの電話が最優先に決まってるじゃん』

「こいつ……と、その返事に嬉しくなるが、状況が状況だけに申し訳なさの方が強い。

しかし、時間はあまり取れないらしい。それなら……もうこつちも単刀直入に行くしかない。

「ビデオ通話に出来る？」

『うん。良いけど……』

ビデオに切り替える。カメラの向こうの明里は……なんかいつもより紳士的な髪型と服装をしていた。

「え、なにその格好」

『忘年会の時とかはいつもこんなもんだよ』

「……」

クツクツソかつこいい、と思ってしまう。元々、モデルになれるくらい外見は整っているのだ。

「どんな格好？ わ、超イケメン」

『あ、やつほーとおるん』

「ひやつほーリカ」

どこの部族の挨拶だよ、と思ったけど、残念ながら今はそれに触れるタイミングではない。

時間もないし、謝らないと……と、決心を固めていると、なんか向こうも少し離れていただけなのに寂しかったのか、いつも以上に喋り倒す。

『どしたのマドちゃん。そんな泣きそうな顔して』

「っ、そ、そんな顔してないし……」

『てか、とおるんもテンション低い？』

「え、わかる？」

『うん』

透のそれも感じ取るとは、本当にこういう時ばかり察しが良い男だ。なんにしても、そろそろ時間もない。告白しなければ。

「ごめん、リカ……その、透の部屋からゴキブリが出て……その、殺そうとして追ってた……リカの部屋に逃げちゃって……」

『殺したの？ 別に気にしないよ。ほんとは逃してあげてって言いたいけど、苦手な人

の気持ちも……』

「その……リカの宝物と、まとめて一緒に……」

『え?』

話しながら、ビデオ通話で見せている方向を切り替え、机に向ける。その机の上には……無惨なメンガタクワガタの破片が散っていた。

『えっ……』

「ホントごめん。ゴキブリがこっちの下に逃げて……私、その……怖くて、加減が効かなくて……」

好きな虫を殺した上に、好きな虫のフィギュアが粉々……流石に怒るかも……と、割と覚悟を決めていた。

「あー……リカ。円香、一応このフィギュアとか拭いて、綺麗にはしたから……」

あの透が珍しくフォローさえしてくれていた。茶化す気にはならないけど、お互いにどれだけことが深刻かを理解しているみたいだ。

明里、怒ってるかな……と、思わず画面を直視できていないしていると、明里の声が耳に届いた。

『マドちゃんは大丈夫?』

「え? う、うん」

『ごめんね、近くにいてあげられてなくて』

「え…………いや」

そんな、謝らないで欲しかった。自分が悪いのだから。

明里はそのまま、作り笑顔だとあまりにも看破しやすいにへらつとした笑みを浮かべて続けた。

『フィギュアのことには気にしないで良いからね。所詮は5000円のガチャガチャだから』

「…………」

さて、困った。この感覚…………この罪悪感…………怒るところか、むしろシヨックを受けてそれを自分の中に溜め込み、他人には何も思わせないようにするタイプだった。

つまり…………怒られた方が数倍マシなタイプ。

『あ…………もう行かなくちゃ。またね、マドちゃん、とおるん。明日には帰れそうだから』
「う、うん…………」

そのまま、電話は切れた。

円香も透も、黙り込んだまま何も話さない。本人がいなのに気まずさがその場を包み込んでいた。

アレだ、と理解する。優しい子供を泣かすような真似をしてしまった時ってこんな気

分なのかもしれない。

「透」

「うん」

「新しいの買いに行こう」

「まずは壊したクワガタの種類を全部把握しないとね」

フィギュアの残骸をかき集めながら、部屋の中の凶鑑を大量に手に取って調べ始めた。

「確か、一つはメンガタクワガタって言ってた」

「どれのことだろうね」

「私が探すから、透はクワガタを組み立てて」

「うん」

円香が破壊したクワガタは、おそらく四種類。メンガタクワガタが一つなので、残り
は三つだ。

「あ、いた。メンガタクワガタ。……オレンジ色の奴」

「あーこれね。……え、こんなクワガタいるの？ キモっ」

「分かるけど言い方」

「あと三つ……うええ、全部黒じゃん……」

「手伝うから」

いい加減、フィギュアと理解しているので、リカのコレクションを触るのくらいは円香も平気になって来ている。

……とはいえ、やはりこうしてバラバラになったものをまじまじ眺めるのは少し苦手でもあつて。さつきまでゴキブリの飛沫がついていたのなら尚更だ。

それでも、あのスマホの奥の明里の顔は二度と見たくないの、頑張つて組み立てていると「あつ」と一つ気がついた。

「ねえ、透。なんかこの黒い奴、他のとツヤが違くない？」

「え？ あー……確かに。なんかゴツゴツしてるし」

「ちよつと、これに似たパーツだけ集めてみて」

「ラジャー」

話しながら、二人でそのパーツを集めていくと……なんかちよつと有りそうなクワガタが完成した。粉々なところもあるのでくつつきはしないが、形にはなっている気がする。

「よし、調べよう」

「任せて」

外見的特徴しか分からないので、図鑑を頭から順に見ていくしかないが、それでも読

み進めた。

そんな中でも、自身の中にあるにわか知識をフル活用。こんなクワガタ、日本にはいないだろう、と予測し、可能な鍵や範囲を絞り……そして。

「あ、いた。こいつじゃない?」

「あーほいわ」

タランドウスオオツヤクワガタ、というらしい。本当に名前にツヤが入っている。

さて、残り二匹だ。なんとか透と根性でクワガタを作りながら、残り二体の正体も探った。

××
アルキデスオオヒラタクワガタ、タランドウスオオツヤクワガタ、メンガタクワガタ、
そしてセネガルノコギリクワガタの四匹。

これらを探すために、二人は家を出て秋葉原に来た。明里の話によると、彼らはガチャガチャ。だが、今のガチャで出るのはメンガタクワガタだけらしい。

つまり、残り三つは買うしかない。……そう、秋葉原で。

「よし、探そう」

「分かってる」

揃って二人でそれを探す。しかし、あるという保証はどこにもない。何せ、これから

探すのはガチャガチャの景品だ。簡単に見つかる事はない。

……そう思っていたのだが。

「あれ、これじゃん」

「ホントだ。いくら？」

「1000〜1500円」

「結構する……でも、買わないと」

バラのものは割とすぐに見つかった。流石は秋葉原。最近、流行りの500円昆虫シリーズなので、割と普通に売られていた。それも新品に近い状態で。値段はそこそこするが、まあ普段はランダムに出るものなのだし、選べるというだけでも値段が上がるのはわかる。

「あ、ないわ。メンガタクワガタだけ」

「他のお店も見てみる？」

「ん」

話しながら、片っ端からお店を回る。といっても、まず駅前にある一番でかいお店に入ってしまったこともあり、そこになかった以上は、中々獲物は見つからなかった。

「疲れたー……」

「分かるけどもう少しだけ」

「もう夜じゃん。お腹空いたー」

「……何処か入る？」

確かに、少し休憩した方が良いかもしれない。円香も普通に疲れて来た。

「じゃああれ、ヨ○バシの一番上にあるレストラン街のつけ麺」

「高そうなんだけど」

「美味しいってネットにあった」

まあ、食べたいものがあるなら別に構わないが。

さて、そんなわけで、二人でヨ○バシに向かう。結構大きい所で、確か8階くらいまであったはず。

その中に入り、エスカレーターでのんびりと上がる。すると、おもちゃ屋のフロアが見えて来た。

「ていうか、おもちゃ屋ならあるんじゃない？ ガチャポン」

「バラでないでしょ」

「ていうか、メンガタクワガタは新品あるかもなんですよ？ ガチャポンで良いじゃん」

「……」

確かに、と思わないでもなかった。そんなわけで、ガチャポンだけ見てみることにした。

降りて少し見て回った後、トイレの近くにガチャポンがズラーつと並んでいたのを見てみる。

「あつた」

「あつたね」

1回500円。出れば、今までに買って来たクワガタよりどれよりも安く手に入る。そんなわけで、二人はとりあえず500円玉を2枚、取り出した。

運が芽生える時は消費をした後。

「……………今何回？」

「……………48」

そんな虚な会話が、二人の間で交わされる。レバーを回し、中から出て来たのは、オエンマハンミヨウ。このガチャガチャの中で唯一、クワガタじやない景品だ。そして、こいつが出たのは23個目である。そして、一つのガチャポンはすでに空にする。

「……………透、500円玉作れる？」

「お札全部飛んだ。円香は？」

「もうない」

「……………」

「……………」

一度、コンビニで下ろすしかないが……………しかし、何故こんなに出ないのか？ ちよつと異常なくらい、メンガタクワガタだけ出てこない。これなら普通にバラで買った方が安……………や、だから売ってないからこうしているわけで。

「下そう……」

「コンビニならあつたよね、下に」

「手数料」

「細か」

「あんたが気にしなさすぎなだけ」

「でも、それだと今から探すんでしょ？ 銀行」

「……まあ」

流石に少し疲れた。肉体的にも精神的にも。でも、みんなで暮らしている以上、手数料さえも切り詰めないといけない。一人暮らしはそんな簡単なものではないのだ。

「今から見に行ったら入荷してないかな？ メンガタクワガタ」

「ないでしょ。誰かが奇跡的に売らないと入荷しないし」

「……あー。そっか」

まあ仕方ない。後半戦だ。そして、今月のお昼はもやし弁当に決定した……なんて思っている時だった。透が「あつ」と声を漏らした。

「何？」

「このクワガタ、売れば良いんじゃないの」

「！ 天才。それで少しでも稼げる」

「よし、行こう」

と、いうわけで、売りに行くことにした。

二人で紙袋の中に詰まった大量のカプセルを抱えて、念のためにフロアを変えて売りに行った。

しかし、こういう時、オタクの街というのは助かる。基本的に他人に興味はなく、自分が購入したものの、或いはしようとしているものにしか意識が向かないので、ノクチルの二人の手の中に虫のおもちやが詰められているのは知られることがない。

まあ、売ってしまう時はもう致し方ないわけだが……何、このフロアはフィギュアとか売ってるフロアだし、オタクと言ってもアニメオタクが多いだろうし、自分達がアイドルとはバレないだろう。

でも念の為、円香は持参していたサングラスをかけた。

「これ、買取お願いします」

「お願いします」

「わっ、ノクチルの樋口円香さんと浅倉透さん!?」

秒殺だった。

「えっ、うそっ……やっぱ、ちよっ……失明するくらい眩しっ……好き、超好きっ……あはっ、やばっ」

「……………」

しかも、超ファンだった。さて、困った事になる。別に公表しているわけではないが、もう三年弱もアイドルをやっていると、ライブのMCとかで核弾頭二人が自分の苦手なものとか普通にバラすのだ。

つまり、ライブに顔を出すほどのファンならば、円香の弱点が虫であることは知っているわけで。このままだとキャラ付けだと思われる。別にファン以外にどう思われようとは知ったことではないけど、ファンにだけはそれはまずい。

「浅倉、売つという。私そんな気色悪いもの見たくない」

「えっ」

紙袋を押し付けて退散した。どうせ透は何も察しないだろうし、これがベストだろう。

そのまま売却を任せて、とりあえずトイレに向かった。他にすることないし。ぼんやりした表情のまま歩いていると…………ふと見覚えある顔がこちらを見ているのに気がつく。

「あつ、円香さーん！」

「…………小宮さんと、芹沢さん」

「円香ちゃん！　こんにちはっす！」

二人とも背が伸びて、今や透よりも大きい。果穂は元々だが。ということは当然、円香よりも大きいわけで。

それでも円香にとつて二人とも小糸に次ぐ愛しい少女だ。気にする様子もなく円香は声をかけた。

「何してるの？」

「これを買いに来ました！」

果穂が見せてくれたスマホの画面には、仮面ライダージユウドの変身ベルトが写っていた。困ったことに、明里が変身するライダーだと思おうと少し欲しい。

「か、カッコ良いね……」

「ですよねですよね!!？」

「芹沢さんは？」

「私は虫の一番くじ買いに来たっす！」

「なるほど」

そんなのあつたんだ、と思っていると、当然次は向こうから聞いてくる。

「円香ちゃんは何しに来たっすか？」

「私は……まあ、ちよつとね」

言えない、ゴキブリと虫のおもちやを叩き潰して弁償しに来た、なんて口が裂けても

言えな……。

「円香ー、全部売ってきたよ。すごい、14,000円くらいになった。また下さなくて
もいけるわ、メンガタクワガタ」

「……」

「メンガタクワガタ？」

今日ほど思い通りにいかない日は中々ないだろう、と思ってしまう程、何もかもうまく行かない日だ。明里には人を幸運にする加護があるのでは、なんて思ってしまうほどである。

「おー、果穂ちゃんとおさひちゃん。どしたのこんなところで」

「これ買いにきました！」

「それより、メンガタクワガタってなんすか？」

「円香が壊した。リカのもの。それ弁償するために買いに来たんだよね。ガチャポンで」

あの口、縫い付けてやりたい。なんで何もかもを話してしまうのか。もう成長した二人は、普通に円香の剛腕に恐れ慄く。

「え……ま、円香さん……何してるんですか？」

「ストレスつすか？」

「違うから。……いや、まあ良いやそれで」

とりあえず、ガチャポンだ。あさひは知っていそうだし、もう言ってしまうことにした。

「とにかく、メンガタクワガタが必要なの」

「私、たくさん持つてるっすよ？ ヨーロッパミヤマが欲しくて結構引いたっすからこれ」

「えっ」

「良かったらあげるっすよ全然」

……天井叩いて最低保証が出た気分ってこんな感じなのかな、とソシヤゲゲーマーの感覚を味わってしまった。

とはいえ、年下の子からタダでもらうのは気が引けるし、何か交換条件を出そう。

「……じゃあ、さっき言ってた虫の一番くじ一回分と交換ね」

「ほんとっすか？！？」 ラッキー！

「あの……じゃあ、まずはあたしのベルトだけ先に買っても良いですか……？」

「よし、じゃあ果穂ちゃんは私と行こう。仮面ライダーリカのベルト買いに」

「ジユウドです。メタ発言はやめて下さい」

と、いうわけで、一旦4人は二手に別れて買い物を進めた。その際に、透が売って得て来たお金は二等分する。

まあ、なんやかんやあったけど、とりあえず目当てのものは手に入ることが確約された。ほって一息つきつつ、円香はあさひとその一番くじの場所へ向かう。

「へえ……これが、一番くじ」

「そうっすー！」

……なんか、明里が持つてるフィギュアの中でもリアルさが違う方のものに似ている。ガチャポンと出来が違うのは当たり前かもしれないが、にしてもリアルすぎて気持ち悪い。果穂の方について行けばよかった。

「……買うの？」

「買うっすよ？」

「……」

勘弁して欲しいが……まあ、これも明里のメンガタクワガタのためだ。

仕方なく、買うことにした。普通のアニメとかの一番くじに比べると安いのはありがたい。

A賞はネプチューンオオカブトか……なんかもう名前から普通に怖いあのカブトムシ。上下に生えている角の間、左右に並んでいる短いツノが気持ち悪い。

「芹沢さんはどれが欲しいの？」

他にもギラファアノコギリクワガタや、ヘラクレスオオカブト、下位の商品でもオウゴ

ンオニクワガタなどがあって、種類は豊富だ。

「私はサカダチコノハナナフシが欲しいっす！」

「えっ……」

あの、カナブンとバッタとカマキリを足して3で割ったような奴だろうか……？ 虫嫌いならわかつてくれると思うが、緑色の虫は色合い的に無理なのだ。どうしても。

ゴキブリやらムカデのようなレジエンドメンバーを気持ち悪いと言うならば、それらの虫は気色悪い、というべきか。

「ほ、他に欲しいのはないの？」

「あとは、ハンカチとかクリアファイルっすかね」

「？ あの辺ってハズレじゃないの？」

「ハズレじゃないっすよ。冬優子ちゃんと愛依ちゃんにもあげて、三人でお揃いにしたっすー！」

やはり、この子も基本的には果穂や小糸と一緒に、前とほとんど変わっていない。オフの日でもユニットメンバーのことを考える優しさと、自分の好きなものを他人とも共有したいという可愛い幼さ。

本当、純粹な子は羨ましいくらい眩しさを保っている。

……でも、やめた方が良いと思う。冬優子に虫のハンカチ使え、なんて言ったら半殺

しでは済まなさそう。

「? どうかしたつすか? 円香ちゃん」

「ううん。買おつか」

でも止めなかった。年下に甘い円香に止める術はなかった、と言うべきか。

そのまま二人で一番くじを引く。……せっかくだから、明里へのお土産として自分も余分に買おうか。透と三人でお揃い、なんていうのもありな気がする。

「4回お願いします」

「私は19回で!」

「19!!?」

「欲しいつすから!」

「そ、そう……」

まあ止めないけど。人のお金だし、多分明里も趣味にもそれくらい使っているし。

さて、そんなわけで早速……と、まずはあさひから引いた。本当に19枚、連続で引く。確か、あさひが欲しがっているサカダチコノハナナフシはB賞。上から二番目だ。

で、その結果……。

ネプチューン(A賞)、ヘラクレスリッキーパーブルー(C賞)、ギラファノコギリクワガタ(E賞)×2、その他大勢……と、全力で物欲センサーを発揮していた。

なんていうか……あさひでもこんなことあるんだな、と変に感心してしまった。

「はあ……中々出ないっすねー」

「まあ、まだ私の分残ってるから」

そう言いながら、円香はまず一回、あさひの分で一枚引く。

「はい、めくって」

「ありがとうっすー！」

とはいえ……円香としては正直、不安があるのだが……その不安はしつかりと的中したようで、次に引いた景品はヘラクレスオオカブトの通常verだった。

「……ま、良いすけど」

「どんまい」

話しながら、いよいよ自分達の分。とりあえず一つ目……明里の分。剥がして中を見ていると、ハンカチだった。

「……ふむ」

悪くないかも。三人でお揃いなのだから、こういう小物がちようど良い。

はい、二回目。次は透の番。またハンカチだった。

「あはは、円香ちゃんもついてないっすねー」

「いやむしろ当たりだから。リカ達にお土産だし」

「? 明里兄ちゃんにお土産なら、尚更フィギュアの方が良いんじゃないですか?」

「三人で使えるものにしたから」

「あー、なるほど。超好きっすね、明里兄ちゃんのこと」

「……別に良いでしょ」

文句あるのか、と思いつつも、まあ雛菜以外の年下に怒るのはちよつとアレだし、目を逸らしてスルー。

続いて、最後の自分の番。くじを引いて中を見ると……B賞の文字があつた。

「……うげっ」

「あっ」

つまり……サカダチコノハナナフシ。緑色の気持ち悪い奴のフィギュア。なんで自分の分、と決めた時に限ってこんなものが出てくるのか。

「あー! 円香ちゃん良いなー!」

「つ……じゃあ、いる? これ」

「え……?」

まあ……別に自分はその虫が嫌いだし、わざわざ3人お揃いにする必要はないのかもしれない。透と明里にあげてしまおう。

「良いっすか!?」

「私はいらないし」

「でも、明里兄ちゃんは喜ぶかもつすよ?」

「どうせあいつ持つてるし平気」

そう言いながら、あさひが景品を大量に入れてもらっていた袋の中に箱を一つ追加した。

……さて、そろそろ帰るか、と思いながら、景品を入れてもらった袋を受け取った時だった。その袋の中に、あさひが薄いビニールに入ったハンカチと、箱を入れた。その箱はあさひがダブったギラファノコギリクワガタだ。

「……何?」

「交換つす!」

「別にいい」

「いえ、そうもいかないつす! 昔から結構、円香ちゃんには飴とかチョコとかもらってたつすから! それ、明里兄ちゃんにあげて仲直りのキツカケにしてくださいつす!」

「……いや、喧嘩はしてないけど別に」

……この子も成長しているんだな、と、心の瞳が潤う。この姿、冬優子に見せてあげたいまでである。

「ありがとう」

「いえー！」

まあ、ありがたく受け取ろう。どうせ明里は持っていると思うが、こういうのはやっぱり気持ちだから。

×そう思いながら、二人でお店を後にした。

「やつと買えましたあああああー！」

別のお店で、果穂はベルトを両手に持って真上に掲げる。その様子を透はぼんやりと眺めた。

「おー、イエーイ」

「はい！ イエーイ！」

元気良いなーと思いつつも、果穂の手元のベルトをのんびりと眺める。

「こういうの、どうするの？ 飾るの？」

「はい！ 私の部屋、仮面ライダー専用の棚があるので、そこに飾ります！」

「あー、なるほど」

やはり日常的に装備するわけではないらしい。当然と言えば当然だろう。

……と、思いつつも、こんなの飾れるスペースがあることに驚く。いや、まあ実際は自分の部屋にもあるのだろうか……。

「果穂ちゃん、大変じゃない？ 部屋の掃除」

「そうですねー。埃とか溜まると本当にちよつと、その……面倒で」

「だよねー。で、知らないうちに汚れが溜まって……」

「いえ、定期的に掃除しています！ ベルトとかファイギュアに、埃がつくと嫌なので！」

「えっ……一々？」

「？ はい？」

……こんな小さい子、と言つても背は高いし中学生だけど、ちゃんと趣味のために部屋の掃除をしているらしい。良い子だ。

それに引き換え自分は……どんなに同じ年の好きな子に掃除しろ、と尻を叩かれても、面倒で途中でサボつて漫画とか読んだりして……で、その結果でモンスターを生み出し、幼馴染にファイギュアを破壊させてこんなところまで来てしまった。

「あー……果穂ちゃん。部屋つて綺麗な方が良い？」

「？ それはそうだと思いますけど……たまに、ベルトをつけて変身ポーズの練習とかしますけど、その時に汚れてたら嫌ですし」

「や、じゃなくて。一緒に暮らしてる人の」

「はい。お兄ちゃんの部屋、昔汚くしてゴキブリが出て私の部屋に来た時『大っ嫌い』つて言つちやつてから、とつても掃除とか他の家事もするようになりました」

「えっ……」

そ、それは可哀想……と、思う反面、だ。もし、自分にまた同じことがあったとして……いや、というか明日帰って来た時、だ。

『とおるん、ゴキブリ出てマドちゃんを泣かしたって?』

『俺の好きな人泣かすなんて酷いじゃん。いくらとおるんでも限度あるから』

『大っ嫌い』

『大っ嫌い』

『大っ嫌い』

頭の中で、言われてもいない辛辣なセリフが木霊する。それと同時に、神里流・霰歩の如く突き進む氷の刃が胸の奥底に突き刺さる。死ぬ。言われてもいないのにこの威力なのに、そんなこと言われたら確実に死ぬ。自殺ではない、シヨック死する。

どうしよう、とりあえずメンガタクワガタの弁償だけでは足りない気がする。何かお詫び申し上げる品をもう一つ用意しなくては。

「果穂ちゃん」

「なんですか?」

「そのお兄ちゃんに嫌いって言った時、何かお詫びもらった?」

「はい! お兄ちゃん、その日のうちにケーキを買って来てくれました!」

「よし、ケーキを買いに行こう」

「えっ？ でも、あさひさん達と合流しないと……」

「果穂ちゃんの分も奢ったげる」

「ほんとですか?!? 行きましょう!」

×行った。

×

翌日、明里は何故か腰が疲れたような感覚で帰宅していた。精神的な疲れというものは、常に肩か腰にくるのだ。

相変わらずしんどいけど、まあいい加減慣れて来た。モデル的にも色んな方と知り合えるのは助かるし、今日のパーティには夏葉とその父親もいたので挨拶しておいたから比較的楽だった気がする。

さて、とりあえず駅に到着。円香と透からのチェインによると、車で迎えに来てくれていたらしい。

「ふう……あつ」

車が目に入り、小さく手を振ると運転席の透が手を振り返す。円香も助手席に座っている。とりあえず、挨拶しながら後ろの先に乗り込んだ。

「ただいまー」

「おかえり」

「どうだった？」

話しながら車を走らせる透。円香の問いに、明里は懲り懲りした様子で答えた。

「寂しかった」

「つ、バカつ、違つ……そうじゃなくて忘年会が」

「私も寂しかったー」

「いえーい、とおるん仲間」

「いえーい」

「運転中にハイタッチしないでバカコンビ」

怒られた透はすぐに前を向き、明里も手を引つ込める。パーティがどうだったか、と聞かれると……まあ、いつものだ。

「疲れたよー。有栖川さんとか来てたんだけど、途中で酔つ払って介抱するのが大変で……まあ、普段きちつとしてるから、そのギャップは……」

「降りて、車から」

「え、なんで!?？」

まずい話題だっただろうか？ そういえば、二人が酔つ払った時はどうなるのだろうか

か？ 透とか超お酒弱そうだな。

「そ、それより二人とも、俺がいない間にトラブルとかなかった？」

「一先ず、そんなことを聞いて話を逸らした。なんか分からないけど、今の話題はマズそうだから。」

すると、二人とも揃って目を窓の外に向ける。

「？ 何かあったの？」

「言つたでしょ」

「……ああ、コカローチの件ね」

「そういえばそんな話をしていた。……思い出すと、少し家に帰るのが憂鬱だが……まあ仕方ない。また買えば良い。」

それより、円香は平気だったのだろうか？

「マドちゃんは大丈夫だったの？」

「平気。子供じゃないし」

「びっくりして腰抜かしてお尻で床突き抜けて下水道まで落ちてリザードに出会したりしなかった？」

「太ったって言いたいわけ？」

「え？ あ、いや嘘嘘！ なんでもありません！」

そうか、そういう解釈になるのか、と慌てて弁解する。円香は透と違って食べ過ぎると普通に太る体質らしいので、その辺は敏感だ。

「とおるんは平気？」

「私も太つてないけど？」

「いや違って。カフアール」

「平気。でも部屋にホイホイ置いた」

まあそれくらいしてくれたほうが良い。明里は決してそれが嫌いではないが、好きでもない。なので、やはり基本的には清潔にしてもらいたいものだ。

「ていうか、リカこそ体重平気なの？」

「え、俺？」

「そうだよ。なんか太るって言うじゃん。忘年会で」

「いや俺そもそもそんな食わないし」

だらしなない身体になるのは嫌だから、普通に運動するし逆に食べ過ぎたりはしない。

そんな話をする中で、透がふと思いついたように呟いた。

「そういうえば、昔いたよね。ゴキブリ食べまくったギネスの人」

「あーいたね」

「よくそんなこと出来るよね……リカでもいける？」

「いや俺踊り食いとか好きじゃないし、あの人死亡くなったらしいよ。体内でスウスールが繁殖して」

「うわ……強つ。ゴキブリ」

「ちよつと、その話題やめて。……吐きそう」

「ごめん」

円香が本当に顔色を悪くしていたのでやめることにした。

さて、そうこうしているうちに家に到着。駐車を終えて、家の中に入った。なんか、一日いなかっただけなのに随分と久しぶりに感じる。どれだけ自分はここに恋焦がれていたのか。

中に入り、手洗いうがいを済ませてリビングに上がると……ケーキとプレゼントと思われる袋が用意してあった。

「えっ」

ケーキの上のチョコレートプレートには「部屋に被害を出してごめんなさい」の文字。何があつたのだろうか？ と、頭上に「？」が大量に浮かぶ。

「え、何これ？」

「いや、壊しちゃったから。フィギュア」

「お詫び」

「お詫びでケーキとプレゼント、だと……？」

どういう事なのか。いや、分からなくもないけど、ほとんどクリスマスや誕生日のようになっている気がする。

「あの……なんで？」

「いや、正直ここまでやるつもりなかったんだけど、透が……」

「これで大嫌いなならない？」

「ならないよ！ こんな真似しなくても！」

「どんだけ暴君だと思われているのか。大事にしているとはいえ、たかだかおもちゃである。」

「え、二人とも俺がそんなことで嫌いになると思ってるの……？」

「え、いや果穂ちゃんのお兄ちゃんが……」

ちよつとイラつとしてしまったので、二人の肩に腕を回して力任せに抱き寄せた。

「分かった。二人がそういうイメージ俺に持つてるなら俺にも考えがあるから」

「いや違くて。なりゆきで……」

「二人に対してもつと優しく尽くせば良いのね」

「いや、だから聞いて……」

喧しい。二人の弁解が言い訳にしか聞こえないくらいだ。

ホールドした状態で両足を高速で動かし、二人の足を引っ掛ける。

「えっ」

「ちよっ」

足が浮いたことで一時的に円香と透の体自体が宙に浮く中、明里は足を正座の形にし、床に着地。腕で二人の首をホールドしているので、そのまま二人とも寝転がらせ、膝の上に頭を置いた。

「はい、よしよし。俺みたいなの暴君の為に、よく用意してくれました」

「あの、リカ聞いて。悪くないけど」

「違うから、リカ。気持ち良いけど」

「ケーキも二人で食べて良いし、買って来てくれたものも二人で使って良いからねー」

「お願いだから待つて。……あ、リカの膝……」

「新鮮……」

しばらくそのまま吞まれるしかなかった。

××
+

さて、ようやく円香も透も正気に戻った。本当にようやくで、三時間膝でゴロゴロしていた。

「なんだ、そういうことだったんだ」

「うん。そういうこと」

「誤解だから」

説明を受けた明里は、ホツとした様子で胸を撫で下ろしていた。どんなか不安に思ってたの、と透も円香も呆れてしまう。

「なんかごめんね、俺なんかのために……」

「原因は私達だから。リカは悪くないから」

「そうだよ。謝らないで」

「でも、とおるんのはあながち勘違いじゃないよね」

「あー、まあね。でもあれはほら、果穂ちゃんのお兄ちゃんのおれだから」

「はいはい」

不安になってしまったのだろう。円香も気持ちは分かる。明里ほど純粹真っ直ぐちゃんに「大っ嫌い」なんて言われたら、おそらくその場で絶命するだろう。自殺ではなく、シヨック死する。

なんて透と同じことを考えながら、ケーキを摘みつつ円香は袋を手を取った。

「で……はい。これ、メンガタクワガタとおまけ」

「ありがとう」

「あんたのも入ってるから」

「え、ほんと?」

あさひと交換したハンカチ。三人でお揃いだ。

「おおー! 良いじゃん!」

「私のもあるんだ」

「ついでだったから」

まあ、今にして思えば、我ながら虫のハンカチをお揃いで持つ二股カップルってよく分らないけど。

でも、それもアリな気がする……なんて思いつつ、もう一つあげた。

「あとこれ」

「え、まだあるの?」

「芹沢さんからもらったやつ」

言いながら差し出したのは、ヘラクレス。持っているかもしれないけど、明里は同じものがいくつもあるのを気にしないし、平気だろう。

「おおー! ヘラクレスじゃん!」

「あげる」

「良いの?」

「……持っていないの?」

「うん。これだけこのシリーズで持っていない」

めっちゃ喜んでくれてる……と、少し頬が緩む。その自分に追撃するように、明里は笑顔で告げた。

「ありがとう。マドちゃん」

「つ……だから、お詫びだって言ってるでしょ」

「ふふ、円香照れてる」

「うるさいバカ倉」

そんな風に話をしながら、三人でケーキを食べた。もちろん、この時間のケーキは太るので運動してから寝た。

炬燵という名のミミツクの季節。

1月……それは、寒さで人を凍らせる季節。基本的に怠け者な透と、元々超怠け者だった明里がいるお陰で、炬燵という人喰いの生き物は今日も絶好調。進撃の巨人とか、炬燵型の巨人とかあれば人間なんぞ入れ食いなのではないだろうか？　と思うような季節。

夜中になつてもいまだに炬燵から出る気配がなく、カタツムリのオルトロス版みたいと同じ辺から顔を出している透と明里を、ゴミを見る目で眺めながら円香は呟いた。

「もう夜だけど。あんたらいつまでそこにいるつもり？」

「あー、いつまで？」

「あー……五つ刻まで？」

「それ言いたいなら、朝五ツか辰の刻だから。5時のこと言ってるなら七ツ半だから。そしてどっちにしてもそんなにそこにいさせられないから」

文系ではない明里に容赦ないツツコミが降り注いだ。まあそんな時間まで炬燵の電気を入れっぱなしにしていたら当然電気代がバカにならないし、当然と言えば当然である。

「あんたら明日仕事は？」

「ないー」

「休みー」

「……」

ダメだ、早起きで脅すことが出来ない、と円香はため息をつく。出来ることなら2人の間に混ざってキンググドラになりたいところなのだが……生憎、円香は仕事なのだ。ソロの仕事が増えるところいうことになるから困る。

「……明日、私が起きてきてここで寝てたら覚えときなさいよ」

それだけ言って、円香は部屋に退散した。その背中を眺めながら、明里と透は顔を見合わせる。このまましばらくのんびり出来そうだ。

「どうする？ とおるん」

「もう少し居よ。ここに」

「りよかい」

肩と肩が密着し過ぎる距離感が、妙に心地良い。頭をのせている両手が繋がっている。両肘を床につけていて、割と痛いはずなのに動きたく無かった。

こうして好きな人と一緒にいられる時間はとても幸福だ。正直、円香にも一緒にいてほしいくらい。

「ふー、疲れるね。肘」

「分かる。だらーんってしちゃう？」

「良いね。だらーん」

両肘を解除して、顎の下に折り畳む。お互いに顔を見つめ合いながら、顔を近付ける。

「……リカ、キスしたい」

「……ん」

軽く唇を触れ合う。……やはり、幸せだ。こういうことが平気で出来る生活が。

そんなふうにいるながら、二人でイチャイチャしていると、透がふと思ったように言う。

「なんか見る？ 映画」

「お、良いねー。じゃあ俺、テレビ……」

「あー、違う違う」

炬燵から出ようとした明里を透が止める。そして、炬燵の机の上からスマホを手に取った。

「これ、これで見ようよ」

「あー……え、してる？ 充電」

「大丈夫大丈夫。多分大丈夫。今日使っていないから。あんま」

「マジかー」

「ほら、84%」

「マジだー」

そんなわけで、スマホを持ってアマプラを起動。さて、何を見るか。

「何見る？」

「とおるんが好きなの」

「じゃあジユウド」

「えー、それは嫌ー」

「ふふ、照れる？」

「うん」

「可愛い。うりうり」

「んー、もつと突いて。ほっぺ」

「甘えんぼー」

「とおるんだって俺が入ってた場所にわざわざ入ってきて密着して来た癖にー」

「ふふ、生意気」

むにむにっとならに頬を突かれるも、なんか気持ち良くてさらに身を委ねる。……ていうか、そうじゃない。何を見るかだ。

「それより、何見る？ 映画」

「あー……じゃあ、アイアンマン？」

「良いね」

話しながら、一作目を見ることにした。とうか、何なら今日の夜は二人でシリーズ全部見ても良いかもしれない。

スマホを二人の位置から見えるように置き、序盤の車のシーンを眺める。

「金持ちかー……良いなー」

「リカの家はそうでしょ」

「いや、そうだけど。でも父ちゃん基本厳しいから、ここまで好き勝手できないよ」

「まあ、自分で稼いでるから。スタークは」

「よくよく考えれば、俺モデルって言ってもバイトだし……現状、彼女2人のヒモかー

……」

「良いよ、一生ヒモでも」

「え、やだよ」

「養う。円香と2人で」

「や、だからやだよ」

まだ大学一年とはいえ、そろそろ将来について決めなければならぬなーなんて考えながらも映画を見る。

トニーが襲われ、拉致された後、少しだけ過去に戻ってトニーと言う人間がダイジェストのように流れる。

その様子を眺めながら、明里がポツリと呟く。

「……この時のトニーってそんなに良い男かなあ」

「お金あるし国に貢献してるし、良い男なんじゃない?」

「俺、そこそこバイトで稼いでるからお金あるし、税金も納めてるから国に貢献してるよ」

「? そうだね?」

「あ……あと、多分頑張ればアイアンマンも作れるよ」

「いやそれは無理でしょ」

なんか張り合い始めたが、透には一切通じていなかった。そんな時だった。トニーが引つ掛けた記者の女性とベッドシーンを始める。その直後、透は明里の目を隠した。

「わっ、と、とおるん?」

「子供には教育に悪い」

「子供じゃないけど!?」

終わった頃合いに手を離され、ルーズな事に遅刻して飛行機に乗ろうとするシーンまで眺める。

「そういえば、リカ」

「ん？」

「いつ抱くの？ 私と円香」

「バブっ!?」

思わず吹き出してしまった。こいつはまた唐突に何を言い出すのか。

「な、何言ってる……！」

「いや、待たされてるなーって。トニーなんて彼女じゃない人と戯れあってるのに」

「え……いい、いや俺そういうのはちよつと……」

「何、恥ずかしくてんの？」

「そ、そりやそうでしょ……」

他人に裸を見られるのは恥ずかしい。それは当たり前のことだろう。透だつて同じだろうに……と、思うが、まあとにかく今はその話題から離れたい。

「そ、それよりさ、アイアンマン。ようやくスタークが捕まったよ」

「あ、ホントだ」

「そういえば、ジユウドが好きな小宮さんは、アメコミも好きなんだっけ？」

「好きなんじゃない？ でも私もアメコミ好きだよ。だから観に行くなら私と行こう」

「う、うん。どしたの急に？」

なんか急に自分を押し始めた。いや別に一緒に行くとか言っていないし、そんな気はないわけだけど……そんな気を知る由もない透は横でモゾモゾと動く。

何しているのだろうか？ というか、アイアンマン見ないのだろうか？ なんて考えていると、透は横になっている明里の真上に寝転がったまま乗った。

むにゆつ、とうつ伏せになった時に床に当たる面が全て背中に乗って来て、柔らかさや温もりが背中を支配する。

「ふふ、いいーい」

「いえーい、じゃないよ！ 何やって……！」

「私がこうしてれば、リカはずっと私と円香のものだよね」

「っ……いい、いやそんなことしなくてもそうんだけど……」

「ふふ、念の為」

透をおんぶしたことだって前にもあったはずだ。なのに……何故、今だけこんなに柔らかさをやたらと感じてしまうのだろうか？ というか、透の胸はこんなに弾力を感じるほど柔らかかったのだろうか？

つて、自分は何をを考えて……と、自分で自分の頭を殴る。……だが、そんな明里の煩悩打撲撲殺術をさせんとばかりに、至近距離の透は耳元で囁く。

「ちなみに……ベッドの中なら、これをリカは触れるんだよ？」

「つゝゝゝ！ と、とおるん！」

「嫌？」

「い、嫌だよ！ てか映画！」

ダメだ。もう一回、頭から血が出るほど殴らなければ、と思つて拳を作る。……だが、うつ伏せなだけあつて強く殴れない。

そんなわけで、第二案に移つた。自分の首を絞めた。

「えっ、り、リカ……？」

「ツ……か、カハッ……！」

絞め落とせば気絶出来る。気絶してしまえばこつちのものだ。命の危機はあるが、せめて円香がいる時でない意識を保つてはいけない。

「つ、ご、ガハッ……！」

「い、いやごめん。ごめんつてば。だからやめて」

「コフツ……」

「分かつた、降りる。降りるから」

何とか自分を絞め落とそうしていると、背後からの感触が消えてハツとする。透が隣に移動していた。

「っ、はっ……はあっ……！」

「……大丈夫？」

「だいつ、じよぶ……！」

「そんな拒否されるとシヨックなんだけど」

「いや、その……せめて、マドちゃんと一緒の時に……！」

「あー……ごめん」

割と反省しているかのように、しよぼんと肩を落とされてしまった。なんか……悪いこと言ってしまったような気がするのは何故だろうか？

何となく罪悪感があった。というか……やはり、カップルならばその手の行為は当たり前にするものなのだろうか？

特に、自分のところは1対2。二人のお願いを自分のわがままで拒否してしまっていると思うと申し訳なさが増していく。

……いや、ていうか、だ。申し訳なさを感じているのは、結局のところ自分に勇気がないから拒んでいるだけ、ということを理解しているからなのではないだろうか？

……透はどう思っているのか、聞いてみようか？ やんわりと遠回しに尋ねてみる。

「そ、そもそもさ……とおるんは、その……恥ずかしくないの？」

「何が？」

「じ、自分の裸見られるの……」

「恥ずいよ？」

やっぱりそうなんだ……とは思った。これで、やはり同じ心情でありながらも勇気を振り絞っていることは分かった。

でも、ならばなんでそういうことをしたがるのかはわからない。

「じゃあ……なんで？」

「え？ あ、あ……」

少し考え込む。このままずっとくっついていなくても幸せだし、わざわざ性行為をする必要はない気もする。

なのにそこまで誘惑してくるのは何故なのか、と非常に気になる。もし、納得できる理由だったら、その時は……。

「……リカがゾウさん見られて恥ずかしがってるところが見たい、から？」

「……」

しばらくいいや、と判断しながら、映画に集中した。

「お、そろそろマークー出来るよ」

「ほんとだ」

「にしても……実際にこういう拉致とかあったら怖いよねーやっぱ。どうしたら良いのかな」

あからさまに話題を変えた。

何も察していない透は、その話題に食いついてくれる。

「いや、リカなら平気でしょ。強いし」

「いや、いくら俺でも銃や薬出されたら勝てないよ」

「ふふ、それはそうだよね。心配」

「とおるんとマドちゃんのが心配。だって素手でも勝てないでしょ？」

「あー……」

「別に天才でもないからアークリアクターも作れないし、火炎放射器なんてもつてのほかだし……」

話せば話すほど不安になってきた。大丈夫だろうか？ 自分が近くにいない時。

そんな明里を眺めながら……透はしばらく考え込む。しばらくつていうか、3秒くらい。

その中身は言うまでもなく「リカが不安になってる↓この流れに乗れば甘えてくれる？ ↓もつとくつ付ける」という短絡的なものだ。

「どうしよー、リカー。私、もしかしたら明日の朝までに攫われて、炬燵の中に残ってるのはリカだけになってるかもー？」

「ーっー！」

言ってみると、今度は隣の明里の方からギュウツとしがみついてくる。胸に顔を埋め、ちよつと痛いくらいに抱き締められて気恥ずかしいのだが、これを微塵の下心もなくやつてのけるのが明里なので微笑ましい。

「だ、大丈夫とおるん。俺がこうしてれば何処にも連れて行かれないから」

「ふふ、心強い」

「でしょ？ だから安心してアイアンマン見よう」

「んー」

どっちかって言うとな不安そうなのは明里の方だろうに……と、思いつつも、頭を撫でてあげながら、アイアンマンを二人で眺めつつ、気が付いたら寝落ちしていた。

××
登朝。

「で、あんたらは深夜から早朝まで炬燵をつけばなしのまま抱き合つて寝てた、と？」

「……………はい」

ガチギレ円香の説教をそろって受けていた。当たり前である。

「言ったよね。そこで寝るなって」

「……………はい」

「ましてや、炬燵をつけばにするのはやめろって」

「……………はい」

「言い訳は？」

「とおるんが攫われると思っただんです！」

「リカが離してくれなかったんです」

「分かった。死刑」

「ひえっ!!？」

揃ってお互いにハグをし始め、余計にボルテージが上がる。この野郎ども、やたらと仲良くしやがって。

「…………とりあえず、そろそろ私も出かける時間だけど…………」

「いってらっしゃい」

勿論、簡単に出掛けるつもりはない。どうせこいつらは今日も炬燵を使うだろうか。そんなのは許されない。

なので…………炬燵布団を捲り、コンセントを抜いてケーブルを鞆の中にしまった。

さて、もう時間だ。バカ達の所為で朝食を食べる時間もなかった。

「え、お、俺達の炬燵は？」

「使用禁止」

狼狽えたように言うバカを立たせると、そのバカに鞆を持たせる。そして、その腕を

引っ張って連行する。

「じゃ、行つてきます」

「え、わ、私の抱き枕は……？」

「今日は私の鞆」

「……」

さて、決まりだ。どうせ休みなのだから精々コキ使わせてもらおうとしよう。

×

「他所の事務所の子を使うわけにいくわけがないでしょ。元の場所に戻してきなさい」

×

×

プロデューサーから却下され、明里は家にとんぼ返りした。

×

「と、いうわけで、帰って来ました」

「ウケる」

透と家で二人きり。結局、そこに戻った。とはいえ、色々と思うところはあ

「でもなんか、最近マドちゃん一人仕事の日多いよね」

「あー分かる。逆に私とリカが仕事の日、円香休みだったりね」

「うん。そんなわけで……なんか、パーティ的なことする？」

「良いね、さ、サブ……なんだっけ。サブレッサー？」

「サプライズ」

「そう、それやろう」

特に何か祝うわけでもないが、とにかくサプライズだ。驚かせて喜ばせられれば勝ち。

そんなわけで、とりあえず出かけることにした。

「何用意する？」

「ケーキ。あとくす玉」

「あー、良いね」

そう決めながらも、だ。そこで明里が閃いた。

「マドちゃんにもさ、炬燵であつたまつて欲しくない？」

「あー……ぐー」

「そんなわけで、帰って来たらそのまま自動的に炬燵に吸い込まれるようにしてみよう」

「どうやって？」

「うーん……バナナの皮で滑らせる……的なの？」

「おもしろ。それで転ぶ円香」

「見てみてえな……やってみるか」

「うん」

当然のように次から次へと話が逸れていくバカ二人。そのまま二人でまずはバナナを食べ始めた。

「はい、むけたよ」

「ありがとう」

明里が皮を剥いてあげると、透は受け取って二人で食べる。バナナ美味しい。

「……バナナと言えばさあ」

「何？」

「マリオ見ない？」

「良いね」

まったくとマリオの映画を鑑賞し始めた。

さて、マリオの話も中盤まで進んだ。そんな中、やりながらふと透が閃く。

「あ……そうじゃん。決めたわ、円香が帰って来たら廊下からマリカーやろう」

「あー……そういうこと？」

普通の人なら理解出来ないセリフなのだが、明里にはすんなりと飲み込めた。

つまり、玄関がスタートで、炬燵がゴールの一直線のレースのようにする、ということだろう。

「面白いじゃん。……でもマドちゃん乗ってくれない？」

「あー……じゃありカ、円香のこと倒してよ。痛くない柔道技で」

「え」

「で、寝かせてから円香を滑らせて、自動的に炬燵に吸い込まれるようにしよう」

「あーそういう。良いね」

痛くない、というよりも痛く投げない、というべきだろう。

だが、派手にやると服が破れてしまうし、ハグするフリして大外刈りがベストだ。

「せつかくだし、廊下もカラフルにしよう」

「良いね。あ、てかアーチ欲しくない？」

「いるわ。ゴールとスタート地点に」

「よーし、作ろう。とりあえず材料を買ってきて、色々と飾りつけて」

「うん」

×そんなわけで、買い出しに出掛けた。

×

「はあ……疲れた」

朝からいらない説教した上に持参したりカを、まるで拾ってきたペットを返してくるようにプロデューサーに諭され、もうイライラが止まらなかつた。フルスロットルだ。その後の仕事も、バラエティのゲストで胸より尻派とか芸人がアホなトークを始めたこ

とで巻き込まれそうになったりと、碌なことがなかった日だ。

さて、帰ったらこのイライラをバカ2人への説教に使わせてもらう。というか、そもそもあいつらから始まったイライラだし。

そんな風に思いながら、玄関の扉を開けた。

「ただいま……」

そう呟きながら靴を脱いだ直後だった。まだ電気をつける前の暗闇で、ぐいつと腕を引かれる。

「えっ」

その声が漏れた時には遅かった。足元を優しく浮き上がるように持つていかれ、腰が空く。

この技……大外刈り？　と思っただが、尻餅をつく前に抱えられてヘリコプターの着陸のように優しく下された。

……ていうか、何の真似なのか？　と思い、声をかけようと口を開く。

「ちよつと、リ……」

直後、聞き覚えのある音楽が耳に届く。まるでスタート前のような音楽だ。それと同じに、急激に電気が光った。床は虹色、壁は黒い星空、そしてリビングへの扉と自分の真上には、見覚えのあるアーチ。

これ……マリカー？ ていうか喧しいやつぱり。いらいらのわんこ蕎麦？ とさらにムカついてくる中、目に入ったのは、天井から吊るされている信号。四つある中、オレンジの目が一つずつ点灯していき……そして、最後の赤が光った直後だった。

「ヒーアイゴー！」

「ちよつ、待つ……！」

明里の掛け声で背中を押され、床を滑らされた。ていうか、この床光ってるのにやたらと滑る。

「きゃあああああ？？」

思わず悲鳴が上がる中、リビングの扉が開かれた。そして、その先で待っているのは、炬燵の口……なのだが、不思議なことにクツパの口に見えた気がした。

「やつ、食べられっ……！」

リアクションが間に合わず、ズボツと突入する。その直後、部屋の中にいた透と後ろを追いかけてきた明里がクラッカーを鳴らした。

「おかえりー！」

「……」

……一体、何の真似なのか。何がしたいのか。どういうサブライズなのか。もう何年もこいつらと一緒にいるけど、いまだに分からないことが多い。

そんな中でも、バカ二人はニコニコ……というか、心無しかニヤニヤしているように見える笑顔で聞いてきた。

「どう？　温かい？」

「全自動吸引式炬燵」

「そう、前人未到球児式炬燵」

全然違うことを言われながらも……まあ、意図は分かった。二人なりに、朝のことを気にした上でこうして変なサプライズを炬燵で表現してくれたのだろう。

なんかもうホントこういうところ、怒る気も失せるし、なんかもう色々いいや、と思いつつ、とりあえず一つだけ答えた。

「寒い」

「えっ？」

「電源が入ってない冬の炬燵がどうなってるのかくらい知ってるでしょ」

「……………」

顔を見合わせて、大量に冷や汗を流す2人。怒られると思っっているのだろうが、特に訂正もせずのためにため息をつきながら、鞆からコンセントを手渡した。

「……………」

「あ、カンタの真似ごっこ？　良いよ、やろうか」

「カアアンタアアアア！」

「違うバカ二人。いいからつけて電源」

どんな勘違いしたらそういう発想になるのか分からないが、とりあえず先にそう言う
と二人とも従う。

すると、ようやくじわじわと暖かさが中で発生する。その事にため息をついている
と、透と明里が側までやって来たので、足首を掴んだ。

「えっ」

「お返、しー」

直後、ぐんつと2人の足を引つ張る。油断していた二人は足を持っていかれ尻餅をつ
くが、無視して足を引つ張り込み炬燵の中に叩き込んだ。

強引に三人で一辺に肩まで浸かると、二人の腕を掴んで引き寄せる。

「んっ……次から同じことやっても、もう許さないから」

「ま、マドちゃん……」

「優しい……」

「これでようやく温まる」

そう言いながら、三人でぬくぬく。

すると、両サイドから透と明里が少しだけ上に出て、円香の頭の上に顎を乗せる。そ

して、二人揃って頭を撫でてくれた。

「ん……サービス足りない」

「ふふ、マドちゃん可愛い」

「甘えん坊円香、超レアじゃん」

「うるさい。黙って癒して」

「何か嫌なことでもあったの？」

「あったでしょ。こういう時」

「……」

こいつらのこういう変なところ鋭いところも嫌いじゃない。大事な時は決めてくれるやつらだから。……まあ、普段のボーツとしてる感じのマイナスの方がやや大きくはあるが。

何にしても、今日の愚痴を肴に今日はゆっくり過ごすことにし……ようとしたところでピーつという電子音。コーヒーが入った音だ。

「コーヒー淹れてたの？」

「うん。……あ、てかケーキも買ってあるよ」

「え、今日なんかの記念日？」

「あー……炬燵記念日？」

「何それ」

まあ何にしてもありがたい。至れり尽くせりとはこのことだろう。でも自分は炬燵から出たくないので二人に任せたい。

「リカ、よろしく」

「え、俺？ とおるんがケーキも買ったって言うから俺の奢りなの？」

「えー、円香やってよ」

「何で私なの。そもそも何のためのケーキとコーヒー？」

結局、明里が全部用意した。